血壓低下劑

動脈硬化症と腦溢血の危險

其治療及豫防内服藥

アニマザ

幼若動物の血管内膜及中膜より抽出せる成分

獨逸 オスナブルク
臓器治療藥會社製



動脈硬化症……延いては壯年期にある貴重の人命を突如として奪ひ去る腦溢血……其治療及豫防は醫家の最も苦慮するところなりしが、獨逸ギーゼン大學グリースバッハ教授を始め多數の專門家はアニマザの内服が現時に於ける最も有力なる療法なりと高唱せり

乃ち特殊の生活狀態にありて本病の素因を有するもの、例へば大酒家、美食家、體格肥滿者、白粉(鉛)中毒者、梅毒罹患者等に本劑を常用せしむるときは、血管の硬化を阻止し、眩暈・不眠・頭痛・足部寒冷・全身倦怠等の自覺的症狀を除き且つ亢進せる血壓を常位に低下せしむることを得べし。

用量 一回一乃至二錠宛一日三回食間に與ふ

包裝 三〇錠入…二圓四〇 一〇〇錠入…六圓八〇

各地著名藥店にて販賣す

血壓低下劑

動脈硬化症と腦溢血の危險

其治療及豫防内服藥

アニマザ

幼若動物の血管内膜及中膜より抽出せる成分

獨逸 オスナブルク
臟器治療藥會社製



動脈硬化症……延いては壯年期にある貴重の人命を突如として奪ひ去る腦溢血……其治療及豫防は醫家の最も苦慮するところなりしが、獨逸ギーゼン大學グリースバツハ教授を始め多數の專門家はアニマザの内服が現時に於ける最も有力なる療法なりと高唱せり

乃ち特殊の生活狀態にありて本病の素因を有するもの、例へば大酒家、美食家、體格肥滿者、白粉(鉛)中毒者、梅毒罹患者等に本劑を常用せしむるときは、血管の硬化を阻止し、眩暈・不眠・頭痛・足部寒冷・全身倦怠等の自覺的症狀を除き且つ亢進せる血壓を常位に低下せしむることを得べし。

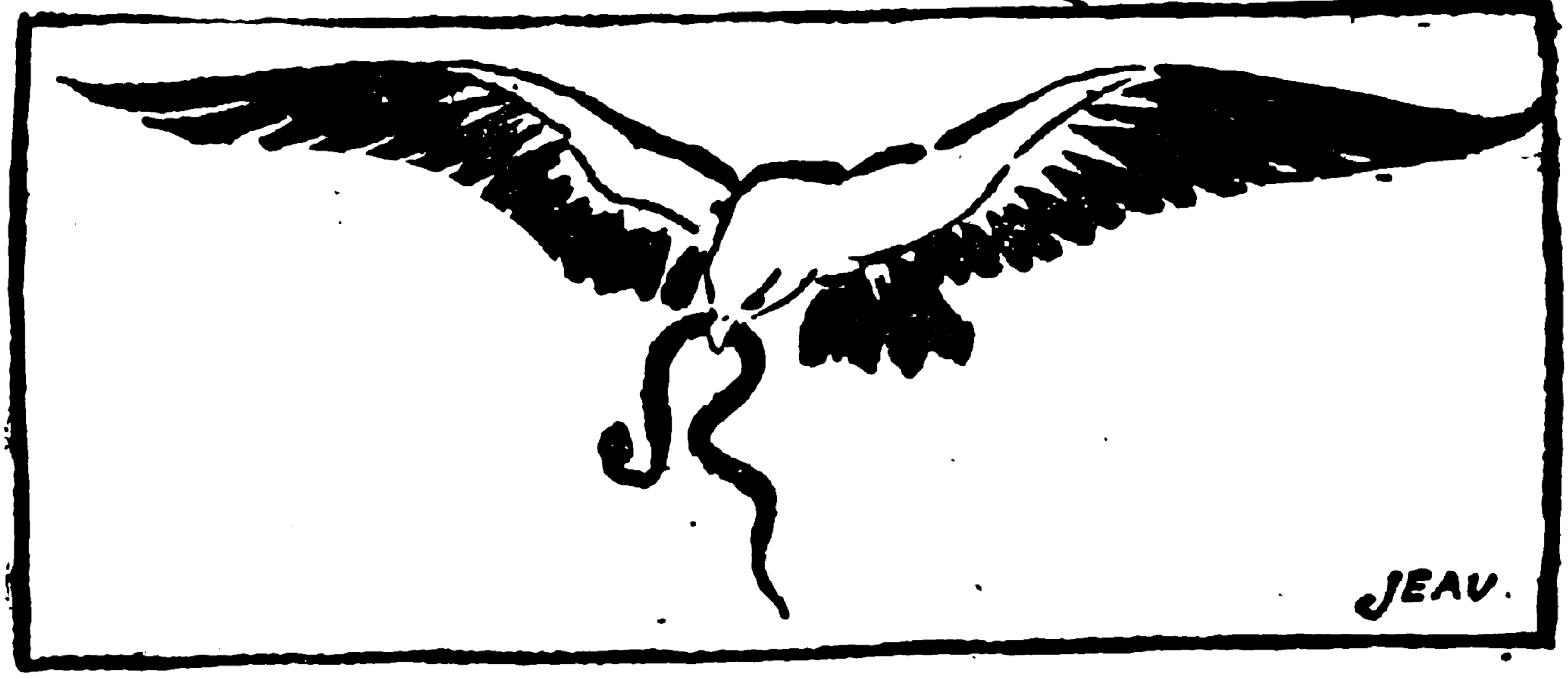
用量　一回一乃至二錠宛一日三回食間に與ふ

包裝　三〇錠入・・二圓四〇　一〇〇錠入・・六圓八〇

各地著名藥店にて販賣す

改造四月特別號 目次


罎詰の
生ビール
日本にたつた一つ
サクラ
罎詰
生ビール
サクラ
生ビール
Sakura
BEER



(四　月　號)

軍閥の陸軍を國民の陸軍へ

薩と長！　長と薩!!　かれらは維新日本の當初、時代的に急要であつた軍國日本的側面の率先企業者でもあつた。其功績は十分に認める。

しかし、殊に明治三十七、八年役後、日本の内外事情は更に躍進した。當年の軍國日本の企業者は既に其社會的存在理由を失つた。そして、社會的存在理由なき軍閥の存在を國民は見る。企業者の子孫が社長、重役を獨占する頃に、資本主義の崩壞が始まると同じ原則に從つて、軍閥崩壞の過程が加速的に進展することは、進歩的日本から見て、必然であると同時に必要だ。

國防は今尚ほ必要だ。しかし、それは、既に、完全に全國民の意思と努力と責任の手に移されて至當な時代に、遲すぎる程に到達し了した。軍閥陸軍によつては日本は防衛されない。日本を防衛しうる陸軍は國民の陸軍でなくてはならん。

政府、議會、黨、軍人、輿論機關、國民、卽ち全國民は、右の見地からして、有らん限りの閥を國軍から掃蕩し、出來るだけの國民的意思、責任、自治をそこへ伸達しなくてはいかん。さうするならば、例へば所謂機密費と會計檢査院との關係を積極的に制定する如き、或は、大臣官制改正の如きは、自然に容易に解決もされる。

われらは、日支間の、國際的良心ある名と實に於ての、經濟的及び軍事的同盟の國家的必要の存在をすら認める。斯かる一部的國家必要のみから考へてさへ、軍閥陸軍の國民陸軍化は急務だ。

例へば大臣たり、議員たるすべての人々は、公職の自覺に於て、公事に當局した際、すくなくとも形式的失職、解散位を忌避するやうな薄志者であつてはいかん。公問題をば、公心を以て飽くまで誠慮し、勇濟せよ。

現代常識の根本概念 百

杉森孝次郎

はしがき

百の雜文といふかたちに於て、右に掲げた題を、それを掲げた意思を、一應遂行して見たいと考へる。

一、抽象

犬が泳ぐ。蛙が泳ぐ。それを見て、どんなに健羨にたえなからうと、もしも、われらの知的能力が、單にその程度の知覺的なものであるならば、その經驗は、能くわれら自身を泳がせるだけの觸發力をば持つまい。それは、たかゞ、われらに於ける模倣本能を刺激して、失敗に終はる眞似をさせる位のものだらう。

認識がその程度にとどまるならば、われら自身が、犬そのもの、蛙そのものに、成り切るほかに、われらは、依然として泳げない人間であるほかない。

けれども、われら自身が犬や蛙に成り切ることは、どうつとめて見たからつて成功しやうはないにきまつてゐる。

しかしながら、もしもわれらに、或程度の抽象能が發達してゐるならば、われらは、泳ぐといふ作用または現象または事實を、犬そのもの、蛙そのものから、頭のなかで、切り離して考想することができる。

さうして出來た觀念は、比較的にわれら自身のものだから、われらはそれを、比較的に自由にどこへでも、なにへでも、持つていつたり、くつ付けて見たりすることができる。先づそれを、われら自身の體格及び體能へ結びつけることによつて、結局、われらは、人間でゐながら、犬のやうに、蛙のやうに泳げる新能力者となる。

抽象の價値はおよそかくの如し。

われらは、輕卒に抽象を馬鹿にすることもあるが、抽象こそは、自由と進歩の原動力そのものではないが、それに次ぐ位置にある原動機關そのものだ位には考へられて然るべき重寶なものだ。

抽象は、讀んで字の如く、具象から或ものを抽き取ることだ。それは、その抽き取られるものからいつでも解放だが、それを抽き取る人間からいふと、さらに遙かに解放の機械を獲得することだ

かくの如くにして、科學ある時代と社會とは、科學なき時代と社會とに比して、いかにいちぢるしく人間の解放を意味することよ。明治以來の日本と明治以前の日本、リネーサンス以來の世界とそれ以前の世界、これらは過去に於けるその證據現象中の或ものだ。そして、科學が單なる常識及び他のすべての知的形式物から識別される第一特徵は、科學に於ける抽象の卓越發達にほかならない。

知性の傾向は最初からして抽象的だ。犬が泳ぐ、蛙が泳ぐと知覺することと自身が、すでに或程度の抽象だ。ただ、その場合に於ては、犬が泳ぐといふ全現象、蛙が泳ぐといふ全現象を、そつくり、そのまゝ、現實の世界から、意識の世界へ抽き取るだけの手數しかかけられてゐない。したがつてその功果も、手數相當にたかの知れたものであるほかないのだ。それは、實物に對する單なる觀念的模倣を意味するだけの抽象だからだ。それは即ち、なんの發明をも意味する抽象ではないからだ。

發明の第一鍵は常に抽象にある。

すると、抽象は、自由と進歩の原動力あたりのものであり、解放の要具であり、發明の第一鍵であると洞察されたことになつた。

いまこの洞察を、成立した一個の假說として、假說的利刃として、手あたり次第にためし切りをやつて見ると、その成績は完全だ。

例へば最近代の、前代と比して多少ともいちじるしい發達を示す政治的及び經濟的デモクラシが、すくなくとも或自由、進歩、解放を意味するものであることは勿論だが、そのデモクラシはどうしてその發達をえたかをしらべて見ると、第一原因は抽象にあつた。

工業勞働階級が、數、組織、及び生產能力に於て發達し、そしてそれが知識づけられたことが、そのデモクラシの第一原因であつた。先づ工業勞働階級の數、組織、生產能力、及び知識に於けるあれほどの發達がなかつたなら、デモクラシのこれほどの發達はまだなかつたにきまつてゐるし、前者の發達がすでにあつたからには、後者の發達は、普選法が立法されてから無產黨が形成される以上に必然だ。しかるに、その工業勞働階級の發達は、產業革命の產物だ。そし

お、具象に泥をかけた具象だ。[illegible]。[illegible]具象[illegible]かれたた。

滿貫に始めて砲聲が轟いた當時、槍と刀が、殘念ながらつひに一と先づ兜をぬがざるをえなくなつたことも、花村と大砲には、全く桁ちがひの抽象が投資されてゐるがためにほかならなかつた。

抽象なき具象は、それが愛のかたまりである場合にも、それが憎のかたまりである場合にも、それが笑ひのかたまりである場合にも、それが怒りのかたまりである場合にも、すくなくとも結果からいふて、けちな愛、憎、笑、怒をしかなしえない。

世にもなげかはしい事の一とつは、抽象能に不足した人々は、例へば一國の政治原則または政治組織を、或かたち、聰明者の眼には最も愛國的なかたちに變へあらためることを、國そのものの破滅を必然意味するものであるかの如くに考へ信じて疑はない事だ。

抽象能に不足してゐれば、しかしながら、これは決して不思議な現象ではない。例へば、封建鎖國の時代に於て、抽象能の不足してゐた人々の頭には、封建をやめ、鎖國をやめることは、萬事をやめることとほか考へられなかつたであらう。丁度、泳ぐためには、犬になり、蛙になり切つてしまふほかないと、抽象能なき人間なら、考へるほかなからうやうにだ。

また例へば、資本主義のかたちに於てのみ産業を現に可能にしてゐる社會に於て、抽象能なき人々は、産業は即ち資本主義、資本主義が即ち産業だと、一圖に信じ切つてゐるから、資本主義を、多少根本的に改廢することは、産業そのものを根本的に廢止することだと早合點する可能がある。資本主義に於ける所有權關係だけを、私的から公的へ多少移し插げることによつて、産業としての資本主義は、資本主義としての産業に於けるよりも、一千〔…〕

れるといふことなどは、その人々によつては想ひも寄られない。

行燈をやめることはあかりをなくすることだと考へ、大小をはづすことは生命を棄てることだと考へる人々とも協力して、一國、一社會の進歩、成長、完成を實現する努力は、眞に容易な事でない。

考へて見れば、現代の世界及び日本にも、抽象能不足ゆゑの社會的悲哀と悲劇はさらにある。政治組織、經濟制度、習慣道德等の世界に於てそれは、殊に壓倒的だが、そこに於てさへそれ位だから、もつとのん氣な方面に於ては、眞劍味にだけは缺けてゐるが、それは一層顯著だ。

例へばいはゆる哲學の世界を見よ。或國の專門家及び一般者の如きは、哲學といへばドイツ哲學だとか、カントだとか、およその種のなにまたはなに〳〵だと、てんからきりまできめ込んでゐる。哲學とは、そも〳〵、考へることだといふことなどは、かれらによつては夢想だもされない。かれらは、したがつて、かれらが無批判的に權威としてゐる書物または著者を研究することを、それも單に讀んで見るだけの事を、しないならば、哲學は、その權威者以外の人々によつては、始められも、進められも、完成されることはなほさら、決してされないと信じ切つてゐる。從來の哲學と呼びならされてゐるもののなかから、思索としての哲學を抽象することをかれらは知らない。だから、かれらの生活全體を見ると、滑稽きはまる現象がある。

例へばかれらの或ものは實在を說く。しかし、かれらは、政治、經濟、習慣道德の如きをば、實在圏外のもの、即ち無だとでも考へてゐるのか、そんな方面にはまるで關心を向けない。

が、具象に足をかけた具象だ。[illegible]時、[illegible]具象だけの具象があつた。

浦賀に始めて砲聲が轟いた當時、槍と刀が、殘念ながらつひに一と先づ兜をぬがざるをえなくなつたことも、砲術と大砲には、全く桁ちがひの抽象が投資されてゐるがためにほかならなかつた。

抽象なき具象は、それが愛のかたまりである場合にも、それが憎のかたまりである場合にも、それが怒りのかたまりである場合にも、それが笑ひのかたまりである場合にも、すくなくとも結果からいふて、けちな愛、憎、笑、怒をしかなしえない。

世にもなげかはしい事の一とつは、抽象能に不足した人々は、例へば一國の政治原則または政治組織を、或かたち、聰明者の眼には最も愛國的なかたちに變へあらためることを、國そのものの破滅を必然意味するものであるかの如くに考へ信じて疑はない事だ。

抽象能に不足してゐれば、しかしながら、これは決して不思議な現象ではない。例へば、封建鎖國の時代に於て、抽象能の不足してゐた人々の頭には、封建をやめ、鎖國をやめることとは、萬事をやめることとほか考へられなかつたであらう。丁度、泳ぐためには、穴になり、蛙になり切つてしまふほかないと、抽象能なき人間なら、考へるほかなからうやうにだ。

また例へば、資本主義のかたちに於てのみ産業を現に可能にしてゐる社會に於て、抽象能なき人々は、産業は即ち資本主義、資本主義が即ち産業だと、一圖に信じ切つてゐるから、資本主義を、多少根本的に改廢することは、産業そのものを根本的に廢止することだと早合點する可能がある。資本主義に於ける所有權關係だけを、私的から公的へ多少移し擴げることによつて、産業としての資本主義は、資本主義としての産業におけるよりも、一[illegible]

れるといふことなどは、その人々によつては想ひも寄られない。

行燈をやめることはあかりをなくすることだと考へ、大小をはづすことは生命を棄てることだと考へる人々とも協力して、一國、一社會の進歩、成長、完成を實現する努力は、眞に容易な事でない。

考へて見れば、現代の世界及び日本にも、抽象能不足ゆゑの社會的悲哀と悲劇はさらにある。政治組織、經濟制度、習慣道德等の世界に於てそれは、殊に壓倒的だが、そこに於てさへそれ位だから、もつとのん氣な方面に於ては、眞劍味にだけは缺けてゐるが、それは一層顯著だ。

例へばいはゆる哲學の世界を見よ。或國の專門家及び一般者の如きは、哲學といへばドイツ哲學だとか、カントだとか、およそその種のなにまたはなに〱だと、てんからきりまできめ込んでゐる。哲學とは、そも〱、考へることだといふことなどは、かれらによつては夢想だもされない。かれらは、したがつて、かれらが無批判的に權威としてゐる書物または著者を研究することを、それも單に讀んで見るだけの事を、しないならば、哲學は、その權威者以外の人々によつては、始められも、進められも、完成されることはなほさら、決してされないと信じ切つてゐる。從來の哲學と呼びならされてゐるもののなかから、思索としての哲學を抽象することをかれらは知らない。だから、かれらの生活全體を見ると、滑稽きはまる現象がある。

例へばかれらの或ものは實在を說く。しかし、かれらは、政治、經濟、習慣道德の如きをば、實在圏外のもの、即ち無だとでも考へてゐるのか、そんな方面にはまるで思索を向けない。そこに、かれらの稱する實在なるものは、最も非實在的なもの、實在の影のまた影のやうなものだといふ證據が示されてゐる。どうしてかといふに、人間にとつての實在は、かれにとつての關心事、關心物であるほかない。しかるに、かれらにとつての最深、最烈の關心事物は、眞理

及び事實として、政治、經濟、習慣道德の世界に、多少病的な、したがつて小規模なかたちに於てゞはあるが、要するに關屬した部類のものだ。位置、權勢、名譽、收入、義理、人情、これらの世界に關する事のためには、かれらはしば〳〵極度の煩悶をさへする。かれらの哲學に關する實在問題や價値問題や、規範や必然や先驗や超越やによつては、決して落ち入らない程度の深い煩悶や考慮にかれらはしば〳〵落ち入る。

かれらは、要するに、第一義的實在をば、決して思索即ち哲學心の注意の焦點には置かないのだ。かれらは、第一義的實在をば考へやうともしないのだ。實在の代はりに經驗といふ言葉を置き据ゑていふならば、かれらは、かれらの經驗そのものともいふべき位置にある經驗に對しては、それを問題とせずに、最初から最後まで權威として、不可疑物として、假定し切つて安心してゐるのだ。これよりも非哲學的な事はない。

かれらの或ものは、人格を說き、個性を說き、愛を說き、普遍妥當理想を說いたりもする。しかるに、かれらを最も有力に代表するからの行動または生活を見れば、かれらは、決してそれらのものに對する信者でも、主張者でもないことを、さらにといつていいほどに示しつゞけてゐる。政治組織、經濟制度、習慣道德の世界に於て、しかもかれらが直接に責任と關係とを分有してゐるそれに於て、隨分はげしくそれらの信仰對象や主張原則が蹂躪されてゐるにかゝはらず、かれらは、それに對しては、素知らぬ顏をし通ほす。かれらは、かれらの公的及び私的社會生活に於て、全くらの哲學に對して無責任であり、反逆者であり、不信者であることの證據を、呆れて物がいへない程度に示す。

しかし、多少過度にまで好意的に、辯護的に考へて見れば、かれらの信じまた稱する哲學にも、いくらかの抽象がないではない。けれども、かれらは、抽象そのものの機能を知らない無邪氣な罪をも犯してゐる。抽象は、具象から或ものを抽き取ることだが、それは、それを抽き取らせた當の具象物そのもの、あるひは、他の具象物に、進歩的新存在を

る。この老木が、この石像が、この狐が、この蛇が宇宙及び人生の精神そのもの、理想そのもの、支配的威力そのもの、救済力そのものだといふやうに考へることなどは、随分大膽な象徴主義だと、その立ち場からしてはいはねばならん。

人間として誇るべき象徴は、發達した抽象を、直接的及び間接的に、しかしながら意識的にであることを必要とせずに、かへつてしばしばさうでないことを必要として、必ず條件としたものであるほかない。

階級意識も、民族意識も、いなむしろ民族本能も、それがそれとして意識される場合だけについていふ限り、人間性からの或抽象としての位置を、それは本質的に、原則的に、適當に與へらるべき筋合のものであるがゆゑに、實に、それは、そこに不拔深の根を托してゐるといふ不僞、不妄の自覺ある場合に於てこそ、その限りに於てこそ、眞義道徳と一致した、眞義道徳そのものの一部的自己主張、あるひは、時としては、全部的自己主張たりうるものであるがゆゑに、すくなくともそれの主張者としては、その抽象的位置に對する基礎意識を、建築に於ける地下設備同様、常に自他の意識を刺激しないかたちに於て至極結構だが、持つだけはたしかに持つてゐることを、そして、必要に應じて明快に闡說、論證の勞が取れるやうであることを最も望ましき一要件とする。

本質的人間性の全的自己主張が、或環境下に、或事情下に、必然、當然、取る部分的形式が、まれには全部的形式が、これこそが、これのみが、眞に存在理由ある階級意識でもあり、民族意識でもあるのだ。しかるを、階級意識や民族意識に立脚して、より深き、より全體的な人間性そのものをうすぼんやりと視たり、無視したり、攻撃したり、それの存在と價値を否定したりする思想と衝動と言論とが、多少とも世間にないか。かくの如き思想と衝動と言論とは、脚を踏んばることを肯定して大地の存在を否定し、頭をあげることを主張してより高き大空の存在を非認するにも等しい反

盲目的、無意識的自殺現象だ。これはこれだけの對象ではあるが、具象の全的反省から結晶したつたものではないから、遊離した、孤立したものだ。具象の全的反省からの後援なく、辯證なきがゆゑに、これはあはれむべき現象的暫定を持ちうるに過ぎない。階級意識や民族意識は、しかしながら、もつと據りどころある主張内容たりうる。階級や民族は、もつと據りどころある愛獲的努力の對象たりうる。

本質的人間性の全的・綜合的自己主張の必要からして階級意識や、民族意識やを抽象しうる人にして、したがつてそれらのものの抽象的位置に對する認識を常に用意して持つ人にして、始めてその階級意識や民族意識を、本質的人間性の全的、綜合的自己主張の發達的新實現への過程、方法たらしめうるのだ。

かの、階級意識や民族意識を、これ自身を目的として、ここに藝術的全悦・飽滿を續ける者の如きは、近代社會藝術の一材料として見ては至極面白いと考察される場合もあらうが、かれら自身の目的は、社會美與建設の材料たることなどにはすこしもなく、社會の進歩的保存そのものにあるとするならば、かれらの抽象的自覺なき抽象は、即ち自作的過程をあまりにすくなく、そして他作的過程をあまりに多く持つ抽象は、その點に於て、かれらの深省をあたひするものだといはねばならん。

人間としては、泳げないよりは、泳げる方がましであるにきまつてゐるが、泳ぐために人間でなくなるよりは、ずに人間である方がまだましだ。また、實は、泳ぐためには、それが、人間が泳ぐためである限り、人間をやめなどは土台話にもならん。現代に於ける階級意識の位置と民族意識の位置とは、多少とも泳ぐことの位置に似てわれらは、人間でありながら、人間でゐながら、例へばマールクスの如くにも、レニンの如くにも、またフイヒテの如くにも、マチーニの如くにも、階級意識や民族意識の所有者となつて然るべき時代と社會とに生活する

實をいへば、といつていままでとても別にうそをいふつもりではなかつたのだから、もう一とつの事實または眞實をいへばといふだけの話だが、さうすれば、例へばマールクスやレーニンの思想や行動から、眞理的要素だけを抽象するといふ態度と方法とが、基礎條件的に、先づわれらに健在してゐることが、かれらの思想や行動を研究する場合についていふならば、まさしくわれらの第一責任を構成する。

抽象低能の民族の歴史を見ると、さすがにそこには科學も哲學も發明も現はれなかつたたけあつて、淺くして敏にそして早く行きづまり、進歩をやめて退歩を始める事例に盈ちられてゐる。それは、實に、社會的、集團的規模に於ての如く、個人的規模に於て、自然、殊にさうだ。

大分わかつた、進んだ、抽象能あることをいふなと、數年乃至十數年も見物してゐると、本能的に抽象低能のしつぽがでてくることがほとんど通則的におびただしい。そして、その人の數年乃至十數年前の思想や學説と、その後のそれとの間に、似もつかぬ背反があるばかりでなしに、その數年乃至十數年後に於けるかれの一言、一文のなかだけにさへも、まるで火を水と同時、同所に、同一人が全信的におだて揚げるやうな矛盾を敢てしてゐる。その相反する兩思想のうちのどちらがその人の本音だかまるで見當もつかない。結局、どつちも本音ではないんだとわかる。本音は、實に、その人の行動、生活、平時及び變時にだけあるんだとわかる。かれは思想家や學者などでは、さうした柄では、もと〳〵、なかつたんだとほほゑまれる。

試みに明治以來の、手あたり次第に、心あたりの思想家や學者を、あし、こし上へしらべて見るとよい、恐らくなに人

徹底人道主義者、徹底社會主義者として名のりいでた若武者が、戰場で多少の功名をあげ、あるひは失敗を重ねる中に、やころ／＼と、あるひは極めて急激に、他の極端へ多少逃げる。最初の徹底が、決して徹底ではなかつたことを自認する。かくの如きは、最初から、その人に、またはかれらに、抽象能が缺けてゐたからの現象だ。自分が抽象するんではなくて、他人が抽象した結果にかぶれただけの事でそれはあつたのだ。だから、採用も手數入らずだが、廢用も至極手數入らずだ。

あつさりした、物事に執着の薄い民族性だと、ほめてばかりは、これはすまない現象だらう。

きのふまで進歩思想の前線に立ちふるまつてゐた人が、一夜あくれば、とても我慢のならない固陋思想や傳統主義思想などに、多少とも肩身を入れて見せるなどは、どう考へて見ても、たのもしい現象ではない。

最初からの方角にゐつづけて、しかしながら小さく、偏屈に、ひからびたかたちに於て凝りかたまるか。恥、外聞もかまはずに反進するか、どちらにしても、進歩的でない場合が、全體に目立つ。

人間は、抽象能が壯健なあひだだけが花だ。そのあひだかれは老いない。われらは永久に、抽象能が旺盛だといふかたちに於て、わかくありたい。

私は、以上の、警告がましいすべての部分をば、勿論のことながら、他のなに人にむかつてよりも先づ自分自身にむけたことを自認してこの一雜文を閉ぢる。

二、再變化

再變化といふことばは、耳あたらしいかも知れん。しかし、多少耳なれたことばだと感ずる人々も多少あらう。いづれにしても、これが、現代常識の根本概念の一たる位置を與へられて然るべきことに懐疑の餘地はない。

われらの祖先は、百年前後まへに、かれらが夷と呼び、蠻とも時としては呼んだ白人種と、再び新たに大規模の接觸を、環境によつて强要された。そして、その結果、維新が生まれ、新日本が開展した。

支那は、九夷、八蠻、北狄、西戎などと、呼びけなして、深い、廣い交渉を、外在民族との間に持つことなしに、比較的にすんで來た。しかし、その結果としての意味も多少あつて、進歩に於て、日本よりもおくれた點を多少示す。

西洋の歴史を見ると、十五世紀前後に、極めて著大なる進歩の新歴史が始まつた。そしてその原因をしらべて見ると、アメリカ發見と、それに先きだつた十字軍遠征とが、最も大きく蟠居してゐる。

アメリカの發見と、十字軍遠征とは、當時及びその直後のヨーロツパ人に、民族的、文化的、自然的新接觸の驚くべく大きな機會を與へた、かれらはそれによつて再變化された。生まれ變はつたにも等しいやうな經驗をそれによつて與へられた。

想へば、十字軍遠征に先きだつた數世紀間が、またいまから見れば暗默のうちに、再變化の數世紀間であつたのではないか。

西ローマ帝國滅亡前後あたりから、紀元約千年へかけて、いはゆる民族的大移動がそこには行はれた。それが、いかに廣汎にして深烈な新接觸過程であつたかは、推想するに必らずしも困難至極ではない。

例へばギリシャの文化的勃興は、交通機關未發達の當時の事情下に於て、それが、最も選ばれたる交通自由の自然的位置にあつたからではないか。商賣その他のかたちに於て、それは、廣く遠近異民族、異國土、異文化に、航海を利用して接觸する機會を待つた。この一事情がなかつたなら、ギリシャの文化的勃興は可能にされなかつたにきまつてる。

わが維新は、民族をあげて異民族、異國土、異文化との新接觸の機會を待つことになつたことをも意味したが、封建的階級制が棄てられて、民族的社會內、國土內に於て、それまでは接觸の機會が稀疎であつた諸階級が、それを繁劇に待つことになつたことをも意味した。その內外兩側に於ける社會的新接觸が、明治、大正の、すくなくともそれ以前とくらべて多少、いな實に、いちじるしく進步的な日本を生產した。

十八世紀末のフランスに行なはれた階級改廢的變化が、その社會及び他の社會に於ける社會的再整化をいかに意味したか、そしてそれがいかに進步を機會づけたかは、世に知れわたつた事實であるとして、それとは性質を異にしたナポレオンの帝國主義的外族侵略も、それが新接觸であつたがゆゑに、例へばドイツの國民主義、ロシヤの帝國主義等を結果として誘招することができた。

民族戰でも、階級爭でも、それは、實に、深い、廣い、そして激しい社會的接觸を意味するものである限りに於て、要するに人類の進步の上に、相當に著大な功果を待つたことは、歷史が一とつの通則としてわれらに示す通りだ。されば、歐洲戰が事情因となつて、世界の全部面に、いかに改造の熱と、想と、行動が發達したことか。また、ロシヤの社會內に於ける、及び多少そのそとへも及びえた、十八世紀末のフランスの場合に似た社會的再整化過程が、いかにロシヤ及び全世界の進步を助成したことか。

普選は、わが國の最近の場合が關する限り、國内的再變化の新可能を、多少とも、約束する。政治家としても、常識人としても、かれの普選觀の第一要件は、この新可能に對する認識、評價、使用の上に、日本を最も深く愛する證據を示しうる思想が用意されてゐることであらねばならん。そして、その用意は、普選を機會として、日本のために、再變化的過程を最も有意義に資することのほかにはない。

方面を變へていふならば、日本が、すくなくとも支那との經濟的及び軍事的同盟の實をあげることに、全體の關係を條件として、全國民的のまじめな努力をささげべきことなども、單なる兩國間的再變化過程を助成する利益のみから考へても、至極希望される一事だ。

社會を内部的に小さく割據させ、外部的に狹く牆壁づけることは、卵が、孵化するまでは甲殼を必要とするかたちに於てのみ必要なことであつて、すでに相當に羽翼を發達させて持つ部分に對しては、自由の大天地を與へることが必要だ。さうしなければ、その社會の爲は、發育不全にして夭折する悲運をまぬかれない。

再變化とは、生まれ變はることだ。生命が增すかたちに於て生まれ變はることだ。先方にとつてどんなにふるいものでも、また客觀的にいかに進んだ、精醇化したものであつても、始めてそれに接觸する當方の立ち場からいへば、それは新奇物だ。しかるに、すべての新奇物は、新經驗は、習性の安定に多少の狂ひを與へる。懷疑、不安、つづいて問題がそこに發生し、發達する。自己及び世界に對して、それは、その經驗者を、批判的傾向に誘致する。批判は創造の直接先行現象だ。

再變化なるかな、再變化なるかな。好んでまで、求めてまでその機會を造り、增し、加へることは、すくなくとも、普通に常識がさうするより以上の或程度に於てさうすることは、人間にとつて、したがつて個人にとつても、社會にとつても、進歩的自己保存のための一最深則たることに毫末も疑議を投ずる餘地はない。

最變化は、即ち、再進化への方法だ

三、進歩

進歩とは、讀んで字の通り、前進的に歩行することだ。まだ踏まぬ世界へ足を運ぶことだ。そのことばのあらゆる自由な譬說的適用をゆるす、極めて廣い意味に於てだ。

東海道を、江戸から京都へ、觀光、察俗の目的を懷いて旅する人を一例として假設するなら、進歩の一具體圖が描かれる。

かれの運ぶ歩一歩が、新らしい、かれにとつて新らしい、自然と人間とを續々としてかれの經驗の世界へ展開する。かくして、かれの歩一歩に、多少獨自の意味がある。

しかしながら、途中に於ける現實の一歩は、既往の全旅程を經過して始めて實現された一歩であるがゆゑに、それは、その人にとつては、その一歩自身であると同時に、いままでのすべての步だ。その證據には、すくなくともかれの記憶に於て、例へばかれがいま江尻にあるとするならば、江戸から江尻までの全經驗が、一續不斷の連鎖を多少とも形成してゐて、かれの現在の經驗をそれだけ豐富にする。

すると、進歩は、經驗に於ける增加を意味し、自己に於ける成長を意味する。どうしてかといふに、その經驗が關す

る限り、かれは、江戸にあつた時よりも、また箱根にあつた時よりも、成長した。

進步は、實に、成長を意味する。

成長は、或程度まで、生物の本性だ。人間に於て、殊に最もさうだ。

人間が成長の生物だといふ證據は、個人の生涯にもあり、民族や人類の歷史にはなほさら澤山にある。

行燈時代から電燈時代へ變つて來たことだけを考へて見ても、人類は成長する。いちじるしくさうする。

人類に、本然の目的とも稱すべきものがある。そして、それはあまりに成長しない。あまりに成長しないからこそ、本然の目的ともいはれるわけだが。

その本然の目的とは、しからばなにか。

光明を悅ぶ本能、光明を手段として、條件として、始めて達しえられるいろ〳〵の目的が意味する本能、例へばこれなども、無數に種々な本能中の或ものだといひうる。

その本能自身は、比較的に、成長しない。その本能を滿足させるための方法や條件の成長に比しては、それはほとんど成長しない。

行燈時代の光明本能と、電燈時代になつた現代の光明本能とをくらべて見て、そこに大した變化も、發達も、根本的には、見つからないことは、その一例だ。

性本能を選んで考へて見ても、同樣の理法が手に取るやうに明視される。さればこそ、古歌に見える性本能も、適切に現代のわれらの心を讀む。けれども、それを滿足させる方法と條件とに至つては、古人、今人、全く隔世の生物だ。

例へば、選擇される異性の範圍が、交通機關及びその他の事情の發達、改良の結果、現代に於ては、古代に於てと比し

て、いかに著大なる擴張を示すことか。現代に於ては、天涯、地角を隔[illegible]にして生まれ、育ち、[illegible]男女の間にさへ、戀愛は必ずしも困難なしに成り立ちうる。見合ひもまれならず寫眞ですむ。そして、寫眞が飛ぶ[illegible]にる速力と、距離と、地域が、大したものでありうるではないか。

進歩は成長だが、その成長は、人間の場合にあつては、本然の目的とも呼びうべきものが、なに人にもあつて、それを達成するための方法または條件が、一層有効なものに移り變はることを意味するといふ判斷が、ここに於てか形成される。

ついでながらに注意するが、方法や條件が發達すれば、本然の目的そのものが、したがつて多少發達することは勿論だ。例へば現代人は、行燈では、いな石油ランプでさへも、永くはとても我慢し切れない。しかし、日本でいふと、つひ先刻まで、われらは結構それで滿足した。

しかしながら、繰り返していふことになるが、さうして發達する本然の目的そのものは、どんなに發達しやうとも、比較的にたかが知れてゐる。且つ、その發達は、方法や條件そのものに於ける發達を先づ必要として然るのちに始めて可能にされる追隨的性質のものだ。

ここに自然に發生しうる一つの問題は、方法や條件そのものに於けるさうした發達は、どこから、どうしてでてくるかといふことだ。成長そのものゝ生産者はなにかといふことだ。

それは、實に、人間性に於ける知性にあるのだ。

知性は、實に、最も靜かなもののやうであて、實は、最も動く、そして動かすものであるのだ。

ワット及びかれと聯想される少數の人々の知性が、自然と社會と人心とを、いかに動かしたかを考へて見ると、

その一例を知ることだ。產業革命そのものが、またその知性の仕事だつた。

加藤清正の槍と稱せられるものを見ても、かれの身幹、四肢の發達のほどは知れてゐる。しかるに、現代人の體格と體力とは、かれに劣る場合がすくなかるまい。清正でなく、當時の平均人を取つて見ても、以上へなり、以下へなり、なにほどの差もあるまい。さらにしかるに、武器そのもの丶發達に至つては、現代は眞に超人以上だ。單なる感情力、單なる意力、單なる本能、及び單なる身體に於ては、人類は、いな人類でさへもが、ほとんど徹底的保守主義者だ。

人間性に於ける知性の無限發達力のゆゑに、しかるに、それを取り卷くすべての人間性が、人的自然が、したがつて社會そのものが、それの餘澤を受けて、あるひはかたちに於ても、あるひは意味だけに於て、限りもなく發達する。

清正時代とくらべて、驚くべき差異を示す、武器の現代的發達も、味方を愛する本能や、敵を憎む本能の發達を反映する現象ではなく、主としては知的本能の發達を反映する。人類の歷史全體からいふて、近代を特徵づけるものは、實に科學そのものであることは、そして、近代は、人間が最も動き、動かす時代であることは、當面の問題にむかつて一つの強い光を投げる。

人間に於ける知性がいかに發達力あるものであるかは、科學の歷史をしらべて見ればすぐにわかる。文學、藝術、政治、道德、產業等の歷史を見れば、古代にすらすでに、必ずしも現代に劣らない、あるひは、往々にして現代に優る感情力や意思力は容易に見つかる。ただ古代に於けるそれらのものには、方法及び條件としての知性の發達が缺けてゐたがゆゑに、あだかも、それらのもの自身が、本質的に幼稚であつたかのやうに速斷されることがあるのだ。

進歩を欲するものは、それゆゑに、先づ知性の發達を欲せねばならん。知性の發達をさへ實現すれば、他のすべての部分に於ける發達は、期せずともおのづからにして到る。

古來の第一流の發明が、機械、したがつて物的秩序改造、の世界に於ける發明が、非功利的な、純藝術的な愛眞、愛知、知眞實の本能または行動、すなはち研究と思索とにそれの直接第一因を持つたことは、それの突出的一例證現象にほかならない。

されば、愛眞、愛知、殊に知眞實の本能と行動とに、したがつて研究、思索及び發表に、手かせ、足かせ、首かせ、長刀、短銃、食ひはぐれ、日かげものといつた風の七つ道具の公、私各種刑を制度及び慣習のかたちに於て所有し、使用する現代各社會の多少の現實は、それ〳〵に、多少深く自社會の進歩に、すなはち成長及び發達に不忠誠な行動でそれがあることを、それ自身の自覺よりも深いところに於て意味するのだ。

知性の發達をさへ愛護すれば、人間は本來行動的なものであるから、實に、知性そのものが、また勿論一とつの行動形式にほかならないものであるから、萬善これにしたがふ。行動の價値と必要を知ること、知つて而してそれを主張することも、それは一とつの知ることだから、知つて而してのちの事だから、その事自身、知性の世界外の事ではない。認識される行動、主張される行動は、一とつの例外もなしに、それゆゑに、知性の或自己主張にほかならない。われらはこの一公理的事實をも知つて置くに超したことはない。

多少の閑話休題として、進歩は、知性の發達をそれの先驅と常にするものであるがゆゑに、しかるに、知性は、問題の構成と解決とをそれの一特徴とするものであるがゆゑに、その如き知性の發達に先驅される進歩一般は、常に[illegible]新たに持つ、新たに解く、そしてまた新たに持つことをそれの一特徴とする。

進歩は、一面に於て、問題を持つことを意味する。しかしながら進歩は、他面に於て、問題を持たないことを意味する。

問題を一度も持たない生活は進歩的生活ではない。しかしながら、同じ問題をいつまでも持ちつづける生活も、また進歩的生活ではない。

進歩的生活は、問題を常に新たに持つ。しかし、それは、同一問題をば永くは持たない。それは、一とつの問題をば出來るだけ早く解決し、そして、それによつてえたる新らしい位置に立つて、さもなければ持つことのできない新らしい次ぎの問題を持つ。その次ぎの問題といはれたものを、それはまたできるだけ早く解決し去つてなしにする。そして、さうすることによつて始めてえられた新らしい位置に立つて、それはまたさらにその次ぎの問題を持つ。この問題も、それが、その新らしい位置に立つたのちにでなければ持つことのできない問題だ。その問題を、それはまた前の場合に於けると同樣の輪廓的形式に於て解決し去る。進歩的生活は、かくして、問題を構成しては解決し、解決してはまた構成し行く過程そのものだ。それは、實に、文字通りに、觀光、察俗のための旅行のやうなものだ。一とつの問題を解決して、次ぎの問題の構成またはそれの解決に移るあひだの息つきの場所なり、期間なりがあるとすれば、途中の一驛に到着して、茶屋に腰をかけて、往を顧み、來を望み、しばしくつろぐ折り々々がそれだ。

例へば封建日本の時代に於ては、覇權と雄藩、一とつの雄藩と他の一とつの雄藩とのあひだの關係などが、最も關心的な問題でもありえた。しかるに、中央集權的民族國家日本の制度を敷設することによつて、それは解決されて問題ではなくなつた。しかしながら、

會的にも、士農工商間の問題などはなくなつたが、工業勞働者を一大中心とする新階級の問題が、例へば、新たに日本にも持たれて來た。農民問題そのものも、維新後、今日に及んで始めて發生し、發達した進步的性質のものであることはいふまでもない。

進步は、すなはち、位置の向上、發達、成長を意味する。位置が、一言にして向上するにしたがつて、問題の質と、かたちと、大きさが發達、成長したものになる。その位置の向上は、しかるに、問題の構成及びつづいてそれの解決の結果であつた。現在の向上した位置から生ずる、したがつて大規模の、發達した問題は、文字通りにその位置から生ずるものであつて、その位置の結果だ。この關係に於ても、進步は、觀光、祭俗の目的を懐いて江戶から京都へ東海道を旅する人の場合に比される。ただ、江戶の東にも江戶が、京都の西にも京都が、進步そのものの場合に於ては、多少現實であると同時に多少想定される。さうするならば、進步は、觀光、祭俗の目的をもつてする旅行、純粹旅行そのものに比される。

位置の向上を欲するものは、問題を持つことを恐れてはならん。そして、それを解決する勞を吝しんではならん。そこに勇氣が必要である限り、勇氣をもふるひおこさねばならん。先づ研究行動が必要だが、即ち知性に於ける向上が必要だが、爾餘の諸必要も、知性自身が確實にそれを必要だとして再認する。そのかたちに於てそれを主張する。

もしそれ進步の條件を完全にかぞへ立てることになれば、勿論、それは際限もない多種に於て存する。けれども、それらのすべても、知性の發達に對する愛護が十分に必要として意識されるならば、おのづから具備されざるをえない必然位置に、その社會なり、個人なりによつてさうされるほかない必然關係に、完全にある。

例へば社會的環境としての制度、慣習を、生活を進步的に保存するかたちのものに改作すること、現代の事實として

は、なかんづく經濟組織、政治組織、習慣道德組織等をさうすること、また例へば、遺傳的環境をさうすること、及びまた、自然的環境をさうすること、これらは、數知れぬ條件中の最も目星いものだ。けれども、これらの條件を明視することとそのことが、たび〱論じ觸れた通り、發達した知性の仕事以外のことではない。

進歩は、ふるい分類だが、知情意の順列に於てなされる生活行進だ。知が進めば、他は習性的及び强制的に進められる。

進歩を愛欲して、尊信して、渴仰して、崇敬して、自任して、知識を呪詛することは、事實の論理によつては不成立だと終審される決定的運命を持つ。

進歩の秘鍵は知ることだ。それ以外のどこにもない。

四、現實

現實とは現在の事實だ。人間からいふならば、現實とは、かれにとつての現在の關心的事實だ。現實とは關心的事實そのものだ。現にかれによつて意識されてゐる關心的事實が、いはば現實的現實であり、現にかれによつて意識されてゐるとゐないとにかかはらず、かれの意識力が完全であるならば、かれによつて意識されるほかない、かれにとつての關心的事實として意識されるほかないと思考されうるすべてのものが、いはば眞實的現實だ。

まつ毛が一本、眼のなかにころげ込んでさへ、そこに一とつの關心的事實が成り立つ。

ばに買ひことばの發展次第では、いのちをまでも的にかけて奮發、世界のための戰ひを戰ふ。それが[illegible]にとつて、むしろ押されもせぬ現實であることに、すくなくともその當人の立ち場からしては、毛頭異論を主張しうる餘地はない

或母にとつてはその子の在りかたが最大の、もしくはそれに近きあたりの現實を構成する。或青年男女にとつては、或他の青年異性が、同様のことをする。

制度改革の或深い必要を意識してゐる青年、壯年者にとつては、勿論老年者にとつてさへも、それが實にかれ自身のいのちにさへもかへられない大きな現實を構成する。例へば幕末志士の或ものを見よ。また例へば、世間一般からこそ、遙かによりすくなき注意と敬意を拂はれて來てはゐるが、そこにまた相當の、あるひは多少の、是認理由も必ずしも成り立たない場合ばかりではすくなくともないが、もつと近い現代に及んで、從容として、いはば斷頭台上の露と消え去つた、むしろかぞへ切れぬほどの人々の場合を見よ。

「小人は身をもつて利に殉ず、士は身をもつて名に殉ず、大夫は身をもつて家に殉ず、聖人は身をもつて天下に殉ず」とは『莊子』のなかにあることばだが、身をもつて殉ぜられる、即ち獻身的、懸命的に從事されるほどの目的物は、その人からいへば、恐らくは最大の現實だ。

人の價値、社會の價値は、その人、その社會が、なにに殉ずるかを見れば、そしてそのなにの內容たるものの價値を見れば、最も簡明にわかるともいへる。一個の人、一個の社會の現實的關心物としての現實的現實がなにであるかを知ることは、實は、最も要領よく、その人、その社會がなにであるかを知ることであるのだ。

かへりみて、日本の現實はなにか。支那の、ロシヤの、アメリカの、イギリスの、ドイツの、フランスの、印度の、トルコの、イタリの、バルカン諸邦の、黑人一般の、アジアの、ヨーロツパの、アフリカの、世界の、勿論現在の人

世界の、現實的關心事物は、いかなる特徴認識と分類とを考究者にゆるすものであるか、興味ある問題であらねばならん。

しかし、それはそれとして、われらは、現實を、現實と普通に呼びなされるものに對する概念を、多少、しば〳〵不完全に構成して所有してゐる。

現實は、さきにもいふた通り、讀んで字の如く現在の事實だが、現在の事實だとして承認されるものであるが、その現實は、過去の奴隷ではないが、將來の奴隷でさへもない。

例へばかの、一部の來世主義者、靈魂または人格不滅信者の如きは、現實生活、現實世界の意味即ち價値即ち目的は、一にかかつて或將來に存するかの如くに思ひ込んでゐるやうだ。しかしながら、これなども、隨分と現實を見そこねてゐる一例であらねばならん。

これらの人々も、口に三度ぐらゐは腹がすく。腹がすけば、食を欲する。その腹がすくことも、その食を欲することとも、それ自身に完全な一とつの現實ではないか。來世があらうがなからうが、靈魂や自己が不滅であらうが滅であらうが、そんなことにはすこしも關係なしに、すき腹はくるしく、すき腹に飯を食ふことはたのしい。

齒が痛む時に、來世がないと、あるひはあると、說得されれば痛まなくなり、あるひは、餘計に痛むやうになるかといふに、そんなことはない。あるとしても、それはまことにたかの知れた、かぞへるだけの價値もないもので、通則としては、ある。

[illegible]

合を通じて、多少とも、無自覺の立ち場に安んじてゐるものだとほとんど概斷される。

過去主義者の一形は、第一原因を無上に尊信する立ち場だ。そこからしては、例へば創世主崇拜のやうなものも生まれた。しかしながら、これは、現にけふも、三度ぐらゐは腹もすいたといふことを無視した立ち場としてでなくては成り立たない。將來主義者についていふて見ても、かれらの或者の立ち場は、宇宙の歴史の最後の瞬間のみに價値があるのだといふ、全く思にもつかぬ結論を避けがたい性質のものだ。現瞬の目的は次瞬に、次瞬の目的は次々瞬にあるといふ論理を推して行けば、そこに落ちるほかない。

例へば、芳紀十八といはれる狀態は、婦としてもつと成熟した次ぎの狀態への過程としてのみ價値あるものではないことは、明白な事實ではないか。もしもそれは、それとしてのみ價値あるものであるとするならば、その狀態をはぶいて、小供から、いきなりおとなになれる方法を研究することに價値があるといはねばならん。しかるに、そんな企てをば、なに人も、出來ないことだとわかり切つてゐるからよりも、損なことだと自然に知りうるがゆゑに、始めもしない。

おしつめていへば、生まれてすぐに老人となるに、生まれてから少、靑、壯の狀態期を持つことは、くらべて劣價なものだと、一種の將來主義的見地からしては結論されるほかない。

過去千萬年を思索しやうが、將來萬億年を懸念して計畫しやうが、即ち觀念的に先づ經營しやうが、さうする心と、その心のさうした作用、活動、狀態とが、斷じて現在のものであることはいふまでもないが、そして、その意味には、いかなる過去主義者も、將來主義者も、現實的自己の圏外に一歩も踏みでることができないことはいふまでもないが、また、したがつて、どんなに長い一とつの構想過程や、推理過程も、各瞬間にのみ現實である直覺的

然的蓄積過程にほかならないこともいふまでもないが、さうした心理的事實から、心の方法に屬する事實から注意の焦點を移して、もつと全體的に、具象的に事實を考察しても、現實主義が充實されべき多少の空隙が、われらの平生の常識及び哲學に於ては、見つかることをほとんど通則とする。

一例として性本能及び性衝動の方法を見るに、それが、いはば膨脹、爆發、放出のかたちを取ることは顯著だ。どんなに發達した、文化的に高級な、したがつてまた複雜な生活事實も、本質的及び原則的には、この形式を必ず取るものであることは、しかるに、つひに疑はれる餘地を示さない。

例へば吉田松陰が、安政五年中に、熟慮的に、すくなくとも衝動的または發作的にではなく熟慮的に、或決死的行動を決意した場合を通察するに、そこには、當時かれ自身が筆舌によつて表明したよりさへも深い、強い現實的必要または必然が、かれ一個の生命內に不可抗的に成り立つたのではなかつたか。あれほどの志望と、能力と、既成位置との持ちぬしであるかれが、そのかれとしては、すくなくとも或他人の立ち場から考へて、多少深く惜まれる、或意味に於て社會のために自己を生かしのばす必要を知り足らない、決意をしたものだと、一應、再應、有意義に考へられるかも知れんが、同時に、一個の心理的事實として、即ち一個の倫理的事實としてそれがいかに完全にあるひは十分に大きく善であつたかなかつたかは全く別の問題として、現實が、或人の或場合に於ては、いかなる在りかたを取りうるものであるかの、悲壯崇烈な一とつの場合でそれがあつたことは寸毫懷疑の餘地がない。そして、現實といふものに對する學術的研究の目的にむかつても、それは或有力な光りを投げる一とつの活きた材料でもありうる。松陰のあの決意には、必ず

な方法が、いくらかの人々に、自分が前に觸れ[illegible]いくらかの人々に、不[illegible]にし[illegible]とに[illegible]道義的性格としては、その局には先づ自分があたるといふ、本能的及び意識的打算があつたらうと推せずることは、必ずしも不當ではあるまいと考へる。そして、かかるところにこそ、偉人松陰の本質にあつたのだとも考へる。

しかし、これらのことはこれらのこととして、かれの一歌「かくすればかくなるものと知りながら、やむにやまれぬ大和魂」がいかにも有力に暗示し、且つ明説もしうるが如く、われらがそれに有力なる暗示と明説とを發見しうるが如く、現實といふものは、最低級のものから最高級のものへ一貫して、どんなに深い思慮をも、高い理想をも、それ自身の内容として持ちうるものだといふことを、重ねて私は注意する。

現實の自己の解放、現實の自己の愛護、現實の自己の完成、いかなる理想も、理想的努力も、これ以外のものでは決してありえない。

現實の自己に、それらのたつといもの、必要なものを與へるための方法及び條件としてこそ、過去無限年の想索も、將來無期限の豫側及び豫營も、必要なものとされるのだ。

かくして、例へば、克己の目的は將來にあるが、その將來の意義は現實の自己の或解放、愛護、完成にある。

詩人が明日の世界を夢想するとせよ。それは、實に、かれに於ける、張りちぎれさうな想像力を、かれは、さうすることによつてわづかに安全に保存することができるのだ。いな、かれは、奔放を求めてやまぬかれの想像力に、自由な明日の世界を與へることによつて、辛うじてかれの全自己を保存し、經營し、統一することができるのだ。かれの現在の自己をさうすることができるのだ。

經世家が經世に於ける、事業家が事業に於ける、科學者が研究に於ける、敎育者が敎育に於ける、宗敎家が布敎に於

ける、すべての生産者がかれらの生産に於ける、ことごとく、この詩人の場合と同様の法則を示す。ただ、それが一層純粋にさうであるほど、それは、おの〳〵、一層純粋にそれだ。

現實は、實に、太陽のやうなものであるのだ。それは驚くべく遠くにまで達しうるが、その達しかたは徹頭、徹尾、自發的、放射的だ。それは文字通りに達するのだ。向ふに在るものから引き寄せられるのではない。太陽の場合に於けるよりも、それは、無限に完全にさうだ。

現實の哲學を、われら自身の内に發達させるならば、われらは、必然、もつと深い問題に對してもつと懸命的になり、過去及び殊に將來に對して、もつとよそ事ならぬ思ひを燃やすやうになるだらうと考へる。

われらは、明日の健康の名に於て、單なる長命の名または意識に於て、あまりに現實の自己を保惜し過ぎる傾きを、勿論われらのすべてがさうだとは思はないが、私程度のものが關する限り、多少持つてはゐないかと、すくなくとも時々に反省して見るだけの價値はあらうと考へる。長命は結構、明日は大事だが、そのいづれもが、現實の自己の眞の綜合的保全の條件としてであるやうに、深いところから強く願はれる。私は、世の殉理想家的形式の、殊にも近い過去に於ける、多少の人々に對して、多少の批判をば、多くの場合、持つほかなかりさうだが、それはそれとして、同時に多少、私は、もしも自分が、社會的、道義的、普遍妥當價ある理想的見地からして、その理想を是認し、またそれらの人々がそれらの人々として取つた方法をも必ずしも非認しえない場合があるとするならば、その場合には、なぜ、そんなら、私自身がそれをしなかつたかといふ問ひに對して、自他を僞はらない、しかも良心に對してやましくない、答辯が立派に私

はありたくないとすれば、理想と方法とに對して、できるだけ十分に責任ある思想と行動の持ちぬしに、自己を效る必要が勿論ある。

かくして、例へば、松陰の一決意を、全心的に嘆稱することは容易でない。現實觀の、徹底した現實觀の構成される必要と困難は、かうしたところにもある。しかしその必要がその困難以上のものであることには疑ひはない。

五、個性

どんなに環境が有力であらうとも、重要であらうとも、環境といふことば自身が、また概念自身が、それを環境とする、したがつてその環境から識別される或ものの存在を假定してゐる。環境は取り卷く世界だ。さうするならば、それに取り卷かれる世界があるわけだ。環境一元論は、かくして、土臺成り立たないものであるに、眞理としては、一決してゐる。早い話が、大體に於て環境は同じでも、梅の木は梅の實を結び、松は松としてしか成長しない。その邊の公、私園にも、さらにある事實だ。

なに人か、そこに、梅としての一個性、松としての一個性を、承認しないことができるか。

環境の有力と重要を注意の焦點に置くことは、主體の存在を過度に輕視することとは、正當には、勿論兩立しない。しかるに、現代に、多少ともその不正當現象はないか。ここで「過度に輕」などいふことばを使つては、てんで批評にもならないが、さうした言葉によつても髣髴されうる現實が、かなり目につくことは、すくなくとも或人々によつてはうなづかれよう。

もと〳〵個性自身の興味から生れた、最近の環境重視的傾向でもあるのだ。すくなくとも精神分析的方法にしたがへ

ばだ。そして、これは、低級功利主義的動機からしてそれらの學術的思索行動が發生し、發達したといふ、通則または原則を裏切つた、例外現象などでは勿論なかつた。個性自身に對する深い全い注意は、しかも、そこからしてこそ、環境に對する十分なる注意を發達させるやうに、眞實の世界秩序自身が出來てゐるのだ。

環境は、近代に及んで、これほどの程度にまですらもいかにして發見されたかを考へ、しらべて見れば、それは、個性からの或抽象としてにほかならなかつた。それは、實に、そのほかありえない基礎的關係がそこにあるがゆゑに、そのほかなかつたのだ。

環境過重主義者は、個性に對する考察の一方法、一結果としての或抽象を、或抽象的性質を、もとの具象物としての個性から全然遊離させ、孤立させて、それ自身に獨立の、それも不思議な獨立の價値を有するものであるかの如くに祭り上げる立ち場だ。それは一とつの偶像崇拜だ。

環境過重主義者は、それゆゑに、現代の多くのいはゆる哲學者とよく似てゐる。かれらの根本の態度と方法とに於てだ。どうしてかといふに、兩者ともに、具象の世界から或ものを抽象して、それを、實は或先人がさうした結果を、それ自身のゆゑに無上價値視する。兩者ともに、抽象といふものに滯ばれてゐる大切な機能を忘れ去り、閑却してゐる。兩者ともに、その意味に於て、空夢的觀念主義者、即ちイデオロジストだ。

いはゆる唯物史觀主義者の多くあるひは或ものと、いはゆるドイツ哲學主義者の多くあるひは或ものとの間には、實に、皮一枚の底には、完全なる穩妥的一致がある。

[illegible]のは、世にも愚なる無用の長物となつた。精確に同様の愚なる長物として、唯物史觀、及びいはば環境一元論が、[illegible]に、ただ一層の新時代的産物として現はれて來た。いかに新時代的であらうとも、これが愚たものであることになんの割引もできない。新時代的であるだけに、この弊は更に深い。いな、この弊は更に目立つただけの事だ。進歩は、どのみち、是、反是、再綜合の辯證的過程をふむものだから、極端なる唯心主義が久しく跋扈したのちを受けて、他の極端なる唯物主義がしばらく跳梁することは、自然であるのみならず當然だ、などと、寛大に、のん氣に、無識別に、看過するのみでは、この現實に對する敵意は果たされない。

個性は、かたちに於て、大きさに於て、數と量に於て、もの〳〵しさに於て、環境との比較に於て、たとひどんなに劣つてゐやうとも、なほかつ、質と價値と意義に於て、結局、眞の實在に於て、環境以上だ。個性の内に環境は、統一され、綜合されて發見される。環境の内には、個性は、分散して、しかも不完全に、一層制限されたかたちに於てのみ發見される。人の内に太陽を發見することは容易だが、太陽の内に人を發見することは、事自身の關係上、それほど容易ではない。同じ太陽の光りと熱を受けても、その證據には、例へば月の世界には人はゐなさうだ。

個性を分析すれば環境はそれの或内容物として發見される。環境を分析しても、それだけでは個性は發見されない。前者には發見されるだけのものが在り、後者にはそれがないからだ。結局、個性は環境以上の實在だ。存在だ。

現代は、一體に非藝術的だ。非質的だ。非價値的だ。非本質的だ。非原則的だ。工業がそれの一因であり、機械文明がまたそれの一因だ。勿論、工業と機械文明とは、大體に於て同一物だが。

そして自然科學及び自然科學的方法もまたそれの一因だ。

これらのものは、それぞれに、巨大なる價値を持つ。それの發生と發達は、近代生活の、前古と比しこの偉大なる進歩を意味する。その進歩を構成する主要素そのものだ。しかしながら、それと同時に、現代は、それらのものに多少不適當の位置をも與へた。人間が使用すべきそれらのものによつて、人間が多少逆に支配されてゐる。道具まけがしたかたちだ。自己の影に驚き怖れるかたちだ。或種類の唯物史觀と環境一元的思考と言論とはまさしくそれの一現象だ。

なにがゆゑに、環境だけを念入りにかぞへ立て、それの功能と威勢とを專ら吹聽、謳歌、讃美するにこれつとめ、そして、個性そのものが正直に、眞實に有する位置と作用と價値とをば、敵の美點に對するが如くに、見て見ぬ振りの素通りあつかひして、素通りあしらひしてすますのか。もつと獨立の知性がほしいものではないか。

日本に於て、ロシヤ革命あたりから、唯物史觀と環境一元論理的主張とが、急に勢焔をあげて來たことは、その事自身、いかにも環境決定を證據立てる現象のやうではあるが、それといふのも、弱い、薄い知性それ自身が、その環境を條件として、分相應に自己決定をやつたまでのものだ

強い知性は、相當に環境を決定する。獨創力ある學者、例へば産業革命の先頭に生きた自然科學者、社會主義の先頭に生きた社會科學者の場合を見よ。

生産の方法が制度と慣習を造つたといふが、道具そのもの、機械そのものが、腦の産物であつたことを、そんなことはわかり切つた話だ。われらの主張は、そんなところから千萬里も先きへ進んだ議論なんだとばかりに、卒業顔してすますべきではない。[illegible]

ふ數量と、やう盤に置き、さり去されただけのものであつて、性そのものは、その個性の集まりにほかならないからだ。ああ、こゝにも、數量に眼がくらむ一例があるのだ、文藝作品が信者や選民がそれであるやうに。なん千年、なん百年の久しきにわたつて、なん千萬、なん億萬の男女が信奉して來たといへば、それだけでわれらはとかく文宗される。それにも似た現象で、極めて心細い、たよりない現象で、前述のはあるのだ。

環境に見とれてはいけない。さうすると、大の男が小童女に玩弄される。一とつの見ぐるしい圖がそこに展開する。「折れたまま咲いて見せたる百合の花」「蝶ありてこのふる雪に飛ばばいかに」「向きたいほうにつんむいて菊の花」「向き〳〵に蛙のいとこはとこかな」「きり〳〵しやんとして咲く桔梗かな」こゝらにすらも、正しい環境哲學の、即ち正しい個性觀の片影はある。花の方向などは、日まはりの原則と同じ環境決定そのものの例だと考へる人にむかつては、要點は、「咲いて見せた」といふやうなところにあるのだとことはつて置く。

イチオロジストに聽くよりは、洞察力ある、想像力ある、即ち眞の詩人に傾聽する方が、正しい學問方法である一例は、この場合にもある。

個性の發達は、環境の發達を、それをいよ〳〵個性自身の支配下に置くかたちに於て、助成する。ただそれだけが眞理だ。問題の或もの、ここであつかつたかたちの問題、が關する限りに於てはだ。

六、環境

職業としての環境も注意される。職業かたぎがあるのだ。本能としての環境も注意される。行動觀察の發達理由かるのだ。環境の世界は、無限に廣い。それは實に無限に廣く、豐富だけれども、仕上げの一觸を、種々の個性によつて

與へられる。習性そのものも、どん底に於ては、個性化された環境にほかならない。環境化された個性だなどといへば、散漫にしてなんの結論をも構成しえないはめに落ち入る。それは事實でないからだ。個性化された環境といへば、これだ、これだとうなづかれる。

しかしながら、環境の存在と價値とが、いかに久しく、いかに亂暴に無視され、蔑視されて來たことよ。ギリシヤの哲學、基督教、近代の理想哲學、唯心論、佛教以前及び以後、陽明、鎖國的、非科學的日本、支那、いはくなに、いはくなに〱。

地理や天候、種、生産方法、無意識の本能及び習性、未探險の新世界が、續々として最近代の知性を刺激して來たことは、歴史がそれに殘した義務であると同時に特權だ。孟子は、「居は氣を移す、養は體を移す、大いなるかな居や」と道破した。まことに先覺者の言であつた。惜しいかな、しかしながら、それは思索的成長をもつて受け嗣がれなかつた。フオイエルバツハや、バツクルや、マールクスや、ゴルトンや、フロイドや、ヱブレンや、ヲツトサンや、勿論、大小種々だけれども、有力なる思索的後繼者を、あるひは多少すでに持つたり、あるひはいまから大いに持たんとする見込に滿ちてゐたりする。それそこに環境專制があるでないかと、すぐに突込まれるかも知れんが、勿論、その程度の自由または必然は、權勢及び能力は、環境に持たれてゐるのだ。

環境無視、環境否認、環境呪詛、環境酸葡萄の歴史が、久しく且つあまねかつたと私はいふた。例へば基督教の原形及び歴史を通じ

いた。偏主觀的ではないか。哲學の意味を、意思や感情の意味から、いた讀者を離すから、??して、???と。あるひは踊り手のない舞台同然のものにしたり、あるひは舞台のない踊り手同然のものにしたりしてゐるかたちではないか。そのかたちがあまりに勢ばつてゐるではないか。

現代に及んでさへもの、いはゆる哲學といはゆる倫理學とが、多くまたは概略的には、制度に對して、いかに消極的なものであるかを注意すれば、くだ〳〵しい例證は不用だ。

發達は最も手近かな、間近かなところから始まることが自然だとすれば、先づ主觀が注意された歴史に理解が持てないことはない。しかしながら、要するに全一の世界に於て、いかなる貴價の部分であらうと、殘部をそれから、それを殘部から切り離してしまつては、行きづまるほかない。環境切り離し主義は行きづまつたのだ。いまはまさにその行きづまりを解き放つ努力の新興時代にある。

七、自由

階級戰そのものが、それが眞に現實である場合についていふ限り、また自由の主張、要求、獲得努力の或かたちにほかならない。したがつて、それの內的事實にほかならぬ階級意識そのものも、また勿論それ以外のものではない。

階級意識は、實に、制限された自由の意識の或かたちだ。

階級とはなにかといふに、それが必ずしも或職業または職業群のことでもなければ、或住地または住地群でもないことは、また或種類または種族群のことでもないことは、最初からしてほとんど自明的だ。

例へばわが封建時代に於ては、士農工商といふ階級別があつた。けれども、今日のわが社會に通用する階級別の稱呼

は、有産無産だ。あるひは、有産有特權と無産無特權だ。そして、その有産有特權を代表する第一線にあるものは資本家及び大地主であり、無産無特權を代表する第一線にあるものは工業勞働者及び農業勞働者だ。さうすると、職業は、階級別を構成するものとしての關係に於ては、時代により、社會によつて必ずしも不易でない。即ち一定職業が常に一定階級を意味するとはいへない。

西洋を見ても勿論同樣だ。例へばプレトー、アリストートルの時代に於ては、工匠は下層階級者であつた。しかるに、歐洲近代の初期に於ては、工匠の階級的位置は著昇した。

階級別が、必ずしも住地や種族に依存しないことは、勝てば官、負くれば賊の、單なる征服被征服によつて、昨の下層階級地や族が今日は上層階級地や族となり、一時代の上層階級地や族が次ぎの時代には下層階級地や族となつたためしが、むしろ歴史そのものの全體の一個抽象であつたことを想起すれば、問題ではなくなる。

貧富別もまた必ずしも階級別ではない。商人は富めども下層階級を形成し、士や儒は貧なれども商人よりは上に位した時代があつたことがその一證だ。

しからば階級別とはなにか。社會的貴賤別または尊卑別がそれだといふならば、やや階級別の一特徵をとらへたことにはなる。けれども、それは文字通りに一特徵だけのものだ。階級別の生命、實在、原則そのものは、その奥にある。

さらにしからば、その奥にある、階級別そのものと呼びえられるものは、そも〳〵なにか。

それは、ここに及んで再び本題に立ち歸るが、社會的自由の

[illegible]きる。その場合、その分有しかたが多少不平等たりうる。事實としては、すくなくとも歴史的事實としては、それは必ず多少不平等であつた。社會的自由を、しかも要するに限られたる社會的自由を、その社會内の或人々は、同じ社會内**の他の或人々との比較に於て、より多く、あるひは、よりすくなく分有する。ここに、しかもここに始めて、階級別が**成立する。その事實がたければ階級別はないし、その事實があれば階級別がある。その事實が取りもなほさず階級別そのものであるのだ。

階級意識と階級とは、しかしながら、事實上、二たつの相關した、しかしながら獨立の特徴を有するものだ。階級なき階級意識は、幻覺または妄、錯覺としてでなければありえないが、階級意識なき階級は正覺としてもありうる。もしも社會的自由に於ける不平等的分有が、その比較的に少額にそれを分有する人々によつて、特に不滿足、不平、憤懣、屈辱、慷慨に感ぜられないならば、その限りに於ては、そこに階級は實存すれども、現時通用のいはゆる階級意識は成り立たない。わが封建時代にもその例はあつた。現代にも澤山にある。それは勿論、政治、經濟等の制度と慣習の世界に於ても著甚だが、男性と女性との對立の世界に於ける、女性のがはにも大いにある。いはゆる滿足してゐる奴隷、感激し切つてゐる奴隷なるものが、古來、いづれの社會にも多少あつたが、それはすべてこれだ。

階級別が事實あり、そしてそれが、下層階級者によつて不當、不正、不都合だと意識された瞬間に、階級意識は始めてそれの存在をえる。

しからば、いかなる場合、いかなる事情の場合に、階級がさうしたしかたまたはかたちに於て意識し始められるか、そしてまたその意識が永續きしたり、發達したりするかといふに、それは主として次ぎの如き事情の場合に於てだ。

自分たちが、かれらと比して、こんなにもすくなく自由を持ち　かれらが、自分たちとくらべて、あんなにも贅澤に、餘計に、餘分に自由を持つてゐるのは、自分たちの自由は、かれらの意思、かれら階級の利己的意思、いはばかれらの階級的利己主義によつて制限されてゐるからにほかならない。社會的自由を享樂する、即ち所有し、使用することに於けるかれら階級と、われら階級との多寡別は、かれら階級の利己的意思からくる制限、それに對する自階級の盲從または屈從、ここにそれの原因を持つ、といふ意識の發生と共に、階級意識は發生するのだ。それが即ち階級意識であるのだ。

階級意識は、かくして、徹頭、徹尾、社會的自由の或分有關係に對する或意識にほかならないのだ。そして、その二たつの或は、いま述べた通りの内容を持つものであるのだ。

しからば、進んで、自由とは、一體、なにか。

邦語の場合は、多少偶然ながらであるには相違ないが、自由の定義を構成する場合に、まことに都合よく出來てゐる。自由とは、讀んで字の通り、在在の原因を自己に持つことだ。もすこし、そして最も、精確にいふならば、在りかたの原因を自分に持つことだ。單なる自然物なら、單なる因果關係によつて支配されるだけのものゆえに、自由は、別に問題とはならない。かれらには、土壤意識力がないから、無論話にならない。

人間には、しかるに、勿論高度の意識力がある。ここに於てか、在りかたの原因が自分にあるか、あるとしてどれほどか、他にあるか、あるとしてまた他のなにに、いかなるかたちと程度に、また意味に、於てあるか、等及び等が、深い、大きな關心事たりうる。

[illegible]

意思にほかならない人間としては、在りかたの原因を自分に持つことは、それを自分の意思に待つことを意味する。人間は永生を意思することがある。しかし、かれは、自然の寿命といふものが、なに人の身の上にも、それの或[illegible]切つた最高限を明示して存することを承知してゐるがゆゑに、いはゆる天壽を全うして死ぬとしても、そして死はその人の在りかの一形にほかならないが、その在りかたを決定する原因が、自分即ち自己の意思に存しない、かへつてそれに反對してゐることを覺する限りに於て、多少の不自由を必然意識するが、しかし、相手が自然力であつて意思、或他の意思、具體的には他人の意思でないことが同時にわかり切つてゐるから、その場合、かれは決して他人をばうらみも、にくみもしない。

わが在りかたが、わが意の如くでない、かへつて或他人の意の如くたと知つた時、さう意識した時には、かれのうらみ、いきどほり、にくみは、勿論自然にその他人にむかふ。

その自分が、大ほぜいの同類者を持ち、その他人がまた多少の同類者を持つてゐる時、そこに階級意識が成り立つ。もつとも、事實殊に歷史上の事實としては、その被制限階級に對する制限階級は、いかなる少數者、したがつて時としてはたつた一人でさへ、すくなくとも形式的、外觀的にはありえた。

自由とは、人間の自由とは、自意にしたがつて生きることだから、くはしくいへば、死ぬことも廣義の生きかたの一種、一形にほかならないから、ここで生きる」といふたのを、狹義の生だけに限つて理解される危險を防ぐためには、自意にしたがつて在りかた、第一にまた代表的に自分の在りかたを決定することだからといひあらためていいが、それだから、自由とは、要するに、善惡を拔きにして考へた、わがままに生きることにほかならない。わがままに生きる、古來のなに人か、これに無關心でありえたものがあらう。これが、人間にとつての唯一の、すべての關心事だ。いふま

でもなく、わがまゝにとは、わが欲する、願ふ、希望する通りにといふことだ。例へばヤソもわがまゝを欲した一人だつた。ナポレオンもそれだつた。それでない人はただの一人もなかつた。今後もないにきまつてゐる。わがまゝは、しかるに、自由の一別名としての適用をゆるしうる。自由の根本的生命そのものだ。或場合に自由と呼ばれるものは、わがまゝの或かたちにほかならない。

わがまゝの具體的內容は、人により、場合によつて、もとより千差萬別たりうる。例へば飢ゑてゐる人にとつては、その飢ゑを滿たすこと、飽かすことが、すくなくともかれのわがまゝの一とつだ。同じ人でも、渴してゐる瞬間には、飲むこと、飲んでその渴を醫することがそれだ。性本能に燃ゑてゐる人、名譽心にさうしてゐる人、榮辱意識に或不安定狀態を持つてゐる人、知識欲に目ざめてゐる人、等、々、々にとつては、それぞれに、その傾向に無碍の、そして十分に忠實な發達、進展、開花、結實、それによつての安定即ち滿足を與へることが、すくなくともかれのわがまゝの一とつだ。

榮は興榮を、そして辱は屈辱を意味する。現に興榮を享樂してゐる階級と、屈辱を受けなやんでゐる階級とが、一とつの社會內にある時、しかも前者の興榮は後者の屈辱を方法及び條件とし、後者の屈辱は前者の興榮をそれとして始めて實現されるのだと、その屈辱階級自身によつて意識された時、なに人もかれの本然の傾向に於て、興榮を悅び、屈辱を悲むやうに出來てゐるがゆゑに、この屈辱階級のわがまゝ本能が、即ち自由欲が、その現狀の改造または打破を必要として見いだすに至ることは極めて自然だ。

〔…〕としての〔…〕、〔…〕たがひ人間としての関係。しかも一とつの〔…〕に於て〔…〕の関係、〔…〕関係を決定するとして成り立つ目標を、これに対する自覚を本質的準役または資産とする〔…〕的努力がかさなりあつて見える。これはおよそ社会的、歴史的形式に於ける政、経、争のすべてだとさへいへる。

現代のいはゆる階級戦、階級争、階級意識なるものを見ると、そのおほくは、それの最も代表的なものは、経済意識またはそれを主内容とした生活意識だといへる。しかしながら、単たる経済意識または単なる経済意識的生活意識程度のもので、一とつの社会的自由破制限意識があるならば、その限りに於ては、これはまだ赤熱の余地を持つものだ。真の自由は、自由の最深構造そのものは、必然的に、最も深い。したがつて最も烈しい栄辱意識または栄辱本能の或かたちであるほかない。

現代のいはゆる階級意識が、無産有産の関係如何によつてさへ呼び表はされて行進しつつある事實の裏面には、しかしながら、なほそれが、人間最深の栄辱範疇によつて再照される余地を持つものだといふ意味が多少あると同時に、一とつの確實な事情にそれが實感と知識を発達させてゐるのだといふ、時代的に有意義な関係もある。

自由は、真に必要な自由はいつでもなんらかのかたちに於て具體的だ。不自由が、真にゐたたまらない不自由が、いつでもなんらかのかたちに於て具體的であると同様にだ。

現代に於て、最も具體的な自由と呼びうべきものは、しからばなにか。その一とつが富であることになに人も疑ひをはさむ余地はない。

現代は、産業革命の延長としての性質を、それの代表的な性質のすくなくとも一とつとして持つ。産業革命はきのふの事件であつた。産業は、機械工業的形式に於ての産業は、生まれたばかりだとさへいへる。

その産業は、しかるに、曠古の社會的大勢力だ。産業は勿論富の生産を第一に意味するが、産業革命以來の産業は、社會に於ける、すくなくともその産業を持つ社會に於ける、富の總額または絶對量を、全く前古とは桁ちがひの程度に於て增大させた。産業革命以來の社會は、その以前の社會と比して、富の所有額に於て眞に激增した。

しかるに、富は、最初からして、それだけの人間的自由を意味する。富を、一とつの社會内に於て、よりすくなく持つことは、社會的自由を、それだけすくなく持つことを一面的事實としては常に意味する。富があれば、したくないことをしなくてすますます自由も多少きくし、富がなければ、したいと思ふ事をせずにすますます不自由も多少まぬかれない。ざらに、不斷に多少ある現實だ。

その富が、即ち或自由を意味する富といふものが、社會内に大激增したことを注意する。そしてその富の生産には、その社會内の大多數者が從事することを注意する。しかるにその富の使用即ち消費をば、その社會内のずつと少數の人人が主として特權づけられてゐることを注意する。さうすると、時代的に發達した一とつのほとんど絶大的な自由は、つひに一とつの大きな社會問題とされずにはすまぬ複雜した無反省な、あまりにも社會的野育ちの狀態にあることが續いて直ちに注意される。富即ち産の有無を識別標準として、現代の階級意識が、それのすくなくとも最も著大な一とつが發達しつつあることは、ここに於てかなんの不可解事でもなくなる。

その、主として特權づけてゐるものは、直接には現存の或制度にほかならないことに注意すれば、その制度の相當の

ら、人間は、それの改變や改作を、それを不都合だと意識した立ち場からしては、再び人爲的即ち人爲的に思ひ立つにきまつてゐる。一とつの人爲物にほかならない社會的自由が、それの不出來ゆゑに、いまは造りかへられつつある。

元來、富といふものは、勿論經濟的價値であつて、藝術的價値から識別された經濟的價値であつて、それが消費される過程にそれの目的は集中してゐる。富の單なる生産過程そのものには、藝術のそれに於けるが如き、自己滿足は決して發見されない。なに人か、例へば、風呂を沸かすことそのことを、なにものをも自由に選擇してゐる事情下にであつたなら、沸かされた風呂につかることに比して、選擇しよう。機械工業時代に入つて、しかるに、單なる富の生産過程は、いよ〳〵、それ自身としての價値に於ては、つまらない、いやなものになつて來た。

藝術的生産には、勿論、しかるに、それ自身の悦びも深く、どんなにも深くありうる。誰れに見せるといふ當てもなしに、獨りあるきの野原で、自然に聲をあげてうたひたくなり、うたひだし、みづからうたひながらみづから聽き、みづから聽きながらみづからうたひ、それで一つのまつたい悦びが成り立つ如きは　それの極めて簡單なる一例だ。

經濟的價値としての富の場合に於ては、生産過程と消費過程とが、藝術の場合に於けるよりはずつと分離してゐるのだ。單なる生産過程そのものは、面白くもないのだ。

單なる生産過程そのものも、部分と事情によつては、必ずしも面白くないとは限らない。例へば企業の悦び、組織、經營の悦びの如きものがありうる。しかしながら、これらの悦びは、現代の經濟組織に於ては、富の所有者、即ち富を多分に使用し、消費しうる位置にある人々の特權に屬してゐる。

富の有無によつて、工業的現代の社會人の自由が、最も大きく與奪され、厚薄の分配別を受けてゐる點は、四顧、俯仰して、眼界ところせまきまでに貼りつけられてゐる。その圖が、生活の現實なのだから、無産有産が、即ち自由不自由

だと、應急的に命名することはたしかにできる。

けれども、この鬪は早晩、褪色し、解滅し去るにきまつてゐる。いますでに刻々に、種々の速度に於て、それが一面の社會的現實となつてゐる。

社會的自由及び不自由の問題は、しかるのちにも、なほ多少殘存するにきまつてゐる。またそれは新たに發達する可能もある。例へば、富の所有者が企業、組織、經營等の特權者ではもはやなくなつても、しかる場合には、才幹、器量に於て、さうした任に、自然當たりうる、また現に當たつてゐる、人々の群れによつて、いはば支配階級、即ち社會的わがまま階級が、必ず多少形成されよう。現在の世界にもいくらかの證據はあるやうにだ。

しかし、武力が爵に、爵が富に、その富が平和的形式に於ける權力または行動的統整力、即ち廣義の政治力に移り進むところに、社會的自由の全局の成長過程は認められる。もしも科學と藝術とが、社會的自由の主體とも、像徴とも、時代的特徴といつて然るべき程度に於てなるならば、それはまた、現代に於て考へうる限りの、黄金時代への肉薄であらねばならん。事實として、眞に深く、遠く人間を解放するものは、不自由から自由へと積極的に解放してくれるものは、正しき意味、根本特徴的意義に於ての、科學と藝術だからだ。しかし、なほかつその科學と藝術との兩者間に姉妹別をつけやうとするならば、藝術を解放する手も、藝術自身にあるよりも科學にある。ただ、科學は、より多く解放者であつて、藝術は、より多く解放される位置にある人生の目的物そのものだ。

擇可能も、全宇宙の豫定の筋書きをいくらかたりとも書きかへさせる必然なきること、いかなる環境決定論者も、自己の意思にすがるきはどい瞬間を時々に持つこと、等、々、々の思索は、ここでは一切、あまりに見なれた顔で珍らしくもないから素通りする。しかし、勿論、本文に於て立ち寄つて見た顔も、概ね古色蒼然たるものではあるが、階級及び階級意識を、自由の或かたちだとして理解することが、それを理解するための至要件だといふ一點に、おのづから足をとめて見たくなつて、そのついでをもつて、眼前寸景の映瞬をそのまゝに、草々騙筆如件。

八、所有權

制度上及び慣習上、所有權と銘を打たれ、あるひは見なされるものがある。その所有權とはなにか。それは、實に、自由の或かたちにほかならない。

いま、私有權即ち私的所有權について考へて見る。ここに、私の下駄と稱せられるものがあるとする。すると、そこに一とつの所有權がある。私に屬する一とつの所有權がある。それはなにを意味するか。それは、私が、その下駄を使用する自由を、社會的自由を持つてゐることを意味する。私がそれをはきたければ、他人からの許可を受けずに、他人から制止される心配なしに、私はそれをはくことができる。はきたくなければはかず、薪にしたければ薪にする。社會から文句をいはれる氣づかひはない。

所有權のありがたさはここにある。公認された選擇可能の或範圍といふかたちに於て、所有權は、われらに、即ち社會人に、自由の或天地を構成してくれる。

その自由の天地を舞台として、われらは、さもなくば踊れない踊りを、心ゆくばかりに踊つて見ることの

所有權なき、またそれの不完全な社會に於ては、個性の成長はそれだけ、それに原因するだけ、制限される。

その大切な、大慈大悲な所有權が、現代の事實としては、どう分配されてゐるか。

個人としては相續權のかたちに於ての、いかなる富の獨占者もありうるし、國家としても、繼承權ともいふべきかたちに於て、いかなる大土地の獨占國もありうるといつた概狀だ。

社會的に有限の富を、相續權や繼承權のかたちに於て、現在の事實のやうに亂暴に私有、獨占することが公許されてゐては、例へば貧者の子孫と、小國の後繼者とは、富者の子孫と、大國の後繼者との比較に於て、例へば競爭が關する限りに於ても、人と人、民族と民族との競爭などはできず、偶然授かつたに等しい物と物との競爭だけができることになる。競爭などは野蕃だといふならば、競戯でよろしい。そこでは、とても、面白い競戯などは見られないことになる。競戯といはずに競技といへば、一層適切だ。技は、實に、人に屬するものだからだ。

願はくば人間の世界をして、すくなくとも競爭が關する限り、すくなくとも競技の世界たらしめよ、競物の世界たらしむるなと、多少深く意識される理由が、所有權をして、それの公私各種形をして、社會の各人の可能的最全發達を明確に目的とするものたらしめよと、うつたふる聲と共に、現代人の、有我、無我の瞬間を、暗くしたり、明るくしたりする複雜事情に、しばし想歩をとどめて見た。

九、勞働運動

勞働意思と資本意思とを對比して見て、すくなくとも一とつだけ勞働意思の方に强味がある。その强味は、勞働意思は、勞働を起點としてすべての頭腦作業にも進取の手を伸ばさうとあがく意思であるのに、資本意思は、手だけは確固に保持しなくてはならんといふ制限を身に着けた意思だといふ點にある。

それが單なる意思であるあひだは、資本家は高枕することもでき、勞働者は降參するほかないこともあるが、それが實力ある意思となりさへすれば、その高枕も、その降參も、共に昨の夢となりうる。

勞働者の立ち場からしては、その實力を持つよりも急な必要は、その勞働運動を成功させるための方法として、勿論一とつもない。したがつて、すべてのそれ以外の精力使用は、それが勞働運動意識に於てなされるものである限り、その實力獲得意思によつて出來るだけ統整されることを、最も科學的思慮あるものとする。

無産階級の時代的眞意義は、實力ある、しかし階級的に機會を拒否されてゐる、したがつて社會的に最も惜しまれべき生産意思群そのものとしてのほかには、勿論ありえない。勞働運動は、しかるに、無産階級運動全體にとつて、ヤソのいはゆる地の鹽そのものだ。しかし、鹽そのものにも、純の上にも純があり、雜の下にも雜がある。勞働者の生産意思、そのための實力獲得、これの成長は、社會理性そのものによつて必要中の必要として常に加護される。勞働運動の眞の、根柢ある、發展的な成功は、生産意思を中心として、これに實力獲得意思、實力所有意思が結び付いたもののみの特權だ。實權の如きは、單なる實權の如きは、意識して、特に意識して求むべきほどの、集中的に求められるだけの、價値あるものではない。ここに、現に旺盛なる生産意思があり、それと結合した眞摯なる實力獲得意思がある以上、またすでに相當に實力が獲得された以上、實權は、內外からの爆發的必然必要物にほかならないものとして必招、必致される。それはかれらの手に必至する一とつの運命物にほかならない。

せめて勞働運動だけは、飽くまでも、飽かずます〱、實利主義、實功主義、實榮主義であらねば、無産階級意識運動は、時と共に雲散霧消し去る空中騒ぎだけのものに終はるほかない。たとひ、それが、或人々の眼には、どんなに虹霓の如くに雄美にも、蜃氣樓の如くに幻魅的にも、映じやうともだ。

生産意思なき、生産實力獲得意思はなほさらなき、したがつて生産實力も薄弱な、しかし生産實權だけをば、制度、慣習によつて確保されてゐる階級と個人がブルであり、その正反對がプロであらねば、そのブルは悔蔑をあたひせず、そのプロは愛敬をあたひしない。

勞働運動は、正しきプロ運動の衝動そのものであると同時に、反省の強制力そのものであることが最も自然だ。社會進歩の綱曳きは、しかるに、常に、その時代に於ける正しきプロ運動によつて引き受けられるほかない役割だ。

十、階級意識

文學や藝術、純粋文學や純粋藝術に於けるよりも深く、自由が必要な文化機能はない。それは、なんの奴隷でもなく、それ自身の手にそれ自身の主權を、人生的主權を持つものであらねばならん。そこにこそ文學や藝術の存在理由の、社會的存在理由の本質的部分はあるのだ。

階級文藝は、その階級が、人間性の、現實の社會に於ける、最眞、最實、最全の所在だといふ假定の上に、せめてもそれの存在理由を持つ。その假定が果たしてどれほどの事實によつて確證され、裏書きされたものであるかが、それゆ

ゐない。文藝は、純粹文藝は、卑な[illegible]功利主義の奴隷でない文藝は、御用文藝でない文藝は、自由文藝心[illegible]たい自立、自由の文藝心は、さうした人間性にも十分の愛と敬とを拂はずにはゐられない。

近松は、例へばかれの『心中宵庚申』に於て、意地わるな姑かたぎをも忠實に再現し、素なほな、氣だてやさしき嫁かたぎをもさうしたが、文藝は、文藝心は、純粹文藝心は、單なる姑かたぎよりも、單なる嫁かたぎよりも深い、全いものなのだから、近松がさうしたのは、非文藝的でも、反文藝的でも決してなかつたのだ。

文藝に、あるひは文藝心に、社會理想的主張があり、批判があることは勿論よろしい。それがその作者の僞はらざる生命的實感であるならばだ。しかし、文藝は、飽くことを知らぬまでに無限に、人間性そのものの觀察者、信仰者、愛著者、批判者、教育者、表現者であらねばならんのだから、それに於ける社會理想的主張も、さうした深根柢からなる直接發露の一特殊形でそれがあることを必要とする。

本能または衝動から發した階級意識でなく、槪念から、あるいは或種類の打算的考慮や、薄志的淺慮やなどから發した階級意識が、階級文藝を成り立たす資格なきものであることは特にいふまでもない事に近い。せめて文藝と哲學とだけは、階級文藝とか、階級哲學とか、自分から看板をかかげる必要のないものであつてほしい。そんなものの深さのほどが、最初から見え透き過ぎてゐるからだ。文藝や、哲學は、そんな制限を、全く制限としてほか意識することができない、自由の信者、愛人、使徒そのものであるからだ。

明日の文藝は、また哲學も、唯物史觀や無產階級意識を權威とし、規則とする約束を持つものではない。それは、ちやうど、これが、唯心論や有產階級意識をもさうしないと同一の深理由によつてだ。現代に於て、現代の事實として、唯物史觀と無產階級意識とに、比較的に、生きた人間性が移籍しつつあることは認められる。しかし、文藝や哲學の立

場は、それらの比較差を十分に認識し、評價し盡くして、なほ無限に綽々たる餘裕を保有する。石油[illegible]が、太陽から見てなにか。

大體からいふて、根本見識に於ける朝變、暮改のともがらは、それが哲學者であらうと、文明批評家であらうと、社會理想家であらうと、社會思想家及び批評家であらうと、文藝作者及び評者であらうと、かれらが、その瞬間々々の自己に不忠實だとは必ずしもいへないが、識力に於て薄弱なともがらであることだけはたしかだ。

勿論、それらの人々の存在にも、多少の社會的功用がないとはいはない。また、岩石そのものの如くに、すこしの昨是、今非もない人々が、識力の持ちぬしだとは必ずしも決していはない。ただ、流行を見て物をいひ、それにしたがつて物をいひ、流行に感染して言動する時に、われら自身に、それの自反、自省、自覺、自知、自認がないならば、それはそれだけの、われらに於ける、制限即ち不完全を意味するものだとはたしかにいへる。

階級意識は、階級意識そのものによつては營養されず、それの環境たる、もつと深い、もつと根柢的な、もつと全體的な人間性そのものによつてのみ營養される。人間性から切り離された階級意識でなく、人間性そのものの全的自己主張の、やむにやまれぬ一形式としての階級意識にして、始めて、それは、人間性としての階級意識だ。この階級意識にして、始めて文藝や哲學の一特徴ともなりうる。

それにしても、階級文藝、階級哲學などと、自分の方から求めて、進んで、先づ名を掲示する如きことは、先づ名のつていづる如きことは、どう考へなほして見ても、文藝心や哲學心の柄にはない。

文藝と哲學は、前者は洞察と想像と表現を方法とすることによつて、後者は洞察と論理と表現を方法とすることによつて、無限の自由を絶對的に必要とする一特殊文化內容、一特殊社會機能そのものだ。

文藝と哲學までもが、外在物の奴隷となつては、それこそ、世界は、環境だけから成り立つたものとなる。しかし、環境も、相手なしの相撲は、張り合ひがなさすぎて始める氣にもなれまい。さうすると、世界は、なしになる。

階級意識、社會意識、人間意識、人間性、底には底が、出來るだけ意識的にもあつてほしい。

我國勞働運動に於ける左翼右翼の闘爭と其將來

無產政黨問題をめぐる左右兩翼の爭ひ

——事實をして答へしめよ——

山川均

（一）

無產階級運動内の左右兩翼の對立は、同じ根本精神の上に立つ意見の分岐に過ぎないもの（即ち程度の相異、分量の問題として見れば、（實際には、量の問題たる範圍を越えて質のか[illegible]んとなつた左右兩翼の對立もあるが）この範圍内に於ての左右兩翼の對立は、無產階級運動の始んど如何なる時、如何なる段階にもあり得るものである。日本の無產階級運動の内部にも、固より兩翼の對立があつた（この對立が如何なる性質のものであるかは暫らくおき）。從つて左右兩翼を包容した無[illegible]樹立の行程が進むにつれ、この兩翼の意見の相異が綱中心として現はれ來ることは、何人にも豫想する[illegible]

のみならず、この相異は可なりに大きなものであると、多くの人々は豫想して居つた。(現在の左右兩翼の性質については、多くの人々が漠然ながら受けてゐた印象が、かく豫想せしめたから)。言葉を換へて云へば、無産政黨準備委員會に參加した諸團體から提出せられる綱領の草案の間には、可なりに大きな相異のあるものと豫期せられてゐたのである。

然るに幸ひにも、實際は多くの人々の豫想に反してゐた。もちろん諸團體の草案には、相異があつた。けれどもその相異は、豫期せられたほどに大きな相異ではなくて、その一致は、寧ろ豫想以上であつた。即ち、諸團體の綱領草案の特徴は、その相異ではなくて、一致點であつた。これが注意すべき第一の事實である。(この事實に注意をひくために、私は昨年十月の本誌に於いて、主要四團體――政治研究會、勞働總同盟、勞働組合評議會、日本農民組合――の綱領草案の分類比較を試みた。今日右翼の代表者と見做されてゐる勞働總同盟の草案二十四項目のうちの二十項目までは、左翼の代表者と認められてゐる勞働組合評議會の草案と、大體に於て共通するものであつた)。

第一回綱領委員會に於ては、左右兩翼の間に盛んな討論が行はれたが、その論點は主として、同一の要求を如何なる形で云ひ表はすかと云ふ表現の問題であつた。例へば土地國有の如き最も重要な問題に就いても、土地國有の要求そのものが無産階級の當然の要求であることには、評議會の代表者も一致する。それと同時に、或る條件の下には、土地國有の要求は地主の要求ともなり得るといふ事實については、農民組合の代表者も異論がない。して見れば問題は、如何にしてこの曖昧が避け得られるかといふことに歸着する。斯ように第一回綱領委員會に於ける論爭が如何に白熱したにもせよ、大體に於いて(もちろん或る問題については、また個々の委員の言論のうちには、この範圍を越えたものもあらうが)右の範圍内に於いての論爭であつたと見做してよい。これは第一の事實から當然に豫期せられる第二の事實である。

この論爭に於て、左翼は善戰した。第一回綱領委員會に於ては、左翼の主張が右翼(及び中央)の主張を壓倒したことは爭はれぬ。左翼は右翼を、土俵の眞中よりも向ふまで――精密に云へば、委

然しながら右翼の實際の勢力均衡の狀態以上に、左翼に有利に終つた第一回綱領委員會の結果は、同じ理由によつて決して安定的なものではない。即ち第二回綱領委員會はその反對であつた。第二回綱領委員會では、徹頭徹尾、右翼の主張が勝利を占め、さきに保留となつた項目も殘らず復活された。ひとり綱領の問題ばかりでなく、或る意味では綱領以上に重要な組織形態の問題では、左翼は分裂を避ける必要から、殆ど何等の強硬な主張をもなし得なかつた。斯ように第一回綱領委員會では左翼が進出したが、第二回綱領委員會では右翼が押し返した。そして左翼は、實際の勢力均衡の狀態に照應した地點で踏みこたへることが出來ないで、それよりも遙かの向ふまで押し返へされた。これが第二回綱領委員會の結果であつた。

かくして出來上つた綱領草案と規約草案（即ち組織形態）とは、左翼的の草案であらうか、右翼的の草案であらうか。右翼と左翼とその他の要素とを包容した委員會の成案であるから、これは左翼の草案でも右翼の草案でもなくて、嚴格に云へば委員會の草案である。けれどもこの草案を決定した最後の委員會を完全に支配したものは、右翼である。從つてこの草案のうちには、右翼の主張がより多く具體化され、左翼の主張は、右翼が喜んでそれを認容する範圍内に於いて具體化せられてゐることとは明かである。決定的の力を持つてゐたのは右翼である。若しその草案のうちには、左翼の要求した主張が含まれてゐるにしても、これを採用した決定的の力は右翼であつた。それは右翼も左翼も同意した成案であつて、右翼も左翼も共に責任を持つべきものではあるが、強いて左翼的性質の成案であるか右翼的性質の成案であるかと問ふならば、それは左翼的性質の成案であると見做すべき少しの理由も存せぬに反して、右翼的性質の成案であると見做すべき多くの理由がある。これが第三の事實である。

（三）

この綱領草案は、準備委員會の最後の總會（結黨直前）に於いて著しく修正され、そのうちから可なり重要な多くの項目が削られた。（組織形態の方面でも、主として左翼の主張した組合以外の無産階級團體の加盟を認める條項が削られた）。

この修正の結果、無産政黨の綱領と組織形態が、特にその綱領が、いづれの方面に傾いたかは言はずして明かであらう。なぜならば是等の項目は、不穩當であるとか、左傾的だとかといふ單なる理由で削除せられたものだからである。この『間際の綱領緩和』——新聞の評語を用ひれば——によつて一層『穩健』とし

た無産政黨の綱領は——第二回綱領委員會に於いて、主として右翼の主張によつて決定せられたこの綱領は、——一層よく右翼の主張と一致するものとなつた。これが第四の事實である。

もちろん私はこの綱領を以つて、右翼の綱領だといふのではない。從つてまた、この綱領に對しては、獨り右翼のみに之を支持する責任があると云ふものではない。なるほどこの綱領（組織形態もまた）は、究極に於ては、左翼のより多くの讓歩によつて成立つたものであり、右翼が殆んど完全に決定力を持つて採用せられたものだといふ意味では、右翼的であると云ふことが出來る。少くとも右翼は、この綱領に對して（組織形態に對しても）何等の異論と不滿のあるべき道理のないものだと云ふ點では、右翼自身の綱領だと云ふことが出來る。

けれども左翼もまた之に同意を與へたものである。この綱領（組織形態もまた）に對して、左翼には何等かの不滿があつたにせよ、少くとも現在の形勢の下に於いては、右翼と共にこの綱領——或は右翼的の綱領——を支持することが、無産階級運動の當面の必要が命ずる任務と考へて、これを支持したものと解

り、之に對しては獨り右翼のみが責任を負ふべきものでもないやうに左翼のみが責任を負ふべきものでもない。斯ような意味に於いて、農民勞働黨は右翼的でも左翼的でもなく、全階級的に理解しなければならぬ。（最後の準備委員會で穩やかならずと認めて削除した綱領項目中の最も主要なるものは、必ずしも左翼のみが主張したものではなかつたこと、例へば『土地國有』『司法制度警察制度の改革』は農民組合の草案から採用せられたものであり、『華族制度の廢止』は總同盟と評議會との草案に共通し、『樞密院、貴族院……の廢止』『產業管理權の獲得』は、四團體の草案の一致する項目であつたこと、これも亦た看のがしてはならぬ事實の一つである）。

（四）

この時、禁止命令が下つた。『國家權力』は闇の中から躍り出て、物をも云はせず、いきなり無產階級の横面を張り飛ばした。撃たれたのは誰だらうか？無產政黨の全階級的性質を理解し、從つてこの打擊を、全無產階級に加へられた打擊として受

らない、左の頰をして左に行かしめよ、吾々は厄介な相棒と手を切つて、片頰だけでゞも失つて暮したい、と。これに反して左の頰は、この打擊を全身に與へられた打擊と考へたとしたならば、この右の頰と左の頰とは、いづれが全身的の意識を持つと云はれるであらうか。そしていづれが全身の利害に忠實だと云はれるであらうか。

農民組合の提唱から禁止命令に至るまでの、無產政黨樹立の行程内に於ける右翼と左翼、この兩翼を結びつけるために努めて中立の立場を取つた中央（農民組合等）この三つの主なる潮流乃至は要素の、それぐ\の努力と行動とについては、特にその戰術上の方面乃至は方法については、批評すべき色々の事柄がある。しかし私は今、その批評を試みてゐるものではない。私はこの行程のうちから、何人も認めざるを得ない少數の事實を拾ひ出した。そしてこの動かすことの出來ない事實によつて、無產政黨——十一月三十日の準備委員會によつてその綱領と組織形態とを賦與せられた通りの無產政黨——に對して、何人が責任を負はなければならぬかを明かにした。無產政黨の全階級的性質に對しては、右翼も左翼も、固より全責任を負ふて之を支持しなければならぬ。けれどもその成立の行程と事實に盲目でない限り——就中、無產階級的意識に盲目でない限り——農民勞働黨に對して最も多く責任を分擔する者は、左翼よりも寧ろ右翼でなければならぬ。なぜならば農民勞働黨の綱領と組織形態とは、主として右翼の主張に一致して決定せられたものであり、從つて農民勞働黨の禁止は、左翼を擊つといふ掛聲で、實際には右翼を擊つたものである。たゞ右翼指導者は、感ずべきその痛みを、自己の痛みとして感じなかつたまでゞある。

現に農民組合は、この打擊を、獨り左翼に加へられた打擊とは見ないで、全無產階級に加へられた打擊と見た。それ故に十二月二日の聲明書により、猛然として單一無產政黨再擧の決意を以つてこれに答へたのであつた。これに反して右翼の指導者は、政府禁止命令を寧ろ當然のことゝして是認した。私は右翼指導者の心事を忖度しようとせぬ。けれども農民勞働黨の禁止を當然のことゝして是認することは、小川平吉氏、憲政會の某總務等々と同一の視角から無產政黨を見ることに歸著するといふ、明白な事實を如何ともすることが出來ぬ。

（五）

第五の事實は農民勞働黨の禁止に對して、無產階級が如何に反應したかといふことである。この反應の作用はいま尙ほ判

所に起り、到る所に進展し、今後尚ほ久しきに亘つて行はるべき作用である。けれども今日までに、少くとも一つの事實は明かになつてゐる。即ち農民勞働黨の禁止に對する反應作用として、無産階級運動の一部分に、一切の無産階級的要素を包容する單一政黨の組織に對して、積極的に反對する主張が現はれたことである。これより以前にも、無産階級運動に對する好意ある助言者を以て任じたブルジョア・デモクラットの間には、單一政黨を非とする意見があつた。そして無産階級運動自身の間でも、右翼は概ね單一政黨に對して、懷疑的であつた、それにも拘らず、少くとも無産階級運動の陣營の内部には、單一政黨を積極的に非とする意見は、存在の餘地が無かつたのである。

然るに農民勞働黨に對する禁止命令の一下により、事情は一變した。右翼指導者は單一政黨に積極的に反對し。左翼を排除した政黨の組織計畫に積極的に進出したばかりでなく、今日は單一政黨を積極的に非とする理論すらも、その指導者によつて編み出されるに到つてゐる。分裂政策への大膽明白な積極的の進

それは大凡そ次の如く要約することが出來る。

(一)從來ブルジョア政黨は、何等かの必要のある場合には、政治的に組織せられて居らず、從つて定形のない一般無産大衆に訴へてその支持を受けようとした(例へば在野時代の憲政會)

(二)然るに無産階級が政治的に結成する機運が熟した今日は、彼等は最早や、一般的な無産階級に支持を求むる希望を拋つた。その結果は、二つの方向を取つて現はれる。即ち第一には

(三)中産階級及びその下層の勢力を强めてこれに支持を求めること、中産階級、特に産無階級と接續するその下層の利害をブルジョアジーの利害に結びつけて、無産階級の影響から引き離すこと。(税制整理に含まれてゐる諸政策、自作農の保護と創定、關税改正等)、第二には

(四)謂ゆる『分割支配』の政策によつて、無産階級そのものの間に、彼等を支持する特殊な層を作ること。

(五)この目的を成就するためにも、無産階級の階級的結成を

（六）政治的には左右兩翼の對立を利用して、（特に左翼の排除によつて）無産階級が單一の政治勢力に結成することを阻止すること。（農民勞働黨の禁止、左翼を排除した政黨樹立の促進。）

無産階級の勢力に對するブルジョアジーと政府の對策、就中、直接に無産階級運動そのものに向つて働きかけてゐる對策の中心は、無産階級の戰線の分裂に外ならぬ。そして政府によつてこの對策が一歩一歩進められるに伴ふて、無産階級の陣營そのもの丶間に、これに順應した反應作用が進展した。

農民勞働黨の禁止は、この政策の最も露骨な現れであつて、その口實が何であらうとも、その眞實の目的が、左右兩翼の反目と背離を激成するにあつたとは爭はれぬ。從つて農民勞働黨の禁止に對しては、あくまで單一無産政黨主義の固執を以つて答へることが（例へば十二月二日の農民組合の聲明書）鬪ひの唯一の方法であり、唯一の無産階級的な立場である。これに反して單一政黨に反對することは（それが左翼の排除によつて行はれると右翼の除外によつて行はれるとを問はず、また如何なる理論、如何なる動機、如何なる心術に出でるとを論ぜず）その事實上の効果に於いて、ブルジョアジーと政府の中心政策に協力し、その遂行と完成とに、最大の貢獻をすることを意味してゐる。

（六）

單一無産政黨とは、無産階級の一切の要素を一つの政治勢力に結合した政黨である。即ち一面には、勞働者と農民との協同戰線であり、他面には農民と勞働者とを通じての、左翼と右翼の協同戰線である。この協同戰線を必要とする主要な理由の一つは、これが資本の攻勢に對抗する唯一の方法だからである。

そこで左翼の單一無産政黨の主張には（左右兩翼に對して中央の立場を取り來つた農民組合その他の單一政黨の主張にも）勢ひ次の如き確信が含まれてゐなければならぬ。即ち

（一）吾々と右翼との意見が如何に隔だたつてゐようとも、無産階級の利害とブルジョアジーの利害の相反してゐるほどに隔だたつてゐるものではない。從つて

（二）意見の相異を認めつ丶、尚ほ且つ資本の攻勢に對しては、右翼と協同の戰線に立つ必要があり、また協同の戰線に立つことが出來る。（ブルジョアジーに對して協同の戰線に立たれぬほどに、右翼をブルジョアジーに近い、ブルジョアジーと同一の階級的立場に立つものとは認めない）。

これに對して、左右兩翼を包容した單一無産政黨を非とする右翼の主張（ブルジョア・デモクラットの主張もまた）の

には、必然に次の如き確信が含まれてゐる筈である。即ち

（一）吾々と左翼との相異は、資本の攻勢に對しても協同の戰ひの出來ない程度の相異である。即ち

（二）吾々と左翼との隔たりは、吾々とブルジョアジーとの隔たりよりも甚だしい。吾々は左翼とよりも、ブルジョアジーとの方により多く利害が一致（乃至は接近）する。

右翼指導者の行動を非難する場合に、左翼はやゝもすれば『階級的裏切り者』といふ言葉を用ひてゐる。この非難が當つてゐるか當つてゐないかは、別問題である。たゞ見逃すことの出來ない事實は、左翼は右翼指導者を責めることに少しの假借をもしないに拘らず、單一政黨の可能を信じ、進んで右翼と協同の戰線に立たんとしてゐるのは、事實の上に於いて、右翼をブルジョアジーの陣營に屬するものとは認めないで、味方の陣營に屬するものと評價してゐることを意味してゐる。然るに、右翼指導者が單一政黨と協同戰線とを拒否するのは、この評價を拒否することを意味してゐる。左翼は右翼指導者をも、資本家階級の味方ではないと云ひ、右翼指導者は却つて之を否んでゐるとしたならば、如何にも皮肉な事實である。しかしながら事實は往々にして皮肉である。（二月二十五日）

二個の指導精神

赤松克麿

一

勞働總同盟が分裂して以來、社會運動の上に二個の指導精神

たやうに、人によつて色々と命名を異にして居るけれども、二個の相容れざる立場が、次第にはつきりして來たことだけは、否定

難い現象である。

對立して居ることを認めざるを得ないのである。右翼と左翼といふ用語は、適切だとは思はないが、玆では便宜上此の用語によつて兩派を呼ぶことにする。改めて斷るまでもなく、私は右翼の陣營に屬する者である。それで私は右翼の立場に立つて、此の二個の指導精神の差異と此れに關するあらましな批評を試みることにしやう。

我國の資本主義が斷末魔に瀕して居るとか、資本主義最後の段階たる帝國主義に進んで居るとかいふやうな言葉は、我國社會運動の宣言や宣傳文書の上に、鼻につくほど濫發されて居るが、これが流行の魁をなし、また最も熱心に其の流行に努めて居るのは左翼の諸君である。レーニンに依れば、帝國主義は資本主義最後の段階であり、死滅しつゝある資本主義であり、また××××の端緒である。左翼の指導精神は、此のレーニンの言葉から出發する。彼等によれば、我國の資本主義は今や帝國主義化し、斷末魔に瀕して居る。而して支配階級と被支配階級とは二大陣營に分れて對立し、其の階級鬪爭は急迫して居る。故に我國の資本主義は、もはや「改良主義の餘地無き資本主義」(勞働組合評議會創立大會宣言參照)であつて、「選擧制の擴張」「勞働立法の制定」「社會政策の實施」等に對して、望みを抱くことは、政府及び資本家の誘惑懐柔に瞞せられることである。だから例へば議會のごとき改良的要求を利用するにしても、之を建設的に利用する××××、、、××××暗殺的見地から、其の鬪爭の××××××、、、、、×××××××××××××××××。(同上宣言)。

世界革命の行程が着々進展して、×××××××眼前に迫つて居り、そして日本の無産階級も堂々たる陣容を築いて、[illegible]死の資本主義に肉迫して居るといふ認識が、左翼の指導精神の根據をなして居ると見て差支ない。總同盟分裂の直後に於て、勞働組合評議會の立場を理論的に代辯した志賀義雄君は次の如く云つて居る。

「日本の勞働階級は強固なる前衛分子を有し、帝國主義は世界的に沒落期に向ひつゝあり、しかもプロレタリア革命はロシアに於て建設されて、×××××××××、××××××××××××××。」

「日本の資本主義の發展は被搾取人民大衆の中から、近代的勞働階級、無産階級を發展せしめた。資本主義の飛躍的發展は即ち無産階級の飛躍的發展であつた。殊に×××××××××××××××××は、資本家階級と無産階級の對立を、甚しく尖鋭ならしめると共に、農民及び其他の小ブルヂョア階級の生活を著しく惡化せしめ、彼等を[illegible]に參加せしめつゝ

かくて支配階級と被支配階級との矛盾は、最も明確なる形をとり、支配階級内の相對的對立關係は、此の絶對的矛盾の發展前に、迅速にその重要性を喪失して行つた」

二

私は左翼の指導精神の根據をなすところの右の認識を肯定しないものである。成程、我國の資本主義は帝國主義化して居る。そして歴史的に見て、帝國主義は資本主義の最後の段階であるだらう。併しそれかといつて、我國資本主義の現實が崩壞に瀕して居り、無産階級の勝利が、鼻の先きにぶら下つて居るやうに觀るのは、あまりに事實を湖曲した見方である。歴史的に見て其れが最後の段階に在るといふことと、其れが眼前に崩壞に瀕して居るといふこととは、可成りの隔たりがある。此の隔たりを無視して、革命的幻影に逆せ上つて居るのが左翼の指導者諸君である。彼等が革命は何年後に來るといつて、大本教の御筆先めいた豫言をしたがるのは此處から來る。また御調子者やあわて者の共産青年諸君が、躍氣となつて、兒戯に類する

入つたといつても、資本の集中、産業の機械化等が十分に行はれないで、夥しい中産階級が存在し、無産階級の陣營は未だ成熟の域に達して居らない。資本主義が行き詰つたといつても、それは早熟早老であつて、先進國の如き正常の發達を遂げないのであるから、刻下の社會狀勢が必しも有産階級と無産階級との最後の決戰舞台を展開して居る譯ではない。しかして資本主義の變則的發達は、我國の政治形態に傳統勢力を根強く殘存せしめ、多くの專制主義的法令を存續せしめ、一般國民に濃厚な國家主義を植えつけて居る。此等の傳統勢力と大資本の勢力とは協同して、長く我國の政治舞台を指導してきたのであるが、最近、世界的なる階級鬪爭の氣運に唆かされて、彼等は益々反動化の傾向を示しつゝある。即ち無産階級が未だ陣容を充實しないうちに、彼等は先き廻りをして反動的防禦を築かんとして居る。彼等は明治三十三年に制定した治安警察法に何等の改廢を行はないで、大正十四年に更に治安維持法を制定したのである。自由主義の黄金時代を經過せずして帝國主義化した資本主義の下にある我國無産階級の、惠まれざる重大理由が茲に存す

[illegible]無產階級勢力[illegible]を叫んでも、正直のところ、其の實力は數量的にも内容的にも幾多の弱點を持つて居る。（拙著「轉換期の日本社會運動」參照）。無產政黨が當局のために一擧の下に擊破されても、何等の反抗運動を起し得ないのである。たゞプロパガンダの一戰術として、時に無產階級勢力の發展を誇張する場合もあり得るが、社會運動の指導方針を決定する場合に、自己の實力を過大視し、其他社會的の諸條件を自己の都合のいゝやうに妄想してかゝることは、實に輕卒千萬と云はねばならぬ。此の點に於て、左翼の態度は、科學的と自稱し乍ら、リアリスチツクよりもアイデアリスチツク又はロマンチツクな要素を多分に帶びて居る。

三

資本主義が最後の段階に進んだといつても、資本主義の死滅は機械的に自働的に行はれる譯のものではない。それには無產階級の成熟を根本的なる一條件とする。尤もロシアの如く、無產階級の陣營が整備せざるに拘らず、社會革命を成功した例もあるが、これは戰亂のもたらした一個の異常現象であつて、これを以て社會革命の典型的形式とすることは出來ない。また若し日本が外國と戰爭しても、ロシアに於けると同じ現象が繰り

[illegible]國の無產階級が[illegible]手段を採ればよいかといふに、右翼の論者は、現實政策を採らなければならぬと主張する。現實政策とは可及的に自由主義政策を利用することである。選擧制に於ても勞働法に於ても社會政策に於ても、出來る限り積極的利用の態度に出ることである。換言すればデモクラシイの徹底をはかることである。

我國の如き變則的帝國主義國家に於て、無自覺無組織の無產大衆を啓蒙し組織するためには、デモクラシイの普及徹底による外はない。社會的異常現象の起つた場合は別として、普通の狀態に於て、一般大衆はデモクラシイを通路として反資本主義的となる。唯だデクラシイを通過する期間の長短が、各國の社會事情によつて異るのである。左翼といへども、デモクラシイの利用價値を無視する譯ではない。だが之れに對する價値意識の輕重に於て、右翼と左翼との間に、大きな開きがある。例へば議會政策にしても、右翼は、法律改正又は法律制定に於て、尚ほ多くの効用性を認めるものであるが、左翼は、立法上の効用性を輕視し、むしろ議會を宣傳場として利用し、又議會なるものゝブルヂョア的本質を暴露するとに利用するのである、勞働爭議の場合に於ても右翼の組合は出來るだけ實質的利益を收め

13 日ヨリ各々本法ニ依リ施行スヘキ[illegible]

ることに努力し、それによつて組合の充實發展、組合員の教育訓練に資せんと心掛けるのであるが、左翼の組合は、ストライキは×××××演習だといつて、當面の實質的利益を收めるよりも、實力を顧みず邁進して、之を鬪爭的宣傳に利用せんとするのである。

第一次無産政黨組織運動に於て、右翼は、政黨の綱領規約は、無産階級現在の自覺に應じて、出來るだけ實際的な穩健なものでなければならぬと主張したのに對して、左翼は、綱領規約は現行法律の許す限りの最左翼のものでなければならぬと主張し、兩者の間に劇しい論戰を生じた。例へば第一回綱領規約調査委員會に於て、植民地政策に關し、右翼が「植民地の自治」を主張したのに對して、左翼は「植民地の解放」を主張した。また右翼が「軍備の縮少」を主張したのに對して、左翼は、そんなブルヂョア臭い綱領を掲ぐべきではないと反對した。つまり左翼は成るべく階級鬪爭を激成するやうな左翼的綱領を掲ぐべきだと主張したのである。そして左翼の委員の挑戰的な、嘲弄的な、優越的な態度は、右翼の委員の感情を激化して、一

斯くの如き二個の運動政策は、先きに述べた我國資本主義の現實に對する認識の相異より分岐する。右翼が革命的幻覺に囚はれないで、徐ろに其の陣容の成熟に努めつゝあるのに對して、左翼は其の強固なる前衛分子を持つて資本主義に對する最後の一戰あるのみである。ところで實戰上の成績は、明かに右翼の成功を語り、左翼の失敗を語つて居る。總同盟の分裂以來、總同盟の會員が激増し、その組合行政が着々整備しつゝあるに反し、評議會が會勢振はず、その組合行政に至つては、から駄目であつて、會費も碌々集まらない有様である。その結果は去る一月下旬の評議會擴大中央委員會の改心的宣言となつたのである。その宣言を讀んで見ると、自分達が「共産派」だとか「左傾派」だとかいはれるのはブルジョアの逆宣傳であつて甚だ怪しからぬと憤慨の體であるが、總同盟の分裂の當時、自分達は共産主義者で總同盟は改良主義者だと威張り散らし、組合大會の席上で「我等のよつて以つて立つ所のものは辨證法的唯物論、換言すれば科學的社會主義、即ち共産主義を以て運動の根本方針とする」と大見得を切つて共産主義ファンの喝采を

た×議會が今となつて少し尻込みするなどは、甚だ以て意久地のない話である。ところで評議會の改心的宣言が、今日どれだけの社會的効能を發揮するかは頗る疑問である。

左翼の戰術は、現在の普通の狀態に於て明らかに不適當である。從つて強いて左翼の戰術に合理性を與へやうとするならば、何等かの偶發的なる異常現象を豫想しなければならぬ。左翼の諸君が、何年の後に××が起るとか、近く日米戰爭が起るから其の時×××××るとか、支那の反帝國主義運動が成功すれば、日本の對支貿易其他に影響して、失業者が續出し、一大社會不安が生ずるから、自分達の運動に有利だとかいふ風に語つて居ることは、全く其處から來て居る。しかし乍ら、そうした偶發的現象を當て込んで運動することは、運動を投機化するものである。若し運動の投機化が社會運動最善の道なりとするならば評議會其他の本部は宜しく之を兜町に移して、幹部は其の地位を相場師に讓るべきである。

五

左翼は思想的であり觀念的であるが、右翼は實際的であり經驗的である。左翼は一定の主義思想を信奉し、頭の中に革命行程の概念を築いて置いて、之を現實に押しつけやうとする傾向がある。之れに反し、右翼は主義思想を無視するのではないが、より以上に生活事實と經驗とを重んずる。例へば勞働總同盟は、最初友愛會として創立されたとき、純然たる改良的勞働組合であつた。それは當時の勞働階級の生活要求を最も素朴に端的に表現したものであつた。その後、總同盟の行路は、大體に於て、我國の社會事情に適應して進んで來た。總同盟がマルクス主義の思想的影響を受けたことは大であるが、彼はマルクス主義の實行機關そのものになることは出來なかつた。それは總同盟は如何なる主義思想よりも、日本勞働者の當面の生活、組合の發展に重心を置くからである。此の意味に於て、左翼は主義思想に對して信仰的であるが、右翼は批判的である。右翼は無産階級の現實勢力と其の四圍の環境とを正確に觀察し、それが發展方法については先づ自己の經驗的考察を以てし、その上で種々なる主義理論を批判的に受け容れて行くのである。總同盟が大體勞働大衆に評判がよく、評議會が大體急進知識階級に受けがよいのは之れが爲めである。

左翼は理論的だといつたが、その理論は舶來品であつて、主たる原産地はロシアである。左翼の幹部諸君が、その指導精神、戰術、運動用語等について、ロシア共産黨名士の言說を尊重すること驚くばかりである。試みにスターリンの「レ

及びレーニズム」を讀んで見るがよい。最近の左翼運動方針の原板が、一目瞭然たるものがある。左翼が舶來的、ロシア的であるのに對して、右翼は國產的、日本的である。

インタナショナリズムに就いて、左翼が民族超越的であり國籍否定的であるのに對し、右翼はそうしたユートピア的國際主義を信ずることは出來ない。右翼は民族意識の中に或る妥當性を見出し、それに立脚して漸次合理的に國際主義へ向はんとする傾向がある。

左右兩翼の指導精神の中で、最も注目すべき相異點は、階級道德に關する事柄である。我々は此の點について、左翼の喰ひ込み策、乘取り策、攪亂策を唾棄せざるを得ない。之れに就いて詳細を試みたいのだが、紙面の都合で遺憾ながら割愛する。

組合運動の二潮流と難產の無產政黨

三輪壽壯

一

日本勞働總同盟の分裂によつて我國無產階級運動は至大の影響を被つた。而もその影響は階級的に見て決して利益ではない、全無產階級にとつての大きな損失であつたことは否み得な

ことが不可避であつたとは考へ得ないし、況んやお互に醜い個人的中傷や、階級的立場を沒却した罵詈讒謗の應酬や、血で血を洗ふ暴力沙汰にまで出ることが何で有意義なりと斷ぜられやうかと思ふ。

勿論こゝで兩者の側でとつた態度如何の如きを問題にして居

ばしたか、これによつて[illegible]された[illegible]に、組合[illegible]織の問題を中心として如何なる方向へ發展して行くものであらうか、それ等のことに關して若干の觀察を述べてみたいと思ふ。

二

勞働總同盟が内紛から分裂ひいてその分裂後の評議會との抗爭の經過の中に一貫してとつて來た態度は實に政策の現實化といふことであつた。此根本方針は自己組合の內外を問はず毅然として押通して來た。それは自ら呼んで現實派となし、相手の現實無視の非科學的態度を痛烈に攻擊した。相手方の放つ幹部攻擊の惡聲例へば墮落幹部、日和見主義者、改良主義者、階級的裏切者等に對する報復かも知れぬが、汝の政策は共產黨のやり口であるといひ、汝の背後に共產黨ありといひ、後には評議會即共產黨の出店といつた風のきはどい攻擊手段に出づることをも敢て辭しなかつた。治安維持法施行下の我國にあつて、之はなる程敵對關係にある者に對する最も有效な攻擊方法かも知れぬが、と同時に立場の相違はあるとしても階級的利害を共に分たねばならぬ者をして、支配階級の白刃の下に曝す樣な殘酷なやり方ではないかと、心ある者は眉をひそめた。然しそれにも[illegible]、[illegible]に[illegible]として[illegible]して行く。分裂當時僅か四千三百人に過ぎなかつた關東同盟は今や二萬を突破して遠からず三萬にも及ばうといふ勢である。又爭議にしても、評議會が屢々失敗の經驗を繰返して居るのに比し、總同盟が殘した記錄は有利な解決を告げて居るものが多い。總じて大會の席上で滔々とその主張を述べることの得意な人達は少いが、實戰にかけての猛者はよく揃つて居る。

評議會は之と反對に經濟戰の闘士よりも言論の雄が多い。宣傳力は旺盛であるが、爭議にのぞんで程よく話を纏める樣な人が少い。之は一つは組合そのものが若いせいもあると思ふが、總同盟の現實政策に慊らない人が之を離れることになつたから、勢ひ實際家に乏しいのはやむを得まい。理論派の常として外國の飜譯的理論、戰術をすぐさま實地に應用しやうとする爲に、兎角露國共產黨の指令で動いてでも居るかの如き揣摩臆測をされることになり、從つて同じ爭議をやるにしても、官憲の取扱が第一違ふ。從つてまた焦つた氣持になりまとまる話もまとまらなくなる。總同盟が時に官憲の調停などによつて困難な地位を切り拔ける便宜手段を講ずる術を心得て居るのに、評議會にあつては一面之を希望しないかも知れぬが、またその便宜も得られないのではないかと思ふ。此種の[illegible]から經濟[illegible]に

て又組合の擴張に於ては總同盟に一籌を輸することは否み難い。

此兩者の抗爭は、當初はとつて着けた樣な理論でお互に自己の立場を辯護し、相手の弱點を突くといふにとゞまつたが、即ち根本的な主義主張の爭だとは認められなかつたが、相爭ふ中に明確な主義政策の相異點を形成するに至つた。右の方向をとつたものは眞實に右し、當初の改良主義利用政策は改良主義と何等選ぶところなきに至つた。又左の方向に向いた者は勢ひ左派戰術を以て自己の立場を擁護し組合全體をその方に導いて行つた。更に此爭は兩者の間から他の組合の間に持ち出された。殊に無產政黨問題に關聯してどの組合も遮二無二此の好ましからぬ問題に首を突込まなければならなくなつた。

總同盟にも屬せず又評議會にも加はつてない他の勞働組合はそれ自身の問題としては左も右もなかつた。その組合員の中には急進的な分子もあればさうでない分子もあり、理論を好む人もあれば、之を輕視して實際怱々として組合擴張をやる人もあり、それ等が一しよにあつて何等の不都合を感ぜず、却つて能率を發揮し得たのであつた。かうした組合が此兩者の外に多數ある。その中には組合員數では總同盟評議會に余り遜色のない有力なものがあるが、然し總同盟が自己の立場を固執する樣な强味はないし、また評議會が理論をふりかざして行動[…]勇敢さには欠けて居る。例へば東京の機械聯合と大阪の[…]合聯合と合體して出來上つた組合總聯合にしても、全國的總聯合を目標として立つとするならば、早い話がその役員の顏振れの如きもつと愼重に考慮されねばならなかつたではないか。中間派としての搖がざる勢力を作るといふことは我組合運動の上に極めて必要なことであるが、その爲にも一般の努力を希望して已まぬ。

事實中間團體として確固たる地步を占めて居るのは日本農民組合である。それは數に於て總同盟評議會を凌駕する勢力であると共に、全國的に分布して居る意味に於ては、政黨樹立に就ての一大勢力である。此勢力を無視して政黨は出來ぬ。よし出來てもその加はると加らざるとに於て其勢力の上に非常な相違が生ずる。そこに農民組合の强味がある。

三

昨年八月農民組合によつて提唱された無產政黨組織の問題は、上述した總同盟評議會の對峙と絡んで、種々面倒ないきさつを生んだ。

總同盟は當初から政黨樹立の問題よりも對評議會の問題を重

大國した[illegible]自分の組合を整理しなければならなかつた。政黨を作つた頃に又左派の連中に攪きまはされてはたまらない。況又その一貫した現實政策から云つても全國的單一無産政黨といふ觀念的理論に引きづられることを好まぬ。況んや[illegible]題目を評議會がその別動隊である政治研究會と共に鳴物入りで擔ぎまはつて居るに於ておや。適當な口實さへあれば此好ましから[illegible]作れを斷りたい。——之が農民勞働黨の成立を前にしての總同盟内の空氣ではなかつたかと推測する。成立の直前意を決して『脫退』といふ双六の賽を投げたがおもはくは外れた。總同盟の脫退にも拘らず、農民組合は所謂右翼八團體を誘つて農民勞働黨を作り上げた。此意外の出來事に面接した總同盟はたとひ一時にもせよその孤獨なる自分の姿を見出した筈である。只然し深く反省するひまもなく政黨禁止の彈壓が來つて、總同盟からみればその窮況を救はれた樣な結果になつた。かくて總同盟はさきの短い苦惱の時を忘れて却つて自らの行動を是認し、現在の立場を肯定するやうになつてしまつた。されば第二回の政黨組織準備の過程に於ては、更に露骨大膽にこの現實政策[illegible]換ふれば左傾分子の排斥を振りかざして臨むが如き態勢を固るのである。

全國的無産政黨樹立の要求は、評議會も率先してこれを[illegible]

[illegible]

たが。然[illegible]參加した人々の一致した要求[illegible]する總同盟の態度あるに見して[illegible]るたのである。然し評議會を代表し[illegible]の拙劣な遣り口が著しくその立場を惡くしたことは爭へない。然しそれは代表者個人の罪をうつたへ[illegible]議會内の空氣がそれらのうしろに[illegible]ぎない、と見るべきである。

評議會はその[illegible]

[illegible]

合聯合）、市電自治會、製陶勞働同盟、日本司厨同盟等が之にあたる。評議會總同盟の相互から働きかけられて可なり迷惑して居るのは事實である。然しまた獨自の立場を把持して邁進する程の潑剌なる意氣も今迄のところでは認められなかつた。總同盟脫退の際の如き準備行動を一時中止して行かうといふ說に一致した位である。それを農民組合が鼓舞して當初の目的たる單一無産政黨にまで驀進することとなつたのである。此時農民組合が他の諸團體を動した力は那邊から出て來たかといふに、此中間派を結成して左右兩翼の抗爭を屛息せしめ様又それをなし得るといふ信念をつかんだからであると思ふ。されば政府の彈壓の後更に戰友を誘つて再度の組織運動を起し、自らその陣頭に立つたのである。然し今回は以前に比して一層困難な立場にある様に思ふ。

四

我無産階級は如何なる內容の政黨を持つべきかといふことを考ふるに當つては勿論日本の現狀に就ての周密なる觀測を必要

今や無産政黨再組織を前にして、總同盟の主張は飽く迄强硬である。所謂共産系の片影すらも認められない様な政黨でなければ、之に參加するわけには行かないといふ。評議會、政治硏究會、靑年同盟の名を指摘してその組合員の端々までも入るを許さぬ禁制の立札を打ち樹て様とする。共産系と目さるゝ人も入るを拒まれねばならぬと爲す。目する者即ち認定權を持つ者は何人であらうか。それが爲には其筋のブラツクリストをその儘借用しスパイ政策を襲用しなければならぬとでもいふのだらうか。かくの如きはたゞに階級道德の上から非難さるべきことであるのみならず、また決して賢明な政策でもないと思ふ。

總同盟が右の方針を固持して一步も讓らない限り、第二次の立黨運動も行き惱むであらう。總同盟が讓步して禁止されない様な政黨が出來上るか、又その不參加によつてさきの農民勞働黨の折と同じ運命に逢着するか、それとも亦準備會が一先づ打切りになつて、何等か外の形に發展してゆくか、大阪に於ける準備會はその何れかを決定するであらう。然し成立後と雖もその中に胎んで居る紛糾の種は容易にとれないであらう。

れば何時までも續き、而も如何なる點に歸着するものであらうか。甚だ私には豫測のつかねことである。私の朧ろ氣ながら考へつく限りでは、總同盟の右傾政策は決して永續するものではないと思ふ。その幹部によつて適當に轉換さるゝことではあらうが、然しその前に行き詰る樣なことは無いであらうか。又評議會の中から階級的立場を失はないで現實政策を行つて行かうとする人達が漸次頭を擡げるのではないかとも思ふ。その時今次の擴大委員會で宣傳した現實主義の政策が生きて來るのではないかと思ふ。

「我國の資本主義は資本主義最后の段階としての帝國主義時代に入りて一進展行程を辿りつゝ居るといふことが、左翼の人々によつて殆んど確定された事實の樣に唱還されて居るが、私は之に對して多くの疑問を持つ。その理由の説明は私の今こゝに爲し得る限りではないが、兎も角我國の社會狀態に適應して或勢力を占めて行くのは（現在といふ一時期を劃してでなく）決して最近の總同盟の行き方でもなければ、評議會のそれでもないと信ずる。然しまた同じ樣な紛糾を此後なほ永く續けて行に違ひない。此紛糾の跡を絶ち、戰線の共同を爲さしめる爲には、有力なる中間派の出現をおいてない。私はそれを渇望し期待ずる。（三、二）

左傾派と右傾派の分岐點

安部磯雄

私は思想上の相違點に就て論議することに必ずしも反對するものではないけれども、これがため感情を傷けたり、罵詈讒謗したり、甚しきは敵愾心を起すといふことには贊成することが出來ない。冷靜に議論を戰はすことには何等の弊害がないとしても、議論の結果双方喧嘩腰になれば其害毒は戰爭の場合と同一になるのである。世には戰闘的精神の必要を説く人も少なくないが、同時に彼等は論理的に戰爭讚美者でなくてはならぬ。戰爭は大なる富の破壞者であるが故に私共は極力これに反對する。思想界の軋轢も亦私共の精力を浪費することが少くないのだから、戰爭に對すると同一の理由を以てこれに反對せ

るを得ない。

若し國民と國民との間に健全なる競爭が行はれゝば、兩者はこれによりて國運を有利に指導することが出來るであらうと考へる。然し彼等が一朝武力に訴へて相爭ふことになれば、其衝突の激烈さ加減によりて國力は全く衰頽するのである。或程度の競爭が人類の進歩を促進するからと云ふて、武力の衝突をも奬勵せんとするのは實に亂暴極まる論理であると言はねばならぬ。

思想と思想との間にも平和的競爭の行はれることがあり、時としては又戰闘の勃發する場合がある。學者の間に行はれる論議は研究を主とするのであるから、何等感情を交へる餘地はない。其結果專門家や研究家の態度は常に眞理を追求するといふことにあるのだから、若し自らの學説に誤謬のあることを發見すれば、何時でもこれを訂正するといふ雅量がある。此の如く平和的競爭は思想の進歩に貢獻することが多大であるけれども、一たび競爭の範圍を越えて、思想と思想とが正面衝突をなすことになれば、其處に精力の浪費と破壞が行はれ、人と人との間

宗教に於て多くの實例を見ることが出來る。宗教は何れも慈悲仁愛の精神により全世界を救濟するといふ抱負を以て起つたものであるが、後世に至るに從ひ多くの分派を生じ、敎祖の精神とは全く正反對である派的闘爭を惹き起すに至つたのである。宗派の分立も平和的競爭の行はれて居る限りは何等の弊害がなかつたけれども、一たび他宗派を異端視するようになつてからは宗教其れ自身を殆んど衰滅の狀態に導くようになつた。思想の闘爭には宣傳といふことがあるけれども、研究といふことは有り得ない。他の宗派或は他の思想を異端視するといふことの中には二つのことが含まれて居ることを考へなければならぬ。一つは自分の思想のみが眞理であると信ずる結果、凡ゆる手段によりてこれを宣傳せねばならぬと感ずること。今一つは他の思想を異端視するため、これによりて何事をも學ぶことが出來ぬと獨斷的に定めることである。所謂唯我獨尊者の角突き合であるから、唯反感を増すのみであつて、何等得る所なきことは言ふまでもない。

佛敎や基督敎の宗派的闘爭が決して宗教の發展を助けたもの

さの原因が比較的小部であつた割合に教宗の反目が頗る激烈であつたといふことである。佛教にせよ基督教にせよ、今日の如き宗派的分立を來した理由を研究したならば、滑稽に感ぜられるものが少なくないことを發見するに相違ない。然し新に宗派が起ることになれば其處に宣傳の必要が生じて來る。宣傳は既成宗派の領分を犯すことになるから、其處に勢力爭いが起るようになる。宗派的鬪爭が漸次其度を高むるに至るのはこれがためである。更に私共は宗派的鬪爭心理の原則とも稱すべきものに論及しなければならぬ。其れは關係の遠い宗派に對するよりも最も緣故の近い宗派に對してより多くの敵愾心を有するといふことである。例せば天主教の耶蘇新教に對する嫌惡心は佛教に對する其れよりも甚しく、保守的基督教のユニテリヤン派に對する態度は回教に對する其れよりも冷淡であるが如きである。これは決して宗教に限られたことではない。政友本黨が政友會よりも寧ろ憲政會に接近して居るのも此原則の實例と見るとが出來るかも知れぬ。我國の無政府主義者が『ブルジョアー階級を倒す前に先づ共產主義者を倒さねばならぬ』と揚言して居ることも確に此原則に裏書するものではないかと思ふ。

我國の勞働運動や社會運動に於て左傾と右傾の兩派を生ずるようになつたことは運動其ものゝために大なる不利益である。無產階級が共同戰線に立つて進まねばならぬ今日に於いては内部の不統一を暴露したといふことは何といふ不幸なことであらう。

明治三十四五年頃に於て社會主義の運動が初めて社會の注意を惹いた時代には別に左傾とか右傾とかといふ思想上の區別はなかつたのであるが、幸德秋水氏が米國から歸朝した以後に於ける思想界には多少の分野の來したかの樣に思はれた。其後急激派をして著しく左傾せしめたのは何といつても露國革命であつたに相違ない。然し其は單に思想的傾向であつて、これが表面上に現はれたといふ事實は比較的稀であつた。唯數年前大阪の勞働大會に於て無政府主義系の勞働聯合が勞働總同盟と分離したこと及び昨年勞働評議會が勞働總同盟から脫退したことゝは著しき事實として何人の記憶にも殘つて居る。然るに昨年十二月農民勞働黨の組織された前後に於て左傾派と右傾派の正面衝突は勞働運動に大なる同情を有する人々に一種言ふべからざる不安の念を懷かしむるに至つた。私共は斯くの如き重大なる問題に對して曖昧なる態度を取ることは出來ないから、忌憚なき批評を試みることが必要であると信ずる

社會主義、共產主義、無政府主義は各特種の主張を有する如く見ゆるけれども、其根本思想に於て相一致せることは歷史

これを示して居る。社會主義の先驅者と認められてゐる佛蘭西の思想家は何れも現社會の欠陷を看破し、これを救治するには根本的社會改造を行ふより外ないと云ふことを考へた。彼等は社會主義者といふ總稱の下に分類されてゐるけれども、嚴密に言へば彼等の中には共産主義者も無政府主義者もあつた。然し枝葉の點に於て彼等の意見は異なつてゐるけれども、生産機關の共有共營と、生産物の公平なる分配といふ大綱に於ては何れも一致してゐたのである。言ふまでもなく共産主義や無政府主義は社會主義と同じく時代の推移によりて其意義に多少の變化を來して居るには相違がないけれども、前記の大綱にまで動搖を來したものとは考へられない。然らば左傾右傾といふが如きことは何の爲めに生じたのであるか。換言すれば其分岐點は何處にあるか。

目的は何れも同じ高峯の月を眺むるにあるのだから、分岐點は唯其の麓の路にあるのだと考へる外はない。初代の社會主義者中には無論直接行動とか議會政策とかいふことで激論したものはなかつたが、明治三十四五年頃の我國に於ても左樣な意見の相違はなかつたように思はれる。然し間もなくサンディカリズムの思想は一部の知識階級及び勞働階級の間に勢力を得るようになつた。殊に露國の革命が行はれた以來其思想は力强く宣傳されるようになつた。要するに今日の左傾派と右傾派は思想のために議論して居るのではなくて、戰術のために相爭ふて居るのである。私は無産階級が第二義的ともいふべき問題のために斯く對陣して居ることを頗る遺憾に思ふのであるけれども、既にこれが事實となつて現はれて居る以上、理が非でもこれを打消すといふ譯には行くまい。私は左傾派と右傾派との間に横はる溝渠が餘り深くならない前に適當なる對策を講ずることの必要を考へて居る。今其概要を述べて見る。

不必要なる感情の衝突を避けるためには左傾派と右傾派が當分接觸する機會を出來得るだけ少なくすることが得策である。換言すれば左傾派と右傾派とは全然別々の團體を造りて其目的の遂行に努力することである。これを實際問題に就て言へば、無産政黨の組織せられるに當りて左傾派と右傾派とが一旗幟の下に集まるといふことは得策でないように思はれる。私自身としては左傾派と右傾派とを打つて一團とした無産政黨の出現することを希望するけれども、直接行動と議會政策といふ第一義的の問題に拘泥して居る以上、此兩者を一政黨の中に包容することは不可能のことではないかと考へる。

左傾派と右傾派は單に意見を異にして居るのみでなく、既に幾分か感情的にならんとする傾向がある。今の中に全然分離し

この間には、[illegible]。若し不幸にして兩者の間に宗派的反目が生じ、互に異端者とか反逆者とかいふような惡名を以て呼ぶようになれば、其こそ取返しのつかぬことになる。だから此際兩者が寛大な心を以て分離し、互に接觸の機會を少なくすることに努力することが必要であると信ずる。左傾派は往々右傾派の團體に喰ひ込んで、これを攪亂し或は乘取るものであるが如く非難されて居る。若しこれが事實であるとすれば、私は左傾派の反省を促さゞるを得ない。宗教家は往々此の如き宣傳法を採用したゝめ、見苦しい宗派的闘爭を惹き起したのである。私共は社會運動や勞働運動に宗派的根性を持込むことに全然反對しなければならぬ。

若し我國に於て、自由主義が完全に行はれて居るとしたならば、左傾派の人々は何等の妨害なしに共産黨を組織することが出來、現在の如く無産政黨組織には何等の行き惱みがないであらう。斯の如く左傾派と右傾派が各政黨を有つことになれば、其間に多少の衝突はあるにしても、超ゆべからざる溝渠を築くことはこれを豫防し得るに相違ない。これを考へても治安維持法が如何に無産階級の政治運動に大なる障害となつて居るかゞ判る。

然し左傾派が自ら政黨を組織することを許されないからと言ふて、右傾派の政[illegible]をやるといふことは決して賢き方法ではない。何となれば左傾派の混入といふことは政府が無産政黨を禁止する口實となるのみでなく、政黨其ものをして常に内訌のために苦しましむることになるからである。

私は宗派的闘爭に反對するが如く、如何なる闘爭にも反對するのであるから、左傾派と右傾派との關係に就いても多少の遠慮を禁じ得ない。然し今日の場合右傾派よりも左傾派の態度如何が凡ての問題を解決するのではないかと思はれる。露骨に言へば右傾派は左傾派と提携することを迷惑がつて居るに反し、左傾派は寧ろ右傾派との關係を持續することを便利として居る。これは殊に無産政黨組織の場合に於て然りである。若し私の觀測が誤つて居ないとすれば、左傾派の取るべき途は二つの中何れかであらねばならぬ。

一つは左傾派の戰術である直接行動といふ主張を放棄することである。若し之が行はるれば左傾派と右傾派との融和は比較的容易であるけれども、この注文は少し無理であるかも知れぬ。これが出來ない相談であるとすれば左傾派の取るべき道は唯右傾派から遠かるといふことあるのみだ。左傾派から見れば、右傾派の行動は微温的であつて、これでは到底無産階級の解放は實現し難いと思はれるかも知れないけれども、強いて右傾

派の團體をかき亂す必要はない。各自ら信ずる路を辿り、聊も他に干渉したり或は之を強制したりすることがなければ、彼等は再び提携して共同戰線に立つ機會が來るかも知れぬ。誤解、

左翼戰術錯誤の根因

一

總同盟の分裂、政治研究會の破綻、單一無産政黨運動の內紛等、最近に於ける我が無産階級運動の陣營は、甚しく步調の亂れてゐることを誰しも認めざるを得ない。云ふ迄もなく、斯の如き出來事は、最も悲しむべき不祥事であるが、しかし乍ら、無産階級運動分裂の不利益なることを何人よりも強く體驗してゐるべき筈の當事者が、遂に、その分裂破綻を選ぶに至つたと云ふには、そうする外に致方のなかつた事情があつたに違ひない、と解釋するを以て、最も公平な見方であると思ふ。

偏見、反目のため、取返しのつかぬような仇敵關係に陷ること

は私共が最も注意して避けねばならぬ點であると信ずる。

高橋龜吉

置しながら、眞向から無産階級意識の大義名分論を振りかざし、その名に於て、無産階級運動の共同戰線を棄するが如きは、その目的は如何に美なりと雖も、その實現を期せんとする手段に於て、欠くる所ありと云はねばならない。尠くとも、心から眞に無産階級の共同戰線を實現せんと願ふるもの丶採るべき愼重な態度ではない。何となれば、その結果は、啻にその目的を達し得ざるのみならず、逆に、益々その分裂の溝を深くする惧すら少くないからであつて、現に、そうした事實すら多少ないではない。斯樣のわけであるから、我が無産階級運動の諸陣營として、其

きである。この意に於て、[illegible]、この第十六回を中心として今度の合評の題目にせられたことは、確かに、我が無産階級運動にとり大なる貢獻である。この意味に於て、私は私に與へられたる機會に最善を酬ひるため、日頃自分の私かに考へてゐる所を卒直に述べて、諸兄の御教を請ふと共に、この問題に對する何かの御參考としたい。

然るに、私のさうした意見の多くは、必然に、私自身の體驗に教へられる所が基本となるから、勢ひ、さうした體驗を最も豊かに貢いで呉れた政治研究會の分裂の事實が、多く影響してゐるであらう。この點は、豫め玆に、讀者諸君並に當時の政治研究會關係諸君の御諒解を御願ひする。

二

左翼は現實を無視して輸入理論を直譯すると云ふ非難あるに對し、右翼は現實主義の名の下に、無産階級解放の理論を無視すると云ふ非難が唱へられる。しかし、私をして云はしむれば、右の如き言表の仕方は、少からぬ觀察の誤りがある。即ち、私は之を次の如く云ひたい。曰く、左翼のやり方は、社會を觀察するに、之を一の有機體として、その全體に亘つて診斷する勞を取らずに、その一局部のみを馬車馬的に診察し、便宜上この一局部のみを[illegible]また、そのまゝ直譯的に勇敢に實行せんとする。從つて、之を一局部の療法として見る限り、そのやり方は病理學者の教へる通り、少しも間違つてゐないか。しかしこれを身體（社會）全體として考へる場合には一局部を療養せんがために、身體（社會）全體の健康を害し、時に、無産階級運動の生存までも奪ふ（一定期間左翼の戰術に忍え得る實力が無い場合には、假令左翼戰術は局部的には非難の打ち所が無い迄に完全であつても、それが目的を達する以前に、無産階級運動の生存が脅かされるに至るから）結果になることがなり得る。譬へて云へば、寒冒で發熱の甚しい患者に對しては、解熱劑を與へると云ふことは病理學の教へる所である。所で、新米の醫者などは、患者の寒冒と熱とを見ただけで、その身體全體を診察せずして、學校で學んだ通りに直ちに解熱劑を與へることが多い。然るに、安ぞ知らん、その患者は、單なる寒冒の外、心臟にも故障があつて、斯様に解熱劑を與へるに於ては、直ちに心臟麻痺を起して死に至る危險が十分あると云ふことがある。更に、腎臟病で水腫の出てゐる患者に對しては、病理學は鹽分の攝取を禁ずべしと教へてゐる。若い醫師は斯る場合これを見て、患者に對して鹽分の攝取を絶對に近く禁止したがる。然るに、實際に於ては、[illegible]

欲は非常に減退するから、已に身體の衰弱せる患者に對して若し斯くの如き直譯療法を行はんか、その結果は、餘り危險でもない水腫を療治せんがために、却つて、身體全體としての衰弱を甚しくし、生命に關する危機すら釀す事になることがある。即ち、以上二つとも、之を一局部の診察及療法として切り離して考へれば間違つてはゐない、がしかし、醫者の患者に對する療法としては、人體全體を有機的に考へなかつた結果、その療法は結局に於て大錯誤であつたと云はねばならない一例である。

我が左翼運動の錯誤とは、正に斯の如き意味の錯誤である。いかにも、その主張する政策はそのことそれ自身のみを切離してこれを部分的に論ずれば間違はないにしても、しかし、之を無産階級運動全體の健康、成長と云ふ立場から云へば、左翼の主張するが如き政策は、却つて逆の結果を生むことになる場合が多いのである。試にその最も一般的な重なる點を簡單に云へば、左翼戰術錯誤の最も主なる一つは無産階級自體の自覺程度と、その實力とを顧ることなしに馬車馬的に勇敢に猛進することであり。一つは敵の對抗策が如何に進歩發達せるか、乃至は發進すべきかを顧慮せずして、過去の事實を基礎として生れた過去の理論を盲信し、その理論の上に現在採るべき實行策を決せんとする傾の多いことである。

いま、代表的には後者の例として（前者についてはよくてゐることであるから略する）マルクス及レーニンの根本的教理の一つについて云はんに、例へば、マルクスに由ると、資本主義經濟は恐慌の襲來に出る經濟界の一大解體によつて致命傷を受くべきことを指摘してゐる。いかにも、この見方は資本主義經濟それ自身のみを切離して考へる時に於ては、流石に資本主義經濟の一大欠陷を洞見せる一大卓說である。しかし乍ら實際に於ては、その後資本家階級は、恐慌の苦い經驗に教へられて、マルクスの想到し得なかつた程聰明にも恐慌廻避の手段に努力し、今や、資本主義經濟が、その疾患としての恐慌（景氣の輪廻より來る）によつて、致命傷を負ふべしと考ふるものは殆んどない狀態である。（尤も資本家階級が恐慌を廻避する策として選んだものは、一の社會主義的經濟原則の採用であつた。この限り主義はそれだけ變形せられて生存しつゝあるのである）果して然らばマルクスの恐慌論それ自身のみについて云へば理論は間違つてはゐないが、併しその教理を盲信して、恐慌の一大混亂時代の來るべきことを前提とした革命戰術をいま主張するものありとせば、彼の戰術は明かに誤つてゐると云はねばならぬ。之と同じく、いま我が左翼戰術の基礎をなすと傳へられる「資本主義最後の階段としての帝國主義」について見

[illegible]ンの結論に、最も能く帝國主義の特性をあばき出した[illegible]る。しかし、そのことそれ自身は如何に眞理でありとするも、然らば現實に一大戰爭が將來再び來るか否かは全く別の問題である。何となれば、此間に、資本家階級は歐洲戰爭の慘害に敎へられて、極力、戰爭を廻避せんとする聰明と努力とを持ち合はしてゐるから、宛も、さきに恐慌の致命的慘害が廻避せられ得た如く、戰爭も亦、それが資本主義の致命的慘害になることを廻避し得られるかも知れないからだ。即ち、斯樣な資本家階級の努力としていま最も代表的なものは國際聯盟の出現であるが、この外、斯種の努力は、それこそ死に物狂ひに有らゆる方面に打て資本階級によつて研究せられ、努力せられつゝある。

云ふ迄もなく、その努力が果して成功するか否かは未知數である。私自身、いま尙ほさうした努力の効果に、多大の疑問を持つてゐる。しかし乍ら、さうした努力が少くとも戰爭を緩和し得る力のあることだけは確かであり、又、さうした資本家的努力が將來更に進歩するであらうことも、過去の經驗から之を信ぜざるを得ない。果して然らば、帝國主義戰爭そのものも、マルクスの恐慌論と同じく、その實現は他の勢力によつて歪められ、變形される可能性は少からずあるものなることを認めさ[illegible]ニンの[illegible]た戰爭必然論は、それ自身のみについて云へば[illegible]いが、しかし、この理論をそのまゝ盲信して、いまでも戰爭が必然に實際に勃發すると云ふことを前提とした左翼の戰術に、多かれ少かれ大なる錯誤のあるべきことを誰か否み得るものぞ。尠くとも、十年や十五年の間にそんな場合は起らないであらうと云ふことを基礎とした右翼戰術の存在理由は十分に在る。しかも況んや、萬一、戰爭が遂に實現したとするも、ロシアの二の舞を踏むか如きトンマを、資本家階級がやるか否かゞ極めて疑問であつて、從來の經驗によれば、斯る場合常に先手は資本家階級に打たれる危險極めて大なるに於ておや。

これ、われ〳〵が、マルクスやレーニンなどの敎理は、しつゝも、而してそれに敎へられる所多きことを確信しつゝも、尙ほ、その敎理をそのまゝ信條とし、直譯せんとする左翼戰術に反對せざるを得ない所以である。少くとも、左翼が右翼戰術に反對の場合には、斯る點について、十分、右翼を説服するだけの親切と研究とを容まれず、今日の如く、徒らに、外國の理論の直譯によつて、直ちに大上段から、右翼を否定し去るが如き非科學的態度を改められんことを祈るものである。

云ふ迄もなく、われ〳〵はマルクスやレーニンの祖述者を毛嫌ひせんとするのではない。しかし、われ〳〵の望む所は、斯る人々は臨床醫師を教へる病理學者として、實際運動の人々を導かれんことだ。マルクスやレーニンの教理を知ると云ふことと、之を實際運動に如何に應用するかと云ふこととは少からず異る能力を要する。病理については病理學者に聞くべきであるが、實際の病人に如何なる療法を施すべきかについては、病理學者は臨床醫學者の說に聞かねばならぬ。この謙讓が、私は、いまの左翼の人々に欠けてゐるのではないかと思ふ。私の體驗による限り、左翼の人々は、右翼の提言を誠意を以て審議せんとする姿勢の代りに、之を頭から、ブルジョアーの論だ、小ブルジョアーの論だ、と云ふが如き大上段の非難を浴せかけるが如き、中世紀時代に見る狂信的態度が多い。即ち、「地球は動く」と主張した一學者を、單に「異端者」の名に於て排斥し去るの類である。而して、われ〳〵が、譬へば、臨床上の診察に基いて、その療法の如何を論ずる場合に、(即ち實際政策を論ずる場合に) 左翼の人々は、その療法の最大基礎をなす診察の可否を

り、直譯迷信者ありと見、さうした意味に於て、左翼の人々の考慮を願ふものである。而して、右翼は決して、理論を輕視せんとするものでないこと、以上によつて說明を要せないであらう。否々、以上に說く所によつて看取し得る如く、右翼は左翼の理論によつて教へられる所多きことを認めるが、只だ、左翼の實際戰術に錯誤あることを確信するものである。

三

しかし乍ら、若しも、我が左翼と右翼との障壁が、單に、以上に述べたるが如き見解の差異のみに止るならば、事はさう難かしくはない。蓋し、斯樣な見解の差異は、少しも、兩者の見解の一致した部分に對する共同動作を阻むものではない筈であるからだ。然るに、實際に於ては、周知の如く、兩者の握手は容易に行はれ難く、寧ろ逆に、益々乖離の溝を深くしつゝあるが如く觀察せられる。思ふに、この根因は、以上の如き見解の差異以上、兩者の握手に最も必要な階級道德上の「信賴」が缺けてゐるからであらう。

元來、無產階級の解放戰術につき、左右見解を異にする場合

[illegible]る。蓋し、斯る場合には、如何なる行き方が、我々の[illegible]に於ては最善であるかの、その大勢を定める實驗的理論が確定してゐない爲めに、多くの獨斷が互に自說の正しきことを主張すべき事情にあるからだ。然るに、局部的診斷に基いて外國の輸入理論を直譯せんとする一派は、自說の正しきことを盲信する余り、自己の說に反對の者に對しては、假令彼が如何に階級闘爭に戰ひつゝある戰士であるにせよ、之と熟議する代りに、輕率にも、直ちに彼に冠する資本家の犬、無產階級の敵、墮落幹部等等の、敵に對すると代らぬ、或はそれ以上の惡罵を加へ、惡宣傳をなし、甚しきは、明かに故意に事實を捏造迄して、昨日迄の同志に煮湯を呑ますが如きことすら(例へば政治研究會分裂當時の如き)强行して大衆を煽動し、加ふるに、同志道德を無視した一種の奇襲的クーデーターによつて、反對者を排斥し去らんとするのである。しかも、以上の如き戰術が、輸入理論と矛盾せることとなきを公言して憚からない有樣である。

尤も、若しも斯樣な非常手段が、左翼の信ずる所に從へば「乾坤一擲の最重大時期」に於て選ばれたといふことであるなら、それは左翼の戰術上致方のないことと思ふ。尠くとも私は、假令見解を異にする場合と雖、斯樣の場合には、左翼のク[illegible]

[illegible]しの不信も不安も抱かんとはしない。しかもそれに[illegible]件がある。即ち、斯樣な非常手段を採らうと云ふには、必ずや、左翼幹部は階級道德上の一大覺悟があるべきだと云ふことだ。即ち、左翼幹部の採りし非常手段が萬一間違つた戰術であつたと云ふことが分つた場合に於ては、必ずや、無產階級の戰士らしく切腹せよと云ふのだ。無產階級の戰陣から退いて、明を固めるまでの階級道德と覺悟とを持てと云ふのだ。

然るに、事實は周知の如く、我が社會の現狀に於ては、彼等の云ふ右翼幹部、又は墮落幹部、資本家の犬、と云ふ右翼そのものと手を握らざる限り、大衆運動は殆んど絕望であると云つてよい實情である。少くとも、右翼幹部と共同戰線を張らざる限り、左翼の使命は達成せらるべき位地でない。(左翼運動が少數の地下運動團たるに滿足してゐるのであるなら無論話は別である)事實、このことは、左翼幹部の共同戰線運動、單一無產政黨運動に於ける熱心によつて容易に看取し得る所である。

斯る狀態に於ては、云ふ迄もなく、乾坤一擲の重大時期に於てのみ、最後の方法として許さるべき、上述の如き右翼幹部排斥の非常手段は絕對に用ふべきではない。蓋し、その結果は、右翼幹部の左翼に對する不信不安を增すのみにて、その極は、左

翼の追出し、又は左翼との一切の提携拒絶となること、洵に自然であるからだ。蓋し斯る場合、右翼幹部としては、無產階級運動の發展上、さうする以外に致方がないからである。（左翼の方からの非難である右翼幹部の臆病と云ふことも多少手傳つてゐることは卒直に之を認め右翼の考慮を望むが、しかし、現在云ふ所の『左翼のみが無產階級を解放する』と云ふが如き、獨斷を前提とした『左翼を避けんとするは右翼のやり方に大衆の要望に添はないと云ふ惧れか、乃至は大衆の要望に添ふと云ふ自信に不足があるからだ』、と云ふが如き非難は少くとも現在の日本に於ては丸で的外れであつて、少し「現實感」のある人には誰にも容易に想像し得られる如く、現狀では左翼――少くとも上述せる如き左翼――を入れては、自覺の未だ其處に至らない我が大衆が、食はず嫌いで逃げて來ないであらうと云ふこと、即ち、左翼側非難の反對の事實があるために、右翼は左翼を避けんとするのである。）

然るに、我が左翼運動は、以上の如き我が社會狀態に於て、斯樣な非常戰術を公々然として行つた。しかも、その結果が失敗であつたこと、誰の眼にも（左翼の人々それ自身にも）明かである場合に於ても――私の體驗する所では少くとも政治研究會の分裂後がさうであると思ふ――その責任の位地にある左翼幹部は、上述の如き階級道德上責任をとらうとはせず、依然陣頭に立つて、第一無產政黨（左右兩派の結成）を要求し、その容れられざるを以て、一に右翼の偏狹に歸せんとしてゐる。諸君、思ふても見よ。斯の如き無責任な左翼幹部が、前述の如き非常手段を、虎視眈々として、平氣でやらうとしてゐるのだ。さうして人々が「一所にやらう」と云ひ出した場合、如何にして責任を感ずる右翼幹部が彼等と手が握れるであらうか。右翼幹部は少くとも、その育て上げた、又は育て上げつゝある無產階級運動の成長と、それの健康とを確保する責任とを感じてゐる。その運動を如何にして、無責任なりと信じる左翼の手の屆く所に置くことが出來るであらうか。現に、新生の獨立勞働協會や、更生のフエビヤン協會が、その設立の精神に反して、少からず專政的規約を設け、以て、斯の如き無責任にして無能なる左翼に鐵柵を投げざるを得なかつた理由は玆にある。無論、われ／＼は斯の如き反動の弊害の大なることを惧れてゐる。しかも、その弊害よりも尙ほ、無責任にして無謀なる一派の左翼の浸入の害毒を大なると見ざるを得ない程、――尠くとももさうした協會が相當發達して、斯樣な左翼に對抗し得る實力の備はる迄は――不安を感ぜざるを得ないのである。或は、斯の如き右翼の不安は、不必要の不安であるかも知れぬ。しか

し、[illegible]に[illegible]してゐる——只だ、右翼をして右の不安を去らしむるに至らない。茲に、左右兩派が握手し得ざる根因が横はつてゐる。

云ふ迄もなく、左翼が右翼との握手を望む限り。——而してそれは云ふ迄もなく左翼の屈服ではなくて、左翼の使命に對する勇敢な決意である——以上の如き招因を先づ除くべきである。過去の過失を償ふには責任者がその責任を負ふべきだ。それは云ふ迄もなく、左翼が右翼と或る程度の、——右翼の左翼に對する戰術上の不信を除くことを主とした——妥協をすることである。無論、其處には左翼の惧れる「墮落の危險」がある。しかし、若し左翼がこの危險を惧れて、右翼との本統の(表面ばかりではない)妥協に躊躇するならば、左翼の攪亂を惧れて共同戰線を避けんとする右翼の臆病を非難する資格は左翼にないと云はねばならず、斯る曉には、左右兩派は離れ〱に自己の可と信ずる所に猛進する外に策はなくなる。私は、左翼が此際、右翼の上述の如き左翼に對する「不信」を除去するに必要な戰術上の變更を敢行せられんことを、我が無産階級運動の發達のため切望して止まない。之れにつき私はさきに、右翼に斯の如き不信を抱かしめた左翼幹部の切腹の責任をとられんことを要求した。その主旨は無論、それ等の人々を永久に葬り[illegible]

[illegible]信じて行はれたことが、こと志と違つてたま〱違の結果をらしたことに對し、個人としては大に同情する。又、其の人々の有爲な才幹に對しても多くの嘱望を抱いてゐる。若しも左翼幹部が右の如き責任を自覺せられ、我が無産階級運動の發達のため、「切腹」の誠意を示されたる曉に於ては、右翼幹部は、一定期間の經過せる後、再びそれ等左翼の人々と談笑裡に手を握り得るために努力せられんことを希望して止まない。この點は特に右翼幹部のより宏量ならんことを祈るものである。

思ふに、右翼幹部に對する左翼の戰術が、以上の如き錯誤に陷つた根因は、次の二點にあるのではあるまいか。

一、無産階級の發達階段と、社會的環境との異同を無視して、歐洲先進國に於ける左翼運動の戰術をそのまゝ日本に輸入直譯したこと。

二、一九一七年から二〇年代の世界的革命期に於ける非常的左翼戰術を、今日のこの非革命時代に直譯せんとしたこと。

果して然らば、此所に於ても、左翼の錯誤は、一局部を重視して、全體としての顧慮を欠ける所にあると云はねばならぬ。

尙ほ最後に一言申したいことは、無產階級運動は、結局に於て、左翼の勝利である。と云ふ意味に對する誤解である。この誤解が左翼の反省を少からず阻むからである。

なる程、無產階級運動は、結局に於て、左翼運動の勝利だと云ふ一般論には間違ない。しかし、その「左翼運動」とは、「現在左翼の人々が與はれる運動」の事實ではなくて、現在の右翼の陣營からも將來成長すべき左翼をも意味する。云ふ意味は、若し、現在の左翼運動が假りにその戰術を誤りながら之を改めさるに於ては、或はその左翼運動——それに與はれる人々と共に——は衰滅して、いまの右翼の陣營から成長すべき左翼が之に代るかも知れないと云ふことだ。

× × × × ×

以上に於て、私は與へられたる紙面を少からず超過した。然るに、責むべきは左翼の戰術のみでなくて、右翼の方面にもあり、之を責めざるは甚だ片手落ちであるが、それは又の機會に讓ることにする。左翼の人々に對し、深く妄評を謝す。

無產政黨の誕生と評議會

中村義明

(一)

無產政黨が生れた。勞働農民黨の結黨!!日本の無產階級は歡喜の聲を擧げてゐる。舊の農民勞働黨の禁止された時、總同盟の

者の政策だ』と我々を嚇かされたが、我國無產大衆の現實的要求は、科學的、現實的な?兩氏の考とは全然反對であつた。

全國的單一政黨は結成された。然も總同盟が幾度か聲明し最後まで頑張つ

發上、逞くましき反勞働勢力に對し講究の發展と見ふを擧げてゐる。

（二）

我等の政黨、勞働農民黨は組織された。然し、この過程には、遂に禁止された、農民勞働黨にも增した生みの苦しみがあつた。そして、その苦しみは凡て總同盟の評議會に對する政策の結果であつた。

即ち農民勞働黨が禁止されるや、農民組合は直に大衆の要望を擔ふて單一政黨の再組織を提唱した。大勢自己に不利と觀た總同盟は、單一政黨、農民と勞働者との政治的結合に反對しながら、政府の逆宣傳を得たりかしこしと唯一の理由に、單一政黨組織の最も熱心な支持者である評議會を組織機關から除外しやうとし、評議會が組織機關の圏外に立つや、今度は階級戰上に立つものを敵陣に賣りつけるが如き言動を以つて、即ち抗爭すべき支配階級の彈壓を承認し、然も無產階級の陣營に在りながら彼等の逆宣傳に呼應し、三萬余の評議會員を黨外に除き、以つて評議會を陷入れんと、無產政黨に對する努力の凡てを擧げた。

總同盟の態度は全く無人の野を行く狂人の如きであつた。彼の主張に反し、階級的立場を堅守すれば、直にこれは、團體であらうが、個人であらうが政黨組織に發言の資格なきものとなり委員たり得ない者となるのであつた。

禁止された農民勞働黨の結黨前後にあの渦卷を卷かした總同盟が、我國無產政黨組織の上に最も公明正大にして、最も積極的に努力した、然も提唱團體である日本農民組合を今度政黨組織運動から除かうとした彼の態度、彼の目的を無產大衆は何と見る。

組織運動は總同盟のこうした獨善的な行動に依つて幾度か危機を孕んだ。一意無產階級の政治的勢力の結成を急ぐに努力せる委員諸君が『無產政黨組織に對する總同盟の誠意が疑はしくなる』と云つたとか、全くである。殊に禁止された農民勞働黨創立直前に於て採つた總同盟の態度、並びに西尾氏、赤松氏等の意見と思ひ合せば、その感を一層深くせざるを得ない。

（三）

評議會は總同盟との對立關係が過去に於けるが如く組織運動の上に累を及ぼすことのあるを怖れ準備機關の圏外に立つた。然し評議會の態度は固より準備機關の中にあつた農民組合其他の僚友團體と同じく、全國的單一政黨の即時樹立以外にはな

かつた。故に評議會は準備機關の圏外に立ちなから、誠心誠意、或は積極的行動に全力を擧げ、或は忍び得ざることをも忍んで單一政黨樹立のために、忠實なる階級的精神を以つて準備機關の活動を援助した。これは評議會が、公開せる第一回擴大中央委員會に於て無産大衆に公約した決議の實行であり、評議會本來の使命を遂行したものである。

勞働農民黨は生れた!!支配階級の脅威である凡ての勞働者と農民の結合せる大衆的、階級的全國的單一無産政黨が生れた!!

無産階級解放戰上必ずなくてはならぬ武器を愈々我々は握つたのだ。

ブルヂョアの爲めに攪亂されてゐた無産階級の政治的勢力を統一すべき宣傳と組織の準備は整つた。

評議會は虚心坦懷に我國無産階級解放のためにこれを喜ぶと同時に、僚友團體の獻身的努力に對し涙ぐましきまで感謝の意を捧げざるを得ない。

勞働農民黨に對する評議會の方針、事新しく宣明するまでもない、過去に於けるが如く常に峻嚴なる自己批判を怠ることなく、無産階級解放のために、勞働農民黨の正しき活動と、正しき發達のため誠心誠意今日より一層の努力を盡さんとする以外何物もない。

現下の階級的至要爭點と所謂左右兩翼の對立

猪俣津南雄

といふに、事實」が一般着お其他にあるといふしても、[illegible]右兩翼の暗鬪」の解釋なり批判なりを平凡的概念的に片づけることの危險は一層甚しいからである。

言ふ迄もなく、勞働者の運動が特殊の社會的重要性を有つのは、それが常に階級としての運動に發展せんとし、發展するの必然性を有つからであり、そして此の階級の階級的使命が限りなく貴いからである。しかも、無產階級にあつては、運動は國際的であり、インターナショナルである。で、如何なる國の運動でも、その有らゆる發達段階於いけて、常に何等かの形に於ける階級的な問題に當面せぬ譯には行かない。そこに階級的な爭點が生じ、それを中心に種々なる分派と傾向とが現はれる。が、大別すれば、すべてを全階級の究極利益から考察し、その命ずる所に從つて行動せんと欲する者と、然らざる者とに分れるであらう。プロレタリア運動上の左翼とは、古典的な用語例によつて、かゝる階級的見地と脚地とに終始せんとする一鬪を特性づける言葉に外ならない。左翼といへば、通常、勇敢と獻身とを聯想させる。蓋し、階級的立場に忠實ならんとすれば、鬪爭を回避することが出來ず、個人的犧牲を厭ふことが出來ないからである。

二

が、鬪爭によつて生長するプロレタリアートには、不斷に攻戰を戰ひ續け得る程には恵まれてをらぬ。少くとも資本主義的經濟周期は、不況時代、反動時代に處しての退却戰又は守備戰を不可避にする。退却戰にあつても、それが眞の階級的利益の爲にするものである限り、攻撃戰に於けると同樣な階級的脚地の把持と、恐らくはヨリ以上の勇氣と個人的犧牲とを以つて鬪はれ、そして此の守勢の裡にこそは既にヨリ大なる次期の攻勢が孕まれてゐるのではあるが、此の際の全陣容は一見ブルジョアジーの喜悅に價ひするかの如き保護色に包まれる所からして、往々それはパラドキシカルに『右傾』と呼ばれる。言葉の末は爭ふに及ばぬとすれば、之れを『戰術的右傾』と名づけるも不可はない。戰術上の右傾乃至は左傾は、之れを言ひかへれば、有機的な運動が展示する屈伸性である。此の種の適應作用は、また、運動それ自體の生長と共に絶えず發現されねばならぬ。運動はその舊段楷を否定することに依つてのみ新段楷へ進出し得るのだから、生長に基づく一つの轉期に立つ毎に、或は左傾の色を強め、或は右傾の衣を着る。例へば、組織プロレタリアートは、それ自身を增大し得たるが爲めに農民との政治的結

合の機會を迎へ、十分にその保守的要求を支持し得る迄でに『右傾』しながら、却つて自己の階級的生長を促進し得るであらう。

三

大正七八年頃に俄かに勃興して今日に至れる我が勞働運動は、初めから階級的旗幟の鮮明なるを特徴とした。その時までに既に歐米の運動が極度の發達を遂げてゐたこと、特にそれが無產階級革命の世界的高潮期に際會したことは、疑ひもなく大いなる刺激であつた。が、更に根本的なる理由は、我國資本主義の發達狀態に求むることが出來る。工場勞働の發達及び集中、交通機關及び教育の普及、勞働條件の惡化と發達末期的な物價騰貴、武斷帝國主義の負擔の重加、等、プロレタリアー少なくとも其の優秀分子――の階級的自覺の爲めに必要なる基本條件は、有り余るほどに造り出されてゐた。しかもそれらの條件は戰後の今日に至つてますく成熟するばかりである。

我國の勞働運動は、夙に日清戰爭後の資本主義的發達の開始

課せられた歷史的任務は、武斷帝國主義の確立であつたと同時に、不利なる競爭條件の下に於ける工業的發達の助成であつたが爲めに、強權による無產者運動の壓伏を絕對に必要とし、そして暫くはそれに成功した。今次の勞働勃興に逢うて倍舊の猛威を振ふに至り、勞働者は、雇主よりは寧ろ治警十七條との鬪ひに苦しみつゝ今日に及んだものである。が、かやうに、工場の爭議が到るところ直ちに官憲との衝突に轉化するといふ事實は、勞働者の鬪爭意識を[illegible]に集注せしむる結果となり、其の意味に於ける政治意識、從つてまた階級的自覺を異常に促進したのであつた。そして、尙ほ後に述べるやうに、かゝる勞働抑壓の必要は、今やますます甚しからうとするのである。

四

かやうにして、我國の勞働運動に特異なる一事態が生れた。年月に比して著しく進んだ階級的自覺に到達した所の、比較的多數の指導的分子を有することと之れである。之等の分子はこれまで『職

に、[illegible]て、最も階級的意識の鮮明なるものであつた。そして其の意味に於いて明かにそれは左翼的なる團體であつた。

全組織勞働の膨脹と共にいよ〳〵繁殖した自覺分子は、いま、それ〴〵の團體に於いて指導的乃至は準指導的地位を占めてゐる。が、かの戰鬪的少數の雄飛の時代に於いて、鬪爭上の必要が生んだ個人的結合は、大衆的背景を有つに至つてからも尚ほ、重大爭點に面する毎に、やゝもすれば一種の徒黨的精神となつて其の惰力を示さうとする。

が、しかしまた過去六七年間の全運動の生長力は實に異常に大なるものがあつた。昨年末に至つて二十四萬を算した組織勞働の殆ど全部は、此の短日月が生み出したものである。で、わが無産階級運動は、自身の急速なる生長によつて今や轉期を孕むに至り、それと共に戰術上の新方針を必要とするに至つた。現下の階級的至要爭點はそこから生れたものであるが、大正十二年末の資本攻勢は、全事態を極度の緊張に導くと同時に、一つの階級的危機を醸させてゐる。

轉期を豫想しての政策上の爭は、先づ、最も進んだ勞働總同盟の内部に擡頭し、指導者群の感情的背馳と縺れつゝ進展し、惡化して遂に、除名、分裂の大團円を見たことは未だ吾々[illegible]間際は直ちにブルジョアジーの乘ずる所となつた。[illegible]して一面して敗るの戰法・威嚇と懷柔とによる計畫的な離間策の積極的行使は、それを機として開始された。二つの團體の競爭的立場が深刻化すればする程、離間政策は奏効し、その奏効と共に遂には、階級的脚地を捨てゝ無條件的に退却せんとする傾向さへが、勞働軍の一角を脅かすに至つたのである。運動の如何なる段階に於いても、その最先頭に立つ指導分子は、支配的勢力から絶えず階級を裏切れと迫られる。――壓迫に依つて、買收に依つて、欺瞞に依つて。

五

現下の階級的至要爭點は、次ぎの如く要約することが出來やう。(一) 極めて急速なる發達の産物たることの當然の結果として、我國二十四萬の組織勞働は、未だ支離滅裂な組織状態にあり、從つてその實勢力は、數の大に比して驚くべき微弱さである。如何にすれば、此の未熟な過去を否定して更に大いなる進展をかち取ることが出來るか? これがその第一點である。

(二) 不景氣と反動政策との熾烈さにも拘らず、また有力組合間の共殺的な對立にも拘らず、勞働組合の發達の爲めの客觀的

條件の成熟の動かすべからざるものあるが爲めに、各組合は現に高速度の組織率を以て增大しつゝある。が、同時にまた、未組織の勞働大衆は尙ほ驚くべき多數に上り、今後に於いて有効に有意義に組織され得る者の大部分は、鍵關的な大工場鑛山にあり、此の分野に割據する雇主階級は、代表的なるブルジョア要素として、鬪志と抵抗力とが最强大である。如何にすれば、此の險難なる未來を征服して更に大いに進展し得るか？ それが第二點である。(三) 最後には、新らたに獲得したる投票權を有効に行使せんが爲めに、また、擡頭せる組織農民を極力支持し且つ極力その支持を受けんが爲めに、そうしてそれらをばプロレタリアートの『全國的、階級的鬪爭』への機緣たり挺子たらしめる爲めに、先づ、如何なる政治的結合體を有つべきであらうか？ 第三點はそれである。(この項の詳細は、創刊號『大衆』の拙文『我國プロレタリア運動の現段楷』を參照)

以上の階級的爭點は既に何人の認識にものぼり、最善の方策に關しても又た既に大綱の一致を見てゐるものである。曰く、組合の產業別整理並びに全國的總聯合の實現による經濟戰線の統一化。曰く、かくして倍加したる戰鬪力の意識的計畫的行使。曰く、全國的大衆的單一無產政黨の組織。

六

我國の組織勞働は、進んで主要產業部門の大工場大鑛山及び鐵道の勞働者を其の陣營に獲得することに依つてのみ以上の發展を期待し得べき發達段楷に達した。それは發展の爲めの必要條件である。が、それ故に又た生存の爲めの必要條件である。かゝる重要區分の勞働者を抱擁せざる組織勞働は、支配者階級の彈壓の下に潰滅すべき不斷の危險に曝されるからである。かゝる微力な組織勞働を基礎とする無產者政黨は、容易に小ブルジョア的勢力侵入に依つて階級的精神を喪失するからである。(我國及び先進國の多くの苦がき經驗を想へ。)

が、一方、雇主階級にとつては、此の大工場鑛山及び鐵道に要害を死守するの必要は今や限りなく大きいのであつた。

長く、半封建的政府の家長的庇護下にあつた我國の產業の資本は世界大戰の僥倖を拾つて辛うじて獨立の機運を迎へたばかりで世ある。然るに、資本主義的國民經濟の全規模の急激なる增大と共に、組織に固有する諸矛盾は、異常に擴大し深化した。就中、物價と賃銀との間の矛盾が激增した。原料と市場とに於いて海外に依存する程度が著增しながら、それらを護得する困難は數倍した。外に在つては競爭が激甚となり、內にあつては生產

[illegible]であり、従つて、勞賃に實質に於いては寧ろ低下しながら、名目に於いては却つて騰貴して、我國の工業にとつての在來の國際的優差を滅却した。加ふるに、天引的に貨幣資本家に支拂はるべき利子的負擔の加重があり、新らたに興れる金融資本家の壓迫が甚しい。工業精化の要求に應ずべき新技術新設備への轉化の必要は、いよ〳〵金融資本への依存を大ならしめやうとする。

そこで、産業資本の活路は只だ一しか殘らない。金融資本を支持しつゝ、舊き武斷帝國主義から新しき資本帝國主義への轉換を行ふと同時に、金融資本の支持の下に、能ふ限り賃銀負擔の低下若しくは其の増大を防止することがそれである。そして、前者を達成する爲めにも後者を遂行する爲めにも、絶對的先要條件は、言ふまでもなく、組織勞働の強大化わけてもその階級的結成を極力阻止することであらねばならぬ。我國資本主義的發達の現段階が資本に命ずる此の根本方策は、今や、代表的ブルジョアジーの固き決意に體現されやうとしてゐる。人も知る農民勞働黨の解散、治安維持法の制定及び亂用（[illegible]）[illegible]破壞的組合法案の提出、等は、ただ其の二三の具體的現はれに過ぎない。組合法案に關する『工業クラブ』の修正意見を讀んでブルジョア自由主義の痕跡も見[illegible]いた爲に、[illegible]合衆國に於いてＡＦＬ式の黄色主義の組合さへ[illegible]にまきたてゐるのを知つて、殆んどの夢からも厭むべきである。苟も勞働階級を組織化する恐れある組合は今やます〳〵否定されねばならず、只だ資本家の組合、乃至はその代用價値の顯著なる『勞働』組合だけが許されねばならなかつたのである。爭點は、既に、炭坑、鐵道をはじめ金屬、機械、造船、纖維、化學工業の巨人的諸工場に移つたのだから、[illegible]、忠實に大資本家を支持しなければならなかつた。たとひ彼等の『手代』でない迄にも、それ自身が最大の産業資本及び貨幣資本を擁する[illegible]トラストを形づくつてゐるのだから。

七

いま、全産業中の最要害を挾んで、一方には××資本家聯合軍を、他方には組織勞働軍の陣營を見渡すならば、後者の戰列の驚くべき支離滅烈さの爲めに、前者のそれが壓倒的に優勢なのを見る。有らゆる地點に於いて勞働軍が苦戰に陷り、多數の捕虜をさへ出さうとする。當面の階級的任務は、實に、此の具體的情勢によつて決定されるのである。能ふ限り速かに密集すること、これだ。全國的總聯合の促進、單一無産政黨の確[illegible]

の條件は、勞働者自身の組合を絶對的必要物たらしめてゐる。わけても、爭議勞働者に對する壓迫が直ちに[illegible]の發動といふ形をとるの一事の如きは、ひとへに階級的自覺の刺戟劑として特製されてあるかの觀さへがある。

所詮、我國の資本主義經濟に奇蹟的な『若返へり』が起らぬ限り、我國の勞働者をして正しき指導者の選擇を誤まらしめることは不可能と見られる。で、此の際の反階級的右傾――資本攻勢への對應に非ずしてそれへの降伏は、降伏者自身の自滅を以て贖はれねばならぬ。階級的忠誠を本質とする堅實なる左翼分子は、客觀的情勢力の命ずる所に從つて次第に增大し、次第に結晶して行くであらう。壓迫及び買收と鬪はずして階級的結成に導き得るとなす考は、壓迫と、買收とに依つて階級的結成を防止し得るとなす支配者の夢想に輪をかけた妄想といはねばならない。

既成政黨の崩壞過程としての第五十一議會

清瀨一郎

近頃、政爭の苛烈を難じ、議會の墮落を責むる聲が高い。本春以來、此種の社説を掲げなかつた新聞紙は、日本中には恐らくはあるまい。政黨の腐敗、議會の墮落を攻擊する點に於ては小生も亦人後に落つるものではない。然し乍ら、本論は此目的を以て筆を執るものではない。ヘーゲルも言ふたとか、「存在するものは合理的也」と。政黨の現狀と議會の形勢を露呈せしめし所以のものは何であるか。而して此現狀は何事を物語るものであらうか。本編は此方針に依り、喧しかりし第五十一議會が、吾々に何を教へたかを檢討して見んとするのである。

一、政黨內閣制の完成

思ふに、五十一議會當時は既成政黨全盛の時期であつた。蓋、今日迄の政黨には何等ハツキリした指導的政治理想はないのである。たゞ、彼等の間に主張らしい主張がありとすれば、それは「政黨內閣制」の主張である。實力ある政黨の領袖が、其理由に依つて大命を拜する。政黨の主張を以て內閣の主義とする。而して、內閣は其政黨が實力を有する間は存續し、其實力を失ふに至れば他の實力ある政黨が之に替る。組閣の大命は形式に於ては黨首個人に下されるのではあるが、實體に於ては其の黨首の屬する政黨に下されるのである。我國の政機を斯う言つた氣風に導くといふ事が、彼等の所謂「政黨內閣制」であつて、今日迄の政黨は、これを實現する爲めに三十年間の戰を續け來つたともいふ事が出來る。彼の桂內閣當時の閥族打破の運動も、はた、淸浦內閣に對する護憲運動も、總て此政黨內閣の理論を基調として居つたのである。之に對し官僚政治家は常に大臣任命の形式論を以て應戰して居つた。伊藤公は「帝國ノ主權ハ天皇ニ在リ、天皇ノ大臣ハ唯タ宸斷ニ依リテ進退スヘノミ、若シ大臣タル者、一ニ議院ノ決議ニ遵ヒテ進退セサルカラストセバ、知ラス、論者ハ大臣委任ノ權、議院ニ在リ乎」と豪語し、院內多數黨派の不信任に拘らず、大臣の

得べきを論し、且事實在職した。桂公亦、「國務大臣ハ君主ノ信任ニ依リテ其職ニ在ル者ニシテ、衆議院ノ決議ニ依リ輕々進退スヘキニ非ス」と唱へ、多數派の不信任を無視した。固より此等は大臣任命の形式論と議會政治の實體論とを混同したるものであつて、一顧の價値のない言説である。議會政治、政黨內閣制の母體といはれる英國自身に於ても、大臣任命の權は國王に在ることは我國と異らぬ。而も院內の實力に變動あるときは內閣の交迭を見ることは當然の慣例となつて居る事は人の知る如くである。然るに、不審議な事には、伊藤、桂の內閣觀は何時の間にか、政黨內閣の主張者たる政黨首領にさへ傳染するの形跡があつた。先年、原敬氏が兇刄に殪れ、高橋是清氏が之に代つて內閣を組織した事がある。其際、小生は、高橋內閣は原內閣時代の施政につき責任を負ふやと質問して見た。之に對し高橋氏は、原內閣は原內閣、高橋內閣は高橋內閣である。是は別異の內閣であるから、政策は同一であるとは言へぬと答へ、同しく政友會を基礎とした、昨日迄の原內閣の施政に對する責任を回避した。然るに今回、若槻氏が、加藤子爵死去の後を承けて內閣を組織するや、公然、前後の內閣の政治上の同一性を表白して居る。本年二月一日政友會の小川平吉君は新首相に對し滿洲事變に關し質問する前提として、新內閣は前內閣の施政につき責任を負ふや否やを確めたるに對し、若槻首相は、

「只今ノ御質問ハ御質問ノ通リデアリマス、前內閣ノ行ハマシタ政治ニ付テハ、現內閣ハ悉ク其責ニ任スル考デアリマス」

との明答を與へた。何故に現內閣が前內閣時代の施政につき責を負ふやは、問はずして明である。それは前後を通じ、同一政黨を基礎として成立して居るからではないか。更に玆に注意すべき一問答がある。本年三月六日、政友會の秋田淸君が、軍紀肅正、政機運用に關する質問（實は中野正剛君の言論を責むるもの）を爲した。其內に同君は首相に對し、今は政黨內閣であるから、首相は與黨の言論につき責任を負ふべきであるが如何といふ意味の質問があつた。それに對し若槻首相は、

「第二ノ御質問ノ、黨員ノ一人ノ行動ニ付テ總テ總裁トシテ責任ヲ負フヤト云フ御質問ニ對シテハ黨議ニ依ツテ決定シタモノハ、デアリマスレバ私ハ責任ヲ執リマス、併ナガラ黨議ニ依ラナイ、黨員各自ノ行動、ソレニ對シテマデ責任ヲ負フ譯ニ參リマセヌ」

と答へて居る。首相は問題の事件に付いては、黨員個人の行動なりとして責任を回避したが、しかし、黨議決定の事項については責任を負ふべき事を明答した。同様の場合に、從前は、

政黨の行動と國臣の責任とは別異であるといふ風の答辯が多かつたのである。右引用の答辯は明に政黨内閣制の理論を承認したものと言はねばならぬ。

政黨内閣制は以上の如く理論的に承認せられたばかりではない。實際の形勢、現實の事實として十分承認せられた。それは外でもない、一月二十八日加藤前首相死去するや、全國の輿論は憲政會の新總裁が後繼内閣を組織するを當然とした。政變の度毎に有り勝の中間内閣運動も起らなかつた。又今回は即席の第一黨運動（例へば政本合同の類）も起らなかつた。それでも世間では此成り行きにつき相當心配をしたものと見へ、一月三十日若槻氏に對する親任式が濟むや、世人は始めて安堵の息を吐いた。國内の新聞紙といふ新聞紙は盡く、政權が常道に依り推移したことを歡ぶ旨の社説を掲げた。彼の超然内閣、中間内閣といふものは、一昨々年の清浦内閣を最後とし、もはや復活するものでない事は日本國民の信念となつたものであると見て差支なからう。是れ小生が第五十一議會は、政黨内閣制の完成を紀念する議會であると言ふ所以である。（本誌前號拙稿「首相急死に因る政變に直面し、我政界の前途を想ふ」を御參照を乞ふ）。

二、既成政黨の自壞作用

ルーソーであると記憶する、「人は生れたる瞬間に死期に近づきつゝある」と言つたのは。既成政黨の目標たりし、政黨内閣制は、第五十一議會に完成した。此完成の議會は同時に其自壞作用への出發の議會であつたのだ。此議會に於て、一世の注目を惹いたのは、三百萬圓事件、山梨、梅田事件、松島遊廓事件、等の政黨腐敗事件の續發である。或は關係個人の悪德を憎むの聲、政黨相互の訐きあひを醜惡なりとして擯斥するの聲は國内に充滿して居る。然し乍ら、冷かに此現象を見るときは、是れ、政黨が其全盛期に到達したる瞬間に自壞の作用を始めたものと觀察するが當然であらう。政黨が完成と同時に死期に近づきつゝあるのである。(1)松島遊廓事件は何故に政黨關係の事件となつたか。元來此事件といふものは、地方官たる知事の職權に屬する事柄である。松島遊廓は大阪市の中心地となつてしまつた。之を郊外に移す必要に迫つた。而して大阪郊外には二三の大土地會社がある。ある土地會社經營地が其移轉先としての指定を受くれば其會社所有地の地價は一躍して數十百倍に騰貴する。そこで、利に敏き大阪商人が運動を始めた。然るに茲に注意すべきは、當の知事に對しては大して運動をして居ら

ぬ。却て政黨關係者に運動して居る。是れ彼等商人は、かゝる決定は官制上は知事の權限ではあるが、其實政府を支持する者、即ち政黨の實力に依りて決せられると信じたからである。殊に面白きは其運動は一黨派のみに限らずして、各派に運動して居るやうである。彼等は、甲黨倒るゝも、後に來るものは乙黨なるべく、乙黨にあらずんば丙黨なるべしと考へたものと見ねばならぬ。政黨內閣制は業に既に大阪商人に依り確認せられた譯である。(2)彼の三百萬圓事件なるものは其眞相未だ詳でない。某富豪と某黨總裁との間に金錢授受ありたりとの前提の下に評論する事は愼まねばならぬ。しかし、山梨、梅田事件は金錢に關係した事件である事は動かすべからざる事のやうである。政黨の離合に金錢を伴ふ。金がなければ總裁は勤まらぬといふ事は、今日我國の政治常識となりつゝある。果して然らば、何故に政黨に金錢を必要とするか。是れ、既成政黨の內部に存在する弱點である。今、少しく此點を解剖して見やう。

既成政黨の政黨內閣論は、實は純粹なる政治哲學より出發したものではなかつた。其始よりして一の政略を交へたものであつた。當時官界に志を得ざりし政治家が、民論の力に依りて政

例へば中道に[illegible]

の資金を此者が負擔するは當然である。の會社屋である。ある有利なる會社があれば、其會社の株券を買取り、委任狀を蒐集して總會に臨み、在重役を逐ひ出し、自ら社長とならうとする。固より會社の經營、技術の改善等に何等の見識があるわけではない。たゞ社長となればよい。そこで株券買集め、委任狀蒐集の費用は社長志望者が持つは當然であるといふ事になる。これが既成政黨の心理に髣髴たるものがあるではないか。此戰術を粉飾するに、彼等は、政黨內閣制の美名を以てした。そこで黨の經費は總裁もちと決つた。總裁自身に無限の財源があれば問題は小さくなる。金錢を以て政閣を支持することは富豪政治（マンモニズム）であるといふ評論を以て片付けられる。然るに一黨の經費を數年、十數年に亘りて自辨し得る政治家がない。そこで此黨總裁又は政黨幹部といふ者は、金錢を引き出す手腕の勝れた者が之に當るといふ事になる。固より目的の爲めに手段の正邪を問ふの遑はない。條件付の寄附は無論の事、認可許可の私約、利權、官有物の拂下、機密費の費消は此等の者の常套手段である。往年の滿鐵事件でも、大連取引所事件でも。今回の[illegible]事件・山梨事件・三百萬圓事件[illegible]

斯くいへばとて小生は決して政黨內閣制の反對者ではない。獨り反對者でないのみならず、熱心なる贊成者である。たゞ、今日迄の政黨は、一定の主張（民衆に徹底したる）を行ふ爲に內閣を組織しやうといふのでなく、內閣組織の爲に內閣を組織するのである。閣僚の地位も利權の一である。黨員が支援して實力ある黨員を局に當らせるのではなく、局に當り度い志望を持つ者（黨幹部）が黨員に請託し入閣、組閣の同意を求めるのである。而して此請託料が黨費である。小生は此不純且不自然なる形式に於ける政黨內閣制を以て今日の政黨の弱點なりとするのである。

然らば總裁の負擔に歸する黨費といふものは何の爲めに使はれるのであるか。それは言ふまでもなく、議員製造の爲めである。彼等の揭げる政黨內閣の理論では、下院の多數の議員を有する黨派が內閣を組織する。問題は甚だ。數さへ揃へば其質の顧みる所ではない。議員を原始的に製造するは、選擧である。選擧の費用は（少くとも其一部は）黨費即ち總裁の自腹より支出せられる。議員を事後的に增加するのは入黨手續である。入黨勸誘費（梅田事件の性質の金）は固より總裁費である。總裁の負擔に歸する黨費といふものは大部分この二口の經費である。黨費とは黨の事務員の俸給や通信筆墨並に政務研究の費用

であらうなど考へて居る者があつたならば、それこそ天下の至愚者である。

斯く見來るときは、今日の醜事件といふものは、これに携はれる個人の道德觀念の薄弱といふ事もさる事ながら、今日迄の政黨の組織と目的とよりして當然發生せねばならぬ運命にあつた事柄であらねばならぬ。今日の政黨が其組織と態度を改めざる限り、此種の事件は跡を絕たない。而して其發覺の度每に政黨の信用は益々下落する。制限選擧の場合に於ては如何に輿論の反對を受けても、猶且、金力を以て押し切る事が出來た。普選はもはや目前に控へて居る。この醜惡事を續行する既成政黨が、永く其優勢を持續するものとは思はれない。既成政黨は恐らくは醜行暴露が原因となつて壞滅するものであらう。而して既政黨全盛の第五十一議會は此自壞作用の第一日である。

三、新二大政黨主義

既成政黨に屬する政治家は、よく二大政黨主義といふ事を口にする。それは「グラッドストーン」「ヂスレリー」時代の英國に於て、自由、保守の二大政黨が對立して、其勢力の消長に依つ互に與黨となり、野黨となる事恰も柱時計の振子の左右するが如くにしやうといふ事である。當時の英國に於ては政治

主義が大體保守、自由の二潮流に岐れて居つた。それ故二大政黨は何人が造つたのでもなく、自ら生れた形勢であつたのである。政治上の主義が二大別せられる時代及邦國では、二大政黨は作爲せずとも自ら生れる。しかし、政治上の主義が二大別せられて居らぬ時代及邦國では、如何に作爲しても二大政黨對立が行はれる筈がない。擬國會でもやるやうに、我國の政局を二大政黨の對立にしやうなどいふ事は意味を爲さぬ。翻て、今日迄の我國の政黨界を見るに各黨間の主義に二大別があつたか。政策については各派各々別異の政策を揭げ來つて居る。或は自作農免税といひ、或は地租地方移讓といひ、政策に於ては各派間に相異はある。しかし、比政策の因て出つる所の主義に何の相異があるか、かゝる時代に於て二大政黨の對立は意味を爲さぬ。假りに今、政友本黨と憲政會が合同し、政友會が無所屬其他の小團體を併呑し、院内が二つの政黨となつたと假定するも、是れ一時政黨の數が二つになつたといふまでゝあつて、所謂「二大政黨對立主義」ではない。偶然、二つになつた政黨は又偶然三つにもなり、四つにもなるであらう。何となれば其間に主義（指導精神）の對立がないからである。

今日に於ける政治上の主張の岐るゝ所は、資本家及地主（土地も投資の目的物となつて居るから、地主と亦資本家の一種に外ならないが）の主張を支持するか、勞働者、無產者の立場に立脚するかの點に作らねばならぬ。資本家の主張は、あくまで現制度（資本主義）の固執である。現制度を固執するのみならず、產業に對する政府の監督を廢除せよ。官業（鐵道、專賣等）は之を廢して自由競爭主義に依りて經營する民業に移せと主張する。勞働者の立場に在る者は、社會の改造、即ち資本主義の變更、又は廢止を主唱する事は勿論である。政黨の數は幾つあつても其主張が此二種に大別し得られるやうになれば是れ一種の二政黨の對立ではないか。

今日院内の政黨（憲政會、政友會、政友本黨、實業同志會）は、其政策に於ては差異があるが、共に資本主義に立脚して居る事は爭ふべからざる事實である。一々事例を擧げて說明するまでもないと思ふが、例りに今期議會に論せられた税制改革の一事について點檢して見ても、直ぐに判る。憲政會や本黨は自作小地主の免税を行ふた。自ら之を以て社會政策であるといつて居る。いづ

て、小地主に免税するのを以て社會政策であるといふことは我國に於て始めて聞く所である。政友會は之に對し地租地方移讓といふ政策を以て進んだ。地租地方移讓に依る國庫收入の欠陷は如何に處理するやと聞くに、それは關税の增收に依るといふのである。關税は云ふまでもなく一種の消費税とも見られる。殊に其主張する米、小麥、小麥粉の關税の如きは一般消費税と同じく、消費者に均等に轉嫁せらるゝ結果、無産者課税といふ事になる。實業同志會が資本主義政黨である事は今更說くまでもなからう。

斯の如く院内が、資本主義政黨ばかりである時代に、院外に一の非資本主義政黨が現はれた。それは外でもない三月五日にに大阪於て結黨式を擧げた「勞働農民黨」である。勞働農民黨が、既成政黨並に資本主義に反對するものなる事は是亦說く迄もない。たゞ玆に三月五日發せられたる「結黨宣言」の一節を引用すれば、實に左の如くである。

「前略、惟ふに、現時のわが國民生活において、最も憂ふべき現象は、貧富の懸隔日に益々甚だしくして、國民の最大多數を占むるわれ等無産階級、即ち勞働者、小作農民を初めとして、幾百萬の小農、小商工業者、下層俸給生活者等[illegible]、全く經濟的並に精神的安定を失ひつゝあることである。實に現代の國民生活の[illegible]をおびやかしつゝある一切の社會的苦悶はこの經濟的、精神的生活の不安動搖の中より醸成され、延いては人類文化の前程に拭ふべからざる暗影を漂はせつゝあるのである。斯の如きは資本主義經濟組織の發達により資本の蓄積集中に伴ふ必然の結果であつて、現代全世界に共通する社會的一大疾患であると共に、われ等が敢へてわが政治經濟の根本的整正と、社會生活の改造を必要なりと主張するゆゑんである。眞に國家を愛する者、民衆をおもふ者、人類永遠の文化と、平和とに光輝あらしめんことを希ふ者は、何人と雖もわれ等と思念を同うして、一日も速かに富の生産、分配の公正を確立せんことを希求しつゝあることを信ずるものである。下略」

勞働農民黨は今出來たばかりである。無論院内に一人の代議士も持たぬ。しかし乍ら、成立と同時に既に二十萬の黨員を有すといはれて居る。黨員の數に於ては既成の何れの政黨をも凌駕して居る。其黨員の百萬を數ふるは瞬く間であらう。而も普通選擧となれば貧富を分たず同しく一票の權利者である。是れ既成政黨に對する一大脅威にあらずして何ぞや。

四、無產政黨に對する防戰

普通選擧法を通過したる第五十議會以來、無產政黨の擡頭は何人も豫想する所であつた。既成政黨は、普選を通過して見たものの、普選に依りて發生する無產政黨には脅威を感ぜざることを得ぬ。既成政黨は本來が拾つべからざる一種の信念を持つて居るのではない。自己の爲めに存在して居るのである。此種の團體が自己保存の爲めに焦慮するは當然である。既成政黨が普選通過後、無產政黨に對して防戰したる跡を尋ねて見れば

(1)先づ第一が彼の「治安維持法」の制定であつた。往年同性質の「過激社會思想取締法案」に極力反對した政治家までが、普選を前にして治安維持法を制定することに同意した。政府黨も、在野黨も黨としては擧つて之に贊成した。之に異議を留めたのは極少數の異端者だけであつた。是れ普選後の新興勢力の擡頭に對する防禦の第一線を張つたものにあらずして何ぞや。

(2)昨春以來の政黨の合同運動も亦、ある意味に於ては、新興無產政黨に對する防禦の戰術であつたのである。「既成政黨の打破」を以て主要の主張として居つた革新俱樂部員の

爭は苛烈を極めるかも知れぬ。此際に處する爲め政友會に入會するを可なりと思ふと演說した（十四年五月十日）又當時同氏が新聞記者に語つた談話として傳へられて居るものに依れば、「今後はわが體の健康が許す限り、また年齡の續く限り、普選後において之を如何に活用し善導するかにつき働いて見たい。もし普選實施により紛擾でも起ることゝなれば國民上下に對して實に相濟まぬ」とある。これが同氏の政友會入りの一理由であつて見れば、其後引續いて起りつゝある、政黨合同運動の動機の幾分は既成政黨が普選後の無產新勢力に當らんとする身構の一であると見るも、あながち不當ではあるまい。

(3)しかし乍ら、既成政黨が、新興勢力防禦の最も露骨なる手段は彼の十四年十二月一日の第一無產政黨の禁止であつた。此いきさつは世間周知の事であるから、今詳しく述べぬ。內務大臣は此黨の決定した綱領には不當の點はない。しかし削除した綱領に不當の點があつたと辯解した。削除した綱領に付き責任を執るべしといふ論理が何處にあるであらうか。又曰く、決議したものは行動綱領であつて、其外に原則綱領があつたと。然

に[illegible]、自己の地位を安固にしやうといふ事。之を禁止する事に依り保守的勢力（元老、樞密院、貴族院）の歡心を買はう。此歡心に依り、其現在の地位を安固にし、又、將來の組閣の機會を多からしめやう。此二種の心術が結合して、彼の電光石火的のはや業を敢行するに至つたのである。今回の第二無產黨の組織の如きも、もし議會開會中でなかつたならば、又何等かの干渉を受けたかも測りがたかつたと思ふ。

(4) 第五十一議會に入り、妥協政治なるものが行はれ出した。政府黨は本來議會の三分の一の議員しか持つて居ない。而して重要なる政策である稅制整理案に就いて在野黨と意見を異にして居る。本來ならば解散は免れ難い形勢である。然るに議會は所謂妥協を以て終始し、遂に解散を回避するに至つた。解散回避には種々複雜な動機があらう。政府はなるべく天下の騷ぎを避けて、其政策を實現しやうと努めたのであるとも云へやう。又、此誠意を全然否定するのも苛酷なる觀察である。然し乍ら、解散の結果行はるべき普通選擧に關し、既成各派が危惧の念を抱いたといふ事も事實である。普通選擧を怖るゝ事は取りも直さず、無產派の擡頭を怖れるといふ事である。斯ふ考へて見るときは、妥協に依る解散回避といふ事は、姑息ではあるが。[illegible]無產黨の擡頭に對し防戰しつゝある爭議の一部なりと稱するも亦全く誣妄の言として退ける譯には行くまいと思ふ。

(5) 茲に意外なる逸話は、彼の勞働法（勞働組合法、勞働爭議調停法）につき傳へられる。蓋し、勞働法は憲政會の在野時代の一主張であつて、今期議會初頭に於ける施政演說に於て、加藤總理大臣が、內閣の重要政策の一として天下に聲明した所である。元來、勞働立法なるものは、現時の個人主義的法律制度の變革であつて、個人主義は一見自由、平等の理想を基調とするが如く見ゆるが、資本家と一個人たる勞働者との對立は眞の平等の立場の取引でない。勞働者は勞働契約を締結せざれば飢餓を免れぬ。此の强迫の下に契約を締結するは眞の平等ではないといふ一點より出發せねばならぬ。然るに政府の勞働法には罷業權をも承諾して居らなければ、團體協約の效力をも認めて居らぬ。所謂、骨拔である。これは不徹だとは何人も感づく所である。然るに茲に藤原銀次郞、昆田某等の資本家が十月十二日とかに內務大臣に會見した記事が謄寫版にして公にせられて居る。其の記事の一節に曰く。

「十月十二日、藤原、昆田、白石、持田各氏ト會見、內相曰、今ヤ普選實施モ近キニ在リ、[illegible]

意見カ議會ニ於テ追々反映セラレ來ルコトトモナラハ、其際新規ニ組合法ノ如キモノヲ提案センカ、到底微溫的ナルモノ、通過覺束ナシ、果シテ然ラハ今ニシテ適當ノ法律ヲ制定シ置カバ、將來改正ノ要求起ルモ、兎ニ角何等カノ法律カ存在セルコトヲ理由トシテ幾分之カ急進化ヲ喰止ムルコト必スシモ不可ナラストセス」

と。此の記事の如くすれば、政府今回殊更に不徹底なる勞働法を提出し置き、普選後の議會に於ける新勢力の要求を拒否する口實となさんとするものである。其用意の周密なる實に感心の外はない。是、又既成政黨が新勢力に對する防禦の一戰術なりとして數ふる事が出來る。

之を要するに、既成政黨は新興無產階級の擡頭を豫感して之に對する戰備を整へつゝあるといふ事も亦、第五十一議會前後に於ける政界の一形勢である。鷄が家鴨の卵と孵したところ、生れた雛がだんだん大きくなつて水の中へ入るのを見て心配したといふ昔譚がある。鷄は既成政黨である。普選は家鴨の卵である。無產政黨は普選より生れる雛であるのだ。此雛を見て心配しつゝある圖が今日の既成政黨である。眞劍か、滑稽か、讀僞す事が當年政府攻擊、政權奪取の唯一の戰略であつたかとである。

五、新領土よりの叫び

今日の政黨の何たるかは以上の記述に依り略ぼ推斷が出來よう。今日の政黨の實は政權奪取の「シンヂケート」に過ぎぬ。政權を握つた上に於て何事をしやうかといふ明白なる考へはない。奪取其事が目的である。口には「國策」などいふ誇大なる言辭を弄する事を好むが、其實彼等には我國家を什麼たる方向に導くべきやのハッキリした目標はない。議會及び政黨に對して此種の批評を下すものは小生ばかりではない。たゞ本篇は冷靜沈着に最近議會の實相を解剖し、之より抽出せらるゝ教訓を指摘しやうといふのであるから、世間一般の議會評を其儘に述するに止めるわけに行かぬ。更に一歩を進め　此批評の因て生ずる事實を正視せねばならぬ。

政黨及び議員が、我國策に如何に無關心であるかを象徴する一事件が起つた。それは新領土よりの參政の叫びに對する彼等の態度である。

統治法たる大正十年法律第三號（前の六三法の後身）を承認し、之を前提として居るのである。同法に依れば台灣に施行すべき法律の中で、內地同樣の法規にて差閊ないものは內地法を以て施行する。たゞ台灣特殊の事情ありて內地法を施行し難き事項については台灣總督をして特別立法を爲し、勅裁を經て之を發布施行するといふことにきまつてゐる。此請願は台灣住民より公選せられたる議員を以て組織する議會を設置し、前記法律後段の事項、即台灣特殊の事情に基き總督が特別立法を爲さんとする際に之を參與するの權限を與へられん事を求むるものである。

臺灣、朝鮮等の新領土の統治法を如何に定むべきやは人、各々見る所があらう。此請願の主旨通りに施行すべきや否やについては各人所見を異にするであらう。然し乍ら、日本の政治家として此問題につき何等の意見を定むる事が出來ないといふのでは誠に申譯がないではないか。而も此請願が議會に提出せらるゝこと前後七回、本文執筆日の（三月八日）迄は議會は何等決するところがない。採擇することも出來ねば、却下する事も出來ぬ。請願委員會は時々之を日程に上せるが、其度毎に審議を延期しつゝある。昨年來のやり方は、委員の一人をして臺灣[illegible]しやうと發議せしめる。之を政府に照會すれば臺灣[illegible]の政府委員は本日[illegible]答へる。「初より斯く答へる事となつて居る」とも傳へられて居る。そこで今日は審議を延期しやうといふ事で日を送つて居るのである。元來、本問題は帝國の領土の統治法を如何なる主義に依るべきか（內地延長主義を固持すべきか、自治主義を加味すべきか）の根本問題である。議院が政府の意見を聞き、之を迎合して態度を決すべき問題ではない。各黨、各派は此問題に對し一定の見解なければならぬ筈のものである。又もし政府の所見を一應聽き置くにしても、これは中央政府の首腦の所見を徵すべき筋のものである。臺灣より上つて來た事務官に聞き糺すべき性質のものではない。請願委員會は此問題の性質さへも明白に了解して居らぬ。況んや之に處するの意見とては無いものと認められるは當然である。彼等は口を開けば「東洋政策」といひ、或は「世界に於ける日本民族の使命」などと大した事を言ふけれども、いざ實際の問題となれば、其空疎なるには驚かざるを得ぬ。何々村に三等郵便局を置け、何々山を國立公園にしろといふばかりが我國策でもあるまいに。

國民參政の要求は世界の大勢である。內地に於て普選を要求するの道理があらば新領土の同胞も亦特殊立法に參加を求むは當然にきた當然ではないか。固より其組織、程度には

負ぬべきものゝ殘つて居ることは勿論であるが、參政の要求自體に反對すべき理由はない。世界に植民地と稱せらるゝものは數多いが文明國の植民地中公選議事機關を有せざるものが何處に在るか。日本も國際聯盟に加入して居る。其規約中に植民地統治精神を明約したるものがある。曰く「近代世界の激甚なる生存競爭の下に、まだ自立し得ざる人民の居住するものに對し、該人民の福祉及び發達を計るは文明の神聖なる任務である」と。搾取と利用ばかりが植民統治精神ではないのである。

既成政黨に新領土參政の用意がつかぬとあらば亦やむを得ぬ。此問題の解決も亦、來るべき新政黨に待たねばならぬ。斯くて、新舊兩政治思想の鬪爭の原野は徐々擴大して行く。

六、議院制度の欠陷

今期議會の一特色であつた、醜行摘發事件につき、一部の世論は其苛烈なるを咎むるの趣があつた。この世論には小生は贊同の出來ない點がある。斯の如き世論の因て生ずる心理作用は、議會の神聖なるべきことや、政爭の正々堂々なるべきことの意識より發して居る。議會の神聖、政爭の公明については小生に於ても異議はないが、不神聖、不公明の「事實」が存在する場合に遠慮會釋なく之を調査究明し、以て責任の所在を明白にする所に議會の神聖、政治の公明があるではないか、のに蓋をして置くこと、友人の身の上ぢや見て見ぬ風をし言ふ事により議會の神聖は保たれる譯には行かぬ。小生は新政團の既成政黨打破の第一戰術は彼等の政治的罪惡を國民の前に摘發し、既成政黨の組織には必ず此種の罪惡の伴ふべき所以を明白にし、以て國民の覺醒を促すに在りとさへ考へて居る。誰であつたか、既成政黨を齲齒に譬へた。互に咬みあつて互に壞れると、此齲齒をして更に新政黨なる小石を咬ましめよ。小石は傷かずして齲齒のみ壞れるであらう。

小生は摘發は贊成だ。たゞここに一つ物足らぬものがある。それは議院法に依る議院の權能の制限である。議院法第七十三條には「各議院ハ審査ノ爲ニ人民ヲ召喚シ及議員ヲ派出スルコトヲ得ス」とある。同法第七十五條には「各議院ハ國務大臣及政府委員ノ外他ノ官廳及地方議會ニ向テ照會往復スルコトヲ得ス」とある。此制限の爲めに查問委員會は要領を得ずして終るの感が甚だ多い。法律の審議、豫算の審査につき一々證人喚問を爲しては其弊を生ずる事は想像に難くない。然し乍ら、特定事案に付き查問を目的とする場合に其資料を得る爲めに人を喚ぶ事も出來ねば議員を派する事も出來ぬでは、其目的を遂げる事の出來ないのは勿論である。此制度は摘發者にも不利なれ

ば、被疑者にも不利である。特定人物、特定事件の糺問といふ事が出來ない制度ならば休む、苟も之を許す以上は少くとも此手段に限り、議院の調査機能を承認する立法に改めねばならぬ。外國憲法には彈劾制度（インピーチメント）なるものがある。政事上の事犯につき下院の彈劾摘發に依り上院之を審判する。今回の軍部高官が巨額の基金を私に銀行預金とせり、公債に投資せりといふが如き、又某黨首領が勅選や男爵を豫約して、某富豪に巨額の出金を爲さしめたりと云ふが如き、實に國家の基礎に動搖を生ぜしむる重大事件である。之が議場討論の目的となつた以上は其眞想を究明する方法がなければならぬ。之を究明する事は國家の爲めに必要なる事は勿論、亦同時に被疑者にも其潔白を證明する機會を與ふる事となるのである。外國の彈劾制度は恐らくは斯の如き場合に運用せらるゝものであらう。我議院に此手段方法なきは重大なる欠陷である。本來、我國の憲法には議院の權能に關する此種の制限があるのでない。兩院の決議に依り修正し得べき議院法に始めて此種の制限を置いたのである。議院法は明治二十二年二月十一日の發布である。議會の經驗なくして制定せられた法規である。其前文にも「朕樞密顧問ノ諮詢ヲ經テ議院法ヲ裁可シ之ヲ公布セシメ併セテ貴族院及衆議院成立ノ日ヨリ各々本法ニ依リ施行スヘキコトヲ命ス」と在る。爾來、法を施行する事三十七年、[illegible]五十一議會[illegible]陥あらば、之が改正を爲すべき時期に到達して居るので[illegible]か。固より事物には長所の存する所亦短所をも包藏する[illegible]う。多少の亂用も想像せられぬではない。然し、今日迄、我[illegible]政界に腐敗の風聞横流するに拘らず、其存否につき的確なる[illegible]議を爲すこと能はずして經過し來りたる事は人心に善き影響を與へたとは言へまい。又此審査不能の現制度が不正事件の続發の誘因とならざりし事を何人が保證し得るか。議院法の缺陷補正といふ事も亦吾々が今期議會に於て受けた一教訓である。

今一つ院制の事を說くを許されよ。

今期議會で、吾々院内の者がつくづく考へさせられたのは我國の議會の會期の餘りに短かい事である。これは獨り議院法のみならず憲法にも關係する事である。憲法第四十二條には「帝國議會ハ三箇月ヲ以テ會期トス」と在る。然し乍ら、三箇月の會期では到底今日の我國の重要國務を愼重審議するわけには行かぬ。今期議會に付き例を採れば、彼の一般、特別の兩會計を合して三十億圓の豫算、二十一個の法律より成る稅制改革案、千數百の物品に對する關稅定率の改正、四篇、四百四十ケ條より成る民事訴訟法の改正案、勞働組合法案、勞働爭議調停法案、出版法改正案等政府提出の法案だけでも、なかなか大したもの

[illegible]此外に外交問題も起れば綱紀問題も起る。而して會期は三月といふも、二院制度であるから、他院の審議を豫想して、其半分の時間にて審査せねばならぬ。これで、どうして愼重な審議を遂げられやうか。議事は焦燥の氣を帶び、論者は粗略となる。國家の爲めに甚だしき損失である。これを如何に改革すればよいか。憲法の改正を行ひ、議院の會期制限を解くことが徹底したる意見である事は勿論であるが、憲法は攝政を置くの間は之を變更せずとの明文もあり、又我國の風潮として、憲法改正論は容易に成立しさうにもない。そこで、憲法改正に依らずして此問題を解決する事を考へねばならぬ。それには凡そ二方法が想像せられる。(1)會期の延長を奏請し、若くは毎年臨時議會を開くの形式を以て事實上議院會期の問題を解決するのも一案である。(2)又、總員會合の日數を現在の儘とし、相當の大きなる常設委員を置き、議會閉會中此委員に依り國務を調査、審議せしめ、毎年の本會議には其結果を報告討論するやうにするのも一方法である。今後、逐次政黨制となつて行くならば各派より按分に委員を選出する事に依り此常設委員制度は、本會議と略ぼ同一の目的を達する事が出來やう。墺國では一八六七年に大部なる法律討議に關する特別法なるものを制定した事がある。米國では、外交委員、財政委員移民委員等五十餘の委員が平素國務を審議しつゝある事は人の知る所である。我の府縣參事會といふものはこれとは主意を異にするけれども多少類似の活動を爲しつゝある。現行議院法でも繼續委員の制度なるものが認めてある。其第二十五條に「各議院ハ政府ノ要求ニ依リ、又ハ其同意ヲ經テ議會閉會ノ間委員ヲシテ議ノ審査ヲ繼續セシムルコトヲ得」との明文を存して居る。然し乍ら、議會開會以來、未だ曾て此繼續委員なるものを置いた事がない。其重なる理由は政府が之に同意せぬといふに在つた。從前の政府は所謂官僚政府であつた。議會や、議會の委員なんといふものは可成避けたいといふのが彼等の心理であつたのである。今後官僚政治の習性が消滅するとすれば此制度を復活利用する事に依り國務の進行を圖ることは至極賢明の策ではなからうか。

（一五、三、八）

勞働農民黨の成立を喜ぶ

堀江歸一

一

餘程以前に社會民主黨と云ふ結社が一部の人士に依つて、計畫されたが、結社屆出と共に、禁止の命令の下つたことは、私の記憶に殘つて居り、更に最近政治研究會其他の團體に依つて、發企された無產者政黨も組織間際に臨んで、以前の社會民主黨と同樣の運命に陷ること丶爲つた。是等の結社に幾多の左傾的分子が居り、其政綱も聊か現代の社會若しくは政治經濟組織の根柢に動搖を來す嫌なしとしなかつた、少なくとも官憲は斯の如き考を懷いて、右の處置に出でたものと思はれる。一方に治安誰持法が嚴存し、官憲に之を勵行する意思のある以上は、共產主義を鼓吹したり、私有財產制度の撤廢を急としたりする政治運動の否認さる可きことは、論を俟たざる所である。然しながら一方に我國の現狀に於て、無產者の利害を政治上に代表し、其階級利益を保護することの必要は保守頑迷を事とする一部少數者の外、何人も承認せざる可からざる所であり、殊に普通選擧の實行の目捷に迫つて居る今日に於ては、此必要に應ずる運動の起るのは、當然の勢である。國家の組織なり、社會の秩序なりを破壞する目的を政綱に揭げた政治的結社の許容さる可からざるは勿論であるとしても、尙ほ無產者が團體的勢力の下に現行法の許す範圍内に於て、合法的に行動し、其許されざるものは、法規の改正を待つて、之を實行すると云ふ合理的態度を取り、依つて以つて其屬する階級全體の利益を保護し、發揚することは、何としても勢の避け難き所であると共に、斯る勢を誘導して、其宜しきに就かしめることが社會階級間の衝突を回避し、鬪爭を緩和して、社會の平和を求めるを得る所以と爲る。斯の無產者の運動に對しては、官憲の如き、寧ろ自由寬容の態度を以つて、之に臨まなければならない。要

司法權や、警察權を濫用し、何事にも社會秩序の維持に藉口して、民衆の集團的運動を禁遏するが如き、徒に社會に騷擾を招くに過ぎざるものと考へられたのである。斯る際に多年の運動漸く成果を結び、最近勞働農民黨と云ふ名稱の下に、無產者政黨が孤々の聲を揚げ官憲亦干涉の必要なしとして、何等の束縛を加へず、順調に成長しようとしつゝあることは、時期の宜しきを得た計畫を以つて見る可きものである。

二

私は勞働農民黨の成立を喜ぶ三ッの理由を持つ。第一此政黨が既存勞働組合を根據として居ること、第二政黨の中央委員中に多數の人材の網羅されて居ること、第三綱領の大體に於て穩健であり、我國の時勢に適して居ることは即ち是れである。政黨は如何なる場合に於ても、環境の力に依り、又時勢の支配を受けて、自然に發達す可きものであつて、一夜作りの間に合せ物であるが如きは、許されざる所である。我國の政界に於ては、政黨が或る一人の力に依つて、興つたり、潰れたり、又は黨首の何人であるかを先づ定め、其人に追從阿附する幾十人の議員や、有志者を黨與として、政黨の組織が短時日に行はれたり、更に甚だしきに至つては、黨員多數の團結を維持する必要があると考へられゝば、恰も煙管の雁首を替へるが如くの位置を試みる。現に最近政友會か高橋を斥けて、田中を迎へたことの如き、此一例であつて、恰も今日の政黨員なるものは、一官廳の屬僚が新舊大臣を送迎する位の親しみしか、黨首に對して持たず、黨其ものに籍を置くにしても、自己の野心を充すに便利であるとか、選擧區多年の歷史の然らしめると云ふ情弊に基くものゝ如くである。是等は何れも今日の我國政黨に一貫する精神なく、又尊重する主義なき證據であつて、政黨の離合集散、殆ど常なき所以も、此邊の事情に胚胎するものと思はれる。此點に於て、私は今度の勞働農民黨と既成政黨との間に大なる相違がありはしないかと考へる。勞働農民黨は幾多の勞働團體若しくは小作人組合を基礎として、組織されて居る。而して其團體なり、組合なりの經歷に就ては、新舊の別はあるとしても、何れも勞働者の利益を發揚し、彼等をして資本主義の下に蒙る束縛を脫せしめると云ふ目的を有し、此事に向つて、邁進したことに就て、其間に些の異なる所はないのである。而して從來勞働組合にせよ、小作人組合にせよ、法律上に何等の保護を受けず、寧ろ以前から治安警察法に依つて、又近くは治安維持法に依つて、幾多の壓迫を受け、官憲から理不盡なる束縛を蒙りつゝ、之に堪へて社會的正義の爲めに、健鬪

し、力爭し來つたのである。而して從來無產者の苦惱したるものありし割合に、實際の效果に於て、擧げられる所の少なかつた一原因は議會政治の今日に於て、政權の一角をも勞働者の手に占めるを得なかつた。否政權に對して、全然門外漢であつたことに歸着するのである。果して然らば普選の下に、無產者が政權に近づき得るに至ることは、彼等をして年來充すを得さりし所を充さしめる所以であり、而して彼等は無產者として團結する外に行く可き道を持たず、無產者を代表して、政界に出づる人は從來の議員が自己の利慾の爲めにしたと違つて、無產者の枉屈を除くことを念とし、選擧人亦代表者に此事を託して、監視を怠らないとすれば、無產者の團結なり、勞働農民黨を代表する議員の團體なりが存外鞏固なるを得ることも、大體に於て想像される。多年の忍苦時代に鍜錬された人々が單一の目的に向つて、政治團體の下に活躍し、一身の榮辱とか、成敗とかを眼中に置かず、一意其代表する階級の爲めに、盡碎すると云ふことは、從來の政黨に對して、異彩を放つものと云へる。更に角有產者に對する無產者の對抗、斯くて生ずる無產者の地位向上が、目的を一にした人々の團結の成立に依つて實現されるのは、私が社會的正義確立の見地から、喜ぶ所である。

三

第二、勞働農民黨の中央執行委員として擧げられて居る人々の名前は新聞紙で承知しただけであり、其內には未知の人もあり、面識ある人もあり、又熟知の人もある。而して私の知る限りに就て云へば、是等委員諸氏の純潔であり、熱誠であり、又力の人であることが特に私の目に映ずる一方に、委員の內には知識の點に於ても、我國今日の知識階級の水準點以上に列する人の多く居ることは、私をして新政黨の爲めに力強く感ぜしめる所である。從來我國青年の多數は幾年かの歲月を學校生活に送迎し、一旦學校を卒業すれば、其間に修め得た知識を賣り物同樣にして、社會的地位を獲得するの風であつたし、一方に勞働者は工場勞働の苦痛を滿喫して、生活しつつある間には、勞働者以外に、身を立てる可き道を知らなかつたのである。然るに今や我國青年學徒の內には、必ずしも知識を賣り物にせず、所信を貫徹する爲めには、身を勞働運動に投じて、所謂榮達利慾を眼中に置かない人々の輩出するを見るに至つた一方に、勞働者中にも鋭き向上心の下に、知識を修めて、勞働運動の前線に鬪ふ人を生ずるに至つた。新政黨の中央執行委員は斯る二様の筋道を經た人々の聯合團體とも見る可きものであつて、

是等の人々の所信なり、閲歴なりに對して、敬意を表する。私は幾年か前までは、日本の勞働運動には知識階級に居る者の援助が必要であらうと考へて居つた。又斯る時代も慥にあつたには相違ない。現に私などが時々鈴木文治君や同君一派の人々に依頼されて、勞働組合員の爲めに、講演したり、勞働學校講師の一人と爲つたりしたのは其一例であるが、今や勞働組合にせよ、勞働農民黨にせよ、充分獨り立ちをする知識を黨與の内に持つに至つたのである。而して此事たる、勞働者の向上心の然らしめる所であり、又青年學徒の博愛的精神に依るものであつて、私は我國勞働者を漫罵する資本家に此一事を告げると共に珈琲店這入りや、ダンスに熱中する一部の青年のみを見て、當今の青年の意義衰へたりと云ふ老人連をも啓めるのである。

勞働者の議會代表に就て、少しく英國の事例を參照すると、同國に於ては千八百三十二年から千八百八十五年に至る間數次に亘る選擧法の改正に依つて、選擧權は非常に擴張され、勞働者の議會代表に對する障害次第に除却されたものゝ、勞働者と云ふ一つの新階級の政治的に勃興することに對しては、世間に大なる反對があつた。現に千八百六十七年十月倫敦勞働者協會の大會に於て、勞働者の議會代表に關する決議の公表されるや、時の總理大臣ダービー伯は最も露骨に之に反對し、又ゴッシェン氏の如きも、「或の人が特殊の階級に對すると云ふを以つて、議員に選擧されたならば、政黨の鬪爭に代ふるに、階級の鬪爭を以つてするものである」と云ふ理由を以つて、之に反對した。如何に識者階級の知見の蒙昧なるものであつたかの一班を知るに足るであらう。隨つて千八百六十八年の總選擧や、其後の補缺選擧に於て、勞働側から出た候補者が慘敗したことも、亦當然と見られる。千八百七十四年の總選擧に至つて、始めて勞働者側から、二名の代表者を議員に當選せしめたもの、此萌芽が次第に成長して、五十年の後に、假令ひ期間は短かつたとしても、確實に政權を獲得するに至ることを誰れが當時に於て、豫想したであらうか。其斯の如く爲るを得たのは、要するに一勞働者の政治團體が勞働組合を基礎として、次第に他を網羅して、其大を成すに努めたこと、勞働者自ら智識を啓發し、自家の黨與の内に、眞に國事を託するを得る人物を選出せしめるを得たこと、其政綱政策をして眞に時勢の要求する所に適せしめたこととの諸點に歸着するのであつて、是等の諸點に就ては、我國勞働者の三省を求めざるを得ない。一昨年英國に於て組織された勞働黨内閣の閣員が他政黨の閣員に比較して、人物に於て、識見に於て、遜色を見なかつたことは、中外の公評であつて、而して此事たる、勞働者の政權獲得の必

[illegible]
困難ならしむる事情を明にするものであると云へる

四

然らば今回我國に於て成立した勞働農民黨の綱領若しくは政策に對して、私は如何なる意見を持つか。綱領なり、政策なりを一瞥して、其清新であり、又全體から云つて、我國今日の時務に適して居る、少なくとも既成政黨の其れの如きの成立を喜ばしめる第三の理由と爲るのである。今、綱領政策の一班として、新聞紙上に掲げられて居る所を見るに、綱領には、

一、我國の國情に即し、無産階級の政治的、經濟的及び社會的解放の實現を期す

一、合法的手段に依つて、不公正なる土地、生産分配に關する不公正なる制度の改革を期す

一、特權階級のみの利害を代表する既成政黨を打破し、議會の徹底的改造を期す

とあり、更に政策としては、

政治、一、普通選擧の徹底、二、無産階級運動を抑壓する各種法令の撤廢、三、戰死廢兵、徴兵に依る本人並に家族の困窮に對する國家扶助の實施、四、軍備縮小と兵卒待遇の改

[illegible]
と謂ふ[illegible]

經濟、一、團結權、罷業權、團體契約權の確立、二、耕作權の確定、三、少年婦人の夜間勞働、坑内勞働及危險作業の禁止、四、八時間勞働制の確立、五、工場法、鑛業法、治[illegible]法の改正、六、最低賃金法の制定。

社會 一、女子の公法上及私法上に於ける差別撤廢、二、女子の人身賣買禁止、三、女子教育、職業に關する一切の差別撤廢、四、失業、疾病、養老、災害保險制度の確立、五、冤罪並に不當拘束に對する國家の賠償、六、義務教育、實業補習教育期間に於ける一切の費用國庫支辨、七、居住權の確立等が擧げられて居る。

以上の綱領並に政策に對しては、私は贊成するを惜まない。又右の政策が實行されたならば、我國が社會的に、經濟的に改善されて、餘程立派な國に爲るであらう。能く人の口にする所謂第二維新と云ふことも斯の如くして達成されるのではあるまいかとも考へて居る。隨つて其れ等の實現の早きことは、私の翹望して已まざる所であり、此點に於て勞働農民黨の出現を喜ぶものであるが、然らば勞働農民黨の期する所が右の諸項を以つて、足れりとするかと問はれゝば、私は不幸にして「否

と答へざるを得ないのである。是等の諸項たる、今日聊かなりとも思想の進歩して居る人々の間に於ては、夙に主張され、近時に於ては、寧ろ言ひ古された觀すらなきを得ない。勞働農民黨が今更らの如く是等を綱領とし、政策とするのは、固より既成政黨に對照しては、新を誇るを得るとしても、果して政界革新とか、經濟組織改革とか云ふ標榜に副ふ所以であらうか。私は考へる、勞働農民黨の人々をして所信を披瀝するに、憚る所なからしめたならば、綱領政策は決してあれだけには止まらなかつたであらう、唯官憲の嚴重なる監視を緩和し、又穩健を旨とする人々を糾合する必要から、當らず觸らず、而して多少の新味を發揮する所に綱領政策を置いたのであつて、今後時勢の進歩と共に、幾變遷し或は急劇の變遷を告げる所に勞働農民黨の妙味が存するのではなからうか。

故に私は勞働農民黨の政綱には總て贊成すると共に、其足らざるものゝあることは遺憾とする。政治の項に於て、何故に我國屬領に於ける新附民の地位を改善し、更に進んで殖民地自治制を布くことを掲げなかつたのであるか、何故に軍備縮小の程度を明にしなかつたのであるか、五、六、の兩項に於て、財政に就て、政策を述べながら、租税の問題のみに止め、更に一歩を進めて財政の根本的改革例へば財産徵課、國有財産擴張等に就て方針を示さなかつたのであるか、經濟の項に掲げられたが總て勞働者と小作人との利害に限られ、是等以外の無産者の利害を念に置かなかつたのは何故であるか、金融機關の便益が資本家階級の專斷する所に係り、廣く一般に及ばざること、銀行が銀行一個の利益に制せられて、經濟社會に無用の波瀾を惹起する弊害の著しきことの如き、無産者政黨の力に依らなければ、容易に解決されない問題であるのに拘はらず、共に閑却されて居るのは、私の物足らず感ずる所である。更に社會の項に於て、各種保險制度の確立を主張すると共に、何故に進んで國民養老年金制度の制定に依つて、國民の生存權を確立することを叫ばなかつたのであるか、義務教育實業補習教育に於ける費用の國庫支辨に止まらず、無産者に對して、國費を以つて、大學專門學校の門戸を開放することを主張しなかつたのであらうか。英吉利の勞働黨の如き、勞働組合聯合會の如き、特に決議の穩健を以つて、世間に知られて居るが、其れにしても時勢の進歩と共に、キビ〳〵した所がある。現に千九百十八年一月の英國勞働黨大會に於ては、「勞働と社會の新秩序」と題する新綱領の報告書が提出され、同年六月の大會に於て、可決されたが、其新綱領なるものは、第一、國民的最低賃銀制の一般的勵行、第二、産業の民主的管理、第三、國民財政に於ける革命、第四

公共團體の爲めにする[illegible]と云ふ原則を立てたので、第二の原則に於て、勞働黨は鐵道、鑛山、發電事業等の國有を要求し、第三の原則に於て、資本徴課金制度に依て富の獲得を主張し、第四の原則に於て、生活の一般的標準を超越する總ての剩餘、所得を全然沒收することを提言したのである。斯の如くして勞働黨が他の政黨に比較して、其綱領とする所に如何に相違する所のあるかを明にするに足りる。私は決して我國の勞働農民黨をして外國勞働黨の爲す所を遂はしめようとするものではない。前者が其綱領に於て、特に「我國の國情に即し」と云つたのは、私の認めて可なりとする所であるが、尙ほ之に次ぐ綱領の一として「合法的手段に依り、土地、生産、分配に關する不公正なる制度の改善を期す」と揭げながら、何故に國有並に公有の制度を實行して、私有財産制度の無節制なる運用を掣肘し、以つて如上の目的を達することを明にしなかつたのであるか。私有財産制度の撤廢と其運用に於ける制限とは全然別問題であつて、現行社會組織の下に於ても、制限の加へらるゝもの少なしとしない。賠償付の國有公有制度の如き、今後大に我國に行はれ可きものであつて、此點に於て吾人の勞働農民黨に期待する所大ならざるを得ない。此政黨にして既に早くも一個の無産者政黨と云ふ飾を打つて、名乘りを上げるからには、今少[illegible]

五

最後に私事に渉るやうであるが、勞働農民黨と私との關係に就て、二三の新聞に誤報が傳へられたから、此機會に於て、一言事實を明にしたい。勞働農民黨の組織に際して、私は關係者から特別委員として、加入することの勸誘を受けたに相違ない。私は從來勞働問題に就て、自分の研究した所若しくは考へた所を隨分多く世間に發表し、勞働者の間に相當の讀者を得て居つたことは紛れもない事實であり、今回の如く勞働者の政黨組織の具體化した以上は、之に參加して、微力を致すのが自分の責任であるやうにも考へられた。然し私は遺憾ながら三個の理由で、右の勸誘を拒絶したのである。

第一、私は近年不治の病氣に罹り、攝生を心掛けては居るが、何時其れが禍して命を奪はれるかも知れない。其處で私は讀書人たる面目上、生命のある間に、自分の研究した所を一通り纒めて置かう、遺稿などで知人に迷惑をかけたくないと考へ、最近兩三年與に筆硯に親んで居る。「英國現代の經濟」「國際經濟總論」「貨幣、銀行、外國爲替」等は何れも右の産物であつて、尙ほ他に二三の著作をする腹案を持つて、

る。政治運動に釣込まれて此計畫を挫折されるのは、私の忍び難い所である。

第二、私にして三十臺の壯年であれば、政治運動も一の經驗と云ふ考へで、參加もするが、五十一歳の今日では、到底野次馬騷ぎに加はる客氣は持たない。

第三、無產者政黨運動に參加するからには、私は自分の所有する一切の財產權を放棄し、素ツ裸に爲つて、同志と事を共にするが、正直の所、家族に多くの係累があつて、私をして之を斷行するに至らしめない、多少の財產を所有して、其れから收入を獲得し、其財產は資本主義を働かす手傳いをして居りながら、他の一面に於て無產者政黨に加入した所で、其運動に眞劍味なく、無產者に取つては、却つて獅子身中の蟲と爲るかも知れない。其れよりも姑く身を局外に置き、局外者として出來るだけの援助をした方が自他の爲めに得策ではなからうと考へる。

右は私を訪問された勞働組合の方に對して、私が突嗟の間に申述べた所であるが、私としては決して偶然の思ひ付きではない、他日斯る實際問題に遭遇した場合に、私の取る可き態度の斯くある可きことは、豫てから期して居つた所であつて、思ふに勞働組合の方も私の所思を諒解されたことゝ考へる。然し私は一個の學究であり、又現に學校の教しては、親から學資を給與されて居る其子を教へて居るが、將一本で世間の荒波と戰ひつゝある勞働者にして、若し私の教を受けたいと云ふ人があれば、其人に教へるのと、學生に教へるのと、教へる所に何の變りもない、私で役に立つたならば、勞働者教育の爲めに、應分の努力を致し、此方面から我國の勞働運動若しくは勞働者の政治的發展を助けたいと思ふのである。

私が局外に居つて、微力ながらも勞働者の政治的代表に對して、幾分の援助をし、其眞直なる發達を期待する一の理由は既成政黨の醜狀陋態に愛憎を盡し、彼等を以つて我國の政治を託するに足らずと考へるからである。政黨の腐敗殊に其金權者流との結託は今日に始まつたものではないが、近年に於て其弊の甚だしきを見るのである。我國の過激論者中に議會政治其ものゝ無能無效を論ずる者もあるやに聞くが、斯る議論を生ずるに至らしめたのも、畢竟既成政黨の腐敗墮落の然らしめるものである。殊に昨今に至つて既成政黨の醜聞に對して、吾人をして耳を掩はしめる者は、金錢に關する不正事件であつて、或は田中政友會總裁が神戶の成金某をして三百萬圓の資金を或る條件の下に、醵出せしめたとか、シベリヤ出征費の一部を私したとか云ふ事件が起れば、或は松島遊廓事件に憲政派の領袖が關

[illegible]

[illegible]件の頻發に忙はしき狀態である。斯る事件は起らないでも、既成政黨の財源問題は年來の謎であつて、黨首として勢を張るには私財を費消するか、然らずんば惡錢を稼ぎ出すか、二途の一を擇ばなければならなかつたのである。尾崎行雄氏が政黨は其收支會計を公表す可きものであると云ふ議論は議論としては申分なき立派なものである。苟も黨員から黨費を醵出させ、世間の有志をして廣く資金を寄付させる政黨の立場としては、會計の公表は其世間に對して爲す可き義務の一つであるが、既成政黨として之に堪へるものは、殆どあるまい。此時に當つて、金權に緣故を持たざる無產者政黨の起つたことは、我國政界に一服の清涼劑を投ずるものである。如何にして黨費を調達するかは、無產政黨としては、困難なる問題には相違ないが、飽くまでも公開を主張として、一點の祕する所なく、公明正大を以て終始する一方に、冗費を要する我國政界の惡風を一掃する覺悟を持して貰いたい。英國の勞働黨が總選擧や補缺選擧に臨んで、黨員や、世間公衆に寄附金を仰ぎ、其金額と人名とが黨の機關新聞雜誌に掲載されて居るのを見受けるが、近年の如く勞働黨其ものに對する同情の盛なるに隨ひ、隨時に同情者のあることが認められる。我國の勞働農民黨の前途には多く

[illegible]

[illegible]き選擧民から[illegible]を得す。[illegible]との如き、今日に於て既に想像される所であり、更に[illegible]展した場合に、工業勞働者と農民と常に調和して、一の傘下に居ることを許されるかどうかも、一個の條件と爲り、將來を豫測するを得ない。唯當事者の熱心と誠實とが能く事に臨んで斯る難關を打開して、彼岸に一道の光明の認め得るであらうと云ふの外、今日は他に云ふ可き所を知らない。私は何處までも此政黨の統制ある行動を望んで已まない。差當り此次に行はれる總選擧こそ勞働農民黨に取つては、其力を施す可き試金石である。私は只管黨員諸氏の奮勵に大なる希望を繋ぐものである。

學費低廉の方策と學生の生活態度批判

近時各學生の學費増加の勢を示し、學生の奢侈漸く加はらんとす。之が對策を講ずるの必要あるを信じ、左の三項目に就いて諸家の御意見を伺ひその御回答を得ました。

一、學生の學費を如何にして低廉ならしむるか

二、現下學生、生活態度の缺陷に對する意見

三、現時の學生に對する希望及び忠言

○ 阿部次郎

一、別に名案もありません、私の知つてゐる一京都大學生は月五十圓（授業料及臨時費を除く）でやつてゐます。それぐらいでやつて行く途もあるでせう、それ以上使ふ癖がつくと卒業して自活するときにすぐに困るでせうから、親の注意でこれぐらいの生活程度に馴れさして置く必要があるかと思ひます。

二、あまり就職とパンとの問題に脅かされすぎて、世智辛く利己的に打算的に、根性が卑しくなりすぎてゐるといふ遺憾を多數の學生について

す、生活を最少限度にせりつめる

さへ持つてゐれば、現在の世の中でももつと自分のいいと思ふことをして濶歩することが出來る筈だと思ひます。

三、精神的の氣位を高くしてほしい。

○ 堀江歸一

一、1、學校を郊外に移し、學生を寄宿舍に收容し、共寄宿舍は學生々活を純潔簡素ならしめる理解の下に、有志者の寄附金に依つて設立し、舍費の低廉を謀ること

2、學生の自發に依つて、生活を簡素にすること

二、1、物質的文明に對する憧憬

2、目前の安樂のみを欲求する

3、自主的研學の態度に乏し

三、1、生活を質實にし、都會の誘惑を排すること、

2、自主的に、研學すること、

○ 北澤新次郎

一、私は[illegible]に學生の[illegible]授業料及教科書等に國家が支辨すべきものであると考へます。學生が學校に通ふ間所謂下宿屋に居る事は唯に不經濟であるばかりでなく、精神上頗る惡いと考へます。私は之れは寄宿の理想的のものを建て實費で學生を置くとする事が學費を大分低廉に致す事が出來ると信じます。

二、現在の學生は現今の學校教育の精神並びに制度が誤つて居る爲め、必然的に學生の心持ちが學校に行くのは單に特定の期間在學し、なるべく容易な試驗を受け、早く免狀でも貰つて就職せんとする氣持になり易い。之れを根本的に改める必要があります。

三、現時の學生は十數年前の學生に比するに餘程利巧になつて居りますが、何んだか少し先輩に對する敬義の觀念が不足の樣に思ひます。私共も其れに關しては常に心掛けて居りますが、たとへ思想や其他の事に關して多少不服の事があつても、先輩は矢張り先輩とし

一、[illegible]へます。

○　小野清一郎

一、寄宿舍の設備を擴張し、同時に日用品及び學用品の供給に關して組合的施設を試みては如何であらうか。同時に學生各自の自制に俟たねばならぬことと勿論である。

二、深き洞察と體驗とに基かずして、流行の思想及び運動に追隨せんとするものがある。私は何よりもそのヂレツタンチズムを排斥するものである。

三、人類の永遠なる文化的使命を自覺し、各自の性能及び境遇に應じて社會に貢献すべく、まづ徐ろに各自の學業を勵むべきであると思ふ。

○　千葉[illegible]雄

一、學校で消費組合樣の組織をつくつて用品を低廉に賣り捌き、次に、學校で費用補助程度で、低廉な、同時に「愉快な」寄宿舍を作る。（止む得ずんば低

[illegible]學校に[illegible]を送らせぬやうな組織にして置いたらよいと思ひます

二、△富豪子弟の享樂生活の刹那的なのと、苦學生的學生生活の悲慘が、極端との對立であります。まして一級、科を抱合する友愛的奉仕親和の觀念が薄くなり、ひどく個人的になつて來ては居ませんか。

△警察の戀愛的犯罪事項その他に、「女學生」の肩書が少なくなり、反對に男學生が、犯罪史のブラック・リストの頁を多く染めつゝある現象は何故か。注目すべきです。

△學校に一切の學生の責任を負せるやり方には大反對ですが、それにしても、私立大學が、帳面づらだけの學生に對して、も少し責任と親切をもつて欲しいと思ひます。

三、△雜誌その他の刊行物または社會の現象に對して、批評的立場から見てほしいと思ひます、次に學術の爲の學

でなく、現實にそれを關係した研究であつてほしいと思ひます。

△讀書や研究を、學校で區ぎらず、一生の修養としたいと思ひます、隨つて卒業證書の爲に勉強する態度を捨てたいと思ひます。

△飲酒を禁じてほしいと思ひます。

○　野村兼太郎

三つの箇條はそれぞれ相關係してゐると思ふから一緒にお答へします。一般學生の生活費が多くかゝるやうになつたのは事實ですが、其中には本當の意味の學費でないのが澤山あるやうに見えます。そして一般生活費に就いて單に學生のみを責めるのは無理のやうに思ひます。社會一般の風潮の反映が學生に現れてゐるので、將に學生に於いて目立つのは學生の大部分が親がゝりであり、近頃の不景

ての從來の考へ方も又是を助けてゐる。私として希望することは生活とか成績とか云ふことを餘り顧慮せずに、もつと學問そのものに熱心であることです。學生が社會生活に對し鋭敏で又怜悧過ぎるやうです。若し學問に熱心であればそのために費す眞の學費等と云ふものは少ないものです。所謂澤山かゝると云ふのは學費でないものが澤山あるからでせう。

○　下田次郎

一、學校内に購買組合（成るべくはチェーン、ストーアとし、大規模とする方一層有利）を設け、識見あり經驗ある經營者の下に、學資に乏しき學生をしてその仕事に當らしめること。

殆んとすべての學生は書籍、文房具、下宿料等については、無自覺で代價を支拂つて居る。これを常に合理ならし

を營んで居ない。學生の生活の如きも一時の間に合せ的のものである。一層リファインされた、カルチューアのある態度が學生間に漸次醸成されることを望む。社會には贅澤な人もあるが、その贅澤が成つて居ない。沐猴の冠せる如きものが多いのは、畢竟眞のカルチューアのない爲である。

三、國家、世界を目標として勉強することにもしたい。身體を練り、旺盛の元氣を養ひ、氣力を以て自己純潔の生活を營むこと。

○　帆足理一郎

一、學校にて指定下宿屋（素人屋も含む）を決定し、下宿料を低下させることも一の方法。フラタンチイ式の寄宿舍を郷土關係などによつて多數設置させ、其經營の下に[illegible]

二、學生においては（一般青年に）、權利の主張のみ徒に盛んで、義務責任の觀念が薄弱であるやうに思はれる。殊に金錢關係など關する自己の責務を怠り勝ちな傾向が見える。學生の奢侈、學費の增額も經濟關係における責任感念の薄弱に起因するものが多い。

三、個性人格たる主なる内容は獨立の判斷と意志の自由である。意志の自由は責任の遂行と同樣だ。責任を回避せんとするものは、自己の行爲を運命や、自然や、宿命や、境遇や、遺傳本能の如き非人格なものに歸する。即ち自己の自己意志によつてその行爲を行つたものではなく、それから非人格的な事情に引きづられて行爲したのであるから、責任はないと辯解する。吾等は責任を負ふ範圍内においてのみ意志が自由であり、從つてそれだけ自己の人格を確立する。學生諸君が彼等の人格觀念をかうした見地の上に築くことを希望する。

○ **小泉信三**

一、學校を大都市から二三時間里程の地に移して、學校を中心とする小都市を建設するのが根本策である。此點に於て商大移轉の成績は注目を要する。それが出來なければ差當り、寄宿舍を增設擴張して、學生に質素愉快なる生活を營ませる工風をするが好い（質素といふ事許り考へて愉快といふ事を忘れては駄目だ）。寄宿舍は大建築のものと、小建築の家族風のものと兩方試みるが好い。同時に學資に乏しい人の爲、所謂大學教育を受けないで、直ちに實務に就くの風を奬勵することが必要である。而して斯る境遇にゐて猶ほ學問を好む人々の爲めに成人教育の施設に心を用ゐ、短い時間で實質のある教育を授ける工風をしなければならぬ。此方面にはまだ改善の余地がいくらもありさうだ。同時に、官衙銀行會社でも、大學教育を受けたものと受けぬ者との待遇差別を少くも今より少なくしたい。[illegible]これた程度までは[illegible]にはなれようとしてゐると聞く。無論さうであるべき事である。

二、色々と欠陷もあるだらうが、左程心配するにも及ぶまい。自分達の學生時代に考へた事行なつた事を回想すれば、誰だつて冷汗の出ることがあるだらう。併し其時先輩から訓戒をきかされても、恐らく尤もとは感じなかつたらうと思はれる。年を取れば自然に分ることである。又先輩の中には、自分に運動競技の嗜みがないものだから無暗に選手を非難したり、自分が音樂の面白味を感じないものだから、音樂部員を墮落生扱ひにしかねなかつたりするのがよくあるが、此種の小言が嫉妬反感から出てゐることは、直ぐ學生に分るから、いくら言つても利き目はない。

三、健康と物事に屈托せぬ元氣とを[illegible]ことを第一に希望する。

○ **錦田義**[illegible]

一、理想案は別とし、決意すれば直ちに實現可能な現實方策としては

(甲)學用品被服等の消費組合を造ること。一つの學校でも、相當數の學生が居れば獨立の組合を造り得るでせう。

(乙)氣の合つた學生同志相語つて自治的寄宿寮をつくること。

三、中學入學の時から大學入學迄激しい競爭試驗に不斷に脅かされて居る現狀では、凡て勉強が學問が他律的に功利的になり勝ちです。多くの實際家達の勸告にも拘らず私は矢張り純なる心持で學を樂む藝に遊ぶと云ふ風な心境を尊いものに思ひます。

○　吉野作造

一、イ　寄宿舍の設立

ロ　消費組合の設立

右の二方法に依て學費の三分の一は優に節約し得ると思ひます。但しその遣り方は大に問題です。學生の自覺は無論いけず、生中の監督も駄目。とにかく大に愼重に考究するを要します。私には別に考もありますが、今詳述するの遑はありません。

二、自分の學生時代の經驗から推して現時の學生を評するわけには參りますまいが、學生達の親切な友達たらんことを心掛けて居る私共の、現時の學生に對しての大なる不滿は、彼等が更に私達を利用しないことです。否、利用はしますが、私共の最も不得手な方面(例へば就職、學資補助の如き)に利用しやうとするものが徒らに多く、研學上修養上の方面では私共と全然沒交涉であることです。學生の生活がモ少し私共の生活と有機的關係に在つたら自他共に利益する所が多からうと思ひます。

三、何よりも第一に現時の學生に對して希望したきは、眞理に對する從順な態度です。眞理を求めて之を我が主張とし我が主義とせんとする熱情はなかなか旺です。併し一旦何物かを眞理と思ひ込んだが最後、彼等は直に盲目となるのが常です。故に外により正しいものがあると敎ふるものがあつても之に耳を傾けません。學生は眞理探究の態度は多情でなくてはなりません。或る意味に於ては無節操でなくてはなりません。無節操と云ては誤解を招くかも知れませんが、常により正しからんとして何時でも態度を改め得る樣に用意してゐなくてはなりません。斯は何人にも必要なことですが、殊に修養を事一とする學生にこの態度は最も必要とします。早くから操持の確立するなんといふことは一見偉らさうですが、斯んなのが所謂小さく出來上つた人物となるのです。此點に於て現時の學生の多くが皆偉くなり方が早過ぎると思ひます。モ少し氣長くのんびりと自らを自由に養へないものでせうか。

（大正十五年度）

現代思想評論家總覽

改造編輯局編纂

（イロハ順）

編纂に就て

□本欄の編纂は、學位氏名及雅號、生地、生年月、學歴、閲歴及外國留學地、專攻科目及主張、著書及最近發表論文、現在職業、現住所等を調査編纂したものである。

□思想家、評論家と云ふ範圍を多數の學者、思想家、文藝家、及操觚者の中から定めることは、頗る難事なので、大體に於て最近發表の著作及評論を標準とし、更に社會評論に比較的緣由の多い人々だけを揭出することにした。そして時日がなかつたので調査洩れの人も少くない

（記者）

石川三四郎

明治九年五月二十三日埼玉縣兒玉郡川村字山王堂生る哲學館及び中央大學の前身法學院に學ぶ。爾來社會主義運動に投じ數回投獄さる。大正二年三月一日秘かに日本を脫走し白國、英國、佛國、河洲モロッコ國等に漂浪す。九年十一月漂然歸國す「哲人カアペンター、」「西洋社會運動史、」「古事記神話の新研究、」「超進化の人生」の著書あり（市外瀧野川中里三九三）

石原純　理學博士

明治十四年一月十五日東京本鄕に生る明治三十九年東京帝國大學理科卒業、同四十四年より大正十年迄東北帝國大學助敎授及敎授在職明治四十五年三月より二年間獨、瑞西、英國に留學專攻科目理論物理學著述書名は「アインスタイン全集」を譯述す相對性原理、物理學の基礎的諸問題、人間相愛、戀愛價値論、歌集靉日等（千葉縣

國英國に留學。十二年歸朝。東京帝大助敎授。十三年東北帝大敎授。專攻科目哲學史著述書名シュライエルマッヘル「宗敎論」、宗敎哲學。但し以上二著共に絕版。（仙臺）

出隆

明治二十五年三月十日岡山縣津山町に生る六高、東大哲學科卒業。オクスフォード大學に留學、東京帝大助敎授專攻科目希臘哲學著書「哲學以前」「神の思ひ」（相州逗子）

出井盛之

明治二十五年七月廿八日栃木縣安蘇郡葛生町に生る大正五年早稻田大學政治經濟科卒業、大正六年米國市俄古大學に留學、大正九年歸朝引き續き母校に敎鞭を執る。專攻科目經濟學、工業經濟問題「行動經濟學の立場より。」「近代經濟組織と學說。」「足袋の話。」の著書あり（市外上戶塚八四一）

生田弘治　長江

等あり（牛込、榎町五〇一）

猪俣津南雄

明治二十二年四月二十二日長岡市に生る早稻田大學卒業後米國ウイスコンシン大學、シカゴ大學、コロンビア大學に留學。共產黨事件に連坐して早大講師を罷め現在著述に從事す專攻科目經濟學「金融資本論」。「特權階級論」「新思想の普遍化」。の著書あり（東京市外新宿京王線笹塚一、一五二）

石濱知行

明治廿八年三月廿六日淡路島洲本町に生る東大卒業、歐洲二ケ年間留學。大正十四年歸朝、九州大學敎授、社會思想同人、專攻科目經濟史、（福岡市土手町一九）

蠟山政道

明治廿八年新潟縣に生る。大正九年東京法科大學卒業、東大法學部助敎授（目下歐洲

[illegible]著集」「モウパッサン傑作集」「戰爭と平和」等の翻譯の外「のもり草」「逍遥」「近代文藝の解剖」「最近社會的文藝」等の著書の外小說及評論多し殊に社會ゞ藝の造詣深し、故馬場辰猪の舍弟なり、明治三十九年以降慶應義塾大學部教授（牛込區水道端二ノ十八）

馬場恒吾

明治八年七月十八日、岡山縣佐久郡長濱村に生る同志社早稻田專門學校等に在學した後ジャパンタイムスに勤むる事十年、經育で雜誌記者たる事四年國民新聞記者たる事十年、現在著述に從業す「改造の叫び」「勞働問題と普通選擧」「キップリング短篇小說」等の著書あり（東京四谷區南寺町十）

林癸未夫

明治十六年九月十七日、岡山縣高梁町に生る、早稻田大學教授、圖書館長たり專攻科目、社會政策、工業經濟學、「產業民主主義運動」「國際勞働運動史」「社會と宗教と藝術」の著書あり（代々幡町幡ケ谷二一〇）

波多野鼎

明治二十九年三月愛知縣東春日井郡[illegible]村に生る大正九年、東大法科卒業後東京[illegible]支社、東亞經濟調査局に勤務、現在同志社大學に教授たり專攻科目社會問題、社會學、著書「社會思想史」（京都市岡崎東天王町九八番地）

長谷川萬次郎　如是閑

明治八年十一月東京市深川區に生る明治卅一年東京法學院（中央大學）を卒業、日本新聞、日本及日本人記者たりし後大阪朝日新聞に入り幹部たり、大正七年退社後大山郁夫櫛田民藏氏等と「我等」を創刊し今日に至る、「額の男」「倫教」「現代國家批判」「眞實は斯く佯ふ」「現代社會批判」「犬猫人間」等の著書の外多くの評論を公にす。（東京府下中野九三七）

波多野精一　文學博士

一八七七年七月長野縣松本市に生る、一八九三年第一高等學校に入學。一八九九年。東京帝國大學文學科哲學科卒業の後一九〇四年より六年迄獨逸國に留學す、一九〇〇[illegible]しな、一九一七[illegible]、[illegible]大學[illegible]となり現在に至る、哲學を專攻し「西洋哲學史要」「基督教の起源」「スピノイ研究」「宗教哲學の本質及根本問題」等の著あり、京都帝國大學教授（京都市上京區田中西大路町八十番地）

西田幾多郞　文學博士

明治三年八月十日石川縣河北郡宇ノ氣村に生る、石川縣專門學校附屬初等中學に入る第四高等中學校に移る中途退學明治廿七年東京文科大學哲學選科卒業の上、能登七尾中學、山口高等學校、第四高等學校、學習院等に教授たりしことあり、「善の研究」「思索と體驗」「自覺に於ける直觀と反省」「意識の問題」「現代に於ける理想主義の哲學」「藝術と道德」等の著あり、京大文學部教授（京都市上京區田中上柳町二九）

新居格

明治廿一年三月九日德島縣板野郡大幸村に生る、大正四年東大政治科卒業、曾つて讀賣新聞、大阪每日、東京朝日新聞記者をなしたることあり、目下著述に從事す（牛込區

南榎町五拾七番地）

錦田義富

明治十七年一月一日島根縣簸川郡田西村伴川に生る京大哲學科卒業獨、佛、英、米に留學。歸朝後東北帝國大學に教授たり專攻科目倫理學（仙臺市日本杉通一）

堀江歸一　法學博士

明治九年四月二十七日東京府荏原郡白金村（現今の白金三光町）に生る明治三十年一月慶應義塾大學部理財科卒業、爾後新聞記者に爲り三十五年七月同大學教授たり、明治三十六年九月より明治三十八年五月まで英國、米國、獨逸に留學しハーヴアード大學、倫敦政治經濟學校に在籍、同四十二年四月より四十三年三月まで再度遊學、財政金融に關する事項を專攻す、貨幣論、銀行論、財政學、英國現代の經濟、世界の經濟は如何に動くか等「貨幣・銀行・外國爲替」

町大字武藏に生る中央大學の前身法學院に學び後渡米南加州大學及びシカゴ大學を卒業。歸朝早稻田大學教授たり專攻科目は宗教哲學、英文學、著述「宗教と人生」。「哲學と人生」。哲學概論。教育哲學概論。人生詩人ブラウニヘグ。精神生活の基調。聖き愛の世界へ。人間苦と人生の價値。宗教哲學概論等の著書あり（東京市外下戸塚五二〇）

穗積重遠　法學博士

明治十六年四月東京市に生る、東京高等師範學校附屬中學校及び第一高等學校を經て明治四十一年七月東京帝國大學法科大學獨法科卒業、大正元年十月より五年二月迄獨「ボン」及び「ベルリン」佛（パリ）英（ロンドン）、米（ケンブリッヂ）留學、民法殊に親族法相續法及び法理學を專修す。「戰爭と契約」「法理學大綱」親族法大意」の著の外、專門的見地よりせる多くの社會評論あり、「裁判の簡易化」「ロシア革命と婚姻法」「離

學を卒業す、大正十年歐洲留學十一年十一月歸朝、京都大學經濟學部教授に任ぜらる「日本社會史」「經濟史研究」「經濟史考」「近世農村問題史論」の著あり京都帝國大學經濟學部教授（京都市吉田中大小路二〇）

本間久雄

明治十九年十月十一日山形縣米澤市越後番匠町に生る、四十二年早稻田大學英文科卒業「最近の思潮及文學」「生活の藝術化」「社會改造の八大思想家」（生田長江氏と合著）「エレンケイ思想の眞髓」「近代文學の研究」「新文學概論」「尾崎紅葉」「現代婦人問題等」の著書あり、早稻田大學講師（小石川雜司ケ谷一四四）

朝永三十郎　文學博士

明治四年二月長崎縣東彼杵郡川棚村に生る長崎縣玖島學館中學校、東京英語學校、第一高等中學校を經て、帝國大學文科大學に

吉野作造 法學

宮城縣仙臺に生る。東京帝國大學卒業後歐洲に留學し帝大教授として社會評論と政治論とを公にせしも、十三年大學を辭し、東京朝日新聞社に入社す、後辭して現に東大講師たり（本鄕駒込神明町三二七番地）

て獨逸、ミュヘン大

社會問題を專攻、「社會統計學史研究

（四論文集）」の著書あり（兵庫縣武庫郡住吉村花田一四〇五）

教授 社會

旨」等多くの評論あり、東京市學務局長、(本鄕區駒込千駄木五二、電話小石川四六七番)

大山郁夫

兵庫縣飾磨に生る、明治卅八年早稻田大學政治經濟科卒業の上、引續き同校に教師となり、留學生として英國に四ケ年滯在、歸朝後同校に教授たりしが、大正六年辭職後大阪朝日新聞に入社言論記者たり、大正七年之を辭し長谷川如是閑櫛田民藏氏等と雜誌「我等」ニ同人、「民衆文化」「社會教育」「政治の社會的基礎」「民族と階級」「現代日本の政治過程」の著外社會評論時事評論等頗る多し、早稻田大學教授(府下戶塚町上の森六九一番地)

渡邊鐵藏 法學博士

東京市帝國大學法科卒業引續きて同校に教授たり、近時社會問題としての都市問題に關して研究を發表し、都市改善の爲め都市研究會を起して宣傳と研究に力む、其他思想問題に關する評論多[illegible]

和辻哲郎

明治二十二年三月一日兵庫縣神崎郡仁豐村に生る、明治四十五年東大哲學科卒業、その前後一寸文壇に顏を出す。次でニイチエ、キエルケゴオル等の詩人哲學者を耽讀。次で佛教美術が面白くなり、從つて日本の文化に興味を感じ始める。その興味が日本思想史に集中されてくる。佛教思想の理解の必要を感ずる。目下その研究中。京都帝國大學助教授、專攻科目哲學及哲學史。日本倫理思想史、佛教倫理思想史等。著書「ニイチエ研究」「ゼーレン・キエルケゴオル」「偶像再興」「古寺巡禮」「日本古代文化。あり(京都市鹿ケ谷寺ノ前町廿二)

河西太一郎

明治廿八年三月十八日生。大正九年東京帝國大學卒業。研究科目は農政學、立教大學教授、「農業の社會化」「社會主義と農業問題」「農業問題研究」等の譯著あり。(市外杉

たる後、日本に於て、キングスレーホールを設立したる事あり、其間熱烈なる勞働運動、社會主義運動を試みたるが、政府の壓迫酷烈の爲め遂に米國に逃る、東洋經濟新報記者たりしこともあり、夙に社會主義に共鳴し、日本に於ける社會主義者の最長老たり、近時ボリシエズムに共鳴し、ソビエトロシヤに於ては其名聲嘖々たるものあり現に第三インターナショナルの常任執行委員の一人なり Labour Movement in Japan (シカゴ發行)「自傳」の著あり。

河瀨憲次

明治二十三年二月十六日生る、京都府天田郡福知山町に生る、中學校卒業直後、東京高工機械科に居たることあり中途退學して廣島高師英語部に學び大正六年京都文科大學哲學科を卒業す廣島高等師範教授、專攻科目は純正哲學、(廣島市千田町三四五)

勝部謙造

[illegible]の教育論」の著あり（廣島市大手町[illegible]丁目八九）

金子馬治　文學博士

筑水と號す、明治三年一月十日長野縣小縣郡殿城村に生る、明治廿六年元東京專門學校文科卒業引續き早稻田大學教師たり。ドイツ國ライプチヒ、ベルリン、ハイデルベルヒ等に遊學す、「近代思想研究」「歐洲思想大觀」「生活と文化」等の著の外幾多の文藝哲學評論あり、最近健康勝れず早大文學部長を辭す。（市外上澁谷）

加藤一夫

明治二十年二月二十八日和歌山縣西牟婁郡大都河村に生る、基督教牧師をすること二年、女學校教師をすること四ケ月、それより文筆勞働。トルストイ、ロマンロラン、カーペンター等の飜譯。重に人生問題に關する論文、詩、それより小說をかく。それより社會運動に熱中し、自由人聯盟を組織し、「勞働文學」「自由人」等の雜誌を發行す。震災以來個人雜誌「原始」を創刊す、「本然生活」「民衆藝術論」「土の叫び地の囁き」「自由人の生活意識」等の著あり（東京府下吉祥寺二七五七）

河上肇　法學博士

明治十二年十月山口縣岩國、東京帝大卒業後農科大學實科、學習院等に講師たり、後教員をやめて讀賣新聞記者となり、讀賣退社後は日本經濟新誌の創刊に與かり其の主筆となる、明治四十一年以後京大教授として現在に至る、個人雜誌「社會問題研究」を發行し學界に獻與する所大なり「祖國を顧みて」「社會問題管見」「唯物史觀研究」「近代經濟思想史論」「社會組織と社會革命」「資本主義經濟學の史的發展」等多くの著作あり、京都帝國大學教授（京都市吉田二本松町。電話上五九二番）

神戸正雄　法學博士

明治十年四月愛知縣一宮町に生る、明治三十三年、東京帝國大學法科卒業、直ちに同大學院に入り、三十五年、京都帝國大學法科大學助教授となり、三十七年八月、文部省留學生として歐米に渡り、特に獨逸ヴュルップルグ大學シャンツ教授に師事して財政學を專修す、四十年九月、京都帝國大學法科大學教授となり、大正二年九月カーン[illegible]に於て[illegible]、大正二年十二月歸朝して今日に至る、一般[illegible]政策、財政及社會政策、特に租税論を專攻す、[illegible]等二十種に上る外幾多の社會評論あり、個人雜誌「時事經濟問題」を主宰す。京都帝國大學教授（京都、上京、淨土寺西田町、七〇）

河津暹　法學博士

明治八年一月東京に生る。東京帝國大學法科卒業後同校に教授たり。卅三年並獨に、四十五年米國に留學。夙に經濟的見地より社會問題の解決にり努め多くの著書と評論あり、社會政策學會員、帝國大學法學部教授（東京市外中野町桃園）

河田嗣郎　法學博士

明治十六年四月山口縣玖珂郡伊陸村に生る、明治四十年京都帝國大學法科大學卒業、四十年より四十一年迄國民新聞社に在り、四十一年京都帝國大學講師囑託、四十年助教授に任ぜられ、大正元年より獨英佛米に留學、大正七年京都帝國大學教授に任ぜらる、經濟學を專攻し「[illegible]の發達」「資本主義的[illegible]」「[illegible]

「土地經濟論」「日本の經濟と佛英」「社會主義論（經濟全書中の一卷）」「婦人問題」「植民地としての巴西」「穀價の研究」「農業倉庫論」「家族制度研究」「社會問題及社會運動」「經濟學要義」「農村問題と其對策」「農政四十三講」「家族制度と婦人問題」等京都帝國大學教授（京都市上京區北白川追分町）

河村又介

明治廿八年生る山口縣の人。大正八年東京帝國大學法學部を卒業す、農商務省に勤務し後東京帝大學法學部の助教授たり、大正十二年獨逸に遊學し、歸朝後東北帝國大學法學部教授となる、專攻科目は國家學（仙臺市木町末無）

片上伸（ノブル）

明治十七年二月二十日伊豫國越智郡波止濱村に生る、同三十九年七月早稻田大學文學科修了、同四十年早稻田大學豫科の英語教師となる。大正五年秋モスクワへ赴き、大正八年春歸る、モスクワ大學、自由大學などに時々行けり、早稻田大學にて、ロシア文學を講じ同大學文學部長たりしが、大正十四年辭して、ロシアに再遊し現在郷里にあり、文壇に活躍す。「生の要求と文學」「無限の力」「草の芽」「思想の勝利」「ロシヤの現實」「近代英詩評釋」「テニスンの詩」「エマスンの自然論」「ドン・キーホーテ」「死人の家」「文學解說」等あり、（和歌山縣御坊町字島）

河合榮治郎

明治廿四年二月東京府下千住町に生る。東京府立第三中學校第一高等學校を經て、東京帝國大學を大正四年卒業、大正七年より大正八年に亘り米國に滯在勞働問題を研究す、農商務省參事官たりしも議會はずして辭職す、勞働問題研究「社會思想史研究」の著の外社會評論多し、東京帝國大學助教授（東京府大井町）

賀川豐彦（バチエラー・オブ・デヴニチー）

明治二十一年七月十日神戶市島上町一〇八番地に生る、德島中學卒業（明治三十八年）明治學院高等科二年修業（明治四十年）神戶神學部卒業（明治四十四年）後米國プリンストン大學神學校（一九一六年）に學び學位を受く、神戶貧民窟に雜居したることあり、獻身的に貧民傳道に從事す、心理學、哲學、神學、生物學を修め、主觀經濟の上に立ちたるギルド・ソシアリズムを主張す「貧民心理の研究」「精神運動と社會運動」「人間苦と人間建築」「主觀經濟の原理」「基督傳論爭史」「涙の二等分」（詩集）「死線を越えて」（小說）「地殼を破つて」（散文詩）「預言者エレミヤ」「友情」「イエス傳の敎へ方」「太陽を射るもの」「星より星への通路」「生存競爭の哲學」「雷鳥の目醒むる前」「空中征服」「苦難に對する態度」「漿水通路」の著あり（東京本所松倉町二ノ廿六本所基督敎產業青年會）

加田哲二

曾て忠臣と呼ぶ、明治廿八年十一月十六日東京本鄉區湯島三組町に生る、東京京華商業學校卒業後慶應義塾理財科に入り大正八年三月卒業す、經濟學並に社會學を修め、「アーサーペンテイの歷史觀」「經濟價值論」の著の外雜誌「批評」に甲野哲二の別名を以て社會評論を發表せり、慶應義塾經濟學部敎師目下留學中

與謝野晶子

明治十一年十二月七日堺市に生る、堺市高等女學校を卒業し、獨學にて史學と文學を

會む、明治三[illegible]大正元年歐洲諸國に遊び、[illegible]に新[illegible]を置す、漫遊一「新譯源氏物語」「新譯榮華物語」「火の鳥」「激動の中を行く」「晶子歌話」「人間禮拜」「人間往來」等著作あり、（麹町區富士見町五ノ九）

吉江喬松　孤雁

明治十三年九月長野縣東筑摩郡鹽尻村に生る、三十八年早大文科を出て、大正五年同大學留學生として佛蘭西に赴き、具に佛蘭西文學を研究し九年八月歸朝、論文集「純一生活」「愛と藝術」等の外 "L'Esprit" "Urashima" の佛譯、ツルゲネーフ、モウパッサン、メエテルリングの邦譯「近代文明と文藝」「高原」「旅より旅へ」「青空」「砂丘」「雲の原」等の文學著作多し、早稻田大學教授（府下日暮里渡邊町一〇四〇）

吉野作造　法學博士

宮城縣仙臺に生る。東京帝國大學卒業後歐洲に留學し帝大教授として社會評論と政治論とを公にせしも、十三年大學を辭し、東京朝日新聞社に入社す、後辭して現に東大講師たり（本郷駒込神明町三二七番地）

米田庄太郎　文學博士

明治六年二月奈良縣添上郡大安寺村に生る、奈良英和學校を卒業したる後、米國ニューヨーク市ゼネラル、セオロジカル、セミナリー、米國紐育市コロムビア大學、佛國巴里市コレヂュ、ド、フランス其他二三の歐洲大學を卒業して社會學を修む、「輓近社會思想の研究」「新理想主義の歷史哲學」「現代人心理と現代文明」「經濟心理の研究」「現代文化人の心理」「リッケルトの歷史哲學」等大著を出し多數の社會評論と研究の結果とを公にす、京都帝國大學文學部教授（京都市岡崎入江町）

高野岩三郎　法學博士

明治四年九月二日長崎市に生る、東大法科大學政治科卒業し明治二十八年七月外國留學――明治三十二年乃至三十六年東大教授――明治三十六年乃至大正十年、現に大原社會問題研究所長たり、東大卒業後主として獨逸、ミュヘン大學留學す、社會統計學、社會問題を專攻、「社會統計學史研究」（近刊）「四論文集」の著書あり（兵庫縣武庫郡住吉村花田一四〇五）

田邊元　文學博士

明治十八年二月三日、東京市に生る、明治四十[illegible]東京帝國大學文科卒業、大正二年より大正八年まで東北大學理學部講師、大正八年より京都帝國大學教授たり伯林、フライブルク兩大學留學す、哲學を專攻し「最新の自然科學」「科學概論」「カントの目的論」「數理哲學研究」の著述あり（京都市富小路丸太町下ル）

高橋誠一郎

横濱市に生る、慶應義塾大學卒業後同校に教鞭を執り歐洲に留學して經濟史を專攻す、歸朝後同校教授として今日に至る。「經濟學史研究」「歐洲經濟學史」の大著作の外多くの評論と研究とを公にす、（相州大磯町王城山五二九）

高田保馬　文學博士

明治十六年十二月廿七日佐賀縣小城郡三日月村に生る、明治四十三年京都大學哲學科卒業、米田博士指導の下に大學院在學、以前商大、廣島高師につとめ、次に九州大學教授　社會學經濟學を專攻し、社會學原理

「現代社會の諸研究」「社會と國家」「社會學概論」「現代社會の諸研究」「分業論」「大數法論」「階級考」「社會と國家」「階級及第三史觀」(佐賀縣小城郡三日月村)

高畠素之

明治十九年一月群馬縣前橋市に生る、群馬縣前橋中學卒業、嘗て賣文社員となり、大化會、經濟學盟等に關係せることもあり、加ふるに牧師たらんとして、傳道に從事したることとあるも、萬事意に任せず、退いて再び著述及畜犬を業とす「資本論」「社會問題辭典」「資本論解說」「社會進化思想講話」「唯物史觀の改造」「社會學思想の人生的價値」「財產の進化」「批判マルクス主義」「古代社會」「社會學入門」等の著書あり(東京市本郷千駄木町五五)

高柳賢三

明治廿年五月十一日埼玉縣熊谷町に生る、東京帝國大學法學部教授たり。震災後命を奉じて、歐米各國を巡遊し東大の爲めにと數十萬卷の蒐集に多大の效をおさむ。「新法學の基調」の著書あり(東京市芝區白金三光九五〇)

高橋清吾

明治二十四年三月三日宮城縣宮城郡利府村に生る、早稻田大學教授大正二年早大專門部政治經濟科卒業大正三年米國紐育市コロンビア大學留學大正七年歸朝以來教職に從事す。專攻科目は政治學、著書「歐洲政治思想史」「歐洲社會制度發達史」「都市建設論」「改造期の政治學說」(東京市外戶塚町諏訪一七五)

高橋龜吉

明治二十五年一月生。出生地、山口縣德山町西町。略歷、十五歲の時高等小學校半途退學後直ちに大阪に上り、一ケ年穀物問屋に丁稚奉公す。次で十六歲の時朝鮮咸北城津に渡り四ケ年半を店員生活に過す。歸國後直ちに早稻田大學に入學、大正五年卒業。久原鑛業に入社、七年退社直ちに東洋經濟新報社に入る、職業「東洋經濟」記者、著書「經濟學の實際智識」「日本資本主義經濟の研究」「末期の日本資本主義經濟とその轉換」。(府下、大森馬込村東九一五)

田中喜一　王堂

東京に生る、文學及哲學上の評論を以て聞ゆ、「哲人主義」「書齋より街頭へ」「徹底的個人主義」等の著作の外評論頗る多し、立教大學講師、(小石川原町一〇六)

田中耕太郎

明治二十三年十月二十五日鹿兒島市にて生る、大正四年東京帝國大學法科卒業英、佛、伊、獨國に留學し現に東京帝國大學法學部教授たり。商法を專攻し「合名會社社員責任論」「商法總論概要」の著あり(千葉縣我孫子町)

瀧川政次郎

明治三十年五月廿六日大阪市に生る、大正十一年東大法學部獨法科卒業、同年中央大學、法政大學、日本大學講師受託、大正十二年司法官試補拜命、大正十四年任九州帝國大學助教授、專攻科目は日本法制史、著書日本法政史講義案、(小石川區宮下町三七)

高岡熊雄　法學博士、農學博士

明治四年八月十五日島根縣鹿足郡津和野町に生る、明治二十八年札幌農學校卒業直に

同校に奉職明治四十年東北帝國大學農科大學教授大正七年北海道帝國大學教授に任ぜられ明治三十四年獨逸に留學を命ぜられ獨逸國ボン大學及伯林大學に三ケ年半、物學、大正十二年歐米諸國を視察す、專攻科目は經濟學特に農政學及植民學、「北海道農論」。「日本内國植民論」、「著者内外國植民制度」。「米國の農業教育」「農業政策」。「農政問題研究、「ブラジル植民研究、經濟學農政學研究叢書（既刊四册）（札幌市）

平　貞藏

明治二十七年八月七日生、山形の人、東京帝國大學法學部卒業目下社會思想社同人、勞働教育會理事、法政大學教授、經濟史を專攻す（市外杉並町高圓寺九九七）

左右田　喜一郎　法學博士

明治十四年二月廿八日愛媛縣に生る、東京高等商業學校卒業後、獨逸ライプチヒ大學に留學し、經濟學殊に經濟哲學を修む、橫濱實業界の重鎭として絡職を辭し、而も孜孜研究の結果を著作及評論に公にしたるもの多數に上る「經濟哲學の諸問題」「文化價値と極限概念」「經濟法則の論理的性質」「左

有田銀行頭取、東京商科大學講師（麴町區[illegible]下二番町）

恒藤　恭

明治二十一年十二月島根縣松江市に生る、明治三十九年島根縣松江中學校卒業、大正二年第一高等學校卒業、大正五年京都帝國大學文科大學卒業の上、大正八年九月より同志社教授たりしも、十一年京都帝國大學助教授となり目下歐洲に留學、「ジムメルの經濟哲學」「マルクス主義の根本問題」（譯）（京都市上京區下鴨森本町六）

土田　茂（ツトム）　杏村

明治二十四年一年新潟縣佐渡郡新穗村に生る、東京高等師範學校博物學部を卒へ、京都帝國大學文科哲學科卒業、京都帝國大學大學院に學ぶ、哲學、生物學を專攻す、「文明思想と新哲學」「生物哲學」「文化主義原論」の著あり、京都市上京町新町頭）

鶴見　祐輔

明治十八年一月三日生。出生地、群馬縣多野郡新町。東京帝國大學卒業。鐵道書記官鐵道參事官たりし所辭して米國に渡る十四年

[illegible]に關係す、著書「[illegible]」「東京名士[illegible]」之研究」、「[illegible]日本民族の將來」、「二十[illegible]物語」「偶像破壞期の支那」其他。（東京市[illegible]區[illegible]町九三電話[illegible]二一七）

中野　正剛

福岡縣の人、明治四十二年早稻田大學政治科卒業、東京朝日新聞記者となる、辭職後「東京時論」を創刊せるも、十二年一日本及日本人」と合併し、雜誌「我觀」を創刊す。大正九年福岡縣より選出されて代議士となる、「世界政策「講和會議を目擊して」「現實に直視して」等の著あり、府下千駄谷原宿二〇〇ノ一。）

永井　柳太郎

明治十四年四月十六日、石川縣金澤市中主馬町に生る、衆議院議員外務參與官たり、明治四十二年より大正六年迄早稻田大學教授大正六年秋早稻田大學改革を企てゝ成らず、却つて戒られ、戰時及戰後の歐米視察に赴く大正九年初めて代議士に當選す明三十九年早稻田大學より英獨兩國に留命ぜられオックスフォード大學に遊び

チェスター、カレーヂ卒業、「社會問題と植民問題」「植民原論」「世界政策十講」等。(東京市外戸塚町千〇六十五番地)

中澤辨次郎

明治貳拾四年七月七日埼玉縣兒玉郡丹庄村に生る、埼玉の野に自作兼小作農の子と生まれ二十三才迄農民としての體驗を持つ、特に學歴なし現在主として農政學を研究、農民の實際生活問題を調査中なり、一、「小作制度論」二、「農民生活と小作問題」三、「小作問題の新展開」四、「最近の小作問題」五、「農業政策改革論」六、「旅の印象」七、「小作爭議論」(東京市外平塚村戸越一一九四)

中野登美雄

明治二十四年七月十三日札幌市に生る、早稲田大學教授大正五年早大政治科卒業、同七年留學生として北米、佛國及獨乙に留學し歸朝後同大學教授たり、專攻科目は國法學にして Ordinance Power of the Japa-

明治二十一年六月九日東京市本郷區に生る東京帝國大學教授明治四十四年東京帝國大學農科卒業、大學院入學、大正四年南洋諸島巡遊、大正七年東京帝國大學助教授、同年蠶糸中央會の囑を受けて北米に渡り大正八年末歸朝、大正九年歐洲諸國に留學し、同年ローマに開かれたる萬國農事協會總會に日本委員として參列、大正十年第三回國際勞働會議に勞働代表顧問として參列、大正十一年末歸朝、大正十三年學位を受く、專攻科目は農政學、「農村問題と社會理想」「經濟政策學原理」「公正なる小作料」「中小農保護政策」(絶版)「國民高等學校と農民文明」(繙譯、絶版)(東京市外代々木富ヶ谷)

武者小路實篤

明治十八年五月十二日東京麹町區元園町一ノ三八に生る、學習院卒業後帝國大學文科に一年在學したる事あり爾來幾多の創作と評論を公にしたるが、大正七年其主義を實

室伏高信

明治廿二年神奈川縣足柄下郡土肥村宮上に生る、順天中學卒業後明治大學に入り中途退學、直に記者生活に入り、時事新報(大正三年)東京朝日(大正五年)に政治記者たりしことあり、大正八年雜誌「批評」を創刊す、大正九年改造社特派員として歐米に遊ぶ「社會主義批判」「ギルド社會主義」「政友會罪惡史」「エドワード・グレーの外交」「社會主義民主主義」及び最近「文明の沒落」「日本論」「土に還る」等の著作の外多くの評論を公にす、府下大森町不入斗四七一)

村松正俊

明治二十八年四月十日生。出生地、東京赤坂。略歴、第一高等學校、東京帝國大學文科大學院、職業、慶應大學教授、アテネフランセ教授、著書名、「光の畫家モネー」「[illegible]

[illegible]の著作と評論あり、小說「片うつり」「うきまくら」「夢の廿八日」の外「罪と罰」「復活」「二人の畫工」の譯書あり、「鐵の舌」「バクダン」其他の著作多し。明治卅五年以來書肆丸善株式會社顧問の職にあり、(府下淀橋町柏木三七一)

内ケ崎作三郎

明治十年四月八日生。宮城縣黑川郡富谷村明治三十四年東大英文學科卒業、三十五年以來早稻田大學の教授たり。明治四十一年―四年オックスフォードに留學、大正九年―十年第二回外遊、「人生と文學」、「英國より祖國へ」、「近代人の宗教」、「ロイド・ヂョーヂ」、「リンコルン」、「自中黃記」、「國際聯盟」、「人生日訓」。(東京府巢鴨町一四七〇番地)

上杉愼吉　法學博士

明治十一年八月石川縣に生る、明治三十六年東京帝國大學卒業、直に同校に敎師たり、明治三十九年より三年間英佛獨に留學す、帝國憲法を專攻し、之に關する著作多し、東京帝國大學敎授(小石川大塚坂下町五四)

上田貞二郎　法學博士

明治十二年五月東京府下德川[illegible]邸に生る明治三十五年東京高等商業學校專攻部を卒業して商學士となる、爾來今日に至るまで同校教職にありて經濟學を研究す、其間明治三十八年より四十二年に亘り文部留學生として英獨兩國に留學す、大正八年第一回國際勞働會議に際し政府代表の顧問として米國に赴く、「外國貿易原論」「戰時經濟講話」「產業革命研究」「社會改造と企業」其他の著書あり、東京商科大學教授(東京府北豐島郡高田町上屋敷千百二十二番地)

昇直隆　曙夢

明治十一年七月十七日生、鹿島縣大島の人陸軍教授及著述に從事す、明治三十六年正教神學校卒業、同時に同校講師となる、大正元年陸軍中央幼年學校講師に任命、同四年早稻田大學講師に聘せられ、同五年陸軍教授拜命陸軍士官學校附に補せらる、同六年外國語學高等試驗委員拜命、同八年內務省囑託に任命、ロシヤに遊ぶこと前後三回に及ぶ。宗教、哲學及文學を專攻す、著述「露[illegible]學」、「露西亞[illegible]」、「二葉亭」、「ロシヤ[illegible]」、「露國民衆と[illegible]全書」五卷、「新ロシヤ・パンフレット」、「[illegible]譯には「現代露西亞文豪傑作集」六卷、「[illegible]」、「虐けられし人々」、「トルストイ物語」、「トルストイとドストエーフスキイ」(評論)等あり。(東京市牛込區若松町一〇二番地)

野村兼太郎

明治廿九年三月廿日東京市に生る、東京府立第三中學校を經て慶應義塾に入學、大正七年卒業、爾後同校に奉職現に教授たり英國、劍橋大學に留學す經濟史を專攻し「近世商業史」の著書あり(芝區二本榎一の三九)

野上俊夫　文學博士

明治十五年五月新潟縣佐渡郡相川町に生る明治三十九年東京帝國大學文科心理學科卒業、大正二年八月より大正五年八月まで歐米に留學し獨逸ライプチッヒ大學に學び戰禍に遭ひて英、獨、瑞、伊各國を經て米國クラーク大學總長スタンレー、ホール博士の教室に學ぶ「歐米教育の印象」「青年心理

講話」其他多くの著作と評論あり、京都帝國大學文學科教授（京都市下鴨西林町）

野坂鐵

明治二十五年三月三十日生、本名參次、山口縣長州萩町、略歷、大正六年慶應義塾理財科を卒業直ちに友愛會に入る。その後二ケ年半、英、佛、瑞、獨、露に遊ぶ。現在は勞働總同盟書記及び産業勞働調査所主任。（府下平塚村、小山、二六一）

桑木嚴翼　文學博士

明治七年六月東京に生る、明治二十九年七月東京帝國大學文科大學哲學科卒業、大學院入學、三十五年二十八歲にして文學博士となる、三十二年東京帝國大學文科大學講師（後、助教授）第一高等學校教授、三十九年京都帝國大文學科大學教授、大正三年東京帝國大學文科大學教授たり、明治四十年獨佛英米留學二年間、純理哲學を研究す、「哲學概論」「哲學綱要」「現代思潮十講」「カント現代の哲學」「五大哲學者」、「デカルト」「時代と哲學」「現代の價値」「哲學と文藝」「哲學五流辨」其他、「倫理學講義」「文化と改造」等の著あり、哲學會丁酉倫理委員。

東京帝國大學教授（東京市牛込區北町三十四番地。電話番地五五〇九番）

久保田明光

明治三十年九月八日東京に生る、早稻田大學講師駒澤大學講師、大正八年早稻田大學政治經濟學科卒業。協調會第一部調査課囑託たりしが、大正十一年曹洞宗大學（現駒澤大學前身）の新設「社會政策」講座擔當。大正十三年更に早稻田大學講師を囑任せられ、尙附屬高等學院の經濟學も併せて擔當。駒澤大學にては人文學科の經濟學。擔當著書「組織惡と其の認識」（近刊）及び「社會主義思想の史的解說」（東京市外杉並町阿佐ケ谷六八六）

櫛田民藏

明治十八年十一月十六日福島縣石城郡上小川村上小川に生る、大原社會問題研究所員大正元年京都帝國大學法科大學卒業、同二年—五年、東京帝國大學助手、同五年—同七年大阪朝日新聞記者及同志社大學教授、同八年—九年東京帝國大學經濟學部其他講師、九年—現在、大原社會問題研究及我等社に關係す九年大原研究所より歐米各地出

張、十一年[illegible]經濟學、市外[illegible]木九七六一）

山川均

明治十三年十二月二十日岡山縣都窪郡倉敷に生る、明治二十八年小學校卒業、同三十三年『青年の福音』に執筆不敬罪重禁錮三年六ケ月罰金百貳拾圓監視一年、三十八年藥種醫療機械商の店員となる、四十四年日刊平民新聞に入社、同年十二月治安警察法違反輕禁錮一月半、四十一年「勞働者」を發行新聞紙條令違反輕禁錮二ケ月、同年六月赤旗事件官吏職務執行妨害懲役二年、四十三年出獄賣藥商人となり岸製藥會社の特約販賣人となり、田舍廻りの寫眞師を稼業す。大正五年賣文社に入社、大正七年荒畑寒村と『青服』を出だし、組合權及び罷工權を主張して禁錮四ケ月、殆んど官權の脅迫下に其半生を投ず、大正八年病軀を押して月刊『社會主義研究』を創刊す、「デモクラシーの煩悶」「歷史を創造する力」「井戸の底から見た日本」「資本主義のからくり」「無產階級の政治運動」「動物界の道德」「レーニンとトロツキー」「社會主義者の社會觀」「マルクス資本論大綱」「マルクス傳」

「勞働組合運動史」「マルクス經濟學」「勞働運動と社會主義」「マルクス學說體系」「勞農露國の研究」等の著作と多數の評論を公にす、就中雜誌「前衞」に發表せし「方向轉換」の一文は日本の左翼運動にとりての劃時代的文献なり、目下鎌倉材木座に療養中。

山名義鶴

明治二十四年九月十七日靑森縣靑森市外に生る、大正六年東大法科卒業、大正七―九年内務省保險衞生調査會囑托、大正九―十四年大原社會問題研究所囑托、大正十三年一月以來日本勞働總同盟政治部委員（大阪市外吹田千里山）

柳宗悅

明治二十二年三月廿一日東京に生る、學習院卒業東京帝國大學文科大學哲學科卒業京都同志社大學教授專攻科目は宗教哲學にして「キリアム・ブレーク」「神に就て」の著書あり（京都市吉田神樂岡三）

山川菊榮

明治二十三年十一月東京に生る、山川均氏夫人也、東京麴町番町小學校、東京府立第二高等女學校を經て、女子英學塾を卒業す、均氏と共に「社會主義研究」の執筆經營に任じ、「戀愛の理想境」「婦人の勝利」「現代生活と婦人」「大戰の審判」「反評「女の立場から」「婦人論」「女性の叛逆」「婦人問題と婦人運動」（飜譯）等の著あり、（鎌倉材木座）

柳澤健

明治二十三年十一月三日生、出生地、會津若松市。職業、外交官。著書、詩集四冊、論集二冊、紀行文集二冊。（佛蘭西巴里、帝國大使館氣付）

山内得立

明治二十三年六月十二日奈良縣高市郡天滿村與田に生る、京都帝國大學卒業、獨逸フライブルヒ大學に留學し歸朝後東京商科大學教授たり哲學を專攻す（東京市外代々木幡ケ谷西原一〇〇）

牧野英一　法學博士

明治十一年三月二十日飛驒高山町に生る。第一高等學校に入り明治三十六年東京法科大學卒業後同校の教職に就き、大正二年教授となる、明治四十三年より大正二年迄獨、伊、佛、英に留學、法律學の方法論に刑法を專攻し日本の刑法學に新局面を開く、法律學の教科書として「日本刑法」「刑事訴訟法」の外論文集として「刑事學說講第一編乃至第八編、其他多くの評論あり、目下外遊中（小石川大塚坂下町百十番地電話小石川八七〇番）

米田實　法學博士

明治十一年十二月福岡縣久留米に生る。明治三十四年米國オレゴン州立大學卒業。加州々立大學院、アイオロ州立大學等修學、マスター、オブ、アーツ及びバチエラ、オブ、ロース等の學位を有す。倫敦クロチウスソサイテーの一員たり。大正十一年東京帝大より法學博士を受く。職業、朝日新聞社相談役、東京商科大學「外交史」講座擔任、著述「最近世界の外交」等（小石川區高田雜司ケ谷九一五）

藤井健治郎　文學博士

明治五年八月八日山形縣東田川郡狩川村に生る、山形中學校第二高等學校を卒へ明治三十一年東京帝國大學文科大學
三十八年より四十年迄獨逸國ミュン

學伯林大學へ入學、倫理學を專攻す、夙にマルクス學等を讀破し社會問題に關しても研究せり、「主觀道德學要旨」「國民道德論」等の著作評論多し、曾て早大教授たり、京都帝國大學文學部教授（京都市上京區室町通今出川下ル）

藤森成吉

明治二十五年八月二十八日生、長野縣諏訪郡上諏訪町。著述、創作集「新しい地」「研究室で」「寂しき群」「煉獄」「その頃の追憶」「東京へ」。長篇「若き日の惱み」「煩惱」「妹の結婚」「舊先生」感想集「藝術を生む心」「大地の匂ひ」「惱み笑ふ」。諏訪中學、第一高等學校、獨法科、東京帝大獨文科卒業、後一年間第六高等學校講師を勤む。（小石川區雜司ケ谷一一五）

福田德三　法學博士

明治七年十二月二日東京神田區元柳原町二十四に生る、明治二十四年東京高等商業學校本科、同二十九年同校研究科卒業、明治

「黎明錄」「暗雲錄」「經濟學考證」「經濟學論攷」「日本經濟史論」「現代の商業及商人」「經濟學講義」「經濟學教科書」「勞働經濟論」「國民經濟原論」「流通經濟講話」「續經濟學研究」「社會運動と勞銀制度」「社會政策と階級鬪爭」「ボルシエヴヰキズム研究」等の大著あり、社會政策學會員、帝國學士院會員、東京商科大學教授目下外遊中。（東京中野本鄕百一）

深田康算　文學博士

明治十一年金澤市に生る明治三十五年東京帝國大學哲學科卒業後、京都大學に教鞭を執り、英、獨、佛に留學、ライプニッツ、伯林、巴里大學等に學ぶ美學を專攻し、之に關する多くの研究と著述あり、「カントの判斷力批判」（解釋）京都帝國大文學部教授（京都市下鴨五〇番地）

兒玉達童

明治二十六年六月四日神奈川縣足柄上郡淸水村に生る、大正七年

一月より日本、立教、曹洞宗等の諸大學に講師、現在は駒澤大學教授、日本、東京女子大學、東京女子高等師範學校講師專攻科目は純正哲學著述書名「人智の原理及對話（譯）「新理想主義哲學序論（譯）」「カントの生涯及性格（譯）」「哲學概論（著）」東京市牛込區辨天町一）

小牧近江

明治二十七年五月十一日秋田縣土崎港に生る著述業、曉星中學中途退學、渡佛アンリ四世校を經、パリ大學法科卒業、專攻科目勞働法制、本名近江谷駧、住所稻村ケ崎）

小泉信三

明治廿一年五月四日東京市芝區三田四ノ廿九に生る、小學校―慶應義塾普通部（中學部）―同大學部―卒業 同塾教員奉職―勤續十六年倫敦―伯林―劍橋（英國）―巴里に留學し、經濟學及び社會思想を專攻す、著書「價値論と社會主義（改造社）「改訂社

明治三十年十二月十八日千葉縣夷隅郡中川村に生る、同志社大學法學部講師大正十一年東大法學部卒業、東京朝日及び大阪朝日新聞外報部勤務、大正十一年秋同社を辭し現に同志社の講師たり。「神聖家族」、「マルクス歷史、社會及び國家學說」、「功利主義論」その他一二の反譯等あり（京都市上京區寺町今出川上ル四丁目）

五來欣造 素川

明治八年六月廿四日茨城縣久慈郡久慈町に生る、早稻田大學教授明治三十三年東大佛法科卒業明治卅七年より大正三年迄佛獨留學大正三年より四年讀賣新聞主筆大正七年雜誌「大觀」創立大正七年より早稻田大學教授政治哲學を專攻し「また見ぬ親」「社會革命の將來」「大帝那翁」其他の著あり（千葉縣船橋町海神四三四）

黒正（コクショウ）巖

明治二十八年一月二日岡山縣上道郡に生る大正九年七月京都帝國大學經濟學部卒業大正十一年より同學部講師就任大正十二年より十四年迄歐米諸國に留學す農業史を專攻し京都帝國大學助教授たり著書「經濟史論考」（京都市上京區淨土寺町[…]）

權田保之助

明治廿年五月十七日神田區今川小路一丁目に生る東京府立中學校卒業、東京外國語學校獨逸語學科卒業、東京帝國大學文學部選科修了、第一高等學校にて高等學校卒業檢定試驗合格、東京帝國大學文科大學文科卒業（大正三年七月）美學を專攻「活動寫眞の原理及應用」「和獨辭典」及「獨和辭典」「經濟的文明史論」「美術工藝論」の著の外多くの社會評論あり、大原社會問題研究所囑託（市內中野鍋屋橫丁）

青野季吉

明治廿三年二月四日新潟縣佐渡ヶ島に生る大正四年早稻田大學英文科卒業。讀賣新聞、大正日々新聞。國際通信社等に記者生活を送ること八年。十二年六月より自由文筆にて立ち今日に到る。嘗て「無產階級社」同人たり「現在」「マルクス協會」「文藝戰線」の同人なり。「資本主義最後の階段としての帝國主義」「鬪爭に導く光」「眼ざめたる馬」の反譯あり（東京市外代々木山谷四〇二）

有馬頼寧

明治十七年十二月十七日東京市日本橋區蠣殼町三ノ三に生る、農商務省嘱託東京帝國大學農學部助教授たりしことあり同愛會長帝國農村問題研究所長衆議院議員、米、英、佛、獨、を巡遊す、專攻農政學著書「農民農村の研究」「蛙の聲」（東京市赤坂區青山南町六ノ一〇五）

姉崎（アネサキ）正治（マサハル）

文學博士
Doctor of Laws
Doctor [illegible]

明治六年六月廿五日京都に生る、明治廿九年七月東京帝國大學文科大學卒業卅一年同講師となる、卅三年外遊しキール大學、卅五年ロンドン大英博物館及卅六年印度ベナレス Queen's College に學ぶ、卅七年東京帝國大學教授となる、卅九年四十年 Kahn Scholarship に旅行し、大正二—四年 Professor of Japanese Literature and Life, Harvard University. 大正四年 Haskell Lecturer, University of Chicago. 大正八年 Conférencier Nichi-bei, College de France 等外遊すること數回、宗教學を專攻し人本主義を主張す、「現身佛と法身佛」「根本佛教」「法華經の行者日蓮」「社會の動搖と精

神的覺醒」The Four Buddhist Agamas. Tokyo. Buddhist Art in its Relation to Buddhist Idea's. Boten. Nichiren, the Buddhist Prophet. Cambridge Mass. Quelques pages de l'Histoire religieuse du Japon. paris. 等多くの內外語の著あり、歸一協會及び巴里の Société Autour du monde 等に屬す、東京帝國大學教授(小石川區白山御殿町一一七。電話小石川二〇二六番)

阿部次郎

明治十六年八月山形縣飽海郡上郷村大字山寺に生る、第一高等學校を經て、東京帝國大學文科大學哲學科卒業(明治四十年七月)大學では哲學及哲學史を專攻し斯學の評論の外、文藝評論、社會評論等多し「倫理學の根本問題」「美學」「合本三太郎日記」「ニイチェのツアラツストラ解釋並に批評」「北郊雜記」の著あり、大正十一年文部省海外研究員として渡歐同十二年十一月歸朝。東北帝國大學文學部教授。(仙臺市土樋二四五)

安倍能成

明治十六年十二月愛媛縣松山市小唐人町に生る、第一高等學校を經、東京文科大學哲學科を明治四十二年に卒業、西洋哲學を專修し「西洋古代中世哲學史」「西洋近世哲學史」「オイケン大思想家の人生觀」「カント道德哲學原論」の著の外評論多し、最近歐洲を巡遊し歸朝す、朝鮮大學教授(京城)

安部磯雄

慶應元年二月四日福岡市新大工町に生る、明治十二年より十七年まで京都同志社に學ぶ明治二十四年より二十七年まで米國留學廿七年七月より十二月まで歐羅巴旅行明治廿年より廿四年まで及び廿七年より三十年まで岡山市にて基督教傳道に從事、三十年より三十二年まで同志社の教師となり三十二年五月早稻田大學教授となり今日に至る Theological Seminary, Hartford, Conn. U S.A. に留學す社會問題を專攻し「社會問題解釋法」「應用市政論」「都市獨占事業論」「社會問題概論」「理想の人」「婦人の理想」「子供本位の家庭」「產兒制限の理論と實際」「社會主義の時代」「土地國有論」の著書あり(東京市外高田町三四四)

荒畑勝三 寒村

明治二十年八月橫濱市永樂町一丁目八番地に生る、高等小學校卒業以外履歷を持たず外國商館のボーイ、橫須賀海軍造船工廠職工、社會主義書類の傳道行商、本屋の小僧、新聞記者、雜誌「近代思想」月刊「平民新聞」「勞働組合」「青服」等の發行經營等具に苦難を甞め、幾度か官權の壓迫を蒙り、主義の爲めに活動し、囹圄の人たること三回「谷中村滅亡史」「ショウ警句集」短篇小說集「逃避者」ウェッブ氏著「勞働組合運動史」ロイド氏著「勞働組合論」ポール、ラファルグ氏著「財產進化論」(反譯)の著あり、エルエル會(大阪に在り、勞働運動社會問題等の研究團體)會員日本勞働新聞主幹たりしことあり。

麻生久

明治二十四年五月廿四日大分縣玖珠郡東飯田村に生る、辯護士、大正六年東京法科大學卒業、大正八年五月まで東京日々新聞記者、同八年六月より友愛會へ入會、出版部長、主事、大正九年全日本鑛夫總聯合會創立、現在、全日本鑛夫總聯合會顧問、日本勞働總同盟政事部長、著書「勞働運動者のひとり言」。「濁流に泳ぐ」。「生きんとする

群」。「黎明」「人生を横ぎる者」「無產政黨の理論と實際」（東京本郷駒込林町一八三）

赤松克麿

明治二十七年十二月四日生、出生地、山口縣徳山町。略歴、大正八年東京帝大法科卒業。職業、日本勞働總同盟本部員兼、日本農民組合關東同盟本部員、雜誌「解放」及び東洋經濟新報の記者たりしこともあり。著書「社會革命史論」（市外杉並村高圓寺七〇一）

秋田雨雀

明治十六年十二月二日生。青森縣津輕郡黒石前町二〇。明治三十五年青森第一中學卒業明治三十六年―四十年の間に第一期の自由思想に影響さる、明治四十年―早稲田大學英文科卒業、大正五年日本エスペラント協會員となる、大正九年―日本社會主義同盟員となる。戯曲小説集「幻影と夜曲」戯曲集、「埋れた春」、「三つの魂」、「佛陀と卯兒の死」、「國境の夜」、童話集「鬼の子供へ」「太陽と花園」其他。（府下、高田町雑司ケ谷一二二番地）

芦田均

明治二十年十一月十五日京都府天田郡中六人部村に生る、明治四十五年東京帝大法科卒業、同年外交官補に任ぜられ、露國在勤を命ぜらる、大正六年十二月大使館書記官、大正七年三月、佛國在勤を命ぜられ、引きつゞき講和會議に全權隨員、大正九年、十年、聯盟總會に出席十一年五月ゼェノア會議に出張七月海牙會議の專門委員、大正十二年二月外務書記官、情報部第二課長。「巴里會議後の歐洲外交」「列强の政戰」「ロシア印象記」東京市麻布區霞町八）

堺利彦

別名貝塚澁六と云ふ、枯川といふ號は十數年前から使はぬ事にしてゐるとの事、明治三年十一月豐前國豐津に生る、小學校、中學校、第一高等中學校等を修めて小學教員、新聞記者、賣文社、入獄、社會主義運動等波瀾重疊の半生を過し、主義の爲めに惡戰苦鬪す、最近共產黨事件に連座して下獄の筈我が社會主義の巨頭にして、「社會主義倫理學」「マルクス傳」「人と超人」「女性中心說」「社會主義研究」「唯物史觀解說」「猫のあくび」「[illegible]の百日[illegible]」等多く、[illegible]あり、社會[illegible]讀「一休和尚」あり、目下日本平民史」の大著に從事しつゝあり、又改造社より出版すべく「社會主義要綱」の執筆中である。（麹町八ノ二四電話九段千百五番）

佐藤丑治郎　法學博士

明治十年五月二十八日山形縣西田川郡鶴岡町天神町に生る、第二高等學校を經て明治三十六年京都帝國大學法科大學政治學科卒業右に京都大學法科講師となる。明治三十八年京大法科助教授に任ぜらる。明治四十一年外國留學（獨國、佛國、英國及米國）伯林大學、明治四十五年六月歸朝し大正元年八月京都帝國大學法科教授に任ぜらる。大正二年十二月法學博士の學位を授けらる、「衆議院議員選擧法正解」「租税法と豫算との關係を論ず」「政治學上卷」「代議士選擧」等の著あり、東北帝國大學法文長（仙臺市

佐野學

明治廿五年二月二十二日大分縣杵築町に生る、縣立中學校第七高等學校を

大正六年に東京帝國大學政治科卒業、それより大學院に入り眞作博士につきて農政學研究、社會學、經濟史、農政學等を專修し社會評論多し、主張は生産者本位の社會主義、譯書「マルクスかカントか」「露西亞經濟史研究」第一卷（約六百頁）の著あり「解放」社同人、新人會同人、全日本鑛夫總聯合會相談役の外滿鐵東亞經濟調査局囑託たりしことあり。後早大教授たりしが大學騷動及び共産黨事件に際しロシアに亡命、滯露一年半に及びしが、歸りて無産者新聞を創刊し之れを主宰す。最近該事件に入獄せり。「日本經濟史」「日本社會史序說」「農村問題」「鬪爭より解放へ」の著あり

佐々木惣一　法學博士

明治十一年三月二十八日鳥取縣鳥取市西町七〇番地に生る、明治三十六年七月京都帝國大學法科大學法律科卒業、同三十九年十月京都帝國大學助教授に任ぜられ、同四十二年九月出發、獨、佛、英三ヶ國の大學に

の著述と政治評論あり、京都帝國大學法學部教授。（京都市上京區田中上柳町）

澤田謙

明治二十七年三月六日鳥取縣岩美郡浦富村に生る、大正四年第一高等學校卒業大正七年東京帝國大學法學部卒業、茂木合名會社、外務省國際聯盟などに勤務せしことあり。大正十三年より東京市政調査會參事たり小時米國遊學社會科學一般を專攻。「國際政治の革命」「國際聯盟概論」スペンサア「第一原理」（綱譯）「勞働内閣まで」の著書あり（東京市牛込區中町十番地）

澤村康

明治廿六年八月廿九日東京市本所區緑町に生る、大正六年東大農學部卒業大正九年東大法學部卒業大正九年農商務省に被任大正十年九州大學農學部助教授に轉任大正十三年より同大學に教授たり、英國、獨逸及び佛蘭西に遊學し農業政策及び農業經濟學を

駿町四に生る、東京富士見小學、府立四中、五高、東帝大法學部卒業後獨佛英米に遊學す政治學政治學史を專攻し現に九州大學法文學部教授たり（福島市行西町八十番地）

木村久一

明治十六年七月山形縣南村山郡宮生村下生居に生る、仙臺東北學院、東京文化大學、大正二年卒業、爾來教育に從事、昨年五月早稻田大學在職中、過激思想宣傳の嫌疑を受け、不敬罪に問はる。心理學を專攻す、最近共産主義に興味を持ちて研究し居れりと云ふ、「早教育と天才」の著の外多數の評論あり（茨城縣）

北澤新次郎

明治廿年二月二十一日東京市本所區菊川町一ノ十一に生る東京府第三中學校早稻田大學を卒へて北米ノースカロライナ大學（在學一年半）同上ヂョンス、ホツプキンス大

菊池寛

明治二十二年十二月高松市に生る、草田杜太郎の別名を用ひたることあり、高松中學校、第一高等學校を經て、京都大學英文科卒業、文藝家たると共に多くの社會評論及び思想問題に關する評論を公にす、又文藝春秋を創刊し出版界に活躍せり「恩を返す話」「無名作家の日記」「我鬼」「心の王國」「冷眼」「極樂」「藤十郎の戀」「眞珠夫人」「菊池寛傑作集」「受難華」「第二の接吻」等あり（小石川雜司ヶ谷金山三三九）

北昤吉

明治十八年七月廿一日、新潟縣佐渡郡兩津町字湊に生る。早大哲學科を明治四十一年に出て茨城縣土浦中學東京府第三中學教諭早大講師を經て米國と獨逸に四年半留學し大正十一年十二月歸朝す。現在は大東文化協會研究所員、大東文化學院教授、日本大學講師たり、近時日本新聞を創刊せり。著書、「ロヂャース西洋哲學史」(譯)、「ブディンダ近世哲學史」二卷、「ベルグソン哲學の解說及び批判」二卷「哲學より政治へ」、「光は東方より」(市外戸塚町上戸塚五八〇)

三宅雄二郎　文學博士

雪嶺と號す、萬延元年五月、石川縣金澤に生る、帝大文科哲學科卒業、曾て日本新聞記者たり、後「日本及日本人」主筆として多年健筆を揮ひしが最近該誌を棄て「我觀」の主筆となりて現在に至る。「宇宙」「世の中」等の著述の外多くの評論あり、論壇の最古參者の一人也。(東京市外代々木初臺五五四)

美濃部達吉　法學博士

明治六年五月七日兵庫縣に生る卅年東大法科卒業卅二年比較法制史研究の爲め獨佛英に留學、歸朝後東大敎授たり、憲法論の上より見たる多くの政治論社會評論あり、「日本憲法」「行政法提要」「憲法提要」「行政法判例」等の著述多し、東京帝國大學法學部敎授たると共に九州帝國大學法學部部長(小石川區竹早町一二四)。

三宅やす子

明治廿三年三月拾五日京都市上京區富小路丸太町に生る、九歲まで京都に住み後東上、お茶の水高等女學校卒業夏目漱石氏に就き[illegible]の[illegible]權文藝に專念し大正十二年六月、月刊雜誌ウーマンカレントを發刊して今日に至る。「心のあと」「私達の問題」「未亡人論」「母の敎育」「生活革新の機來る」「鐵草」「創作集」「母子敍話集」等の著書多し(牛込區若松町一〇五)

三井甲之助　甲之

明治十六年十月十六日山梨縣中巨摩郡松島村に生る、第一高等學校を經て明治四十年東京帝國大學文學部國文學科を卒業明治四十一年正岡子規の遺業根岸短歌會を繼承し雜誌「アカネ」を發行し後「人生と表現」と改題し「人生と表現社」を組織し今日に至る。「日本及日本人」「山梨日日新聞」等に寄稿し、農業に從事し居村小學校の學務委員たり。著書、「詩集消なば消ぬかに」「人生と表現社宣言」(山梨縣中巨摩郡松島村)

三輪壽壯

明治二十七年十二月十五日生福岡縣糟屋郡廣內村大字古賀に生る、第一高等學校を經て東京帝國大學法學部を大正九年卒業後直

ちに辯護士開業、「カウツキー著社會民主黨綱領解說」の譯等あり（東京市牛込區矢來町四番地）

滿川龜太郎

明治二十一年一月十八日大阪府豐能郡南豐島村原田に生る、京都立命館中學卒業後早稻田大學東京外國語學校等に學ぶ『民聲新聞』『海國日報』雜誌『大日本』等の主筆大正八年同志と共に猶存社を組織し『雄叫』發刊大正十四年同志と共に行地社を組織し現在『日本』發刊、大學寮、東洋協會大學、宇都宮高等農林學校講師たり『奪はれたる亞細亞』『東西人種鬪爭史觀』等の著あり（東京市牛込區南榎町廿二番地）

水谷長三郎

明治卅年十一月四日生京都市外伏見町の人大正十年京都帝國大學卒業後辯護士を開業す譯書「通俗資本論」『史的唯物論略解』『唯物史觀批判』『科學的社會主義序論』『ゴータ綱領批判」等あり（京都市御幸町通御池下ル東側電中四八九〇）

下中彌三郎

明治十一年六月十二日兵庫縣多紀郡今田村に生る、小學校、中學校、女子美術學校、師範學校教員たりしことあり。大正八年、日本教員組合啓明會の創設に盡力、現に同會の主幹たり。大正九年以來勞働運動に參加、勞働組合同盟會に理事たりしことあり。大正十一年、國際教育協會創設に盡力、現に理事たり。『教育再造』『萬人勞働の教育』の著書あり（東京市外高田雜司ケ谷上り屋敷一一一九）

島中雄三

明治十四年二月十八日奈良縣磯城郡三輪町に生る、奈良縣畝傍中學に學び上京して英語學校に入り中央大學を出でゝ雜誌記者となる。一時身を社會主義的啓蒙運動に委ね九州各地に轉々せることあり。後、「サンデー」「新公論」等に主筆たり。爾來賣文の傍出版業に從事す。（東京市小石川區小日向臺町二丁目十九番地）

汐見三郎

明治二十八年二月九日大阪市に生る、京都帝國大學助教授東部帝國大學部卒業後獨逸ハイデルベルグ大學に學び財政學を專攻す「經濟統計研究」を著す（京都市上京區上長者町通室町四）

新明正道

明治三十一年二月廿四日生。出生地臺灣臺北市。大正十年東京帝國大學法科卒業。關西學院社會學部教師たり、社會思想同人にして著書『社會學序說』『權力と社會』『群集論』『ソフイストの政治學研究』の著あり

廣濱嘉雄

明治二十四年一月二十日三重縣多賀郡神戸村大字上神戸に生る、明治四十四年三月京都府師範學校を卒業し、同校訓導並に教諭の職を奉じ、大正八年九月京都帝國大學法學部に入學し、十一年三月卒業、同大學助手に任ぜられ、後十三年一月より東北大學法學部教授たり論理學特に私法原理を專攻し近く外遊の筈（仙臺市定禪寺通り）

平塚明子

らいてうと號す、明治十九年二月東京麴町に生る、お茶水高等女學校を卒へて日本女子大學家政科卒業「所謂新らしき女」を糾合して雜誌「青鞜」を起し、我が婦人問題

に寄稿を爲す、最近新婦人協會を起して實際運動を試む、多くの創作と評論あり、「圓窓より」「現代と婦人の生活」「現代の男女へ」「婦人と子供の權利」「扃ある窓にて」譯エレンケイ「母性の復興」等の著あり（東京市外千駄ケ谷九〇五）

平林初之輔

明治二十五年十一月八日、出生地、京都府竹野郡深田村字黒部。略歴、大正六年早大卒業。やまと新聞、國際通信記者たりしことあり。職業早稲田大學講師、著書「無産階級の文化」「近世社會思潮」、「日本自由主義發達史」、譯「自然界に於ける人間の位置」等（東京市外田端六七）

土方成美　法學博士

明治二十三年七月十日生。出生地、兵庫縣姫路市。略歴、大正四年、東京帝國大學法科大學經濟科卒業。米、佛、英に留學し財政學を專攻す、東京帝國大學教授著書名、「財政學の基礎概念」。（東京市麹町區一番町四十七番地）

平野義太郎

明治三十年三月五日東京市に生る、東京帝國大學法學部卒業同校の助教授となり教鞭をとる民法及び勞働法を專攻し「民法におけるローマ思想とゲルマン思想」「法律における階級鬪爭」の著書あり（東京市外下落合七五三）

森口繁治

明治二十三年三月二十五日神戸市に生る、大正四年京大法科卒業佛、英、獨に留學し大正十二年より京大教授たり專攻は國法學にして「ルソー民約論」（市村博士と共著）「近世民國政治論」「立憲主義と議會政治」の著あり（京都市上京區田中里ノ内町二九）

森本厚吉　法學博士ドクトル、オブ、フイロソフイー

明治十年三月京都府舞鶴町に生る米國ボルテイモーア市ジョンスホプキンス大學院にて經濟、政治、歴史を專攻し、更にボストン及シカゴ市大學普及講演協會の講師として經濟問題の講演に從事せり「生活問題」「生活經濟の新能率」「消費經濟論」「中流階級の研究」「生活標準の研究」英文學の著作の外多數の評論あり、東京文化生活研究會主幹、北海道帝國大學教授、（札幌區十二條西十丁目一番地）

森戸辰男

廣島縣に生る、東京帝國大學法科を卒業同校に教鞭を執り助教授となる。大正九年一月帝大經濟學部機關雜誌「經濟學研究」にクロポトキンの社會思想に關する研究を發表し、其筋の睨む所となり、遂に罪に問はる、大正十年二月末大原社會問題研究所より派遣されて英佛獨に赴き大正十二年歸朝す多くの社會評論を公にし「社會主義思想史」「クロポトキンの片影」「青年學徒に訴ふ」「學生と政治」等の著書あり、大原社會問題研究所員（兵庫縣蘆屋町字茶屋廣屋）

杉原三郎

明治二十二年四月七日山形市香澄町に生る東京府立第一中學、青山學院、アテネフランセ、獨逸語專修學校、正則英語學校を卒業する、社會主義の價値哲學、倫理學を專攻し「人格主義の哲學」「社會主義の價値哲學」の著あり（青山原宿一七〇ノ一六號）

鈴木義男

明治廿七年一月十七日福島縣白河町に生る大正八年東京帝大法學部を卒業し獨佛伊英米に遊學し歸朝後東北大學教授たり（仙臺市東三番丁一六一）

杉山元治郎

明治拾八年十一月十八日大阪府泉南郡北中通村下瓦屋に生る、明治三十六年四月大阪府立農學校卒業後和歌山縣農會技手たり明治四十二年三月仙臺東北學院神學部卒業大正九年まで福島縣相馬郡小高町にて日本基督教會の傳道をなす大正十一年四月九日より今日まで日本農民組合長となる、大正十三年三月歯科醫學の免許證を受く、「通俗福音物語」、「農村經營の理想」、「農家經營の實際」、「五用論」、「農民組合の理論と實際」の著あり（大阪市此花區江澄町一八六）

末廣重雄　法學博士

明治七年七月愛媛縣宇和島に生る、明治三十二年東大法科卒業明治三十四年十一月より三十八年二月まで外國に留學、外交史を修め外交上に關する多くの著書と多くの評論を公にす、京都大學教授（京都相國寺門前町）

杉森孝次郎

明治十四年四月靜岡縣小笠郡南山村に生る明治三十九年早稻田大學文科卒業、同校に教鞭を執り、大正二年十月より同八年三月迄文部省留學生として獨英に滯在修學す、「The principles of the moral Empire」「人類の再生」「新社會の原則」「惟意識の哲學化」等の著書あり早稻田大學教授たり、社會評論家として名あり（東京府下代々木新町一番地）

鈴木文治

明治十八年九月四日宮城縣栗原郡金成村に生る、明治四十二年東京帝國大學政治科を卒業し、曾て東京朝日新聞記者たりしことあり、夙に友愛會を組織し「勞働と產業」を發行して全國の勞働者聯合に力む、大正三、四年に二回米國の勞働運動視察に赴き、大正七年巴里の國際勞働聯盟會議に臨み更に大正十三年四月國際勞働會議に我國勞働代表として列席「勞働問題早わかり」「工場法釋義」「日本の勞働問題」「國際勞働問題」の著作及評論多し、日本勞働總同盟會長（府下大崎町六八〇）

末弘嚴太郎

明治廿一年十一月三十日、山口生る。但し本籍は大分縣宇佐郡宇佐町。東京市本郷小學校から開城中學、一高を經て東京帝國大學法學部を卒業す、後三年間歐米に遊學す。東京帝國大學法學教授たり。又社會思想家、評論家として論壇に活躍す「債權各論」「物權法」「嘘の效用」「農村法律問題」「法窓閑話」等の著あり（東京市小石川區竹早町一二三）

坪内逍遙博士譯（新刊）

戀の骨折損

（沙翁傑作集の續刊出づ！）

定價 貳圓五拾錢
郵稅 拾貳錢
四六判二七〇頁美裝
口繪及挿畫多數入

沙翁傑作集
第二十一卷

Love's Labour's Lost

此作第一の特色はそれが沙翁の**處女作**であると隨つて古今獨歩の**世界的劇天才の發達**を跡附くべき必讀書たると第二は其**時代相の反映**、諷刺、漫畫であると就中不自然な衒耀的辭令や矯飾的口語の嘲弄であるから**滑稽百出**戲謔縱横の**對話劇**であると而して主題は五才女と五才子の**戀愛戰争**、脚色は**詩的笑劇**、譬へば三馬、一九、鯉丈、金鵞らの作意を高尚にし貴族的にし女性的情味を豐かにして劇化したやうな作、地口や語呂や當込みや**駄洒落の連續**、到底飜譯すべからざるもの、それを此譯者が**どう取扱つたか**是れ亦此譯の興味である。

沙翁傑作集 自第一卷至第二十卷 **內容見本進呈**

東京牛込 **早稻田大學出版部發行** 振替 東京一一二三 大阪六八九〇〇

法學博士 堀江歸一著（上卷）

貨幣・銀行・外國爲替

定價參圓二十錢 送料二十二錢

最新

本書は貨幣、銀行、外國爲替の三問題に關して、理論、政策并に歴史の三方面の研究考察を大成せられたもので、實に博士平生の蘊蓄を傾けて餘りあるものである。而も從來斯種の論著に於ては、政策上の議論空疎に流れ、實地應用に不便であつたが、本書に於ては政

發行所 東京市 改 振替東

十年間に貳千五百圓の貯金の通帳を無くして仕舞ふと同じだ！！

煙草も一度「カロット」を口にすれば

斷じて再び煙草は吸えぬ、乞ふ明かなる事實に聞け!!

實業之日本代理部と榮川堂主人

先年十月十三日煙草代用品「カロット」發賣元の榮川堂へ電話があつて實業之日本社代理部から「カロット」の御註文がありました店員が此事を主人に報告しますと主人は「明日私自身で代理部へ上つて「カロット」を御說明申さう」と云て主人は翌十五日午前十時「カロット」一組を携へて實業之日本社代理部を御訪問申しました、丁度社員の諸什は熱心に執務の最中でありましたが快く迎へて異れました、其處で榮川堂主は自身來社せる眞意を述べて「カロット」發賣に至る迄の苦心と確信を申上げました、其うして先づ一社員の煙草好なる方に御試を願ひました、すると其社員の入に早速「カロット」を取上てお試しになりました、暫して其方は「カロット」を口より放して今度は卷煙草をお吸ひになりましたが、社員の方、やつゝ之は驚いた、之は全く煙草が吸へない、煙草がいやになりました、到底煙草が吸へないですね！、驚いたと仰有いました、此時迄發賣主の言葉に對して半信半疑の眼を持つて見ておいでになつた他の社員の方々も「どれ僕も一つ」「僕もやつて見やう」「僕も」と云ふ風に全社員の方が總立になつて「カロット」を取り上げてお試しになりました。「やあこれでは煙草は吸へませんね！」「全く煙草が不味くなつて仕舞つた、驚いた」と口々に御賞賛下さいました、其處で更に店主は口を開いて一度「カロット」を御用ひになれば何等の努力を要せずして斷じて再び煙草は吸へなくなると云ふ事と、幸に近來「カロット」が多くの人に認められて來た事の本懐とを述べて暇をして參りました、歸るに先だつて社員の方々は此の品の將來に對する御奬勵の言葉を述べて下さいました。

天下堂は銀座時事新報社の向つて左横通り左側八軒目です、何うか一度誰方も御來店の上御試しの上ニコチンの中毒の害からのがれて下さいまし、最後に弊堂は確信を以て次の事を斷言します、其れは「萬一御來店御試吸の上煙草が直ぐに廢められない方は其儘「カロット」を壁に投げつけてお歸り下さいまし……」

特徴

外見恰も卷煙草を用ゆるに異ならざるを以て手持無沙汰の事なく適量朝鮮人蔘の精氣を含有せるを以て朝鮮人蔘が具有せる諸效用の凡てを人體に與ふると同時に溫雅なる香氣と忘れ難き淸涼なる甘快味とは輕き刺戟と快感とを永く口中に殘し一度之を口に試みたる者は全く煙草に對する永き嗜好を離れて斷じて再び顧みざるに至る殊に口中惡臭を發する時又は食後夜中に至りて口中一ねばりを生ずる時其他散歩等に之を常用する者は身心の健康期して待つべく且永年の「ニコチン」中毒を安治すべし

日、英、米、專賣特許出願中

カロット（凡百日分）

金貳圓五十錢（ベークライト製パイプ付）

金參圓五十錢（サック入象牙製パイプ付）

送料（内地十八錢 臺、朝、樺四十五錢）

引替送料（内地三十錢 臺、朝、樺五十五錢）

御註文は振替利用を便とすれども御都合によりては端書にて御申越次第引替小包にて送品可仕候

東京府大森不入斗四五一

榮川堂

振替東京五二九壹壹

東京市京橋區瀧山町十三番地

代理店 **天下堂**

文壇の四大家を報知新聞に迎ふ

文壇未曾有の盛事
新聞界空前の大飛躍

報知新聞は、進んで文壇の最前線に立つことになりました。精神の糧としての新聞紙の最高使命を果すためには、第一に新聞の藝術化が必要であります。

宇野浩二氏
菊池寛氏
佐藤春夫氏
里見弴氏

（五十音順）

その理想に向つて進むために、報知新聞社は、現時日本文壇の代表的作家にして、一流中の一流を以て推さるゝ上記四大家を客員として迎へ、四月以降の紙上からその新作長篇小説をかゝげます。四氏の創作は、新聞紙としては、報知新聞が独占することは申すまでもありません。

本誌の読者諸君にして、報知新聞を購読せざる方は、即日最寄の新聞店に御申込下さい。

報知新聞は、日本に並ぶものなき優秀なる超高速度輪轉機を据付け、内外通信網を完備し、米国に於ける二大通信を独占し、社員の大増加を行ひ、新聞として理想的の設備を完成しました。

報知新聞は、日本の文運を代表する金字塔であります。現代人たることに、誇りを持つ人、悩ましさを感ずる人は、是非この三稜塔に反影す[illegible]を読んで下さい。

大正十五年四月

報知新聞社

菊池寛著（卅七版）

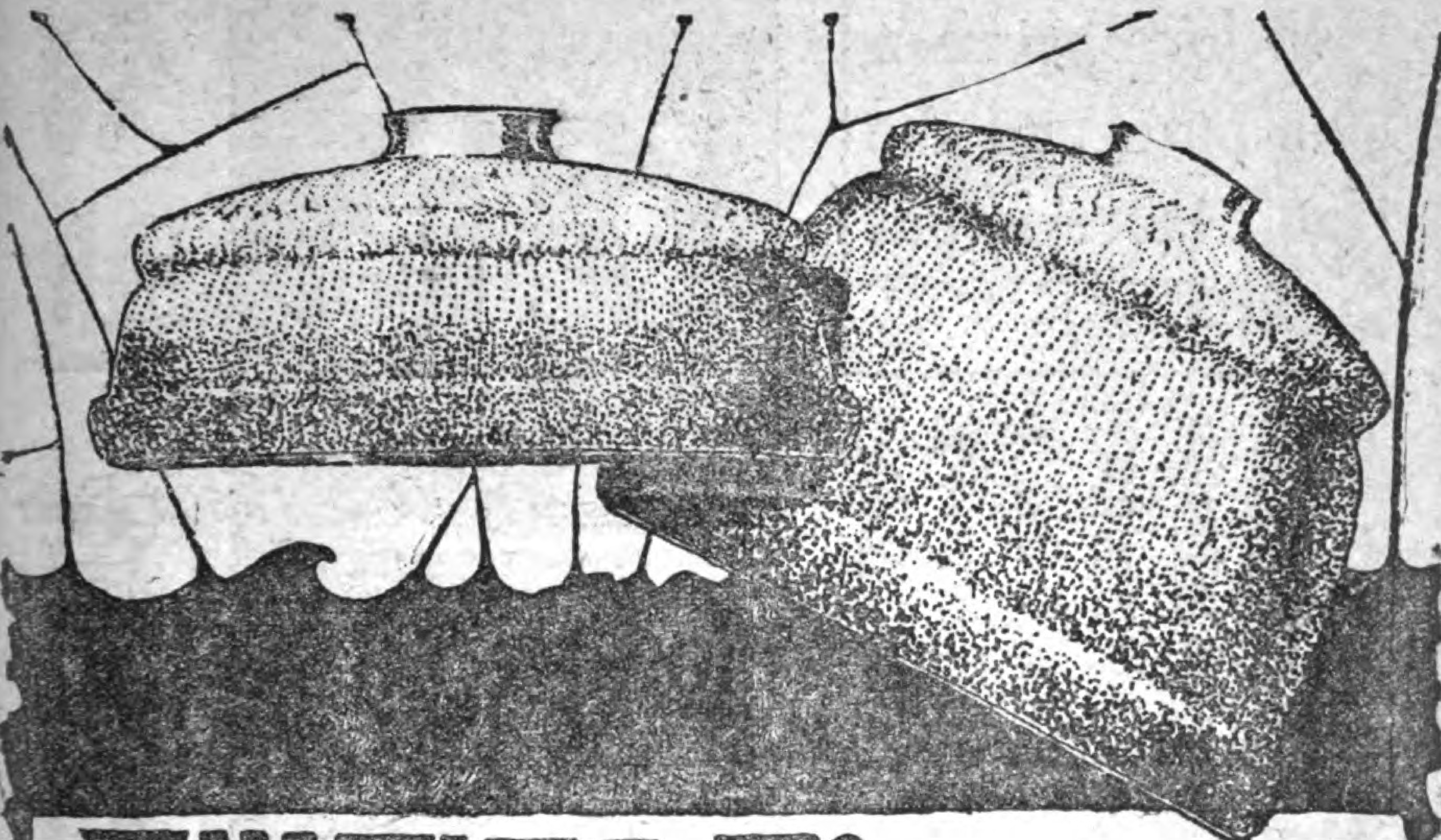
第二の接吻

（田中良輔裝）
定價貳圓
送料廿錢

In love between the pure and the foul, there is but a kiss.

戀愛に於て、淨きと淨からざるとの堺は、只一の接吻に在りと稱せらる。接吻すれば萬事休し、接吻すれば萬事始まる。接吻は戀愛の大轉機にして、間接に女性の運命の契機たり。二人の男女の最初の接吻に筆を起し、第二の接吻に筆を擱かんとす。まさに男女間の性愛の機微に筆を舞して、一個の戀愛爭鬪圖を描き來る。しかも前後二回の接吻共に誤れる接吻なりと云ふに至つては、作者の着想天馬を御して大空を馳けるが如し。

發行所　東京芝區愛宕下町　振替東京八四〇二　改造社



マツダランプのサテン色セード

氣持ちよきお部屋

上品なお客間・靜な書齋、團欒の茶の間・落ち付きのある勉強室……と各々その氣分に相應しき良き照明の爲に吟味に吟味を加へた新製のサテン色セードはきつとお望み通りの氣持ちよきお部屋になります。

マツダランプ製造元
東京電氣株式會社
神奈川縣川崎市

念珠集

齋藤茂吉

二　痰

父は長い間、痰を煩つてゐた。小男で痩せた父が咳込んで來ると、少し前かがみになつて、何だかお腹の皮でも捩れるやうに咳込むのがいかにも苦しさうであつた。ところが、その苦しさうな咳が一とほり濟むと、イツヘ、イツヘ、イツヘ、イツヘといふ咳が幾つか續いて、それから、イツシ、イツシ、イツシ、イツシといふ咳になる。その工合がどうもをかしいので、まだ幼童の僕がよくそれを眞似したものであつた。佛壇の勤めなどがまだ終らぬうちに父が咳込んで來て、それからさういふ異樣な咳になると、勝手元に働いてゐる母の傍にくつついてゐながら僕がイツシ、イツシ、イツシ、イツシといふ眞似をして、母から睨まれたりするけれども、母もたうたう笑つてしまふのであつた。

年に一度、多くは冬を利用して人形芝居が村にかかつた。夕飯を終へてから、翁媼も、婿も孫も、みんな深くつもつた雪がかんかんと氷る道を踏んでその人形芝居を見に行つた。時にはひどい吹雪の夜のことなどもあつた。その人形芝居を見てゐると、美しい娘をさらつてゐる大猿を一人の侍が來て退治したり、松前屋五郎兵衛が折檻されて血を吐いたり、若い女房がひとりの伴を連れて峠を上つて行くと、そこに山賊が出て來たりした。杉の木立の向うは暗闇でそこに

眼が輝いてゐるやうにも拵へてあつた。ある晩に父は僕を背中に負つてその人形芝居を見に行つたときにも、父はひどく咳込んで。いかにも困つた様子であつたが、背中にゐた僕がまたそれの眞似して、それでも稱ごころに、惡いことをした氣もしてゐると。隣にゐた一人の媼がこちらを向いてどうも僕に同情をしたやうに笑ふものだから、僕はまた好い氣になつてイッシ、イッシ、イッシと云つたことをおぼえてゐる。

父の痰は僕の生れる前からあつた。祖父が隱居してから樂みに飼つた鯉が、水が好いので非常に殖え、大きな奴がいつも澤山泳いでゐた。雪がもう二三度降つてからのことであつたさうである。大雪にならぬ前に、その鯉池の浚ひをする方がいゝといふので、ひどく寒い日に父は若者を督促して働いたのが本で、とうとう痰になつてしまつたといふことであつた。痰になつてからも父はやはり働いてゐた。僕の生れたのは父が痰になつてから後のことである。僕は小さい時は腺病質でひよろひよろしてゐた。父が痰でなやんでゐたときの子だからだなぞと祖母の云ふのを聞いたことがある。

父は痰持であつたから、水飴だの生薑の砂糖漬などを貰つてしまつて置いた。水飴は隣の寶泉寺からよく貰つて來たやうである。寶泉寺では村人が餅を搗くたびに持つて行くので、その餅の食べきれないときにはそれを水飴に作つた。いつか寶泉寺では、琥珀色の透とほる水飴が甕に一ぱいあるのを持つて來て分けて呉れたことを僕は覺えてゐる。父の居ないときに時折兄と僕とがその水飴を盗んで舐めた。水飴のなかに指を突き込んで出來るだけ敏捷に水飴を塗付けて逃げて來るのであるが、[illegible]

た。生薑が寺の上におりると三四の雀が勢よく飛んで來てこれを爭つたことをおぼえてゐる。其上生薑と己に何かの因緣があるやうにも思へたがこれが幼童の僕には分からない。これから大分經つて僕は東京にのぼるやうになり、好んで浪花節を聞いた。浪花節かたりは、『せめて生薑の一へげも』といふことをうたふ。その度ごとに僕は父のことを追憶した。醫學を學んでから僕は漢方または民間醫方に興味をもつたこともある。さて生薑のことを注意すると、『思邈の云く。八九月に多く食へば、春にいたりて眼を病む。壽を損じ筋力を減らす。姙婦これを食へば、その子六指ならしむ』なんぞと說明したのもあつて僕を驚かしたが、多くの漢醫方には、生薑に開痰の作用あることが皆說いてある。痰火の條に薑汁を用ゐることもあり、治寒痰咳嗽といふ句もあり、導痰丸。導痰湯などの處方もあるので、父が砂糖生薑をしまつてゐたことが、何だか一種の哀ふかいやうな氣持で僕の心に浮んでくることもあつたのである。

父は三山や藏王山あたりを信心して一生四足を食はずにしまつた。僕の寢小便がなかなか直らぬので、牛が好い、馬が好い、犬が好いなどと敎へて吳れるものがあつたが、父はわざわざ山形まで行つて、朝鮮人參二三本買つて來てくれたことをおぼえて居る。それであるから、兄が十五になつて、若者仲間に入つてから間もなく、大雪が降つてそれの固まつた或る晩に、鮭の頭に爆發する爲掛をして、狐六疋を殺した。六疋の狐は銘々行くところに行つて死んでゐたさうである。垂れてゐる血を辿つて行くと其處に狐が死んでゐるので、一つなどはそれでも、林の中の泉の傍まで行つてゐたさうである。兄達五六人の若者は、夜業の藁爲事が濟んでからそれを煮て食つた。兄は爆發爲掛の旨く行つたことを得意に話しながら、どうも少し臭くて駄目だな。牛よりも旨くないな。こんなことを話した。これを次の日父が聞きつけて、非常に怒つたことをおぼえて居る。何でも狐のことをひどく勿體無がつて、馬鹿野郎、きさまは畜生かやうな

郎だなど兄に云つたことがある。

父は痰を病んでから、いつのまにか何かの神に願を掛けて好きなものを断つことを思つた。ただ、酒も飲まず煙草も喫はぬ父は、つひに納豆を食ふことを罷めた。幾十年も納豆を食ふことを罷めて、もう年寄になつてからある日納豆を食つたが、どうも痰によくない。また痰がおこりさうだなどと云つたことがある。父はその時から命のをはるまで納豆を食はずにしまつただらうと僕はおもふ。

父は好く精進をした。併しさういふ普通の精進のほかに、穀断。塩断などもした。みんなが大根の輪切を味噌で煮たり、鮭の卵の汁などを拵へてそれを旨さうに食つてゐるのに、父はただ飯に白砂糖をかけてのみ込んで居た。それを僕はじろりじろりと見るのだが、何のために父がそんな真似を為するのだかを解釈しようとしなかつた。

〔附記〕　いつぞや、『八十吉』といふ小文章を、やはり『改造』に出したことがある。この『痰』以下の小文章は『八十吉』のつゞきのつもりで、そこで仮りに『念珠集』といふ名をつけて見た。

三　新　道

六歳ぐらゐになつた僕を背負つて、父は早坂新道を越えて、上山へ向つて歩いていつた。雨あがりの道は、よく固まつて、天がよく晴れても塵の立ちのぼるやうなことはない。両側に密生した松林がしばらくの間続いてゐて、何だかさびしいやうである。

さういふ土地は農業としてもう少しだが、茲でもいゝであらうな気もちもする。

上山は温泉場で、松平藩主の居城のあつたところである。御一新後はその城趾になつて、今では月岡神社の境内にな
つてゐる。後年、俳人の碧梧桐がここを旅して、『出羽で最上の上山の夜寒かな』といふ句を殘した。僕の村からこの
廣い新道を通つて上山まで小一里ある。そこまで村の人が大概買物などに行つた。

さういふ街道を父は獨占したやうなつもりで、街道の眞中を悠然として歩いて行つた。なるほど何物も礙げるものが無い。先づ無礙の大道といふ氣持であつた。然るに稍しばらくすると、僕のうしろの方で人力車の車輪の軋る音がした。さうしてヘエ、ヘエ、といふ懸聲がした。これは避けろといふ合圖に相違ないから、父は當然避けて道を開くだらうとおもつてゐるとさうではない。依然として見向きもせずに歩いてゐた。その刹那にどしんといふ音がして人力の梶棒がいきなり僕の尻のところに突當つた。父は前にのめりさうになつた。

すると父は突嗟に振向きしなに人力車夫の頂のところをつかまへて、ぐいぐい横の方に引いたから、人力車がくつがへりさうになつた。人力車夫は慌しく梶棒をおろさうとしたが、父はなほ攻勢をゆるめない。人力車夫はつひに左方に俯向になつて倒れた。父は人力車夫の咽のあたり、頂のあたりを二三度こじいたが、それでも人力車夫は叫び起きたつて、父と鬪はうと相對した。そのとき乘つてゐた老翁が車から降りて來てそれを止め、かたがた父に詫をした。

父はその儘凱旋のときのやうな恰好で尻を高くはしより再び街道の眞中を歩いた。その老翁を乘せて後から來た人力車は、今度は僕らを避けて追越して行つた。追越すときに人力車夫は何か口の中で云つてゐたが、父はそれにはかまはなかつた。僕は事件のあつた時、父の背中で聲を立てゝ泣いた。それは思ひ設けぬ急劇な不安に襲はれたからであつた。僕は泣きやんでからも、前を走つて行く人力車がだんだん遠くなるのを見守つてゐた。

僕は明治四十二年に熱を病んで、赤十字病院の分院にゐたときに、終日少年の頃の回想に耽つたことがある。そしてなぜあの時、人力車夫が梶棒をあんなにひどく突當てたであらうと考へたことがある。この文章を書いてゐる現在の僕がやはりそのことを思ふのと同じであつた。

この街道の開通されるまでは、小山を幾つも越えて漸く上山に行著くのであつた。そこは如何にも寂しい山道で、夜遊に上山まで行く若者が、時々道が分からなくなつて終夜そのあたりをさまよふといふやうなことがあつた。上山から魚を買つて夜道すると屹度道が分らなくなるといふこともいはれた。夜更けてから、ほうい。ほうい。といふこゑがその山道あたりから聞こえるのはさう稀なことではなかつた。それはどうしても道が分らなくなつて進退谷まるので救を求めるのである。村では直ぐ太鼓を打ち犬を連れてさがしに行くのであるが、道から一間も離れぬところに蹲踞んでゐたなどといふ話は幾つもあつた。

一つの小山の中腹に大きな石が今でもある。それを狼石と稱へてゐるのは、そこには狼が住んでゐて、子を生むと村の人が食べ物を持つて行つてやる。小さい狼の子が幾つも出て來て遊ぶといふやうなことがあつて、夜半などに鋭い狼のこゑがよく聞こえたものださうである。その石の近くを上山へ行く山道が通つてゐた。その山道で、雉子が蛇に巻かれ叫び苦しんでゐるのを村の人が見つけて、雉子を分捕つて來て食べた。さうすると三日ばかり經つた晩にこの男の腹に大きな蛇が巻付いてゐた。その男は蛇の仇打に來たことと思ふと腹に力を入れて置いて、それからまた腹を急にへこまして庖丁をその隙に入れ

山の中腹を鑿開いて山形から上山を經て米澤の方へ通ずる大街道が出來た。早速[illegible]ここに[illegible]ある。この新道が僕の生れるずつと前に開通されたものだが、連日の人足で村の人々の間にも不平の聲が高かつた。ある時、縣令の臨場の際に人足に寢てべつてゐる者のあるのを役人が咎めると、『人としてねぶたきことはあるものを吾にはゆるせ三島縣令』といふ一首を差上げたなどといふ逸話も傳へられた。その男は僕が東京に來てからも年取つて未だ存命して居つたが今は歿したであらう。

さて、新道が出來ると、人力が通る。荷車は干魚などを山のやうに積んで通る。郵便脚夫が走る。後には乘合馬車が通り、新發田の第十六聯隊も通つた。たまには一二頭馬車などの通ることもあり、騎馬の人の通ることもある。珍らしいものゝ通るときには、寶泉寺まで走つていつて遠目金でそれを見た。

人力車夫が此の大街道を勢づいて走つてゐるときには、心中に一種の『誇』があつた。『矜恃』があつた。恰も、ヴァチカノの宮殿を歩いてゐるときに何がなし胸が開くやうに感ずるが如きものである。僕の父にしてもさうである。父はこの大街道を獨占したやうにして歩いてゐたときには、そこにやはり不意識の『矜恃』があつたに相違ない。父の剛愎な態度は、人力車夫の『矜恃』の過程に邪魔をしたから、梶棒をどしんと僕の尻に突當てたのである。その不意打の行爲が、僕の父の『矜恃』の過程に著しい礙を加へたのだから、父は忽然として攻勢に出でたのである。どうもそれではあるまいか。

こんなことを思つたことがある。痰持で小兵の父の一生に、かういふことがなかなかある。氣の小さい僕にはそのへんが稍興深く感ずるのであるが、その解釋の當つてゐるかどうかは分からない。

四　仁兵衛。スペクトラ

仁兵衛は村里に生れたが謡の上手であつた。それに話に云ふに云はれぬ諧謔があつた。仁兵衛はいつも日の暮方になると、丘陵にのぼつて小手をかざして、川に沿うた村だの、山ふところに點在してゐる村だのを眺める。村の家から幽かに煙の立ちのぼるのを見極めると、仁兵衛はいつも著換してその家に行く。その家には定めて婚禮があつた。祝言の座に請ぜられぬ仁兵衛ではあるが、いつも厚く饗せられ調法におもはれた。仁兵衛に持前の謡をうたひ、目出度や目出度を諧謔で收めて、結構な振舞を土産に提げて、さうして家へ歸るのであつた。村の人々はその男を『煙仁兵衛』と云つた。

その仁兵衛が或る夜更に、上等の魚を土産に持つて歸途に著くと、すつかり狐に騙されてしまふところを父はよく話した。どろどろの深田に仁兵衛が這入つて、酒風呂のつもりでゐる。そして、『あ、上燗だあ。上燗だあ』と云つてゐるところを父は話した。そこのところまで來ると父のこゑに一種の勢が加はつて、童幼は目を瞠つて父の顔を見たものである。父は奇蹟を信じ、妖怪變化の出現を信じて、七十歳を過ぎて此世を去つた。

寺小屋が無くなつて、形ばかりの小學校が村にも出來るやうになつた。教員は概ね士族の若者であつた。なかには中年ものも居た。『窮理の學』といふことが時々それらの教員の口から強調せられた。父は冬の農事の暇に教員のところに遊びに行くと、

人の境を行くが如くに氣を吐いた。

前に備はるものはあつたが、父は殆ん衝なく切りにその三稜鏡をいぢつてゐた。これは何かの爲掛(しかけ)は無いか、からくりは無いかと思つたのである。が、ちつともさういふ氣配が見えない。そして太陽光を透して見ると、なるほど七色の光があらはれる。

父は暫く三稜鏡をいぢつてゐたが、ふと其を以て爐の火を覗いた。すると、意外にも、爐の炎がやはり七つの綾になつて見える。父は忽ち胸に動悸をさせながら、これは、きりしたん伴天連(ばてれん)の爲業(しわざ)であるから、念力でなんとかしなければならぬと思つたさうである。

教師様。お前は、きりしたん伴天連に騙されて居(を)るんではあんまいな。これを見さつしやい。お天道さまも、ほれから、圍爐裏のおきも、同じに見えるのが勿體なくないか。どうか。からくりが無いやうにして此の中に有るに違ひないな。きりしたん伴天連おれの念力でなくなれ。

かういつて、父は三稜鏡をいきなり爐の炎の中に投げた。教員は驚き慌ててそれを拾つたが、忿怒することを罷めて、やはり父がしたやうに爐の炎をしばらくの間三稜鏡で眺めてゐた。教員は日輪と爐の焚火と同じであるか、違ふものであるかの判断はつかなかつた。教員の窮理の學はここで動揺した。父は滿洲から歸つて來た大山巌のやうな氣持でそこを引きあげた。

後年父は屢その話をした。開化文明の學問をした教員を負かしたといふところに、なかなか得意な氣持があつた。けれども單にそれのみではなかつたであらう。神の本願力を念じて、穀斷(こくだち)、鹽斷(しほだち)してゐたやうな父は、すぐさまスペクトラの實驗の腑におちよう筈はないのである。腑に落ちるなどと謂ふより、反撥したといつた方がいゝかも知れない。

それからずつと月日が立つて、父は還暦を過ぎ古稀をも過ぎた。父は上山町のとある店先で、感に堪へたといふ風で、蓄音機の喇叭から傳はつてくる雲右衛門の浪花節を聞いてゐたことがある。けれども、父はその蓄音機は、窮理の學に本づくものだといふことなどは追尋しようともしなかつた。スペクトラを退治した寫象なども無論意識のうへにのぼつて來なかつた。僕の言葉は少し悟めいたが、つまりそれに相違なかつた

五　漆瘡

村の學校が隣村の學校に合併されて、そこに尋常高等小學校の建つたのは、森文部大臣が殺されて、一二年も立つたころであつたらうか。

學校までは小一里あつた。雪の深い朝などには、せいぜい炭つけ馬が一つ二つ通るぐらゐなところで、道がまだついてゐない。雪が腰を沒すといふやうなことは稀ではなかつた。兒童達は五六人固まつてその深雪を犯して行くのであるが、ひどく難儀をしたものである。途中で泣出して學校に行著くまで默らなかつた童などもゐた。

けれどもそこを辛抱すれば、柳に銀色の花が咲くころから早春が來て、雪の降るのがだんだん少くなつて來る。それから一月も立てば、麗かな天氣が幾日も續いて、雪がおのづと解けてくる。道は『雪解みち』になつて、朝のうちは氷つてゐるが午過ぎからは全くの泥道になつて、歩くのにまたひどく難儀をするのが、それが幾日も幾日も續くのである。草鞋は毎日一足づつ損じて切れた。八つか九つになつた僕は、さうして毎日學校へ通つた。

そこを通越すと、道の片隅の方などに乾いたところが見え初めてくる。それが日一日と大きくなつて行つて、向うの方に見えてゐた乾いたところと連續してしまふ。さういふ土の乾いたところを、兒童達は『草履道』と云つた。さうい

ふ乾いたところが見え出すと、兒童達はそこを踏んで跳ねまはつてあそぶのである。

街道の雪が消え、日あたりの林の雪が消え、遠山を除いて、近在の山の雪が消えると、春が一時に來てしまふのである。太陽の光はまばゆいやうに輝く。木の芽がぐんぐん萌えはじめる。苞をやうやく破つたばかりの、白つぽいやうな芽だの、赤味を帶びたやうなものだの、紫がかつたものだの、童達は道ぐさ食ひながらさういふ木の芽をぼきりと摘んで口の中で噛んだりした。雲雀は空氣を震動させて天の方にゐるかとおもふと、閑古鳥は向うの谿間から聞こえる。榆、櫟、の若葉が風に裏がへるころになれば、そこに山蠶が生れて、道の上に黒く小さい糞を澤山おとすのであつた。

五六人、總勢十人ぐらゐの童達は、さういふ春を享樂し、ほしいまゝに道草くひながら、毎日おなじ道を往反するのである。蟻の穴に小便をしたり、蛇を殺してその口中に蛙を無理におし込んだり、さういふ惡業をしながら、時間が迫つてくると汗を出して一齊に學校まで走つた。

然るにこれらの童達を威壓してゐる童子がひとりゐた。これは僕の從兄弟になるのだが、年はそのころ十一二ぐらゐであつた。年かさも大きいし、猛烈なところがあつて、村の學校の童達をみんな統御してゐた。周圍の童達を引率して、學校の授業も何もかまはずに山や澤に出掛けるので、そのやり方がどうも一風變つてゐたが、其奴のいふことを聽かない訣にはいかぬといふ何處か猛烈なところがあつた。一度教員は忿怒して學校の梁木にこの童子をつるして折檻したことがある。それは森文部大臣が東北の學校を視察して、山形から上山に行くために早坂新道を通られるといふ日であつた。僕らは文部大臣を敬禮するために四五日の間その稽古をした。さてその日になり、滅多に穿くことのない袴などを穿き、中には、これも滅多には著ぬ襯衣などを著て、白い釦で手のところを留めたりなどして學校に行つたのでも

つたが、童子は何時の間にかさういふ童達を引率して山に遊びに行つてしまつた。それであるから、文部大臣が御る時がだんだん近づいてくるのに、童達が歸つて來ないといふのであつた。併し文部大臣の微行がどうにか間に合つて、僕等は早坂新道に整列し、人力車で通つた文部大臣森有禮に小さいかうべをさげた。金毘羅か何かの神のやうに空想されてゐた文部大臣を僕らはまのあたり見たのであつた。教員はその日は平穩な風をしてゐた。が、次の日に、その童子を學校の梁木に弔して、鞭で續けざまに打つてみんなに見せたのであつた。それから間もなく森文部大臣が殺されたのだといふやうな氣がする。さういふことは總てまだ學校の合併されない前のことである。學校が合併されてからは、その童子もやはり學校に通つて、おのづから周圍の童どもを威壓してゐた

美しく晴れた春の朝に、その童子は僕らを合せた七八人の中心になり、思ふ存分道ぐさを食ひながら學校へ出掛けて行つた。硫黃泉を源とする酢川（すかは）の橋から石を投げたりなんぞして、しばらく歩くと、道端に五六本の漆の木があつた。これは秋には眞赤に紅葉したのであつたが、今は小さい芽が枝の尖端のところから萌えいでてゐる。

その漆の木のところに行くと、その童子はみんなに列ぶやうに言附けた。さうして自分で漆の芽を摘み取ると芽の摘口から白い汁が出て來た。童子はみんなに腕をまくらせて、上膊の面のところに、漆の汁で女陰と男根とを畫いた。女陰などといふと、すさまじく聞こえるが、實は支那の古篆の『日』の字のやうな恰好をしてゐるものに過ぎなかつた。男根でもさうである。皆『Präputium』が無かつた。そして思ひきり單純化されてゐた。中江兆民は癌に罹つて餘命いくばくもないといふとき、『一年有半』といふ隨筆を書いた。そのなかに慥か、『陰陽二物』の何のと云つて日本國を貶してゐたとおもふが、あれは無理だ。羅馬は無論、巴里に行つても、倫敦、伯林に行つても、さういふ邪氣の無い繪はいくつも描いてあつた。この童子もおのづから邪氣の無い繪をかいたに過ぎない。童子はそれでも漆の芽を幾つも取換へた

りなどして、分折つて描いた。描いて貰ふと皆が聲を擧げて笑つた。そして汁の乾くのを促すために息を吹きかけた。

した。

大小いろいろと描いて來て、僕の腕には割合に小さいのを描いてくれた。それは今からおもへば、降誕から八日めに割禮した、耶蘇基督の男根のやうな恰好であつたのではなからうか。僕も汁の乾くのを促すためにしきりに息を吹きかけたりした。それから三つ四つ描いてしまつて、童子は最後に自分の腕に思ひ切り大きいのを描いておしまひにした。みんなは汗をかきながら一目散に學校へ走つた。

その次の日の朝である。みんなが集まつて腕の繪を見せ合つて大聲で笑つた。繪のところだけが黒くなつて乾いたから、きのふに較べてはつきりして來てゐる。童子も思ひ足つたやうな面構をした。然るに僕のだけは、繪のところが黒くならずに赤くなつて少し腫れあがつてゐる。ゆうべあたりからどうも痒い。みんなのと違ふので不安に思つたが、その日はそのまゝ過ぎた。

その次の日の朝である。みんなが繪を見せあふと、繪のところが益々黒くなつて乾いてゐるのに、たゞ僕のだけはゆうべから痒味が増して來、それに痛味が加はつて、繪のところから汁が出はじめた。皆が面白がつてゐるけれども、僕はそれどころではなかつた。授業をうける時にも痒さと痛さになやんで居た。さうすると、澤蟹をつぶしてつけると直るといふものがあつた。學校の裏は直ぐ澤になつてゐて、そこの流には小さい蟹が幾つも住んでゐた。石を一寸避けると小さい蟹どもが滑稽なやうに出て來た。僕はそれをつぶしてなるたけ臓腑のところを、かぶれかゝつてゐる腕の黥繪になすりつけた。けれども、赤く腫れて汁の出て來たところは今度は結痂して行つた。「かさぶた」が出來て行つた。繪のところだけが黒く結痂したから、直つたのかといふとさうではない。「やつぱり

だから風呂に入つた時などに、秘かに骨折つてその痂を除いてみると、その下は依然として爛れて居つて何だか深いのやうになつてゐる。そして次の日には二たびそこに結痂するのである。ほかの童らは、さういふ女陰・男根圖のことなどはいつのまにか忘れて行つた。それはその筈である。描いて貰つてからすでに一ケ月餘も經過したのであるから、さういふ繪は剝げて取れてしまつたのが多かつた。縱ひ殘つてゐても、そんなものはもう珍らしくはなかつた。たゞ僕ひとりは毎日そのことで苦しんだ。さうして、痛いのを我慢して痂を除いてはそこに蟹の臟腑をつけてゐるに過ぎなかつた。すると、痂を取つたところの瘡がだんだん深くなるのに氣が付いた。そこでひどく危懼不安の念に襲はれるのであるが、これを母や父に打明けることを敢てし得ない。僕は空しく二月（ふたつき）を過ごした。

　けれども、或時僕はとうとうそれを母から見付けられた。そして僕はその成行を一々白狀してしまつた。母は僕を父のところに連れて行つた。僕は恐る恐るすでに結痂した男根圖を父に見せた。父も母も共に笑つた。僕も氣が急にゆるんだから大きなこゑを立てて笑つた。その晩に父は何だかどろどろした油藥（あぶらぐすり）のやうなものを拵へて來て塗つて呉れた。さうすると二三日で痂が取れて行つた。そこへまた油藥（あぶらぐすり）のやうなものを塗つて呉れた。ひどく苦んだ漆瘡（うるしかぶれ）の男根圖は、かくのごとくにしてつひに直つた。瘡は極く『平凡』にぐんぐん拵えて行つた。

『はじめは脱兎の如く』と云つておいて、そして『をはりは處女のごとし』と云ふあたりは、味はつてみるとどうも旨（うま）いところがある。たゞ餘り陳腐になつてゐるから、今までそれを味はぬのであつた。その陳腐さは、レオナルド・ダ・ヴインチの畫いた、モナ・リザ・ジョコンダの像のやうなものであつた。そして、僕の漆瘡物語の結末が消えるやうにして無くなつてしまつたときに、この諺、警句をおもひ起したのであつた。おもひ起して味はつてみるとどうも言方に旨いところがあつた。僕は心中ひそかに滿足をおぼえた。レオナルド・ダ・ヴインチをおもひ起したのはかういふ訣（わけ）であ

る、

けれどもこれは自ら耻ちてゐる。ただ、一つばかりここに記入しておかうと思ふことがあつた。その一つは、『凡そ兒童はその父の能力に就いてどう思惟してゐるか』といふことである。時には兒童は父の萬能を信ずるものではあるまいか。兒童は父と母とのことなどは夢寐にも信ぜないから、作男などが來て、『坊ちやん。坊ちやんはどうして生れて來たのだか知つてますかい』などと云つて教唆すると、兒童は目を瞬るのを常としてゐる。さて時が經つと、兒童のまへには父は追々と平凡化されて行つた。父は虹のことをノズと云つてゐた。これが父祖から傳へられた名であつたからだ。虹が向うの小山のうへに立つと、『茂吉見ろ。あそこさ二つもノズ立つたから』から父がいふ。さうすると僕は、『父つあん。あれあノズでは無いどつす。ニジと云ふんだどつす』などと云つて父を駁した。當時「讀書入門」といふののなかに、『あめはれて、にじたつ』といふ文章がある。それが根據であつた。僕が少しづゝ大きくなるに連れて、父は益々平凡化されたから、父が三稜鏡を炎のなかに投じた話などをしても、僕は心中、感服したことはない。然るに僕が痎瘧であれほど苦しんだ時に、父は極めて平凡にそれを療して呉れた。僕はその時、父には何か知らん、やはり特殊の『能力』があるのではあるまいかと思つたのである。ここで、父の平凡化は別な色合を以て姿を變へたのであつた。中味も變つたが、方術も變つたのであつた。それから書記さうとする二番目は、『平凡治癒』といふ概念である。實地醫家は肯んずるに違ひない。實地醫家は、疾は幾ばく骨折つても癒えぬときがある。さうしてゐて癒ゆるときには極めて平凡に癒えてしまふ。さういふことを幾たびも經驗してゐるに違ひない。疾を『平凡治癒』の機轉に導くのが名醫で、そのあとは將棋の差手などを考へてゐても好いのである。

彼の童子から漆の汁で描いて貰つた繪がかぶれて、一月も苦しんだけれどもそれは

ころが瘢痕組織で補はれたと見えて、そこに痕が殘つた。その小さい男根圖の痕は、小學校を出て、中學校に入り、中學校を出て高等學校に入るころまでは殘つてゐた。僕は風呂に入つたりすると其の痕を凝視して、追憶にふけることもあつた。然るにその痕はいつのまにかおぼろになつて行き、今ではもはや其の形を認めることが出來なくなつた。僕もそろ〳〵初老期へ近づいて來た。南獨逸の客舍で父の死報に接した時も、僕は忽然として漆瘡のことを想出し、床のなかで上膊の内面を凝視したのだけれども、形はすでになくなつてゐた。

漆瘡に、生蟹黄調塗とか、蟹沫塗之とか、または、蟹殼滑石研細摻之乾者蜜和塗などといふ療方のあるのは、漢醫方に本づくのであつた。和文に、漆まけを癒しとあるのも亦さうである。父の拵へて呉れたものはそんなものではなかつた。油藥のやうな、どろどろしたものであつたが、その藥の色やなんかはどうしてもおもひ起すことが出來ない。そのあたりの父の顔も分らない。努めておもひ浮べやうとすると、晩年の老いた父の顔のみが浮んでくるのであつた。

六　初詣

明治二十九年に丁度僕は十五になつたので、父は湯殿山に初詣に連れて行つた。その時父は四十五六であつたたらうから、現在の僕ぐらゐの年であるが、もう腰が屈つてゐた。これは百姓爲事に始終したためであつた。もう腰が屈つてゐても、幾度となく湯殿山に參詣し、道中自慢であつた、そのおもかげがまだ殘つてゐた。

た。僕はすつかり疲れた。ここまでは此から十四里にたつぷりあつた。第二日には、まだ暗いうちに志津といふ所に著いて、そこで先達を頼んだ。それからの山道は雪解の水を渡るといふやうなところが幾つもあつた。まだ午前であつたが、湯殿山の谿合にかかると、風の工合があやしくなつてきて、とうとう『御山』は荒れ出して來た。霙雨が全山を撫でゝ降つてくるので、笠は飛んでしまひ、著てゐる蓑もちぎれさうになるのである。大木の枝がぼきぼきと折れた。これでも先達はひるまずに、六根清淨、御山繁盛と唱へて行つた。さうして行くと、渡るべき前方の谿は一めんの氷でうづめられてゐる。それが雨で洗はれてすべすべになつてゐる。下手の方は深い谿に續いて居つて、ひどくあぶないところである。僕は恐る恐るその上を渡つて行つたが、そこへ猛風が何ともいへぬ音をさせて吹いて來た。僕は轉倒しかけた。うしろから矢張りなづみながら歩いて來た父は、茂吉俯へ。其處さ、べたつと俯へ。鋭い聲でさういつたから、僕は何だか眩暈でもしてゐるやうな氣持で氷のうへに俯つてゐた。やつとのことでしがみ付いてゐたといふ方が好いかも知れない。さういふことを僕はおぼえてゐる。

『語られぬ湯殿にぬらす袂かな』と芭蕉が吟じた、その湯殿の靈山に僕は參拜して、『初まゐり』の願を遂げた。鐵の鎖で辛うじて谿底の方へくだつて行つたことだの、それから、谿間の巖から湯がどんどん湧いてながれてゐるところだのをおぼえてゐる。もどりに志津に一泊して、びしよぬれの衣服をほした。行程十六里ぐらゐだが、この日は不思議にくたびれなかつた。

第三日は、麗かな天氣に歸路を歩いてゐた。七八里も來たころ、父は茶屋に寄つて、ぬた餅を註文した。ぬた餅と謂ふのは、枝豆を擂鉢で擂つて砂糖と鹽で鹽梅をつけて、餅にまぶつたもので、これは非常に旨いものである。父は、茂吉なんぼでも食べろ。と云つた。それから、道中をするには腹を拵へなければ駄目である。山を越す時などには、腹一

腹を拵へて、それから、てつぺんで腹を拵へて、少し物を持つて出懸けるといゝなどといつて、なかなか上機嫌である。ふたりは腹にたらふく食つてまた歩き出した。

もう山形の街も近くなつたころ、當時の中學校で、歴史を擔任してゐる教諭の撰した日本歴史が欲しくなり、しきりにそれを父にせがんだ。その日本歴史は表の様に出來てゐて、工面のいゝ家の子弟は必ず持つてゐたし、小學校でも先生がそれを教場に持つて來たりするので、僕は欲しくて欲しくて溜まらなかつたものである。書物の價は四十錢であつた。然るに父はどうしてもそれを買つて呉れない。そのうち、僕らは山形の街に入つた。僕は幾たびも頼むが父は承諾しない。そのうち、書物の發行所、五十嵐書店のまへを通りすぎてしまつた。僕はなぜ父はそんなに吝嗇だらうかなどと思ひながら父の後ろを歩いてゐた。間もなく盂蘭盆が來て、兄が訣なくその書物を僕に買つて呉れた。

七　日露の役

日露の役のあつたときには、僕はもう高等學校の學生になつてゐた。日露の役には長兄も次兄も出征した。長兄は秋田の第十七聯隊から出征し、黒溝臺から奉天の方に轉戰してそこで負傷した。その頃は、あの村では誰彼が戰死した。この村では、誰彼が負傷したといふ噂が毎日のやうにあつた。恰も奉天の包圍戰が酣になつた時であつただらう。夜半を過ぎて、秋田の聯隊司令部から電報がとどいた。そのとき兄嫁などはぶるぶるふるへて口が利けなかつたさうであつた。父は家人の騒ぐのを制して、袴を穿き、それから羽織を著た。それから弓張を灯し、佛壇のまへに据わつてさうして電報をひらいたといふやうなことを、僕が偶々歸省したりすると姉などが話して聞かせるのであつた。よそ人は僕の斯くのごとき文章は、之をただ傍觀して呉れればいい。血族の相續あることとのみに因つて、僕は斯くの如きことをも書留

めるのであるから。

田植をどりといふのを習つて、その女形の方になつたり、堀川の陣屋があつた時に、農兵になつて[illegible]を習つたり、おいとこ。しよがいな。三さがり。おばこ。木挽ぶし。何でもうたふし。祖父以来進歩黨時代からの[illegible]政會に力瘤いれて、蓮應和尚から草稿をかいてもらつて、堂々とした政談暗記演說をしたり、劍術に凝り、植木に凝り、和讃に凝り、念佛に凝り、まへには穀斷、鹽斷などをし、さうして死んで行つた。

血脈の聯鎖があることのみで、如是のことを記入するといふのは僞ではなかつた。ただ僕のやうな、物に臆せ、すべてが物褄く、ひとを恐れ、心の競ひの尠いものが、たまたま父の一生をおもひ起すと、そこにはあんまり似寄の無いことに氣付くのであつたが、けれども是は自ら斯う思ふといい。僕は父が痰を煩つたときの子である。生飯の砂糖漬などを舐つてゐたときの子である。さういふ時でも子は生れるものだから。ただ、どちらにしても馬胎を出でて驢胎に生じたぐらゐに過ぎぬとは僕もおもふ。

八　青根溫泉

父は五つになる僕を背負ひ、母は入用の荷物を負うて、青根溫泉に湯治に行つたことがある。青根溫泉は藏王山を越えて行くことも出來るが、その麓を縫うて迂回して行くことも出來る。

父の日記を繰つてもらふと、明治十九年のくだりに。『八月七日。雨降。熊次郎、おいく、茂吉、青根入湯に行。八月十二日、大雨降り大川の橋ながれ。八月十四日。天氣吉。熊次郎、おいく、茂吉三人青根入湯返り。八月廿二日。天吉。傳右衛門、おひで、廣吉、赤湯入湯に行。九月朔。傳右衛門、おひで、廣吉、赤湯入湯かへる。

僕を連れて青根温泉に行つたことを記し、ついで、祖父母が僕の長兄を連れて、赤湯温泉に行つたことを記してゐる。父の日記は概ね農業日記であるが、かういふ事も漏らさず、極く簡単に記してある。青根温泉に行つたときのことを僕は極めて幽かにおぼえてゐる。父を追慕してゐると、おのづとその幽微になつた記憶が浮いてくるのである。

父は小田原提灯か何かをつけて先へ立つて行くし、母はその後からついて行くのである。山の麓の道には高低いろいろの石が地面から露出してゐる、石道であるから、提灯の光が揺いて行くたびに、その石の影がひよいひよいと動く。その石の影は一つ二つではなく澤山にある。僕が父の背なかで眠がらずにゐたのはさういふ訣合からであつた。僕はさういふことをおぼえてゐる。

まだ夜中にもならぬうちに家を出て、夜通し歩いた。あけがたに強雨が降つて合羽まで透した。道は山中に入つて、小川は水嵩が増し、濁つた水がいきほひづいて流れてゐる。川幅が大きくなつて橋はもう流されてゐる。山中のこの激流を、父は一度難儀してわたつた。それからもどつて、こんどは母の手を引かへて、二人して用心しながら渡つたところを僕はおぼえてゐる。それから宿へ著くと、そこの庭に四角な箱のやうなものが地にいけてある。清い水がそこに不斷にながれおちて、鰻が一ぱい泳いでゐる。そんなに澤山に鰻のゐるところは今まで見たことはなかつた。

帳場のやうなところにゐる女は、いつも愛想よく笑顔してゐるが、母などよりもいゝ着物を着てゐる。僕が恐る恐るその女のところに寄つて行くと、女は僕に菓子を呉れたりした。母は家に居ると[illegible]

うへに[illegible]
てゐる。
或る日に、多分雨の降つてゐた日ででもあつたか。湯治客がみんなして芝居の眞似をした。何でも僕らは土間のところで見物してゐたとおもふから、舞臺は奥座敷であつたらしい。仙臺から湯治に來てゐる媼なども交つて芝居をした。その時父はひよつとこになつた。それから、そのひよつとこの面をはづして、囃子手のところで笛を吹いてゐたことをおぼえてゐる。

父の日記に據ると、青根溫泉に七月ゐた訣である。それから、明治二十丁亥年六月二日。晴天。夜おいく安産。と父の日記にあつて、僕の弟が生れてゐるから、どうも青根溫泉湯治中に母は懷姙したのではないかと僕は今おもつたのである。」

九　奇蹟。日記鈔。

不思議、奇蹟などいふことは、中江兆民には無かつた。それは、開化を輸入するには物質窮理の學を先づ輸入せねばならぬから、兆民は、當時『理學』と謂つてゐる哲學をも輸入したが、いきほひ『奇蹟』を對治する立場にあつた。けれども僕のやうな氣の弱いものには、『奇蹟』は幾つもある。

大正十三年の暮に火事があつて、僕の青春なんどもあんなに燒け果ててしまつたのに、僕が郷里から持つて來て、新聞紙に一包にしてゐた祖父と父の覺帳が煙にこげたまゝ燒けずにゐた。びしよぬれになつてゐた日本紙で綴つた帳面を一枚一枚火鉢の火で乾かしながら、僕は實に強い不思議を感じてゐた。僕の妻は、紙を乾かすのを手傳ひながら、

『輕いものですから、二階の燒落ちるときに跳ね飛ばされたんでせう。』などと云つた『また被服廠の時のやうにつむじ風が起つて吹き飛ばしたのかも知れませんね』『併しあんなぺらぺらな紙の帳面ですから、直ぐ燒けてもいゝ筈ですがね』などとも云つた。甥はなるべく物理學の理法で說明をつけようとするのであるが、それでは分からない點が幾らもあつた。しまひには甥もさう簡單には片付かないといふ様な顏をして帳面を乾かすことを手傳つてゐた。

　祖父のものは、俳諧連歌か何かを記入したものであつたが、父のものには、「品々萬書留帳」といふ、明治七甲戌年二月吉日に拵へたものである。これは長兄が生れたとき、祝に貰つた品々などの記入から始まり、法事の時の獻立、病氣見舞の品々、婚禮のときの獻立など、こまごまと記してあるので、僕は珍しいと思つて貰ひ受けたのであつた。例へば、明治廿三年二月廿三日夜より廿四日。盛華院蓮阿妙淨善大姉三回忌佛事獻立控の廿四日十二人前の條に、平（かんぴよう。いも。油あげ。こんにやく。むきたけ）。手しほ皿（奈良漬。なんばん）。ひたし（韮）。皿（糸こん。くるみ合）。卷ずし（黑のり、ゆば）。吸物（包ゆば二つ。しひたけ。うど）。あげ物（牛蒡。いも。かやのみ。くわい。柿）。煮染（くわい。氷こん。にんじん。竹の子。しひたけ）。手しほ皿（燒とうふ。くづかけ。牛蒡黑煮）。皿（うこぎ。わらび漬）。下あげもの（くわい。牛蒡。柿。かやのみ。赤いも　。大平（くわい。しひたけ。ゆづ）。汁（とうふ。ふのり）。茶くわし（せんべい）。引くわし（うんどん五わ但四十めたば。まんぢゆう七つ但一つに付四厘づゝ）。こんなことが書いてある。これで思起すのは、陰暦の二月すゑには、既に韮が萠え、木の新芽が饌に供し得る程になつてゐるといふことである。それから、『わらび漬』などとあるのも少年の頃をしのばしめるのであつた。

　その父の帳面に、僕が生れた時祝に貰つた品々を記した個所があるから一寸書きとどめておきたいと思ふ。明治十五壬午年三月廿七日生出。守谷茂吉義豊。安産見舞受帳。小玉餘魚七枚、曾野彌五右衛門。金二十錢外に味噌一重、金澤治

[illegible]
衛門。焼かれい三枚、松原村山本善十郎。金五錢、齋藤宗右衛門。金十錢、大澤才兵衛。以上であるが、ここに[illegible]から八錢
硯を貰つて居り、他村から一軒貰つて居る。他村の松原村と記してあるのは、母の姉が嫁入つたところである。これか
ら最後に、大澤才兵衛とあるのは、父の弟で、漆の芽で僕の腕に小男根を描いてくれた其子の父である。明治十五年頃
の東北の村ではこんな程度であつた。

僕は留學から歸つて來て、家兄に頼んで少しばかり父の日記から手抄して貰つたのであつた。そのうちに僕に錢を與れたのを記したところが處々に見つかる。明治十九年十月十五日曇り。二錢柿代富太郎、茂吉え遣し。明治二十年七月十五日。一錢茂吉え遣し。明治廿三年正月七日。十八錢、茂吉授業料正二三ヶ月分。三錢茂吉え遣し。十日休日。三錢茂吉え遣し。十五日休日。一錢茂吉え遣し。七月二日。五錢茂吉書物代。十二日。四錢茂吉え遣し。十二月廿四日。二十二錢茂吉藥代。こんな工合である。ここに二十二錢茂吉藥代とあるのは、僕が繪具に中毒して黄疸になつたとき、父は何處からか家傳の民間藥を貰つて來てくれた。それを云ふのである。

明治廿四年。二月十五日。一錢直吉筒代。五錢富太郎え遣し。三錢茂吉え遣し。三月三日。二十錢茂吉書物代書學紙共。十五日。一錢茂吉え遣し、廿八日。二錢茂吉え遣し。八月十四日。天氣吉。茂吉直吉おみゑ上山行。九錢茂吉筆代。十月廿一日。天氣吉。七錢茂吉下駄代。廿二日。天氣吉。廣吉茂吉は半郷學校え天子樣のシヤシン下るに付而行。熊次郎紙つき。富太郎金三郎深田の萁刈。女中三人は午前菜つけ。午後裏畑草取。傳太郎を頼で十一俵買。

合併になつた隣村の學校に、御眞影がはじめて御さがりになつた時の趣で、それは明治廿四年十月廿二日だつたことが分かるが、これはすべて陰暦の日附である。大雪にならぬ前に深田の萁を刈り、菜を漬け、畑の草を取つて播くべきも

のは播き、冬ごもりの準備をする光景である。父の日記は、大凡農業日記であつて、そのなかに、ぽつりぽつり、僕に呉れた小遣錢の記入などがあるのである。明治廿二年の條に、寶泉寺江泥ぼう入、傳右衞門下男刀持て表より行。熊次郎槍持て裏より行、などといふ事件の記事もある。これは、寶泉寺住職隆應和尚が上京して留守中、泥棒が入らうとして日本刀で戸をずたずたに切つた。倔強の若者が二人ばかり宿つてゐたが、恐れてしまつて何の役にも立たなかつた時の話である。傳右衞門は祖父の名で未だ存命中であつた。熊次郎は父の名である。

一時劍術に凝つたり、砲術を習つたりした名殘で、どちらかといへば、さういふ時に槍など持つことを好んでゐた。父はさういふとき『得手まへ』といふ言葉を好く使つた。

十　念珠集跋

「念珠集」は、所詮『わたくしごと』の記に過ぎないから、これは『秘錄』にすべきものであつた。それであるから、僕の友よ、どうぞ怒らずに欲しい。

ミユンヘンに留學中は、主に實驗腦病理學のことをやつた。少い暇に讀む書物も、それから考へることもさういふことが主になつてゐた。ischämische Zellveränderung といふやうなこと、Kolliquations-Nekrose とか、koagulierende Nekrose とか、例へばさういふ概念が頭を領してゐるのであつた。そのまた暇に僕は心理書を讀んでみた。Hylopsychismus といふことだの、Zerlegung der Gignomene とか、Unbewusstheit der Reduktionsbestandteile とかいふことだの、さういふことが頭を惱ましたのであつた。

ところが、僕の下宿に馬琴のものが置いてあつた。もう古びて、何代もの留學生が異郷の寂しさをそれで紛らしたと

[illegible]むかしに、天竺の國にひとりの若い修行僧が居り、小國の女尼するのを見て、髑髏のうへに[illegible]ことが書いてあつた。僕は計らずも洋臭を遠離して、東方の國土の情調に浸つたのであつた。さういふ心の交錯にあつたときに、僕は父の訃音を受取つた。七十を越した齢であるから、もはや定命と看ても好いともおもふが、それでもやはり寂しい心が連日湧いた。夜の曉方などに意識の未だ清明にならぬ狀態で、父の死は夢か何かではなからうかなどと思つたこともある。併し目の覺めて居るときには、いろいろと父の事を追慕した。それは遠く東海の生れ故郷の場面であつた。「念珠集」は所詮、貧しい記錄に過ぎぬ。けれどもさういふ悲しい背景をもつてゐるのである。僕を思つてくれる友よ。どうぞ怒らずに欲しい。

大正十四年八月に、比叡山の安居會に出席して、それから先輩、友人五人の同行で高野山にのぼつた。登山自働車の終點で籠に乘らうとしたときに、男が來て北室院といふ宿坊を紹介してくれた。それから豪雨の降るなかを籠で登つて宿坊へ着いた。そこに二晩宿り、貧しい精進料理を食つた。饅頭が唯ひとつ寂し相に入つてゐる汁で飯を食べたことなどもある。而して、そこで勸められる儘に、父の追善のために廻向をして貰つた。三圓ほど納めた。その時ふと僕は父が死んでからもう三回忌になると思つたのであつた。

本來からいへば七月に三回忌の法事をするのであるが、稻作の爲事が終へてから行ふことになり、八月、九月、十月と過ぎて、十月のするに行つた。けれども僕は東京の事情に礙げられて列席することが出來ないので、そのことをも僕はひどく寂しくおもつた。法事終へてから家兄が父の小さい手帳を屆けて呉れた。これは大正四年に西國に旅した時の日記である。

五月六日。舊三月廿三日。天氣吉。吉野町より、朝六時吉野山のぼり、午前十一時吉野驛發。高野口驛え午後一時三十分着。是より五十丁つめ三里高野山え上り、午後八時頃北室院に着。一圓、吉野町宿料拂。五十錢、吉野山見物車ちん。五十錢、同所寺に參詣費。三十錢、吉野口驛より高野口驛迄切符代。五十錢、晝飯料。二圓六十錢、籠に乘賃拂。七圓五十錢、日ばい料北室院に上げる。

五月七日。舊三月廿四日。晴天。朝の八時より參詣致。總參詣人一日へいきん二萬人以上づつ有山。午後一時より高野山より下り高野口驛え午後四時に着。是より粉河驛え着。かなも館支店宿泊。一圓、參詣費。一圓五十錢、北室院宿料。五十錢、荷物負賃。一圓、途中小使。五十錢、晝飯料。五十錢、車賃。四十錢。汽車賃。

これを見ると、父は十年前に高野山にのぼり偶然にも北室院に宿泊して、宿料が一圓五十錢なのに、日牌料七圓五十料も上げてゐる。これは、僕の母のために供養して貰つたのに相違ない。母は大正二年に歿したのだから、大正四年は三回忌に當る都合である。父の日記に據ると、高野山を半日參詣して直ぐその午後には下山して居る。佛法僧鳥を聞かうともせず、寶物も見ず、大門の砂のところからのびあがつて、奥深い幾重の山の遙か向うに淡路島の横ふのも見ようともせず、あの大名の墓石のごたごたした處を通り、奥の院に參詣して半日つぶして直ぐ下山して居る。道中自慢であつた父も、その時は既に六十四五歲になつて居り、四十歲ごろから腰が屈つて、西國の旅に出るあたりは板に紙を張りそれを腹に當てて歩いてゐた。さうすれば幾分腰が延びていいなどと云つてゐたのだら、高野の旅なども矢張り難儀であつたらうと僕はおもふ。そして、僕らが食べたやうな、汁の中にしよんぼりと入つた饅頭を父も食べたのだらうとおもふと、何だか不思議な心持にもなるのであつた。これを「念珠集」の跋とする。大正十五年二月記。

二人凌山

（耽々亭聞書の一）

吉井勇

一

桑名、岐阜、豐橋、濱松と、東海道を逆に打つて來た橘家燕之助の一座は、靜岡まで來ると到頭解散しなければならないやうなことになつてしまつた。もともと女の音曲師を眞打にした、寄り合ひ世帶の一座のことだから、旅の間も紛紜が絶えず、さう長續きがするとは思はれなかつたが、まだ沼津、小田原と二た場所も、約束の出來たところもあるのに、急に解散することになつたのは、燕之助の師匠の圓朝の亡くなつたことが原因だつた。圓朝の亡くなつたのは明治三十三年の八月十一日で、その翌日にはもう燕之助の一座と云ふものはなかつたのである。

「仕方がねえ。世間からは妾だらうと云はれてゐるほど、可愛がつて貰つた師匠に死なれたんだ。とても旅なんぞ興行ちやあゐかれねえだらうよ。」

一座のものはこんなことを云つて、思ひ思ひに別れて往つたが、その中で橘丸と燕藏の二人だけは、はたと往く先に當惑してしまつた。もう二三年で眞打になれやうと云ふ橘丸は、まだ二十を越したばかりの遊び盛りで、今度かうして燕之助の一座に加はつて旅に出たのも、いろいろ東京にゐられない譯があつたためからであつた。それだから無論東京には歸れなかつたし、京大阪の方にも、去年一昨年と二年近く、修業に往つてゐた間に、不義理の數々を重ねてゐた。燕藏はもう五十に近い老人だつたが、持つて生れた博奕好きから、旅でなければ名前の出せない身の上だつた。

「おい、困つたね。燕藏さん。如何するい。」

「如何するつて云つたつて仕方がねえ。二人で暫く稼がうぢやないか。」

「しかし二人ぢやあ心細いなあ。」
「なあに心細いことがあるものか。おれが落語をやつて、お前が講釋をやるのよ。」
「おれには講釋なんか出來やしねえ。」
「なあに出來ねえことがあるものか。お前の話しつ振りは講釋には持つて來いだよ。」
「さうかな。しかし何にも材料がないぜ。」
「なあに材料なんか如何でもならあ。」
「如何でもなるつて、お前さん知つてゐるのかい。」
「うん、おれだつてちつとは知つてゐるし、おれの鞄の中にも、速記本が二三冊入つてゐたつけ。」
「おや、おや、速記本の講釋師か。しかし落語ぢやあ如何していけねえんだ。」
「うん、實はおれの考へぢやあ、これから湯治場を廻らうと思ふんだが、それには講釋師が一人ゐなくちやあいけねえよ。」
「それぢやあお前講釋をやつたらいいぢやあねえか。」
「ところがおれのこの低い調子ぢやあ駄目なんだ。まあ、兎も角もお前一晩やつて見たら如何だね。」
「うん、やつて見てもいいが、捕かつたら一晩で止めるよ。」
「ああ、いいとも、ところで昨夜の二丁町の割前はいくらになるね。」
「これから一緒に稼ぐとなりやあ、そんなものは後でもいいよ。」
「さうか。それぢやあそろそろ出懸けるとしやう。」
こんなことから二人はまた一緒に寂しい旅を續けることになつた。同じ宿屋に泊つてゐた、日本手品の德蝶齊が、名古屋で藝者をしてゐる娘のところに、往くと云ふのと停車場で別れて、二人は上りの列車に乘つたが、燕藏が第一に目指したところは、夏で客が入り込んでゐるだらうと云ふ修善寺だつた。燕藏は汽車に乘つて、腰掛の上に腰を下ろすなり橘丸の方に澄んだ目を向けて話し懸けた。
「ねえ、橘丸さん、如何もおれの考へは當つたと思ふよ。これから先づ修善寺を振り出しに、天城を越して伊東に出るんだ。そしてあれから船で熱海へ往つて、ここで稼いで湯河原へ往く。ねえ、如何だい。ここまで來るうちには、二人とももう大分懷が溫かくなつてゐる譯だが、まだその上に箱根つてものが控へてゐるんだ。へゝゝゝ湯治をしながら金が殘るなんて、こんなうまい商賣はありやあしないぜ。」
橘丸もまだ年が若かつたので、かうぺらぺら煽て調子で喋り立てる燕藏の言葉を聽くと、すつかり乘り氣になつてしまつ

た」
「成程、こいつあ燕藏さん、お察だね。いいよ。おれはもう講釋でも何でもやるよ。」
「うん。何しろ湯治場などでは、落語よりも講釋の方が受けるからね。何でも受けるものをやつて、座敷の數を多くしなくつちやあ合はねンやね。」
「しかしうまく往かねえ時は態あねえな。」
「なあにお前さんなら大丈夫だ。講釋と云ふ觸れ出しで、人情噺をやつたつて、お茶位濁せると云ふものぢあねえか。」
「成程、さう云ふ術もある譯だな。」
橘丸はさう云つてから、不圖氣が付いたやうに訊いた。
「しかし、燕藏さん。講釋師に橘丸つて云ふ名前は可笑しいだらう。」
「うん、橘丸つて名前は、ちよつと講釋師には篏らねえな。何とかひとついゝ名前を考へやう、」
かうして二人でいろいろ考へた末が、やつと三島で汽車を降りる間際になつて、「神田凌山」と云ふ名前がいいと云ふことに話が極まつた。
「ねえ、いい名前ぢやないか。凌山なんて名前は、無論神田派にねえに極つてゐるから、これなら何處へ往つたつて、あいつもましい、[illegible]
燕藏はさう云つて、ひとりで喜んでゐたけれども、橘丸は何だか心が浮かなかつた。講釋師に化けると云ふことには、生活きの手段としては面白かつたが、そこには何處か藝人として、慰めることの出來ないやうな、かなり深い寂しさがあつた。こんなにしてまで稼がなければならないかと思ふと、われとわが身が情なかつた。

三島の町で一晩泊つて、翌くる日の朝早く乘合馬車で出懸けたが、丁度客が誰もなかつたので、二人は遠慮なく話し合ひながら、旅を續けてゆくことが出來た。大場のあたりまで來ると、日は窓に引いた淺黄色の雨汗染のある幕を洩れて、ちりちり灼けるやうに射し込んで來た。旱續きなので黄色い土埃りが、馬の蹄の音と一緒に舞ひ上がつた。
「おや、おや、今日もまた油照りだ。」
暫く默つてゐた橘丸は、歎息を吐くやうな調子でさう云つてから、ふと思ひ出したやうに言葉を續けた。
「ねえ、燕藏さん。圓朝師匠は惜しいことをしたね。」
と、これもぼんやり何か考へ込んでゐた燕藏は、さう云ひ

ると不圖疲れたやうな顏を上げて、

「ああ、全く惜しいことをしたよ。」

と云つたが、直ぐに忌々しさうに附け加へた。

「しかしおれには憎い奴よ。ずゐぶんおれだつてこれまでに、いろんな奴と附き合つて來たが、あんな憎い奴はありやあしねえ。」

その言葉を聽くと橘丸は、思はず燕藏の顏を見返しながら訊いた。

「ええ、如何してだい。如何してそんなことを云ふんだい。」

「如何してつて、お前、今ぢやあ藝でも、人氣でも、格式でも、違ひ過ぎるほど違つちまつたけれども、昔あの男が眞打になる時分には、おれとさうたいして違ひもしなかつたんだぜ。」

「ふうん、さうかねえ。」

「お前さんなんかその時分のことを知らねえから、また燕藏のやついつものお株を始めやがつたと思ふかも知れねえが、おれだつてその時分は、あの男に負けねえ位の人氣だつたんだ。」

「さうかねえ。分らねえもんだねえ、人間てえものは。」

「何を云やがるんでえ。何しろ何だぜ、あいつの親父の長藏つて男が、二本差が嫌ひで武士を止めて、落語家になつた時に世話をしたのが、おれの親父だつたんだつて云ふんだから、云はどおれの家は師匠筋に當るんだ。」

「さうかい。それぢやあ圓朝師匠は、つまり武士の出なんだね。」

「うん、それだから落語家のやうでもねえ、いやにきちんとしてゐやがるのよ。あんなにきちんとしてゐたけりやあ、出淵治郎吉なんて云ふ、鼠小僧染みた名前からして、取り換へなくつちやなるめえぢやないか。」

橘丸は憎さげに云ふ燕藏の言葉を、いくらか蔑むやうな心持で聽きながらも、その不遇な老藝人の身の上に、憐れみの念を寄せないではゐられなかつた。が、燕藏は相手が默つて返事をしないでゐるのにも關らず、ひとりで嘲けるやうな調子で喋り續けてゐた。

「何しろおれはあの男が七つの時に、江戸橋の傍の土手倉の席で、初高座を勤めた時から知つてゐるんだ。それが如何でえ、おれがちよつとした女出入で、暫く東京つて土地を賣らなくちやあならねえことになつて、五六年旅を廻つてゐる間に、何時の間にか馬鹿に出世をしてゐやがるぢやあねえか。旅先で噂を聽いた時には、何を馬鹿なことを云つてゐやがると思つて、高をくくつてゐたものの、歸つて來て見て驚いたね。懷かしいことも懷かしいが、憎いとも憎いやあな。畜生、こつちだつて今

[illegible]

錢で、そのまま錢も合せずに、大阪へすつ飛んで往つたんだ、一生の骰子の振り損なひよ。これつきりうだつが上がらねえこの態なんだ。」

橘丸の耳にはさう云ふ言葉が、唯寂しく響いて來るばかりだつた。云つてゐることが何だか自分自身のことのやうにも考へられたので、ふと慰めてやりたいやうな心持になつて顔を上げた。

「燕藏さん。もうつまらない愚痴なんか云はない方がいいよ。今更こんなことを云つたところで始まらないぢやないか。」

「何だつて……。俺はつまらねえ愚痴なんか云やあしねえよ。云ふだけのことがあるから云つてゐるんだ。」

むつと膨れて、不興げに面を反けた燕藏の顔を見ると、橘丸は切角深切に慰めてやらうと思つた心持を、裏切られた寂しさに口を噤んだ。二人は思ひ思ひのことを考へながら、これからはあんまり口も利かずに、默りがちに馬車に揺られて往つた。

仁川、田京、大仁を過ぎて、修善寺に着いたのは、丁度その日の正午頃だつた。町盡頭のところで馬車を降りると橘丸は信玄

[illegible]

たけれども、二人とも素人だけに、これほど[illegible]ゐなかつた。橘丸は蜻蛉の絣の上布に縦縞の羽織、少し[illegible]見えてはゐたが、幅の狭い、博多の一本獨鈷の帶をしてゐた。燕藏も[illegible]の單衣に、兎も角も絽無地の羽織を着てゐた。

暫く往くと燕藏は、さつきの氣まづさは忘れたやうに、にやにや笑ひながら橘丸の方を向いて訊いた。

「ねえ、橘丸さん。お前さん知らないかい、何處かここの宿屋を……。」

橘丸は燕藏がもう萬事呑み込んでゐると云つたやうな顔付をしてゐるので、すつかり任せた氣でゐたところへ、かう云つて訊かれたので、頼りないやうな心持で詰り返した。

「何だい。お前さん何處も知らないのかい。おれはまたお前さんが萬事心得てゐるものと思つてゐたんだが……。」

「なあに知つてゐる家もあるんだけれど、ちよつとまづいことがあるんだ。まづいと云つたところで、別に義理の悪いことがしてあると云ふやうな譯ぢやあないんだけれど、兎も角もそこの家でねえ方が仕事が仕いいんだよ。」

「さうさなあ。」

橋丸は少し心細くなつて、ちよつと立ち留まつて考へてゐたが、そのうち不圖まだ前座時分に、師匠の橋樂と一緒に兜町の客に連れて來られたことがあつたのを思ひ出した。
「昔まだうちの師匠の達者な時分に、兜町の客に連れられて來たことがあるんだが、何しろこつちは前座時分で、師匠のお供で來たんだから、とても宿屋の方ぢや覺えてはゐまいよ。」
「うん、しかしその兜町のお客つて云ふのは、何て人なんだい。」
「そりやあ何さ、あんまり思ひ切つた相場をやるんで、その時分みんなが樊噲つて渾名を附けてゐた藤野さんさ。」
「ああ、さうか。藤野さんなら今でもまだたいしたもんぢやあねえか。こちとらのやうな旅ばかり歩いてゐるもんだつて、兜町で藤野さんと云へば、ああ、さうかと合點が往くぜ。」
それだけ話を聽くと、燕藏はもうすつかり腹が極まつたやうに、それまで地面の上に下ろしてあつた鞄を取り上げながら云つた。
「さあ、それぢやあ荷を下ろすのはそこの家と極めやう。」
「だつて、お前さん、覺えてゐないよ。」
「いいよ。大丈夫だよ。まあ、いいから默つておれに附いて來るがいいや。」
燕藏はさう云つて歩き出したが、不圖氣が付いたやうに橋丸の方を振り返つて訊いた。
「だが、一體何て家なんだい。」
「ええ、何だ、新井つて家だ。」
「おお、新井なら立派なもんぢやあねえか。あすこなら座敷のかかることも多いだらうし、ひよつとすると演藝會位やつて呉れるかも知れねえぜ。」
「さううまく往きやあいいが、怪しいもんだな。」
「なあに大丈夫だよ。おれがうまくやつて見せらあ。」
二人はそんなことを話し合ひながら歩いて往つたが、そのうち燕藏は不圖立ち留まると呟くやうに、
「兎も角も名刺代りに持つてゆく、手拭をひとつ買つて往かう。」
と云つて、直ぐそこの往來端の、土産物の椿油や蜂蜜や樟木細工や雁皮織などの外に、いろいろな雜貨を賣つてゐる店の中へ入つて往つた。橋丸はぼんやり河岸に佇んで、じつと水音に聽き入つてゐたが、そのうちにだんだん目がしらのところが、入染むやうに熱くなつて來た。
「やあ、お待遠樣。」
暫くしてからさう云つて出て來た燕藏は、新井の前まで來る

[illegible]
たおちのの十分と経たないうちに、にやにや笑ひを浮べながら出て來た。
「おい、橘丸さん。うまく往つたぜ。今座敷を一間空けて呉れるさうだ。」
「へえ、何だか混んでゐるらしいのに氣の毒ぢやないか。」
橘丸がさう云ふと燕蔵は、ひどく無造作にあつさりと、
「なあにいいんだよ。いい譯があるんだから關はねえよ。」
と云つてから、急に聲を潜めて囁くやうに云つた。
「實はね、橘丸さん、おれは今聽いた兜町の藤野さんの名前を使つたんだよ。それだからお前もそのつもりでばつを合はせて呉れなくちやあ困るぜ。」
「うん、よし來た。」
さうは云つたものの橘丸は、燕蔵ほど人を食つてゐないだけに、何だか心の底の方に、微かな不安が感じられた。
かうして到頭二人は、新井に荷を下ろすことになつたのだが、著いたその晩からもう直ぐに座敷が懸かつて來た。最初に呼んだ客と云ふのは、木場あたりの旦那らしい、でつぶりと肥

たた、二人に一晩が[illegible]
「うん、中々うまえ、しかりとした[illegible]」
とお世辭でもなく褒めてから、[illegible]紙に包んで呉れた。部屋へ歸つてから開けて見ると、中には五圓札が一枚づつ入つてゐた。
「如何でえ。見ねえ。この工合ぢやあ四五日うちには、づしりと懐が重くなるぜ」
燕蔵はさう云つて、ひどく機嫌のいい顔付をしてゐたけれども、橘丸は何となく心が浮き立たなかつた。
「しかし如何もおれは弱つたよ。何しろお前講釋つてものは、演るのは今日が始めてなんだから、凌山先生すつかり冷汗をかいちまつた。だが、如何だつたい、今夜の出來は、」
「いや、もう、お前があれほどうまく演らうとは思はなかつたよ。しかし「與三郎」とはうめえものを界き出したよ。あれならまあ人情噺の呼吸でやれるだらう。」
「ところがそれを逃げやうとするので大苦しみよ」
「なあにそんなに苦しんでゐるやうにも見えなかつたぜ。」
「いや、もうほんとに凌山先生ぢやあまゐつちまつた。何なら明日つから代つて貰いたい位だ。

「笑談云つちやいけねえ。おれのやうに年をとつちあ落語でさへ危ねえ位だ。」

「そんなこたあないよ。今夜の「三人旅」なんか、中々結構な出來だつたぜ。」

そんな話をしてゐるところへ、また二度目の座敷が懸かつて來て、二人は到頭その晩は、その家ばかりで三つづつ、座敷を勤めた。

「神田凌山の橋丸は、その晩どの座敷でも聽き覺えの、「世話情浮名横櫛」の中の抜讀み、與三郎が佐渡ケ島抜けをして江戸へ出て來て、品川の觀音久次の世話になつてゐるおとみにめぐり會ふと云ふ一席ばかり演つてゐたが、部屋へ歸つて來ると、さも困つたやうにほつと溜息を吐きながら云つた。

「燕藏さん。いけないよ。おれはもう兜を脫いぢまうよ。」

「ええ、如何してだい。」

「如何してつて、お前、今の座敷で少し口馴れた勢で、とんとんと話を運んでゐると、障子の外の廊下のところで聽いてゐやがつた當家の女中が、あら、またあの話だよつて云ふぢやないか。」

と、燕藏な默頭きながらにやりと笑つた。

「うん、それはね、實はおれもお前が何處の座敷へ往つても、あいつばかり演つてゐるのは、そいつあいけねえたんだ。」

「だからよ、おれはもう兜を脫ぐつて云ふんだ。」

「はゝゝゝ、氣の弱えことだ云ひなさんな。今になつて兜を脫がれて堪るものかな。」

さう云ひながら燕藏は、ズツクの鞄を開けて底の方から、速記本を一册引つ張り出した。

「そおれ、種本ならここにもあらあ。それで足りなきやあここの女中部屋にだつて、きつと何か轉がつてゐるだらうぜ。」

「亂暴だなあ。そんなことをすりや直ぐに種が分つちまふぢやないか。」

「なあに分るものか。が、兜も何もその本は御役には立たないかい。」

橋丸が取り上げて見ると、それは何だか名も知れない大阪の方の赤本屋が出した「寛永三馬術」といふ講談の速記本で、口演者の名前も出鱈目らしく、天地軒玄黄としてある。

「はゝゝゝ、ひでえいかもの本だな。何だい、天地軒玄黄つて云ふのは。こんな講釋師がゐるのかい。」

「うん、まあ、神田凌山先生と似たやうなもんだらう。はゝゝゝ。」

「はゝゝゝ、ひでえことになつたもんだな。」

その晩は二人は三四本徳利を並べると、いい心持に醉つてしまつて、そのまゝぐつすり寝てしまつた。耳馴れない水音も醉つた耳には快かつた。

翌くる日は晝間のうちは、溫泉に入つたり午睡をしたり、そこらをぶらぶら散歩したり、そんなことに暮らしてしまつたが、夜になると丁度その晩東京の素人義太夫の連中がやつて來たので、これと一緒に演藝會をやることになつた。ここの廣間でやつたので、無論木戸は取らなかつたけれ共、素人義太夫の連中と云ふのが、大根河岸や何かの旦那達だつたので、二人はその晩もかなりたんまりと祝儀を貰つた。凌山の橘丸はその晩、怖々ながらも晝間のうちに速記本で覺えた「寛永三馬術」の中の度々平の條を、三席ばかりに分けて演つたが、これが思ひの外うまく演れたので、自分でもすつかりいい氣持になつてしまつた。

「はゝゝゝ、面白いね、燕藏さん。おれはもう落語家を止めて講釋師になるよ。」

部屋に歸つて來ると橘丸は、こんなことを云ひながら、もうちやんと支度のしてあるチヤブ臺の上の杯を取つた。

「兎も角もお前さんは器用だし、年の若い割に度胸がいいよ。」

「しかしおれは誰か噺を知つてゐる人がゐやしまいかと思つて、どの位心配したか知れやしないぜ。」

と、燕藏は一杯ぐつと飲み乾してから、何でもないことのやうに云つた。

「なあに知つてゐた人がゐたところで、こつちがどうせかう云ふ商賣なんだから、この位のことはありさうだと思はあね。」

「思つて呉れるやうな人ならいいけれど、おや、ありやあ橘丸ぢやあねえかなんてやられたらまゐるぜ。」

「なあに案外知つた人には會はねえものよ。」

「だけど如何だか分らないからなあ。」

「はゝゝゝ、そんなことを心配してゐたら切がありやあしねえ。まて、もう三四日ここで稼いだら、筋書通り天城を越えて伊東へ出やう。伊東ぢやあたいしたこともねえだらうが、あれから熱海へ廻つてうまくやりやあ、またたんまり懐が溫まるぜ。」

「さう、うまく往きやあいいが……。」

「いや、振り出しがこの工合ぢやあきつとうまく往くよ。」

そんなことを云ひながら飲んでゐるうちに、二人ともなく醉つてしまつて、何時寝たか分らないうちに、もりと眠つてしまつた。

「おい、大變だよ。飛んだことになつてしまつたぜ。」

武者修行に出て女を助けると、これが以前買馴染の吉原の華魁だつたと云ふやうな、至極他愛のない落語家らしい夢を見てゐるところを、から大きな聲で呼び起されたので、橘丸はびつくりして寢床の上に起き上がつた。もう正午近いと見えて、障子にはかあつと明るい日が當つて、部屋の中は蒸されるやうな暑さだつた。直ぐ目の前の池の面から來る反射(てりかへし)が、寢起の瞳に痛かつた。

「おい、寢惚けてゐるところぢやあねえぜ。大變なものが現はれたんだ。」

さう云ふ聲でやつと氣が付いたやうに橘丸は、端手拭をぶら下げたまゝ、直ぐそこに突つ立つてゐる燕藏の、瘦せて細長い顏を見上げた。

「何だい。何ものが現はれたんだい。」

さう訊かれると燕藏は、[illegible]

つて出掛けたんだが、その前にちよと[illegible]思つて、菊屋のこつちの共同湯のところまで來ると驚いちまつたんだ。」

「ふーん、何だい。」

「そこの先きに桂座つて云つたかな。寄席見てえなちつぽけな小屋があらあ。あすこに今夜から淩山つて講釋師の獨演會があるつてえビラがそこに出てゐるぢやあねえか。」

「ええ、淩山……。」

橘丸はちよつとぎつくりして、燕藏の顏をじつと見詰めた。

「如何でえ。ちよつとびつくりさせやがるだらう。」

「うん、だからおれは如何も始めつから氣が進まなかつたんだ。」

「今になつてそんなことを云つたつて仕方がねえやな。」

「仕方がねえつて云つたつて、困るぢやあないか。あつちも淩山、こつちも淩山、芝居ならばこれはしたり位のことで濟むかも知れないが、ここぢやあさうは行かないからな。」

つたつて、まともの講釋師ぢやねえと思ふぜ。」

「さうかなあ、しかしおれはもう厭だよ。ここにゐるのは。もうこれだけ稼ぎやも澤山だから、早く隨徳寺を極め込みたいや。」

「はゝゝゝ、橘丸さん。」

燕藏は改めて橘丸の名を呼んで置いてから、にやにや薄笑ひをしながら言葉を續けた。

「ところがね。そればかりぢやあねえんだ。惡い惡戯を考へ付くやつがあるぢやあねえか。今ここの番頭からの話なんだけれど、今夜からの凌山獨演會が濟んだ後で、凌山二人會を演らせやうつて話が、もうあらかた纏まつてゐるんださうだ。」

「笑談ぢやあないぜ。おれはもういよいよ逃げ出しだよ。」

「なあに逃げ出すのはまだ早えよ。兎も角も今夜向ふの凌山がどんな腕のあるやつだか、聽いて見てからでも遲かあねえやな。」

「いや、どうせ獨演會でもやらうつてやつだ。腕に覺えのあるやつに違ひないよ。」

「ところがずゐぶんセコなのが來るんだからね。」

「いくらセコでも二人會なんて眞つ平御免だ。」

「はゝゝゝ、ひどく怯氣付いちやつたもんだな。」

燕藏の嗄れた笑ひ聲を聞くと、橘丸は何だかひどく腹立たしい氣持になつた。かつと明るく照り付けてゐる陽の光が、目に痛いほど眩しいのも苛立たしかつた。で、橘丸はこれまでになく、心を昂らせながら燕藏の方を向いて、きつぱりとした調子で云つた。

「いや、何も怯氣附いてゐる譯ぢやあないよ。兎も角もおれはもう神田凌山なんて名告つてゐるのが厭になつたんだ。噓を吐いて客を瞞して商賣をするのが厭になつたんだ。」

「それぢや如何するつて云ふんだい。」

「だからよ、おれはもうやつぱりもとの橘丸にするよ。橘丸で落語をやつてゐる方が、拙いにしても氣持がいいや。」

もともと燕藏が橘丸を講釋師に仕立てたのは、橘丸に落語を演られると、自分の藝の拙いのが目立つためでもあつたから、から聽くといくらか面を曇らしながら呟くやうに云つた。

「さうか。それならやつぱり落語をやんねえ。」

「うん。だがもうおれは大城を越えるのは厭になつたね。」

「ふうん。それぢやあ如何しやうつて云ふんだい。」

さう云はれると橘丸は、暫くじつと俯向いて考へてゐた後で、思ひ切つたやうに顏を上げた。

「兎も角もここでお前とは別れやうぢやあないか。お前さん

馴れてゐるこつたから、これから筋書通り、伊東、熱海、湯河原、箱根と、湯治場を廻つたらいいだらう。」

「それでお前は如何するんだ。」

「おれは沼津にちよつと知り合ひがあるから、暫くそこへ往つて厄介になるつもりだ。」

さう聽くと燕藏は、ぎろりと窪んだ目を光らせながら、急に意地惡さうな調子で云つた。

「しかしお前ここで逃げたら、向ふの凌山に笑はれるぜ。」

「いくら笑はれても關はないよ。何しろおれは早く神田凌山でなくなりたいんだ。」

「ふん、勝手にしろい。」

燕藏は吐き出すやうにさう云つてから、睨むやうな目付で橋丸を見た。溫泉宿の晝は不氣味なほど靜かで、何處からかぴたりぴたりと舌打をするやうな花札の音が、むしろ懶く聽こえて來た。

橋丸が信玄袋をぶら下げて、逃げるやうにして新井の門を出たのは、それから間もなくのことだつた。乘合馬車の出るところまで歩いて來るうちには、さつき燕藏から聽いた「凌山獨演會」の辻ビラが、二つも三つも目に留まつた。潮風に煽られひらひらしてゐるのが橋丸の目には、何だか自分を嘲つてゐるやうに映つた。が、もう自分は神田凌山でなく、もとの落語家の橋丸だと思ふと、何處か心がすがすがしくつてそんなことなど氣にならない。

「やつぱり嘘がいけなかつたんだ。講釋師に化けたりしたのがいけなかつたんだ。」

橋丸はそんなことを考へながら、乘合馬車に搖られて往つたが、今度はたつた一人で、話し相手さへなかつたけれども、かへつて來た時よりも寂しくなかつた。何となくのびのびとしたやうな快さが感じられて、搖られながらもいい心持にうとうとしてゐた。野面を吹いて來る風にも、蘇つたやうな涼しさがあつた。

沼津に着いたのは、もう夜に入つてからだつたが、訪ねて往つた先きの田節と云ふ料理屋では、喜んで橋丸の來たのを迎へて呉れた。主人は以前十兩までなつた相撲取で、體を痛めて土俵に上れなくなつてから、靜岡の藝者と一緒になつて、ここで料理屋をやつてゐるのだが、時に興行事などにも手を出すので、それで橋丸とも懇意なのだつた。橋丸はそれまでにもこの男の手で、二三度この沼津に來たことがあつて、さう云ふ時に

はいつでも田毎と云ふ料理屋に、寝泊りをしてゐたのである。

で、酒が始まつてから橋丸が、靜岡で一座が解散してからのことを話すと、主人は既に其を知つてゐると見えて、

「ああ、あいつあいけねえ。おれはあいつに酷い目に會つたことがあるのだ。」

と云つてから慰めるやうに、

「まあ、いいから悠くり遊んで往つたがいゝや。」

と云つて、わざわざ奥の一間を橋丸のために空けて呉れた。橋丸はまだ懐には二三十圓の金があつたし、云はれるまゝにここの家に厄介になつて、呑氣にぶらぶら何にもしずに、四五日うかくと暮らしてしまつた。

「如何だい。橋つあん、泳ぎに往かう。」

さう云はれて千本濱の方へ、海水浴に出懸けて往くこともあつたが、それよりも毎晩主人の酒の相手をすることが、まづ橋丸の勤めだつた。以前相撲取だつただけに、今でもやつぱり酒が強く、いつも晩酌が一升を越して、二升近くなることもめづらしくなかつた。それの相手をするのだから、橋丸には大分徹へたけれども、これとてもさう飲めない方の口ではないので、兎も角も毎晩寐るまで杯を離さずに附き合つてゐた。

と、ここに來てから四五日目のことだつた。その晩やつぱり主人の晩酌の相手をして、くたくた[illegible]いてゐると、主人は不圖思ひ出したやうに目顔を擦すつて、少し改まつたやうな調子で橋丸に話し掛けた。

「ああ、橋丸さん。おれは頼まれてゐたのをすつかり忘れてゐた。あのな、一昨日の晩からここの奥き小さな客席に、講釋が懸かつてゐるんだがな、こいつがまるで入りがないんだ。それでその席亭から、ひとつ田毎の大將、今お前さんのところにゐる橋丸さんを、二三日スケに借して呉れないかと云はれてゐるんだが、如何だい、ひとつ助けてやつて呉れまいか。」

講釋と聴くと橋丸は、唯燕蔵と修善寺へ稼ぎに往つたと云ふだけで、淺山一件は話してなかつたので、思はずぎくりとしながら探るやうに訊いた。

「ええ、だが一體そりやあ何て云ふ講釋師なんです。」

「ええと、何て云つたかな。妙な名前だつたな。ああ、さうさう、陶々齋醉玉つて云ふんだ。」

「へえ、あんまり聴いたことのない講釋師ですね。」

「ああ、どうせろくなやつぢやあねえさ。それだからお前さんにスケに出て貰ふのは氣の毒なんだけれども、おれはちよつとそこの席亭に義理があつて、頼まれたんだから[illegible]よ。」

橘丸は凌山でなかつたのに安心をして、直ぐに點頭きながら返事をした。

「ようがす。明日からスケに出ませう。」

「さうかい。出て呉れるかい。さうして呉れりやおれの顏も立つと云ふもんだ。それぢや早速知らせてやつて、看板やビラの支度をさせてやらう。」

かうして橘丸は、その陶々齋醉玉と云ふ講釋師のスケとして、その翌晩から沼津の寄席に出ることになつた。

一（二）一

その前の三晩、醉玉が一人で張扇を敲いてゐる時分には、やつと客の頭が二三十だつたのが、橘丸が出るやうになつてからは、急に客の數が增して、每晚百を下つたことがなかつた。で、二三日と云ふのがだんだん延びて、到頭一週間ばかり打ちつゞけた。

醉玉と云ふのは、もう五十近い、肥つた赭ら顏の立派な男で

いやうな男で、每晚打ち出すと橘丸を誘つて飲みに出掛けた。橘丸も一度付き合つて飲んで見ると、思ひの外呑氣なさつぱりした男なので、大抵每晚一緒に飲み步いてゐた。

と、明日で千秋樂と云ふ晚のことだつた。やつぱり打ち出してから二人連れで、いつも往きつけの小料理屋に往つて、ちびりちびり始めてゐるうちに、同じ旅を步いてゐる藝人のことだから話はひとりでに諸國の色街の女のことから、いろいろ旅での失敗談が、二人の口にのぼるやうになつた。と、そのうち醉玉はちよつと頭を搔くやうな手附をしながら橘丸の方を向いて、

「ねえ、橘丸さん。いくら旅だと云つても、惡いことはないねえもんだよ。」

と、いくらか懺悔をするやうな調子で話し出した。

「何だい、惡いことは出來ないつて……。何處かの女房さんでも口說いたのかい。」

「いや、そんな色つぽい話ぢやあないんだ。[illegible]んだ

[illegible]くやうな手附をしながら言葉を續けた。

「僕はそこに來る前二三日、或る溫泉場に往つてゐたんだよ。」

「何處だい、その或る溫泉場つて云ふのは。」

「そりやあ何さ、この先きの修善寺さ。」

「ええ、修善寺……。」

橋丸は思はず目を瞠つて、醉玉の顔をじつと見詰めながら訊き返した。

「ほんとかい、醉玉さん。」

「ほんとだとも……。誰が嘘なんか云ふものか。嘘ぢやあ僕は懲り懲りしてゐるのだ。」

「さうか。それで惡いことの出來ないつて譯は如何云ふんだね。」

「うん、それはね、かう云ふ譯なんだ、何しろ御覽の通り僕はかう云ふ飲み助だらう。それで借金で困つたところから、一月ばかりの約束で或るドサ廻りの興行師にこの體を賣つたもんなんだ。ところがその興行師の云ふのには、如何も陶々齋醉玉つて名前ぢやあ商賣が仕難いから、もうちつとえらさうな名前を附けて呉れ、それには以前こつちへ來て人氣のあつた講釋師に、寶田凌山と云ふのがゐるが、それを名告つちやあ如何だと[illegible]

「ええ、凌山[illegible]」

橋丸は思はず呟くやうにさう云つて、また改めて見直すやうに、醉玉の赭ら顔をじつと見詰めた。

「僕ももう體を賣つたことだし、さう云はれりやあ仕方がないやね。これから寶田凌山と云ふ名前で、御殿場、佐野、三島あたりを打つて廻つて、修善寺に往つて明日から蓋を開けやうとすると、如何だい、そこにはちやんとほんものの凌山先生が控へてゐるぢやあないか。」

橋丸は可笑しくつて堪らないのをじつと耐へながら、先づ杯を取つてさつと盃洗の水で洗ふと、突きつけるやうに醉玉に差した。

「醉玉さん。一杯獻じやう。實はその凌山て云ふのはおれのことなんだ。」

「ええ、君かい、あれは。」

醉玉は杯を受け取りながら、目を圓くしてじつと橋丸の顔を見詰めた。

「實はもう一人ゐた連れの燕藏と云ふ男が、湯治場は講釋の方がいいからつて云ふんで、そいつの云ふ通りに凌山と名告つてゐたんだが、それじやあ燕藏のやつ、凌山て云ふ講釋師が、以

…くとらて人氣があつたつてことを知つてゐやがつたんだな。」

「うん、それやあさうに違ひないね。しかし君は講釋も演れるのかい。」

「うん、ほんとに演れやしないよ。燕藏の持つてゐた速記本で覺えて、それで演つたんだから大膽な敵さ。」

「はゝゝゝ、しかし不思議だねえ、かうして二人の浚山が、知らずにめぐり合つたと云ふのは。」

「はゝゝゝ、まあ、醉玉さん。今夜は悠くり飲まうぢやないか。」

「うん、飲まう。さあ、御返杯だ。」

醉玉は杯を橘丸に返してから、もう大分醉つてゐるらしく、また同じやうな言葉を繰り返した。

「はゝゝゝ、さうかい。君が浚山だつたのかい。」

「お前さんがさう云へばこつちでも、さうかい、お前さんが浚山だつたのかいと鸚鵡返しに云ひたくなるね。はゝゝゝ。」

二人は聲を合せて笑はうとしたが、如何しても思ふやうに笑へなかつた。何んだか咽喉に何かつかへてゐるやうな氣がして、笑はうとすると息苦しくなつた。二人はひとしきり寂しさのどん底に、投げ出されたやうに坐つてゐた。

科學文明の將來

駒井卓

はしがき

今吾々の享樂(又は享苦)して居る所謂文明が主として科學の力で出來上つたとはたしかである。又これから後も人類の文化が今迄と同じ方向に向つて進んでゆくだらうと云ふ事も少くともこゝ百年や二百年のところはたしかだらう。然しかやうにしてどこ迄も進んでいつたらつまりどうなるものだらう。人類は此科學の御蔭でいつ迄も過去にあつたやうに榮える事ができるものだらうか、又これの爲めに結局滅びるやうな運命になるのではなからうか。此等の事については昔から多くの人が思ひ思ひの事を云つた。吾國では此邊の議論が今迄も相當にあつた。私がこれからこゝに述べるのは私も亦其議論の仲間入りをさせてもらはうと云ふのではない。たゞ近頃讀んだ本の中にあつた他人の意見を面白いと思つたのでそれを紹介するだけの事をするのに過ぎぬ。

それは近頃英國で發表された J. B. S. Haldane と云ふ若い生理化學者の書いたものである。ギリシヤ神話の中から題を採つて Daedalus と云ふのが其本の名である。其說の當否はともかく內容はよほど面白いから、此本を讀まれない方々の爲に介紹介の勞を取る。

斷つておきたいのは物理學や化學等畠違ひの事が大分あるので、充分にこなせなかつた處も少くない。それからハルデーン先生ラテン語やギリシヤ語が得意と見えて處々にむづかしい引用句が出て來る。これ等も遺憾乍ら大概は御免を蒙つておいた。大勢にはあまり關係がなさそうであつたからでもある。

三つのシーン

第一は歐洲戰爭の或戰場、一九一五年の某日一面の塵と埃と烟と、其中からだしぬけに黑と黃の濃い煙がむくむくと騰る。瞬く間にそれが魔の吐く息のやうに弘がつて天と地と

る物を撒ひ散す。暫くして風と共にそれが薄らぐ。と跡に僅か許りの人影が殘る。それが少しも動かずぢつとして居る。多分動けないのだらう。先程迄はもつと多く居た筈と思ふのに、何故か急に少くなつてしまつて居る。

・一寸見ると此小さな人間。苦もなく動けなくなつたり殺されたりする人間。これが此戰爭をやつて居る御本尊で、此活劇の主役だ等とはとても思へない。それよりは此眞黑な大きな烟の塊の方が遙かに主な役を演じてをるやうである。そして人間共はほんの端役で、極けちな目に立たない役をしてをるやうである。そして此見方の方が結局正しいのであるかも知れない。

次は三年後一九一八年の某日、場所は前と同じやうな處、一體の舞臺裝置は大概前と同じ事。たゞそこへだしぬけに地から湧いて出たやうに大きな奇怪な化物が跳び出して來る。それはまるで大きななめくぢのやうなもので、塹壕の上森の中處擇ばずずるずると滑つてゆく。森を通る時には大きな樹でも丁度農夫の鋤の前の草のやうにぐんぐん倒されてしまふ。此化物の前こは人間共は[illegible]

恐ろしい物をこしらへたのだ等とは夢にも思はないであらう。その被造物が造物主を苦もなく追ひ散らし、傷け殺して居るのである。そして云ふ迄もなく此等は人間の科學の所産である。

今一つは印度のさる處の一夜

ダンスの群を逃れぬ三人の歐洲人がバルコニーに出て空を眺めて居る。ふと其中の一人が銀河の中に燦く見慣れぬ大星を見附けて他の二人に指す。三人の間にはそれから其新に就ての談に花が咲く。或者は星の爆發だと云ふ。又或者は二つの星の衝突のために起つた光だと云ふ。或はこれは他の人類の棲む世界の最後の審判の光景であるやも知れぬ。或は其世界に住む科學者の輻射機能に關する實驗が成効し過ぎたために引起した全星の爆裂破壞であるかも知れぬ。或は事によつたら此二つの假說はつまり同じ事實を云つてをるのかも知れぬ。要するにダンスをして樂しんで居るべき人間共が餘り星のぞきに凝り過ぎるやうな世界の最後の態を示す者でないだらうか。

かう云ふやうな事を見ると科學と云ふものの値打ちについて

め[illegible]間もなく[illegible]して老人に[illegible]い眼を向けるやうになつた。とうとう今では人間も[illegible]なしの[illegible]の中へ衝き落すか分らぬと云ふやうな始末になつてしまつた。或はサムエル・バトラーの云つた様に此儘でゆけばつまり人間は機械の寄生物になつてしまつて、其大きなそしてこみ入つた装置の一部の生殖器官の其又一部に下落してしまひ、つまり機械が人間の位置を奪つて此地球の主になるのではなからうか。

研究は止まぬ

と云つて今更科學の進歩は止められる者ではなからう。成程科學はほんの近頃始まつたものである。さうすれば人間が皆一致してこれを止めやうとしたら明日にも止められるかもしれぬ。實際中世紀では世論がやかましくて殆んど科學的の研究など出來なかつたやうな事實もある。さうすると科學學者たちは明日から失業と云ふ事になるかも知れぬ。

けれども私の見るところでは科學者諸君の生活は今の經濟組織社會組織がともかくつゞく限り永久に安全である事を保證する。何となれば資本主義は科學者達に充分なる生活の資を供する事はしないにきまつてゐるが、彼等を其食卓に供へる金の卵を生む鳥としていつ迄も飼つておく事はまちがいない。又よし[illegible]國との戦争のために[illegible]の国も科學の研究を[illegible]によつて[illegible]を[illegible]やうとするに違ない。

之に反して労働者達の味方が政權を握るとすればどうなるか。やはり科學の將來は多望であらう、英國でも政黨の中で其政綱に科學の奬勵と云ふ項を入れて居るのは労働黨ばかりである。中にも生物科學研究は資本家よりも彼等の方が多くの好意を寄せると考へる理由がある。化學や物理學の研究にしても、其結果失業者の數を増す如き事なく、労働時間を減する事になるものとすれば、之亦彼等の贊成を得る事疑ひない。

尤も假に世界中がロシアの轍を踏んで文化が破壊され盡すと云ふやうな事が起れば、科學も之と道連れになつて一時滅亡してしまはぬとも限らない。然したとひさうなつたところで、科學は必ず早晩再興させるに極つてゐるから、結局遅くも幾千年かの間には又元の如き状態に戻り、同じ問題を繰返す事になるだらう。而も忘れてならない事は現に其ロシアでも頗る立派な科學の研究が續けられて居る事である。

こゝに又面白い意見がある。それは將來研究の問題がなくなつて科學の進歩が止ると云ふ意見である。たとへば[illegible]

壇に盛名を馳せてをるチエスタートンは今から十五年程前に或本を書いて其中で此後新しい發明と云ふものはあまり無からうと思ふから、其頃流行した半席の後の臺に御者が立つて長鞭を振つて馬を驅る頗る悠々たる馬車が百年たつてもロンドンの町をうろついてをるだらうと豫言した。處がそれから急に此馬車が滅つて五六年たつと其の見本が博物館に出て見た事のない人に觀せる程になつた。

それからＨＧウエルス——「未來」とか「豫言」とか云ふと直ぐウエルスの名が思ひ出されるのも不思議である——そのウエルスが一九〇二年に書いた「豫想」と云ふ本の中に一九五〇年迄には大氣より重い飛行機が發明されて戰爭に用ゐられるだらうと豫言した。而も御丁寧にも斷り書きとして之は彼の私見に過ぎない、そして之を公にすれば恐らく世人の物笑ひになるだらうと述べた。豫言者にしては氣の毒な位謙遜な次第である。

かくウエルスの好んで未來とか豫想とか云ふに拘らず、彼の憐れにも時を遲れなのは、其科學思想の養はれたのが一時代前であるからである。彼の時代には飛行機も無線電話も科學上の問題であつて、科學研究の興味の中心は物理學と化學との上にあつた。處が今では飛行機も無線電話も共に產業に實用せられる者となり、且其後の科學の興味の中心は移つて生物學に來て居るのである。

今より後更に時代が轉ずれば興味の中心は又何れかに移るであらう。そして此文中に述べる處も亦極めて臆病な因循な想像力の不足な意見として後世の物笑ひとならうかも知れぬ。とにかく此文の中ではウエルスの飛行機よりももつと謙遜な處を云ふ積りであるから。

物理學の將來

物理學の將來を云はうとするには自ら話が學問的になり過ぎる嫌ひがあるからなるべく簡單にしておきたい。今物理學の學說は云はゞ非常な氣迷ひの狀態にある。これは主にアインスタイン——キリスト以來の最大の猶太人——の御陰である。彼の名は後世ロイドジョージや、フオツシユや、ウイルヘルム等の名はチヤーリー・チヤプリンの名と共に次第に人の心から忘去られる後にも永く尙記憶せられ尊敬される事疑ひない。

昔より多くの哲學者たちは時間と空間との絕對性を信じて居た。そして之から人生觀も倫理觀も政治論も割出していつた。然しから云ふ說の立て方が果して誤であるかないかを實驗によつて試す事は不可能であつた。たゞ彼等の經驗したのは歲月の人を待たず、山河の戀を隔てる事位に過ぎなかつた。處がアイ

ンスタインが出て來て此時間及空間に對して從來人の考へて居る事が誤りである事を明かにした。これ迄の時間空間の概念では分らぬ事象のある事を示した。吾等の時と云ひ空間と云ひ物質と稱へる處の者は何れも第五の擴がりの影に外ならぬ事を教へた。かくして彼の說は太陽の重力圈内に於て光の曲げられる事實の實驗證明せられたによつて確かに裏書きをされ、天は彼の譽れを表はした。

この事實の哲學上に及ぼす影響、引いて吾等の人生觀に及ぼす影響如何と云ふに、案外に深く遠い者であらうと思はれる。ニユートン出で其學說が信ぜられた後唯物觀が世人を支配した如く、アインスタインの後はカント式の唯心論の極端な種類の者が先づ物理學者の心に入り次で時代の思潮となるのではなからうか。そしてこれが世人の道德觀人生觀政治論に大なる影響を與へるものではなからうかと思はれるのである。

更に又量子論が一般に信ぜられる日が來る時、又思想方面に根本的の變化を齎すものと思はねばならぬ。將よりどう云ふ變化と云つて今から之を想像する事はむづかしいけれども、或はポアンカレの云つたやうに此宇宙間に起る一切の變化は總て瞬間的の變動の連續であり、又あらゆる空間は小さき點の集合と考へなければならぬやうな事にならうとも限らない。何れにしても放射能に關する吾等の知識が一層發達して來たら此邊のところも今少し明瞭に云へるやうになるであらう。

現在吾等の用ゐてをる燈火は其エネルギーの九五パーセント以上が眼に見えぬ者となつて消えていつてをる。燈火を得るためにランプを點すのは恰も肉を炙るに家を燒くに等しい。恐らくは今より五十年後には燈火の入費は今の五十分の一に下り、それに伴つて吾等の都市には夜と云ふものがなくなるだらう。晝夜の代る代る來る事は人間の活動に大きな妨げである。これは物理學の進步と共に除かれる障害の一つであるに相違ない。かくして吾等は今よりも多く所有し多く旅行し多く通信する事が出來るやうになるだらう。此遞送通信の便が果してどこ迄發達するか想像する事は難しいが、とにかく其終極は光の速さ迄達する者と見なければならぬ。吾等は今二人の人が地球上のどことどことに離れて居ても、一度會はうと云ふ意志さへ起れば、一秒の二十四分の一で會へると云ふのを理想にして進步して居るのである。吾等の進步は或はこゝ迄達する事は終迄出來ぬかも知れぬ。然しともかくこゝまで進步して始めて進步の終極と云ふ事が出來るのはたしかである。かくして此遞送通信の便が増すに從つて人間共の交通は日に日に頻繁になり生活さ[illegible]々複雜になり贅澤になり、[illegible]に人間の

無限に擴げられてゆくのである。

尤も此樣な進歩が起るためにはそこに一つの先決條件がある。即ち充分な人の力と機械との力が供給されると云ふ事である。先づ人の力の方を考へるに、將來產業組織が愈複雜になるにつれ、全組織の中でどこかの活動が止れば、それにつれて十數の他の部分の活動が止ると云ふやうになるであらう。そこで如何なる工業を經營する者も、又其工業が如何なる經濟組織の下に行はれる場合でも、罷業などのために仕事に休みが多く出來ても其休みと休みとの間にうんと生產しさへすればかまはぬと云ふやうな營業方針は漸次棄てられて、生產高や利潤は多少犧牲にしてもなるべく規則正しく仕事が行はれる事を望むやうな傾向になるだらう。さうすれば資本家たちも勞働者等の罷業のために仕事がいつ中止されるか分らぬと云ふやうな不安の狀態の下に事業を經營するよりも、其事業の一部を勞働者等の經營に委ねる方が結局利益が多いと云ふ事を感ずるやうになり、事業が次第に勞働者たちの手に移り、終に今日あるやうな爭議は跡を絕つやうになるだらう。

た道德は永遠の眞理の樣に思はれる——の出來上るにすら數千年の年月を要した事を考へると、此工業を根底とした堅固な社會組織の成るにも相當の時日を費さなければならぬ事は當然である。然し私の私かに考へる處では此樣の社會が出來るのは農業を根底とした社會の成つた程に長い年月は要しないだらうと思ふ。とにかく何れにしても此事をなし得る民族は僅かに地を嗣ぐ事を得るに相違ない。要するに私は科學の進歩の終には工業上の不道德はつまり自分の損と云ふ風になる事、ちやうど今國際間の不道德が自國の損害になるやうな世の中になりつゝあるやうな事になるだらうと思ふのである。

それでは機械の原動力はどうして供給されるだらうか。誰でもこゝ數世紀の中には今ある炭田や油田は殘らず掘り盡されてしまふだらうと云つて居る。又その時が來たら工業を基として居る文明は根本から頽れてしまふだらうと云ふ人もある。然し私はさうは思はない。それ迄に何か新しい動力が發見されると考へるからである。

る。

吾等に取つて有用な物質は之を大別して二つにする事が出來る。其一は例へば鐵、木材、硝子等の如く其物にある物理的又は化學的の性質に基づく者で、之等を材料として或は火を點じ家を建て剃刀を造る等吾等の用に立てる事が出來る物である。それから第二は其生理的の作用の爲めであつて、例へば食物、飲物、煙草、藥品等の如き物である。染料と香料とは此二種類の中間に來る。

此中で第二種の物質は人間の身體の構造生理に特殊な關係のある事だけは分つて居るが、其委細の點は明かでない。たとへば火を起すには石炭を焚いてもよし泥炭を焚いてもよし又木炭でも薪でもよいのであるが、水やアルコールであると、決して

生活の一部

類の者が外にも將來出て來たし

い。現に戰爭中フランクフルト大學の

云ふ人の發見した處によると、燐酸曹達

長時間の筋肉勞働に堪へる事、二〇パー

の勞働にも何程か效果があるだらうと云

品は續けて飲んでもよいので、或處の石

間之を續用して其生産力が大に增加した

之を飲む事が一般に大流行であると云ふ

コーヒーや茶のやうに大規模に製産される

らぬ。

今日酒や煙草や茶やコーヒーの人生に且

をるが、之を簡單に説明するのはむづかしいから之以上述べる事は差控へる。

こゝで暫くかく吾等の科學が進歩し時と空間とを征服するに從ひ藝術にどんな影響があるだらうと云ふ事を考へて見たい。今日藝術の頽廢と云ふ事がよく云はれるが、夫は主に藝術家の教育の不足に因る者だと私は思ふ。今日の詩人で工業生活と云ふ者を正しく理解して居る者は殆んどない。又美術家にもかう云ふ人は誠に少ない。今玆にミルトンやシエレーの様に時代の科學の唱へ得る詩人を得むとならば、吾等は將來の詩人たるべき人に現代の科學と經濟學との知識を授ける事が必要である。私の確心する處が誤りでなくば科學は古典等よりも遙かに想像力を刺戟する力のある者である。惜むらくは此の刺戟を感ずる科學者等が一般に之を藝術化する才能がないために其尊き所産が時より時へ葬られる運命に終るのである。未來の詩人が科學を學べる者の中より起らぬ限り昔ホーマーやヴアジルがギリシヤやロマの生活を唱ひ、其詩が市井の小僧等に盛んに愛誦せれらて、其章句がポムペイの家の壁に落書されたやうな事は望むべくもないと思はれる。

詩人や美術家に科學の教育の必要であると同じに、勞働者も資本家も藝術の教育を受けなければならない。今日の資本家たちの工業に於ける藝術觀と云へば、工場の壁に自ら繪を引つ張つて得意になつて居る位の程度であるが、此原裝飾でもこれが發達して工場の内部に壁畫を描く事は勞働者の能率を一〇三パーセント上げると云ふ様な事實が見出され、藝術が算盤勘定に合ふやうなことにならぬとも云へない。之と同時に勞働者たちも唯パンのみにて（或はパンとビールのみにて）生きる事の出來ぬ事を知るやうになる日の來る事も疑ひない。尤も其の前提としてパンとビールとの供給が確實になる事が必要である事は勿論である。

化學の應用

應用化學はこれ迄人生に對して應用物理學の熱機關や電話等を與へた程の重要な物を作り出さなかつた。尤も化學の發達のために物質の生産が非常に殖えた——殊に金屬の生産の增した事は著しい事である。然し化學のある前に既に爆裂物もあり染料もあり藥品もあつた。たゞ此等の品が非常に多量に安價に生産せられるやうになつただけである。

將來應用化學の最大の問題は冶金術によつて下級の鐵鑛の利用と粘土から其中に含んでゐる二四パーセントのアルミニウムを採る事であらう。尤もこれが出來ても鐵が青銅や擬石に代つ

[illegible]は思はれぬ。然しアルミニウム又は其合金が少くも[illegible]一の工業用金屬となる事は疑ひない。

或は又香料が多額に生産せらるゝやうになれば、吾等の鈍い嗅覺が再び刺戟發達させられると云ふやうな事も起らぬとも限らない。

けれども將來の化學上の發明の中で一番有望と思はれるのは確かに生物化學の方面にある。それは大凡次の如き理由に據る。

吾等に取つて有用な物質は之を大別して二つにする事が出來る。其一は例へば鐵、木材、硝子等の如く其物にある物理的又は化學的の性質に基づく者で、之等を材料として或は火を點じ家を建て剃刀を造る等吾等の用に立てる事が出來る物である。それから第二は其生理的の作用の爲めであつて、例へば食物、飲物、煙草、藥品等の如き物である。染料と香料とは此二種類の中間に來る。

此中で第二種の物質は人間の身體の構造生理に特殊な關係のある事だけは分つて居るが、其委細の點は明かでない。たとへば火を起すには石炭を焚いてもよし泥炭を焚いてもよし又木炭でも薪でもよいのであるが、水やアルコールであると、決して[illegible]

[illegible]つてから弘く用ゐられるやうになつた[illegible]ゞ二種だけある。それは即ちカフエインとニコチンとである。此二種は共に十六七世紀の頃始めて歐羅巴には入つて來た者である。尤も此外にもクローフォルムとかキニーンとか云ふやうな者もあるが、カフエインとニコチン程弘くは用ゐられない。實にコーヒー、茶、煙草、酒は今日食物とか水とかと同じ様に日常生活の一部をなして居ると見做してよい者である。かやうな種類の者が外にも將來出て來ないときめてしまふ理由は決してない。現に戰爭中フランクフルト大學の生理學の教授エムデンと云ふ人の發見した處によると、燐酸曹達を七グラム程飲むと、長時間の筋肉勞働に堪へる事、二〇パーセントに上り、又頭腦の勞働にも何程か效果があるだらうと云ふ事である。而も此藥品は續けて飲んでもよいので、或處の石炭坑では坑夫が九ケ月間之を續用して其生產力が大に增加したとの事で、ドイツでは之を飲む事が一般に大流行であると云ふ。或はこんな物が將來コーヒーや茶のやうに大規模に製産されるやうにならぬとも限らぬ。

今日酒や煙草や茶やコーヒーの人生に[illegible]

ど想像の外であらう。之を用ゐる爲めに多くの利益を受けて居る場合もあり、又害を受けて居る事もあらうが、要するに人類の進歩と共に此種の物質が更に多く發見せられ、それ等が適當に用ゐられると云ふ事になれば、どれほど人性を愉快にし、又人の才能をより良く働かせる事が出來るやうになるか、それは容易に斷定を許さぬ事である。

然し化學の應用によつて更に一層重要な生理的物質が製造されるやうになるに違ひない。即ち食料の合成である。今吾等の用ゐて居る食物は結局植物から來る者である。尤も動物を食ひ或は其生産した物を食ふ事もあらうが、動物は植物を喰ふ故元に遡れば植物を喰ふ樣なものである。處で植物は一般に其得た糖分を一部分だけ消化性の澱粉に變じ、殘りの大部分は不消化性のセルローズに變へてしまふ。そこで牛や馬は其腸に一杯バクテリアを棲まはせ、其バクテリアがセルローズを分解するので、其副産物によつて彼等は生活して居る。吾等も此牛や馬に習ふ必要がある。但し腸の中にバクテリアを飼ふのは氣が利かぬから一切の事を體の外でやらねばならぬ。これは化學者の工夫すべき事である。先にアルワインと云ふ人はセルローズから九五パーセント量の砂糖を作る事に成功した。惜むらくは其費用が莫大であるので實用には供せられないが、何れにしても何等かの方法で或は細菌を用ゐる事によつて此方法[illegible]られ、多分次の世紀あたりには砂糖や澱粉は鋸屑程の價[illegible]ない物になるだらう。其他の食物或は蛋白質の如きもより簡單な石炭とか空氣中の窒素とから合成されるやうになるかも知れぬ。かやうにして弘く食物が合成せられ市場に賣出されるやうになるには自分は今から百二十年以上はかゝらぬものと見て居る。

そこでかうなると、農業等は贅澤仕事になり、田畑[illegible]り、積肥や屠牛場のあつた處に工場が建ち、人間の[illegible]と云ふ階級がなくなるだらう。

生物學と將來の文化

次に生物學が如何やうに人生に應用せられる[illegible]うかと云ふ事を考へるに多くの人は醫術が大に進[illegible]や植物が改良せられ優生學が多少利用せられるだらう位の事を想像して滿足して居るやうである。私はとてもこれぱかしの事では濟まぬと思うてをる。

今暫く眼を過去に向けて人類のなし得た生物學的發明の中で最も大切なものは何かと云ふ事を見たい。こゝに私の云ふ生物學的發明とは人類と動物又は植物との間に新しい關係を生じ、

責は人と人との間に行はれた文明を開いた一切の事實を[illegible]あるに生物學的發明と云ふ事の意義を定めて見ると、人間始まつて以來今迄に六つの大切な生物學的發明があつた事が分る。そして其中四つは有史以前にされて居る。即ち動物の飼育、植物の栽培、菌類を培養して酒を醸す事と、今一つ此等より遙かに重要たのは人と人との間に行はれた者で、即ち動物では配偶を求めるのに雌が雄を選擇するので、雄の方に美しい羽毛とか鬣とか髯とか云ふ飾物が發達して來たのに、人類になつて此雌雄淘汰の方向が變つて、男が女の顏と胸とを賞美する事を知り初め、終に尻の偉大さに憧憬するホツテントツトから近代の文明人迄美の標準の向上した事實である。

此四つの大發明の外に吾等の時代になつてから、殺菌消毒と云ふ事と産兒調節と云ふ新發明が二つ加はつて人類あつて以來六つの著しい生物學的發明があつた事になる。

一體總て發明とか發見とか新説とかには色々の反對や障碍の伴ふ者である。昔プロメセウスが火を發明して人類に暗を照し食物を炙る事を敎へた。其咎で鎖に繋がれ鷲に喰はれたと云ふ事がある。化學の發明家物理學の發明家はいつも此プロメセウスである。太古の火の發明から最近の飛行機の發明迄、一度として其時の世間から瀆神の咎めを受けぬ者はなかつた。物理學化學の發明[illegible]人間は何でも自分たちの今迄[illegible]を人がするのを見れば汚らはしい事の様に[illegible]牛の乳を搾つて飲むなど云ふ事も之を知らない國民から見れば極めて不自然なきたない事に違ひない。殊に事が生殖に關係した事になると此感が一層深いものである。

右云つた事を記憶して貰つて次に云ふ事を讀んでいたゞいたら一見極めて不自然に又は汚はしく思はれる事も一概に非難するに當らぬと思はれるだらうと信ずるのである。

こゝに生物學的の發明と云ふと、大低は唯、人類動物植物界の現象を物理學や化學の知識によつて説明しようとする事と考へられる。處が生物學の進歩は決してこんな處で止まる者とは思へない。之よりも遙かに多望なものであると思ふ。

尤も今の生物學と云ふものは實に幼稚極まるものである。吾等は實際殆んど生物學と名づけてよいやうなものを持たぬと云つてもよい。之は生物學者自身もあまり氣づいて居ない事であるが、間違ひのない事實である。其證據はいくらでも擧げられる。

早い話が、生物學の應用の例としてこゝにコレラの微菌を撿定して消毒をすると云ふ場合を考へて見る。こゝに大に生物學

があるやうだけれども、こゝにある眞の生物學的眞理はたゞ「或バクテリアは或人を殺す」とこれだけである。其外黴菌を顯微鏡で廓大して見たり染色したり藥品で消毒したりするのは光學又は化學の應用に過ぎない。尤も更に一歩を進めてチフスの血淸を注射して免疫にするといふやうな事になるとこゝに大分生物學的の事が入つて來るが、其理論とか云ふことになるとまるで分つて居ない。

眞の生物學の理論とか學說とか云ふものとして吾等の今持つてをるものは、昔アリストールやヒポクラテスやハーヴェーの見出した生物界一般に通ずる若干の法則の外に其後ダーウヰン、マイエル、クロードベルナール、メンデル等の見出した法則等がいくらかあるだけで、個々の生物と其體の部分に就て知られてゐる無數の事實は悉く其解說を將來に持つてをると云ふ有樣である。

今より七十年前にダーウヰンの說いた處は近頃になつてやうやく其眞價が認められるやうになつた。現に或宗教等に重大な影響を與へて居る樣な次第であるが、ワイスマンやメンデルの學說や發見も多分今世紀の終迄には一般世人に充分理解され消化されて、ダーウヰンに劣らず政治論や哲學等に大きな影響を與へる樣になるであらう。蓋し此等の學說は生殖とか遺傳とか云ふ問題に關係してゐるからである。此等の學說によ[illegible]の移ると共に進化論が與へたやうな大きな衝動を總ての方面に與へるに違ひない。此等の衝動はどう云ふ形のものであらうか。之を今より豫想する事はむづかしいけれども、其衝き當られる對象が極めた根深い因襲的の思想であるから、ちやうど吾等の祖父たちがダーウヰンを聞いて、人間が猿の子孫だと云はれたと思つて時に劣らぬ程の驚きと憤りを感ずるに相違ない。幸にして人間には防水（防新思想）の室を造つて其中で物を考へる特殊の習慣なり能力を持つてゐる。それで此等新學說の影響も進化論同樣急に感ぜられるやうな事もなく極くゆるやかに入つて來るだらうから心配する程の事もないかも知れぬ。

次に生物學を人間の生活に應用する方面即ち醫術の進步は此後更に大きな影響を人生社會に與へるであらうと思ふ。醫術が此後一層進步すれば將來の歐洲の社會には恐らく產業革命に劣るとも遠からぬ程の大なる影響が來ると思はれる。現に僧侶が其職を次第に醫師や看護婦に奪はれてゆくのは事實である。之も重大なる社會上の變革であるが、外に極めて著しい事は今より四百年前迄は大多數の人が小供の中に死んでしまつたのに、今日では平均四十五才迄生きると云ふ事になつてをる。現在の都市の甚しい不衛生狀態を以てしても、貧民窟の小兒死亡率は

出世の言葉の交に比して三分の一以下である。それで死と云ふ事がだんだん吾等の實際問題から遠のいてしまつた。宗教も昔は良い衛生の觀特を衆生に教へて居たのに今日では良い生涯を送れと云ふようになつて來た。之と共に生命の短い事を前提にして出來て居た制度は根本からこわされてしまつた。例へば英國の土地制の如き地主の壽命を凡そ四十歳とし、四十になつたら死んで二十位の息子が其後を繼ぐと云ふ事を前提にして出來た者である。此二十の息子は此土地の管理に其生涯を費し、其外の事はあまりしない。それで先づあまり不體裁なしにやつて往けると云ふやうな譯になる。處が此頃はどうかと云うと、親爺は八十になる迄便々として生き延びて居る。それで少くも晩年の十年はまるでだめである。其息子がそれから始めて後を繼いでやつてゆくと云ふ事になるが、此時は早五十にもなつて居る。若い時分には陸軍の佐官になるとか株の仲買をやるとかして一人前にやつて來たにしても、五十になつては最早新らしく土地管理のいろはから學ぶ事も馬鹿らしい。習つた處で若い者ほど一心にやれない。そこで誰か代理のものにやらせると云ふ事になる。それが大概は頭がないし又道德的に腐敗して居る。それが極めて非科學的に仕事をやつてゆくので、自ら收入が思ふ様に上らぬ。それで直にこれは赤化思想のためだ等云ひ出す。何ぞ計らん原因は遠い處にある、即ち醫術の[illegible]の當面の敵である事を知らぬのである。

再び本論にもどつて、また現在の科學が進步すれば將來どんな事が起るだらうかと云ふ事を考へて見る。そして、今から後例へば百五十年もたつて此の二十世紀の間に生物學が人類に[illegible]史にどれ程の影響を及ぼしたかを回顧する積りになるとする。其頃に例へば或大學の一年生の出來の惡い男はまあこんな論文でも書いて出すだらうかと云ふ想像である。

「既に二十世紀の劈頭に於て生物學を實際政治に應用せむと云ふ運動が起つた。それは即ち所謂優生學であつた。此頃に生物學は始めて其存在を認められるやうになつたのであるが、その時分斯學を直接人生に應用し、其頃あつた極めて原始的な社會狀態の中から一種超人的の人種を創造せむとの企てが起り、國によつては之が爲めに法律を定めむとするに至つた。且彼等は梅毒、精神病等の傳播を防がむ爲めに相當の努力をなした[illegible]く、之がために一般民衆殊に子孫を殘すにふさはし[illegible]はれた階級の中より最も激烈な反對が起つた。(甲[illegible]カ州に於ては其爲めに暴動をすら引起すに至つ[illegible]にかく彼等は世論に先立ちて進み其歸嚮すべき[illegible]ふ點で結局相當の成蹟を擧げる事を得た。

更に他方に於ては醫學の進歩の結果、個人の生活に國家が或程度の干渉をする事を拒まなかつたやうな國では傳染病と云ふものは大低なくなつてしまつた。そして終に一九五八年の國際聯盟會議で定めた法令の施行により全く傳染病は世界から跡を絶つ樣になつた。唯印度人が長く此制度に反對したので、印度の一部では一九八〇年迄何不衞生な狀態が續いた。

なほ他の見地から見て、重要な生物學的の仕事として擧ぐべき者は此世紀の初め三十年間になされた實驗動物學及實驗植物學の業蹟である。早くも一九一二年に於てモーガンはシヤウジヤウバヘの核に於て多くの遺傳質の位置を決定する事を得、マーモレツクは或方法を用ゐて無害の黴菌をして天竺鼠を殺さしめる事に成効し一九一三年にはブラシエーは血清中に於て兎の胎兒を數日間育てる事を得た。それにも拘らず一般世人は勿論當時の生物學者輩も此等の仕事が如何程迄人生に應用され得る者なるかを豫想する明のなかつた事は眞に驚くべき事である。

然るに一九四〇年セルコウスキーの發見した紫色の海藻 Porphyrococcus Fixator が計らずも世界の歴史を一變するに至つて始めて世人の目は開かれて科學の研究の如何に人生に重大なる結果を齎すかと云ふ事を認めた。此時より前五十年間に世界に於ける小麥の産額は凡そ倍になつた。之は種々の化學肥料の普及にも因るが、主として種々の品種の交配を行[illegible]である。然し此方面の進歩は其後暫らく行きづまりに陷[illegible]た。處が此ポルフヰロコツクスと云ふ藻類が實に驚くべき窒素同化力を有する事が證明せられたのみならず、水と少量の加里と燐とのある土地ならば如何なる氣候の下にも繁殖して空中より窒素を攝取して之を同化する事が見出された。而も其効果の偉大なる在來の荳科植物が一年に擧げる所を四日でなし得る。此者はセルコウスキーの實驗室で始めて作られたもので後改良淘汰せられて實用に適する樣になつた。之を用ゐるやうになつてから窒素の不足のために産額の充分でなかつた地方では、至る處麥の産額が倍になり、牧場の價は四倍に騰貴した。程なく食物の値は一般に大暴落を見、農業のみによつて立つて居た地方の頓に衰頽したため、終に一九四三年及四年の大慘事を惹起す原因をなすやうになつた。

殊に又一九四二年に此ポルフヰロコツクスのQ系の者が偶然海中に逃げそこで急劇な繁殖をしたため、食料は更に急劇な增加を見た。初め海中に之が入つた事の分つてから二個月間と云ふものは熱帶太西洋の海洋の表面は一面寒天の如き物で蔽はれ、それが引いて歐洲の天候に大きな影響を與へた。それから游激生物の或者の中に之を消化する酵素を生ずる者あり、それ

が海中の魚族を急劇に增加せしむる原因となり、終に今日見る如く魚類を一般に安價に喰ふ事が出來るやうになり、英國も食料を他から輸入を仰ぐ必要もなくなり、英國の食料政策の獨立が完成された。そこで英國全體の富が急劇に增加し、終に其年始めて炭坑夫同盟がデルビーに其仲間の馬を參加させる事が出來るやうになつた(デルビーと云ふのは其頃年々やつて居た馬の競爭の事である)。

吾々は今海の色を濃紫色だと云ふ。吾々に取つてはこれ程自然な事はないが、之は云ふ迄もなくポルフヰロコックスが海に入つて以來の事で、それ迄は海の色は綠色か藍色をして居たと云ふ。これは一寸聞くと奇異に聞えるが、昔の本にはちやんとこう書いてある。而も此藻が海に入つて海水の色が綠や藍から急劇に紫色に變じた時、吾等の曾祖父母たちは美の見地から大に之を歎いたと云ふやうな事實もあつたのである。

此外一九五七年フエルグソンとラーマツーラとの共同研究の結果一種の地衣を作り出し之を繁植させて地球上の沙漠の砂を固定せしめる事に成功した事、或は風力を利用する計畫が社會黨によつて大規模に實行せられるやうになり、終に農業地方の失業問題が解決せられるやうになつた迄の事等は何人も知る處であるから多くこゝに述べる必要を見ない。

次にジュボンとシュワルツとは一九五一年[illegible]兒を發育せしめる事を得た。之より先一九〇一年ヒープは[illegible]於て其胎兒を甲の雌より乙の雌に移植する事に成効し一九一[illegible]年ハルデーンは鼠の胎兒を十日間血清中で養ふ事を得たが、終に之を終まで成効する事能はずして已んだ。而して漸く一九四〇年に至りクラークはケールマン溶液を用ゐて豚の胎兒を產出時まで育てた。チュボン及シュワルツは初め飛行機の事故の爲めに墜落慘死した婦人から新鮮の卵巢を得之を五年間生活を保たしめる事を得た。且之より若干の卵を取り之に授精する事に成効した。然るに胎兒に營養を給する事は甚だ困難であつた、その後四年かゝつて漸く成効を見るに至つた。今や此方面の技術の完成により吾等は婦人より卵巢を剔出して適當の液中に留けば、之を實に二十年間生活を保たしめ置く事が出來るのである。其間各自に新しき卵を生ずるが、其中九十パーセントは之を授精發育せしめ、其幼兒は又九ケ月間容易に之を生育せしめて之を空氣中に出す事が出來るやうになつた。科學の進步實に驚くべきである。しかも之は多くの科學者の永年の苦心の結果であつて、シュワルツの實驗は決してこゝ迄の成効ではなかつたのであるが、彼の始めて此種の實[illegible]

云ふ報は全世界[illegible]

文明國に於ては出產率は死亡率に及ばなかつたためである。そこでフランスは先づ此胎外產兒法を國法を以て採用する事に決し、一九六八年迄に此法によつて年六萬づゝの小兒を生じ來つた。フランス以外の諸國では强い反對もあり、殊に一九六〇年法王の布令を發して前代未聞の大怪事として之を嚴禁せんとするあり、又同年回教々主も同樣の意味で反對を試みたが、今日では誰も知る如く此胎外產兒法は世界到る處に於て實用せられ、吾國に於ては現に僅かに三十パーセント未滿の小兒が女より產まれるのみで殘は皆此法の所產である有樣である。そこで此性愛と生殖との分離の人の心理及社會生活に及ぼす影響は必ずしも良き者とは云へない。古代の家族生活にも大に取るべき者がある。今日吾人は女に乳の出るやうにする爲めには常にプラセンチンの注射による事にしてをるが、昔の吾等の曾祖父母時代の原始的なやり方にも確かに良い處がある樣である。けれども一方に於て吾等が子孫を殘すべき男女を選擇する樣になつた事は右の缺點を補うて余りあるものである。今日次の時代の父母として選ばれる少數の男女は確かに平均より優秀な者であつて、此法によつて今迄優れた音樂者を出す事も得たし、又竊盜を大に減ずる事を得た事等見逃してならない事である。若し此胎外產兒法の應用なかりせばどこの國に於ても全國民中の最劣等な分子の繁殖率の比較的高き爲めに其文化の餘り長かに廢滅に歸した事は聊か疑ふべき余地がない。

この胎外產兒法に於て次の時代の母となるには勿論或手術を受けなければならぬ。此手術は曲線美を損ふとか生命に危險を及ぼすとか云ふやうな事無く、又生理的に有害等云ふ事は全然無いが、然しとにかく手術を受けるのだから、決して愉快なものではない。けれども名譽は名譽である。かう云ふ事でなければ恐らく民衆の反對が激しくてとてもかやうな事の實行がむつかしかつたであらう。現に此國では此法に對する非難の聲が例の通りとてもやかましくて、其爲め現行の嚴密な選擇法を始めて採用したのはドイツよりも一時代後の事であつたが此頃では或は他のどの國よりも進步して居るかも分らぬ程に迄なつた。とにかく今日此選擇法を徹底的に施行する事の利益は殆んど計り知られない。たゞ今尙問題になつて居るのは理想的の男女の數の比如何と云ふ事で、此點に就ては種々の異說もあるが大體の此頃の傾向は最初の男女同數論に戻りつゝある樣である」。

なほ此論文の著者は進んで一九九〇年頃に起つた一層根本的の進步に就て記述して居るかも知れぬが、こゝには寧ろ生物學の應用として比較的早い頃に行はれた者のみに關する記述を引用するに止めて置く。

とおく右の様に生殖といふ事が[illegible]な事になるまでとしたら、確かに人類に全く新しい意味の時代が來るであらう。現在の國民の特質が時代と共にいくらかづゝ變化しつゝある事は明らであるが、之が如何なる法則に從つて變りつゝあるか、まるで分らない。政治の要諦は此國民の特質の變化に順應する如き施設を見出すにある。これから後或は此選擇生活法によつて國民の特質を自由に變じ得る事國家の施設を時世に應じて變へ得るに等しくなるであらう。今より三百年後の選擧のビラに（若しこんな奇怪な手段が此時までも續くものとしたら）例へば『スミスに投票して音樂者を得よ』とか『オレアリーに投票して娘を多く產ませよ』とか『マクフエルソンに投票し、汝の曾孫に尾のある者を生ぜしめよ』等書くやうになるかも分らない。吾等は已に動物の品種に甚しい變化を生ぜさせた。此の法を人類に應用するやうになるのは唯時の問題だけではないかと思はれる。それで此未來紀記者の筆を借りて人類全體に應用される將來の生物學は大凡右述べた樣な風の事になるのではないかと云ふ處を述べたのである。

それから又個人個人の改良に就ても生理學がもつと進歩しどう云ふ才能はどう云ふ生理的自由によつて其發達を妨げられるかと云ふやうな事が詳しく分れば、此妨げを取除く法が考察されること[illegible]在でも我等の[illegible]（特に甲狀腺生殖腺等）の作用に[illegible]等が知て居る。そして此等の腺に故障が變化があつても人の性格に甚しい影響を及ぼす事が分つて居る。此方面の知識が更に進めば、例へば人間の感情や慾望を制するのに斷食したり苦行をしたりするよりももつと直接有効な方法がある事も分らうし、又吾等の想像力を刺戟するにしてもアルコールよりもつと副作用のない良い藥も見出されるかも分らないし、或は惡い人間の天性を矯めるに牢に入れたりする事を廢めて生理學的方法を用ゐるやうにならぬとも限らない。之と同時に此後犯罪も一層巧妙になり十九世紀に藥學の進んだ以來始めて起つた犯罪等よりも更に巧るべきやうな新しい犯罪が殖えることもありさうな事である。

醫學の最近の進歩を回顧して見ると、大凡次の樣である。八七〇年頃迄は醫學は主に生理學の上に立つて居た。それで病氣は皆負傷等と同じで其原因は患者の體にあると考へられた。處がパスツールが出て傳染性の病氣の本性を明かにしたので、一般の病氣に對する考へが變り、從つて或病氣の豫防の出來る事が分つた。けれども之と共に醫學全體の傾向が變つてしまふやうな事になつた。それ故若しパスツールが生れずバクテリ

と云ふものが今日迄見出されずに居たら、傷が膿んで死んだりチブスで死んだりする人は今よりずつと多いだらうけれども、腎臓病や癌等は或は今よりもたやすく治療が出來るやうになつて居たかも知れない。癌等は特別の黴菌のために起るものではなからうが、結核の黴菌等は或人には比較的無害であるに係らず他の人には甚有害であると云ふやうな事もある、そして其理由は一向分らない。それ故かう云ふ點になるとパスツールの始めたやり方ではだめで、どうしても黴菌の研究よりも患者の體の生理をもつと研究する必要がある。現に醫者にちかに黴菌を殺す手段のない場合には患者の體の營養を旺にして生命を保たせ、獨で病に打勝たせるやうにしてをるのである。さう云ふ譯で將來はどうしても生理學の知識がもつと必要になつて來る。尤も今の生理學者の研究が癌の豫防法を見出すやうになるかどうかは分らない。パスツールの如きも最初は結晶の研究をして居たものである。然し誰にしても癌の豫防法を見出すのはきつと生理學的の知識を大に應用する人であるにちがひない。

かやうにして若し病氣が全く無くなれば死は眠りと同じで全然生理的の事になつてしまふ。それで共に生きたものは共に死ねるやうになる。元來人が來世の生活を望むのには二つの動機があると思ふ。一は此世の生活が完うしない中に行くと云ふ氣持のする事、一は本意なく訣れるなつかしい人々に再會と云ふ望である。若し生涯の仕事が完うし徐ろに墓に下るなら、此第一の氣持は大低無くなるだらう。又吾等の親しいものが短命を慨き乍ら死んでゆくと云ふやうな事もなくなるだらう。

老齡のつらさは男子より婦人に取つて一層甚しい樣である。婦人は平均して男子より長命するが、四十歳と五十歳との間に來る生理的變化の爲めに、どうかすると健康が損はれ病に冒されるやうな事がある。此變化は主に卵巣から出來る或化學物質が急劇になくなるのに因るやうである。若し此物質を分離し又合成する事が出來たら、婦人の青春時代を長くし、男子と同じやうに自然に徐ろに老齡が來るやうになるかも分らない。

序に心理學はこれも亦未だ科學の名も冠らせる事が出來ぬ程幼稚なものである。之も生物學と同じで僅か二三抽象的の又哲學の臭ひの大にある法則のやうな者が見出されて居る。而も之等に就ても尚議論があると云ふ有樣である。それで實驗の方では隨分重要な事實も發見されて居るが、之から歸納された理論とか法則とか云ふやうなもの、例へば潜在意識の存在と云ふやうなものは未だ數が至つて少い。然し催眠術や暗示の實驗を一度でも見た事のある人は若し其等の結果を自由に加減し又其應用に或規準を設けると云ふやうな事が出來る——ちやうど藥劑

を使ふ場合のやうに――者としたら其影響の及ぶところ實に想像の外にある事を思ふのであらう。又今日或人々の云つて居る他界の靈と交通が出來ると云ふやうな事が假に出來るとなれば其結果はどうなるかとても分るものではない。

右述べた處はとにかく科學の進歩は此後どの邊迄達する事が出來る者であらうかと云ふ事について僅かの暗示を與へたに過ぎない。とにかく科學の將來なすべき事は非常に多い、而もどのやうな意外な事實が此後見出されるかも分らぬ。自分は思ふ。科學者殊に生物學者は今日此地球上に生存して居る人間の中にあつて最もロマンチックな人々である。彼等を一寸見ると如何にも不景氣な榮養不良の顏をしてをる。そして顯微鏡にも見えぬ世界の中を盲滅法に彷徨したり、扁形動物の腎臓に就て生涯を費して仲間と議論して居る中に死んでしまつたり、或は或朝起きてふと新聞を見ると、名も無いどこの馬の骨とも分らぬ男が一寸した實驗に成功して自分の仕事を引くり返してしまつた御蔭で自分の不朽の名が生物學史に止まり損つたりする事を見出したりするやうな人間である。かやうに生物學者の生涯には多くの悲劇もある。然し彼は或どうしても逃れられぬ責任を負はせられて居る事を知る。そのために利害の觀念から全然脱却してより高い者のために日夜努力して倦む事を知らぬ者である。[illegible]にこびりつく人々また[illegible]かさる〻人々を恐れるに[illegible]あらゆる心性の中で[illegible]く人々である。[illegible]文化の礎を崩す者である。彼等は[illegible]ひ、[illegible]ち、又神をも殺す[illegible]である。過去に於ては例へばヴォルテール、ベルタム、テール、マルクスのやうな人々がそうであつた。[illegible]がダーウヰン出で、科學者も亦同じやうな事をする事を示した。此後人が理性の最も多く科學の圏内で其自由を享樂する事を悟り、且其の力の科學を通しても政治哲學文學によると同じ様に偉大な影響を世に與へ得る者である事を知るに至つたら、其後なほ多くのダーウヰンが世に現はれるに相違ない。此種の人々は本來眞理のために眞理を愛するのである。然し其業蹟の實用せられる時、世に與へる影響の如何に大なるかを見れば、勿論何程かの興味を感ぜずには居らぬ者であらう。

尤も今の生物學者は一般に其學問が將來如何に人生に大きな影響を與へるかをあまり關知せぬやうな顏をして居る。彼等は例へば棘皮動物と腕足類との類緣はどうかとか云ふやうなに沒頭し或はたゞ其俸給を溜めて餘生を安樂にするとかな事ばかりしか考へて居ないかも分らない。彼等[illegible]達の此世のすゝものであり此世[illegible]

彼等には夢を見る暇がない。然し彼等は實際口に出て云ふよりも多く夢みて居る事は確かである。

結論と餘談

私は上に私の夢を描いた。これは惡夢であるかも知れぬ。元より科學の知識が人生にどれ程の革命を起すか等云ふ事を一々の場合に就て豫想する事は殆んど不可能である。けれども實際革命を起すべき事だけはまちがひない。恐らく私の想像したよりもつと激しい革命が來るであらう。私自身は遺憾乍ら既に過去に喰込まれた人間である。それで少くも家族生活位は何とか此儘事無しにすませたいと願はぬでもない。然し上に私の暗示した處の事はどれもこれも已に幾分其徴候の見えて居ない者はないのである。若し假に十七世紀の終頃に居た化學者が物理學者をして自分の專門の學問の將來に就て豫想を云はせたとしたら、隨分滑稽な事も云ふただらうが、とにかく其學問が何かに應用される事を信じたであらうし又其豫想の中何程かは當つたであらうと思ふ。

要するに吾等の科學を考へる時には三つの見地からしなければならぬ。第一は科學は人間の理性及想像力の自由活動である。第二は多數者の富と樂と勝利とに對する要求に對する少數者の應答である。第三に時間と空間との征服、次で物
服、自己及他人及一切の生物の體の征服、そして終に其靈
ある暗い惡い影の征服である。

元より此等の征服は決して完全にゆくものではない。然し着々進涉すべき事は確實である。思つてこゝに至ると此恐るべき力を誰にでも與へてよいといふ譯にはゆかぬやうな氣もする。少くも自分を修める力のある人だけにしか持たせてならない。さうでないと丁度赤ん坊にマッチの箱を持たせて置くやうなことになるといふやうな論も起り得ると思ふ。此返答は日々の新聞を見たらいくらでも出て居る。昔から世界の人々は戰爭を撥めて一つの力の下に聯合しなければならぬと理想主義者が聲を涸して唱へた。そして外に名案がないと云ふ理由だけで、同じやうなことが何年たつても繰返されて言はれて居た。そこへ歐洲戰爭が始まつた。そして論理學で所謂 reductio ad absurdum 的に彼等の云ふ處が裏書されるといふやうな事になつた。然しそんならこれは誰の力かと云ふと、決して彼等理想家たちの力でなくて、要するにブラックとかケクレとかラングレーとか云ふやうな化學者や生理學者が人間の自然を制御する力を增したためである。其結果廻り廻つて、然し實は論理の必然な結果として國際的の機關を設ける事の機會を造るやうなこと

に立到つたのである。

今云ふ通り科學者共は本來國の區劃を[illegible]といふやうなる[illegible]に反對する様な仕事をして來たものであるが、今日では彼等の努力の結果は聯盟を生み又世界を一つの國にしたらよいと云ふやうな事を考へる人がどこの國でも普通の人々の中にも出で來るやうなことになつた。元より今の國際聯盟が發達して世界を一つの國にするといふやうな風にはならうとも思へない。又第三インターナショナルが變つてそんなものにならうとも考へられない。然し今世界至る處に此種の希望を持つてをる人が多くあるのは事實である。又いくらか其端緒のあちこちに現はれた事も確かである。然し大多數の人々に此必要を感ぜさせるには尙一二回戰爭が必要であるかも知れない。かういふ必要から次に又戰爭が起る事は極めてありさうなことである。

考へやうによつてはかやうな戰爭によつて却つて全世界の和合が不可能にならぬとも限らない。さうすれば人類は又二千年許り次の機會の來るのを待たねばならぬ事になるだらう。然し二千年位は地質學から云へば殆ど數にも入らぬ程である。人が其原始時代を通り過ぎるに二十五萬年もかゝつた。國境を超越するにもどうしても此位かゝると見て差支なからう。

それで私の考へでは科學の應用が弘くなるにつれ、人間の惡[illegible]
つて、今迄[illegible]幾千萬人[illegible]
終に行き詰[illegible]して[illegible]
かと思ふのである。マルクスは[illegible]組織の進化に關する學説即ち此種の特殊の場合を取扱つた者と見てよい。但し問題の解決法として彼の提出した人爲的の方法が必ずしもよいと云ふべき理由は毛頭ないと思ふ。

とにかく今工業の進歩と共に戰爭と云ふものもだんだん不可能になり、又私有財産制の或部分が維持困難に陷りつゝあるやうに、生物學の進歩は終に我等の社會にある或種の不道德な行爲が到底行はれないやうにならせるであらう。例へば前に引用した未來記の中にあつたやうな優生學的の制度が若し實行されるものとしたら、現在ある階級制度や男女間の關係等はとても成立してゆかない事になる。私の考へでは人間が道德的に進歩することは甚だ困難なことであるから、どんな方法でもよい、又どんな恐ろしい衝動を與へるやうな事件でもかまはぬから、とにかく人間が道德的に進歩するのでなければ人類は結局亡びるの外はないと云ふ事實を的確に人間に知らせる法があつたら大に歡迎してもよいと思ふのである。

之を要するに科學は未だ搖籃時代を出ない。吾等の今日將來

に就て云ひ得るのはたゞ今迄なかつた事が將來あるだらうと云ふ事に過ぎぬ。たゞどんな信仰でもどんな權威でもどんな制度でも決して永遠に安全であり得ないと云へるだけである。先頃の大戰は實は科學の進歩の結果として當然起るべきやうな事件の一例に過ぎなかつたのである。人類の將來行くべき路は決して平坦ではない。行けば行くに從つて後から後へと色々の問題が湧いて來る事であらう。其の中には昔からあつて今日も變らぬ者もあらう。恰も罪惡の大きな花が開いて終に自ら腐り果てるやうな事も見るであらう。又時には全く新しい問題の蕾も開から。人類は科學によつて新しい力を得たが終には其力の爲めに倒れるやうな事になるのではないか、例へば養分を取り過ぎて養つた草のやうに。それは吾々には分らぬ。何れにしてもかやうな問題は決して何も急に今始まつた者でない。これは昔からあつた自由と云ふ人生のパラドックスを脚色し人を俳優に世界を舞臺とした問題劇である。知識を知識の爲めに追求める人類特有の欲望の尊さを信ずる人には人類の前途には光明が輝いて居ると見られるであらう。けれども人類が其力に其德性を鹽梅する時にのみ此光明は輝く。若人類が此事に成効する時が來たら、科學は始めて其手に道德的進歩と云ふ險しい道の鍵の一つを握るのである。

科學者とても亦其時代の道德觀の養料を吸ふて育つたある。彼等にして若し自ら運命的に善を惡に變へる仕事を—をる事に氣附かなかつたら彼等は幸福である。然し元々人の德性を善とか惡とか判斷するには其人の力が強いか弱いかと云ふやうなもので絕對的の標準は何にもない。それで人間の力がだん〳〵增して來たら今迄善い事と云はれて居た事でも惡い事と云はれねばならぬやうな事も起る。例へば衞生に關する知識の進歩の結果、傳染病の流行の際には昔は靜かに之を運命と觀じて呟かないでぢつとして居るのがよいとせられてゐたのだけれど今では之を明かな罪惡として咎められるやうになつた。又此頃では昔何より大切と思つてゐた軍備の一部を廢する事が必要と思はれるやうになつた。又愛國心の如き昔は神壇のお燈明のやうに神聖なものと考へられてゐたが、今は世界を燒き盡す業火の如く思はれるやうになつた。それ故吾等は因襲的の道德を除り大切な者と思はないやうにする事を學ばねばならぬ。科學の進歩は神話を葬る事は出來易いが、之にへばりついた因襲道德は中々除きにくいものである。宗教には如何に獨斷的分子の少い宗教でも何かの傳説的道德を持たないものはない。これが科學と宗教との永遠に排馳する所以である。基督教は恐らくあらゆる宗教の中で一番融通の利く者である。これはエスがモ

[illegible]
のを一つの[illegible]なかつた爲めである。何れ教へにも二[illegible]常人には實行の出來ないやうな高いもので此所でモーゼの教へやマホメットのと非常に違ふからである。處が其後出來た教會と云ふものは夫々皆新しい勝手な信仰個條を製造して之を信徒に強ひた。處が幸にして此等信仰個條と聖書にある教へとの間には非常な距離があつた。それで多少そこに進歩の餘地が殘されて居たのであつた。

とにかく科學を學ぶ者を滿足させるに足る宗教は其傳説も信條も決して永遠不變の者でないと云ふ事を自認するやうなものでなければならぬ。尤もかやうな者が果して宗教と云へるかどうかそれは別問題である。然しかやうな宗教が基督教から發達する事を望んでをるものは今も多くある。

ともかく將來の科學者の姿は益々寂しいものであらう。彼等は自分の悲しい運命を知る。そしてそれを寧ろ誇るであらう

黑い着物を頭から爪先きまで
下には暖かい肌と肉と
脈には飢と渴と性が流れる
眼を見よ。はじめの細胞の様な
圓い光つた焔が燃える。

社告

改造新年號中欄第五十二頁第十三行目小町開三（假名）氏「古代人の地誌にあらはれたる日本」の文中に不穩當の文字のありましたことは編輯者の重大なる手落ちでした。

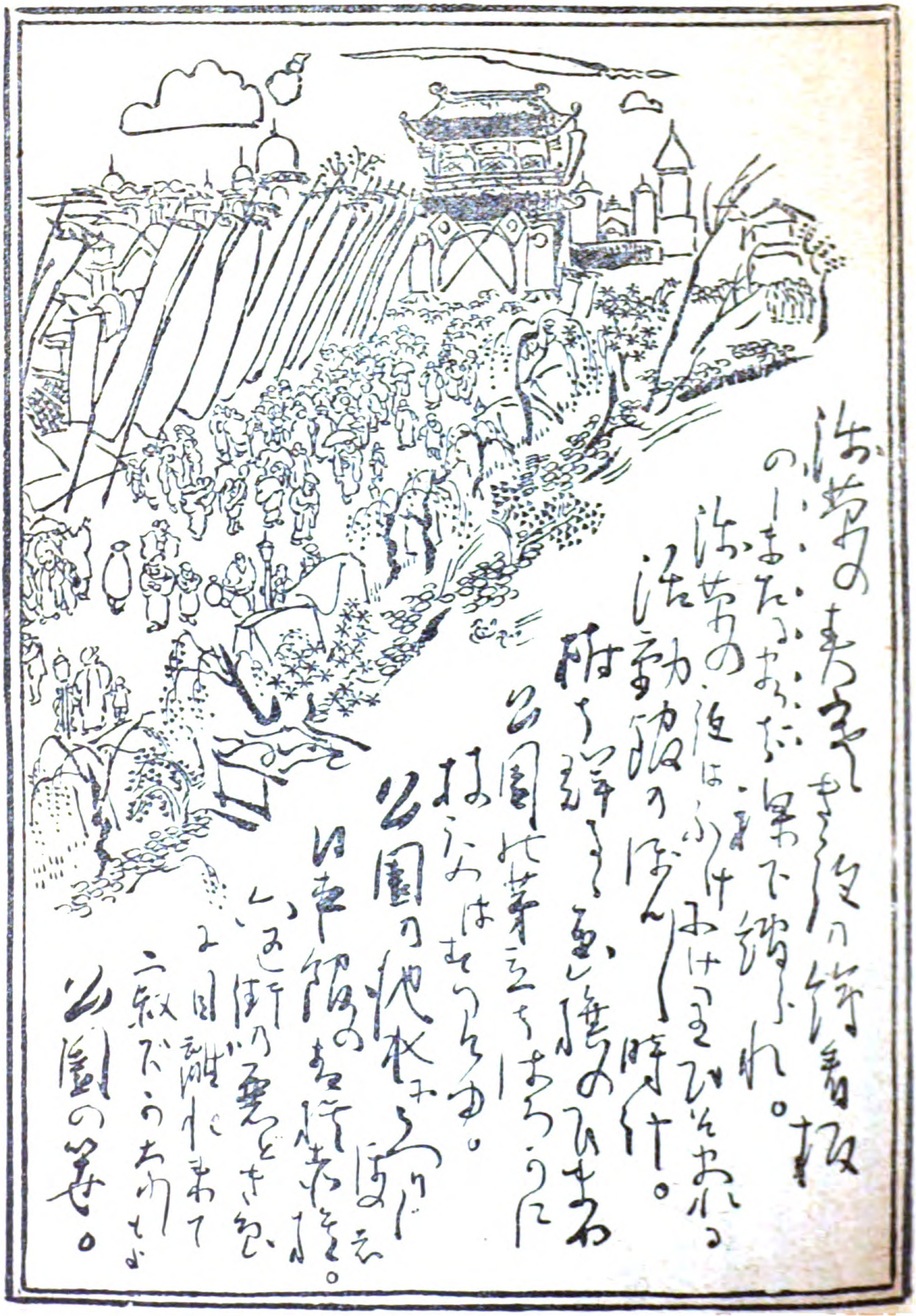
我社は在巴里の筆者にもその反省を希ふと共に茲に東京水平社を通じて全國水平社並に讀者各位に陳謝致します

大正十五年二月十五日

改造社

東京景物の歌を
浅草公園の子
草なびけ堂あつて仏まきとおもひろう
閑窓子の松ケ崎なかなき
春風が何代戦に紅塗れ
浅草街の毎々年々年々
春の日は浅草街の賑ひかなず
ねむれば今日見る看板の太刀。
ばかりの丹を早見よ浅草は
いつきねまを振けては春の日か。





文學の讀者の問題

片上伸

文學が一つの社會的現象であると言つたら、人は今さらのことだと言ふでもあらう。全く、われ〳〵の考へたり書いたりすることの中には、遺憾ながら「今さらのこと」が少なくないやうに見える。しかしながら、その「今さら」らしく見えることに就いて、新らしく考へたり書いたりする必要が、存外少なくはないといふことをも、序でに世間の聰明な人たち（批評家と稱する人々をも含めて）に考へて見て貰ひたいのである。

文學が一つの社會的現象であるといふことに就いては、これまでに書かれたものも可なり多いやうである。藝術上の情緒が、結局一つの社會的情緒であつて、藝術家はそれによつて、われわれ自身のと近接類似の生活をわれわれに經驗せしめるといふこと、音響の律とか色彩の調和とかいふやうな快い感覺から與へられる直接の滿足のほかに、藝術家がわれわれの想像のうちに呼びあつめて來るいろいろの存在の間に心を置き、それに同感する心持ちの起こるに伴つて一種の滿足が生ずるといふこと、――要するに、この藝術的情緒は本質に於いて社會的であつて、その結果として自のづから個人の生活を擴大し、一層廣い共通普遍の生活との融合に導くといふこと、藝術の窮極の目的はこの社會的情緒の創造に在るといふこと、――これ等も既に說かれてゐるところである。また、藝術家の創造の心理の方面から觀察して、藝術家の根本的な特質を「共に苦しむ」力に在りとする說もある。この「共に苦しむ」力によつて、藝術家は自己の「我」の範圍を越えて他と融合することが出來るやうになる。この「共に苦しむ」力の助けによつて、藝術家の心は、無數の他の人類の感情を反映し、またそれに反響する。その力によつて藝術家の意識の音響が滿たされる。それは時と隔たりとを短縮して、藝術家の前に過去と未來とを呼びさます。

それによつて[illegible]い殆ど聞こえないほどの響きにも共鳴して震動する。それは藝術家の想像力に翼を與へ、それによつて翔の如くに飛び立つ。藝術創造の能力と重大な關係を持つところの想像力は、この「共に苦しむ」力と密接に結合してゐる。藝術家が社會のもしくはひろく人間生活の興味に對して呼應共鳴する力の鮮活であればあるほど、その藝術の力はそれだけ強くなる。ひろく人間生活の興味に對して呼應共鳴する力の鮮活な藝術のみが、眞によく多くの人々の心を動かし、廣い人生の視野をひらく。――この說もまた新らしいものではない。

更に、藝術上の事實の進化發達するあとを見ると、その樣式によつておのづから集まつてそれぞれの群を成し、それぞれの流派を形づくつてゐる。これは時處を同じくすることもあれば、また必ずしもさうでないこともある。とにかく何れにしてもその樣式の持つてゐる集團的性質は見のがすことが出來ない。またあらゆる藝術は一定の公衆を豫想し、一定の文化の環境を條件とする。藝術上の作品の價値は、時代と環境とに從つて常に移動する。一定の公衆を豫想することなしに、藝術上の作品の價値を考へることは出來ない。藝術上の價値は自のづから一つの社會的の現象である。――かういふ考へも既に說いたし[illegible]。

これ等の[illegible]文學藝術[illegible]にする[illegible]するための試みとして、[illegible]今日では、[illegible]れた考への中うにさへもなつてゐるであらう。文學藝術が一つの社會的現象であることは、今日では常識だと言つてよい。もつとも時々氣まぐれな考へかたの人が出て來て、そしてそれは大抵「藝」とか「技巧」とかをそれだけで獨立した特別のもののやうに考へがちな人たちだが、文學の社會性を否定するやうな一種の激語を放つたりすることもある。しかし、それ等とても、その眞意に於いては、ほんの一時の何かに興奮したあまりの言ひ分と見るべきものであつて、もはやこの一義については、根本の點では論はないものと見てよい。しかしこの一義は、いはゞ文藝論の肝要な一つの出立點であつて、この一義の徹底と不徹底との差が、重大な文藝論上の爭ひを生むのである。この一義は決して輕く見るわけには行かない。要するに文學（ここでは文學だけに就いて論ずるつもりであるが）の社會性は、文學を享受する方面の事實から見て決定せられる。文學創作の方面の事實から見ると、作者自身は、或ひは「純粹な藝術」のための使徒として自分を考へ、文學の社會性といふやうなことは、てんで意識してゐないかも知れない。しかし、作品が出來上るととも

に、それは作者の意識の如何に頓着なく、客觀的な價値の對象となるのである。即ち作品が出來上るとともに、それは一つの社會的現象となるのであつて、この事實は何としても否定することも無視することも出來ない。

文學が一つの社會的現象であることは、實際の場合としては作者自からもこれを認めてゐることが少なくないのである。ある思想とか理想とかを、ひろく讀者の間に普及浸潤せしめるために、意識して作者が文學を作つた場合は、必ずしもその點で有名になつてゐるロシヤ文學ばかりでなく、他の國の文學に於いても、いくらもその例を見出だすことが出來る。功利的な傾向を明らかに追ふところの文學いろいろの意味での宣傳文學敎訓文學は、世界の文學史に少なくない。しかしながら、文學が社會性を持ち、一つの社會的現象であるといふのは、必ずしもそれが宣傳的、敎訓的、功利的な傾向を追ふからではない。さういふ傾向の有る無しに拘らず、文學は一般に人間の生活感情感情を統一組織する一つの力であつて、即ち社會性を持ち、一つの社會的現象として十分成り立つてゐるのである。

今までの文學研究や批評の上では、專ら作者のことばかり問題になつてゐる。作者が問題になるのに不思議はないのだが、作者ばかりが問題になつて、當然それとともに考へられなければならない讀者の問題が閑却せられて來たことは、いはゞ一つの不思議であつた。文學が社會的現象であることを認めるかぎり、作者の問題と並せて、讀者の問題が考へられなければならないのは言ふまでもないことである。これも言ふまでもないことだが、文學は一つの生活である。文學といふ一つの生活が成りたつためには、作者と讀者との双方がなくてはならない。讀者といふものの中には、普通の意味での一般の讀者は勿論、批評家、研究者などのすべてを包括してゐるものと考へなくてはならない。文學を社會的現象として考へるかぎり、この意味での讀者の問題と

ものも成り立たないといふ考へは、ある時代の或る讀者の文學などに就いても試かれたことがある。即ち受容者を創造するところの主體と、その創造せられた象徴を享受する、ところの主體とこの二つのものをあはせて一つの全きものとして、これに對する關係から考へられるのでなくては、象徴主義文學の本質は到底論究することは出來ないとせられたのである。言ひ換へると、象徴主義の文學は、創作者と鑑賞者との兩者に對する文學上の作品の二重關係の中に成り立つのであるから、つまり鑑賞者が其作品を如何に享受するかといふとが、その作品を象徴的なものとするか否かを決定する條件になるのである。即ち讀者がなくては、その作品は象徴主義の作品とはならなくなり、象徴主義の詩人といふものも成り立たなくなる。何故かといふに、象徴主義は單なる創作行動ばかりでなく、創作的連帶行動だからである。更にまた、象徴主義は、創作するところの主體が、單に藝術的客觀化を行ふことではなく、藝術的客體を、創作的に主觀化することにほかならないからである。——象徴主義文學に就いてのこの考へかたは、單に象徴主義文學にのみ限らず、これをひろく一般の文學に推しひろめて云ふことが出來るであらう。（一體文學そのものが、正しい意味での、デカダン的幻象的な意味を拔きにしての象徴だと言へるのだから、この場合に於ける[illegible]れることいふ[illegible]であることは即ち[illegible]るところの主體を藝術的に客觀化すること（作者の創造）と藝術的客體を創作的に主觀化すること（讀者の享受）と、この二つの方面の事實が、文學の批評と研究との上に必ずあはせて考察せられなければならないのである。作者の問題のほかに、讀者の問題の考察がなくては社會的現象としての文學の考察は十分とは言へない。

しかしながら、讀者の問題の考察は決して容易でない。殊にこれまでの文學批評や研究が、この方面を閑却してゐたために、尙更この問題についての手がゝりが少ないやうに思はれる。またそれ等の事情の如何に拘らず、この題目そのものが面倒であつて、正確な説明をこれに與へることは容易の仕事ではあるまい。それかと言つて、この問題がつまらないといふことにならないのは勿論である。

作者を中心として考へると、その作者が一定の讀者を持つといふことは、その作者と讀者との間に、何等か近親類似の生活內容が存在してゐるといふことを意味する。一人の讀者なり、ある範圍の多數の讀者なり、またはひろく一國の一時代の讀者

公衆が、ある作者に惹きつけられるといふことは、その作者なりその作品なりが、それ等の讀者の生活興味を表現する役目を勤めてゐることを意味する。讀者の作者に對する態度のうちには、讀者の生活の本質と組織的な關係を持つてゐるところの好尙趣味が、知らず識らず現はれてゐるのであつて、讀者の心理は、そこから推定することが出來るのである。文學がある時代のある國民の生活の表現であると言はれるのは、それがその時代の國民の中から生れたからといふばかりでなく、寧ろその文學が、その時代の國民から受け入れられ、承認せられて、それによつてその國民が一種の滿足とよろこびとを感じたからであると言へるのである。かういふ解釋に對しては、その作者（もしくは作品）に對する時代の社會的環境の影響を輕く見てはいけないといふ批評が加へられる。それに實際の研究となつても、ある作者の人氣の程度といふやうなものは、その作品の印刷部數とか賣れ行きとか、原稿料とかいふやうなものから推定することはなかなか困難でもあり、危險でもある上に、それ等の知識材料を得るだけのことさへ實は容易ではあるまい。或ひはまた、その時代の讀者公衆の思想傾向とか趣味好尙とか、文學もしくは文學者といふものに對する態度といふやうなことから、讀者の心理を知らうとする說もある。文學上の作品の成功とか影響とかいふ方面から見て、この二つが必ずしも一致せず、影響といはれるものの中にも、文學以內でのものと、社會に及ぼすものとの二つがあるとして、その社會に及ぼした影響——作品が播布普及せられて行く間に、どういふ階級に對して專らその力を及ぼして行つたかといふ點を重大視する見かたもある。

更にまた、樣式の歷史と趣味の歷史との二つの方面から文學問題を考察せうとするのもある。創作する主體の立ち場から見て時代の精神と作品との交涉に重きを置く場合には樣式の歷史が成り立ち、享受する公衆の側から見て、文學の發達の上に生產と消費との相互關係を認める場合には趣味好尙の歷史が成り立つ。その時代の讀者の特に好んで讀んだものは何であつたか、如何なる趣味がその時代を支配してゐたか、如何なる內容と形式とが殊に好まれたか、一定の批評上の規準ともいふべきものは如何にして成り立つたか、その批評上の規準は眞に正當な作品の評價に役立つたか、或ひはその評價はある作品を實價以下に見、ある作品を實價以上に見たやうなことはなかつたか、文學上の讀者もしくはその傾向の追隨者は如何なる社會上の位地身分を有してゐたか、およそこれ等の諸點を檢討することによつて、作者の讀者公衆に對する影響と、讀者公衆の趣味

[illegible]、この方法の特徴の目立つてゐる[illegible]一般文學史といふものは作者の歴史であるとともに讀者の歴史でもなければならない。讀者公衆のない文學上の生産は考へられない。それだけのことは分り切つてゐるのだが、實際さういふ原則から文學の發達を研究したものはあまり無いのである。第一に讀者の群といふものを考へて見なくては、ある時代の多くの作品の中から何を選んで來て研究するかといふ判斷さへ立たないことになる。讀者の意識が如何に作品を選擇したりその價値を生かし顯はすために重要缺くべからざるものであるかといふ考へが、もつと實際の研究の上にあらはれて來なければならない。而してその讀者といふ中には、同じく作者であるところのものをも含んでゐることを忘れてはならない。即ちこの種類の讀者は專ら文學上の影響を受ける讀者である。

讀者の問題は、讀者が文學に影響を與へる場合と、文學が讀者に影響を與へる場合との二つに分けて見ることが出來るが、しかしこの二つのものは嚴密に區別することが困難である。讀者が文學に對して消費者としての要求註文を持ち出すと見える場合にも、その讀者の要求註文や性質や方向を決定するものは、いろいろの複雜な社會生活上の原因である。文學が讀者に影響を[illegible]態によつてその[illegible]といふものはやはりいろいろの複雜な[illegible]によつて決定せられるのである。讀者の要求註文に應じて作者がその[illegible]といふ風に考へられてゐる場合でも、實際は、作者がその時代のある社會の心理狀態もしくは生活狀態を鮮やかに表出することによつて、その心理乃至生活狀態を統一してこれにある新らしい生命が附與せられ、その力が讀者の間に一層鮮やかな形で擴がつて行くのに過ぎない。言ひかへれば、作者は讀者の要求註文に應じてゐるやうで、實はその讀者公衆の社會が自分自身の姿や心理を一層鮮やかに見せつけられてゐる形だとも言へる。このことは、文學が讀者に影響を與へると考へられてゐる場合に於いても同じやうである。文學が讀者の生活にいろいろの點から影響感化を與へるといふことは、昔からどこの國ででも度々言はれることであつて、心中や厭世自殺も文學の感化影響だと言はれたりするのであるが、さういふ場合に於いても、文學は別に自分獨りで考へ出したことを書いたわけではなく、實はその讀者公衆の社會が、自分自身の姿や心理をその文學によつて一層鮮やかに見せつけられてゐる形に過ぎないと言へるのである。

文學の影響は、必ずしも一國の同時代の間には限ず、時代を異にし處を異にしても生ずる。時代を異にし處を異にして何且つ讀者が在るからである。文學の永遠性として考へられ名づけられてゐるものも、つまりはこの意味の讀者の存在を認めることにほかならない。文學が生き延びて行くといふのは、文學が時や處を異にして讀者を持つことである。たとへば一國の文學が他の國の文學に影響を與へるといふ場合には、即ち一國の文學が他の國で讀者を見出だし、その讀者を強く惹きつけるといふ場合には、この二つの國に於ける社會的關係の間に、何等かの類似が存在してゐなければならない。この類似の程度と、文學の影響の程度とは正比例する。この類似が全く見出だされない場合には、文學の影響といふ結果に到達するほどの意味での讀者はあり得ない。學者のあげてゐる例によると、アフリカの土人は今日に至るまでヨーロッパ文學の影響を少しも受けてゐない。それからまた、一方の國民が文化の進歩に於いて相手の國民よりも後れてゐる場合には、その關係は片務的であつて、文學上の影響は後れてゐる方ばかりが受けることになる。ロシヤ文學は十八世紀のフランス文學からいろいろの影響を受けたがロシヤ文學からの影響はその時代のフランス文學へは及ばなかつたのである。社會的關係の狀態が類似してゐて、文化の程もほゞ相如くやうな場合には、相互の影響が行はれる。イギリスとフランスとの文學の關係の如きがそれであると考へられてゐる。外國文學の影響は、全く偶然の事情から防ぎ止められてゐたり流れ込んで來たりすることもあるのだが、双方相知る機會のないところからその影響が及ばないといふやうな事情を別として見れば、ほゞ上のやうなことが言へるであらう日本で自然主義文學の興つた當時、これに反對する學者や批評家の多くは、中には相當物識りの人もゐたのであるが、その文學が遠いフランスで何十年前とかに行はれたものであるとして、これを無意味無根據な運動であるかの如くに言つたのである。あの當時に現はれた自然主義文學の作者は、實際文字通りの意味でフランスやロシヤの自然主義もしくはリアリズムの作品の熱心な讀者であつた。その讀み方がどうであつたにしても、その作品の多くに外國文學の模倣があつたにしても、あの文學運動を生んだ日露戰爭前後の日本は、その社會的關係の狀態に於いて、たしかに一つの轉回期に立つてゐたのである。

讀者の問題は、外國文學の影響の問題にも當然觸れ及ばなければならない。

[illegible]ふことは、讀者の住む[illegible]の社會的關係と、作品の生れる時代の[illegible]社會的關係とが、當時近接してゐる場合に於いて、讀者と作品との交渉が成り立つといふことを意味するものである。隨つて、一國の社會的關係に急激な變動を生じた場合には、今までその社會で成り立つてゐた文學は、その急激な社會的關係の變動に適應隨伴するために苦悶する。もしくはさうすることを拒絶して、社會的關係の變動の方向に反かうとする。今までその社會で成り立つてゐた文學は、その心理上思想上の脚場がぐらつき、それの不安定からいろいろの形で動搖する。ロシア革命に伴ふ新舊文學の混亂分裂が最も鮮やかなその最近の一例である。ロシヤの國外移住文學者は、社會的關係の急激な變動に對して、殆ど全く反對の方向に向はうとするが、少なくとも、もとのまゝの立ち場に踏み止まらうとするものである。いはゆる「革命の道づれ」は、その變動の方向に隨伴して行かうとするものである。何れにしても、文學と讀者との關係が、社會的關係の急激な變動につれて激變する場合の現象にほかならない。

而してかういふ場合に於いては、文學と社會との關係がいろいろの點から新らしく考へ直され、それにつれて、新文化の建設の問題と關聯して、新らしい文學と前時代の文學とのつなが[illegible]る。[illegible]らしいものを作り出さなければならないといふ主張が行はれる。それに對して、新らしい文學が、過去の文學から多くのものを批判的な態度で活用すべきだと說かれる。社會的關係の急激な變動に伴つては、文學の上にかういふ論爭が生じがちである。

社會的關係の急激な變動は、要するに全く新らしい社會生活を創造しようといふ意氣込みで行はれるのであるから、ひろい社會生活の建設創造といふことが、あらゆる場合の第一の關心事になつて來る。即ち文學の方面では、實際の社會生活を文學よりも高く重く見る考へが勿論强い。人生のための文學だといふ心持ちが强く支配する。文學はその新社會生活建設のために役立つ一つの手段として見られる。文學は新社會生活の建設が成就するとともに用のなくなるものだといふ風にさへ考へられる。ロシヤの未來派のうちでもコム・フートゥイといはれてゐる共産主義的未來派の考へかたなどがそれである。一種の文學自殺說であると言つてい〻、かういふパラドキシカルな考へかたは、文學が極端に社會奉仕のためのものとして考へられるやう

な場合によく出て來る。批評の方面でも、批評力がすべての讀者に行きわたつて來ると、批評といふものは自然消滅すべきものだといふやうに考へられたりするのである。つまり生活そのものが藝術となるとともに、藝術は自然に消滅するといふのであつて、この點から見るとワイルドの考へなども一つの藝術自殺說の方向をとつてゐると言へる。而して一種の極端な藝術利用說だとも見える。この考へかたは、要するに藝術が未來の理想世界——社會主義の限なく實現せられた世界でどういふ意義を持つかといふ問題に歸着する。

文學批評家が、最も賢い讀者でなければならないことは、これまでも度々言はれて來た。文學の價値の問題が、讀者の意識によつて決定せられる以上、讀者の問題はなかなか重大であるのだが、しかし讀者の意識といふものは、前からも言ふやうに、これを明確にするとは非常な困難である。そこで批評家は、讀者の代表者として、また代辯者として、自然に[illegible]

は、實に寂しい感じのするものであらねばならぬ。

文學の讀者の問題は、文學を社會及びその發達と結びつけて考へるところに、起こらなければならないものである。文學を專ら內在的に批評研究する間は、この問題は起こらない。文學を社會及びその發達と、原因結果の關係に於いて考察するところから、この問題は現はれて來るのである。この一篇は、この問題の考察のための下書きである。

凡てのものは悉く壞れる 外二篇 ([illegible])

故 有島武郎
佐藤隆三 編

お斷り

先月號に、「來月號には選外中に殘りよこせし通信文を發表し得べし」と印刷されて居ましたが、再校の際、編者の都合でこの文句を抹消して置きましたにも不拘、雜誌が出來たのを見ると校正してなくれ儘出て居りましたので實は當惑いたしました次第です。讀者の中で少しでも御期待を持たれた方があつたとしたら、ほんとうに御氣の毒でたまりません。三校する時間がなかつたので、こんな間違が出來たのでした。何卒御諒承願ひます。

今月號には、凡てのものは悉く壞れる」「今の藝術の爲めに」「トルストイ著 WHAT IS ART』に自已の註釋を加へしもの」の三編を發表しました。何れも未定稿のまゝ發表はしなかつたと思ひますが、ARTに關する研究に就いては講演をしたことがあるかも知れません。

十五年二月　編者

凡てのものは悉く壞れる。是が地球を支配する「運命」の下す宣告である。「凡てのものは悉く壞れる」此單純な低い抑揚もなにもない音調の上を自分の生活はトレモロをなして流れ行くのである。

凡てのものは悉く壞れる。「凡てのもの」と云ふのは實驗科學が假定する或る不消不磨の物質をも含むか、或は形而上學が主張する不變不滅の或る觀念の對象をも含むか、そんな事は自分は關知しない、又關知する限りでもない。科學者や哲學者の取扱つて居るものの中には地球の存在する限りと云はず、永劫無窮に壞れずに殘るものがあるかも知れない。我等が今日科學哲學の存在を許す限り、其主張に敬意を拂ふのがあたりまへだとすれば、あるかもしれないと云ふ代りに、どうもあるらしいと云つて置く方がいゝやうにも思はれるが、同時に如何に科學哲

學の存在を許せばとて必ずあると云ひ切つてしまふ事はどうしても出來ない事である以上、假定や假說は到底疑問の中にもてあつかはるべきもので、如何にもなまぬるい蕊ないものである。地球の存在する限り壞れずに殘るものがあるかも知れない。又ないかも知れない。此あるとも判然せず、無いとも確定せぬ假定の上に自分の生活、即ち自分が今日此所で此個性の全能を以て享けつゝある此生活を安じて托する事は試みても出來ないことである。假說は知識の寵兒ではあるが生活の愛人とはなり得ぬ。生活は知識の媒介を以て其寵兒なる假定を美しいものと見る事はあつても血をすつて二世を契る程の執着は持つ事が出來ないのである。

自分の眼が見、耳が聞く處に於て壞れずに續くものとしては何があらう。凡てのものは悉く壞れるのである。發生と破壞の目まぐるしい連續、搖籃と墓とを繋ぐあはたゞしい生活行爲、記憶と忘却との間にさまよふ泡のやうな名聞、頽れんがために高まる貝潮の波、枯れてゆく淚、乾ひてしまふ笑ひ、そう云ふものが自分の內郭と外郭とを取圍んで居る。今更らに驚いて不朽を摸索しても其處には何物もないのである。何故か知らないが自分には不朽に向つてあえぐ ASPIRATION がある。それだから、不朽はあるものと云ふ樣に身のまわりも顧みずに思ひなして來た。其思ひなしがふとした機會で破れた時、ぬ斷崖はすぐ端に立つて居る自身を見出してゾッとした切られながら頭の禿げるのを心配して居た人のやうな、滑稽な皮肉な而して慘酷な悔恨の心が自分を耻ぢしめたり怒らしめたりせずにはやまなかつた。

自分は何一つ手に入つた專門と云ふ者を持つて居ない。執着力がない故かも知れない。頭が惡く隨つて油が乘らない故かもしれない。充實と云ふ事の尊さを知らない故かもしれない。最も早道な當世の處生法に暗い故かも知れない。生活が或る程度まで保障されて居ると云ふ心の姑息がさせる業かもしれない。然し自分自身では以上の原因だけで專門家となれなかつたのではないと思て居る。自分には專門家となるべき隨分多くの機會が與へられた。自然科學も其宏大な影の一部分を自身の上に投げた。宗教は一時自分にとつては生命其物であつた。自分は又歷史が與ふる哲學と云ふ樣な者に興味を持つた事もある。然し今から過去を見ると自分は其內の何れにも執着が續いて居ない。殊に宗教と別れた時の事を思へば、自分の生涯はあすこであつなく切斷せられる處であつたと云ふ感じを持たずには居られない。自分はこんなにいつまでも身の定まらないで居たことを耻づべき事だと思つて居た。一事に沒頭して他の萬事を他界の事

で[illegible]もある様に[illegible]みたい[illegible]の[illegible]を考へて見る[illegible]に、[illegible]業に熱中して[illegible]ずの如く[illegible]する[illegible]の行路を思ふ度に[illegible]要ない[illegible]が世に一人居ると自分の孤影を弔つた。

然し考へて見ると、こんな風に思ふのは、克己とか自責とか云ふ大層な道義的の觀念が先入的に自分の心を盲にして居たからだ。自分に自分を顧つて蔑む前に最少し同情を持つて自分と云ふものを眺めて見るべきであつたのだ。若し同情が批評的態度の第一要件であるならば――而して自分はそうだと信ずるが――自己解剖に於ても同情が必要であるべき筈ではないか、同情をもつて自己を見る、是れは自分にとつては小さな發見ではなかつた。儒教的道德にはぐくまれた自分にとつては決して小さな發見ではなかつた。而して新たな眼を開いて自己と其周圍とをながめ廻して見た。

物心を覺えるとすぐ、自分は外界の刺戟に對して反應したと同時に反抗して居る。父母の教訓の中にも、小學校の教育の中にも自分は反抗すべき何者をか見出して居た不平があつた、不滿足があつた。小學にゆく年頃になつては夫れが更らに增進して行く斗りだつた。自分の眼の前には五倫五常の整然たる倫理的概念が展べられて事物の眞を發見するのに一番近道な科學の基礎智識も敎へられた。人の守るべき道と知るべき道は嚙んでふ[illegible]ように[illegible]た。[illegible]若し人であることだに、[illegible]

[illegible]ても、人である以上は人として一番大切なことは、食ふことよも寐ることでも、ちやんとやつて行つて居るのだから、夫れよりも更らに大切な事は當然深い注意をもつて迎へる筈であるのに、事實は全く反對であつた。

自分は其頃、そんなに鼻つたらしでもなく、腕白でもなく、學の素直で、理の當然な事なら其まゝ受け入れる位の少年であつた又理解力も人後に落つる程遲鈍ではなかつた積りである。敎師が云ふ所は注意を拂つて聞いてさへ居れば決して理解の出來ない事でもなく、又決して理窟に外れた事でもないと云ふ丈けはよく判つて居た。唯自分にとつて當惑を極めた事はかくして受入れた智識が自分に何等の興味を與へない事であつた。こんな興味のないものでもやがて一層進步した修養をする時には必要なものとなるであらうと云ふおぼろげな期待と、くだらない習慣的な惰力とによつて自分は中學時代の生活を續けて居たのである。

編者曰。此稿はこれきり後が書いてない。次ぎの藝術論は切々のノートを寄せ集めたもので漸くこれだけ纏り得た。

今の藝術の爲に

第一章　藝術とは何ぞや

一　藝術とは、音樂、文學、彫刻、繪畫、建築等を云ふ、（劇、舞踊の如きは人によりて異る）

二　藝術は、意美を感情的に、則ち情意に訴へて取扱ふものなりとの說。

第一期　眞に理想ありや（美共者にて足れりや）。

第二期　觀　念　論。

實　在　論。

超越實在論。

三　藝術は美を取扱ふと雖も美なるものの本體は畢竟甚だ明確を缺くとの說の起り。

第三期　トルストイの定義せる所にして今までに於ける ART の定義はこれを約すれば吾人の心中に DESIRE

RODIN ……………自然は美なり。

BERGSON…………Nomal activity of personality の昇止と suggestion.

四、

A、要之 ART とは廣き意味に於ける自然に對し Artist が情意的に攝得したる結果を動作、線、色、音、文學其他の形に於て再現し、これに接するものにして、同一時い感じを引起さしむるものを云ふ。

B、よき Art は Artist の Personality が攝得する自然と調和し又接するものに artist が暗示せんとする所を十分に暗示し得たるものを云ふ。

C、故に藝術の目的は暗示に止まり、理性の滿足又は敎訓と云ふが如きは與からず。

第二章　歐洲の現代の ART

㊂南方文明の北方移轉(卽ち羅馬帝國型文明とGOTHIC文明との衝突)

㊃科學思想の勃興(隨而舊信仰の動搖、舊道德の破壞)

㊄生活の不安。

㊅故に今の歐洲のARTの特色は、

一、無理想なる事

二、現存文明に對し甚だしく懷疑的なること。

三、自然主義なること。

四、極端に鋭敏なる、不具的なる感觸の激動あること(卽ちDecadence)

五、名狀すべからざる一種の力を有すること。

六、個性的なること。

第三章 日本の現代のART

㊀日本現代のARTも殆んど歐洲の現代のARTに見る特質傾向を具備すること。

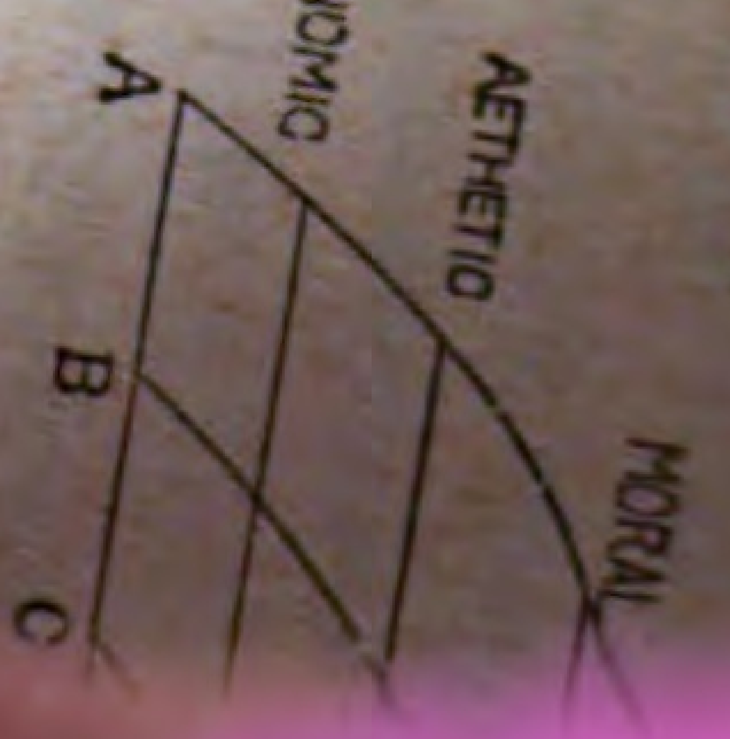
㊁其傾向を恐るべしとせざる一派あること。而して夫等の人はARTISTとARTを呪ふこと。

㊂然し日本に於ても論者の所謂よきARTなきに非らざる事。

㊃然らば罵るものは事の轉倒をなせる事。

藝術が起り來る順

PATTENの說



卽ち此に云ふECON

止まらず、夫れに從ふ

り。

卽ち今の如きARTを

組織なる事を知らさるべか

㊄一體ART批評の標準は、

とか、家庭の幸福とかを以てす

に對するLIFEにまでかへらざる可か

㊅國家の藝術的價値(美術展覽會、文藝院)

㊆社會の藝術的價値(所謂、努力主義 分業制度)

㊇家庭の主宰者と被護者との區別。

第四章 今の

—(凡てのものは悉く壊れる)—

一 國家の品位
二 社會組織の改善又は改造
三 家庭内部の改良
（一〜三）積極的

四 美術館
五 思想の普及
（四〜五）消極的

六 各個の修養
七 我れのこれを論ずる理由

WHAT IS ART?

目次

一九一一年二月

READ AND COMMENTED

註
(理) とあるは理想主義の略
(遊) とあるは遊戯主義の略
(T) とあるはトルストイ主義

L. TOLSTOI

"What is Art."

第一章

Tolstoi が opera の rehearsal を見にゆきし時の經驗。

㊂ 南方文明の北方移轉(即ち羅馬帝國型文明と GOTHIC 文明との衝突)

㊃ 科學思想の勃興(随而舊信仰の動搖、舊道徳の破壞)

㊄ 生活の不安。

㊅ 故に今の歐洲の ART の特色は、

一、無理想なる事

二、現在文明に對し甚だしく懷疑的なること。

三、自然主義なること。

四、極端に鋭敏なる、不具的なる感觸の激動あること(即ち Decadence)

五、名狀すべからざる一種の力を有すること。

六、個性的なること。

第三章　日本の現代の ART

㊀ 日本現代の ART も殆んど歐洲の現代の ART に見る特質傾向を具備すること。

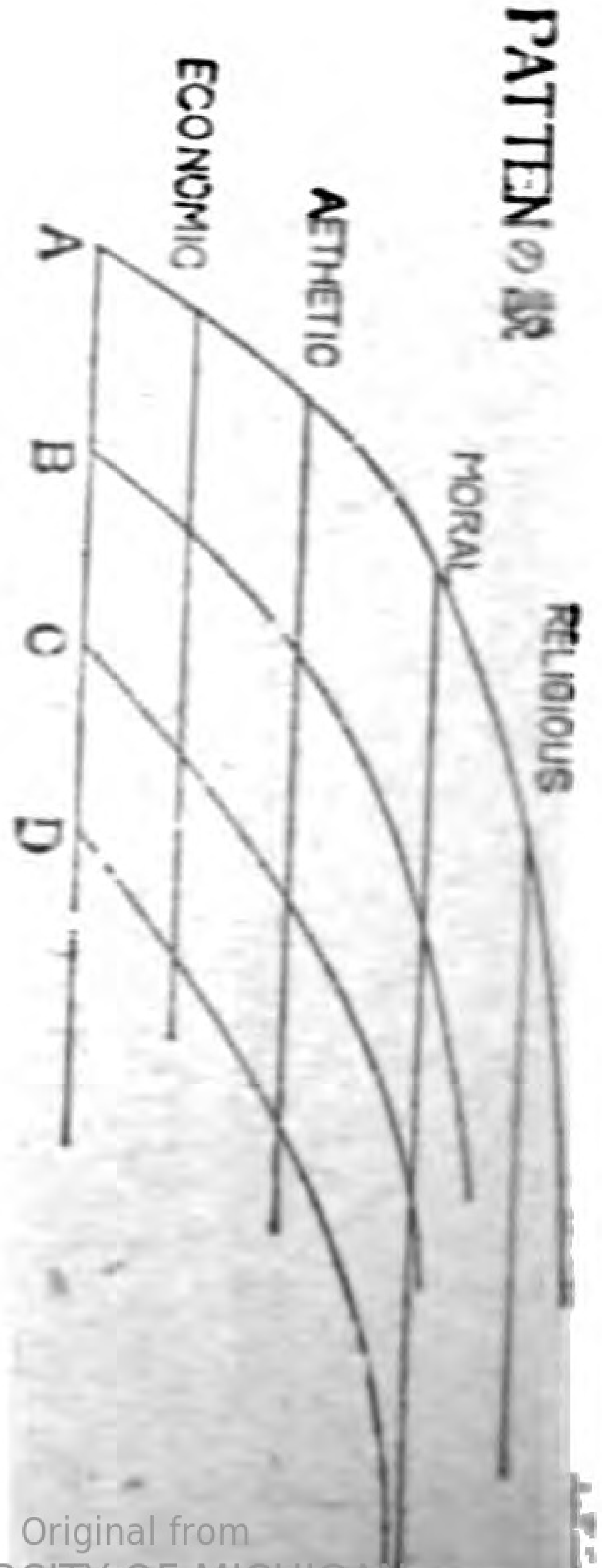
㊁ 其傾向を恐るべしとせざる一派あること。而して夫等の人は ARTST と ART を呪ふこと。

㊂ 然し日本に於ても論者の所謂よき ART なきに非らざる事。

㊃ 然らば罵るものは事の轉倒をなせる事。

藝術が起り來る順序。

PATTEN の說



即ち此に云ふ ECONOMIC とは單に經濟的と云ふに止まらず、夫れに從ふて起る所の社會組織も亦與るなり。

即ち今の如き ART を生めるものは、日本現時の社會組織なる事を知らざるべからず。

㊄ 一體 ART 批評の標準は、國家安寧とか、社會の平和とか、家庭の幸福とかを以てすべからず、個性の個性に對する LIFE にまでかへらざる可からず。

㊅ 國家の藝術的價値(美術展覽會、文藝院)

㊆ 社會の藝術的價値(所謂、努力主義　分業制

㊇ 家庭の主宰者と被護者との區別。

第四章　今の藝術を如何にすべき

WHAT IS ART?

目次

一九一一年二月

READ AND COMMENTED

註

(理) とあるは理想主義の略
(遊) とあるは遊戲主義の略
(T) とあるはトルストイ主義

I. TOLSTOI

"What is Art."

第一章

Tolstoi が opera の rehearsal を見にゆきし時の經驗。

Griticism の混亂統一なきこと。

第二章

Art の definition の混亂の結果 beauty とは自然に理解せられたる事にして investigation を要せさることとなりと云ふに

(Schiller も亦 Kant の follower として[illegible]を主張す。【已ち遊戯説】 wilhelm Humbolt も亦之に一致なり)

Fichte. (1762-1814) (理) 自然には二面あり。一つは我等が受くる limitations の總加なり。他は自由なる理想的活動の總加なり。前者より見れば世界は制限せられ後者より見れば世界は自由なり。前者より見れば物皆偏欠、醜悪なり。後者より見れば物皆満圓、美整なり。故に美は此世界の中にあるにあらず、これを享る人の Schoner geist にあり。即ち美術は Schoner geist manifestation によりて成る。(これと歩を同じくするものに Schlegel (1772-1829) あり art 上の美は單に不完全に理解されたるものにして、美は arts のみならず、自然の中、又 love のうちにもあり、故に aesthetic art と不離にして moral & philosphic beauty なるものあり、Adam Muller これに似たり。

Schelling. (1775-1854) (理) Arts の主題自身が元題となり目的物自身が目的物たるべき事物の conception の産物又は結果なり。美は有限中に無限を感得することに依て成る art の産物の重要なる特質は unconcious infinity なり、主觀と客觀を合一し、自然と推理とを合一し、無識と合識とを合一する所に美は成立す。故に Art は智識の最上道なり。故に美術家は自[illegible]

[illegible]の中に含まるる Idea が自ら[illegible]

Solger. (1780-1819) 美的[illegible]の観念の基礎たり。[illegible]の見る世界は支離滅裂なれども想像によりては art は非常なる最高點に達す。故に art は creation に近きものなり。

Krause.(1781-1832)(理) 積極的美とは個性の中に於て Idea の表現にして人間の free spirit の境界に於て存在する美の表現を云ふ art の highest stage は art of life にして beautful man の beautiful abode たるに適する様現實を導くもの之れ ast なり。

Hegel. 神は自然中に自己を現はし art 中には美の形體にて現はる。神の現はれには二途あり。自然と spilit とに於て美は Idea が物質を透して輝けるなり。眞に美なるものは Soul のみ自然に於ける美なるものは——夫故に——spilit natural beauty の反影のみ、故に美は單に精神的内容を有するのみ。而かも精神は感能的形體を取らざる可からず。精神の感能的表現は appiarance (schein) のみ、而して此の schein が beauty の唯一の reality なり。かくて art は宗教及哲學と共に人道の最重問題並に spilit の最上眞理を現はすべき方法となるなり。

Truth と beauty とは同一なり。其差と云ふは眞理は Idea

Hutcheson. (1694-1747) "Inquiry into the Original of our Ideas of Beauty and Virtue"

Art の aim は美なり。美の眞髄は imifomity と variety の感念を心に起さしむるに成る。art なるを認むるには吾人は internal sense を川ゆるを要す。internal sense は ethical sense と矛盾することあり。故に常に善と相應立せず。

Home, Lord Kames. (1666-1782) 快よきものを美と云ふ。故に美は趣味(TASTE)によりて定義せらるべし。眞趣味の標準は Richness, fullness, strength と variety of imp ression が最使の限界内に含まるゝを云ふ。

Burke. (1729-1797) Art の aim なる sublime と beautiful は自己存保と社界の進捗に根底を發せり。自己保存は滋養、保護、戰爭によりて成立し、社界の進捗は交通と、繁雜とによりて成立す。前者は Sublime の源頭となり、後者は beautiful の源頭となる。

翻つて佛國に於ける當時の狀況を見れば、Père Sudré(1741) 美に三種あり、Devine, natural, artificial これなり。

Batteux. (1713-1780)(遊) 藝術は自然の美を模擬し、其目的とする所は enjoyment にあり、Diderot の云ふところ亦同じ。

伊太利に於ては、

Pajano. Art は自然の中に散在する美を結合するにあり、而して美を感得するものは即ち taste にして是を一の Whole となすの力は藝術的天才に俟たざる可からず。

和蘭に於ては、

Hemsterlmis. (1720-1790)(遊) 美は吾人に快感を與ふるものを云ふ。快感を與ふるとは最小時間に最大數の Idea を與ふるものなり。

(第十九世紀に及んでは獨逸に Kant あり。Paumgarten 以後の美學を受けて更らに一大綱領を作成せり)

Kant. (遊) 人は自個以前の自然に對する智識と、自然内に於ける自個の智識とを有せり。自個以外の自然に對しては眞を求め、自個内に於ては善きを求む。前者は pure reason にして後者は practical reason なり。以上二個の perception の外當人は判斷の力を有し推理することなしに判斷し desire することなしに快示(p'easure)を得、此能力が即ち美的感情の基礎となるなり。故に美とは主觀的には推理することなく實際的利益を必要とせずして、人を樂しましむるものを云ひ、客觀的には utility の conception なくして考へ得る適當の目的物を云ふ。

り人を[illegible]上ぐ。

Veron. art は動作、音樂或は言葉が一定の rhythms の下に運用して line, form, color の結合によつて外面的に應用されたる emotion の表現なり。

(英國に於て美學者は重に美は其 quality にあるにあらずして賞翫するものの taste にある旨を稱道するもの多かりしが反對のものも少なからず Charles Darwin の父なる E. Darwin の如き之也。

Erasmus Drrwins. (1731-1802) 吾人が美を考ふるや吾人の愛するものに對する觀念と連結して之れを美となすなり。

Charles Darwins. (1809-1882) 美意識は animal にも存在するものにして人間の祖先にも因よりこれありしなり。

Herbert Spencer. (1820-?) art の起元は遊戯なり (Scheller と同じ) 下等動物にありては、凡ての life energy は生活の爲めに消盡せらるれども人間にありては、これに餘裕を生ず。此餘裕は遊戯に用ゐられ、遊戯は art となるなり。遊戯は實際活動の imitation なり。art も亦同じ。

Todhunter. (1872) (逆) 美は infinite loveliness なり。而して之を解するは推理と love の高潮とによる。美を承認するは taste なり。故に定義としては無し。。

Ker. [illegible]さるゝ事なしに可能ならしむ[illegible]所なり。

第四章　過去に於けるART定義の批判

以上述べ來れる所を綜合すれば美の美學的定義に二とたすを得べし。即ち、

一、(美の定義を二とす) 美は獨立の存在を有する或者にして、絕對的完全とか、理想とか、精神 (spirit) とか、意志とか、神とかの (manifestion なりとす。

二、美は吾人により享樂せらるゝものにして樂みの一種なり。共目的に關しては吾人に個人的利益 (personal advantage を與ふる事なしとなすもの。

(一)は Fichte, Schelling, Hegel, Schopenhauer Cousin, Jouffroy, Ravaisson 等によりて主張せられ、此客觀的神秘主義の定義は現今の所謂教育ありと報ぜらるゝ人士によりて抱懷せらる。

(二)は重に英國の美學者中に勢力を有し、younger generation によりて遵奉せらる。

即ち一方に於て英國は高尚なる神秘主義に達すと雖も、不幸にして明晰を缺き、從つて哲學、宗教、人生共者をも共中で合

が idea 其者として存在せる場合にして beauty は Idea が多面的(externally)に表現せられたる場合を云ふ。故に美は Idea の manifestation なり。

(かく Hegel 及び其徒が美の定義をなせる間に全く反對の說が併行して獨逸に行はれつゝありしなり)

Herbart. (1776-1841) (遊) 美が美自身に於て存在すると云ふが如きことは非ず。夫れは單に吾人の主張のみ。故に此主張の根底を發見する必要あり。

吾人の所謂夫と稱する一種の關係 (relations) あり arts は此關係を發見するに於て成立す。

氏は更に說を爲して曰 object は Idea を表現せずとて、美しき事あり rainbow は唯其線と色とが美なるのみ、特に Iris や Noah の rainbow を聯想するが故にあらず。

Schopenhauer.(1788-1860) (理) will は世界に於て各種の
が高きに
Planes の上に容現する (objectionize) 而して
從つて其美は大なり。自個を其中に沒却して will が表はれたる夫等の planes を考ふることが我等の美的感覺を與ふ。凡ての人は Idea を planes の上に表はす力を有す。而して Genius はそれを最上の planes 上に表はす能力を有するものを云ふ。

Harmann. (1842-1906?) (遊) 美は外界にも又 Ding an sich にも存在せず[illegible]中にも存在せず唯

構成せらるる schein 中に存在するのみ。

Helmholtz.(1821)美の法則は artist には知られあらず artist は自覺せずしてこれを達成す。故に解剖を附する事能はず。

Bergmann. (1840) 美を客觀的に定義するは不可能なり。美は單に自觀的に考へられ得るのみ。故に美學上の問題は、何は誰を喜ばすかと云ふに終る。

佛國に於ける近世の美學は、

Cousin. (1792-1867) (理) 美は常に道德的基礎を有す。美は客觀的に定義する事を得ず。即ち主として unity 中の variety に於て成立す。

Jouffroy. (1796-1842) (理) 美は之れを表現し得べき自然上の signs を用ゐて不可見を表現するにあり。visible world は garment にして之れを通じて美を觀取することを得るものなり。

Taine. (1828-1893) (理) 美は現實に現はれたるより以上完全に一の主要なる Idea の表現なり。

Guyar. (1854-1888) (T) 美は object と離れて存在するものに非らず art は reasonable and conscious life の expression なり。art は Similarity of feeling を以て個人的生活よ

り人を引上ぐ。

Veron. art は動作、音響或は言葉が一定の rhythms の下に運用して line, form, color の結合によつて外面的に輸出されたる emotion の表現なり。

(英國に於て美學者は重に美は其 quality にあるにあらずして賞翫するものの taste にある旨を稱道するもの多かりしが反對のものも少なからず Charles Darwin の父なる E. Darwin の如き之也。

Erasmus Drrwins. (1731-1802) 吾人が美を考ふるや吾人の愛するものに對する觀念と連結して之れを美となすなり。

Charles Darwins. (1809-1882) 美意識は animal にも存在するものにして人間の祖先にも固よりこれありしなり。

Herbert Spencer. (1820-?) art の起元は遊戯なり (Scheller と同じ) 下等動物にありては、凡ての life energy は生活の爲めに消盡せらるれども人間にありては、これに餘裕を生ず。此餘裕は遊戯に用ゐられ、遊戯は art となるなり。遊戯は實際活動の imitation なり。art も亦同じ。

Todhunter. (1872) (遊) 美は infinite loveliness なり。而して之を解するは推理と love の高潮とによる。美を承認するは taste なり。故に定義とては無し。

Kant、美は吾人をして空想的世界を其他の論理に關して解はさるゝ事なしに可解ならしむるものを云ふ。これ科學と異なる所なり。

第四章　過去に於けるART定義の批判

以上述べ來れる所を綜合すれば美の美學的定義は二とたすを得べし。即ち、(美の定義を二とす)

一、美は獨立の存在を有する或者にして、絕對的完全とか、理想とか、精神 (spirit) とか、意志とか、神とかの (manifestion なりとす。

二、美は吾人により享樂せらるゝものにして樂みの一種なり。其目的に關しては吾人に個人的利益 (personal advantage を與ふる事なしとたすもの。

(一)は Fichte, Schelling, Hegel, Schopenhauer Cousin, Jouffroy, Ravaisson 等によりて主張せられ、この客觀的神秘主義の定義は現今の所謂教育ありと報ぜらるゝ人士によりて抱懷せらる。

(二)は重に英國の美學者中に勢力を有し、younger [illegible]tion によりて遵奉せらる。

即ち一方に於て英國は高尚なる神秘主義に達すと雖も、從つて哲學、宗教、人生其者をも其中にして明晰を缺き、

ART は自個と同じき感情に他の人を結合する目的を以て共感情を或る外面的 indication を以て云ひ現はしたる場合に始まる。

(欠呻する人の例では不可、小兒と獨の例)

To evoke in oneself a feeling one has once experienced and having evoked it in oneself, then, by means of movements, lines colors, sound, or forms expressed in words, so to transmit that feeling that others may experience the same feeling..........this is the activity of art.

Art is a human activity, consisting in this, that one man consciously, by means of certain external signs, hands on to others feelings he has lived through, and that other people are infected by these feelings, and also experience them.

(ART存在の理由)

知る可し art とは神秘的なる美の Idea にもあらず、神に

共通の感情に結合するものにして個人並に人

に缺く可からざるものなり。

(ARTの制限)

斯くの如くにして art は單に theaters, Concerts, exhibitions にあるのみならず Buildings, Statues, Poems. novels にあるのみならず、叉守唄、家、衣服其他にもあり、但し狭義に於けるを定めんには或る理由の元に是れ等の多くより選びたる或る限られたるものを以てす。

(宗教)

共制限の要件の一は Religion なり。Socrates, Plato, Aristotle, Hebrew prophets Ancient Xtian 現今の Mahomedan は之れに屬す。此人等は宗教的ならざる art を全く排除すれど狭量なり、され共 pleasure を供するものならば何なりともart となす現代と何れぞ。

第六章　ART定義の發達史の一

(何故ARTの定義はかく陥落せしや)

如何にして ART の定義は斯く變化せしや。ARTの價値の評價は、人の人生の意義に對する觀念により定まるものなり。即ち

彼等が人生の

を保護せんが爲に、其凡てを include せんが爲めに人が強く作り出せる假定のみ。

第五章　ART の眞定義
(然らば美の觀念を排除したるARTの定義とは如何)

さらば confusion の基なる美の觀念を排除したる Art の定義とは何なるべき、最近の定義の二三は次ぎの如し。

一、Physiological-evolutionary Definition.

A　art は動物界にも行はるゝ活動にして Sexual desire と play の傾向より其を起せるものなり。(Schiller, Darwin, Spencer)

B　而して神經系統の昂奮を伴ふ (Grant allen)

二、Experimental Definitions.

Art とは人によりて感ぜられたる感情を線、色、動作、音響或は言葉の手段によりて外部に表現するを云ふ (Veron)

三、

ART とは永久の同質又は一時的動作の所産にして産出者に active enjoyment を供するのみならず夫より起さるゝ personal advantage とは全く無交渉に聽者、觀者の或る數に快き印象を與ふるに適したるものを云ふ。

(其欠點)

以上は前章の凡ての定義に立脚せるものなりと雖も各欠點あり。

(一)A　は artistic activity 其者に就て定義をなさずして art のdelivation を定めたる故なり。

(一)B　此中には他のもろ／＼の human activies を含まるゝ故なり。

(二)　人は線・他を以て表現するとするも之れを受くる人感ぜざらば如何。

(三)　これも亦 conjuring trick や gymnastic exercises を含むべければ不可。

以上の如き定義の不備又は ART を以て Pledsure の對象となし人生及び人道に補益する所あるを考へざるに起因す。

(ト氏のARTの定義)

凡ての藝術的作品は其 receiver をして作品を製作せるもの、又は製作しつゝあるものと或る種類の關係に入らしめ、又其 receiver と同時にか其以前にか、又は其以後にして同じき藝術的印象を受けたる人々と或る種類の關係に入らしむるものを云ふ。

言葉によりて人は思想を他に傳ふ。藝術によりて人は……(feeling) を他に傳ふるなり。

ART の activity は人が聽、視、の感覺を通じ……を表現しつゝある人と同じき感情……る。

ART は自個と同じき感情に他の人を結合する目的を以て其感情を或る外面的 indication を以て云ひ現はしたる場合に始まる。

(欠伸する人の例では不可、小兒と猫の例)

To evoke in oneself a feeling one has once experienced and having evoked it in oneself, then, by means of movements, lines colors, sound, or forms expressed in words, so to transmit that feeling that others may experience the same feeling..........this is the activity of art.

Art is a human activity, consisting in this, that one man consciously, by means of certain external signs, hands on to others feelings he has lived through, and that other people are infected by these feelings, and also experience them.

(ART存在の理由)

知る可し art とは神秘的なる美の Idea にもあらず、神に[illegible] ENERGY の餘分を放つ戯れにもあらず、[illegible]

其道の感情に結合するものにして個人並に人道の福祉の進捗に缺く可からざるものなり。

(ARTの制限)

斯くの如くにして art は單に theaters, Concerts, exhibitions にあるのみならず Buildings, Statues, Poems, novels にあるのみならず、又守唄、家、衣服其他にもあり、但し狹義に於けるを定めんには或る理由の元に是れ等の多くより選びたる或る限られたるものを以てす。

(宗教)

其制限の要件の一は Religion なり。Socrates, Plato, Aristotle, Hebrew prophets Ancient Xtian 現今の Mahomedan は之れに屬す。此人等は宗教的ならざる art を全く排除すれど狹量なり、されど其 pleasure を供するものならば何なりともart となす現代と何れぞ。

第六章 ART定義の發達史の一

(何故ARTの定義はかく腐落せしや)

如何にして ART の定義は斯く變化せしや。ARTの價値の評價は、人の人生の意義に對する觀念により定まるものなり。即ち彼等が人生の善悪に對する考へによりて定まるものなり。而して善悪は宗教と稱せらるゝものによりて定る。

人生の進歩するや、先覺者なるもの生ず。此人の人生の意義

...PERSTITION, TRADITION, CEREMON

であるとし

よい。

現代に於ても文字を有しないで口傳で

は好箇の敍事詩である。然し泰西文學に於て敍事詩は最古

も言ふべき内容を持つものと考へられて來てゐる。即ちホーマ

ーのイリアッド、オデッセイの二大敍事詩がその詩源をなすも

のであつて、敍事詩(Epic)はホーマー風の詩(Homeric poem)

とも呼ばれてゐる所以である。

ホーマーは紀元前十二世紀の頃生存した人であつて、そのイ

傳

ないが、それでもこ

の敍事詩とひきくるめて分類し

第一は神話的の英雄、若しくは歴史上の

を取扱つたもの

を云へり。

ソクラテスは美を善の下に置き、プラトーは善美を合一して更らに SPIRITUAL BEAUTY なることを說き、アリストートルは ART は人民に道德的感化を與ふるによりて初めて許さるべしと云へり。而かも善美が相合一すとの考へは彼等も亦脫却し得ざりし所なりき。而して其內幾多の葛藤を見るに至れり、而して歐洲人は直ちに之れを取りて藥籠中のものとなし、善美の合一を主張せり。而して美學はソクラテス以來稱道せられる所にして EI ICUREAN, STOIC によりても繼承せられ SENECA, PLUTARCH を經て PLOTUS に至れりと說けり。其後然しながら此學問は千五百年跡を絕ち、一七五〇年 FAUMGARTEN によりて稱道せらるゝに至れと說けり。SCHASLER は此一五〇〇年間は美學の爲めに無進步の時にして何等之れに貢献したる所なしと云へり。然るに實際は進步も無進步もたく、美學なぞと云ふものは存在し居らざりしなり。希臘人は單に道德觀念の未發達なるより善美の合一を思ひ居たりしのみ。而して百五十年前に至りて歐洲人の富有階級に現はれ始めたり。（バウムガルテンの出現及其說の承認）BAUMGARTEN が獨逸風の學者らしき表面的の正確平例を以て述べたる所は何の根據なかりしにも係はらずよく當時の人氣を集め、眞理らしく思はれしこと恰も Malthus の人口論の

如く、又 MARX の小資本家か大資本[illegible]るの說の如かりき。而して其將死後一九〇〇年 BEAUTY, TRUTH, GOODNESS と云ふ語は學問上の三位一體をなすに至れり。而して夫れを以て疑ふ可からざる程に堅固なる地盤の上に立てるものなりと思はしむるに至れり。

（此稿未完）

日本叙事詩史

白鳥省吾

叙事詩は詩としては最も對社會的で民族的であり得るものである。叙事詩といふ意味を一つの物語を韻律的に表現したものとすれば、日本に於ても平家物語や近松の作などにもさうした要素を見ることが出來る。また古事記などもそれが漢字に書寫されるまでは語部の口によつて代々に傳へられて來たものであるといふから、一種の調子を持つて傳へられたものと見てよい。

現代に於ても文字を有しないで口傳されてゐるアイヌの歌謡は好箇の叙事詩である。然し泰西文學に於て叙事詩は英雄詩とも言ふべき内容を持つものと考へられて來てゐる。即ちホーマーのイリアッド、オデッセイの二大叙事詩がその詩源をなすものであつて、叙事詩(Epic)はホーマー風の詩(Homeric poem)とも呼ばれてゐる所以である。

ホーマーは紀元前十二世紀の頃生存した人であつて、そのイリヤッド等も傳誦されたものである。その時代には詩は書かれたものでなく、聽衆の前で吟誦したものなのである。そこでホーマーの詩なども一人のホーマーがあつたのでなくて、多くの詩人の短詩が集まつたものとする研究者もある位である。然し叙事詩を聽衆に讀んできかせるといふことは文字ある時代でも、たとへばタッソー（伊太利の詩人、一五四四—一五九五）の如きは自作の叙事詩を吟誦してきかしたと言はれてゐる。

叙事詩の始源はそんな風のものであるが、叙事詩の形式をとつたもので、内容はよほど多種になつて來てゐる。吾が國の新體詩創始以來、この叙事詩といふものは數へるほどしか出てゐないが、それでもなか〳〵に種類は多いのである。これ[illegible]の叙事詩とひきくるめて分類して見ると、

第一は神話的の英雄、若しくは歴史上の非[illegible]を取扱つた史詩

北窓の隙戸おし開き
臥牀に猶うち臥して
ゐませしかエホバの神の
御命なりといふ一聲に
おどろきて身をかへす間に
上衣もておほひしみぎの
腰よりぞあはや右手に
寶劍をばぬくよとみしが
はや王の胸板ふかく
刺通し鍔本に
あまりける脊のまくらも
眞白なるかやのむしろも
くれなゐの血しほに染し
凄しくげに肥へふとる
白牛を屠るが如し

かくてエホデはそこをのがれ出で、人民を糾合する。

第五回「溪流」は、かゝる一大事なりとも知らぬ門番は夕日のころなるに王室に入れる青年まだかへらず、様子を見んと來り、この有様に驚く。その時、エホデは改め來り城に火をかける、城兵の遁れ出でたる者が、淺い溪流を渡らんとすれば、堰き止めたる流れを切つて落して溺死せしむ。

年少きエホデをあげて
國民の士帥と
あふぎつつモウセの歌を
三たびまでうたひあげたる
よろこびの聲猶潤に
殘りけり皆もろともに
エホデをばゲラの家まで
送らむと川邊を遠く
見渡せば夜もはや明て
朝日影さしむかひたる
ギルカンの記念の石の
あたりより空に群立つ
山鳩のその數十二
あるぞあやしき
あはれ我その鳩のごと
翼あらばユダヤの國の
いにしへの神の恩惠を
つげむためいざかえらなん
うらやすの國に

明治二十一年に現はれた落合直文の「孝女白菊の歌」は井上巽軒の漢詩を七五調の詩に移したもので、その内容は西南戰爭後と思はれる頃の物語詩である。三篇より成り、第一篇は白菊といふ十四の少女が父を訪ねて山に迷ひ、深山の寺に若き僧と遇ふ。第二篇は寺を去りて山路にて山賊に捕へられ、危きところをかの若き僧に助けられる。その若き僧は嘗て勘當された

[illegible]

「四方にきこゆる蟲の音も
あけれよわるときく程に
ありあけ月夜かげきえて
峰のよこ雲わかれゆく」
しづかにそこをたちいでて
あたりのさまをながむれば
軒の松風聲かれて
あれたる庭に霜白し」
手をばとられつとりつして
かたみに山路をすぎゆけば
ゆふべの賊のむれならむ
あとよりあまた追いてきつ」

兄は戰ひ、少女はにげてとある山家にゆき着く、そこに月日を送るうち、身に染まぬ緣談をうける。思ひ出すのは自分は捨兒であつたのを拾はれたので、かの家出した兄を自分の夫とする積りだといふことを亡き母が言つたことがある。そこでその家をとび出して川に身を投じて死なんとすると後ろよりとめた者があるそれが兄であつた。その奇遇を喜んで、共にわがふる里こひしく連れだつてかへれば春も過ぎて夏となつて家に着いた。するど永年たづぬる父が歸つてゐた。親子三人は過ぎしこ

これは[illegible]語[illegible]持つてゐたので、可なりの人々に愛誦されたものだ[illegible]のをきいてもよく解るといふ點で、同時にたかい[illegible]を帶[illegible]點で、深さはなくとも叙事詩として兒童にまで歌はれたものであらう。

落合直文は更に、福島中佐が伯林から西伯利亞を横斷したことを詩材として「騎馬旅行」といふ叙事詩を明治廿六年六月に發表した。同時代の興味ある人物を詩材として三日三晩で書き上げたものである、與謝野寛なども助力してゐる。福島中佐が歸京の前三日の夜に脱稿したといふ序を見ても際物のものであることがわかる。千餘行の長篇であるが、いささかのたるみもなく、面白く讀ませる。そして「老女白菊の歌」よりも技巧に一肘の老熟を見る。

その十

カザンのさかひすぎゆけば
こゝは去年よりのひでりにて
秋のみのりもあらざれば
飢ゑに悩める里ごとに—

食はむものなきまゝに
とりて飯にやかへつらむ
その葉だになし草見ても
野なる山なる木を見ても」
こゝにかしこに見えぬるは
いつ斃れたる人ならむ
をとこもをみなもわかぬまで
斃れ伏したりその屍」
屍の上に日はてりて
砂吹く風もなまぐさく
あさる烏はむらがれど
追ふ人もなし夕まぐれ」
わが過ぎ行くを見てしより
よろぼひいでて里人は
あまた縋れりわがのれる
駒の鐙にはた鞍に」
錢をとり出てであたふれば
いかにうれしくおもひけむ
手をあはせつゝをろがみぬ
三たび五たび

調に平叙したといふ以上のものを感ずることが出來ない。

現代及び自己を描ける敍事詩にも二種ある、一つは事實を平叙せる短篇小説に比すべきもの、他は構想あつて長篇小説に比すべきものとである。

北村透谷の「楚囚の詩」は明治廿二年四月の作であつて、その「自序」は作者の心境と時代とをよく語つてゐる。

『余は遂に一詩を作り上げました。大膽にも是れを書肆の手に渡して知己及び文學に志ある江湖の諸兄に頒たいとまでは決心しましたが、實の處躊躇しました。余は實に多年斯の如き者を作らんことに心を寄せて居ました。が然し、如何にも非常の改革、至大艱難の事業なれば今日までは黙過して居たのです。

或時は翻譯して見たり、又た或時は自作して見たり、いろいろに試みますが、底事此の篇位の者です。然るに近頃文學

し、余は窃かに信ず、吾等の同志が諸共に協力して其志を貫く心になれば遂には狭隘なる古來の詩歌を進歩せしめて、今日行はるゝ小說の如くに且つ最も優美なる靈妙なる者となすに難からずと。

幸にして余は尙ほ年少の身なれば　好し此「楚囚の詩」が諸君の哄笑を買ひ　諸君の心頭を傷くる事あらんとも、尙ほ余は他日是れが罪の償と得る事ある可しと思ひます。

元とより是は吾國語の所謂歌でも詩でもありません。寧ろ小說に似て居るのです。左れど、是れでも詩です、余は此樣にして余の詩を作り始めませう。又た此篇の楚囚は今日の時代に意を寓したものではありませぬから獄舍の模樣なども必らず違つて居ます。唯だ獄中にありての感情、境遇などは聊か心を用ひた處です。」

內容から言へば東海散史の「佳人の奇遇」とか「志士淑女の想海」などを連想させるもので、獄中に三人の壯士と自分の花嫁も囚はれて居る。そしてこの叙事詩は獨白の形式に依つてゐる、狭い獄中にあつて殊に月や日光や蝙蝠や鶯に對する憧れと感慨がよく述べてある。冬より春へ、かくて彼等は獄舍を出た。それらはもとより空想の產物だが調子の自由であること政治熱の盛んな時代の背景などが考へられる。

鶯は[illegible]て
直に獄窓に立ち上るに
鶯は此響には驚かで
獄舍の軒にとまれり、いと靜に
余は再び疑ひそめたり……此鳥こそは
眞に愛する妻の化身ならんに。
鶯は余が鬧靈の姿を振り向きて
飛び去らうとはなさずして
再び歌ひ出でたる聲のすゞしさ
余が幾年月の鬱を排ひて。
鄕の美しき衣は神の惠みなる、
鄕の美くしき調子も神の惠みなる、

泰西の叙事詩が吾が國語に飜譯されたものは一二三に止らないが、完譯といふものは少い。古いもので評判になつたものには鹽井雨江の譯したスコットの「湖上の美人」(明治二十七年三月發行)がある。スコットの三大叙事詩と言へば「湖上の美人」「マアミオン」「最後の樂人の歌」で、中でも「湖上の美人」は最もポピュラーの作品で、所謂血あり涙ある騎士物語で、構想も大きく、各人物の性格も明瞭に活躍してゐる。國文學者である雨江は泰西の他の叙事詩にはあまり關心しなかつたやうであるが「湖上の美人」には心醉して、これを飜譯したのは大學一年の時であつた。「詩歌もて長篇の物語をうたひ、大篇の小說を作

ることは、獨り彼の國の詩家あるのみ、わが國には絕えて見ず」と雨江はその序で書いてゐる。

この翻譯は首尾みな七五調の柔かい國文調で押し通したもので、雨江の創作の詩風と同じものであつた。

その一

モナンの小川　風さえて
光りいざよふ　夕月夜
かけのながるゝ　谷水を
のみてあきたる　さをしかの
床はかなたの　森の蔭
しげるはしばみ　その下に
蔓を纏ひつゝ　ねぶるなる
步路の末や　いかならむ。
あからひく日の　朝日かげ
ボイルの峯の　山の端に
かゞやき初めて　ほどもなく、
さけびく＼て　狩犬の

國文學」に發表して、出世作とも言ふべきものであるが、それは約婚の男が洋行して異國の女を娶り來た失戀の女が深山にはいつてゐる孤獨な境遇を歌つたものであるが、今日から見れば着想は平凡、單純で、詩的情緒が稀薄なものである。同じ頃、武島羽衣が日清戰爭を背景とした「小夜砧」などを發表してその幽幻奇怪な詩を喚稱された。それらは「湖上の美人」の翻譯からひきつゞいた敍事詩の一機運であつたが、眞に國民性を表はした構想ある長篇は出ず、敍事詩と言へば多く平板な敍述に終つたのであつた。

傳說は敍事詩としていつも好適の詩材となるのであるが、羽衣傳說を詩に試みたものに井上巽軒の「比沼山の歌」がある。日本に於ける羽衣傳說は四種ある。そのうちで最も人口に膾炙してゐるのは三保の松原ので、その他は、丹後比治山（或は比沼山）近江の與胡の湖、河内の天の川のそれである。

井上巽軒の「比沼山の歌」は[illegible]

が出て來て、どことなく[illegible]

第一章は、丹後の比治の山頂の眞井といふ泉に天女八人來り浴してゐるのを、和奈佐といふ翁が、天女の衣を一つ隱すと、七人は飛び去つたが一人のみ飛ぶ事が出來ない。翁これを見て、私に子供がないから地上に留つてくれと言ふ、天女はさういふ事なら留まるから衣をかへしてくれと云ふ。

翁笑ひて云ひけらく
　疾く歸れ、嗚呼天女よ
衣かへさば、飛び去らん
　天女云へらく、何事ぞ
天女は皆欺かず
　信を本とし、變らぬに
何をさばかり疑ひて
　我れに衣をたまはざる。」
翁答へて云ひけらく
　疑多く信なきは、
人類の常、世の習
　とくかへさぬは、これがため
されど天女は異なれば
　などて人をば欺かん
やがて衣を取り出して
　天女にやりて疑はじ。」

と言ふのは、「古風土記逸文」の「老夫曰、天女娘何存欺心」

[illegible]

[illegible]

の文を近體詩にしたもの[illegible]こうした[illegible]

言葉が至る所に散見し、用語は[illegible]ながら自由でもある。

自然描寫は次のやうなものである。

竹の林を繞り行き
　丸木の橋を打ち渡り
野原遠く過ぎ來れば
　兩人が影は婆娑として
淋しき村の暮れ方に
　翁我が家に近寄れり。」
殘る夕陽傾きて
　西山の雲に遮られ
鳥のむれ〳〵いそがしく
　林を指して飛び還り
木の間洩れ來る燈火の
　光はいつか身を照し
蒼煙暗く村を籠め
　何處の鐘か高く吼ゆ。」

第二章は、天女は翁の家に同居して酒を手づから釀したるに、「色はさながら琥珀にて、普通の酒に似もやらず」買手が蝟集し來り、且つ天女の容色を目あてにくるものが多かつた。――この邊までは傳說そのまゝである。これから作者の想像が加

つてゆく。かくて翁の家は丹後第一の金滿家となつた時、國中に、旱魃のための大饑饉が來た。近在のもの數千人、この和奈作の家へ押し寄せて來て物を乞ふに、翁は一物を與へないので、人々亂暴狼藉す。天女出でて酒食を饗し金錢を與へた。そして、

やゝ靜まれるころほひに
　姫子は扇手を取りて
いと窈窕にしづ〳〵と
　天女の舞を舞ひ始む。
腰肢は細く、柳枝に似
　衣帶は長く飛霞を曳き
鳳か翩躚、風を避け
　鸞か低回、影を踏る。」
歌ひて曰く、世の中は
　苦もあり、樂もあり、能く思へ
若し苦なければ、樂もなし
　樂ある故に　苦もあるぞ、
苦あるからとて　怨むなよ
　樂しんぞ[illegible]

れやうとして交渉に來た、翁は天女が[illegible]姫子は人府が、入鹿にあげたならば利益もあらうと承知した。姫子は入鹿と權威とを罵り、承知せず入鹿を罵る。小人大いに怒りて去る。

第四章は荒監村に盲大といふ隱士あり。雪の夜の月をながめつゝそゞろあるきをして、比沼の里にでゝ、姫子の彈ずる琵琶をきき思はずその家に近づく、かくて姫子と語りその愁をさく。

第五章は、祭の日の雜踏にまぎれて平群の小人が姫子を奪ひ去る。それを日頃思ひをかけてゐた黑といふ博徒が子分をつれて間道に待伏せる。かくとも知らぬ小人等は駕籠に姫子を入れてやつて來た。そして兩群の戰ひとなつた。

互に火花散らしつゝ
　暫時鬪ふ其中に
黑は小人の刄をば
　[illegible]
風[illegible]

何故を[illegible]して忍び[illegible]けるか
　[illegible]
斜に萩が[illegible]伏し
　上に轉ぶに死骸のみ
血は流れて已みもせず
　道の砂石は赤く染む。

第六章は秋の月夜に橋の上よりあはや身をなげんとする乙女、かけよつてそれをひきとめる若者、乙女は小夜衣とて都育ちのものであるが、花見のとき人にはぐれて、今は博徒の黒に養はれてゐるが、今年二八の年を迎へると、黒はこの乙女を自分のものとしやうとして口説く。それで乙女心の思案にくれて、身を川淵に棄てやうとするのであつた。若者は小松と言つて、比沼の黒の卑彌呼といふ姫君（かの天女のこと）に仕ふる者、小夜衣の身の上を姫君に話して相談しやうと共につれだつてかへる

第七章は晩秋の夜ふけに彼の天女の姫君の間に曲者二人忍び入る。天女は二人を相手に戰はんとするに刃なし。

うれしや床の花瓶に
　誰がさしたるか白萩の
一束あるを手にとりて
　受け流ししもいさましや

曲者の一人は逃げ、一人は闘つてゐると、従者の小松も闘い[illegible]
[illegible]なる。見ればその曲者は黒の腹心の者であつた。

何故に忍び込んだかといふに、姫子は助けられた恩返しもせず、日頃の思ひをかけてる美しい小夜衣まで自分の家に迎く。それで姫子を殺し、小夜衣を奪ひ返すためだといふ。姫子その曲者を戒めて追放したが、小松のいふには必ずあの黒は今度は自分で手下をつれて襲つてくるに相違ない、先んずるものは人を制すとて、小松は太刀を佩き弓を持ちて、家に待つほどに、五六人の怪しい影がこちらに近づいて來る。小松は弓をつがひて放つと、曲者の一人の眉間に當つたが、それは賊の巨魁と見えて、續く手下は逃げ出した。あと追ひかけると逃げおくれた賊の一人は止つて戰ふ。それは黒の子であつた。一上一下と戰ふうち黒の子の刀は折れ、手ごろの石を持つて小松の刀を受け止めると、それは石でなくてされこうべであつた。

思へばここはその昔
　小人が黒に殺されし
同じ所にありけるよ
　さては砕けしかうべこそ
やがて小人のされこうべ。

といふので第一篇七章が終つてゐる。
これより事件がどう展開してゆく豫定であつたか未完に終

たので、知る事が出來ないが、「古風土記逸文」に依る比沼山傳說は、醸酒をして家富んでからと言ふものは老夫婦が天女に向つて、汝は吾が兒でなく暫し家を借したものであるから、出て行けと言ふ。天女泣いて今更出て行けぬから置いてくれと言ふと、翁は怒つて追ひ出して了ふ。天女久しく人間となつてゐたので天に還ることも出來ず、地に親しきものもなく天を仰いで「あまのはらふりさけ見ればかすみたちいへぢまどひてゆくへしらずも」と退いて泣く泣く竹野郡船木里奈具村に留居してゐたとある。

井上巽軒の比沼山の歌は首端は似てゐるが、これだけのものでもだいぶ脚色を加へて、世態人情にからんで教訓をもふくませた。一貫して人界の汚濁と天人の清淨な心とを對照させようとしたものである。

明治三十六、七、八年は叙事詩の最盛期とも見るべく、優れた作品も此の期間に出た。

明治三十六年一月、

合を歌へる「山寨」、戰功を歌へる「鳴鏑」を發表した。いづれも詩的空想の豊かな調子の高いものであつた。その當時の叙事詩として最も成功したものであらう。

法　鼓

二

将軍義經、鼓を把るや
前に矢櫓の上にあらはる、
緋威の鎧、黄金の兜、
齢は幾歳ぞ二十五の[illegible]
東の嶺をば離りて出づる
炫ゆき朝紅に輝きわたり、
眉目にぞ溢るるその神彩は
似たりな、神將威ありて猛き。

皆、決して遠く聚めば
湖、標渺として雲と濤、

[illegible]
激しき聲をば始めて叫び、
高倉のおひ宮上に頂き
多恨の大敵防ぎし處
『軍は敗れて、埋木の歌
誦つつ悲哀によし果て給へど、
言はじな數奇の老いし武人と
類なき壯圖、讃嘆すべし

『禮拜、欽みまた若しんで
我今、皇天の威靈にぞ訴ぐ
倚ては凶暴平氏を忌みしが
ちかごろ義仲無下に交代りて
若髪が花束分つ如くに
天下を三つにと志しては、
荒野さながら、王城惱まし
[illegible]に西なる平氏と結ぶ。

賊罪問へよの宣旨をかしこみ
鎌倉出でては夜を日を馳せつ
範頼瀬多より我は宇治より
巣をば挾んで擊たんとすなり。
ああ、天神地祇請ねがはくは
この戰鬪をもて若し吉とせば、
維この默せる鼓は鳴りて
衆をば勵ませ、この河渡せ。

[illegible]よ
第一の[illegible]に、眞寺に[illegible]、
第二は顛覆、第三は父、
怨靈、惡靈菩提に供養。
不思議や、鼓は忽ち放たで、
號砲の玉をば打ち出すごとく、
或は魔王の血潮に飢ゑて
眞夜中、哈きに舌打つごとし。

軍兵、等しく耳欹てて
令ぞと刹那に靜まりぬるに、
一韻一音いよいよ切に
序、破、急いづれか悲哀ならざる
『これ遊戲ならんや、解脱の初陣
源家の浮沈はこの一擧ぞ
危險は冒せ、艱苦は凌げ
汝等勇士の名をば汚すな。

さはいへ、北岸敵をば眺めて
逡巡、渉らず怯とや云はん、
我聞く、平氏は山又山又海に、
假寢の夢をば僅に結ぶと、
やがては討たんに、その懸崖
[illegible]く怒濤を汝等如何に、
されはよ、今日より一[illegible]を敵とし

風とも爭へ、浪とも鬪げ
ああ、この宇治川、躍つて先陣
誰かはこの日の勇者と謳る。』
將軍、雄たけび終らぬ程に
小島が崎より二騎躍り出づ。
何等の不思議ぞ、紫電閃々
晴れたる蒼空に雲馳せ驟り、
殷々、鳴動く雷火のしたに
鼓はおのづと又響きけり。

(夏花少女)

與謝野鐵幹の作は、八七調を中心とした林外ほどの調子に新工夫の自由さを示してゐないが、簡勁である「山寨」の絶句を示して見よう。

年ごろの願かなひて
我君を今日見まつると
妻を呼べば肯きからさぬ
赤裳ひき御銚子とりて

しろがねの[illegible]はま[illegible]し
君が馬おのれ口とり
[illegible]州へ御供の門出
さらばとて勇めるうしろ
さばかりの雨雲はれて
くだかけはほがらに鳴きぬ
いはけなき女こゝろや
涙ぐみ見おくる柱
將軍とわが夫の上に
下野の夜は明けにけり。

傳説詩から近代的な史詩の方に歩るいて、吾等の時代に比較的近い興味を見出さうとしたところにこの義經の史詩の價値があるのである。

詩集「紫草」(明治三十七年五月發行)には、日本武尊を歌つた「哀歌」と晶子の「橘姫」が載つてゐる。言ふまでもなく古事記を[illegible]

[illegible]
行く道に反射食む如も
よこたはり走ると見しが
霞りたる樹下の露の
森の日に融けて形なき
ありさまに且つ消えにけり。
この時よ如何なる遠か
聲ありて『與北の海ゆ
支那都比古氷雨を誘へ、
霧の神大　惑子
妹脊して天の闇戸ゆ
舞ひくだれ、今』とぞ叫ぶ。

といふのでは、古事記をいくらか書換へたに過ぎない。いくらか枝葉の工夫をして見たところで、感動の根本が同一である。今更叙事詩とするまでもない。

その外、史詩としての、森鷗外の「長曾我部信親」(明治三十六年九月發行、)山崎紫紅の「日蓮上人」(明治三十六年十月發行、)が出た。森鷗外のものは薩摩琵琶に合はすとて作つたものであつた。

平木白星の詩集「日本國歌」(明治三十六年二月發行)に附錄として載つてゐる叙事詩「伊弉諾、いざなみ」は、言ふまでもなく古事記より題材を得たもので、日本創造のこの二柱の神の

[illegible]
五章より成立つてゐるが、いまこの[illegible]

五

かたみに空をふりあふぎ見れば
光明溢るゝ西の妓婦
森のくれなゐ　秋の紫
百千萬の花やこの花

男神

『我なくて何ぞ汝あらむ
汝ありてぞ我もかくあれ。

『自己をいみじう愛るに次て
我と同じき物をいつくしむ。

『天縁のはじめ、この心こそ
幸福のもと、この心こそ

『近くは寄りね、頬ずりして
眼を目かはし、互ひの面に

『汝の慰紛、我が禍祉を
鏡を見るこど覓めいでなむ』

女神

『實にもいましのたまふ如く
いましの心を心となさば

「愛あるところ、不淨はあらず。
愛あるところ、邪惡ぞ無き」

男神

「我は汝に眞を與へ
天にあでなる生をはじめむ」

女神

「いましに善を我に加へて
天にけだかき命つづけむ」

男神

「觸れたき汝が白きたゞむき
狭くわが頸にうちかけたまへ

「かかるは終に合ふとしいへば
いざいざ元の一に歸らむ」

相對きつゝ胸のときめき

も調子もよほど晦澁になつてゐることがわかる。そして事件の平叙以上に彼等の藝術的な深みを加へやりとする苦心が察せられる。戀愛至上の心境を突込んで歌はうとしてゐる。古事記を詩材としたものは後に、薄田泣菫の「天馳使の歌」（明治三十八年五月發行詩集「二十五」所載）と吉野臥城の「天若彦」（明治四十八年「太陽」所載）とがある。

「天馳使の歌」は伊弉諾、伊弉冊の黄泉の比良坂の傳說と橋立傳說と比沼山の羽衣傳說とを結びつけて、永遠の女性の慈悲を歌つたものである。

平木白星の「心中おさよ新七」（明治三十七年十二月發行）は、心中ものを取扱つたのであるが、武士を出したのを見れば傳說を骨子として作つたものと思はれる。

全六章から成つてゐる。調子に種々變化を試みやうとし、第一章は七七調、第二章から第五章まで五五調、第六章は[illegible]

上りても見よ、岸の波に
夜々顯はるる龍燈ありと
汝に聞きて詣でし我へ
何故捧げざる鐘ぞ、旃陀

『あな畏しや、聲高かれば
木靈耳神く　天や咎めむ
この山頂に祀る佛の
御本願をば慕ひて火をば
龍王さへも捧ぐるものを』

そして注意すべきは老翁の言葉に出來るだけ、砕けた俗語を用ひやうとした事である。

『尋常の理を僞る猿智慧
あちらこちらの法を歛めて
確適ゆかば見れこそ不思議
善かれ惡かれかう念ふたら
めつたに變へぬ翁めが合點』

第二章は父知らぬ孤兒の新七は利口か馬鹿か變り者で、去年の大漁に人々が大うかれしてゐるときも「弦の音を背になして、大岩に立つ男子」は彼であつた。

媚めかし伽羅の香や
後ろふと見かへせば

今宵もお小夜に
鉢巻したをすめぐ
大江戸のぬきた紋

氣質なら容姿たら
何もかもとこらへ
唄はせて憎い聲
憎いとは裏の裏
それは思ひのあまり

お小夜は酒の惡强ひを脫れて來て見ると、漁夫の新七が居る。新七にはお小夜が姉の艶、母の慈悲を持つ女とも見えた。お小夜も親なき子なき孤獨の身の上、二人は夫婦約束をする。第三章はお小夜、新七との交情を女主人に堰かれて、益す意氣地を立て通す。

第四章は

右手に陸奧、ゆんでには
兩毛の惡漢の
千萬の總たばね
俱利迦羅の源太こそ
男のうちの伊達男

お小夜を深く思ふて、今宵も酒宴の大一座、漁夫新七は呼ばれて坐にあり、人々源太を嬲りものとするのであ……

ばふ、お小夜の俠氣が小氣味よく出てゐる。

『好かぬにはあらねども
我をふるふ貴大人の
今日は何故憎いやら
幾夜々の血起證も
反古となる此宵、今

『あゝ戀にあらねども
いたいけな彼の人の
かくはなぜ愛しきぞ
憎をば綱にして
風流や潮の花

「親分を神にする
我が胸が知りたくば
この乳房の下を裂き
沸きかへる生き血にて
濯はんせ汝が眼

いかに啖呵を切つても、

るお小夜。その時第一章に出て來た武士と爺とが山頂から望み見て、龍燈があがつたものと思ふ。

この内容を許すれば漁夫が主人公であり、太平洋が場面になつてゐるので、剛健で雄大な感がある。お小夜の心理も相當な微妙さを示してゐる。この叙事詩の面白味は時代物に對する世話物の味ひである。傳説から暗示されても、だいぶ吾等の時代と共通な血が通つてゐる。

石川啄木にたゞ一篇の叙事詩がある、郷土の傳説を歌へる「錦木塚」といふ二百行足らずのもので、明治三十七年一月十六、十七、十八日の稿である。詩集「あこがれ」(明治三十八年五月發行)の中に收めてある。その内容は次のやうなものである。

(昔みちのくの鹿角の郡に女ありけり。よしある家の流れなればかかかる邊つ國はもとより、都にもあるまじき程の優れたる姿なりけり。日毎に細布織る梭の音にもまさりて、歌子となむ云ふなる其名のをちこちに高かりけり。

[illegible]
[illegible]
射にするやつばらが作らしかすがにこのことかみにはむく[illegible]き手にあ
まる泉もありけむ。ひとつ塚に葬りて、にしき木塚となむ呼び傳へよ
る。花輪の里より毛馬内への路すがら、今も旅するひとは、[illegible]川の[illegible]
を渡りて程もなく、草原つづきの丘の上に、大きなる石三つ計り重ね
て木の端など結ひたるを見るべし。かなしとも悲しき物語のあとか
た、草かる人にいづこと問へばげにそれなりけり。傳へいふ、昔年今
に都へたてまつれる陸奥の細布と云ふもの、政子が織り出しけるを初
めなりとかや。）

第三章で「にしき木の巻」には作者の感慨が述べられ、「のろひ矢の巻」には主人公の若者の獨白で、「梭の音の巻」は女主人政子の獨白である。これはもと前後六章から成る予定で、二人の死後政子の父の述懷と葬りの日の歌と天上のめぐり合ひを添へる心組であつたが、未完のまゝに終つたものである。

ああ願ひ、あだなりしか、錦木をば
早や千束立てつくしぬ。あだなりしか。
朝霜の蓬が葉に消え行く如。
野の水の泡が根にかくるゝ如。
色あせし我が幻、いつの日まで
沈淪ゆく胸に住むに堪へうべきぞ。
わが息は早や迫りぬ。黒波もて
[illegible]
[illegible]
うらみなく、わづらひなく、[illegible]は
さながらに大天なる光と[illegible]
さらば姉、君を待たむ人の花嫁[illegible]

といふやうな詩風で、その時代としては普通であらうが、今から見るとたどたどしくて情緒の流れがあまり感ぜられない、啄木はこうした長い叙事詩の作には、最も不適當な詩人であつたらう。

蒲原有明には三つの叙事詩がある。「姫が曲」（明治三十七年「新小説」所載）は英國の宣教師のギレといふ人の書いた「南太平洋諸島の神話及歌謡」中の「泉の精」と題した一章の傳説を素材としたものである。その傳説と言ふのはかうである。はじめ月夜に遊ぶ水精の女を、その土地の酋長が人をして縛へしめ、これを寵愛した。女が懐孕した時、女は「この腹を剖いて胎兒を出し、わが亡骸は土に埋めて呉れ」といつて嘆き悲しんだが、女は既にして一兒を産み落した。女はまた云く「人界に來りて子を産めば、悉く死ぬであらう」と。その後酋長は女の手を執つて共に泉の底に下りゆかんとしたが、人間の悲しい約束として水底に辿りつくことが出來なかつた、酋長が遂に女に別れたといふのが、

その光節である。

瞬眉しろき戀の魚
姫は衣をかい遣りぬ——
衣のあやのきらめきは
瑪瑙の海ゆく孔雀船
（あゝ、うたかたや、
　孔雀ぶね、美しうを。）

たちまち青き水の空
王が身もまた沈みゆく
王はとぢたる眼をひらく
ひとたび姫がすがた見つ。
（あゝ、うたかたや
　姫かそも、泡か、そも。）

と、いふ詩風で、各聯に繰り返しのあるのは、ロセッチの「シスター・ヘレン」から思ひついたものなそうである。「さび斧」は明治三十八年一月の「太陽」に載つたもので、一つの傳說に據つたものでないが、

「死鯨」「やよ、だからす一
「あゝ、わが夫、口ぎたなくも、
ののめきてあればさぶしも
わかき日のことを思へな。」

伊佐奈は古鏡をつて持ゐる。鏡には海がうつる、思ひ出が映る。銛は戀敵を刺した、美女は彼が後を追ふて死んだ。——夫の伊佐奈はいま金斧を取つて打下ろすと橘の樹は倒れ、伊佐奈も息絶えたのである。

「人魚の海」は西鶴の「武道傳來記」の中の一章に據つたものである。そして人魚の出現する折りの形容は一々西鶴の言葉を用ひてゐる。

奥の浦で人魚を見たる武士が半弓でそれを射ると、人魚は悲鳴して海に沈む、その顔は亡妻の微笑そつくりであつた。武士は二日經てまたふらく、奥の浦にやつて來た。そして、人魚に誘はれて海にはいつて死ぬそのうしろから、「父よ」と呼ぶ姫

朝乳を染むる血の鉛手──
武運の君が射むけたる
矢鏃のあとの血は朱に

人魚は、やをら、かなしげに
面をあげぬ、かなしめど
なほ、ほゝ笑める艶の顔

人魚は遂に絶え入りぬ
姫はすゞろに亡父の
むくろに縋り泣き沈む。

この時に荒波が來て、武士の亡體も姫も人魚も海の底にさらはれて行つたのである──。筋は簡單だが氣分の物凄さが充分に出てゐて、有明の叙事詩中に優れたものである。

叙事詩に近代的な感能といふものを豐かに示さうとした先驅をなすものである。

岩野泡鳴の史詩「豐太閤」（明治三十七年十二月發行「夕潮」所載は一つの梗概を持つて、事實の平叙でなく、作者の心境で豐太閤を解釋してその心をよく示してゐる、八七調で用語も解し易い。

その序に、

「われ豐太閤の事蹟を見て、最も感ずるところは、その外征にあり、

彼、朝鮮を得れば、大明國に向ひしは勿論、印度、ペルシヤ、否な世界をも征伐せるなるべし。然し太閤の意とするところは、かゝる外界の事件にはあらざりしたり。彼に對象は國に、家に、戰の要求を滿さんことを欲せしなり、實はその手段を選ばずして之に満足せしなり、されどわれは、光秀征伐時代の秀吉よりも、征韓時代の豐太閤を愛するものなり、先きには機智あまりに多くして人の同情を引かず、後には大山に似て而も神々しきところあり。國家の內部的生命を興ふる文藝その物は、知らず識らず、彼に依つて、その面目を發揮することを得たりといふべし。」

と言つてゐる。

全五編から成り、第一編の「一夜の會」には

去年のこの日に諸侯を集め
聚樂の屋形に外征を議す。
五人の宿老　五人の奉行
中老三名みな列なりつ
備前の宰相　大閤に代り
諮辭を呈して異議なくありき
十萬七秋は直ぐ立ちどころ
艦船七百われ今

人間僅かに百歳ならず
快ならざらんや無前のいくさ
美々たる戰袍われ人かざり
金[illegible]

大軍 瞻々 旗幟をたゞし
鷄林八道 四州四百
遥羅 晨旦 をも一つに統べば
やまとの言葉を西夷に擬せん

かくて潮路を守護する御靈の、いつく島がみに祈つたのである。

第二篇は「清正望岳賦」で、鷄林八道に轉戰したる清正が遥かに富士の靈を望見して、思郷の念の堪へがたき士卒を勵ますことを叙す。

勝利のしらせを待つらん人の
ありとし額めばいづこの果も
われには榮榮のたゞあたたかき
御殿に同じとかしこみ起きつ
再び馬上に士を見渡せば
きほひは凛々あらたに振ふ

第三篇は「明使追放」で、「なんぢを封じて日本の國王——」の言葉に秀吉が激怒して、再び數百の兵船と十萬の貔貅を送り出すを叙す。

韓國七將また加りて
蔚山修羅なかばに迫る。

第五篇の「薨去」は、七年の征役、事半ばにして逝くに際し、幼君秀頼の補佐役を定め、韓國の兵を收むることを叙す。

第六篇の「小海祠」は吾が軍、苦戰しつつ、兵をひく時に、高宮小八なる者、端なく後れて便船を得ず、空しく日本を望み、休む家なく食ふ食なく窮死す。韓人憐れみて小山に小祠を立て、時日を定めて祭りをなすことを叙す。

これは豐太閤の事蹟を正面から叙した末に、この一篇を加へたので、何となく變化と哀愁とを感じさせる。

これは日露戰爭が始まる頃の作である。出來榮はともかくこうしたスケールの大きいものに手をつけるやうになつたのもやはり戰爭の影響の一つであらう。

幸田露伴の「心のあと出盧」(明治三十八年一月發行)は作者の人生觀を雜列したもので四六版三二二頁のものだが、各自

の悩みといふものを表はさうとしてゐる。

内容に新味さは感ぜられないが、明快達意の詩句で、調子も所々苦心して變化あらしめてゐる。

次のやうなのを見ると自然に對する見方、無情感の表現などがよくわかる。

第五☆

一

眼に涙なし、閻王の使者。
人を免さず、黒鐵の鞭。
「汝の壽命　既に盡きたり、
地獄の門は開け　居るなり、
猛火の車　汝をぞ待つ
疾く〳〵乘つて　冥土へ急げや！。
罪人！、いそげ！、いそげ。」とぞ逐ふ。

二

竹の葉末に　置く露と、
しばし結べる　人の身に、
つれなくあたる　小夜嵐！。
さらばと地に　落ちて散る
露の聲をば　誰か聞く！。
露の聲をば　誰か聞く！。

三

[illegible]など　春[illegible]に、
油のやうな　春雨にさへ、
海棠　忽く　力無く、
ほろりと落つる　紅の
苺苔に點ずる　其のゆふべ、
花の芳魂　何處にか往く！。

四

紫光　匂ふ　天つ星、
此の拂曉に　地に落ちて、
馬鬼が原に　冷まじき
颶風急に　起り狂へば、
空に騒立つ　八千草の
亂れの中に　麗人の
玉の形骸の　横はる！。

五

白綾　長う　しども無く、
白蛇　血を吸ふ　頸の傍。
たゞ草叢に　棄てられて、
地に　幽辨の　香を遺す！。

各自獨立した詩篇の內容だが、氣分に於て略々同一なものであることは止むを得ない、即ち、或る日或る時の現實の感動でなくして、心を模索して並列したもの であるから、どことなく、道話風の調子があるのである。

第二十章

一

浮世の富の　威力無や、
黄金　萬貫　何を買ひ得る？
老いて悲しく　髪　白む時、
たゞ一筋の　黒き毛をだに。
いかで新に　買ひ求め得ん！

二

羨しからぬ　世の富や！
蠅は　あされし　肉に集り。
虱は　温き　垢につく。
銅錢の香の　なまぐさき
人間の蒼蠅　これに集り、
内懐の　あたゝかき、
浮世の虱　はひまはる！
富　たゞ招く　蠅　虱！
富　たゞ招く　蛆　虱！

三

うき世の富を　何戀はん。
浮世の富を　何戀はん。
投げの情を　賣る里の
あだな櫻の　中にさへ、
すいと立つたる　若松の
お千代が歌に　一足る事を
しる鍵一ツ　扉の開く
庵は富貴・自作鍵」よと
洒落て退けたる　心ゆかしや。

四

世を花やかに　おもしろう
たのしげに行く　山車の牛、
ちやんちき／＼の　鳴物に
囃さるゝ身も　安逸は無う
夏の一日　荷は強く、
夕陽に辿る　歩重し！
一門　光り　輝きて
世に囃さるゝ　物持の
見る目まばゆく　榮ゆるも、
山車の牛ぞや　山車の牛！
何か異る山車の牛！

要するにこうした詩集は詩壇以外の人に試みられ、同時に詩壇にはたいした影響も與へずに單獨な位置に終つた。詩想としても修辭としても格別の清新さはなかつたのである。同年十月に神谷鶴伴が「出處抄註」といふものを出した。學者の作だけに詩句の出所、註釋を施したもので、この類の詩集でこれまでにないことである。

前田林外の「夏花少女」（明治三十八年三月發行）の集中の「アメリカ彦造の墓」も好個の叙事詩と言ふことが出來る。至

章二百行ほどのものである。アメリカ彦造の墓畔吟といふべきもので、アメリカ彦造とはペルリ提督を日本に導き來たる文化の先驅者であることは、次の詩句に示されてゐる。

第一章は墓畔の景を叙し、第二章は次のやうなものである。

二

ああ、アメリカ彦造
ああ、天の撰民彦造
曾て遠く祖國を逃(のが)れて、
一箇　の奇兒。
蒼茫(さうばう)たる大西洋のあなた
桑　港(サンフランシスコ)の市に立ちし君。
適(たまた)ま義使の提督ペルリに知られて
欣然として告げて言ふ
わが祖國は亞細亞の絕東
豆の如き小さき島國(とうごく)
いにしへの美名は蜻蛉洲(しま)
別に豐葦原(とよあしはら)の瑞穗國(みづほのくに)とたゝへて
米、漆(うるし)、茶、糸、に富めり。
國の風俗　特に美なれど
未だ文明の體(たい)を知らず。
性を擧げて桃源の夢
惛々(こんこん)として醉へり。
提督、君が語をきゝ
天を仰いで高く歎ずらく。
あゝ、かくの如きが島國の美
これ神の賜(たま)へる寶藏(ほうざう)
とこしへに鑑(き)加へずば
必らず國に禍(わざはひ)あらむ。
あゝ、誰か扶(と)くこを開くもの。
直ちに君を政府に薦(すゝ)めて
紀元一千八百五十三年、
提督の大艦君を載せつ。
浪、長閑なる春の曙(あけぼの)。
錨(いかり)の浮標を跡にのこして
この絕東に航しぬ。

第三章は提督の四艘の軍艦が日本に向けて出航する盛んなる情景を述べ、

提督、笑つていふ。
開國のほかに心なき我。
君さな深く疑ひそ。
見よ、わが阿米利加十三州
よく正義を以て英國を挫(くだ)きぬ。
義使の父なり

文明の母なり。

といふ提督の公明な心事を以て結んでゐる。

第四章は途中の寄航を叙し、第五章は嘉永六年六月一日、久里濱に錨を下ろしたるさまを叙し、しかも、祖國に來りてその土を踏むを得ざる彦造の悲哀を述べてゐる。

さはいへ、遠く走りて
君、こゝに國禁を犯せし身、
罪、償ふべくば當に死あるのみ。
目を擧げて山河を見るも
足、祖國の土を踏むべからず。
父あり、母あり、
頭に白き死の花咲きて
墓に入るべき齢ぞ
あゝこの日を舷によりて君
袖を掩うて泣きしにあらずや。

第六章は更に塚のぬしに言を寄せて

あゝ、塚のぬしよ、
激

人パルリの名を記するも
誰か君が功業を知らず

と歌ひ、「他年、本郷の厨屋に窮死して、一言を自らのために辯ぜず」といふ、このアメリカ彦造は詩材として、極めて詩趣の豐かなものであつて、あまり周知な英雄の史詩と異つた感興に溢れてゐる。岩野泡鳴はこれを散文詩であると呼んだが、自由詩が詩形となつてる今日では、寧ろその自由さが、いろいろの試みをした果てに、この詩形に到達したものと見て、苦心を買つてやるべきと共に、この作品から、先驅的な伏線をも感じていい。

叙事詩がいくらか注目されて來たその傍系のものとして、當時評判の小説の筋書きを叙事詩としたものも出た。家庭新詩と銘を打つた瀧口白羊の「不如歸の歌」(明治三十八年六月發行)などが一例で、續いて「金色夜叉」「己ケ罪」などの歌が出て、源氏物語の歌まで出たが、言ふまでもなく創作としての價値のないものであつた。

第一章は鞍馬山の谷間に十四の少女が捨てられてゐる、第二章、六部が通りかかりわけをきくと癩病を治すためと言ふて母に捨てられたのである。それが五六年前に家を出たその父であつた。

『その昔、われは国栖人(くずひと)
三上の奥に笛吹き
うはばみの眠りを覺まし
昧噌の香に之を招きて
黑がねの柵を卷かせつ

『七重八重かたき圍みを
やすらかにその柵のうち
なまぐさき夜風しのびて
金色のうろこ取るわざ——
樂しさは戀ゆゑなりき

「癩病の藥なりとて
こを賤りに貯らす毎に
かねよりもはた器具よりも
なが母の若きすがたを
目に映すこれ常なりき

そして綠仲となつて娶れば、黄金鱗を服するはその乙女であつた。娘が十の時、子に黄金鱗を飲ませやうと私を山にやつた後に娘をつれて出奔したのである。その母のあとをたづねて、

六部は[illegible]ちたき六部堂したつてあるいたのだ。第三章は、彼は[illegible]の中に娘を入れて、母の居る家の方にやく。

『來たれ、兒よ、すでに、この母子
靜くさき箱にはあらず
五とせを戀のぬくみに
あたゝかき胸とうちなり
なれを乘せ　母に運ばん

第四章は鴨川のほとりに娘は先づ母に告げにゆくと、自分を山に運んだ男が、母と酒をのんで戯れてゐる。そして兒が生れたら捨てて若い美しい時を樂しもうなどと言つてゐる。娘は驚いてかへり父にそのことを告げると、父は半信半疑で來て見ると、二人は接吻などしてゐる。

第五章の「水晶洞」は大和の吉野川の奥の靈泉に癩病やみが身體をひたしに來る。かの父と娘とも共處に來てゐる。肉體が壞れ增つてゐる。顏の紫の人々が集つて來て、その中に妻も居るが、傍に娘の居るのも知らないといふのである。

上田敏はこれを評して「藝苑」で「氏がこれ迄の作品中最も優れたるものたらむ。題材の新奇なるを貴するにあらず、常に新境地を開拓せむとする氏が勇氣は、時に或は余をして追隨することを躊躇せしむれど、新詩は熱烈の情を迎ふるに、[illegible]

訓練（但しこの者の範圍内でいふ）を以てし、活動の妙を捉へたり。」と言つた。

泡鳴の神秘的半獸主義などいふ思想を具體化した作品と見るべきであらう。

中谷無涯作「すひかつら」（明治三十九年二月發行）は純然たる郷土傳說を描いた「緒名が淵」と思想的な「降魔頌」との二篇を收めてある。

「緒名ケ淵」は四六版の八十五頁を占めてゐる。

だが傳說を傳說として描いたまでゝ、感覺にも思想にも新味は毫もないものである。全五章より成り、第一章に山深きところ、幻の如く馬追歌がきこえる。その緒名ケ淵を點出する。第二章は老松と巨巖との獨白をなさしめ、緒名ケ淵の人界遠き幽邃さを歌ふ。その淵の上の小祠は何を祀れるやといふ。

第三章はその小祠の神の本體は式内の古き神でなくして、鄙の乙女なのである。

我が戀　潔く汚れ無かりき
幼稚馴染の……

笑みて翻るゝ栗實を拾ひに
霜おく冬は　落葉を掻きに
父母　野良に　働く折は
割籠かよひも二人して行く

我は鄙の女　君は山がつ
我馬追へば　君馬に乘り
我乘る時は　君馬を追ふ
君草野に息籠むる時
谷に尾上に　木魂の調べ
我聲なげて追分聲歌ひ
調べにつれて鄙ぶりうたひ
春の朝も秋の夕も
君ならずして誰　友とせむ？
たゞ友として睦べる日頃、
心春日の如く長閑けく
憂きも辛きも知らで過ぐしき。

この若者は眉目美しく、秋祭に女形姿となるほどであつたので、鹿毛駒を追ふて市の歸るさに、乙女は堪へかねて若者に謎

の恨み、呪ひ、彼女は長者の邸宅のほとりを彷徨さまよふこともあつた。

第四章は、月下のその邸から出づる娘、

絹布の擦りあひ、留木の香り
風に揺めく　頭の飾り
縺れし頭髪の毛　はら〳〵戰ぎ
紅絹の裳裾に　雪白の脛
寢卷姿ぞ仇しどけなき
礫、岩角、厭はず洗足
肉は壞れて　血潮したたり
招く尾花に　心も留めず
茨肌をやぶれど知らず
後見かへり　見かへりつ往く

長者の娘の戀は若者に容れられなかつたのである。そればかりでなく領主は長者の娘を垣間見て、側室に召さうとしたが、若者を戀してゐると言ふので、殘酷にもその若者を探し出して殺してしまつたのである。私が戀した爲にあの人は生命を亡くしたのである。私は死んで詫びなければならない、——この言葉を巖頭に立つて長者の娘のかきくどくのを田舍乙女はきいた。

怨みも忘れ　妬みも碎けて
憐れは迫り　ひた泣きに泣く
すゝりあげたる　我が傍に
背き立つたる　鹿毛の駒
鹿毛よ駈け！
我が戀人は　失はれにき
我が怨みし人　誠心ありき
われに勝りて　苦しみありき
人の世厭はし　人の世惡くし
權威ある人　怨むべきかな！。

長者の娘が淵に身を投ずれば、田舍乙女もわれおくれずと、鹿毛駒に乘つてそのまゝ淵に投じたのである。

第五章は絶壁や松や淵や自然の姿は常住のやうに見える。田舍乙女を祀る崖の上の小祠は三度新しくつくられた。叶はぬ戀の乙女ではあるがどうしたことか戀が叶ふ神として近郷の乙女連に願言をかけられた。實としてある日崖くづれ淵を埋めて、緒名ケ淵は今、何處にか探しやうもない。たゞ古びた小祠がまた新しく立つて、戀の願をする乙女が絶えない。

この傳說詩も場面として豐かな情緒を出すと言ふより、筋書きとして描かれたやうに見えて、調子からしても柔かく氣分が出て來ないのは、この時代のものとして止むを得ない。この三角關係も近代的な解釋を加へないで淡々として書き流されたのである。

「降魔頌」は世界の平和を呪ふ破旬を摩利天が降伏させることを劇的に描いたものであるが、冗漫であるのみで、感激を與へないものである。

薄田泣菫の「葛城之神」（明治三十九年七月「早稲田文學」所載）は、役の小角が葛城山へ石橋を架けやうとして、海か山神の合力を求めた時、たつた一人、葛城の女神が容貌のみにくいのを他にみられるのを耻ぢて、晝間出會はなかつたので、結縛したと言ふ傳説に因つて作意を構へたものである。全三篇から成りその内容に依つて、一、橋づくり、二女神結縛、三、女神幽囚と項目を別つてゐる。作者はこれについて「これを作る時には、無論アイスヒユロスの『プロメシユス結縛』を想さ浮べずには居られませんでした。この一篇は後篇『解脫葛城の神』を俟つて、初めて完成するものなのですが「解脫葛城の神」は腹案としてのみ殘つてゐます」と言つてゐる。

古語を用ひてゐるので一讀して晦澁の感もあるが、想像も豐かに優艶な詩風で、技巧としても優れたものである。殊に第一篇の橋づくりに於て諸山神の出現のさまを描寫し

若髮ゆらにかかる[illegible]で
岩かた陰に額づきて
「御定は然あれ、あり數の
八十氏人はかしこみて
日にまた夜にいそしめど
陽の長なる葛城の
地主權現の兄姬のみ
日を岩窟にこもりゐて
草の片葉の朝じめり
乾かわく間だに參に來ず
宿直やつれの金屋の
眠たゆげに出でたたす
かはたれ時に訪れ來て
日の營みて物倦の
ますら吾らを見そなへど
また若生の「曙光」が
唐様のころもうちはへて
眞夏の小野の朝踏みに
天の御階にいでませば
つと衣がづき纈ひ蔽て
木殺かくれたりましし。

ます。私もなるべくなら平易な耳近い言葉で詩を作りたいと思つてゐましたが何分日本語は語が貧しく音調が淺いものですから、私は適當な語を求めて、知らずしらず新しい造語も試みないことはありませんでした。しかし新造語を試みる爲に、まづ同じ内容を含蓄する古語の復活すべきものはなからうかと詮議してみました。私は自分でもあまりに古語の復活沙汰に執着し過ぎたことを知らない譯でもなかつたのですが、やるからには徹底的にやり通すのが、私の性分だものですから……」と言つてゐる。

以上に略叙して來た如く、日本の叙事詩は質量ともに貧しいものであつたが、種類から言へばいろいろのものがあつた。そして芽を吹きかけては、それに繼續すべき作品が出ないのであつた。それは詩語として韻文的な叙述に、いくらか泰西の言葉よりも不自由な點もあるかも知れないが、根本問題は民族的な熱情に乏しいためではないかと思ふ

叙事詩は殊に史詩の傳説詩であつたとき、それが最も民族的なものであつたからである。奔放長大な叙事詩を書く心持は、よしや鋭感な近代人と雖も所有してゐるものである。

日本の過去、現在、未來に對して、叙事詩として歌ふべき詩材は決して少くない。

叙事詩といふものを一種のロマンチシズムの運動として考へてゐたのであるから、明治四十年前後に於ける自然主義の現實的な運動の極盛期に際して、その内容からしても叙事詩は行き詰つたが、表現に於ても明治四十年九月から口語の自由詩運動となり、その詩形が散文化さるるに及んで、叙事詩と言ふものが全く影を絶つに至つたのである。

けれども詩をロマンテックのものと考へずに、廣い意味の詩の立場からすれば、叙事詩がその内容を史詩、傳説詩、現代詩、の孰れにもせよ、新しい叙事詩が生れなければならないと私は信ずる。

史詩、傳説詩に對しては現代の心を通じての解釋の下に作らるる場合に、無限の詩趣を感ずることが出來るし、現代を詩材とした場合にはプーシュキンの「エフイゲニ・オネーギン」のやうに、現世紀の惱みを長篇小説風の構圖の下に、奔放に歌ひ得るのである。最近の叙事詩の運動はその意味に於て新しく提唱されて來てゐる。

國境安別

北原白秋

安別沖まで

波なだりいやつぎつぎに重き冥む穂のみね厚し海豹の顔

名も知らぬ黄なる花むらなだり咲き目もあはれなり時化霧の隙間

凄まじく海ぞ荒れゐれ目じろがず人は乗り來る舟の舳の反り

砂濱

昆布食みて慧き鼠か長き尾の亂り走りぬ波裂くるとき

ぺんぺんとなづな實りて群れにけりとどろきくらき波なだり來る

海豹は頬の髭黄なり孔まろき白き頭骨となりはてにけり

鰊乾場

日の光薄き濱びの板びさし春の鰊は燻し了へにし

ヤントの黒き頭巾のふつかけ雨巡査は佇てり露の葉のかげ

濱びさし雨あちきなし紙旗の日の丸の紅も垂りにじみつつ

ふたつ眼の毛皮の[illegible]

夏、夏、夏、露西亞さかひの西の國の花じや赤いもの、ふりの[illegible]

夏もなか黄なる菜の花が明るなり北の日本のいやはての村

日のひかりいとど薄きを菜のはなのうらなく咲きて黄なりこの濱

菜のはなに藻くづ昆布の鹽じめば北の日本の春もいぬめり

鰊粕脂のり來る艀べや雨は沁ますてはねてちりをり

ななかまど

あかき實のななかまどといふ藪の崖小供飛びをり鳥のまねして

ぎやをと啼きまた擘縦がずどしやぶりの實のあかき木に海猫はゐる

天測點へのぼる道

玉ぼこの道つくりびとすがすがし路と萱とをそぎにけらしも

ぬかるみの新墾道（にひはりみち）の吹きあげ雨反（そ）り立つ路の裏しごきうつ

草高の栗鼠露うつ窓の音今はたしかに[illegible]にえし

國境標附近

熊ひとつ石のうらべに彫りにけりそなたに多き虎杖の花

雨、雨、雨、蟲くらひ葉の音繁きこの虎杖は露西亜領の花

椴松の霧たちかくす日の在處氣流の冷えがとみにし著し

この國境あまりにさびし椴松のうれを久しく雲はながれぬ

ひそかなる國の境や椴松に雲白うゐて郭公のこゑ

北樺太ピレオの村も寒むからし蝦夷松疎く雲こごり見ゆ

獵人のピレオ出て來る寒き影はたや向ひの尾に立つらむか

國思ふ心はもとなとどまらず雨はさ青の芒を流らふ

雨は小止み草山なだりさみどりなり日本の村へ一氣にすべる

小學校にて番茶を饗せらる

黄の花の鈴菜畠のさんさ雨鴎あがれりまろき眼をして

日本のいやはての北の小學校水蠟樹籬みて夏休らし

隆盛の大き目の額見つつ出てすずろに紅(あか)し虎杖(いたどり)の花

電信局にて

ワレラコクキヤウニアリ、むらさきの花じやがいもの盛りにうつも

じやがいもの花の香しるき頼信紙このふきぶりに濡らしけるかな

鑵詰工場は休みて商品陳列所となれり

雨しげき鰊乾場（にしんかんば）の賓のなづな國の境も見つくしにけり

こんこんとしみみふり積く夕ごころそは蚊帳にきこゆるこゑ

うらさぶしうらさぶしとを選りゐたり烟鰈の黄の腹の焦げ

端舟に乘る頃

夕づけて遊ぶ童(わらべ)の寄りどころ蟹の甲羅の朱(しゆ)も古りにけり

時化(しけ)後(ご)の海ひたくらし向ひ立つ女(め)の子(こ)がふふむほほづきの音

冬籠

古泉千樫

寒ければ朝寝はしつゝ日々の飲食の時も定まらなくに

冬の日の今日あたたかし妻にいひて古き硯を洗はせにけり

寒の水にしづかにひたす硯石蒼き匂ひのいさぎよくして

こがらしの風吹きすさぶ障子のうち咽ゑごくしてひと日暮れたり

山房の夜中

齋藤茂吉

みちのくに雪解のみづのとどろくと告げこし友を我はおもはむ

われひとり眼みひらく小夜ふけに近くをとほる兵の足おと

さ夜ふけて春の夜ふけしひもじさに乳のあぶらを麺麭にぬりつつ

とりよろふ青野を越えてあゆみつつ神死したりといひし人はも

赤彦はいまごろ痛ふかからむ赤彦をしましねむらせたまへ

椿と浪

若山牧水

静かなる椿の花よ葉ごもりに咲きて久しき椿の花よ

ひともとの野なかの椿枯草のすさまじきなかのひともと椿

枯草のおどろがなかにひともとの椿かがやく葉は葉の色に

ひと枝の椿の花に寄りて行くわらべ等の見ふ[illegible]ぎくれ

わらべ等よとるな椿をわが部屋ゆ見ゆる冬野の共處の椿を

からみたる野の草枯れてひともとの椿は花のいよよ咲くなる

闇の夜とおもふ夜ふけの廂うつこよひの雨の親しくあるかな

しぐれの雨いつしかやみて靜かなる宵とおもふに浪の音起る

今宵立つ浪のとよみは高くあがらず地をつたひて聞え來るかも

親しさよ今宵の浪のとどろきは地にこもりて聞えたるなり

牀上漫吟

島木赤彦

二月十二日病宜しからず。東京より信濃に歸る

信濃路に歸り來りてうれしけれ黄に透りたる莖漬のいろ

神經の痛みに負けて泣かねども夜毎眠られねば心弱るなり

風呂桶に觸らふ我の背の骨のいたくも我は痩せにけるかな

火箸もて野菜スープの火加減ををり〳〵見居り妻の心あまし



活死人

露伴學人

既に宗教と云はゞ、其光まさに六合を被ひて餘り有るべし。或は神仙と稱す、其道かならず千古に亘りて亡びさらん。然るに宗教の光も亦時に隨ひて明滅し、神仙の道も亦世に伴なひて興廢するこそおもしろけれ。

宋の德漸く衰へて、大駕南に渡りし頃より、天下の形勢は風に似て動いて定まらず、宇内の山河は瓜の如く分たれて完きこと無し。遼といひ、金といひ、夏といひ、元といひ、各一方に虎踞して、將に中原に龍鬪せんとし、或は退き或は進み、或は熾んに或は熄えんとすと雖も、其志皆おのれを固うし他を壓し、人を制し己に奉ぜんとするに在り、尊俎の折衝、旌旗の往來、紛々擾々、已む日を知らざらんとす。

此時に當り、世運既に安からず、人心も亦異を思ふ。漢唐の學は夙く替りて、周程の說漸く起りしより後、林靈素の

詭秘の言は徽宗の代に興りて徽宗の代に敗れたれども、朱子の性理の論は孝宗の時に發して寧宗の時にも爭はる。これは是れ南方士人の間の事に屬すれども、北方庶民の裏にも、亦信仰の新に起り、思想の更に萌えたるあり。元興りて、西海の帕克斯巴(パクスパ)の國師と尊まれてより、佛教の大に隆んなりしは言ふまでも無く、又江西の張宗演の銀印を賜はりて、道教の小しく康かりしも語るを須ゐざることとなるが、此等を外にして金季元初に崛起せるの教門三。一は金眞教なり、一は眞大道教なり、一は太一教なり

眞大道教は金の季に當りて道士劉德仁の立てし所なり。其の教旨詳しく知り難しと雖も、元史の記するところに據りて之を窺ふに、苦節危行を以て要と爲し、妄りに人に取らず、苟も已に侈らざる者なりと有れば、身を苦めて道に據り、是非を外に絕ち、人我を緣に忘れんとするものにして、少しく我が法華の別派の不受不施の流にも似たるものならん歟。聲聞辟支の氣味あるを免れずと雖も、亂離の世に在りては自ら守るに適すといふべし。德仁の時に教名ありしにはあらず、五傳して酈希誠といふに至りし時、元主の知るところとなりて教名を賜ひ、諸路の道徒を轄べしめたりといふ。此一派二三傳して張志法といふに至り、其人志操清高、其教大に振ひ、時の人其風を高しとして謂いて圖を爲して以て相傳ふるに至りしといふ。

太一教は金の天眷年中といへば、彼の岳飛未だ殺されず、我が西行[illegible]

自分を人家に行ふに足るとなすものなり。昔の時の[illegible]、今[illegible]
の佛教の徒も亦これを作る。支那の佛の道家の法術を採みて俗に媚ぶるに學ぶなり。佛法印度に出で、曾に[illegible]富む
に似たるの符字有らんや。今の佛經中、間々符字を載するものあり。道佛互に參ひ相援ひ、笑ふ可きのみ。茲道士太一
三元法籙の術を傳へしと云へば、思ふに息災消病等の符を與へて、民庶をして之を信賴せしめしならん。抱朴より四傳
して蕭道に至り、世祖の知るところとなつて、弟子李居壽をして太一宮を兩京に建て、之に居りて祠事を領せしめらる
ゝに及べりと云ふ。符籙齋醮の道を主とす、其の教旨、猜して知るべし。

眞大道教と太一教とは、殆んど言ふに足らざるなり。而して劉蕭二道士の著はせるところの書、始より有る無きか、或は既に泯びて傳はらざるか、予未だ得て寓目せざれば、之を論ずる能はざるなり。たゞ全眞教に至つては、其の根柢必ずしも淺からざるに似て、其の影響も甚だ小ならざるを見る。文獻も亦徴す可き有りて、予の寡聞なるだに、猶數十卷册を涉獵して、其の大概を知る。況んや其の教祖の、莽々蕩々として、埋沒阻閼す可からざるの意氣精神あり、其の教徒の各々一氣骨あり、一風韋ありて、蹄を擧げ塵を絶ち、鰭を振ひ浪を揚げ、駿馳魚游、欲する所に長往するの跡、人をして是の如きの時、是の如きの人、是の如きの情有り、是の如きの事あるべきを想はしむるに足るものあるをや。予嘗て仙人呂純陽を談りぬ、乃ち今聊か王重陽等を談らんとす。神仙の事、吾が邦人の之を道ふ者鮮し、其の聞くこと稀なるの故を以て、予を目して虚に憑り妄を談ずるものと爲すこと勿れ。

元の文宗の至順年間、古汴の鍾嗣成、新編錄鬼簿二卷を撰す。後の元の雜劇を談ずる者の必讀の書なり。中に馬致遠の作るところの劇十二種の目を擧ぐ。致遠は大都の人、東籬と號す、江浙行省務官たり。元の劇の作者中の大家にし

て、關漢卿と名を斉しくす。嗣成が擧ぐるところの致遠が作十二種中に、王祖師三度馬丹陽の一篇あり。馬丹陽の一篇四折、幸にして今猶ほ世に傳はり存す。曲中の王祖師は即ち王重陽にして、其の全眞教の開祖たるを以て祖師となせるなり。馬丹陽は即ち重陽の嗣法者となりし馬珏にして、丹陽は重陽の授けしところの稱なり。曲中に叙するところの、重陽三たび丹陽を度する談は、作者の任意に作爲捏濫せるにあらず。當時傳へて以て實と爲せるの事に據れるのみ。元劇は大抵人の周知するところの事蹟に本づきて筆を馳せ曲を度す、王馬の談の人の口耳に在るにあらずんば、東籬何ぞ敢て此曲を結撰せんや。

王重陽は宋の徽宗の政和二年、即ち女眞の帝を稱して國を立て、金と稱するに至れるに先だつこと三年、徽宗の詔して道經仙記を求むるの前年、十二月二十二日を以て生る。李道謙の七眞年譜の記すところ是の如し。蓋し異説なし。唐の仙人呂洞賓の生日の確徴す可からざるが如きにあらず。北平王粹の撰する所の傳に云ふ。全眞祖師王嚞字は知明、重陽子と號す。京兆咸陽の人なり。世々貲産を以て姓著はる。後に終南縣劉蔣村に遷る。其母異夢に感じて而して娠む。二十四月に及んで乃ち生る。始の名は中孚、字は允卿と。開府儀同三司上柱國密國公金源璹の撰する所の終南山神仙重陽眞人全眞教祖の碑に曰く、眞人名は嚞、字は知明、咸陽大魏村に應現す [illegible]孕むこと二十四月[illegible]

重陽の生れしより壯に至るまでの間、聞くところ有る無し、たゞ是れ幼にして仕進を事とし、今一たび二十歳前後に、凡童と異なること無かりしならむ。弱冠にしては進士の擧業を修め、京兆府學に籍せしが、才學未だしきにあらざるところも、記すところ無し。これも赤霄常一樣の擧子の境遇、道ふに足らずとすべし。時に金起りて國を併せしより二十餘年、武隆んにして、陝西の地も其の收むる所となり、英豪の士は用ゐらるゝを獲しかば、是に於て重陽も文場の試を思ひ斷ちて、武擧に應じて雄飛せんことを欲し、自ら名を德威、字を世雄と易へたり。既に文に成る能はず、乃ち武に立たんことを思ふ。これも赤霄常一樣の爲す有らんとする者の態度、奇とするに足らずとすべし。名は德威、字は世雄、何ぞ其の名字を撰ぶの堂々たるや、其志も以て知る可し。德威時に年二十七、驕髯漸く美はしく、目は口より大に、一表の人物、看來つて俗ならず、身の長六尺に餘り、膂力人に過ぎ、豪氣雄爾、おのづからに衆を厭す。されども天の此人をして世間に志を得て、青雲朱紱、榮華を樂みて身を終らしむるを欲せざるか、此人の傲骨昂々屈す可からざるもの有りて、世と相俯仰する能はざるより、簪花登龍の運を得るに至らざるか。文武の道、兩ながら塞がりて通ぜず。年三十前後なるべし、遂に慨然として世を棄て道に入らんと欲するに至れり。蓋し此心を懷くに至れる所以の者、一には其の性質の豪爽にして、世塵の埋沒する所となるを背んずる能はざるに出で、二には秦隴の地、廢齊（劉豫）事を擅し、紛擾紊亂して、民は堵に安んぜず、中原湖北、天下到る處亦多難にして治らざるの世に際し、外を卑しみ内を尊み、嗒焉として獨り嘯き、飄然として孤往せんと欲するを免れざるに出づ。之に加ふるに虛無靜寂を宗とするところの道教有緣の地に生れたるもの、又其の出塵脫俗の念を助けずんばあらず。

道教有緣の地とは何ぞや。重陽の生地咸陽大魏村即ち是なり。西は秦隴より起りて、東は臨川に徹するまで、雍といひ、岐といひ、郿といひ、長安といひ、凡そ其距離八百里が間を、連綿蜿蜒として其南に峙ち亘れる者を終南山とい

ふ。終領といへるものは即ち是にして、重陽の詩中に數々地肺といへるものも亦即ち是なり。重陽が生れたるところ長じたるところは、特に終南の主山に近々と接し居りて、明けぬ暮れぬに看るところのもの此山の翠色ならざること無く、雨に晴に望むところのもの此山の雲氣ならざること無し。此山は即ち孤域の名山高峰も數多きが中に、最も道敎に因緣深きものにして、茅山廬山華山嵩山羅浮山大和山峨眉青城龍虎等の山々にも勝りて、人をして古を懷ひ今を感じ、道を思ふの念の油然として起るを遏むる能はざらしむるものあるべし。所以者何となれば、道敎の本づくところは、老子道德經五千言にして、道德經は實に此終南山に於て著はされたればなり。終南山說經臺碑記に據れば尹喜字は公文天水の人、少くして學を好み、天文秘緯を善くし、大度恢傑、德を隱し仁を行ふ其後山水を涉覽し、雍州終南山盩厔縣の里中に於て、草を結んで樓を爲り、至道を精思す、周の昭王二十五年癸丑、東方より紫氣西に邁くを瞻て、聖人有りて當に京邑を過ぐるべきを知り、乃ち出でゝ函谷關の令と爲ることを求め、以て之を物色せしに、其年七月甲子、老君關に到る。即ち朝服を具して出でゝ迎へて、令に就かしめ、座を設け、北面して之に事へ、遂に疾と辭し官を退き、其年十二月を以て、老君を迎へて終南の本第に至り、齋戒して道を問ひ、復書を著して後世に惠まんことを請ふ。老君乃ち道德五千言を述べて之を授け、明年甲寅四月二十八日、宅南の小阜上より、雲に乘じ共に紹し、升つて太微に入る。尹喜これより遂に草樓に於て、人事を屛絕し、清修三年、心凝り體釋け、道の妙に至るを得こ

公度、喜の弟子杜沖、沖の弟子彭宗等數十人も皆樓觀に依止して道を[illegible]は裏碑の末に記して曰く、樓觀は天下の道林の張本の地たり。文始（尹喜）上昇よりの後、[illegible]世として[illegible]無きは無く、諸仙史を閱すに、一にして足らず、始め太和の尹君（尹通）別に樓觀先師の傳を晉に作り、次には則ち[illegible]法師（韋節）之を後周に述べ、末には則ち尹尊師文操之を唐に續ぎ、合せて三十人、各一列傳して書を爲す三卷、世に垂ること久しと。終南山は是の如くにして、老子說經の處、道敎發生の地たるのみならず、又尹喜の故宅、結草の一樓は、天下宮觀の祖たるのみならず、又文始眞人以後、修道成仙せるもの、數十人を出し、のみならず、山中の宮觀は、歷代帝王の崇敬尊仰ありて、葺補時に加へられ、修築數々起さるゝ所となりたるなれば、耳目ある者の之を聽視せざる無く、文字ある者の之を讚歎せざる無く、閭里の翁媼、村落の芻蕘も之を噂稱話談せざる無かりしなるべし。終南の主山は、咸陽の南、西安の南西に當り、澇水、甘河等、皆これより出づ。重陽の居は甘河の附近に在り、窗牖窓外に山を望むべく、嵐光翠氣は堂に入るべし。文擧武擧皆志を得ず、仙風道風當に懐を誘ふべし。重陽が世を捨て道に入るもの、故無しとせんや。

終南は又佛敎に甚深の因緣有り。都穆の終南山記に徵するまでも無く、山麓の興敎寺に三塔有り、其中の一の特に高大なるものは、天竺に遊ぶ十七年、歸つて唐の太宗に御弟として優遇せられ、一代の宗師として、翻經布說、大威力を發揮したる玄奘三藏埋骨の所と爲す。其左は雄豪の資、玄微の學、後人をして舌を卷かしむる玄奘の弟子窺基の塔たり。其他羅什三藏、杜順、宗密等幾多名僧高德の蹟あり。此等もまた重陽をして感を發し思を致さしむるの因たらざらんや。重陽後に神仙の道を成して、而も佛を斥けず、其の詩詞の中に佛敎の氣味甚だ多く、且つ玄奘の譯出したる般若の精髓たる心經を取りしもの、奚んぞ微密の因緣の潛牽幽引する無きを知らんや。

笑へば笑ひ、語れば語り、食へば食ふ。都て是れ二人にして一人、一人にして二人なり。重陽これを見て愕然として駭き、凝然として思ひ、心に其の必ず是れ人間の人ならずして仙中の仙たることを悟り、乃ち二人の去るに從つて幽僻にして人無き處に至り、虔み禱りて禮を作し、敎を乞はんと欲す。二人徐に言つて曰く、此子敎ふ可しと。重陽欣んで就いて語り、仰いで瞻るに、二道者は眞に是れ煙霞の態度、宵漢の精神、其言は皆塵を滌ぎ垢を滌ぎ、骨を刮き盲を剔り、醉ふが如くにして醒め、瘖の如くにして鳴る。遂に秘玄の旨を授け、修養の道を傳ふ。栖楳道人の金蓮正宗記には、王害風の名を嚞、宗を知明、號を重陽子と爲せるものは、此時二道人の命ずるところに出づと爲す。言旣にして畢り、道人東方を指して曰く、汝何ぞ之を觀ざるやと。重陽首を回らして望めば、空中に七朶の金蓮の子を結ぶを見る。道人曰く、何をか見ると。答へて曰く、七朶の金蓮の子を結ぶを見ると。道人笑つて曰く、豈たゞ是の如きのみならんや、將に萬朶の玉蓮有つて芳ばしからんと。言訖ひつて忽ち所在を失ひたり。

これより重陽いよ〳〵狂顚して、復世間の是非、人事の價値あるを思はず、動靜語默、皆己の欲する所に從ひ、不攜直往、破衣短褐、飄々として丐行し、踽々として露宿し、漸く眞の害風漢となりぬ。當時重陽の作るところの詩、遇師と題するもの一絕、全眞集に載す。曰く、

四旬八上　遭逢を得たり、

重陽一道人に遇ふの事、畢竟是れ何を語るものぞや。余[illegible]く、其の[illegible]の者は、[illegible]に

予嘗て之を論ず。世相傳ふ、純陽は唐の人、道を鍾離權に學んで仙を成し、永く世間に遊行して人を度すと。宋の時に於て純陽數々世に現はるゝの談有り、明清の世に於ても、猶ほ時に世に降臨すとせらる。重陽に現はれしもの、果して呂仙人なるか非耶。蓋し別に人有つて被髮の一道人の清風に現はれしを見る有るにあらず、誰か一道人の果して呂仙人なると呂仙人ならざるとを辨ぜんや。又誰か果して一道人の重陽に現はれしを併せて其の實事なると假說するとを辨ぜんや。抑又異人の重陽に現はれしの事の、たゞ是れ重陽の主觀中の事なるか非なる耶を知らんや。然も亦世おのづから傳異の道を傳へて、光を和し塵に同ずるの隱士無きにあらず、重陽の遇ひしところの者、此等の人にあらざる無き歟、是れ亦尋常の見を以て概論す可からざるものあるなり。重陽遇師の詩を讀むに、其の傳受するところの者、金丹の道なるが如し。金丹の道は淡よりして傳へて今に至る。其道幽渺知り難しと雖も、歷代の眞仙、皆之を修め之を證して、而して後に生死を超え、玄妙に入る。淺俗の士、箇中の消息を窺知する無く、妄りに意を以て測りて、世豈に鍊丹の術有らんやと云ふ。然りと雖も其道の頭緒有りて執る可きを覺え、符驗有りて信ず可きを思ふにあらずんば、歷代の高明にして學有り識有るの士の、肯て世を謝し家を棄て、妻を遣り子を遺れて、丹爐鉛汞の事に苦心すること有らんや。金丹の道は、予將に別に論ずる有らんとす、今急に之を詳に言ひ難しと雖も、要するに一道潜傳して、亡びざること千有餘年、今猶ほ考ふ可く徵す可きもの有る也。重陽の遇へるところの一道人の果して呂仙人なると呂仙人ならざるとに論無く、又たゞ是れ重陽の主觀中の事たると否とに論無く、蓋し重陽四十八歲、正隆四年六月望日に於て始めて感發悟得するところ有りしなり。但し重陽が披髮の道人を目して呂純陽と爲ししは掩ふ可からず。重陽の[illegible]集中に、

題せる詩あり、曰く、

□來り　月往き　愈〻身輕し、
□是れ　雲車　穩にして又平なり。
□目　怎でか知らん　雲水の貴きを、
□仙　相聚まり　氣神榮ゆ。
□牛の運用　人　鑒し難く、
□虎の咆吼　我に聲有り。
□遠に是非　心　道を樂み、
□先勝地　淸明を賞す。

此は是れ藏頭の格といふものにして、七言の詩の毎句の頭一字を示さず、人の猜做に作すもの。第五句第六句は正に是れ丹道の話にして、馬牛の運川、龍虎の咆吼、本皆虛誕妄語にあらず。此篇重陽の作るところの者の如し、然れども或は疑ふ是れ披氈の道人の王重陽に贈るものにあらざる無きぬを。又純陽眞人の韻に和すと題せるもの一篇あり。純陽眞人と云へば、是れ呂純陽なること知る可く、韻を和すと云へば、純陽が王重陽に贈るの詩有りたること知るべし。乃ち知る重陽が純陽に遇へりと爲すの事の

□生　日沒　往くこと千々。
□年　修煉して　方に且に歸し、
□日　□成　自ら恍然。
□裏の白蓮　今巳に見はる、
□神　正に得ん　大難の側。

火裏の白蓮も亦是れ丹道の語、今巳に見はるといふ其意知るべし。

此の甘河鎭遇仙の時に前後して、重陽其兄を亡ふ。集中に、兄死作の一絶句あり。曰く、

人々　只會す　家親を哭するを、
誰か肯て　能く哀まん　自己の身を
若し　己が身を把つて　哀み得て働かば、
無生の路上に　閑人と作らん

其の當時道に進んで前後左右を忘るゝの狀想見すべきにあらずや。自詠と題せる行香子の詞に、

箇の王三有り、風害狂顚。

の句あれば、重陽は蓋し王家の第三子なりしなるべし。重陽が家庭に於けるの狀は、諸書明記せずと雖も、其の悟眞歌を讀みて、略々知る可し。歌に曰く、

余九歲に當つて　方に事を省す、
祖父年を享くる　八十二。

二十三上　榮華の日、
伯父　享年　七十五。
三十三上　婪耽を覺ゆ、
慈父　享年　七十三。
古今　百歳　七旬少し、
此の遷滅を觀る　怎で當に甘んずべき。
三十六上　寐中に寐ぬ、
便ち要す　分つ他の兄の活計を。
豪氣　天を衝き　意情を恣にす、
朝々　日々　長く沈醉す。
幼を厭し　人を欺き　歲時を度り、
兄を詬ひ　嫂を罵り　天地を慢る。
家業を修めず　身を修めず、
只作す　他の恣しく富貴なるを望むに

一分は喫茶し　一は酒に買ふ
他母（母は華に同じ）の衣欲　全く知らず、
余・酒錢を遺して　災禍を記く。
四十八上　尚ほ強を爭ふ、
爭奈せん　渾身　祭詐を做す。
忽爾一朝　便ち心破れ、
變じて風害となり　風狂に任す。
慴れず　人々の　長へに恥笑するを。
一心　三光の照を昧ますを恐る。
慮を靜にし　思を澄まして　己身を省み、
悟り來つて便ち妻兒を把つて掉つ。（下略）

此歌に據つて知る、重陽が九歳にして祖父を失ひ、二十三にして伯父を失ひ、三十三にして父を失へることを。又知る重陽は父の四十歳の時の子なることを。又知る三十六にして兄に需むるに資産を分ち與へんことを以てし、既に資産を得て後は、任意任情に生活して、酒を喫して日を送り、心に滿たざる有れば兄嫂を詬罵し、勢に乘じては人を侮り他を壓し、勤勉して產を治むることを敢てせず、徒らに他の富貴を羨み、自己の財產を蕩盡し、妻子をして怨恨せしめ、終に家を賣り田を賣り、又之を酒肉に費し去り、妻子の困窮を省みず、四十八歲に至りて猶ほ意氣を負へども、既に如何ともする能はざるに及び、忽爾として道心を發し、甕直に入道して、妻子を棄つるに至れるを。

何ぞ　頓に　俗海を抛つて　猛く浮囂を悟らざる。
好し　霞を碧嶠の前に餐ひ、
堪へん　氣を松峰の下に煉るに。
造化を　斡旋し、
陰陽を　反覆し、
列宿を　九鼎の中に燦たらしめ、
萬化を　一壺の内に聚めば、
千朝　功滿ちて　名は仙都に掛り、
三載　殷勤にして　永く萬劫を鎭せん。
恐る　爾の來ること遲くして　身の泉下に沈まんを。

其二の前半に曰く、

莫れ、樽酒を將ゐて浮囂を戀ひ．
毎に鄜中に向て腰を繋がるゝを作す。
龍蛇動く時　[illegible]

的として丹家の秘なり。重陽之を求むること數過して、方に[illegible]と。即ち之を火中に投ぜしめ、且つ曰く、功成らば速やかに東海に往け、[illegible]中に一[illegible]有り、[illegible]と。言畢つて忽ち所在を知らず。

道者は何人ぞや。正宗記には、漸极永榮、是れ居る所といひ、密國公の撰する所の碑には、濮の人と云ひ、二文に指年二十二と云へりと記す。其人其事、尋ぬ可きが如く、尋ぬ可からざるが如し。畢竟悠謬の談、朦朧の事、問ひて之を論ぜんか、所謂癡人の前に夢を說く可からざるものなり。假令論究し得て、微に入り細に入るも、味者永く瞶々、論ぜずして之を混沌懵侗に附するも、達者既に了々たるもならん。

重陽是に於て修眞の念忩々振ひ、全く復世事を顧みず。幼女を携へて姻家に送り、其の生育婚嫁を舉げて之を委ね、家を出で妻を棄て、自ら重陽子と號して、始めて眞の道人となりぬ。其翌金の大定元年、重陽年五十、異人に遇ひて心機一轉してよりの第三年、終南山の南時村といへるところに、地を堀りて土窟を作り、其中に安居して、寂寞として世と相絕ちぬ。一は資財既に乏しくして、屋を葺き室を構ふるの力無くなりたればなるべく、又一には一切を屏謝して、全く世俗の因緣を斷絕せんと欲したるなる可し。然れども眞の目的は、唯此の一條のみにあらざるなるべし。蓋し古より道を體し眞を證せんとする者、大抵皆獨自一個の心、獨自一個の身、獨自一個の性命、獨自一個の精魂を以て、直ちに宇宙に當り、緊しく古今に對せんと欲す。故に或は土穴に潛み、或は石窟に坐し、或は曠野荊棘、人の終に到る無き處に飄浪し、或は深山幽峯、鬼も亦居らざるの地に玄默す。釋迦の山に於ける、基督の野に於ける、マホメットの洞窟に於ける、皆純粹の全獨自一個を以て、蕩然湛然と時間空間に直面し、我の由つて來るところ、我の去つて往くところ、我のこゝに立つところを觀、智といふも未だ盡さず、情といふも未だ眞ならず、意[illegible]

を以て、器世間非器世間未分の境に入り、或は人と境と時と、三亡一存するの地に出で、眞に人我天地三世の源頭に立ち落處を得んとす。是に於て食を斷たんと欲するに非ず、食もおのづから斷え、坐を靜かにせんと欲するにあらず、坐もおのづから靜かにして、眼も見ると見ざるとを知らず、耳も聞くと聞かざるとを忘るゝに至るなり。是れ學問思辨、指擬忖度の事にあらず、學問思辨、指擬忖度の到る能はざるところに到らんとするなり。因緣和合、飲啄笑哭の邊にあらず、因緣和合、飲啄笑哭の管せざるところを管せんとするなり。古の道人輩、根器に大小あり、淺深有りと雖も、皆此處に於て、乾坤混沌、陰陽未分以前の消息を探り、日月は壞盡し、金石は灰飛する以後の光景を搜る。孔子は人世の聖なるも、猶ほ祈禱するの言あり、祈禱とは何ぞや。莊子は山野の賢なるも、猶ほ心齋の說あり、心齋とは何ぞや。牛頭の懶融、石室に枯坐すること年有りて、五祖の點破するところとなるは、世の禪を談ずる者の喋々するところなるが、志有る者の人を避けて岩竇に居る、ひとり懶融のみならず、もとより甚だ多多なるなり。重陽の土窟に在る、又何ぞ異とするに足らんや。

　重陽の俗を離れて窟に入る、もとより復徒に空しく地上に出で日下に遊ぶを欲せず、得る無くんば斃れて而して已まんことを思ふ。故に自ら土窟を視て以て、身を横たへ骨を埋むるの處となす。されば此を目して家と爲さず、此を觀じて以て墓となす。自ら墓の側に高さ數尺の塚を築き、上に一方牌を掛け、牌上に王某靈位の字を寫す。墓の深さ丈餘、長
物を置かず、

水雲 別に是れ 一偈語。
道名は 喚んで作す 重陽子と、
諱號は 稱して爲す 沒池埋と。

又曰く。

活死人兮 活死人、
行果を談ぜず、因を談ぜず。
墓中 自在にして 吾が意の如くし、
占め得て 逍遙 六塵を出づ。

又曰く、

活死人兮 活死人、
公の與に 今日 洪因を說く。
墓中 獨り死するは 眞に嘉話、
枕を並べ 棺を同じうするも 悉く塵と作らん。

又曰く、

活死人兮 活死人、
活中に死を得るは 是れ良因。
墓中 閒寂として 眞に虛靜、

隔斷す　凡間　世上の塵。

又曰く、

活死人兮　活死人、
害風は　便ち是れ　我が前因。
墓中の這箇の眞消息、
水を出づるの白蓮　肯て塵を惹かんや。

又曰く。

外人は識らず　裏頭の人、
門より喚出し來らば　此の因を得ん
明月　淸風　我を笑ふを休めよ、
這回　倆に似て　紅塵に遠ざからん。

此類の詩數十首、皆當時の口號なり。又述懷の詩數十首有り。一に曰く、

紫鹽　芝甲　始めて先づ萠ゆ、
採り得て來る時

修持　如し金丹を鍊るを得たらば
只要す　眞鉛　水性の全きを。
請ふ看よ　崑崙　山上の景、
碧霞　光彩　粲川に接す。

又曰く、

瑶地　裏面に　黄芽を看る、
瓊蘂　金枝　玉花綻ぶ。
朶朶　玲瓏　清氣上る、
玎璫たる清韵　吾家に屬す。

又曰く、

驀然として提住す道の元初を、
幻化　方に知る　余に屬せざるを。
一箇の光明　眞了了、
五般の彩體　目如如たり。

其意大抵自ら策進するか、人の永く惡趣に墮するを哀むか、或は又微しく丹家の消息を露はすに在り。乃ち知る重陽が墓中に在りて爲す所の事、坎離龍虎、結丹養胎の工夫に他ならざるを。
墓中に在ること大定元年より同三年に至る。道蓋し成る有りて、大定三年、重陽年五十二の秋、活死人の墓を出で。

一（活死人）一

之を塡め夷らげて、劉蔣村に遯り、茅を結んで焉に居る。時に和德璉といふものあ輸槊を攻め、長じて刀筆の吏と爲る。心を存する敦厚、高人勝士に遇へば、就いて道に參せさるなし。天德年間が二道者に會ふに先だつこと十年ばかり、部條の川身を以て、方に官途に游仕せんとしけるに、忽ち一道者ありて門に過ぎりたり。德璉延いて家に至り酒を酌み玄を談じけるに、大に其意に適ひ、少らくして去りたり。其後の日に道者復至り、臂に一梟を繫げ居けるが、德璉に謂つて曰く、此物かくの如く大眼なりと雖も、終に人を識らずと。德璉乃ち異人たるを思ひて、因つて其の鄕里姓名を問ふに、答ふることも無くして去りぬ。後に月餘にして道者復來りて、德璉が家に止まりしが、身厲疾に染みて、膿血汚穢、殆ど近づく可からず。德璉爲に醫を招き療治するに、百藥も功無くして、歲を經て乃ち死したりしかば、禮を備へて葬りぬ。又數月にし一老媼あり、門に詣りて泣いて且つ告ぐるやう、老身たゞ一兒有り、雲水を嗜みて、家業を事とせず、近頃貴宅に淹居せるを聞きて、特に來りて相尋ぬと。德璉其の既に死したるを告ぐれば、老媼慟哭して已まず、老身と兒と、たゞ是れ二人、兒今既に死す、吾が身を如何にせんといふ。德璉已むを得ず、請うて母の禮を以て之に事へけるが、一日老媼泣いて訴へて曰く、吾一たび壙を啓きて吾兒の面を覩んと欲すと。告ぐること再四、德璉も情之を禁むるに忍びず。終に是非無く其塚を發きけるに、但空棺有りて屍有る無し。愕然として視るに、秘旨一幅有り。顧みるに老媼も亦所在を失ふ。德璉駭き嘆じて曰く、吾今眞仙に遇へり、尙永へに塵中

點化せらる。其使宵貫聞道の念を萌ち、處有に徧作して、道を以つて日に[illegible]
人共名を知らず。重陽も亦重陽の道光外に發するを見て、就いて共に居り、錦衣の昆の學に於て、[illegible]を
受く。師第三人一庵に同居し、乞丐して日を度る。元の雲峯寺の僧[illegible]道者はすとこへの拝傳録後三に、王重陽大全[illegible]
を興せる當初の狀を記して、大衆三人より聚まらず、誰は二屋より備へずと云へるものは、蓋し誹謗の言に非ず、事蹟
正に然る有る也。玉蟾重陽二人の事を記するは、祖庭内傳に據る。重陽等三・同居の處は、即ち後の祖庭鎭の重陽萬壽
宮是れなり。

大定は四年に至りぬ。重陽時に年五十三。重陽一日甘河鎭より酒一壺を携へて庵に歸らんと欲す。道に一先生あり、
叫んで曰く、害風、肯て我に酒を與へて喫せしめんや否やと。重陽拒まずして之を與ふ。先生一飲して盡し、卻つて重
陽をして壺を以つて河水を取らしむ。乃ち河水を取つて先生に奉ずるに、先生笑つて曰く、汝之を飲めと。重陽其言に
從つて之を飲むに、水にあらず、酒なり。目を擧げて先生を視るに、先生曰く、儞劉海蟾を識るや否やと。重陽曰く、
但肯つて畫像を見るのみと。先生笑つて去つて之くところを知らず。是より重陽復酒を飲まず、但水を飲むのみ、而し
て醉容有り、口中酒香を作す。重陽の酹江月の詞に、

　正陽的祖、
　又　純陽師父、
　修持　深奥。
　更に、眞箇有り、唯是れ　叔　海蟾、
　同じく三島に居る。

の付あるもの、海蟾に値遇するに因る。又重陽が虞美人の詞に、

害風　水を飲む　知りぬ多少ぞ、
此に因り　玄妙に通ず。
白麻の衲襖　布の青巾。
好模　好樣、
眞個に好精神。

とあるもの、飲水待酒の事ありしに因る。虞美人詞の註、詳に當時の事を記す。重陽の酒を飲まさるに至るや、不飲酒と謂するの一絕有り、曰く、

醒め來つて飲まず　瓶中の酒、
逢して後　別に傳ふ　物外の杯。
衒ふ莫れ　向雲　隨處に有り、
自然に　歩を擧げて　蓬萊に到る。

酒を嗜むの重陽にして酒を飲まさるに至る、眞に是れ逢後別に傳ふ物外の杯なるものなり。酒は元是れ水中に火を藏するもの、人此の

る。もとより玄門の巨頭なり。名は操、字は宗成、燕山の人、年十六にして、明經を以て甲科に擢んでられ、燕主に仕へて丞相に至る。道を愛し命を談ずるも、未だ其妙を得ざりき。一日道者有りて來り謁し、姓名を問へども敢て答へず。但自ら正陽子と稱す。乞ひて金錢一文、鷄卵十枚を得、金錢を案上に安き、高く十卵を累ぬ。海蟾これを見て、驚嘆して曰く、危い哉と。道者曰く、相公の危きこと更に此より甚しと。海蟾頓悟して、棄世の意を發し、遂に印を解き官を辭し、佯狂歌舞して家を出で、衣を易へて卑賤に處り、形を辱しめ跡を埋む。當時の一聯に云ふ、

拋離す　火宅の　三千口、

屏去す　門兵　百萬家。

と。其後遠く秦川に遊びて、眞を太華の前に陶し、身を終南の下に遁れ、精を養ひ氣を煉りて、復前次の道人に遇いて丹訣を受け、正に是れ鍾離正陽なるを知り、以て眞を成する至る。忽ち一日代州壽寧觀に於て墨水を以て潑して、龜鶴齊壽の四字、およそ一丈餘なるを成し、幷に自ら眞を其間に寫し、又西蜀成都の青羊宮に於て、墨水を以て潑して淸安福壽の四字を成し、代州鳳凰山來儀に於て壽山福海の四字を成し、三處相隔たること、啻に數十里ならざるに、皆同日にして之を書し、以て神變無方なるを表し、世俗を警醒して、世に神異有るを知らしむ。顯はすところの蹤跡甚だ多し。黃凝陽、張紫陽は卽ち其の直授の弟子にして、紫陽の悟眞篇は傳へて今に至り、玄門の秘旨、長く惠を來者に貽れるものなり。海蟾其の終るところを知らざるも亦是れ終南に隱る。重陽の遇ふところ實に此人と爲す、海蟾を目して道門の叔と爲す所以なり。海蟾後に元の武帝に封ぜられて、正大三年、明悟弘道純佑帝君となる。其の著はすところの至眞歌一篇、今猶ほ泯びず、意旨深切、詩詞淸亮、道を學ぶ者之を稱す、

翌大定五年・重陽終南の上淸太平宮に遊び、宮の壁上に書して云ふ、

一活)

死

一(人

害風　害風　舊病發す、
壽命は過ぎず　五　十六。
兩箇の先生　決定して來り、
一靈の眞性　搜𠝏を成さん。

同じく六年、重陽年五十五、長安の櫟村の呂道人の庵の壁に書して曰く

地肺の　重陽子、
呼んで爲す　王害風。
來る時　日月　長く、
出る後　西東に任す。
伴を作す　雲和水と
鄰を爲す　虛と空と。
一靈　眞性　在り、
衆心と與に　同じからず。

故に弟子徒等に告げて曰く、[illegible]、吾將に世を逝らんとすと。因に[illegible]として[illegible]。[illegible]る者なり。當時一禪師評して曰く、坦山死に臨んで猶ほ小兒を哄すと。重陽の道既に成り、機遂に發す、大定七年、四月二十六日、自ら其庵を燒く、近鄰爭ひ來つて火を救はんとすれば、重陽の婆娑として其間に舞へるを見る。人其故を問へば、答へて曰く、三年の後　別に人ありて修築せんと。乃ち詩を吟じて曰く、

茅庵　燒了して　事　休休。
決ず有らん　人々の　却つて修せんと要する。
便ち惺惺　誠に猛烈なるを做すも、
怎生　學び得ん　我が風流。

と。其日甘河鎭に宿して衆に辭して曰く、余東海に馬を捉へ去らんと。邱劉譚中一俊馬を捉へよとは、正隆五年醴泉に於て異人の教へしところ。烏兎七年、今は則ち重陽自ら去つて此事を試みんとす、重陽それ自ら信ずる所有るか。邱劉譚か、九龍譚か、馬は是れ眞馬か、人の姓の馬か、語は解す可く解すべからざるの間に在り。これより逍遥として東に往きて、咸陽を過ぐ。咸陽に史處厚といふもの有り、乾州醴泉の人なり。重陽が活死人となれる時より、心之を思慕し、遂に就いて學ばんことを乞ひ、納れられて弟子となり、洞陽の號を授けられたるもの。爾後乞丐して心を鍊り、終南鄠社の間に往來し居たり。重陽今遠く東に去らんとするに臨み、侍行せしめんとしたるに、洞陽は母の老いたるを以て遠遊を辭す。重陽乃ち自ら一幅の畫を作り、一の三髻の道者ありて、其傍に青松鬱として茂り、白雲これを繞り、仙鶴娑婆たるの狀を描き、洞陽に與りて曰く、謹んで之を秘藏せよ、これは他日參同の符と爲らんと。五月北邙山の上清宮を

過ぎて、共壁に題して云ふ、

邱譚に　王山　馬劉を捉へ、
崑崙　頂上に　玉毬を打す。
儞還　撒して作く　寰海の内、
贏得ん　三千八百籌。

と。是より重陽風餐露宿して、遠く東海に向ふ。函谷の關を過ぎて、東すれば、一故人無し。被るところは一襤褸のみ携ふるところは一鐵鉢のみ。背糧無し、腰纏無し。技無く、能無く、才學の人に賣弄すべき無し。有するところは唯天上の日月の光のみ、路邊の松風のみ、眼前脚下の泉聲山色のみ。鐵鉢を敲いて食を乞ふ。歌つて曰く、

猿や馬に騎つて、頭髪を逞しくす、
擒へ難し捉へ難し、怎生捨てん。囉哩唛囉哩唛。
慧刀開いて、齊しく殺し、君をして根源を認め得しめん也。囉哩唛囉哩唛。」
從來の性、本來の命。
形無く質無し、怎生悝めしめん。囉哩唛囉哩唛。

る。携ふるところ、たゞ一鐵鏟、鏟を投ぐるも唯此の一鐵鏟、食を求ぐるも唯此の一鐵鏟、[illegible]、

「鐵鏟携へらる、鐵鏟携へらる、
響聲　敲動して　愚迷を振ふ。
若し響聲して人會得するを要さば、
分たざらん　南北と東西とを。」
「鐵鏟の能、鐵鏟の能、
能中　兀兀と　騰騰と。
杳杳　冥々　風を友と作し、
昏昏　默默　月を明と爲す。」

鐵鏟の歌、幾章なるを知らず。鐵鏟の爲に歌有るか、歌の爲に鐵鏟有るか、鐵鏟を敲き來つて、人の爲に音を發するか。吾が爲に食を化するか。鐵鏟も知らず、寒風も知らさらんとす。

是の如くして乞食叫化し、函關の西より、一路迢々、東海の濱に至る。途に衛州を經。衛州に蕭眞人といふものあり、仙風道骨あるを以て、世の稱するところたり。重陽これに見えて、相提携せんと欲し、就いて語る。蕭もまた拒まず。然りと雖も、盤桓數日、話相投ぜず、重陽乃ち之に驀山溪の詞を贈る。詞に曰く、

眞人　已に悟りて、
四海　名先づ到る。
只　聲聞有るが爲に、

却つて隔了す　玄元の妙道。
憐む可し、仙骨　落ちて入る鬼形骸、
一般に衰へ、一般に老い、
空しく恁(かく)　一般了。」
豈知らんや　玄妙を、
剛に　身心を把つて傲る。
日を度る　聾盲の若し、
謂る　丹砂　爐竈を識らざるを。
好し、二物を將て、鼎内に結んで丹を成し、
服餌し了し、長生を得て、
手を携て　蓬島に歸せん。

詞意十分に考婆心切、眞人が空名有つて實證無く、茫々然として徒らに日を送るを惆み、着手の處の別に在する有るを示すも、眞人之を讀みて、終る悟る能はず、但點頭するのみなりき。由來抗顏して人の師と爲り、壇に上りて法を說き道を示し、[illegible]美なることを[illegible]

疾たり。獨守不職にして、意を恣にし情に任す。弱冠の時、[illegible]
迷ひ、行に檢束無し。一日奇疾を得て、殆んど救はれざるに至り、夢に仙家の地に入り、己に[illegible]を得たり。遂に幻化の理を悟り、存心神道せんとす。偶ゝ重陽の[illegible]唆を唱へて、故峨を過ぐるに調ひ、其の[illegible]情[illegible]適にして、雲背に飛擧せんとするの態有るを望見し、驚いて就いて之と與に談る。機緣契合して、禮拜して弟子と爲る。重陽乃ち修眞の秘旨を授け、內功を積ましむ。是に於て慨然として家を棄てゝ長往し、杖策して西のかた關中に入り、終南の甘水の側に廬を結んで獨り靜かに眞を煉る。後に明昌の初、金の昌宗に召されて、金丹の道を問はる。乃ち答ふるに、此は山林の道人の尚ぶ所なり、陛下は四海生民の主たり、必ずしも意を此に留めたまはざれ、といふを以てし、但對ふるに黃老の淸靜治國の道を以てして、大に帝の悅び敬するところとなりしもの、即ち是れ此人にして、著はすところの全道集、世に行はるといふ。

少林の達磨、面壁九年、慧可を得るに及んで、其道大に輝く。王重陽、得々地に幽谷の西より東海の濱に到る、馬丹陽を得るに及んで、全眞の教、はじめて其勢を發す。東海に馬を捉ふるは、もとより懸記有り。重陽の東に行くもの、後より之を論ずれば、全く馬譚劉邱の徒を得るを期する者の如し、奇といふべし。重陽大定七年四月を以て自ら茅庵を焚き、直ちに東海を指して發し、同年秋七月十八日、寧海洲に抵る。七月十八日、七月十八日。嗚呼是れ王馬始めて相見するの日、全眞の教の天下に光被するに至るもの是れより起る。

其日寧海の人馬從義、友とする所の高巨才、戰法師と偕に、范明叔の怡老亭に飲む。范明叔も亦馬從義の親昵する所なり。時に一道人あり、鬚髯甚だ美はしく、面は運化の如く鮮やかに、眼は大にして口に過ぎ、身長六尺に餘り、索氣堂々、聲は巨鐘の如し。鐵罐を手にして、奕として其席に至る。戰法師問ふて曰く、布袍竹笠、髯を胄して來る、何ぞ

勤むるやと。道人曰く、宿緣仙契あり、徑ちに來りて訪謁するなりと。從義竊相…これを食ふ。異しみて其故を詢ふ。答へて曰く、卄は菁巾より來ると。人また奚よりすると問ふ。日く、紺…に來りて、醉人を扶くと。是に於て馬從義心甚だ之を異とす。これより前數日、馬また高戰等と此亭に飲める時、酒酣にして詩を賦して曰く、

兀を抱き一を守る　是れ工夫、
懶漢　如今　一も也無し。
終日　杯を御みて　神思を暢ぶ、
醉中　卻つて有らんや　那の人の扶くる。

と。馬と道人ともと相識らず、復其詩を得て知る可きの理無し。然るに今卒爾として言を出して、三千里を遠しとせずして特に來つて醉人を扶くといふ。馬の密に異とする所以なり。馬乃ち問ふ。何をか名づけて道とは日ふやと。答へて日く、五行到らざる處、父母未生の時と。これより主客玄を談じて、席上に風を生ず。道人の言ふところ、箇箇皆鵠に中り的を破る。是に於て從義これを邀へて私第に居き、問答往來論談す。自ら作るところの羅漢頌十六首を出して示すに、道人筆を執りて濟和し、宛として宿構に出づるが如し。從義遂に心服して師事す。此は是れ翰林直學士王利用の撰する所の、馬宗師道行碑に據る。

に人稱して呂半州といひ、弟姓三人、皆進士に擢でらるゝを以て、故に錦衣堂有り。從義いまだ生れざる前、辛巳の八月清且、客有りて謁と(?)として細複を案上に擲つて去り、往くところを知らず。其の語だ頭きを以て搦いて之を記こに、金色月を射る。乃ち之を藏して以て待つ。旬日にして客至りたれば、即ち之を與ふ。客謝して曰く、吾は呂仙といふものなり、家は幽谷村に居る。砂金を淘採するを以て業と爲し、積んで兩鎰を得、將に市に鬻がんとしたるに、稅監に逼逐され、幾んど刑に陷らんとす、公に賴りて幸に免るゝを獲たり、願はくは兩分して以て報ひんと。揚固く辭して受けず。呂仙曰く、公黃向の風有り、後當に高士有りて出づべしと。他日幽谷の人に訪ふに、呂姓の者有ること無し。始めて其の異人たるを知る。從義の母は唐氏、夢に女仙麻姑の丹一粒を賜ふに會ふ、呑んで而して分娩す。實に金の天會元年五月二十日なり。

從義は是の如きの家に是の如くにして生る。幼時常に雲に乘じ鶴に駕するの語を誦し、夢に數〻道士に從つて天に昇りしといふ。崑崙山の道士李無夢、見て之を奇として曰く、額に三山有り、手は垂れて膝を過ぐ、眞に大仙の材なりと。因つて頌を爲りて之を稱す。孫忠顯といふ者、無夢の言を喜び、女富春を以て之に妻たらしむ。子を生む三人、延珍、延瑞、延珪といふ。

從義一鄉の右族に生れ、財に饒にして譽に富み、資性の美、孝悌を以て稱せられ、加ふるに聰明穎慧、學を好み經に通じ、又財を輕んじ義を重んじ、人に貸して其の還す能はざるを見れば、其劵を焚く。性格學問、操行存心、皆人の瞻仰するところと爲る、其の日常の平穩快活なりしこと、知る可く。かつて佃客劉進の盜んで耕牛を殺せるの罪を許せるが如き、又惡少年の面に唾せるを怒らざりしが如き、其の粹然たる美質を見る可きもの多し。人是の如きの順境に居れば、晏如として其の清福を享樂するを常とす。然るに從義は、胸中別に人に語らざるもの有つて存せしか、抑も又宿

禁内より發して、人間の榮華の取るに足らざるを思ひ、眞諦の清淨の實に味ふに堪へたるを道を思ひしは、其の平生に照らして明らかなり。傳へて曰く、從義嘗て夢む二人の褐衣せる者の、一人は素もて僧伴を補せるが跪き且つ泣くを。二人曰く、我輩十萬人の性命は、公の主どる所に在りと。言訖つて并つて南巷に入る。從義之を追ふ。屠者の劉淸の圈中に入るを見る。顧みるに欄上に劔有りて云ふ、我輩已亥十萬人、大半已に辛巳に殺さる。此門是の若く慈悲ならず、世々軸頭常に斷抹せんと。夢覺めて屠らるゝ猪の聲を聞く。往いて之を視れば、則ち清の子阿澤二猪を屠る、其一は肩白し。止めんと欲して及ばず。始めて夢中の人の已亥即ち猪なるを悟り、又辛巳は乃ち劉の生るゝ所の歲なるを悟り、乃ち夢中誦むところの頌を壁間に書す。然れども屠者心剛、之を誘ひ醒ます能はず。從義是に於て、生死の輪廻、萬化の起止變滅に思ふありて、心安き能はず、衞士孫士元に詣りて之を占せしめ、以て自ら覺る有らんと欲し、因みに吾が壽を稽へしむ。子元曰く、君の壽、四十九を踰えずと。從義嘆じて曰く、死生固より人に在らず、なんぞ有道の人に親みて、死生を越ゆるの計を爲する若かんやと。又傳へて曰く、從義一時、客と奕棊す、乃ち聲を失して曰く、此の一著、下し得ば、渠れ死せざらんと。夫れ生を憐み死を傷むの心の、常に中に存する有れば、夢に二猪の苦に訴ふるを聽くも、亦怪むに足らざるなり。人間の如露如電なるを思ふの心、久しく中に蓄ふる有れば、衞士の言に感ずるも、亦自ら然るの勢なり。超生越死の心、恒に中に萌ゆる有れば、[illegible]

内の念[illegible]

せず。劉祖謙の甘陽祖師仙跡記に、馬も亦儒流中の豪傑なる者、[illegible]。[illegible]實を得たり。然も從義は重陽の談論甚だ聽く可きもの多きを以て、一菴を造りて之を止めんと欲し、重陽と與に南園に徜徉して、重陽に其地を擇ばしむ。是より先に從義嘗て南園の地中より一鶴の起つて出づるを夢む。重陽が地を指すに及んで、即ち鶴起つの處なり。從義心大に之を異む。菴成るに及んで、重陽之を名づけて全眞といふ。全眞の名、實にこゝに起る。

重陽馬氏園中の全眞庵にあり、將に從義を點化せんとするも、從義又未だ遽に屈せず。恰も釋迦の教法の大に興る、迦葉を服して其の弟子と爲せるに因るも、迦葉初め屈强にして容易に釋迦に下るを肯んぜず、數々其の及ぶ可からざるを思ふと雖も、吾が道の眞なるに如かざる也、と云ふこと再三なるが如し。重陽乃ち悠然として庵居し、徐ろに機の熟せんことを待つ。從義の妻、孫富春、從義より長ずること四歳、これも亦聰明淑良にして、才學あり。重陽の言動を觀て、其の有道の人たるを思ひ、心を傾けて禮敬す。

時に崑崙山の道士邱處機、字は通密といふものあり。家世〻登州棲霞の名族たり。年わづかに十九にして、大定六年、俗を棄て道に入る。敏慧にして學を好み、眉宇閑曠、擧措詳雅なり。善く相する者言ふ、必ず帝王の師たらんと。年未だ弱冠ならずして、夙に玄風を慕ひ超然たる意氣、塵世の末流に在るを肯んぜず。重陽の道學を耳にして、就いて教を請ふ。重陽一見して之を愛し、與に語ること終夕、玄機契合す。因つて詩を贈つて曰く、

細密の　金鱗　碧流に戲れ、
能く香餌を尋ねて　鈎を呑むことを侍す。

予に　綫々と　綸線を収められれば、
拽いて迷樂に入つて　永く自川ならしめん。

處機拜して之を受け、遂に重陽の銀鈎を吞み、玄綸に拽かるゝを肯んじて、其の弟子となり、長春の號を得。これより旦夕左右に親侍し、洒掃の役を執り、學月に進み、道日に長ず。寂通居士陳時可の撰するところの、長春眞人本行碑、長春の一生を記して、論叙其要を得たり。銘の辭に、

全眞の一派、道之が源たり。鼻祖は其れ誰ぞや、聖なる哉玄元。誰か其れ之を導ける、重陽倡れ始む。誰か其れ之を大にせる、子長春子。（下畧）

と云へるもの、實に浮詞に非ず。後に千古の英雄たる成吉思汗に印度に見えて、直言するに多く人を殺す勿れといふを以てし　成吉思汗をして禮遇せしめ、大に道教を扶持するに至らしめしものは、實に此の邱長春なり。當時眇然たる一年少の道士、那んぞ知らん是れ他日大機大用を逞しくして、去至する所、人をして其の馬首を擁して以て感泣する者有るに至らしむるの活神仙たらんとは。銀鈎玄綸、釣者もとより好し、被釣者亦好し。長春の重陽に遇ひてより、學問道徳大に進みて、馬丹陽を除きては　全眞教門第一の人となれる、因縁まことに不可思議といふべし。長春は元史に其傳あり。重陽の長春を弟子とする、蓋し大定七年に在り、長春時に年二十。

黄老莊列の言を愛して、恬淡無爲の道を[illegible]ぶ。[illegible]こ[illegible]に[illegible]、[illegible]を[illegible]る。深く易數を窮めて、卜の術に通ず。大定七年の秋、王重陽因りて來りて、海寧の市に[illegible]行す。[illegible]トを肆に貨る。重陽一瞥して、其の言動の凡ならず、仙骨度す可きを見、之を誘掖せんことを思ふ。士大夫環列して坐す。重陽突として入り、遂に廣寧の面に背いて坐す。廣寧曰く、君何ぞ頭を回らさゞるやと。重陽曰く、只恐る先生の背て回頭せざるをと。廣寧悚然として驚き、瞿然として覺む。回頭の一語、世に面するの頭を回して、道に嚮ふの眼を開くの意を含むを以つてなり。是に於て廣寧起つて禮し、肆を閉ぢて重陽に從ひ、閒話す。往來問答、石の水に投ずるが如きあり。廣寧詩を獻ず、其の句に曰く、

　同席の諸君　太古を樂しむ、
　未だ明らかにせず　黑白希夷の路を。

重陽の答ふる詩の句に曰く、

　足間雲霧　接し來る時、
　日に要す　先生　淸靜の句。

これより廣寧、重陽に歸向するの意あり。翌年三月に至り、遂に世を棄てゝ弟子となる。重陽之に法名を大通と與へ、廣寧子と號せしむ。大定七年、廣寧始めて重陽に會ふの時、年二十八。

重陽の馬氏園中の全眞菴に在るや、仙風道氣漸く四方に振ふ。譚玉、字は伯玉といふものあり。學海の人なり。父は繆鍊の工なり。繆鍊の工は、黄金白銀を以つて物を造る、權衡出納の間に於て、多くは私用を爲す。[illegible]

一（活　死　人）一

人の稱するところとなり、且つ慈仁惻怛の心に富む。玉幼にして秀發、聲韻朗然、人其の

歲にして、戯るゝに因つて井に落つ。人急に井に下つて之を救ふに、玉の晏如として水に坐するを見る。又幼時居之

火を失し、互棟榻前に碎け落つ。玉方に熟睡す。呼んで之を起たしむるに、神情自若たり。年十五にして詩を作る、詞旨淸發、其の蒲萄篇、一時の人々に膾炙するに至りしといふ。やゝ長ずるに及び、詩書を涉獵し、草隷を工にし、風神飄逸、淡泊自ら娛む。一朝醉ひて風雪に途中に遇ふに因つて、風痺の疾を得たり。乃ち喟然として嘆じて曰く、吾が平生の爲すところ、世に於て鮮益無し、今複奇疾に遇ひ、身廢人たらんとす、天の佑けさるや、藥石それ吾を如何と。日夕に北斗經を誦して濟を求む。忽ち夢に大席の空に横はるを見、飛昇して之に據らんと欲す、北斗星君の冠服して坐するを睹、叩頭作禮し、怳然として覺む。茲より道を奉ずるの心篤し。重陽の馬氏園中に在りて、道法卓異なるを聞き、杖に憑りて從ひて謁し、痼疾の或は癒されんことを需めんとす。重陽戶を扃して納れず。玉乃ち其の眞に道有るを思ひ、堅く自ら守りて退かず、終夕剝啄して已まず。已にして門忽ち自ら開く。重陽悅んで以て仙緣有りと爲し、納れて而して與に語る。談論機に契ひ、水魚相遇ふ。夜更く。重陽庵中に宿せしむ。時に嚴冬飛雪、庵中荒凉、海藻を籍いて寐ぬ、寒くして睡る可からず。重陽遂に足を展べて之を抱かしむ。少頃にして溫熱煦々、汗流れて體を被ひ、身を炊飩の中に置くが如きを覺ゆ。拂曉に及びて、重陽盥洗の餘水を以て、玉をして面を滌はしむ。從つて之を滌ふて、風痺の

一心 道に向ひて 同通する莫れ。
清虚 本是れ 眞仙の路、
只要す 安居養内の顔。

修養數年の後、重陽門下四俊の一、譚長眞と稱さるゝ者は即ち是れ此の譚玉なり。密國公の譚眞人仙跡碑銘ありて、其の一生の行蹟を盡す。長眞の著はすところの詩詞水雲集一卷、長春の著はすところの磻溪集と共に傳へて今に至る。重陽門下の著述、郝太古の著はすところの太古集は易理を以て勝り、長春の磻溪集は詞藻を以て勝り、水雲集は磻溪集に次ぐ。皆各ゝ其の風丰精神を見る可き也。

馬從義夫妻、中に道に嚮ふの心無きにあらずと雖も、未だ遽に首を重陽に屈せず。重陽もまた之を强ひずして機の熟するを待つ。十月の朔に至り、重陽從義に謂つて曰く、吾や道に依り儒佛を兼ね修む、汝何ぞ自ら決せざるや。我今庵を鎖して、齋居百日せんと欲す、と。從義其言に從ひて、環堵を爲る。重陽内に在りて、日にたゞ一餐するのみ。隆冬冱寒、風雪四入すと雖も、唯筆硯几席、布衣草履あるのみ。而して形神和暢、寒谷に春回るが若きの態有り。窓外に時に敎を乞ひ詩を求むる者あれば、重陽應酬揮灑して、綽々として餘裕有り。是に於て從義も漸く眞に其の道術有るを思ふ。從義の居る所と菴と、幾百歩を隔て、復重街有りて其間に在り。從義夜自己の宅中の樓上に寢ぬ、門戸扃閉して人を通ぜず。然るに時に重陽の忽然として室中に入り來り、親しく從義に對して談論すること有り。其の由つて來る所を知らず、去るに及んで之を追ふも及ばず。去つて後に門戸を檢するに、更に出入の形跡無し。從義其の神異に堪ふることを能はず、或は人をして庵中を窺はしむるに、たゞ重陽の儼然として默座するを見るのみ。從義益々驚きて、道の常

道に非ずして、深奥の所謂、思議す可からざるもの有るを思ふ、

重陽に在つては、形と神との理に達し、性命との機に通ず、是の如きの事、まさに奇と爲すに足らざるべし。而も世常の人に在つては、誰か敢て身外に身有り、神出でゝ神を現ずるを思はんや。重陽果して神を出せしか　從義果して形を認めしか。悠々の談、今の人皆疑つて、觀中の事となし、夢裏の象と爲さんとす。然らずんば荒唐の談、烏有の事として、一笑に附して信ぜざらんとす　然れども今の世に「Projection of the Astral Body」といふものは、即ち道家に所謂「出神」にして、歐人等の考験に先だつ數百年にして此事有り、歐人等の論議、實に道家にして珍とするに足らざるなり。Col. de Rochas, of Paris, M. Hector Durville. Dr. Baraduc. M. Charles Lancelin of Paris. 等の談を聞けば、近人は惘然として、「神と形」の事　吾人が凡常の見を以て論ずるが如きものにあらざるを思はんとす。近人の神と形との事に於けるや、思を致すも亦淺しといふべし。重陽と丹陽との事は姑く措くも、二千年前　須菩提の禪室に於て五比丘等に先だつて釋迦の成道出山を知り、頻婆娑羅の獄中に在つて法悦を得たる如きは何ぞや。此も亦近人の見に從へば、たゞ是れ夢幻の事なるべし。夢幻の事、夢幻の事、悠謬の談、悠謬の談、一切夢幻、一切悠謬にして可ならんのみ。予今出神の果して能くす可きや否や、果して眞に此事有りや否やを論ぜんとするにあらず、たゞ王重陽の馬丹陽を度せんとして是の如きの事を示せりといふの傳説あるを言ふのみ。人は機關の

の如[illegible]性と命とに[illegible]らず。[illegible]性は[illegible]、[illegible]一[illegible]
せず。重陽の問曲示玄の談の如き、之を詣るも亦從容[illegible]ならんのみ、[illegible]
重陽去冬の初より、日に詩詞を示して、從義をして縦和せしむ。今存するところい重陽教化集有り、[illegible]二十三首に、
因[illegible]尹、范[illegible]、趙抗、劉孝友、梁棟、劉[illegible]之等の序を附して行はる。重陽が附詩の一に曰く、

一別す　終南　水竹の村、
家に兒女無く　亦孫無し。
三千里外　知友を尋ね、
引いて入る　長生不死の門

其他藏頭拆字の詩詞多し。篇章亦富人に取りて興味必ずしも饒からず。これを擧ぐるに懶し。之を讀むも亦懶からん。

重陽また梨一枚を與へて從義をして喫はしめ、第十一日に至つて一梨を分つて二と爲して從義夫婦をして食はしめ、十日を經るごとに一分を加へ、第二十日には三分し、第四十日目には四分して食はしむ。百日に至つて五十五塊を食はしむ。分梨十化といふもの、即ち是なり。當時附答の詩詞、收めて分梨十化集に在り。集傳へて今に存す。百日に至つて、大定八年正月十有一日、從義遂に資産を以て子の庭珍輩に付し、休書を妻の孫氏に付し、服を易へ冠を受け、寧海一市の鉅萬の富者、忽然として乞食の道士となりぬ。當時の從義の心中の消息、道行碑、正宗記、仙源像傳等、並に之を記せず。十化集卷末に重陽が從義に贈るの詩を載す。曰く、

酒初めて醒め、夢初めて驚き。月初めて明らかに、性初めて平らかなり。如し覺悟せば、是れ前程あらん。

從義次韻して曰く、

醉中に醒め、睡中に驚き、暗中に明らかに、箇中に亦らかなり。心開悟して、
從義が夢中歆に、燒き得て白く、煉り得て黄、便ち是れ長生不死の方、の何ありしに因つて、重陽命じて、名を
を玄寶と更め、丹陽子と號せしむ。
馬丹陽、馬丹陽、此は是れ一豪傑、重陽の之を化する容易ならず、重陽の全眞集、教化集、十化集等を見れば、重陽
の老婆心甚だ切なるを知り、丹陽が强項不屈なるを知る。丹陽の未だ歸道せざるや、夢に重陽に從つて山に入る。日に
及んで重陽呼んで曰く、山侗と。從義瞿然として、重陽が吾が夢を知るに驚く。丹陽の時に自ら山侗と稱し、重陽の時に山
侗を以て丹陽を呼ぶもの、是より起る。又嘗て重陽一日人に謂つて曰く、馬公道を破ると。人曰く、師何を以て之を知
るや。曰く、昨日馬公飲酒すること多しと。人これを候ふに、從義曰く、昨日藥を得て酒を用ゐて引とし、因つて覺え
ず量を過すと。重陽の丹陽に於ける凡べて是の如し。丹陽の遂に道に入るを致す所以なり。丹陽の妻孫氏、道を尙ぶと
雖も、猶ほ家業を捨つるを肯んぜず、當時重陽の孫姑に贈る詩に曰く、

一婆　猶ほ自ら　家業を戀ふ、
家業　誰か知らん　錢を壞了するを。
若し是れ　家に居りて　常に舊に似たらば、

若し省て　叩頭して　覺悟を促さば、
名は傳へて　永々に　仙姑と喚ばれた。

孫富春もまた遂に剃頭して世を棄て、夫の從義が道に入るの翌、大定九年重午の日、金蓮堂に詣りて出家し、名を不二と改め、淸淨散人と號するに至る。重陽の道を傳ふる者の唯一の女仙なり。其の著はす所の孫不二元君法語傳へて今に至る。詞氣淸還、的に是れ女仙の語なり。別に丹道秘書三卷あり。法語と同じく數葉の小冊、多く言ふに足る無しと雖も亦是れ馬丹陽の一有緣の人たりしを示すものといふべし。詩に曰く、

白鶴に乘ぜず　鸞に乘ずるを愛す、
二十の幢幡　左右に盤る。
偶　青壇に入りて　尋で一笑す、
降眞香は繞る碧闌干。

又一章、

小春の天氣　暖風陰る、
日は照らす　江南處士の家。
催し得て　臘梅　先づ蕋を逝らす、
素心の人は對す　素心の花

丹陽夫婦、心を重陽に歸す。重陽が丹陽を度し得て、道法に猛進せしめし時の事知るべし。丹陽も亦意を決して道に就く、決烈の意氣、金石を貫かんと欲するあり。重陽丹陽をして誓狀を燒いて、復び人間を思はざらしむ。時に詩有り、

曰く、

余鈎を擲下して　恰も一年、

方に香餌を呑んで　綸の牽くに任す。

玉京山上　鵬と爲りて化さば、

我に隨つて　扶搖して　洞天に入らん。

丹陽繼韻して曰く、

鳳仙　我を化して　已に年を經たり、

悟徹して　鈎を呑んで　線の牽くに任す。

本師に　參從して　雲外に去り、

功成りて　決して上らん　大羅の天。

丹陽又重陽が一別終南の詩に繼いで曰く、

遇ふを得ぬ　當に歸すべし　劉蔣村に、

妻を黜け　妾を棄て　兒孫を屏く。

妻男を發にす　孫を慣はず。

志　環堵に在りて　大道を修め。

玉戸を　幹開して　金門に入らむ。

又當時述懐の詩、丹陽が洞玄金玉集に載す。其一に曰く、

身は　儒門に在る　三十年、

知らざりき　一字の　大なることを天の如きを。

偶　風仙の理に悟徹するに因りて、

頓に覺る　靈明の　大千に滿てるを。

其二に曰く、

虚無　浩渺たり　神仙の國、

欝崛　鸞翳たり　自己の天。

白日　淸閑　冗事無し、

丹宵　出入して　飛煙に駕せん。

其三に曰く、

逍遥　自在　三千の容、

坦蕩　無拘の　一散仙。

淸淨にして　幹開す　壺内の景、

無爲にして　踏碎せん　洞中の天。

丹陽の道に入る、時に年四十六。丹陽の著すところの洞玄金玉集一卷、漸悟集、丹陽語錄等、およひ重陽と應酬するところの、重陽教化集、分梨十化集等を讀めば、丹陽の藻詞學問、ほゞ窺ふべし。年既に四十六、思慮まさに熟し、經歷亦饒し、此時に當つて鉅萬の富を棄て、家を棄て、妻子を棄つ、豈に草率の心の能くするところならんや、重陽の道必ず深く其心を動かすところ有りて、而して後に決する有りしや知る可きなり。長春の重陽に歸するや、年甫めて二十なり、聰明絕倫といふと雖も、是れ錦鱗の小魚のみ、容易に金鈎を呑む。丹陽の重陽にあふや、年四十五、學問腹に滿ち、經歷身に存す、是れ玄鱗、鐵翅、老蒼たる大魚なり。なんぞ容易に鈎を含み綸に牽かれんや。丹陽の道に入るを觀て、重陽の内に蓄へしところの者の、たゞ空理と大言とのみならざりしを察すべきなり。

馬東籬の撰するところの、王祖師三度馬丹陽の曲は、此の王馬相遇の事を叙し、重陽が出神入夢、分梨賜芋、遂に點化して道に入らしむるの談を取つて以て劇を爲せるなり。

入夢の事も亦能くす可し。人の心知るべし、人の夢何ぞ知る可からざらむ。巫覡の徒、たゞ僅に淺近の術を得る者も、人の胸中の消息を得。古の婆羅門が、南陽の忠國師が心中に天津橋上に猢猻を觀たるを看破せしは、傳へて今に至るの談、世人の多く知るところたり。他人心中の想像も知るべし、夢裏の光景も知り難か

の大石に座するに遇ひ、推背せられて称に言ふ。汝が中[illegible]に狂歌す。人或は将んで心を失へりと謂ひ、或は譏りて恥無しと為す。大定八年、年五十七、明化以其の門に[illegible]を知き、弟子の列に側はらんことを願ふ。眞君其道を授く可きを知り、爲に今の名を賜し、崑崙煙霞洞に從居せしむと。後に大竪に俯し、一足を以て跂立し、鐵脚仙の稱を得たる者、其の爲す所や婆伽林の苦行外道の如しと雖も、苦行の堅確精苦また知る可し。傳へて言ふ、嫉惡する者の爲に鴆を飲ましめられて而して死せずと。大定二十年、金の世宗、其の道業を聞いて、召して教を乞ふに至る。重陽門下の一俊なり。詩詞の集を雲光集といふ。傳へて今に至り泯びず、其の風韻を剏すべし。

馬丹陽既に道に入る、奮迅勇猛、精煉苦修す。其勢蓋し朝に道に進む、夕に死するを辭せざるが如きものあり。乃ち崑崙の烟霞洞に登りて、修煉三昧に入る。忽ち頭痛を患ひて、顱頂ノ裂せんとす。人言つて曰く、良公將に旦夕を保たざらんとすと。重陽曰く、吾三千里外に特に此人を化す、それ死せしめて可ならんやと。乃ち水を呪して之を與へ、且曰く、凡そ人の道に入る、必ず酒、色、財、氣、攀援愛念、憂愁思慮を戒む、此の外に更に良藥無しと。丹陽をして清浄安閒、坦然廓然洞濁其濁の境に安んぜしむ。丹陽水を受け教を奉じて、寂々寞々の裏に氣を煉り神を修め、進火退符の功遂に成りて、甘露靈泉の象已に具し、性命雙圓證するに至りぬ。丹陽の病を得て殆んど將に死せんとするは是れ蓋し丹神將に成らんとするに當りて、多く起るところの象、是に至りて多少の英雄底の漢の蹉過せんとするものならずばあらず。龍力騰つて泥丸に至るに及んでは、波湧き火閃き、乾坤砕けんと欲し、一身冷えて死屍の如く、氣息將に絶えんとす。此故に必ず師父の力を籍る。重陽既に丹陽の師父たり、丹陽賴つて以て功成るを得たるのみ。此の一番の颶風暴雷並び臻るの境を經て、而して後に性命の本源に到達す。如是にして世の學問思辨の人の、[illegible]

ろとなり、時間の鎚打するところとなりて、而も自ら悟らず、沒首沒尾の比量智を恃みて、高遠幽深と爲し、時間の超
頭を問はれ、空間の落處を詰らるゝに至つては、茫々然として一句をも說出し得ざるが如きに異なりて、神仙の家風、空間に遊戲自在にして、時間に超越無礙なるを得るなり。

此年の二月晦日、重陽は丹陽、長春、長眞、玉陽を提げて、崑侖山煙霞洞を開きて之に居る。三月郝廣寧も亦來り從ふ。八月に至り、五弟子を率ゐて、還つて文登縣の姜實庵に居り、七寶會を立てゝ、衆人を濟度す。一二月の間より、故重陽の德を聞き、教を乞ふ者、門に入らんとする者、漸く多し。重陽或は詬罵し、或は捶楚して、以て之を鍛煉す。煙霞洞を開くに來り就く者も多くして、散じ去る者も亦多く、能く精進隨從する者、丹陽、長春、長眞等數輩のみ。煙霞洞を開くに當つてや、石を採つて用と爲すに、巨石あり、忽然として脫し落ち、人皆悚懼す。重陽威を振つて大喝するに、其石屹然として止まりしかば、樵蘇する者讙呼して禮を作し、遠近歸服したりといふ。若し、巨石にして止まらず 重陽を壓殺せば、重陽を重んぜし者、散じ去つて之を侮りしならむ。憫む可し巨石の止まりしことや。振威大喝も、亦復多事なるかな。碑文に記して曰く、重陽或は瓦を發し石を發すと。瓦を發し石を發するは、狂人も之を能くす、又何ぞ異とするに足らむ。又記す、重陽時に二首を現じ、旅中に坐すと。二首を現ずるは 双頭鬼の形なり、珍とするに足らんや。又記す、人或は之を留めて飯せしむれば、預め食罰を言ふと。

曰ひ、重陽を邀ふ。重陽[illegible]
を空に擲つ。傘風に乘じて飄起し、雲[illegible]して終南山の玉陽大王光明洞にやり落ち[illegible]北洞を[illegible]す。洞中に[illegible]あり、[illegible]
子と曰ふ。玉陽に約するところの別號を撰して贈る也。竹、今たゞ昇を假る、字は人下に六人なあり、字は十八人との共字
無し、重陽の撰するところなり。擲傘の處と雲光洞と相去る二百餘里、人皆驚異す。玉陽但日求の謝す。重陽詩を贈つ
て、修煉の道を喩す。詩に曰く、

修行の事理　記する丁寧にせよ。
只要す　心中　靜裏に明らかなるを。
眼界　生ぜずんば　龍自ら伏し、
鼻門　閉づる無くんば　虎常に停まらん。
舌根に味を退けなば　心神爽やかに、
耳內に聲を除かば　腎水淸まん。
南北　混融して　一處に歸し、
東西　交媾して　三彭を滅す。
木金　厮秘して　盤桓として住まり、
嬰姹　相隨つて　自在に行く。
結んで金丹を作して　頂上より出で、
五光射透せん　彩雲の棚。

蓋く是れ丹道の秘、關鍵を知らざる者に在つては囈語の如くなるも、少しく門戸を窺ふ者に在つては是れ[illegible]陽これより精煉して、邱長春の贊して、九夏に陽を迎へて立ち、三冬に雪を抱いて眠ると云へるが如く、刻苦奮鬪して終に道を得たり。人下六人の字の如きは、重陽の新撰するところ、甚だ妄なるが如しと雖も、字畢竟七人を作し、金蓮七朶の數を表す。元來道家の文字に於ける、世の伏羲畫象、倉頡造字の說と、其の傳ふるところを異にし、三元八會、八角垂芒、文字自現の論有り。道士の字を造るは、梁の陶宏景の眞誥等よりして既にこれ有り、太公隱符經（李筌所傳の隱符經にあらず）の如きは、異字滿目、率然としてこれに臨めば、荊棘森々の眼を射るが如きを覺ゆるのみ。重陽の金蓮堂に入るや、夜神光有りて、照耀して晝の如し。人驚いて火災と爲し、馳せて之に近づけば、たゞ重陽の光明中に在るを見るのみ。寧海もと海に近し、井水皆至つて鹹し。重陽庵の井を呪す、水變じて甘潔、今に至つて其惠を存すといふ。是に於て三教金蓮會を建て、又福山縣に至つて三教三光會を立つ。文登の七寶會と共に、重陽が當時立つるところの諸會、多くは一人をして逐月に四文錢を出さしむるか 重陽が金蓮會の詩に、逐四文月十六字の句有り、攄つて考ふ可し。登州に至つては、三教玉華會を立て、萊州に至つては三教平等會を立つ。以上三州五會、皆三教を以て名に冠す。是れ皆重陽が傳道覺世の機關にして、儒には孝經、佛には心經を取り、道には 道德經を本とし、三教を偏廢せず、四海を一家とせんとするに因つて、三教を標榜するなり。[illegible]

[illegible]

師道行訣に據れば、劉は[illegible]んで婦材に事へ、特に孝を以て聞ゆ。[illegible]て縣官せず、[illegible]自ら[illegible]り。[illegible]

以て其の胸中の誠を慰するに足る無かりしといふ。心に異人を訪ひて道を得んと欲す。而も[illegible]在る[illegible]を以て忍び

す。大定九年の春忽ち謝居の壁間、人の及ぶ能はさる處に於て、一頌を揮灑せるありて、墨跡尚ほ新しく、姓名を列ね

さるを見る。其の末句に云ふ、

武官は養性　眞仙の地、

須らく有るべし長生不死の人。

劉其の筆力遒勁なるを嘆賞し、神物の化成するところなるかを疑ふ。其八月に至りて、重陽邱譚馬の三人を從へて至る。劉之を聞いて謁す。重陽顧みて笑つて曰く、壁間の墨痕、汝之を知るやと。三子も亦相視て笑ふ。是に於て劉乃ち神通變幻の啓醒する所以なるを悟り、誓つて几杖を負ひ、巾瓶を執らんとす。重陽其の懇勤專精にして、神彩の不凡なるを愛し、歎じて曰く、

釣罷んで　歸り來つて　又鰲を見る、

已に知る　分有りて　仙曹に列するを。

鳴榔　相喚べば　予が意を知り、

躍つて洪波を出てゝ萬丈高し。

仍つて壁間の語意を取つて、長生を以て號と爲し、處玄を名と爲し、通妙を字と爲さしむ。長生時に年二十三。道成つて後に金の章宗の崇敬するところとなり、上賓を以て待たれ、琳宇を賜はりて、修眞宮と名づけらるゝ[illegible]

此の長生なり。長生の門に入るに及んで、重陽に隨ふもの七人　人皆長春、長生、長眞、丹陽を呼んで　邱劉譚
し、四上足の名、天下に喧傳す。邱劉譚に俊馬を捉ふるの言、こゝに於て驗有り。又閻寧、玉陽、清淨散人を合して、七人となり、金蓮七朶の應、こゝに現はる。十月重陽掖縣に至り、又四子を挈げて汴梁に至り、磁器王氏の旅邸中に寓す。

十年正月四日、重陽、丹陽長眞長春を召す。三人榻下に立つ。重陽曰く、丹陽は已に道を得たり、長眞は已に道を知れり、吾慮る無し、長春は學ぶこと一に丹陽に聽け、長生は長眞當に之を管すべし、吾今師眞の約に赴かんとすと。丹陽遺頌を請ふ。重陽曰く、吾已に長安の灤村の呂仙庵に書せりと。前に擧ぐるところの、害風害風舊病發す、壽命は過ぎず五十八の詩なり。言訖つて逝く。是年閏五月にして、正月十一日始めて立春たるを以て、正に是れ五十八

四子禮を盡して、權りに孟宗獻の花圃に瘞め、既にして丹陽三子を率ゐて遠く西して關に入り、和玉蟾、李靈陽に終南の太平宮に會し、史處厚に京兆に會し、劉通微、嚴處常に終南に會し、大定十一年、丹陽三子と與に劉蔣村に居り、庵を建てゝ、重陽が燒庵の時の豫言を完うし、其の葬所を治め、十二年丹陽三子を率ゐて汴梁に復り、重陽の仙柩を奉じて、再び西して劉蔣村に葬る。今の祖庵鎭即ち是なり。丹陽の全眞第二代と爲り、長眞長春等餘子の道皆成るに及んで、全眞の教天下に行はれ、宋、金、元朝、皆之を尊崇せざるを得ざるに至る。邱長春の北走十八人を率ゐて、劉仲祿に

[illegible]
帝[illegible]扱合思八等もとより[illegible]を投け、姚公茂等また[illegible]を疎む　既に[illegible]して許父の[illegible]形[illegible]に若くに、況んや又道士等淺學無見にして佛を攻むるを知らず、老子化胡經等を支持して、而して敗れさらむことを試するをや。是れ猶ほ驢馬に向つて鬪輪に鷄し、而して敵の刀斧戟の下に走るが如し、いづくにぞ身首處を異にせさらん。古より道も佛を[illegible]、佛も道を目し、道佛相擠む。且つ佛說と稱するものも、疑僞甚だ多し。道士等これを攻むることを知らず、化胡の說を執して、好んで身を敵の鋒鏑に露はす、終に口を閉ぢて言無きに至る所以なり。王重陽もと三教を打つて一丸と爲さんと欲す、然るに李眞常等以下、妄りに道威を張り佛法を厭す。既に教祖の意に戾り、又老子恬淡柔弱の旨に反して、多く多く佛寺を奪ひ、暴横至らざる無し、是も亦自ら戮すこと甚だし。金の元好問、一代の文宗たり。好問に嘱して、王重陽の碑を記し重陽の德、葛洪の晉に於ける、陶弘景の梁に於ける、寇謙之の魏に於ける、司馬承禎の唐に於ける、陳摶の宋に於けるにも超ゆると爲す。而も猶ほ足れりとせずして、文立つて復毀つに至る。是れ富家の小兒の驕溢の態なるのみ。何ぞの恐にして亢ぶれるや。人の憎惡を惹くに足るともいふべし。故に重陽死して後、其徒等終南の杜順の寶塔を發きて、聯環金骨を攫み、これを重陽の壙中に埋みて、重陽の舍利と爲せり、といふが如き謗讟を致すに及べり。杜順の骨果して聯環金骨なりしや否や、重陽の骸、果して他人の骨を安きしや否や、是れ皆知る可からずと雖も、事若し眞ならば、陋も亦甚だしく、言若し誣ならば、誣も亦甚だしといふべし。それ溢美の言も信ず可からず、過惡の辭も亦疑ふ可し。達者もとより耳を信ばずと雖も　昧者多くは道聽途說に聽かんと欲す。重陽の詩に、三百六十金骨節の何有りと雖も、重陽自ら嘗が嘗然りと道へるにあらず。重陽の徒の言、重陽を神仙と爲すこと至れり盡せりと雖も、重陽の聯環金骨なりしことを稱せるを見ず。然らば則ち杜順の骨を偷みて重陽が壙中に埋めたりといふの言も亦佛者の誣謗ならずんばあ

訓練（但しこの者の範圍内でいふ）を以てし、運動の妙を捉へたり。」と言つた。

泡鳴の神秘的半獸主義などいふ思想を具體化した作品と見るべきであらう。

中谷無涯作「すひかつら」（明治三十九年二月發行）は純然たる郷土傳說を描いた「緒名が淵」と思想的な「降魔頌」との二篇を收めてある。

「緒名ヶ淵」は四六版の八十五頁を占めてゐる。だが傳說を傳說として描いたまでゝ、感覺にも思想にも新味は毫もないものである。全五章より成り、第一章に山深きところ、幻の如く馬追歌がきこえる。その緒名ヶ淵を點出する。第二章は老松と巨巖との獨白をなさしめて、緒名ヶ淵の人界遠き幽邃さを歌ふ。その淵の上の小祠は何を祀れるやといふ。第三章はその小祠の神の本體は式内の古き神でなくして、鄙の乙女なのである。

我が戀　淸く汚れ無かりき
幼稚馴染の美しき戀よ
笑みて語る
霜おく冬は　落葉を掻きに
父母　野良に　働く折は
割籠かよひも二人して行く
我は賤の女　君は山がつ
我馬追へば　君馬に乗り
我乗る時は　君馬を追ふ
君草野に息憩むる時
谷に尾上に　木魂の調べ
我聲なげて追分聲歌ひ
調べにつれて鄙ぶりうたひ
春の朝も秋の夕も
君ならずして誰　友とせむ？
たゞ友として睦べる日頃、
心春日の如く長閑けく
憂きも辛きも知らで過ぐしき。

この若者は眉目美しく、秋祭に女形姿となるほどであつたので、鹿毛駒を追ふて市の歸るさに、乙女は堪へかねて若者に

の惱み、呪ひ、彼女は長者の邸宅のほとりを彷徨さまよふこともあつた。

第四章は、月下のその邸から出づる娘、

絹布の縺りあひ、留木の香り
風に搖めく　頭の飾り
縺れし頭髪の毛　はら／＼戦ぎ
紅絹の裳裾に　雪白の脛
寢卷姿ぞ仇しどけなき
礫、岩角、厭はず洗足
肉は裂れて　血潮したたり
招く尾花に　心も留めず
茨肌をつぶれど知らず
後見かへり　見かへりつ往く

長者の娘の戀は若者に容れられなかつたのである。そればかりでなく領主は長者の娘を垣間見て、側室に召さうとしたが、若者を戀してゐると言ふので、殘酷にもその若者を探し出して殺してしまつたのである。私が戀した爲にあの人は生命を亡くしたのである。私は死んで詫びなければならない、――この言葉を巖頭に立つて長者の娘のかきくどくのを田舍乙女はきいた。

怨みも忘れ　妬みも融けて
憐れは迫り　ひた泣きに泣く
すゝりあげたる　我が傍に
嘶き立つたる　鹿毛のみ
鹿毛よ聴け！
我が戀人は　失はれにき
我が戀みし人　誠心ありき
われに勝りて　苦しみありき
人の世厭はし　人の世惡くし
權威ある人　惡むべきかな！

長者の娘が淵に身を投ずれば、田舍乙女もおくれずと、鹿毛駒に乗つてそのまゝ淵に投じたのである。

第五章は絶壁や松や淵や自然の姿は常住のやうに見える。田舍乙女を祀る崖の上の小祠は三度新しくつくられた。叶はぬ戀の乙女ではあるがどうしたことか戀が叶ふ神として近郷の乙女連に願言をかけられた。實としてある日崖くづれ淵を埋めて、緒名ケ淵は今、何處にか探しやうもない。たゞ古びた小祠がまた新しく立つて、戀の願をする乙女が絶えない。

この傳説詩も場面として豊かな情緒を出すと言ふより、筋書きとして描かれたやうに見えて、調子からしても柔かく氣分が出て來ないのは、この時代のものとして止むを得ない。この三角關係も近代的な解釋を加へないで淡々として書き流ささしこ(ママ)である。

：：「降魔頌」は世界の平和を呪ふ破旬を摩利天が降伏させることを劇的に描いたものであるが、冗漫であるのみで、感激を與へないものである。

薄田泣菫の「葛城之神」(明治三十九年七月「早稻田文學」所載)は、役の小角が葛城山へ石橋を架けやうとして、海か山神の合力を求めた時、たつた一人、葛城の女神が容貌のみにくいのを他にみられるのを耻ぢて、晝間出會はなかつたので、結構したと言ふ傳說に因つて作意を構へたものである。全三篇から成りその內容に依つて、一、橋づくり、二、女神結構、三、女神幽囚と項目を別つてゐる。作者はこれについて、「これを作る時には、無論アイスヒユロスの『プロメシユス結縛』を想ひ浮べずには居られませんでした。この一篇は後篇『解脫葛城の神』を俟つて、初めて完成するものなのですが、「解脫葛城の神」は腹案としてのみ殘つてゐます」と言つてゐる。

古語を用ひてゐるので一讀して晦澁の感もあるが、想像も豐かに優艶な詩風で、技巧としても優れたものである。殊に第一篇の橋づくりに於て諸山神の出現の條が精彩があつて、在來の

岩かた陰に離つきて
「御定は然あれ、あり故の
八十氏人はかしこみて
日にまた夜にいそしめど
驕の長なる葛城の
地主權現の兄姬のみ
日を岩窟にこもりゐて
草の片葉の朝じめり
花かわく間だに谷に來ず
宿直やつれの金星の
眼たゆげに出でたたす
かはたれ時に訪れ來て
日の暮みて物倦の
ますら荷らを見そなへど
また若生の「曙光」が
唐樣のこころもちはへて
眞夏の小野の朝踏みに
天の御階にいでませば
つと衣がづき纏ひ着て
木靈かくれ去りましぬ。

ます。私もなるべく平易な耳近い言葉で詩を作りたいと思つてゐましたが何分日本語は語が貧しく音調が淺いものですから、私は適當な語を求めて、知らずしらず新しい造語も試みないことはありませんでした。しかし新造語を試みる爲に、まづ同じ内容を含蓄する古語の復活すべきものはなからうかと詮議してみました。私は自分でもあまりに古語の復活沙汰に執着し過ぎたことを知らない譯でもなかつたのですが、やるからには徹底的にやり通すのが、私の性分だものですから……」と言つてゐる。

以上に略敍して來た如く、日本の敍事詩は質量ともに貧しいものであつたが、種類から言へばいろいろのものがあつた。そして芽を吹きかけては、それに繼續すべき作品が出ないのであつた。

それは詩語として韻文的な敍述に、いくらか泰西の言葉よりも不自由な點もあるかも知れないが、根本問題は民族的な熱情に乏しいためではないかと思ふ

敍事詩は殊に史詩の傳說詩であつたとき、それが最も民族的なものであつたからである。奔放長大な敍事詩を書く心持は、よしや鋭感な近代人と雖も所有してゐるものである。

日本の過去、現在、未來に對して、敍事詩として歌ふべき詩材は決して少くない。

敍事詩といふものを一種のロマンチシズムの運動として考へてゐたのであるから、明治四十年前後に於ける自然主義の現實的な運動の極盛期に際して、その内容からしても敍事詩は行き詰つたが、表現に於ても明治四十年九月から口語の自由詩運動となり、その詩形が散文化さるるに及んで、敍事詩と言ふものが全く影を絶つに至つたのである。

けれども詩をロマンテックのものと考へずに、廣い意味の詩の立場からすれば、敍事詩がその内容を史詩、傳說詩、現代詩、の孰れにもせよ、新しい敍事詩が生れなければならないと私は信ずる。

史詩、傳說詩に對しては現代の心を通じての解釋の下に作らるる場合に、無限の詩趣を感ずることが出來るし、現代を詩材とした場合にはプーシュキンの「エフイゲニ・オネーギン」のやうに、現世紀の悩みを長篇小說風の構圖の下に、奔放に歌ひ得るのである。最近の敍事詩の運動はその意味に於て新しく提唱されて來てゐる。

國境安別

北原白秋

安別沖まで

波なだりいやつぎつぎに重き冥む穂のみね厚し海豹の顔

名も知らぬ黄なる花むらなだり咲き目もあはれなり時化波の際間

凄まじく海ぞ荒れゐれ目じろがず人は乘り來る舟の舳の反り

砂濱

昆布食みて慧き鼠か長き尾の亂り走りぬ波裂くるとき

ぺんぺんとなづな實りて群れにけりとどろきくらき波なだり來る

海豹は頰の髭黄なり孔まろき白き頭骨となりはてにけり

鰊乾場

日の光薄き寂びの板びさし春の鰊(にしん)は燻(いぶ)し了へにし

マントの黒き頭巾のふつかけ雨巡査は佇てり路の棗のかげ

寂びさし雨あぢきなし紙旗の日の丸の紅(べに)も垂りにじみつつ

ふたつ眼の毛皮の羆(ひぐま)つるされて次つかけ過ぎ[illegible]

夏、夏、夏蕎丙畦さかひの畠の畦の花じやおいものしぶりの雨

夏もなか黄なる鈴菜が明るなり北の日本のいやはての村

日のひかりいとど薄きを菜のはなのうらなく咲きて黄なりこの宿

菜のはなに深くづ昆布の鹽じめば北の日本の春もいぬめり

鰊粕脂のり來る辨べや雨は沁まずてはねてちりをり

ななかまど

あかき實のなかまどといふ藪の崖小供飛びをり鳥のまねして

ぎやをと啼きまた野鶫がすどしやぶりの實のあかき木に海猫はゐる

天測點へのぼる道

玉ぼこの道つくりびとすがすがし蕗と萱とをそぎにけらしも

ぬかるみの新墾道(にひはりみち)の吹きあげ雨反(そ)り立つ蕗の裏しごきうつ

登高の葉際蕗うつ雨の音今はたしかに國境に來し

國境標附近

鷲ひとつ石のうらべに彫りにけりそなたに多き虎杖の花

雨、雨、雨、蟲くらひ葉の音繁きこの虎杖は露西亞領の花

椴松の霧たちかくす日の在處氣流の冷えがとみにし著し

この國境あまりにさびし椴松のうれを久しく雲はながれぬ

ひそかなる國の境や椴松(とどまつ)に雲白らみて郭公のこゑ

北樺太ピレオの村も寒むからし蝦夷松疎く雲こごり見ゆ

獵人(かりびと)のピレオ出て來る寒き影はたや向ひの岸に立つらむか

國思ふ心はもとなとどまらず雨はさ青の芒を流らふ

雨は小止(をや)み草山なだりさみどりなり日本の村へ一氣にすべる

韃靼海西風(にし)吹きあげて立つ雨の色まつしろし潟きるのうへ

小學校にて番茶を饗せらる

黄の花の鈴菜畠のさんさ雨鴎あがれりまろき眼をして

日本のいやはての北の小學校水楢樹濡みて夏休らし

隆盛の大き目の額見つつ出てすずろに紅(あか)し虎杖(いたどり)の花

電信局にて

ワレラコクキヤウニアリ、むらさきの花じやがいもの盛りにうつも

じやがいもの花の香しるき頼信紙このふきぶりに濡らしけるかな

鑵詰工場は休みて商品陳列所となれり

雨しげき鰊乾場（にしんかんば）の賓のなづな國の境も見つくしにけり

こんこんとしみみふり湧く夕ごころも[illegible]にさふしおこたる

うらさぶしうらさぶしとを逕りゐたり燻鰊の黄の腹の焦げ

端舟に乘る頃

夕づけて遊ぶ童の寄りどころ蟹の甲羅の朱も古りにけり

時化後の海ひたくらし向ひ立つ女の子がふふむほほづきの音

冬籠

古泉千樫

寒ければ朝寝はしつゝ日々の飲食の時も定まらなくに

冬の日の今日あたたかし妻にいひて古き硯を洗はせにけり

寒の水にしづかにひたす硯石蒼き匂ひのいさぎよくして

こがらしの風吹きすさぶ障子のうち咽ゑごくしてひと日暮れたり

冬日かげ一日あたるふるさとの廣き緣がはを思ひつつあはれ

おりたちて土ふむなべに心なごみ行きあるきけり日のてる道を

山房の夜中

齋藤茂吉

みちのくに雪解のみづのとどろくと告げこし友を我はおもはむ

われひとり眼みひらく小夜ふけに近くをとほる兵の足おと

さ夜ふけて春の夜ふけしひもじさに乳のあぶらを麺麭にぬりつつ

こがころふ青野を越えておゆみつつ神死したりといひし人はも

[illegible]はいまごろ湖ふかからむ赤彦をしましねむらせたまへ

椿と浪

若山牧水

静かなる椿の花よ栗ごもりに咲きて久しき椿の花よ

ひともとの野なかの椿枯草のすさまじきなかのひともと椿

枯草のおどろがなかにひともとの椿かがやく栗は栗の色に

ひと木の椿の花に寄りて行くわらべ等の見ゆ枯草がくれ

わらべ等よとるな椿をわが部屋ゆ見ゆる冬野の其處の椿を

からみたる野の草枯れてひともとの椿は花のいよよ咲くなる

闇の夜とおもふ夜ふけの廂うつこよひの雨の親しくあるかな

しぐれの雨いつしかやみて靜かなる宵とおもふに浪の音起る

今宵立つ浪のとよみは高くあがらず地をつたひて聞え來るかも

親しさよ今宵の浪のとゞろきは地にこもりて聞えたるなり

牀上漫吟

島木赤彦

二月十二日病宜しからず。東京より信濃に歸る

信濃路に歸り來てうれしけれ黃に透りたる莖漬のいろ

神經の痛みに負けて泣かねども夜每眠られねば心弱るなり

風呂桶に觸らふ我の背の骨のいたくも我は瘦せにけるかな

火箸もて野菜スープの火加減ををり〳〵見居り妻の心あはれ



活死人

露伴學人

既に宗教と云はゞ、其光まさに六合を被ひて餘り有るべし。或は神仙と稱す、其道かならず千古に亘りて亡びさらん。然るに宗教の光も亦時に隨ひて明滅し、神仙の道も亦世に伴なひて興廢するこそおもしろけれ。

宋の德漸く衰へて、大駕南に渡りし頃より、天下の形勢は風に似て動いて定まらず、宇内の山河は瓜の如く分たれて完きこと無し。遼といひ、金といひ、夏といひ、元といひ、各一方に虎踞して、將に中原に龍鬪せんとし、或は退き或は進み、或は熾んに或は熄えんとすと雖も、其志皆おのれを固うし他を擠し、人を制し己に奉ぜんとするに在り、尊俎の折衝、旌旗の往來、紛々擾々、已む日を知らざらんとす。

此時に當り、世運既に安からず、人心も亦異を思ふ。漢唐の學は夙く替りて、周程の說漸く起りしより後、林靈素の

詭秘の言は徽宗の代に興りて徽宗の代に敗れたれども、朱子の性理の論は孝宗の時に發して寧宗の時にも爭はる。これは是れ南方士人の間の事に屬すれども、北方庶民の裏にも、亦信仰の新に起り、思想の更に萌えたるあり。元興りて、西海の帕克斯巴(パクスパ)の國師と尊まれてより、佛教の大に隆んなりしは言ふまでも無く、又江西の張宗演の銀印を賜はりて、道教の小しく康かりしも語るを須ゐざることとなるが、此等を外にして金季元初に崛起せるの教門三。一は全眞教なり、一は眞大道教なり、一は太一教なり

眞大道教は金の季に當りて道士劉德仁の立てし所なり。其の教旨詳しく知り難しと雖も、元史の記するところに據りて之を窺ふに、苦節危行を以て要と爲し、妄りに人に取らず、苟も己に侈らざる者なりと有れば、身を苦めて道に據り、是非を外に絕ち、人我を緣に忘れんとするものにして、少しく我が法華の別派の不受不施の流にも似たるものならん歟。聲聞辟支の氣味あるを免れずと雖も、亂離の世に在りては自ら守るに適すといふべし。德仁の時に教名ありしにはあらず、五傳して酈希誠といふに至りし時、元主の知るところとなりて教名を賜ひ、諸路の道徒を轄べしめたりといふ。此一派二三傳して張志法といふに至り、其人志操淸高、其教大に振ひ、時の人其風を高しとして畫いて圖を爲して以て相傳ふるに至りしといふ。

太一教は金の天眷年中といへば、彼の岳飛未だ殺されず、我が西行僧と爲りしほどの時なり、道士蕭抱珍といふもの、これを創め、太一三元法籙の術

命令を人畜に行ふに足るとなすものなり。晋の時の符字、今皆伝はりて亡びず、後世の符字も未だ此を出でざるなり。和漢の術巫の徒も亦これを作る。支那の術の道家の法術を採みて俗に媚ぶるに学ぶなり。仏法印度に出づ、豈に支那の道文に似たるの符字有らんや。今の仏教中、間々符字を載するものあり。道仏互に窃み相採む、笑ふ可きのみ。金道士太一三元法籙の術を伝へしと云へば、思ふに息災消病等の符を与へて、民庶をして之を信仰せしめしならん。抱珍より四伝して輔道に至り、世祖の知るところとなつて、弟子李居寿をして太一宮を両京に建て、之に居りて祠事を領せしめらるゝに及べりと云ふ。符籙祈祀の道を主とす、其の教旨、猜して知るべし。

真大道教と太一教とは、殆んど言ふに足らざるなり。而して劉蕭二道士の著はせるところの書、始より有る無きか、或は既に泯びて伝はらざるか、予未だ得て寓目せざれば、之を論ずる能はざるなり。たゞ全真教に至つては、其の根柢必ずしも浅からざるに似て、其の影響も甚だ小ならざるを見る。文献も亦徴す可き有りて、予の寡聞なるだに、猶数十巻冊を渉猟して、其の大概を知る。況んや其の教祖の、磊々落々として、埋没隠匿す可からざるの意気精神あり、其の教徒の各々一気骨あり、一風采ありて、蹄を挙げ塵を絶ち、鰭を振ひ浪を揚げ、駿馳魚游、欲する所に長往するの跡、人をして是の如きの時、是の如きの人、是の如きの情有り、是の如きの事あるべきを想はしむるに足るものあるをや。予嘗て仙人呂純陽を談りぬ、乃ち今聊か王重陽等を談らんとす。神仙の事、吾が邦人の之を道ふ者鮮し、其の聞くこと稀なるの故を以て、予を目して虚に憑り妄を談ずるものと為すこと勿れ。

元の文宗の至順年間、古汴の鍾嗣成、新編録鬼簿二巻を撰す。後の元の雑劇を談ずる者の必読の書なり。中に馬致遠の作るところの劇十二種の目を挙ぐ。致遠は大都の人、東籬と號す、江浙行省務官たり。元の劇の作者中の大家にし

て、關漢卿と名を齊しくす。嗣成が擧ぐるところの致遠が作十二種中に、王祖師三度馬丹陽の一篇四折、幸にして今猶ほ世に傳はり存す。曲中の王祖師は即ち王重陽にして、其の全眞教の開祖たるを以て祖師となせるなり。馬丹陽は即ち重陽の嗣法者となりし馬珏にして、丹陽は重陽の授けしところの稱なり。曲中に叙するところの、重陽三たび丹陽を度する談は、作者の任意に作爲揑灑せるにあらず。當時傳へて以て實と爲せるの事に據れるのみ。元劇は大抵人の周知するところの事蹟に本づきて筆を馳せ曲を度す、王馬の談の人の口耳に在るにあらずんば、東籬何ぞ敢て此曲を結撰せんや。

王重陽は宋の徽宗の政和二年、即ち女眞の帝を稱して國を立て、金と稱するに至れるに先だつこと三年、徽宗の詔して道經仙記を求むるの前年、十二月二十二日を以て生る。李道謙の七眞年譜の記すところ是の如し。蓋し異説なし。唐の仙人呂洞賓の生日の確徵す可からざるが如きにあらず。北平王粹の撰する所の傳に云ふ。全眞祖師王嚞字は知明、重陽子と號す。京兆咸陽の人なり。世々貲産を以て雄著はる。後に終南縣劉蔣村に遷る。其母異夢に感じて而して娠む。二十四月に及んで乃ち生る。始の名は中孚、字は允卿と。開府儀同三司上柱國密國公金源璹の撰する所の終南山神仙重陽眞人全眞教祖の碑に曰く、眞人名は嚞、字は知明、咸陽大魏村に應現す　仙母孕むこと二十四月又十八日なり、按ずるに二十四氣、土氣を除して眞人を成す也と。[illegible]

重陽の生れしより壯に至るまでの間、聞くところ有る無し、たゞ[illegible]にして[illegible]、又[illegible]と異なること無かりしならむ。弱冠にしては進士の學業を修め、京兆府學に籍せしが、才學[illegible]も、志[illegible]ところ無し。これも亦尋常一樣の擧子の遭遇、道ふに足らずとすべし。時に金起りて國を稱せしより二十餘年、勢益々隆んにして、陝西の地も其の收むる所となり、英豪の士は用ゐらるゝを獲しかば、是に於て重陽も文場の試を思ひ斷ちて、武擧に應じて雄飛せんことを欲し、自ら名を德威、字を世雄と易へたり。既に文に成る能はず、乃ち武に立たんことを思ふ。これも亦尋常一樣の爲す有らんとする者の態度、奇とするに足らずとすべし。名は德威、字は世雄、何ぞ其の名字を撰ぶの堂々たるや、其志も以て知る可し。德威時に年二十七、鬚髯漸く美はしく、目は口より大に、一表の人物、看來つて俗ならず、身の長六尺に餘り、膂力人に過ぎ、豪氣雄爾、おのづからに衆を厭す。されども天の此人をして世間に志を得て、青雲朱紱、榮華を樂みて身を終らしむるを欲せざるか、此人の傲骨昂々屈す可からざるもの有りて、世と相俯仰する能はざるより、鐵花登龍の運を得るに至らざるか。文武の道、兩ながら塞がりて通ぜず。年三十前後なるべし、遂に慨然として世を棄て道に入らんと欲するに至れり。蓋し此心を懷くに至れる所以の者、一には其の性質の豪爽にして、世態の埋沒する所となるを肯んずる能はざるに出で、二には秦隴の地、廢齊（劉豫）事を擅し、紛擾紊亂して、民は堵に安んぜず、中原湖北、天下到る處亦多難にして治らざるの世に際し、外を卑しみ内を尊み、嗒焉として獨り嘯き、飄然として孤往せんと欲するを免れざるに出づ。之に加ふるに虛無靜寂を宗とするところの道教有緣の地に生れたるもの、又其の出塵脫俗の念を助けずんばあらず。

道教有緣の地とは何ぞや。重陽の生地咸陽大魏村即ち是なり。西は秦隴より起りて、東は藍田に徼するまで、雍といひ、岐といひ、邠といひ、長安といひ、凡そ其距離八百里が間を、連綿蜿蜒として其南に峙ち亘れる者を終南山とい

ふ。秦嶺といへるものは即ち是にして、重陽の詩中に數々地肺といへるものも亦即ち是なり。重陽が生れたるところ長じたるところは、特に終南の主山に近々と接し居りて、明けぬ呑れぬに看るところのもの此山の翠色ならざること無く、雨に晴に望むところのもの此山の雲氣ならざること無し。此山は即ち西域の名山高峰も數多きが中に、最も道敎に因縁深きものにして、茅山廬山華山嵩山羅浮山大和山峨眉青城龍虎等の山々にも勝りて、人をして古を懷ひ今を感じ、道を思ふの念の油然として起るを遏むる能はざらしむるものあるべし。所以者何となれば、道敎の本づくところは、老子道德經五千言にして、道德經は實に此終南山に於て著はされたればなり。終南山說經臺碑記に據れば尹喜字は公文天水の人、少くして學を好み、天文秘緯を善くし、大度恢傑、德を隱し仁を行ふ　其後山水を涉覽し、雍洲終南山盩厔縣の里中に於て、草を結んで樓を爲り、至道を精思す、周の昭王二十五年癸丑、東方より紫氣西に邁くを瞻て、聖人有りて當に京邑を過ぎるべきを知り、乃ち出でゝ函谷關の令と爲ることを求め、以て之を物色せしに、其年七月甲子、老君關に到る。即ち朝服を具して出でゝ迎へて、令に就かしめ、座を設け、北面して之に事へ、遂に疾と辭し官を退き、其年十二月を以て、老君を迎へて終南の本第に至り、齋戒して道を問ひ、復書を著して後世に惠まんことを請ふ。老君乃ち道德五千言を述べて之を授け、明年甲寅四月二十八日、宅南の小阜上より、雲に乘じ共に翔し、升つて太微に入る。尹喜これより遂に草樓に於て、人事を屏絕し、淸修三年、心凝り形釋け、道の妙に至るを得たりといふ。事の眞否は確徵す可からざれども、夙くより是の如きの

公度、喜の弟子杜沖、沖の弟子彭宗等數十人も皆樓觀に依止して道を修め[illegible]は豪碑の末に記して曰く、樓觀は天下の道林の張本の地たり。文始（尹喜）上仙よりの後、[illegible]として[illegible]きは無く、諸仙史を閱すに、一にして足らず、始め太和の尹君（尹通）別に樓觀先師の傳を晉に作り、次には則ち梁思尊法師（韋節）之を後周に述べ、末には則ち尹尊師文操之を唐に續ぎ、合せて三十人、各一列傳して書を爲す三卷、世に垂ること久しと。終南山は是の如くにして、老子說經の處、道教發生の地たるのみならず、又尹喜の故宅、結草の一樓は、天下宮觀の祖たるのみならず、又文始眞人以後、修道成仙せるもの、數十人を出し、のみならず、山中の宮觀は、歷代帝王の崇敬鑽仰ありて、葺補時に加へられ、修築數々起さるゝ所となりたるなれば、耳目ある者の之を聽視せざる無く、文字ある者の之を讃歎せざる無く、閭里の翁嫗、村落の芻蕘も之を傳稱訪談せざる無かりしなるべし。終南の主山は、咸陽の南、西安の南西に當り、澇水、甘河等、皆これより出づ。重陽の居は甘河の附近に在り、猪端窓外に山を望むべく、嵐光翠氣は堂に入るべし。文學武藝皆志を得ず、仙風道風當に懷を誘ふべし。重陽が世を捨て道に入るもの、故無しとせんや。

終南は又佛教に甚深の因緣有り。都穆の終南山記に徵するまでも無く、山麓の興教寺に三塔有り、其中の一の特に高大なるものは、天竺に遊ぶ十七年、歸つて唐の太宗に御弟として優遇せられ、一代の宗師として、翻經布說、大威力を發揮したる玄奘三藏埋骨の所と爲す。其左は雄豪の資、玄微の學、後人をして舌を卷かしむる玄奘の弟子窺基の塔たり。其他羅什三藏、杜順、宗密等幾多名僧高德の蹟あり。此等もまた重陽をして感を發し思を致さしむるの因たらざらんや。重陽後に神仙の道を成して、而も佛を斥けず、其の詩詞の中に佛教の氣味甚だ多く、且つ玄奘の譯出したる般若の精髓たる心經を取りしもの、奚んぞ微密の因緣の潛索幽引する無きを知らんや。

重陽の家貲元來豐厚、鄉中に於て豪富を以て目さる。されば貧窮の者の粟を貸さんで
しで、其實里閭の富者の、貧者に穀粟金幣を貸して利を收め勢を張るも、世間の通態なり。然るに富者貧に窮困す[illegible]
は、其の子錢子粟を納むる能はざるのみならず、其の母錢母粟をだに還す能はざるの狀に陷る。是の如きに至れば、
富者は貧者を奴僕として使用し、筋骨の勞役を以て償還せしむるを例とすること、小說雜書に散見間出す。蓋し此も亦
世俗の通態にして、人も見て以て怪まざるなり。重陽は是の如きの時に當つて、之を免して責めず、却つて之を憫み之
を惠み、自ら本を折し母を失ふこと半なりしといふ。然れども當時の世治まらず、政厚からざりしに加へて、歲また登
らず、饑饉となりしかば、民の貧にして良からざる者、隊を成して盜となりぬ。支那史上の所謂羣盜なるものは是に
して、今の破壞的共產主義者に近きものなるが、此等羣盜の常として、其の向ふ所は必ず資產あるの家なれば、重陽
の家は其の襲ふところとなりて、一夜にして家財一空せられぬ。重陽の大父これを縣府に訴へ、大に隣里三百餘戶に求
め、辛くして其の亡へるところの金幣を少しは得、又賊の渠魁といふべきを捕へ得しかば、將にこれを法に附せんとし
けるに、重陽これを宥めて曰く、これ乃ち鄉黨饑荒よりして起りしもの、譬へは窮者の諸を其隣に乞ふ者の如し、亦眞
盜には非るなり、安んぞ死地に陷るに忍びんや、とて遂に縱ち捨てゝ去らしめたり。重陽の此言、まことに世の實相に
徹して、俗の淺見に墮ちず、寬大の量、聰明の智、よく機を轉じて禍を寡くするものといふべし。こゝを以て里情やゝ安
まり、人々重陽を敬仰し、成陽、醴泉のあたり、重陽に賴りて騷ぎ立つこと無きを得たりといふ。

して任俠を以て稱せらる、とあるものは、[illegible]ることなどを指せるなり。好問は文を能くす、任俠を以て稱せらるゝの數字、[illegible]の道に入[illegible]重陽の詩詞事蹟を考ふるに、實に俠者の風あり。任俠の二字下し得て好しといふべし。世を棄つるの[illegible]閙々擾々の生活を爲す、獨り禪牀に枯坐して默々として道を思ふも、徒に意馬の奔走して韁を斷ち羈を脱せんとするの勢あり。乃ち酒肆に狂飮して昏々として情を忘るゝも、又心猿の矯捷にして柱を攀ぢ窻を窺ふの狀あり。道念と欲念と常に内に相爭ひ、大疑と小疑と迭りに長へに逼りて簇り起り、寢食も安からず、動靜も定り無く、或は醒めて苦み、或は醉ひて狂ひ、咄々として叱し、呵々として笑ひ、殆んど自ら守る能はざるもの有りしならむ。故に自ら高吟して曰く、昔日の龐居士、如今の王害風、と。龐居士は財に富饒にして而も道に精苦せるの人なり。王害風は自ら道ふ。害風は俗諺、猶ほ狂客と云ふがごときなり。是に於て鄕里の李四張三の輩、重陽が心内の消息を解することと無くして、たゞ其の行止擧動の常ならざるを見、害風害風と稱す。重陽も亦これに抗せず、害風と呼べば即ち應じて厭はず。正に是れ牛と呼び馬と呼ぶ人の呼ぶに任すものなり。かくて月往き歲移り、幾春秋を經けるが、金の正隆四年己卯、重陽の歲四十八の六月望日に至り、老樹終に春風の訪ふに逢ひ、幽禽忽ち白日の射るに驚くに及べり。

恍々惚々未だ道を得ず、鬱々勃々の思堪ふる能はざる害風は、其日甘河鎭に遊行して、一酒肆に入りたり。甘河鎭は西安の西南に當り、鄠を去ること遠からず、甘河の傍に在りて、終南の山に逼る。終南山の中なりとも云はゞ云ふ可し。鎭中の酒肆に、大盤の肉、小碟の蔬、數碗の酒を喫過して醉を吹く時、忽ち二人の白氈を衣る者ありて至るを見る。重陽眼を擧げて之を視るに、驚くべし二人の容貌風采全く一にして異ならざること、形影の相同じきにも過ぎたり。身の外に身有り、孰れか是れ眞の身なるを知らず、影の邊に影を添ふ、那れの一か實の影なるを辨じ難し。飮めば飮み、

笑へば笑ひ、語れば語り、食へば食ふ。都て是れ二人にして一人、一人にして二人た［…］き、凝然として思ひ、心に其の必ず是れ人間の人ならずして仙中の仙たることを悟り、乃ち二人の去るに從つて幽僻にして人無き處に至り、虔み禱りて禮を作し、教を乞はんと欲す。二人徐に言つて曰く、此子教ふ可しと。重陽欣んで就いて語り、仰いで嘱るに、二道者は眞に是れ煙霞の態度、宵漢の精神、其言は皆塵を滌ぎ垢を滌ぎ、背を鋤き肓を剔り、醉ふが如くにして醒め、瘖の如くにして鳴る。遂に秘玄の旨を授け、修養の道を傳ふ。樗櫟道人の金蓮正宗記には、王害風の名を嚞、字を知明、號を重陽子と爲せるものは、此時二道人の命ずるところに出づと爲す。言既にして畢り、道人東方を指して曰く、汝何ぞ之を視ざるやと。重陽首を回らして望めば、空中に七朶の金蓮の子を結ぶを見る。道人曰く、何をか見ると。答へて曰く、七朶の金蓮の子を結ぶを見ると。道人笑つて曰く、豈たゞ是の如きのみならんや、將に萬朶の玉蓮有つて芳ばしからんと。言訖つて忽ち所在を失ひたり。これより重陽いよ〳〵狂顚して、復世間の是非、人事の價値あるを思はず、動靜語默、皆己の欲する所に從ひ、不羈直往、破衣短袋、飄々として雲行し、踽々として露宿し、漸く眞の害風漢となりぬ。當時重陽の作るところの詩、遇師と題するもの一絕、金眞集に載す。曰く、

四旬八上　遭逢を得たり、
口訣　傳へ來つて　便ち功有り。
一粒の　丹砂　色愈々好く、
玉華山上　殷紅を現す。

重陽二道人に遇ふの事、畢竟是れ何を語るものぞや。李道謙曰く、其の遇ふ所の者は、鍾呂二仙たりとす。予嘗て之を論す。世相傳ふ、純陽は唐の人、道を鍾離權に學んで仙を成し、永く世間に遊行して人を度すと。宋の時に於て純陽數々世に現はるゝの談有り、明清の世に於ても、猶ほ時に世に降臨すとせらる。重陽に現はれしもの、果して呂仙人なるか非耶。蓋し別に人有つて披氅の二道人の害風に現はれしを見る有るにあらず、誰か二道人の果して呂仙人なると呂仙人ならざるとを辨ぜんや。又誰か果して二道人の重陽に現はれしを併せて其の實事なると假託するとを辨ぜんや。抑又異人の重陽に現はれしの事の、たゞ是れ重陽の主觀中の事なるか非なる耶を知らんや。然も亦世おのづから倚異の道を傳へて、光を和し塵に同ずるの隱士無きにあらず、重陽の遇ひしところの者、此等の人にあらざる無き歟、是れ亦尋常の見を以て概論す可からざるものあるなり。重陽遇師の詩を讀むに、其の傳受するところの者、金丹の道なるが如し。金丹の道は漢よりして傳へて今に至る。其道幽渺知り難しと雖も、歴代の眞仙、皆之を修め之を證して、而して後に生死を超え、玄妙に入る。淺俗の士、箇中の消息を窺知する無く、妄りに意を以て測りて、世豈に鍊丹の術有らんやと云ふ。然りと雖も其道の頭緒有りて執る可きを覺え、符驗有りて信ず可きを思ふにあらずんば、歴代の高明にして學有り識有るの士の、肯て世を謝し家を棄て、妻を遺り子を遺れて、鼎爐鉛汞の事に苦心すること有らんや。金丹の道は、予將に別に論ずる有らんとす、今急に之を詳に言ひ難しと雖も、要するに一道潛傳して、亡びざること千有餘年、今猶ほ考ふ可く徵す可きもの有る也。重陽の遇へるところの二道人の果して呂仙人なると呂仙人ならざるとに論無く、又たゞ是れ重陽の主觀中の事たると否とに論無く、蓋し重陽四十八歲、正隆四年六月望日に於て始めて感發悟得するところ有りしなり。但し重陽が披氅の道人を目して呂純陽と爲ししは掩ふ可からず。重陽の全眞集中に、王道人に贈ると

題せる詩あり、曰く、

□來り　月往き　愈、身輕し、
□是れ　雲車　穩にして又平なり。
□目　怎でか知らん　雲水の貴きを、
□仙　相聚まり　氣神榮ゆ。
□牛の運用　人　鑑し難く、
□虎の咆吼　我に聲有り。
□遠ニ是非ー心　道を樂み、
□先勝地　清明を賞す。

此は是れ藏頭の格といふものにして、七言の詩の毎句の頭一字を示さず、人の猜破に任すもの。第五句第六句は正に是れ丹道の語にして、馬牛の運用、龍虎の咆吼、本皆虚誕妄語にあらず。此篇重陽の作るところの者の如し、然れども或は疑ふ是れ披氈の道人の王重陽に贈るものにあらざる無きやを。又純陽眞人の韵に和すと題せるもの一篇あり。純陽眞人と云へば、是れ呂純陽なること知る可く、韵を和すと云へば、純陽が王重陽に贈るの詩有りたること知るべし。乃ち知る重陽が純陽に遇へりと爲すの事ありしを。詩に曰く、

□人　此に到りて　清泉を弄す、
□洗す　塵勞々　物外の天。
□是　人非　難きこと汨々。

□生　日夜　往くこと千々。
□年　修煉して　方に且に歸し、
□日　座成　自ら恍然。
□裏の白蓮　今已に見はる、
□神　正に得ん　大羅の仙。

火裏の白蓮も亦是れ丹道の語、今已に見はるといふ其意知るべし。

此の甘河鍾遇仙の時に前後して、重陽其兄を亡ふ。集中に、兄死作の一絶句あり。曰く、

人々　只會す　家親を哭するを、
誰か肯て　能く哀まん　自己の身を
若し　己が身を把つて　哀み得て慟かば、
無生の路上に　閑人と作らん

其の當時道に進んで前後左右を忘るゝの狀想見すべきにあらずや。自詠と題せる行香子の詞に、

箇の王三有り、風害狂顚。

の句あれば、重陽は蓋し王家の第三子なりしなるべし。重陽が家庭に於けるの狀は、諸書明記せずと雖も、其の悟眞歌を讀みて、略々知る可し。歌に曰く、

余九歳に當つて　方に事を省す、
祖父年を享くる　八十二。

二十三上　榮華の日、
伯父　享年　七十五。
三十三上　婪眈を覺ゆ、
慈父　享年　七十三。
古今　百歲　七旬少し、
此の遞滅を觀る　忽で當に甘んずべき。
三十六上　寐中に寐ぬ、
便ち要す　分つ他の兄の活計を。
豪氣　天を衝き　意情を恣にす、
朝々　日々　長く沈醉す。
幼を賺し　人を欺き　歲時を度り、
兄を謳ひ　嫂を罵り　天地を慢る。
家業を修めず　身を修めず、
只任す　他の窓しく富貴なるを望むに。

二分は喫著し　一は酒資に

他毎(毎は擧に同じ)の衣食　全く知らず、

余　酒錢を遺して　災禍を說く。

四十八上　尙ほ強を爭ふ、

爭奈せん　渾身　祭詐を做す。

忽爾一朝　便ち心破れ、

變じて風害となり　風狂に任す。

懼れず　人々の　長へに嘲笑するを。

一心　三光の照を昧ますを恐る。

慮を靜にし　思を澄まして　己身を省み、

悟り來つて便ち妻兒を把つて掉つ。(下略)

此歌に據つて知る、重陽が九歲にして祖父を失ひ、二十三にして伯父を失ひ、三十三にして父を失へることを。又知る重陽は父の四十歲の時の子なることを。又知る三十六にして兄に需むるに資產を分ち與へんことを以てし、旣に資產を得て後は、任意任情に生活して、酒を喫して日を送り、心に滿たざる有れば兄嫂を誹罵し、勢に乘じては人を侮り他を陵し、勤勉して產を治むることを敢てせず、徒らに他の富貴を羨み、自己の財產を蕩盡し、妻子をして怨懟せしめ、終に家を賣り田を賣り、又之を酒肉に費し去り、妻子の困窮を省みず、四十八歲に至りて猶ほ貧乏を負へども、旣に如何ともする能はざるに及び、忽爾として道心を發し、摠道に入道して、妻子を棄つるに至れるを。

是の如くなれば是れ凡常愚劣の輩、氣を負ひ酒を使ふ者の經歴にして、世おのづから是の如き[illegible]くにか此類の徒無からん、東坡の所謂瘴死の牛肉を喫ひて村醪を鯨飲して氣を吐くの輩、與に談るに堪へさるの罪たらずんばあらず。重陽自ら述ぶること既に是の如し、蓋し詐らさるの自白なり。然りと雖も歌中前半は盡く是れ自ら責むるの辭のみにして、絕えて自ら護るの語無し。人の自ら責むるの辭に依つて、其人是の如きのみと爲さば、竟に是れ鄙析の徒の苛論たるを免れさらむ。重陽が此歌を作るの時、年五十一なり。故に歌中の後の句に曰く、

　五十二上　光陰急なり、
活きて七十に到るも　幾日か有らん。

と。五十二の時は　重陽自ら墓中に在り。一切を擺脫して、其心や箭の如し、只進んで道を得んと欲するのみ。白賁の言の痛語なるも、異しむに足らず。人應に斟酌して言を聽き、此に依つて生活の概狀を窺ふ可きのみ、此に依つて彈呵の論議を爲す可からさるなり。

重陽の遇ふところの道人を呂仙人と爲すものは　重陽が了了歌に

　漢の正陽を兮　的祖と爲し、
唐の純陽を兮　師父と做す。

の句有るに據る。正陽は即ち鍾離雲房にして、呂純陽に道を傳へしもの。傳へて云ふ、今の終南山の凝陽洞傳道觀は即ち正陽の東華帝君に遇ひて道を傳へられしの處、又咸陽の周曲灣の正陽宮は即ち正陽の故居なりと。咸陽と云ひ、南山と云ふ、皆重陽の生地居處に因緣あり。況んや正陽の弟子呂純陽は昇天を願はずして長く人間に在りて道を傳へ人を度せんと欲したるの眞仙なるをや。重陽の純陽に遇へりと云ふも、因緣甚だ深しといふべし。

重陽が呂仙に遇へりといふの翌年、即ち正隆五年の一月夜、重陽また一道者に遇ひ、同じく月下に談論しけるに、道者謂つて曰く、吾は西北の大山の中に居る、(西北の大山は當に是れ終南山なるべし) 彼の間に人有りて、談論するを善くし、陰符道德は尤も精通する所なり、聞く君が平昔此の二經を好むことを、なんぞ相從ひて、彼に往いて見聞せざるやと。重陽意動きしかども、躊躇して未だ之を能く決せざりしに、道者忽ち拄杖を拋つて、風に乘じて去り、行くところを知らず。重陽驚きて、左右に之を求むるに、杳として音耗無く、茫然として失ふ所有るが如し。これは正宗記に出づるところにして　此も亦主觀中の事なりや、事實なりや、時處も明らかならず、今之を詳にし難し。

同じ年の八月十六日、重陽醴泉(咸陽の西南、甚だ遠からず)に過ぎりけるに、再び道者に遇ひしかば、趨つて之を拜し、欣然として邀へて酒館に入り、共に飲むの次に、其の鄉里を問ふに、答へて曰く、蒲板永樂は是れ居るところなりと。年甲幾何と問ふ。答へて曰く、春秋二十有二と。復其族姓を問へば、默して答へず。遂に筆墨を索めて、秘語五篇を書し、重陽をして讀ましむ。其一篇に曰く

猱として粢地に遊び、
泛として長安に遊ぶ。
或は　丹を市邑に貨し、
或は　跡を山林に隱し。
因循　數歲、
覷見す滿目の蒼生、盡く是れ兇頭の下鬼なるを。
今　吾が弟子に逢ふ、

三十三上　榮華の日、
伯父　享年　七十五。
三十三上　婁眺を覺ゆ、
慈父　享年　七十三。
古今　百歲　七旬少し、
此の遞減を觀る　怎で當に甘んずべき。

と。卽ち之を火中に投ぜしめ、且つ曰く、功成らば迎ぞ
と。言畢つて忽ち所在を知らず。

道者は何人ぞや。正宗記には、蒲板永樂、是れ居る所といひ、密國公の撰する所の碑には、年二十二と云へりと記す。其人其事、尋ぬ可きが如く、尋ぬ可からざるが如し。畢竟悠謬の談、朦朧の事、論ぜんか、所謂癡人の前に夢を說く可からざるものなり。假令論究し得て、微に入り細に入るも、味者永く癡々すして之を混沌儱侗に附するも、達者旣に了々たるもならん。

重陽是に於て修眞の念忽々振ひ、全く復世事を顧みず。幼女を携へて姻家に送り、其の生育婚嫁を舉けて之を家を出で妻を棄て、自ら重陽子と號して、始めて眞の道人となりぬ。其翌金の大定元年、重陽年五十、異人に遇ひて轉してよりの第三年、終南山の南時村といへるところに、地を鑿りて土窟を作り、其中に安居して、寂寞とし絕ちぬ。一は貲財旣に乏しくして、屋を葺き室を構ふるの力無くなりたればなるべく、又一には一切を屛絕世俗の因緣を斷絕せんと欲したるなる可し。然れども眞の目的は、唯此の二條のみにあらざるなるべし。蓋しを體し眞を證せせんとする者、大抵皆獨自一個の心、獨自一個の身、獨自一個の性命、獨自一個の精魄を以て、宇宙に當り、緊しく古今に對せんと欲す。故に或は土穴に潛み、或は石窟に坐し、或は曠野荊棘、人の終に到らに飄浪し、或は深山幽峯、鬼も亦居らざるの地に玄默す。釋迦の山に於ける、基督の野に於ける、マホメツト於ける、皆純粹の全獨自一個を以て、蕩然湛然と時間空間に直面し、我の由つて來るところ、我の去つて往我のこゝに立つところを觀、智といふも未だ盡さず、情といふも未だ眞ならず、意といふも未だ全からざる渾然

——(活　死　人)——

何ぞ　頓に　俗海を拋つて　猛く浮嶽を悟らざる。
好し　霞を碧嶠の前に餐ひ、
堪へん　氣を松峰の下に煉るに。
造化を　斡旋し、
陰陽を　反覆し、
列宿を　九鼎の中に燦たらしめ、
萬化を　一壺の内に聚めば、
千朝　功滿ちて　名は仙都に掛り、
三載　殷勤にして　永く萬劫を鎮せん。
恐る　爾の來ること遲くして　身の泉下に沈まんを。

其二の前半に曰く、

莫れ、樽酒を將ゐて浮囂を戀ひ、
鎮に鄽中に向て腰を繫がるゝを作す。
龍虎動く時　雪浪を拋たば、

的として丹家の秘なり。重陽之を讀むこと數過して、方に[illegible]待る時、[illegible]と。卽ち之を火中に投ぜしめ、且つ曰く、功成らば速やかに東海に往け、邱劉譚中に一隻馬有り、其[illegible]之を[illegible]にせしと。言畢つて忽ち所在を知らず。

道者は何人ぞや。正宗記には、蒲坂永樂、是れ居る所といひ、密國公の撰する所の碑には、濮の人と云ひ、二文に皆年二十二と云へりと記す。其人其事、尋ぬ可きが如く、尋ぬ可からざるが如し。畢竟悠謬の談、朦朧の事、强ひて之を論ぜんか、所謂癡人の前に夢を說く可からざるものなり。假令論究し得て、微に入り細に入るも、昧者永く瞶々、論ぜずして之を混沌儱侗に附するも、達者旣に了々たるもならん。

重陽是に於て修眞の念々振ひ、全く復世事を顧みず。幼女を携へて姻家に送り、其の生育婚嫁を舉げて之を委ね、家を出で妻を棄て、自ら重陽子と號して、始めて眞の道人となりぬ。其翌金の大定元年、重陽年五十、異人に遇ひて心機一轉してよりの第三年、終南山の南時村といへるところに、地を掘りて土窟を作り、其中に安居して、寂寞として世と相絕ちぬ。一は資財旣に乏しくして、屋を葺き室を構ふるの力無くなりたればなるべく、又一には一切を屏謝して、全く世俗の因緣を斷絕せんと欲したるなる可し。然れども眞の目的は、唯此の一條のみにあらざるなるべし。蓋し古より道を體し眞を證せせんとする者、大抵皆獨自一個の心、獨自一個の身、獨自一個の性命、獨自一個の精氣を以て、直ちに宇宙に當り、緊しく古今に對せんと欲す。故に或は土穴に潛み、或は石窟に坐し、或は曠野荊棘、人の終に到る無き處に飄浪し、或は深山幽峯、鬼も亦居らざるの地に玄默す。釋迦の山に於ける、基督の野に於ける、マホメットの洞窟に於ける、皆純粹の全獨自一個を以て、窈然湛然と時間空間に直面し、我の由つて來るところ、我の去つて往くところ、我のこゝに立つところを觀、智といふも未だ盡さず、情といふも未だ眞ならず、意といふも未だ全からざる渾然たる一體

を以て、器世間非器世間未分の境に入り、或は人と境と時と、三亡一存するの地に出で、眞に人我天地三世の源頭に立ち落處を得んとす。是に於て食を斷たんと欲するに非ず、食もおのづから斷え、坐を靜かにせんと欲するにあらず、坐もおのづから靜かにして、眼も見ると見ざるとを知らず、耳も聞くと聞かざるとを忘るゝに至るなり。是れ學問思辨、指擬忖度の事にあらず、學問思辨、指擬忖度の到る能はざるところに到らんとするなり。因緣和合、飲啄笑哭の邊にあらず、因緣和合、飲啄笑哭の管せざるところを管せんとするなり。古の道人輩、根器に大小あり、淺深有りと雖も、皆此處に於て、乾坤混沌、陰陽未分以前の消息を探り、日月は壞盡し、金石は灰飛する以後の光景を搜る。孔子は人世の聖なるも、猶ほ祈禱するの言あり、祈禱とは何ぞや。莊子は山野の賢なるも、猶ほ心齋の說あり、心齋とは何ぞや。牛頭の懶融、石室に枯坐すること年有りて、五祖の點破するところとなるは、世の禪を談ずる者の喋々するところなるが、志有る者の人を避けて岩竇に居る、ひとり懶融のみならず、もとより甚だ多多なるなり。重陽の土窟に在る、又何ぞ異とするに足らんや。

重陽の俗を離れて窟に入る、もとより復徒に空しく地上に出で日下に遊ぶを欲せず、得る無くんば斃れて而して已まんことを思ふ。故に自ら土窟を視て以て、身を横たへ骨を埋むるの處となす。されば此を目して家と爲さず、此を觀じて以て墓となす。自ら墓の側に高さ數尺の塚を築き、上に一方牌を掛け、牌上に王某靈位の字を寫す。墓の深さ丈餘、長物を置かず、兀然として獨り起居し、自ら名づけて活死人と爲す。墓の四隅、偶々存するところの海棠四株を植ゑて標と爲し、笑つて曰く、吾將來、四海の教風をして一家と爲らしめんのみと。

是の如くにして死坐或は旬日に及び、乞食或は一時を濟ふ。自ら歌つて曰く、

活死人兮　王嚞　乖なり、

水雲　別に是れ　一僊翁。
道名は　喚んで作す　重陽子と、
諱號は　稱して爲す　没池埋と。

又曰く。

　活死人兮　活死人、
行果を談ぜず、因を談ぜず。
墓中　自在にして　吾が意の如くし、
占め得て　逍遙　六塵を出づ。

又曰く、

　活死人兮　活死人、
公の與に　今日　洪因を説く。
墓中　獨り死するは　眞に嘉話、
枕を並べ　棺を同じうするも　悉く塵と作らん。

又曰く、

　活死人兮　活死人、
活中に死を得るは　是れ良因。
墓中　閒寂として　眞に虛靜、

隔斷す　凡間　世上の塵。

又曰く、

活死人兮　活死人、

害風は　便ち是れ　我が前因。

蓦中の這箇の眞消息、

水を出づるの白蓮　肯て塵を惹かんや。

又曰く。

外人は識らず　裏頭の人、

門より喚出し來らば　此の因を得ん

明月　淸風　我を笑ふを休めよ、

這回　偏に似て　紅塵に遠ざからん。

此類の詩數十首、皆當時の口號なり。又述懷の詩數十首有り。一に曰く、

紫蟹　芝巾　始めて先づ崩ゆ、

採り得て來る時　旋旋に烹る。

休恠　欲し金丹を論ずるを白さば
只要す　眞靈　水性の全きを。
請ふ看よ　崑崙　山上の景、
瑠璣　光彩　粲川に接す。

又曰く、

蓄地　裏面に　黄芽を看る、
瓊蘂　金枝　玉花綻ぶ。
朶朶　玲瓏　清氣上る、
玎璫たる清韻　吾家に屬す。

又曰く、

蕩然として提住す道の元初を、
幻化　方に知る　余に屬せざるを。
一箇の光明　眞了了、
五般の彩䴸　目如如たり。

其意大抵自ら策進するか、人の永く惡趣に墮するを哀むか、或は又微しく丹家の消息を露はすに在り。乃ち知る重陽が墓中に在りて爲す所の事、坎離龍虎、結丹養胎の工夫に他ならざるを。

墓中に在ること大定元年より同三年に至る。道蓋し成る有りて、大定三年、重陽年五十二の秋、活死人の

之を塡め夷らげて、劉蔣村に遷り、茅を結んで焉に居る。時に和德瑾といふものあり、
輸槩を攻め、長じて刀筆の吏と爲る。心を存する敦厚、高人勝士に遇へば、就いて道に參せざるなし。天德年間、重陽が一道者に會ふに先だつこと十年ばかり、部椽の出身を以て、方に官途に游仕せんとしけるに、忽ち一道者ありて門に過ぎりたり。德瑾延いて家に至り酒を酌み玄を談じけるに、大に其意に適ひ、少らくして去りたり。其後の日に道者復至り、臂に一梟を擎げ居けるが、德瑾に謂つて曰く、此物かくの如く大眼なりと雖も、終に人を識らずと。德瑾乃ち異人たるを思ひて、因つて其の鄕里姓名を問ふに、答ふることも無くして去りぬ。後に月餘にして道者復來りて、德瑾が家に止まりしが、身癘疾に染みて、膿血汚穢、殆ど近づく可からず。德瑾爲に醫を招き療治するに、百藥も功無くして、歲を經て乃ち死したりしかば、禮を備へて葬りぬ。又數月にし一老媼あり、門に詣りて泣いて且つ告ぐるやう、老身たゞ一兒有り、雲水を嗜みて、家業を事とせず、近頃貴宅に游居せるを聞きて、特に來りて相尋ぬと。德瑾其の既に死したるを告ぐれば、老媼慟哭して已まず、老身と兒と、たゞ是れ二人、兒今既に死す、吾が身を如何にせんといふ。德瑾已むを得ず、請うて母の禮を以て之に事へけるが、一日老媼泣いて訴へて曰く、吾一たび壙を啓きて吾兒の面を覩んと欲すと。告ぐること再四、德瑾も情之を禁むるに忍びず。終に是非無く其塚を發きけるに、但空棺有りて屍有る無し。愕然として視るに、秘旨一幅有り。顧みるに老媼も亦所在を失ふ。德瑾驚き嘆じて曰く、吾今眞仙に遇へり、倘永へに塵中に碌々するを甘ずべけんやと。終に妻子を棄て、衣を易へて道に入りぬ。後に和玉蟾と稱するものは即ち是れ此人なり。玉蟾、王重陽が異人に遇ひて道を傳へ、精苦して功を成せるを聞き、乃ち往いて參同して共に居りて道に勵みぬ。玉蟾は蓋し重陽を師とし友とせるものなり。

玉蟾の外に李靈陽といふものあり。終南縣の人にして、聰明特達、學問淹博なり。靈陽も天德の間に異人にあひて

の句あるもの、海蟾に値遇するに因る。又重陽が虞美人の詞に、

害風　水ゝ飲む　知りぬ多少ぞ、
此に因り　玄妙に通ず。
白麻の衲襖　布の青巾。
好模　好様、
眞個に好精神。

とあるもの、飲水得酒の事ありしに因る。虞美人詞の註、詳に當時の事を記す。重陽の酒を飲まさるに至るや、不飲酒と題するの一絶有り、曰く、

醒め來つて飲ます　懷中の酒、
達して後　別に傳ふ　物外の杯。
衒ふ莫れ　向雲　隨處に有り、
自然に　歩を擧げて　蓬萊に到る。

酒を嗜むの重陽にして酒を飲まさるに至る、眞に是れ達後別に傳ふ物外の杯なるものなり。酒は元是れ水中に火を藏するもの、人此の陽火を愛して杯を擧げ盞を把る。水を飲んで醉を得るに至るは陽火の氣が内に餘り有るに因る、復水中

る。もとより玄門の巨頭なり。名は宗、字は宗成、燕山の人、年二十六にして、明經を以て甲科に擢んでられ、遂に仕へて累遷して上相に至る。道を愛し、命を讀するも、未だ其妙を得ざりき。一日道者有りて來り謁し、姓名を問へども默して答へず、但自ら正陽子と稱す。乞ひて金錢一文、鷄卵十枚を得、金錢を案上に安き、高く十卵を累ぬ。海蟾これを見て、驚嘆して曰く、危い哉と。道者曰く、相公の危きこと更に此より甚しと。海蟾頓悟して、棄世の意を發し、遂に印を解き官を辭し、佯狂歌舞して家を出で、衣を易へて卑賤に處り、形を辱しめ跡を埋む。當時の一歸に云ふ、

拋離す　火宅の　三千口、
屏去す　門兵　百萬家。

と。其後遠く秦川に遊びて、眞を太華の前に陶し、身を終南の下に遁れ、精を養ひ氣を煉りて、復前次の道人に遇いて丹訣を受け、正に是れ鍾離正陽なるを知り、以て眞を成する至る。忽ち一日代州諄寧觀に於て墨水を以て潑して、鶴齊壽の四字、およそ一丈餘なるを成し、并に自ら眞を[illegible]間に寫し、又西蜀成都の青羊宮に於て、墨水を以て潑して清安福壽の四字を成し、代州鳳凰山來儀に於て壽山福海の四字を成し、三處相隔たること、實に數十里ならざるに、皆同日にして之を書し、以て神變無方なるを表し、世俗を警醒して、世に神異有るを知らしむ。顯はすところの靈跡甚だ多し。黄凝陽、張紫陽は即ち其の直授の弟子にして、紫陽の悟眞篇は傳へて今に至り、玄門の秘旨、長く惠を來者に貽れるものなり。海蟾其の終るところを知らざるも亦是れ終南に隱る。重陽の遇ふところ實に此人と爲す、海蟾を目して[illegible]門の叔と爲す所以なり。海蟾後に元の武帝に封ぜられて、正大三年、明悟弘道純佑帝君となる。其の著はすところ[illegible]歌一篇、今猶ほ泯びず、意旨深切、詩詞清亮、道を學ぶ者之を稱す、

又大定五年、重陽終南の上清太平宮に遊び、宮の壁上に書して云ふ、

一活)

死

一(人

害風　害風　舊病發す、
壽命は過ぎず　五　十六。
兩箇の先生　決定して來り、
一靈の眞性　捜刷を成さん。

同じく六年、重陽年五十五、長安の櫟村の呂道人の庵の壁に書して曰く

地肺の　重陽子、
呼んで爲す　王害風。
來る時　日月　長く、
去る後　西東に任す。
伴を作す　雲和水と
鄰を爲す　虛と空と。
一靈　眞性　在り、
衆心と與に　同じからず。

前年太平宮の壁上に書するところの詩と、此年呂道人の庵壁に書するところの詩と。皆象の二十ト、境界を示すもの。

故に寺徒等に告げて曰く、其月某日、吾将に世を遁らんとすと。期に至つて儼然として逝く。[illegible]る者なり。當時一禪師評して曰く、明山死に臨んで猶ほ小兒を哄すと。

重陽の道既に成り、機遂に發す。大定七年、四月二十六日、自ら其庵を焼く、近隣争ひ來つて火を救はんとすれば、重陽の婆娑として其間に舞へるを見る。人其故を問へば、答へて曰く、三年の後 別に人ありて修築せんと。乃ち詩を吟じて曰く、

茅庵　燒了して　事　休休。
決ず有らん　人々の　却つて修せんと要する。
便ち惺惺　誠に猛烈なるを做すも、
怎生　學び得ん　我が風流。

と。其日甘河鎭に宿して衆に辭して曰く、余東海に馬を捉へ去らんと。邱劉譚中一俊馬を捉へよとは、正隆五年醴泉に於て異人の教へしところ、烏兎七年、今は則ち重陽自ら去つて此事を試みんとす、重陽それ自ら信ずる所有るか。邱劉譚か、九龍譚か、馬は是れ眞馬か、人の姓の馬か、語は解す可く解すべからざるの間に在り。これより邁邇として東に往きて、咸陽を過ぐ。咸陽に史處厚といふもの有り、乾州醴泉の人なり。重陽が活死人となれる時より、心之を思慕し、遂に就いて學ばんことを乞ひ、納れられて弟子となり、洞陽の號を授けられたるもの。爾後乞丐して心を錬り、終南郊社の間に往來し居たり。重陽今遠く東に去らんとするに臨み、侍行せしめんとしたるに、洞陽は母の老いたるを以て遠遊を辭す。重陽乃ち自ら一幅の畫を作り、一の三髻の道者ありて、其傍に青松欝として茂り、白雲これを繞り、仙鶴婆娑たるの狀を描き、洞陽に附りて曰く、謹んで之を秘藏せよ、これは他日參同の符と爲らんと。

過ぎて、其壁に題して云ふ、

邱譚に　王瓜　馬劉を捉へ、

崑崙　頂上に　玉毬を打す。

偏還　撥して往く　寰海の内、

贏得ん　三千八百籌。

と。是より重陽風餐露宿して、遠く東海に向ふ。函谷の關を過ぎて、來すれば、一故人無し。被るところは一襤褸のみ携ふるところは一鐵鉢のみ。背糧無し、腰纒無し。技無く、能無く、才學の人に賣弄すべき無し。有するところは唯天上の日月の光のみ、路邊の松風のみ、眼前脚下の泉聲山色のみ。鐵鉢を敲いて食を乞ふ。歌つて日く、

猿や馬に騎つて、頭要を逞しくす、

擒へ難し捉へ難し、怎生捨てん。囉哩㖨囉哩㖨。

慧刀開いて、齊しく殺し、君をして根源を認め得しめん也。囉哩㖨囉哩㖨。」

從來の性、本來の命、

形無く質無し、乍生惺めしめん。囉哩㖨囉哩㖨。

汞中の明、鉛中の瑩、

る。携ふるところ、たゞ一鐵鑵、錢を乞ふるも唯此の一鐵鑵、食を乞ふるも唯此の一鐵鑵、[illegible]つては、
鐵鑵携へらる、鐵鑵携へらる、
響聲　敲動して　愚迷を振ふ。
若し響聲して人會得するを要さば、
分たさらん　南北と東西とを。」
鐵鑵の能、鐵鑵の能、
能中　兀兀と　騰騰と。
杳杳　冥々　風を友と作し、
昏昏　默默　月を明と爲す。」
鐵鑵の歌、幾章なるを知らず。鐵鑵の爲に歌有るか、歌の爲に鐵鑵有るか、鐵鑵を敲き來つて、人の爲に音を發するか。
吾が爲に食を化するか。鐵鑵も知らず、害風も知らざらんとす。
是の如くして乞食叫化し、函關の西より、一路迢々、東海の濱に至る。途に衛州を經。衛州に蕭眞人といふものあり、
仙風道骨あるを以て、世の稱するところたり。重陽これに見えて、相提携せんと欲し、就いて語る。蕭もまた拒まず。
然りと雖も、盤桓數日、話相投ぜず、重陽乃ち之に猺山溪の詞を贈る。詞に曰く、
眞人　已に悟りて、
四海　名先づ到る。
只　聲聞有るが爲に、

却つて隔了す　玄元の妙道。
憐む可し、仙骨　落ちて入る鬼形骸、
一般に衰へ、一般に老い、
空しく恁　一般了。」
豈知らんや　玄妙を、
剛に　身心を把つて做る。
日を度る　聾盲の若し、
諳る　丹砂　爐竈を識らざるを。
好し、二物を將て、鼎内に結んで丹を成し、
服餌し了し、長生を得て、
手を携て　蓬島に歸せん。

詞意十分に考婆心切、眞人が空名有つて實證無く、茫々然として徒らに目を送るを惘み、着手の處の別に存する有るを示すも、眞人之を讀みて、終る悟る能はず、但點頭するのみなりき。由來抗顏して人の師と爲り、壇に上りて法を說き道を示し、美なること冠玉の如くにして、而も内空しき者有り。道佛の徒、特に此弊多し。經を[illegible]、或は[illegible]も持する能はず、經を讀み[illegible]

熱たり。個々不[illegible]にして、[illegible]にし指に任す。[illegible]

迷ひ、行に拘束無し。一日奇疾を得て、殆んど救はれざるに至り、夢に僧家の地に入り、已に[illegible]

遂に幻化の理を悟り、存心神道せんとす。偶ゝ重陽の嘔唖嗞を唱へて、披峽を過ぐるに遇ひ、共の[illegible]情爽適にして、雲霄に飛擧せんとするの態有るを望見し、驚いて就いて之と與に談る。機縁契合して、禮拜して弟子と爲る。重陽乃ち修眞の秘旨を授け、内功を積ましむ。是に於て慨然として家を棄てゝ長往し、杖策して西のかた關中に入り、終南の甘水の側に廬を結んで獨り靜かに眞を煉る。後に明昌の初、金の昌宗に召されて、金丹の道を問はる。乃ち答ふるに、此は山林の道人の尚ぶ所なり、陛下は四海生民の主たり、必ずしも意を此に留めたまはざれ、といふを以てし、但對ふるに黄老の清靜治國の道を以てして、大に帝の悅び敬するところとなりしもの、即ち是れ此人にして、著はすところの全道集、世に行はるといふ。

少林の達磨、面壁九年、慧可を得るに及んで、其道大に弥く。王重陽、得々地に函谷の西より東海の濱に到る、馬丹陽を得るに及んで、全眞の教、はじめて其勢を發す。東海に馬を捉ふるは、もとより懸記有り。重陽の東に行くもの、後より之を論ずれば、全く馬譚劉邱の徒を得るを期する者の如し、奇といふべし。重陽大定七年四月を以て自ら茅庵を焚き、直ちに東海を指して發し、同年秋七月十八日、寧海洲に抵る。七月十八日、七月十八日。嗚呼是れ王馬始めて相見するの日、全眞の教の天下に光被するに至るもの是れより起る。

其日寧海の人馬從義、友とする所の高巨才、戰法師と偕に、范明叔の怡老亭に飲む。范明叔も亦馬從義の親昵する所なり。時に一道人あり、鬚髯甚だ美はしく、面は運化の如く鮮やかに、眼は大にして口に過ぎ、身長六尺に餘り、容氣堂々、聲は巨鐘の如し。鐵罐を手にして、奕として其席に至る。戰法師問ふて曰く、布袍竹笠、瓢を背にして來る、何ぞ

勤むるやと。道人曰く、宿縁仙契あり、徑ちに來りて訪謁するなりと。從義[illegible]相視て一[illegible]
これを食ふ。異しみて其故を詢ふ。答へて曰く、廿は晋中より來ると。人また奚よりすると問ふ。曰く、終南山より特
に來りて、醉人を扶くと。是に於て馬從義心甚だ之を異とす。これより前數日、馬また高戩等と此亭に飲める時、酒酣
にして詩を賦して曰く、

元を抱き一を守る　是れ工夫、
懶漢　如今　一も也た無し。
終日　杯を銜みて　神思を暢ぶ、
醉中　卻つて有らんや　那の人の扶くる。

と。馬と道人ともと相識らず、復其詩を得て知る可きの理無し。然るに今卒爾として言を出して、三千里を遠しとせず
して特に來つて醉人を扶くといふ。馬の甚に異とする所以なり。馬乃ち問ふ。何をか名づけて道と曰ふやと。答へて曰
く、五行到らざる處、父母未生の時と。これより主客玄を談じて、席上に風を生ず。道人の言ふところ、箭箭皆鵠に中
り的を破る。是に於て從義これを邀へて私第に居き、問答往來論談す。自ら作るところの羅漢頌十六首を出して示すに、
道人筆を執りて淋和し、宛として宿構に出づるが如し。從義遂に心服して師事す。此は是れ翰林直學士王利用の撰する
所の、馬宗師道行碑に據る。
馬從義は卯[illegible]

に人稱して馬半州といひ、弟姪三人、皆道士に擢でらるゝを以て、世に道風有り、從義は其の末子なり、本貫は人
月清貝、客有りて器皇として細視を案上に擱つて去り、往くところを知らず。其の甚だ重きを以て揣摩いくたびを試るに、金色目を射る。乃ち之を藏して以て待つ。旬日にして客至りたれば、即ち之を與ふ。客謝して曰く、吾は呂仙といふものなり、家は幽谷村に居る。砂金を淘採するを以て業と爲し、積んで兩餘を得、將に市に鬻がんとしたるに、盜に逼逐され、幾んど刑に陷らんとす、公に賴りて幸に免るゝを獲たり、願はくは兩分して以て報ひんと。揚固く辭して受けず。呂仙曰く、公黃向の風有り、後當に高士有りて出づべしと。他日幽谷の人に訪ふに、呂姓の者有ること無し。始めて其の異人たるを知る。從義の母は唐氏、夢に女仙麻姑の丹一粒を賜ふに會ふ、呑んで而して分娩す。實に金の大會元年五月二十日なり。

從義は是の如きの家に是の如くにして生る。幼時常に雲に乘じ鶴に駕するの語を誦し、夢に數ゝ道士に從つて天に昇りしといふ。崑崙山の道士李無夢、見て之を奇として曰く、額に三山有り、手は垂れて膝を過ぐ、眞に大仙の材なりと。因つて頌を爲りて之を稱す。孫忠顯といふ者、無夢の言を喜び、女富春を以て之に妻たらしむ。子を生む三人、延珍、延瑞、延珪といふ。

從義一鄕の右族に生れ、財に饒にして鄕に富み、資性の美、孝悌を以て稱せられ、加ふるに聰明颖慧、學を好み經に通じ、又財を輕んじ義を重んじ、人に貸して其の還す能はざるを見れば、其券を焚く。恔格學問、操行存心、皆人の瞻仰するところと爲る、其の日常の平穩快活なりしこと、知る可く。かつて佃客劉進の盜んで耕牛を殺せるの罪を許せるが如き、又惡少年の面に唾せるを怒らざりしが如き、其の粹然たる美質を見る可きもの多し。人是の如きの境に居れば、晏如として其の清福を享樂するを常とす。然るに從義は、胸中別に人に語らざるもの有つて存せしか、抑ゝ又宿

禁内より發して、人間の榮華の取るに足らざるを思ひ、眞諦の清[illegible]道を思ひしは、其の平生に照らして明らかなり。傳へて曰く、從義嘗て夢む二人の褐衣せる者の、一人は[illegible]同行を補せるが跪き且つ泣くを。二人曰く、我輩十萬人の性命は、公の主どる所に在りと。言訖つて斧つて南巷に入る。從義之を追ふ。屠者の劉清の圏中に入るを見る。顧みるに欄上に頌有りて云ふ、我輩己亥十萬人、大半已に辛巳に殺さる。此門是の若く慈悲ならず、世々軸頭常に厮抹せんと。夢覺めて屠らるゝ猪の聲を聞く。往いて之を視れば、則ち清の子阿澤二猪を屠る、其一は肩白し。止めんと欲して及ばず。始めて夢中の人の己亥即ち猪なるを悟り、又辛巳は乃ち劉の生るゝ所の歲なるを悟り、乃ち夢中誦むところの頌を壁間に書す。然れども屠者心剛、之を誘ひ醒ます能はず。從義是に於て、生死の輪廻、萬化の起止變滅に思ふありて、心安き能はず、術士孫士元に詣りて之を占せしめ、以て自ら覺る有らんと欲し、因みに吾が壽を稽へしむ。子元曰く、君の壽、四十九を踰えずと。從義嘆じて曰く、死生固より人に在らず、なんぞ有道の人に親みて、死生を越ゆるの計を爲する若かんやと。又傳へて曰く、從義一時、客と奕棊す、乃ち聲を失して曰く、此の一著、下し得ば、是れ死せざらんと。夫れ生を憐み死を傷むの心の、常に中に存する有れば、夢に二猪の苦に訴ふるを聽くも、亦怪むに足らざるなり。人間の如露如電なるを思ふの心、久しく中に蓄ふる有れば、術士の言に感ずるも、亦自ら然るの勢なり。超生越死の心、恒に中に萌ゆる有れば、奕棊の手談の際、偶ゝ聲を失して、内の念ふところを發するも、亦應に之有るべきの事たり。此等の事、馬從義未だ王重陽に會はざるの前にあつて、既に向上入道の念の、胸裏に氤氳蓬勃たるもの有りしを語るものにあらずして何ぞや。

從義既に重陽にあふ、機緣投合して、これを家に居く。もとより長者を以て之を遇すと雖も、然れども從義の奉ずる所のものは孔孟の道にして、重陽もまた儒を斥けずと雖も、其の主とするところの玄に在るを以て、未だ遂に全く信許

せず。劉祖謙の重陽祖師仙跡記に、師も亦儒流中の豪傑なる者、[illegible]責を得たり。然も從義は重陽の談論甚だ聽く可きもの多きを以て、一菴を造りて之を住めんと欲し、重陽と與に南園に徜徉して、重陽に其地を擇ばしむ。是より先に從義嘗か南園の地中より一鶴の起つて出づるを夢む。重陽か地を指すに及んで、即ち鶴起つの處なり。從義心大に之を異む。菴成るに及んで、重陽之を名づけて全眞といふ。全眞の名、實にこゝに起る。

重陽馬氏園中の全眞庵にあり、將に從義を點化せんとするも、從義又未だ遽に屈せず。恰も釋迦の教法の大に興る、迦葉を服して其の弟子と爲せるに因るも、迦葉初め屈强にして容易に釋迦に下るを肯んぜず、數々其の及ぶ可からざるを思ふと雖も、吾が道の眞なるに如かざる也、と云ふこと再三なるが如し。重陽乃ち悠然として庵居し、徐ろに機の熟せんことを待つ。從義の妻、孫富春、從義より長ずること四歳、これも亦聰明温良にして、才學あり。重陽の言動を觀て、其の有道の人たるを思ひ、心を傾けて禮敬す。

時に崑崙山の道士丘處機、字は通密といふものあり。家世ゝ登州棲霞の名族たり。年わづかに十九にして、大定六年、俗を棄て道に入る。敏慧にして學を好み、眉宇閑曠、擧措詳雅なり。善く相する者言ふ、必ず帝王の師たらんと。年未だ弱冠ならずして、夙に玄風を慕ひ超然たる意氣、塵世の末流に在るを肯んぜず。重陽の道譽を耳にして、就いて教を請ふ。重陽一見して之を愛し、與に語ること終夕、玄機契合す。因つて詩を贈つて曰く、

細密の　金鱗　碧流に戲れ、
能く香餌を尋ねて　鈎を吞むことを命す。

予に綏々と綸線を收められば、
拽いて蓬萊に入つて永く自由ならしめん。

處機拜して之を受け、遂に重陽の銀鉤を呑み、玄綸に拽かるゝを肯んじて、其の弟子となり、長春の號を得。これより旦夕左右に親侍し、洒掃の役を執り、學月に進み、道日に長ず。寂通居士陳時可の撰するところの長春眞人本行碑、長春の一生を記して、論叙其要を得たり。銘の辭に

全眞の一派、道之が源たり。鼻祖は其れ誰ぞや、聖なる哉玄元。誰か其れ之を導ける、重陽伊れ始む。誰か其れ之を大にせる、子長春子。（下畧）

と云へるもの、實に浮詞に非ず。後に千古の英雄たる成吉思汗に印度に見えて、直言するに多く人を殺す勿れといふを以てし、成吉思汗をして禮遇せしめ、大に道教を扶持するに至らしめしものは、實に此の邱長春なり。當時眇然たる一年少の道士、那んぞ知らん是れ他日大機大用を逞しくして、去至する所、人をして其の馬首を擁して以て感泣する者有るに至らしむるの活神仙たらんとは。銀鉤玄綸、釣者もとより好し、被釣者亦好し。長春の重陽に遇ひてより、學問道德大に進みて、馬丹陽を除きては全眞敎門第一の人となれる、因縁まことに不可思議といふべし。長春は元史に其傳あり。重陽の長春を弟子とする、蓋し大定七年に在り、長春時に年二十。

黄老莊列の言を愛して、恬淡無爲の道を喜ぶ。性の好むところ、凡そ林泉閑寂の地に遇へば、徘徊吟詠して、終日歸るを忘る。深く易數を窮めて、占卜の術に通ず。大定七年の秋、王重陽西より來りて、海寧の市に遊行す。廣寧たまたまトを肆に賣る。重陽一瞥して、其の言動の凡ならず、仙骨度す可きを見、之を感發せんことを思ふ。士大夫環列して坐す。重陽突として入り、遂に廣寧の面に背いて坐す。廣寧曰く、君何ぞ頭を回らさゞるやと。重陽曰く、只恐る先生の背て回頭せざるをと。廣寧悚然として驚き、瞿然として覺む。回頭の一語、世に面するの頭を回して、道に嚮ふの眼を開くの意を含むを以つてなり。是に於て廣寧起つて禮し、肆を閉ぢて重陽に從ひ、閒話す。往來問答、石の水に投ずる如きあり。廣寧詩を獻ず、其の句に曰く、

同席の諸君　太古を樂しむ、
未だ明らかにせず　黒白希夷の路を。

重陽の答ふる詩の句に曰く、

足間雲霧　接し來る時、
日に要す　先生　清靜の句。

これより廣寧、重陽に歸向するの意あり。翌年三月に至り、遂に世を棄てゝ弟子となる。重陽之に法名を大通と與へ、廣寧子と號せしむ。大定七年、廣寧始めて重陽に會ふの時、年二十八。

重陽の馬氏園中の全眞菴に在るや、仙風道氣漸く四方に播す。譚玉、字は伯玉といふものあり。寧海の人なり。父は理錢の工なり。理錢の工は、黄金白銀を以つて物を造る、權衡出納の間に於て、多くは私利を爲す。玉の父、正直善良

人の俤するところとなり、且つ慈仁惻怛の心に富む。玉幼にして秀發、聲韻朗然、人其の凡常児にあらざるを知る。六歳にして、戯るゝに因つて井に落つ。人急に井に下つて之を救ふに、玉の晏如として水に坐するを見る。又幼時居る所火を失し、巨棟榻前に砕け落つ。玉方に熟睡す。呼んで之を起たしむるに、神情自若たり。年十五にして詩を作る、詞旨清發、其の蒲萄篇、一時の人々に膾炙するに至りしといふ。やゝ長ずるに及び、詩書を渉獵し、草隷を工にし、風神飄逸、淡泊自ら娯む。一朝酔ひて風雪に途中に遇ふに因つて、風痺の疾を得たり。乃ち喟然として嘆じて曰く、吾が平生の爲すところ、世に於て鮮咎無し、今複奇疾に遇ひ、身廢人たらんとす、天の佑けざるや、藥石それ吾を如何と。日夕に北斗經を誦して濟を求む。忽ち夢に大席の空に横はるを見、飛昇して之に據らんと欲す、北斗星君の冠服して坐するを瞻、叩頭作禮し、恍然として覺む。玆より道を奉ずるの心篤し。重陽の馬氏園中に在りて、道法卓異なるを聞き、杖に憑りて從ひて謁し、痼疾の或は癒されんことを需めんとす。重陽戸を扃して納れず。玉乃ち其の眞に道有るを思ひ、堅く自ら守りて退かず、終夕剝啄して已まず。已にして門忽ち自ら開く。重陽悅んで以て仙緣有りと爲し、納れて而して與に語る。談論機に契ひ、水魚相遇ふ。夜更く。重陽庵中に宿せしむ。時に厳冬飛雪、庵中荒涼、海藻を籍いて寐ぬ、寒くして睡る可からず。重陽遂に足を展べて之を抱かしむ。少頃にして温熱煦々、汗流れて體を被ひ、身を炊甑の中に置くが如きを覺ゆ。拂曉に及びて、重陽盥洗の餘水を以て、玉をして面を滌はしむ。從つて之を滌ふに、風痺の患、既に大に寛なり。是に於て心服して之に事ふ。居ること月餘にして、宿疾遂に癒ゆ。玉の妻嚴氏、庵に詣りて呼び

一心道に向ひて同退する莫れ。
清虚本是れ眞仙の路、
只要す安居養內の顔。

修養數年の後、重陽門下四俊の一、譚長眞と稱さるゝ者は即ち是れ此の譚三になり。濟國公の譚眞人仙跡碑銘ありて、其の一生の行蹟を盡す。長眞の著はすところの詩詞水雲集一卷、長春の著はすところの磻溪集と共に傳へて今に至る。重陽門下の著述、郝太古の著はすところの太古集は易理を以て勝り、長春の磻溪集は詞藻を以て勝り、水雲集は磻溪集に次ぐ。皆各々其の風丰精神を見る可き也。

馬從義夫妻、中に道に嚮ふの心無きにあらずと雖も、未だ遽に首を重陽に屈せず。重陽もまた之を強ひずして機の熟するを待つ。十月の朔に至り、重陽從義に謂つて曰く、吾や道に依り儒佛を兼ね修む、汝何ぞ自ら決せざるや。我今庵を鎖して、齋居百日せんと欲す、と。從義其言に從ひて、環堵を築る。重陽內に在りて、日にたゞ一餐するのみ。隆冬邱寒、風雪四入すと雖も、唯筆硯几席、布衣草履あるのみ。而して形神和暢、寒谷に春回るが若きの態有り。意外に時に教を乞ひ詩を求むる者あれば、重陽應酬揮灑して、綽々として餘裕有り。是に於て從義も漸く眞に其の道術有るを思ふ。從義の居る所と菴と、幾百歩を隔て、復重街有りて其間に在り。從義夜自己の宅中の樓上に寢ぬ、門戶扃閉して人を通ぜず。然るに時に重陽の忽然として室中に入り來り、親しく從義に對して談論すること有り。其の由つて來る知らず、去るに及んで之を追ふも及ばず。去つて後に門戶を檢するに、更に出入の形跡無と能はず、或は人をして庵中を窺はしむるに、たゞ重陽の儼然として就

道に非ずして、深奥の所證、思議す可からざるもの有るを思ふ、

重陽に在つては、形と神との理に達し、性命との機に通ず、是の如きの事、まさに奇と爲すに足らざるべし。而も世常の人に在つては、誰か敢て身外に身有り、神出でゝ神を現ずるを思はんや。重陽果して神を出せしか　從義果して形を認めしか。悠々の談、今の人皆疑つて、觀中の事となし、夢裏の象と爲さんとす。然らずんば荒唐の談、烏有の事として、一笑に附して信ぜざらん　す　然れども今の世に「Projection of the Astral Body」といふものは、卽ち道家に所謂「出神」にして、歐人等の考驗に先だつ數百年にして此事有り、歐人等の論議、實に道家にして珍とするに足らざるなり。Col. de Rochas, of Paris, M. Hector Durville. Dr. Baraduc. M. Charles Lancelin of Paris. 等の談を聞けば、近人は惘然として、「神と形」の事　吾人が凡常の見を以て論ずるが如きものにあらざるを思はんとす。近人の神と形との事に於けるや、思を致すも亦淺しといふべし。重陽と丹陽との事は姑く措くも、二千年前　須菩提の禪室に於て五比丘等に先だつて釋迦の成道出山を知り、頻婆娑羅の獄中に在つて法悦を得たる如きは何ぞや。此も亦近人の見に從へば、たゞ是れ夢幻の事なるべし。夢幻の事、夢幻の事。悠謬の談、悠謬の談。一切夢幻、一切悠謬にして可ならんのみ。予今出神の果して能くす可きや否や、果して眞に此事有りや否やを論ぜんとするにあらず、たゞ王重陽の馬丹陽を度せんとして是の如きの事を示せりといふの傳說あるを言ふのみ。人は機關の如し、食餌は石炭の如し、石炭燃燒されて、而して機關動き、食物攝取されて而して人活く、と爲すが如き尋常の見を抱く者に、神と質との一元なり

の所謂性と命とにあらず。全真[illegible]、自ら[illegible]せず。重陽の問神示玄の談の如き、之を語るも亦徒勞無益ならんのみ。而も言語文字の傳ふるところあらざるなし。重陽孟冬の初より、日に詩詞を示して、從義をして和せしむ。今存するところの重陽教化集有り、大定二十三年、馮開升、范懌、趙抗、劉孝友、梁棟、劉愚之等の序を附して行はる。重陽が附詩の一に曰く、

一別す　終南　水竹の村、
家に兒女無く　亦孫無し。
三千里外　知友を尋ね、
引いて入る　長生不死の門

其他藏頭拆字の詩詞多し。儒者亦宮人に取りて興味必ずしも僅からず。これを擧ぐるに懶し。之を讀むも亦懶からん。重陽また梨一枚を與へて從義をして喫はしめ、第十一日に至つて一梨を分つて二と爲して從義夫婦をして食はしめ、十日を經るごとに一分を加へ、第二十日には三分し、第四十日目には四分して食はしむ。百日に至つて　五十五塊を食はしむ。分梨十化といふもの、即ち是なり。當時贈答の詩詞、收めて分梨十化集に在り。集傳へて今に存す。百日に至つて、大定八年正月十有一日、從義遂に資產を以て子の庭珍輩に付し、休書を妻の孫氏に付し、服を易へ簪冠を受け、寧海一市の鉅萬の富者、忽然として乞食の道士となりぬ。當時の從義の心中の消息、道行碑、正宗記、仙源像傳等、並に之を記せず。十化集卷末に重陽が從義に贈るの詩を載す。曰く、

酒初めて醒め、夢初めて驚き。月初めて明らかに、性初めて平らかなり。如し覺悟せば、是れ前程あらん。

從義次韻して曰く、

醉中に醒め、睡中に驚き、暗中に明らかに、箇中に亦明らかなり。心開悟して、前程を得[illegible]從義が夢中歆に、燒き得て白く、煉り得て黃、便ち是れ長生不死の方、の句ありしに因つて、重陽命じて、名を珏、字を玄寶と更め、丹陽子と號せしむ。

馬丹陽、馬丹陽、此は是れ一豪傑、重陽の之を化する容易ならず、重陽の金眞集、教化集、十化集等を見れば、重陽の老婆心甚だ切なるを知り、丹陽が强項不屈なるを知る。丹陽の未だ師道せざるや、夢に重陽に從つて山に入る。且に及んで重陽呼んで曰く、山侗と。從義惺然として、重陽が吾が夢を知るに驚く。丹陽の時に自ら山侗と稱し、重陽の時に山侗を以て丹陽を呼ぶもの、是より起る。又嘗て重陽一日人に謂つて曰く、馬公道を破ると。人曰く、師何を以て之を知るや。曰く、昨日馬公飲酒すること多しと。人これを恠ふに、從義曰く、昨日藥を得て酒を用ゐて引とし、因つて覺えず量を過すと。重陽の丹陽に於ける凡べて是の如し。丹陽の遂に道に入るを致す所以なり。丹陽の妻孫氏、道を尙ぶと雖も、猶ほ家業を捨つるを背んぜず、當時重陽の孫姑に贈る詩に曰く、

一婆　猶ほ自ら　家業を繼ふ、
家業　誰か知らん　錢を壞了するを。
若し是れ　家に居りて　常に舊に似たらば、
馬公は　分の神仙と做る無からん。

君し肯て　剃頭して　覺悟を徹すれば、
名は傳へて　永々に　仙姑と喚ばれむ。

孫富春もまた遂に剃頭して世を棄て、夫の從義が道に入るの翌、大定九年重午の日、金蓮堂に詣りて出家し、名を不二と改め、清淨散人と號するに至る。重陽の道を傳ふる者の唯一の女仙なり。其の著はす所の孫不二元君法語傳へて今に至る。詞氣清澀、的に是れ女仙の語なり。別に丹道秘書三卷あり。法語と同じく數葉の小册、多く言ふに足る無しと雖も亦是れ馬丹陽の一有緣の人たりしを示すものといふべし。詩に曰く、

白鶴に乘ぜず　鸞に乘ずるを愛す、
二十の幢幡　左右に盤る。
偶　青壇に入りて　尋で一笑す、
降眞香は繞る碧闌干。

又一章、

小春の天氣　暖風賒る、
日は照らす　江南處士の家。
催し得て　臘梅　先づ蕋を逆らす、
素心の人は對す　素心の花

丹陽夫婦、心を重陽に歸す。重陽が丹陽を度し得て、道法に猛進せしめし時の喜知るべし。丹陽も亦意を決して道に就く、決烈の意氣、金石を貫かんと欲するあり。重陽丹陽をして葬狀を燒いて、復び人間を思はざらしむ。時に詩有り。

曰く、

金鈎を擲下して　恰も一年、
方に香餌を呑んで　綸の牽くに任す。
玉京山上　鵬と爲りて化さば、
我に隨つて　扶搖して　洞天に入らん。

丹陽繼韻して曰く、

風仙　我を化して　已に年を經たり、
悟徹して　鈎を呑んで　線の牽くに任す。
本師に　參從して　雲外に去り、
功成りて　決して上らん　大羅の天。

丹陽又重陽が一別終南の詩に繼いで曰く、

遇ふを得ぬ　當に歸すべし　劉蔣村に、
妻を黜け　妾を棄て　兒孫を屏く。
攀緣　割斷して　雲遊し去り、

　靈明を懐にす　孫を慣はず。
　志　環堵に在りて　大道を悠め、
　玉戸を　斡開して　金門に入らむ。

又當時述懐の詩、丹陽が洞玄金玉集に載す。其一に曰く、

　身は　儒門に在る　三十年、
　知らざりき　一字の　大なることを天の如きを。
　偶　風仙の理に悟徹するに因りて、
　頓に覺る　靈明の　大千に滿てるを。

其二に曰く、

　虛無　浩渺たり　神仙の國、
　蔚崛　鸞際たり　自己の天。
　白口　清閑　冗事無し、
　丹霄　出入して　飛煙に駕せん。

其三に曰く、

　逍遙　自在　三千の客、
　坦蕩　無拘の　一散仙。
　清淨にして　斡開す　壺内の景、

無爲にして　踏砕せん　洞中の天。

丹陽の道に入る、時に年四十六。丹陽の著すところの洞玄金玉集一卷、漸悟集、丹陽語錄等、および重陽と應酬するところの、重陽敎化集、分梨十化集等を讀めば、丹陽の藻詞學問、ほゞ窺ふべし。年既に四十六、思慮まさに熟し、經歷亦饒し、此時に當つて鉅萬の富を棄て、家を棄て、妻子を棄つ、豈に草卒の心の能くするところならんや、重陽の道必ず深く其心を動かすところ有りて、而して後に決する有りしや知る可きなり。長春の重陽に歸するや、年甫めて二十なり、聰明絕倫といふと雖も、是れ錦鱗の小魚のみ、容易に金鉤を吞む。丹陽の重陽にあふや、年四十五、學問腹に滿ち、經歷身に存す、是れ玄鱗、鐵翅、老蒼たる大魚なり。なんぞ容易に鉤を含み綸に牽かれんや。丹陽の道に入るを觀て、重陽の內に蓄へしところの者の、たゞ空理と大言とのみならざりしを察すべきなり。

馬東籬の撰するところの、王祖師三度馬丹陽の曲は、此の王馬相遇の事を叙し、重陽が出神入夢、分梨賜芋、遂に點化して道に入らしむるの談を取つて以て劇を爲せるなり。

入夢の事も亦能くす可し。人の心知るべし、人の夢何ぞ知る可からざらむ。巫覡の徒、たゞ僅に淺近の術を得る者も、人の胸中の消息を得。古の婆羅門が、南陽の忠國師が心中に天津橋上に猢猻を觀たるを看破せしは、傳へて今に至るの談、世人の多く知るところたり。他人心中の想像も知るべし、夢裏の光景も知り難からんや。但是の如きの事　思を至玄に致さゞる者に在りては、もとより信ず可からさるのことたり、又[illegible]

の大石に座するに退む、梟首せられて鼠に合ふ。又夜中、口自ら三匝[illegible]ち證[illegible]、[illegible]中に狂歌す。人或は病んで心を失へりと謂ひ、或は謔つて狂無しと爲す。大定八年、年二十七、[illegible]其の村に[illegible]を聞き、弟子の列に厠はらんことを願ふ。眞君其道を投く可きを知り、爲に今の名を制し、崑崙煙霞洞に從居せしむと。後に大堅に俯し、一足を以て跂立し、鐵脚仙の稱を得たる者、其の爲す所や跋伽林の苦行外道の如しと雖も、志行の堅確精神また知る可し。傳へて言ふ、嫉惡する者の爲に鴆を飲ましめられて而して死せずと。大定二十七年、金の世宗、其の靈聲を聞いて、召して教を乞ふに至る。重陽門下の一傑なり。詩詞の集を雲光集といふ。傳へて今に至り泯びず、其の風韻を領すべし。

馬丹陽既に道に入る、奮迅勇猛、精煉苦修す。其勢蓋し朝に道に進む、夕に死するを辭せざるが如きものあり。乃ち崑崙の烟霞洞に登りて、修煉三昧に入る。忽ち頭痛を患ひて、顱頂ノ裂せんとす。人言つて曰く、馬公將に旦夕を保たざらんとすと。重陽曰く、吾三千里外に特に此人を化す、それ死せしめて可ならんやと。乃ち水を呪して之を與へ、且曰く、凡そ人の道に入る、必ず酒、色、財、氣、攀援愛念、憂愁思慮を戒む、此の外に更に良法無しと。丹陽をして淸淨安閒、坦然廓然洞焉冥焉の境に安んぜしむ。丹陽水を受け教を奉じて、寂々寞々の裏に氣を煉り神を修め、進火退符の功遂に成りて、甘露靈泉の象已に具し、性命雙圓證するに至りぬ。丹陽の病を得て殆んど將に死せんとするは是れ蓋し丹將に成らんとするに當りて、多く起るところの象、是に至りて多少の英靈底の漢の蹉過せんとするものならずばあらず。龍力騰つて泥丸に至るに及んでは、波湧き火閃き、乾坤碎けんと欲し、一身冷えて死屍の如く、氣且將に絕えんとす。此故に必ず師父の力を籍る。重陽既に丹陽の師父たり、丹陽賴つて以て功成るを得たるのみ。此の一番の颶風暴雷並び臻るの境を經て、而して後に性命の本源に到達す。如是にして世の學問思辨の人の、空門の世界

ろとなり、時間の鎚打するところとなりて、而も自ら悟らず、沒首沒尾の比量智を恃みて、高遠幽深と爲し、時間の起頭を問はれ、空間の落處を詰らるゝに至つては、茫々然として一句をも說出し得ざるが如きに異なりて、神仙の家風、空間に遊戯自在にして、時間に超越無礙なるを得るなり。

此年の二月晦日、重陽は丹陽、長春、長眞、玉陽を提げて、崑崙山煙霞洞を開きて之に居る。三月郝廣寧も亦來り從ふ。八月に至り、五弟子を率ゐて、遷つて文登縣の姜實庵に居り、七寶會を立てゝ、衆人を濟度す。十二月の間より、重陽の德を聞き、教を乞ふ者、門に入らんとする者、漸く多し。重陽或は詬罵し、或は捶楚して、以て之を鍊磨す。故に來り就く者も多くして、散じ去る者も亦多く、能く精進隨從する者、丹陽、長春、長眞等數輩のみ。煙霞洞を開くに當つてや、石を採つて用と爲すに、巨石あり、忽然として脫し落ち、人皆悚懼す。重陽威を振つて大喝するに、其石屹然として止まりしかば、樵蘇する者嗟呼して禮を作し、遠近驚服したりといふ。若し、巨石にして止まらず 重陽を壓殺せば、重陽を重んぜし者、散じ去つて之を侮りしならむ。憫む可し巨石の止まりしことや。振威大喝も、亦復多事なるかな。碑文に記して曰く、重陽或は瓦を餐し石を餐すと。瓦を餐し石を餐するは、狂人も之を能くす、又何ぞ異とするに足らむ。又記す、重陽時に二首を現じ、席中に坐すと。二首を現ずるは 双頭鬼の形なり、珍とするに足らんや。又記す、人或は之を留めて飯せしむれば、預め食單を言ふと。食單を預知するが如きは、市井の少年の乖利猾狡の者も之を能くす、必ずしも至道者の事にあらざるなり。記して曰ふ、神通應物、概舉す可からずと。神通應物は、小兒も之を能くす、芋を食ひ栗を食ひ米麥を食ひ水を飲んで、此の斫れば則ち痛み、摩すれば則ち感ずる底の身體を化成し來る、是れ豈に至妙至靈の神通應物にあらずや。凡そ是の如きの事を以て重陽を傳ふ、寧ろ重陽の爲に厭ふ可きを覺ゆ。

九年、王玉陽重陽を辭して、査山に隱居し、獨り修煉を事とす。四月 寧海の周伯通といふ者、庵を建てゝ金蓮堂と

日く、重陽を逸ふ。重陽、丹陽、長眞、長春、玉陽、[illegible]
を室に獨つ。金風に乘じて飛起し、圓轉して本山の玉陽が雲光洞前に至り脇ち北斗を[illegible]旋す、病中に[illegible]其の、[illegible]陽
子と曰ふ。玉陽に對するところの幻境を探して歸る也。倚、今たゞ指を屈る、字は人下に六人[illegible]あり、[illegible]の北斗
無し、重陽の探するところなり。[illegible]の處と雲光洞上相去る三百餘里、人皆驚異す。玉陽但日来り謁す。重陽[illegible]
て、修煉の道を喩す。詩に曰く、

修行の事理　記する丁寧にせよ。
只要す　心中　靜裏に明らかなるを。
眼界　生ぜずんば　龍自ら伏し、
鼻門　閉づる無くんば　虎常に停まらん。
舌根に味を退けなば　心神爽やかに、
耳内に聲を除かば　腎水滿まん。
南北　混融して　一處に歸し、
東西　交構して　三彭を滅す。
木金　隔秘して　盤桓として住まり、
嬰姹　相隨つて　自在に行く。
結んで金丹を作して　頂上より出で、
五光射透せん　彩雲の棚。

盡く是れ丹道の秘、關鍵を知らざる者に在つては囈語の如くなるも、少しく門戸を窺ふ者に在つては是れ貢獻なり
陽これより精煉して、邱長春の讃して、九夏に陽を迎へて立ち、三冬に雪を抱いて眠ると云へるが如く、刻苦奮勵して
終に道を得たり。人下六人の字の如きは、重陽の新撰するところ、甚だ妄なるが如しと雖も、字畢竟七人を作し、金蓮七朶の數を表す。元來道家の文字に於ける、世の伏義畫家、倉頡造字の說と、其の傳ふるところを異にし、三元八會、八角垂芒、文字自現の論有り。道士の字を造るは、梁の陶宏景の眞誥等よりして既にこれ有り、太公陰符經（李筌所傳の陰符經にあらず）の如きは、異字滿目、率然としてこれに臨めば、荊棘叢石の眼を射るが如きを覺ゆるのみ。

重陽の金蓮堂に入るや、夜神光有りて、照耀して晝の如し。人驚いて火災と爲し、馳せて之に近づけば、たゞ重陽の光明中に在るを見るのみ。寧海もと海に近し、井水皆鹹し。重陽庵の井を呪す、水變じて甘潔、今に至つて其惠を存すといふ。是に於て三教金蓮會を建て、又福山縣に至つて三教三光會を立つ。文登の七寶會と共に、重陽が當時立つるところの諸會、多くは一人をして逐月に四文錢を出さしむるか　重陽が金蓮會の詩に、逐四文月十六字の句有り、據つて考ふ可し。登州に至つては、三教玉華會を立て、萊州に至つては三教平等會を立つ。以上三州五會、皆三教を以て名に冠す。是れ皆重陽が倡道覺世の機關にして、儒には孝經、佛には心經を取り、道には道德經を本とし、三教を偏廢せず、四海を一家とせんとするに因つて、三教を標榜するなり。金蓮社の疏、玉華社の疏は全眞集卷下に見え、三州五會化緣の榜は教化集に見ゆ。大略人をして傍門小徑に由らずして、澄心定意、抱元守一、仁を修め德を涵ましむるを主とす。其の言に奇異無しと雖も、奇を呈し異を立てざるところ、却つて世を導いて善に誘ふといふべし。

九月萊州に劉長生を度す。劉の家、世ゝ武官に居る。其祖其父、陰德を多くし、孤寡を恤み、良田八十餘頃を捨てゝ龍興の巨刹に與へ、以て種福の根と爲せりといへば、閭里の敬重するところとなりしことを知るべし。宋の太平興國年

[illegible]
陌道行碑に强れば　劉に[illegible]んで嬉待に事へ、特に孝を以て聞ゆ、[illegible]官せず、[illegible]た[illegible]、[illegible]に以て
以て其の胸中の識を攄するに足る無かりしといふ。心に異人を訪ひて道を得んと欲す。而も熟耨の在る有るを以て忍び
ず。大定九年の春忽ち謫居の壁間、人の及ぶ能はざる處に於て、一頌を揮灑せるありて、墨跡尚ほ新しく、姓名を留め
ざるを見る。其の末句に云ふ、

武官は養性　眞仙の地、
須らく有るべし長生不死の人。

劉其の筆力遒勁なるを嘆賞し、神物の化成するところなるかを疑ふ。其九月に至りて、重陽邱譚馬の三人を從へて至る。劉之を聞いて謁す。重陽顧みて笑つて曰く、壁間の墨痕、汝之を知るやと。三子も亦相視て笑ふ。是に於て劉乃ち神通變幻の啓醒する所以なるを悟り、誓つて几杖を負ひ、巾瓶を執らんとす。重陽其の慇懃專精にして、神彩の不羣なるを愛し、嘆じて曰く、松の月、竹の雪、故より黄塵を受けざるものなりと。之に詩を贈つて曰く、

釣罷んで　歸り來つて　又鰲を見る、
已に知る　分有りて　仙曹に列するを。
鳴榔　相喚べば　予が意を知り、
躍つて洪波を出てゝ萬丈高し。

仍つて壁間の語意を取つて、長生を以て號と爲し、處玄を名と爲し、通妙を字と爲さしむ。長生時に年二十三。道成つて後に金の章宗の崇敬するところとなり、上賓を以て待たれ、琳宇を賜はりて、修眞宮と名づけらるゝに至りしもの、

此の長生なり。長生の門に入るに及んで、重陽に隨ふもの七人　人皆長春、長生、長眞、丹陽を呼んで、邱劉譚、馬となし、四上足の名、天下に喧傳す。邱劉譚に俊馬を捉ふるの言、こゝに於て驗有り。又廣寧、玉陽、清淨散人を合して、七人となり、金蓮七朶の應、こゝに現はる。十月重陽掖縣に至り、又四子を挈げて汴梁に至り、磁器王氏の旅邸中に寓す。

十年正月四日、重陽、丹陽長眞長春を召す。三人榻下に立つ。重陽曰く、丹陽は已に道を得たり、長眞は已に道を知れり、吾慮る無し、長春は學ぶこと一に丹陽に聽け、長生は長眞當に之を管すべし、吾今師眞の約に赴かんとすと。丹陽讃頌を請ふ。重陽曰く、吾已に長安の灤村の呂仙庵に書せりと。前に擧ぐるところの、害風害風舊病發す、壽命は過ぎず五十八の詩なり。言訖つて逝く。是年閏五月にして、正月十一日始めて立春たるを以て、正に是れ五十八

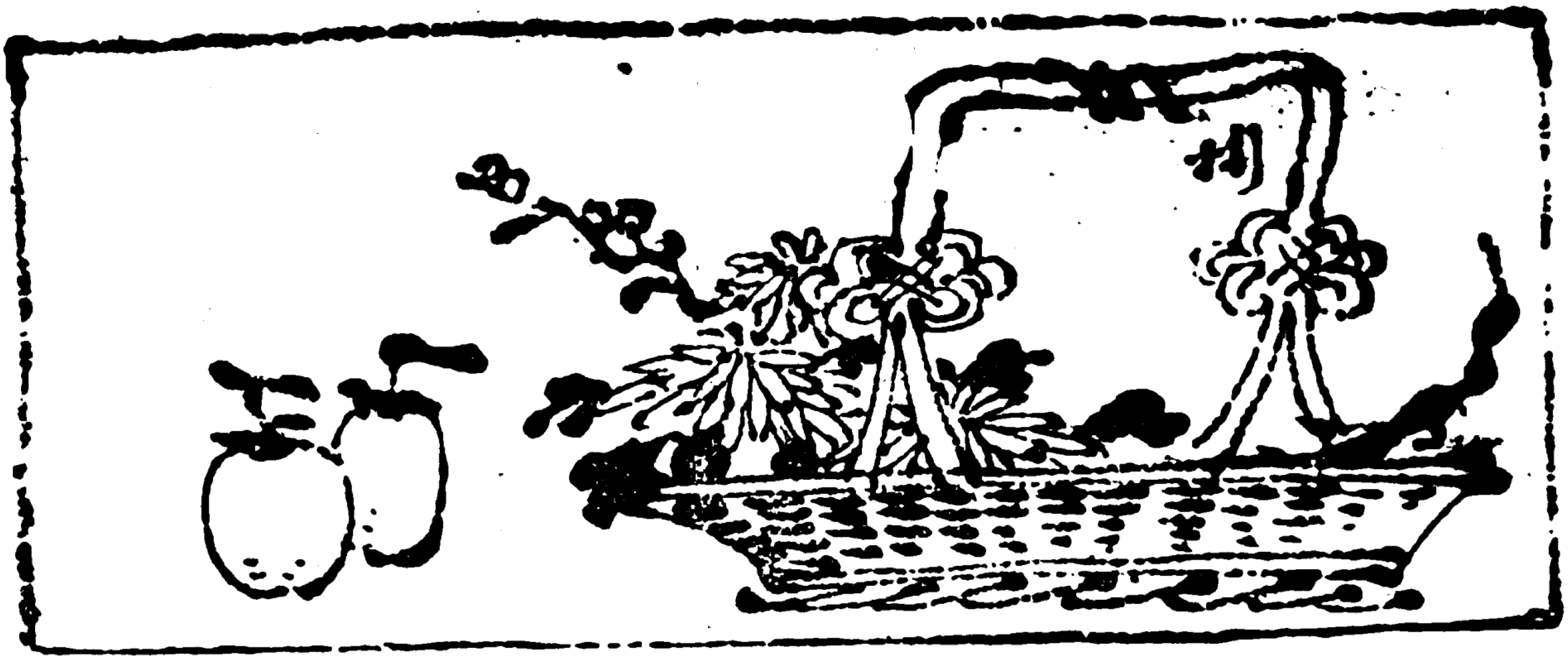
四子禮を盡して、權りに孟宗獻の花圃に瘞め、旣にして丹陽三子を率ゐて遠く西して關に入り、和玉蟾、李靈陽に終南の太平宮に會し、史處厚に京兆に會し、劉通微、嚴處常に終南に會し、大定十一年、丹陽三子と與に劉蔣村に居り、庵を建てゝ、重陽が燒庵の時の豫言を完うし、其の葬所を治め、十二年丹陽三子を率ゐて汴梁に復り、重陽の仙柩を奉じて、再び西して劉蔣村に葬る。今の祖庵鎭即ち是なり。丹陽の全眞第二代と爲り、長眞長春等餘子の道皆成るに及んで、全眞の敎天下に行はれ、宋、金、元朝、皆之を尊崇せざるを得ざるに至る。邱長春の其徒十八人を率ゐて、劉仲祿に迎へられ、成吉思汗に印度に見え、其の敬重するところと爲るに及んで、道大に張り、長春の弟子等の勢を得るに至つては、西京天城に孔子廟を奪つて文成觀と爲し、天下の名山巨刹、世人の耳目に粲然煥然たる佛寺五百餘處を掠めて佛像を倒し、三淸を安んじ、鴟梟の志を逞しくし、虎狼の威を張り、佛敎を迫害して已まず、終に至元年間、元主面前の道佛大爭論を生ずるを致せり。

[illegible]帝師林靈素等もと[illegible]を投け、姚公茂等また[illegible]を讀む[illegible]して道家の[illegible]に若かる、況んや又道士等淺學寡見にして佛を攻むるを知らず、老子化胡經等を支持して、而して敗れさらむことを欲するをや。[illegible]輪に駕し、而して敵の刀鎗斧戟の下に走るが如し、いづくにぞ身首處を異にせさらん。古より道も佛を存し、佛も道を冐し、道佛相攘む。且つ佛說と稱するものも、疑僞甚だ多し。道士等これを攻なることを知らず、化胡の說を流して、好んで身を敵の鋒鏑に露はす、終に口を閉ぢて言無きに至る所以なり。王重陽もと三教を打つて一丸と爲さんと欲す、然るに李眞常等以下、妄りに道威を張り佛法を厭す。既に教祖の意に戾り、又老子恬淡柔弱の旨に反して、多く多く佛寺を奪ひ、暴横至らざる無し、是れ亦自ら譏すこと甚だし。金の元好問、一代の文宗たり。好問に囑して、王重陽の碑を記し重陽の德、葛洪の晋に於ける、陶弘景の梁に於ける、寇謙之の魏に於ける、司馬承禎の唐に於ける、陳搏の宋に於けるにも超ゆると爲す。而も猶ほ足れりとせずして、文立つて復毀つに至る。是れ富家の小兒の驕溢の態なるのみ。何ぞの恐にして亢ぶれるや。人の憎惡を惹くに足るともいふべし。故に重陽死して後、其徒等終南の杜順の寶塔を發きて、聯環金骨を攘み、これを重陽の塋中に埋みて、重陽の舍利と爲せり、といふが如き謗譏を致すに及べり。杜順の骨果して聯環金骨なりしや否や、重陽の塋、果して他人の骨を安きしや否や、是れ皆知る可からずと雖も、事若し眞ならば、陋も亦甚だしく、言若し誣ならば、誣も亦甚だしといふべし。それ溢美の言も信ず可からず、過惡の辭も亦疑ふ可し。達者もとより耳を傾けずと雖も　昧者多くは道聽途說に聽かんと欲す。重陽の詩に、三百六十金骨節の何有りと雖も、重陽自ら吾が骨然りと道へるにあらず。重陽の徒の言、重陽を神仙と爲すこと至れり盡せりと雖も、重陽の聯環金骨なりしことを稱せるを見ず。然らば則ち杜順の骨を偸みて重陽が塋中に埋めたりといふの言も亦佛者の[illegible]ならんか

らず。これ全眞の教の大に行はれて後、其徒之を誇ること甚だしく、佛を胝すること甚だしきより、遂に重陽を果して是の如きの誣を蒙らしむるに至れるのみ。

人或は重陽の既に神仙不死の道を證して、而して大定十年正月初四を以て死せること、猶ほ凡人の終焉に異ならざるを以て、これを疑はんか。是れ甚だ笑ふべきのみ。佛法道教、其の教法だに猶且つ盛衰興廢有るを免れず、況んや其の人をや。金棺露脚の談ありと雖も、釋迦も亦一縷の臭烟となれるのみ、乘蘆獨歸の圖を存すと雖も、達磨も亦半幅の倚土たらんのみ。死して舍利を留む、舍利も雞骨魚鯁の醜ならずして何ぞや。師子尊者の頭を刎ねられ、基督の磔殺せられし如きは、却て是れ痛快淋漓、愚俗の病眼に三斗の冷水を灌ぐものなり。佛陀も神子も神仙も、始有り、それ終無からんや。況んや其重陽、其の道を得ざるや、生きて既に活死人たり、其の道の傳はるや、死して猶ほ死活人たらんとす。何の猜むところか有らん。若夫れ強ひて神仙奇異の談を求めんと欲する者は、大定二十三年冬十月下元、重陽逝いて後十有餘年にして、文登の令の尼龐古武節、馬丹陽を請ひて九幽醮を作したる時、忽ち空中に重陽の至るを見る、青巾白袍にして、白龜に翠蓮葉上に坐す、道衆懽呼して、香を焚き拜を致す、居ること何も無くして、首を回して東南に去るといふの事、丹陽道行碑中に見ゆるを以て、甘心すべし。翠葉か黃葉か、正に是れ止啼の錢のみ、金蓮會四文錢、吾却つて其の花を買ひ神を買ふべきを稱せずんばあらざる也。

季特別號創作



痴情

志賀直哉

一

薄曇りのした寒い日だつた。彼は寒さから輕い頭痛を感じながら、甚く沈んだ氣分で書齋に閉ぢこもつて居た。時々むかふの山の見えなくなる程雪が降つて來た。庭ぢう池になつてゐる、其池水に雪がどん／＼降込んで消えた。硝子戸と障子の硝子越しに彼はぼんやり眺めてゐた。雪は少時すると止んだ。止んだかと思ふと、急に青い空が見えた。此處も亦山國のうちだと彼は思つた。

それはどうと、此事をどう處置すべきか彼は却々決められなかつた。自分が女を念ひ斷る事が出來ればそれに越した事はないが、それはいやだつた。妻に云はれて念ひ斷るといふ事が既にいやなのだ。女に執着はないのだから、或る時、自分の執着さへなくなるなら、素直に別かれてもいゝが、今、此心持を殺し、別かれるのは如何にも無理往生の氣がした。假りにさう決心した所が、實行のあてはなかつた。それにしろ、此まゝ再び妻を欺き續けるのも不愉快だし、殘るところは妻が其事に

「死ぬの生きるの云ふ問題ぢやない」

「左うかしら」

「馬鹿だけが一緒にするのだ」

「でも私では一緒にならないとはかぎりませんよ」

妻の言葉は妻として必ずしも誇張とのみ云へない事は知つてゐたが、彼は矢張り腹を立てた。

「強迫するのか。そんな事で人の行爲を封じようとするのは下等だぞ」

妻は默つてゐた。彼は口から出るまゝ、毒のある言葉を吐いた。

妻は顏色を變へ、凝つと彼を見てゐたが仕舞ひに其眼を落とすと、溜息をつくやうに、「貴方は本統に勝手な方ねえ」

と云つた。

「初から勝手なんだ」

「初めから勝手は分つてゐるけど、御自分が散々人をだまして置いて、それが分つたからつて、強迫するのだの。下等だの、よく平氣でそんな事が仰有れるわね。他人の事を批評なさる時は隨分拔目なく突込んで、御自分の事だと、それが全で異つて了ふのね。どういふわけ？　子供が嘘を云つたりすると、嚴格過ぎる程お叱りになる方が、御自分の嘘は左う氣にならないと見えるのね」

彼は不愉快で仕方がなかつた。もう口をきくのがいやだつた。

「だから、もういゝ事よ。何も彼も昨晩本統の事を云つて下すつたんでせう？　もう何も隱し立てはしやしないのでせう？　それでいゝ事よ。それで、どうぞこれからの事を堅くお約束して頂戴。もう決してさう云ふ事をしないと——それを私に信じさせて下さい。今までの事私も忘れますから、それだけ信じさせて下さい。……ええ？　どうなの？」

「それは分らない。ないつもりの事が起つたんだから、今後とても請合へない」

妻は急に亢奮して叫んだ。

「それぢやあ私、生きてゐられない」

「生きてゐられなければどうするんだ」

「それは自殺もしまいけど、屹度自然に死ぬやうな事になる。屹度さうなるに決つてゐる」

「そりやあ、俺の知つた事ぢやない」

妻が此調子では兎も角、女とは一時別れるより仕方ないと思ふと、彼はその事でも苛々した。

三

一時間程して、二人が京都東山三條で電車を下りた時には大きな牡丹雪が氣持のいゝ程盛んに降つてゐた。山科を出る時、陽を見て傘を用意しなかつた二人は頭や、肩にそれを浴びながら、見る〳〵白くなつて行く往來に首をちぢめて立つて居た。

「一時間か、一時間半したら還る。お前はKの所で待つて居るのだ。なるべく落ちついて居ないと見つともないよ」

妻は默つて彼の眼を見て居た。

「寒いから早く行くといゝ。着物は充分着て居るね」

妻はうなづいた。

「――それぢやあ」

彼は妻に別かれ、僅かな道程（みち）なので、込んだ電車よりは歩く方がよく、往來を越して、煙草を買ひに入つた。そして再び其所を出ようとすると、胸や髮に一ぱい雪をつけた妻が何時か一間程離れた所に立ち、泣き出しさうな顏で何か小聲で云つてゐた。妻は一ト晩の間に眼に見えて衰へて了つた。そして彼から近寄つて行くと、妻は片方の肩の上へ首を傾け、哀願するやうに、

「ねえ、いゝこと？　ねえ、いゝこと？」と云つた。

「もう、よろしい。雪の中にいつまでも立つて居ると本統に病氣になる」

妻は漸く還つて行つた。厚いショールから出て居る引詰に詰つた小さな頭の遠去かつて行くのを見ると、如何にも見すぼらしく哀れに思へた。

彼はいつも會ふ、その宿へ入つて行つた。暗い茶の間の長火鉢に坐つた女將は、

女は[illegible]して[illegible]来た。そして[illegible]

つた。[illegible]を[illegible]つてあつた。これを[illegible]く[illegible]

うた。[illegible]

「[illegible]十[illegible]はないかもしない[illegible]

「[illegible]

[illegible]

も彼も濟まして來たのだ。彼は妻を欺く代りに假りに自分を欺いてゐる。自分を欺いてゐないとすれば、そんな風に再び妻を欺き、女をも欺いたのだ。何れにもせよ。彼には家庭の調子を全く破壞してまで正面から此事に當らうといふ氣はなかつた。それに價する關係とは思はなかつた。女は最初幾らか彼を嫌つて居たが、今は嫌つて居ない程度で、妻に云はれるまでもなく、女には一つの商賣に過ぎない事と分つて居た。女の此氣持は彼には愉快でなかつたが、その世界ではそれが道德であり、氣持の上だけでも、それを超えさす事は女が彼を愛してゐないかぎり出來ない事だつた。

それにしろ、彼は一人でゐる時も、人とゐる時も頭から女を完全に離しきる事はなかつた。これが何かの意味で平穩に歸して見れるまでは彼は女と別れる氣にはなれなかつた。

其日彼は妻と町を歩き、夜になつて山科の家に歸つて來た。妻は其晩から病氣になつた。熱のある身體で出たのが惡かつた。

四

妻の病氣は風邪だが、却々直らなかつた。

「すつかり濟んで了つたのね。もう安心して居ていゝのね」

こんな事を云はれると、彼は當惑した。そしてそれに應ずる言葉で慰めはするが、その云ひ方がはればれしなかつた。妻がそれを信じたがつて居ると尚はればれ云ひにくかつた。

或時は又こんな風に云ふ。「つまり家庭の病氣みたやうなものね。直ればもう何んにも殘らないわね。…………だけど、此病氣の方が余つぽど壽命が縮まりますよ」

「病氣と云ふ以上、又かゝらないとは限らない」彼はさう氣にして云ひ〳〵こんな事を云ひ出した。兎に角彼は早く何所かへ行き度かつた。丁度東京へ行く用があつたが、妻の病後は彼に氣掛りで、妻を同伴させたかつた。病氣そのものよりは衰弱が甚しく、妻は絶えず幾らか亢奮して居た。いつもより瘠せたやうに見えて居た細い指環が手を下げると自然に指から抜け落ちたりした。

以下は、それから間もなく上京した彼が受け取つた妻の手紙である。

御無事御暮の御事と存じ升。御上京後毎日の樣に雪ふりにて大へん御寒う御座いますが、お神經痛は如何で御出で遊ばされますか。〇〇樣の御容體如何やと御案じ申上て居り升。そちら皆々樣も御きげんよく入らせられます御事と存じ升。カラスミの御禮御申上戴きたく、御文したゝめる筈で御座いますが、どうも〳〵只今手紙かくのがつらふ御座いますから、くれ〴〵もよろしく御申上戴き升。御出立の時は私の相變らずから御氣をそこね御ゆるし戴き升。私はその事では少しもひかん致しませんでしたが、其日はやはり氣持惡く床に居りました。只今もづい分〳〵淋しい氣持になりましたので一人淚が出ますので御文したゝめました。おかきもの、御さまたげしてはいけませんと思ひ、づい分〳〵こらえて居るので御座いますが自分の胸もづい分つらう御座いますので、またくだらぬ事をかきます。一人淋しくなりますとあの事を思出し淚ぐみます。もう〳〵すぎた事だからと思ひながら、こだわりて仕方が御座いません。どうしても、ようきの氣持になれません。ほんとにもう一生のうちに、こうゆうつらひ思ひをどうぞさせないで戴き升。お袋もとう〳〵死にました。今もかなしくて〳〵たまりません。もうほんとにあなたを信じさせて頂き升。ほんとに〳〵に信じて信じてゐてこんな事がありましたので御座いますから、此後はほんとに內しよでもいやで御座い升。私の我

申上ました御側におさわりになりますかもしれませんが私の胸の苦しみ出しまして御願ひ申上升。私はあなたに大切の人だと御申戴いて、こんなにひかんしてはもつたないので御座いますが、一途に思ひますので其方より一方の事を思出してかなしくなり升。どうぞ〳〵委しく御返事を頂いて私の安心出來る樣にさして戴き升。

毎日御いそがしく、またおかきものでおつむり御つかいの事と御察し申上升。どうぞ十分御からだ御氣をつけ遊ばされ升す樣、御風邪召しません樣、少しでもお神經痛の方おわるかつたら箱根に御養生に御出遊ばします樣願上升。御はかまを忘れましたので御送り申上ましたが御うけとり戴きました事と存じ升。夜分は別にこわい事も御座いません。子供たち元氣に致して居り升から御安心願上升。しじゆう泣いて升もおりません。時々しづんでみますといろ〳〵思出してなみだが出るので御座い升。自分でも一生懸命に氣持をかへ樣と思つて居り升。自分はあなたに大切にして戴き、何かおこつてもふわんの氣持になる事ないので御座いますが、それは私の我まゝでどうしても私一人でなければ神經がおさまらないので御座います。あなたの御氣持を御察しゝないで自分の事斗かいたのはほんとに御ゆるし〳〵戴き升。これだけくだらぬ事を申上ましたら胸の苦しいのが樂になりました。皆々樣にくれ〳〵もよろしく。

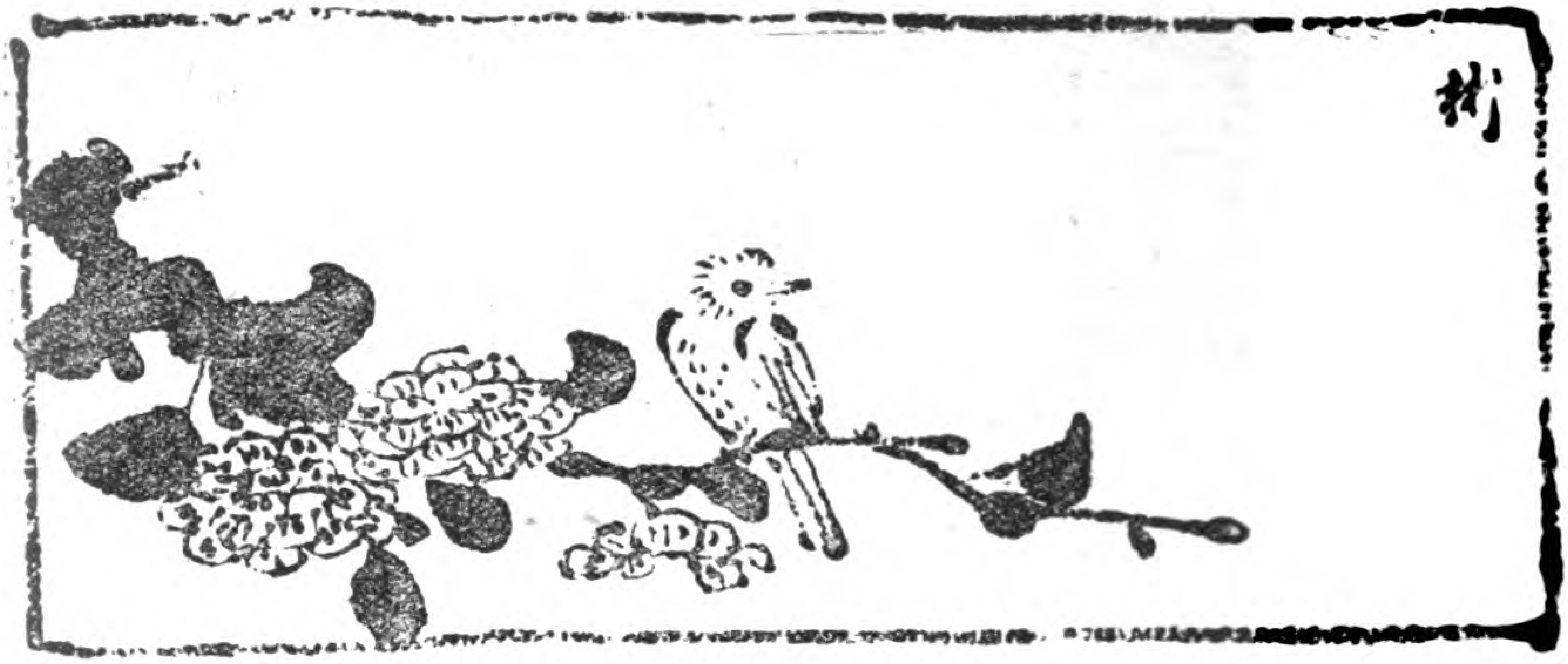
彼が外出から歸り、此手紙を見てゐる時、電報が來た。「オカヘリネガウ」――妻がいよ〳〵堪えきれなくなつた氣持が彼には明瞭うかんだ。彼は妻がこれ以上我慢しやうとしなかつたのは幸だつたと云ふ氣がした。用は少しも片づいて居なかつたが、直ぐ歸る事にした。

「病氣でも惡いのかしら？」

「私が道樂したんです」

母はそれには答へなかつた。そして「直ぐ歸るといゝね」と云つた。

彼は二十分程で仕度し、漸く最後の急行に間に合つた。



歸りを待つ人々（一幕）

池谷信三郎

時。
或る冬の曇り日の朝。

所。
或る港の波止場の出迎人控室。

人。
Aの會話。
山路茂雄。狂へる醫學士。登場せず。
父。
母。
兄。
その妻。即ち嫂

妻。初枝。

息子。

弟。義雄。

友人A。吉田。

B。

弟の友人。

Bの會話

石本五郎。

父。

母。

妹。葉子。

佐野。外遊中の友人。即ち洋行歸り。

學友。O。太田。スポーツマン。太つてゐる。

I。井坂。文士。瘦せてゐる。

M。まだ大學生。[illegible]

Suzanne Alphandéry。石本の妻。純粋のパリジエンヌ。

その他

見窄しい老船員。

新聞記者。

その助手。

事務長（パーサー）。

船のボーイ。

ヴァイオリン彈き。

舞臺。

破目板の假普請。窓をすかせて、ランチのマスト、煙突、等。

右手（觀客より）の隅のストーブを取圍んで、山路を出迎へる人々。その會話――A。

左手にも亦一群の人々。即ち石本を出迎へる人々。若い大學出位の人多し。中には角帽を冠れるのも居る。その會話――B。

左手、ずつと離れて、見窄しき年老いたる船乗風の男ひとり、觀客の方を向いて居睡りをしてゐる。

備考

簡單なる裝置としては、背景に黒幕を用ひ、その中央に。

全體の調子がどこに焦點があると云ふ事もなく、例へば夜汽車の出る前に、東京驛の待合室などに居ると、どこからともなく、いろいろの會話の斷片が耳に入つて來る、と云つた工合に、漠然とした、もや〳〵とした會話の中から、觀客は段々と、歸つて來る二人の人間とその周圍を描いてくれれば良い。從つてAとBとの會話の交錯は演出者の考へによつて、出來るだけ細かくする事も良い。又は、その間に、いろんな用のない人間、例へば出迎人とか、外人、船員、通譯、又は人を探しにやつて來る人間とか云ふやうな人物の出入りを適宜に行つてもかまはない。勿論なくつてもかまはない、

下手にゐる見窄しき老船員は、醉つてねてゐる。時々にや〳〵と笑ひ、時々眼を覺して呶鳴る。即ち、觀客の注意が余り片一方の會話に焦點が適ひ過ぎると、それを攪き廻すやうに呶鳴るのである。——即ち此の戯曲は或る意味の不統一を要求する。

Bの會話はその會話の性質上、若々しく、陽氣である。Aの方はうち濕つて深刻らしい。

煙草の煙。欠伸など。

Digitized by Google　　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

M。（時計を出して見て、）もう九時を過ぎてるな。

O。（腕時計を見て、）嘘吐け。まだ八時前だ。

M。だつて、俺は驛で合せて來たんだ。

O。そんな筈はない。俺のはナルダンの標準時計だからな。

M。見せてごらん。

O。（退しい腕をさし出す。）

M。なあんだ、止つてるぢやないか。

O。（腕を耳へ當てて、）成る程。こいつはいかん。

I。（背後の方から、）ハハ、流石スポーツマンの持つてる時計は違ふな。ストツプウオツチと來てやがる。

一同笑ふ。

見窄しき老紳日。（眠つたまゝにやく〳〵と笑ふ。）

A。（低く、）

友人A。山路君も隨分變つたらうな。

友人B。そりやさうさ。兎に角もう、……何年だつけな？

友人A。さう、大正・・俺も忘れたよ。

梓。もう八年でございますよ。(息を指さして、)あの子が九つになりますからね。

友人A。成程。九年!

友人B。九年て云や、かれこれ一昔だからな。

友人A。あの縮れた眞黑の髮の毛にも、きつと白髮が交つたに違ひない。兎に角普通の九年とは違ふからね。

友人B。さうだ、あの房々とした髮の毛は有名だつた。アストラカンつて仇名があつたからね。

弟の友人。いや、散切りですよ、きつと。西洋ぢや罪人は、……

友人A。おい君!

弟の友人。(氣が着いて、間のわるさうに口を噤ぐ)

父。(笑ひ乍ら)いや、かまわん、かまいませんよ。ほんとなんだから。

友人A。(父に、)だつて、あなた。精神に異常を呈した時になすつたことなんですから、犯罪とは云へませんよ。

父。いいや、倅は狂人ぢやありません。俺の血統にはそんな、……

友人A。いや、そんな意味で申したのではないのです。ただ、……

父。(笑つて、)笑談ですよ。倅は狂人です。人殺しは皆んな狂人です。たゞ、慢性か、急性かつて違ひがあるだけです。

友人B。だけど、山路君は裁判の時、きつぱり云ひ切つたつてぢやありませんか。――僕は狂人ぢやない。私はたつ

てあの男を殺したんだなんて、命が惜しい爲に、

見窄しき老紳士、（ちよつと目を覚し、ぶつぶつ呟くやうに、）六人！六人！（にやにやと、てれたやうに笑ひ、そのまゝ又睡つて了ふ。）

父。私に云はせりや、戀なんてもんが、旣に狂人の沙汰ぢや。

母。あなたに會つちや、何もかも、狂人ですわね。

友人B。（母に、）小母さんも昔は狂人だつたわけですね。お安くないね。

母。どう致しまして。私共の若い頃は、御婚禮の日ぢやなけりや、相手の顏が見られないんですからね。戀と云へば、易ひの本と、仲人の出鱈目口に、お互ひに惚れ合ふ位のもんですよ。

父。それに、狂人ぢやないつて云ふ、それが狂人のしるしさ。俺は醉つて居らんつて云ふ奴に限つて、ほんとに醉つてゐるやうにね。

友人A。小父さんは相變らず頑强ですね。

母。この通り、一遍云ひ出したら、決してきかないんですからね。いつだつたかなんて、尤も、もう二十年も昔の話、まだ福井の署に居りました時の事でございますが、朝起きて、今日は日曜だから、芝居へでも行かうと云ひ出したんでございますよ。ほんとは土曜なのです。私が暦を見せると、一枚剥して了つて、それ見ろ、日曜だつて云つて、私が何んと云つてもきかないのです。仕方がございませんから、私、そつと病氣届を出しといて、出掛けました。丁度師、郎がかかつて居りましてね、出しものは、ほら、お得意の小春治兵衛、良いですわよ、、、

父。おい、うるさい。

母。所がそこでお役所の上役の方に會つちまひましたんでせう。山路君、狂の方はもう良いのかねつて云はれた時、側に居て、私が、……

父。うるさいつたら。

友人B。山路君もそんな所がありましたよ。これやどうも血統らしいですね。

父。茂雄もあの時、辯護士の云ふ事をきいて、狂人だつて事を承認したらな。ただ黙つてゐさへすりやよかつたんだ。

友人B。全く。さうすりや散切りにならずに濟んだのだ。

友人A。あのアストラカンもつひに再び見られなくなつたのか。

弟。(息の髪の毛を引つぱつて、)いや。ここに名殘りをとどめておきます。

息。痛い。マ、ー養叔父ちやんが又僕の頭の毛を引張つた。

妻。(寂しく微笑ふ。)

友人B。だけど又直ぐ延びるだらう。

弟の友人。松澤病院の御飯ぢやねえ。

友人A。おい、君!

友人B。[illegible]

B

S。相手の女つてのはどんな人？

P。純粋のパリジアンヌだつてさ。

妹。兄さんから手紙でそう云つて來ましたわ。えゝと、……『その瞳はエルプスの深夜の如く、その唇は、……』……忘れちまつたわ。

O。石本君は詩人だからな。

佐野。實際詩人が外國へ行つちやたまりませんよ。あちらの女と來たら、情が熱いですからな。徹底的ですからな、兎に角。一たん戀するとなりや、ピントをすつかりその男に合せますからね。家の事も、親の事も、全て第二義的で、その何んですよ、實際良い所がありますよ、實際。

P。おやおや、佐野さん、お惚氣ですか。インターナショナルの惚氣は罪が深いですよ。

佐野。何、僕は君、國にソルベーデが待つてたんですから、潔白なもんでしたがね。友人の例からつらつら惟るに、……ですな。

P。どうだか？

佐野。そりや君、僕だつて、たまには美しい碧眼の少女を見て、……たゞ氣持の上だけの話ですが、つひその、……いや、勿論小説の女に惚れる程度にですが、…………その、何んですよ、ハハ、だから君、いはんや抒情詩人石本君に於てをやですな。

I。どうも、佐野さんの話は、説明語ばかり多くつて、…………

佐野。僕はただ純粹美學の立場から見て、……

妹。佐野さん、奥様に云ひつけてよ。

佐野。困るなあ、さうどうも四面楚歌ぢや。だけど、旅にゐると妙にセンチメンタルになるつて事は事實ですな。ことに、夜、獨り寢のベットの上で、ピヂヤマの釦などを縫つてゐる。つひうつかりと指へ針をさして了ふ。赤い木苺の實のやうな血が一雫、ポタリと白いシーツの上へ落ちて來る。すると、妙にから涙つぽくなつてね、水を一杯吸ひこんだスポンヂみたいに、身體のどこをでもちよつと押しさへすれば、涙が潸然とはふり落ちさうな氣がする事がよくありますよ。

O。あゝ、さうらしいですね。この間も伯林に居る友人からの手紙に、丁度その通りの事が書いてありましたよ。何んでも、窓邊でぽかんと黄昏の街を見下してゐると、ふと、机の上の薔薇の花が、風もないのに、ぽたんと落ちるんですな。その音がかすかに耳に入る。すると、急に、どつと涙がこみ上げてくる。街の燈火（あかり）が一重に霞んで行くつて書いてありましたつけ。

妹。太田さん。お友達つて、女の方でせう。そんな詩的なお手紙を下さる方ぢや。

O。どう致しまして。男ですよ。しかも十九貫もある奴です。日本に居た時には、僕と一緒に、ボートの合宿で、猫を殺して食つた奴です。

妹。

（友人B、Aと兩人、やゝ前へ出て、小聲で）だけど、當面の問題だね、僕は少し薄情過ぎると思ふんだがね、

友人A。だつて、仕方がないさ。さう云ふ條件で、兎も角、歸國が免されたんだからね。あつちに居る今井博士の鑑定で、精神鑑定の結果、……

友人B。そりや解つてる。解つてゐるよ。だけど、君、考へても見給へ。十年ぶりで故國の土を踏む。そこには最愛の妻、懷しい父母、同胞（きやうだい）が迎へに來てゐる。それを、君、家へも寄せずに、その足で直ぐ松澤病院の灰色の檻の中へ連れて行かれる。そんな君、……

友人A。法律には、君、感情つてもんがないんだからね。

友人B。そんな事あ、ないと思ふ。近頃は、君、裁判所の判決を見たつて解る事だけど、隨分例外の價値を認めてゐると思ふ。一つの箇性、それは兎に角、その人の指紋と同樣、世界にたつた一つのものなんだからね。それが、或る環境の中で、或る瞬間に行ふ、或る一つの行爲、その原因とか、感情とか、因果律とか云ふものの總和は、やつぱり、たつた一つのものぢやないか。それを一樣の條文に依つて、一樣の判決を下すなんて、僕には實際、不合理な氣持がするんだがね。

友人A。そりや君、ダニエルでも居て、生きてゐる法律が、……

友人B。ジムメルも云つてるぢやないか、一つの固定した概念で、流動する人生を束しやうとする法律と、人生を、概念のカテゴリーに當てはめやうとする、……

友人A。だが、君、そりや、…………ハハ、もう止さう。

友人B。どうしたんだい？

友人A。いや、學校を出て、十年も經つと、法律の事なんか、てんで頭から出て了ふからさ。

友人B。全くだ。學問の忘却律は、白髮の數の二乘に正比例するよ。

友人A。それに、僕はふと、あの彌生町の下宿の部屋を想ひ出したんだ。山路君と三人でさ。……あれは醫科で精神病學をやる。僕達は高文の試驗で每日こんな議論をやつたぢやないか。

友人B。さうだつけね。それで二人共、勿論おつこちて、尤も、あの落ちた理由には多分に君に罪があるんだよ。

友人A。何故？

友人B。何故つて　ほら、よく冬になると、炬燵に當り乍ら、本を讀んだらう。すると定つて君が放屁(おなら)をする。『屁を放(ひ)つて、面白くもなし獨身者(ひとりもの)』なんて川柳を云つちや、ブツとやる。あれが君、炬燵に籠つて、僕たちの頭を惡くしたんだ。硫化水素はどうも記憶力を減退させるらしい。

友人A。馬鹿云へ。近因はさうかも知れないが、遠因は、山路が夜おそく歸つて來ちや、燒芋の土産を持つて來たせいだ。

友人B。その遠因は遠く異國の空に、無期徒刑の宣告を受け、鐵窓の下に呻吟するとは、[illegible]

友人A。畜生め。僕だ。聞いてゐる僕の態度がいけなかつたんだ。

友人B。馬鹿云へ。

友人A。まあ良い。そんな事は、山路君の無期徒刑の宣告が、苛酷に失したと云ふ事實とは關係のない事だ。

友人B。それは、君、殺した當の男が、何んでも州の知事の身寄りに當るんださうだ。

友人A。さつき云つた因果律の調和が、被告にとつて不利だつたんだね。

見窄しい老船員。六人！（にや〳〵と笑ふ。）

友人B。兎に角、君はあく迄、山路を病院へ連れて行く心算か。一日位は良いんだらう？

友人A。いやいかん。僕は今井博士から、固く頼まれてゐるんだ。僕には引受けた義務を果す權利がある。今井博士の骨折を徒勞にさせるのは偲びない。だつて、若しも、一日でも山路君が家にゐた事が解れば、條文は彼を又きつとアメリカへ引戻す。永遠にだよ。さうすりや、今井博士の同情ある骨折は、皆んな水泡に歸して了ふぢやないか。……永遠！君は永遠と云ふ言葉を知つてゐるかい？つまり二人の男が向ひ合つて坐る。各々はその手に鏡を持つてゐる。一人の姿がその相手の鏡に映る。その手には鏡を持つてゐる。そしてその鏡には鏡を持つた相手の姿が映る。その手にも亦鏡が持たれてゐる。そしてその鏡に又鏡を持つた、今度は自分の姿が映る。かくして永遠に……

友人B。もういいよ。……僕には、動機はいさ知らず、結果に於て今井博士の骨折は、決して適當な處置ぢやないと思ふ。寧ろ殘酷極まることだと思ふ。後になつて悲しみを二倍にする爲に、[illegible]

僕はあの元氣な、何もかも諦め切つてゐる山路の獄中からの手紙を見て、づくづくさう思ふんだ。

友人A。さう君のやうに、他人の氣持を一概に方程式にはめる事はよくないよ。兎に角僕にして見りや、山路にもう一遍富士の山を見せたいんだ。あの奥さんの顔を見せたいんだ。（妻の方を見て、）ほら、見給へ、あの晴々とした奥さんの顔を。あれだけで、僕は今井博士の處置を無條件に肯定したくなるね。

友人B。あの晴々とした顔なればこそ、僕は殘酷だつて云ふんだ。生れつきの盲人、もうすつかり自分の宿命の星を諦め切つてゐる盲人の眼を、ちよつと開けてやる、その後のその盲人の悲慘めさを思つてやれよ。僕は最近、ド、キユレルの劇を讀んだんだが、その中にかう云ふ挿話がある。（兄が聞いてゐるのを意識して、）何んでも一人の年若い尼さんがあつたんですね。それが胸の病かなにかで、もう死ぬと云ふ事が明らかになつたのさ。すると、周圍の者や、親兄弟が、どうせ死ぬのなら、せめて一遍、自分の家へ連れてつてやり度いと云ふわけなんだね。何んでも、修道院の規則で、一たん尼さんになつた者は、死ぬ迄御に仕へなければいけない。所謂、娑婆の風にあてゝはならんと云ふのだね。そこで皆んなは策略を考へて、醫者に賴んで、散步をしなければいけないと云はせて、馬車を近所の貴族から借りて行く。そこで、今度は馭者に賴んで、態と車の輪を外させる。そして家へ連れて行く。そこでつまり家の者と一緒に、樂しく食事をとつて、夕方、修道院に歸したんだ。その女は間もなく死んで行つた。その臨終の時、その女はかう云ふ事を云ふんだね。なまぢつかそんな事をしてくれたばつかりに、今、自分の死んで行く氣持が却へつて苦しいと云ふんだ。つまり、もうすつかり[illegible]

弟。（窓を見てゐる。突然、）吉田さん！　こんなに曇つてちや見えませんね、

友人A。（振返つて、）何がです？

弟。富士山です。今、あなた方はそんな話をしてたんぢやありませんか。

友人A。あゝ。さうですね。

弟。外國から歸つて來て、初めて海の向ふに、あの山の姿を見た時は、とても嬉しくつて思はず泣けて了ふつて云ふぢやありませんか。

友人A。えゝ。

父。遅いね。義雄！ちよつと見ておいで。

弟。着きや、何んとか知らせがありますよ。

父。無精な奴だなあ。仕方のない奴だ。

B

佐野。（煙草を出し乍ら、Iに、）如何？

I。えゝ、有難う。（とる。）一本頂きます。

佐野。どうぞ。

I。ゲルベゾルテですね。

O。僕も一本貰ひますよ。

I。スポーツマンの癖に吸ふのか。

O。いや、吸ふと云ふ程ぢやないが。まあ、友達の結婚式でホテルへ行く。すると、そこのテーブルの上に金口が置いてある。とさあ、ちよつと手を出して見たくなる。そんな所なんだ。

I。變な奴だなあ。ハハハ。

M。見渡した所、角帽を冠つてるのは僕だけだな。

S。俺は淋しいよ、か。ハハ、、、、。

父。正木さんは何をおやりなんです？

M。僕ですか。初め農科へ入つて繭の研究をやつてたんですが、つまりませんから、文科へ變りました。印哲です。印度の哲學です。どうもかびよりは哲學の方が面白いですよ。

O。先のうち、こいつの家へ行くと、かびを切つた後の餅をよく食はされて、閉口しましたよ。

M。嘘吐け。

I。一體、君は學校へ出てるのかい？

M。いや、あんまり。

I。あんまりつて、たまには行くのか？

I。絶對に行か……

I。お前の見りなる筈。

M。馬鹿！

一同笑ふ。

M。石本君もお歸りになつて文大學へお這入りですか？

父。えゝ、何んだかそんな事云つて居ましたが。

M。科は？何をやそんですか。

父。やつぱり哲學科だと申して居りました。

I。戀愛哲學ですかね。

O。卒業論文はきつとかうだよ。「異國の少女との戀愛生活に就いて。」

母。ほんまに恥しふおまんのでつせ。碧い眼の嫁なんか、連れて來ましてん。五郎にも困つたもんだす。

S。いえ何、そんな事があるもんですか。勇敢なる新時代の先驅者として、僕は大いに石本君の勇氣を稱讃しますよ。

M。それに、相手の女がレッキとした良家の處女に於てをやです。これが淫賣とか何んとか云ふのなら、……

佐野。おい君、何んです。淑女(レディー)の前で。少し言葉の撰擇に就いて意を用ゐるんですね。どうもいかん。印哲なんてやると、人間が赤裸々になり過ぎて。

P。一體どうして成立したんだい？

I。何んでもテニスで出來たらしい。テニスは、君、ミックスなんて粹(いき)なもんがあるからね。

O。いいだらうねえ。マロニエの花散る、青い南歐の空の下で、金髪の美人と相し

振つた拍子に、妹の頭に觸る。櫛が落ちる。)

妹。あら。まあひどい。

O。どうも失禮。(拾ふ。)

見習しき老船員。六人だい！

母。わてら、自分より身長(せい)の大つけなお嫁はん貰ふなんか、夢にも思ふてまへんでしてん。

S。石本君は前からコスモポリタニストだつたからね。兎に角、おむすびへバタをつけて食べたりしたからね。だけど小五十年お國粹を守つてゐる母さんとの交渉は見ものだぜ。

妹。さうそ、この間、そりや可笑しかつたのよ。西洋間がお離れに出來て、ダブルベツトを買つて來たのよ。そしたら、お母さんたら見に來て、まあ、眞四角なお床かい？西洋人つて余つ程寢相が悪いんだねつて。

O。それから、お前にも丁度良いだらうつて。

妹。まあひどい。そんなら良いわ。太田さん、さつきのお約束を取消すから。ちか子さんにお紹介しなくつてよ。

O。そりやいかん。そりやいけませんよ。約束と皮肉とは何んの關係もないんですから。

M。今日ですか？

妹。えゝ、今晩。

M。今日は少し困るなあ。（髭をこすり乍ら、）十七日で床屋が休みですからな。

I。僕にも一つお願ひします。

妹。まあ、かう希望者が多くつちや。ちか子さんもきつと迷ふこつてせうよ。

I。何、大丈夫です。僕は、たとへ千人戀仇があらうとも、…………

妹。まあ、自信の強い方。

O。こいつは、兎に角、クロスワードパヅルをインキで書くつて奴ですからね。

I。所で美人なんですか、そのちか子さんて方は？

妹。そりやさうよ。絶世の美人よ。クレオパトラ、ネーケツトフイートつて方よ。

I。それぢや、是非お願ひし度いですな。

M。僕もです。安全剃刀がおありでせう？あなたのお家に。

妹。まあ、……（笑ふ）だけど、……（笑ふ）

M。何が可笑しいんです？

妹。私、白状して了ふわ。その方はもう奥さんなのよ。今日、旦那様とご一緒においでになるのよ。

M。なあんだ。又かつがれた。

妹。お氣の毒さま、非坂さん。

I。いえ、何。僕は最初から解つてたんです。

妹。負惜しみの强い方ね。

I いや、ほんとです。シヤーロツクホルムス直傳の三段論法でね、僕にはちやんと解つてたんです。

妹。どう云ふの？

I。第一。—女といふものは、自分より不美人か、又は既婚の女に非れば、喜んで紹介する事を欲せず。第二。—彼女はクレオパトラはだしの美人なり。それ故、當然の歸決として、彼女は既婚也。——どうです。明快なもんでせう。

一同笑ふ。

見窄しき老船員。（びつくりして目を覺し、にやにやとてれたやうに笑ひ、又そのまゝ眠つて了ふ。）

A

息。マヽ、おしつこ。

妻。しやうがないのね。ぢや、おいでなさい。（兩人退場。）

母。あたしや、さうだと思ふよ。諦めてゐるのでね。

父。俺もさうだ。意志と云ふものを持たない人間は、どうしても運命に敏感になり易いからね。

兄。そんなら良いですが。

母。茂雄が歸つて來て、あれがちよつとでも厭やな顔をしたらね。それがあたしや何よりも氣になるよ。

父。さうだ。兎に角、十年もの間、茂雄はあれの氣持を、五通りにも十通りにも解釋し、考へつめてゐるだらうからね。兩人の瞳が合つた瞬間に、茂雄はあれの瞳の動きの一閃に、そのうちのどれが正しかつたのかを、はつきりと判定するんだからね。だから、もし、あれの頭の中に、ちよつとでも怨むと云つた氣持があつたとしたらね。茂雄は、それを當然とは考へてゐても、きつと、どんなに淋しいか。………

兄。その氣持はよく解るんですが、又一方、もう一つの考へ方として、かう云ふのもありはしないかと思ふんです。つまり、自分の罪を、無抵抗に諦められて了ふより、却つて、責めてくれる。つまり責めると云ふ事は强く愛してゐる事だと云ふ事を感じ度い、さう云ふ氣持もありやしませんかと思ふんですがね。

父。そりや、お前、想像した氣持と、體驗した氣持との違ひだよ。十年の煩悶を通して來た感情には、そんな夢のやうな餘裕はないと思ふね。ちよつと例は違ふが、例へば、一人の乞食に食ひかけの鮭をやるとする。やる男は却つて氣が負けて、その乞食の感ずる自尊心の傷つきなどを氣にかける。だが、乞食にはそんな考へは夢にもない。長い間の苦しみや感情の痲痺で、そんな厄介な重荷はとうの昔に棄ててゐる。たゞ、食べ度いのだ。たゞ、空腹なのだ。つまりそれだけの違ひがあるんだよ。一人の人の氣持などと云ふものは、その人がその氣持へ到達する迄の、いろいろの副作用の總和なんだから、ちよつと脇からそれを云々する事は六ケしい。

見窄しき老船員。（目をつむつたまゝ、ひどく大聲に、）六人だい！馬鹿！

父。（ちよつとびつくりしてその方を見たが、又話を續けて、）尤も俺だつて、茂雄のやうな特種の氣持を體驗したわけではないんだが、それに近い體驗をして來た人々に、お前よりは多く出會つてゐる。さう云ふ人々のさう云ふ場合の表情を知つてゐる。つまりお前よりは年を老つてゐる。年を老ると、兎角、氣持の解釋に、夢のやうな余裕を排斥したがるもんだ。單純になつて行く、つまり何んだね。ローマン何んとか云ふ奴が身體の脂肪と一緒に、なくなつて行くんだね。

兄。そりや僕だつて解ります。だけど、茂雄は僕より若いと云ふ事をお忘れになつてはいけません。

父。だがこの十年はあいつにとつちや、お前の三十年にあたるかも知れないよ。年と云ふものは、脈の數に比例するもんぢやない。ある個人の頭の動きに比例するんだ。例へばだね、戀人を待つ五分間と、會つてから話をする一時間とば、どつちが長いとも云へないだらう。時の長さなどと云ふものは、感じるだけのものなんだからね。

兄。おやおや、驚いた。どうして、お父さんは中々ロマンチストぢやないですか。

父。何ね、ただお前方に、一番解り易い、ぴつたりとした例をとつたまでの事さ。

兄。成程、感じ方。さう云や何んでもさうですね。惚れて通へば千里も一里つてね。同じ距離の中で足を踏まれて、お付

顏が立たんでせう。

母。知らないよ。あたしや、感じ方なんてそんな當世風の便利なもんを持合せないからね。

兄。ハハ。ですが、お父さん。當面の問題として、一應、初枝の氣持を確めて置く必要はありますね。

父。さうだね。

兄。僕が訊いたつて、たゞ笑つてるだけなんだからな。

兄の妻。初枝さんの氣持は、妾、ようく解つて居りますわ。あの時だつて、茂雄さんの事がこちらの新聞に出たあの時だつて、初枝さんは、ちつとも悲しみはなさらなかつたんですものね。妾、あの時は少し怒つて了つた位。

兄。それはお前、氣持の上に起る、一種の錯覺ぢやないかい？

兄の妻。いいえ、そんな事ないわ。初枝さんはほんとに晴々としてらつしやいましたわ。でも、それから、段々、話をきいて、そりや尤もだつて事が、妾にも解つて參りましたの。

兄。どう云ふんだい？

兄の妻、なんでも、初枝さんの氣持はかう云ふんですつて。茂雄さんと結婚して、余りなんの障害もなく、從つて、幸福も薄つぺらで、初枝さんにはそれが物足らなかつたのね。茂雄さんが大事にしてた、ほら、琥珀のパイプがあつたでせう？ちよつとでも見えなくなると、茂雄さんは眼の色變えて騷いだでせう。あれと、自分と、どつちを茂雄さんは愛してゐるのかつて、そんな事迄考へたんですつて。

兄。つまり、ノラだね。

兄の妻。でも、ノラのやうに、家を出て行つて了ふ程、それ程茂雄さんに、冷淡にはなれなかつたのね。恩に何、茂雄

さんを愛してゐたのね。それで、自分の姿に何か知ら、あはれみの陰影(かげ)が出來なければ、茂雄さんはほんとに、自分を愛してはくれない。さうして、その時こそ、自分も完全に茂雄さんを戀する事が出來るんだつて、さう思つてゐたらしいのね。いや、それを念じてゐたらしいのよ。それで茂雄さんがあちらへ行つて、あの女との問題が起り、さうして、とうとうあの事件が突發した。すると初枝さんの頭には、茂雄さんの淋しい姿が映つた。それと同時に、茂雄さんの頭の鏡に、自分の寂しい姿が映つてゐる事を感じた。それをはつきりと感じた。多年の念願が報ひられたのです。初枝さんは、その時位、自分がほんとに戀されてゐるとはつきり感じた事はなく、從つて、その時位、茂雄さんを戀しいと思つた事はないつて、さう云つて居りましたわ。

母。まあ、妙な事を考へるもんだね、近頃の人達は。

兄。(しばらく考へてゐる。)初枝の氣持は、ほゞ俺にも解つた。所で一つ、今度はお前に質問があるんだがね。

兄の妻。妾に？何よ？

兄。お前は、お前も初枝の氣持が解るのかい？

兄の妻。えゝ。

兄。ぢや、それを肯定するんだね？

兄の妻。えゝ。どうして？

兄。つまり、[illegible]

兄の妻。まあ、やな方。あなた何事件かあつては思ひ出したわ。
兄。何だ？俺だいつ。……
兄の妻。知らなくつてよ。
母。これこれ。人様の中で夫婦喧嘩をする人がありますか。呆れた仲の良い夫婦だよ。
父。初枝はあんたに茂雄を愛してくれた。
兄の妻。ほんとでございますわね。ほら、毎年、クリスマスになると、年にたつた一遍許される手紙が参るでせう。いつだつたかも、あの小撚りを送つて参つた時なんぞ、…………
母。初枝が指輪にしてゐる、あれだらう？あの小撚りは一體何んにするんだい？
兄の妻。存じませんけど、何かにするんでございませう。あの内職で、お小遣ひが良い加減出來るつて書いてございましたわ。……それで、あの時なんぞも、妾が、何んの氣なしに、夜、目を覺したら、初枝さんがぱつちりと目を開けて、あの小撚りをぢつと凝視めてゐるんでせう。蔽をした電燈の下に、二つの瞳が光つてゐますの。妾がどうしたのつて、訊くと、靜かに、泣き乍ら話してくれましたわ。初枝さんはあの小撚りを見てゐるうちに、牢屋の鐵窓の下で、夜、ぢつとこの小撚りを撚り乍ら、たつた獨り、さして來る冷い月の光を浴びた、寂しい茂雄さんの姿が浮んで來るんですつて。そして、その瞳の中に、はつきりと自分自身の姿が浮んでゐるのが見えるんですつて。さうやつて、初枝さんは毎日、夜になつて、人が寢沈まると、獨り、ぢいつと床の上に起直つては、闇の中に瞠いた瞳で、ぢつとその小撚りを凝視めては泣くんですつて。妾、なんだか、いぢらしくなつてね、…………（涙ぐむ。）
兄。さうか。ぢや、お父さんの心配も杞憂でせうね。だけど、可愛さうだな。それだけに却つて。おい、吉田君と茂雄

はほんとに狂人(きちがひ)なのかね。

友人A。今井博士の診斷ですからね。

兄。だけど、今井博士がわざと氣をきかせて、…………

友人B。それも考へられますね。さうすると今井博士の人道心(ヒューマニテート)は茂雄君と云ふ一個人を余りに考慮に入れ過ぎたきらひがあつて、僕は益々今井博士の處置に疑ひを置きたくなるが。

友人A。いや、さうぢやない。事實氣狂ひなんだらう。今井博士のヒューマニテートは、ただ、うつちやつて置けば、そのまゝのものを、たゞ診斷して、故國へ歸すやうにしたと云ふ點にだけあるので、診斷をした手段の過程に、不正をしはしない。僕はあの人の日頃の人格から推して、あの人が、そんなに道學者的良心を、人情の前に消す位、センチメンタルだとは思はない。

友人B。それが疑問だと思ふ。僕はあの手紙を見ると、その心理の動きに、少しの狂ひをも認められないんだがね。

友人A。例へば？

友人B。一々例は上げられないがね。

母。この間、あたしの所へ寄越した手紙には、何んでも一年にたつた一遍、クリスマスの時だけは、どんな願ひでもきけるんださうでございましてね。一人の男が、まさかとは思つたんですが、豚を一匹つて云つた所が、早速[illegible]

見窄しき老船員。（眠り乍ら、呟く。）六人！

も、下を見ても、身長の高い、僕んな人の五六人位殺してるやうな、

は、自分の身體が如何にも貧弱で、しかも、たつた一人つしか人を殺し

つて書いてありましたよ。

母。まあ、それぢや、もうほんものの狂人ですわね。

妻。（息を連れて歸つて來る。）

一同ちよつと默る。

父。（やがて、）どれも、なまぢ狂人の研究なんかしなければ良かつたんだ。ミイラ

新聞記者。（寫眞班。助手を連れて出て來る。あたりを探す。友人Aに近附く。）あの、ちよつと伺ひますが、

お出迎ひの？

友人A。えゝさうです。

新聞記者。（名刺を渡す。）私、かう云ふものでございますが、お寫眞を一つ。

友人A。（父に、）よろしいんですか？（名刺を渡す。）

父。（名刺を見乍ら、）あゝ、新聞の方ですか。かまひません。どうせ解つてゐる事なんですからね。

新聞記者。ぢや、ここで待たして頂きます。（隅へ坐る。）

R。

I。（Aの連中の方を見乍ら、）何んだらうね、あの人達！

P。さあ？

姉。……ぢや、もう一つ白狀して了ひますわ。ちか子さんはね、お兄さんの許婚だつたのよ。

佐野。さうですか。それで解つた。巴里でご一緒に下宿してゐた時も、しよつ中、手紙を氣にしてゐらつしやつたから。

私はどうも變んだとは思つてゐたんです。下宿の扉(ドア)の隙間から、すゝするつて云ふあの音。僕のやうな木念仁でも……

…らなく嬉しく、懐しい氣がしましたわよ。

M。もしもし、何んです、[illegible]に聞いて。[illegible]すると、どうあん[illegible]にだ[illegible]……

佐野。おやおや、聞いてたんですね。[illegible]聞いて頂けたい話[illegible]た。

妹。（笑ふ。）だけど、佐野さん、そんなあつさりふれたんぢやないのよ。そりや、どうしても現代的な別れ方[illegible]

佐野。どう云ふんです？

妹。お兩人が横濱で別れてから、一年經つたのね。さうすると、兄さんは、ちか子さんの手紙の中に、ふと、或る束縛の匂ひを感じ出したのですわ。ちか子さんが、二人の約束を束縛に思ひ出したのに、氣がお付きになつたのですわ。實際、ちか子さんはその時、今の夫の方と段々親しくなり初めてゐらしつたのよ。兄さんはあゝ云ふ氣持の自由な人ですから、ちか子さんが、まだはつきりとそれを云ひ出さない先から、もう諦めて了つたんですね。それで手紙を書いた。あなたが、私との約束を、あなたの新しい戀の門途に際し、少しでも束縛として感じられる事を、自分が知らんふりをしてはゐられない。さうしたら、ちか子さんから答へが來て、別れさせて頂きますわつて云つて來たんですつて。それでお兩人はあつさりと別れて了つたんですつて。そして、別れる時のお約束として、その後半年の間に、必ず、お互ひに結婚して了はふとお約束したんですつて。そして、今度日本で會ふ時は、お互ひに既婚者として、氣持よく會はう。お互ひに悪い事でもしたやうに、氣まづい思ひをし合つたり、又は、から云ふ關係の男女がよくするやうに、お互ひに仇敵でも見るやうな、あんな厭やな眼つきをしないで濟ましたいとお約束なすつたんですつて。

佐野。さつぱりしたもんですね。こんな事云つちや失敬だけど、それぢや、ほんとに戀し合つてゐたんぢやなかつたんですね。

妹。いゝえ、それが可笑しいのよ。兄さんからもその後手紙で、僕はあの手紙を書き、あの返事を受取つた今、一番ち

ちか子さんを戀してゐる事を感じる。だからと云つて自分には、もうそれを取消す力がたい。それは丁度、あの河の底深く、投げこんで了つた彼女とのエンゲーヂリングが、とこしえに、自分の指には這入らないのと同じ事だつて、さう書いてお寄越しになつたのよ。お兄さんは、指輪をセイヌ河へ投げこんでお了ひになつたんですつて。夕陽が赤く、ノートルダムの屋根を照らしてゐる。お兄さんは、サンミツシエルの欄干にお顔を伏せて、頬がつめたく冷え切つて了ふ迄、お泣きになつたんですつて。

佐野。そこへ、今度お連れになる、奥さんがお通りになつたつて段取りですかね。

妹。それは、どうだか知らないわ。

佐野。で、そのちか子さんの方は？

妹。ちか子さんも、お兄さんの手紙を受取つて、私の所へやつて來て、散々泣いていらつしやいましたわ。それで、姿に、兄さんにどうかしてくれなんて云ふんぢやなく、姿、近いうちに、木村と、今の夫の方、その方と結婚するのよ、なんて、そ云つてらつしやるんですもの。姿には、あの兩人の氣持はまるで解らないわ。ようく訊いて見ると、お互ひに深く愛し合つてゐるからこそ別れるとも云ふのよ。

M。つまり結婚は戀愛の墓場だと思つてるんですね。さうだとすりや、却つて古いですね。そんな思想はもう二千年も前に、印度の山の奧の、…………

佐野。印度の話はもう澤山です。それでなくても戀の話は熱いんですから。

佐野。こんな氣持の後で、石本君が、初めて出會つた異國の少女の姿に戀人がその[illegible]に[illegible]、そこに、そこな約束迄あつちや。あちらの女はね、更に角、………

このあたりから、Aの山路の妻、ぢいつとBの會話の方を凝視め出す。その瞳が妙に光る。

佐野。（續けて、）……情熱的で、しかも、その情熱を理智で操る事を心得てゐるんですから、あちらの女はね。

I。佐野さん、又あちらの女ですか。

佐野。いやなに。

I。純粹人種學の立場ですか。

佐野。たゞ、例に出しただけです。今、栗子さんから、石本君とちか子さんとの戀の件を聞いてたんです。

O。え？ 石本君とちか子さん。ちか子さんて、さつきの人だらう？

佐野。許婚だつたんですつてさ。

I。さうだらう、僕はどうも變んだと思つてゐたんだ。やつぱり小説家の觀察は鋭いな。送りに行つた時、石本の瞳がどうも一つ所を凝視めてゐるんだ。俺達の言葉なんかてんで上の空で、たつた一本のテツプをぢいつと握つてゐるんだ。あの時の日傘の主が、そのちか子さんだつたのか。人を見るのはこつちの商賣だからな。

M。小説家なんて、まるで宿屋の番頭みたいなもんだな。

O。あの詩ね。何んかの雜誌に出てた。ありや、どうもたゞ事ちやないと思つてたよ。

見窄しき老船員。（眠り乍ら、呟く。）六人！

佐野。だけど、栗子さん、僕には石本君の氣持は解りますよ。あの人には自分の傍に、一人の女性が少しでも邪魔を感じてゐると云ふ事は、とても堪えられない事だつたでせうよ。あの人は、そりや消極的な男だつたんですからね。進んで、人を幸福にすると云ふより、その人のその時の幸福に、少しでも陰影をさしちやいけないと、きつと思つたんでせうね。例へば、あの人と二人で、銀座を歩いてゐるんですね。向ふから、女連れが來る。すると、定つて、あの人は下を向いて通るんです。僕が訊くと、答へる。つまり、二人の女のうち、どつちかを見る。さうすると、殘りの一人はきつと淋しく感じるに違ひないつて云ふのです。

M。そりや詭辯だ。プラトンだつたか、ソクラテスだつたか、それともアリストテレスだつたかに、こんな話がある。まあ、プラトンにして置くよ、一番短いから。一人の女がそこへやつて來て、かう云ふんだ。倅を官吏にし度くない。正直にしてゐれば、下の者から、融通の利かない野暮な奴だと煙たがられ、不正直にすれば、神の御意に背くからつて。するとプラトンが云ふ。そりや違ふ。正直にすれば、神の御意に叶ふし、不正直にして、賄賂でも取つてやれば、下のものから、こいつ話せるわいと、喜ばれるぢやないかつて云ふのがある。つまり、石本の場合だつて、二人の女に出會ふ、一人の顏を見てやれば、その女は反對に非常に幸福になれるぢやないか。

佐野。いや、僕の云ふ意味はさうぢやない。つまり、ものには、全て、さう云ふ二つの見方がある。石本君は常にその消極的の方をとると云ふ事を云つてるのさ。

妹。お兩人の戀はほんとにプラトニツクだつたのね。

佐野。さうですね。結婚と云ふカテゴリーに束縛されたくても、今迄通り愛し合へると云ふ所に、誇りをそこへ置いてゐるのかも知れませんね。

S。いや、戀人の愛と、夫婦愛とを使ひ別けやうと云ふ、巴里大流行の行き方ですね。

I。佐野さんのネクタイみたいな戀だな。

M。やつぱり毛唐の中にゐると、考へ迄も毛唐らしくなるんだね。

佐野。おい君、毛唐とは何んです。君のやうなインテリゲンチヤの口から、まだそんな明治初年の、ちよん髷のやうな言葉を聞くと、僕は實際アナクロニズムを感じますね。あちらへ行つて、チヤツプと云ふ言葉を聞いた時の、あの淋しさが、ちよつとでも君方に解つたらなあ。

汽笛の音。

S。あ、着いたらしい。

AとB

皆、がやがや云ひ乍ら、窓口へ行く。

佐野。やあ、見えたぞ。

P。見える〳〵。どうだい、あの大きな船の姿は。

弟。やあ、着いた。

I。いいなあ。僕は船を見ると、このまゝ、あれに乘つて旅がしたくなるよ。

Aの方の桜。初枝！

息。（背伸びして、）どれ、どれ？

弟。（抱き上げてやる。）ほら。

息。あれ？

佐野。あの大きな船が、まるで扇風器の前の蠅のやうに無力に、木の葉か何かのやうに揺れるんですからね。印度洋のモンスンと來たら、哲學も絲瓜もありやしない、山のやうな黑い波が、かう、……

I。佐野さん、見たやうな事を云ひますね。

佐野。だつて君、僕は、…………

I。いや、君が印度洋を船で通つたつて云ふ事實は直實ですよ。だけど、君が、その嵐の最中、果して眼を開けてゐたかどうかは、Who knows? ですからね。

皆、笑ふ。

郵船の小僧。（入つて來る。）皆さん、船が着きました。（去る。）

P。なんだ、ありや？

佐野。知らせに來たんでせう。

I。ベルみたいな男だな。

佐野。いや、僕が行つて來ますから、皆さんここで待つてて下さい。

Bの方の父。これが良からう。ここの方が靜かでいい。

佐野。(去る。)

友人A。ぢや、皆さん、參りませう。

Aの方の父。初枝！氣を落ちつけてな。

妻。(やはり、淋しく笑ふ。)はい。

新聞記者。(友人Aに、)ぢや、ここでお待ちして居ります。(助手に、)這入つてるね？

助手。(乾板を調べ乍ら、)えゝ。

息。僕、錯しいな。

Aの組の人、全部去る。

見窄しき老婦I。(眼を覺し、いきなり大聲に、)六人だい！

B。

I。(新聞記者に、)ちよつとお伺ひしますが、(Aの人々の後姿を指して、)今の人達は何んなんです？

新聞記者。あれは、山路つて云ふ醫學士を出迎へる人達なんです。

一同聞耳を立てる。

O。何か事件でもあつたんですか？

新聞記者。え〻。もう十年程前に、精神病を研究しに、アメリカへ行つたんですが、向ふの病院で研究してゐるうちに、そこの看護婦で、Miss Lucie つて云ふ女に惚れましてね、………

M。Miss Lucie 良い名前だな。

新聞記者。まあ、その擧句、戀の嫉妬から、同僚の醫師を殺したんです。ピストルでね。勿論外人です。それで、無期懲役の刑を受けてたんですが、今度その人の先生で、あの有名な今井博士が向ふへ行つて、精神鑑定の結果、全く精神に異常があると云ふので、送還されたのです。何んでもその足で松澤病院へやられるらしいですね。

I。そりや可哀いさうだ。

妹。だつて奥さんでせう、さつきそこにゐらしつた綺麗なお方！

新聞記者。え、さうです。

妹。お可哀いさうだわ。

O。（ふざけて、）これも運命のいたづらか。全五卷。

妹。こんな時にふざける人、妾嫌ひ。

O。これはいかん。あなたにそんな事を云はれると、僕は今の奥さんよりも、もつと慘めになるんです。

妹。まあ、知らなくつてよ。

M。太田、君は御婦人にはもてないよ。

母と同じ。「ほんまり、今晩家に[illegible]たらみなさんさかいに、[illegible]を[illegible]つて下さいてくれてありましたわ。」

外から悲しさうなヴアイオリンの音が流れて来る。露西亜の何か民謡。皆んな黙つて聞いてゐる。

やゝ長き間。

O。来たらしいぞ。

S。どれ？

この時、Aの組の人々、どやどやと這入つて来る。皆んな打沈んでゐる。パーサーとボーイが従いて来る。妻は、兄の妻に依りかかつて、顔を埋めてゐる。息がすがつてゐる。Bの組の人々は、憐んな顔をして見てゐる、その他、人物適宜の出入あり。

A。

息。パパはどうしたの？

一同無言。

息。よう、ママーつたら、よう

妻。（歔欷く。）

母。坊や！

事務長(パーサー)。そんなわけで、まことに申訳ございませんが、いづれ充分調査致しまして、その、責任を明らかに致す心算(つもり)で居ります。」

新聞記者。お着きになりましたか？

友人A。いや。

新聞記者。と申しますと？（直感的に感づいたらしく、口を噤ぐ。）

事務長。兎に角、上陸の間際で、誰れも氣が付かなかつたのでした。つひ、今しがた、どうもあの方の姿がお見えにならないと云ふので、それから、大騷ぎになりまして、お部屋を探しましたら、お机の中に、これがあつたので、……

（ポケットを探ぐる。）

B

妹。どうしたんでせうね？

佐野。さあ？

A

友人B。だつて、君、あの人は特別監視付きぢやなかつたんですか？

事務長（パーサー）。はあ、それは、さうだつたんですが、何しろ、その、……

[illegible]

母。（こゝは、ふるへる。）

兄。（同じく。）

父。（無音に讀む。震へる。）

母。（歔欷く。）

友人A。（一通の表紙をBに示し、）お見せしちまうか？

友人B。そりや、ねえ。あゝ。

友人A。（その一通を兄の妻に渡す。）

兄の妻。初枝さん！

妻。（默つて泣いてゐる。）

兄の妻。（兄に、）後にしませうね？

兄。（默つてうなづく。）

友人A。（Bと共に一通を讀む。）

見苦しき老船員。（眼を見張し、妙にどなる。極めて、悲痛に、）六人――六人！ 後から後からと、ひり出しやがる。一艘全艘、どいどうしてくれるんでえ。馬鹿！

そつちへ、氣を取られるもの、取られないもの。

B。

母。五郎どないしたんだつしやろ？

父。まだ見えんか？

A。

ボーイ。（ポケットから小型の額椽をとり出して、小聲で、パーサーに、）お渡し致しますか？

事務長。（小聲で、）あゝ。他の方にね。

ボーイ。（母に渡す。）

母。（歔欷き乍ら、）初枝の寫眞ですわ。

ボーイ。お机の上にずつと飾つてございました。

父。猫は死を豫感すると、默つて、そつと、人の見ない暗い椽の下へ這入つて行く。あれもたつた獨り、人のゐない、夜の舷邊に立つて、闇の中に白く渦卷く、暗い水を見たのだらう。青白い兩手が水を掴んで、無意識的に船に向つて突き出される。……

方々で低い歔欷。

兄。（ボーイに金をやり乍ら、）御苦勞。おや、更に何、荷物を玄關の方へ廻して置いて[illegible]

ボーイ。はあ。（帽子を脱いで、お辭儀してゐる。）

次のBの會話のうち、各々、ひそ／＼と談合す。妻だけ、脇で默つてゐる。

B。（早く、すら／＼と、）

佐野の聲。（突然、表で、）ブラボー花嫁花婿の御入來！

石本。（外人の女と手を組んで、元氣に這入つてくる。）やあ、皆さん。有難う。

妹。五郎！

一同、ちよつと變んな氣まづい顔附。やがて、Aの事は忘れたやうに、陽氣になる。

O。ソエル・カム！

M。よう。

I。ビエンブニュ！

S。元氣で良かつたなあ。

I。（佐野に、小聲で、）シヤンですね。

妹。兄さん！

石本。あゝ、要ちやんか。さうさう、紹介しなくつちや。僕の妻だよ。Suzanne Alphandéry Madame Ishimoto だ。

(C'est ma soeur, Mll. Yoko

Suzanne。(やゝ極り惡るさうに、お辭儀をする。小聲で、日本語で、)さよなら。

石本。Ce n,est pas "Sayonara". Ca signifie au revoir. tu dois "Konchiwa"
(父の側へ進み、)お父さん、久らく。お母さんも來てたんですね。あんまり小さいから。

母。(泣き聲で、)丈夫でまあ何よりだんね。

石本。お母さんに、僕の妻君を紹介しなくつちや。

母。いやや、わて。

石本。そんな事云つたつて駄目です。どうせするんですから。食ひつきやしませんよ。

母。ほんなら、お前通辯してんか。

石本。ええ。

母。それに、あのチユつて吸ひつく奴は御免やで、えゝか？初めから斷つといてや。

石本。ハハヘ、大丈夫ですよ。(妻に、)Ma mer

Suzanne。(愛嬌よく進み、手を出す。)こんちは！

母。(おづおづ手を握り、)どうぞ、お心安うに。

石本。お母さんの大阪辯にも困つたな。折角、船の中で正統の日本語を教えて來たのに。

妹。兄さん、西洋館が出來ててよ。

石本。ぢや、荷物は大丈夫ですね。
佐野。えゝ、早速新家庭へ送らせます。郵船の方で、すつかりやつてくれるらしいですよ。

その時、外で又さつきの悲しいヴァイオリンが聞えて來る。これはこの劇の終り迄續く。

石本。何んだい、あれあ?
佐野。放浪露西亜人のヴァイオリン弾きだよ。どこの波止場にもつきもんだ。君も聞いたらう、マルセイユで?黄昏の異國の港で、あの悲しいヴァイオリンの音を聞くと、實際つくづく、國を離れて來てゐる事を想ふね。
石本。さうか。日本も中々エキゾチツクになつたね。
佐野。あゝ。露西亜から多勢流れこんでるからね。
O。何んて、不景氣な曲を弾いてやがるんだ。ブライダルマーチでも弾かないかな。……タンタタター、タンタタター、……一同陽氣に和す。

A

その時、突然、甲高い異様の笑ひ聲。
一同、Aの組もBの組の人々も、びつくりしてその聲の主を見る。
妻。(いきなり、兄の妻のふところから、さつきの夫の端書を取り、そのまゝ前へよろけ出る。手紙をかざし、)小撚り!(ぢいつと、自分の指を見て、小撚りの指輪を外す。その拍子に手紙が下へ落ちる。)
息。(手紙を拾ひ、)繪葉書?(妻が默つてゐるので、何んとなく恐くなつたやうに、兄の妻にすがり、)僕、恐いや。

負へないところがあるわ—」

「そりやお前世間を見て居るもの。どうしてなか〳〵……お前をどう動かす位のことはちやんと心得て居るさ」

「私には、本ものと思へない體裁のいゝものを、正面から有難がつて受取つて置いて、その間にぐん〳〵此方をのして行くと云ふやうなことが迚も出來ないんでね。眞正面でない關係は私に持ち切れない。其なら、一刀兩斷な處置をするかといへば又さうも出來ず……勝氣などこぢやあないわ」

「人によつて違ふもんだね」

多計代は、俄に力をこめた聲を出した。

「私なんかだつたら、一思ひに思ひ切つちやふね、自分を眞から愛しもしないやうな者に引づられて行くなんて、考へただけだつて堪らないことぢやあないか」

現在、自分の對手にさういふ者でも現れたやうに勢こんだ彼女の口調が、伸子に一寸可笑しかつた。

「だつて——其ぢやあ自分の心持はどうするの、相手が本當に愛さない、其ならつて自分の愛が急に消え切る？ さう都合よく片づかないから、切ない思ひをするんぢやあないの。つまり云へば誰だつて對手の愛を苦しむんぢやあなくて、自分の心にある愛を苦しむ方が多いんだわ」

「ぢやあお前——まだ佃を愛して居るの？」

隙間風のやうな寂しさが、伸子の心を通つた。世間の、一度結婚してそれが破れ、兩親の家に戻つた娘が一人殘さず經驗するだらう憂愁の源を、伸子は母親の單純な質問の中に發見するやうな氣がした。

伸子は、程經つてから自分に述懷するやうに

「折角の愛も何もかも捧げてさへ彼方に渡つたなら、私はやきもきして居ることよ」

と云つた。

「私にはね、どうしても、普通の結婚生活がやつて行けないからつて、持つて居る好意や愛まで打消さなけりやならない譯は決してない氣がするの。何とか工夫のつかないものかしら——本當にさう思つてよ。何もこれまでの夫婦がさうしか行けなかつたからつて、眞似をするには及ばないんですものね、見識は、組立てるにだつて、解ぐすにだつてあつていゝわ」

「俺は其那ことは解らない人だよ、——始つからお前——目的が違ふんだもの」

「それなら其でいゝのよ」

仲子は、はつきりこだはりなく答へた。

「私と生活して何かいゝことがあつたんなら、私それで結構よ。結構だから、別々になればどう斯うと消極的な、自棄みたいなことを云つてさへ云つて呉れなければ。——私自棄ほど嫌いなものはないわ、自棄になつた人間程慘めで醜いものはありやしないわ。自分の故で、さういふ人間を一人作るかと思ふと、ぞつとして勇氣も何も失つて仕舞ふのよ」

「…………」

微に、多計代の起上るらしい氣勢が闇の中でした。仲子は、頭でだけ母の方に向いた。

「なんなの」

「いゝえね、少し涼しすぎるやうだから羽根布團をかけようかと思つて——お前はどう？　それでいゝかい？　に

仲子は、緋の小夜着をかけた胸をたゝいた。

「大丈夫よ、すつかりかけて居るから」

多計代は、年寄らしく

「田舎は此だけ違ふんだねえ」

と呟き乍ら、又寝た様子だつたが、いきなり思ひ出したやうに聲高く云つた。

「なにどつち道心配することたあありやしないよ」

「何が？」

「あのひとが云ふことをさ」

「どういふ意味で？」

「だつて判つて居るぢやあないか。死ぬなんぞする人ではありませんよ。其那若々しい馬鹿ではないよ」

「――さう高は括れないわ」

「ぢやあ見て居て御覧！」

多計代は、嬉しさうな、挑戦的な聲を出した。

「若し本當に其那人だつたら私はあのひとを見あげるよ。どんなにでもして私の不明を謝さう」

――仲子は、いやな心持になつて黙つた。つい本氣になつて母と頑々話し[illegible]

い。姉様よ。

「……そろ／＼寢ようかね」

と欠伸まじりに呟いたら

「空氣がいゝ故と見えて、こつちへ來たら不眠なんぞすつかり忘れたやうになつて仕舞つたよ」

「…………………」

「ぢやあ、おやすみ」

「――おやすみなさい」

十分もしないうちに、苦のなささうな平らかな寢息が母のところから聞えて來た。仲子は、目をあいたなり、凝つとそれを聽いて居た。たゞ一つの細い寢息に引れて、洪水のやうな周圍の闇や先刻からの遊い氣持が、規則正しくさしたり退いたりするやうだ。仲子は段々居苦しくなつて來た。彼女は、そつと寢床を出た。蚊帳の裾が、冷え／＼足の裏に滑つこい藤蓙の敷物の上に落ちて重い音を立てた。

のろ／＼廊下を行くと、雨戸に切嵌めた硝子窓から、燐光のやうな月の光が、傍の障子に照つて居た。仲子は、顔を押しつけて外を見た。庭ぢゆうに月がさして居る。その中を歩いたら妙に燦く液體がねばりつきさうな光波につゝまれ、圓い躑躅や檜葉がくつきり黑い影を從がへて鎭りかへつて居る。樹や芝生が夢幻的に生あるものゝやうに思へた。この月夜には、人間の靈魂も遠くまでたやすく傳はりさうだ。何百里も離れたところで、妻である女とその母との間に、先刻のやうな會話がとりかはされた。―それが同じ夜、個の魂へ響いて行つたら、彼はどんな心地に打れるであう。…………

仲子はむきになつて、二三度、右手を力一杯顔の前で振り動した。今、雨戸を抜け、月光に浸つた夜氣の中へ浮き出して行く魂の波動を、いそいでごちやまぜにして、遮り止めようとでもするやうに。

（二）

十月になつて、やつと仲子は赤阪の家に戻つた。二ケ月前、佃と那須へ行くに同じ線を北に向つた時分と、風景はすつかり違つた。一面秋だ。

上野の構内に列車が入ると、赤帽を呼ぶ爲に、仲子は早くから窓をあけプラットフォームを見て居た。直ぐ發車する汽車が、向ふ側に入つて居、その方の見送りや貨物の積込みやで雜踏する中に、數人の出迎へが、此方の客車一つ一つに注目して佇んで居る。群の中に仲子は思ひがけない横顔を認めた氣がした。佃そつくりの外套を着、山高をかぶつた男が、人待ち顔に立つて居る。彼女の着く時間は手紙で知らしてある。仲子は、體ぢゆうぽーつと熱くなるやうに感情を動かされた。彼が來て呉れたのだらうか？　彼だらうか？　彼が來て呉れるとは思ひがけない！仲子は一層窓からのり出した。その佃らしい横顔に向つて合圖のつもりで手を振つた。が、仲子の目前の人の注意は引かず、赤帽がまだ惰力のある列車の窓の下に駈けつけて來た。

「何箇です？　これだけですか」

仲子は、聲の屆かない處に佇んで居るその人影を見失ふまいと氣が氣でなく、

早足に昇降口から、其人の立つて居る柱の處まで進んだ。仲子は、愈々良人かと思つた時ひどく動悸がし、口がしばんと結んで居られない程であつた。待つ十歩をもどかしく亂し。三尺ばかりの距離まで來。改めて其の顔を見なほすと彼女は變な、泣笑ひのやうな波を口に漂はして、ふいと傍に逸れた。側ではなかつた。

改札口まで歩き乍ら、仲子は彼那に待たれて歸る人は何といふ幸福だらうと泌々思つた。考へて見れば良人が迎へに出て呉れようなどゝ空想したのが、抑々間違ひであつたと云へた。彼は、、仲子が何處へか行つたり歸つたりする時、決してステイションまでとも來たことはない人だ。其上、歡んで迎へて呉れと要求されもしない心持でもある。去年の初夏同じ田舍から、同じやうにして歸つて來た。その時と自分の感情が全然違つて居る。それは仲子によくわかつて居た。今度、仲子が歸つて來たのは、どうして夫婦の關係を立てなほさうかと思ふより、最も合理的に、その關係を更へるに何うしたらよからうといふ考に押されてであつた。互の運命に對する恐れも深くあつた。特に個の側に對して。如何那に救ひがたいものとなつては居ても、仲子は良人との絆にまだ愛があつた。他人にその始末をつけて貰はふとは絶對に思はなかつた。せめて自分の意志と後に悔の殘らない必然とで破れるものなら破りたい。さういふ心持ちなのであつた。其那筈はないと心得て居ながら、俥の梶棒があがる時、仲子はもう一遍、撒水した日光のさゝない三和土の上でプラツトフオームから來る小荷物運搬の手押車をよけ〳〵かたまつて居る疎な群集の中を物色した。先刻の側をつくりの横顔を持つた男は見えなかつた。

仲子が歸つて間もなく、勤めて居る學校の都合で、二日休みの日があつた。

仲子は椽側に坐布團を持ち出して、エシオピカを讀んで居た。秋晴れの澄んだ天氣であつた。手洗鉢の横に先住の

が置いて行つた薔薇が、もう終りの小さい鮭肉色の花を二輪つけて居た。薔薇のうしろは古い竹垣で、隣家の庭に古た羽目が高く見えた。羽目は黒いのだが、永年の風雨に曝されて荒廢し、黒さも藍鼠色にぼんやりしたところへ、白つぽい細かい黴が蛾の粉でも撒いたやうに滲み出して居る。それを背景に、黄がかつた鮮やかな二輪の薔薇は非常に美しく見えた。艶ある濃臙脂の纖い小枝の線、夜の霧に蝕まれ始めた葉の複雑な色。朽ちかけた黒い羽目に、此より優れた調和はない。

讀みかけの頁に指を挾んだまゝ、伸子は快感をもつて花や蔓のよい羽目やらに見とれて居た。此那樹模様があつたとしたら、其は如何那に美しからう。伸子は、立派な樹模様は見たが、好きな、本當の趣味ある樹模様といふのは此迄一度も見なかつた。

あちら向きになつて、一本ある松の樹の下を描いて居た佃が、伸子の方を顧た。

「──どうです？ 面白い？」

「これ？」

伸子は、薔薇から目を離し片手に持つたなりのエシオピカをあげて見せた。

「──さうね、冒険物語よ……春浪ばりみたいな書き出しだわ」

「でも、古い人でせう。その著者は……何とかドラスとかいふ男は」

「古いことは古いらしいわね──」

伸子は、緒言のところを翻した。

「四世紀頃ですつて」

「ふむ…………」

これきりエシオピカは打ち切り。彼は、狭い地面を疎々に敷いた庭石のところに立つて彼方此方見廻した。不図、彼は何か見つけ、不興げな表情で、つくばひの傍に行つた

「仕様がないな——又此那足跡をつけて居る」

彼は、スリツパの古いのを穿いた片足で、ぺた〱一箇所を踏みつけた。

「とよ！　とよ！」

木戸から、とよが首を延して

「お呼びになりましたか」

と云つた。

「——お前今朝下駄でこゝを踏んだかい？」

「…………さあ」

とよは、椽側に居る伸子の方に流眄をし、困却したやうに佃の踏んで居る箇處を見守つた。

「滅茶々々に歩かないで呉れ、僕ばかり一生懸命に掃除して居るんじやないか」

とよは、明に不服な表情で

「はい」

とだけ答へた。

「——[illegible]も、[illegible]た」

鋏を受取り乍らも、佃は念を入れて、足跡のことを繰かへした。伸子は傍で見て居、妙な、極り悪さを感じた。自分達夫婦のさつぱりしないいきさつの飛沫を、女中が受けてゐるやうに思へた。

花鋏で、佃は枯れた松の小枝を剪つてから、薔薇の樹のところへ來た。八つ手の蔭を潜つて、横手から、彼は咲かずに萎れた蕾を挾み始めた。伸子は默つて見て居た。佃は、段々鋏を入れて、伸子がさつきから惜をひかれて眺めて居た二輪の、半開の花迄挾まうとした。

「む。それはやめて下さらない。奇麗だから、」

「かうやつて置いても直き駄目になりますよ。剪つてさしたらいゝでせう」

「でも——剪つちやあまはりの樣子が違つて仕舞ふから——いゝんでせう？ そうして置いたつて」

佃は、捕へた枝を離さず、

「永く花を置くと幹が痛むから剪らうと思ふだけですよ」

伸子は、言葉に出すと何處か氣障のやうで、その二輪の黄がかつた鮭肉色の薔薇が、背景の荒れ古びた黑い羽目の前に、咲いて如何な風情に富むか說明出來なかつた。

「——本當にさうやつて咲いて居るといゝのに！」

「ぢやあやめませう——do as you please」

佃は、ふてた顏で八つ手の下を潜つて出て來乍ら呟いた。

「——こんな花！もつと〳〵奇麗だつた時には見る人もなかつた」

伸子は、伏目になつた。枝一杯にこの薔薇が花をつけて居た頃、四十日も前になるだらう、彼女は田舍に居て、夜毎に

耳だつて來る蟲の音と、黄色くなつて來る庭の芝生を見て暮して居た。その時の氣持や、今自分達二人が、夕闇のさす庭で薔薇を剪る剪らぬと云つて居る心持。愛し合つて居た筈の二つの心が聯絡を失ひ、離れ切れない消極の力だけに求かれて互に彷徨して居る狀態が切なく仲子の胸に迫つた。これから何年か經つた後の或秋晴の日、偶然今日の些細なこの情景が憶ひ出されることがあつたら、椽に座つて居た自分、庭に立つて居た佃の姿、美しかつた二輪の薔薇が、果して何を自分に語るだらう。

仲子は、立つて部屋に入つた。

翌朝、黎明に、仲子は通りすがりの硝子戸の中から庭をすかして見た。薔薇の花は露に濡れ、頭をうなだれるやうにし乍ら、色鮮やかに昨日と變らず咲いて居る。その色の鮮さ、可憐な姿が異樣に仲子の心を傷ませた。彼女は眼を逸すやうにして通りすがつた。

（三）

夜の八時。客間から、スミルノフが、ハフイズの詩を音讀して居るのが聞えた。後について、佃が、抑揚をひどく注意し乍ら、一スタンザづゝ讀んで行く。――意味の分らない喉音の多い、單調な二つの男の聲は、四邊の空氣を重く感じさせた。

スミルノフは、テヘランの羊毛商の息子で、日本に商用で來てゐた。佃は或機會から、毎週一度づつ來て貰つて、古詩の研究をしてゐた。まだ廿五六才の青年で、元氣のいゝ時は白皙な額や張つた顎つきでどう見ても歐洲人であつた。疲れて、欠伸が出るやうな時、彼の相貌はすつかり變つて純然たるイラン型になる。彼には二つの面がある。混血であ

一（暑）一

つた。鼻の長い、眉の重い、皮膚の色まで淺黒くなつた波斯人のスミルノフの表情を思ひ浮べ乍ら、伸子は樹に嫉
ついて居た。卓子を挾んで、眉を張り、ノートに色鉛筆でしるしをつけ乍ら几帳面に讀んで居る佃の後姿も、まざまざ
見えて來るやうだ。……スミルノフが低い聲で何か云ふのに、彼がせはしくて重ねて

「yes. yes.」

と答へる聲がした。伸子は、部屋の中を、彼方此方動き出した。

伸子は、數日來、一種情熱の足りない自己嫌惡に陷つて居た。

今度歸つて來、伸子は、良人がもう自分をなみの女として扱へなくなつたのを知つた。持てあまし、要點が捕へられず、恐れるべきなのか、憐れむべきなのか。兎に角觸らぬ神に祟りなし。さうきめた風に感じられた。田舍に居た間のことについては、伸子の方のことも訊かないと同時に、佃は自分の方のことも一切話さなかつた。

「歸つてさへ來れば、いつでもウエルカム・ホームですよ。ベイビ」

然し、本當のベイビのやうに無垢ではない。伸子は事實女で、彼の妻であつた。彼等の間では夫婦間の××も、自然さを失つて居た。

××に、家族主義的な希望もなければ、原始的な欲望の燃え上りから生ずる淨らかな力も缺けて居た。佃の何だか思惑的な、さういふ行爲さへ伸子の爲、といふ感情を感じるのは、伸子にとつて苦しく、屈辱であつた。彼女は、ひとりでに滿ち溢れて來る泉のやうな自分の若い、潑溂とした生命力さへ、其那時は憎く、口惜しく、悲しかつた。二度と還らない若さにまで、不合理な恥辱を感じさせる佃を恨んで泣いた。二人の關係が、惡いのだ、間違つてしまつて居るのだ。

伸子には、よくわかつた。一人一人離れて見れば、大して惡い者でもなく、慘酷なものでもない人間同志も、或關係の

―（若）―

下に置かれると、別人になる。――何より其處を正すべきなのは彼女自身知りすぎてゐる。

田舎から歸る決心をした時、仲子は、自分が多分に佃のことを考へてゐると思つて居た。其上の解決を得たい。徒に生活を破りたくない、よい動機で歸るやうに思つた。ところが、自重するばかりではないらしい不決斷で、毎日を消して居る自分を顧るとさうばかり考へられないから、仲子は歩き廻はらずには居られないのだ。

佃は彼一流の忍耐と狡さから、形式上昨日のことは昨日のこととしようと仕て居る。自分は自分で、知らず知らずそこにつけ込んで居るのではないかといふ氣がして來た。彼を攻めつゝ、結局勇氣の足りない、我ながら始末のつきかねる自分を一時預けにして居るのではないだらうか。

仲子は、よくあるやうに、他に新たな戀人が出來たので、やつと境遇を更へた。然し、或男の妻であり、家庭生活を濟む點では、以前の反覆に過ない、つまり男から男へ移つたといふだけのやうな生活法にはいろいろ疑ひがあつた。彼女は、佃と誰かを比較して、結婚生活がいやなのではなかつた。相互の性格によつて種々生じる不都合と、並に、結婚生活のしきたりとでも云ふか、一般男女間に通用して居る生活の感じ方、生き方に、納得ゆかぬ數々を見出して居るのであつた。佃は、仲子にとつて最初の良人であつた。そして、恐らく最後の良人となるらしかつた。仲子自身もつと違つた女に生れ更るか、或は性生活の常識が或點の變化でもして無理がなくならなければ。つまり、仲子にとつて佃と夫婦生活がやつて行けないのは、たゞ對手が佃だからと云ふだけの理由ではない譯であつた。面倒な言葉で云へば、佃といふ男、自分と彼との結合で生活に導き入れられた、彼女に辛棒ならぬ中流的な精神や感情の不活潑さ、貧弱な僞善、結句は恩給證と引かへにするのが嬉しいらしい所謂仕事の態度、それ等と、迚もうまく調子を合はせては行けない自分を、見出したといふことになるのであつた。其故、仲子は、佃に對して、混りけのない或氣の毒さがあつた。彼だけ

うなのではないから。彼女は、自分を彼に結びつけたが、むしやらな熱情を訖ることは出來た。然し、歎しさだけはなく、自分の主張を實行出來る心のよりどころがあるのであつた。

其だのに何故ぐずぐずせずには居られないのだらう。愛の故か？たゞ數年間夫婦として暮した習慣によつてゞあらうか。又、人間は悲しい生き物で、藁しべ一本程でも好意が殘つて居るうちは、せめては其をかたみとして互にわけ持つて別々に生きようとなど出來ない愚かなものなのだらうか。何か暴力が加はらなければ、例へば誰か一人の人が現れて、側から自分を奪ひ去つてゞも呉れなければ、處理がつきかねるのだらうか。

底の底には、自分の腕の働きで生活して行く將來の生活へのたぢろぎが、微塵もないと、伸子には思へなかつた。側がこの微妙な弱さを、氣付かないとは考へられない。彼が腹では、伸子がいくらいきり立つても、何、いざとなつて見ろ、と思ひつゝ、ベイビ、ベイビと甘やかす。——。伸子は、歩き乍ら、堪え難い何ものかから身を防ぐやうに兩肩をすぼめた。

不意に、ガチヤンと、匙が紅茶皿にぶつかる亂暴な音がした。向ふの部屋で、音讀する聲が止んだのにちつとも心付かなかつた。とよが、飲物を運ぶ足音がする。——もう濟んだかと思ふと、伸子は漠然とこの部屋に居るのが厭な心持がした。良人と口を利くのが苦痛であつた。どつか、暗い、人の居ない隅つこに早くもぐりこんで寢てしまひたい。すつかり世の中が變つて仕舞ふ迄寢通したい。……………襖が開いた。板の間を踏む音がする。左右に搖れるやうな彼獨特の音。伸子は、[illegible]の方を見た。[illegible]

いたやうな聲で
「なあに」
と自分から訊いた。
「――ミスタ・スミルノフがこれを下すつたんだが………」
佃は、異常な空氣を感じたと見え、改めて伸子を上下に眺めた。
「――來ませんか、こつちへ」
伸子は、背を摑まへたまゝ、横から椅子にかけた。
「――邪魔でせう? 今夜。――失禮するわ。よろしく、どうぞ」
スミルノフ一人なので、彼はすぐ箱を伸子にあづけて去つた。箱には、ティッシュ・ペエパに包まれた波斯棗の砂糖づけが入つて居た。

(四)

十二月になつたばかりの或晩であつた。
伸子は女中部屋に座つて居た。とよが、妹にやる肩掛を編むと云つて、暖さうな雜色の毛糸を買つて來た。
「――一寸お手がおすきでゐらつしやいませうか」
「何なの」
「これをまきますに、一寸………」

「あゝいゝわ、さ」

仲子は、兩手を延した。

「有難うございます——すぐすみますから」

疊半疊ほど離れて、とよが、血色のよい、胸の張つた、ルノアルの田舍女めいた樣子でせつせと毛糸玉を大きくし始めた。後の壁に、新聞附錄の美人畫がはりつけてあり、赤い襟が氣發油で洗つて、かけてある。眺め廻し乍ら、仲子は心持よく手を動して居た。小さい時分、よく母の前に坐つて縫糸を卷く手傳ひをさせられた。仲子は、小町糸を奇麗にしんなしに卷いて一杯色まぜに入れてあつた箱を思ひ出した。表に、十二單衣の姫の繪がついて居るボール箱であつた。樟の用簞笥に入つて居た。引出しをあけるとぷーんと、樟の香がする。その香にしみて、七色の小町糸は珍しく、美しく、寶のやうに見えた。欲しくて、ちよい〳〵指先で押して見た憶へがある。あれば母がいくつの頃であつたらう、廿七八であつたらうか。——仲子の近年に、こんな糸卷きの手つだひをしたのは珍しいことであつた。彼女はどこかに嬉しい心持さへした。

「とよや、いつもはどうして居たの、一人で出來たの?」

「普通の糸なら引つぱつてかたく卷いても平氣でございますから、一人で出來ますんですけれど」

とよは、仲子が飽きたと感違ひをし手を急がせた。

「いゝのよ、ゆつくりで。

—（卅）—

「——もつとも、私みたいに家に落付けない人を當にも出來ないわけだね」

四オンスめの糸が、五六本、細いわくになつて伸子の手頸に絡みついて居る時、佃の呼ぶ聲がした。とよは、あはてゝ、頭を下げながらいざりよつて毛糸をとりのけた。

佃は、机の前に居た。

「何か御用？」

「——一寸」

「何なの」

伸子は、机の横に立つて良人を見た。佃は、脚に毛布を巻きつけて腰かけて居る體を椅子の上で反すやうにし、伸子を凝つと眺めた。眉をよせ、額に皺をし、一種悲痛な眼付で見ながら、垂れて居る伸子の左手を執つた。伸子は、佃のさういふ表情が何となく悩ましかつた。

「何なの、御用は」

「——今夜は少し眞面目な話があります」

伸子は佃の執つて居る手を引込めた。

「ぢやあ一寸待つて頂戴ね」

伸子は、隣室へ椅子をとりに行つた。行き乍ら、樂しみなやうな、見當のつかない不安なやうな氣がした。何を彼は云はふとするのであらう。

「少しそつちにやつて——さう。どうも有難う」

伸子は斜に相對する位置に椅子を置いた。

佃は、やゝ暫く沈默したまゝ暫く腕組みして居たが、やがて傍から、四つに疊んだ懷紙をとり出した。彼は其を伸子に渡した。

「――いやだらうが見て下さい――其那ものが昨夜出た」

伸子は、開いて見た。ぞーつとした。一度伏せ、更に注意して見なほした。紙の間に、黝みがゝつた桃色の、花瓣が破れた大輪朝顔を押花にしたやうに血痕が大きくついて居た。

「――いつなの？昨夜の」

「風呂を出てから――こゝへ來ると、變にむせるやうになつたから、それに唾をとらうとしたら其那ものが出た」

「今日は？」

「何ともない」

伸ふは、紙を机の上に戻した。

「變ね――兎に角安靜にして居なければいけないわ――何故今まで默つてなんかゐらしつたの。鹽水がいゝのよ、直ぐ其時には飮むと……」

佃は、又、伸子の手をとつた。

「――私は、永い間隨分體を無理して來たから、

權利がなくなつた。――どうか――自由にして下さい。私はもう決して引き止めはしません――

伸子は、見たものから或程度動かされて居た。けれども、佃の云ふことは、感傷的すぎて聽へた。考へて居ると、彼は、益々伸子の手を自分の方に引よせ乍ら訴へるやうに云つた。

「――本當に遠慮はいりません。斯う云ふことになれば、私は、君からあゝいふ話が出て居なくたつて、自分の傍に置かうとは思はないから…………ね」

伸子は、猶默つて居た。佃は長く伸子を凝視めて居たが、軈て

「――あゝ」

と吐息をつき乍ら椅子の背に靠たれた。彼は、感慨に堪えぬやうに頭を振つた。

「到頭來たか…………」

伸子には、佃の云ふことがと何かぴつたり來なかつた。病氣は病氣で別問題といふ氣がひどくはつきりした。病氣になつたから去つてもよい――彼の提議には、何か矛盾した。悲壯感に煽られての氣ぜわしさがあるやうに伸子は感じた

「――だつて――さうせつついて考へるには及ばないぢやないの。第一、病氣だつて何なのかまだ定りもしないのに――」

伸子は、却つて彼を云ひなだめようとするやうな、餘裕ある心持で微笑さい浮べた。

「あとで貴方の思ひ違ひだつたツて騷ぐやうなことになつたらどうなさること？」

「其那ことは決してない――私にはよくわかつて居ます」

「――考へて御覽なさい」

伸子は、いつの間にか佃の腕を、着物ごと抑へつけた。

若

「假に女中だつて、病氣の主人を置いて出られるものではなくてよ。——出來ないことは仰云らない方がい

「——出來ないことぢやあない」

「どうして？ 貴方は本當に私が悦んで云ふ通りにすると思つて仰云るの？ 兎に角まだ何も仰々しく云ふ時ではないわ。——明日津山さんをお呼びしませう」

これは不思議な感情であつた。時には殺して仕舞ひたい程に思ふ佃、この關係から逃れたい、逃れたいと思つて居る伸子の心に、次第々々に慾しい歡びとでもいふやうなものが充ち溢れて來た。彼女は靜かに云つた。

「——何が仕合はせになるかわからなくてよ。……私共は、この頃ひどい貧棒人だからね——心が——だから何だつて役に立てようと思へば立つかもしれなくてよ」

佃の病氣が、生活の目標を變へ、從つて二人の心持にも變化が起り、互の生活に鬪らず新生面が開けまいものでもない氣が伸子にはした。少くとも、病氣を癒さうといふ共通の目的が二人に授かる。——これは活かしようによつては積極に働く力ではないだらうか——

却つて、活を入れられたやうな心持で、伸子は椅子をずらした。

「——大したことでないには定つて居るけれど、もう横におなりなさい」

佃は、すつかり悄れ、伸子の云ふなりになつて床についた。

「さあ、元氣を出して！ 昔の人みたいな考へ方は駄目よ。若しさうなら水野さんの

水野とか、

來、仲子も始めて紹介された。その時、彼は久々で日本語を話す愉快さと、一つの事業をなしとげた人間の味ひしれない満足とを以て一晩ぢゆう自分の研究と最新の手術法、經過等を彼等に話して聞かせた。

その時の話の中から覺えるともなく覺えて居た注意によつて、仲子は、佃の床に湯たんぽを入れ、火鉢を部屋から出した。彼女は、水野が、

「庭にラズベリーの繁みがありましてね、雪が積ると駒鳥(ロビン)が遊びに來い〳〵しましたよ。」

と、如何にもその風景に慰安されたらしく追回して話した調子を思ひ出した。

五

仲子は自分の机にかへつて、津山へやる手紙を書いた。

「一昨夜、血液の混つた唾が出たと云ふので大層氣にして居ります。齒齦や鼻からではないやうですが、何卒一度御來診下さい」

仲子は

「とよ」

と呼んだ。

「これを、明日の朝九時に學校へ屆けて御返事をいたゞいて來て頂戴、間違ひなくよ」

津山は校醫であつた。

翌朝早いと思つて、仲子も早寢にした。佃はいゝ工合に熟睡して、仲子が入つて行つても微に鼾をかいて居た。

いさ眠るとなつて、仲子は自分が極めて平靜な積りにも拘らず底では亢奮してゐるのを知つた。良[illegible]心持があつたと見え、何だか病氣も判らなさうに云つたが、仲子に其がコンサムプションであらうことは殆ど疑ひなかつた。彼が廿代に痔瘻を患つたことのあるのは聞いて居た。始終腸に苦情があつた。彼の生國は臘別にして一番さういふ患者の多數なところだ。然し、さう病勢が激烈ではなささうだし、彼はもう四十になつて居るのだから危變はあるまい。断片的な知識で仲子は大體の結論をつけた。

それにしても、何故自分がこの事を突然の不幸と感じないのだらうか。仲子は怪しんだ。暗闇に横はり、斯うして彼の寝息を聽いて居る。——騒ぎ立てる程特殊な驚きも、危激な歎きも傳つて來ない。同時に、あれ程執念深い確執の意識が、今夜だけにしろすつかり、消えて居るのに仲子は氣がついた。一種、中和した狀態だ。——彼が、夫婦といふ關係以外、人として健康な自分の助力が入用になつた故だらうか。

pity……pity akin to love…………

線香花火のやうに其等の文句が點いたり、消えたりした。仲子は良人の心持など考へ、森とした氣持に成つた。

仲子は、寝がへりした。彼も此方を向いて眠つて居るらしい。彼のはく呼吸が二つの床の中間で自分の息と入り混るのを仲子は寒い夜氣の中で感じた。その瞬間、感じは異常に鋭い注意を仲子に呼び醒した。仲子は思はず息をつめ、愕きを感じつゝ、闇の中で眼を瞠つた。彼女は、永いこと無意識につめて居た息をはき出すと、次の吸ひこみを自然にそつちを向いたまゝでは出來なくなつた。仲子は、出來るだけそろ〳〵布團の中で仰向けになほつた。仲子は、自分に對し皮肉な心持になつた。

例になつて、伸子は一つ夢を見た。

佃が血を出したと云ふので、自分が醫者に電話をかけて居るところだ。何處の電話か、受話機を握つて居る手のひらの感觸と、送話口の光つたニツケルだけがはつきり感覺的にわかつて居る。傍に、絣の着物を着た女中が立つて居る。自分は無智な女中に、佃が血を出したと云ふのをきかれるのがいやさに、送話口へ延び上つて懸命に、

「佃がbloodを出しました」

と云つた。

それぎりで目が醒めた。醒めた後も、其bloodと云つた舌の感じが變に現實的に殘つて居て伸子は悲しい心持がした。

津山氏は、一時前に見えた。佃は細かに、容態を說明した。同僚ではなく、すつかり醫師と患者といふ態度で。

「それは御心配でせう。然し、長い時間に亘つて聲を出す職業――お互のやうにね――よくやられますよ。結核でなくとも。それに、何です、X光線ででも見れば十人の中七八人までは痕跡を持つて居るもんですからな。つまり無意識の中にかゝつて、無意識の中に治つてしまつて居るのです。何、人間は此でなか／＼うまく出來て居ますよ」

彼は、血色のよい、然し神經質らしい手つきで、聽診器を出した。

「どれ――一寸拜見しませうか」

佃は、本氣な顏つきで襯衣まで脫いで胸部を出した。どこにも病氣などなささうに胸廓の廣い厚い胸つきであつた。

「――確りした骨格ですね」

醫師は、精神療法を心得て居、佃の皮膚に指先をふれ乍ら云つた。

「ほら、貴君の皮膚はこうやつて見ると充分脂肪もあるし、血色もいゝし、弾力もありませう。どうして、本ものとな

つたらこうは行きません」

「大きい息をして！」「小さい息をして！」

「大きいのをもう一！」

伸子は傍で見て居て、佃がしんから哀れになつた。津山に云はれる通り、彼は眞心こめて、肩まで上げ下げし乍ら大きい息を吸ふ。小さく息をする。伸子は彼が此那に眞劍で全力的なのを、どんな場合にも見たことがなかつた。彼も生きたいのだ。其でこそ正直だ。

伸子は、鼻のしんが酸つぱく、しみるやうになつて來た。手洗ひを用意して戻ると、もう佃は着物を着かけて居た。

「いかゞです」

アルコホルの香のする脱脂綿の小片で聽診器を目立たぬやうに拭き乍ら、津山が答へた。

「別に私は異常を認めませんね、一寸――ほんの一寸、左の方に雜音があるやうな氣もしますが、その位のことは一時的に誰しもあり勝のことですから」

佃は、今朝から自身を非常に劬り、力を入れて聲さへ出さなかつた。彼は、其那ことは、津山の診斷だけでも忘れたやうに勢づいた。

「――有難う。――色のついたものなんか出たんで、すつかり喫驚してしまひました」

「さうですね、素人の方は。然し却つてその方が安心

「さあさあ、どうぞ」
「御免下さい」
仲子は何處にも異常なかつた。津山は、明日K病院の、呼吸器專門の人と又來ると云つて歸つた。
「御覧なさい！　私の云ふ通りでせう」
仲子は、明に快活さを以て云つた。
「――いや、然しまだ判りません、專門家が見ないうちは」
仲子は
「いやね」
と笑つた。
「ヒステリーのお孃さん！　少し重い病氣でないとお氣に入らないの？」
然し、其夜寢る時、夜具を引上げる拍子に仲は又小量の血液を出した。彼は精神感動の爲、眞蒼になつて、氷のやうな四肢になつた。

（六）

日曜日に、仲子は動坂へ行つた。
門に自動車が止つて居た。仲子は玄關で訊いた。
「お客様？」

「須田のお孃樣がたがいらつしやつて居らつしやいます」

「父樣は？」

「お客樣でございます」

「あゝ別なの」

暖爐の傍に、須田の三人の子供と、三人の伸子の弟妹、母とが居た。彼等は、前ぶれなしに入つて行つた伸子を見る

と、一どきに

「わーッ」

と歡聲をあげた。

「こんちは。丁度よかつてね、鈴ちやん達も一時間計り前に來たところよ」

「おあつらへむきだつたね、さつき電話でもかけて見ようつて云つて居たところだつたよ

「さう。—暫く」

伸子は、手袋をぬぎ乍ら從妹たちに挨拶した。

「まるで珍しいわね。この前、華ちやんの御結婚の時會つたぎりね」

「だつて伸ちやんちつとも來て下さらないんですもの」

割込んで腰かけると、カーテンの仕切から、

「さあ――。つやちやん今日は大變おしやれね、どうしたの？　そのスウエエタア。奇麗よ」
「鈴ちやんが編んで下すつたの」
「いゝ色だね、子供には其那色もいゝと見えるね」
「つや子は髮が黑いからなほうつるのよ、つやちやんは何を御禮するの？」
つや子は、考へて居たが、極り惡さうに
「僕も編んだげるわ」
と、膨れて答へた。すると、マンテルピイスの上で時計の構造を、須田の男の子に說明してやつて居た中學生の保が、頓狂に振向いた。
「え？　君が編む？　つや子の編んだ袋ね、僕見たけど、まるで貧弱つたらないの。赤くて、小ちやくて、穴だらけよ」
皆がふき出した。窓から、霜げた飯葉の梢が見えるのが冬の日曜らしく長閑であつた。
仲子は、卅分ばかりして母に訊いた。
「私父樣に伺ふことがあつて來たんだけれど――お客樣ながいの？」
「さうだね」
多計代は時計を眺めた。
「おや、もう二時間餘になるね、もう直きだらう、何か會社の方の關係らしいから。」
彼女は、燕餡を命じた。
「泊つてつたつていゝんだらう、今日は。さうおしよ」

「今日は迚も駄目！　御病人があるんだから」

多計代は、意外さうにぼんやり

「へえ」

と云つた。

「佃さんかへ？」

「こないだからずつと寝て居るの」

事もなげに断定するやうに、多計代は呟いた。

「又例のおなかだらう。――弱いね」

「おなかちやあないのよ今度は。――」

其處へ、父が入つて來た。

「やあ。來たね」

伸子達は、揃つてぞつくりと立ち上つた。

「今日は。」

「こんちは！」

父は、おどけて、眼鏡を鼻の先にずりこかせた。

「父樣、いつだつたか、いゝ寢臺のカタログを見てゐらしつたことがあつたわね、あれ今でも在ることゝ何處かに」

「さあ——探せば勿論あるが——貰ひますか」

「一つ欲しいと思ふの」

彼は、暖爐の火をいぢり乍ら

「一つ？」

ときゝかへした。

「——どうせ貰ふなら二つがいゝだらう？ 健康的ですよ——うちも、頑固婆さんさへ承知してくれゝば寢臺にするんだが」

仲子は、來た用事をきめたく、冗談にのらずに續けた。

「佃が少し工合わるいんでね、床の上に寢て居られると歩くに氣がねだから、一つだけさし當り貰ひたいのです。——何處？ デスクの中？」

仲子の後について、父もデスクのところに來た。

「其處ぢやああるまい、そつちの綴ち込みの中だらう。Bのところを見て御覽」

彼等は、カタログを見つけ出し、子供連が圓くなつてダイアモンドをして居る傍を拔けた。父は、心配さうに訊いた。

「どうしたんだね一體、ずつと惡いのか」

仲子は、腹案を立てゝ來た通り、輕く答へた。

「無理をしたと見えて喉の奥をわるくしたのよ。一週間位休養すればいゝんですって」

母が、見徹すやうな表情で自分の云ふことを聞いて居るのを伸子は感じた。

「其りやいかん。醫者は誰か信用のある人を頼んだかい」

「父様御存じでせう。Kの芹澤さんといふ人」

伸子はカタログを検べ、店へ電話をかけた。月曜に届けるといふ事であつた。佃は、三度目の精密な診察で、初め怪しかつた通り左に輕微な浸潤のあることが明かになつた。けれども、伸子は、萬已を得なくなる迄、彼の病狀の詳細は兩親に告げない積であつた。ヴヰクタアで第五司伴樂でも聽いてそろ／＼歸らうと思つて居ると、女中が呼びに來た。

「奥様が、一寸御炬燵へいらしつて下さいましつて」

伸子は、用向が直覺され、いやであつた。渋々襖をあけると、多計代は炬燵に當つたなり首だけ振向けた。

「時雨て來たね何だか。——おあたりな。あつちぢや、がや／＼して困るから、一寸話したいと思つて」

伸子は膝を入れた。

「佃の病氣についてだがね。——本當に大丈夫なのかい」

「なにが？」

「——單純に喉なんかぢやあるまい？」

「何故？」

「いつか來た時の顔色はどうもたゞぢやないと思つて居たもの」

伸子は、母に幾分の安心を與へる義務を感じた。

「――いづれにしろ、ひどい心配な事はないのよ。――私がこんなにぴん／＼して居るんだから[illegible]證據ぢやないの。たゞ、寒さに向ふ時候だから大事をとるのよ」

「お前のぴん／＼は當にならないがね――何しろ困つたものだ――それで何かい、本當に一學期位で元通りになるのかい？」

「多分ね」

仲子は暗い顏で笑つた。

「人間だからはつきりは判らないけれど」

「然し、若し佃が結核でゞもあるんなら、それを默つて結婚するなんて、罪惡だね」

「假にさうとしたつて、前からあつたんぢやあないでせう。さう考へるのは少し酷よ」

「お前だつて、折角健康なのに――何をするんだつて體が資本だよ。國の父さんのところへは云つてやつたかい？」

「其那必要はないのよ、まだ」

「だつていろ／＼……………」

金のことであるのが仲子に推察された。

「本當に大丈夫なの、――」

仲子は炬燵布團をはねた。

「ぢやあ今日は失禮するわ、いろ／＼有難う」

「さうかい」

多計代は未練らしく自分も立ちかけた。
「本當に氣をつけなけりやいけないよ。お前まで變なものを背負ひ込んだら、家ぢやあお斷りだよ」
部屋を出がけに、彼女は皮肉に呟いた。
「――まああの人にすれば、却つて都合がいゝといふもんだらう。斯うなると、出ろと云つて出られるお前ぢやないのは明かだから………」

（七）

重いスープ皿を載せた盆を兩手で持ち、伸子は唐紙をあけた。
清潔な白布に覆はれた寢台に佃が寢て居る。一切炭火が入らないので、室内の空氣は清らかですが〳〵しい。硝子戸越しに、麗らかな日光が寢台の金具に燦いて居た。
「いゝ氣持ねこゝは。――頭がすーつとするやうよ、私も火鉢なんぞおやめにしようかしら………」
返事がない。――伸子は、しまつたと思つて首をすくめた。佃は眠つて居たと見える。つい先刻まではつきりして居たのに。伸子は、俄に忍足になつて、枕許に近よつた。音を立てないやうに傍の小卓に盆を下し、覗いた。彼は眠つて居るのではなかつた。仰向いて天井を眺めて居る。唇を引締め、上瞼を引つらすやうな表情で、一點を凝視して居る。
何かと思ひ、伸子は一寸天井の方を見た。
「

「眠つてゐらしつたの？——スープが冷えてよ」

佃は、のろ〳〵眼球を動し、悲痛なやうな、訴へるやうな眼差を、元氣に立つて居る伸子に止めた。

「——眠つてなんか居たんじやありません」

非難を含んだ語勢に、伸子は始めて、佃の左手——伸子から見えなかつた側にある手に小型聖書が持たれて居たのに氣付いた。伸子は、說明しがたい不快を感じた。これが始めてゞはなかつた。彼女はもう數回こういふ情景を目擊した。その度に同じ全身的な不快が伸子を壓した。慢性腎臓炎にかゝつて居ても佃はやはり聖書を片手に、このやうな表情をするであらうか。伸子は、平常ちつとも聖書など讀まない生活を送つて居る佃が、床についてから、最も不幸な境遇に陷つた者らしく、陰慘に聖書をひねくるのが、伸子には、慘めなやうな、耻かしいやうな——堪らなかつた。——が、伸子は、自分の感情を制し、强いて明るくスープをすゝめた。

「さ、あついうちに召上れな。冷えたらクックの腕が腕だから仕方がなくなつちまつてよ」

佃は、伸子の明るさを反撥するやうな眼付のまゝ、寢台に起上つた。默つて匙をとつた。一種のやり切れない義務のやうにスープを吸ひ乍ら、白眼のはつきりした視線で傍の伸子を見る。……伸子は、自分が理由の不明な詰問を受けて居るやうに感じた。

「どうなすつたの？——工合がよくないの？」

「いゝや」

「——ぢやあ氣を引立てゝ召しあがれね。貴方なんぞもう恢復期なのよ。何も滅入る必要なんかないのに。——活々と平靜で居る方がいゝのよ」

「——有難う……美味しかった」

佃は皿をかへして、云つた。

「君は健康だ……それに若い。……氣の毒です」

「どうして？」

「此那だから——私が」

「病氣のこと？」

佃は、返事の代りに太い吐息をついた。

「——そりや誰しも病氣よりは健康の方がいゝには定つて居てよ、でもなつたら仕方がないでせう？　最もよく其を治すやうにするだけだわ。それに第一私がよくないと思ふのはね——何ていふか………」

伸子は、皮肉に響かない云ひ廻しを求めた。

「氣の持ち方とでもいふか——何故一般に人は、他の内臓の病氣を扱ふやうに扱はないでせう。——危險がない程度なら却つて頭がよくなつていゝ位に、ぐんと思つてしまへばいゝのに」

「——兎に角、幸福な人間は成らない病氣ですよ」

——伸子が今度は、眼球をのろ〱動して佃を眺めた。相反射し縺れ合つた心持が、どんより恐怖を伴つて徐ろに彼女の心に湧いた。彼の調子は、病氣も何も伸子の故にして居るやうだ。………伸子にとつて全然新しいことであつた。彼女は病氣は病氣と思つて居た。——本當に自分に責任のあることなのだらうか。彼女はこわい、返却出來ない精神上の負債を押しつけられるやうな氣がした。

皿を抱へたまゝ、伸子は永いこと凝つとして居た。軈て立ち上つた時、彼女は、一寸落付いて居た。通路のないのを知らされたやうな落付き。病氣が來たが、心と心とで爭ち合つて居る音のない爭ひはやんで居はしなかつたのだ。これは、單な勝負か。或は果し合ひなのだらうか。伸子は、自分の立場を苦しく窮屈に感じた、病氣だからひとりでに劬り助けて居るがつきつめたところへ行けば矢張り佃が感じて居る通り!!伸子は彼をすつかり受け入れて居るのではない。

伸子は、臺處へ行き、默つて女中にスープ皿を渡した。

本當にからりとした心持で、知り合つて居る人同志が話すやうに、又親切をつくすやうに伸子は佃の身の廻りの世話をして居る。例へば、

「一寸――ずつて居てよ」

と枕をなほしたり

「もう少し動すといゝわね、日向になつて」

と、寢臺を小さい車輪の上でずらしたり。其那時、唾棄すべき惡魔の煙のやうに、ふと疑が伸子の心の一隅を掠めるやうになつた。

「ほ! 親切さうに!」

すると、全く自然にやりかけて居た自分の單純な行爲まで、變に僞善的なところがあるやうに思はれて來る。佃ではない、誰か、見えぬ存在に頻りに媚を呈してゞも居たかのやうに。伸子は急に苦々しい心持で、いそいでやりかけのことを片づけて仕舞ふ。佃に、其が伸子のぞんざい、面倒くさがりしとかとれないのがよくわかる。伸子は悲しく思ふ。自分が佃でも憎らしいであらうと思ふ。――これは切ない事であつた。

或宵、伸子は暫く一人で日記を書いて居た。切りまで來て氣がつくと、家ちゆうひどく森として居る。彼女は一寸耳を欹て、見た。自分の居るところだけ殘して、周圍の部屋々々が消え失せたやうな靜けさだ。伸子は、急な不安に襲はれた。體で椅子を押しのけて隣の唐紙をあけた。スタンドが灯つて居る。寢台の懸布は、内に横はつて居る人間の體なりにもり上つて居る。何の變りもない。——考へて見ればそれが當然で、伸子は、何の爲に彼那得體の知れぬ不安に掴まれたか、可笑しくなつた。寢台の方の裾の壁に、大きい影法師を映し乍ら、伸子は部屋に入つた。來たついでに用はないか訊かうとした。が、良人の様子を見ると、言葉が塞がれた。

彼が聖書を讀む——どういふ心からであらうと、其をとやかくいふ權利が自分にないのは伸子にわかつて居る。明るく讀まうと、感傷をそゝるやうに讀まうと。然し、世の中には、何だか神經に徹へるやりかたと云ふものがあるものだ。例へば同じ物を食ふにしても、見て居て腹の立つ食べかたといふのがある。

伸子は、佃の顏を見下した。彼は、伸子に見下されて居ることも、その視線には皮膚の上を踏みつけるやうな強い感情がこもつて居ることも恐らく感じて居るのに、睫毛一本動かさなかつた。恨を含んだ凝視を、足下の壁から離さない。

伸子は辛棒しきれなくなつた。彼女は低い、ひしやげたやうな聲で云つた。

「それをこつちへ頂戴、お願ひだから……」

彼女は云ひ乍ら手を延した。

裂けるやうな荒々しい心持を制せられなくなつた。

「――頂戴」

彼はよこすまいとする。

「頂戴！」

あゝ、自分は何を仕ようとするのか。佃の體に悪い。恐ろしいことになるかもしれない。一方にはしんから縮みあがつてはら〳〵する心持があつた。而も、眼や手は、却つて其警告に煽られたやうに執念く、狂暴に、佃が持つて上げたり下げたり、渡すまいとするものを追ひ廻す。追ひ廻すうちに伸子は、自分等が可怖くなつて、涙をぽた〳〵こぼした。

「頂戴つて云ふのに！下さりさいすりや何でもありやしないぢやないの！」

伸子は、聖書を寢台の下にたゝきこんだ。彼等は二人とも泣いた。

（八）

佃が床について居たのは、僅か半月ばかりの間であつた。それも、後半は、一日に數時間起きて、机に向つたりした。二月下旬には、學校に出勤しない事、朝長く寢台に居ること、夜外出出來ないこと位で、殆ど平常に復した。

冬枯の庭に、いつの間にか潤ひが出來、こまかに木の枝など眺めると、仄かな艶や芽のふくらみが優しく早春を感じさせる日であつた。

佃は、炭置場の横で、木戸の繕ろいをして居た。厚く着ぶくれ、スキーにでもかぶるやうな帽子を耳まで引かぶつた彼の様子は五十位の年寄に見えた。田舍の年寄が、春を樂しみに背戸で何かして居るやうに見える。

「――其那に力を出していゝの？私が打ちつけて上げませうか」

「何、大丈夫です、此位。――一寸針金を持つて來て」

伸子は、納戸に行きかけた。

「あゝそれから時計を見て下さい、机の上にある」

伸子は、針金の束と、針金切の鋏をもつて戻つた。

「一時十分前よ」

「もう？　ぢや仕度しなくちやあ」

佃は、いそいで仕事をしまひかけた。

「――何處かへいらつしやるんだつたの？」

「えゝ、君も仕度して下さい」

「何て出しぬけなの！」

伸子は、とよを顧みて笑つた。

「そんなら早く仰云ればそのやうにするのに。いやな方だこと、私がおしやれで仕度に二時間もかゝつたらどうなさること？」

伸子が着換へをして居るところへ、佃も手を洗つて上つて來た。

「それでいゝんです、これで行つたつてかまはないところなんだ」

「どこ？」

「行けばわかります」

「動坂？」

「いゝや」

「——妙ね、知らずに行くのがいゝところなの？　面白いところ？」

「さあ——多分さうだらうとは思ふんだが」良人の爲に、足袋や何か揃へさせ乍ら、仲子は、頭の中で、行くところを方々さがした。

「ね、一寸頭字だけ云つて。當てるから」

「行けば判りますよ」

此那ことは、彼等が結婚して以來、始めてのことであつた。佃は、興にのることなど、又樂しい不意打ちで悦ばせるといふ點など、ちつともない人であつた。他處へ行つても、予定の時間に歸ることを忘れない人が、珍しいことが。

彼等は、近所から電車に乘つた。

「——本郷……肴町。二枚」

肴町………。仲子は、佃の隣に腰かけ、眼をしばたゝくやうにして考へた。彼等の交友範圍は狹かつた。二人で訪ねて行く處など、決して思ひ出せない程はない。肴町——仲子、は覺えず

「あゝ、わかつた」

と、口に出した。

「わかつてよ」

佃は、正面を向き、外套の下で腕組みしたまゝ訊きかへした。

「どこ？」

「――でも、其でもやつぱり確ちあないわね……阪部さんかと思つたんだけれど――東京に來てゐらつしやるんでせう

あの方今――どつか――大學正門邊なんぢやあなかつたかしら、宿が……」

佃は、どつちにでも取れるやうに笑つた。

「ぢやあさうしてお置きなさい」

阪部は、地方の大學に植物學の教鞭をとつて居る彼等の親しい友人の一人であつた。上京すれば、會はない事のない

間柄であつた。

案の定、佃は、大學正門前へ來ると立ち上つた。

「降りませう」

そして、果物屋の横を眞直に入つた。或西洋料理店の前に、白服、白前垂に大きなクック帽をかぶつた料理番が立つて

ぼんやり彼等を眺めた。少し先の社の前に風船屋が出て居る。伸子は、穏やかな午後の往來を、複雑な心持で歩いた。

夫婦とは、或は人間の生活とは、何と奇妙なものであらう。あのやうに泣いた二人が斯うして歩く――前ぶれなしに、

阪部訪問になど自分を連れ出して呉れた良人の氣持が、伸子には、或思ひ遣りを起させた。

本郷台を、小石川の方へ下る坂の右側に、御下宿、と書いた中古の看板をかけた門がある。佃はそこを入つた。裾を端折つて通りすがつた女中に、彼は聲をかけた。

「おいでゞすか――阪部君」

「はあ、どうぞお通り下さい」

女中は、伸子を觀察し乍ら、スリッパを二足揃へた。佃は、案内を待たず、どん〳〵自分で中庭に向つた廊下を進んだ。

「まあ！ もういつの間にか被來つたことがあるのね」

その聲を合圖のやうに、廊下が鍵のてに曲る角の柱の傍へ、阪部の姿が現れた。

「やあ」

「よくいらしつたね、さあどうぞ」

阪部の部屋は、窓から坂下の樹木や屋根の見晴らせる靜かなところであつた。伸子は、窓に腰をかけた。

「割合にいゝお部屋ね、餘り下宿らしくなくて」

「一昔、私がまだ書生の時分から知り合ひでね、こゝの親爺は大の阪部黨です」

阪部は自分で茶を入れながら、佃に訊いた。

「どうだね、ずーつと順調かね」

「うむ。もう自分ぢやあ何ともないやうだが、まあ三月一杯我慢するさ。――然し氣になつてね」

「はゝゝゝ。勤人根性といふ奴があつてね、出るべき時に休んでは、休みもみにならないといふ譯か。――まあ、

る時にうんと休んで、潜勢力を貯へることだね」

仲子は、佃の友達の中で、阪部にだけはどんな口も利いた。彼女は、年とつた叔父とでもいふやうに訊いた。

「ね、阪部さん、今日はどんな素晴らしいことがあるの？」

「どうしてです」

「だつて――二人で喋し合はせてゐらしつたんでせう？」

「これは困つたね、はゝゝゝ、何かで、は特別な趣向でも凝すんだつたが、もう間に合はないから――晩の御馳走で勘辨して下さい」

阪部は、二重瞼の、眼尻に小皺のある眼で、しげ／＼仲子を眺めた。

「――貴女は相變らず元氣ですね」

仲子は、肩を落すやうにして、唇を曲げた。阪部は、彼女の感情を見拔いたやう直ぐ押しかぶせて、

「いや、元氣なのが本當です」

と云つた。

「總て、生きて居るものは元氣なのが自然です。眞の元氣は、見ようによつて、一種聖なる天の力の反映みたいなものですよ」

去年の夏、丁度佃が關西方面に旅行中のことであつた。仲子が動坂の家から病院通ひをして居た頃、阪部が上京し

「貴方もあの頃は、今のやうに大家じやあなくてゐらしてよ、一生懸命だつたわね。ほら、あの黴だらけの標本を大事にしてゐらしつたこと！」

「ふむ」

阪部は、檢微鏡を覗きつけた眞直な平らかな視線でやゝ暫く仲子の顔を見て居たが、突然云つた。

「――貴女――こんなことを伺ふのは失敬かもしれんが――幸福ですか？」

仲子は、いきなり苦しい胸の眞中をすばりと射られたやうに感じた。けれども、彼女は或恥しさから、笑ひ乍ら云つた。――其那らしい細胞の變化が現れて居ること？」

「……貴女に無駄なことはなからう。――結構だ。やれるだけやりなさい」

矢張り、笑ひ乍らだが、仲子は思はず涙を出した。彼女に此那風なことを、此那工合に云つた人はなかつた。仲子は今、其時のことを思ひ出した。

（九）

「――今年は雪が降らないと云へば――」

阪部は日本服で別人のやうな後姿を見せて、机の下から厚い紙挾みを出した。

「今度はこれを印刷することも一つの用で來たんだが」

仲子は、菓子鉢や茶器を片よせた。

「專門的に云ひ出すと、又面倒くさいことになるんですがね、つまり、要點は寫眞で説明して居るだけだ。――先づ、

これが何と云ふか、序論とでも云ひますかね」

其は、櫻に似た一本の樹木の寫眞であつた。眞直に幹を延し、左右ゆつたりと枝を張り、花をつけて居る。伸子等は默つて眺めた。

「次は――これ」

「何でせう――嵐のあとの景色？電線が切れて居るし、家は倒れて居るし」

阪部とでも話すよりはきゝ役の側が訊いた。

「何處？滿洲邊らしいね」

「あゝ北滿洲ね、ひどい有様でせう。每年或期間期節風が吹くのが此那勢だといふことを示したもの」

次のは、幾本もの大木が、皆梢を一方に捩曲げられ、片側は丸坊主に枯れたやうになつて居る寫眞。

「――關係がわかりますか？」

伸子は面白くなつて來た。彼女は、熱心に見較べ

「えゝ、判つた！判つた！」

と叫んだ。

「わかつてよ。其から」

六枚の寫眞は、每年の季節風の爲、滿洲或地方の樹木が發達を阻止され、一定の法則をもつて變形し[illegible]

「——十年近くなるかね」

「………然し、同じ研究でも君のはいゝね。自然は到るところにある。眼さへ——勿論科學者としてだが——立派ならすぐよい材料が見つかる。僕の方はやり切れない。何しろ事實材料をディッギング・アウトだからね」

「日本ぢやあ駄目かね」

「——、貧棒暇なしさ、食はなけりやならないからね」

寫眞を又繰返し眺めて居た伸子が云つた。

「——食べなけりやならないのは誰だつて同じよ。十人の中九人半までさうだわ」

「さうです」

佃は、不意な伸子の言葉で少し感情を害したらしく云つた。

「然し、僕の研究では、教師にもなれないからね」

「專門の教師をしたつて君、樂ぢやあないぜ。いつでも、自分の力以下の學生對手でやつて行くのは——それにやつぱり本當のラバラトリー、ウオークは、別さ。——却つて、別のことを講義して、本職は本職でこつ〳〵やるなかに純粋な樂しみがあるかもしれんね」

「——時間がないね、實に」

「何時間です?」

「十一時間」

「いゝよ、君、其なら——」

「――僕の方の仕事なんぞは、一言見つけるに一日どころか三日四日かゝつても駄目なことがあるんだからね」

仲子は、專門如何に拘らず、熱のこもつた仕事ぶりに刺戟される性であつた。阪部の、兎に角ものにして行く努力を見たばかりの時、良人の云ひ方が、彼女の仕事魂とでも云ふやうなものにさわつた。

「まるで、阪部さんに責任があるやうね、其では……」

其處へ、仲子さへ予期しなかつた工合に、こんぐらかつた夫婦の鬱積が絡つた。

「だから、私の云ふ通りになさると、いゝのよ。さうすると、學校は研究の云ひわけ、研究は學校の云ひわけ、と云ふやうな面倒なことにならなくていゝわ」

「全く――面倒だね、はゝゝ」

阪部がとりなすやうに笑ひ出した。

「何です、仲子さんの云ふ通りつて」

仲子は、表面明るい快活さで、すらりと云つた。

「私がいゝ提議をしたのよ、もう旦那様、奥様で、何一つ碌なことも使す體裁だけ意義あるやうに構へて居るのは澤山になつたから、元の書生にかへりませう、つて。いゝと思ふのよ、私は。そして、二人で、本當に自分の力を活かして遣れるところまでやつて見ればね……」

輕く切り出したのが重々しくなり。仲子は悲しげな顔付きになつた。

かつたら、恐らく自分此那ことを云ひ出しは仕なかつたらう。伸子には、其が特に苦しい心持を起させた。佃は、むつつり默り込んだ。

佃が、溜息と一緒に

「――なか〳〵むづかしい」

と云つた。

「我々は互に仕事があるからね。どうも」

坂部は、そろ〳〵日のかげつて來た部屋の火鉢に火をついだ。

「――其だけなら、始つから諒解し合つて居ることなんだから割に雑作なからう、もつと、こりや根だね。――根が大事だよ。」

坂部は、暫く考へ、續けた。

「植物を又かつぎ出すが、何だね、或草や木が生きて居られる、――最も自然ないゝ狀態に於てだね、場處といふのは、きまつて居るね。原則として、――熱と水分を必要とするのは共通だが、或草は、北緯何度の地帶でしか生存出來ない。或は、赤道附近でしか生きられない。其は勿論人工で溫室に入れたり他の方法を用ひたりして枯れないやうに丈は保てるさ。けれども、悲しいことには、ちやんと實らない――繁殖出來ない。――ことが恐ろしい點と思ふよ。人間も、どんな境遇にだつて、生理學上の命だけは失はずに生きられよう。が、地味が本ものでないと實らない。理想論だが、何だね、能ふべくんば、互にその本ものゝの地味を作り、又與へたいもんだと、僕はよく思ふよ斯ういふ話になつたから、率直に云ふが、――まあ、君等も――強いて一つ小さい、工合の合はない植木鉢の中に

合つて居なければならない事もなからうさ。――」

佃が齒の間から呟いた。

「理想はさうだらう――然し僕には出來ない。――さういふものぢやない」

「何が――伸子さんの云はれるやうなことかい？」

「さうです」

「……………、翔びたい鳥を精一杯翔ばせて見るのもいゝ氣持だと思ふな」

伸子は、坂部が明に自分に好意を持ち、擁護して居るのを感じた。彼女の感情が動いた。好意は嬉しかつたが坂部に、いゝ氣さうに其那ことを云はれて居るのが苦痛になつた。

「いゝことよ。議論で決定することではないのよ。とんだ卷き添へにお會はせしたこと」

氣分を換へ、彼等は五時まで話した。

「折角だから夕飯を何處かで食べやう」

「夜まだおそくなれないから、今日は失敬します。家へ來てくれ給へ、家ならいつまででもいゝ」

廊下へ出ると、坂部が立ち止まつた。

「あゝ一寸持つてくれ給へ、あげるものがある」

坂部は、下駄を廻してくれと云つて、中庭に下り、池のところで摘んだ。戻つて

「東京では珍しいものです、毬藻」
板敷に立つて、彼は帳場から出させた紙でその綠天鵞絨でこしらへた小手毬のやうな藻を包んで仲子に渡した。

（十）

椽側に手をついて、仲子は背の高い硝子壜の中を覗いて居た。壜には水に毬藻が沈んで居る。
「――何だかこの頃色がわるくなつて來たやうね、これ。一向浮上らないぢやあないの」
「さうですか」
「そんなにいつまでも營養が內にあるもんでせうか」
「さあ…………………」
間を置いて、仲子が尋ねた。
「坂部さん南洋へいつお立ちですつて？」
「まだ一二ケ月あるんでせう、まだすつかり決定したといふわけでもないんだらうから」
仲子は、水をとりかへた硝子壜を日向に置いた。
「…………貴方、坂部さんをどうお思ひになること」
佃は、自分の言葉をよりわけるやうな表情をした。
「貴方の思ふ通りを云ふと、どう？」
「さあ、相變らず彼の男でせう」

「貴方の心持、變らないこと？」

侚は、案外さうな、咎めるやうな眼付できゝかへした。

「どうしてゞす？」

仲子は、先日坂部を二人が訪問してから、友情の一部に變化を生じかけて居るを感じて居た。彼女には、其が二人の爲に遺憾であつた。一半は自分の責任であるといふ感情もあつた。彼女は侚にぶちまけてあるなら不快を洩して欲しかつた。

「本當に今まで通りなの」

「さうでない譯がないでせう」

「それなら結構だけれど…………」

隣の、三軒並んで建つて居た古屋を壞しにかかつて居る凄じい物音がした。壁を崩したと見え、黄色つぽい砂煙が、明るい光線の中を舞つて來た。

「こりや此處には居られないわ、入りませう」

仲子は障子をしめた。

新學期から、侚は出勤し始めた。

初めての出る時、暮頃の通りの、服裝で彼が靴をはく後に膝をつき、仲子は或感に打れた。侚にとつても、仲子にとつても、彼の病氣はほんの一時的なたゞの病氣でしかなかつたと云ふ

仲子は、自分の仕事をしはじめた。佃の本を借よみして[illegible]に興味をひいた或小説を種にした。長いものであつた。期限が迫るのに、隣地で、ヨイトマケが始つた。騒ぎが一通りでない。仲子は動坂へ行つた。
或日、佃から電話がかゝつて來た。

「明日歸られませんか――す――坂部君が廿八日に愈々立つと云つて來たから、御飯でも一緒に仕たいと思ふ」

翌日、彼等は三人で夕食をたべに出かけた。もう外景はすつかり初夏であつた。軟らかな夜空の下に、街路樹が若芽をそよがせて居る。彼等は、先日やゝ氣まづく別れた蟠りなど忘れ、愉快に喋つたり散歩したりした。佃も仲子も、第三者が加ると元氣を幾分どりもどした。仲子はその夜は赤阪へ戻つた。

朝になると、昨夜星が奇麗に見えて居たのに小糠雨が降つて居た。

とよが、傘もさゝず、お太鼓に結んだメリンスの帯の上に露の玉をつけ乍ら、池を覗いて居る。

「どうしたの」

「金魚が一匹妙なんでございます」

「どうしたの？」

「今朝起きて見ますと、一匹やつと游ぐやうたのを、皆が後からせッせと追ひ廻して居りますから、弱つたのを助けて游がせてやるのかと思つたら、いぢめて居りますんですよ」

とよは、

「ほら又！叱つ！叱つ！」

と手を叩いた。

苔

「何故いぢめるんでせう、可哀さうに」
仲子も手傳つて、手網をさがしたが見當らなかつた。
「斯ういふものは妙だね、こないだ夜、一匹犬が自働車に轢かれてキャン〳〵鳴き乍ら逃げるのを、矢張り多勢他の犬が追つかけて喰みついてよ」
彼方此方して居るうちに、仲子は、この間ぢゆう椽側に置いてあつた筈の硝子壜が見えないのに氣づいた。
「おや、あの壜どうした」
「どの壜でございます？」
「あの、青い眞圓い――ほら、この間私が鋏で散髪した圓い藻の入つて居たの」
三月程經つうちに、毬藻は段々青々した色を失ひ、水を透して見ると、球狀の周圍にほや〳〵水あかのやうなものが認められるやうになつた。この前、歸つた時、仲子は
「これはいけない、枯れ出した。一つ散髪をやつて見よう」
と、とよに手傳はせ、老癈した藻の表面を挾んだ。
「これでございましたかしら」
とよが、態と云ひ譯を用意しつゝといふ風で、空つぼの乾き切つた壜を持つて來た
「ないの？藻は」
「こないだ旦那様が溝にこれをおあけになつてゐらつしやいましたけれど――おすてになりましたんでせうか
仲子は、暫く、とよが鈍く雨空を反射させ乍ら持つて居る空の硝子壜を見て居た。

「もういゝの　ちゆあ」

とよが、詫びを云ひさうにした。仲子は急いで顏洗ひに去つた。

――仲子は毬藻が好きであつた。世界でも珍しいその藻の生活狀態を坂部から說明されたのみでなく、形も色も愛らしいものであつた。誰でも興味を持つだらう。佃にぢかに誰かゝら貰つたものだつたら、さうむざく來てなかつたらうと思ふと、仲子は不快であつた。昨夜、彼はそんなことは一言も云はなかつた。仲子が坂部に、毬藻の怪しくなつて來たことを話して居た時でさへ。

二時半に、仲子は家を出て丸善に行つた。昨夜、坂部が今日丸善へ學校の參考書を注文しに行くと云ふ話が出た。

「丸善？――私も何か見に行きたいな」

すると、佃が云つた。

「行くなら、こないだ送つて貰つた中で返すのがあるからとりに來いと、杉君に云つて下さい」

出かける迄毬藻のことが仲子の心にこだわつて居た。彼女は暫く躊躇した。けれども考へて居るうちに、彼女は拘泥して居る自分が腹立たしくなつて來た。彼女はとよに

「おかへりになつたら、昨日申上て居た通り丸善へより、坂部さんと何かあげるものを見つけてから、動坂へ行つたと申上ておくれ」

と云つて出た。

二階へ昇つて行つて見ると、坂部はもう數冊の本を選び出し番頭と何か話して居るところであつた。仲子は先づ良人へ傳言を果した。坂部は、植物學を通俗的に書いたいゝ本を仲子に示した。

「――かういふ風な書き方は、我々大いに學ぶ必要があると思ふが、どうです」

「植物の生活」ファブルが子供の爲に書いた著作にどこか似た文章であつた。仲子は、別な棚で自分の欲しいものを見たが無かつた。坂部が長い航海中讀むようにと一冊の本を買ひ、一時間程で丸善を出た。

小糠雨は、まだやまない。濡れた外套から立つやうな濕つぽい、ねばつく霧が遠方の建築物をぼやかして見せた。傘を擴げたなり高くかゝげて、向ふから來る人のと衝突するのを避け乍ら、坂部が

「さて、どうします」

と仲子に尋ねた。

「いやな天氣ね――歩く氣もこれではしないわ」

「どちらへ歸ります？」

「私？　今日は動坂」

「ではお茶でも飲んでお別れしませうか」

仲子は、よく來る家族的喫茶店へ行つた。坂部はいつも話好きだが、其日は特に話題が盡きなかつた。彼がいつか書きたいと思つて居る、さつきの植物學のやうな本のこと。今度の旅行で、附屬的收獲としたい或人類學上の興味と野心について。仲子が友達としての坂部に最も面白いと思ふのは、彼が一種綜合的な天質で、植物學に據つて居る點であつた。彼が變形菌のことを話せば、必ずそれは

「――さつき、あの二人が動き出しませう――」

「あゝ大分今日は喋りましたね―」

坂部は時計を見た。

「何時？四時すぎたでせう」

「廿分です」

彼は勘定をし乍ら、考へて居たが

「どうです、どうせ食べなければならんものだから夕飯を近所ですませませんか」

伸子は、何んだか其申出をすらりと受けられなかつた。

「――二人だけで？……若し貴方が明日立つといふのに一人でぽつねんと食べるのがお厭だつたら、動坂へいらつしやい。今日は父も歸る日だから丁度いゝわ」

坂部は、伸子の心持を理解したらしく

「――成程」

と云つた。

「佐々さんにお目にかゝるのも愉快だな、では、さう願はふか――けれども突然で、かまひませんか」

「よそへ行くよりずつとよくてよ」

伸子は、動坂の家へ電話をかけた。

途中で、何かの端につけ、坂部は

――今日のことは――まあ云はん方がよからうな」
獨語のやうに云つた。
「何のこと」
「いやね、この間の樣子でも、仰君は一種の病人です、精神的に――。だから、病人には病人を扱ふ心がけが必要だらうと思ふ――つまり、聞かせる必要のないことまで、聞かせるに及ぶまいといふのです」
「――……」
何と說明もつかない、其は不愉快な言葉であつた。仲子は、坂部から其樣な言葉は豫期しなかつた。

（十一）

悄氣こんで、仲子は、原稿紙へ無駄書をして居た。坂部の言葉が印象濃く、數日經つた後まで彼女を滅入らせた。坂部との遠慮無いつき合ひを、仲子は數年來安心して樂んで來た。彼と話すことは面白く、刺戟された。彼も、仲子のやんちやや、知識慾やを樂しんで居たらしかつた。親しい年の差の多い叔父姪のやうないきさつで、極めて自然に彼が好きだと仰にも云へたのに、何だか警戒的にならざるを得なくなつた。毬藻をくれた者と、其を棄てた者との男の本能が、香氣に甘たれて居た自分を挾んで、暗默の裡に對抗したのかと思ふと、仲子は、佗しく感じた。自分は、何方につくものでもないのに……。然し、これは少とも心の持ち方の上でだけも如何うにかされなければならない行きがかりだ。妙に寒い日で、仲子は腸の工合を惡くし、猶元氣がなかつた。仕事がちつとも出來ず、彼女は、單衣の上から母の羽織を借着し、家の中をうろついて暮した。

―（著）―

翌日仲子は眼が醒めると、今日こそ、と意氣ごんで床を出た。彼女は、[illegible]緋の元祿袖の着物を着、とにかく食堂に行つた。

「――お早うございます」

珍しく兩親が卓子に向つて居た。

「母樣が此那に早いのは」

云ひかける仲子を、持つた新聞と一緒に手を振るやうにして、多計代が、潰れた聲で遮つた。

「えらい事が出來たよ」

見ると、父も別の一枚讀み乍ら、いつにない表情で居る。仲は、肩起しに紙面を覗き込んだ。一大見出しが瞳に映ると、仲子は、頸から顎にかけ鳥肌立つやうな打撃を受けた。彼女は、そこにあつたもう一枚を擴げ、一氣に讀んだ。讀む字はわかるのだが、そこから來るものが多すぎ自分の理解から溢れる心持さへする。或尊敬されて居た文學者が或夫人と自殺した事件が報道されて居るのだ。仲子は讀みなほし乍ら、何とも云へぬ悲しみと、畏怖で震へるやうになつて來た。口が利けなくなり、彼女は何か云ふ兩親を置いて部屋を出た。

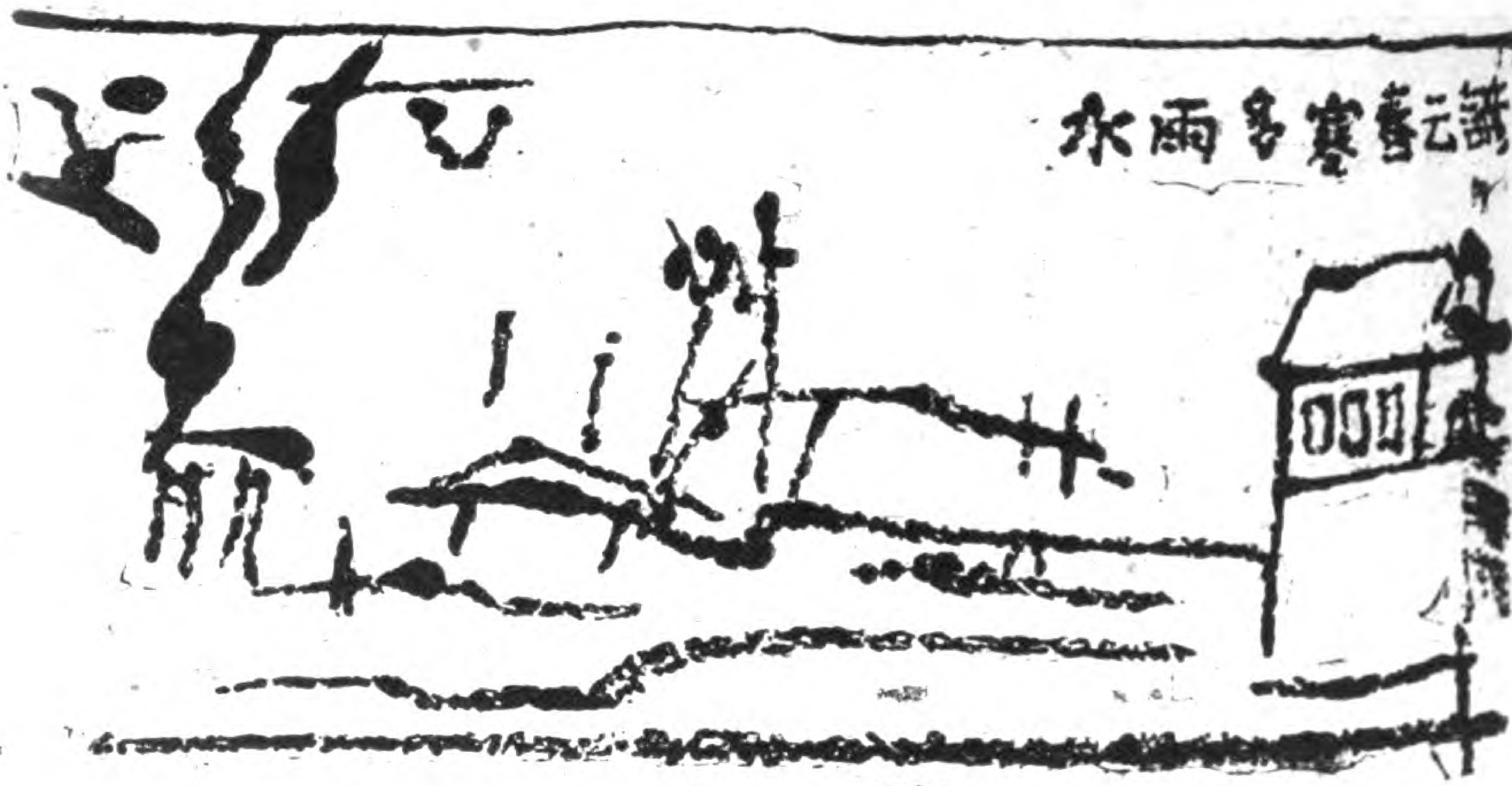
へ氏は、四十歳を餘程越した。上流出生の教養と才能と同時に人間的敏感さを多分に持つた藝術家であつた。理想家で、愛妻を失つてから、二人の兒の父とし、孤獨を守つて生活して居た。作品の詩趣と、その境遇が種々の方面に女性の崇拜者を作つたが、仲子はさういふ側からでなく、反對に、更に偉大な人及び藝術家として自分を完成させる爲、か激しく行つて居るらしい内面的爭闘にひどく心を牽かれて居た。最近書かれた長篇が、仲子に多くさういふ點で示を與へて居た。彼女の理解したへ氏は、この二三年間に、必ず運命的な轉回を

に達して居たのだ。其處を、ぐんと！彼は第二の天から、第一の天へ昇り得るであらう。仲子に其にして居たであらう！仲子は藝術家の運命──特色ある性格と環境との喰み合ひ──を、人ごとゝ思へぬ年齢になつて居た。彼女は、待つて居た。そして、見て。──

その期待のたゞ中に、今日の報道が齎らされた。全然、夢想もしない形で。彼は飛んだ。上へか！下へか！。仲子が全心で感じ得ることは、さういふ疑問に對する返事でなくて、彼は左樣した。彼は僞りを云ふ人でない。といふ恐ろしい確認ばかりであつた。事件には人を沈默さす誠實の威力があり、超人力の何ものかがある。それが仲子に苦しい。ひどく苦かつた。自分といふ現在搖れて居る弱い存在の根にまで響が傳つた。

仲子は、食事が出來なかつた。一日、感動に漂つて、一人坐つて居た。その夜、努力したが眠れなかつた。涙が出る以上の緊張が精神を掴んだ。

告別式が翌日の午前にあつた。仲子は、父と行つた。白布の敷かれた上を進み、白花に覆はれた寫眞で再び故人の溫容に接すると、きのふ新聞を見た時と同じ苦しさが新に彼女をしめつけた。「彼は飛んだ。上へか？下へか？」涙が始めてこぼれた。外側の關係から見れば、彼女はそのやうに泣く程故人と近い者ではなかつた。式に列して居る親族の前に、仲子は極りわるさを感じた。



赤い靈魂

倉田百三

第二部

人物

供へた男（第一部の青年）
N子
山川（勞働運動指導者）
同志の女（第一部の令嬢）
金澤
金澤夫人
N子の弟
供へた人々
盲目の兄弟
アナーキスト

鑛務課長及事務員
鑛夫聯盟委員
女將
其他男女勞働者。學生。警官。群衆等

處　T市及びF市附近。

第一場

勞働寄宿舍の一室。　横手後ろに集會場の棟と高い竿が見える。背景は雜草の生えた原、その向うに濁つた海、草原の一部を横ぎつて築港用の土砂を運ぶトロッコの線が遠くに見える。草原には月見草が咲き、材木などが轉ろがつて居る。T市の近郊のある港街の場末。

N子。パンが足りない。――此の月もまた（帳簿を押しやる）
同志の女。同志に病人があつた。それに仕事にあぶれたものが――
N子。會計はいつも缺損です。でも私たちは落膽はしない。道は何とかしてつく。これまでもさうだつた。
同志の女。彼の人に言はねばなりますまい。
N子。（吐息をつく）彼の人に言はねばなりません。彼の人は顏をしかめはしない。默々としてまた何處かへ金をつくり

に出て行くでせう。

（沈默）

同志の女。パンは必要だ。パンを得なければならぬ。パンはそれ自身のためではない。精神を支へるため……ほんの少ししか要らない──私たちが生命をつなぐためには。それさへあれば生活は無限に豐富だ。空も、海も、花も──人間の愛撫も私たちのものだ。無邪氣な遊びも私たちのものだ。物を創る時間も私たちのものだ。だがパンがないとき生活がない。時間がない。──鎖りがあるきり……その少しばかりのパンくづが──

N子。それが鍵だ。魔法だ。人間の生活を金縛り（かなしば）にする──

同志の女。私にパンと水とだけ與へよ、そしたら私はツオイスの神に劣らない程幸福に生きて見せる──それはエピクロスばかりではない。みんなさうなんだ。貧の味を知つてるものは皆それを知つてゐる。それだのに誰れがそれを人間に拒むのだ。

N子。階級が、ブルジョアが──

同志の女。必要は正義だ。必要はものを神聖にする。わたしはそれを知つた。わたしは悔やしまれる。私はお召を着ねばよかつた。それも私に要らなくはなかつた。でも紡績が今の私たちに必要なのに比べれば──私は紅茶を飲まねばよかつた。麥と鹽とが私たちの自由を……

N子。パンは侮りを防ぐために要る──いのちを賣らないために……女では──女では操を……もう返りはしらな。

（顏を歪める）

同志の女。私は此處に來てよかつた。私は私の人間を救つた。人間の痛苦を知らずに甘へてゐたら……それは空しい。

今私は生きてゐる。苦しくても充ちてゐる。——私は飜譯の仕事をしやう。（机に向ふ）

N子。あなたの仕事は五人の口を養つてゐる。

同志の女。ハンブルな人間の口を——一人が十圓で……私の昔の羽織一枚で——砂を噛むやうな飜譯もそれを思ふと力づく。

N子。寄宿舍の臺所は却々苦しい。でも來月からもつと緊しめませう。福麥にしたら——そして味噌で……

（沈默）

郵便配達。（登場。勞働新聞をほうり込んで去る）

N子。（とりあげて見る）W聯盟の連中が又あなたの攻撃をしてゐる。

同志の女。（新聞を受取り一寸見る）相變らずだ。私はあの人たちが大嫌いです。

N子。あなたの非難が癪にさはつたのでせう。

同志の女。私は幾度でも非難する。彼の人たちには精神がない。あの妥協的な、生温るい態度は私たちの恥です。あの規則書を見たらブルジョアが私たちを輕蔑するでせう。わたしそれが何より殘念だ。

N子。さうです。まるで勞働者と資本家との間のブローカーだ。

同志の女。資本家に誓約書を出させる。爭議があつた時、直接に交渉したものは除名するのですつて——

N子。資本家は彼の人たちを捕へて置きさへすればいゝ。それで彼の人たちが勞働者を操縱してくれる。

同志の女。わたし彼の人たちが私たちの運動の盟主のやうな風に振舞ふことは許して置けません。

N子。非難して下さい。假借なく。あなたの筆には力がある。わたしにはできない。

同志の女。わたしは文字をあやつることを習つた。學校で。――十五六年間わたしのやつたことはおもにそれだつた。それで私の日々の生活ができてゐた。文學者になるために！ あゝ。あなたたちにはすまなかつた。

N子。いゝえ。あなたのペンは鋭い武器です。それで私たちのためにたゝかつて下さい。

同志の女。せめてそうするのがつぐのひでせう。

（沈默）

女事務員。（青ざめた顔をして登場）

同志の女。おや。休みですか、今日？

女事務員。早能けでかへつたのです。

同志の女。どうして？

女事務員。（沈默）

N子。病氣ではないのですか。それだつたら遠慮なく休すんでいらつしやい。

女事務員。いゝえ。

同志の女。顔色が悪い――何か心配が――

（此の時玄關に人の聲。女事務員のがれるやうに立つて玄關口に出る。二人顔を見合はす。）

女事務員。（引き返す。N子に）あなたに面會の方……

N子。（出て行く。すぐ動搖した樣子で引き返す）弟です。弟が來ました。

同志の女。……

N子。すつかり變つて。百姓のやうななりをして……それに母親をつれて來てるらしいのです。

同志の女。ともかくも……では。（立ちかける）

N子。いゝえ。外で逢いませう。面倒なことになるかも知れません。（出て行く）

（沈默）

女事務員。（行きかける）

同志の女。ちよつと。（事務員かける）あなた……何か起つて居るのでせう。

女事務員。……

同志の女。どうも近頃あなたの樣子が變だと思つてゐました。言つて下さい。かくさずに……私たちの間では――

女事務員。私、局に出るのがいやで〳〵。

同志の女。どうしたのです。

女事務員。局長さんがしつこいのです。

同志の女。馬鹿な、はねつけてしまひなさい

女事務員。でも後が色々と――

同志の女。局をやめてしまひなさい。

女事務員。（溜息をつく）それだけならいゝのですが……

同志の女。（鋭く）あなたは操られて居ますね。

同志の女。……

女事務員。（突然泣き出す）私には母があります。故郷に――小さい弟と二人で。私は仕送りせねばなりません。私の月給は三十五圓です。弟が二、三ヶ月病氣しました。……私は受持の帳簿の數字を加減しました。

同志の女。局長がそれを握つて――

女事務員。私は秘密の室に呼ばれました。……私は選ばねばなりません。刑務所か、それとも――

同志の女。それで、あなたは？

女事務員。それでわたしは……（間）私今日ある處で局長に呼ばれました。それは場末の待合でした。……私は逃げてかへりました。……でも明日までのうちに決めねばなりません。

同志の女。勿論あなたは――

女事務員。（投げ出すやうに）私は身を賣りませう。外に道がありません。

同志の女。斷じてそれはいけません！

女事務員。誰が母や弟を養ふのです。惡い履歴がついたが最後誰が私を雇つてくれませう。どうして私は生きて行くのです。私にとつて今の位置はわるいものではありません。……それに私ばかりではありません。そんなことをしたものは――

同志の女。いけません！何を言ふのです。あなたは恥を忘れたのですか。

女事務員。（泣く）恥を忘れたのですつて？　誰がわたしに……えゝ、えゝ恥を忘れたんです。やつぱりさうにちがない。

同志の女。强くなつて下さい。女のいのちより大事なものを守つて下さい。

女事務員。操はいのちより大事ですか？

同志の女。えゝ。命より大事です。女のたましいを殺して、それより大事ないのちとはどんないのちです。たましいより大事ないのちがありますか？

女事務員。……

同志の女。捨てれば出來る。あなた自身を捨てればできる！

女事務員。私自身を捨てればできる！でも母と弟とは？

同志の女。私たちが引受ける。同志のものが養つて行く。幾ら送つてゐるのです。

女事務員。（顔を赤らめる）十三圓。麥で――田舍はものがかゝりません。

同志の女。（涙ぐむ）引き受けます。わたくしが――心配する事はありません。

女事務員。でもみんな貧乏なんです。

同志の女。貧乏が何んですか。たましいを守るための貧乏が。同志の操を守らせるために勞働を二倍にすることが何ですか。睡りを減らすことが何ですか。强くなつて下さい。はねつけて下さい。

女事務員。私ははねつけたい。あの薄い髭のある赤ら顔を近く寄せられるときのいやらしさ！でも私の恥があらはになる。

同志の女。どちらが恥ですか。もと〳〵××××××××××ない金を、弟の藥のために貰つたことゝ、若しそれが惡いなら――尙更その惡をごまかすために女のいのちを賣ることゝ……行きなさい刑務所へ。私たちはあなたを輕蔑

しはせぬ。あなたを輕蔑するものはブルジョアだけ——もと〳〵私たちより名譽のない彼の人たちの輕蔑が何んですか。私たちはあなたを送つて行く。あなたが出るとき迎へに行く。刑務所があなたを××××ができますか。若し刑務所があなたの罪をつぐなふ力があるのなら、罪をつぐなふために行きなさい！

女事務員。私は行かう。私を捨てれば出來る！私はそれで輕くなる。私の心にのしかゝつてゐた重しが一時にとり去られる。私はもうかくすまい。誰れにでも、私は言はう。私は金をぬすみました。私はぬすびとです。私を裁いて下さい、と——

同志の女。さうです。さうおつしやい。私たちはみんな聲をあはせてあなたを辯護する。誰れが此の人を××××？あなたがたが？大ぬす人のあなた方が？あなた方こそ私たちのパンを盗むのだ！暴力でぬすむのだ——

女事務員。それから私は言ひませう。私を用心なさい。私はあなた方のポケットをねらふ。でも私は喰べられないから、私の小さな弟の藥がないから——私は私のをとり返すために盗むのだ。でも私は操は賣らなかつた！

同志の女。操は賣られてはならぬ。飢えても——殺されても……私たちのうち一人がそれを賣る時みんなの恥だ。「女」の恥だ。男たちは私たちを輕蔑する。いや、そればかりではない。人間性が——たましいがふみにじられる。

女事務員。仲居が戸をしめて行つた。「袴を取りなさい！」局長がかう言つた。「窮屈さうだから……」……私はぞつとした。私より大きな、力のある腕がのしかゝつてくるやうな氣がして……だが今はもう何んでもない。何故私はあんなに恐れたんだらう。

同志の女。決心して居なかつたから——あなたのたましいが生きて居なかつたから。

女事務員。あの男の前に恐れる奴隷のやうに、眼をふせてはもう立つまい。明日は一人の獨立のむすめが、誰でもいや

らしい男にするやうに、嫌悪の情を一ぱい浮べて彼の男の面を見てやらう。それから……でもそれからすぐに女囚として……

山川。（二人の會話の間にはいつて來て後ろに立つてゐたが）刑務所へ行く必要はない。

同志の女。
女事務員。｝（山川の顏を見る）

山川。決心さへあれば充分だ。局長は自分の秘密のあらはれるのを恐れる。

女事務員。證據は何もありません。

同志の女。考へてやつて居るでせう。

山川。はゝゝゝ。平凡なその局長に勇氣はない。あなたは恐れずにはねつければいゝ。覺悟を見せればいゝ。すると彼の男はすぐに妥協的に出る。俺のお前に言つたことは他人に言ふのではないぞ。お前のしたことは俺が見なかつたことにする。

同志の女。それつきりでせうか。

山川。さうです。但し彼の男は忘れはしません。――使つた金は辨償してもらはねばならぬと。

同志の女。それですむなら、私たちが働いてその金をつくればいゝ。

山川。なあにほつて置けばいゝ。局長が卑劣なまねをした罰だ。局長は自分で始末をつけます。自分の局からさういふものを出したことは落度になるから。見てゐなさい。局長はあなたがはねつけたら、今後却つてあなたを恐れるやうになるから。馬鹿な！それ位なことが見ぬけずに澤山なむすめが身を賣るのだ。我々のむすめはもつと強くなら

ねばならぬ。もつと鋭く。柔弱なことは名案でない！

女事務員。私あの局はもうやめます。

山川。やめてどうするのです。

女事務員。他で口を探します。

山川。それには及ばない。知らぬ顔をして今の局にゐなさい。

女事務員。でもわたし……

同志の女。そんな局にゐる氣がしないのは當然です。

山川。いや、同じことだ。何處へ行つてもまた同じやうなことが起る。あなた方は甘い。日常の茶飯事だ。今の社會のしきたりだ。一方に金と淫慾とがある。他方に飢えと美貌とがある。後は方程式だ。もつと事實の力を知れ。我々は此の公式を打ち毀はさねばならん。その個々の結果ではない。決心さへあれば何處でも身は守れる。それが無ければ何處へ行つても駄目だ。

女事務員。（沈默。首を垂れて退場）

同志の女。かういふ汚い祕密がどんなに多いのでせう。

山川。到る處に。山にも野にもみなしかばねです。

同志の女。でも私たちのすぐ側まで喰ひ込んでるとは思ひませんでした。

山川。おどろくことはない。公然と行はれてゐる何十萬人の女奴隷はどうだ。國家の朱印つきの、稅金を納め

……

同志の女。……

山川。宴會にはいつでも女奴隷だ。大臣でも、學者でも、藝術家でも──僧侶でさへ！

同志の女。私たちの妹や娘がとられて行く。

山川。綺麗な尾を振る金魚──あゝ俺れはあのランチウを見るといつでも彼の女等を思ふ。

同志の女。あれはもう自然の產んだ正しい魚ではありません。

山川。どうだ。あの飛び出た眼の味は、あの腰の振りやうは。冷めたさうなぬら〳〵する皮膚は？ 紳士たちは品さだめする──

同志の女。（面を覆ふ）止して下さい。私たちの侮辱に耐えられません。

山川。（顏色が惡くなる）もう俺には怒りはない。行爲がある。感情はない、意志がある。──すぐに××××××！

同志の女。あなたにはすべてが內攻したのです。でも私は……許して下さい。あなたを見て居るとわたくしは……（涙をふく）

（沈默）

山川。（自ら恥ぢるやうに）まだ冷靜さが足りないのだ。あなた方を快活にさせることができないなら──よろしいですか。平靜と知謀、鋼鐵のやうな意志、我々の事業を成すものはこれですぞ。──いや、處でわたしはあなたに逢いたいといふ人たちを連れて來たのでした。（外に向って聲をかける）諸君どうぞ。

（W聯盟委員、同組合員二人登場）

山川。これが私たちの共の婦人です。（同志の女に）W聯盟の諸君です。

委員。あなたは僕たちの攻撃を書かれたが、今も同じ意見を持つて居るのですか。

同志の女。さうです。

委員。私が××新聞にかいた論文を讀みましたか。

同志の女。拜見しました。

委員。で今後どうするつもりです。

同志の女。私は同じ考へを固執する他はありません。

委員。お止しなさい。あんな下らない素人論文は。

同志の女。……

組合員甲。甘い考へ方だ。

同志の女。何故です。

委員。ちつとも實際運動の核心にふれてゐない。もつとリアリスチツクに考へなさい。實際運動の鍵は實力だ。實力は數だ。頭數を揃へることがアルフアで又オメガーだ。そのためにはどんな手段も取らねばならん。

同志の女。ブルジョアに媚びてもですか。

委員。媚びるのではない。利用するのだ。

同志の女。あの誓約書は何ですか。私は恥づかしくなる。

組合員。一片の誓約書が何んだ。實力さへ握ればそれでいゝ。

同志の女。あなた方には精神がない。妥協的氣分でだらけてゐる。

委員。現に爭議の時に効果があがるぢやないか。

同志の女。僅かばかりの賃金の値上げが大事ですか。×××精神が大事ですか。

組合員。精神より金だ、パンだ。

同志の女。精神の息のかゝつたパンだ。半官、半民——ブルジョアのための勞働者のブローカー——

委員。何だと！俺たちはプロレタリアのために献身して働いてゐるのだぞ。

同志の女。爭議はどうして解決する？ブルジョアの秘書役とあなた方とが待合で逢ふ。ある條件で話がまとまる。一方では勞働者の大衆が飢えを賭して工場の前に血眼になつて集まつてゐる時にあなた方は秘密に何事かを授受するのだ。ニツコリ笑つて——それからあなた方は彼等の前へ出て激越な演説をする。「我々は勝つた」と。

委員。あなたはものゝ現實を知らない。又さうして決まるなら些々たる事ではないか。簡單なピユーリタンでは事はまとまらぬ。現に我々の大衆は萬歳を唱へて解散する。明日からポケツトに幾つかの貨幣が殖えるのだ。

同志の女。彼方がたは自分の敵の手先きと知己のやうにして酒を飮む。——彼方がたと彼等との間の授受は潔白なのですか——私はおたづねします。

委員。勿論だ。（空うそぶく）

同志の女。許しがたいのは彼方がたは何故妓（をんな）を呼ぶのです。何故我々が解放しなければならないものを自分で弄ぶのです。

委員。…………

同志の女。一方では煽動する。一方では妥協する。その間の呼吸であなた方が生きてゐる。

組合員。素人だ。たゞの理想的社會主義だ。

同志の女。殘念なことは、あなた方のふところに入る金はブルジョアのポケツトマネーに過ぎないことです。彼等は陰ではあなた方を輕蔑するでせう。あなた方を通じて、我々の階級を輕蔑するでせう。

組合員乙。（怒鳴る）失敬な！　證據があるか。

同志の女。（輕蔑の表情をもつて沈默）

組合員甲。一體あなたは我々の階級かね。さういふ空論を吐くやうでは出が知れてゐる

組合員乙。生ツ白い、女學生くさい議論だ。そんな議論は同窓會へでも行つて吐くがいゝ。

委員。いや、理想論として敬意を持つて聞いて置かう。或ひはさういふ理論から×××成功するかも知れないから。

山川。これ位いでもういゝだらう。どうです諸君。

委員。いや、とんだ時間をつぶしました。

組合員甲。馬鹿げたこつた。

組合員乙。失敬しやう。

（三人退場）

（沈默）

山川。彼の連中には×××成功しない方がいゝんだ。さうすると自分でハンマーや、鋤を執らねばならなくなる

同志の女。私は恥づかしくなります。

山川。駄目です。彼の人たちが自分の快樂を持つてゐるかぎりは——いや。もうよろしい。N子さんはどうしました。

同志の女。今朝突然弟さんが逢いに來ました。——お母さんも一緒に。

山川。ふーむ。（考へる）

（沈默）

同志の女。N子さんは美しい。彼の人を見てゐると×××ガイストを見てゐるやうな氣がする——あなたは御自分のことはお考へにならないのですか。——生活することは………

山川。えゝ。

同志の女。愛のことも——

山川。…………

同志の女。でも愛することが、事業のエネルギーを燃やすやうな愛でしたら——さういふ人がありましたら——

山川。（赤くなる）私は粗野な男です。鬪ふこと、謀ること、そして倒すこと、——それが私の役目です。がその方のことは一向……いや、アモールの惠みには緣が薄い方です。

同志の女。決してさうではありません。

山川。（不釣合に狼狽する）私をなやまさないで下さい。

（集合場でベルが鳴る）

山川。集りの仕度があります。大體

(草原の上にN子と弟とあらはる)

弟。僕たちは勞働します。自分を人類に供へます。しかし誰をも憎みません。

N子。憎みのない愛、敵のない勞働運動——そんなものは私には考へられない。

弟。愛と犧牲とで僕たちは占領して行きます。人類の魂を貰つて行きます。

N子。彼の人がそれを敎へるのですか。

弟。さうです。僕は彼の人を信じます。彼の人は僕の煩悶を解決する道を示してくれました。その他の道では僕は滿足できません。お父さんと姉さんとの間の憎み、——それは僕にはどうしてもそのまゝでは不調和なものです。その間に挾まつて僕はどうして幸福に生きて行けませう。お父さんは確かに惡い。けれどそれを憎んだだけでどうして解決がつきますか。姉さんのその憎みが勝つたとき、お父さんが復讐されて壓しつぶされた時、それで解決がついたのでせうか。その時僕はどうすればいゝのです。考へて見て下さい。僕は思ふ——どうしても憎みでは駄目だ。復讐より外に道が無ければ嘘だ。だつてそれは僕を救つてくれないもの。本當の道は——眞理はともかくも姉さんとお父さんとの手を握らせるやうな或るものでなくてはならぬ。それはたしかだ。——彼の人はその道を僕に示してくれたのです。

N子。私がお父さんを愛する。お父さんのために犧牲になる——そしてお父さんはどうするんです。お父さんの罪惡はどうなるんです。

弟。お父さんは悔い改めるのです。悔い改めた以上は過去の罪を責めてはならない。そんなことをするものは罪惡を憎む資格さへない。姉さんはそんなことはなさらないでせう。

N子。勿論私はしません。だがお父さんが悔い改めない限り――

弟。姉さんが本當にお赦しになれば、お父さんは悔い改めるのです。一方は悔い改めたら赦すといふ――（片方はい・
憎むから悔い改めないと。其處を一歩踏出すのが犧牲です。悔い改めない時に赦して下さい。あなたの力でお父さ
んを悔い改めさして下さい。

N子。それは逆さまです。それでは正義が――

弟。犧牲は正義以上です。正義には「救ひ」の力はない。だが犧牲にはある――

N子。（傍白）私はあの男の聲をきく。弟を透して彼の男の聲を！それはあきらかに私を目安にした聲だ。競ふもの、
聲だ！

弟。僕は信じます。犧牲は憎み以上です。それのみがたましひを買ふことができる――

N子。では答へて見なさい。あなたはお父さんに悔い改めを說くより何故さきに私に犧牲を說くのです。

弟。それは姉さんがお父さんより强いからです。

N子。………

弟。姉さんの方が高尙なからです。僕が姉さんをお父さんよりも尊敬してゐるからです。强いものは弱いものを助ける
べきではないのですか。

N子。（一瞬間目を閉ぢる）

弟。姉さん。どうかお父さんを赦して

N子。私の不名譽？　私は私一個の事業を考へてゐるのではありません。何百萬人の人を私と同じやうな[illegible]へてゐるのです。自分のことなら自分が忍耐すればすむ。ですが他人のことを自分が忍ぶことが出來ますか。誰かゞ自分の顔を打つた。それを赦すのは尊いことかも知れない。しかし他人の顔を打つものがゐる時にそれを見逃がすのが尊いことですか。それは卑怯です。私が一番耐えがたいのは第三者が第三者を虐げるのを傍見してゐることです。

弟。…………

N子。私はどうしても凝つとしてはゐられない。虐げるものと鬪はねばならぬ。お父さんは私にとつてさういふ人です。お父さんが女を弄ぶことを止めない限り、不義の財を散らさない限り——それともお父さんは放蕩を止したとでも言ふのですか。

弟。（悲しさうに口をつむぐ）

N子。（見る〳〵憎みの表情を浮べる）ふむ。私のやうなものを此の上まだつくらうと言ふのか。

弟。姉さん。お父さんは病氣なんです。自分でお母さんにさういふさうです。モルヒネ中毒患者がモルヒネなしには生きられないやうに、お父さんは女なしには生きられないんです。

N子。（興奮する）病氣？　女を喰はねば生きられない病氣、父なし兒をこしらへねばをさまらない病氣、ぢやあお父さんは精神病だ。そんなものは檻の中にぶち込むがいゝ。いゝえ、そんな中毒患者に效くのは毒藥の外にはない。だから憎惡と恐怖との毒藥を以つて——

弟。姉さんどうか止して下さい。——あゝもう今日はお父さんのことは言ひますまい。——姉さんは私のお母さんを可

哀想には思ひませんか。

N子。お氣の毒な!

弟。實はお母さんが姉さんに逢いたがつてゐるのです。逢つてあげて下さい。

N子。(考へて)えゝ。だけどそしてどうするつもりなの。

弟。だん／＼お父さんの周圍から切り崩して行くのです。お母さんはもう僕たちのものです。僕たちはもうお母さんのたましひを占領しました。お母さんはもう富や名譽からは自由になつたのです。お母さんがお父さんの家から出てわたしたちの所に來ないのはお父さんを守る爲だけなんです。

N子。わたしにどうして會ひたいのでせう。

弟。なぜですか……お母さんがそれを話すでせう。多分お母さんの善良な、人なつかしい性質からなんでせう。兎に角會つて上げて下さい。あの倉庫の陰で待つてゐるのです。(舞臺の端迄歩いて行つて合圖をする)

(夫人登場。N子を見ると直ぐに眼に涙を一ぱい溜める)

夫人。お目にかゝりたいと思つてゐました。

N子。(堅くなつてゐた肢體が見る／＼弛るむ。默つて夫人を見上げる。軈て頭を垂れる。)

夫人。わたしも幸福ではないのです。信じて下さい。わたしがあなたに持つてゐる感情は……わたしたちは同じ人によつて不幸なのです。

N子。あなたの淋しい御生活の事を知らないでも御座いません、そのやうなものと結び付けられた運命を今其中になつたあなたを傷ましく思ひます……御免なさい。でもわたしはどう申すべきでせう、わたしの父を保護する事からあなたの御主人を苦しめる事になるのでしたら・・・

夫人。（顔色が青くなる）N子さん、その事はあなたとわたしとの運命が絡まつてゐる事を示してゐるものではないでせうか。わたしたちは互に無關心ではゐられないやうに因緣づけられてゐるのです　わたしの夫はあなたの父――それは否應なしに與へられた事實なのです。

N子。それはむしろわたしとあなたとが親しみ合ふ事の出來ない運命を示してゐるものでは御座いますまいか。わたしたちがよしどんなに愛し合つたとしても。わたしは父を憎んでゐます。あなたの夫はわたしの敵です。

夫人。さうでは御座いますまい。一つのものによつて不幸にされてゐるものは塊り合ふ事が出來る筈です。何故と申しまして、そのものに打ち勝つ爲に力を合はせなければならないからです。唯大事なのは一番深い爲方で打ち勝つ事です。わたしはその爲方をあなたと御相談申したいのです。

N子。あなたの仰しやる事は解るやうに思ひます。ですがわたしにはもう先きが見えるのです。本當にそれはわたしにとつて不幸です。でも爲方が御座いません。わたしには見へるのですから。わたしたちの道は分れてゐます。

夫人。何故で御座いますか。

N子。卒直に申します。あなたは貴族です。境遇も精神もわたしのとは違つてゐます。殊に後のものが一等わたしたちにとつて不幸なのです。

夫人。さうお思ひにならないで下さい。わたしはもう貴族と言ふやうなものには何の興味も持つてはゐません。わたし

には唯人間として、妻としての義務があるだけです。わたしは思ひます。兎も角も金澤はわたし
す。わたしは金澤を負つてゆかなければなりません。あれがした過ちをわたしが償つてゆかねばなりません。金澤
はあなたを不幸に陥し入れました。若し出來ますなら、それをわたしに少しでも償はして戴きたいのです。

N子。と申しますと……

夫人。(一歩進む) あなたはわたしと一緒にあちらにいらして下さいませんでせうか。あたしはあなたを御世話したいのです。そこで人間としての最も高い教養に必要なあらゆる手段を——それはあなたにこれ迄拒まれてゐたのですから。勿論わたしの家にいらして下さるに及びません。どんな方法でも取る事が出來ます。

N子。(沈默)

夫人。あなたは全く自由で勿論何の負ひ目も感じる事なしに——

N子。わたしは出來ません。

夫人。……

N子。有り難う御座いますが、御辭退せねばなりません。

夫人。何故でせうか。失禮でしたでせうか。

N子。さうでは御座いません。御考へになつて下さい。さう言ふ餘裕と物質とは何處から來るのでせうか。わたしはさう言ふ教養を受けたいとは思ひません。だつてそれは澤山な人達の勞苦によつてはじめて出來る事ですもの。

夫人。わたしもそれを考へないでも御座いません。伜から何時もそれを教へられてゐるのです。ですが、わたしがかう考へるのは間違ひでせうか、一度あなたもお考へ下さい——わたしたちは緣によつて夫や、伜やあなたを知つてゐ

ゐるのです。わたしたちの運命は互に縺れ、絡まつてゐます。わたしたちは、いはゞ地球から一つのグループとして[illegible]られたのです。わたしたちは互の不幸を見ます。感じます。この呻きの[illegible]聞きます。もとより他に澤山な人間がゐる事を知つてゐますが、わたしたちはそれとは違つた意味で特別な關はりがあるやうに思ふのです。世界の何處かで今百人の人が餓死してゐるかも知れません。でもわたしたちはそれを見はしないのです。此處にわたしの夫の娘が、わたしの伜の姉が苦しんでゐます。わたしの夫を敵のやうに憎んでゐます。わたしはそれを見ます。生々と苦しく壓しつけられます。その時わたしはどちらに重い關はりを持つたらいゝのでせう。「已でに見る兄弟を愛せざるもの、いかで未だ見ざる兄弟を愛せんや」聖い人は言はれました。わたしは縁によつて觸れ合つた人達――わたしの近くにゐるものゝ幸福を先きに考へたいのです。それは許されない事でせうか。

N子。でもわたしはわたしと同じやうに苦しんでゐるものゝ苦しみを生々と感じるのです。わたしの心臓はさう言ふ人達のと一緒に打つのです。わたしはその苦しみを身に受けて來ましたから。それにわたしと同じやうな不幸なものを他でこしらへて、その代りに自分の苦しみを脱れやうとするのは卑怯です。

夫人。今わたしの手に物質がある。それはどうして私の手に這入つたかは私は知らない。でも唯それがわたしの手にあるのだから、それを自分の一番手近かな義務の爲に使ふ事は許されないでせうか。わたしは物質に何の執着も持つては居りません。唯の手段として餘りとらはれたくないのです。

N子。物質に捉へられるのではありません。物質が捉へるのです。身動きが出來ないやうに――一切れのパンがわたしたちの自由を――生命を支配するのです。それがわたしの生々と經驗した事です。そしてあなたには唯考への上で解る事なのです。あなたが仰しやる事は本當です。わたしたちは生々と感じられる事を――内から要求され

をすべきでせう。あなたとわたしとはそれが違ふのです。わたしたちの道が分れてゐると言ふのはそれです。

夫人。（悲しさうに）一つだと考へやうとして下さい。金澤と言ふ一人の人間の救ひの事を考へて見ませう。わたしたち三人は金澤と運命的な深い關係に立つてゐる點で一つ立場にゐるものです。自分の父や夫を救ふ事はわたしたちの一番初めの愛の務めでは御座いますまいか。それをせずに他のものを救はうとするのは不謙遜ではないでせうか。言はゞ神樣から、同じ人間を救ふやうに一つの義務がわたしたち三人に課せられてゐるのです。それがわたしたちを一つに結びつけないでどうしませう。

N子。わたしは個人の運命よりも人類の運命を重んじます。一個の金澤を、わたしの父をどうしやうかと言ふ事よりも、もつと大きい義務がわたしに命じます。わたしの父よりももつともつと善良な、もつとハンブルな澤山な人達が父のやうな傲つた人間の爲に虐げられてゐる。わたしはその人達が父よりも先きに救はれる權利があると思ふのです。父はわたしにとつて殘酷な父であるだけでは御座いません。いゝえ、それは寧ろ小さい事です。父は虐げるものゝ階級の一つの型です。わたしの敵の著るしい代表者です。お忘れにならないで下さい。金澤はわたしにとつてはさういふものなのです。

夫人。ではわたしは全く違つた方角からあなたにお願ひします。わたしはもうあなたを說きふせやうなどゝは思つてゐません。わたしは唯人間としての親しみからあなたにお近づき願ひたいのです。わたしはあなたを懷しく思つてゐます。あなたはわたしの伜の唯一人の姉さんです。それに不幸に暮してゐる一人の人間としてのわたくしと親しくして下さいます事があなたのお心に反きまして？

N子。……

夫人。（親しさうにN子を見る）それともあなたは私も金澤と同じやうに敵のやうにお思ひになりますの？

N子。い丶え奥さん……わたしさう思はなければならないと思ひますのに――

弟。姉さんそれがいけないのです。それをよして下さい。唯運命で貴族の家に生れたからと言ふだけで強いて敵と思はうとするなんて無理な事です。そんな心にも無い事はしないで下さい。僕は知つてゐる。姉さんは僕のお母さんと會つて氣に入つたんぢやありませんか。恐れずにもつとずつと親しくなつて下さい。

N子。……

夫人。わたし今あなたに無理な申出をしてあなたをお困らせするのはよしませう。わたしはお目にかゝつた事をうれしく思ひます。ですが悲しい事にもう二三日の中にF市へ歸らねばなりません。明後日の晩も一度わたしのホテルにいらして下さいますまいか。決してお惱やませしは致しません。唯三人でお夕食を食べたいと言ふだけなのです。

N子。有り難う御座います。（考へてゐる）

弟。姉さん是非來て下さい。い丶ぢやありませんか。僕待つてゐますよ。

N子。（かすかに頷く）

（向ふの海で汽笛の音が鈍く聞える）

夫人。もう歸らねばなりません。

弟。今日はこれで歸ります。でも姉さん僕は未だ却々退却しませんよ。あの人にも會つて行きたいが今度にします。

夫人。ではさようなら（手を差し出す）握つて戴けませんの。

N子。（夫人の手を握る）

夫人。（N子の手を堅く握りしめる。急に涙が頬を傳ふ）わたしたちはお友達ですよ。さようなら。

N子。さようなら。

弟。さようなら。

（夫人と弟月見草の咲いてる草原を通つて倉庫の陰に去る）

N子。（見送つて立つ。凝つと考へる。軈て材木の上に腰を懸ける）

（沈默）（遠くのトロッコを土砂を一ぱい積んだ車を押して一人の老勞働者が默々として通りすぎる。）

山川。（登場）弟さんと金澤の夫人とが會ひに來たさうですね。

N子。此處で暫らく立話ししました。

山川。（鋭くN子の樣子を眺める）負けてはいけませんぞ。

N子。……

山川。あなたの立場を守つて下さい。決して妥協してはなりません。

N子。決して妥協はしません。一人はわたしの弟です。一人は唯氣の毒な夫人として……

山川。（鋭く）あの人達は我々の敵です。個人的の情實程或々の戰の精神を鈍らせるものはない。どういふ口實を待つて來るにもせよ、我々とあの人達の間には越える事の出來ない溝がある――それを忘れてはならん。

N子。弟はブルジョアではありません。家から離れて勞働してゐるのです。

山川。（いら〳〵する）あの「供へた男一の

る事は我々にとつて非常に不利益です。我々の闘志を内から挫く恐ろしい害毒です。

N子。あの男はわたしの敵です。あの男はそれを奪ひました。あの男はもうわたしの弟を取りました。あの男はわたしの敵だ。何時か監獄の女を取り返しに來るでせう。わたしに取られたあの男の愛人を。

山川。（怪しく興奮する）わしはあの男を憎む。彼の男はわしのライヴァルだ。

N子。わたしのライヴァルです。（力を入れて）わたしたちのライヴァルです

山川。（狼狽する）わたしたちは戰はねばならぬ。事業の爲には總ての個人的な欲ひを捨てねばならん。

N子。唯一つの欲ひだけ――それは許されていゝ。事業が結びつけ、事業の熱情を高めるやうな愛……

山川。……

N子。（我を忘れる）あなた……わたし總てを捨てます。可愛い弟も捨てます。個人的なもの〻總てを捨てます。でも許して下さい。唯一つだけ……

山川。（堅くなつて立つてゐる）

N子。わたし今日金澤の奥さんの深切な申出を受けました。あの人の人間らしい心に動かされました。久し振りに會つた弟の溫かさ――わたしは淚が出た。とう〳〵わたしはあの人たちの手を握つた。あの氣の毒な奥さんが淚を一ぱい溜めてわたしたちは友達ですと言つた……ですけれどわたしそれもみんな捨てゝ了ふ。わたしは目をつむつてあの人たちを却ける。あの人たちとの親しみはもうわたしにはない。わたしは一人ぼつちです。わたしは事業に捧げます。唯それをわたしたちの事業と考へる事が出來たら！ あなた許して下さい。長い間わたくしは――

山川。わたしたちは同志だ。共に一つの事業に生命を捧げてゐる……

……

N子。あなたに捧げるのは事業に捧げる事——でもあなたと事業とは一つではないの。わたし死にます。あなたの爲に……それは事業の爲ではないの。わたしには二つは一つです。

山川。（沈默）

N子。あなたはわたしの恩人。わたしの先生……わたしの救ひ主。あゝわたしもう言ふ事が出來ない。わたしの心を受けて下さらなくて？

山川。あなたは尊い同志だ。あなたはわたしを勵ます。あなたはわたしの忠實な弟子だ。わたしの言葉に反いた事は一度もない。わたしはあなたを見る時わたしの力に自信を持つ。あなたが旗を持つて女の勞働者たちの行列の眞先にゐるのを見る時わたしは指揮者としての權威を持つてゐるやうに感じるのだ。だつてわたしは知つて居る。あなたが私の一言で何時でも死んで呉れることを。だがあなたはわしにはわしが産んだ娘のやうな氣がするのだ。わしの精神をつぐ後繼のやうな氣がするのだ。

N子。……

山川。許して呉れ。わしの愛はさう言ふものだ。わしは喜ろこんであなたを背負つて川を渡る。あなたを助けるために劍の中に飛び込む。あなたをわしの膝の上に抱いて接吻する。若しわしに遺こすべき何かの名聲があるならば、わたしは誰れよりもあなたにのこすだらう。だがあなたの思つてゐるやうな——

N子。（青ざめる）それでは……それではわたし……

山川。許して呉れ。わしはデリケートに言ふ事を知

山川。（顔をいがめる）わしはあなたの心を傷けただらうか。さうでない事を望む。

N子。あゝ。わたしには運命がどうして何もかも許すのだ。わたしの欲つた事が一つでもかなつた事があるだらうか。

山川。……

N子。力がわたしから拔けた。

山川。（强く）しつかりしてくれ。あなたは强い。今我々にとつて大事な時が來つゝある。わたしたちは一つ旗の下で戰ふのだ。あなたに働いて貰はねばならぬ。わたしあなたに大事な部署を預ける。あなたは女達を率いてくれ。御覽。あの向ふの濁つた海に今錨をまく船を。力强い音ではないか。

N子。わたしにまだ力があるか。わたしは一人でやつて見る。でも私は淋しい。あなたと初めて逢つた夜、わたしはむしろあなたの腕の中で眠ればよかつた。でもあなたは私のみさををしんでくれたのだ。同じやうな船つき場……あの安宿の暗い部屋で夜通し波の音を聞いたのだ。あくる日からわたしはあなたに從つた。わたしはあなたのもの、その時から思つてゐた。でもあなはわたしのものではない……

山川。粗野な、獸のやうに荒いわしのやうな男にあなたは自分をさゝげやうといふのだ。でもわしは僞はる狼ではない。わしは一人の女をもまだ犧牲にはしなかつた。わしはあなたに僞はつて悦ばせるよりは眞實を負はせる。苦しんでゐるあなたを見て、あなたのいのちを尊敬したい。

N子。苦しむことがわたしの運命なのか。長いことつゞいて來た苦しみの日——そしてわたしがよろこびを求めやうとして手をのばす時まるで咎められでもしたやうにたゝき返へされるのだ——

山川。（眼を閉ぢて立つ）

N子。小さかつた頃の日を思ひ出すことは暗い――そしてこれから先きは砂のやうに…………

山川。先きには光りがある。奮い立て！　我々の日は來つゝある。あちらでも此方でも我々の味方は頭をもたげかけてゐる。それ等が一齊に立ちあがる時が今に來る。愉快ではないか。鬪ふのは。私たちは一緒に出陣しやう。あなたは緋絨を着てどんなに美しいだらう。わたしが負傷をしたら傷を卷いてくれ。あなたが馬から落ちたらわしはあなたを小脇に抱へて切り拔ける――淸い〳〵友情と相互扶助のこゝろ――私たちは事業に於いて一つなのだ。正義の徽章のなかに名をつらねて彫り込んでゐるのだ！

N子。人類の惱み――苦しむものは世界に充ち〳〵てゐるのだ。私だけではない…：生活苦の谷底で彼等の呻き聲がきこえる！

（此の前後より勞働者たち參々伍々は入つて來て、草原を横ぎつて、集會所の方に行く）

山川。力を落してくれるな。尊敬すべき苦しみの人！　あなたの精神の力を見せてくれ。わしはあなたの苦痛を敬禮する。

N子。（頭を上げる）もうおつしやらないで！　わたしは一人でやつて見ます…………私は殘つてゐる力を集める！

（此の時集會所の××××××××××××××××）

山川。集りだ。

N子。（きつとなる）いらして下さい！

N子。(××××××××××見て立つ)

(永き間)

N子。苦しみは神々しい——私はもう幸福を求めまい(爽やかに)わたしに苦痛と幸福しつへる。

第二場

供へた人々の家。地方の山間の農村。山かげの耕地に建てた粗木の大きな家。がらんとして廣い土間。頑丈な粗末な卓。腰掛。谷水を引いた汲溜桶。一隅に大きな鍋釜のかゝつた竈。梁木から吊り下つた薬罐。開け放れた戸の向ふに一面の山と開墾された田畑とが見渡される。人々が耕し、土石を運んでゐるのが見える。供へた男土間に敷いた蓆の上に座り、一心に竹の籠をつくつてゐる。

人の兄弟達の前にしやがんで芋を蒸して居る。少し離れて一人の盲目の兄弟端座して點字を撫でゝゐる。

(しばらく沈默)

兄弟甲。日が永い——山の麓から兄弟たちの掛け聲が透つて來る。……重い石を運んでゐるのだ。

供へた男。日でりがつゞいて仕事がよくはかどる——それに此の頃は病人が殆んどない。ありがたい事だ。

兄弟甲。わしらは働く。——腹が空く。——芋が蒸せた。

供へた男。今年は六段畑が出來た。野菜や——うまく行けば麥がつくられる。

兄弟甲。痩せたところでも少くとも芋が——これまで石ころや雜草で何にもたらなかつた荒地が私たちを養ふ食料をた

み出すのだ。

供へた男。よろこばしいことだ。

兄弟甲。働くことは尊い。兄弟たちはよく働らく。日に燒け汗をたらして――私たちは知つてゐる――私たちの勞働が必ず無駄でないことを。一寸の土地が拓かれても人間の役に立つ。一鍬の秣が刈られても馬が生きる。――誰も不服を言ふものは居ない。働かぬものは喰つてはならぬことを知つてゐるから――

盲目の兄弟。(點字を撫でる手を止める)僕は働かない。

(沈默)

盲目の兄弟。(悲しさうに)僕は働かずに喰つてゐる。

兄弟甲。(氣の毒さうに)君は別だ。

盲目の兄弟。僕が働けたらな。僕は眞黑になつて働くのだが。荒地を起すのはどんなに力が入つて愉快だらう。種を蒔くのはたのしみなもんだ。――せめて手工が出來たらな。座つてゐてもたゞは過さないのだが――もう駄目だ。僕に出來ることは何もない。僕は人類の穀つぶしだ。兄弟たちが汗みどろで働らいたものを鼠のやうに喰いつぶすばかりだ。

兄弟甲。惡かつたね。うつかりしてゐて……でも君は目が見へないんだもの。君は働けないんぢやないか。働かないんぢやない――

盲目の兄弟。でも何もつくり出さないことは事實だ。僕は何の[illegible]

きふんだ。自分の存在が容れられてゐない世界に生きてゐるといふ氣持は何と言ふ不安なものだらう！　僕は時々死にたくなる——

供へた男。安心し給へ。兄弟。君は生かされてゐるんだ。

（沈默）

供へた男。君は生きていゝ。それは生を與へられたからだ。

盲目の兄弟。勞働が私たちに生きる權利を與へる。——それだのに私は働かない。

供へた男。（力強く）生きる權利を與へるものは勞働ではない。——恩惠だ。我々をつくつたもの、我々に生命を與へたものゝ愛だ。

盲目の兄弟。……

供へた男。それに氣がつかぬ時すべてが間ちがふ。私は夜晝勞働する——だがそれで生きる權利があるとは思つてゐない。生きるためには食はねばならぬ。だから私は勞働する。働けないものを食はせてやりたい。だから私は勞働する。だが私が生きる權利は私をつくつたものゝ意志にある。

盲目の兄弟。私をつくつたものゝ意志だつて？

供へた男。さうだ。君は生れやうと意志して生れたかね。

盲目の兄弟。（考へる）いや、僕が氣がついた時には僕は已でに生きて居たのだ。

供へた男。さうだらう。それどころではない。君が生きてることに氣がつくまでには生まれてから數年、本當には二十年近くが經つてゐるのだ。君は自分で知らずにお母さんの乳房を吸つて大きくなつたのだ。君が生きる權利が何處

から來るのかを考へ出したのは一體幾つの時だ。それまでは君は何處からその權利を得てゐたのだ。――考へてくれ給へ。

盲目の兄弟。（考へる）僕は産まれたのだ。だから僕は生きてゐるのだ。……さうだ。僕は何ものかから生命を與へられたのだ。お母さんから？……母は意志して姙みはしなかつた……

供へた男。或る者が君に生命を與へた。其の者が欲しなかつたら君の存在はてんで無かつた。君の存在はその者にデペンドしてゐる……さうではないか？

盲目の兄弟。さうだ。

供へた男。その者が生きる權利を君に與へる。君のお母さんの乳房が君を養ふやうに、その者が君を養ふ……それとも君は君が働いてお母さんの乳房をつくり出したとでも言ふのかね。

盲目の兄弟。（沈默。――涙が落ちる）

供へた男。（しづかに再び網を編みつゞける）

盲目の兄弟。僕は生きてもいゝんだ。……僕は氣がつかなかつた。

供へた男。私も廿五の年まで氣がつかなかつた。わしはそれに氣がついた時初めて頭が下つた。ハンブルといふことを知つた。……私は暮らし方を變へてしまつた。

盲目の兄弟。自分の力で生きるのではない――生かされるのだ……僕は容れられてゐる。僕はうれしい。僕は働かなくても生きてゐてゆるされる……

兄弟。君は詩がつくれるぢやないか。君は口で言へばいゝ。僕が筆記してやるよ

盲目の兄弟。やつてくれるかね。實は書きたいことがあるんだ。僕は目は見えないが、光りを感ずることができる。美しいファンタジーが浮かぶ——僕は書きたい。僕のやうな運命を受けたものがどうして生きればいゝかといふことを——

飢へた男。(考へながら)運命に打たれた時初めて本當の生活がはじまる——悲しみは却つて恵みを教へる——君は決して不幸ではない。

盲目の兄弟。僕はうたならう。盲目のうたを——深い悲しみを——たましいのよろこびを——凝つと座つてゐても訪れて來る人生の痛い感觸を……

兄弟甲。僕は健康だ。それだから働く。君は不具だ。それだから働らかない。——それでいゝぢやないか。

飢へた男。皆して何とか活らして行く——これが經濟の一番本當の道だ——その他の法則は皆障りがある。

兄弟乙。(畑からかへつて來る)腹が空いた。何か喰ふものはないか。

兄弟甲。今芋を持つて行かうとして居るところだ。——どうだ一つ。(芋をやる)

兄弟乙。(芋を貰つて喰ふ)うまい。馬鹿に腹が空いた。荒地起こしは一番力が要る。だがそれだけ一番働いた氣がする。

兄弟甲。俺もこれから行く。俺は今日は受持の田の草とりだ。

兄弟乙。今日午飯の休憩の時川のはたで俺が考へたんだ。あの川の水を引いて水田をもつとつくらう。もつと米が欲しい。——それで皆も贊成して水路をつくる計畫を色々して見た。

兄弟甲。それはいゝ。さうなると助かる。

兄弟乙。いづれ後で詳しく話す——芋を持つて行つてやらう。皆腹を減らしてゐるんだ。

兄弟甲。よし。（芋を入れた叺を擔ぐ）俺の鍬と鎌とを——（先きに立つ）

兄弟乙。（鍬をかつぎ鎌を腰にさす）

（二人出て行く）

盲目の兄弟。（間の悪るさうに立つ）

供へた男。（仕事の手をやめ）よろしいよ。

（供へた男盲目の兄弟の手を引いて便所に連れて行く。廊下に立つて待つ）

姉妹甲。（洗濯物を一杯入れた籠とバケツを抱へて歸つて來る）たゞ今。

供へた男。御苦勞でした。

姉妹甲。お天氣がいゝのですぐ乾きます。川の水が氣持がいゝ——どうぞ。わたくしが。……（赤くなる）

供へた男。（元の處にかへる）

盲目の兄弟。（出て來る。柄杓を手探る）

姉妹甲。（すぐ行つて水を掛けてやる。手を引いて元の席に連れて來てやる）

盲目の兄弟。ありがたう。

姉妹甲。シャツが乾いてゐますよ。召し替へなさい。

盲目の兄弟。はい。どうも……

姉妹甲。御用事はございませんか。

盲目の兄弟。はい。(もち〳〵してゐる)

供へた男。何でも頼んだらいゝだらう。

盲目の兄弟。僕は詩がかきたい――代筆してくれませんか。

姉妹甲。よろこんで致しますわ。

盲目の兄弟。暇なとき少しづゝ――一二三行づゝでも(聲が咽喉につまる)いゝえ、今ではないのです。今日は胸がドキ〳〵して……

姉妹甲。(下を向く、涙ぐむ)

供へた男。君今日は久しぶりで外へ出て見たらどうだ。

盲目の兄弟。野へ出て見たい――皆が働いてゐる側へ行つて見たい。せめて賑かな勇しい掛聲を聞いたらどんなに引き立つだらう。

姉妹甲。いらつしやい。それから河の方へ廻つて御覧になるといゝ。

供へた男。いゝな。僕は河岸に座つてあの瀬の音に凝ツと耳を傾けるのが一等好きなんだ。それに僕は川の中へ手を突つ込んで冷たい水流を感ずることもできる――

供へた男。行つて來給へ。(姉妹甲に)連れて行つてやつて下さい。

姉妹甲。さあ。參りませう。

盲目の兄弟。(立ちあがる)行つて來よう。でもすみませんな。

姉妹甲。何ですか。そんなこと……わたしいつだつて――さあ杖です。

盲目の兄弟。（杖をとつて土間に立つ）

供へた男。（門口まで送つて行く）日はまだ高い。ゆつくり遊んで來給へ。

姉妹甲。では行つて歸ります。

（姉妹甲盲目の兄弟の手を引いて出て行く）

供へた男。（見送つて立つ。沈默。深い悲しみの表情が浮かぶ。やがてそれを抑へる）滑らかな幸福だつたと思へ。（沈默）時を待たう。それを招き寄せやう。先づ神の心を得よ。そしたら彼の女のたましひを呼び戻すことが出來るだらう。（元のところに歸り再び仕事をつゞける）

（間。一人の職人風の四十歳位の男が考へながら入つて來る）

男。私は聞きたいことがあつて參りました。——隣り村の大工です。

供へた男。何ですか。

男。一番善いものが一番幸福でなければならぬ——私は子供が拾つて讀んでる刷物を路でよみました。私は急にあなたに聞いて見やうと思ひました。何故だか知れません

供へた男。何でも——役には立ちますまいが。

男。私は誤解されて苦しんでゐます。私は正直に暮らして來たつもりです。變なやうですが、人の見ない處で働いて來ました。私が子供の時から同じ棟梁の處に弟子入りをして習つた朋輩の大工がゐまして、それが腕はあるのに惜しい事に酒癖が惡くてよく借金をするので、私は色々諫めた力によつて

ものなので、子供を二人連れて寄依してゐるので私が引き受けて世話をしてやりました。恰度五年許りたつて男が歸つて來ました。何でもある炭礦で働いてゐたといつて小金をためて。で私は大變よろこびました。ところがこの男が留守中私と家内との間が怪しいと言つて疑ふのです。はたで焚きつけるものがゐると見へて、いくら辯解しても得心しないのです。家内をせびるので家内が度々私のところへ訴へて來ました。しかし私は家内をかばうやうにとられるのであまりなぐさめてやる事もできないのでした。その男は私に向けては何も言はないのです。そしてだん／＼私から離れて行くのです。それが私は一等辛いのです。ところが惡いことに今度その家内が亡くなつたのです。――これでもう私の誤解の晴れることは一生ありますまい。私は考へて見ます。私がその男のために親切にしてやつたことはかういふ結果になつて私にかへつて來た――色々借金を融通してやつたこと――酒の上の不しだらの後始末をしてやつたこと、留守中の妻子の世話――その男の知らないことで私が自腹を切つてつくしてゐる事は少くないのです。――どうもわかりません。それに人の話しではその男はあの持ち逃げをした受負ひの金は私が貸つたやうに言つてるさうです。勿論その金は二人の名前だつたので私が皆引き受けて辨償したのです。あの男がそんな讒言をするところを見れば、よ程私を惡く思つてるものと見える――どういふものでせう。一體私はそんな目に遇ふわけがあるでせうか。何もかも申しますが、私は若い時から村の橋など毀れてゐるのを見るとそつと材木や古釘を集めて置いて、默つてなほして置いたものです。そんなことを色々考へて見ます。どうも私は此の世の中がまつすぐに出來てるものか、どうかわからなくなります。果して一番善いものが一番幸福でせうか。

供へた男。私はそれを信じます。

男。私の場合ではどうでせうか。

供へた男。あなたの場合でもさう信じます。

男。さう致しますと——

供へた男。私たちにはわかりません。どうしてそれがさうなつてゐるかと言ふことは。併しそれがさうなつてゐることは確かなのです。

男。どうしてそれが解るのでせう。

供へた男。それは解りません。たゞ信じ得る事です。私はそれを理解することが不可能なことを知りました。元私は學問を志したのです。學問と言ふものは私たちの理性ですべてのことを解からうとし、解けると決めてかゝるのです。ですが私は理性が解けない眞理があることを感じるやうになりました。又一體解かるといふことがどうして眞理の唯一の根據になるのでせう。頭では解らないが、心で信じ得ることが何故同じ根據にならないのでせう。理性は私たちの生命の働らきの一部分に過ぎません。それがどうしていのちの眞理そのものを知ることができるのでせう。いゝえ、知ると云ふことそのものがもう心の働きの一部分にすぎません。私たちは何故すべてを知らねばならないのでせう。知らずに信じてはならないのでせう。行つてはならないのでせう。事實私たちはさうしてゐるのです。他人に心があることを私たちは信じます。しかし知ることはできない。あなたはお母さんの乳を知らずに吸ひました。——私はいのちの眞理は頭でわからないもので、生命全部で掴み、たましひで確信すべきものと思ふのです。——わからないと言ふことは眞理でないといふことではありません。さうです。私は善いものが必ず幸ひであることを信じる。しかしどうしてさうなつてゐるかはわからないのです。

男。（默つて凝つと考へてゐる）

供へた男。私は私が一番大事だと思ふものを掴むために理窟を捨てゝ此の道に就いたのです。……私は[illegible]を信じる。あなたが善いだけあなたは幸福です。あなたは默つて毀はれた橋をなほしました。あなたはただちに親切をつくして誤解されました。しかしそれでもあなたはそれだけ幸福なのです。あなたがわからないだけで實際は幸福なのです。

男。（涙ぐむ）私は幸福にならうと思つてさうしたのではありません。でも此の世界がまつすぐでないといふことは――天道樣がないといふことは――私はどうしてもわかりません。

供へた男。さうでせう。天道樣が無いといふことはわからない――何故あなたはわからないと言ふか。天道樣が必ず在るといふ理窟がありでもするかのやうに！　單にないと言ふことが何故わからないことゝ感じられるのでせう。それは實に理窟以上の根據です。なくてはならないのです。わかつても、わからなくても。あなたにとつてなくてはならないといふ要求なのです。

男。（考へ乍ら）あると言はれても。ないと言はれてもわしにはわからないのだ。だがちがふやうだ。あるといふことは頭にわからないのだ。ないと言ふことは腑に落ちないのだ。

供へた男。さうです！　あなたの靈魂が得心しないのだ。あなたの心がわたしには解る。あなたのやうな人間はそれが在ることを信じずにはおさまりはしない。私は言つてもいゝと思ふ。それを信じなさい。その他に道はありません。あなたは色々廻はり道をしても結局それを信じるよりないのだ。わたしにはそれがわかる。あなたはきつと正直な善人だ。得はしない人間だ。誤解されながら犧牲になる人間だ。――そういふ人のたましひの落ちつき處は――もう迷ひなさるな。たゞ信じなさい。

男。（涙が落ちる）ありがたう。――わかつて貰つたやうな氣がします。――それが何より嬉しう厶います。

供へた男。きつと知つてる者があるのです。

男。（沈默。凝つと考へてゐる）

供へた男。あなたは……奥さんや小供さんは？

男。わたしは獨り者です。

供へた男。（男の顔を見る）

男。何時の間にかさうなつて了ひました――わたしは兩親に早く別れまして、小さい弟妹が多いのを親代りに見てやらなければならなかつたので、自分の事を考へてゐる暇がありませんでした。お陰で皆どうにかかた付きました……がわたしは時が過ぎて了つたのです。

供へた男。ふん。（間）自分を供へる事は辛い――あなたの朋輩も許してやりなさい。

男。さうしませう。得意先へ行つてわたしの惡口を言ふので都合の惡い事が出來ますが。わたしが惡い者になつてゐる方が氣がらくです。あの男と喧嘩した事は未だないのですから。

供へた男。あなたが勝つてゐるのです。

男。（沈默）今日はもういゝ。これでわたしは歸ります。

供へた男。さうですか。

男。又是非來ます。來させて下さい。

供へた男。えゝ。どうか。

男。（退場）

供へた男。（暫らく淡々と考へる。軈て再び仕事をつゞける）

（間）

（N子の弟二人の學生らしい青年を連れて登場）

弟。歸りました。F市の大學に行つてゐる友達です。あなたに會ひたいと言ふので一緒に連れて來ました。

供へた男。さうですか。

（二人の青年お辭儀をする）

供へた男。よく來ました。（弟に）どうでした。

弟。姉さんに會つて來ました。姉さんは頑として動きません。母とも會ひました。姉さんは母の申出を拒みました。然し母には愛を感じたらしく、心が動いたやうに見えました。所がどう言ふものか、二、三日の中にすつかり心を閉じてしまつて、いやにかたくなにわたしたちを離れて了はうとしだしました。僕たちは失望して歸りました。なぜ姉さんの態度が急に變つたか。屹度あの男がさうさしたのです。僕たちを階級の敵として取扱ふやうに……

供へた男。ふむ。（間）あの人達には人間よりも階級が先きなのだ。傷ましい事だ。

青年甲。實は僕たちもそれで苦しんでゐるのです。その問題を離れて僕たちは生きて行く事が出來ません。我々はどういふ態度を取るべきでせう。

供へた男。君達はどう思ふのです。

青年乙。解りません。然しブルジョアは惡い。プロレタリアの憎みは當然です。問題は暴力を以つてプロレ

擁すべきか否かにあります。

供へた男。それで。

青年甲。僕は××を認める事が止むを得ないと思ふのです。だつてさうしなければ日々澤山なプロレタリアが餓死したり穢がされたりします。そして勿論それは事實上暴力によつて强制されてゐるのです。どちらにしても暴力は避けられないとすれば少數の、且つ不正なものゝ側の犧牲を選ぶの他に道はありません。

青年乙。そればかりではありません。プロレタリアの立場は正當防衛の立場です。×××以て抵抗しなければ事實上自分の生命が危險なのです。病人が勞働しなければならない爲に死を早めるものがどんなに多いでせう。人間は生きなければならない。それならば××抵抗する事はプロレタリアにとつて必然ではないでせうか。

供へた男。（沈默）

青年甲。あなたはどうお考へなのです。

供へた男。あなた方はぎりぎりの所迄考へてゐられるやうに見える。だが果してさうだらうか。わたしはあなた方と違つた世界に生きてゐる。先づわたしはブルジョアではない。わたしは勞働してパンを得てゐる。だがわたしは正しくはない。わしは思ふ。すべて他の生命を虐げたものは、同じ虐げを受けても不服をいふことはできぬ——君たちはそれを認めますか。

青年乙。認めないわけに行きません。それが正義の報償です。

供へた男。ブルジョアはプロレタリアを搾取してゐる。だがプロレタリヤは馬や、牛や——數知れぬ動物を搾取してはゐないか。何億と言ふ魚を食ひ、獸の皮を剝ぎ、乳を搾り、卵を殺してはゐないか。自分の體が切られる時肉體的

苦痛を感じない人間にゐない。その同じ苦痛を我々は牛や豚に負はしたと言ふ事を忘れてはならな[illegible]
と同じ苦痛を受けても我々は不服を言ふ權利はない。これは我々に與へられても我々が忍受するのが當然だ。それ
ばかりではない。我々は他の人間を傷けてゐる。憎み、呪ひ、汚してゐる。しかも自分は傷けられ、憎まれ、呪は
れるのが不服だといふのか。わたしはどんな苦痛を受けても不服を言ふ資格があるとはどうしても思へない。勿論
わたしは痛い。悲しい。然し不服は言へない。それなら何故同じ苦痛を他の者にあたへたのだ。我々はそれが忍べ
ぬと言ふのか。彼等はすでにそれを忍んだのだ！自分を搾取したものが榮えてゐるのを見る時我々は不服でせう。
プロレタリアが正義の名によつて不服を鳴らしてゐる時屠られた動物たちは皮肉に感じるでせう。我々の首の周圍
には彼等の呪ひが十重二十重に卷き付いてゐるのだ。わたしは今肉を食つてはゐない。然しわたしがこれ迄殺した
動物の告訴はどうするのです。これまで傷け、犯した人間の呪詛はどうするのです。あなた方はあなた方が公平な
裁き手である時プロレタリアの不服を取り上げる事が出來ますか。

青年甲。それはできません。然しそれならばブルジョアの罪惡は益々許すべからざるものになるではありませんか。

供へた男。さうです。あるものゝなか最も傲慢な、最も無智な、しかも身の程知らずです。

青年甲。僕は人類の事は人類の範圍に限りたい。

供へた男。どこからその權利を得たのですか。

青年甲。……

青年乙。然しさう言へば生物全體が共食ひではありませんか。違つた類の間では生存競爭、同じ類の間では相互扶助……

弟。同じ階級の間では相互扶助、違つた階級の間では生存競爭……それぢや同じぢやないか。どうしてそれ
非難する？

青年乙。實は僕もそれが解らないのです。今日でも現に徹底した階級鬪爭家は正義の名に據らないのです。唯階級間の
戰ひ――どちらが強いかと言ふだけの問題です。

供へた男。それが當然です。階級鬪爭の道德の原理はそこへ來る他はない。」

青年乙。……

供へた男。あなた方が本當に正義を求めるのならそこに止つてはゐられない筈だ。先づ懺悔から始めねばならぬ。先づ動物にお詫びせねばならぬ。我々が傷けた他の人間にお詫びせねばならぬ。そして少くとも我々が動物や他の人間の被害者に與へただけの苦痛が自分に與へられる事は忍受しなければならぬ。

青年甲。……

供へた男。正義とは少くとも公平な報償です。それ以上のもの――赦しと惠みである事は出來ても、それ以下である事は出來ない――それをあなた方は認めますか。

青年甲。認めない譯に行きません。

供へた男。では先づ悔ひ改めと忍受――そこから出發しないものは理性の昏迷者です。

弟。蟲がいゝ――と言ふべきだらう。

青年甲。それでは我々は實に慘めぢやありませんか。

供へた男。さうです。若し赦しと言ふものがないなら。だから我々は正義を要求するよりも赦しを求めたい。我々は唯

願ふ事が出來るだけだ。私たちは罪を赦して貰ひたい。だから我々も他人の罪を赦さねばならない。それを
弟。正義だけではいけないよ。赦しがなくては——僕はもうそれを確信する。我々が正義ばかりを要求し合つた結果がどうなるか。あゝ僕はその缺陷を痛感する。それは決して本當の平和をもたらしはしない。さうだとも——
供へた男。私たちが正義ばかりを要求するのは自分で自分の首を絞るものです。
青年甲。……
（この時四十歳前後の顏色の惡い優しさうな百姓の女が連れの女と這入つて來る）
女。燈を下さいませんか。
供へた男。はい。どれでもよろしいのを。
女。（選ぶ）これを戴きます。おいくら——
供へた男。よろしいですよ。
女。でも……こちらはお安いと言ふので來たのですが……
供へた男。それではいくらでも。
女。（いくらかの銅貨を財布の中から出して蓙の上に置く。凝つと立つて供へた男を見てゐる）あの、あたしは子供をなくしまして。
供へた男。それは……
女。川にはまつて死にまして。
供へた男。あゝあなたですか。子供さんが溺れて死んだのは……
女。はい。（涙ぐむ）どういふものですか。運惡く……わたしが草取りに行つた間に。

弟。惡い渦があるからな。

女。よく勝手を知つてゐたのですのにあの日に限つて――

供へた男。お氣の毒です。

女。わたしは何も手につきません。色々思ひ出して。あの子は何の爲に生れて來たんだらう。

連れの女。およしなさい。他人があなたの子供の事ばかり思つてはゐませんよ。あなたは人を見さへすればその話をするのです。

女。ごめんなさい。でもわたしほかの話はしたくないのですもの。それにわたしなんだか……（涙をふく）

連れの女。歸りませうよ。人樣に笑はれますよ。

（二人の女退場）

（沈默。この時突然門口の櫻の木から、鎌切りと蟬とが一塊りにもつれて土間の上に落ちる。蟬がじじと異樣に鳴く。皆の視線が思はずそれに集る。）

青年甲。いやだな。どうも（側に行つて鎌切りを離さうとする。鎌切りしつこく搦みつく。無理に引き離す）獰猛な奴だ。（蟬を拾ひ上げる。直ぐに振り離す）あゝ。いやだ。胸を半分食はれてゐる。もう駄目だ。

（沈默）

青年乙。生存競爭だな。自然界はみんなかうなんだ。僕は何時でも變な氣になる。

（沈默）

しくなへてゐた事が今なしになつちまふんだ。

供へた男。（沈默）

青年甲。唯強い方が勝つ――唯一の合理的な態度は利己主義ぢやないだらうか。

供へた男。（沈默）

青年乙。ニヒリズムだ――この事實を誰が解釋をつけるんだ。

供へた男。（沈默）

青年乙。蟬を助ければ鎌切りは飢ゑるんだ。一體どうすればいゝんだ。

供へた男。（目を閉ぢる）事實です――唯事實です。

青年甲。その事實をどう說明するんですか。

供へた男。なんとも、かとも說明出來ない事實です。無限に深刻な――唯受け取る他はない……

（沈默）

供へた男。宿命だ。宿命は正義より深い。勞働問題より深刻だ。生きてるものは皆供へ物なんだ。互に犧牲になり合ふのだ。

（沈默）

供へた男。昨日もわしは道を歩いてゐてふと見付けた。道の傍に捨てられた魚の頭を。開いた口、くぼんだ眼。青蠅がぶん／＼たかつてゐた。人間が食ひあきて捨てた骨を蠅がせゝる。わたしは思つた。この魚は何處かの海で生れたんだ。そして自由な青い海を游いでゐたんだ。美しい生々した魚だつたんだ。それが今は道の傍に捨てられて蛆が

たかつてゐる。人間に取られ、その食膳を賑はした魚、母や子供たちがテーブルをかこんで……吸ひものゝ目玉を箸で子供がつゝいたんだ。むくろとなつてからも未だ蠅を養つてゐる――わしは道端に立つて暫らく魚の頭を拜んだ。

（沈默）

供へた男。犧牲は唯この魚だけだらうか――それを考へてくれ給へ。わたしが生きる爲にはどんなに澤山な犧牲が必要なんだらう。わたしも亦自分の身を惜しむべきではない。わしの命も供へ物なんだ。

（沈默）

供へた男。君はニヒリズムだと言つた。さうだニヒリズムか信仰か。わたしたちはこの二つの中から選ばねばならぬ。その他のものはみな行きついてゐない。私はいふ。社會的正義が決して最後ではない。今來たお母さんは子供をなくした。勞働問題などに氣が付く程生長する迄にどんなに澤山な子供が死ぬるか知れない。人間の五分の一は五歳未滿で死ぬのだ。さう言ふものの運命はどうなるんだ。君たちがさうなつたかも知れないんだ。二十迄生きられたものは已でに選ばれたものだ。あの溺死した子供は何の爲に生きたんだ。それともそれは生活ではなかつたとでもいふのか？　その運命はオミツトされていゝのか？　君がその子供だつた時それを承認するか？　その子供の運命を考へずにはゐられない母親だつた時どうするか？　宿命の問題はなによりも深刻だ。嚴然とした事實だ。

（沈默）

供へた男。もつと深く掘れ。もつと深く錨を下ろせ。社會の中での個人の位置はかり考へたのでは問題は解けない。法界に於ける人間の運命を考へろ。人間は死なないとでも言ふのか。社會的不正義の由つて起る源を究めなさい。階

級よりも利己心が先きだ。利己心が階級を造つたのだ。然かもこの利己心が唯一の合理的な立場だと君は言つたではないか。

(沈默)

供へた男。問題はもつと〳〵深い根をはつてゐる。若しニヒリズムに立つのならば社會的不正義は當然な事ではないか。

青年甲。ではあなたはどうしろと言ふのです。

供へた男。瞑目だ。

青年乙。唯見てゐやうと言ふんですか。

供へた男。合掌だ。

青年甲。一指も加へずに――唯仕方のない事實として――

供へた男。先づこの事實を事實として受け取れ――そこから出發せねばならぬ。この事實を抱きしめろ。この事實を禮拜しろ。自己犧牲の目を以て總てを見直せ。自分の命を供へよ。

(沈默)

供へた男。わたしたちが總てを利己心からでなく犧牲の心から見るやうにならない限り、我々の世界の建て直しは絕望と思はねばならぬ。正義では權威がない。一つの惡が犯された時憎みは、裁きはこれを征服する力はない。赦しが、犧牲が唯その力を持つてゐる。自己犧牲は最も強い征服力だ！

青年甲。不正を憎むなと仰しやるのですか。

供へた男。さうです。若し不正を征服しようと思ふのなら。わしは憐みが不正を征服し得ない事を或る事件で
じたのです。正義は言はゞ天秤棒だ。惡は千鈞の重さを以てその一端にぶら下つてゐる巨大な岩だ。片方の端に何を釣り下げて平均を保たうとするのか。それは自己犠牲だ。復讐ではない。惡には強い魅力がある。それは惡魔的な蠱惑だ。合理的な正義はそれに對抗する事は出來ぬ。唯神的なもののみがこれに勝つ事が出來る。神々しいもの、赦しと惠みと犠牲とのみがその力を持つてゐる!

青年乙。惠みとは何ですか。わたしたちがニヒリストにならない事がどうして出來るのですか?

供へた男。ニヒリズムと信仰とは全く同一の事實を唯逆の方向から見るのだ。わたしたちは自己から出發しない。すべてのものを受け身に感ずる。我々の生命は與へられたものだ。我々に生命を與へたもの、其者にわたしたちは歸依する。我々の生命は最初のものではなく、其ものから流れ出たのだ。總て必然なものは其者の意志――わたしたちが唯信順して受け取るよりほかのない事實なんだ。其の者は本來清淨なものであつてわたしたちが批判する事が出來ないものなのだ。わたしたちの善惡の觀念はその源から出て來るもので、我々がその源を裁く事は出來ない。本來與へられたものはいゝものでなければならぬ――これが信仰です。わたしたちは生きてゐる。わたしたちが欲せずしてわたしたちの存在が與へられてゐる。その存在はそれ自身調和したものでなければならぬ――わたしたちはたゞさう信じるのだ。我々の人生を否定する力さへも其者から出て來たのだ。絶對に、無限にわたしたちは信順する。

青年甲。どう

は知つてゐるだらう、エンゲルスは言つた「萬國のプロレタリア聯合して戰へ。我々が失ふものは鐵鎖あるのみ」と。だがわたしたちは何を失ふのだ。その時殘るものは只ニヒリズムのみだ。だがニヒリズムはそれ自身間違つてゐる。何等積極的なものを持たないと言ふ事はその儘で不合理だ。それは間違ひ以上の無價値だ。ゼロだ。

（沈默）

供へた男。わたしは悔いない。わたしはこの信仰を抱きしめる。我々の存在を直ちに價値と結び付ける。事實を受け取る。合掌し、沈默し――禮拜する。

（沈默）

青年甲。では惡と戰つてはならないのですか。惡が荒れ狂ふ儘に放つのですか。

供へた男。否。何處迄も否。わたしたちは戰ふ。最も內面的な高尚な戰ひを！ わたしたちは惡を拒絕する。惡と協同せぬ。若しも惡と協同しなければならないならば我々は餓死する。劍を以て操を賣る事を迫るならば我々は殺ろされる。我々は全力をつくして惡を行ふまいとする。惡人に對してさへも――惡は絕對的の損失だ。

青年乙。それで若し生きて行く事が出來なかつたら――

供へた男。我々は死ぬる。

（沈默）

供へた男。我々は一度全存在を一擲する。絕望する。若しこの道がないならば我々にとつて全存在は呪咀である。我々は呪咀の外失ふべきものをもう持つてゐない！

（沈默）

供へた男。人間は死ぬのだと言ふ事を忘れるな。大地は人間の絕對共同墓地だ。

青年甲。たとひ一年でも、一日でも我々にとつて絕對な生命ではないか。

供へた男。さやう、たとひ如何に短かくても、それが眞理の一片でありさへするならば！だか如何に長くてもそれが無價値であるならば——我々はこの人生を嫌惡して潔よく捨てるだらう。我々は既に其處迄來た。——我々は否定するか。肯定するか。——問題はたゞこれだけだ。我々は肯定する。我々は信仰する。我々が信仰するのは我々がニヒリストである事が出來ないと同じく理論ではない。我々の絕對の要求なのだ。我々の靈魂の本來の性質なのだ。

青年甲。あなたの道が勝つ事が出來るか。——問題は其處に集中します。

供へた男。勝つ事が出來る！

青年乙。どうして、何時勝つ事が出來ますか。

供へた男。內から征服して、內から人類の魂を買つて、人類の歷史の中で——

青年甲。人類の歷史の中で？あの遠い未來を含んだ……

供へた男。遠い未來。然かもそれは人類の所有ではないか。忘れるな。眞理は個人を超える。惡との戰ひが若し個人の幸福の爲であるならば、勞働運動は最も愚かな手段だらう。ギロチンが、牢獄が、追放が個人の幸福をもたらすか。自分が生きてゐる中にその成果を見なくては滿足しないものが事業のために自分を犧牲にする事が出來るか。

青年乙。ではその間に生ずる澤山の犧牲者は？

供へた男。瞑目だ。合掌だ。自分も他人もみんな犧牲者だ。法界に滿ち〳〵てゐる犧牲者の死骸を禮拜しろ。それが人

類の、そして大生命の運行なのだ。

青年乙。世界を造つたものは、生命を與へたものはなぜさう造つたのだ。なぜさう與へたのだ。

供へた男。彼が、絶對者がそれをよしと見たからだ！

（この時急に家の外が騒がしくなり、七、八人の兄弟と數名の山男とが劇しく言ひ爭ひ乍ら、這入つて來る）

男甲。他人の材木を盗んで使つて逆捩を食はせようといふんだな。

兄弟丙。さうではない。我々は盗んだ覺へはないんだ。

男乙。盗んだんぢやない？現に我々の切銘の付いた材木がお前さんたちの小屋の柱や梁木にちやんとなつておさまつてるぢやないか。

兄弟丁。我々は知らなかつたんだ。人を頭から盗人にきめてかゝるのは失敬ぢやないか。

男丙。（かつとなる）盗人たけだけしいとはお前たちのこつた。這ひつくばつてお詫びをするがいゝ。

兄弟丁。默れ。我々は名譽のある人間だぞ。

男乙。名譽のある人間が物を盗むか。俺達は川上の山の奥で材木を伐り出して、それを筏に組んで流したんだ。それをお前たちが盗んで使つたんだ。

兄弟丙。我々は川の岸に漂着して砂まみれになつてゐた木を見付けたんだ。それは洪水の後だつた。誰も取りに來ないので、唯腐らすのはもつたいないから拾つて使かつたんだ。

男甲。なんとでも理窟はつく。お前たちはそ知らぬ顔をしてすまさうと思つてゐやがつたんだ。だがさうは行かない。俺たちの材木を引き渡せ。

兄弟丁。君達の材木なら返へさないとは言はない。だが我々は乾かして山の上迄かついで來て小屋を建てたんだ。木組みから、左官から皆我々がやつて小屋がやつと建てられたんだ。それが無駄になるんだ。

男乙。そりや爲方がないさ。

兄弟丙。我々は人間の勞力を尊敬したいんだ。

男甲。冗談言つちや困る。他人の物を盜んで家を建てゝ勞力も糞もないもんだ。盜人が！

兄弟丙。盜人呼ばはりは不都合だ。

男甲。直ぐに材木を引き渡せ。

兄弟丁。だから我々に賣つてほしいといふんだ。人間の勞働を無駄にしないために。

男甲。いやだ。俺達は賣らない。お前さんうまい事を言ふね。ふん。なんだな。お前たちは初めからかう思つたんだらう。默つて使つてやれ。解らねばそれで得だし、解つた時には買ひ取ればいゝんだと。だがそうは問屋が卸ろさないぜ。

兄弟丁。そりや痛くない腹を探るといふもんだ。

男丙。なんだ。かうなりやもう意地だ。決して賣らないぞ。

他の男たち。さうだ。さうだ。

男甲。それだけぢやない。お前たちのやつた事は横領になるんだ。

兄弟丙。（興奮する）君達は法律の事をいふのだね。

男甲。誰のものでもないつて？　俺は山の持ち主に金を払つて受けてるんだぞ。

兄弟丙。山も木も人類のものなんだ。人類に役立つ仕事に人類が使へばいゝんだ。僕たちはこれを出したんだ。

男甲。きいた風な事を言ふな。一體俺達はお前さん達がこんな處へ這入り込んだから氣に食はないんだ。材木は俺達のものだ。直ぐに引き渡して貰らはう。あんなボロ小屋はぶち毀はして了ふがいゝ。

兄弟丁。（かつとなる）僕達の事業を侮辱するのか。

男甲。（冷笑する）

青年甲。（見兼ねたやうに口を出す）僕は此處の者ぢやない。だが經濟の方から言つてもこの材木は勞力を加へたものゝ所有になるべきもんだ。

男甲。しやら臭い事を言ふな。天然物は誰のものでもない。勞力を加へた時初めて權利を生ずるんだ。

甲丙。俺は役場にゐた事があるんだ。そんな事を言つてお前。これは俺達の出やう一つで臭い飯になる事だぞ。

青年乙。（たまり兼ねたやうに）洪水で流れたこんな材木は遺失物だか遺棄物だか解らんよ。

男甲。すつ込んでゐりやいゝんだ。（青年乙を毆る）青二才が。

青年。（立ち上る）ぶつたな。

男甲。さうよ。出しやばるなといふ事よ。（又打つ）

青年乙。なにツ（摑みかゝらうとする）

供へた男。（割つて入る）君達よし給へ。わしが責任者だ。

男甲。お前が此處の頭か。

供へた男。わたしが預つてゐるのだ。

男甲。どうしてくれるんだ。不都合ぢやないか。

供へた男。殘念な事だ。

男乙。どう仕末をつけるんだ。

供へた男。(沈默)

男乙。小屋をくずせ。材木を引き渡せ。

男丙。出る所へ出やう。

供へた男。(沈默)

男甲。なんだ。啞のやうに押し默つてたんぢや解らないぢやないか。

供へた男。小屋を毀はす事は出來ない。材木を返へす事は出來ない。

男乙。なんだと。(供へた男の胸座(くら)を摑む)も一度言つて見ろ。

供へた男。小屋はもう捧げられた。兄弟達の勞力は供へられた。それはもう我々のものではない。

男乙。馬鹿。(供へた男の面を打つ)

(兄弟たち皆立ち上つて男たちを取り卷く)

供へた男。神のものには手をつけた。我々が、人間が後仕末を附けてやらう。

男乙。この盗人を引きづつて行け。警察へ――

(兄弟達思はず棒や鉄を掴んで打ちかゝらうとする。)

供へた男。(土間を引きづられ乍ら)よし給へ。諸君決して抵抗すな。

兄弟達。あんまりだ。理不盡だ。

供へた男。材木と道とどつちが大事だ?

兄弟達。あまりに亂暴すぎる。此の上の侮辱には耐えられない。――

供へた男。忍べ。忍べ。永い間の忍耐を一朝にして崩すのか。

男甲。牢屋へ行かう。

兄弟達。なにツ……(詰め寄せる。)

供へた男。よし給へ。諸君。わしは牢屋へ行かう。わしが牢屋へ行く事と兄弟達が獣になりさがる事とどちらがいゝんだ!

兄弟達。(沈默)

供へた男。わしを牢屋へ連れて行け。

男甲。(思はず供へた男を離す。)

供へた男。(地べたに手をつく)許して呉れ。わしは神にお詫びする。人間の恥づべき行ひの爲めに!

(沈默)

供へた男。諸君爭ひをやめ給へ。わしはお願ひする。材木は誰に屬すべきものかわしは知らない。だが君達は山の中へ

入り込んで斧を振つて伐り出したんだ。これは君達のもの丶やうだ。兄弟達はこれをかつぎ、手
だ。これは兄弟達のもの丶やうだ。そこには誰も惡い動機を持たなかつた。天然物に人間の勞力が加へられたん
だ。それが惡い目的に費やされたとでも言ふのか。誰かゞそれを私したとでも言ふのか。金持ちが遊び暮らす客間
を造つたとでも言ふのか。否、其處には農具が置かれるのだ。乾草が積まれるのだ。もしくはあはれな仔牛が眠る
のだ。

（沈默）

供へた男。小屋を倒す事はた易い。材木を引き出す事はなんでもない。だが人間の勞力が、汗が浪費される事を考へて吳れ。わたし達は何のために働く？　建設する爲に働く。破壞する爲ではない。人間の汗が造り出したどんな小さなものでも毀す事は冒瀆だ。我々はそんな事はすまい。わたしたちの過ちを許してくれ。この材木は人類の用に供へてくれ。

男甲。俺達の損害はどうしてくれるんだ。

供へた男。わたしたちの作つたものを持つて行つてくれ。わたしたちの拓いた土地から出來た芋を。野菜を。わたしが手技で造つた籠を。桶を！　それを持つて行つて使つてくれ。君達がも少し待つてくれるなら、麥がとれる。それを欲しいだけ持つて行つてくれ。いや君達がそれで未だ足りないなら、我々は君達の山へ行かう。そして君達を手傳つて木を伐り出さう。それを運ばう。わたしたちの勞力を使つてくれ。それで損害を償つてくれ。

（沈默）

供へた男。（地べたに頭を下げる）これで滿足して吳れ。わたしたちのあやまちをゆるしてくれ。

男甲。そう出るなら話は解つてゐる。

供へた男。理解してくれ。我々は他意ある者ではない。いつでも君達と一緒に働きたいと願つてゐるものだ。

男乙。話しさへ解れば別に荒立てる譯もないんだ。

供へた男。喧嘩をしてくれるな。きたない言葉をはき合つてくれるな。斯材は死んだ材木なんだ。生きた人間が材木に支配されては殘念だ。材木は家を建てる爲めにある。人間に役立つ爲にある。我々は材木を支配しやう。君達はそれを役立てる爲に伐り出した。洪水がそれを流してわたし達の所に打ち上げた。でわたし達は拾ろつて使つた。そのすべての自然と人爲との過程を支配しやう。人間の理性で。みなが具合がいゝやうに相談して………

兄弟達。（默念として立つて居る。）

男丙。横領と毆打だ。證人は澤山ゐる。相殺した方がよささうだ。

男甲。（苦々しげに）そんな事どうだつていゝ。材木は俺たちのものだ。君達はそれを認める。君達がさう言ふのなら、俺達も君達が盗んだとは言ふまい。

男乙。俺達は損害をうづめて貰へばいゝ……だが君達は手間をつぶしたんだ。

男甲。ぢや。かうしやう。俺達はこの材木を君達に寄附する。俺達も男だ。あれつぱかしの材木をやかましく言はなくてもいゝ。唯君達が默つて口をぬぐつてゐると思つて癪だつたんだ。

兄弟丙。俺達は盗んだんぢやない。君達はそれを認める。僕達の作つたもので埋めあはせてくれ。

男甲。いや。そんなものはいらないよ。

兄弟丁。それぢや氣の毒だ。何か持つて行つてくれ。

男乙。俺達はこの儘でいゝ。だが君達がそんなに言ふなら、又他の時に時々やつて來て野菜でも貰つて行かう。

兄弟丙。時々やつて來てくれ。そして僕たちの働いてゐる山や畑を見てくれたまへ。山の仕事では君たちに助言しひたいことは少くない。

男甲。君たちは山を拓いてるやうだが、場所によつては殖林した方がいゝかもしれない。

兄弟丁。殖林も大いにやりたいんだ。

（兄弟姉妹たち大勢或は斧を背負ひ或は鍬をかついで歸つて來る。）

男乙。今日はこれでかへらう。

供へた男。いや、あなた方は飯を食つて行つてくれたまへ。もう晩飯だ。

兄弟甲。何も御馳走はないが僕たちのつくつたものを食べてくれたまへ。

兄弟丙。（皆をかへりみて）さあ飯にしやう。

男甲。ぢやあよばれて行かうか。

（兄弟姉妹たち食卓や椅子をならべる。食物がはこばれる。入陽が赤く山からさす。かな／＼が鳴く。一同食卓につく。夕燒けの光をあびて盲目の兄弟の手を曳いた娘の姿がさながら光りのなかから浮かび出たやうにはいつて來る。）

娘。只今かへりました。

供へた男。あゝ。かへりましたか。

盲目の兄弟。（興奮しながら）よかつた。野の空氣の爽やかさ、僕は川瀬の音をきいた。たんぽぽにさはつた。入陽は僕には見えなかつたが、僕の額に熱くあたつた。そして姉妹が僕の一等好きなあの敬虔な「夕燒の中にて」をうたつ

てくれた。

兄弟乙。それはよかつた。――さあ飯だ。

兄弟丙。食卓につき給へ。――今日は珍らしいお客さんだ。村の兄弟たちが六、七人。

盲目の弟。さうか。（食卓につく。）

兄弟丁。僕たちはつまらないことで喧嘩したんだ。だが仲直りして一緒に飯を食はうといふんだ。

男甲。なに、さゝいなこッた。

盲目の兄弟。それはよかつた。（まだ散歩のなごりから脱けないで）御かげだ――僕は皆のめぐみで生かされてゐる。（箸を手探り乍ら）よろしい。僕は僕が儲けたのでない飯を今晩も食べやう。――幕

（未完）



高天ケ原

かつらぎの峰の白雲かをるなり高天の山の花ざかりかも——月清——

宇野浩二

四月の或晩、私は呉服商人の中戸丈助と同伴で、東京驛から出發することになつた。私たちの買つた切符は、さすがの東京驛でも滅多に發行されないものと見えて、活字でなく、ペンの字で「高天ゆき（名古屋廻り）」と認められてあつた。高天といふのは奈良縣にある、或私設鐵道の小驛の名である。私は黒の背廣服に同じ外套、それに同じ色のソフトを被つて、中形のスート・ケースを一つ持ち、丈助は茶縞の結城紬の著物に、出來合らしい綿ラクダのトンビを羽織つて、古風な鳥打を被り、玄信袋を一つ提げて乘り込んだ。私は三十五歳で、丈助は六十八歳であつた。が、帽子をとると、年にも似合はず殆ど茶瓶頭になつてゐる私が、どうかすると四十歳以上に見られる反對に、鬼のやうな剛い毛を角刈にした、五尺七寸餘かの頭丈な體格をした丈助は、五十歳以下にしか見えなかつた。彼が三等でいゝといふのを、私

が無理に二等にすゝめたので、車室に入つて來ると、人々は不釣合に見える同伴の私たちの方を、ぢろ〳〵と不思議な目で迎へた。

もつとも、私たち自身にしても全く不思議な氣がするのであつた。一ヶ月前には夢にも丈助と同伴で旅をするなどといふことを思つたゞらうか。そして、丈助にしても同じ思ひに違ひなかつた。何故といつて、同じ東京の下谷と淺草とに住んでゐながら、近頃私は彼を尋ねたことは殆どなかつたし、彼が私を尋ねて來たことも滅多になかつた。それでゐて、私と彼とは、もつと親しくしてゐる友達同士の間にも容易に見出されないやうな、珍しい因緣に結びつけられてゐるのだつた。といふのは、今日私が小說家として世に立つてゐるといふことが出來るとすれば、それは丈助のお蔭であつたし、丈助が今日數萬の資産を貯へた呉服商人になつた元はといふと、私の力添えの爲めだつたことは、私がいはない迄も、さう丈助が機會ある毎に他人に吹聽し、又彼が直接私にもいつてゐる通りだからである。現に今、彼はその死後の遺言を私に托してゐることでも、彼がどんなに私を信用してゐるかゞ分るだらう。しかし、私たちは親類に當る譯でも、何でもないどころか、先にもいつたやうに、互に職業にしても、身分にしても、餘りかけ離れてゐるので、不斷は殆ど往來しないやうな間柄なのである。

時々——月に一二度、私の母が丈助の家へ出かけて行くことがあつた。それも用事がある譯ではなく、彼の家は淺草にあるので、彼女は月々十八日の觀音樣の命日に、淺草へ行つたついでに彼の家に寄る位のものであつた。資金の[illegible]な商人の家によく見るやうに、とある溝川に沿うた片側町の彼の店は、人目に立たないやうな、三間間口の小さ[illegible]であつたが、間口一ぱいに四枚の硝子戸の嵌まつてゐる店の間には、坐り場所もない程商品の呉服類が積み重ねて、次の間のそれ一つ切りしかない居間兼茶の間の六疊にも、どうしてそこに夜の寢床を敷くのかと思はれる位

が一ぱい充滿してゐた。私の母は彼の家で買ふと、普通に市場で買ふ半分の値よりも安いといふので、中元の進物にする浴衣地などをよく分けてもらつて來た。又、年の割に達者で出好きな彼女は、時々子供のやうに花屋敷へ出かけて行くことがあるので、その歸り途などによく彼の店を尋ねるらしかつた。が、彼の店はいつの時でも商賣の用事の客が來てゐないことはなく、それに先にもいつたやうに家の中が商品のために狹められてゐるので、落着いてゆつくり坐つてゐられないと見えて、彼女はすぐそこ／＼に辭して歸るのが常だつた。

「萬次郎はんにちつと來てもろてんか。萬次郎はんかて、一年に一ぺんや二へん淺草へ來やはることがおまつしやろ。」

丈助は晩酌で眞赤になつてゐる時などに、私の母が顏を出すと、時々かういつて私のことを聞くのであつた。

「あんたの話は始終萬次郎もしてますけど、」と母もつひ國言葉になつて、「しかしお伺ひしても、さてあんたと萬次郎では、片方はお酒が飮めませんし、話が合ひまへんやろ。」

「それもさうやな。アハハハ、」と丈助は極り惡さうに頭を搔いて笑ふのだつた。

早いもので、丈助の後妻がその家に來てから、最早やかれこれ十年近くになるのだつた。ところで、丈助はこの後妻に遠慮してゐることがあつた。それは丈助でない外の人間であつたなら、そんな心配の入らないことであつたかも知れないのだが、彼の性質が許さないのだつた。何故といつて、彼女が丈助の家へ來た頃には、既に彼の家の商賣の地盤は固まつてゐて、一萬圓近くの貯金さへ出來てゐたのである。三十歲を過ぎて後妻に來た女だけに、彼女は中々働き者で、彼女が來てから丈助の店が益々繁昌したことも確だつた。が、それだといつて、彼が彼の近親の者に金をやることを氣兼する必要はないのだが、彼の性質として、彼はそれを後妻に來た彼女に內所でしなければならなかつた。彼がそんなに氣にかけてゐる近親といふのは、京都に嫁づいてゐる娘の雪江と、その雪江が以前に生んだ私生兒の秀夫と、そ

の秀夫を預けてある彼の故郷の高天村にゐる甥の丈太郎とであつた。

「なア、小畑はん、」と彼は彼の妻が傍にゐない時、私の姓を呼びかけて、「わしも中々苦勞が絶えまへんわ。錢なんてない方が氣樂やな。錢が出來ると、方々からあてにしよるさかいな。しかし、あるものを送つたるのはわしはかまへんけど、それがお政に氣兼でな。」

「そんなこと、あんたが儲けて、あんたのお金やおまへんか。遠慮せずにどん／＼送つたげなはつたらえゝやおまへんか。」

「それがなア、」と丈助は嘆息していつた。「あいつはわしとは夫婦でも、外のものとは他人やさかいな。わしの身内に錢や物を送ると、えゝ顔しよれへん。しよがないから、ぼつ／＼隱しといて、内所で送つてやるやうにしてゐるけど、よう袂の中へ入れて見つかつたりナ、額の後に隱しといて見つかつたりナ。そんなことはえゝけど、これでわしが死んだら後が心配や。」

「そんな事、何もあんたが主人なんですから、今のうちにちやんと遺言にして書いときなはつたらえゝやおまへんか。そのための遺言ですもの。」

「それやわしも考へてあるんやがな、それに就いてわしは一ぺんあんたのところの萬次郎はんに會うて頼んでおきたいと思ふね。お政のことも心配やけど、高天の丈太郎のお母んが亦慾張りやさかいな。」これは彼の妹の丈太郎の母といふのが、丈太郎とは名目だけで血のつゞいた親子ではないのをいふのだ。「それに又、丈太郎が身體が弱いと來てゐる。わしは、秀夫はまだあんな子供やさかい、この商賣を丈太郎に讓つてやろと樂みにしてたんやが、丈太郎の身體があれではおかんし、錢なんか何ぼ儲かつてもしよあれへん。食うて食うて食ひ倒したろかと思ふけど、そんなに食へるもんやあれへ

んしな。それに、此頃は酒かて、二本飲んだらこんなに酔うてしまふし……」

後妻のお政はお政で又私の母が、文助の留守の時などに行き合はすと、

「ねえ、小畑の小母さん、」と彼女は文助と違つて、出來るだけ東京の言葉を使つて呟いた。「聞いて下さい、考へて見ると、私のやうなたよりない者はありませんわ。何ぼかうしてせつせと働いても、自分の子といふものがありませんのですしな。うちの人も何ぼ達者やといひましても年には勝てませんからね、いつぽきッと死なれるやら分りませんし、そしたら私があの小さい秀夫さんを見んなりません。まア、お陰でかうして商賣は繁昌して居りますから、少しばかり金は殘りますけど、それが私の金であつて私の金といふ譯には行きませんものね、自由になりませんから何にもなりませんわ。」

「でも、ないのと違つてあるのですから、」と私の母も出來るだけ東京の言葉になつて、「ある手からは洩れるといふ事もありますやおまへんか。それに中戸さんにしても、あんたに一文も殘して行かないでおきなさる筈はありませんし、又、さうしてあんたが會計を預かつてなはるんやから、夫婦の仲ですもの、今のうちにせいぐ\しんがい（私もこの言葉の意味をはつきり知らぬ）しておきなすつてもかまはないぢやありませんか？」

「それや少し位、しんがいはしますけど、私にしても國の方に時々送つてやらなければならん所がありましてな、中々自分の手には殘りませんのですよ。」

が、さういふ話を私はいつも母や妻から間接に聞いてゐるだけで、文助その者には隨分長い間會はなかつた。彼の後妻のお政などとは、數へて見ると二三度會つたことはある筈だが、人の顔を見覺えない私の癖として、中に過ぎる程の記憶しか[illegible]町で行違つても[illegible]

端な氣むづかしやで、私が家にゐると忽ち天氣が變つたやうに家の中が暗くなると家の者から陰口をきかれてゐる位であるから、母にしても妻にしても、私からの外は、不斷用事の外には私に滅多に口をきかないやうにしてゐる位だつたが、この中戸の話だけは例外で、彼のことで何か話の種があると、彼等は好んで私にし向けるのが常だつた。それは彼**の噂は必ず私を上機嫌にしたからである。**

よくやる譬だが、人はこの世の中で接する人々を本に譬へることが出來る。朝から晩まで顏を見てゐる人でも氣に入らない人があるし、ふと顏を合しただけで氣に入る人もあるし　又子供の頃には義務のやうに月に何度か極つて御機嫌を伺はなければならない長者などもある。つまり教科書のやうな人や、冒險談のやうな人や、戀愛小說のやうな人や、いろ〳〵な人がある。中戸丈助は私のそれ等の本箱にしまつてある本や、不斷机の上にひろげてある本やに譬へらるべき人々の中で　不思議な愛讀書の一つだつた。

その本の中にはかういふ一節もある。――

例の關東の大地震のあつた三日目の朝のことだつた。その前の晩には、下谷の私の住居の邊まで火事の及んで來さうな心配があつたので　私は念のために家族と一所に郊外の友人の家に避難して行つたのだつたが、明け方になつて火事が止んだので、私だけ樣子を見がてら自分の家へ歸つて來た。そして表から戸を外して、まだ地震の心配があつたので、後から歸つて來るものゝ用意に、七輪や釜を表に持出して、やつと手に入れた玄米の飯をたいてゐると　そこへひよつこり襯衣と股引の上に、腰に三尺帶をぐる〳〵卷きにした中戸丈助が現はれた。

「やあ!」

「やあ!」

「でも、丸焼では困るでせう！」と私が同情して聞くと、

「いや、今んとこ困りますけど、銀行さへ開いたら、通帳は持つてるさかい、まだ三萬ぐらゐあるね。お政がそれは金を少し持つとをると思ふね。」

この男は、自分の持つてゐる金高を、より多くもなく、より少なくもなく、時候の挨拶と同じやうに平氣でいふことが出來る程、商人には珍しい淡泊なところがあつた。

彼は水を飲むとすぐに立上つて、

「御馳走樣。みなはんに宜しく」といふので、

「どこへ行くんです？」と私が聞くと、

「まア、もう少し探して見ますわ。もし後でこつちへ尋ねて來ましたら、公園の中の美術館の南側のところで待合すやうにいふといとくなはれ。」

「そんなことをしないで、僕の家へ來たらどうなんです？」

「いえ、いえ、」と彼は向う向いてお辭儀しながら歩いて行つた。彼はその前の晩も、前の晩も、すぐ近くの私の家があるのに遠慮して來ないで、公園の美術館の南側で野宿したらしいのである。

その午後、彼の細君と、彼の家の番頭とが私の家へ尋ねて來たので、私はその二人と一所に彼の敎へて行つた公園の美術館の南側といふのへ行つて見た。が、そこに彼の姿は見られなくて、ペンキ塗の美術館の壁一面に、「本所何町何某」「淺草何町何某一家」「淺草何町何々屋」等、等と、我勝にと白墨や墨汁で人の目を引くやうに書かれてある無數の避難者たちの姓名番地の中に、それ等の極く隅の、極く下の方に、人の名前と名前の間に、小さな小さな字で、窮屈さう

に遠慮して「中戸丈助」と名前だけが認められてあるのを見出した。おゝ、かういふ所でまで遠慮してゐる中戸丈助！

――私はこの私の最も愛讀する人物と、この時以來顔を合はさなかつたのだつた。地震の後、一二度彼は私の家の玄關先まで來たことはあつたが、一度は私の留守の時で、一度は私のゐた時だつたが、「まあ、どうぞ、どうぞ一寸でもお上り下さい、」と妻がいつてゐるうちに、二階にゐる私に知らしに來る暇さへ與へないで、いつでも用事だけいふとそこ〳〵に歸つてしまつた。もつとひどいのは、彼の風采が風采なのと、態度が餘り謙遜過ぎるので、玄關に出た新米の女中が、押賣商人か無心者と勘違ひして、留守をつかつたことがあつて、それがずつと後になつてから分つたといふやうな話もあつた。それにしても、彼は地震の後で元の燒跡に家を建て、商賣を始めたといふことも、それが木綿物を主に扱つてゐるので地震前よりも一層繁昌したといふことも、それで之迄は小切ばかり扱つてゐたのを、その頃から呉服太物卸問屋といふ看板になつたといふことも、私は唯噂にだけ聞いてゐたのである。

すると、この三月中旬の或晩のことだつた。私は滅多にあの方面に足を向けたことはないのであるが、一人でふら〳〵と淺草の活動寫眞街へ出かけて、何か新聞の廣告で引き寄せられた活動寫眞を立見で見た後で、電車に乘らうと思つて田原町の方角から雷門の方へ敷石道の上を歩いて行つた。日が暮れて間もなくのことで、私は疲勞の上に大分空腹を感じてゐたのだが、あの邊の賑かなカツフエーへは一人で入る勇氣がなし、といつて、その外のどんな飲食店へも矢張り一人で入るのは氣が引けるので、いつもさういふ場合にするやうに、我慢して家へ歸つて何か食はうと決心した。寧ろさういふ時に、屋臺店のうまい鮨屋でも知つてゐたなら、その方が便利でもあり、氣輕でもあるので、ちよつと暖簾を頭で分けて腹をこしらへたいと思つた。その時、ふと私の目を捕へたのは、とある店の硝子箱の中に見事な大阪鮨が並んでゐるのだつた。東京で大阪鮨を見ることは近頃では珍しいことではないが、長い間彼地で馴染んで來た私の目を引きつけ

る程な出來榮えの大阪鮨といふものは、空腹である時とない時とに拘らず、滅多に見られなかつた。が、その時見たのは、確に餘程大阪的な、大阪鮨になり切つたものなので、私は食ひたいといふ氣持からでなしに思はず足を止めた。ふと懐しくなつたのである。たしか「丸萬」といふ看板が出てゐた。不斷ならとても一人で入れないやうな店だつたが、
「あ、丸萬か」と思つて(「丸萬」は私の名に似てるためではない、私の故郷の名代の店だ、)私はふら〳〵とその店の緩簾をくゞつた。そして二階に上れと下足番がいふのを氣にかけないで、入つたところの土間の腰掛の一つに腰を下ろした。あたりには大勢の人々がそれ〴〵陣取つて飲んだり食つたりしてゐた。そんな時の私の癖で、それ等の人々の顏を一つも見ないようにして、食臺の上に獻立書があつたので、それを目の前にひろげて、少しその中の空氣に馴れる迄、しばらく無意味にその獻立書の表を見つめてゐた。その時、
「小畑はんやないか?」と突然私のすぐ隣の席から聲をかけたものがあつた。
「おゝこれは大變なところで會ひましたな!」と私も思はず聲を上げていつた。
「わしはこゝへ此頃毎晩來るんだすけど、」と中戸丈助は酒飲みの癖で、無意識に私の方に盃をさしさうにして、「あんたは相變らず飲みなはれへんか、」と恐怖さうにその手を引つこめながらいつた。地震のやうな時は別として、酒でも飲んでゐないと、彼はとてもこれだけの口數を私にきくことがないので、私は久しぶりで彼と話が出來る、都合のいゝ所で會つたと心で喜んだ。そこへ印絆纏を着た十四五歳の小僧が注文を聞きに來たので、私は取敢ず鮨一人前と、ふと丈助の前にあるものを見て、私もそれと同じ茶碗蒸を命じた。すると、どういふ譯か、丈助が傍から嬉しさうに、
「あんたも茶碗蒸しが好きだつか?」と聞いた。そして彼はつゞけて、「わしはな、この茶碗蒸

茶碗蒸しを食べたことおますか？」

「いゝえ、初めて。表を通りかゝると、珍しくうまさうな大阪鮨が出てたもんだから、ふら〳〵と何の氣なしに入つて來たんです。もつとも始終食べるには、矢張り東京の鮨の方が飽きませんがな。ところで、本當にしばらくでしたな。母が始終お邪魔に上つてるさうですが……」

「まあ、そんな悶苦しい挨拶は抜きにしまよ、」と丈助はその眞赤になつた四角な瓦のやうな顔を綻しさうに歪めながら、「わし一ぺんあんたに會ひたいと思うてたんや。お母はんにもさう いうて頼んどいたんやが、わしこんな性分やでな、あんたに會ひたうても行くのが大儀でな。行くのはわしのことやから歩いてゞも何でも大儀やないけど、かうして酒を飲んでると別やが、わし口がきけんもんやさかいな。」

「いや、さういはれると、僕の方からも伺はねばならないんですが、御無沙汰してます、」と私がいふと、

「まあ〳〵、そないいふと直き悶苦しなる、」といつて、丈助はその百姓のやうな大きな片手を上げながら、「わし、つひ四五日前に大和から歸つて來ましてん。お母はんもまだ知りはれへんやろ。」

「始終高天の方へいらつしやるらしいですな、」と私は母からよく彼が鄕里の高天へ行くといふ話を聞いてゐるので、さういふと、

「いや、始終でもない、二ケ月に一ぺん位や、」と何故か彼は恥かしさうにいつた。

「丈太郎さんは如何です、此頃しばらく便りがないが、身體の方は？」と私が聞くと、

「まあ、ぶら〳〵しとをる、」と丈助は答へた。丈太郎といふのは先にもいつたやうに、丈助の兄の竹藏の後取り息子の名だつた。が、實は丈助にも竹藏にも丈太郎は甥に當るもので、彼は彼等の死んだ長兄の子だつたのを、竹藏が養子に

買つたものである。その竹藏はつひ二年ばかり前に死んで、三十歳になる丈太郎が今は彼の心配は彼が身體が弱い上に、死んだ竹藏の妻、即ち丈太郎の母になるものが、丈太郎には血のかゝらぬ他人に當ることと、その母親が慾張りで、どうかすると亡夫の僅ばかりの財産を、自分の身内の者に與へたり、彼女自身に着服したりする傾向があることだつた。それに、彼がそんなに屢々故郷の高天に歸るのは、その本家の丈太郎の家に彼の孫に當る秀夫が預けてあることも最も主な原因に違ひなかつた。秀夫は彼の先妻の娘の私生兒であつたから、今の妻の政江とは矢張り肉緣の關係はなかつた譯である。もう一つ、彼の國に歸るのは、大和にひろがつてゐる天理教の信心のためであることを私は今度の旅で知つたのであつた。

「僕もそのうち一度久しぶりで高天へ行つて見たいと思つてるんですが……」と私はいつた。その時丈助の自慢の茶碗蒸が私の前に配達された。

「さうさう、」と丈助は思ひ出したやうに、「あんたの祖母さんのお墓の下台の石がくづれて來て、大分傾いとるさうなが、今のうちなら一寸手を入れたらあのまゝでもようなるが、それとも石をすつかり積み變へなはつたらどうやいうて、此間歸つた時、丈太郎にことづけされたのを忘れてゐた。」

この話に見るやうに、私の母方の祖母の墓が妙な因緣で、大和の高天村にあるのである。といふのは、今から十五六年前、丁度その時この高天村に寄寓してゐた私と母のところへ、大阪から遊び旁々やつて來た私の祖母が、着いてから二日目に墓になつたことがあつた。

私は思はぬところで、思はぬ人の口から、十九歳の時に別れた祖母の墓のことをいはれて、ふとセンチメンタルな氣持になつた。が、

死者の孫である私と、子である伯父とだけでは擔ぎ兼ねたので、私の方の俥を手傳つて擔いでくれたのがこの丈助だつたを思ひ出しのた。葛城下ろしの吹く日で、高天山の麓の墓地に向つて、この丈助と前後になつて棺を入れた輿の先棒を擔いだ時の光景を、私は思ひ出した。

おゝ、高天村よ、汝の自然よ、汝の住民よ！

その時、私は突然かう詩人のやうに叫びたい衝動に驅られた。高天村といふのは、奈良縣葛城郡に屬する村で、先にいつた高天驛から三十町或は五十町ばかり離れたところにある二つの部落から成立つてゐた。二つの部落に分れてゐるのは、まん中に周圍二十町ばかりの高天山といふ丘のやうな山があつて、その南側と北側とに分れて存在してゐるのである。北側のを上高天、南側のを下高天と呼ばれてゐた。丁度葛城山の東の麓に當つてゐた。兩方とも役場や郵便局の呼び方では村になつてゐるが、その邊の人たちは上高天の方は町と呼び馴らしてゐた。又、戸數からいつても、上高天はいつでも町制のしけるだけの資格があつたのだ。停車場からも上高天の方が近く、下高天へはその倍ほど行かねばならなかつた。

私が初めてこの村の名前を知つたのは、私の十歳頃のことだつた。その村に私の母方の遠い親戚があつたのである。それは若し私の母が若く後家になつて、その家に居候するやうなことにならなかつたなら、私なぞは名を聞く位で、一生交際せずに終つたかも知れないと思はれる程の遠い親戚なのだ。母がそこへ行つたのが今いふ私の十歳頃のことで、私が彼女を尋ねてその家へ行つたのはそれから又二三年後のことだつた。それが下高天村だつたのである。もつとも、一度行き始めてからは、毎年夏休毎に出かける習慣になつたのであるが、大阪のやうな都會から行つた少年の目には、たゞの寂しい、不便な田舍の村で、そこに母がゐるとはいふものゝ、周圍が大阪の伯父の家などと違つて馴染のない人

たちばかりだつたので、少年の私はいつも豫定の日數より少なくゐて、切り上げて來るのが常だつた。

ところが、私が二十歳の時だつた。私はもはや中學校を卒業したのだが、前途の方針に迷ふことになつた。といふのは、それ迄世話になつてゐた伯父の家も、伯父に遲く生れた子供たちがそれ〴〵學校に行く頃になつて、彼の經濟として手一ぱいの暮しになつてゐたので、厄介者の私はそれ以上彼の家に居辛くなつてゐた。それまで父方の親類で私の中學時代の授業料とか教科書とか、さういふ食費以外の學資を出してくれてゐたものがあつたが、それが又私の希望する學問が氣に入らないといふやうな關係から、はか〴〵しく相談に乘つてくれなかつたりして、いつの間にか東京の學校の入學期日が過ぎてしまつた。そのうちに私は脚氣を病んだりしたものだから、愈々大阪のやうな不健康地にゐてはよくないといふのと、今いつた伯父の家にいつ迄もだらしなく世話になつてゐることの心苦しさから、その下高天村の母がゐる家へ、病氣の養生を兼ねて行つたのが因緣だつた。

その下高天村の親戚といふのは紺屋を商賣にしてゐる家であつた。母はその家の裏の、六疊一棟の離家に住んでゐたので、私はその離家に彼女と同居することになつた。私が行つたのは秋の初だつたが、中頃には健康をすつかり回復した。それと共に私は青春の惱みに悶え始めた。何故といつて、私はもつと學問をしたいと思ふのだが、その途をふさがれた形になつたからだ。ぐづ〳〵してゐると、退屈だらうから小學校の教員になつたらどうかと勸めるものがあつたり、早く嫁をもらつて母を安心させたらと勸めに來るものがあつたりするのだ。私は脚氣がなほつて、足が達者になると共に、ぢつと落着いてゐられなくなつて、無暗にそこらを歩き廻つた。大和の國の葛城郡は割合に景色のいゝ所だ。郡山や法隆寺の邊のやうな退屈な平野でもなく、又吉野寄りの土地のやうに山中でもなく、丁度その中間に

が鉢山の景色を見るやうに並んでゐる。それが天の香久山だとか、耳成山だとか、畝傍山だとか、高天山だとか、など由緒附きの、大和繪に見るやうな可愛らしい山である。それ等の可愛らしい山を保護するやうに、葛城山とか、金剛山とか、吉野山脈だとか、多武の峯だとか、大きな山が國境を限つて聳えてゐる。それに林が多かつた。林は大方櫟の木だつたから、私が散歩を始めた頃は、見る限りの木は紅葉してゐた。私は私の村から一番近い高天山へ最も多く上つた。高天山の上は外のどの山にも見られない大きな草原の廣場があつて、廣場の中央に池があり、池の周圍には櫻の木が植はつてゐた。櫻の木もみな紅葉してゐた。附近の人々はそこを高天ヶ原と呼んで、それが昔の、あの神々が住んでゐた天高ヶ原だといひ傳へてゐた。

初めのうち私はこの高天ヶ原を愛して、家を出ると竹の杖を振りながら、用ありげにこの山へ上つた。麓から頂の原まで四五町位あつたが、私は息を切らしながら何かなしに急いで上つた。高天ヶ原の上には、時々小學生の一群に會ふ位で、滅多に人がゐなかつたので、私はそこで、誰に遠慮もなしに出鱈目の詩を吟じたり、身體を跳躍さしたりした。それから目の前に聳えてゐる葛城山に向つて大聲で呼びかけたり、遠くの青空の下に横たはつてゐる奈良の山に向つて體操したりした。

が、間もなく私は高天ヶ原の散歩にも飽き、次第に出無精になつて、一日紺屋の離家に引込んでゐるやうなことが多くなつた。その部屋の東向きに一間の窓があつて、窓を開くと大和富士といふ山が眞正面に見えた。大和富士は多武峯につゞいてゐる山で、秀麗な形をしてゐた。が、それも私の神經をいら立たせる種だつた。上り口の縁側は西向になつてゐて、それが中庭に面してゐた。中庭の向ふは隣家の壁と屋根とで區切られてゐて、その上に油團を被せたやうに葛城山が迫つてゐた。庭には方々に紺を染める壺が埋めてあつて　その上に染物の木綿がいつも運動會の旗のやうに張り廻

してあつた。左手には納屋を直した機織小屋があつて、そこからは朝から晩まで筬の音が聞えて來た。その音も何かなしに私の神經をいら立たせる種だつた。終には、私の不機嫌を恐れて、母が始終家を空けるやうになつた。彼女な始終のことで行き場所がなくなつたと見えて、或日私と高天ケ原の上でばつたり出合つて、双方で驚いたことがあつた。私たちは互に心の中で高天ケ原の池を恐れた。そこで、互に機嫌を取り合ひながら、山を下りたことがあつた。

この紺屋の新しい親戚が中戸竹藏の家なのである。私の家の母方と紺屋とが既に先にいつたやうな舊い、薄くなつた親戚であつたから、私の母も亦この村に來る迄は、その紺屋の新しい親戚である中戸竹藏の家の存在は知らなかつた譯だ。この中戸の家は當時は下高天村で唯一の料理屋を商賣にしてゐた。若い頃、その主人の竹藏は放蕩に身を持ちくづして、博奕打の仲間にまで入つてゐたといふことで、弟の丈助と違つて身體の小さいのが特徴だつた。小柄で博奕にかけると鋭い巧さがあつたといふので、「ちんこ竹」といふ綽名があつたさうだ。惡く評判する人の說に依ると、今の料理屋の元もちんこ竹が博奕で儲けた金でこしらへたのだといふことだつた。もつとも、私が初めにこの家と親しくなつたのは、竹藏の一人息子の丈太郎といふのが、私より四五歳年下の少年だつたが、以前中學時分の夏休みに來た頃から、時々附合つてゐたのが始まりだつた。彼は彼の家の商賣の關係から、周圍の者たちが無智なのに愛想を盡かして中學生である私に物珍しさと親しみを感じたのであらう。だから、以前、私がまだ大阪の伯父の家にゐた頃にも、一二度大阪へ出たついでに、彼は尋ねて來たことがある位である。

今度は私が高天村に暫く住むやうになつて、一層丈太郎と親しくなつたのは、先にいつたやうな關係の外に、その一年程前から私の母が彼の家に雇はれてゐる大勢の女中たちに頼まれて、彼女の習ひ覺へた三味線唄を彼女等に教へに行つてゐたといふこともあつた。さういふ田舍の料理屋のことであるから、藝者ともつかず酌婦ともつかない、關西地方

特有の「仲居」と呼ばれる女中たちが、竹藏の家には十人近くゐたやうにおもつた。[illegible]さういふ自分の家の料理屋の空氣を厭がつて、特に私に親しみを感じたのであらう。私の方からいふと、私は又彼と友[illegible]することをだしにして、大勢の若い女たちのゐる彼の家へ出かけて行く機會を得たことを喜んだといへるだらう。「ちんこ竹」の竹藏にして見ると、彼は又彼の見界から、彼の息子が私のやうな友達を持つことを徳とするらしく、私が尋ねて行くと、彼はその昔を思ひ出させる凄味のある目を鬼の愛嬌のやうににこ〳〵させて、私の爲に彼の陣取つてゐる帳場の大きな長火鉢の傍に坐を設けてくれた。彼は又一面は話好きな性質らしく、殊に私のやうな、彼のこれ迄の經歴には見たことのない種類の若者の話を聞くことが好きらしかつた。やつと假名文字が書けるか書けないかの教養しかない男らしかつたが、六十歳近くなつて智識を愛する慾を覺えたといふやうなところがあつた。大きな長火鉢の中の銅壺には、いつもぐら〳〵沸いてゐる湯の中に、燗德利が二本づゝ並んで浸つてゐた。それを奧の座敷の方から、長い廊下を踏んで、受持々々の女中たちが間斷なしに取りに來た。餘り忙しくて、新しく浸けた德利の燗が間に合はないと、

「御免やす。ちよつと當らしくとなはれ。」といつて、髮油の匂をにほはせながら、女中たちは私と丈太郎とが、東京の話や、戰爭の話や、外國の話や、歷史の話などをしてゐる間に割り込んで來て、安物の指輪を光らした、眞赤な太い手を火鉢の火にかざしに來た。彼女等の目には十五歲のぼんちの丈太郎も、二十歲の中學卒業生の私も同じに映つたに違ひない。すると、

「おい〳〵！ お前つちはそつちの火鉢へあたれよ！」と主人の竹藏は、その平べつたい、それでゐて先の方の鋭くとがつた鼻を突き出しながら、何か汚ならしいものが近づいて來たやうに、彼女たちをたしなめた。

「そつちへ行つてえ、邪魔になる！」と少年の丈太郎も同じやうにいつた。

しかし、何といつても、料理屋の帳場部屋のことだつたから、そこへは色んな種類の人々が邪魔に現れた。表から入つて來て、上り框に腰かけたまゝで何か用談をして行くものや、上つて來て、私たちと同じ長火鉢の一方に坐つて、しばらく主人の竹藏と話し込んで行くものや、かと思ふと、奥の間の方からも、時々私の見馴れぬ顏が出て來て、その長火鉢の傍に坐るものなどがあつた。さういふのは、いふ迄もなくその家の身内のものとか、親しい客とか、或は居候とかに違ひなかつた。紺屋の家などから思ふと、餘程人の出入りの激しい家だつた。私はそれ等の奥の間から出て來る人たちの中で、その家とどんな關係の人だか知らないうちに、顏を覺えてしまつたり、一寸した言葉を交したりするやうになつた人が少なくなかつた。その中で覺えてゐる一人は、五十近くに見える、妙に靑ぶくれした顏の、太つた、無恰好な、ひどくむつつりした女だつた。丈太郎は彼女のことを土地の言葉で「をばはん」と呼んでゐた。後で知つたのであるが、これが竹藏の弟の丈助の先妻のお樂といふ人だつた。

この丈太郎の「をばはん」とどこか似た、矢張り色の生白い、むくんだ、生氣のない顏付をした二十歳位の娘がゐた。どことといつて標緻も惡くないのだが、それでゐて娘らしい魅力の少しもない、むつつりした女だつた。どういふ譯か、私はこの娘が例の「をばはん」と母子だといふことにずつと後まで氣がつかなかつた。一つには注意を向けなかつたからでもあるだらう。即ち丈助の娘で、雪江といふ名だつた。

こんな風に擧げてゐると、この長火鉢の前で會つた人たちには限りがないから止めるが、その頃の或晩のことであつた、丁度その時は私の母も來合せてゐて、例の長火鉢を圍んでゐると、一人の見馴れない大きな體格の男が奥の間から出て來て

「や、皆さん今晩は、」とぶきちよな挨拶をしながら、長火鉢の仲間に加はつた。すると、珍らしくその男を傍から母

が私に紹介した。珍らしくといふのは、母に限らず、こんな田舎のことであるから、いつの場合においても、いはゆる大人になつても、改めて紹介されるなどといふことは滅多にないことだつた。

「こゝのをぢさん（竹藏のこと）の弟さんです、」と母は紹介していつた。

「丈助さん。」

これが私と丈助との初對面の場面だつたが、この初對面の印象では、私は忽ち彼を輕蔑してしまつた。といふのは、兄の竹藏も「ちんこ竹」と綽名される位であるから、決して上品な顔立ではなく、といつて料理屋の亭主らしい意氣な風もなく、まるで田舎の百姓親爺のやうな風采だつたが、私は見馴れて居たのと、それでどこか隣のやうな懇緻な感じがあつたので、相當の敬意を拂つてゐたが、丈助の方は、彼と違つて岩のやうな頑丈な大男である切りで、現に居候であるといふ彼の境遇も私に一種の先入感念を持たしたのだらうが、たゞ愚直な、お人好しらしい印象しか與へなかつた。頬骨と顋の骨とが尖つてゐるので、眞四角に見える大きな顔が、笑ふと善良らしい大きな齒の見えるのが唯一の愛嬌だつたが、目といひ、鼻の恰好といひ、口附といひ、どこか阿弗利加邊の土人の風を思はせるものがあつた。それに輕く吃る癖があるためか、無口であつた。

「はア。わしは竹藏の弟だす、どうど宜しう、」と彼はいつてお辭儀をした。さういつた切りで、後は人の話の聞手になつてゐるばかりで、熊のやうな武骨な手を火鉢の一端に遠慮ぶかさうに掛けてゐた。

後で、紺屋の私たちの離家に歸つてから、私は母にその晩初めて見た竹藏の弟の印象を述べると、

「まア田舎の人といふものはな、なり振にかまはないものだからね、」と母は彼のために辯解するやうにいつた。「しかし、人は實にえゝ人やで、まア一寸あんなえゝ人といふのも珍しい、」と賞めてから、彼がこれ迄ずつと朝鮮の方へ行つてたこと、朝鮮では何度も何度も前の金を儲けたことがあつたのだが、餘り人間が正直な爲に儲けた金をその度毎に失

つてしまつて、今ではすつかり失敗して歸つて來たのだといふやうなことを傳へられた。が、それは話だけのことであるから、彼の風采だけを見た私には、とても彼がそんな成功をしたことがある人間とは信じられなかつた。私ばかりでなく、長火鉢に集まつて來る他の人たちも彼を餘り尊敬してゐないらしかつた。が、その時の杉の話に、
「あの人もひよつとしたら東京へ行くといふてはる。」といふのを聞いて、私は彼を急に見直すやうになつた。で、その次、彼に會つた時、
「あなたも東京へお出でになるつもりださうですが、いつ頃……？」と私は丈助に尋ねた。
「うむ。いつ頃ちうても、あてはないんだすがな。」と彼はひどく恐縮したやうな態で、例の輕く吃る癖のある言葉で答へた。
「やつぱり何か商賣で？」と私が聞くと、
「うむ。商賣も商賣やが、元も子もなうしてしまふたさかいに、」と彼は元氣のない調子で、「しかし、わしももう西の方は飽いたから、今度は東へ行きたいと思うてますね。」
「いつ頃行くつもりです？」と私は又同じことを聞いて見た。
「さあ、いつ行けるやら、未だあてがつきまへんね。それにわし見たいにかうする事なす事失敗すると、もう商賣の見當が皆目つかんわ。何ぞえゝ商賣おまへんやろか？」
　私自身先のあてが附かなくて迷つてゐた時なのに、他人の商賣など考へる餘裕はなかつたので、それには答へる術を知らなかつた、それにしても「こゝにも東京に行かうといふ人がある」といふ發見だけで、私は氣をよくした。さうなると、私には年下の丈太郎などより、この丈助の方が頼もしくもあり、味方でもあるやうな氣がした。考へて見ると、

當時彼は既に五十歳を越してゐた筈なのだが、四十歳位にしか見えなかった。或時、例の長火鉢の傍で、丈太郎と彼は

してゐた議論を、私は傍にゐた丈助に向けて、

「ねえ、さうですねえ。」と彼の意見を求め[illegible]「[illegible]正成は金剛山には關係が深いが、その隣の葛城山とは關係

がないことよ。高天ヶ原と葛城を結び[illegible]ゐた高天ヶ原と[illegible]といふ議論だつたと思ふ

[illegible]人たちの議論をにこにこ笑ひながら聞いてゐた丈助は、急に歪んだ當惑したやうな顔になつて、

「[illegible]」とどぎまぎした體で、吃り吃りいつた。その眞に困つたらしい、耻か

[illegible]うつかり[illegible]この人も[illegible]らしいことに氣がついた。氣が

[illegible]それと共に、これは

[illegible]

丈太郎に問かれて、私がそれを說明してゐると、

「そや、そや、」と丈太郎がまだ合點し兼ねてゐるうちに、横合から彼が言葉を挾んで、「ふうむ。つまり何やな、よう考へるとそれもやつぱり國の爲やでな。國の爲なら、ちつと位警察にねらまれてもやり通さうちふんやな。ふうむ、」といふ風なのである。

その年、私はこの高天村で年を越して、數へ年二十歲の春を迎へたのである。私の健康はすつかり回復したが、將來の方針に就いては未だ少しも見當がついてゐなかつた。しかし、私は何よりももう高天村に飽き飽きしてゐたが、私の母はさうでなかつた。彼女は初のうちこそ私と一所にそんな田舍に埋もれることを望んでゐなかつたらしかつたが、その頃には彼女も亦私がそこで小學校の教員にでもなり、彼女は今のまゝに「ちんこ竹」の家の仲居たちに三味線唄を教へる仕事をして行つたなら、親子が人の厄介にならずに細々と暮して行けるだらうと考へたらしかつた。彼女ははつきり口に出して私にさうはいはなかつたが、私は彼女のさういふ氣持を察しると、一層いら〳〵して來た。その時分の或日、大阪の伯父の家にゐる祖母が私たちの高天村へやつて來たいといひ出したのである。それは私が高天村を嫌つて、用事にかこつけては大阪へ行き行きしてゐるうちに、或時私が大阪から高天村へ歸る時に、祖母が連れてほしいといひ出したことから起つたのである。彼女にして見ると、大阪の家は自分の長男の家に外ならなかつたが、よくある姑と嫁の關係で、息子の嫁と一所に暮すよりは、娘と孫と一所に暮したいといふのが望みだつた。殊に彼女の孫である私は、私が生れた時から中學を出る迄、彼女が育てゝ來たものである、つまり早く後家になつた不幸な娘と、早く父を失つた不幸な孫とが、どんな田舍でゞも、どんな細々した烟でも上げることと、そこで彼女が死水をとつて貰ひたいといふことが、七十幾歲になる彼女の最後の希望だつたのだ。それで、私が一月の初に大阪へ出た機會に、彼女は今度私が高天へ

留る時、是非一所に連れて行つてくれといひ出したのだつた。私が不承々々に承諾すると、彼女は喜んで、早速引越しのやうな騒ぎを始めた。私のつもりでは、到底まだ母と二人で高天村に永久の居を定める考へはなかつたのだから、母が遊びに來るにしても、せいぜい一週間か二週間位の豫定であつて欲しかつたのだつた。ところが、彼女が高天行の仕度をしてゐるのを見ると、一箇の柳合李に一ぱいと、一箇の信玄袋に一ぱいと、その中に何を詰め込んだかといふと、冬の着物はいふ迄もなく夏の着物から、茶碗から、その他急須とか、扇子とか、その他彼女自身の愛する持物と、彼女が娘や孫にやりたいと思ふ一切のものを荷造りしたので、私は驚いたといふよりも不機嫌になつてしまつた。

おまけに丁度出發の日の間際になつて、私の中學時代の友人が遊びに來たものだから、豫定の汽車の時間より二時間ばかり遲れてしまつたので、今度は祖母が不機嫌になり、漸く友人が歸つてしまふと、私が不機嫌になり、今日は止めよう。いや、何が何でも出かけようと爭つた末に、私たちはやつと出發することになつた。港町から高天までは汽車の時間が三時間ほどかゝるので、正月の短い日のことだつたから、高天の驛に着いた時はもう日が暮れかゝつてゐた。それが一月二月によくある、意地惡く底冷えのする寒い日で、停車場の出口を一足踏み出すと葛城下ろしの風が粉雪を孕んで、氷のやうな冷たさで吹きつけて來るので、一分間と立つてゐられない有樣だつた。迎へに來てゐた母と、車をやつとのことで三台そろへて、五十町の道を下高天に向つて走るのだが、時々車屋が林の蔭や、軒の下に避難して、少しの風の油斷を見計らつて進む位にしなければならなかつたので、いつもの三倍もの時間がかゝつた。だから、初めに村の入口に近い「ちんこ竹」の家で一服するつもりで、そこで車を下りると、僅かそれから二三町のところだが、私たちの住居である紺屋の家まで行くことが出來なくなつてしまつた。が、深切な竹藏は私たちの到着を歡迎してくれて、元より商賣柄空いてゐる部屋に不自由がなかつたので、早速離れの座敷に案内してくれて、祖母のために置炬燵をし、手

のもの、酒肴を見る見るうちに御馳走してくれた。祖母は昔間孫の私が辛く當つたことも、遠大の旅に惱んだことも忘れて、何よりも日頃憧れてゐた高天村に着いたことを喜んでゐる風で、今更のやうに「ちんこ竹」の家の離れの一と間で、一つの炬燵を圍んでゐる孫の私と娘の母の顔を見廻しながら、彼女のたしなみである晩酌を樂んでゐる風だつた。が、これが私たちの最後の晩餐となつたのだつた。私は後で考へて、その時の祖母の嬉しさうな顔に、どこか不斷の壯健と氣丈さに似ず、底に力のないやうな、影の淋さがあるやうに思つた。だから別れる時、何か氣がゝりなやうな氣がしながら、その晩だけそこに母と祖母とを泊めて貰ふことにして、私だけは紺屋の離家に歸ることにした。母もその意見で、祖母もそれに同意したのだつた。ところが、愈々私が一人歸るとなると、祖母は急に盃を置いて、「私も一所に行きたい」といひ出した。が、夜も更けてゐたし、雪も風も少しも衰へてゐなかつたので、しかし明日はこの分なら乾度天氣になるだらうから、改めて迎へに來ようと約束して私たちは別れた。それでも祖母は一二度言葉を返すので、私は彼女の聞き分けのないことをたしなめて、後を母に任して獨り紺屋の離れに歸つたのである。子供のやうになつた祖母の心持では、一刻も早く私と母の住んでゐる部屋を見たいと思つたのだらう。それとも今夜見ておかなければ、永久に……と彼女の靈感が感じたのだらうか？ そして、彼女は到頭その思ひを遂げなかつたのだつた。その晩――といふよりは、翌朝の二時頃急に身體が惡くなつて、それから二日目の明け方、假りの宿であつたその「ちんこ竹」の家の離家から墓へ行くことになつたのである。七十七歳だつた。「ちんこ竹」の家は先にいつたやうに料理屋だつたから、そこの離れた座敷であるとはいふものゝ、始終三味線や唄の聲が祖母の病床に聞えて來た。それは大方私の母が數へた程に違ひなかつた。佛になつた祖母の枕元では、佛とは全く他人である竹藏や、丈助や、丈太郎や、竹藏の妻や、丈助の妻などがお通夜をしてくれた。そして、翌々日、大阪から伯父の來るのを待つて、私と伯父と、手傳ひに丈助と車屋の爺

之丞（車屋ではあるが、士族だといふので、立派な八字髭を生やしてゐるのだつた）と二人で、高天山の麓の端にある村の墓地へと祖母の柩を運んで行つた。

墓地は街道から一町ばかり引込んだところにあるのだが　最早や高天山の一部に屬してゐるので、少し高みになつてゐた。無論、こゝは代々の高天村の人々たちの墓地であるから、他國者である祖母の墓には連がなかつた、墓地の一番東の隅に僅かの土地を得て　彼女は燒かずに埋められた。墓石は伯父が後で、すぐに村の石屋に頼んで、半月程後に建てられた。それは儉約家の彼の工夫で　台石に大きな石を使ふ代りに、小石をセメントで石垣の山を造つて、その上に石の墓標を立てたものだつた。だから、金のかゝつてゐない割合に風變りで、背が高く、而も墓地の一番はづれにあつたので、街道を通りながらもすぐに目に立つた。街道から見ると、祖母の墓は背に高天山を背負ひ　その上に葛城山を背負つて見えた。

だが、青春の希望の前にはどんな悲みも力も失ふもので、祖母が死んでから一月程後、例の中學時代の學資を出してくれてゐた父方の親類との相談が、ちよつとしたことからばたばたと纏つたものだから、私はいよいよ四月「希望の綠の衣服を飾つて」東京に遊學することに定まつたのである。さうすると、高天村は又私に愉快な景色を展開した。木々は去年の紅葉の代りに　綠の新芽で裝はれ出した。山の頂の高天ヶ原の池の水も陽氣に緩んで、ぷん／＼と泡立ち始め池のまはりの櫻の木が紅い芽を含み出した。奈良の山が紫色に霞んで見える日があつた。紺屋の匂も筏の音も悉く私の胸に希望をそゝつた。

或晩、私が近頃俄に上機嫌になつた氣で、竹藪の長火鉢の傍に、誰も傍にゐなくても、獨りで火箸で拍子をとるやうな氣持で、頭をうつとりとさせて坐つてゐると、

はふと高天村へ行つて見たくなつたので、

「中戸さん、あなたが來月あちらへお出でになる時、私もお供したいと思ひます、」といふと、

「あんた、一所に行つてくれなはるか?」と文助は文助で、感激した調子で叫んだ。「ほんまか、ほんまにあんたも行きなはるか?」

「えゝ、行きます、何とか都合して行きます、」と私は答へたのだつた。

文助が高天村から出て來たのは、遲れ遲れて、私が東京に來てから三年程後のことだつた。母から手紙が來て、「文助さんがそちらに行かれたから、お前の下宿に尋ねて行かれるだらう、文助さんにお前のところへ届けるものを、お賴みしておいた、文助さんのそちらの所はまだ定らないやうだが、定つたらお前の方からも尋ねてお上げ。あの人はいゝ人だから、」といふ手紙を私が讀んでゐる時に、階下から小僧が上つて來て、

「中戸さんといふ方がお見えになつてます、」と知らして來たのである。

小僧といふのは私が當時間借りしてゐた子供靴屋の小僧で、私はそこの二階を借りて、自炊して暮してゐたのだつた。當時私の生活は多くの初年期を通過した文科の學生がさうであるやうに、大分亂れてぐらついてゐた。その證據に、私の學校は牛込にあつたのに、その間借りしてゐる家は淺草にあつた。淺草であらうが、深川であらうが、春秋の試驗さへ受けて通ればいゝといふ考へで、私は毎日學校の門に背中を向けて、戀と文學に思ひを凝らしてゐたのだ。そこへ、中戸文助が母からのことづかり物だといふ、羊羹とネルの着物の入つた風呂敷包を持つて尋ねて來たのである。

「到頭來ましたね。で、お一人?　お住居は?」と私はもうすつかり東京に馴れ切つた書生の態度で聞いた。

「いゝや、足手まとひをみんな連れて來ましたわ、」と文助は背の

らない始末で、鼻をくん〳〵鳴らしながら、「何しよ、さういつ迄も兄貴のとこで居候してる譯に行かんさかいな。家内と、娘と、孫と、わしと四人や。今はちよつと知り合ひの家に泊めてもろうてるんやが、わしもあんたみたいなこんな二階でも借りたいな。」

「これで商賣はどういふことを始めるつもりなんです？」と私は生意氣に机に片肘を突きながら訊いて見た。「一體、あなたはこれ迄どういふ商賣の經驗があるんです？」

「さうやな、」中戸は愚鈍らしい顏を傾けて、「商賣といふ商賣は大抵したやうな氣がしますわ。わしは日露戰爭の後を追ひ驅けて朝鮮へ行つたのやさかいな。日本人の入るものなら何でも賣つて見たよ。油でも、米でも、着物の切でも、道具でも、何ちふことはないな。こゝにある、」といつて、私が前の晩に買つて來て食べ殘した甘栗が前に出してあつたのを指さして、「この支那栗もうんと仕入れたことがおますわ。その時は景氣のえゝ時でな、あんまりたんと仕入れたもんやから、入れ場に困つて、軍隊の倉を借りて入れといたところがな、二ケ月ほどして取りに行つたら、袋がそのまゝで、中がみな空つぼの皮だけになつとをるんや。兵隊がみんな食ひよつてん。えらい目に遭うたな、あの時は……」

「それにしても、何か商賣の見當がないんですか？」

「それが皆目ないのんや。東京ちふとこが初めてやからな、見當がつかんのや、」と丈助は困つた顏をして、「わし、今度兄貴から二百五十圓もろて來たんや、今は二百十圓餘りがあるがな、ぐづ〳〵してるとこんな金すぐなうなつてしまひよる。……」先にもいつたやうに、この男は二百五十圓持つてゐる時も、五萬圓持つてゐる時も、平氣でありのまゝにいふ男だつた。その時階下から、がら〳〵いふミシンの音が聞えて來たのを、彼はふと耳を止めて、「こゝの階下の商賣は何してはんね、何商賣だんね」と尋ねた。

「子供靴ですよ。」と私はいつた。心の中で、成る程、かういふ商賣をする者があるのかと、初めて引越して來た時私は妙に考へたことがあつたが、成る程、中戸丈助などが眞似をするこれは商賣に違ひない。これなら二百圓の元でも出來ないことはないだらうと思つたので、「さうだ、かういふ商賣がいゝかも知れませんな。」と卽座にいつて見た。そして、市內の洋服屋から羅紗の裁ち屑の切を買ひ集めて來て、それを子供靴の型に切つて、ミシンでこしらへてゐる階下の商賣を、自分の知つてゐる限りの智識で、出來るだけ易しさうに、そして如何にも儲かりさうに話したところが、それが思ひがけずとん〳〵拍子に進んで、

「いや、それは何でもないんです。現に僕の學校は牛込なんです。ちよつと譯があつて、こんな學校から離れたところに下宿してるんですが、もうぼつ〳〵學校の試驗も始まりますし、それに自炊には懲り懲りしてるんですから。それで近頃は每日近所の飯屋へ飯を食ひに行つてるんですが、それぢや不經濟だから、學校の近くに下宿しようと思つてたところなんです。」と私はその場で頭に浮かぶまゝのことをいつて、彼に自分の現在借りてゐる部屋を譯分らずに提供する氣になつた。

「いや、それでも、それではあんまり氣の毒や、それではわしが濟まん、又あんたのお母はんにも濟まん。」と遠慮家の丈助は殆ど後ずさりせんばかりに辭退するのだつた。彼は本當に後ずさりして、いつの間にか梯子段の下り口の近くまで下つて行つて、逃げて歸りさうになつた。しかし、私は熱心に彼を說いて、それが私自身に何よりも都合がいゝことと、現に牛込にゐる友達からその友達のゐる下宿に適當な間が空いてゐるといふ知らせを今先受取つたばかりだとか、突然こゝを空けると借り手が見つかる迄の間代を拂はねばならぬ約束だとか、口から出任せの嘘と本當をまぜこぜにして、どんな[illegible]

に違ひなかつた。彼は後になつてその時のことを回想して、わしはうれしかつたあの時の恩を忘れへん、と感激的の飾りのない言葉でいつた位である。私は無論深切心もないではなかつたが、半分は気まぐれでしたことを、そんなに正直な氣持で感謝されて恐縮したものだつた。「あんたがあの時勵ましてくれたやうなもんや。」と彼は眞心をこめていふのだつた。

兎に角、そんな風にして私は私の部屋を丈助の一家に讓つて、自分は牛込の友人のゐる下宿に轉したのであるが、無論、それで學校の近くに行つたとは云ふものゝ、學校の門に背を向けてゐたことは、浪人時代と少しも變りはなかつた。私にた。その間に、丈助は一二度私を下宿に尋ねて來てくれたが、私の方からは一度も彼を見舞つたことはなかつた。私にして見ると、彼のやうな風采の男に尋ねて來られることは、友達や下宿の女中の手前迷惑であつたが、都合のいいことには遠慮家の彼は尋ねて來ても、いつでも玄關まで來るだけで、決して部屋まで上らなかつたので、私は友達に尋ねられた時、彼のことを郷里の自分の家の小作人か家來かのやうに吹聽しておいた。彼はいつの時でも、大きな風呂敷包を背負つてゐた。彼の妻と娘が階下の家の子供靴の職人になり、彼はその家の材料の買出し掛りと製品の賣廣め掛りになつてゐるらしかつた。彼は或時娘の手工がこしらへたのだといつて、雜紗の切でこしらへたスリッパを私に持つて來てくれたこともあつた。が、終には彼がいつ來ても、私が留守だつたり、又留守を使つたりしたので、それに彼の仕事の上にもいろいろ忙しいことが起つたりしたので、そのうち私たちは暫く往來が絶えた形になつた。

ところが、その間に又私が高天村と接近するやうな事件が起つたのである。それは例の「ちんこ竹」の家が商賣換へをしたことから始まつたといふことが出來る。元來、竹藏はその平べつたい癖に、尖の方が剃刀のやうにとがつてゐる鼻に特長があるやうに、目先のきく、思ひ切りのいゝ性質と見えて、その證據に私などが未だ知らなかつた頃博奕打と

して可成り活躍してゐたらしい彼が、料理屋になつてからは一切博奕を止めてしまつたのでも察しられるが、料理屋であつた彼が今度は自分の後取の丈太郎に、全く堅氣の商賣をさせたいと決心したのである。で、弟の丈助の一家が東京に行つたのを機會に、彼は料理屋を止めて、金物と瀬戸物を主にした、田舍によくある萬屋に商賣換をしたのであつた。もつとも、そのことが私に直接の關係がある譯ではないのだが、その「ちんこ竹」の家が商賣換をして半年程後に、私の母が高天から上高天へ引越した事が私に一つの事件を持つて來たのである。それは「ちんこ竹」の商賣換と共に、そこにゐた仲居の大半が上高天の或料理屋に住みかへたので、彼等はこれ迄習つてゐた三味唄のつゞきを習ふために、一週間に一二度私の母を車で上高天へ迎へに寄造してゐたところが、そこで三味線唄の弟子が次第に增えたものだから、それ等の弟子たちが勸めるまゝに、元々呑氣な氣性の私の母は、どちらで住むのも同じ、東京の大學へ行つてゐる私の卒業も最早や一年餘り先に見えてゐることだから、それ迄退屈しのぎに上高天で住んで見るのもよからうと考へて、住み馴れた下高天の紺屋の離家から越して行つたのである。

上高天は下高天の五倍もある大きな村、といふよりは不思議な繁華な町で、高天驛から廣い道に依つて通じてゐた。私たちが下高天へ行くには、この道を通つて、上高天の北と東の端を通り抜けると、その町外れから五六町行つた所で、急にやつと車が通れる程の細い道に曲つて、その細い道が高天山の麓に沿うたり、又麓から離れたりして、三十町ばかり行つたところで、漸く下高天村の入口に着くのである。そこからは最早や振り返つても、高天山に遮られて、上高天の町は見えない。だから、私はそんなにしばしば下高天には行つたが、上高天は停車場からの途で、それも大抵車の上から、その町の、西洋流にいふと、いはゞ城壁の近くをいつでも素通りしただけだつた。先にもいつたやうに、上高天は表向きは

或日私は牛込の下宿屋で、母からこの上高天に引越したといふ知らせの手紙を讀んだ。母も私に似て筆不精なのに長文で、その手紙の樣子に依ると、既に二三ヶ月前に越してゐたらしいのだ。そして手紙の中に、突然、今ゐる家にきさ子さんといふ娘さんがゐて、その人が大變自分に親みを持ち、且つ深切にしてくれる、その人がお前の話を聞いて大變お前に會ひたがつてゐる、そして又その人は小説が好きだから、若しそちらに入らない小説の本があつたら送つて上げてほしい。――かういふ文句があつたのだ。といふよりは、それが母の手紙の殆ど全部といつていゝ程で、引越しのことはその次手に知らして來たやうなものだつた。だから、母がそのきさ子とそんなに親しくなる迄の月日を勘定して見て、手紙の文句を讀み返して見ると、彼女はそれより二三ヶ月前に上高天に行つたらしいと私に判斷された譯である。

　それは私が二十三歳の年だつた。私は若かつたが、母のこの手紙には妙に動かされなかつた。といふのは私はそんな正體の知れた高天村の娘よりも、正體の知れない都會と都會の女を憧憬してゐた。現に高天村の娘といへば、下高天の紺屋の家にも一人の娘があつた、そしてその娘の多くの友達の娘たちをも私は見た。彼女等は私のゐた離家の前の庭を隔てた機織小屋で朝から晩まで機を織つてゐたが、晝飯の休とか、夜業の前の休には、その紺壺を所々に埋めた庭を飛び飛びに廻つて私の縁側へ遊びに來たり、又私が縁側に蹲んで葛城山と睥めつこをしてゐると、たまに着物を着更へた祭の日など、如何にも見てくれがしに庭の紺壺と紺壺の間で鬼ごつこなどして見せてくれたものである。私は頭からきさ子もさういふ娘の一人に違ひないと思つた。だから、私は母の手紙には返事さへ出すのを忘れてしまつたのである。それが多分十一月時分だつた。間もなく學校の冬休が來るので、母から又手紙が來て、この休がお前の學生の最後の休であるから、――と彼女がそんなことをいつて來たのは始めてだつた、無頓着な人で、これ迄なら休になつても別に來いとも來るなともいつて來たことがないのに、その時に限つてそんな手紙をよこしたのは、後で考へて見るときさ子の

とこちらの家の主人たちに挨拶しておくれ、」といひながら、彼女は又表に出て、先の路地を出たところ
ふ家へ私を案内して行つた。私は彼女の後について行つて、玄關先で一寸挨拶位すればいゝのだらうと思つてゐると、
彼女は「こつちへ、お上り」といつて、玄關の次の茶の間らしい所へ入つた。それは丁度「ちんと竹」の家の帳場の間
に當るやうなところらしかつた。矢張り大きな銅壺の埋まつてゐる長火鉢があつて、その傍に竹藪のやうな男の代り
に、三十歳と二十歳位の、美しい女が二人坐つてゐたので、私は忽ち氣後れを感じた。すると、向うから

「まア、ようお出でやした。なる程えゝ息子はんやな、」と年上の、丸髷に結つた女が私を迎へていつた。

「こちらの御主人、」と母はその女を私に紹介してから、もう一人の女をさして、「こちらがきさ子はん。」

その言葉の終らないうちに、

「あら、あて極りが惡いわ、」といふなり、きさ子は大仰な身振りで袂を上げて顏を隱した。隱す前にちらとその顏を見た印象に依ると、私はきさ子が思ひがけなかつた美人で、而もたゞの田舍娘でもなく、といつて料理屋女中のやうな種類の女でもなく、私の出現と共にびつくりして袂で顏を隱した様子など、偽りなく内氣な、おぼこ娘らしいのを知ると、その時間、私はてれながらも急に彼女に興味を感じ出した。髮の毛の濃くてたつぷりした質らしく、それを盤のやうにきちんとした、一本の後れ毛もないやうな形に結つてゐるのは、阪神や東京あたりでは好まれない形だつたが、これも私には、彼女の端然として人形めいた容貌に適はしく思はれた。顏立は、後になつて考へると、大和の國の典型的な形の一つで、どちらかといふと稍々角張つてゐたが、兎に角南天あたりの田舍では珍しい美人に違ひなかつた。

その時私がどぎまぎした氣持を辛じて抑へながら挨拶をすると、

「まア、か

へ逃げて行つてしまつた。

「まあ、をかしい子やな、」と丸髷の女が取りなすやうに、しかしよくあることらしく、別に驚いた調子でなくいつた。

この髷の女がこの家の主人で、おつるといつて、きさ子の長姉に當るものだといふことを後で知つた。顔立はきさ子と違つて形はくづれてゐるが、意氣なところのある、氣性も傳法肌であるらしい女と見えた。頸の美しい割にしやがれた、鴨鳥のやうな聲が癖だつた。私はその翌日、矢張り隣の路次の一軒に住んでゐるといふ、きさ子の中の姉に當る姉妹にも母から紹介された。この中の姉がもしかすると、姉妹中で最も缺點のない美人だといへたかも知れない。彼女は受負師の妻とかで、私が初めて會つた時三歳ばかりの子を抱いてゐた。兎に角、この家の三姉妹は恐らく高天で評判の美人たちに違ひなかつた。

私は間もなく母と一人の女中の案内で、その家の二階の一番奥の間らしい、床の間も何もない、がらんとした八疊の部屋に通された。

「この部屋をお前に借りておいたの。あんまり奇麗やないけど、こんな家だから、こゝが一番靜かでえゝと思つて……」

と母がいつた。

「あなたの借りて居る部屋は？」と私は不思議でもあるし、いくら靜かでもそんな料理屋の一間などに居るよりは、彼女の借りてゐる部屋に居たいと思つたので、かう聞くと、

「あそこでもえゝのやけど、二階へ出入りする人が通るし、來る時間がまち〳〵やさかい、三味線の稽古で始終喧ましいし、それに食べ物を運ぶのにもこゝの方が都合がえゝと思つたものだから、」と彼女は辯解するやうにいつた。「もつとも、こゝもね、」と彼女は前の障子を開けて見せて、「この前の物干から隣へ行け行けにはなつてるの。つまりこの隣がき

さ子はんの家で、その階下が私の借りてゐるところや。」

さういはれても、何か、しかし、私には强ひて問ひたゞさうとは思はなかつたが、何か解し難いやうなものが感じられて、その當てがはれた部屋が不滿だつたが、長く居るつもりはなかつたので、だまつてゐた。私は母がこの家の女中たちに三味線を教へる位のことはいゝが、それ以上餘りこんな家に接近してくれない方がいゝといふ氣がしたのだ。それにしても、きさ子！　きさ子のことを考へると、母の心配など私の念頭からなくなつてしまふのであつた。

その晩、きさ子は私の母の袖を引張りながら、それで私の部屋に入ると母の蔭に隠れるやうに坐つて、私のところへ遊びに來た。彼女は少しづゝ馴れて來ると、ぽつり〳〵と國言葉で、自分はかういふ商賣が嫌ひなので、かういふ商賣のものに見られるのを好かないとか、だからあなたのお母さんのやうな品のいゝ方にお友達になつてもらつて嬉しいとか、大阪とか京都とかへ遊びに行く時はいつもお母さんに一所に行つてもらつてゐるとか、今度はお母さんとあなたと三人でどこかへ一所に旅行したいとか、いふやうなことを、或時はひどく初々しいところがあるかと思ふと、そんな旅行の相談などをいきなり臆面もなく持出すといふやうな大膽さで話した。かと思ふと、その翌日から三日間とか、天の家の直横町にある劇場に芝居が掛るといふ噂が出た時、彼女は私の母に目くばせするやうな言ひ方で、

「な、明日の晩、かまへしめへんやろ。あんた厭やつたら、あて二人で行きたいわ、」とそこで例の袂で半分顏を隠す恥かしさうな表情を私の方に向けながら、「あて見たいなもんと一所に歩くのん厭だつしやろな。そやかて、こんな田舍やつたらかまへしまへんやろ、」といつた。

「そんなこと……」と私も初心な青年のやうに答へた。「僕、喜んで一所にお供します。」

待つてゐたのに、彼女は夕飯の時に顔を見せた切り、その時は外に人がゐたのでわざと芝居の話をしなかつたのだらうが、到頭宵の口が過ぎても姿を見せなかつた。母が時々私の部屋に入つて來て、退屈なら町を散歩して見たらどうかと勸めるのだが、彼女も昨日の芝居行の話を聞いてゐる筈なのに、そのことについては何にもいはなかつた。私は又、きさ子さんは？と幾度も口に出かゝつたのだが、到頭聞くことが出來なかつた。で、十時近くになつてから私は一人で町に出て、芝居の前を通つて見た。その翌日、きさ子と會つた時、私が芝居のことをいふと、彼女は誘はう誘はうと思つたのだが、何としても極りが惡かつたので、家の者を連れて見に行つたといひながら、私の顏色を讀むやうにして、しばらく何かいひにくさうに口ごもつてゐた後で、「あんたはんが本當に行つてくれはるのやつたら、今晩……」と考へて、「今晩はちよつと差支へおまつけど、明後日の晩あたり御一所に行きたうおますわ、」といつた。が、私はその翌々日の午前中に高天を立つて、大阪に行かなければならなかつた。こんな女がゐたのなら、もう少し長くゐる豫定にして來るんだがと思つたが、私はその日の午後大阪で友人と會ふ約束がしてあつたのだつた。といふのは東京で知り合つた女優が大阪に來てゐて、友人と二人でその女優を訪問する約束があつたので、母やきさ子が止めるのにも、割合に未練を殘さないで、私はその時高天町を立つたのである。

ところが、これが緣で、その後私ときさ子との間に急に戀愛が發展したのである。それは會はない前から八分通り私を戀してゐた彼女は、私が彼女の目の前に現れると、考へやうに依つては思はせぶりに見える程、淡白にさつさと歸つてしまつたことや、又私にあはない前から、彼女が私の母を好いてゐたといふことや、それから彼女が育つた雰圍氣から私たちの方を見ると非常に上品で憧憬すべきものに見えたことなどが重なつて、私といふものが一層戀しく見えたのに違ひなかつた。彼女はその後東京の私に宛てゝ頻りに手紙を書いて來たり、心づくしの贈物を送つてよこしたりした。

考へて見ると、その時の交際振りは私の方が不良で不純だつたといへる。例へば彼女の手紙に返事が出
さい言譯に、ある時、東京の學生々活では、風呂錢や切手の代にまで困ることが珍しくないので、返事を出したくても出せないことがある、などと思ひつきの談を書いてやると、次の時には彼女から三錢切手を百枚手紙の中に封入して來たりした。しかし、彼女のさういふ初心らしい仕打は私を次第に引込んだ。だからいつとなく私の方からもきさ子を純粋な心持で慕ふやうになつて來た。それに後半年もしたら學校を卒業する時だつた。しかし、考へて見と、それが世間普通の學科なら、學校を卒業さへしたら、たとへ僅な月給取からでも、直に世に出る門が開かれる譯だが、私が進まうとする文學の世界は、月日が經つ程先が混沌として見當がつかないのだつた。私はそんな役にも立たない學校の免狀よりも、急にきさ子が欲しくなつて來た。そこで、間もなく卒業試驗が始まりさうになつた時になつて、私は突然發作に襲はれたやうに學校に背を向けて、高天村に出發することにした。春の終の頃で、母にはもう試驗も終り、後は免狀を貰ふばかりだから、こんなものは友人に頼んでおいて、來る何日に歸るといふ手紙を出しておいて、或晩蒼惶と東京を立つた。私は汽車の中で、高天の停車場に母ときさ子とが迎へに來てくれてゐる圖などを想像して樂みながら着いた。ところがそこには母一人しか來てゐなかつた。が、私はきさ子は？と半分迄口から出かゝつたが、胸を抑へて聞かずにゐると、母も心の分らぬ女で、矢張りきさ子に就いて何にもいはなかつた。この時は、停車場から母のところ迄歩いて行つた。すると、途で、「さうさう、きさ子はん二三日前から風を引いて寢てはるのや、」と彼女は何氣ない調子でいつた。「さうですか、」と私も強ひて平氣らしく裝つていつた。

實際、きさ子は風で寢てゐたのだつた。そして私は着いた日の夕方、初めて見る母の部屋の二階のきさ子の部屋に母に連れられて彼女を尋ねた。すると、きさ子はいつかの

に顔を埋めてしまつた。その仕草が又私の心を狼狽させた。が、しばらくすると、彼女は然で上気した顔を布団の中から半分覗かしながら「おゝ、今日までに綺麗なほつておきたいと思うて、薬を二度ぶり一ぺんに飲みましたら、こない急に熱が出て來ましてん。昨夜はな、お母はんと一所に停車場まで迎ひに行くつもりだしたのに」といつた。「まあ！きさ子はん、そんな無茶なことをしなはつたの？」と母も知らなかつたと見えて、傍から驚いたやうにいつた。「えゝ、お醫者はんに聞いたら、外の薬と違うて、熱さましの薬を二度ぶりも飲んだら、もつとえらい目に會ふ、その位で濟んだら仕合せな方やいふて叱られました。」ときさ子はいつた。それは本當らしかつた。

その翌日になると、きさ子は床を離れた。そして、持前の大抑な恥かしさうな振をしては、私の部屋へそつと入つて來て、二言か三言か話すと、落着かなさうに出て行き、かと思ふと、又何か彼かいひに入つて來た。しかし、この前の時から思ふと、彼女はずつと大膽になつて、日が暮れるとよく私の母を一所に誘ひ出しては、目的は私と一所に町を散歩することであつた。或は又私の爲にといつて町で一等の菓子屋から菓子を、一等の八百屋から果物をふんだんに取寄せては、それ等のものをまるで稲荷様の供物のやうに、私の机の上に積み上げてくれた。が、その頃になつて私は初めて彼女の身分を分つたのだつた。それには、先づ彼女の長姉のつるといふ女の經歴であるが、彼女は以前娼妓をしてゐたもので、大阪から下の關へと流れて行つてゐるうちに、ふと金持の男に引かされて自由の身になると共に、間もなくその男と死に別れるかどうかして、今から何年か前に單身少なからぬ金を持つてこの故郷の町に歸つて來て、今の料理屋を始めたといふことだつた。が、元々彼女は身持が放埒だつたので、だん／＼持金をなくしてしまつて、商賣の料理屋の經營さへ次第に困難になつた時代が來た。すると彼女は次の妹を町の顔役（先にいつた受負師のこと）の後妻にやつて一時危なかつた天の家の經濟をその妹婿の後援で持ち直させた。それには何でもその男と彼女とが以前に關係があつ

といふ噂もある位で、何にしても所謂凄腕の女に違ひなかつた。即ちきさ子も亦その姉の犠牲になつたといつだつた。それはきさ子が二十歳の時だつた。姉妹中で彼女だけが高等小學校も經つてゐるし、普通の素人娘らしく育つてゐるといふのを資物にして、長姉のつるは或る片輪の男に、――無論餘程の金持に違ひないが、誰もその男の身分を知つてゐる者はなかつた――妹のきさ子を妾として周旋したといふのである。その周旋料として、彼女はその男から今見るやうな立派な天の家を新築させた上にその隣の五軒の長屋（その一軒に私の母や、きさ子や、きさ子の中姉やが住んでゐる）を建てさしたといふのである。そして、きさ子には當時の金で月々百圓づゝ、それから田舍のことであるから、年二度の節季に千圓づつの手當をもらふといふ約束なのださうである。きさ子はつまりさういふ境遇の女だつたのだ。彼女が無邪氣で、恥かしがりであるのは、そんな境遇でありながら、そんな境遇の女が經て來るやうな世間の苦勞を知らないで來たからなのだらうか。恥かしがりながら、一面に思ひの外男に對して大膽なところがあるのは、姉たちと同じ血を持つてゐるからなのだらうか。もつとも、あゝ見えて、姉妹三人のうちでだれが一番きけ者だか、甲乙はつけられないといふやうな噂をも私は耳にしたことがある。何にしても私は初めてきさ子の身分を母から聞いた時、幻滅すら感じる暇がなかつた。唯ひどく呆れてしまつた。すると、その晩、私はそこへ來た時に病床にゐた彼女を尋ねた時から二度目で、彼女の部屋に招待されて、どういふ譯だか、彼女の旦那といふ男に思ひがけなく紹介されたものである。前に聞いてゐた通り、その旦那といふ男は全く一目と見られない醜男である上に、片手が義手だつた。その手は日露戰爭の時になくしたのだとその時私はその男の口から聞いた。といふのは、私が文學をやつてゐるといふ話から、その男は日露戰爭中に森鷗外の從卒だつたといふ話をした次手に、その手のことを辯解したのである。なる程、その男を見て見ても、現在の職業は何をしてゐるのか、どういふ身分のものであるか、少しも見當がつかなかつた。

その翌日も亦その男はきさ子の所に來てゐたらしかつた。きさ子の身分が分つて見ると私はがつかりしてしまつたことは事實だ。夕方私は例の當てがはれた部屋で欠伸しながら讀書してゐると、突然物干に足音がして、がらりと前の障子が開いたと思ふと、昨夜の男が片手に手拭を持つて現はれた。はツと思つて私が挨拶したのに、彼は昨夜の時とはまるで別人のやうに、私の存在など眼中に入れないで、物干の上でふと後の方を振り返つて、「おきさ、おきさ、石鹸を持つて來んか？」と叫ぶと、そのまゝつツと物干の上から私の部屋の壁の上へ飛んで下りて、私の部屋の眞下にある湯殿の方へ階段を下りて行つた。私はつゞいてきさ子が來るかと待つてゐたが、彼女はさすがに私の部屋を通り兼ねたと見えて、表から廻つて行つたらしく、それで石鹸を持つて行くのが遲くなつたと見えて、下の方からしばらく「おきさ、おきさ！」とかの男の腹立たしく呼ぶ聲がつゞいてゐた。

その翌々日、私はつまらなくなつたので、母に大阪へ行くといひ出すと、きさ子がそれを聞いて一週間位なら是非一所に行きたいといひ出した。ところがその相談が私の知らないうちに割合容易に運んで、思ひがけなくその次の日、私たちは三人で大阪へ行くことになつた。汽車の中で、「これが本當の親子夫婦三人の旅行やつたらどんなに嬉しおまつしやろ。しかし、兎に角これから一週間の間だけそのつもりで方々旅行しましようね、」ときさ子は心から嬉しさうにいつた。私も亦落したものを思ひがけなく拾つたやうな嬉しさで、その嬉しさの前途の短かさなど忘れてしまつた程、有頂天な氣持ちになつた。が、それが又餘り思ひがけなく短かつた。といふのはこの旅行がその翌日おじやんになつてしまつたのである。行きに、汽車が王寺驛で十分ばかり停車してゐた時、私たちの窓の外を通りかゝつた男が、母ときさ子とに挨拶して行つた後で、彼女たちが何か急にひそ〳〵と話を始めた。

「まさかね。」

「まあ、そんなこと大丈夫やろと思ひますけど、」などといふ彼女等の會話が私の耳に殘つた。

果して、彼女等が心配した通り、私たちがその晩大阪へ行つて、私の伯父の家で泊つた翌朝、きさ子に宛てた電報がとゞいた。すぐ歸つて來いといふのだつた。いふ迄もなく、きさ子と私が旅行したことがあの片輪の旦那に知れたのである。そこで母もきさ子を送つて一所に後戻りすることになつて、私は彼女たちを港町の停車場まで送つて行くと、別れる時きさ子は「これ」といつて、私が何か受取り兼ねてゐると、彼女は無理押しつけに私の袂の中へ入れて行つたものがあつた。別れて歸る途で、私は袂の中を探つて見ると、私の手に指輪が觸つた。

それから二三日して、母からときさ子からと別々に私に宛てゝ手紙が來た。母からのには、この間は思ひがけないことになつた、さてもうお前も愈々學校を卒業するのだから、早く東京に歸つて、どんな小さな家でもいゝから一戸を構へて、私が一緒に暮らせるやうに獨立しておくれ、私は一刻も早くこんな田舍を離れたい、お前のお蔭で、きさ子さんのあの人にこの間のことを詰問されて、何か私がそゝのかしでもしたやうに云はれ、向うも腹立の餘りだらうが、扇子で膝を打たれた、私はこの年になつて人に打たれたことは初めてだ、悔やしくてならない、私は何もあのえたい知れない人の世話になつてゐる譯ではないが、あの人の世話になつてゐるきさ子さんや、きさ子さんの家にこの上世話になるのはどうしてもいやだから、どうか一日も早く私のために東京に家をこしらへておくれ、と書いてあつた。きさ子からのには、あんなことになつて悲しくてなりません、しかしこれもこれ迄の緣とあきらめて下され、私もあきらめます、それからあの時の指輪は持つてゐて下すつても宜しいし、失禮ですが、賣つてお好きなものをお買ひ下すつても宜しい、唯お返し下さると迷惑します、お母さんにも迷惑が掛ります、と書いてあつた

一ケ月程後、私はその指輪を六十圓で質に入れた。その朝私は東京の友人から私が學年試驗に落第してゐることを

通知した手紙を受取つたのであつた、それは元より覺悟してゐたことであつたが。私はきさ子の爲にたつた一週間うつゝを拔かしただけで、失戀と落第とを一度に受けたと思ふと、流石に打撃を感じない譯には行かなかつたのである。これからは私に月々學資を貢いでくれてゐた親類も、私が學校を卒業したものとして、最早やそれ以上月々の仕送りはしてくれないだらうし、さて東京に歸つたところが、すぐには職業を見つけることは出來ないだらうし、といつて、中學時代のやうに伯父の家に居候してる譯には行かないし、私はいろいろ考へた末、きさ子から貰つた指輪を金に代へて、それを當分のしのぎとして、せめてその間に何かまとまつた小說本の飜譯でもしてから、それを持つて東京に行かうと決心したのだつた。そのつもりで大阪の伯父の家でしばらくごろ〱してゐたが、仕事が進まないうちに金が殘り少くなつたので、私は思ひついて或日下高天の中戶竹藏に手紙を書いた。東京へ歸るまで一つまとまつた仕事を落付いてしたいと思ふので、二三週間居候をさしてほしいといつてやつたのである。しかし、どんな理由であれ、高天と目指したのには心の中にまだ幾分きさ子の亡靈が私の心中に殘つてゐたのかも知れない。丈太郎の代筆で、いつでもお越しなされとすぐに返事があつた。そこで私は、早速仕度をして、高天驛に夜着く汽車で着いて、下高天に行く途で上高天を通る時、車の上で私は帽子を深めにして顏を隱しながら、きさ子の家の誰かに見られないように用心したり、又見られて下高天に行くことをきさ子に知られたいなどとロマンチックに考へたりするうちに、無事に蔦屋に商賣換へして、店の樣など全く變つた、懷かしい「ちんこ竹」の家に着いた。

私はその時竹藏の家に一ケ月近くゐた。母のところへは、天の家への遠慮があるので、或日丈太郎に賴んで彼が商賣の用事で上高天へ行つた次手に、そツと私が彼の家に來てゐることを知らす手紙を渡してもらつた。すると、二三日後に、母は下高天へ私に會ひに來た。彼女はこの前の手紙の文句をくり返すやうに、秋まで辛抱してゐるから、是非一日

も早く東京へ行かれるやうに、私に勉强してくれといつた。ところが彼女が來た翌々日だつたかに、思ひがけなくきさ子から竹藏の家方私宛に手紙が來た。又しても母は妙なことをする。多分彼女がそツときさ子に私のことを知らしたのに違ひないと私は思つた。が心の中では嬉しくもあつた。彼女の手紙には、私に東京へ歸るまでにどうかして一度お目にかゝりたいと書いてあつた。そして、若し返事をくれるならかういふ家によこしてくれと、同じ上高天村の知らない所と名前とが認められてあつた。私は久しぶりのきさ子からの手紙に接しると、再び彼女を思ふ思ひが燃え上るのを感じた。その時の彼女の手紙にはまだその外に、私にロマンチツクな戀心を煽るやうなことが書かれてあるのだつた。いふのには、世間はとても上高天の町へあなたは來ることが出來ない。それは上高天には三つの入口しかない、而もそれ〴〵三つの入口にはあなたの顏を知つてゐる見張りの番人がゐる。それは藤山（きさ子のすぐ上の姉の亭主で、例の受負師で町の顏役をしてゐる男の名）の子分の車屋がそれ〴〵の入口の車宿にゐるからなどと書いてあるのだ。無論そんな事は噓か本當か分らないやうな話だが、失戀した男にとつて、その失戀の物語を飾るこの上ない道具立に役立つた。私もどうかしても一度會ひたいと返事を書いて送つた。そして私はその頃飜譯の仕事に疲れると、當時もう二十歲かであつた丈太郎を誘つては、高天ヶ原まで散歩に出かけるのが常だつた。高天ヶ原の北西の端に出ると、目の下に山の公園と、その公園のまん中に聳えてゐる天倫敎の會堂と、町の四方にある四つの寺の鐘樓と、取引所の跡の倉庫と、郊外にある紡績會社とで飾られてゐる、變に田舍びてゐながら、變にごた〴〵とした賑しさを持つた上高天の町が見下ろされた。最早や氷水とボートの季節で、その山の公園の池のほとりの、天倫敎會堂のある反對の側の台には、氷水の旗を立てた店や、岸につながれたボートなどをも指摘することが出來るのである。私はそれ等の景色を包んだ町の入りながら、丈太郎にぼつ

あつたが、母の方は全く他人であるので、子供の頃は兎に角、年頃になつて來ると共に、家の中に氣まづい空氣が生じることがあるらしかつた。それに、丈太郎もどちらかといふと都會好きだつた。東京に行つてゐる彼の伯父の丈助が、その商賣にもう少し目鼻がついたら、來いといつてくれてゐるから、自分も是非伯父の家へ行つて働いて見たいなどと洩らした。が、私は多く彼の言葉を上の空に聞き流しながら、目の下に見える不思議な感じのする上高天の町を、それ等の屋根のどれか一つの下にきさ子がゐると思へる町を、ぼかんとして眺め入つた。

「近いうちに一度夜分にでもあそこへ行つて見ませうか？」と私はいつた。

「どこへ？」

「上高天へ、」といつて私は赤くなつた。

が、それから間もなくその上高天へ行く日が來たのである。或日上高天からといつて、よぼ／＼した婆さんが竹藪方の私に手紙をとゞけて來た。それは母の手紙で、今夜きさ子さんと町の活動寫眞に行くから、丈太郎さんを誘つて活動寫眞を見に來たらどうかといふのだつた。私は承知の返事をして、その日の暮れを待つて、丈太郎と一所に下高天を出かけた。が、道が案外早くはかどつて、上高天の町が目の下に見える、高天山の麓の曲道へ來た時にも、まだ日が暮れ切らないので、道の傍の草原に蹲んで、日の落ちるのを待つた。そして、やつとあたりが暗つなつた頃に、私たちは泥棒のやうに町の中にまぎれ込んで、勝手を知つた丈太郎の案内で、とある小屋掛の活動寫眞館の前に出た。私は丈太郎の後から人に顏を見られぬやうに腰を屈めて場内に入つて、母の手紙に示してあつた通り東側の棧敷の隅に坐を取つて、西側の棧敷の方を見ると、すぐに母ときさ子の姿を見出すことが出來た。そこで、私は丈太郎に頼んで、そつとの來てゐることを母に知らしてもらつた。間もなく母が私たちのゐる方へ忍んで來た。と、母の後から久しぶりで

きさ子の派手な姿がちよこ／＼と現れた。私ははつとしながらわざと改まつた恰好で挨拶すると、と彼女は初めて會つた時と同じやうに袖で顔を隠した。そして、二言三言話をしてゐると、話しながらも、始終不安さうにあちこちと暗い活動小屋の中の群集に眼を配つてゐたらしいきさ子は、突然私の母の袖を引いて、「あゝ、あそこへ板場はんが來ましたから、ちよつと場へ歸つてましよ、」と氣がゝりらしい聲でいつた。「あ、さう、」と母もあわてゝかういふと、「ぢやあ、又歸りにでも、」といつて、二人はそこ／＼に群集の中にまぎれて行つた。しばらくして元の席についた母ときさ子の方をこちらから盗み見ると、私も見覺えのある天の家の青白い顔をした若い板場が、見たことのない金縁の眼鏡をかけて、きさ子のすぐ傍に坐つてゐた。私は何となくつまらなくなつたので、短い寫眞を一切り見ると、もう一度丈太郎に母を呼んでもらつて、彼女にだけ別れを告げて、そこ／＼に活動寫眞館を出た。まだ時間が早かつたので、丈太郎と二人であちこち町を散歩してから、行きとはまるで反對のつまらない心持で三十町の夜道を歸つて行つた。その時切り私はきさ子に會はないのである。後で母に聞いたのであるが、もつともその時は母も知らなかつたのださうだが、その後あの青白い板場はきさ子の情夫と分つて、間もなく追放されたといふことである。

その秋、到頭母は高天を引上げて、私が手紙でもう少しもう少しと彼女の上京を延ばすやうに懇願してやつたにも拘らず、或日突然牛込の私の下宿に現れた。私は親類からの仕送りなしに、自活し出してから未だ一ケ月にもなつてゐなかつた。自活するといつて、定つた收入のある勤め口はなかつたので、僅に人の賣文業の下仕事などして暮してゐたのだ。折角、下高天の竹藏の家で居候しながら仕上げて來た飜譯の原稿も到頭賣れなかつたのである。自然そんな譯で下宿屋の拂など滯らしてゐた。が、母子で下宿住居も出來ないので、やつと無理して本郷の或町に小さな借家を見つけて、取敢ずそこに移つたが、早速その月末から困り出して、少しづゝ母の持つて來た着物などを金にかへたりし始め

た。

或日、母が私が以前間借してゐた所にそのまゝ住んでゐる中戸丈助を尋ねて行つた。すると、義理固い丈助はこれから二日程して私の家へ尋ねて來た。彼はその青ぶくれした顔の妻のお樂と、同じやうに青ぶくれした顔の娘の雪江と、雪江は背中に四歳になる秀夫を負ぶつて、一家そろつてやつて來た。丈助は私の家の取片附いた外觀を見て、

「あんたたちは結構やが、わし達はこれからや、」と輕く嘆息しながらいつた。彼の遠慮辭は相變らずで、彼の妻や娘が無作法に飛足などして座布團の上に遠慮なく坐つてゐるのに、彼だけは幾らすゝめても、「いや、いや、」と後すさりして、歸る迄それを敷かなかつた。彼の妻のお樂も、娘の雪江も、丈助に似て口下手だつたが、同じ下手でも丈助のには巧まない、自然の朴突な愛嬌のやうなものがあつたが、彼女たちにはそんなものもなかつた。唯、雪江の子供だけが變つてゐた。彼は母親の背中から下ろされると、初めのうち暫くの間はにかんで見えたが、少し馴れると妙にはら／＼するやうな腕白を發揮し出した。それを丈助が一番氣にして、始終「これ、これ、秀夫！」とたしなめてゐるのだが、變な子で、彼は手足の運動は世間の同じ年頃の子供並に活潑であるのに、言葉らしい言葉が一言も發音出來ないらしいのだ。

「あの子は何でも少しをかしいんだよ、」と彼等が歸つてから、母は私にいつた。

「さういふと、雪江といふ人も少し變ぢやないですかね？」と私もいつた。「いや、雪江さんのお母さん──あの丈助さんのお上さんといふ人だつて、何だか變だな。」

「お樂さんはどうして、あれで中々しつかり者なんだよ。雪江さんは少し何だけどね。娘はんと孫の秀夫はんは丈助さんの苦の種やろな、」と母はいつた。

區別のない二間の家で、もつとも二階があつたが、それは職人に間貸しをしてあ[illegible]して間借をしてゐた丈助は、獨立して、今度は職人を二階におくやうになつたのだつた。羅紗でこしらへて、リボン[illegible]止めるやうになつてゐる無數の子供靴が、板の間にも、疊の上にも、どうかすると便所に通ふ廊下の邊に迄も散亂してゐた。その外どこもかしこも切屑だらけだつた。これはしかし商賣が繁昌してゐる徴ではなく、丈助の妻のお染がだらしない上に、同じ氣性の娘の雪江がかまはない性分であつたし、それを馬鹿の秀夫が掻き廻すためらしかつた。薄暗い奥の間にミシンの機械が二臺据ゑてあつて、そこに青くむくんだ顔をしたお染と、矢張り青くむくんだ顔をした娘の雪江とが、がち〳〵と機械の音を立てゝゐた。どちらか鼻が悪いと見えて、機械の音にまじつて、始終鼻をすゝる音が聞えた。それに、雪江のぎよろりとした生氣のない、大きな出目は近眼と見えて、彼女は顔を機械の傍にくつ附けるやうにして仕事をしてゐた。二階にゐる職人も同じ仕事をしてゐるらしく、そこからも絶えずミシンの音が聞えて來た。時々一束の子供靴が梯子段の上から、「ほーい！」といふやうな叫び聲と共に轉がり落ちて來ると、それを下の者が掻き集めて、ぼろ〳〵の柳合李の中に入れたり、ミシンの手の空いてゐる時は、お染か雪江かゞ、上り口に近い、稍々明るい場所にその柳合李を持ち出して、一つ一つの靴にリボンの飾りをつけたりしてゐることもあつた。

が、氣の毒なことには、丈助が子供靴屋として獨立すると間もなく、とても競爭出來ない商賣敵が現れたのだつた。

「大分具合よう行つてたんやがな、」と或時彼は鼻をすゝりながら私にいつた。さうだ、彼も鼻が悪いと見えて、絶えず鼻をすゝる癖があつた。「近頃ゴム靴といふやつがおますやろ。あの方が丈夫で安いもんやから、世間の人といふものはえらいもんや、こつちが何ぼ勉強してもだん〳〵賣れんようになりよるね。」

その頃のことであるが、丈助の妻のお染が三月程の病氣で、突然死んでしまつた。私は彼女の死んだ顔を見たが、生

高天ヶ原（一）

前青くむくんでゐた顔が、牛の頭のやうにたぶ〳〵になつてゐるのが目についたゞけで、生前の顔も死後の顔もそんなに變つてゐなかつた。母はお通夜に行つたが、私はお參りだけして歸つて來た。葬式などどんな風にされたか知らない。多分夜明けに柩だけ火葬場に送られたものに違ひない。兎に角、お染のこの死に方は私の祖母の場合よりも可哀さうだと私は思つた。

その時分に私の身にも變化があつた。私に起つたのはよくある女の間違ひで、それと貧乏が到頭行き詰まつたからでもあつた。私は母を彼女が行きにくがつてゐた市内にある父方の親類にやつた留守の間に、女と共に本郷の家を夜逃げするやうなことになつたのである。その頃、丈助の家でも、雪江を京都の方へ嫁にやつて、孫の秀夫を高天村の竹籔の家に預けたといふ話を聞いた。が、私は丈助と暫く會はなくなつた最後の時、それは多分彼の女房が死んで悔みに行つた時のことだつたと思ふが、

「萬次郎さん、あんたはわしより東京に古うゐなはるんやが、何かわしに出來る商賣はおまへんやろか？ 折角、あんたの世話でこの商賣をやつて、ちよつと具合よう行きかけたと思うたら、こんな事になつてしまひよるし、」といつになく丈助が愚痴めかしい口調でいふのを聞いた。「それにな、かうして家内は死によるし、秀夫はだん〳〵手が掛るさかい、雪江だけでは何ぼも働きが出來へんよつてに、これ迄通りの商賣をするとしても、中々困難やからなっ」

私はその時、返事に困つて、「あなたはミシンの方は出來ないんですね？ これ迄からずつと買ひ出しにばかり回つてゐた譯ですか、」と問いて見た。

「そや、そや。洋服屋とかな、呉服屋とかな、その他切類の問屋のやうな家からな、さう

屑を買うて來るんや。切屑というても、そんなんやさかい古の切

「ぢやあ、子供靴にならない切屑は駄目なんですか？」と私は問いて見た。無論、何の考へが
つゞける爲だけのつもりだつたのだ。

「ふむ、それや又それで、何にしよるんや、矢張り買ひに來る奴があるらしいな、」と丈助はいつた。彼も亦そんな會話をしながらも、殆ど無考へに喋つてゐるらしかつた。長年連れ添うた妻の死骸が、線香の匂の充ちてゐる隣室にまだ横たはつてゐる時だつたから無理もない。が、私はその時、ふと思ひついたことがあつたので、

「ぢやあ、その子供靴は賣れなくても、その材料の切屑は色んな向きに賣れる譯ですね？」と問いて見た。

「それや賣れるわ、」と丈助は矢張り上の空で返事をしてゐた。

「それなら、一つ先廻りをして、東京中のさういふ切屑をあなたが先に買つてしまつて、どんな種類の切屑でも、あなたの家へ行つたらあるといふやうな商賣はどんなもんです？」と私は私自身にもあやふやにしか考へてゐなかつたのだが、實際としては兎も角、理屈としては成立つだらう位のつもりで、かういふ意見を出して見た。

「なる程な、それはえゝ考へやな！」と丈助は案外感動したらしく、「ふむ、ふむ、」と後は腕を組んで獨りで唸り出した。

が、その時外に用事が出來て、丈助が坐を立つて行つたので、その話はそれ切りになつてしまつたが、その後彼は女房の死と共に、娘をかたづけたり、孫を國に預けたりして、最後にもう一奮發するつもりで、改めて兄の竹藏から少しばかりの資金を借り受けて、私のいつた小切屑切を專門に賣買する商賣を始めたのであるが、それが偶然彼に今のやうな成功を持つて來る段取となつたのである。が、それはずつと後の話で、先にいつたやうに私はその時別れてから三年程も丈助と會はなかつたのである。つまり、私は先にいつた女の始末をつけるのに、かれこれ三年程かゝつた譯だつ

た。女の始末はつけたが、相變らず未だ身の方針が定まらないので、母を親戚に預け放したまゝで、私はしばらく、生時代の氣持で、下宿生活をしてゐた。が、相變らず定つた收入がないので、二ケ月以上同じ下宿屋に落着いてゐられない狀態だつた。が、その時私は心に多少希望を抱いてゐた。それは長い間朝から晩まで不貞腐れの女との生活に心をくだいてゐたのが、その女とも別れたのであるから、幸ひこの際女のことで親類に避難してもらつてゐる母を、今少しそのまゝにしておいて、この間に長年の望みであつた小說を作ることに沒頭して見ようと思ひ立つてゐたのだ。何人かの友人は既に小說家として世に出でつゝあつた。自分も世に出る出ないは二の次として、小說で生活出來るようになつたら、賣文屋の下仕事など鬼と共にあれ！　どんなに救はれるだらうと思つたのである。小說の思ひで私は胸がふくれるのを感じた。何とかそのふくれた胸の思ひに表現を與へたなら、自分にも人並の仕事は出來ないものではないだらう。それにしても、さし當り困るのは下宿屋の問題だつた。せめて寬大な下宿屋があつて、これから半年位の間金の催促をしないで置いてくれたなら、思ひ切つて一つ發憤して見るがなア、などと虫のいゝことを私は眞面目に考てゐたのである。

その頃のある日、私はあてどなく町を步いてゐると、ふと向うから黃色い、風の例のやうな大きな風呂敷包を背負つて來る中戶丈助に、何年ぶりかで出遭つたのであつた。私ははつとした。もう少し早く彼の來るのに氣がついたなら、私は橫町に姿を隱してゐたに違ひなかつた。が、生憎彼の方が先に私を見つけて、

「おゝ！」と呼びかけた。

呼びかけられた瞬間、私には彼の挽臼のやうに四角な醜い顏が、神といふと誇張になるが、何ともいへぬ人間的な感じに溢れてゐるのを見た。以前と同じものではないかと思はれる、汚い木綿縞の着物に、紺の小倉の袴を縮めて、尻からげ

をした足に板裏の草履を穿いてゐた。その時私はといふと、母のお古を仕立て直したお召の着物を着てゐたかも知れなかつた。爪尖の破れた足袋を隠すために、足の爪に墨を塗つてゐたことだらう。

「どうしてなはる?」と丈助は私がぽかんとしてゐるのを、勇氣づけるやうにも一度彼の方から聲をかけた。風采は昔と少しも變らなかつたが、彼は如何にもこの世に自信が出来たらしく、そして又昔と違つて彼の目に、階級の違つた私を誤る偏見はなくなつて、ありのまゝの私の姿が映つたらしく思はれた。

「いやア、相變らずです、」と私は頭を掻きながら、「つひそこに今は又下宿をしてるんです。」

「下宿? それやいかんな。お母はんは達者ですかい?」と丈助は私の境遇を一ト目で察したらしく しばらく私の様子を、頭の先から足の先まで見てゐたが、「さうさう、わしんとこは家を又越しましたで。あんたこれからどこかへ用事に行きなはるのか?」と聞いてから、「何ならこれからわしんとこへ來なはれへんか。わしんとこもお陰で此頃はちよつと具合ようなつてんね。あんたのお陰でな。今は小切専門でやつてるもんやさかい……兎に角、又いろ〳〵相談に乗れるかも知れへん。な、夕方の飯でも一所に食ひまよ。あんたはわし見たいに歩くのほかなはんやろから、そこから電車で行きまよ。」

その時私は初めて今の溝川に沿うた丈助の店を見たのである。今の店といつても地震前の借家時代のものをいふのだが、矢張り三間間口に四枚の硝子戸の嵌まつた家だつた。今と違つて小切を並べたり、吊り下げたりした、問屋の姉さんのやうな店で、店頭に青白い顔をしたきやしやな體格の二十七八歳の番頭が坐つてゐた。丈助につゞいて私が入つて行くと、

「お歸り、」とその男は丈助に挨拶して、「入らつしやい、」と私の方にいひながら、不思議さうな目で私を見てゐた。

「さあ、お上り。」と丈助は私にいつて、奥の間の方へ通つて行くので、私もその後からついて行くと、ここには足ぶみのふみミシンの機械が二台並んでゐて、その一台の方に二十歳足らずの青年が機械に足を掛けたまゝで、台に肘をついて何か思案してゐる様子だつた。彼は私たちの足音が彼の傍に近づく迄何かぼんやりしてゐた様だつたが、私たちが入つて來たのに氣がつくと、

「お歸りなさい、」とあわてたやうにいつて、そのまゝがらがらと足を踏み、手を廻しゝて機械を動かす仕事を始めた。そして仕事をしながら、何か唱歌のやうなものを口笛で吹きつゞけてゐた。髮の毛を當時はやり初めのオールバックにした、顏色の赤白い、合の子めいた風采の男だつた。

「ところで、あんたはどうしてなはんね?」と丈助は店の間の外に、そのミシン機械を据えてある六疊の部屋切りの、縁側に寄つた方に私を案内して、自分で茶を汲んで來たり坐蒲團をすゝめたりしてから、私と差向ひになると早速から切り出した。

この時でなかつたら、私は唯もぢもぢして、「いえ、どうかからか、」とか、でなければどうせ文學方面のことなど全然知らない相手のことだから、ありもしない成功をしてゐるやうな法螺でも吹いたかも知れないが、(もつとも、以前に何かの時彼にさういふ法螺を吹きかけた所が、「そんなことをいはれてもわしらには分らん。あんたが文士でどの位のとこやら、相撲の番附見たいなもんがないのかいな。そんなもんがあつたらわしらにもよう分るのやがなア」といはれて閉口したことがあつた。)私は可成り眞劍な氣持になつてゐる時だつたから、丁度以前下高天の「ちん竹」の帳場で、突然彼に楠正成や、葛城山の話をしかけた時のやうな調子で、「これ迄は隨分無駄ばかりして來ましたが、これからはそれを役に立てゝ、近頃になつてやつと仕事が出來さうな自信がついて來ました、」と勢こんでいつた。

が、果して丈助は私の言葉の半分通りは分らなかつた見えて、目をくるくるさせながら、

「あんたのその仕事ちふのは何や、小説たらいふのは止めたんか？」と聞いた。

「いや、その小説が仕事なんです、」と私はあわてゝ言葉を足した。「その小説も、これ迄は本當の小説でなしに子供の話とか、外國の本の飜譯――つまり寫し直しですな、そんなことをしてその日その日の食扶持だけを稼ぐやうなことばかりしてゐたんですが、それではいつ迄たつても頭が上りませんから、こゝで一つ決心して、本當の小説を書いて見ようと思ふんです。僕には屹度それが出來るつもりなんですが、」と出來るだけ相手に意味の通じるやうにいつた。

「その本當の小説ちふのをこしらへるのにどれくらいかゝりますねや？」とそこで丈助は膝を乘り出して聞くのだつた。「それで、それさへよう出來たら、後はもう何ぼでも賣れまんのか？」

その答には困つたが、「それがやつて見なければ分りませんが、僕は自信――大丈夫だと自分では思つてるんです。さあ、二ケ月もかゝるつもりなら、屹度書けるつもりでゐます。」

「そんなら、あんた、下宿を止めて、うちの二階へ來てやつて見なはれ。そないに思ひこんでるんやつたら、出來るやろ。うちの二階やつたら、誰も遠慮するもんあれへん。男ばつかりや、番頭と、職人と、わしと三人や。その代り御馳走はないで、それでもかまへへんかつたら、どうや、うちへ來たら？」

そこで翌日から、私は躊躇なく丈助の家の二階に居候することになつたのである。丈助の二階は下町の古風な借家建によくあるやうに、中心から端の方へ行くに從つて、天井が次第に急に御辭儀するやうに頭をさげてゐる構造の最も極端なもので、その最も接近してゐる所は、三尺位しかなかつた。が、その三尺の所のところに[illegible]
た[illegible]

「あんたは少し背が高過ぎるけど、あんたやなうてもこれは具合惡いけど、勉强するには辛抱出來ますやろ、」と丈助は鼻をくすくす鳴らしながらいつた。「それに机がないと困るやろな。」

「机は僕は入りません。」

「ないわけにいかんやろ、」といつたかと思ふと、彼は階下へ下りて行つた。そして三十分ほどすると、商品の荷箱の板を寄せ集めて、速製の机をこしらへて來てくれた。が、その机はもたれるとぐらぐら揺れて、今にもどちらかにばさりと折れてくだけさうだし、又そつともたれるにしても、窓の餘り傍に持つて行くと、うつかり机から頭を上げると天井で頭を打ちさうだし、後に寄り過ぎると光線が机の下から射して來る不都合があつた。結局、私は腹這ひになつて物を書く癖が一番樂なので、机を入らないといつたのはお世辭ではなかつたのだが、丈助の心づくしの手前、誰もゐない時には腹這ひになり、人の來た時だけあわてゝ机でやつてゐる恰好をして見せることにした。が、一日のうち、時々商品の切類を上げたり下ろしたりする時の外、誰も二階に來るものはなかつた。三度の飯の時は、階段の下から「御飯ですよ、」とミシンの職人が唱歌のやうな節で知らしてくれるので事が足りた。彼は行く行くはミシンを止めて、歌劇の俳優になる志望を持つてゐた。次手だが、店番の靑白い顏の番頭は、子供からの俳優で、現にその時から三年ばかり前まで樂天地で女役者をしてゐたといふことだつた。丈助の家の外の雇人が二人とも俳優に關係があるのは滑稽なことだつた。

だが、私の仕事である小說も亦、丈助の仕事である小切呉服屋と同じやうにいふなら、私の仕事はその時から芽を出して、丈助より早くから志して、丈助より後れはしたが、兎に角その後丈助の小切屋と同じ位の一家を構へるやうになつた譯である。丈助は八萬七千圓の財産を造り、私は八萬七千圓程の名聲を得た。丈助に分るやうに番附でいふと、丈助が小切屋の幕内なら、私も小說家の幕内になつた。目出度も目出たしといふべきだらうか？

ところで丈助の私に頼んだ遺言といふのは、その八萬七千圓の割當のことなのである。丈助はその財産目錄を半紙に叮嚀に認めてあつた。それを見て驚いたのであるが、私は併て彼を楠正成と葛城山の歴史の話で困らしたことや、彼の見の竹藏の無學なことなどから考へて、彼も亦片假名位しか書けない無筆者だらうと推測してゐたのが、その財産目錄を見ると、中々しつかりした筆蹟であることだつた。もつとも、いつかの地震の時、竹の台の美術館の南側の壁に、彼が大勢の人々の住所姓名の間に遠慮して小さい字で彼の姓名を記してゐた字を見た時も、おや、割合に上手に書くなと思つたことがあるのだが、今かうして纏つた彼の筆蹟を見ると、尙そのことが證明された。それにしてもどうしたつて彼が寺小屋以上教育を受けてゐるとは思はれないから、生れつきの能筆なのだらう。それに依ると、田地が一萬圓と、二萬圓の山といふのと、後は三萬圓ばかりが株券とか債券とかで、二萬幾らが銀行の預金といふ風に分れてゐて、それ等を孫の秀夫と妻の政江と、甥の丈太郎と嫁にやつてある娘の雪江と、それから天倫教といふのとにそれぐ割當てられてあるのだつた。

丈助のいふところに依ると、彼はその割當てのことでいろく に迷ふらしく、それに一度定めても半年位經つと財産が增えて來るので、又それを變へなければならず、それに分けてやるものが、肝腎の唯一の後取りの孫がやつと十二三歲になつて、村の學校にも行つてゐるのだが、啞とも吃音ともつかず、言葉が半分位しかいへない子である上に、頭が少し惡いらしい(と丈助はいふのだが、私の聞いてゐるところでは一種の白痴らしい)ので、折角財産を分けてやつたところが、それを管理するものがないのが彼の第一の心配らしかつた。といふのは、彼の妻は秀夫とはまるで他人であるし、秀夫の母であり、彼の娘である雪江といふのが、彼女も亦少し「頭の惡い」人間に屬する上に、これは他所の人になつてゐるから、これも賴みにならないのである。ところで、甥の丈太郎

るのだが、妙に内氣で、それに早く死んだ彼の實の兩親の遺傳を受けたのか、近頃めつきり顏が惡いらしいのであるさうだ、丈太郎の家へ秀夫を預けておくと、丈太郎の病氣が秀夫にうつる心配があるから、もう東京へ引取つた方がいゝと、彼はこれ迄から度々政江にすゝめられてゐた位だつた。無論彼も自分の手に秀夫を置きたいのは望むところであつたから、これ迄にも一度ならず東京へ連れて歸つたことがあるのだが、どういふ譯か秀夫は政江になじまないで、すぐに大和へ歸りたいといひ出したり、それで無理に東京に置いておくと病氣をしたりするので、矢張り元の丈太郎の家へ預けてあつたのである。が、丈太郎の家も、三四年前に父の竹藏がなくなつてからは、丈太郎には他人である竹藏の後妻のお菊が頑張つてゐて、氣の弱い丈太郎はどうもその義理の母親に頭を抑えつけられてゐるらしかつた。それに、彼の叔父に當る丈助がさういふ風なお人好しだつたから、どうにもさばきのしようがないのだつた。それに又、どういふ譯か、秀夫はその丈太郎の義母のお菊に一番なついてゐるので、尙始末におへなかつた、といふのは若しお菊が正直な人だつたら、丈助は安心して秀夫に殘しておく財産の管理を彼女に任せられるのだが、お菊は夫の竹藏の死んだどさくさまぎれに、丈太郎に讓られるものさへ大方ごまかして、彼女の身内（彼女には兄妹が澤山あつたので）の者にくれてやつたり、又彼女自身老先の短いことを忘れて、丈太郎に内所で財産を隱してゐるといふやうな評判のある女なのである。丈助にして見ると、若い丈太郎に秀夫の財産を管理させたいのだが、先にいつたやうな病弱な丈太郎のことだから、叔父の彼自身よりも、又義母のお菊よりも、一番先に彼が墓に行くかも知れない恐れがあるのだつた。無論、それを丈助は妻の政江に抱することなど、彼女も亦お菊に負けず劣らずの慾張り屋だといふことを知つてゐたから、それは彼女に殘す分前を二倍にするのと同じことになると知らねばならなかつた。さういふ譯で、彼が財産を持つて苦勞し、煩悶し、「もういそのこと、みんな西の海へほつたろかと思ひますわ、」と溜息するのにいろ〳〵無理のないことがあるのだつた。

それから、彼が遺産の分前の一つに勘定してゐる程、天倫教に歸依してゐるといふことを私

狀を見てからだつた。元々彼が天倫教の信者だといふこと位は、私も母から聞いてはゐたが、それほど凝つてゐるとは思はなかつた。彼が今度歸鄕する用事の一つは、その財産目錄の一である二萬圓の山といふのを、天倫教に寄附することであつた。山といふのは高天山なのである。

「高天山といふのはあの高天山のことですか？」と私は驚いて聞いた。それは私も多少村人の傳說に煩はされてゐたと見えて、「あれが買へたんですか？」と聞くと、

「あれは三人の持になつてゐまんね、」と丈助がいふには、「そやけど、あんな山仕樣あれへん。死んだ兄貴が疑りもんでな、どういふ譯や、金が出來たらあそこの地面を一町でも買ひたい買ひたいといひ通しにいうてたんやがな。わしが買うたんは兄貴の死んだ年、死ぬ前から話があつたんやが、死んでから纏つてん。高天の家の筋向ひに細川いふ酒屋があるのを覺えてなはるか？　あの家が持つてたのを買ひましてん。あのずつと上の原つ場——池も皆さうだす——あそこから東べらへかけて、墓場な、あんたの祖母はんの墓のある、あの邊までずつとだす。わし、買うて兄貴にやるつもりだしたんやけど、兄貴は先に死んでしまひよるし……」

「それで天倫教に寄附するといふと、天倫教であそこへ又、「上高天の公園のやうな敎會堂でも建てる話があるんですか？」

「そや〳〵。わし、この上生きてゝもつと金が出來たら、もう面倒くさいさかい、後の金はみんなその敎會堂の方へ寄附したろかと思うてんね。」

「隨分な信心ですね、」と私がいふと、

「いや、わし等信心も何もあれへん」と丈助はいつた。「丈太郎があんな若いのにあんなもんを信心しよつてな、いつの間にやらわしも誘ひ込まれてん。あんなもん信心出來るもんだすかい？ 身代つぶした人何人あるかも知れへん。その代り、ようしたもので食へんようになつたら、引取つて養うてくれるのが取柄や。わし、いつそのこと、秀夫もあんな奴やよつては、天倫さんに入れてしもたろかと思てまんねが、どうだすやろ？」

「さあ……？」といつたまゝ、無論私は答へる言葉を知らなかつた。

汽車が伊賀から山城の一部を通つて、大和の國を走つてゐた時分だつたと思ふ。

「さうさう、」と丈助は何か思ひ出して、一寸いひにくさうにしてから――「あんた、上高天の天の家な、あそこの娘のおきさを知つてなはつたな。（彼は多分私ときさ子の話を丈太郎からでも聞いてゐたに違ひない。）あいつが今度えらい出世しよつてん。あいつの旦那といふのがな、あんた聞きなはつたか、あれは天倫教のお二代さんやつてんが、えらいもんをつかまへよつたもんやおまへんか……」

「天倫教のお二代さんて、あの……」と私がいひかけると、

「見つともない顔の人や、中々やり手やといふ話やがな……」

「あの、片手のない……？」

「そや〳〵、あんた知つてなはるか、」と丈助は私が急に彼の話に緊張し出したので、張合ひが出來たやうにつゞけた。「あのお二代さんの奥さんちふ人が、つひ半年程前になくなりはつてん。元から、もう五年も十年も患うて寢てはつたんやさうながな、何病氣や知らんけど。それで、今度その後へ、おきさが直りよつてん、これは内所やがな」

「へえ……」

「女子ちふあんはどこまで出世しよるか分らんもんやな」と丈助は別に大した感慨もなさ

「それで、」と私はしかし興奮しながら、「それであなたはそんな天倫教にやつぱり寄附したりなんかするんですか？」

「それやまア、おきさはおきさやし、天倫さんは天倫さんやからな。あれで中々えゝこともしてよるさかいな。早い話が人の財産をつぶしても、後々はその家の人を引取つて養ひよるし、それで貧乏人を助けるのも助けよるし、何ちふのか、まアあれで社會主義ちふやうなものやな。」

私は丈助の妙な智識に驚きながら、「しかし……」といひかけると、

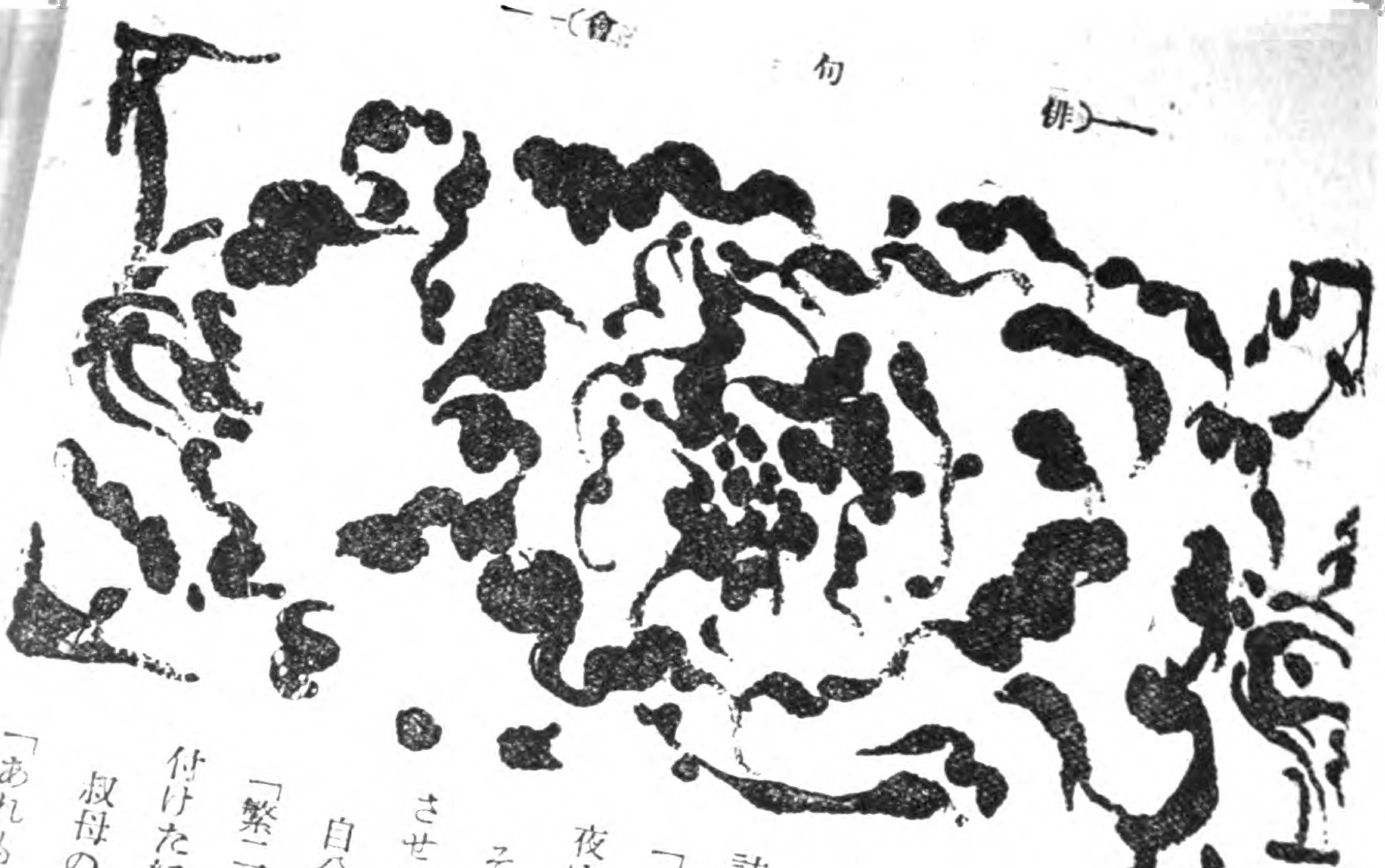
「まアえゝやないか、」と丈助は引取つて、そこで帶の間から大型の銀時計を出して見ながら、「もう後二時間したら行くな。明日は一つ花見でもしまよか。さうさう、あんたは酒が飲めんねな。しかし、あの高天ケ原の櫻を知つてなはるか。中々えゝ景色だつせ。わしももう達者なやうでも年やさかいな、今度は墓をこしらへといたろと思うてまんね。あゝ、あんたも祖母はんの墓を直しなはんねな。今度行たら、墓の土地を少し上げよ。お母はんのもこしらへといたげなはれ。あんたかて、死ぬのは未だ早いけど、どうだす、次手にこしらへときなはつたら？」

「これや驚いた！」

「いや／＼、」と丈助は眞面目で、「死ぬことと墓をこしらへとくこととは別だつせ。まアしかし、かうしてあんたとこんな道中をしようとは夢にも思ひまへなんだな。そらさうと、あんたと初めて會うてから、もう何年になるやろな。十二三年だすか。」

「いえ、もうかれこれ十五六年ですよ。死んだ中戸さんの、あそこの帳場の間でお目にかゝつた時から。」

「そや／＼。わしが朝鮮から歸つた時やから……」と丈助は指折つて、「そや、もう十五六年になるさかいな。あんた、あの時は二十歳位やつたかな、まだまだあんたは若いな。おゝ、咲いとをる、咲いとをる、」と丈助は汽車の窓から外を眺めながら、片手に正宗の瓶を持つたまゝの手で、南の方を指さして「高天が見えるわ、高天が見えるわ！」といつた。



俳句會

瀧井孝作

一

俳句の會に行く自分は、叔父の袴をかりてはいた。叔父は自分の妹の絹子の家へ訪問にと出かけた。

「そんなら晩に、絹子もよぶではやう戻れ、君の買物は、繁二郎は店もヒマやで今夜は泊つてあす悠くり見たらえい」と叔父は云ひおいた。

それは大工道具だが、自分らは指物の手造りを仕たくて、元大工の從弟に見分けさせてこの日道具は揃へたかつたが、その從弟は在郷軍人の運動會にいつて居た。

自分は叔母に

「繁二郎、まは若(もし)早く戻れば、見て買はせといてくれ」と、買物の大工道具の名を書付けた紙に凡その代二十圓そへて、叔母に托した。

叔母の話は繁二郎の上に移つた。

「あれもきのきかん子やろけど、息(うち)

わ」といつた。

自分は奈良であつた先日の辯解と思つた。先日自宅での出來事は日記にかき自分はよく分り、また今叔母のいふそれに耳を傾ける心持になつた。

叔母は跡取りの子の商ひに役立たぬことより近頃叔父のイラダツて居るといふ話をした。そして、子は駄目ときまれば他の向く所に向けたい心持の叔母は

「それであれは杉村さんの店にでも用うてもらひます、とわては良人に云うと、僕があかんと云ふ者を僕は他にやれるかい、杉村さんでも用へるかい、とけなさはるしな。そりや小僧から仕上げた者とちごて、商ひはヘタな所もあるやろ。わては是非にとたつてもろた子や、今更あれを國へ返やす事は、わてはどんなことあつたかてせん」

といつた。叔母はまだなほ澤山話をした。その中に

「良人は清治さんにやらせたいのやろけれど、あの人も今にうちへはいるのは考へものやと云つて、ハイといつては來ないわいな。そりや商ひは出來る人や」

とかいつた。――清治は先妻の子で叔父は若氣からこの子が胎にある時分にすてゝ家出をしたのだ。清治は小僧より仕上げ商館に勤めた。いまはでいりして實父とは呑合つたりした。

「壽太郎はあんな遠くで不運で死んだが、南洋々々と前から行きたがりわてもやる氣にはなつたが……。あれは此家は矢張面白くなかつたから出て行つたのやろと思ふ、良人はあゝ云ふ人やさかいにな」

とかけつた。今日叔父には惜まれる叔母の連れ子、自分の從兄は十年前に南洋の或る所で死んだ……

「うちは他で何かきいて戻らはると、わてらが行つてまた昔日か何ぞの様にいうて叱らはるし、

るが、わてや繁二郎は他で何をこんな話いふかいな。皆はあの子には同情してくれはるのやう」

とか

「それはキゲンのとりにくい人一倍六ケしい良人だから、皆はナンギをするわいな」

とかと、叔母は勝氣から何氣なき面持で徐々にいうた。

自分はおちついて聴きいり、只背いた。叔父の性分によるわけか内には和氣靄々とした所はなかつたが、安全瓣は持たぬ叔父の心持も氣の毒だが、さういふ叔母の話から自分は瞼の裏はあつくなり、自分は涙のにじむ目もとをした。自分は俳句の會はおくれた。そして心持の一段落した所で立上つて、自分は外出した。

二

電車を下りて、キタナイ落葉の街路樹の下より自分は一人ボッチで行つた。

H氏來阪俳句大會本社樓上と貼紙の出た、大新聞社の前に自分は暫し立つてそこを眺めた。會場にゆく通路の階段のオドリ場に上つた自分は印刷場の雑音にとりまかれて、こんな場所で句作は出來るのかしら、こゝでやるやうになつたはさすがに新しいと思つた。テーブルを備えた廊下の受附より會費とひきかえに句録の刷り物を渡されたが、何年目で俳句會にきた自分は矢張一人ボッチだ。

そして、ざつと百人程が演壇の方に向けた椅子に腰掛けて居る。例にない會場の工合を見て、自分は會には係らぬ心持であつた。H師にあふ筈の自分は、服のえりに菊の造花をつけた男を捕へて「Hさんはどこに方は何方です……あ、さうですか、おみそれしました、しばらくですな……

と、云はれて自分は伴はれた。委員室と貼紙の出たドアをみて、自分は成程と思つた。一寸そんなに思つた。

H師は　最初に無表情で自分を見て、そしてウム／＼と首肯いた。自分は逢つてやはり近い氣持直かな心を持つた。

「わざ／＼よく出て來られた」

「大阪に一寸用事もあつて、ついでに」と自分はそれは簡單らしく云つた。H師はまた「昨日京都下谷が、奈良の君のうちに電報を打たうと云つたが、わざ／＼出て來るのはまた厄介だらうと僕はとめた」といつた。

自分は元の先生にあつて自分の事はいふには人中できおくれして、東京の友だちのことは、誰かれよりもさて第一番にと特別にきくことはなく云ひ出さなかつた。雜誌の消息にあつた、伊賀の香落峽の紅葉とはどんなのと所は奈良の隣りのわけで、全く初ての自分はきくとH師は、こんどは出發の日のおくれた爲えう行かずだがと曰つた。香落峽は場所はやはり上野を通つて名張より入り、あかめ四十八瀧(この名は自分はかつて聞いた)とつゞいて其所の裏合せになると曰つた。

そこへまた、H師に「ヤァしばらく」と、一人はいつて來て「ヤァ大分うすくなりましたね、僕の頭も斯う白くなつたがね」とその人は曰つた。

それは和服の五十男だが、大阪師團の軍醫監かで句をよむ人としれた。雜誌に蕪村の傳記をつゞけて居るH師に「年よると人の傳記に興味が出るものらしい、故の森閣下もさうだつた」と、それは森閣下とよびつゝ森鷗外に目安をおいた老ヂレッタントだつた。若返つた先生に向け切りに年寄じみた話を持出したが皮肉にはとれずそれは氣の好い人だつた。

それは能辯家で中腰の肱は椅子の背におき、最近の傾向の俳句につき議論をはじめた。雜誌に出る句はさ湯をのむやうに淡白だもつと何か考へさせられるものを。といふのだつた。この議

ない所に趣のある樣に考へるのは月並だと、やられたが、併し能辯家は[illegible]うるさくなつて「これは、自分でやつて見るとなかなかうまく出來ぬが、俳句はぎろんより先づ作を見せなければ」ときつく口を出すと、「君はこの頃の句に贊成かネ」「僕はいま俳句はやらぬけれど、雜誌の句はよみ皆うまくなつたと思ひます、もう少し充實してくれば貴方も問題はないのでせう」自分は曰つた。さうして句のぎろんはやんだ。

能辯家は次ぎに、お能や噺子の事、「己れのやつて居る梅若の後援會、その方の話題にてH師になほ向いた。

H師はまた其他の人々にも應接して、テーブルの上の句錄の刷り物は「これに○はつけたがよく選句は出來ん」と、一枚委員の手にやつた。

えりに菊の造花をつけた委員五六人は室のドアより出たり入つたりした。自分は、さつき見た會場の百人程が、正午より三時四時まで演壇にむけた椅子におかれさぞ退屈だと思つた。互選句や何か位で辛抱づよく一人の不平の出ぬのはと思ひ、さやうなみんなのおだやかな氣長な心持が自分に傳つて來た。それは俳句なぞやる人々の集りだから。

そしてH師は講話にと會場に伴はれた。先生はこの人々に滿足を與へるかな先生はなれては居ると思つて自分は附添つた。

H師は平常の調子で低音で、人々は立つて前列の椅子にと詰かけた。はなしぶりは興味的の例を上げる風もなくて演說としては不出來だつた。たゞ自身を具體的に的にして曰つた。それは若者のやうに元氣よく見えた。自分は幕のそばにより立つたが、演說の聲はよく耳にうけとれず、自分はたゞ見てゐた。演說が終ると人々は立つて歸りかけた。俳句大會は大方は事務に了つたといつたやうなものだつた。

再び委員室の椅子に自分は腰下した。能辯家はこちらに興味をもつ風で「宿屋にゆきた[illegible]

ん會と俳三昧をやるのでさういひ、「さあ僕は何うせうかと思つてゐる所です」と自分はそれにはさう答へたが、少時してH師には、叔父と妹とにあふ約束で中坐するあとで宿屋に出ることを曰ひおいて、一人外に出た。

三

そこの門口にたつた、子供抱いた妹に自分は出逢つた。子供は手にバナナの剝いたやつを持つた。自分は「バナナの筋はとつてやれ」とすぐにいつた。いつもの好人物の妹は、七月にこゝで見てからけふだが、やゝ老けて見えた。

叔父は、「そんなにせんかて」と叔母にいはれたが仕出料理二三と大阪鮨とまた東京流のにぎり鮨と取りよせて、自分ら兄弟のお膳を拵へた。今方まで妹の家で酒呑んだといふ叔父は、また自分らと呑合つた。

食事した繁二郎は、托された買物の大工道具はどこに行つたらえいかといつて叔母に相談した。

叔父は杯を持上げて

「さう／＼チツコは前掛をたんとよごせ、さう子供はよごすんでうちらの商ひはあるんやで。どれか見本のあまりはあるやろう、繁二郎」

と、子供のたべよごれたエプロンはのけて新しくかへさせ、叔父は子供の背中に目注けてゐたが、

「上をモチイツと詰るとよいな、幅廣いとうつらんわいなあ。……繁二郎お前らに分らんか、この商賣やつたら子供にきせた時によく工合を見とおけ」

と繁二郎はにらまれた。自分は心持は固くなつた。さつき叔母は曰はれたあの氣分で叔父に向いた。

叔父は

「この折詰は奈良の新温泉の料理やさうな。あいつは鮨折だけ食べてこれと酒は土産に持つて戻つたんや」
といつて、ひとりごとの様に
「そこへいんだのやつたらな、元林院のげいこでもだあいと上げて、うちに電報爲替をいつてくる位やつたらまだましや」
と、この日運動會のあつた子にこの晩はこんなに當つた。
叔父はまた今晩は皆と寄席にとつぶやいた。自分は先手をとつて「これから僕は晩の俳句會に行きます」と云ひだした。
叔父は「よせに附合へ……さうか他はやめて今晩は僕につきあへ」とくりかへし、首肯かぬ自分を見ていささかヤな面持をした。東京より元の先生の見えたと曰ふ自分の詞は半分受取つた叔父は
「あさよか、君は先生やつたらそんなら行かんならん、この頃はもう先生やで。ぢやあ自動車で行け、自動車をよんでやるで先生らしくだあいとのりつけるのや」といつた。
自分はやられたが、叔母は正直に「自動車はいらん、東京の先生というて居るのやが」といつた。此方の行先きをきいた叔父はしつつこく
「では、繁二郎案内せよ」と、彼を立たせるのだつた。
二人外に出て、自分は「君はよいヨ」と曰うと、從弟は
「でも、云はれたんでそこの門口までいつて見て戻らんと、わるい」と曰つた。
電車内では、從弟はとなりの男の膝に上から覗きこんだ。開けた小謡本だつた。それは謡や生花を習ひかけた從弟、
と自分は心づいた。叔母は自分に繁二郎の謡や生花をやることはかう語つた「叔父さんはあれには何かなチすぎる、商

ひにぼんやりするのは他事に頭を用ふからやと曰ははるが、商ひとこれとはまた別やでなあ」と。

堂島のその宿屋の門口まで從弟はきた。自分は別れて、ひとりで上つた。

四

かもゐに貼紙に雜詠三句八時〆切とあり、そこにはざつと二十何人くつろいだ風で、句作半ばだつた。さきほどの委員□□□氏はそばに此方をいれる座席をつくり、自分はいれてもらつた。そこより四五人の肩越しのH師は、未だ一人食事中にて給仕の女を何か笑はせた。

さうしてそれからH師は悠くりと自らの句作の手帳は開けたがまた、手枕によこたはり寢てしまつた。例の夜の俳三昧には、句作中にひと寢いりする先生の習慣だ。

各自一枚の紙に、作句と名とを書きつけて、それらの句稿は順々に廻はされ、各自は互選した。目醒た先生は互選にはあづからずに句作した。

そして、委員の一人の手にかき集められた互選句はよみ上げられた。自分は、句作もせずに選句も出さずにのけ者の方だが、句のよみ上げられる折は、何かにこ〳〵と座の氣分と一つになつた。(かつて大阪の○○氏が「俳句會は、作る時の興味と他の人の句を見る時の興味と、よみ上げられる時の興味と、この三つの興味があつて、これは又しだいに高潮してくるのでなか〳〵面白い」といつたが、之は俳句を玩具にして居る者だと思ふが、この晩、互選句のよみ上げに浮き〳〵とした自分は、しばらくやらぬので、やはり心持は外れて俳句と離れた態度だつた。いやまた、座に興味氣分が多分にあつた)

やうやくH師は「僕の句も出さう」といつて書いてから、皆の句稿を見た。高點の句の評になり、自分の隣の□□□氏の作、銀杏落葉する阪下の砂利ふみたれてある、をH師は「この句は阪下は悶い、阪下りる、と身についていうとよい」と評した。□□□氏は直に首肯いた。その他皆いろ〳〵曰つた。例の能辯家は一人で五人前位口を出した。それは愛嬌はあつて一座を快活にさせた。神戸あたりよりきた若手の人々はぎろん家らしい。それは先生の曰ふ藝術、詩、さういふ詞につれて共々に六ケしく曰つた。自分は、藝術、藝術家、こんなことばは普段恐はくてえら曰はない男で、さういふ議論にはあづからなかつた。自分は座を外して廊下に出て、便所にゆきほつとした。息抜きに二三度便所に立つた。自分はいたづらに草疲れた。ぎろんの多いから云ふ會は先生はナンギだ。しかし先生はまたすきらしい。相手になられるそれは若々しい元氣さかんの心持だ。

自分の前にH師の句稿は廻つてきた。

紅葉見に來た人々と立交り書架たたみゐる

灯近く盆のビスケツトのしめりてある夜

紅葉日照る水べのさじき女と笑ひゐる

端居して酒をのむ燒鳥の皿に日當りゐる

四句あつて、自分は愼重によんだ。壓へつけた樣な把握だと思つた。力には感心した。なか〳〵の作家だ。この句に就てもぎろん家は議論したが、かけはなれて曰つてゐる樣でそれはしまひにはやはり降參させられた。

大方の人は立つて、自分はH師の方に席を移した。歸りかけた一人の男は「先生、先日のあれは」と曰うと「ウム、

持つてきて居ます」「ではお二階に行きませうか」と、先生とその男は他に行つて。それはこの頃の自筆百句選の用向きだらうと自分は思つた。

筆と墨を持つてきたH師は

「何か書くのなら、書かう、墨をすれよ」

と委員に向いた。

「否、けふは一切、先生もお疲れになるからと、その方は出さないやうに前に定めたんで」

と□□□は答へると、そばの消息通のUは曰つた。

「それはナ、H師の收入にいくらかなるのや、けふの樣な折りには註文があれば受取つといたらよかつた」

「それはあるにはあるが」

□□□は躊ためらつた。自分は

「先生は書きたがつてゐる、感興のある時書かせた方が」といつた。自分はこの頃の自筆百句選は未だ申込む資力はない男だが、一部ちよつとほしく思つた一人だ。

色紙や短冊は持ちこまれた。草疲れた□□□はざぶとんに仰向に寢て「あすは會社を休む、あすの晩は早く來て作ろ！」と、もう一夜の俳三昧のことを他にいつた。そして終電車の頃皆歸つていつた。

「寒くなつた」と、H師は女中に酒一本運ばせて、自分と差向ひになつた。H師は、自分の家庭や子供や、國の老父のことをたづねて

「さうか、もう七十二になるかな」といつて

「お国にはJが居るからまあ安心だろ、君の代理をJはまあつとめてくれるだろ、が、Jの身の上に若何事か變事のあつた場合、君はお国に老人一人おいて措けないね、その時は考へる必要が起ると思ふね、まあJの無事で居てくれる間は安心だ」といつた。H師は自分の國の俳人Jの人物に左う信頼をもつた。

それからH師は立つて、展べてある半切にまたがつて、何とか慈善團の註文の四季の俳句四枚書いた。H師は一枚書上ると、女中にさしづして、擴げた新聞紙の上に、ぬれたそれは移させた。

「オイ、その上にまた新聞を重ねて擴げるんだ、さうおけばよい、左うだ〳〵」

「へイ〳〵恐はい」と、女中は一一いはれてさうした。

「これはあす、〇〇新聞社のこの名刺の人が取りにくるから渡せよ」と、半切に添つた名刺は女中にやるといつた。

「さよか、まあ恐はい〳〵」

といつた。草疲れた女中は、筆の洗ひ方がわるいと洗ひ直させられて、又「こわい〳〵」とおどけた。

H師は自分に、今晩は玆にとまれとすゝめたが、自分は何うせうかと思ひ思ひ。

「叔父の宅はあけてある筈で」と曰つて別れた。

五

自分は從弟と、自分らの餘技の大工道具を買ひに出て歩いて行つた。松屋町を南へ向いた。朝の街は、何でもないが何かきれいに見えた。

自分は歩きながらならんだ肩の低い從弟のことを思つた——商ひに役立たぬのはさういふ生れつきなら怒る方が無代

だつたが、イツモ役に立たぬと曰はれていぢめられたが、從弟は辛抱づよかつた。小心で正直の從弟は叔母の子になりもう戻れないと極つた工合だつた。大工の子の時分と比べて、三年目に二百圓餘の貯えや時候の衣類持物はふへたにしろ、それだつて從弟は自分勝手にされぬやうなものなんだ。

自分は從弟はいた〳〵しく目に映つた。從弟は、未だこなれぬ大阪辯だつた——謡や生花や、所持の小さい雅帖に寺々の朱印をうけたり、そんな風の悠くりした所のある從弟だ。自分は、俳句は云へばやる氣になる從弟だと思つた。俳句會などに云へば出かける從弟だと思つた。（純粋の俳句はなぐさみ物ではなからうが、この第何義かの使命はこの從弟のやうな男の心持を安めるものだ。いや、慰安よりもこれは或る精神の糧、力になると思ふ。この功利的な考へはその第一義ではないにしろ）

從弟は、この悠くりした心持からつらい日常生活に耐へ辛抱づよいのだつた。それは心持の安全瓣を一寸持つた男だ。

二人は、二ツ井戸の大工道具店にはいつた。從弟は、鉋は値段の安いやつをとつた。自分は從弟に任せたわけで只見て居た。鉋二丁とノミ二丁は午後一時までに刃をつけると曰はれてそこにあづけておいた。

また、西の方の千代崎橋の舟大工道具うる金物店に西洋斧があるといはれて行つたが、そこでは、これは短艇などに備附ける飾りの様なもので、切れ味はこれよりこれがよいと日本物の斧を出されて、自分はそれにした。短い柄のそれは自分共の國では何とか名を曰つたと自分は思ひ、從弟はこれは「マンキチ」と國でよぶと曰つた。

此橋詰の家を出て、東へ向ひて街を歩いた。從弟は路々、

「値段は安かつたがさき程買つた鉋はどうかしら」と迷つた。そして、

「鉋は實際まのものでよいのに當ればよくきれるけれど。よく用ひこんだ古は刃金があればよくきれます」とこんなに曰つて、律義な從弟は任されたことには心を用つた。

自分は、大工道具は揃ひ何か手造りのやれるたのしみがあつた。繁二郎には「ありがたう、こゝでよいから」と、大丸の角で別れるのだつたり氣のよい從弟は用事のすんだ所でそんなにして還やせるのだつた。

（十五年三月）



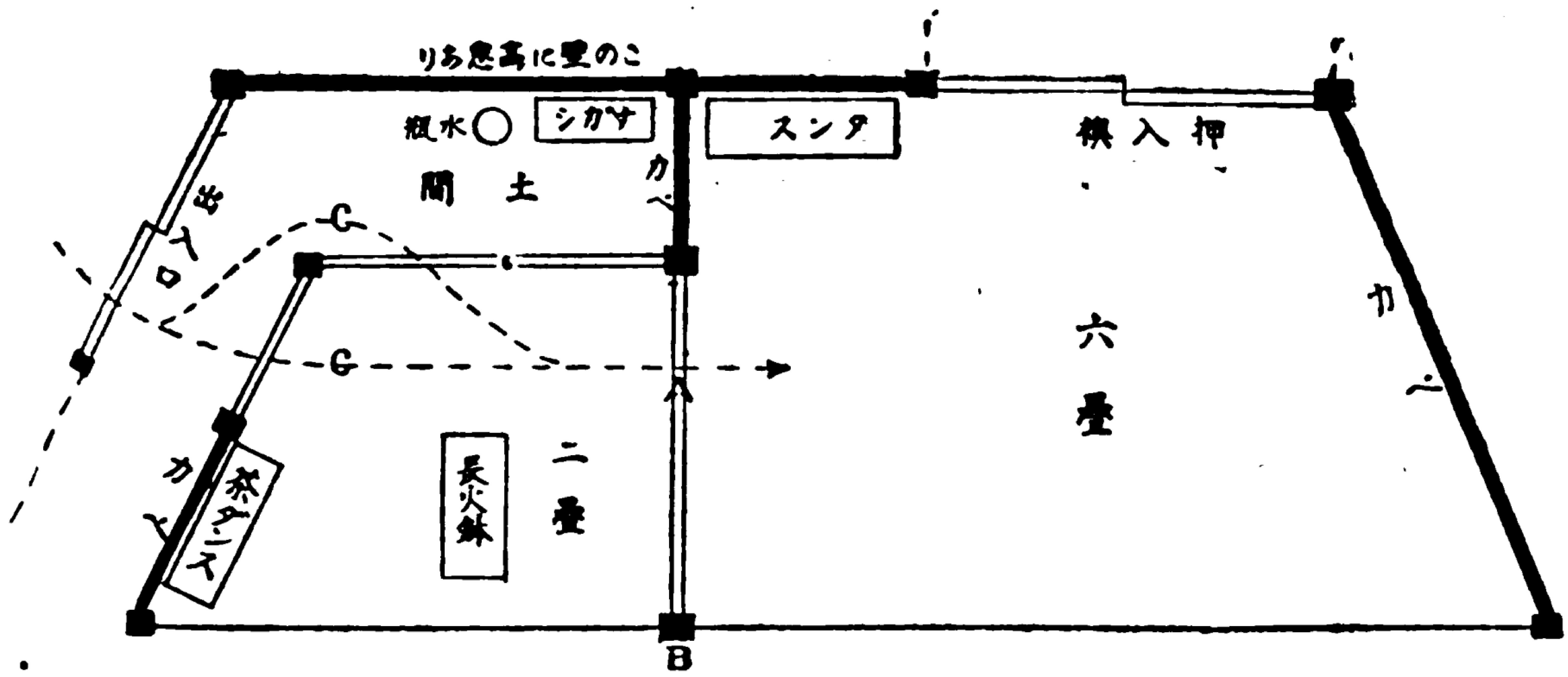
戯曲 たのむ（一幕）

里見弴

時――現代。

人――内田助次郎。五十五六。
かつ。四十三四。
爲吉。三十二三。
豫審判事。五十位。
檢事。四十五六。
裁判所書記。三十四五。
警部。四十位。
近所の男。四十位。
その他、刑事、甲、乙。巡査。高窓から覗き込む子供の顔。

景――上手、六疊ほどの部屋。正面に一間の押入。襖は、切張りや腰張りでさん〴〵に繕（つくろ）つてあつて、その繕ひに用ゐた紙も、時代



この隔、敷居ばかりにて、障子も襖もなし。

B　この柱、芝居心にて、とりて差支なし。

C　登場人物の通過路を示す。

も、區々まち〳〵であるが、なかに、最近貼つたらしい新聞紙の箇所だけ、やゝ白く目立つ。

その下手、三尺折り廻しの壁際によせて、古ぼけた箪笥。上には行李が載せてあり、汚しく散かつてゐる。横手の壁には、脱ぎ捨てた着物、印絆纏などがひつ掛けてある。續いて下手、舞臺端によせて二疊。粗末な、舊い長火鉢、同じやうな茶箪笥。

その奥、土間の臺所のこゝろにて、流し、水瓶、その他臺所道具が、貧しく置いてある。突當りの壁に吊り棚、高窓あり。

この土間を下手に出づれば、すぐ出入口のこゝろ。(そこも、東の見物席の一部分からは見えるわけゆゑ、それらしく飾るもよし、また、ほかになんとか方法をとるもよし、兎に角、西の見物からは見えないところゆゑ、そこで芝居があつてはならない。)

尚、念のため上圖を參照せられたし。

たれは、上下左右とも、黒にて包むこと。

總て、貧民窟にある、ひどい長屋建の内部の態。

秋雨のそぼ降る十月上旬。白ツぽい、陰氣な光が、高窓と、出入口の方から、僅にさし込んで來るこゝろ。

故に、設光の灸所は、雨の日の、午後二時頃の「暗さ」を現すにあり。つまり薄暗いながらに、夕方にあらず、まして夜にならない工風が肝心なり。

幕あくと、長火鉢の上に、爲吉が胡坐で、剝げちよろけた能代膳を控へ、手酌で飲んでゐる。髭の濃い、逞しげな、そして鼻ツぱりの強さうな男。素袷に絆纏、といつても、粋になつてはいけない。いゝ男でも、また特別醜男でもない、普通の勞働者。

かつ。うしろ向きに、流しもとで漬物を刻んでゐる。洗ひざらした黒地のゆかたに絆纏。赤球の簪にぐる〳〵と捲きつけた束髪。眉を剃した、でつぷりと大きな女。

そとには、溝板の上を行く足音、遠く、カーブを行く電車の軋。じめ〳〵した、陰氣くさい靜かさ。

爲吉。（長火鉢の藥鑵に徳利をつけて、燗をし直しながら、勞れた、ものうげな聲で獨語つ。）なるほど、ちぎる秋なすび…。

かつ。（それをうけて、）もうとても刻まないぢア食べられないよ。生薑があると、おろしてかけるとうまいんだがねえ。

爲吉。買つて來ねえな。

かつ。買つて來ようか。序にお酒も……、(こゝんで、見物には見えないところで、貧乏徳利を振つてみる。)……あゝ、まだ一本や二本はありさうだ。
爲吉。ぢア、まアいゝやな。
かつ。(默つて刻んでゐる。)
爲吉。(せうことなしの出鱈目を云ふ。)生薑、生薑か……。生薑なすびに……火事、親爺か……。
かつ。(笑ひ聲ながら、ほき出すやうに、)なアにを……。
爲吉。(我ながら少し可笑しく、上機嫌になつて、)もういゝ加減にして來ねえな。
かつ。お待ちよ。いますぐだから。
爲吉。(盃を充さうとするが、すぐなくなる。綺麗に滴を切つてから、手を延し、土間からの上り端へ押しやりながら、)ぢア、こいつも序に……。
かつ。なんだい。(ト、振り向き、)あいよ。ぢア、こいつはそつちに取つとくれ。(ト、引き代へに漬物の小鉢を渡す。――土間を引きづる足駄の音。)
爲吉。(うけ取るために、延びだした拍子に出入口の方を見て、)なんだ、ちつと明るくなつて來たんぢやアねえか。(ト頭を低くし、土間から空を見あげるこなし。)
かつ。さうかい。(德利に酒を注いでゐる。)
爲吉。さうかいぢアねえよ、冗談ぢやねえ。(急に本氣になつて、そこらの下駄を突ッかけ、門口まで空模樣を見に出かけながら、)土方殺すにや刃物は要らぬつてな……。

かつ。(酒を注ぎ終り、すぐ頭の上の高窓から空を見る。)此月だよ、おんなじこつたよ。

爲吉。(姿は殆ど見えず。)降つてるか。(立つけの惡い出入口の戸を、ガタ〲と引きあける音。)あ、なアるほど……。飽きもしねえで、感心によくもまア降りやアがるな。(下駄を引づつて歸つて來る。)土方殺すにや刃物は要らぬ、か。

かつ。(このうち二疊へあがり、長火鉢の下に坐つて、徳利を藥鑵につけたり、火をいじつたりしてゐるが、輕く節をつけてあとをとる。)雨の三日も降ればよーい、と。

爲吉。(もとの座へ直りながら、)何がいゝことがあるもんか。だらしがねえ、雨なんぞに殺されて……。

かつ。まアいゝやね。落ついてぶら〲しといでよ。

爲吉。……てえほどの御身代でもあるめに……。(シュッと音をさせて盃を吸ひ、かつにさす。)

かつ。お待ちよ。(うけた盃を猫板の上に置き、徳利の尻にさわつてみてから、)よささうだね。(ト、手酌で注がうとする。)

爲吉。(手を伸して奪ひとり、酌をしてやりながら、)おめえ、爺さん爺さんつて安く云ふけれど、然しなんだぜ、今時倖を引いて、箪笥の一つも据えやうてえなア、どうして、なか〲生優しい藝當ぢアねえぜ。

かつ。馬鹿におしでないよ。あれだつて、これだつて、(ト、六疊の箪笥の方へ顎をしやくり、長火鉢の縁を手の平で叩いて、)もと〲あたしのもんだもの。永年つれ添つちアゐたけれど、その間に、なくなされたものこそあれ、何一つ、――普段着一枚こさへて貰つたことなんぞありやアしないよ。(飲んで、盃を返し、酌をしてやる。)

爲吉。なアるほどね。てえしたもんだ。

かつ。何がさ。

爲吉。そんな働きのねえ男でも、なア、亭主となりやア矢ッ張りそれ……。(盃を口へ持つて行く。)

かつ。馬鹿々々しい、よしとくれよ。

爲吉。だつて、さうぢやねえか、永年つれ添つたつて云ふぢアねえか。(飲む。)

かつ。それアお前、さうだよ。(もう一度盃をよこすことを豫期しきつてゐる手つき。にも拘らず、膳の上へ置かうとするので、)ちよいと、おくれなね。

爲吉。うるせえな。もう一つ出したらいゝぢアねえか。(とは云ふものゝ、さす。)

かつ。(酌をさせ、一口飲むと、身をひねつて、すぐうしろの茶箪笥から、もう一つ別な盃を出して相手に渡し、注いでやつてから、さてといふ風に話の續きにかゝる。)それアね、いくらどじでも唐變木でも、亭主となりア仕樣がないやね。なんてつたつて、それア矢ツ張り女は……。

爲吉。チエツ。(舌をうち、横を向く。)

かつ。いゝえさ、さういふわけぢやないけどさ、――つまり、あたしの云ふなアお金のことだよ。それア、上を見ればほうづがないが、まアこつちとら相應に、その日その日の食ひものをあてがつてくれりやア、それでまアいゝとしなきアなんないからね。

爲吉。それに、その爺さんてのは、よつぱど働きもんだつたに違えねえ。十年前なら兎も角も、この不景氣に、――おまけに電車自動車の世の中だ、どうしておめえ、朦朧のよぼ〳〵爺が、夜ツぴてまご〳〵して歩いて見たところで、これだけの世帶は張りきれるわけのもんぢやねえ。

かつ。(多少得意げな氣持で、)それアね、いゝ按配に子供もなかつたし、世間の嬶と違つて、たまにアちよいとした椋鳥もひつかゝつたからね……。

爲吉。だつておめえ、薄白痴(うすばか)だつてえぢアねか。

かつ。だからさ、世の中は面白いもんでね、うちの薬碾爺さんみたいた、お人好しの甘ちやんでも、下にやア下があるとみえて、お花見時分なんぞにやア、時たまいゝ仕事をして來つたつけよ。……これだつてまア、二三年前までの話だけれど……。（微ながら懷舊の情うごく。）

爲吉。（易(たやす)くその情合にほだされると、忽ち義憤めいた氣持で詰(なじ)ついて來る。）そンだけの稼人(かせぎにん)で、おまけにおめえにやア、からもう目がなかつたてえのに、……だから、女なんてえもなア……。

かつ。だつて、それア お前……。（云ひ遁るのではなく、擧げるべき理由が、てんからおたまにない、と云つた風な口の喋(しやべ)み方。）

爲吉。（暫く答を待つてから、）だつて……。どうだつてんだい。

かつ。（促されるまゝに、ふと思ひついた言葉を擲り出す。）だけど、それア お前、……ふとした出來心だアね。

爲吉。（そんな出來合の答でも、あやふやに正義感がおさまりかけて、）うん、（ト、考へ込みながら、盃を口へもつて行き、）どうも、まア、それも……。

かつ。（調子に乘つて、）時のひようりで仕樣がないやね。何も惡い氣で、……爺さんをおツぽつて、なんでもかでもその男と一緒にならうのなんのつて、そんな深い謀計(たくみ)があつたわけぢやなしさ、なアにお前、どこのおかみさんだつて、そんな話の二つや三つ……。

爲吉。（うるささうに、）わかつたよ！

かつ。（益々圖に乘つて、）この節ぢア、自動車で乘り歩いてるやうな、いゝとこの奥さんたちだつて、ちつともおてにや

ァならないつてんだもの、ましてやお前、こしとら社會であつてみりやア……。

爲吉。うるせえな！　わかつたつてえのに……。(ふと陰欝になつて、グビ／＼酒を飲む。)

かつ。(引き込まれて、これも陰氣な氣持になり、ぼんやり考へ込んで了ふ。)

爲吉。(ふと、氣を變へて、)で、これからさき、おめえ、一體、どうしてやつてくつもりなんだ。

かつ。(それに就いての考へに耽つてゐるのでもなく、たゞ默つてゐる。)

爲吉。爺さん、裁判がうまく行つて、命だけは助つたところで、どうせその年齡(とし)ぢア、もう二度、娑婆を見る氣遣(きづかひ)はねえんだから、おめえだつて、こゝでなんとか思案をつけとかねえぢア……。

かつ。(ふと我に返つたやうに、)それア大きにさうなんだよ。

爲吉。だから、どうする氣だつてえんだよ。

かつ。(本能的な媚が、突然、顏や體に現はれて來る。)爲さん、今更お前、そんなこと……。

爲吉。そんなこと、つて、おらア何も……。この先おめえの……。

かつ。だからさア、何もどうしてくれのかうしてくれのつて、あたしやそんなむづかしいこたア云やアしないよ。たゞね、こんな婆さんでも、一緒にゐてやらうと思つてくれるんなら……。

爲吉。それアいゝが、おらにやア、とてもこんだけの世帶(しよたい)は、張り通せる氣づけえはねえし……。

かつ。なんだねえ、そんなこと！　あたしやア、……お前さんさイいつまでもあたしをほツぽり出さないでゐてくれりやア、假令(たとひ)……。

爲吉。(急に冷淡になる。)フヽンだ！

かつ。何が、フヽンだよ。

爲吉。爺さんに殺つけられた野郎も、さだめし、たんとそいつを聞かされたんだらう。

かつ。(勝ち誇つた笑。)やいてるよ！

爲吉。(慍りツぽく。)誰がくそ、てめえみてえな……。

かつ。(負けてゐずに、むツとする。)なら、いゝぢやねえか。よしんばあたしが、――養つてくれてがなくつて、明日が日のたれ死をしようと、何もおめえは、ほツときアいゝこつた。な、な、なにもそんな、嫌はれてまで、おらアおめえの世話にならたア思やアしねえし、第一、おめえ、こゝに轉がり込んで來てから、一ン日だつて仕事に出たことがあるかい。みんなおらが……。(涙聲になる。)爺さんが、食ふものも食はずに、好きな酒も我慢して……。

爲吉。(感動しやすく、すぐ折れて、宥めにかゝる。)だからよ……、何も……。

かつ。(ゆかたの袖口で涙を拭きながら、)よく、爺さんがさういつたつけ、――おめえとおらとは、ひと周りの上も年齢は違ふし、永年夜働きをして、おらア大ぶ體も損じてるから、どうせ一足お先に死ななきア ならねえ、さうなつたあとで、おめえがもう一度男をもたうとどうしようと、先だつものは金だ。金せえありや [illegible] の中、ど[illegible]でも切りぬけて行かれるもんだ、つてさう云つてさ、どんなに苦しい時でも、その日／＼の[illegible]に[illegible]ちん／＼とお前、一割づゝは、あたしの名前で、郵便局に積んどいてくれたんだよ。その……

爲吉。わかつたよ。だから、俺だつて、毎ン日空模様ばかり氣にしてるんだけれど、これぢやアおめ[illegible]

かつ。……さういふ、血の出るやうなお金だつて、爲さん、あたしやアお前のためなら……。

爲吉。わかつたよ。もういゝぢやアねえか。……だから、天氣になりしでえ、稼ぎに出りやアいゝんだ[illegible]

おめえ、世間にやア、五人十人子供を拵えたつて、どうやらかうやらやつてつてる人だつていくらもあるんだ。おめえ一人ぐれえ、いくらおらだつて、まさかひぼしにもしやアしめえぢやねえか。なア、安心してねえ、安心してねえ。

かつ。（忽ち感激して、）爲さん！

爲吉。まアいゝやな、いつぺえいかう。（ト、ガブリとあけてさす。）

かつ。（嬉しさうにうけて、）ほんとに爲さん、いつまでもその氣でね……。

爲吉。でえじようぶだよ！

かつ。お前は飽性らしいから……。

爲吉。そんなこたアねえよ。

かつ。おまけに、男ぶりはいゝし、若いんだし……。

爲吉。おだてるない！　この雨をくらつちア、自由勞働者は、はゞかンながら、逆に振られたつて鼻血も出ねえや。

兩人、和み笑ふ。

この時、出入口の戸の、亂暴に引きあけられる音。正服、外套の巡査、頭巾をはねのけながら入り來り、土間に立つ。

巡査。内田、……てのは、お前ンとこかね？

かつ。へえ。（答へながら、恐る〳〵立つて行き、突膝で應對する。）

巡査。これから、こゝで實地檢證があるから……。

かつ。(意を解せざる體。)
巡査。裁判所から判檢事の方々もお見えになるんだから、萬事粗忽のないやうにな……。
かつ。(ピョコ〳〵と頭をさげるばかりで、なほ意を解せず。)
巡査。一體、お前、誰かね?
かつ。(憶して答へられない。)
巡査。犯人の妻かね?
かつ。内緣で御座います。(ト、頭をさげる。)
巡査。あすこにゐる男は?
かつ。へえ……、(もじ〳〵して、)親籍の者で、爲吉と申します。
巡査。(女では埒があかないといふ風に、今度は爲吉の方へ話しかける。)實地檢證といふのはね、犯人をつれて來て、實地で、犯罪の模樣を詳しく取調べることだ。解つたか。
爲吉。(それより前に、坐り直して、長火鉢の前から巡査の方に向つて、兩手を膝に、キチンとかしこまつてゐるが、話しかけられると、一々頷いて聞く。)へえ、解りました。
巡査。もうすぐこゝへお見えンなるが、判檢事の方々に對しては、よく謹んで、……もしなんかお訊きんなつたら、正直に、言葉を謹んで、ハキ〳〵と、よくわかるやうに申しあげなきアいかんよ。いゝか、解つたな。
爲吉、頷く。巡査、去らうとする。かつ、追ひ縋るやうに言葉をかける。
かつ。(恐る〳〵、)犯人と申しますと?

だつたが、イツモ役に立たぬと曰はれていぢめられたが、從弟は辛抱づよかつた。小心で正直の從弟は叔母の子になら
もう戻れないと極つた工合だつた。大工の子の時分と比べて、三年目に二百圓餘の貯えや時候の衣類持物はふへたにしろ、それだつて從弟は自分勝手にされぬやうなものなんだ。

自分は從弟はいたく〱しく目に映つた。從弟は、未だこなれぬ大阪辯だつた――謠や生花や、所持の小さい雅帖に寺々の朱印をうけたり、そんな風の悠くりした所のある從弟だ。自分は、俳句は云へばやる氣になる從弟だと思つた。俳句會などに云へば出かる從弟だと思つた。（純粹の俳句はなぐさみ物ではなからうが、この第何義かの使命はこの從弟のやうな男の心持を安めるものだ。いや、慰安よりもこれは或る精神の糧、力になると思ふ。この功利的な考へはその第一義ではないにしろ）

從弟は、この悠くりした心持からつらい日常生活に耐へ辛抱づよいのだつた。それは心持の安全瓣を一寸持つた男だ。

二人は、二ツ井戸の大工道具店にはいつた。從弟は、鉋は値段の安いやつをとつた。自分は從弟に任せたわけで只見て居た。鉋二丁とノミ二丁は午後一時までに刄をつけると曰はれてそこにあづけておいた。

また、西の方の千代崎橋の舟大工道具うる金物店に西洋斧があるといはれて行つたが、そこでは、これは短艇などに備附ける飾りの樣なもので、切れ味はこれよりこれがよいと日本物の斧を出されて、自分はそれにした。短い柄のそれは自分共の國では何とか名を曰つたと自分は思ひ、從弟はこれは「マンキチ」と國でよぶと曰つた。

此橋詰の家を出て、東へ向ひて街を歩いた。從弟は路々、

「値段は安かつたがさき程買つた鉋はどうかしら」と迷つた。そして、

「鉋は實際まのものでよいのに當ればよくきれるけれど。よく用ひこんだ古は刄金があればよくきれます」とこんなに曰つて、律義な從弟は任されたことには心を用つた。

自分は、大工道具は揃ひ何か手造りのやれるたのしみがあつた。繁二郎には「ありがたう、こゝでは、[illegible]

[illegible]



戯曲

たのむ（一幕）

里見弴

時――現代。

人――内田助次郎。五十五六。

かつ。四十三四。

爲吉。三十二三。

豫審判事。五十位。

檢事。四十五六。

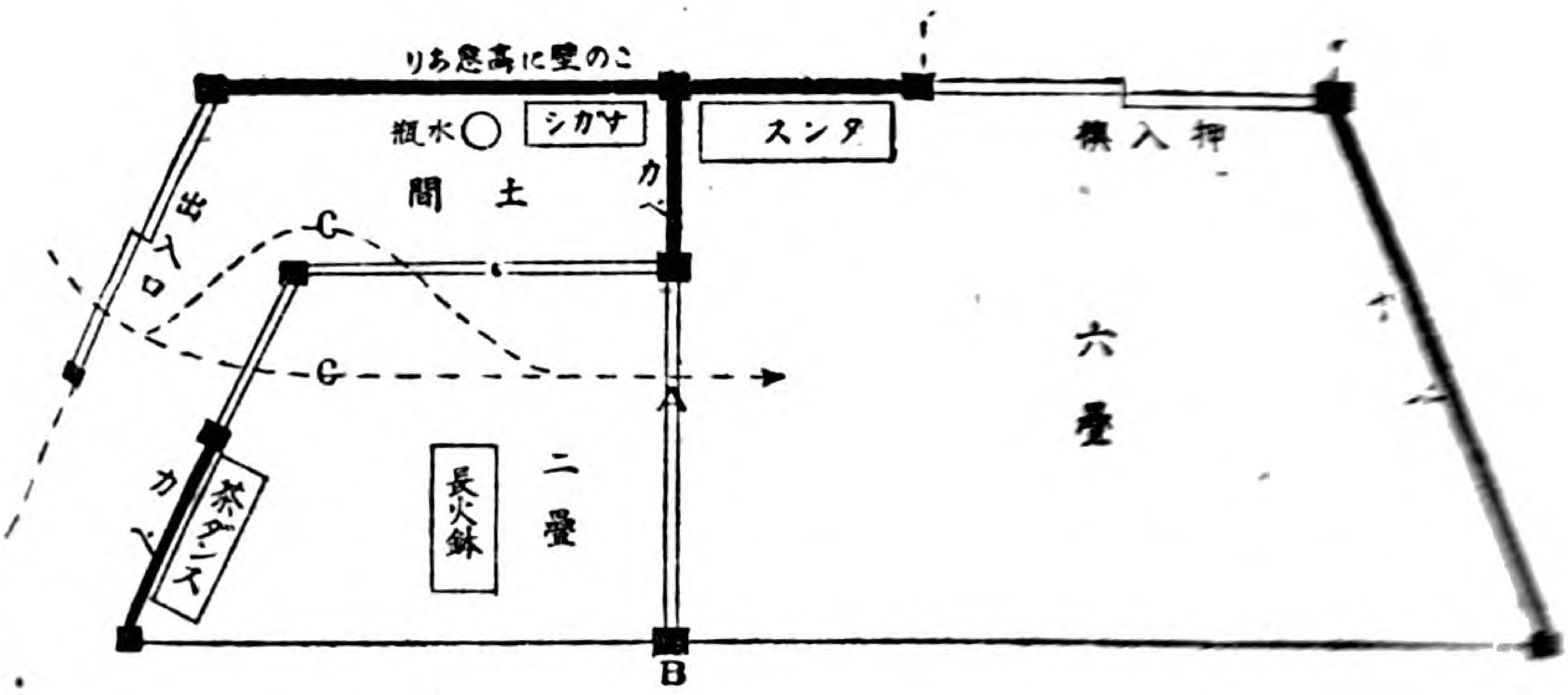
裁判所書記。三十四五。

警部。四十位。

近所の男。四十位。

その他、刑事、甲、乙。巡査。高窓から覗き込む子供の顔。

景――上手、六疊ほどの部屋。正面に一間の押入。襖は、切張りや腰張りでさん／＼に繕（つくろ）つてあつて、その繕ひに用ゐた紙も、時代



B　この柱、芝居心にて、とりて差支なし。

C　登場人物の通過路を示す。

ある。續いて下手。

長火鉢、同じ

その奥、土間の

臺所道具が、貧しく置いて

高窓あり。

この土間を下手に出

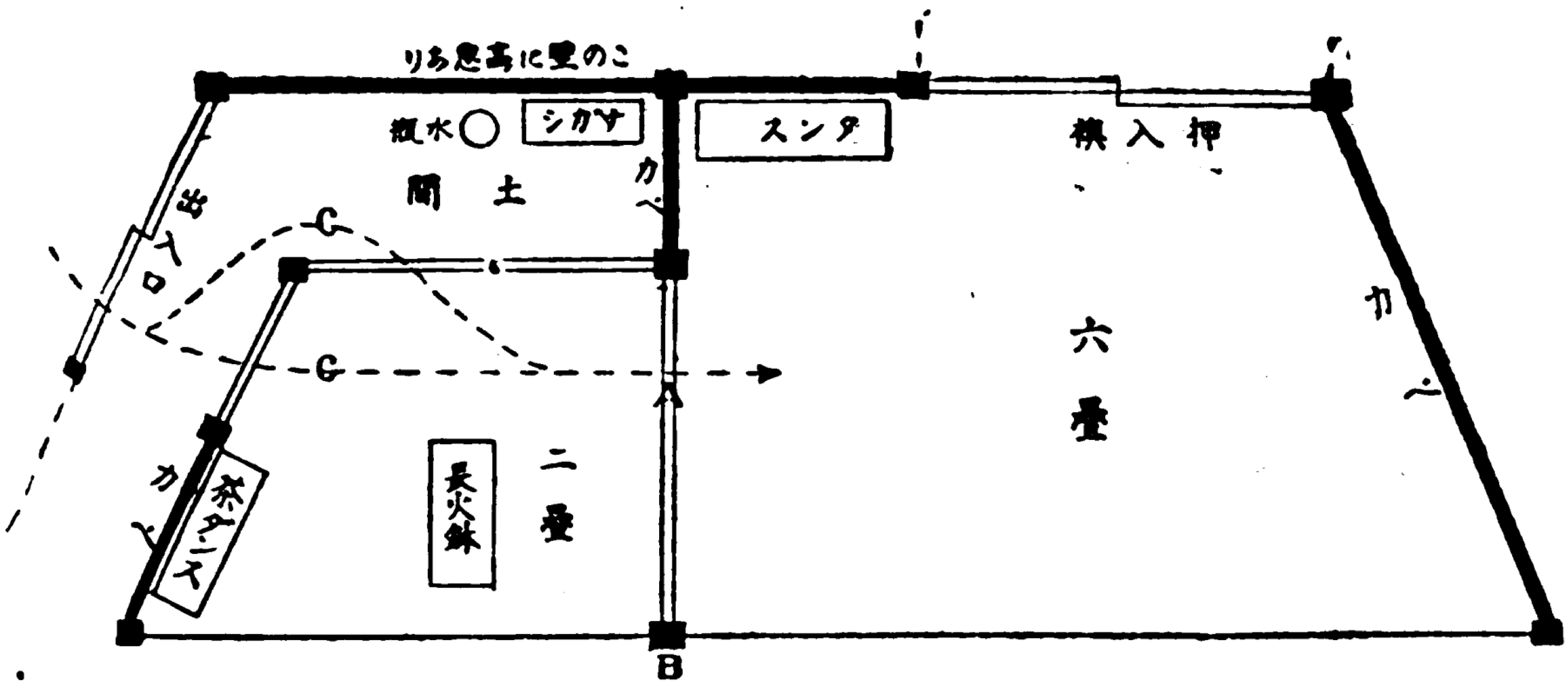
も、東の見物席の一部分

しく飾るもよし、また、ほかに

し、兎に角、西の見物からは見え

で芝居があつてはならない。)

尙、念のため上圖を參照せられたし。



この隔、敷居ばかりにて、障子も襖もなし。

B　この柱、芝居心にて、とりて差支なし。

C　登場人物の通過路を示す。

も、區々まち〳〵であるが、なかに、最近貼つたらしい新聞紙の箇所だけ、やゝ白く目立つ。

その下手、三尺折り廻しの壁際によせて、古ぼけた箪笥。上にも行李が載せてあり、汚しく散かつてゐる。横手の壁には、脱ぎ捨てた着物、印絆纏（しるしばんてん）などがひつ掛けてある。續いて下手、舞臺端によせて二疊。粗末な、舊い長火鉢、同じやうな茶箪笥。

その奥、土間の臺所のこゝろにて、流し、水瓶、その他臺所道具が、貧しく置いてある。突當りの壁に吊り棚、高窓あり。

この土間を下手に出づれば、すぐ出入口のこゝろ。（そこも、東の見物席の一部からは見えるわけゆゑ、それらしく飾るもよし、また、ほかになんとか方法をとるもよし、兎に角、西の見物からは見えないところゆゑ、そこで芝居があつてはならない。）

尚、念のため上圖を參照せられたし。

たゞは、上下左右とも、黒にて包むこと。

總て、貧民窟にある、ひどい長屋建の内部の態。

秋雨のそぼ降る十月上旬。白ッぽい、陰氣な光が、高窓と、出入口の方から、纔にさし込んで來るこゝろ。

故に、設光の灸所は、雨の日の、午後二時頃の「暗さ」を現すにあり。つまり薄暗いながらに、夕方にならず、まして夜にならない工風が肝心なり。

幕あくと、長火鉢の上に、爲吉が胡坐で、剝げちよろけた能代膳を控へ、手酌で飲んでゐる。髭の濃い、逞しげな、そして鼻ッぱりの強さうな男。素袷に絆纏、といつても、粋になつてはいけない。いゝ男でも、また特別醜男でもない、普通の勞働者。

かつ。うしろ向きに、流しもとで漬物を刻んでゐる。洗ひざらした黒地のゆかたに絆纏。赤球の簪にぐる〱と捲きつけた束髮。眉を剃した、でつぷりと大きな女。

そとには、溝板の上を行く足音、遠く、カーブを行く電車の軋。じめ〱した、陰氣くさい靜かさ。

爲吉。（長火鉢の藥鑵に徳利をつけて、燗をし直しながら、勞れた、ものうげな聲で獨語つ。）なるほどちぎる秋なすび……

かつ。（それをうけて、）もうとても刻まないぢア食べられないよ。生姜があると、おろしてかけるとうまいんだがねえ。

爲吉。買つて來ねえな。

かつ。買つて來ようか。序にお酒も……、(こゝんで、見物には見えないところで、貧乏徳利を振つてみる。)……お
まだ一本や二本はありさうだ。

爲吉。ぢア、まアいゝやな。

かつ。(默つて刻んでゐる。)

爲吉。(せうことなしの出鱈目を云ふ。)生薑、生薑か……。生薑なすびに……火事、親爺か……。

かつ。(笑ひ聲ながら、ほき出すやうに、)なアにを……。

爲吉。(我ながら少し可笑しく、上機嫌になつて、)もういゝ加減にして來ねえな。

かつ。お待ちよ。いますぐだから。

爲吉。(盃を充さうとするが、すぐなくなる。綺麗に滴を切つてから、手を延し、土間からの上り端へ押しやりながら、)
ぢア、こいつも序に……。

かつ。なんだい。(ト、振り向き、)あいよ。ぢア、こいつはそつちに取つとくれ。(ト、引き代へに漬物の小鉢を渡す。—
—土間を引きづる足駄の音。)

爲吉。(うけ取るために、延びだした拍子に出入口の方を見て、)なんだ、ちつと明るくなつて來たんぢやアねえか。(ト
頭を低くし、土間から空を見あげるこなし。)

かつ。さうかい。(徳利に酒を注いでゐる。)

爲吉。さうかいぢアねえよ、冗談ぢやねえ。(急に本氣になつて、そこらの下駄を突ツかけ、門口まで空模樣を見に出か
けながら、)土方殺すにや刃物は要らぬつてな……。

かつ。（酒を注ぎ終り、すぐ頭の上の高窓から空を見る。）新月だよ。おんなじこつた。

為吉。（姿は殆ど見えず。）降つてるか。（建つけの悪い川入口の戸を、ガタ／＼と引きあける音。）あ、なアるほど……。飽きもしねえで、感心によくもまア降りやアがるな。（下駄を引づつて歸つて來る。）土方殺すにや刃物は要らぬ、か。

かつ。（このうち二疊へあがり、長火鉢の下に坐つて、徳利を藥罐につけたり、火をいじつたりしてゐるが、輕く節をつけてあとをとる。）雨の三日も降ればよーい、と。

為吉。（もとの座へ直りながら、）何がいゝことがあるもんか。だらしがねえ、雨なんぞに殺されて……。

かつ。まアいゝやね。落ついてぶら／＼しといでよ。

為吉。……てえほどの御身代でもあるめに……。（シユツと音をさせて盃を吸ひ、かつにさす。）

かつ。お待ちよ。（うけた盃を猫板の上に置き、徳利の尻にさわつてみてから、）よささうだね。（ト、手酌で注がうとする。）

為吉。（手を伸して奪ひとり、酌をしてやりながら、）おめえ、爺さん爺さんつて安く云ふけれど、然しなんだぜ、今時倅を引いて、簞笥の一つも据えやうてえなア、どうして、なか／＼生優しい藝當ぢアねえぜ。

かつ。馬鹿におしでないよ。あれだつて、これだつて、（ト、六疊の簞笥の方へ顎をしやくり、長火鉢の縁を手の平で叩いて、）もと／＼あたしのもんだもの。永年つれ添つちアゐたけれど、その間に、なくなされたものこそあれ、何一つ、――普段着一枚こさへて貰つたことなんぞありやアしないよ。（飲んで、盃を返し、酌をしてやる。）

為吉。なアるほどね。てえしたもんだ。

かつ。何がさ。

為吉。そんな働きのねえ男でも、なア、亭主となりやア矢ッ張りそれ……。（盃を口へ持つて行く。）

かつ。馬鹿々々しい、よしとくれよ。

爲吉。だつて、さうぢやねえか、永年つれ添つたつて云ふぢアねえか。(飲む。)

かつ。それアお前、さうだよ。(もう一度盃をよこすことを豫期しきつてゐる手つき。にも拘らず、膳の上へ置かうとするので、)ちよいと、おくれなね。

爲吉。うるせえな。もう一つ出したらいゝぢアねえか。(とは云ふものゝ、さす。)

かつ。(酌をさせ、一口飲むと、身をひねつて、すぐうしろの茶簞笥から、もう一つ別な盃を出して相手に渡し、注いでやつてから、さてといふ風に話の續きにかゝる。)それアね、いくらどじでも唐變木でも、亭主となりア仕様がないやね。なんてつたつて、それア矢ツ張り女は……。

爲吉。チエッ。(舌をうち、横を向く。)

かつ。いゝえさ、さういふわけぢやないけどさ、――つまり、あたしの云ふなアお金のことだよ。それア、上を見ればほうづがないが、まアこつちとら相應に、その日その日の食ひものをあてがつてくれりやア、それでまアいゝとしなきアなんないからね。

爲吉。それに、その爺さんてのは、よつぱど働きもんだつたに違えねえ。十年前なら兎も角も、この不景氣に、――おまけに電車自動車の世の中だ、どうしておめえ、朦朧のよぼ／＼爺が、夜ツぴてまご／＼して歩いて見たところで、これだけの世帯は張りきれるわけのもんぢやねえ。

かつ。(多少得意げな氣持で、)それアね、いゝ按配に子供もなかつたし、晝間の稼と違つて、たまにアちよいとした椋鳥もひつかゝつたからね……。

爲吉。だつておめえ、薄白痴だつてえぢアねか。

かつ。だからさ、世の中は面白いもんでね、うちの若旦那さんみたいた、お人好しの甘ちやんでも、下にやア下があるとみえて、お花見時分なんぞにやア、時たまい丶仕事をして來つたつけよ。……それだつてまア、二三年前までの話だけれど……。（微ながら懐舊の情うごく。）

爲吉。（易くその情合にほだされると、忽ち義憤めいた氣持で許ついて來る。）そンだけの稼入で、おまけにおめえにやア、からもう目がなかつたてえのに、……だから、女なんてえもなア……。

かつ。だつて、それァお前……。（云ひ遁るのではなく、擧げるべき理由が、てんからおたまにない、と云つた風な口の喋み方。）

爲吉。（暫く答を待つてから、）だつて……、どうだつてんだい。

かつ。（促されるまゝに、ふと思ひついた言葉を擲り出す。）だけど、それァお前、……ふとした出來心だァね。

爲吉。（そんな出來合の答でも、あやふやに正義感がおさまりかけて、）うん、（ト、考へ込みながら、盃を口へもつて行き、）どうも、まァ、それも……。

かつ。（調子に乘つて、）時のひようりで仕樣がないやね。何も惡い氣で、……爺さんをおツぽつて、なんでもかでもその男と一緒にたらうのなんのつて、そんな深い謀計があつたわけぢやなしさ、なアにお前、どこのおかみさんだつて、そんな話の二つや三つ……。

爲吉。（うるささうに、）わかつたよ！

かつ。（益々圖に乘つて、）この節ぢア、自動車で乘り歩いてるやうな、い丶とこの奥さんたちだつて、ちつともおてにや

アならないつてんだもの、ましてやお前、こしとら社會であつてみりやア……。

爲吉。うるせえな！　わかつたつてえのに……。（ふと陰鬱になつて、グビ〳〵酒を飲む。）

かつ。（引き込まれて、これも陰氣な氣持になり、ぼんやり考へ込んで了ふ。）

爲吉。（ふと、氣を變へて、）で、これからさき、おめえ、一體、どうしてやつてくつもりなんだ。

かつ。（それに就いての考へに耽つてゐるのでもなく、たゞ默つてゐる。）

爲吉。爺さん、裁判がうまく行つて、命だけは助つたところで、どうせその年齢ぢア、もう一度、娑婆を見る氣遣はねえんだから、おめえだつて、こゝでなんとか思案をつけとかねえぢア……。

かつ。（ふと我に返つたやうに、）それア大きにさうなんだよ。

爲吉。だから、どうする氣だつてえんだよ。

かつ。（本能的な媚が、突然、顔や體に現はれて來る。）爲さん、今更お前、そんなこと……。

爲吉。そんなこと、つて、おらア何も……。この先おめえの……。

かつ。だからさア、何もどうしてくれのかうしてくれのつて、あたしやそんなむづかしいこたア云やアしないよ。たゞね、こんな婆さんでも、一緒にゐてやらうと思つてくれるんなら……。

爲吉。それアいゝが、おらにやア、とてもこんだけの世帯は、張り通せる氣づけえはねえし……。

かつ。なんだねえ、そんなこと！　あたしやア、……お前さんさイいつまでもあたしをほツぽり出さないでゐてくれりやア、假令……。

爲吉。（急に冷淡になる。）フヽンだ！

かつ。何が。フヽンだよ。

爲吉。爺さんに殺つけられた野郎も、さだめし、たんとそいつを聞かされたんだらう。

かつ。(勝ち誇つた笑。)やいてるよ！

爲吉。(惱りツぽく、)誰がくそ、てめえみてえな……。

かつ。(負けてゐずに、むツとする。)なら、いゝぢやねえか。よしんばあたしが、――養つてくれてがなくつて、明日が日のたれ死をしようと、何もおめえは、ほツときアいゝこつた。な、な、なにもそんな、嫌はれてまで、おらアおめえの世話にならたア思やアしねえし、第一、おめえ、こゝに轉がり込んで來てから、一ン日だつて仕事に出たことがあるかい。みんなおらが……、(涙聲になる。)爺さんが、食ふものも食はずに、好きな酒も我慢して……。

爲吉。(感動しやすく、すぐ折れて、宥めにかゝる。)だからよ……、何も……。

かつ。(ゆかたの袖口で涙を拭きながら、)よく、爺さんがさういつたつけ、――おめえとおらとは、ひと周りの上も年齢は違ふし、永年夜働きをして、おらア大ぶ體も損じてるから、どうせ一足お先に死なきアならねえ、さうなつたあとで、おめえがもう一度男をもたうとどうしようと、先だつものは金だ。金せえありやア、世の中、どうにでも切りぬけて行かれるもんだ、つてさう云つてさ、どんなに苦しい時でも、その日／＼の稼ぎのなかゝら、せちん／＼とお前、一割づゝは、あたしの名前で、郵便局に積んどいてくれたんだよ。その……。

爲吉。わかつたよ。だから、俺だつて、毎ン日空模様ばかり氣にしてるんだけれど、これぢやアおめえ……。

かつ。……さういふ、血の出るやうなお金だつて、爲さん、あたしやアお前のためなら……。

爲吉。わかつたよ。もういゝぢアねえか。……だから、天氣になりしでえ、稼ぎに出りやアいゝんぢアねえか。なアに

おめえ、世間にやア、五人十人子供を揃えたつて、どうやらかうやらやつてつてる人だつていくらもあるんだ。おめえ一人ぐれえ、いくらおらだつて、まさかひぼしにもしやアしめえぢやねえか。なア、安心してねえ、安心してねえ。

かつ。(忽ち感激して、)爲さん！

爲吉。まアいゝやな、いつぺえいかう。(ト、ガブリとあけてさす。)

かつ。(嬉しさうにうけて、)ほんとに爲さん、いつまでもその氣でね……。

爲吉。でえじようぶだよ！

かつ。お前は飽性らしいから……。

爲吉。そんなこたアねえよ。

かつ。おまけに、男ぶりはいゝし、若いんだし……。

爲吉。おだてるない！　この雨をくらつちア、自由勞働者は、はゞかンながら、逆に振られたつて鼻血も出ねえや。

兩人、和み笑ふ。

この時、出入口の戸の、亂暴に引きあけられる音。正服、外套の巡査、頭巾をはねのけながら入り來り、土間に立つ。

巡査。內田、……てのは、お前ンとこかね？

かつ。へえ。(答へながら、恐る〳〵立つて行き、突膝で應對する。)

巡査。これから、こゝで實地檢證があるから……。

かつ。（意を解せざる態。）
巡査。裁判所から判検事の方々もお見えになるんだから、萬事粗忽のないやうにな……。
かつ。（ピヨコ〳〵と頭をさげるばかりで、なほ意を解せず。）
巡査。一體、お前、誰かね？
かつ。（臆して答へられない。）
巡査。犯人の妻かね？
かつ。内縁で御座います。（ト、頭をさげる。）
巡査。あすこにゐる男は？
かつ。へえ……（もじ〳〵して、）親籍の者で、爲吉と申します。
巡査。（女では埒があかないといふ風に、今度は爲吉の方へ話しかける。）實地檢證といふのはね、犯人をつれて來て、實地で、犯罪の模樣を詳しく取調べることだ。解つたか。
爲吉。（それより前に、坐り直して、長火鉢の前から巡査の方に向つて、兩手を膝に、キチンとかしこまつてゐるが、話しかけられると、一々頷いて聞く。）へえ、解りました。
巡査。もうすぐこゝへお見えンなるが、判檢事の方々に對しては、よく謹んで、……もしなんかお訊んなつたら、正直に、言葉を謹んで、ハキ〳〵と、よくわかるやうに申しあげなきアいかんよ。いゝか、解つたな。
爲吉、頷く。巡査、去らうとする。かつ、追ひ縋るやうに言葉をかける。
かつ。（恐る〳〵）犯人と申しますと？

巡査。被告、内田、……なんと云つたつけかなア（衣嚢に何かを探る。）

かつ。内田助次郎と申します。

巡査。うん、その内田助次郎をつれて來て、こゝでどうした、あすこでどうしたつてことを、一々實地にやらせてみるんだから……。

かつ。あの、内田助次郎がこゝへ參りますんで？

巡査。さうだ。

かつ。ヘツ！ こゝへ……。

巡査。別に、何も、そこら取り片づけることもいらんが、成可くまア綺麗にして置くやうにな……。

急ぎ退場。

かつ。（顔色を變へて跳び戻つて來る。）どうしようね、お前さん……。

爲吉。どうするもかうするもねえぢやねえか。

かつ。だつて、爺さんが來るんだよ、こゝイ……。

爲吉。來たつていゝぢアねえか。

かつ。あたしやいやだよ！ 一遍だつて面會に行つてもやらないし、きつと恨まれてるに違ひないんだから……。さうだ！あたし、お兼さんのとこイ行つてるからね、お前さんは……。

爲吉。いゝぢアねえか、何もおめえ……。

かつ。だつて、お前、もしひよつと……。

爲吉。(笑つて、)そんな氣づけえがあるもんかな。どうせ、おめえ、縄つきで來るんぢアねえか。

かつ。それだつても……。

爲吉。でえじようぶだつてことよ！

かつ。(男の頼母しさに、自らも不安を抑えつけながら、)それアさうだね、ふんじばられて來るんなら……。

爲吉。なアに、さうでなくつたつて、ぢたばたすりやア、俺が擲り倒してやらア。

かつ。それアね、お巡査さんだつて大勢ついて來るんだらうし……。ぢア、かうおしよ、お前さんどつかに行つといでなね。かうやつて、火鉢の向前に坐つてちやア、なんぼなんでもあんまり……。

爲吉。(おつかぶせるやうに、)なアにがよ！あんまりもくそもねえぢアねえか！

かつ。だつて、お前……。

爲吉。いゝつてことよ！おらだつて、一遍はその爺さんの面も見て置きてえやな。

かつ。それアお前、こゝイはいつて來る時ンだつて、出て行く時ンだつて、見ようと思やアいくらだつて見られるんだから……。

爲吉。うるせえな！何も、火鉢の向前に坐つてやうと、一諸にくツついてねてようと、ちつとも構つたこたアねえぢアねえか。つまらねえとこでみえエするねえ！

かつ。さうぢアないけどさ……。

爲吉。なアに、さうよ！爺に未練がありやアこそ、さうしてみえが張りてえんだ！フン！後家さん面が聞いて呆れらア！

かつ。すぐさうお前みたいに……。

爲吉。なアに、さうにきまつてらア……。

尚も兩人の言葉がもつれ合ふところに、路次の溝板に大勢の足音が近づいて來て、すぐ出入口があき、以前の巡査が眞先にはいつて來る。

兩人、居住居(ゐずまゐ)をたゞし、小さくなつて控える。巡査、土間に散らかつてゐる下駄を片づけたりする。

すぐ、豫審判事が、警部の話に、何やらうち頷きながら出る。（これ等の人々の容貌、服裝等は略す。いづれも、それらしければよし。）

次に、檢事と書記。これ等の人々が、狹い土間で靴をぬいであがるまで、どこかひそ〳〵とした感じに、ざわめき、混雜する。

内田助次郎、黑地のゆかたに袷を重ね、細紐をする。素足。深編笠。手錠。腰繩。刑事（甲）に繩尻をとられて、しよんぼりと登場。巡査が、既に上へあがつた人々の靴を片よせたりしてゐる間、ちツと、長火鉢の方へ顔が向いてゐる。足もとの片づいたのも氣づかずに、立つくしてゐるので、刑事が輕く背を突く。なほ同じところを見詰めたまゝ、上へあがり、押しやられるやうに、ぐづ〳〵六疊の間へはいる。

無論他の人々も、長火鉢の前の二人に對しては、それ〴〵の氣持と、從つてまた態度が現はれなければいけない。なかで、檢事には、一番注意深く二人を見させたい。

もう一人の刑事（乙）と、巡査とは、土間に立つてゐたり、囁き合つたり、兎に角そのへんにゐる。

六疊では、判事が、ちよつと二疊の方へ顎をしやくり、警部に何か訊く。警部、流しそばのところへ巡査を呼

び、かゞんでなにか聞きとり、戻つて報告する。その間に、判檢事、うちのなかを見廻すとか、囁き合ふとか、いろ〳〵しぐさあり。書記は、毛繻子の風呂敷包をとき、筆記の支度をする。

やがて、判事の命令で、繩取りの刑事が、部屋の中央にしよんぼり突立つてゐる助次郎の編笠をぬがせてやる。先刻から、二階の二人を見詰めたきりの顏が、こゝに始めて見物の前に現はされる。

勞働者に獨特な皺の深さをもつた、人の好ささうな顏。額は禿あがり、髮と、やゝ伸びた髭とは、ともに胡麻鹽。大して獄中の窶(やつれ)は見えず、頰の肉など、タブンとたるんでゐる方がいゝ。烏睛(くろめ)が、なみよりも白(しろ)ちやけてゐるかと思はれるやうな、愚鈍な、しよぼ〳〵とした眼つき。

かつ、爲吉、兩人に對する感情は、あまり複雜で、とてもどうと取りとめがつかず、却つて、よそ目には、ぽかアんとしてゐるやうな、然しどこか弱々しげな表情。

判事。（一體に、表情に動きがなく、冷たい感じだが、低い聲で、ごく穩かにものを云ふ質(たち)の人でありたい。が、この呼びかけだけは、少し凜(りん)とする方がいゝ。）被告、内田助次郎。

助次郎。（その方を向いて、お辭儀をする。）

判事。これから取調べにかゝるが、一切嘘を云はんやうに、よく考へて、間違つたことを云はんやうに……。わかつたな。

助次郎、もう一度頭をさげる。

判事は、書記から厚ぼつたい調書をうけとり、印(しるし)の赤紙の出てゐる箇所を、あつちこつち引ツ繰り返してから、以下の訊問をする。

判事。えゝ、九月八日の晩に、お前は仕事に出かけたかね。

かつ。すぐさうお前みたいに……。

爲吉。なアに、さうにきまつてらア……。

　尙も兩人の言葉がもつれ合ふところに、路次の溝板に大勢の足音が近づいて來て、すぐ出入口があき、以前の巡査が眞先にはいつて來る。

　兩人、居住居(ゐずまひ)をたゞし、小さくなつて控える。巡査、土間に散らかつてゐる下駄を片づけたりする。

　すぐ、豫審判事が、警部の話に、何やらうち頷きながら出る。(これ等の人々の容貌、服裝等は略す。いづれも、それらしければよし。)

　次に、檢事と書記。これ等の人々が、狹い土間で靴をぬいであがるまで、どこかひそ〳〵とした感じに、さわめき、混雜する。

　內田助次郞、墨地のゆかたに袷を重ね、細紐をする。素足。深編笠。手錠。腰繩。刑事(甲)に繩尻をとられて、しよんぼりと登場。巡査が、既に上へあがつた人々の靴を片よせたりしてゐる間、ちツと、長火鉢の方へ顏が向いてゐる。足もとの片づいたのも氣づかずに、立つくしてゐるので、刑事が輕く背を突く。なほ同じところを見詰めたまゝ、上へあがり、押しやられるやうに、ぐづ〳〵六疊の間へはいる。

　無論他の人々も、長火鉢の前の二人に對しては、それ〴〵の氣持と、從つてまた態度が現はれなければいけない。なかで、檢事には、一番注意深く二人を見させたい。

　もう一人の刑事(乙)と、巡査とは、土間に立つてゐたり、囁き合つたり、兎に角そのへんにゐる。

　六疊では、判事が、ちよつと二疊の方へ顎をしやくり、警部に何か訊く。警部、流しもとのところへ巡査を呼

判事。ぢア、こゝに歸つて來た時には、お前は醉つとつたかな？

助次郎。いゝえ、ちよいと氣つけに一杯やりましたんで、……この分なら仕事が出來ると思ひましたくで、すつかり元氣がよくなりましたから……。

判事。醉つてたといふほどぢアないが、元氣づいてはゐた……？

助次郎。（頷く。）

判事。歸つて來たのは十時半頃、──さうだな？　間違ひないな？

助次郎。（ぼんやりしてゐる。）

判事。どうだ、その時分か？

助次郎。（驚いて、續けざまに頷く。）

訊問の始る前から、おもてに人だかりがするこゝろにて、出入口の方がざわつき、そとにゐる巡査の制する聲などし、それがだん〳〵激しくなつて來る。

で、この時、バリ〳〵と、下駄で羽目板を掻く音がして、正面の高窓から、十五六の子供の首が覗き込む。

子供の聲。やア、ゐやアがる〳〵！

抑えた聲で、然し嚴しく巡査が叱りつける。すぐひつ込むが、少しすると、他の子供や、同じ奴が、叱られ〳〵何度も首を出す。たうとう巡査がおもとへ廻つて行く。子供たちが、ワーツと云つて逃げて行く氣勢など。

この間判事は、調書をあちこち飜してゐる。警部が近より、何か訊き、頷くのを見て、土間にゐる刑事（乙）のそばへ行き、何か云ひつける。刑事、出て行く。入れ違ひに、子供を追つぱらつた巡査が歸つて來て、笑

助次郎。(うなだれたまゝ、碌に考へもせずに頷く。)
判事。それア何時ごろだつたな?
助次郎。(聴々とした低い聲。)いつもの通りで、八時かそこらで御座います。
判事。それから、こゝに歸つて來たのは?
助次郎。なんですか、頭が重くつて、……その二三ン日前から、鼻ツ風邪をひいて居りましたもんですから……。
判事。(半ば、調書を讀む調子で。)とても伜は引けさうもないと思つたから、一晩休むつもりで歸つて來たと……。さうだな?
助次郎。(頷き、)體だけは、至つて丈夫な方で御座いますから、めつたにそんなことも……。
判事。(それは耳にもかけず、他の箇所をめくり、同じく半ば讀む調子で。)いつもの通り伜を貸りて、一旦は雷門まで行つたが、腰が痛かつたり頭が痛かつたりして苦しいので、一人も客を乘せずに、すぐ歸つて來た、――さうだな?
助次郎。へえ、伜を返しによりまして、輪代を半夜分だけ拂ひましてから……。
判事。三ノ輪の居酒屋にはいつて酒を飲んだ、――さうだな?
助次郎。(頷く。)
判事。どのくらゐ飲んだ?
助次郎。コップに一杯きりで……。
判事。酒か。濁酒か。
助次郎。えゝ、電氣ブランといふやつで……。

判事。ぢア、こゝに歸つて來た時には、お前は醉つとつたかな？

助次郎。いゝえ、ちよいと氣つけに一杯やりましたんで。……この分なら仕事が出來ると思ひましたくらゐで。お蔭様で、すつかり元氣がよくなりましたから……。

判事。醉つてたといふほどぢアないが、元氣づいてはゐた……？

助次郎。（頷く。）

判事。歸つて來たのは十時半頃。――さうだな？　間違ひないな？

助次郎。（ぼんやりしてゐる。）

判事。どうだ、その時分か？

助次郎。（驚いて、續けさまに頷く。）

訊問の始る前から、おもてに人だかりがするこゝろにて、出入口の方がざわつき、そとにゐる巡査の制する聲などし、それがだん／＼激しくなつて來る。で、この時、バリ／＼と、下駄で羽目板を掻く音がして、正面の高窓から、十五六の子供の首が覗き込む。

子供の聲。やア、ゐやアがる／＼！

抑えた聲で、然し嚴しく巡査が叱りつける。すぐひつ込むが、少しすると、他の子供や、同じ奴が、叱られ／＼何度も首を出す。たうとう巡査がおもとへ廻つて行く。子供たちが、ワーッと云つて逃げて行く氣勢(けはひ)など。この間判事は、調書をあちこち飜してゐる。警部が近より、何か訊き、頷くのを見て、土間にゐる刑事（乙）のそばへ行き、何か云ひつける。刑事、出て行く。入れ違ひに、子供を追つぱらつた巡査が歸つて來て、笑

ひ顔で警部と何やら二言三言話す。

判事。では、お前、御苦勞だがひとつ、こゝに歸つて來てからあとを、そのまんまやつて見せ
こでどうした、こゝでかうしたつてことを……。

刑事(甲)が、もじ〳〵してゐる助次郎を引つたてゝ、上り端へ行き、下駄を穿かせる。判檢事たちも一齊へ
近く立ち並ぶ。

判事。今お前は、その晩、そとから歸つて來たところだ、いゝか!

助次郎。(頷き、恥らうやうに二人の方を偷看(ぬすみ)る。)

判事。まづ第一に、(出入口を指さして、)そこの戸は、あいてたのか。それとも締りがしてあつたのか。

助次郎。(振り向いて見ながら、)あいてたやうに思ひますが……。

かつ、事實の相違を叫へたくもあり、可怕(こは)くもあり もじ〳〵する。

判事は、それも見てとつてゐる。

判事。いつもはどうなんだ。毎晩仕事から歸ると、叩いて起すのか。

助次郎。夜があけてから歸つて來ることもありますし、……寢てゐる時でも、大低棧はかつてありませんですが、さア
あの晩は……。

判事。ぢア、戸を叩いた憶えはないんだな!

助次郎。(やゝ正氣づいたやうな聲になる。)あゝ、さうでした、さうでした! 叩きました、あゝ、慥に叩きました。

判事。(調書の上に目を走らせながら、)珍しく締りがしてあるので、これアまたをかしいぞ、と思つたといふことを、お

前、前に一度云つてゐるがね……。

助次郎。御尤で！　全くそれに違ひ御座いません。……えゝ、女房のやつめが、へヽ。云ふ時、かつの方へ目は向けない。が、かつの方では、ギョッとして、助次郎を見詰める。）前にも一度まをとこをいたしましたことが御座いましたが、この時にも締りがして御座いまして、いくら叩いてもあけてくれませんで……、そんなことが、前にも一度あつたもんで御座いますから、どうも、これアすこウし怪しいと思ひましたんで、……へえ……。（このあたりから、だん〴〵元氣づき、雄辯になつて來る。）

判事。ちア、この晩も叩いたんだな？

助次郎。まつたく、さようで、へえ……。

判事。さうしたらば……？

助次郎。永いこと待たせやアがつてから、女房のやつめが、寢間着姿かなんかで出て來やアがつて、「誰だい？　誰だい？」つて云ひますから、「俺だア」つて怒鳴つてやりましたんで、へえ……。唯今、締りがしてなかつたやうに申しあげましたのは、全くわたくしの憶え違ひで、えゝ、なんとも申譯御座いません。

判事。それからすぐあけてくれたのか？

助次郎。すぐぢやア御座いません。……するてえと、ひとしきりシインとしちまいまして……、やがてのほどに、「なんだね、お前さん、今時分……」なアんてえましてからに、いきなりがらッとあけやアがつたんで御座いまして、へえ……。

判事。それで、はいつてみたら、……うちのなかは、暗がりだつたのか。燈がついてたのか。（云ひながら、六疊から引

つ張つて二疊の敷居へ引つかけてある、うちどうにたつた一つの電燈を見やる。)

助次郎。へえ、矢張りそこんところで、(ト、指さし、)電氣がとぼつとりましたんで……。

判事。それからどうした。

助次郎。默つて上へあがりまして、そこんとこイ行つて……。(爲吉の席を指さすが、目は爲吉に向けない。)

判事。あがつて、その通りやつてごらん。

助次郎あがる。警部が、爲吉の背を叩いて、六疊の方へ行つてろ、といふこなし。爲吉、ふくれ返りながらも、命じられたやうにする。かつも續いて立つて行かうとするが、六疊との境に立ち重つてゐる人垣を見ると、それを押し分けてまでの勇氣はなく、薄ぺつたい座布團から滑りおり、茶簞笥の陰に身を縮めて、ぐづ〳〵と居竦んで了ふ。ノコ〳〵とやつて來た助次郎は、爲吉の尻のぬくもりの殘つてゐる座布團の上に、平氣でペタリと坐り込んで了ひ、キヨト〳〵と、膝の上や、そこらあたりを見廻す。

判事。そこに坐つて、それからどうしたんだ。

助次郎。(記憶の蔓を手放して了つた態で、ぽかアんと現在だけを感じてゐる。)

判事。おい、それからどうしたのか。

助次郎。へえ。(吃驚して、一生懸命記憶をたぐり出さうとする。)……へえ、へえ……えゝと、なんです、……するてえと、こいつが……。

すぐ鼻のさきにゐるかつの方へ、思はず顎をしやくる。かつ、縮みあがる。ト、助次郎も息を引き、うなだれて了ふ。

判事。するとどうしたんだ。

助次郎。……えゝ、それから、二言三言、云ひ合ひをいたしましたんで、誠にどうも、なんとも申譯御座いません。

ト、頭をさげる。眞正面にゐるかつも、思はず頭をさげる。

判事。その時、女房はどこにゐたのか。

助次郎。そこです。

ト、言下に答へて、指をさすのに、かつは、をほ更に尻ごみ、身の置きどころもなく、壁に貼りついて了ふ。

判事。どういふことを云ひ合つたのかね？

助次郎。いえ、なに、つまらないことで……。

判事。つまらんこととは、どういふのか。

助次郎。いえ、もう、愚にもつかない燒餅喧嘩で……「庄公の野郎が來てやがるんだらう！」とかなんとか……。まつたくわつちがよくねえんで、へえ……。

助次郎が頭をさげる度に、かつも吊り込まれて頭をさげる。

判事。ふん。で、その時にお前は、被害者の庄太郎が、事實こゝに來てゐるに違ひないと思つてゐたのか、それともまた、今お前が云ふやうに、愚にもつかない燒餅喧嘩のつもりだつたのか。

助次郎。へえ。それは、なんです、おもてに立つて、戸のあくのを待つて居りました間の方が、「野郎、またへえずり込んやがるに違えねえな」と思つて居りましたんで、こゝイ來て坐りましてからは、別だんそんな樣子も御坐いませんし、たゞもうほんのむしやくしや腹で、そんなことを呶鳴つてみただけのことでして……、へえ……。

判事。それで、その喧嘩はどうなつたんだ。口だけですんだのか。それとも、摑み合ひ[illegible]

助次郎。默つてりやアいゝものを、こいつがまた勝氣な性分でして、ガア〳〵つてがなり立てやアがるもんですか[illegible]ついそれ、わつちも、こツから、かう、ポカリツとひとつねえ……。

長火鉢ごしに、相手の横ずつぽうを撲り飛ばす身ぶり。かつ、「どうも誠に相濟みません」と云ふやうに、ぺたりとお辭儀をする。

判事。ふん、それから？

助次郎。するてえと、いきなりうしろの方で、ドタバタつていつたと思ふと、庄公の野郎が……。

判事。その時には、こゝに、障子か襖がはいつてゐたのか。それとも……。

助次郎。どういたしまして、そんなもなア、いつの昔からねえんですか、あつしがこゝを貸りる……。

判事。よし〳〵、ぢア、この通り、矢つ張りあけつぱなしになつてゐたんだな？

助次郎。さやうですよ、へえ……。

判事。それだのに、被害者庄太郎のゐることが、それまでどうしてお前に知れなかつた？　をかしいぢアないか。

助次郎。蟵が吊つてありましたし、電氣がこゝイ引ツ張つて來てありますから、そつちア薄くれエし、よもやと思ふから、別だん覗いて見もしませんもんでしたから、ついどうも、ちつとも氣がつきませんかつたんで……。

判事。それで、どうした。

助次郎。へえ……。(どこまで話したのか忘れて了ひ、まごついてゐる。)

判事。(ちよいと嚴しい調子)で庄太郎に、いきなりうしろから撲られて、それからどうしたといふんだ。

助次郎。へえ！……こーんちきしよう、と思ひましたから、いきなり武者振りついて、ドヽヽドウと……。坐つたまゝながら、胸食へ喰ひついて、相手を押し倒さうとする身ぶり。

このへんから、次第に話にみが入り、登場したての、しよぼ〳〵とした様子などはどこへやら、いよ〳〵相手を刺すあたりを話す時分には、大勢の見物の前で、一世一代の大役を勤める役者にでもなつたやうな氣で、すつかり亢奮し、野性をさへ帶びて來て、無我無中にやつて見せる。

助次郎。ドヽヽドツと、そこんとこへ、(ト、六疊の、簞笥の置いてあるあたりを指さす。)押し倒してやるてえと、野郎も必死になりやアがつて、膝頭で、いやつてえほどひとの睾丸を蹴あげやアがつたんで、……あゝッと思つて、手がゆるんだ拍子に、今度ア胸へ足をふんがけやがつたからに、力いつぱい蹴返しやアがつたからたまらねえ…。話すうちに知らず識らず乘り出して來るのに、判檢事たちも、おり〳〵とあとへさがる。助次郎は、簞笥の前あたりで、相手をギユー〳〵抑へつける身ぶり、續いて、蹴返されたこなし。

助次郎。ヒヨロ〳〵ツと、こゝんとこまでよろけて來て、(ト、流しの前の土間近くまで、あと退りに退つて來てみせ、)スツテンコロリンとうしろへ轉げ落ちた……。

ト、云ふかと思ふと、忽ち素足のまゝ、うしろ向きに土間へ、ドタリと不器用に跳びおり、態々尻餅までついてみせる。刑事が慌てゝ繩を繰り延ばす狀、さながら猿廻しの如し。

見る人(爲吉、かつ兩人を除く、)いづれも失笑する。

助次郎、すぐ身を起し、流しもとの庖丁挿から、菜切庖丁をぬき持たうとするが、刑事に、ぐいと腰繩を引かれて取り落す。

この動作に、かつは浮き腰になる。

判事。(可笑しさをこらへた聲で、)よし〳〵、何も、態々ほんとうに庖丁を持ち出さなくたつていゝ。……そこで兇器を手に把つた、と……。よし解つた、それから？

助次郎。出刃庖丁を把るが早いか、跳びあがつてつて……、(言葉の調子はひどく威勢がいゝが、動作は至つてぶまに、またのこ〳〵伺ひあがる。)野郎を目がけて突いてかゝると、肝ウつぶしやアがつて、「人殺し！」「たすけてくれえ！」つて喚きやアがつて、あつちこつち逃げ廻りやアがるのを……。(奮迅、敵に迫る狀を、六畳いつぱいにうろついてみせる。)

判事。(思はず職業ばなれのした、普段々々した調子になつて、)そんなこと云つたつて、お前、こゝにやア幮は吊つたるんだし、床はとつたるんだし、さうはお前……。(ごく自然な笑ひ聲。)

助次郎。(はッと氣はつくが、負惜み半分に、)幮なんざア、旦那、疾の昔に吊手が切れちやつてますし、寢床だつて、まるでもう踏みくちやでさア。……追つかけ廻してゐるうちに、ちよいと野郎に隙が見えたから、ワアッとばかり一本。……。野郎、キャッといつて、わつちの肩に力いつぱいしがみついたからたまらねえ、もろに、お前さん……。(キョロ〳〵あたりを見廻し、いゝ加減にそこらを指さして、)そこんとこへもつてつてからに、ドサリ！折り重なつて倒れましたんで、へえ……。

出來榮よく、一席の長講を終つて、樂屋にさがつて來た藝人のやうな得意と、滿足とをもつて、肩で息をし、手錠のまゝの甲で、禿げあがつた額の汗を拭く。

人々は、可笑しくもあるが、その、底ぬけの善良さに搏たれて、なんとなく胸の熱い思ひで立ちつくしてゐ

る。

助次郎は、その衆勢にてれて、無論誰の顏へも目は向けず、手のやり場にさへ困り、もじ〳〵してゐるうちに、ついヒョイと口へ飛び出して了つたやうな調子で、二疊の方を振り向きさま、

助次郎。おツかア！　水をいつぺえくんねえな！

かつも、その調子に吊られて、無意識にヒョイと擡げかけた腰を、——氣がついて、あたりの人々を見廻しながら、またぢり〳〵と落ちつける。これと見た判事が、「よし〳〵、權はんから持つて來てやれ！」と云ふこなし。かつ、「有難う御座います」と云ふこなし。立つて、茶簞笥から湯飲を取り出し、慌しく土間へおり、水瓶の水を汲んで來て、恐る〳〵助次郎のそばへよる。

助次郎、手から手へうけとりしなに、恥しさうな、氣の弱い眼つきを、チラリとかつへ走らせるが、すぐ、うまさうにゴク〳〵咽を鳴らして一息に飲み乾し、無雑作に湯飲を突き返す。かつ、小走りにもとの座へ歸る途中、ほんのチョイ、チョイと、兩の眼頭へ指先をあてる。

こゝに、先刻出て行つた刑事(乙)が、近所の者らしい、薄ぎたない男をつれて來る。

(この男は、小心者で、矢鱈にピョコ〳〵頭ばかりさげて、始終蚊のなくやうな聲でうけ答をするので、見物には一言も聞えない。)

警部がそれと見て、判事に、「何某をつれて來ました」といふそぶり。判事、「すぐこゝへ」といふ顏。警部、その男を上へあがらせ、判事の前へつれて來る。

これにて人々の居どころが動く。これまで、具合惡さうに、「おかみ」の人たちのなかに混つてゐた爲吉は、チ

ヨロ〱ッと、長火鉢の前の元の席へ歸る。

助次郎は簞笥のそばへ引きさがる。

六疊の中央で、判檢事、書記、警部に取りまかれ、近所の男の取調が始る。

判事の「正直に、ありのまゝを云はないと、僞證罪になるからね」とか、「內田のかみさんが、お前のうちに飛び込んで行つて、それから、時を移さず、すぐお前はこゝに駈けつけて來たんだね？」とか、「それで、來てみたら……？」とかいふ言葉が、纔に見物席に達しればいゝ。あとは、いづれも默劇(パントマイム)でこの件(くだり)をはこぶ。

一々判事の問に答へながら、男は、兇行の現場を說明するしぐさ。——このへんに、被害者が、かういふ風に、こつちを頭にして橫たはつてゐたとか、こゝらは、いつぱい血だらけだつた、とか、さういふ類のことを、竊々(ひそ〱)と低聲(こごゑ)に喋りながら、手まねもしてみせる。この取調は、或る一定の時間だけ續くのだが、以下に述べる主役たちの芝居を妨げるやうな、人目を惹く動作は出來るだけ避けなければならない。これは、主役たちの無言劇に、ごく弱音の伴奏をつけて行くに過ぎないのだから。

助次郎は、少しもそれには耳を藉さずに、長火鉢のあたりを頻と氣にしてゐる。氣にしながら、初めのうちは顏が向けられない。ふと、すぐそばの壁に、印絆纏がぶらさがつてゐるのに氣がつくと、そつと手をかけて、引つくり返して襟字のところを見る。それから、なんといふこともなしに、鼻へもつて行つて匂ひを嗅いでみる。

そのうちだん〱大膽になり、少しづゝ二疊の方へ體を捩じ向けて行つて、ショローリ、ショロリと二人を偸(ぬす)看(み)し、あわよくばかつと視線を合はさうとしてゐる。

かつは、神妙らしくうなだれたまゝだが、大ぶん氣持を樂にしてゐる。

爲吉は、人々の注意が、近所の男の話に集注されてゐるのに安心し、且は、「なアに、これしきのこと、屁とも思つてやアしねえ」といふ氣持を誇示するために、ことさら手荒く、ガチヤ〱音をさせて藥罐の蓋をとつたり、燗をしなほしたり、いゝ加減で引きあげて、酒を飲んだりする。

かつが、頻とそれを目で禁めるが、「なアに構ふことがあるもんけえ」といふやうな顔をして見せて、一向取り合はない。

最後にかつが、「あすこで見てゐるからさ！」と、胸で知らせるのに、「なんでえ、誰が見てようと構はねえぢやねえか」の氣持で、ヒヨイと振り向く。パツタリ、助次郎と視線が合ふ。互にはツとする。――とたんに助次郎は、ニタリと和やかに笑ひかけるが、それを爲吉は、見たか見ないの瞬間に、顔をもとへ戻して了ふ。

助次郎は、淋しく笑ひをおさめる。爲吉は、ちつと膳の上を見詰めたまゝ考へ込んでゐるが、忽ち意を決したやうに、猫板の上に置いてあつた以前の湯飲に、すつかり徳利の酒をあける。それから、茄子の漬物の刻んだのを、一箸に、出來だけ澤山はさみあげ、湯飲は左に持つて、つか〱ッと助次郎のそばへより、默つて、ぶつきら棒に突き出す。

助次郎、その顔を見詰めてゐるうちに、泣面をつくり、ぼろ〱と手ばなしで泣き出す。

爲吉「さア早く！」と云ふ風に、兩手に持つたものを、一つしやくつて突き出す。

助次郎、刑事の顔を窺ひ、氣をかねる。刑事、輕くちよいと頷いてみせる。（無感動にやるべし。）

助次郎、大急ぎで、手の甲で涙を拂ひ、一つ鼻を啜つてから、手を出す。――まづ湯飲をうけ取り、生

た)——

の

飲み、むせながら、今度は左の手の平に漬物を載せて貰ひ、ちよつと頂いて口

飲む。

助次郎、湯飲を返しながら、涙に硬ばる頬を、引き伸ばすやうな顔をして、低聲ながらも、眞[illegible]て

助次郎。たのむよ、お前さん！

爲吉、一つ大きく頷くと思ふと、すぐ、クルリと背を向けて、まるで慍つてゐるやうな、可怕い顔をして火鉢の前に歸り、とかツと胡坐をかく。

丁度この時に、六疊の方では、近所の男が、押入の襖の、新しく貼られた新聞紙の箇所を指し、そこに、シヤアツと血がかゝつてゐた、と云ふ身ぶり。

その話聲に、助次郎、ふと振り返る。襖に一番近く立つてゐた警部が、何心なく、新聞紙のはがれ目をつまんで、ばり／＼とはがしてみる。眞黒な血痕が現はれる。

[illegible]ブル／＼ツと震えあがり、顔をそむけて了ふ。

[illegible]の男の取調がすむ。

[illegible]、かつともちよつと頭をさげ合つて、急いで歸つて行く。

「[illegible]、これで……」といふやうな顔つきになり、

爲吉は、先刻の怯つたやうな顏が、だん〳〵だん〳〵泣面になつて來て、この時には、一生懸命歯を喰ひしばり、肩を震はせてゐる。

かつは、助次郎が酒を飮むくだりで一度泣くが、あと泣きやんでゐて、またいよ〳〵歸つて行くといふだんになると、聲をあげんばかりに泣きだす。

助次郎も、それを見ると、涙がこみあげて來るこなし。刑事に促されて土間におりる。法官たちは、どや〳〵ともうおもてに出て了つたあとで、そこには、隅の方に巡査が一人立つてゐるきり。

助次郎、爲吉の方へ顏をさしよせるやうにして、

助次郎。ぢや、ほんとにたのむぜ！

爲吉、急にしやくりあげて泣き出し、頻に頷く。

助次郎、今度は、かつの方へ、

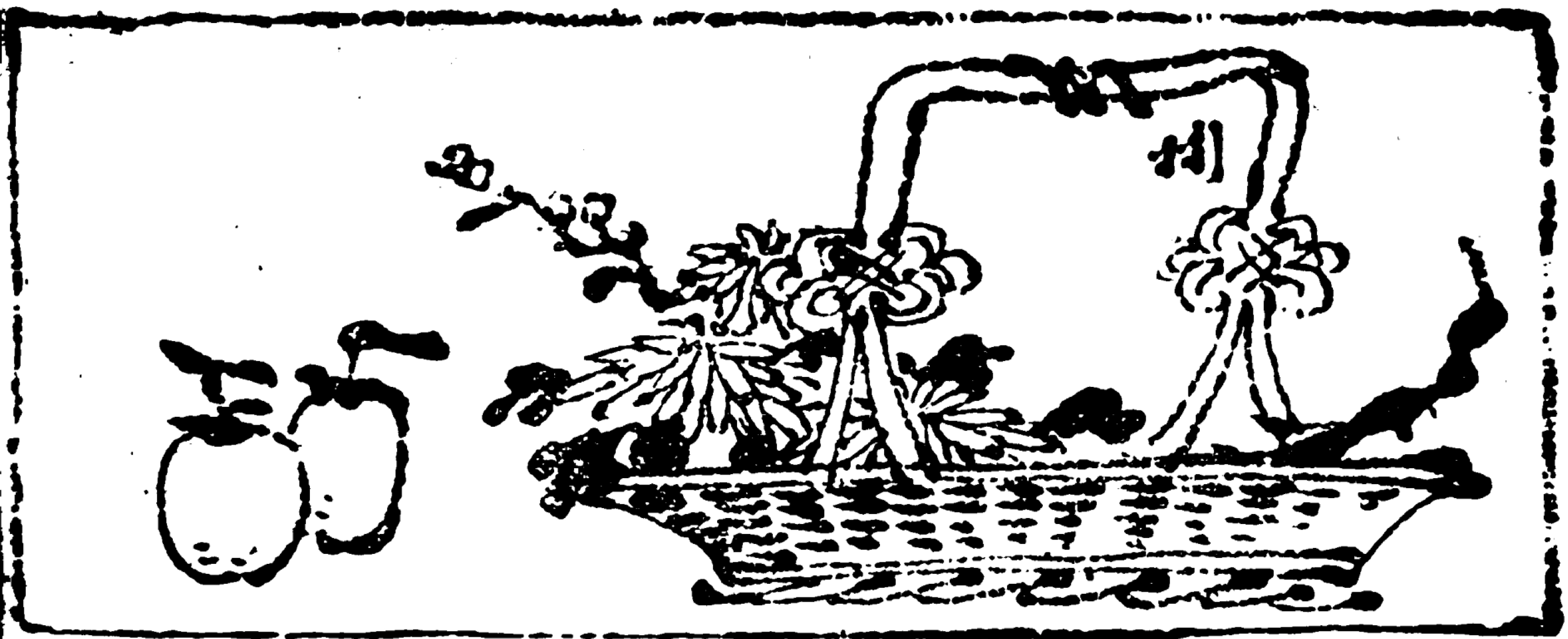
助次郎、仲よく暮しねえよ。いゝか……

助次郎、とぼ〳〵と、けれども、心安げに引かれてはいる。

――幕――

（無斷上演厳禁）

大正十二年四月號の新小說に、久米正雄氏が、これと同じ題材で小說を書いてゐる。友達の間のことで、誰も盗んだとも思ふまいが、念のため一言附け加へて置く。



叔母の再婚

池田忠一

京都の生家に歸つてゐる妻の敏子から、出產後初めての便りがあつて、一度は不調に終つた筈の叔母の緣談が、また縒りを戻して急に纏りさうになつたことを知らせて來た。

健次は敏子の短い手紙を讀んで一寸變な氣がした。利にさとい叔母が、餘り香ばしくもない今度の緣談に心を惹かれやうとは思ひも寄らなかつたから。健次は叔母の眞意を量りかねた。敏子も叔母の態度に無關心でゐられなかつたらしく、彼の女にしては珍らしい感傷的な不滿をすら洩らしてゐた。

……あんなにして、一たんはお斷りの書狀まで出して置きながら、今頃本人の叔母さまが、俄かに乘り氣になつて小娘のやうに燥いでゐられます。人間てそんなものかも知れませんが、兎に角、先に死んでいつた人はつまりません。……

敏子はものを眞面(まとも)にしか見やうとしない女だつた。健次は一本氣な彼の女の氣持を察して微笑した。叔母と云つても、敏子の母の妹で、敏子とは七つしか年の違は

ない、若い未亡人であつた。敏子は、亡夫への心立てを振だし、諦め切らうとしてゐる叔母の氣込みを、まざ／＼と見せつけられて、心を痛く傷つけられたらしい。健次も、移り氣な人の心を思つて寂しい氣がした。けれども、いづれは落ち着くところに落ち着くらしい叔母の身の上を案じてホツとした。朗らかな感じだつた――小娘のやうにか……」健次は、大柄な叔母の、血色のいゝ豐頬を思ひ浮べてほゝえんだ。彼は叔母に對して蟠りのない氣易さをかんじた。それは叔母を知つてこの方、嘗て經驗したことのない氣持だつた。

叔母はよく、二重瞼の目尻を心もち上げ、厚い出張つた下脣を頑なに結んでツンと澄ましてゐた。變に氣位の高い叔母に、時折思ひ出したやうに意外な方面から緣談の持ちこまれるのを聞いて、健次はこそばゆいかんじがした。敏子の母は、見下げたやうな、弱身につけこむやうな仲人達の口裏を推して、その度に寂しがつた。妹の前途を親身に氣づかひ、暗い運命を嘆いた。彼の女は黃色くあせた顏を曇らせて、

「なんぼ、落ちぶれたかてなあ。」

と愚痴た。

持ちこまれた話の中には、相當な資産もあり、小人數で氣樂なと思はれるところもあつたが、年が親子ほどに隔つてゐたり、また先方の人柄に信用が措けなかつたりして、彼の女は佗びしく苦笑するほかなかつた。大ていは叔母にも知らせずに一存で斥けた。出來ることなら妹に、濕やかではあるが現在のまゝの平穩な生活を續けさせたい。母は一人でさうも思つてゐた。

五年程前に夫に逝かれた叔母は、その時まだ胎内にゐて、父の顏さへ知らぬ百合子を、おぼつかない女手に育てゝ來

た。健次が敏子と結婚して暫く敏子の生家に同居するやうになつた時、叔母はつひ近くの街角に、化粧品や文具類を商つて、こじんまりした生活を營んでゐた。

敏子の父は、一人殘された叔母の身の上を不憫がつて、口癖のやうに云つてゐた。

「勤め人は、そやさかいに賴りならうてたあ。」

これは健次に對する婉曲な警告であつた。が、神戸のある會社に出てゐた夫の、僅かばかりの遺産が叔母をさうした靜かな生活に落ちつかせたのであつた。叔母の生活は、他所目にもつゝましく見えた。

しかし、何と云つても叔母は若かつた。

店先に坐つて浮かぬ顏をしてゐることもあつた。顏をくすませ、ぼんやり往來を眺めてゐる叔母を健次はよく見た。そんな時の叔母は、別人のやうに弱々しく見えた。時には通りがゝりの若い男と店先で、あでやかに笑ひ興じてゐることもあつた。底深い、張りのある叔母の音聲を、健次はなまめかしくかんじた。また、敏子の家に遊びに來て、物蔭げに磐に見入つてゐる叔母の横顏をチラと見て、彼はわけもなく寂しいかんじに打たれたこともあつた。乳房をまだ離れぬ百合子の絡ひつくのを煩さがつて、邪險に押しのける叔母の氣持を、健次はひそかに不安にかんじずにはゐられなかつた。叔母の生活が賴りないものに思はれた。

他所目にはつゝましく平穩に見える叔母の氣分がこのまゝ亂されずに濟むであらうか？。現在の靜かな生活が何日まで續くだらうか？。健次は暗い氣持に襲はれた。石榴のやうに內部からはじけて、いづれは地上に落つるのではなからうか。………健次はさう考へずにはゐられなかつた。年若い叔母の生きるみちは、その心がけによつてどうにでも開けるわけだつた。たゞ、幼い百合子の運命をどう考へたらいゝのか。それは第三者の

だつた。が然し、健次は叔母の身邊に無用の注意を向けまいとした。叔母の生活に、どんな變化があつたところで、彼には何の關りもないことであつたから。また、百合子の運命を彼がいくら氣づかつても、どうなることでもなかつたから。

健次は初めて叔母に會つた時、冷い敵意を含んだ彼の女の眸を鋭く胸にうけた。彼は自分達の結婚に、少しの好意も持つてゐない叔母の氣持をはつきりかんじた。彼は不愉快だつた。その後、會ふたびに、叔母の採るやうなしつこい眼に出會つた。その眼に反撥して彼の心は嚴つと引き締るのだつた。

健次はさうしたことのために、直ぐに心の平衡を失ひがちだつた。些細なことに氣分を亂されて憂欝に沈む自分の氣弱さを、彼は深く省みた。勿論彼は、叔母や其の他の親戚に對して、單にそれが敏子の身寄りであると云ふだけの理由で、親しみ合へるものと思つてゐなかつたし、また、打ち解けた顏を合せなければならぬとも考へてはゐなかつた。それは自然のなりゆきにまかせて置けばいゝ筈であつた。けれども、一寸したことから起きる感情の行き違ひや、お互の立場を理解しないための不愉快な蟠りは、出來る限るは避けなければならぬと思つてゐた。彼は努めて彼自身の感情を色に現はすまいと氣を配つた。とは云ふものゝ、思ひがけぬ折に、ひよいとしたきつかけから、日頃の心がけも忘れて生地を出してしまふことも珍しくなかつた。

敏子の兩親は、内心は兎も角、表面はおだやかに健次を遇した。が、西陣の伯父や吉田の伯母は、だしぬけに一人娘の敏子を、健次が奪ひとつてしまつたやうにかんじて、肌合ひのまるで違ふ健次を異端者か何かのやうな眼で見た。西陣の伯父も、吉田にゐる伯母も皆敏子の母の兄妹だつた。父の方は弟が一人であつたが、今は亡くなり、その長男が二條寺町に店を出してゐた。彼等は不意に自分達の前に現はれた健次に反感を持ち、一樣に侵入者として迎へた。それは

無理もないとで健次自らも古い傳統を唯一の生活信條とする雰圍氣の中に、いきなり飛びこんで、事毎に戸迷ひした。

敏子の結婚は、親戚の人々の前に、寢耳に水が寄せたやうに突然に現はれた。ゆる／＼親戚の年寄たちの同意を求めてゐる餘裕はなかつた。敏子の母の口から持ちかけられた相談も、九分通りは決定的な報告に過ぎなかつた。今にして思へば、あまりに性急な健次と敏子の要求ではあつた。二人は若い心の一途に、専念それを希つた。健次は當時のやるせない焦燥を思ひ浮べるたびに、ほろにがい微笑を禁じ得ない。

健次は親戚の人々の前に、世間的な引け目を少しも感じなかつた。が、その當座、周圍から受けるであらう理由のない反感は、あらかじめ覺悟してゐた。彼はしかし、その點を重大視してはゐなかつた。殊更問題にしてかゝらなくても、時が立てばひとりでに消えてゆくであらうと高をくゝつてゐた。そして今更そのやうな問題で、ホンの輕い意味でしかないとは云へ、多少の心構へをせずにゐられない自分の心に淡い嫌惡をかんじた。彼は親戚間のいろ／＼な交渉には、意識して努めて無關心でゐやうと心がけた。一つは到底その繁に堪えなかつたから。殊に、夫に先立たれて間もない孤獨な叔母に向つては、特に目立たぬやう、萬事控へ目にした。

さうしてひとり埒外にゐやうと心がけた健次は、親戚間の煩さい交渉にわづらはされるやうなことはなかつた。が、たゞ叔母との間はさうは行かなかつた。彼はいつの間にか、叔母の執拗な、意地悪い態度に反撥されて、こぢれてゆく自分の氣持をもてあますやうになつてゐた。ともすればいきり立つ激情をどうすることも出來なかつた。彼は知らず／＼のうちに、叔母に對して自身を頑固に守つてゐた。彼は自分の心を見て寂しくも思つた。叔母の、敏子への偏狹な愛がはゞまれて、形を變へて彼に向けられることは、彼は充分理解してゐた。その點についての反省は、彼は怠らないつもりでゐた。それでゐながら彼は叔母の[illegible]

を送つてゐる叔母への世俗的な思ひやりだ、彼れの良人の顏を想うじて責めることも度々だつた。彼女の同情心、兩方への僻みをこめて叔母に對する氣持が、彼の女にどう反映してゆくかについては極めて不用意であつた。押しつめてしまへば存外意地をもつ敏子ではあつたが、常は人一倍弱氣だつた。何事も云はずに、無理な彼の女の主張を容れた兩親の手前、敏子は叔母に露骨な反感を見せるわけにゆかなかつた。

土地のしきたりの繁雜な往き來は、敏子にとつて煩はしい限りであつた。周圍の空氣になじまぬ健次をそのたびに引き合ひに出すことは彼の女には堪へられない苦痛であつた。父母と伯父叔母たちは、お互に兄妹とは思へぬほどの見榮を張り合つた。彼等は他人以上に空々しい世辭のとりやりをして平氣だつた。彼等の態度は自然にさへ見えた。些少の用事をかこつけに、頻りに尤もらしく繰り返される親戚よりの來訪を、敏子は健次のために厭ふた。わけて叔母は近くもあるし、無聊に苦しんで、一寸の暇にもよく顏を見せるので彼の女は氣苦勞の堪へ間がなかつた。彼の女は、しげしげ訪ねる叔母に、今までかんじたことのない憎惡を覺えた。叔母は自分で仕度するのを面倒がつて、百合子を連れて夕食を招ばれに來ることも珍らしくなかつた。敏子は叔母の不檢束を健次に見られて辱しかつた。少しは考へてくれたらよささうなものだと叔母の强氣を腹立たしくも思つた。

敏子は小さい折に叔母によく面倒を見て貰つた。そのせいか叔母に向つては妙に頭が上らなかつた。彼の女は自分の結婚が問題に上つた時、最後まで一人で非難しつゞけた叔母の態度を思ひ出すと、今だに口惜しかつた。その時、打算一方の叔母の心根をさげすみながら、彼の女は面と向つては何も云ふことが出來なかつた。ひしとこたえた口惜しさは、健次にも明さずにじつと我慢してゐた。

その當座、叔母はわざと健次の存在を無視したやうに、どうでもいゝ用事を敏子に云ひつけた。健次は初めのうち苦

笑してゐたが、敏子のおづ〳〵した態度を見ると不快でならなかつた。

ある日、健次が敏子と二人で茶の間にゐるところへ、店の方で母と何か話してゐた叔母が、づか〳〵と入つて來て、突つ立つたまゝ敏子に呼びかけた。

「あんた、これ縫うておくれやすな。あてはいそがしして、でけへんさかい。」

健次がひよいと見ると、叔母は持ち前の下唇をつき出して、縫ひかけの百合子の單衣をぶら下げてゐた。

何て、だらしない女だらう。……健次は顔をそむけてぐつと唾を飲み下した。――叔母は何かを賴むにも、平然としてさういふ機會を利用する女であつた。

あくる夕方、健次の顔に剃刀をあてゝゐる敏子に、叔母は隣りの茶の間に座つたまゝ、疳高い聲で云ひかけた。

「敏ちやん、百合子の足袋が干してあるさかい、早よ取つて來てんか。」

敏子は意估地な叔母の云ひつけに、もじもじしてゐたが、剃刀をそつと鏡台にのせて、慌てゝ庭に下りていつた。

健次は、解りすぎる位に露はな叔母の意圖に、わけもなく屈した敏子を見て嚇となつた。

「馬鹿ッ。」

彼は敏子の背後に怒聲をあびせて突つ立つた。次の瞬間、サツと襲ふた悔ひに居たたまらず、逃げるやうに二階に駈け上つた。………

健次は叔母の底意を知りながら、つひふらふらと、ぬきさしならぬ泥濘に誘ひ込まれた自分の不用意を省みて悄氣てしまつた。大人氣ない仕打が辱かしかつた。彼は机の前に身體を投げ出して頭を抱へた。――あの叔母を相手にむきになるなんて。――彼は自分の腹の底を叔母に見透かされたやう[illegible]

そこへ敏子が色を變へて上つて來た。[illegible]て、健次は別種な憤りに聲を慄はせた。

「女中がゐるじやないか!。」

萎れて、くづをれるやうに彼の前に座つた敏子に、健次はそれ以上意地惡く當ることは出來なかつた。ふと彼は敏子の眼に涙の浮ぶのを見て目を外した。逆流してゐた血がハタと止つたやうなかんじがした。

興奮からさめた健次は、まだ階下にゐるであらう叔母の氣持を察して苦笑した。彼は耳をすまして階下の氣配をうかがつた。階下の奥座敷はしんかんと靜まり返つてゐた。父は外出勝ちであり、母は店の方に眼が離せなかつた。いつもの靜けさではあるが、健次の頭には異樣に、あり得べからざる靜寂のやうにしみこんだ。彼はカラリと晴れた氣持で敏子を見た。そして半ばテレて剃り殘した頰を撫で廻した。

敏子は初めて眉を開いてホツとした。彼の女は首をすくめてニヤリと笑つた。階下を氣にしながら小聲で云つた。

「こゝへ持つて來ませうか?。それとも……。」

健次は急に眞顏になつて、拂ひのけるやうな調子で云つた。

「いゝから、早く下りなさい。」

敏子は顏をひきしめて、除かに下りて行つた。

健次は立つて障子を開け、椽に出て、もう既に暮靄の立ちこめた外を眺めた。隣家の甍の上に、高台寺の森の梢が紫に煙つてゐた。

「あゝあ、感情の浪費か。………」

ふとさうした感懷に襲はれた。彼は寂しかつた。一體誰のために忍んでゐなければならぬのか。結婚して漸く三月、その間を彼は家庭的な雜事に煩はされ通した。それも覺悟してゐたことではあつた。二年ごし探り合ひの形にあつた二人の關係が急に切迫して、最早後へは引けなくなつた時、健次は非常の手段をとるより他にみちのないことを知つた。健次は既に家を相續してゐてどうにもならない身分であつた。彼は敏子に兩親を棄てさせるに忍びなかつた。彼は敏子の決心を知つてゐた。彼が望めば敏子はどんな方法でもとり得たであらう。少しの不安も感じずにさう思はれた。そして最後の一つ手前で、彼等は敏子の父母に明して決心を述べた。ところが意外にも二人の願ひは許された。彼等は張りつめた氣もゆるんでがつかりした。その時、敏子の親からの條件は、親戚や世間の手前、健次にある時期まで敏子の兩親と同居してくれ、と云ふのであつた。健次は快く承諾して敏子の生家に身を寄せたのであつた。健次はてすりにもたれて考へこんでしまつた。彼はもう東京に行く準備をしてもいゝと思つた。彼自身のためにも、敏子のためにもそれが最良の策であつた。このまゝじつとしてゐたら、敏子の兩親との間も、いびつにならぬとも限らなかつた。

それから間もなく、健次たちは東京に住むことになつた。それは結婚前からの健次の計畫であつた。二人はやつとの思ひで兩親の同意を得ることが出來た。

出發に間もないある夜、家中のものが珍らしく揃つて火燵にあたつてゐた。叔母も百合子を連れて遊びに來てゐた。彼の女は、敏子の嫌がるのもかまはずに、敏子の小さい折の可愛いゝ失策をしやべり立てゝ皆を笑はせた。母が話のついでに、店の方に働らく青年たちが、いかにも賴み甲斐のないことをかこつと、叔母は、火鉢の前に座つてかき餅を燒いてゐる敏子をチラと見て勢こんでずばりと云つた。

「自分の子かて、あてになれへん。」

健次は、何をくだらない、あてにならないか、あなたに分りますか、と云ひ返してやりたくなつたが、叔母への烈しいさげすみが先立つて、冷笑にまぎらした。敏子は手を休めてじつとしてゐた。別に平氣な顔でゐた。父はおだやかな微笑を浮べ、母一人があとでやきもきした。その夜寢床についてから、敏子は健次の脣を貪るやうに求めた。

健次たちが東京に住むやうになつてからは、叔母の尖つた神經もいくらか和いだやうであつた。優しい便りをくれたり、時には季節のものを送つてくれたりした。たまに歸省して會ふと、叔母は以前とは打つて變つた親しみを見せた。何うしてさう變化したのか、健次は深く考へる氣にもなれなかつたが、自づと氣の輕るくなるのを覺えた。叔母は會ふたびに肥つてゆくやうであつた。あごが二重にくゝれ初めて、一層若々しく見えた。

震災後初めての新年を兩親と共に迎へるために、健次たちが京都に歸つた時には、叔母は店をたゝみ、百合子を敏子の母に預けて、自身は大阪の方に行つてゐた。郊外の方の女學校に奉職してゐるといふことだつた。もう百合子は、片言交りにおしやべりするやうになつてゐた。

「お母あちやんは?。」

ときくと、百合子はにつこりして答へた。

「おほちやか。」

健次は何となく佗びしいかんじで百合子を見守つた。

「みじめだわね、」

敏子も顔を曇らせた。

「店の方はいけなかつたのか知ら?。」

「一人では、矢張り不安になつたらしいわ。」

百合子は母の歸りを待ち佗びた。小さい指を折つて、

「もうこれだけ寢たら、歸つて來やはるのか？。」

と頭をかしげてきいた。毎日、あきずに何度もくりかへしてきいた。

叔母は常は學校の寄宿舍に泊り、土曜毎に歸つてくるらしかつた。敏子の母は、百合子が日に増し、母を忘れがちになることを云つて寂しさうな顏をした。百合子はまた時々、つかれたやうに、母の寫眞を見せてくれとせがんだ。寫眞は叔母が結婚當時、夫と二人で寫したものであつた。それを與へると百合子は、怒つたやうな顏でじつと見入つて動かなかつた。

「この人どなた？。」

敏子が指さすと、百合子は顏を赧らめて答へた。

「あてのお父うちやんどす。」

「さう、どこへゐやはるの。」

「ゐやはらしまへん。」

「へ？。」

「死なはりましてん。」

健次は見かねて敏子をたしなめた。

「百合ちやん、

健次が手を差し出しても、百合子は羞かんで寄りつかなかつた。彼の女はよく肥つて可愛らしかつた。しかし、何故か健次には馴まなかつた。ふつくらと盛り上つた頬や、二重の顎は叔母そつくりであつた。すねて、長い睫をしばたゝき、ツンとそつぽを向くしぐさまでが叔母そのまゝであつた。健次は百合子を見ると、よく最初のうちかんじた叔母の冷たい眸を思ひ浮べた。

健次は叔母の獨り立ちを危ぶまずにはゐられなかつた。と云ふよりは百合子の前途を包む暗影に、ひそかな危惧をかんぜずにはゐられなかつた。どことなく心魂に緩みのかんじられてならない叔母が、職業婦人として多くの異性の中に交はることは、健次には不安な豫感が伴はずには考へられなかつた。一面、勝氣で打算家だけに、返つて脆くも敗けてしまふことがありはしないだらうか。頽廢的なだらけきつた空氣の張つてゐる教育界である。どんな機會が待ちうけてゐないとも限らない。健次は叔母が教職にあるだけに、一層強く危險を覺えた。

叔母は、つゝましくて行きさへすれば、一生困るやうなことはない筈であつた。一人子を手離してまで働らかねばならぬ理由が、叔母の心のうちにきざしたのであらうか？。健次には叔母の氣持が解らなかつた。

敏子の父は彼一流の解釋で、「働らける間にうんと働らいて置く方がえゝさかい。」と云つてゐた。健次も、一切の價値を物質に基けて考へるやうな叔母のことであるから、或は父の云ふ通り、さうした考へで大阪に行つたのかも知れないと思つた。母は叔母の態度については何も云はずに百合子の相手になつてゐた。

東京に戻つてからは、健次はあまり叔母のことを思ひ出す折もなかつたが、ふとして、彼の女の結婚前のロマンスを、死んだ夫と戀し合つて結婚したと云ふ話を思ひ出すことがあつた。それは敏子にきいてゐたのであるが、何故か、嫌な連想ばかりが伴つて思ひ浮べられるのだつた。彼は笑ひながら敏子に云つた。

「叔母さんは京都にゐるのが窮屈になつたのじやないか」

「さあ。………」

「大阪に一人でゐて大丈夫かしら？。」

敏子は目を伏せたまゝ冷やかに云つた。

「間違ひはおへんやろ。あの人かて辨へてるさかい。」

彼の女はたしなみを忘れたときに限つて、郷里の馴れた言葉使ひをした。健次は彼の女の他所ゆきの、にべもない調子を意外に思つた。彼は敏子との間にある牆壁の存在をはつきり感じた。

それから一年ほど立ち、敏子のお産の時期が近づいて來たが、健次は彼の女を京都に歸へす氣にはなれなかつた。敏子が京都にゐて安靜な氣持を續けられさうもないことが、健次の胸を痛めた。長い汽車の道中も考へなければならなかつた。それに一人殘されたあとの自分のみじめさを思つて、彼は敏子を歸すまいと考へてゐた。彼の女も初めのうちは歸らないつもりで色々と用意してゐた。が敏子は、日に增し不安になつて來た。手足がだるくて毎日の仕事が億劫になり、時々は下腹にさしこみが來て、彼の女はおびえて靑くなつた。健次は彼の女の苦しさうな息づかひを氣にしては、

「大丈夫だよ。」となぐさめた。

敏子はそのたびに「でも……」としぶつて不服さうな顏をした。さう云はれると健次は、もとより默つてしまふほかなかつた。

お互に、口に出して語り合つたことはなかつたけれど、敏子は健次の心の中に、從來の生活を切り更へて新らしく出直さうとする心構へのあることを知つてゐた。日々の雜事についてはお互に我を張り、けなし合つて氣まづい顏をする

ことが絶えなかつたが、腹の底はいつも靜まり返つてゐた。互の氣持を口に出すことさへはゞかるやうに、いつの間にかなつてゐた。敏子はお産のごた〳〵を健次の前に見せたくないと思つてゐた。

「あなた困るでせう。」

敏子はさう云つて寂しさうな顏をした。

で結局ぎり〳〵のところまで行つて不意に歸ることになつた。

敏子を送つて京都に歸つた時、健次は叔母の今度の緣談が持ち上つてゐることを聞いた。そして、持ちこまれた緣談に對する母の態度が、大部以前とは違つて來てゐることをかんじた。

「どうして坊さんなぞから申込んで來たものかな。」

さういふ健次の顏をふり返つて敏子はにつこりした。

「いつかの法會に來たあの坊さんですつて。それから度々來たらしいわ。」

「はアん。……」

健次はその坊さんを一度見た。きれいな坊さんだつた。が、顎のあたりになんとなくひやうきんなかんじがたゞよつてゐる人だつた。茶色の眼もうるをひがなさすぎて嫌だつた。健次はおぼろげに殘つてゐるその坊さんの面影を思ひ浮べてほゝゑんだ。

嵯峨の奥にある寺の住職で、京都の本山につとめてゐ、そこから敏子の家の法事に來るので、彼の女などは顏馴染であつた。

「あの坊さんが、叔父さんの戒名も書いたのよ。下手な字で、叔父さんに何んだか濟まないやうな氣がしたわ。」

「毎年の法會にもあの人が來たんだな。」

「え、さう、つひこの前の五周忌に來て、その場でお母あさんに、ぢかに話して行つたのですつて。」

「へえ!」

健次は擽つたい顏をした。お經を讀んだあとで、その佛の未亡人に對する結婚の申込を、そつとして行つた坊さんの姿を想像して、一寸可笑しかつた。

敏子は緒い顏して小聲で云つた。

「お母あさんは問題にしないでせう。」

母は深く考へやうともしなかつた。昨年、妻君に死なれて、二人の小さい子を持てあましてゐるといふその坊さんの所へ、今更嫁がせる位なら、彼の女はさう思つてゐた。健次の眼には、母の冷淡な態度が著しく映つた。

ところが、今までとの話にも傍觀的な態度をつゞけてゐた父は、多少こんどの話には心を惹かれてゐるやうであつた。

「子供は二人とも女の子やさかい、あんじやうでけるわ。……」

「そやけど、……中々どすやろ。」

「一寸の辛抱や。二人の子を嫁にやつてしもたら、あとは氣樂なもんや。お寺はんで威張つてゐられるわ。極樂や。」

あつさり事もなげにいふ父を、母はうらめしげに見て默つてしまつた。

吉川の伯母はもつと烈しかつた。伯母は吉田からわざ〳〵出て來て母を說いた。健次は彼の女の見え透いた腹を淺間しく思つた。先方の寺が、格以上に何何であると云ふ話になつて、[illegible]

た。そして、露骨な忖度が許されるならば、この縁談の成立したあかつき、最も便宜を得られるのは古書畫、骨董類を持ち廻つてゐる伯母のつれあひであることは明らかであつた。本山で相當な地位にゐるその坊さんは、その方面には明い眼を持つてゐると云ふことであつた。

「あの子には辛抱できんやろ。」

母が進まぬ顔をしてさう云ふと、伯母は生來の太い聲で笑つて云つた。

「何云つてんのや。生娘やないよつてに、案じることないわ。それに、初めてのことやないし、あんじやうゆかなんだら、さつさと歸つて來たらえゝがな。」

健次は襖一座の隣室から洩れるそれらの言葉を聞いて驚いた。敏子は聲をひそめて云つた。

「お母さんは、お寺の様子をあなたに調べて頂きたいらしいのよ。」

「そんな事は僕の柄ではないね。僕が行つたら、先方のよくない所ばかり調べてくるよ。」

健次は嘲けるやうにつぶやいて、隣りを氣にした。

敏子は顔をしがめて調子を合せた。

「あてはあの坊さん嫌い！。直ぐにお商賣の説教口調を出すんですもの。」

さう云つて彼女は舌を出して首をすくめた。健次は苦笑した。どうだつていゝ筈のことがらに、氣をもんでゐる自分達を省みて。

あとで母は、健次の顔を見て訴へるやうに云つた。

「どないしたら、よろしやろ。」

「さあ……叔母さんが嫁く氣なら……。」
さう云つて健次は自分達の結婚當時を思ひ起した。あの時叔母はさう考へてくれなかつた筈だ。……彼はきつと唇をかんだが直ぐ思ひ返して云つた。
「一度、叔母さんに話して御覽になつたらいゝでせう。」
「あの子もまさか、そないな氣にはなるまい、思ふのやけれど……。」
母は帶の間に右手をはさんで考へ込んでしまつた。
母は今までのやうに、一人で反對してゐられない氣がして、兎に角、本人の叔母の意向を訊くことになつた。
叔母は、はでな大柄の羽織を着て歸つて、健次の眼をみはらせた。健次は敏子と二人きりになつた時、
「お前、も少し華やかなものを着たらどうだい。」と云つた。
敏子は笑つてゐた。
叔母は氣のりのしない様子だつた。先妻の子が二人もあるときいて、興ざめた顔をした。吉川の伯母も、母に示したやうな露骨な態度は、さすがに叔母には見せなかつた。叔母は何事も聞かなかつたやうな顔をして、翌朝大阪へ行つてしまつた。
數日後、坊さんから催促の手紙が來た。健次は母あてのその手紙を見て嫌な氣がした。手紙には、他に一つ緣談が持ち上つてゐることをほのめかしてあつた。こちらの話が不調に終れば、その方の話をすゝめたい。ついては至急返事を頂きたいと云ふのであつた。
「まるで地面の賣り買ひでも、してゐるみたいですね。」

健次はさう云つて坊さんのやり口を笑つた。そして、先方の心持はそれで七割解つたやうな氣がした。よほど困つてゐるらしいことも察せられた。

彼は母に向つてきつぱり云つた。

「お母あさん、斷つておしまいなさい。先々好いことはないに決つてゐます。」

健次は母の云ひつけで坊さんあての返事を書いた

……あれも今まで、切角あゝして來たことでありますから。御厚意の段は感謝いたしますが……

そしてすぐ單身上京した健次には、その後の樣子は解らなかつた。忘れるともなく忘れてしまつてゐた。敏子の安産の知らせを受け取つてから、今まで京都の消息には接せずにゐた。

切角あゝして今まで……彼はその時書いた文句を口ずさんで見た。本人の氣がすゝまないのでと書いて、彼は改めてその文句を消したことを思ひ浮べて微笑した。彼は敏子の手紙を見て、どうして叔母がゆく氣になつたのだらうかと思つた。そして、はしやいでゐる叔母を想像して、彼の女の本體をしつかりつかんだやうな氣がした。

それから十日ほどして、また敏子からの便りがあつた。叔母は突然歸つて來て泣いて母を責めたのださうだ。母が叔母にたゞしもせずに斷つたことを、狂氣のやうになつてうらんだと云ふことだつた。

「……××日の夕方、叔母さまはとうとう嫁かれました。一日でも早くと云ふお二人の要求で、母あさんや、吉田の伯母さんは、てんてこまひをなさいました。式は手輕に慌だしく擧げられました。百合ちゃんを連れた叔母さまを見送つた時には、あつけない氣がしましたが、今になると何だか馬鹿にされたやうな氣もします。

叔母さまは、それは〳〵嬉しさうでしたのよ。坊さんが――今はもう叔父さんですわね。ホヽヽ、嫌なこと！――大阪までわざ〳〵會ひに行つて、そして話が急にきとまつたんですつて。約束の調つた日なんか、ずいぶんでしたのよ。晩に坊さんがのこのこやつて來て、「牛肉でも食べに行きませう。」と叔母さまを誘ひました。叔母さまは行きたがる百合ちやんを無理に寢かしつけて、さつさと二人で出て行かれました。あとに殘つた年寄たちは、苦甘い表情で顔を見合せてゐました。叔母さまはその夜一時すぎに歸られました。翌朝、父うさんは小聲で「どこへ行つて來たのだらう。」と云つてニヤリと笑ひました。

しかし、叔母さまは、案外氣樂にやつておいきになるでせうと思ひます。先方の子供や百合ちやんのことを眞劍に考へるやうな人ではありませんから。………」

健次は讀み終へて、蟲づの走るやうな汚らはしさを感じた。しかし、周圍の誰よりも叔母は正直な人のやうに思はれて來た。健次は叔母に、お祝ひの手紙を書かうと思つたがそれはやめた。

健次は、くど〳〵しく、さうしたいきさつを書いて寄こした敏子の氣持を想つてほゝえましい氣がした。漸く産褥を離れた彼の女は吐息と共に、一部しじうを見てゐたのであらう。………健次は彼の女を迎へに行く日どりを胸のうちで數へて見た。



折鞄

徳田秋聲

融は何時からかポオトフオリオを一つ欲しいと思つてゐた。會社員とか雜誌新聞記者とか、又は醫者のやうに、別段それが大して必要と云ふほどのことはなかつたけれど、しかし其があると便利だと思はれる場合が時々あつた。一日の汽車旅行とか、近いところへ二三日物を書きに出る場合とか、でなくて長い旅でもこま〳〵した手廻のものを仕舞つておいて、手輕に出し入れのできる入れものが一つ有つた方が便利であつた。煙草、マツチ、薬、紙、ノオト、賴信紙、萬年筆、雜誌、小さな書冊、そんなやうな種類のものは、その全部でなくても、ちよつと出るにも洋服の場合は、ポケツト、和服の場合は袂や懷ろに入れておけないことはなかつたけれど、矢張何か入れ物に取纏めておく方が都合が好かつた。しかしもと〳〵事務的に出來てゐるポオトフオリオが、事務家とも遊民ともつかない老年の彼にふさふか何うか考へものであつた。融は時々手提の袋などを買つて、その當座二三度持つて歩いて悦んでゐたこともあつたが、何だかぢぢむさい氣がして、いつでも棄てつぽか

してしまつた。

「何うだらうポオトフオリオを一つ買はうかな。」

融は子供や妻と町を散歩したり、買いものに出た場合などに、鞄屋の店頭や飾店の前に善く立停つて言つたものであつた。勿論それは實用品といひ條、彼に取つては人のもつものを、ちよつと玩具に持つて見たい程度の、小供らしい慾望でもあつた。

「お父さんには少し可笑しいな。」子供は言ふのであつた。

融はその時は子供に遠慮するやうに、買ふことを止めたが、しかし何うかすると、鞄屋の前に足を止めることが、其の後も時々あつた。

すると大晦日ちかい或日のこと、彼は二三日それが續いたやうに、その晩も妻と大きい子供と町を散歩した。彼はその前の晩も三人で、本屋を三四軒覗いて、劇に關する著述と俳諧に關する書物を買つたが、その又前晩にも、妻と二人で贈りもののお屠蘇の道具を買つたりした。或晩なぞは途中で彼女が遽かに氣分が變になつて、急いで家へ引返した。

「何だか頭が變ですから、私歸りますわ。」

彼女は悲しげな聲で融に告げるのであつた。

「あゝ、それあ可けない。大急ぎで歸らう。俺が手を引いてやらう。」融は吃驚して、彼女の顏を見ながら言つた。

「いゝんですの。そんなでもないんですけれど、何だか變ですの。」

融は若い時分から、時々出逢つてゐるやうに急に、足の鈍くなつた彼女が今にも往來に倒れさうな氣がした。それほど彼女の顏色が蒼かつた。顏全體の輪廓や姿も淋しかつた。

「お前の顔色は大變に惡いよ。まるで死人のやうだよ。明朝醫者においでなさい。何を措いても此度だよ。」融には言調に力をこめて、少し脅かすやうに言つた。勿論顔色が凄いほど蒼かつたことは事實だし、秋以來ずつと健康を惡くしてゐることも解つてゐたけれど、その言葉には兎角病氣を等閑りにしがちな彼女を、少し驚かしておかうといふ氣持の方が勝つてゐたことは事實であつた。

融は持病もちの彼女の健康に、彼女自身より以上の不安を抱いてゐた。もう二十年の餘も前に、産後その病氣が發生したときほどの歎きと恐怖は、それほどでもなささうな其の後の經過と醫者の診察とで、時々に薄いでゐて、年月がたつにつれて、慣れてしまつてゐたけれど、でも融はひゞの入つた危つかしい瀬戸物か何かを扱ふやうな不安から始終離れることが出來なかつた。そしてその病氣に慣れて來て何うかするとまるで餘所事のやうな顔をしてゐる彼女を腹立しく思ふことすらあつた。

「自分一人の體だと思はれては困るぢやないか。この頃はちつとも醫者へ行かないやうだが、近頃新聞によく出てゐる、腎臓から腦溢血を惹起して死ぬ人のことを讀む度に、俺はぞつとするよ。」

融はついこの頃も、朝早く起きて、子供の辨當などの仕度をして、疲れた顔をして長火鉢の傍にすわつてゐる彼女を窘めたことがあつた。頭のわるい彼女は、朝起きを昔しから辛がつてゐたが、ごたつく台所の音が耳に入ると、矢張り寢てもゐられないのであつた。それに一度起きると、ちよつと横になつて體を安めると云ふやうなことが、絶對に彼女には嫌ひであつた。

「早起きしたときは、子供を出してから少し寢るやうにしたら可いぢやないか。」融はさうも言つたが、しかし融が心配して何かと干渉がましいことを言つても、彼女はいつでも素直に「さうしませう」と答へたことはなかつた。格段融の言葉

が耳に逆かう譯ではなかつたし、腹では感謝してゐるんではあつたけれど、彼女の氣分は、融がじれ〳〵するほど硬くてむづかしかつた。融は煩く世話をやくことを、控へなければならないやうになつた。勿論融が氣づかない時でも、利尿劑とか、處方によつた藥などを、そつと飲んでゐることもあつて、融が苛々するほど、づうづうしくなつてゐる譯でもなかつた。

その晩も、それほど氣分が惡くなかつたけれど、一晩熟睡すると、翌朝はまた何のこともなかつた。そして不斷のやうに働いてゐた。それで其の翌晩もまた町へ出て行つた。

それから又一日おいて、親子は三人で森の町へ出て行つた。別に大した買ひものもなかつた。化粧品屋で何か二三品彼女が買つたゞけであつた。

「どこかへ行かうかな。」融は途中旅へ出る自分を想像した。

「行つていらつしやいよ。」彼女も勸めた。

「餘り遠いところは可けないし、近いところは一杯だらうしね。」融は不決斷に言つた。

彼等は、いつもの家で、彼女の好きな鮨を食べに寄つてから、歸路に就いた。

途中融は思出したやうに、鞄屋の飾店の前にふと立止つた。

「一つ買はうかな。」彼は子供のやうに惹着けられた。

「お買いなさい、お買ひなさい。」妻も贊成した。

「お父さんが使はなければ、僕が持つて歩いてもいゝよ。」

「それも可いだらう。」

二人はぞろ／＼部屋へ入つて行つた。そして品物の選擇に取りかゝつた。あれかこれかと三人でやゝしばらく評議した結果に、彼女の助言で、到頭その中の一つに決めた。さう云ふ場合の彼女の助言が、いつも不決斷な融の意志を決定させた。必ずしも彼女がいつでも好い買ひものをするとは決まつてゐなかつたかも知れなかつたが、よく物を買ひぞくなふ融には遠慮のない助言が必要であつた。

融は何だか嬉しかつた。そして家へ歸つてからも弄くりまはしてゐた。彼はそれを提げて、ちよつと何處かへ行つて見たいやうな氣がした。

その折鞄をさげ出して、融が驛前のホテルへ行つたのは、その翌日の晩方であつた。融は年のうちに遣らなければならない小さい仕事が、まだ二つ三つあつた。それに最近持病の胃腸がまたちよつと可けなくなつて、暫くお粥ばかり食べてゐたので、何處か暖かい海岸の溫泉へでも行きたいと思つたが、仕事の都合でさうも行かなかつた。彼はしかし健康は害してゐたけれども、氣分は寧ろ積極的に傾いてゐた。今迄やつて來た仕事や、現在の生活境地に或る飽足りなさと空虛を感じてゐたので、いくらか根本的な計畫に取りかゝりたい希望に急立てられてゐた。そして其と同時に、自分自身の健康と妻の健康とを悉皆よくしなければならないことを感じてゐた。そして若し經濟狀態が許すならば、家庭を離れて、靜かな孤獨の生活に入りたいとも願つてゐたが、長いあひだ染みこんだ家庭の臭み―それは重もに彼女特有の氣分や流儀から割出されたところの、決してさう無趣味でも不愉快でもないながらに、餘りに世俗的で外面的な仕事に煩はされがちなことや、一應目端がきいて、しつくり彼の氣分に合つて行くらしく思はれる、日常生活の底に、どこか本當に融け合つて行くことのできない、性格や氣質から來てゐる矛盾が、遂ひに何うすることもできないものである

ことに、氣づいて來てゐたからであつた。極端に言へば、彼女がほんたうに彼のものになり切つてしまつたのは、三年前腦溢血で死んだ彼女の母を失つてからだと言つてもいゝくらゐであつた。それでもまだ、小心で臆病で勝氣な彼女は、ほんとうに自分の兩手をひろげて、良人の胸に體を投げかけて來ることのできないやうな、それは遠慮といつて可いか、頑固（かたくな）といつていゝか、兎に角良人を信じ切ることのできない硬い感じが、彼女をひどく窮屈で哀れなものにしてゐた。そして何かにつけ人情ぶかい彼女ではあつたけれど、本質的な深みのある夫婦愛には觸れえなかつた。恐らく融も、長いあひだの色々の場合に於ける自己保存の必要から、對立的に自我的にならずにはゐられない事情もあつて、彼女が母を失ふまでは、本當に彼女をいとしむことが出來なかつた。

「M――は郵便を出すのに不便だし、熱海や湯ヶ原も臆劫だし、いつそ松の內だけでもホテルへ出て見ようか知ら。」

融は二三日前、東京へ出る度に、いつも泊ることにしてゐる。そのホテルへ來てゐるS――氏夫妻に或る劇場でひよつくり逢つて、一緒に觀劇に行つてゐた子供の一人をつれて、歸りに銀座のふじ屋の食堂へ入つてから、ホテルへ同道して、その部屋で暫らく遊んで歸つた。その時「暫らくこゝへ來てもいゝな」とふと考へたので、ちやうどS――氏夫妻も來てゐるし、原稿を出すのにも便利なので、ポオトフオリオをさげて、そこへ行つてみようかと思つた。子供のないS――氏夫人は、その時融の子供を見て、大きくなつたのに驚いてゐた。

「お湯へお入りになりませんか。」夫人はお愛相に言つた。

融の長男は、何んな人中へ出ても、どんな豪い人の前へ出ても、俛いたり硬くなつたりするやうな事は、決してなかつた。餘り卑俗な人間でさへなければ、何んな年長者とでも話の調子を合すことの出來る性質に生れついてゐた。そして融が辭退したところで、夫人は子供に勧めた。

「さあ」彼はにこ〳〵してゐた。

「今用意させましたから。」

「さうですか。それなら入つても可いですが……。」

後でS――氏の子供觀が出たりしたが、融は子供と一緒であつても、少しも父親らしいぎごちなさを感じなかつた。

そのホテルで一週間ばかり書いたり談じたり讀んだりしようと思つて、彼は家を出て行つた。

「年越しには歸らうね。元旦の雜煮も家で食べるからね。」

「貴方が留守だと人も來ませんし、私も體が樂ですから。」妻もポオトフオリオに物をつめてゐる融の子供らしさを可笑しく思ひながら、笑ふこともできなかつた。

兎に角彼は感冒にかゝらないやうに、妨寒の設備のあるところが必要であつた。

室を極めてから、彼はS―氏夫婦の部屋の戸を叩いた。戸が開いたところで、ぬつと顏を入れると、夫人は今湯からあがつて、浴衣一枚であつたところで、ベッドの上に體を悚めてしまつた。融はあわてゝ廊下へ出た。

暫らくすると、夫人が部屋へやつて來た。そして脚本が上場されるについて、S―氏が劇場へ行つてゐることと、間もなく歸るであらうことを告げた。暫く話してゐるうち、夫人が

「食堂へ入らつしやいませんか」と言ふので、融も、

「行きませう。飯を食べて來ましたが、しかし紅茶くらゐなら。」

案内役の夫人について、やがて融は食堂へおりて行つたが、時間がちよつと早かつたので、ホールで待つことにして、隅の方の椅子にかけた。融は彼自身と反對に子供や係累のないS―氏夫妻が、海岸の家を閉め切りにして、大晦日

だといふのに、東京へ出て來て、二人でホテル住ひなどしてゐる幸福が、如何にも羨ましくて仕方がなかつた。さう云ふ生活も餘り幸福なものでないことは、時々S―氏から聞かされたことだが、融のやうな家庭の囚となつてしまつたものには、それは寧ろ贅澤の沙汰だと云ふ氣がした。

食堂の時間が來たところで、夫人は自分の食事の外に、融にも何か取つて、葡萄酒などを注がして待遇したが、その間に劇場の良人へ電話で融の來たことを通じたりした。

間もなくS―氏が歸つて、食堂へやつて來た。そして食事をしながら、例の快活な調子で、舞臺稽古の話などした。

食事がすむと、又ホールへ出て煙草をふかしたが、夫人の發言で三人で暮の銀座へ行くことになつた。

「行きませう。」夫人が言ふと、

「さあ。」S―氏は目を瞬かしたが、「昨夜は大變だつた。尾張町附近はまるで動きが取れない。何が面白いんか知らないけれど、外に行くところがないからな。」

やがて四階へ外套なんか取りに行つてから、揃つて外へ出た。融はいつもの癖で、さうやつてゐても、やつぱり家のことが氣にかゝつたり、暮に書いた作品に對する不滿があつたりして、創作興味の緊張し切つてゐるS―氏が生活と藝術とがぴつたり一つのものになつてゐるのに比べて、餘りに自己分裂の多い生活の煩はしさに堪へ切れない自己を哀れまずにはゐられなかつた。

銀座はその晩も、歩行が困難なくらゐ人出が多かつた。融は暮の外の氣分が好きであつたが、家のなかの暮氣分も惡くはなかつた。そして賑かな銀座を歩きながらも、自分の子供達と同じ新時代の青年達などの愉快さうにぞろ〳〵歩いてゐるのを見ると、何だか場ちがひの人間のやうな寂しさをすら感ずるのであつた。

「あゝ、あれが暮の銀座へ一度行つて見たいと言つてゐたつけ。」

私はふとそんな事を思ひだした。するとづつと以前の或る年の大晦日に、彼女と二人で此處へやつて來て、帶の[illegible]りもの丶半衿などを、彼女が買つてゐたことたどが思ひ出されて、妙に氣が滅入るのであつた。

「どうせ春になれば、どこかへ行くつもりだ。來年は二人で伊勢へでも行かうかね。それから京都や大阪も見せてやらう。行かないかい。」私はつい此の頃の晩も、そんな事を彼女に話した。

「え、よし子をつれて行ければね。」彼女は答へたが、餘り氣も進まないらしかつた。

「行つてらつしやい。」長男も傍から勸めた。

しかし二日でも三日でも家を棄てゝ夫婦で旅などして歩く氣分になりうる彼女ではなかつた。[illegible]

[illegible]

履を一足買つて來た。

「好いのがないんだ。」

「上等ですわ。これなら暖くて……。」

「スリッパがよかつたかな。」

「いゝえ結構ですわ。有難うございます。」彼女は嬉しさうにお禮を言つた。

そして一と晩親子三人で大阪淨瑠璃を聽いて歸つた。そんな事もあつた。

「これお、よし子をつれて行けば安心だけれど。大變だぞ。五日くらゐ可いぢやないか。」

「さう行きたいと思ひませんね。勿體ないですもの。子供がもつと大きくなつてから……。」彼女は矢張り氣が進まなかつた。

「子供が大きくなる時分には、此方が年を取りすぎてしまふ。」融は言つたが、病氣のある彼女が、長い旅に堪へるか何うかは不安であつた。

彼女が行くと言つても。融かつれて行つたか何うかは素より疑問であつた。彼の頭腦は最近殊に忙しかつた。行樂的な旅などする餘裕はなかつた。ホテルへ來る前の晩か、その前の晩かにも、彼は不斷のやうに、家庭の年末氣分とは全く離れた、彼一人の世界を考へてゐた。

「お餅を切つてくれませんか。」

ホテルへ立つ前の晩にも、餅を切つてゐた妻がいきなり融に言つた。不斷なら切つてやらうと言つても、後で手がふるへるのを案じて、切らさない彼女がどうしてそんな事を言つたかは、其の時の彼には全く氣のつかないことであつた。

「笑談ぢやない。おれはそれどころぢやないんだよ。」
融は讀みたい本を少しづゝ集めようと思つて、その晩も子供をつれて、本屋を獵りに出た。妻も買ひものがてら從いて來た。

銀座から歸つてから　融はS—氏夫妻の部屋で、二時間も話しこんでしまつた。
翌朝もS—氏夫妻と時に顏を合したが　重もに新聞を書いたり、雜誌を讀んだりした。
晩には夫妻にさそひ出されて、風月の食堂へ行つた。
「やつぱり風月がいゝのかね。」
「何うだかわからんが、M—なんか一番旨いと言つてゐるね。あの連中は西洋にゐて、洋食の味は知つてゐるだらう。××屋（俳優）もよく行くよ。」
「僕も久しく行つてみないから。」
三人は自動車を傭つた。S—氏夫妻の生活振が、最近可なり余裕のある幸福なものになつてゐることが、融にも感づけた。それも子がないからだと思はれた。彼は子供を多勢もつたことを、不仕合せとも仕合せとも考へなかつた。たゞさう云ふ風に運命づけられた自分の生活だと思ふだけであつた。自分のやうに何時までたつても子供つぽい人間には余りふさはしい運命だとは思へなかつたが、子供で苦勞して自分が、眞實の自分だといふ感じもするのであつた。
「S—に多勢の子供をもたせたら。」融はちよつと皮肉な考へを浮べて見たりした。
兎に角子供をもたないS—氏の前では、自分が弱者であることを感じないではゐられなかつたが、それも世間的生

だけの意味であつた。事によると、それは單に經濟的な問題であるだけで、さう本質的なものではなかつた。

自動車の窓にうつる日本橋や京橋の大通りは、昨夜と同じく人の海であつた。

風月の食堂ではS—氏夫妻はお馴染であつた。融は幾年月かで來たが—無論震災で昔しの建ものは燒けたにしても少數の御定連に旨いものを喰はせる家だといふ落着いた感じがあつた。大晦日のことで、客はさう立てこんでもゐなかつたが、三人ばかりの子供をつれた、四十三四の紳士夫妻が、こゝで年越しの晩餐を樂しんでゐるのが、何となし融の目を惹いた。融は今頃家でも、妻の拵へた煮もので、子供たちが打揃つて年越しをしてゐるだらうと思ふと、その方が旨く味へるやうな氣がした。大きい方は銀座でも歩いてゐるかもしれないと思つた。現に今彼は家庭人の悲哀と言つたやうな氣分に躓いたやうな感じであつた。實際彼が家庭人か何うかは疑はしいので、今日の前に見る紳士のやうな怡樂は、感じてゐないのであつた。むしろ人間的な悲哀が、彼を繋ぎ止めてゐるに過ぎなかつた。

「これは旨いんだらうかね。」融はカリーフラワを食べながら言つた。

「こんなもの些つともおいしくはありませんわ。」夫人は若い娘のやうに言つた。

「こゝは一番レフアインされた料理なんだらうが……。」

食事がすんでから、ストウブの傍でお茶を飲みながら料理の話をした。

「こゝのビステーキが有名なんださうだ。」

「ビステーキは確かに好いな。まあ食つたあとの腹工合の好いところを見ると、調理の好いことだけはわかるやうだ。さう云ふ點が好いんじやないかな。」

それから其處を出てから、銀座へ出た。途中で近代劇の舞臺へでも出て來さうな洋裝のH—氏夫妻に出會つた。連中

がライオンへ來てゐることを、H―氏は告げたので、歸りにライオンへ寄つて、其人達としばらく話を交へてから、やがて其處を出た。

元日の朝が來た。

融は少し寢過ぎて、時間がおそかつたけれど、約束がしてあつたので、電車で雜煮を祝ひに、わざ〳〵家へ歸つた。雜煮は彼自身の好みで、いつも其に決めてゐるので、それでないと寂しかつた。

家へ歸ると、子供たちの多くは、もう屠蘇と雜煮を祝はつたあとで、臺所も一と片着けすんだところであつた。妻はちよつと臆劫さうな顏をして、彼の來たことを、さう悅ばなかつたが、ガスに點火して仕度に取りかゝつた。

「どうしたんだ、又子供と喧嘩でもしたのか。」融は不平さうに言つた。

雜煮の鍋を仕かけてゐる彼女の顏が、不斷でも善くあるやうに、その時も濁んだ色に少し脹んでゐた。でも、融は氣にもかけなかつた。

彼女もいくらか元氣づいて來た。

風呂から上つて來た、十七になる愛子が、今にも消え入りさうな呻吟聲を立てゝ、緣側まで來て、ぐた〳〵と倒れた。融はあわてゝ妻を手傳つて寢床へ抱きこんで介抱した。

「逆上せたんですよ。」妻はさう驚きもしないやうに言つた。

愛子は間もなく顏色が出て來て、口もはつきり利くやうになつた。そこへ年始の客が來た。妻は愛相よくそれを迎へて、屠蘇の道具やお重のものなどを運んで煮ものを取配けたりした。部屋は例年のとほりに、狹いなりにきちんと片着

いてゐた。

その客が歸つたのを機に、融もホテルへ歸らうとした。

「え、貴方は忙しいんだから。」彼女も言つた。

融は彼女が疲れてゐるのに氣づいてゐた。歸つてしまへば、後で寢るであらうことを期待しながら、第二番目に來た禮者と前後して、表へ出た。そして忘れた藥や何かを取りに、二度ばかり小戻してから、急いで大通りへ出た。

ホテルへ歸つてみると、S―氏は卓子の前にかけて、一心に何か書きはじめてゐた。顔が緊張してゐた。融は部屋へ歸つて、雜誌を讀みはじめた。

その晩彼はS―氏夫妻と、帝國劇場へ行つたが、何か落着かない氣分であつた。愛子が若し可けないやうなら、ホテルへ電話がかゝるだらう。さうしたら此處へもしらしてくれるだらう。彼はそんな事を考へながらも、いくらか容らしい劇場の空氣に浸つてゐた。

翌朝彼はけたゝましい電話のベルに呼びさまされた。劇場から歸つた彼は、疲れてぐつすり寢込んでしまつたので、あわたゞしい其のベルの音の震動を耳にしながら、やゝ暫らく其れがどこで鳴つてゐるのかを意識しなかつたが、ふと愛子のことが、仄かに頭腦に浮んで來たので、慌てゝベットから辷りおちるやうにして、卓上電話にかゝつて行つた。

「もし〳〵。」彼は夢現のなかで呼かけた。

「お父さんですか。僕ですが……お母さんが惡いんです。何うも腦溢血らしいんですが……。」

融は遽に暗い氣持になつたが、腦溢血といふ言葉を其まゝに受容れることは困難であつた。

「そやね、今直ぐ歸るから、誰か好いお醫者を一人呼んでおいてくれ。」融は顫へる聲で、好い醫者に力をいれた。

融は大急ぎで、しかし割合に落着いて、着ものを着たり、折鞄に紙や萬年筆を仕舞ひ込んだりして、別れをS——氏に告げに行つた。S——氏はもう床を離れて、窓ぎわで仕事に熱中してゐた。

「家内が病氣ださうで、僕これから歸らうと思ふ。」融がいふと、

「さう。すつかり引揚げるですか。」S——氏も無論それほどの事とは思はないらしかつた。

融はそれから又一旦部屋へかへつて、下へ電話をかけて、會計と自動車を頼んでから、外套や衿卷をして、力ぬけのした足で、エレベータの乘り場へ出て行つた。

下へおりると、S——氏夫人が、もう其處へ出てゐて、口數は利かなかつたけれど、悲しげな目をして彼の降りてくるのを待つてゐた。融は滯在を略一週間ときめて部屋代を拂つてあつたので、殘り分の金を受取つて、しばらく自動車の來るのを待つてゐた。

「小型がよろしいんでせう。」夫人はさう言つて、二度ばかり出口までおりて見たりした。

靜かな朝の町に、初荷の荷馬車や、貨物自動車が動いてゐた。融は苦い經驗があるので、病氣といふと醫者の不快を買ふまでも、大騷ぎをする癖がついてゐた。で、その時も腦溢血といふ言葉を、そのまゝ妻の現在の病氣に引直して考へることは出來なかつた。それは劇場や電車のなかなぞで、眞蒼になつて仆れたことが、若いをりから三四回もあつたからで、今度も多分それだらうといふ氣がしたが、しかし其れにしても何時ものより重いと云ふ感じが強かつた。そして町が春氣分に耀いてゐたゞけに、彼の氣分も一層暗かつた。

家へ飛びこむと彼は部屋の隅にあつた座蒲團のうへに、折鞄を投げ出して、そこに横はつてゐる妻を見た。妻は彼の裏の家にゐるT——氏の夫人に介抱されて、靜かに目をつぶつて寢てゐたが、眠つてはゐなかつた。掛りつけの醫者のG——氏

と、T—氏が融の机の傍に火鉢に當つてゐた。

「今ね、電話でお歸りを止めやうとしてゐたところです。」

さう言つて皆んなが割合何でもなささうな顏をしてゐるので、融は出鼻を折られて、遽かに頭腦が輕くなるのを感じたが、決して樂觀はできないといふ氣がした。

「さうですか。心配ないんですか。」

「大丈夫ですよ。靜かにしておけば、落着きますよ。」G氏は事もなげに言ふのであつた

融は何だか安心出來ないやうな氣もして、そのまゝ火鉢の傍にすわつて、ホテルの話などしてゐるあひだも、時々G—氏にきいた。

「誰か一人呼ぶ必要はないでせうか。」

「いや、いつものあれですから、心配はないですよ。」け—氏は言ふのであつた。

融は腦溢血の危險なことと恐ろしいことは、十二分に分つてゐたけれど、診斷がむつかしいものだとは思はなかつた。で、今朝お雜煮をしまつたあとで、何時ものとほりに長火鉢にすわつてゐた彼女がふと嘘をしたところで、頭がぴりりと痛んだ。そして洟汁をかむと、痛みが一層強くなつたと同時に、顏の色が變つて體が崩れさうになつた。子供があわてゝ背後へまわつて介抱しようとした時には、彼女はもうぐつたりとなつてゐた。

融は、ぼんの窪のところへ手をやつたり、鼻と耳のあひだを痛がつたりしてゐる彼女の狀態に不安を感じながら、割合醫者に信頼してゐたところもあつた。彼女は後腦のあたりに、さく〳〵針が刺つてゐるやうな感じがしてゐるらしかつたので、何うやら腦溢血らしいと云ふ氣もしたが、それにしては口も利けるし、手の動くので、やつぱり醫者を信じ

ていゝやうにも思つた。

「まあ夕方までかうやつておいて下さい。」G―氏は間もなく歸つて行つた。

融は病床へ寄つて行つた。

「何うだね。」

妻は目と顳顬のあたりへ手をやつて、痛みを訴へた。

「いつもとは違ひます。」彼女は低い聲で言ふのであつた。

融の頭は腦溢血だと云ふ直感が大部分を占めた。

「急いでM―博士を呼んで來てくれ。」彼は長男に命じた。

長男は出て行かうとしたが、急に又彼女が止めるやうに何か言ふのであつた。そして同時に便通を訴へた。

「ちや、ちよつと待つて。」融は小供に言つた。そして女中に便器をもつてくるやうに命じた。

「じいつとしておいで。大便は僕が取つてあげるからね。動いちや可けないよ。」

さう言つてゐるうちに、上半身を擡げた彼女は、苦しげな歪んだ顏に嘔吐を催して來たことを告げた。小ひさな洗面器が、持ち來たされたところで、彼女の口から濁黃色をした惡いものが、だら〳〵と吐出された。そして吐いてしまふと

「私もう駄目です」と言つて、ぐる〳〵頰のあたりを顫はせながら、枕のうへに仆れた。が口籠つてしまつた。目もあがつてしまつた。

それを見ると融は遽かに大變だと云ふ氣がした。そして「早くM―さんを……それからG―さんにもさう言つて。」

G―氏から來て、一本注射をして間もなく、M―博士もあわたゞしい樣子で驅けつけてくれたけれど、何んにもならなかつた。恐らく彼女はそれから一時間とゝたなかつたであらう。そして其が彼女の生涯の終りであつた。



戰國父子

菊池寛

美濃の國の國主、齋藤道三は丁度その時、鷹狩に出かけるところであつた。天文十九年冬の最中で飛驒境の山々は、降り積んだ雪に被はれ、輝き初めた朝の光りに、手に取るやうに間近に見えた。庭先きにも二三寸雪が積つて、道三の愛馬白光鹿毛を引いて來た足跡がはつきりとついてゐる。馬は道三の姿を見ると、冷い澄んだ空氣の中で高らかに嘶いた。

「今日は、鶴も鴻もたくさんゐるぞ」

「御意にござります。雪晴れの今朝は御物數が望みのままでございませう。」

「鷹はどうぢや、皆機嫌がいいか」

「さつきから羽ばたき許りいたして居ります」

「うむ、よし」と云ふと、道三は七十に近い體を、身輕に馬上の人になつた。

「どう、どう」馬付きの足輕が、いきり立つ馬を制する。

「お立たち」馬廻の近侍が大聲でふれる。お供を仰せつかつた近從達の姿がめいめ

い馬上で中門の彼方へ勢揃ひする。玄關先きに現れた道三の二男孫四郎と、喜平次とが平伏する。

「お父上御機嫌よう」

「うむ、今日は鶴のあつものを存分に食はせるぞ。留守の用心」道三がそういひ捨てて輕くひとむち當て、玄關先きを二三段離れた時だつた。

「暫く、暫く。大殿樣暫く」奧から現れた家老の一人が大聲で呼び立てた。道三はそれを聞くと手綱を控へて早速に、馬をとめたが、振り返つた時は可成り不機嫌だつた。

「何ぢや。出さきを呼び止めて何事ぢや」しわがれた聲が、どこかに物凄い響きを以つてゐた。

「只今本丸からのお使ひ、新九郎樣、御重病とのことでございます」

「何、新九郎が重病?」道三はさすがに色を變へたが、直ぐ言葉をつゞけた。

「よし歸城の上で、ともかくも見舞はうぞ、一刻二刻を爭ふほどでもあるまい」道三は氣輕にそう云ひ捨てると大手の門の方へ駒を進めた。

十二三名の近從たちが、雪を蹴散らして道三の後を追つた。

新九郎と云へば、道三の長男である。長男の危篤を聞き乍ら、鷹狩へ出かけてゆく道三の心は、もとより世の常の父の心ではなかつた。彼は新九郎を愛してゐなかつた。新九郎は彼にとつて冠つてゐなければならぬ、いばらの冠だつた。新九郎のことを考へると、彼は一番考へたくない過去の怖ろしい記憶をいやでも考へずにはゐられなかつた。

道三はもと、稻葉山の城下で油を賣つてゐた。彼は買ひ手があるとひしやくに注いだ油を永樂通貨の眞中の穴を通して買手の差し出した器の中に注いでやつた。永樂錢を少しもよごさないで、一合の油を、注ぎおはる彼の手練の美事さ

[illegible]

彼は、盛大な戰を見た時に、この時の三吉野のことを思つた。[illegible]

放逐した主君のことを考へ[illegible]

（南洋のある島に昔あつた話）

人物

（男）

（女）

は、打ちものを取つても、釆配を取つても、變らなかつた。彼は油賣から、當時の美濃の國主、土岐氏の家來となり、家老となり、やがては土岐氏を追つて、美濃一國の國主大名になつてしまつた。だが、彼を信任して呉れた主君の頼藝を追ひ斥けたことさへ餘りいゝ記憶ではなかつた。それだのに彼はもつと惡いことをしてゐた。それは、頼藝の愛妾だつた三吉野と云ふ美女を奪つて、自分の妾としたことだつた。其の三吉野の腹に産れたのが新九郎だつた。

彼はどうにかして、主君を追ふたことを忘れたかつた。主君の愛妾を奪つたことを忘れたかつた。もう主君も死んでゐる。三吉野も死んでゐる。だが、肝心の二人が死んでゐても、其の恐ろしい罪惡の最後の結末である新九郎は、自分の長男であることを、どうすることも出來なかつた。

彼は、新九郎を見る度に、その母の三吉野のことを思つた。三吉野を思ひ出すと、自分が色々な策略で、遂々國外へ放逐した主君のことを考へ出さずにはゐられなかつた。

彼はそのために、新九郎の顏を見るのがいやだつた。

いやゝそれよりももつと恐ろしいことを云ふ人間がゐた。尤もその事を云つた張本人の乳母は、即座に成敗してしまつたが、だが然し、ゐたことはたしかにゐたのだ。その乳母は次のやうなことを云つた。

それは、新九郎は本當は道三の子ではないと云ふのである。三吉野が、道三に奪はれて道三の妾になつたときには、すでに、新九郎は三吉野の腹の中にゐたと云ふのである。

つまり、新九郎は道三の子ではなくして、土岐頼藝の子だと云ふのである。それをきいたとき道三は、一思ひに新九郎た、切つて仕舞はうかと思つた位である。だが、この說は、どうも當つてゐるかゐないか分らない。それは土岐頼藝が美濃の國を去つてから、新九郎が生れるまで、十一ケ月たつてゐる。頼藝を追ひ落したのは、如月の三日で新九郎が生

れたのは、その年の師走である。さう思つて一度は、疑念を晴さうとしたが、稲葉山の城下に一年滯つて來た唐人の醫師に訊いて見ると、人間が母の胎内に宿つてゐる期間は、普通は十ヶ月と定まつてゐるが、一ヶ月二ヶ月の遅速はありがちだと答へたのである。それ以來道三は、一旦絶たうとした疑念を再び胸の中に懐いた。しかも前よりは、その影が濃くなつてゐた。

その上、新九郎が人となるに從つて、そののつそりと落着いてゐる所が、だん／＼故主の頼藝に似て來るやうな氣がするのである。しかも、此方から言葉をかけても一言答へて、そのまゝぷつつりと默つてしまふ態度が、頼藝にそつくりなのである。尤も、顏丈は母親似で頼藝にも似てゐなければ道三にも似てゐなかつた。

だが、新九郎が自分の子でないことがどんなにハッキリ分つても、齋藤家の長男として、披露してあるものを今更何うすることも出來なかつた。

いろ／＼な式日には、新九郎をいやでも長男らしく振舞はせねばならなかつた。道三は、いつも自分が犯した過去の罪惡が、此ののつそりとした長男の姿になつて、自分の目の前に自分をさいなむために、動いてゐるとしか思はれなかつた。

彼は、此の三四年新九郎と言葉を交したことがなかつた。たゞ、一日と十五日に新九郎が彼の住んでゐる二の丸に挨拶に來て

「父上には、いつもながら御健勝にて、祝着に存じまする」

と、口重く云ふとき、

「御苦勞」と云つて、うなづく丈だつた。それ以上は、親も口を訊かなければ、子も口をきかなかつた。

然し、だんだん家督をゆづるべき時が近づいて來てゐた。だが、形式約に長男らしく扱ふことは出來ても、實質的に家督をゆづることは出來なかつた。彼が、辛苦して自分のものにした美濃一國を、正眞正銘の自分の子である二男や三男をさし措いて、新九郎にゆづる氣は到底しなかつた。（つゞく）



戯曲

ある物語(三幕五場)

武者小路實篤

(南洋のある島に昔おこつた話)

人物

(男)

王。
オスト
ガンコス
副官
チミ
コモス
カミトモ
イム
其他

(女)

アヌ
スト
アミ
エテ
其他

第一幕

(王の室。王一人居る處にアヌ登場)

アヌ。王様。
王。なんだ。
アヌ。私、之から一寸お花見にゆきたいと思ひますがよろしゆう御座いますか。
王。あゝ、行つたらいゝだらう。
アヌ。王様。あなたはいらつしやいませんか。
王。行きたくないこともないが、今日は忙がしい。
アヌ。それでは行つて來ます。
王。行つておいで、なるべくゆつくりね。
アヌ。なるべく早く歸つて來ます。
王。それにはおよばない。
アヌ。それならゆつくり行つて來ます。
王。あゝ。

(アヌ退場。まもなくスト登場)

スト。王様。

王。なんだ。

スト。私は一寸うちまで行つて來たいと思ひます。

王。いつ歸つてくる。

スト。夕方までには歸つて來ます。

王。きつとだな。

スト。きつと歸つて來ます。

王。歸つて來ないと首をちよん切るよ。

スト。えゝ、どうぞ。

王。途中を用心しろ。お前のやうな奴はワハバミがたべたがるから。

スト。大丈夫で御座います。

王。俺がウハバミだつたら食つてやるのだが。

スト。王様がウハバミでしたら私はよろこんで食はれます。

王。嘘つくな。

スト。嘘ぢやありません。

王。まあ早く行つて來い。

スト。はい。

(スト退場。アミ登場)

アミ。王樣。
王。なんだ。
アミ。私にどうぞお暇を下さいまし。
王。なぜだ。
アミ。私はある方と結婚したく思つてをりますので。
王。さうか。それは目出たい。結婚と云ふものは目出たいことになつてゐるから、目出たいと云つてもいゝだらう。それならすぐ暇がほしいのか。
アミ。はい。
王。それなら幸福にしろ。
アミ。ありがたう御座います。
王。金は會計にさう云つて出來るだけ多くもらつてゆけ。どうせあいつはケチだがね。
アミ。ありがたう御座います。之でもう王樣にお逢ひ出來ないと思ふと、おなごりおしく思ひます。
王。そんなことは腹のなかで思つて、喜んで出かけるがいゝ。
アミ。ありがたう御座います。

(アミ退場、エテ登場)

エテ。王樣、私もおいとまを戴きたう御座います。
王。なぜだ。

てにはならないが。

エテ。そんなことは御座いません。

王。まあいゝ。人の心と云ふものはわからないものだ。又わからないのでいゝのだらう。

エテ。王様は私を信じては下さらないのですか。

王。半分信じてゐる。さうだ、お前は大變劍の舞いのうまい女だつたね。

エテ。さうでも御座いません。

王。少しはまづくなつたらう。

エテ。いゝえ、毎日練習はおこたらずにしております。

王。それは安心だな。それなら今度宴會の時久しぶりに見せてもらはう。

エテ。どうぞさうお願ひいたします。

王。それならまあ安心して室に歸つたらいゝだらう。

エテ。ありがたう御座います。それからお言葉にあまへますが、いつか御一緒に晩飯でもいたゞくわけにはまいりませんか。

王。まあしらべて見やう。かうやつてお前を見てゐると段々昔のことを思ひ出す。（帳面を見）。さうだな、今日と明日と明後日と明々後日と、その又さきと、そのさきと、どうも澤山約束ずみだな。來月三日迄はあいた時がない。來月三日にそれならお前と二人だけで飯を食ふことにしやう。

エテ。ありがたう御座います。大丈夫で御座いますね。

王。大丈夫だ。帳面に宿つけておいたから、今日エテと二人だけ飯を食ふとな。

エテ。ありがたう御座います。これですつかり安心いたしました。

（エテ退場）

王。誰か。

近習。はつ（登場）何か御用ですか。

王。オストは來たか。

近習。はい。さつきから王様のお召を待つておいでゞす。

王。さうか。それならすぐにこゝに御通しゝてくれ。

近習。はい。（退場）

（まもなくオスト登場）

オスト。八十三にもいろ〳〵あります。私は最近十八になる花よめを迎へたいと骨折つておるやうな次弟で御座います。尤も先方では私の孫のよめにならよろこんで差し上げると申してゐるさうで御座います。

王。本當の話か。

オスト。嘘の話で御座います。

王。そんな冗談はやめて、何か變つたことはないか。

オスト。大いに御座います。

王。本當か。

オスト。本當で御座います。

王。何が起つたのだ。

オスト。おあてになつて御らんなさい。おあてになりましたら、私の孫奴を一人差上ます。

王。そんなものはほしくない。女もゝう面白くない、皆同じやうなものだ。

オスト。私の孫は別あつらいで、一寸類がない程醜い女で御座います。王様にすつかり惚れております。

王。馬鹿、云ふな。この頃の政治はどうだ。

オスト。相變らず不平家が多ございますが。ガンコスが頑張つておりますから、表面は至つて平和で御ざいます。

王。ガンコスは鐵のやうな男だが、多勢に恨まれてゐるだらうな。

オスト。勿論で御坐います。王様についてはガンコスがうらまれております。

王。そんなに俺は恨まれてゐるのか。

オスト。勿論で御座います。この国では偉れた人間が罰されます。

王。俺は偉れた人間でもなさゝうだがな。

オスト。人民は誤解しております。

王。困つた奴だな。そしてガンコスは免職するわけにはゆかないのか。

オスト。とても参りません。今にガンコスの方が王様を免職するで御座いませう。

王。それは王様を免職されるのはありがたいが。牢屋に入れられるのでは困つた。

オスト。それはどうなりますか。ガンコスに聞かないとわかりません。

王。ガンコスをやつけるわけにはゆかないのか。

オスト。とてもいまになつては駄目で御座います。

王。困つたなそれは、しかし俺を殺すやうなことはしまい。

オスト。それはわかりません。ガンコスは自分のこと以外は何にも考へない男で、あの男の力には誰も叶ふものはありません。それにあいつは兵士をすつかり自分の味方につけております。人民の恨みを王様に向けゝる方が都合のいゝ間王様を生かしておくで御座いませう。

王。お前はまさか、冗談は云つてはゐないだらうね。

オスト。冗談は申しません。

王。それならどうしてもガンコスに俺が殺されなければならないのか。

オスト。まあ九分通りはさうなるだらうと思ひます。

王。その時、お前はどうなるのだ。

オスト。私も御一緒にお伴をいたします。

王。それは本當か。

オスト。嘘は申しません。私はもう死んでもいゝ命で御座います。

王。しかし俺は死んでいゝとはゆかない。

オスト。それならば、王様は覺悟をなさらなければいけません。

王。どう覺悟をするのだ

オスト。王様が御自分でガンコスの首をお切りになるのです。

王。そんなことは出來ない。

オスト。それならあなたが殺される許りです。

王。よく考へて見やう。

オスト。この宮殿のなかにはまわしものがいくらでも入つておりますから注意のおつもりで。

王。この宮殿の内で信じていゝものは誰かゐるか。

オスト。一人もおりません。私の他は。

王。皆がガンコスの味方か。

オスト。ガンコスの味方は四五人で、あとはたよりにならないものです。もしたよりになるものが一人あるとするとエテ位いのものですが、あの女もこの頃は[illegible]の寵愛がさめたと云つて少し悲しんで居ります。

王。これなら安心するがいゝ、エテに俺の味方になつてくれる。

オスト。さうですか。エテをお可愛がりになれば、エテは大様のお味方をするでせう。しかしそれがあなたにとつてはいかがいゝかも知れません。あなたが何かの障然りに任せてガンコスの首をお切りになるのが一番いゝと思ひます。だが今は駄目です。今ガンコス居なくなると國の秩序はたもてないでせう。ガンコスも今は様を殺すやうなことは、ないでせう。たゞその時機のくるやう少しづゝ細工をしてゐます。

王。どう云ふ細工だ。

オスト。つまりあなたを人民のためにやつつけると云ふ口實をさがしてゐるのです。

王。俺の方ではガンコスのかはりになるものを求めなければならないわけだね。適任者は誰だ。

オスト。今の處王様より他ありません。

王。さうか。俺の内に眠つてゐた勇氣が少しづゝ目がさめて來たやうだ。お前は今迄それを知つてゐて、なぜだまつてゐたのだ。

オスト。いづれ申し上げるつもりでしたが。時機のくるのを待つてをりました。

王。俺が殺されてもガンコスが殺されてもお前は別に困らないと思つてゐたのだらう。

オスト。そんなことはありません。

王。お前がもう少し若かつたらな。

オスト。私も齢をとつておりますのが殘念で御座います。

王。お前の息子が居てくれたらな。

オスト。本當にあれがおりましたらお役に立たせましたらう。
王。當分何にも知らない顔をして、馬鹿に見せておく方がいゝだらうな。
オスト。それはその方がよろ御座います。
王。俺はおめおめとは殺されはしない。
オスト。だが用心おしなさいまし、ガンコスは劍をとつては並ぶものゝない男です。
王。俺は又劍をとると手がふるへると言ふ人間だからな。
オスト。エテは劍のつかい方を知つております。
王。だがガンコスには叶ふまい。
オスト。それは云ふまでもありません。
王。よろしい。俺も何とか考へておく。
オスト。しつ。誰が來ました。

（近侍登場）

近侍。ガンコス様がお見へになりまして、王様に是非一寸お目にかゝりたいと申されました。
王。さうか。それならこゝに通すといゝ。
近侍。はい。（退場）
王。何の用か。
オスト。又何かたくらんだのでせう。

（ガンコス、副官獰猛な男をつれ登場）

ガンコス。王様。今朝王様に謀反のくわだてをいたしました十三人の男の首をはねさしました。御承知を願ひます。

王。さうか。

ガンコス。この頃は世の中が物騒になりました。何處に敵が入りこんでゐるかわからなくなりました。御用心の程御願ひ申します。

王。そんなに物騒になつたのか。俺は又世の中は泰平無事だと思つてゐたよ。

ガンコス。御心配なことは御坐いませんが御油斷はなさらない方がよう御坐いまア。オスト君、君に一寸話たい事があるから、こつちへ來てくれ玉へ。

王。こゝでは話せないのか。

ガンコス。畏れ多いことですから。

王。なんだ。

ガンコス。いや私のことで御坐います、オストさんのお孫さんの御結婚の話です。

王。さうか。

ガンコス。オスト君、一寸來てもらはう。

オスト。それなら一寸失禮いたします。

（ガンコス。オスト、副官退場。王おちつかない形。まもなくガンコス登場）

ガンコス。王樣、オストを死刑に處すことにしましたから左樣御承知願ひます。

王。オストが何か惡るいことをしたのか。あの男は國のために隨分働いた男だし、もう齢をとつてゐるから死刑だけは許してやれ。

ガンコス。オストの罪ははつきりしております。王樣と私とを殺すくわだてをしておりました。王樣と私との間をさき、二人を爭はして自分だけが得をしやうとしてゐた罪があきらかになりました。

王。それは本當か。

ガンコス。それは本當で御座います。訴へ出たものが御座います。

王。訴へ出たものは誰だ。

ガンコス。エテと申す女で御座います。

王。そしてエテはどうした。

ガンコス。エテは自殺いたしました。

王。それは本當か。

ガンコス。本當で御座います。

王。さうか。そしてオストはもう殺されたのか。

ガンコス。今時分頭がとんだ時と思ひます。之も皆王樣の御身の上を思ふからで御座います。惡いことは申しません。王樣と二人切りで秘密の話をするものは生命のないものとお考へ下さい。

王。エテは惡い女とは思はなかつた。

ガンコス。エテはいゝ女で御座いました。ですから自殺したので御座います。

王。厚く葬つてやれ。

ガンコス。ありがたい御言葉で御座います。

それでは失禮いたします。

（副官登場。ガンコスにさゝやく）

ガンコス。王様、オストの首にさらし首にすることにし、オストの家族はのこらず死刑にすることにいたしました。左様御承知を願ひます。（副官に）王様の御命令だ。オストの一家にすぐ軍隊をむけよ。

副官。はい。

ガンコス。それでは失禮いたします。

（ガンコスと副官退場。王様何か考へてゐる。アヌ登場）

アヌ。王様、唯今。何をそんなむづかしい顔をしてゐらしやるのです。王様、オストをお殺させになつたさうで御座いますね。あの老人は何かわるいことをいたしたのですか。

王。さうだと思へる。

アヌ。あんないゝ老人が。

王。俺とガンコスとの間をさき、二人を殺さうとくわだてたのださうだ。

アヌ。あの人がそんな恐ろしいことをくわだてたのですかね。人間て見かけによらないものですね。

王。さうだ、見かけによらないものだ。それからエテも自殺したさうだ。

アヌ。エテが自殺しましたか。それは氣の毒なことをしました。あれは氣のいゝ女でした。

王。人のいい人間や、氣のいゝ人間は死んでゆくものと見へる。

アヌ。何をおつしやるのですか。

王。俺はガンコスがゐてくれるので安眠が出來ると云ふものだ。

アヌ。ガンコスさんは。

王。(急に言葉をさへぎるやうに)あは……。ガンコスは不思議な偉い男だ。俺は今日と云ふ今日、ガンコスにすつかり感心した。ガンコスの悪口を少しでも俺のそばで云ふものがあつたら俺はそいつの首をこの劍でちよんぎつてやる。ガンコスがゐなかつたらおれの國はでたらめになるだらう。珍らしい立派な男が生れたものだ。俺はガンコスのことを思ふと、うれしくつて仕方がない。誰も生てゐたいものはガンコスの悪口を云ふな。死にたいものだけガンコスの悪口を云へ。皆來い、おい近侍達を皆よんでこい。さあ皆でガンコスの萬歳を云はふ。

(近侍達登場)

王。ガンコス萬歳

殆んど皆。ガンコス萬歳。

二

(近侍、チミの室月あかりでやゝあかるい。誰か靜かに戸をたゝくチミ、ロウソクに火をつけ)

チミ。誰です。

外。俺だ。……俺だ。

チミ。王様ですか。

外。さうだ。

チミ。何しにいらつしやつたのです。

王。一寸話したいことがあつて、忍んで來たのだ。

チミ。（戸をあける）どうぞ、

王。戸をしめて明をけして。

チミ。はい。

王。チミ！（小聲で）お前は今日ザンコス萬歳を云はなかつたな。

チミ。いゝえ、申しました。

王。いや、お前は云はうとしていへなかつたのがよくわかつたぞ。

チミ。恐れ入ります。

王。なぜ云はなかつたのだ。

チミ。………

王。お前はガンコスを嫁つてゐるのだらう。

チミ。いゝえ決してそんなことは御座いません。

王。本當のことを云つてくれ。

チミ…………
王。お前は俺に同情しないのか。
チミ。オスト様をなぜお殺しになつたのです。
王。あれはガンコスが殺したのだ。俺は反對出來なかつただけだ。反對したつてオストの生命はたすからない。そして俺が殺される許りなのだ。チミ、俺はお前だけをたよりにしてゐるのだ。
チミ。恐れ入ります。
王。だがお前も生命は惜しいだらうな。
チミ。王樣が私のやうなものをおたより下さるなら、私も覺悟をいたします。
王。それは本當か。ガンコスは俺と内證で話す人があれば誰でも殺すと云つてゐる。
チミ。そんなことを申しておりますか。
王。俺もおそかれ早かれガンコスに殺される身なのだ。
チミ。それは皆さんもさうおつしやつてゐらつしやいます。
王。さうか。それはまちがいのない事實なのだが、いくら俺でも默つて殺されてやるわけにはゆかない。
チミ。あたりまいで御座います。
王。それで俺は誰か一人たよりになるものがほしいのだ。ガンコス一人を殺すことならやれないことはないと思ふが、その後が大へんなのだ。俺には一寸見當がつかないのだ。
チミ。私にも見當がつきません。

王。それで俺は一つ手紙をかいたら、之を山のなかにかくれてゐる俺の叔父の處へ持つて行つていつてほしいのだ。しかし手紙が見つかれば俺は生てはゐられない。しかしどうせ生てゐられないのだから、一か八かやつて見るつもりだが、お前は引きうけてくれるか。

チミ。ひき受けます。

王。それならもし萬一俺がここに來たのが見つかつたら、（何かさゝやく）

（チミうなづく）

王。それならたのんだよ。

チミ。はい。

三

王。スト！

スト。はい。

王。お前はガンコスが好きか。

スト。そんなことは御座いません。

王。本當か、ガンコスをもし嫌ふなら生かしてはおかないぞ。

スト。嫌いぢや御座いませんが、何んだか怖しう御座います。

王。俺を愛してゐてくれゝば怖いことはない。

（チミ泣きながら登場）

チミ。王様、何とも申しわけないことをいたしました。

王。何をしたのだ。

チミ。王様が大事にしてゐらつしやいました茶碗をつい落してこわしてしまひました。

王。馬鹿！（いきなりチミをなぐる）

チミ。許して下さい。許して下さい。

王。（出鱈目になぐり）もう貴様のやうな奴には用がないから出てゆけ。

チミ。どうぞそんなことをおつしやらないで。

王。すぐ出てゆけ、出てゆかないと殺してやるぞ。（剣をとる）

チミ。（泣きながら）出てゆきます。出てゆきます。（逃げるやうに退場）

王。馬鹿な奴だ！

スト。あはゝゝゝゝ。本當にあの逃げる様子つてありはしませんわ。

王。馬鹿な奴だ。人の大事なものをこわしてあやまれば許してもらへるなんて思つてゐるのは、馬鹿な奴だ。一たいあいつはふだんからいやな奴だと思つてゐた。

スト。だけど中々可愛いゝ子ですわ。

王。馬鹿な奴だ。一つ今日はお前と庭でも散歩して見やう。

（ガンコス登場）

ガンコス。王様。オストの家族は一人のこらず退治ましたさうです。それで功勞のありました男には褒美をやることにいたしました。左様御承知を願ひます。

王。よろしい。

（王退場）

ガンコス。王さんはどうだ。

スト。王さんは馬鹿ですね。オストを本當に惡者だと思つてゐるやうです。

ガンコス。王の馬鹿は今始まつたことではないが。しかし油斷は出來ないぞ。

スト。もう手も足も出なくなつてゐます。私が四つばいになつて歩けと云ふとよろこんで四つんばいになると云ふ王様ですからね。

ガンコス。だが油斷をしてはいけない。何か變つたことはないか。

スト。別にありません。

ガンコス。誰か逢ひに來たか。

スト。誰も來ません。

ガンコス。刀でも見ると云ふやうな様子はなかつたか。

スト。そんなことはありません。

ガンコス。本當に性根のない王なのかね。

スト。さうとしか思へません。

ガンコス。だが油斷をしてはいけないぞ。

スト。はい。

（王登場）

王。ガンコス、昨晩は面白かつたぞ。

ガンコス。何がです。

王。ストが俺を奴隸のやうにあつかつたが、奴隸も惡いものではないと思つたよ。

ガンコス。一つそれでは奴隸の眞似でもして戴きますかね。

王。お前が見てゐては少し耻かしいよ。ストはお前を怖いと云つたよ。だが俺はお前をちつとも怖いとは思はないよ。

ガンコス。さうですか、王様には怖いものは何にも御座いませんでしやう。

王。あるね。

ガンコス。なんで御座いますか。

王。怖いものはウハバミだね。女も怖い處があるが、怖いよりも可愛いゝ處が多いやうだね。

ガンコス。左樣で御座いますか。

王。しかし世界で一番强いものはお前だらう。お前に逢つては誰でも叶はないだらうからな。

ガンコス。私の恐ろしいものは王樣だけで御座います。

王。ガンコス本當にお前は俺が怖いか。

ガンコス。はい。

王。それなら俺は世界で一番強いわけだな。だがストよ俺より強いものもないか。

スト。どういたしまして。

王。オストが殺されたので恐る奴は一人もないか。

ガンコス。はい御座いません。皆大難だと申し、いゝ氣味だと申しております。

王。さうか。人間でおかしなもんだな。

ガンコス。どうしてで御座います。

王。だがあんな難してまだ殺されるやうなことがしたいといふのは馬鹿だね。王様にでもなりたかつたのかね。

ガンコス。さうと見へます。

王。馬鹿な奴だな、そんなになりたかつたら一度なつて見るとよかつた。さうすれば王様つてあんまり面白いものぢや

ないと氣がついたらうがな。

ガンコス。王様、あなたは王様がお嫌ひなのですか。

王。嫌ひでもないが、好きでもないな。平和にストとくらすことが出來ればいつでも王様はやめてもいゝがな。

スト。あんなお上手なことをおつしやつて。

王。ガンコス！

ガンコス。はい。

王。お前は、力は五十人力あると皆云つてゐるが本當か。

ガンコス。いえ〳〵高々十人力位のもので御座いませう。

王。武藝でお前の相手になるものは一人もないさうだね。

ガンコス。皆はさう申しますが、天下は廣大で御座いますから、何處にどんな人がおりますか、あてにはなりません。

（副官登場）

ガンコス。なんだ。

副官。オストの一族達が謀反のくわだてをいたしておりますさうです。

ガンコス。さうか。それならすぐ相手の用意の出來ない内にやつつけてしまへ。

副官。はい。

ガンコス。王様の命令だ。皆、殺してしまへ、王様に手向ふものはね。女でも子供でも用捨まするな。

副官。はい。

王。一寸待つた。女子供は許してやれ。そして美しい女がゐたら一二人つれて來てくれ。女を殺すのは勿體ないぞ。

スト。女は殺して了しまい。王さまを惑はれては大變だからね。

王。なに、たゞ見るだけだよ。

副官。どういたしませう。

ガンコス。王様があゝおつしやるのだから。王様のおつしやる通りにしたらいゝだらう、だが一寸耳をかしてくれ。

副官　はい。

（ガツコス囁く、副官承知する）

王。何と話してゐるのだ。

ガンコス。ストさんに一寸内證です。お耳をかして下さい。

（ガンコス何か囁く、王うれしさうにきく）

スト。本當にいやな方ね。

王。何んでもないのだよ、何んでもないのだよ。

第二幕

（花見の宴。王の叔父コモス、女の地方の勢力家カミトヨ達と酒をのみ女達の音樂にあはせて踊つてゐるのを見てゐる）

コモス。今日は又うらゝかな天氣だね。

カミトヨ。本當によい御天氣で御座います。

コモス。どうだ、もう一杯のめるだらう。

カミトヨ。ありがたう御座います。

コモス。かうやつてゐると天下泰平だが、オスト一家は氣の毒なことをしたな。

カミトヨ。本當に氣の毒なことをしました。

コモス。謀反のくわだてをしたと云ふ噂だが信じることは出來ない。

カミトヨ。王樣はこの頃、さう申しては失禮ですが、少しどうかしてゐらつしやいますね。

コモス。恐怖病にでもとつかつかれたのだらう。今に俺なんかもやられることになるだらう。

カミトヨ。そんなことは御座いますまい。

コモス。あてになるものか、妄想はいたる處に敵をつくり出すものだ。オストは俺の友人だつたからな、尤も俺とあいつとは意見はいつもちがつてゐたがね。

カミトヨ。王様をお誡め申すものはないのでせうかね。

コモス。いさめるものがあれば殺されるだけなのだらう。おだてる奴許り寵愛されるのだらう。

カミトヨ。ガンコスは何してゐるのでせう。

コモス。ガンコスが殺人の張本人で、王はその人形にすぎないのだらう。

カミトヨ。ガンコスは恐ろしい奴ださうですが、この頃はしきりと人民を手なづけやうとしてゐますね。

コモス。あいつは人民に嫌はれることは損だと氣がついたのだ。だから人民には王のなされ方について人一倍自分が苦勞してゐるやうな顏をしてゐる。オストのことも盛んに惜しがつてゐるふりをしてゐるさうだが、反つて氣味がわるい。

カミトヨ。近頃、ガンコスは優しい人ださうだと云ふ噂が盛んにつたわつて來ますね。

コモス。王だけが恐ろしいことにしたいのだ。

カミトヨ。王は氣がちがはれたと云ふ噂がありますね。

コモス。王は優しい方だつた。しかし今のことは知らない。だがまあそんな事はよすとしやう。生てゐる間は、たのしくくらす方がよささうだ。

カミトヨ。オストのやうな目にあつてはたまりませんね。

コモス。早く引こめばよかつたのだ。酒をもつとついでくれ。

侍女。はい。

コモス。（酒をのみ）愉快だ。オストお前も早くこゝにくればよかつたのだ。カミトヨ俺は二三日前オストの夢を見たが、オストは相變らず元氣にしてゐて百姓は生て見せるやうなことを云つて笑つてゐた。人間と云ふ奴は實に殺されるに都合よく出來てゐるものだね。生る方はむづかしいが、死ぬことは簡單だ。だが人間を殺しだしたら切りがない。誰まで殺したら安心と云ふことはない。殺された奴は何處かで復讐するものだ。オストは死んだが、更に多くのオストが生れてくる。殺しだしては切りがないな。

カミトヨ。それはさうで御座います。

コモス。人間の内には友達が殺されると、なんだかぢつとしてゐられないものがゐる。何とかしたくなるらしいな。だが俺はもう冊間を閉口だ。いくら殺されても、こゝより出る氣にはなれない。

カミトヨ。あなたは殺されるわけはありません。あなたが殺されゝば私達は默つてゐません。全國の人々が默つてはゐません。

コモス。しかし死されたものは生きかへりはしないぞ。そして死を恐れるものは、やがて默つて引こむより仕方がなくなる。ガンコスはなさやさしい奴ぢやない。

カミトヨ。私の三男のイムはガンコスにはまけない勇士です。

コモス。それは俺も認めるが、しかし一人が强くつたつて知れたものだ。

カミトヨ。しかしイムの强さには私もおどろきます。イムはたしかに三十人力はあるでせう。それに眞にかけては、あ

いつは獅子を猫の子のやうにあしらうと背申してゐます。

コモス。へんな子が生れたものだな。

カミトヨ。人相見はイムを見て、あなたは必ず大將になり、一國の尊敬をあつめるものだ。高貴な人があなたを信頼するだらうと云つてゐます。

コモス。何しろイムは氣持のいゝ男だ。イムを見てゐると、俺の心は若がへり、生々してくる。

カミトヨ。それでイムは實に無邪氣な、優しい子です。他の子とはまるでちがひます。

コモス。イムのことさへほめてやれば、お前はすぐ夢中になるな。

カミトヨ。はい。あいつが私の子として生れたのは猫が虎を生んだやうなものです。

コモス。さあ、もつとおどれ。賑かにおどつてくれ。俺は今日は何となく淋しいのだ。

カミトヨ。イムをよびませう。そしてあいつにおどらしませう。

コモス。それはいゝ考へだ。誰か、一番早い馬にのつてイムをよんでこい。

家來の一人。はい。(退場)

(チミ牧童に化けて出てくる。)

チミ。殿下は何處にゐらつしやいますか。

他の家來。あすこにゐるのが殿下だ。だが失禮なことをしてはいかんぞ。

チミ。はい。はい。(すきなうかゞつて)殿下一大事で御座います。

(チミ、コモスの前に倒れるやうに跪づく

コモス。どうしたのだ。何が起つたのだ。

チミ。王様からのお使ひで參りました。

コモス。王様からの御使ひ、それは本當か。

チミ。どうかこの御手紙を御覽下さい。

（コモス手紙をうけとり、よむ）

コモス。さうか。よく忍んで來た。カミトヨこの手紙をよんで見ろ。之は王がかいたのだぞ、王が。この手紙をよんで泣かない奴は人間ぢやないぞ。

カミトヨ。（讀む）畏れ多いことです。畏れ多いことです。ガンコスはゆるしてはおけない奴です。

コモス。チミとやら、王様には一人の御味方もないのか。

チミ。はい。

コモス。すべてがガンコス一人のはからいか、オストを殺したのも。

チミ。はい。

コモス。王様はお前だけをたよつてゐらつしやるのか。

チミ。はい、はい。

コモス。もう安心するがいゝ。俺達がついてゐるから。だがガンコスの力をやつけるのは一人のことではあるまい。王様の生命は旦夕にせまつてはゐないのだな。

チミ。はい。

コモス。よろしい。それなら何とか考へて見やう。カミトヨ、お前の處に兵隊はどの位ゐる。

カミトヨ。ごく僅か切りおりません。とてもガンコスの敵ではありません。

コモス。よろしい。正面からやつけることが出來なければ他に方法があるだらう。

カミトヨ。イムが來ました。

コモス。イムが來たか。いゝ時に來た。又は王をすてないぞ。

（イム、登場）

イム。殿下、何か御用で御座いますか。

コモス。お前にたのみたいことが出來た。

イム。なんで御座います。

コモス。今俺の處にかう云ふ手紙が來たのだ。讀むからよく聞いてゐろ。

イム。はい。

コモス。叔父上。最もあはれなる王と名の乏奴隸より。私の生命はおそかれはやかれオストと同じ運命を荷ふでせう。このまゝでゐましたら。オストは私と二十分許り二人だけで話したと云ふ理由だけで殺されました。エテと云ふ女も私のことを心から思つてくれた許りに殺されました。氣の毒な人々です。私は手足をのこらずガンコスの爲に切り取られました。全世界に私程一人ぼつちのものがありませうか。幸ひこの小さいチミが私のために唯一の味方になつてくれました。私はガンコスに利用されるだけ利用されて、それから首をはねられるのは火を見るよりも明らかです。私は死の覺悟はしてゐますが、このまゝでは死ねません。出來るだけ生きて見るつもりです。叔父樣のおたすけをおねがひ

られ、何かいゝ方法が見つかり、又たよりに出來る人がありましたらおたすけ下さい。私の生死はこの手紙が叔父さんの手に入るかどうかできまるのです。この手紙をお受けとりになりましたら、どうかチミを大事にしてやつて下さい。私は救ひがくるまでたゞ出來るだけ殺されるのがながびくやう、あらゆる醜體を演じております。私にはもう手も足も出ないのです。いつ殺されるかわからない。王より。

イム。…………

コモス。イム、お前早速女に化けて、宮殿に入りこむやうに用意しろ。

イム。はい。それでは之より參ります。

コモス。待て、祝ひの酒をやるから、祝ひの舞ひを舞つてゆけ。神に多くの捧げものをしてお前が勝利を得るのを祈つてやるぞ。

オム。はい。(大杯をほす)

コモス。チミ。お前は感心な奴だ。お前はチビのくせして王の生命の恩人、この國の平和の恩人だぞ、もう安心するがいゝ。イムは天使にまもられてゐる。勇士だから、イムが引きうけた上は安心するがいゝ。

チミ。はい。

コモス。それから皆で王様は實はいゝ方なのだが、ガンコスがわるいのださうだと云ふ噂をひろめるやうにしやう。イムそれならおどつてくれ。

イム。はい。それでは門立の舞をお笑ひ草に舞ふことにいたします。(舞ふ)

第三幕

（王の室、王一人何か考へてゐる、足音がする、すぐ表情をかへ、うれしさうな馬鹿面になる。アヌ登場）

アヌ。王様。

王。何んだ。

アヌ。私は口惜しくつて口惜しくつて仕方がありません。

王。どうしたのだ。

アヌ。ストが私を侮辱しました。

王。侮辱されると腹でもいたむかな。

アヌ。こんなに侮辱されるなら死んだがましです。

王。人間はどうせ死ぬものだよ。

アヌ。あなたはあんなに馬鹿にされても口惜くは思はないのですか。

王。思はないよ。反つて其處が面白い。

アヌ。あなたはこんな方とは思ひませんでした。

王。俺はどんな人間か、俺でさへわからない。だがどんな利口な人間だつて、死ぬのが嫌いな人間や、肉體の苦痛をすきでない人間は時々は馬鹿になる必要があるものだ。

アヌ。それでも辛抱の出來ない侮辱と云ふものはあるものです。

王。そんな侮辱はない。どんなことがあつても生きられる限りは生て見るものだ。

アヌ。之以上、侮辱を受けるばかりです。そして揚句の果は。

王。風は何處から吹いてくるものかわからないものだよ。

アヌ。あなたは何處からか救ひが來ると思つてゐるのですか。

王。俺はガンコスを信じてゐる。あの男は不思議な男だ。あの男は耳が何百とある。そしてあの男の心臟は鐵で出來てゐる。誰も手向ふことは出來ない。あの男にさからうものは死ぬことの好きな男だけだ。いや女でも殺されたければ逆ふがいゝ。だが殺されたくないもの、ともかく生きてゐたいものはガンコス大王の奴隷にならねばならぬ。

アヌ。あなたは、……

王。さうだ俺は俺を救つてくれるものはガンコスだと云ふことを知つてゐる。ガンコスは俺の救ひ主だ。

アヌ。王樣。

王。本當だ、お前の云ふ通り、俺達はガンコスの云ふ通りるなつてゐれば天下泰平と云ふものだ。ガンコスは百人力をもつてゐて、身體は心と同じく鐵で出來てゐる。稀代の英雄だ。

アヌ。王樣……

王。さうだ。俺は幸福だ。俺はうれしい。俺は安心して天下のことをすべてガンコスに任せてあるんでいゝのだからこんなうれしいことはない。（小聲で）默つてゐろ。ともかくどんなことがあつても生てゆけ。（やゝ大きな聲で）さうだ大前は中々利口だ。ストも偉い女だ。ガンコスとストがゐてくれる間、俺は安眠が出來る。二人は生命の恩人だ。お前も二人の云ふことはなんでもきくがいゝ。

アヌ。王様。

王。ガンコスは俺に非常な美人を世話してくれると云つた。ガンコスはあれで中々氣のきく男だ。馬鹿、お前は怒つてゐるね。やきもちをやくな。

アヌ。王様。

王。なんでもいゝ、俺は生てゐればいゝ。こんないゝ天氣につまらぬことをくよ〳〵思はずに愉快にくらすと云ふことが利口な男のすることだ。考へても始まらないことは考へるな。どんなことでも辛抱しろ、大したことぢやないと思へ。乞食になつたつもりでゐろ。今にまたどんな風が吹いて來ないとも限らない。世の中に美人程いゝもの はないな。俺は死ぬのが一番嫌ひで、美人が一番好きだよ。

アヌ。王様、王様、私は死にたう御座います。(泣きくづれる)

王。そんな狂言はよせ。(小聲で)死んぢやいかん、今にいゝことがあるかも知れない、希望はおとすな。(大聲で)こんなに云つてもわからないのか。泣くなら泣け、泣けるだけ泣け、泣けるものは仕合だ。泣け泣け。

(ガンコス登場)

ガンコス。何をないてゐらつしやるのですか。

王。美人はどうした。

ガンコス。もう暫くお待ち下さい。

王。お待ち兼ねだよ。

ガンコス。はい。アヌ様は何を泣いてゐらつしやるのですか。

王。やきもちをやいてゐるのだよ。お前も氣がきかないね。ほつたらかしておくより仕方がない。

ガンコス。王様。

王。なんだ。

ガンコス。あなたはチミを何處へお遣しになつたのです。

王。チミか、あいつは茶碗をこわしたのでおいだしたのだが、その後のことは知らないよ。氣が小さい奴だから自殺でもしたのぢやないか。

ガンコス。王様、正直なことをおつしやらないと御爲にわるうございます。

王。俺は正直にものを云つてゐる。

ガンコス。王様、私が怒れば何をするか、御存知ですか。

王。お前が怒れば人を殺すのだらう。

ガンコス。おつしやる通りです。私は自分の怒りにかつことは出來ません。王様、あなただけは私が殺すことが出來ないとはお思ひにならないでせうね。

王。お前が俺を殺すことが出來ないと云ふのか、それはあたりまいだらう。

ガンコス。王様、私はこの通り王様でも殺せると云ふのです。

(刀で王の首を切る眞似をする。王おどろく)

王。そんな眞似はよしてくれ。俺は死ぬことは大嫌ひなのだ。

ガンコス。死ぬことが御嫌ひなら、あなたは私の云ふことを聞かなければなりません。

王。何んでもきくよ。

ガンコス。あなたはもう王をおやめなさい。

王。王なんかいつでもやめるよ。俺は王なんかになつてゐたくない。もつと靜かなあたゝかい生活がしたいのだ。

ガンコス。あなたはチミのあり場を白狀なさらなければ、あなたの生命はありません。

王。俺は知らない。自分の家に歸つたのだらう。

ガンコス。家には歸つてゐません。彼は何處にも姿を見せないのです。

王。それなら何處かの川へでも身を投げたのだらう。

ガンコス。そんなことはありません。チミはあなたの叔父さんのコモス殿下の方へ行つたと云ふ噂があります。

王。何しにそんな處へ行つたのだ。

ガンコス。それが私の聞きたいことなのです。

王。そんなことは知るわけはない。

ガンコス。あなたが知らないわけはありません。

王。たしかに知らない。

ガンコス。よろしい。それならコモス殿下を反逆罪で召しとる詔令にあなたの印を押す許りです。

王。もしチミが叔父の處にゐなかつたらどうだ。

ガンコス。ゐないわけはないのです。

王。叔父さんは反逆なんか起す方ではない。

ガンコス。だが私はあなたの叔父さんを生かしておくわけにはゆかないのです。

王。それなら勝手にするがいゝ。

ガンコス。あなたは叔父さんを殺すことを承知なすつたのですね。

王。俺が承知しなかつたら。叔父さんの生命は助かると云ふのか。

ガンコス。チミの居場所さへわかれば、コモス殿下の生命はたすかるでせう。

王。それなら國中に命令してチミの居場所をさがさせろ。

ガンコス。それでも、しチミがコモス殿下の所に居りましたらあなたの命はないものと思つて下さい。

王。いゝとも、チミは叔父さんの所にゆくわけはないから。

(アヌ退場しやうとする)

ガンコス。いけません。アヌさん共處にぢつとしてゐらつしやい。

(アヌ聞へぬふりして行かうとする)

ガンコス。あなたはなんと云ふ强情つぱりです。もう一歩歩いたらあなたの生命はありませんぞ。

王。アヌ。

(アヌ默つて歩く。ガンコスアヌを切り殺す)

ガンコス。おい死骸をかたづけろ。

外で。はい。

(戸あく大勢の兵士立つてゐる。その内から四人の人が出て死骸をかたづける)

ガンコス。王様、あなたは國民を賣りましたね。
王。俺は何にも知らないのだ。
ガンコス。チミをなんのためにコモス殿下の所へおつかはしになつたのです。
王。おれはつかはしはしない。
ガンコス。本當ですか。
王。本當だ。

（ストあはてゝ登場）

ガンコス。何か用か。
スト。王様のお生命があぶないと思つたのでやつて來ました。
ガンコス。誰がそんなことを云つた。
スト。私が自分で感づいたのです。
ガンコス。さうか。
スト。あなたは王様をお殺しにはならないでせうね。
ガンコス。だがこの王さんは中々食へない王様だ。中々馬鹿ぢやない。
スト。だが王様をお殺しになつてはいけません。
ガンコス。もう二三日は殺しはしない。だが看視しないといけない。
ガンコス。それでは王様、コモス殿下を早速殺すやうにしますから、御承知下さい。副官！

副官。はい。
ガンコス。コモス殿下に兵をさしむけて、捕縛するやうに、捕縛が出來なければ殺してもよろしい。
副官。はい。
（ガンコス、副官に何か耳うちする。女裝せるイム窓から忍び込む。誰も氣がつかない、ガンコスのそばによ
り、いきなりガンコスを刺し、副官をもつゞいて殺す。王おどろく）
王。誰だ。
（イム、默つて窓へゆき布をふり、すぐ歸つて來）
イム。（王の前に跪き）コモス殿下よりつかはされたもので御座います。
王。さうか。
イム。御機嫌うるはしい御樣子を拜してうれしく存じます。
王。よく來てくれた。お前は俺の生命の恩人だ。名は何と云ふのだ。
イム。イムと申します。
王。さうか。齡はいくつだ。
イム。十八で御座います。
王。大した奴が生れたものだな。
（イムとスト死骸をかくす）
王。誰か。

男。はい。

(戸をあけて一人の男入つて來。王様に最敬禮をする)。

王。ガンコスは今副官と秘密の相談をしてゐるから、誰も內へ入らないやうに注意しろ。そしてお前には一寸用があるから、こゝにゐるやうにガンコスが俺にたのんでゐた。

隊長。はい。

王。イム。あの戸をしめて來てくれ。

(カギを渡す)

イム。はい。

(イム戸をしめて歸つてくる)

王。(隊長に)お前の名は何と云ふのだ。

隊長。トモイと申します。

王。トモイとはいゝ名だ。お前の云ふことは軍隊はよく云ふことをきくか。

隊長。はい。私の云ふことはガンコス閣下の言葉として皆、聞いてくれます。

王。さうか。お前はガンコスと俺とどつちを愛するか。

隊長。私は王様を限りなく尊敬しておりますが、ガンコス閣下のためには火も水もいといません。

王。それは感心な心がけだ。だがそれは生きたガンコスの云ふことをきくので、死んだガンコスの云ふことはきくわけにはゆくまい。もしガンコスが死んだら、お前は誰の云ふことをきくのだ。

隊長。(恐る恐る)ガンコス閣下はどちらにおいでなのですか。
王。ガンコスか、ガンコスは地獄にゐるのぢや。お前も地獄にゆきたいか。
隊長。御冗談を
王。冗談ぢやない。お前が俺の云ふことをきかなかつたら氣の毒だが、ガンコスと副官のやうに地獄にやるより仕方がない。だが俺の云ふことを聞けば、お前は出世さしてやる。
隊長。ガンコス閣下は何處にゐらつしやるのですか。
王。あいつはあすこにゐる。イム、ガンコスを見せてやれ。
イム。はい。

(イム襖をあける。ガンコスと副官の死骸がならべてある。王は劍をぬく)

王。俺を殺さうとした故殺してやつた。尤も殺したのは俺ではないが。お前は俺の云ふことをきくか。それとも死んだガンコスの云ふことを聞くか。もう死んだものは仕方があるまい。お前は俺の味方をして、あと始末の相談しろ、イムは女裝してゐるが、女ではない。コモス殿下からつかはされた英雄だ。ガンコスも、副官もこの英雄の前には虎の前の猫よりももろかつた。
隊長。(王の前に跪づき)王様、あなたの御命令に從ひます。なんなりとも御命じ下さい。
王。お前は先づ軍隊を歸すやうにしろ。
隊長。はい。

(イム戸をあける。隊長戸口にゆき)

隊長。皆もう歸つてゐる。俺達は一寸相談があるから一足おくれる。

外。はい。（皆歸る氣合ひする）

（イムと隊長歸つてくる）

王。あゝ、之で萬事過ぎた。いや之から萬事始まるのだ。惡夢からさめたやうな氣がする。だが死んだものは生きかへらない。スト！生きのこつたのは俺とお前だけだな。

スト。はい。王樣、今迄の失禮をおゆるし下さい。

王。人間と云ふものはすぐつけ上り、すぐ又へこたれるものだ。昔のことはお互に忘れるとしやう。仕方がないからな。イム早速叔父さまをお迎へするやうに使ひを出すことにしやう。

イム。それにはおよびません。コモス殿下は御變裝で外で樣子を見てゐらつしやいます。軍隊が歸りましたらおいでになるでせう。私の父と一緒に。その他五六十人のものがついて來るで御座いませう。

王。さうか、そしてチミはどうしてゐた。

イム。あれは元氣に留守番をしてをりませう。

王。俺の助かつたのはお前と叔父さんとチミのおかげだ。

イム。いえ、王樣の御威德のいたす處で御座います。

王。俺に御威德なんかあるものか。俺は三十分程前にはガンコスにおびやかされてちゞみ上つて生きた心地もしない人間にすぎなかつた。だが今になると、そろ／＼王樣のやうな氣持になつて來た。おかしなものだ。

コモス。王様お信用たゞ戴きいたしました。

王。ありがとう。之も叔父さんがつかはして下さつたイムの御おかげです。

コモス。王様、之は私の友であり　イムの父であり、地方の豪族でもあるカミトモと云ふものです。私お信用してゐるものです。

王。今度はどうもありがたう　イムのおかげで生命びろいをしました。

カミトモ。恐れ入ります。息子が御役に立つたことを光栄に思ひます。

王。スト。皆をよんで来い。

スト。はい。（退場）

王。叔父さん。あとのことは萬事よろしく願ひます。之はトモイと云ふガンコスの部下だつたのですが、ガンコスの軍隊はこの男の一言でどうにでもなると思ひます。この男は幸ひ改心してくれました。ガンコスのために心ならずオストー族を殺すことを手つだつたのだと思ひます。ですから改心さへすれば許してやつていゝと思ひます。

コモス。王様の御恵みの深いのに感動いたします。

王。いや、俺はいくぢのない一人の男にすぎないのだ。

コモス。國民達をこの際大いによろこばしたく思ひます。悪税は廃し、税はひくめ、そして國民のよろこびとなることをいろ／＼と國力がおとろへない方法でやりたく思ひます。その點カミトモとよく相談して、やりたく思ひます。御任せしていたゞけますか。

王。よろこんで任せます。

長官。王様、何か御用で御座います。

王。今日から俺がこの國の王であり、この宮殿の王であることを申しわたす。

長官。王様。何をおつしやいます。今迄も王様でゐらつしやいました。

王。いや今迄はガンコスが王だつた。俺はガンコスの奴隷にすぎなかつた。ガンコスはいつでも俺達を殺す力をもつてゐたから。しかし今はさうではない。ガンコスは既に退治られた。嘘だと思ふものはあれを見るがいゝ。其處で今度は俺が王として命令する。俺の云ふことをきかないものは、やむを得ず死刑にするだらう。死ぬのがいやな人間は俺の云ふことをきけ。之から萬事をこゝにゐるコモス殿下におたづねしろ。

コモス。王様、私はあと始末が出來次第、又山に歸りたく思ひます。

王。さうか、それは羨やましいことだ。それなら叔父さまは後事を任される方をおきめ下さい。

コモス。萬事はカミトモに御相談なさるのが一番いゝと思ひます。

王。誰か、私の云ふことに不服のあるものは云ひ出てもらひたい。俺の云ふことに贊成なら、之から皆、新に生き返つた氣持で、仕事を始めてもらいたい。

長官。承知いたしました。

コモス。王様、誰も王様に手向ふものはあるわけは御座いません。皆王様のお爲をはかり、國民の幸福のためにつくすと思ひます。

カミトモ。私は王様に手向ふものはイムと共に必ず退治てお目にかけます。しかしガンコスの勢力がどの位い、軍隊の内にしみこんでゐるか、一つしらべ

り、そして不幸なものをおこらしになつていたゞいたと思ひます。

王。それはさうだ。それならさう言ふことにしやう。俺は意氣地のない一個の人間にすぎないから、お前達に萬事任せるからいゝやうにしてくれ。

コモス。かしこまりました。皆さん。こんな御立派な思ひやりのある王様をいたゞくことが出來たことは臣下一同のよろこびで御座います。

王。まあ、さう云つてくれるな。俺はいくたの人を見殺しにした意氣地なしにすぎないのだ。

コモス。それは王様の罪では御座いません。私達が立ち上り方がおそすぎたからです。しかしすんだことは仕方がありません。之から私達は決心を新にし、力を一つにしてわが國のために働きたく思ひます。

王。ありがたう。

コモス。王様の萬才をおとなへいたしませう。

(樂隊の音ひゞきわたる)

コモス。萬才。

(皆。萬才を三唱する)幕。

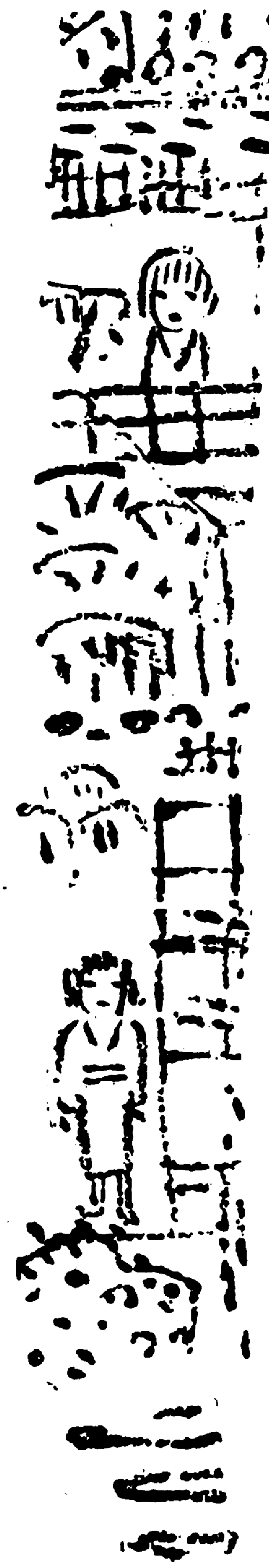
(一六、三、九)

「改造」四月號特別附錄

■思想取締の理想とその實現　田村德治

■階級の自壞作用　高田保馬

■カール・マルクスを克服する者　櫛田民藏



思想取締の理想と其の實現

——一名、行政學的見地より見たる思想取締の問題

田村德治

一、序說

思想取締の問題は、其れの屬する學問の種類との照合に於いて、二に分かち考へられ得る。其の一は、思想の取締行爲、及び殊に其の取締行爲の客體を爲す被取締行爲に關する規範意識の檢討であつて、其れは、即ち法律學、殊に制定法學上の問題であらねばならぬ、其の二は、思想取締の客體を爲す被取締行爲、及び殊に主として思想の取締行爲其の物に關する考究であつて、其れは、廣き意味に於ける行政學、殊に國家作用に關する學問上の問題であらねばならぬ。二者は、相互に密接の關係が有るが——而して其れ故に多くの場合に於いて屢ば混同せらるるが——然し對象論的には、之れを區別せねばならぬ。私の此處に取扱はうとするは、其の後者に外ならぬ。

思想取締の問題は──有らゆる他の問題の討議に於けると等しく──或は個別且具體的に研究せられ、又或は一般且抽象的に研究せられ得る。私の今此處に此の問題を取扱ふには、此の後の方法に據る。蓋一般且抽象的研究は、個別且具體的討究の基礎を爲すものであつて、其の結論は、性質上、時代及び國土の制約を超脫し得るものであるが故である。

＊　＊　＊　＊　＊

思想の取締は、行政上の行爲であるが故に、其れを對象とする學問は、即ち行政學であらねばならぬ。だが然し所謂行政學の中には、種々の部門が存する。思想取締は、縱ひ一方に於いては純正的に──即ち例へば或は沿革的、或は地理的に──如何に行はれつつあるかの考究を許すものとしても、然し又他方に於いては全く運用的に、其れが如何に行はるるを以て合宜若くは最良とすべきかの考量を許すものであり、而して思想の取締の問題の討議には──否問題を限局しても、少くとも私の今の論議の關聯する範圍に於いては──此の後の見方が、必須的且本質的であるは、元より論ずるを俟たぬ。從ひて思想の取締の問題は、其れが合宜の方法を發見するに努力する限りに於いて、行政學の中の運用的方面の部門、之れを明確にせば、即ち行政政策學の對象であらねばならぬ。玆に行政政策學とは、現實の行政──從ひて又思想の取締──を高めて、一の想定せられたる行政──從ひて又思想の取締──の理想情況を體現せしむるには、如何なる方法が、採らるべきかを考究する學問を謂ふ。然るに斯くの如き理想情況には、二が分かち考へらるる。一は究極若くは最高理想情況であつて、而して他は過渡若くは中間理想情況である。行政政策學は現實の行政をして斯くの如き理想情況を體現せしむる方法の學問であるが、然し其の方法の確立は、斯くの如き理想情況の確立と、全く別個の思惟と能力とを必要とするものなるが故に、從ひて此の理想情況の想定は、更に別個の學問、即ち實に行政哲學の研究の結果に俟たねばならぬ。右の究極理想情況を定むる學問は、絕對的行政哲學であり、之れに反して右の過渡理想情況を定むるものは、相對的行政哲學であると爲すが如きは、即ち是れである。

行政政策學の價値の、斯くの如き理想情況を定むる學問の精粗に依りて、影響せらるるは、故に我々が、今思想の取締の問題を取扱うて、其の方法を考究するに當りても、只漫然として常識の示す理想情況の儘に採用する、沒批判的の擧に出でてはならぬ。一度着眼を誤らば、方法の精緻を以てしても、其の處置の合宜を期し得ぬが故である。然れば思想の取締の政策を樹立しようが爲には、我々は、先づ絶對的行政哲學及び相對的行政哲學の夫々の見地に於いて、右の政策の目標とすべき理想情況の何たるかを分明にせねばならぬ。但し絶對的行政哲學及び相對的行政哲學の名稱は、私の作出に繋るものであつて、其れ等に該當する實質は、元より存しても、然し其れを表出すべき用語は、未だ發達して居らぬ。通常の用語例に從はば、私の絶對的行政哲學と呼ばうとするところのものに、純理論の語を用ひ、而して私の相對的行政哲學と唱へようとするところのものを、實際論の名を以て表さうとするに似て居る。其れ故に今は當面の目的以外の事項に、別異を立て、理非を爭ふことを止めて、暫く通常の用語例の耳に親しみ易きに就くならば、我々は、思想の取締の合宜を確立しようが爲には、其の目標とする理想情況に就きて、純理論と實際論とを分かち考へねばならぬ。

だが然し我々は、斯くの如き純理論及び實際論に入るに先立ちて、實は尚一層根本的に、其れ等の豫想する基礎問題たる國家及び國權の存在の合理や、國家の唯一的支配の合理やを論議し、更に進みては國家の活動の範圍や、國家及び國權の理想を實現する態度やを確定する必要が有らう。勿論此れ等の問題の中にて、前二者、即ち國家及び國權の存在並びに國家の唯一的支配の合理の問題は、嚴正に謂はば一般に行政學の領域に屬せぬものであつて、我々の標題の問題の解決に直接の關聯が無く、之れに反して後二者、即ち國家の活動の範圍並びに國家及び國權の理想實現の態度の確定の問題は、右の領域に屬するけれども、然し前の場合と等しく、我々の標題の問題の解決に直接の原理を與ふるもので

はあらぬ。けれども此れ等の問題に關して、各人が如何なる見解を有するかに依りて、各人が我々の問題に對する態度を若くは答解も、亦自ら異らざるを得ぬ。換言せば我々の標題の問題は、此れ等の問題に關する各人の見解の如何に依りて、人々の間に或は問題とせられ、或は問題とせられず、而も其の問題とせらるる場合に在りても、又其の結論に於いて、自同であるを得ぬものである。此の意味に於いて此れ等の問題は、少くとも我々の標題の問題の解決に豫想せらるるものであると謂ひ得る。例へば國家及び國權を認めず若くは國家の唯一的支配を認めぬ者に對しては、初めより思想取締の理想を謂ふ餘地が無きが故に、標題の問題は、全く無意味と爲らざるを得ざるべく、次ぎに例へば――其れ等を認むるも――國家の活動の範圍を狹く解すると、廣く解するとに從ひて、又は國家及び國權の理想を實現する態度の、質料的なると形式的なると、及び消極的なると積極的なるとに從ひて、思想の取締に對して、肯定若くは否定の差異を生じ、又は其の取締の對象に關して、見解を異にせざるを得ぬが如きは、即ち是れである。

其れ故に標題の問題を萬人に妥當せしめ、且其の解決の歸結を萬人に必然ならしめようと欲せば、我々は、須く此れ等の問題の各々に溯りて、其の夫々に就きて、正當の結論を抽出し、斯くて思想の取締の主體たるべき國家及び國權の存在の合理の立證に始めて、一般に思想の取締の合理及び其の取締に關する用意を討議し且確立し、以て標題の問題の解決の準備に資せねばならぬ。固より此れ等の問題に就きては――其の理論上の答解は、如何樣にもあれ――既に一般に事實的に解決が行はれてあり、又我々の標題の問題は、此の一般に解決せられたる事實の容認の下に審議せられて、不可は有らぬけれども、然し今我々の解決すべく直面しつつある標題の問題の審議は、彼の常に一定の制約を許容する、譬へば單なる試驗問題の審議ではなくして、我々の徹底的に確信を立て置くことを必要とする、我々に取りて切實なる問題の審議であり、又特殊の個人に與へられたる問題の審議ではなくして、一般に人類の考ふべき問題の審議である。而

も一度我々が、斯くして標題の問題を、一般的に且徹底的に審議しようとせば、我々は、最早前述の諸問題の事實上の解決を其の儘に容認して、直ちに與へられたる問題の解決に進む方法を採り得ないのであつて、必ずや其れ等の諸問題の——事實上の解決は、如何樣にもあれ——理論上の解決の、如何にあるべきかを明瞭にせねばならぬ。

斯くては私は、標題の問題を取扱ふに當りて、理路を溯り得る點まで溯らしめて、其れの豫想する根本理論たる國家及び國權の存在並びに國家の唯一的支配の合理、國家の活動の範圍、並びに國家及び國權の理想の實現の用意等の、問題を考究する。斯くの如きは、標題の問題の範圍を人々の要求の外に擴大せしめ、且之れを解決する方法としては、迂遠であり又痴愚であるに似て居るが、蓋其れは——事毎に無限の前提を遡らうとする私の習癖にも因らうが——又問題の性質上、止むを得ぬに出づると謂はれねばならぬ。只私は、此の方面の學問に、從來充分の工夫と必要の知識とを有せぬに拘らず、此處に急遽として此の稿を爲すが故に、其れが內容には、多大の欠陷の存せぬやを憂ふる。恐らくは其れに多かるべき誤解や、觀過や、僻見やに關しては、私は、切に識者の示教を乞うて、之れを後日の完成に資したいと思ふ。

二、思想の取締の問題の豫想する基礎理論の確立と適用

イ、國家及び國權の存在、並びに國家の唯一的支配の合理

道は、皆ローマより發すを。萬軍を叱咤し、降魔の旗を高揭して、敵陣に馳驅する命を受くる者は、先づ其の坦々たる道を、ローマより走らせざるを得ない。

凡べての物は、少くとも思惟上、之れを其の根源より下して、其の行手行手に於ける觀察、吟味、形成等を爲すでなければ、之れを正しく解決し、創造し、完成する等のことを爲し得ない。人々が、思惟上、物の根源を問題とするところ

に、其處に坦々たる道が開かれ、斯くて物の——外見的ならぬ——眞正の解決、創造、完成等のことが、初めて可能にせられ得る。若然らずして、人々が、思惟上、肆いままに物の中途より道を設けようか、然るときは其れは、空々の迷行であり得ない、其れは、成程終決に早く到達するに似て居るが、然し何時までも未解決の點が殘る、創造が歪む、完成が條件付に行はるる。道は通ぜられても、其れは、誤り易き不安の、危險の道たるに終る。

此のことは、理論の構成の場合に於いても、亦同樣であらねばならぬ。否理論の構成の場合には、既に從來正道と間道とが無數に錯綜し、又其れ等は、各々武裝の支持者を有して、他の排擠が行はるるが故に、人々が、其の適從するところを知らうと欲せば、先づ其の人自らが、武裝に身を堅めざるを得ない。

一の理論を構成して、諸多の理論の紛糾の間に正道を發見し、他の理論の錯誤を是正しようとする者は、先づ其の根據地をして金城鐵壁に依りて固めしめ、且其れの地位をして、四方を觀望し得る高所に置かしめねばならぬ。居る所の地位が、四方を觀望し得る高所に在らねば、方針を確立すべき達見が、生まれ得ず、又根據地が薄弱であらば、其の立てられたる理論は、他の理論の鋭鋒に當りて、忽ちに崩壞せねば、ならぬが故である。

一の理論を構成するに當りて、其の根據地を金城鐵壁に置き、而して其れの地位をして四方を觀望し得る高所を占めしめ、斯くて幾多の迷路の錯綜する間に、正しき道を發見し、諸多の攻擊の間に其の地歩を失はずに——此の道を强行し得るが爲には、我々は先づ其の理論の根源に鋒を起して、而して其處に難攻不落の、堅固なる城塞を築くことを試みねばならない。其の果して我々が斯くの如き堅固なる城塞を築き得るか否かは、固より之れを問はない。今我々に與へられたる問題の解決の爲にも、固より此の外に方法が存しない。

*　　*　　*　　*　　*

凡そ理論の流れは、之れを遡らば、悉く形而上學に、其の始原を見出す。

一切の形而上學を分かちて、自然形而上學と文化形而上學との二と爲すことが、認められ得るならば、凡べての文化形而上學的理論は、皆其の源泉を、遠く——然し我々には最も近く——人生の思念に出發せしむる。國家及び國權の存

在、並びに國家の唯一的支配の合理の討究も、亦斯くの如き種類の理論に屬する[illegible]、是れが解[illegible]く想ひを人類の理想上に走らせて、人生の目的は何であるかとの根本問題に就きて知るところが行はれねばならぬ。論間々の場合に、一を取りて他を捨つることとの、一に全く人々の有識的若しくは無識的に把持する目的意志によりて決せらるるに徴しても、知らるるが如くに、一切の物に與へられたる存在の意義は――之れを嚴正に其の根本に就きて探らば――究極的には人生の目的を如何に立つるかに依りて、定められつつあるものであり、又個々の場合に、一を取りて他を捨つることとの合理の、一に全く右の目的意志に依りて定めらるるに見ても、考へられ得る如くに、一切の物の存在の合理も、究極的には只人生の目的を如何に立つるかに依りて、決せらるべきものであらねばならぬ。國家及び國權の存在、並びに國家の唯一的支配の合理の問題も、亦其の例を漏るるものではあらぬ。然るに人生の目的の何たるかに關しては、古來諸多の見解が存する。嚴密に謂はば其れ等の間に、或は概念的把持に於いて、或は用語の選擇に於て、妥當のものと然らざるものとの分存するは、素より言ふを俟たぬところであるが、然し其れ等は、皆先覺の苦心の結果として、案出せられたるものであるが故に、其れ等に由來する實際的効果よりせば、何れも同巧異曲であると謂ひ得るに似て居る。私は、今烏滸がましいが、私自身の思索に結果する信念に基きて、人生の目的を以て、人類全般の――從ひて單に自己と謂はず又他人の――生々發達を遂ぐるに在ると解して、我々の當面の問題の考究に移らうとするものであるが、然し此の見解も、其實際的效果に於いて、諸多の先覺の見解と、甚しく背馳するものであらぬことは、恐らくは事新らしく之れを辯ずるを要せぬ。凡べて此れ等の論點に關しては、私は他の機會に於いて、既に之を述べた。

* * * * *

人類は、全般的に――從ひて又自他を分かたずに――其の生々發達の理想を實現せねばならぬ。人生の目的に關す

私の此の見解にして、幸ひに妥當であるとせば、玆に必然に、次ぎの三の結論も、亦正當であるとせられねばならぬ。

（一）先づ第一に認められねばならぬ結論は、各々の人類若くは其の一團の者が、各々其の生々發達を遂ぐるに適する情態に自己を置き、又之れに適せぬ情態に自己を置かぬことに努力せねばならぬと云ふことが、即ち是れである。各々の人類若くは其の一團の者——即ち單一若くは複合の個體——が、皆夫々斯くの如き努力を爲せば、人類全般の生々發達の理想の實現せられ得ることは、元より謂ふを俟たぬ。けれども人類は、其の性質に於いて——精神的にも、又肉體的にも——必ずしも常に強く、健かに、且全くあらぬ。各々の人類若くは其の一團の者は、事實上、一方に於いては、皆此の人生の目的の現實に努力するに限らぬと共に、他方に於いては、之れに努力しても、只其れ自體の力のみにては、其の實現を確實にするを得るに限らぬ。其故に——

（二）次ぎに第二に認められねばならぬ結論は、各々の人類若くは其の一團の者が、右の理想の實現の爲に、他の個々若くは一團の人類の右の努力に關與し且共力することが、許されねばならぬと云ふことである。斯くの如くして始めて人類は、其の獨力にて不能のことをも、全體の協働に依りて、可能と爲し得る見込が有る。けれども人類は、矢張り弱い。人類相互の關與と共力——若くは干渉と助成——とが、認められても、一方に於ては、其關與が關與者の側より、適切且正適に行はるるを保障し得ぬと共に、他方に於いては、縱ひ其れが、適切且正當に行はれても、被關與者の側に於いて、之れを適切且正當に受くることが、保障し得られぬ。玆に於いて——

（三）更に第三に認められねばならぬ結論は、一定の個々若くは一團の人類が、自己若くは第三者の右の關與若くは協力を有效にする爲に、支配、即ち命令及び統制の權力を行ふことが、許され得ると云ふことであらねばならぬ。其の際斯くの如く公認せらるる一定の者が、其の本質若くは地位に於いて、右の支配を行ふに最も適當の者であるを必要とす

ることは、素より自明である。此の最も適當の者は、勿論時代と場所との情況に於いて同樣であり得ぬが、少くとも團體殊に國家が其の著大なる事例の一であることに關しては、恐らくは疑ひの存せぬところであり、現に今日に於いては―少くとも文明社會に於いて―國家が、否國家のみが、右の支配を行ひつつあることも、亦一般に認められねばならぬ。斯くて支配を行ふ國家の存在の合理は、人生の目的との關聯に於いて、始めて立證せられ、且了解せられ得るに至る。

實に、人類をして人類たらしむるが爲に、人類に支配の必要があり、又此の支配を行ふに國家が、最も適當なるものの著大なる一事例であることは、必ずしも多く論證を要せぬが、然し支配及び國家の、人生の目的の實現に對して有する價値の、如何に大であるかを味解する爲には、幾度の論證を繰返しても、其の多きを訴へぬ。

（一）人類をして人類たらしむるが爲には、支配は、絕對に必要がある。何故ならば若此の支配がなくば、啻に人生の目的の實現が、不能にせらるるのみならず、又實に人生の目的の壞滅、即ち人生の目的上の見地よりせば、向上ではなくして、向下が、行はるるに至るが故である。例へば支配、即ち命令及び强制の存する今日の社會に於いて、尙其の跡を絕つことを得ぬ、酒亂、阿片病、爭鬪、殺人等、命令及び强制の存せぬ社會に於いて、拭ふが如くに消失し去ることは、到底之れを想定するを得ぬに似て居る。今命令及び强制の存する社會に於いては、尙此れ等の害惡を阻止し且減少せしめて、人生の目的の實現を確保することをも得るであらう。けれども命令及び强制の存せぬ社會に於いては、斯くの如き害惡の阻止及び減少は、可能であり得ぬが故に、其の結果の如何に有るべきかは、元より語るまでもなく、知られ得ることとである。

（二）支配を行ふに最も適當なる著大の事例は、國家である。何故ならば人類は、其の性情として自然に團體を作るものであり、而 [illegible]

能從ひて又國家に、其の範圍を劃して、自然に發達し來れる支配を行使せしむるは、人類の性情に合致して、一般の容認を容易にし、且團體殊に國家の結束を鞏くして一般の進展を確實にする利を得るが故である。支配を行ひ得る者、若くは現に——其の承認せられたると否とに拘らず——之れを行ひつつある者は、必ずしも獨り國家に限らぬ。然のみならず此れ等の者は、本來本質的に支配を行ふに適せぬとせらるべきでもあらぬ。若彼れ等にして識見に富み且動機に於いて正しからば、其の支配を行ふことに依りて、人生の目的の實現を容易ならしむべきは、元より疑ひを容れぬ。けれども個々の人類が、團體殊に國家內に在りて、團體殊に國家に屬せぬ各自の支配を、他の個々の人類に對して行使する場合には、縱ひ其れが、人生目的の實現の爲の至愛と至誠とに出でて、且優秀の識見と堅固の意思に導かるるにしても、決して一般に衆人の容認を得て、長く其の相互の平和を確保し、以て本來の目的の達成を容易にし且完全にすることを得ぬ。國家內に於ける諸多の階級、集團、若くは團體等——即ち要約せば複合的個體——が、國家に屬せぬ自己の支配を他の同類の者に對して行使する場合に於いても、亦同樣であらねばならぬ。其れ故に苟も團體殊に國家の範圍を劃して——尤も其の際其の成立の動因若くは事情及び其の範圍の廣狹若くは變更は、凡べて之れを與へられたるが儘に容認して、我々の議論を進むる——支配を行ふに最も適當なる者を求むるならば、其れば、即ち國家であると謂はれねばならぬ。

だが然し私が、右に國家を以て支配を行ふに最も適當なる事例であると爲すことに關しては、其れが、次ぎの二の前提に立脚することは、此處に、說示せられねばならぬ。

(一)、先づ第一に、私は、國家が支配を行ふに最も適當であると爲しても、其れは——既に上述の解明に於いて暗示せられてある如くに——其の支配が、右の國家に屬する單一若くは複合の個體に對して行はるる場合に限りて、思惟せら

れたるものであつて、決して國家の支配が　他の國家――若くは無制約的に、他の國家に屬する單――に對して行はるる場合をも包括して、立言せられたるものではあらぬ。國家の支配が他の國家に及ぼされ得るとすることよりして、決して望ましき結果の生じ得ぬことは、國家内に於ける諸團體の互に支配を行ふことの望ましからぬと云ふ理由を以て類推し得られねばならぬ。其れ故に斯くの如き欠陥の洞察は、必然的に世界國家若くは國際聯盟等の如き理想の定立と　其の實現の運動とに趁らねばならぬ。けれども此れ等の理想の定立若くは其の實現の運動は　或は國家の數若くは盛衰に關し、或は國家間の協調の方法に關して、何れも、國家の存在の合理を前提して、初めて考へられ得べく、決して國家の支配の合理を説明し得べき性質のものではあらぬ。其れ故に支配を行ふに國家が適當であるか否かの問題の考究の爲には　單に國家を其れの與へられたるが儘の多數を於いて容認して、其れが所屬員に對する支配を眼中にせば充分であつて、其れ以上に及ぶ必要はあらぬ。實に我々の國家の支配の合理性の考究は　初めより斯くの如き事由を自明として、此處まで運ばれ來つたと謂ふことを得る。

（二）、次ぎに第二に、私は、國家が支配を行ふに最も適當であると言うたけれども、其れは、決して國家なる複合的個體が　現實の事實として自ら其の支配を行ひ得るとして曰はれたのではなく、却つて只單に國家が支配――若くは精確に謂つて支配權――の主體たり得べき法理上の適格に見て、然く謂はれたのである。凡べて複合的個體、從ひて國家が、現實の事實として個々の場合に支配する物理的能力を缺くは、固より自明であらねばならぬ。現實の事實としては、國家內に於いて、一若くは數個又は多數の單一的個體――即ち個人――が、支配の權利を保有し、而して更に一層多數の單一的個體が、固有若くは委任の權限に依りて、此の權利を行使しつつあつて、而して之れに關しては、何人も之れを否定することを得ぬと謂はねばならぬ。而も其れにも拘らず、此れ等の單一的個體の外に、支配の權利主體として國家を想定

することには、法理上、啻に可能であるのみならず、極めて自然であり、否寧ろ或場合には、特定の制定法上必然であるとせられねばならぬことも存する。即ち私が前に國家を以て支配を行ふに最も適當であると言ふためには、國家が物理的に支配を行使し得ると云ふ事實的觀察に立脚したではなくして、却つて只單に國家が論理的に支配の主體と爲り得ると云ふ法理的構説に基底と爲したるに外ならぬ。(其れ故に今若國家が支配を行ふと云ふ用句が、誤解に導き易いとの批難を爲す人も有らば、私は、其れを國家が支配の主體であると云ふ用句を以て置換するを拒む者ではあらぬ)。然るに斯くの如くに、法理的構説に於いて、國家を以て支配の主體と爲し得ることは、其れ自身の中に次ぎの利點を包藏するに似て居る。即ち一方に於いては、縱ひ或場合――例へば特定の制定法――に於いて、國家の範圍を劃して自然に發達し來れる支配の主體を以て、法理上、一若くは數個又は多數の單一的個體であると構説せねばならぬことの存する可能が有り、而して此の構説の下に、其の支配の主體たる單一的個體に對して、一般國民の親愛の情の加はり得る可能の存するにしても、然し斯くの如き利點は、法理上、國家を以て右の支配の主體と爲し、而して一若くは數個又は多數の單一的個體を以て、其の支配の保有者であると構説せねばならぬ場合に於いても、之れを招來するを得るのみならず、又他方に於いては、縱ひ兩の構説に於いて――否兩の法理的構説の相異に拘らず――事實上、支配を行使する多數の單一的個體の存在は、同一であらざるを得ぬにしても、然し右の支配の主體が國家其の物であるとする場合は、其れが單一的個體であるとする場合に比して、右の支配の行使者に對する一般國民の不當の狹量と猜忌とを防ぎ、斯くて無智と誤解とより生ずる無用の害惡の避けられ得るは、之れを觀過するを得ぬ。

* * * * *

斯くの如くして私は、國家を認め、又其の支配、即ち國權を認むる。けれども――序であるが故に、言及するが――

私の此れ等のものを認むるは、此れ等のものに存在の合理が、存すると考ふるに由る。其を有せぬもの、若くは之れを有するも、他の一層多く存在の合理を有するものの存在を危くするものを認むるに躊躇する者である。顧ふに初めより存在の合理を有せぬ支配の存在の、認めらるべきものでれを殊更に指摘するまでもあらぬ。存在の合理を有して、而も其れが他の一層多く存在の合理を有するもの——例へ國家——との關係に於て、其の存在の認めらるべきでないことの有るは、斯くの如き場合には、支配は、相互に背反する傾向が有り、而して其の背反の結果は、爰に無用の害悪を生ずる可能性が有るに由る。斯くの如き害悪の何たるかは、此處に私の一々之れを指示するを須ゐぬ。恐らくは私のみならず、何人も、國家内に於て、多数の、無統一の——と言ふは、既に前に暗示せられてある如くに、國家内に於いて、多数の者が統一的に國家の支配を行使し得ることは、私は、之れを認むる——相互に獨立する、支配を認むることは、之れを躊躇することと思はるる。而も此の躊躇の心は、私を以て見ば、恰も人類の永年の經驗の支持を受くるやに思はるる。現に歷史上、否狹く謂うて今日に於いて、國家が、獨り支配の淵源であつて、而して其の承認の有る場合の外に、原則として他の者——其れが、如何に支配の適格と實力とを有する者にてもあれ——の支配を許さぬは、即ち此の消息を語るものであらねばならぬ。斯くの如きは、固より一面に於いては、只單に因果論的に説明せられて、其れは、全く國家の猜忌に基くに過ぎぬと見られ得ぬでもなからうが、然し他面に於いては、又目的論的に與據せられて、其れは、國家の公認せられたる任務を行ふに必須であるに因ると謂はれ得ねばならぬ。

以上の理由に於いて私は、人生の目的の實現を確實にしようが爲に、啻に國家及び國權を認むるのみでなく、又實に

……ことは言ひ得

までも、然し或程度まで——獨占的に行ひ得たるが故に、若然らずば發展したでもあらう多くの弊害と災禍とが、古往今來、如何ばかり多く救はれ得たであらうか？　月並の言草であるが——然し其の事柄は、常に重大である——假く世界の現情に就きて謂はば、人々が、現實の國家の、若くは國家のみの支配に對して、如何に多くの不滿を感じ得るにしても、然し我々の、外は外國の不正の侵害を防ぎ、而して内は人類の平和を保持して、衛生に、教育に、保育に、兇暴の禁止に、人生の目的の達成を可能にし、且之れを容易ならしめつつあるも、亦國家が、現實に於いて、或程度まで此の支配を獨占するに基くと謂はねばならぬ。國家及び國權を否認し、若くは國家の獨占的支配を拒否しようとする者は、先づ斯くの如くに國家及び國權、若くは國家の獨占的支配を認むるより生ずる利益に就きて、充分の考量を費す必要が有る。固より國家及び國權、若くは國家の獨占的支配にも、人類の創設に繋る有らゆる諸制度及び諸規約と等しく、幾多の弊害が、牽聯し、伏在し、且作動しつつあらうが——此の點に關しては、實に何人も之れを拒むを得ぬ——然し我々は、其れにも拘らず、其れが、國家及び國權、若くは國家の獨占的支配の改良の理由と爲るも、決して此れ等を毀滅する理由と爲らぬことに、注意せねばならぬ。

ロ、國家の撮持すべき理念、其の活動の範圍、並びに其の目標の設立の態度

斯くて私は、人生の目的は何であるかに筆を起して、一先づ思想の取締の主體たるべき國權及び國權の存在の合理並びに國家の唯一的支配の合理に就きて論證した。而も筆路が、一度此處に達したる時に、而して私が、謂はば此の達せられたる山上の城郭を根據地として只演繹的に、まつしぐらに我々の標題の問題に下降しようとする時に、私は、暫く此處に低徊して、四方を觀察し、且は私の立場を反省して、之れを他の立場と照合し、斯くて一方に於いては、希くは私の根據地を金城湯池に置きて、其れよりの推論に偏倚と誤謬との忍入を免れしむることを期すると共に、他方に於い

ては、國家及び國權に關する私の右の理論を、一層分明ならしめて、人々の同意
き必要を感ずる。

* * * * *

A、私の根本見地

既に前に見られたる如くに、私は、人生の目的を解して、人類の生々發達を遂ぐるに在ると爲した。此の見解の、果して容認せられ得べきか否かは、固より精細の吟味を要することであるが──而して其の精細の吟味は、別に一個の大事業であるが故に、其れに直接且必然の關聯を有せぬ我々の標題の問題の討究には、之れを省くを以て穩當とすると思惟せらるるが──然し若假りに右の命題が、正當であると爲され得るならば、其れに含まるる次ぎの三の人生觀上の態度も、亦自ら容認せられねばならぬ。三の人生觀上の態度とは、即ち有條件的個人主義、有條件的世界主義、及び無條件的理想主義が、是れである。

此れ等の三の態度の正當なることも、實は別に獨立に詳密の論證を要することは勿論であるけれども、然しそれは──亦前と等しく──他の問題の討究に附隨して爲さるるには、餘りに大事業であるが故に、今は原則として之れを措く。其れ故に私は、此處には只──止むを得ぬ場合、例へば理想主義の解明の場合の外は──私の右の人生目的上の見解が正當であるとせらるゝ結果として、其れに含まるる前述の三の態度も、亦容認せられ得ると假定して、扨其れ等の三つの態度、即ち有條件的個人主義、有條件的世界主義、及び無條件的理想主義とは、果して何を意義するかの問に對して、答へて見ようと思ふ。此の問に對する答は、即ち私が如何なる意味に於いて此れ等の三の態度を信奉するかの告白に外ならぬのであるが、然し其の際之れを明確且嚴正にする方法としては──既に前に述べたるが如くに、其れ等の態度と必然の關係の有る──右の私の人生目的上の見解との關聯に於いて說述するを以て便宜とする。

先づ私は人生の目的の確立に際して、私の理論を個人に出發せしめたるが故に、其の意味に於いて[illegible]只其の意味に於いてのみ――個人主義者である。けれども私は、人生の目的を實現する爲に、團體の意義を充分に認むる者であるが故に、私の理論は、團體を否認したる個人主義ではなくして、却つて之れに結合する個人主義である。然**のみならず私は、一方に於いては、飽くまでも個人の自由なる個性の發揮を高唱しつゝも、而も他方に於いては、**其の個性の發揮の、小我より大我に擴充せられ、斯くて團體若くは全體の利益の、個人若くは部分の利益とせらるべきことを理想と爲し、且其の可能をさへ信ずる者である。此の意味に於いて私は、縱ひ無條件に個人主義に屬するとせられ得るとしても、尚少くとも往々坊間に泥同せらるゝ、利己主義としての個人主義に屬する者ではあらぬ。

次ぎに私は、又人生の目的を確立するに當りて、世界の有らゆる人類への平等の關心に於いて、思索したるが故に、其の意味に於いてのみ――と言ふは、世界主義の名稱は、個人主義の名稱と等しく、他の意味に於いても使用せられ得るから――世界主義者である。けれども私は、人生の目的の實現を確保する爲に、結極は、自然の結合に基因する國家を認むるものであるが故に、私の理論は、國家を否定したる世界ではなくして、却つて之れを肯定したる世界主義である。然のみならず私は、一方に於いては、國家を基礎として行はるゝ、憎惡、排擠、陰謀等を陋とし、無用とし、且悲しむけれども、而も他方に於いては、各々の國家は、各々其の時代と場所と、及び人と物との差異より生ずる特色を保存し且之れを發達せしめ、決して世界を通じて、一樣性を期すべきであらぬとさへ思ふ者である。此の意味に於いて私は、縱ひ無條件に世界主義者であると爲され得るとしても、然し世界の人類を皆同胞であるとするが故に、一切の國家的特色までをも無視しようとする、極端なる世界主義にまで、徹底しようとする者ではあらぬ。

更に私は、人類の生存の目的を以て、其の生々發達を遂ぐるに在ると考ふる者であ

けれども、自然主義を奉ずる者ではあらぬ。今此の點に關しては此處に多少の解明が必要とせらるる。

自然主義の用語は、其の表すところが極めて多義であつて、或は價値闡明の態度を表す爲に用ひられ、又或は價値採擇の態度を表す爲にも用ひらるる。けれども此の用語の表す根本精神は、一に全く人爲的思索の加はらぬ感覺的經驗、若くは後天的反省の向けられぬ原本的性情を重んずることを示すに在る。例へば價値闡明の態度に關して謂はば、藝術に於いて、對象を有るが儘に寫すべきであると爲し、若くは學問に於いて、經驗を基礎とする必然的關係に於いて──即ち自然科學的方法に於いて──思惟すべきであると爲し、更に宗教に於いて、人類は、只理性に依りて神の知識に到達する（從ひて往々神と自然と同一である）と考ふるが如きは、是れであつて、又例へば價値採擇の態度──と言うても此の主義は、主として人生觀上の態度を表明する爲に、立てらるるのであるが──に關して謂はば、多くの人生觀的提説の中にて、或は人類は、社會的義務に導く自然的愛情に依るべきであると爲し、或は人類は、生命の保存及び種の存續を安全にする爲に、外部的──環境に適應して生活すべきであると爲し、殊に或は人類は、人性に本具する性能、換言せば有るが儘の本性に則りて行動すべきであると爲すが如きは、即ち是れである。

今前の態度の場合に於いては、自然主義は、明かに偏狹を意義する。蓋價値闡明の場合に於いては、自然主義も、斷より一の重要なる原理たり得ることは、疑ひが無いけれども、然し又同時に他の主義──暫く之れを文化主義の名に於いて包括する──の、亦等しく重要なる原理たり得る可能を否み得ぬが故である。例へば藝術及び宗教に於いて、寫實若くは合理的思惟の外に、想像若くは天啓に基く表現若くは感激も、亦價値が有り、又學問に於いても、因果の關係に於いて思惟する學問の外に、目手の關係に於いて思惟せられ得る、否思惟せねばならぬ學問の存することは、之れを示す。之れに反して後の態度の場合に於いては、自然主義は、全くの誤謬を意味する。蓋價値闡明の場合には、[illegible]

を認むることも、其が自然の一の矛盾であつて、此の場合には他の主義――即ち理想主義――のみが、自ら妥當せねばならぬが故である。例へば自然的愛情に遵依し若くは外部的自然に適應する生活を高調する場合に、實は無意識的に、社會的義務又は生命の保存若くは種の存續が、理想として採用せられてあるが如き、又例へば人類の有るが儘の本性――其れの何たるかは、不幸にも學者の見るところに於いて一樣であらぬが――に則る生活の主張の場合に、等しく無意識的に、其れに依りて實現せらるべき一定の價値、即ち理想の、豫想せられてあるが如きは、之れを示す。

今前の場合は、我々の問題の解明に直接の關係が無いが故に、之れを措く。之れに反して後の場合は、恰も我々の問題の解明の辿る正路に横はる。然るに此の後の場合に於いては、既に右に證示せられたる如くに、之れを嚴密せば只單に理想主義のみが有つて、自然主義は考へられ得ぬ。此の意味に於いて私は、正に理の當然に理想主義に屬して――尤も其の理想主義の中にて、特に私が、生々發達の理想を主義とする理由は、其れの縷説に暇が無いが故に、之れを省かねばならぬが――自然主義に屬する者ではあらぬ。

自然主義に屬する學説の中にて、古來最も有力に主張せられ、且長く世界を支配して、今日に至るまで思想界の潜勢力を爲しつゝあるものは、自然法學者の構説である。彼れ等の構説は、價値闡明の方面と價値採擇の方面との二を含む。世界を因果的機制と考へて、一定の公理的事實――例へば人性の原始狀態――より機械論的に國家殊に法律の理論を構成しようとするは、前の方面であつて、之れに反して只經驗の世界に於いて與へられたるもの――例へば、人類原始狀態の、有るが儘の情意活動、契約、國家、法律等の如きもの――のみを容認して、之れを超越する形而上學的のもの、殊に理想的のもの――例へば一般に理念、理想的國家、若くは法律等――を、少くとも其の本質的樣態に於いて、承認せぬのは、後の方面である。自然法學者の構成に繋かる理論的體系を、此處に紹介し且批判することは、元より私の意圖すると

ころであらぬが、然し彼れ等が、其の固有の立場より、人類の原始狀態を以て自由であると考へ、而して其の際無意識的に自由を以て最高の價値なるを豫想しつつあるは、私の後の理論の展開の必要上、今之を否認し置くを便宜とする。勿論私は、啻に私自身の立場に於いて、各々の個人の自由の、人類の生々發達を遂ぐるに必須であると信ずるのみならず、又多くの學者と共に、其の人格の尊嚴を保持する上に必要であるを認むる者であるけれども、然し私は、凡べての自然學者及び其の影響の下に立つ多くの學者とは反對に、之れを以て價値系統に於ける最高の地位を占むべきものとは考へぬ。此れ等の學者は、多くは意識的の推理に依る深き考量も無く、只無條件に、個人の自由に最上の地位を與ふるけれども、私を以て之れを見るに、其れは、過去に於いて、自然法學者が、機械論的に人類――殊に社會若くは國家――生活を與據しようと努めたるときに、其の立論の出發點に於いて、全く虚妄に原始人類を以て、離存的に自由の生活を營みたると想定したるに由來する。(尤も彼れ等の多くは、必ずしも此の想定に、歷史的事實であるとの權威を與へぬが、然し若其れが歷史的事實であらぬならば、其れを以て國家生活を與據するは、(縱ひ不能でなくとも)、無用の擬制であると謂はれねばならぬ。)歷史的事實として、原始人類の、離存的に自由の生活を營みたるとの確證の無く、否實に既に知られたる範圍内に於て、其の反證のみの存することは、偶々彼れ等の與據の、正當ならぬことを語る。然のみならず更に一層根本的なる批難の彼れ等に對して加へられ得ることは、此の構說に於ては、文化形而上學の建設に際して、機械論的方法が、用ひられてあるといふことである。人類生活、殊に社會若くは國家生活を與據するに、機械論的構說の不當であつて、之れを與據するには、只目的論的構說のみの可能であることは、既に確立せられたる事柄に屬すると見る可く、殊更に私の構說を須ゐぬ。然るに一度目的論的見解に立ちて、人類生活を與據しようと欲せば、人類の追求すべき最高の價値の固より他に在つて、自由が――單にその追求を確實にする爲めに方法として――副貳的價値を有するに過ぎぬことに鑑して、

[illegible]

B　國家の擁持すべき理念並びに其の活動の範圍の確定

私は、今私の立場を顧みて、斯くの如き根本見解に立脚しつつある私を眼前に見る。其れ故に私は——後にも再び言及せらるる如くに——一方においては、素より無條件的國家主義若くは團體主義を信奉する者では決してないが、然し又他方に於いては、其の反對の立場に立つ無條件的個人主義否世界主義をも、其の儘に是認する者ではあらぬ。然のみならず個人主義及び世界主義は、歴史的には、殆んど自由主義若しくは無政府主義——及び其の他の革命主義——の形態において主張せらるるに似て居るが、然し私は、斯くの如き自由主義若く無政府主義等に關しても——若く其れ等を個人主義若くは世界主義への連結より離して考へて見ても——其れ等が正當に人類の理想情況を現示し得たとは考へぬ。即ち私は、彼の個人主義的、世界主義的見地に立ちて、一般に國家を否認し、個人の絶對の自由を企圖する無政府主義にも、同意し得ぬと共に、又同一の見地に立ちて而も國家を容認するが、然し其の活動を最少限度に局限して、能きる限り、各々の個人の自由を確保しようとする自由主義にも、必ずしも賛成するを得ぬ。

國家の擁持すべき理想、並びに其の活動の範圍の確定の問題に答ふが爲には、我々は、歴史的に見らるゝ右の個性主義若しくは世界主義、又は自由主義若くは無政府主義等との關聯において、之れを述ぶるを以て、便宜であるとする。但し中に就きて純粹の個人主義若くは世界主義に關しては、既に團體殊に國家の存在並びに其の獨占的支配の合理の論設の了りたる今に於いて、評論の必要は存せぬ。之に反して自由主義若くは無政府主義其の他の革命主義に關しては、其れ等の主張の内容は恰も、我々の當面の問題の討議事項に屬するが故に、批判を略することを得ぬ。無政府主義及び自由主義の構説の、その根本の見地に於て、如何に觀過と錯誤とに出る弱點を包藏するかは、今は人

々に私の如上の說述の參照を乞ふに止めて、此處に之れを詳に摘示することを爲さぬ。だが然し此れ等の學說の本の見地に於いて弱點を包藏することは、實はその理論の批判に俟つまでもなく、其の結論若くは結果に就きて、之れを明かにすることを得る。蓋正しきもの丶、正しき結果を生み、若くは人類の眞摯の要求の、理論的に人類の理想として確立せられたる結論に合することは――語は、少しく宗教信念の表白にも似たる形式に於て、爲されたが、然し人生を大觀して考ふるに――不動の眞理であると見て可い。無政府主義及び自由主義の理論が、其の結論に於いて、人々の要求する望ましき情態を招致するに定かでなく、若くは其の結果に於いて、實際の實情に應じ得ぬは、實に其の根本の見地に於ける觀過と錯誤とに基くと見なければならぬ。

（一）先づ無政府主義の實現の不可能なることは、既に多くの學者の間に、言ひ古されたる眞理であると謂うて可い。個人の自由を至上の原理と見る此の主義の根本思想の、採容せられ得ぬことは、既に前に知られたるところの如くであるが、假りに此の根本思想を認むるにしても、斯くの如き自由の最大程度は、無政府主義の實現によりて、得らるゝものではあらぬ。無政府狀態に於いては、國家は、否定せられてあるが故に、元より論理の約束上、其の支配、即ち命令及び强制の有り得ないは、勿論であるが、然し從來國家が存したる爲に抑壓せられて居つたる、他の個々若くは一團の人類の害惡、否其れ等の相互の命令及び强制の、國家の廢されたる後にも行はれぬことは、如何にして保障し得るであらうか？　無政府狀態に於いて、一切の害惡及び恣意に基く命令及び强制の行はれぬことを考ふるは、之れを今日の國際間の現情に照合しても、恐らく夢想に過ぎぬとも謂まれ得よう。

（二）次ぎに自由主義の、今日の時代の要求に應じ得ぬことも、亦既に一般の學者に依りて、承認せられたるところであらねばならぬ。既に前にも見られたる如くに、自由主義者は、國家及び國權を必要的害惡と見て、其の活動を最少限

度に減縮しようと欲した。然るに其の主義の、一時――と言つて今日に至るまで相當の長期に亘つたのであるが――澎湃として世界に行はれて、近代の文明國に於ける諸般の立法に實現せらるるや、其の結果として、茲に其れの全く豫想せぬ多くの弊害を生ずるに至つた。例へば自由主義者は、各々の個人の自由を高調したが、然し其れは、各々の個人の平等を否認したのではなく、少くとも各々の個人の平等の自由を願はぬものではなかつた。けれども此の主義の一度實施せらるるや、有產者の自由は大いに伸張せられたけれども、然し無產者の自由は、其の反對に全く阻害せらるるに至つた。次ぎに例へば彼れ等は、特に自由の價値を尊重したが、然し其れは、少くとも他の價値――即ち例へば正義、友愛等――を排斥する意味に於いて爲されたのではなかつた。けれども此の主義の一度實行せらるるや、其處に一切の分配、從ひて消費の公平が無く、又人々の活動に機會の均等が無く、斯くて人類相互の親和の毀損せられたことは、甚だ大であつた。此れ等の事實は、現に人々の、目前に見るところであらねばならぬ。其れ故に苟も我々にして自由以外の若くは自由以上の諸價値を認むるならば、否之れを具體的に謂はゞ、苟くも我々にして國家の救貧、衞生、教育、其の他の保育的文化的施設を呪ひ得ぬならば、然るときは我々は、必然に自由主義の埒外に、歩を進めぬを得ぬであらう。

斯くて私は、自由主義にも就かず、又之れを徹底したとも考へらるる無政府主義にも贊せず、一方に於いては、國家及び國權並びに國家の唯一的支配を認め、而して他方に於いては、國家の把持すべき理想の、個人の自由のみに限らぬことを指摘し、國家の活動の、範圍の相應に廣かるべきを認めた。けれども私の此處に特に人々の理解を得たきことは、私は、決して其れだからとて、今日の所謂國家及び國權が、其の唯一的支配に於いて、若くは其の支配の内容に於いて、過去に於いても、將現在に於いても、合理化せられてあつた、若くは合理化せられてあると考ふるものであらぬと云ふことである。歷史上――從ひて固より現在をも含む――國家の成立の事情、の芳しからぬものが有り、又其の支配の内容の、

面白からぬものゝあつたことゝ、獨り私に限らず、所謂國家主義に徹底する人々も、亦之れを容認せぬを得ぬことゝ思ふ。けれども我々の當面の問題は、國家及び國權の成立及び行使の功過を因果論的に說明しようとするものではなくて、却つて其れ等の理想の實現の任務を目的論的に確立しようとするに在る。而も一度國家及び國權の理想の實現の任務が、問題とせらるゝに至らば、其れ等の成立及び行使の功過の如何に拘らず、之れを承認せぬを得ぬことは、既に前に見られたる如くである、此の意味に於いて——序でであるが故に論及するが——私は歷史上一切の國家が、皆征服國家であり、資本主義の國家であり、搾取國家あるが故に、之れを否認せねばならぬと爲す多くの革命者——中に就いても、其の中堅を爲すマルクス一派の社會主義者(尤も其の全部ではなかろうが)—の見解にも又自ら異議を挾まねばならぬ。

惟ふに社會主義等の革命主義—但し無政府主義は、別個の見地に於て、此處に之を除外する——が、自由の外に、特に正義を高調し、生產殊に分配の社會化を企圖するは、縱ひ其の間に人々の指摘自繁るが如き理論上の欠陷の介在するにしても、實に多くの傾聽すべき理由を有すると謂はれねばならぬ、けれども私は、暫く其の理論の當否に關する詮議は、之れを措き、此れ等の主義、殊に一派の社會主義の——他の急進的革命主義、殊に共產主義や、サンディカリズムや、I、WWの運動に關しては、尙更であるが——其れを實現するに當りて採る手段に對しては、常に多大の疑惑を以て之を見る者である。然のみならず、我々の問題に關係の有る論點に立歸るならば、私は、革命主義、從ひて社會主義を奉ずる多くの學者が——若くは時として一部の社會學者が——一般に國家を以て、征服國家であると爲し、搾取國家であると考へて、之れを否定することの有るは、概念の構成に關する思索に於いて、批判の足らざるに由ると思ふのである。概念の構成方法よりせば、國家は決して征服國家若しくは搾取國家に限らるべきものではあらぬ。假りに歷史的に隆替したる一切の國家は、其の成立に於いて征服的であり、其の活動に於いて搾取的であつた[illegible]

本質よりせば、單に偶然であつたに過ぎぬ。其れ故に歴史上の國家——而して現在の國家も——が、我らが、既に之れに與へたる任務を實現して居らぬ、若しくは之れを實現するに充分なる活動領域を有せぬとするならば、我々は、其れを、之れを實現する國家、若しくは之れを實現するに充分なる活動範圍を有する國家に改造するに努むべきであると謂ひ得るも、其れが、決して一般に國家を否認する理由と爲るものではならぬ。此の點は、既に前に言及せられたるところであるけれども、然し此處に之れを特に再言する必要がある。蓋し社會主義、否他の一層急進的なる革命主義を奉ずる者の、往々にして乾坤一擲の社會革命を一朝に——若くは少くとも急激に——招來することに焦心するは、固より一方に於いては、現實の國家の改め難きに絶望したとも謂はうけれども、然し他方に於いては、現實の國家の個有性を以て、一般に國家の必須性とする錯誤に出づるが故である。

要するに革命主義の論者は、彼れ等の企求する社會も、亦國家であることを考ふる必要がある。蓋概念の混亂より國家一般を否認するは、無用の誤解と禍害とを惹起するが故である。然のみならず論者の現實の國家觀も、亦正鵠を得たと爲すことを得ぬ。嚴正に謂はば現實の國家は、實は其れが、一般に國家たる資格に基く價値より謂うても、否極言せば其の現實の構成に由る價値より考へても、必ずしも常に全く絶望の外の無き害惡のみの結晶であると想定せらるべきものではあるまい。凡べて人類の全般に、若くは一部に、百害の有りて一利の無きものは、必ずや長く存續の可能が有るものではあらぬ。現實の國家、否一般に國家が、斯くの如きものであらば、其れは、論者の自覺的運動を俟つ前に、夙に世界に其の跡を絶たずには了らなかつたのであらう。

C　國家の理想の確立並に其の實現の用意

以上、私は、私の前に達し得たる立場より、無政府主義を夢想とし、自由主義を極端とし、又一派の社會主義否實に

一般に革命主義を、其れが錯誤に依りて固執する僻見に就きて、訂正した。斯くの如きは、其の論結に於いて、恰も[illegible]粋に國體主義若くは國家主義を採る人々の謂ふところと、異る點も無いに似て居るが、然し私の根本的立場の、純粋に國體主義若くは國家主義ではなくて、却つて個人主義と國體主義とを融合し、又世界主義と國家主義とを調和するものであることは、常に明識せられねばならぬ。私は、實に斯くの如き根本的立場に佇立する。其れ故に私は、單なる國體主義若くは國家主義の根本理論にも、承服し得ぬと共に、又其の實行の齎らすべき結果をも、望ましいと考へぬ。殊に歴史的には、國體主義若くは國家主義は、近時殆んど復古主義若くは保守主義の形態に於いて、主張せらるる如くであるが、私は、斯くの如き復古主義若くは保守主義に關しても、亦其れが―暫く之れを國體主義若くは國家主義との關聯より離しても―正當なる理論の支持を有するとは考へぬ。凡べて此れ等の點に於て、私の右の歸結は、前に私の排斥したる各種の主義の主張に、類似すると謂はれねばならぬ。即ち私は、一方に於いては、既に前に見られたる如くに、無反省なる個人主義若くは世界主義に基く、無政府主義、自由主義、社會主義、共産主義等に左袒し得ぬと共に、又他方に於いては、等しく無反省なる國體主義若くは國家主義に基く、復古主義若くは保守主義にも贊成し得ぬ者である。

國家の理想の確立並びに其の實現の用意を述ぶるが爲には、我々は、之れを歴史的に知らるる右の國體主義若くは國家主義、又は復古主義若くは保守主義との關聯に於いて、考ふるを以て、便宜であるとする。但し此の際純粋の國體主義若くは國家主義の批判を爲すことは、國家及び國權の存在の合理、並びに國家の獨占的支配の合理及び其の活動の制限の撤廢の合理を自明として成立する我々の當面の問題に關係が無いが故に、此處に之れを措く。之れに反して復古主義若くは保守主義に關しては、其れの批判は、更に一歩を進めて、國家及び國權の目標―換言せば國家の活動の指針―を決するものであつて、恰も我々の當面の問題の討議に屬するが故に、之れを略することを得ぬ。所謂復古主義と保守主義と

は、事實的には通常同一の主義として通用するに似て居るが、然し此れ等は、論理的には別個であり得べきが故に、此處に暫く兩者を其の別異の論據に於いて批判する。即ち復古主義は、過去の——殊に大體に於いて、產業革命以前の——國家若くは國權の情況に立歸らうことを希求するものであり、而して保守主義は、國家若くは國權の一定の、殊に過去の——即ち此の點に於いて保守主義は、復古主義と同一に歸し易い——情況を保存しようとするものに外ならぬ。

復古主義及び保守主義の目標とする理想情況は——縱ひ論理的には他であり得るも、然し事實的には特權を擁し、護差別を高調して、恰も團體主義若くは國家主義の主張の體現に外ならぬが故に、其れ等の根本理論の討議並びに其の反資本主義的政策の當否も)は、既に右に述べたる理由に依りて、此處に之れを辯ずるを須ゐぬ。我々の——我々の當面の問題に關係の有るとして——興味を有するは、其れ等のものの傾向若くは態度の問題である。然るに、私の見るところに依らば、復古主義及び保守主義は、恰も此の傾向若くは態度に於いて、根本の誤謬を有すると爲さるべきに似て居る。

(一)、先づ第一に、復古を理想とすることは、決して無條件に容認せられ得べくもあらぬ。疑ひも無く過去の國家、殊に產業革命以前の特權國家にも、種々の美點は、存したであらう。けれども凡べて國家の理想は——他の一切の場合に於けると等しく——其の時々の情況に適合して行くものであらねばならぬ。萬象は、皆流轉する。一の國家の或質料——例へば或體制若くは施設——が、一の時代の或情況に於いて、顯著の實蹟を擧げたからとて、之れを、其の儘の形態にて、情況の同じからざる現在殊に將來に移さうとするは、眞に文字通りの時代錯誤でなくして、果して何であらうか? 固より一の國家が、過去に於いて、任意の質料的體制若くは施設の下に、世界に誇り得べき實蹟を擧げたとせば、其れは、人類に對する一大寄與であらねばならぬ。けれども斯くの如き顯著の實蹟は、異りたる情況の下には、異りたる質料若くは其の異りたる形態の下に擧げられ得べきことを知らねばならぬ。過去に於いて、或質料的體制若く

施設の下に顯著の實蹟を擧げたるが故に、移り行く現在若くは將來の情況をも歪めて、之れを過去の質料的施設若くは施設に近かしめようとするは、正に株を守りて兎の横死するを待つ誹りを免れぬのみならず、又其の時の流れを無視する、今を昔に返さうとする試みは、例へば大人を小兒の昔に戻さうとして、之れを強行するが如くに、常に不能であるに止まらず、却つて、或は恐るる、有害でないかを。

（二）、次ぎに第二に、保守を以て能事とすることも、決して之れを是認し得べきことではあらぬ。一の國家が、現在若くは過去に於いて、世界に誇るに足る美點を有し若くは有したとするならば、我々は、之れを保守するよりは、寧ろ之れを發揮することに努めねばならぬ。固より一の國家が、過去殊に現在の情況に於いて、大なる不可が無く、否實に時としては其の完美に達したとさへ言はるることの有るは、確に存する。けれども地上に與へられたる如何なる最美の物であつても、之れを高め行く餘地と必要との存せぬことは、果して之れを想定し得べきことであらうか、一物の位置は、如何に高からうとも、其れを——殊に其れが、人類に依りて置かれたる限り——天の高きに比する時には常に無限に低いと見らるるものであらねばならぬ。凡べて究極的、否一般に理想情況への到達の、永遠の課題であるとせらるるも、是れが爲である。其れであればこそ、聖者も、常に自彊して息まぬ。金甌無缺を誇る國家であつても、若人が、其れに闘して、保守を以て、事が足ると考ふるは、其の情操に於いて姑息であり、又其の結果に於いて頽廢であると謂はれねばならぬ。即ち保守主義は——復古主義と等しく——其の根本的態度に於いて、誤謬が有ると見られねばならぬ。

之れを要するに復古主義及び保守主義は、其れ等の目標の立て方に於いても、又其れ等の努力の向け處に於いても、決して之れを採ることを得ぬ。此れ等の主義の目標とする理想情況は、常に質料的であり、又其れ等の努力の方向は、常に消極的である。其處に此れ等の主義の本質的なる誤謬が存する。先づ我々の努力は、常に消極的でなくして、積極

的であらねばならぬ。蓋若然らねば、我々は、移り行く時代と環境との必要に適應するを得ないであらう。又そこに我々の目標は、常に質料的ではなく、却つて形式的に想定せられねばならぬ。蓋質料的に目標を想定して、之れを保持若くは復舊しようとすることは、單に不能であるのみならず、又實に有害であり得るが故である。(此處に質料的に目標を想定するとは、移り行く内容と然らぬものとを分かたずに、現在若くは過去に行はれ、若くは行はれたる形態の儘の體制若くは施設等を目標とするを謂ひ、而して形式的に目標を想定するとは、右の體制若くは施設等に關する目標を立つるに當りても、其の移り行く内容を捨てて、只其の移るべからざる眞髓を擇ぶことを謂ふ)。

勿論世に復古主義者若くは保守主義者と稱せらるる人々の中には、多若くは少なる度に於いて、夙に復古主義若くは保守主義の弱點に氣が付き、其の目標を、現に若くは曾つて行はれ若くは行はれたる形態の儘の體制若くは施設に採らずに、却つて之れを其の眞髓(若くは精神)に求め、而も其の目標への到達を企圖するに當りて、只退嬰的に其の眞髓を失ふまいと苦心することをせずに、却つて進取的に其の光りを大にしようと努力し、斯くて復古主義若くは保守主義の質料的及び消極的なる弊を免れて、之れを形式的且積極的の着衣に於いて主張する者が、無いではあらぬ。所謂國粹の發揚を主張する者は——其れが、後に私の支持しようとする國粹發揚の思想と、必ずしも同一でないが——即ち是れであると謂ひ得る。けれども斯くの如きは、決して純粹に復古主義者若くは保守主義者と稱せらるべき者ではあらぬ。否實に彼れ等は、其の質料的及び消極的の特質を捨つる限りに於いて、或意義に於いては、發展主義者若くは進歩主義者であらざるを得ぬ者である。但し斯くの如き種類の復古主義者若くは保守主義者は、其の數に於いて甚しく多からぬのみならず、又其の之れに數へらるる者に在りても、所謂國粹の發揚に眞正の理解を有せぬが爲に、事實上、質料的且消極的政策の高調に陥らぬは極めて稀れである。其處に彼れ等の復古主義者若くは保守主義者たる實が存し、又其處に

一般に此れ等の主義の、大方の――否少くとも活潑に思惟する人々の――同情を博し得ぬ欠陷が存すると謂はれ得る。

八、前掲の基礎理論の思想の取締の問題への適用

以上に於いて、私は、先づ第一に、國家及び國權の存在並びに國家の獨占的支配の合理を確め、次ぎに第二に國家の擁持すべき理念並びに其の活動の範圍を論じ、更に第三に國家及び國權の理想の確立及び實現に關する態度を決して、略ぼ私の意の有るところを示した。第一の理論は、其の内容に於いて、社會若くは國家の理想情況の問題の一部を構成するものであるが故に、社會若くは國家哲學――此處に哲學とは、形而上學、即ち此の場合にては、文化形而上學の義である。以下皆同斷である――に屬すると謂はれ得べく、次ぎに第二の理論は、其の實質に於いて、行政の理想情況の問題の一部を構成するものであるが故に、之れを行政哲學、嚴密に謂はば純正行政哲學上の理論と見ることを得べく、更に第三の理論は、主として行政の目的達成の方法に關するものであつて、其の内容は、斯くの如き目的達成に想定せらるる方法上の理想情況の問題の一部を構成するものであるが故に、運用行政哲學――等しく語は熟せぬが、或は自立的行政政策學若くは行政政策哲學と言ふを適當としよう――に屬すると考へられ得るであらう。今此れ等の夫々の學問に屬する基礎理論を、我々の標題たる思想取締の問題に適用するならば、其れは、夫々次ぎの三の命題に見らるる如き形態に於いて示されねばならぬ。以下私は、此れ等の三の命題を原理として、其れ等の夫々に關する政策を樹立しようと思ふ。

(一)、先づ第一の社會若くは國家哲學上の基礎理論よりして、一般に思想の取締の主體は、國家である。否國家のみであるべきであるとの命題を生ずる。

但し此の場合に此の命題よりして、一般に思想は取締らるべきものであるとの結論が、[illegible]題の意義するところは、苟も思想が取締らるべきであるとせば、其の取締を爲すべき主體が、唯國家のみであるべきを、現示しようとするに過ぎぬ。國家の行爲としての取締の地位、性質並びに内容は、後の說述に之れを讓るを便宜とするが、少くとも此處には、其れが、支配即ち命令及び强制に屬する行爲であることを指摘せねばならぬ。斯くの如き行爲は、前揭の基礎理論よりせば、只國家のみが、當然に之れを爲し得る。蓋既に見られたるところに從はば、個々の人類は、各々人生の目的に反するを得ぬものであり、而して若彼れが之れに反するときは、他の個々若くは一團の人類が、之れに關與し得べく且關與せねばならぬが、然し其の際命令及び强制を用ひ得る者は、只國家のみに限らるるが故である。

けれども此處に思想の取締を爲す主體が、只國家のみであると云ふことにも、亦解明が必要とせらるる。此處に思想の取締の主體の、國家のみであるべきを謂ふは、其れの淵源の單に國家のみに限らるべきを意義するものであつて、決して其れが、事實的に國家以外の者に依りて行使せらるべからざるを意義するものではあらぬ。一般に國家は、必要と思惟するときは、其の支配の行使を、他の一團若くは個々の人類に委ね若くは認め得べきものであつて、其れが、亦人生の目的を實現する上に於いて、是認せられ得べきは、論を俟たぬ。思想の取締に就きても、亦然らねばならぬ。其れ故に今日世界の各地に於いて、國家以外の者の思想の取締を行ふことが有らうとも、其れが、國家より委任せられ、若くは容認せらるる限り——と言うても、斯くの如き委任若くは容認か有りても、其れが、又四圍の情況上、人生目的の實現に適す若くは適せぬとせらるることに依りて、合理と不合理とを分かたるべきは、勿論であるが——一應は正當であると認められねばならぬ。但し此の問題は、我々の標題の問題の解決への正路に存せぬが故に、此處に其の討議を進

めぬ。

（二）、次ぎに第二の純正行正哲學上の基礎理論より、一般に國家の支配は、思想の取締りにも及び得ねばならぬとの命題を生ずる。

此處に所謂思想とは、既に私が他の機會に於いて之れを述示したるが如くに、主觀的には、心裡に成立するところの或種の表象を意義すると共に、又客觀的には、其の外界に表出せられ若くは保存せらるる或種の意味を現示するものであるが、私は、所謂思想の取締を解して、啻に右の主觀的及び客觀的意義に於ける思想の取締のみならず、又其の發表及び宣傳の動作及び行爲の取締をも含むと爲し、而して此れ等の取締を、――暫く其の運用の問題を離れて、謂ふならば――其の全領域に於いて、合理であると解する。此の點に於いて私は、無政府主義者は固より、一般に自由主義者、及び――自由主義の流れを汲み若くは其の影響を脱し得ぬ――多くの今日の法律學者の見るところと、稍や其の趣きを異にする。

人々の絶對自由を高調する無政府主義者の論結は、暫く之れを措き、一般に自由主義者、殊に多くの法律學者は、客觀的意義に於ける思想の取締（例へば文書の發賣禁止及び停止）を認め、又主觀的意義に於ける思想の宣傳の行爲の取締（例へば集合の取締、朝憲紊亂の宣傳の處罰）を認むる。けれども彼れ等は、一般に思想の發表に關して、殊に其の動作に關して、國家の取締を認むるに躊躇するのみならず、思想が單に思想たるに止まる場合、即ち主觀的意義に於ける思想に關しては、全く其の取締を拒む者である。想ふに其の際彼れ等の理由とするところは、恐らくは次ぎの一點に歸する。一は、各人が、其れの心裡に於いて、任意の思想を抱き得るとの、自然的權利を認むることであつて、而して一他は、心裡の思想は、之れを取締ることを爲し得ぬが故に、放任するの外が無いと云ふことに[illegible]

其の行動に關して[illegible]

けれども既に我々の確立したるところにして、幸ひに誤らぬならば、國家の取締は、主義として、人生の目的に反する――約言せば反人生目的的――行爲の一切に對して、加はるを合理とせねばならぬ。心裡に於ける思想であつても、其れが、反人生目的的である場合に―縦ひ顯著で且直接であり得ぬとも、然し間接に且漸次に―之れを取締り得る方法(例へば懲戒の如きは、是れである)―が有るのみならず、又既に各人が、其の心裡に於ける思想を發表否宣傳することの、任意であり得ぬならば、何が故に獨り心裡に止められたる思想に關してのみ、反人生目的的であるも許され得るかの理由が、發見せられ得ぬ。其れ故に彼れ等の論結も、『人類は、人生目的の實現に反せぬ限り、任意の思想を抱き得る、若くは『思想の懐抱は、其れが、反人生目的的であらぬ限り、取締らるべきであらぬ』と云ふ限度まで、訂正せられねばならぬ。然るに斯くの如き論結は、單に私の積極的に言表したる主張を、消極的に言表したるに外ならぬ。兩者は、其の根本見解に於いて、互に自同の立場に佇立する。各人は、其の行爲に就きて、反人生目的的――否放縦――であるべきでないが如くに、其の精神に就きても、反人生目的的――否放縦――であるべきでないとする見解が、即ち是れである。

斯くの如くに私は、思想の取締に關しては、啻に其の宣傳及び發表の行爲若くは結果のみならず、又實に思想其の物に對しても、國家の取締の加はるべき餘地の有るを思ふ。此の點は、實に恐らくは多くの人々の承認し得ることの困難なるところであつて、且有らゆる時代及び有らゆる場所の立法も、未だ嘗つて多くこれを承認せざるに似て居る。けれども私の茲に人々の注意を乞ひたきは、私の斯くの如き程度にまで思想の取締を認むるは、單に國家の權利若くは義務を確めようとするものであつて、決して無制約的に其の行使までをも、是認しようとするでないと云ふことである。

凡そ正しいとせられたることであつても、其れを行ふと否との可否は、時と場合とに依りて異り得る。若小を救はうとして、大を傷くる恐れが有らば、初めより之れを爲さぬを以て可とする。其れは、實に卑近なる功利主義的要求ではなくして、人類の最高理想との關係に於て容認せられ得る一般的原則であらねばならぬ。殊に心裡に於ける思想の反人生目的的であるか否かは、外部より之れを識別することが難く、假りに之れを識別し得る情況に置かるるも、其れの眞に反人生目的的であるか否かは、之れを決定するに決して容易であらぬ。其れ故に私は、一般に國家が、人生目的の實現の爲に——此の制約は、常に國家に對して嚴重に之れを高調する必要が有る。蓋個々の人類にして反人生目的的であり得ぬとするならば、本來人生目的の實現の爲に合理化せらるる國家の、反人生目的的に行動し得ぬことは、正に自明であるが故である——心裡に於ける思想の取締を爲し得ることを認むるも、然し國家が、それを事實的に行使することに對しては原則として之れを否認するに躊躇する者である。此のことたるや、心裡に於ける思想の——既に多くの人々の氣付いて居る如くに——人格の尊嚴を形つくる最も直接のものであり、而して其れの自由の、理想の追求に必然の前提を爲すものであることを注意するに於いて、殊に然らねばならぬ。

一般に社會主義及び其れに類似する革命主義——但し無政府主義は、別に之れを取扱ふ——は、自由主義の理論と結果とに絕望して起りたるものであるが故に、其れ等に於いて認めらるる理想社會——即ち我々の見方よりせば國家——が、自由主義の下に於ける國家よりも、人類の生活に關與する程度及び範圍の大なるは、元より謂ふを要せぬ。思想の取締に就きても、亦恐らくは同斷ならざるを得まいが、然し私の右の考量は、一切の國家に就きて通用するものなることが、記憶せられねばならぬ。其れ故に內に言ふが、社會主義及び其の他の革命主[illegible]れが、其の企求する社會に於いて、思想の取締を[illegible]にすることを[illegible]し、而して現實の國家の下に於ける[illegible]なることを[illegible]とするならば、

其れは、正しく自殺的論理であると謂はれねばならぬ。

思想取締の程度若くは限界の問題も、我々の標題の問題の解決の要點を構成するものでないが故に、此處に是れ以上の考究を措く。

(三) 更に第三の運用行政哲學上の基礎理論よりして、國家の取締は、人生目的の實現を趣旨とする一切の思想には、原則として除外せられねばならぬとの命題を生ずる。

但し此の命題は、實は右の基礎理論より直接且必然に抽出せらるるではあらぬ。右の基礎理論の示す結論は、只單に國家の理想を確立するには、形式的なるべく、而して之れを實現するには、積極的なるべきであると云ふに歸着し、而して實に其れ以上に出づるものではあらぬ。其れ故に右の結論より直接且必然に抽出せらるる命題は——暫く理想の確立の形式的なるべきであるとの方面を除外するならば——國家の理想の實現の爲には、有らゆる新らしき施設も之れを試み、又有らゆる新らしき理想をも聽かねばならぬと云ふことであつて、決して私の前に述べたる命題其の物ではあらぬ。けれども斯くの如く有らゆる新らしき理想を聽くが爲には、此れ等の理想を示す思想に對して、國家の取締の發動してならぬことは、勿論である。是れが、即ち私が、前揭の命題を以て、右の基礎理論より抽出せらるると爲したる所以である。

だが然し待てよ。右の基礎理論よりして、否實に國家の理想の確立殊に實現が、積極的であるべきであるとの結論よりして、果して國家が、其の理想の實現の爲に、有らゆる新らしき施設も之れを試み、又有らゆる新らしき理想をも聽かねばならぬとの命題が、無制約的に抽出せられ得るであらうか? 仔細に考ふるに、右の基礎理論は、只單に理想即ち目標の立て方及び其の實現の態度を示したるに止まり、決して其の理想の内容若くは其の實現の方法を定めたるものでと

はあらぬ。我々は、右の基礎理論に於いて、只單に我々の理想を質料的に定むべきでなく、却つて形式的に定むべきでうあり、又之れを形式的に定むるにせよ、只消極的に過去若くは現在に之れを探らずに、却つて積極的に將來に、否寧ろ時間及び空間を超越して、之れを求むべきであることを確立したに過ぎぬ。理想其の物の內容並びに其の實現の方法に關しては、我々は、其れに於いて、未だ一度も言及せぬのである。けれども理想の立て方及び殊に其の實現の態度は、理想の內容及び殊に其の實現の方法との結合於いて、考へられ得ぬものであらうか？　又若其れが可能であるとせば、右に所謂『國家が、其の理想の爲に、有らゆる新らしき施設を試み、又有らゆる新らしき理想を聽かねばならぬ』との命題も、亦其の理想の內容及び其の實現の方法の制約を受け、所謂新らしき施設を試み又新らしき理想を聽くことは、只其の特定したる理想の內容及び其の實現の方法の妥當する範圍內に於いてのみ許容せらるるものでなからうか？

顧ふに此の疑問は、其の全幅に於いて肯定せられねばならぬ。理想と云ふことが、無理想と云ふことと同一でない限り、理想が、形式的に定められねばならぬとて、其れに內容が有らねばならず、從ひて又理想を實現する態度が、積極的であらねばならぬとて、其れの從ふべき方法が、考られ得ねばならぬ。理想の形式的に定めらるるとは、決して其れが無內容と爲ると云ふことではあらぬ、質料的內容に對立して形式的內容と云ふことが、有り得るべく、又有らねばならぬのである。然のみならず、更に進みて之れを謂はば、理想の形式的內容は、縱ひ質料的內容の如くに時間及び空間の制約を受くる個別的且具體的の形態を採らぬにしても、決して其れが、時代と場所とに依りて異種の形態を採り得る程の變改を許すものでもあらぬ。寧ろ他の意味に於いて之れを謂はば、初めより變改し得る偶有性を除去して、變改せられ得ぬ必須性のみを採擇する點に於いて、形式的なる面目が存する。即ち理想の形式的內容には、亦形式的固定が有ると謂

想に於いて積極的であるべきを意義するではなく、却つて定められたる理想に於いて積極的であるべきを意義する。即我々は—前の基礎理論に從ひて—定められたる理想に關しては、其の内容及び其の實現の方法に於いて有らゆる新しき施設を試み、又有らゆる新らしき理想をも抱き得るが、然し其れと異る理想に關して、右と同樣の態度に出で得るか否かは、別に其の考究を要すると謂はねばならぬ。

斯くの如くして、前に提出せられたる疑問が、悉く肯定せられねばならぬならば、此處に新たに擡頭し來る問題は、國家は、其の異る理想内容及び其の實現方法に對して、果して如何なる態度を採るべきかであらねばならぬ。國家は、其の擁持する理想と異る理想内容と其の實現方法とに據りて、新らしき施設を、積極的に且組織的に試むる必要の無いことは、固より請ふを要せぬ。けれども國家は、斯くの如き異る理想内容と其の實現方法とに據る、他の人類の新らしき施設の試みに對して、如何なる態度を採るべきか？ 殊に我々の標題の問題に關係の有る點に關して謂はば、國家は、斯くの如き異る理想内容と其の實現方法とを主張する思想に對して、如何なる態度を採るべきか？ 約言せば、凡べて此れ等の行爲若くは思想に對して、國家の取締は、發動するを以て合理とするか、將發動せぬを以て合理とするか？ 惟ふに斯くの如き問題は一般且抽象的に一切の國家に關して想定し得るものであるが故に、從ひて啻に現實の國家に對して、提起し得らるるのみならず、又實に復古主義者及び保守主義者の國家、否—現實の國家の多くの取締に反抗しつつある—社會主義者の國家に對しても、提起し得られねばならぬ。此れ等の主義者が、此の問題に對して果して如何なる答解を附するかは、其れ等の主義の根本精神と照會する場合に於いて、興味の有るところであるが、此處に其の詮議を省く。今は只私は、一般且抽象的に、此の問題に對して、如何なる結論の導かれ得るかを見ようと思ふ。

斯くて前に掲げられたる第三の基礎理論より抽出せられたる右の命題は、之れを理想—殊に國家の擁持する理想と

異れる理想 ── の内容及び其實現の方法との結合に於いて、考究せらるる時に、此處に初めて我々の標題の問題の解……重要の意義を與ふる。其れは、我々の標題の問題の解決の正路に横はり、且其の要點を爲すものであらねばならぬ。其れ故に私は、左に筆を改めて、之れを徹底的に考究し、且其れに關する政策上の理論を ── 望むらくは ── 確立しようと思ふ。

三、思想の取締に關する理想

イ、具體事件の處理に標準を與ふべき根本要請

昔は、人が天を翔くることを考へたるときに、他の人々は、皆之れを空想であるとして嘲つた、其れよりして、人が行はれ得ぬ考を立てたるときに、其れは、天を翔くるが様だと笑はれた、けれども今日に至つて天を翔くることが可能に爲つて來たときに、人々は、更に古への嘲られた人々を噺すに至つた。而して其れ等の人々は、實に先見の明を有するとして崇められた。之れに依りて考ふるも、理想の光を仰ぐことは、常に推奬せられ、且尊敬せられねばならぬ。けれども其れかと言つて、我々は、又現實を忘るべきではあらぬ。若人々が天を翔けようが爲に、只單に無準備に、樹より落ち、絶壁に飛ぶことのみを爲してのみ居たならば、今日の成功は、到底期し得なかつたであらう。我々は、先づ其の前に、退いて繩を綯ひ、釘を作り、機械を整へ、燃料を求めねばならぬ。

* * * *

國家の搬持する理想と異れる内容の理想を主張し、若くは時として國家の採用する理想實現の手段と異れる方法の手段を強調する思想に對して、國家は、果して如何なる態度を採るを以て、妥當とすべきか? 此の問題を解決しようが爲には ── 殊に此の問題を個別且具體的の事件の處理に一般的標準を與へ得る如くに解決しようが爲には ── 我々は、必然的に先づ國家の搬持する理想及び其の實現方法の如何に定立せらるべきかを定めねばならぬ。蓋國家の搬持する理……

べきかが知られ得べく、而して斯くの如き異る理想內容及び其の實現の方法の何たるべきかが知られ得て、然る後に國家の、個々の場合に、其れ等に對する處置の何たるべきかが定められ得るが故である。斯くの如くして私は、國家が、其れの撮持する理想と異れる內容の理想及び其の實現方法に對する態度を決する前に、先づ國家の撮持すべき理想及び其の實現方法の如何に定立せらるべきかに關して、私の根本見地を披瀝し置く必要を感ずる。

既に前に私の述べたるところに從はば、一般に――從ひて又國家の――理想內容は、質料的に定めらるべきものではなくして、却つて形式的に定めらるべきものであり、又其の實現態度は、消極的に立てらるべきものではなくして、却つて積極的に立てらるべきものであつた。今若此の見解にして幸ひに誤りが無いならば、國家の撮持すべき理想及び其の實現方法の正に此れ等の要件を具備する如くに、定立せられねばならぬことは、謂ふまでもあらぬ。只問題は、國家の理想及び其の實現方法は、如何に定立せられたる場合に、其れ等の要件を具備したと謂はれ得るかに存する。此の點の解決は、即ち國家百年の大計を立つる所以であつて、又以て古往今來實際的に興味の中心と爲り、且熟慮の對象と爲りたる――とは言ふものの、未だ決して徹底的に究明せられざる――問題の解決であらねばならぬ。

私の考ふるところ――其れは、素より單に素描に止まるが故に、恐らくは未熟で、且杜撰で、多大の謬見も有るべく、而して其れに關しては、切に識者の示教を乞うて止まぬのであるが――に依らば、次ぎの如くである。

* * * * *

(一)、先づ理想內容の設定に關しては、次ぎの二の考量が、必要とせらるる。即ち――

(イ)、國家の撮持すべき理想は、一般に理想に存すべき特有の性質に基きて、其の地位に於いて絕對的であり、又其の任務に於いて指導的であり、超時空的に崇高、圓滿、自在、且無礙であらねばならぬが、然し之れを設定するに當りて

は、我々は、其の理想若くは目標の、必ずや一般且抽象的形態に於いて定められて、個別且具體的形態に於いて定めらるべきものであらぬことに注意せねばならぬ。蓋個別且具體的の形態は、即ち完成的形態であつて、從ひて斯くの如き形態に於いて理想を設定するは―縱ひ其れが可能であるとしても―即ち之れを質料的に設定するものに外ならぬ。其處には、縱ひ認識の容易と到達の確實との利點が存するにしても、彈力性が無く、融通性が無く、到底時代と場所とに超越して、永く且恰く理想たる地位を保持し得るものではあらぬ。之れに反して一般且抽象的の形態は、未完成的形態であつて、之れに於いて理想を設定することは、謂はば其の骨骼を定むるに外ならぬ。理想の形式的設定とは、之れを謂ふに外ならぬ。其處には時代と場所との制約に服する多くの個別且具體的理想を包容し得べく、從ひて又常に且弘く理想たる權威を失墜するものではあらぬ。其處に理想の形式的に定めらるべき要求の面目が存すると謂はれ得る。

元來形式及び質料―或は此れ等を形式及び內容（若くは素材又は實質）、又は制約者と被制約者と云ふも、亦同樣であるが―の意義は、往々茫漠であるとの誹りを免れ得ぬが、之れを明確にせば、二に分かち考へられ得る。其の一は、二者が、一の概念と其の上位若くは下位の概念との關係に於いて、考へらるる場合である。此の意義に於ける形式と質料とは、上位概念と下位概念との義であつて、其の關係は、正に相對的であらねばならぬ。例へば國體、國家、社會等の諸概念に於いて、前者は、各々其の後者の質料であり、後者は、各々其の前者の形式であると謂はれ得るが如きは、是れである。其の二は、二者が、單一の概念の內容の中に分かち考へらるる場合であつて、其の關係は、正に絕對的であらねばならぬ。此の意義に於ける形式と質料とは、之れを本質（若くは超驗）概念と本具（若くは經驗）概念との意であると解することを得る。有らゆる概念は、皆他の一定の概念に對して、上下の關係に立ち得るにしても、然し任意の一概念、例へば國家若くは國體の概念に關して、之れを通時空的にも、特殊時空的にも規定し得るが如きは、之れを示す。

今一般に理想、從ひて國家の撮持すべき理想の形式的に設定せらるべきであるとの要求に、素より一方に於いては、之れを前の關係に於いて謂ひ得る。例へば我々は、一の下位概念の表す實體の理想を實現する爲に、不斷の努力を施して、固より悔ゆべきではあらぬけれども、然し我々は、又最上位の概念の表す實體の理想の何たるかを知りて、常に本末を顚倒する愚妄に陷らぬ用意を爲す必要の有るは、即ち是れである。けれども此の要求は、又他方に於いては、之れを後の關係に於いても爲し得る。例へば我々は、一の實體に關する理想を設定するに當りて、之れに移り行く諸多の內容を與へて、其れが實現に、時代遲れ若くは場所違ひの努力を爲すよりも、寧ろ始めより其れに其れの背景若くは眞諦を爲すべき內容を與へて、而して之れを時代と場所とに適應し得る形態に於いて實現する必要の有るは、之れを示す。

今卒然として之れを見ば、私の前に爲したる國家の撮持すべき理想の形態の解明は、或は獨り後の關係に於ける形式を高調して、前の關係に於ける形式を不問に附したるに似て居るが、然し其れは、細說を省きて一般的理解を容易にしようが爲にしたるより出づる餘弊であつて、然く考へらるるは、私の眞意ではあらぬ。若夫れ國家の撮持すべき理想に就きて、嚴密に細說を試むるならば、我々は、最上位に人類の理想を置きて、其れより漸次に國家の理想に下り、而して國家の理想をも、其れの下位に立つ國體、政府、議會、官公吏等の理想との關係に於いて確立し、以て其の本末の關係を明かにし、且其の際各々之れを超時空的若くは本質的に定めて、以て其の實現に人々の遍且永遠普の努力を可能にする必要を高調せねばならぬことは、元より謂ふまでもあらぬ。只斯くの如きは、我々の標題の問題の解決の道を餘りに遠ざかるが故に、之れを略したるのみである。

（ロ）、國家の撮持すべき理想は、前にも見られたる如くに、常に絕對的且指導的の性質を有し、崇高且圓滿であつて、善美を悉くし、又圓滿且無碍であらねばならぬが、然し我々は、此のことの、決して悉く現實の顧慮を拒斥する意

味に於いて謂はるるではなくして、却て之れを加味する意味に於て考へられ得ることを、知得せねばならぬ。理想を設定するに當りて、現實を顧慮すべきであると爲すことは、決して我々が、右に漸く形式的に定めたる理想を、更に質料的に轉化することを意味するものではあらぬ。何故ならば其れは、決して現實を理想の中に取入るることを意義せず、殊に況んや現實を以て理想に代らしむることを意義するものでなく、却つて單に前に所謂超時空的に立てられたる理想の內容の中にて、現實に內在する素質に於いて、先づ實現せられ得る方面の採擇せらるべきを意義するに外ならぬが故である。國家の操持すべき理想の設定に當りて、斯くの如くに現實を顧慮する必要の存することは、蓋疑ひを容れぬ。凡べて一般且抽象的に理想と見られたることにても、之れを實地に履現するに當りては、履現者の特殊の情況に應化せらるゝことを必要とする。例へば――既に自明であると爲されてある如くに――一般に流行する服裝の色彩若くは樣式は、如何樣であらうとも、各人が、各々其の流行を自己に適する範圍に於いて採用し、斯くて其の服裝を自己に適する寸法に於いて調製することが賢であるとするならば、我々は、更に一層大なる理由を以て、一般且抽象的に理想とせらるる國家情況に就きても、其れが、現實の各國に於いて、各々採取せらるる方面を異にすべきを確信し得ねばならぬ。蓋若然らねば、例へば自己に適せぬ衣服の自己を醜くし、自己を害すると等しく、各國の理想の實現が、之れに依りて著しく困難にせられ、若くは不能にせらるるが故である。其れ故に理想の設定に當りて、現實を顧慮することは、決して其の本來の一般且抽象的の理想を不用とする趣旨に出づるものではあらぬ。否却つて、其れは、一般且抽象的理想を實現するに當りて、成るべく多くの損失の無く、且弊害を無からしめようとする趣旨、若くは更に積極的に、自己の短所を擁護して、擧らぬ效果に焦るよりは、寧ろ其の長所を利用して、遙早く希望すべき效果を舉げ、其の他の點の完成を後に讓らうとする趣旨に出づるに外ならぬ。

現實の顧慮に於いて注意せらるべき其の素質も、之れを質料的に定むべきではなく、却つて形式的に定めらるべきことることは、素より言ふを要せぬ。此の場合に於いて所謂形式と質料とは、或は上位及び下位の關係に於いて考へられ、又或は超驗及び經驗の對立に於いて考へられ得る。此れ等のことに關しては、凡べて理想の場合に於ける解明が、其の儘に此處に移され得ねばたらぬ。（A）、先づ現實の顧慮に依りて、既に確立せられたる理想の採擇せらるべき方面を定むるに當りても、其の所謂現實――若くは一層精密に現實の素質――は、決して經驗的（無批判的に）に見定めらるべきではなく、却つて超驗的に（批判的に）認定せられねばたらぬ。何故ならば現實を超驗的に、批判的に見定むるときは、我々は、不朽且不變の本質的現實を知り得るに反して、之れを經驗的に、無批判的に認定するときは、我々は、往々にして其の移り行く非本質的のものをも、現實の特質として考へざるを得ぬものであるが、苟も現實の顧慮に依りて、理想に採擇せらるべき方面の決定を與ふる爲には、必ずや其の現實の本質に據るべく、而して右の如き非本質的のものを標準とするは、到底許され得ぬことであるが故である。B）、次ぎに等しく現實の顧慮に依りて、右に所謂理想の採擇せらるべき方面を定むる場合に、其の所謂理想の採擇せらるべき方面は、現實の上位概念との照應に於いて、之れを定むべく、決して現實其の物への同位概念との照應に於いて、之れを定むべきものではあらぬ。例へば我々が、國體に關して、現實の顧慮に依りて、理想の先づ實現せらるべき方面を定むるとしように、我々は、先づ其の現實的國體――即ち例へば君主國體――の上位概念たる國家の本質及び任務等を考へ、之れに依りて其の國體の採擇すべき理想の方面――例へば理想の君主國體――を定むべく、決して先づ現實（即ち例へば君主國體）と同位概念に立つもの（即ち例へば共和國體）との照應に於いて、其の現實的國體の採擇すべき理想の方面を決すべきであらぬが如きは、即ち是れである。然世の儘ならぬことに關して、往々にして悲嘆せらるる理想と現實との衝突は、現實を、其れと同位の、然し異

の實體に關する概念に依りて、指導せしめようとするより起る。けれども斯くの如き企圖は、例へば烏を鷺に、若くは鷺を烏に轉じようとするものであつて、強いて之れを試みば、必ずや人々の悲嘆に値する如き變災若くは破滅を後見せずには止まぬ。其れは、明かに初めより理想の採擇方面の決定に、全く誤れる方法を用ひたるに基く。何故ならば一の現實と同位に立つ他の實體は、縱ひ其れが、別に現實として存し、若くは特定の現實に於いて理想とせられ得るものであつても、然し其れは、問題たる現實より見ば、等しく資料であつて、決して形式に解せぬが故である。

(二)、次ぎに實現方法の確立に當りても、次ぎの二の注意が、必要とせられねばならぬ。即ち――

(イ)、先づ我々は、國家の撮持する理想の實現に當りては――其れは、實に一般に理想の實現に於いて同一であるが――常に現實に立脚し、現實を育成し、且發達せしむることに依りて、其の理想(即ち定められたる超時空的の目標)への到達を完成することに努力せねばならぬ。

だが然し右に所謂現實に立脚するとは、抑も何を意義するか?

一の物、一の個人、一の國家等に關しては、我々は、常に其れに於いて其の善惡に係らぬ一定の素質を見出す。例へば、個人に就きて謂はば、根づよい、優しい、怒りぽい、賢い等と云ふが如きは、是れである。個人の場合には、只斯くの如きもののみが、個體の本質を形成し、而して只斯くの如きもののみが、遺傳の客體と爲るに外ならぬ。國家に就きても、亦之れと同樣の事が、謂はれ得ねばならぬ。所謂現實に立脚するとは、斯くの如き善惡に係らぬ素質の眞髓に着眼して、之れを育成し、發達せしむるを謂ふに外ならぬ。一般に素質の眞髓には、善惡が無く、其れは、其れ自身に於て善惡を超越する。只斯くの如き素質の眞髓が、環境との關係に於いて、反撥若くは順應の傾向を採りたるときに、爰に

[illegible]

其れ故に我々が國家の操持する理想を實現しやうが爲に、現實的國家に立脚しつゝ、其の發達を計る場合にも、具さに、既に經驗的に善なる形態を取れる方面をば、益々助成し、開展せしむると共に、惡なる形態を取れる方面をば、嚴に鎭壓し、撲滅することに努めねばならぬ。蓋經驗的の現實に對して斯くの如き矯正を加ふることは、其の本質を爲す素質の眞髓に對して、理想の實現に至るべき適當の指導を爲すに外ならぬが故である。

だが然し經驗的現實の、善なる形態を益々助成し、開展せしめ、又其の惡なる形態を嚴に鎭壓し、撲滅するといふことは、其れ自身に於いて、果して自明であらうか？　否我々は、善惡の考へ方の如何に依りて、同一現實の同一形態に就きて、事實上、其の判斷を異にすることが、有り得ぬであらうか？　其れ故に我々は、更に進みて右に所謂矯正に關しても——誤解を避くる爲に——此處に其の眞義を定め置くべき必要を感ずる。

凡べて物の善惡又は善若くは惡なる形態——其れ等は、此處にては美點、欠點等と稱せられても、亦同一であるが——は、理想との照合に於いて定めらるる。然るに我々は、既に國家の操持すべき理想に關して、之れを超時空的に定むべきものであると爲したるが故に、如上の前提にして正しからば、現實的國家の善惡又は善若くは惡の形態も、亦實に斯くの如き理想との照合に於いて定めらるべきものであらねばならぬ。即ち現實的國家に於いて見らるる善惡の形態は、固より現實的國家の屬性としての美點若しくは欠點であるけれども、然し其れ等は、現實的國家に標準を有する絶對的美點若しくは缺點、又は慣習的評價の然らしむる美點若くは缺點ではなくして、却つて只單に超時空的目標への傾向を現示するが故の美點若しくは欠點であらねばならぬ。其れ故に今若現實的國家の善なる方面を助成し、開展せしめ、其の惡なる方面を鎭壓し、撲滅することを矯正と言ひ得るならば、斯くの如き矯正は、正に超時空的理想の實現への突進を促すものであるが、然し其れは、決して慣習的評價に據る矯正を意義するものではあらぬ。慣習的に沒批判的に評價

することに、實に人類の陥り易き弊であつて、我々は、其の全方面に覺醒したと考ふる場合に於いても、時として全く無識的に慣習的評價の奴隷と爲りつつあるを發見するものであるが、然し是れは――殊に重大の場合には――常に注意して、之れを避けねばならぬ。

凡べての判斷、凡べての評價には、批判的なる、全く捉へられざる自由の思惟が、必要とせらるる。超時空的に立てられたる理想は――縱ひ其れが、永遠の課題たる點に於いて、完成の喜びを齎らさぬ、充されぬ憾みは、伴はうけれども――其れ自身に制約を藏せぬが故に、其れの實現にのび〱したる濶達の快感が漂ふ。之れに反して限時空的に立てられたる理想は、縱ひ其れの完成は、比較的に確實であらうとも――尤も文字通りの完成は、此場合に於いても決して可能であらぬ――然し其れの實現は、常にいぢけて、且狹苦しい。慣習的評價は、過去に於いて善若くは惡として考へたるものに據りて、善若くは惡を考ふるものであつて、其れの基礎を爲す理想は、限時空的のものに外ならぬ。けれども我々は、過去に生きないで、却つて將來に生きねばならぬ。即ち我々は、只單に過去は美しかつたとて――其れに關しては我々は、實に人に誇りても、素より差支はなからうが――徒らに其れを墨守してはならぬ。否却つて我々は、其の素質をさへ發揮せば、常に我々の美點を釀成し得ることに、確固たる信念を有せねばならぬ。理想の現實の爲の努力には、現實の實體に對する信賴が必要である。國家の攝持する理想實現に關しても、亦素より同一であらねばならぬ。

(ロ)次ぎに我々は、國家の攝持する理想の實現に際して、相成るべくは、現實をして、常に秩序的に確實に進ましめ、激大なる變革、殊に革命を避けしむることに留意せねばならぬ。

顧ふに激大なる變革、殊に革命の原因は、個々の場合に於いて、固より一様でなく、又其れは、諸多の方面より考究し得べく且考究せねばならぬが、然し今茲に人類の……

を、探るならば、二が考へられ得る。其の一は、理想設定に、屬する[illegible]其の理想を、現實と何處迄[illegible]至つ他の實體に求むることは、即ち是れでなければならぬ。其れに伴ふ根本的の誤謬は、既に前に之れを指摘した。其の二は、價値評定に屬するものであつて、之れに關しては、大きの二が、分ち考へられねばならぬ。人爲を過重する精神と、現實を嫌厭する念慮とが、即ち是れである。我々の此處に討究するは、自ら此の價値評定に屬するものであらねばならぬ。（A）先づ人爲は、其れの働き懸くる實體に、著しき變化を及ぼす。多くの人々に人爲の喜ばるゝは、實に此の爲に外ならぬ。けれども人爲は、自然の大勢力に比して之れを見ば――少くとも今日までのところは――尚小技巧たるに止まりて、且其れの爲し遂げたるところには、必ずや常に遺漏が伴ふ。

見よ、自然の巧智を。自然は、概して物事を飛躍せしめず、而も人爲よりも、著しくないが、然し大きく、之れを育たしむる。勿論人類は、其の生を享くると共に、其の固有の目的を實現せねばならず、又其の固有の目的を實現する爲めには――自然の巧智を以てしても――必ずしも常に必要なる物事の完成を、自然の推移に任する譯にも行かぬ。けれども我々は、人類が斯くて自然に人爲を加ふるに當りても、彼れが常に其の人爲よりは、自然の大勢力を、多く利用しつつあることを、智得せねばならぬ。人爲を加ふる者は、人類であるも、之れを、完成するものは、自然の大勢力であるが故である。然れば自らは、萬物の靈長であると自負しても、人類は、其れ自身において自然の一大機構に於て働く一小因子に過ぎぬ。人類の思惟は、如何にも靈妙であると言ひ得ても、然し我々は、我々自身が、如何に其の靈妙の思惟を緻密にしても、尚兎角に誤ることの多き、憐れに小さき、弱き生活體なるを顧みなければならぬ。

人類は、熟慮に熟慮を重ねても、兎角に無意識的に誤ることが多い。少くとも人類の有らゆる過去の經驗は、皆雄辯に之れを語る。既に此の事實が、一般に容認せられねばならぬならば、我々は、人爲を過重することを止めて――と言ふ

ても、努力を廢して可いと云ふ悲觀論に陥つてはならぬが——須く謙虚なる心に立歸り、一時に激大なる變替をも、熟慮に出づるならば倘恕し得るが、時としては、否多くは早急に——存すべくして存したる他の實體に加ふしむべきでなからうか？　此のことは、一切の實體に關して、素より同一であらねばならぬが、然し其れが、人生に對して重大の意義を有する實體、例へば國家若しくば國體等に關しては、殊に然らねばならぬ。激大なる變替を加ふる事業は、様々の意義に於いて確に痛快であり、又た眩しいが故に、因襲上、華々しくも見ゆるが、然し斯くの如き事業の、單に右の如き氣分の滿足若しくは外觀への野望を以て從事せらるべきであらぬことは、元より自明であると謂はれねばならぬ。然のみならず此の種の問題を解決すべき鍵鑰は、實は人々の氣分若くは外觀に於いて存しないで、却つて其の適格若くは權利の點に存する。然るに若し斯くの如き適格若くは權利を謂はば、人類は、何人と雖も、苟しくも存すべくして存したる實體に、激大なる變替を加ふるに足る適格若くは權利を有せぬことは——既に見られたるところに依りて——又容易に承認せられねばならぬやに思はるゝ。

(B、)次ぎに現實は、或は實に人々の嫌惡に値することも有り得る。けれども人々の單なる嫌惡は——縱ひ其れが、必然であり、痛切であり、且合理であつても——直ちに以て其の現實に激大の變替を與へても可いとの結論に導くものではあらぬ。

一の現實に激大の變替を與ふることの可と否とは、時としては其の現實に對する、他の人々の思惑の顧慮に依りて、決定せられねばならぬことも有り得る。今日常の瑣事には、古きもの、好まぬものは、之れを弊履の如くに捨去し、新しきもの、好しきものは、之れを直ちに採取しても、必ずしも其れに對して多くの異議は生せぬ。殊に其れが、容易に批判せられ得るもの、若くは屢ば排斥され得るもの、又は其れが、行爲者其の人のみに關するもの、若くは行爲者其の人

のみに依りて決し得べきものである場合は、尙更然りである。けれども事の性質の重大なるものは、決して斯くの如きことを得ぬ。其處には、必ずや多くの異議が生ずる。殊に其れが、容易に代用せられ得ず、若くは屢ば繰返され得ぬものなる場合、又は其れが行爲者其の人のみに關せずして他人にも關する場合、若しくは行爲者其の人の意思のみにより決せられ得ずして、多衆の意思に依りて決せられねばならぬ場合に於いて、尙更然らねばならぬ。勿論私は、斯くの如き場合にも、右の現實若くは事物に、激大の變替を與ふることの、人生目的の實現に適するか否かは、其の本來の性質上、決して他の人々の異議の有無に依りて決せらるべきものでないことは、之れを認むる。否却つて私は、若我々にして、眞に誤らぬとの確信が有らば、我々は、他の人々の異議に拘らず、一般には其の主張に於いて、所信を曲ぐべきでなく、又事が、自己のみに關し、且自己の意思に依りて決し得べきものなる場合には、其の行爲に於いて所信を實演するに、狐疑すべきでないとさへ考ふる者である。即ち我々は、斯くの如き場合には、自ら反して縮からば、千萬人と雖も、我れ往かう氣慨を有して、固より然るべきである。けれども右の場合に、若事が、他人にも關係し、若くは其れが、多衆の意志に依りて決せらるべきものであるときは、其の結論は、必ずしも斯くの如くであることを得ぬ。我々は、縱ひ其の確信を以てしても、之れを直ちに行爲に移して、右の現實若くは事物に激大の變替を與ふることは、之れを愼しまねばならぬ。蓋既に前に本稿の初頭に掲げられたる私の人生觀に豫定せられたることにして、果して正しからば、國家及び其の他の公認せられたる個體(と言うても殊に團體)の外は、一般に個體、(殊に個々の人類)は、縱ひ正しきを以てしても、自己の信ずるところを、他の個體に強制する合理を有せぬが故である。此のことたるや、右の現實が、代用せられ得ぬもの、若くは繰返され得ぬものなる場合に於いて、殊に然らねばならぬ。國家若くは國體等の如きは、實に斯くの如き現實的實體に屬するものである。

即ち我々は、斯くの如き人生に對して重大なる意義を有する實體に關しては、極めて特殊の場合——例へば國家の如き公認團體の自發的意思、若くは直接投票等の形式に依る全團體員の合致的意思に依る場合——の外は、之れに多大の變替を與ふる擧に出づべきではあらぬ。固より純粹に眞理の確認の方法を以て論ぜば、一の提案に多數者の反對の有る場合にも、其の多數者は、皆悉く欺かれて居ることも有り得べく、若くは其の提案の趣旨を理解し得ぬに出づることも有り得る。從ひて此の場合に、多數者が、眞に其の趣旨を知らば、提案者の考ふるが如くに考へ、又提案者が、之れを敢行せば、其の有效の結果に見て、之れを德とすることも、有り得よう。斯くの如き場合に、右の提案を實演に移さずに葬り去るは、實に人類に對する一大損失であるが如くに感ぜらるる。けれども其れにも拘らず我々は、斯くの如き場合に、單に其の提案に對する多數者の無智と誤謬とを除去する爲に勸説することの合理を得るも、決して之れを直接に行爲に實演することの合理を有し得るものではあらぬ。斯くの如きは、之れを提案者よりせば、實に齒痒く、且物足らぬでも有らうが、然し之れを敢てせぬは、諸自己目的を有する他の人々の人格に對して、當然に拂ふべき尊敬に外ならぬのである。

斯くて私は、一切の實體に對して激大なる變替を與ふることに關して、一方に於いては、人類の無權利を提唱し、而して他方に於いては、其の不正義を指摘した。其の際尙私は、其れが人生觀上の要求に照合して——縱ひ日常の瑣事の場合には、止むを得ぬとして、觀過せられつつあるにしても、然し國家若くは團體等の如き人生に於ける意義の重大なるものに對しては——決して許容せらるべきでないことを力說した。だが然し嚴正に人生觀上の要求より論ぜば斯くの如き行爲は、啻に消極的に許容せられぬと謂はるるに止まらず、寧ろ積極的に之れを阻止せらるべきであると爲されねばならぬ、人生の目的は——既に前に見られたるところに從はば——人類の生々發達を遂ぐるに在る。其れ故に我々は、一方に於いては、其の目的の實現の爲に一切の手段を悉さねばならぬと共に、他方に於いては、人類に變災を加へ、殊に彼れを破滅に導くべき一切の行爲を回避せねばならぬ。縱ひ其の行爲に依りて、多衆の人類が餘り、子々孫々が、塗炭

の苦より救はれ得ようとも、若其の行爲にして、必然に流血の慘を惹起せねばならぬものなる限りは、我々は一般に生命の有する人生觀的意義と、人類の多くの生きようと悶搔く原本衝動の痛切さに鑑みて、何斯くの如き行爲以外の他の行爲に依る同一目的の實現の方法の考究を勸說せざるを得ぬ、況んや之れを歷史に徵するに、凡べて事物に激大なる變替を加ふる行爲、殊に革命は、其の本來の目的が如何に崇高であらうとも、決して豫期したる效果を實現し得ぬことを示すに於いてをや。激大の變替、殊に革命の囘避せられねばならぬは、其れが、必然に——例へば戰爭と等しく——人類に流血の慘を惹起するに由る。勿論流血の目的と爲るべき人類にも、多くは其の責任の問はれねばならぬことも有らうが、然し血を以て血を洗ふは、人生の理論に於いて、決して承認せられ得ぬことと、謂はれねばならぬ。私は、前に理想實現の方法の、積極的であらねばならぬことを言うたが、然し其れは革命をも止むを得ぬと爲したものではないのである。

＊　＊　＊　＊　＊

以上私は、全く純理論的に、國家の攝持すべき理想內容及び實現方法の如何に定立せらるべきかを考究したが、然し此の問題は、實際論的に考究せられても、亦同樣の結論に到達せねばならぬ。今私の上述の純理論的構說に於ける見解を、更に實際論的構說に應しき用語に於いて要約するならば、其れは、思ふに一種の國粹發揚主義に外ならぬとも世られ得よう。國粹發揚主義の用語は、從來其の主張者並びに反對者の言說及び行動に基く誤解より、一般に芳しからぬ聯想を伴ふが故に、此の用語に依りて私の上述の見解を代辯せしむることは、實は私の甚しく之れを好むところではあらぬ。けれども國粹の發揚の用語の、其の本來の意義に於いて、私の右の見解を象徵するものなることは、私自身も、亦之れを認めざるを得ぬ。其れ故に私は、此處に私の上述の理說を以て、一の新なる、若くは正確なる、國粹發揚の思想を代表するものとして、私の旗旛を擁持しようと思ふ。

國粹發揚の思想は、何れの時代、何れの國土に於いても、決して珍らしき主張ではあらぬ。其れは、本來——少くと

其の語義に稟ふ旨趣に於いて――何人にも傾聴せらるべきものであり、又何人にも異議を狹まるべきものではあ　けれども國粹發揚の用語は、其の精確の意義を確定することが、極めて難しい。既に前にも指摘したることの　に、國粹の發揚の如何にして實現せらるるかに關しては、從來之れを高調する者の間にも、未だ正當の理解が、存せ　に似て居る。實に其の際分かたれねばならぬ形態と眞髓、若くは質料と形式とは、之れを如何にして識別し得るかに關して、未だ決して明瞭に定められてはあらぬ。若此の主張を以て、現在若くは過去の形態の保持若くは復興を鼓吹するに在るとせば、其れは、前に見られたる如くに、純粹の保主主義若くは復古主義と同一の誤謬に陷らざるを得ぬ。又若之れを以て、只無差別に目標を將來に採り若くは常に正しきに就くべきを力說するに在るとせば、又――自由主義若くは社會主義等の主張と同樣に――世界に於ける特異性の輕視に導き、國粹發揮の眞義を沒却するに至らねばならぬ(尤も此の後の場合には、縱ひ其れが、世界に於ける各國の特性に重大の價値を附せぬとも――然し事實上、各國に於いて特界性の在する以上は、其の目標の共通に拘らず――又自ら各國に於いて、夫々特徵の有る發達を招來するものなるに似て居る。國粹發揚の意義を斯くの如くに解するは、確に一の達見であつて、其れは、保守若くは復古を以て能事と爲し、又は一時の思付きに基き、徒に採長補短の空名を弄する者に對して、明かに一の警告に値するものならざるを得ぬ。けれども斯くの如き必然的制約に基く各國に於ける特徵の有る發達は、之れを其の主張の趣旨に照合するときは、單なる偶然の結果に外ならぬ。其れは、特に奬勵を俟をずして生來する自然的事實であつて、假りに其の結果に極めて望ましきものが有るにしても、決して其れに依りて、各國の固有する最も善美の特異性――即ち國粹――が最も有效に發揚せられたと爲すことを得ぬ。國粹の發揚の主張は、各國の特異性を、無意識的に制約とするではなくして、意識的に制約とするものである、無差別的に基礎とするものではなくして、差別的に基礎とするものである、放任的に自然の生來する結果

にのみ委ねずに、寧ろ其の望ましきものを計劃的に招致しようと努むるものである。即ち右の場合は、之れを眞正に考ふるときは、國粹の發揮を爲すものであると爲さゞるを得ぬ。其れ故に國粹發揚の主張は、私が右の純理論的考究に**於いて摘示したるが如き要件を具備する場合に於いて、初めて其の眞正の意義を得ると謂はれねばならぬ。即ち國粹の發揮の爲には、**各國は、各々先づ其の素質の眞髓を洞察するところが、有らねばならぬ。斯くて各國は、一方に於いては、一般且抽象的に立てられたる國家理想を、其の長ずるところに適合せしめ、而して他方に於いては、其の慣れたるところに立脚して、之れを確實に且秩序的に育成し且發達せしむる。其處に國粹發揚の眞正の意義が存するのである。其れ故に國粹發揚の思想は—其の眞正の意義に於いて—決して各國が、各々偏頗の理想を撮持し、且實現すべきことを勸說するものではあらぬ。却つて其れは、各國に於ける理想の共通性を容認しつつも、之れを、有效に實現しようが爲に、必要の注意を用ふべきことを主張するものである。斯くの如きは、各國の根柢の深き長所を、效果の多き方法に於いて活用するものであつて、素より其れの趣意に關しては、人々の間に甚しき異議の有るべくも思はれぬ。

　國粹の發揚の主張！其れは、新なる意義に於いては、正しく不動の眞理を表白すると見られねばならぬ。世界の萬象は皆異る。萬象は皆異るが故に、爰に各々に異りたる特長が有り、又各々に異りたる特長が有るが故に、爰に世界の形相に無限の旨趣を與ふる。萬象が皆等しからば、世界は、爰に其の複雜且多態の美容を失ひて、索漠たる無味の一樣性に陷り、又萬象が、皆其の特長を欠かば、世界は、爰に其の百花爛亂の媚態を失ひて、錯落たる不快の一混塊に隤するであらう。世界は、萬象が、各々其の異りたる特長を發揮すると共に、其の光彩を加へ、然らざるときは、忽ちに其の清新の面目を失ふ。固より一方に於いては、萬象の異ることは、其れ等の間に、粗隔と排擠とを惹起せしめぬでもないが、然し又他方に於いては、其れ等の間の親和と協調とは、之れに依りて招致せしめらるるども、考へられ得る。其れ

故に若各國に特異性、殊に國粹なるものが、認めらるるならば、此の特異性殊に國粹の發揚は、極めて望ましいと謂はれねばならぬ。況んや國粹發揚の主張は、其の眞義に於いて他國の排斥を欲するものであらぬが故に、其れの實演は、國家相互の長短を相補ひ、相扶けしめ、斯くて人類に各々其の理想を遂げしめ、世界を樂園に轉化せしむべき動因を爲すに於いてをや、國粹發揚の思想を眞正に理解せば、恐らくは何人も、從來の國粹發揚主義に聯想しつつある害惡の、杞憂に屬することを知るであらう。

以上私は、實際論的に、國家の據持すべき理想內容及び實現方法の、國粹發揚の思想に依りて導かるべきものであることを高唱した。今我々の論構を周密ならしめようと欲せば、我々は、更に進みて、此の思想が時代の必要、思潮の影響、隣國との交涉、列國對峙の情況、世界の趨勢等の顧慮に於いて、如何に其の存在理由を主張し得るかと見ねばならぬが、其れは、本稿の主要の目的に遠かるが故に、此處に之れを措く、但し此れ等の事情の顧慮に於いて――其れは、利害得失の問題に外ならぬが、(と言ふは、實際論的考究は、利害の較量に外ならぬが故に)――一般に我々の常に銘記せねばならぬことは、人々が、自己若くは自國の有するものを輕侮し、只徒らに他人若くは他國の有するものの模倣に始終することの、自己若くは自國にとりて、大損失を意義すると云ふことである。けれども此の點も、既に多くの識者の指摘するところに屬するが故に、今は立入りて之れを論證することを爲さぬ。

* * * * *

斯くて私は、純理論的に且實際論的に、國家の據持すべき理想內容及び其の實現方法の、如何に定立せらるべきかを考究し、而して其の結果として爰に一種の國粹發揚の思想を信奉するに至つた。國粹發揚の思想には、百川が、皆朝宗する。其れは、一面に於いては理想を憧憬し、理想の國家を豫想するが、然し又他面に於いては現實を尊重し、現實の

國家を肯定する。現實の國家の肯定は、又實に其の現實の體制の肯定に外ならぬ。勿論國粹發揚の思想は、理想の國家を豫想し、理想の權威を認むるものであるが故に、現實の國家及び其の體制の不斷の改善を企圖するものであろけれども、然し此れ等の理由の無き破壞若くは變革を拒む點に於いて、現實の國家及び其の體制の肯定の精神を示すものである。其れ故に國粹發揚の思想は、又實に現實の有らゆる國家が爲しつつあるが如き、國家の自己肯定をも、是認すると謂はれ得ねばならぬ。斯くの如くして國家が自己肯定を爲し得るとせば、國家は、果して自己及び自己の體制を否定する諸般の思想及び行爲に對して、如何に莅み得べきか？　此の疑問が提起せらるるに至りて、我々は、此處に初めて、我々の論構の自然の行程に於いて、掲げられたる標題の討議に立入るを許さるるに至つた。蓋右の疑問は、即ち思想取締の理想を、其の内容の一部に豫想して爲されたるものであるが故である。

思想取締の理想を確定するには、我々は、既に本稿の初頭に述べたるが如くに、之れを純理論と實際論との二に分かちて、取扱はねばならぬ。今純理論は、人類の叡知に立脚する。其れに依りて確立せらるる絶對的理想は、縱ひ今日假に採用せられ、實現せられ得ぬにしても、然し其れへの到達は、人類の永遠の課題と爲るものである。之れに反して實際論は、人類の聰明を基礎とする。其れに依りて定立せらるる相對的理想は、縱ひ明日に於いて多少の變改を免れ得ぬにしても、然し―少くとも過渡期に於いて―人類の沒落を避くるが爲に、必ずや採用せられ、遵由せられねばならぬものである。我々は、先づ純理論に就きて、其の絶對的理想の如何に立てらるべきものなるかを討究し、然る後に實際論に於いて其の相對的理想の如何に有るべきかを考究しようと思ふ。

ロ　純理論的見地より見たる思想取締の理想

茲に私は、本稿の二のハに於いて、其の同じく二のイ及びロに展開せられたる基礎理論より、思想取締に關して

せらるべき結論を抽出し、斯くて私は、先づ第一に、思想取締の主體の、唯一的若くは獨占的に國家であるべきを謂ひ、次ぎに第二に一般に思想取締の可能と、及び其の限界の――少くとも主義としては――心裡の思想にも及び得ることを定め、更に第三に、思想取締の實現の態度の、原則として自由であるべきを見、且又少くとも一定の思想に對しては、右の取締の除外せられねばならぬことを確めた。此れ等の三の結論に於いて、今イは、我々の當面の問題の解明に關係がないが故に、之を考察の範圍外に置く。ロ及びハに於いて、ハは――元より其れは、一定の思想以外のものに對して、何等の決定を示すものであらぬが、然し少くとも其の精神に於いて一見ロと矛盾するものの如くに思はるゝが、實は決して然うではあらぬ。蓋後者、即ちロは、反理想的思想に就きて、之れを謂ふものであるに反して、前者、即ちハは、異理想的思想に就きて、之れを謂ふものであるが故である。今異理想的思想と反理想的思想とは、其の相互の區別が必ずしも明確ならず、從ひて又最も普通に兩者の間に、概念的混同の行はるるが、見られ得る。けれども異理想的思想と反理想的思想とを明別すること、其處に一般に思想取締の問題を解決する鍵鑰が存せねばならぬ。其れ故に私は、我々の當面の問題を解決しようが爲に、此處に所謂反理想的思想と異理想的思想との區別、否一般に反理想的と異理想的との區別の、何たるかを明かにする必要を有する。

抑も國家の有する支配（若くは命令及び强制）、即ち國權の發動は、一般に國家の有する任務の實現に對する關係に於いて、二に分かち考へらるる。一は、其れが積極的に國家の任務の實現を促進するを目的として行はるる場合であつて、例へば産業の保護の爲に或は肥料の取締を爲し或は種牛馬の檢査を爲し、若くは牛馬の去勢を行ふが如きは、即ち是れである。但し此の種の目的の爲にする國權の發動は、近代の國家――殊に立憲國――に於いては、單に僅少の事例を有するが故に、我々の問題の討議には、暫く之れを無視することとする。他は、其れが、消極的に國家の任務の

實現に對する障害を除去するを目的として行はるる場合であつて、之れに次ぎの二を分かち考へ得ねばならぬ。其の一は、專ら若くは主として、必要の狀況を實現しようが爲に爲さるるものであつて、例へば、(イ)火災洪水其の他の天災事變に際して、目前の危害を防禦する爲に、(ロ)個體の生命、身體若くは財産に對し、目前の危害が有るに依りて、之れを救護する爲に、(ハ)又は一般に犯罪行爲に及ばうとする者に對して、之れを制止する爲に、(ニ)其他一般に止むを得ざる急迫の必要に依りて、個體の身體若くは財産に一定の制限を加ふるが如きは、即ち是れである。但し此の場合は、國權發動の常則の方法であらぬが故に、我々の問題の考究には、暫く之れを措く。其の二は、個體をして其の義務を實現せしむる爲に爲さるるものであつて、其れは、又個體の行爲に對する關係に於いて、二に分かち考へらるる。一は、積極的に個體の行爲を誘發する場合であつて、例へば疫牛、狂犬等の撲殺の强制、種痘の强制、就學の强制、其他諸般の義務殊に納稅の强制等が即ち是れであり、而して他は、消極的に個體の行爲を阻止する場合であつて、例へば不良井水の飲用禁止、病毒汚染物件の使用禁止、人力車其の他の賃錢の制限、密酒造、密輸入等の取締建築物の築造法の制限、郵便、電信等の營業禁止、毒藥、劇藥等の販賣禁止、兇器携帶の禁止、其の他一般に犯罪の禁止等は、即ち是れであらねばならぬ。之れを以て、國權の發動する固有且常則の場合であるとする。古來よりの、及び今日の國權發動は、主として右の如き目的の實現の爲に行はれ、且つ行はるるに外ならぬ。

國權の發動が其の固有の目的に於いて常則的に行はるゝ場合、即ち之れを評言せば、國權の發動が、國家の任務の實現に對する障害の除去の爲に、個體をして一定の義務を實現せしめやうとして、行はるゝ場合の中にて、其れが、個體の行爲を誘發する爲になさるゝ場合は、我々の問題の解明に直接の關係を有せぬが故に、此處に之れを省く。國權の發動が、個體の行爲を阻止する爲になさるゝ場合——其れの中には、我々の考究の目的たる思想取締も、亦包含せらるゝ

が——は、其の之れを阻止するが爲に用ひらるゝ手段との照合に於いて、之れを次の二つに分ち考ふることを得る。其の一は、個體が、其の義務を履現せぬ場合に、強制執行の方法を採らうとするものであつて、又之れに間接強制(例へば執行罰)と實力強制(例へば直接強制)との二を分かち得る。けれども之れ等は、共に我々の問題の解明の主要の方向に屬せぬが故に、今は暫く之れを措く。其の二は、個體が其の義務を履現せぬ場合には、制裁の方法に依らうとするものであつて、之れにも又夫の二つが分かち考へられ得る。一は、國家が、右の義務の不履現を以て、國家の本來の任務たる人類の生々發達の理想の實現に本質的障害を與ふると爲して、之れに制裁を附する場合であつて、此の場合の制裁は、之れを一般に刑罰と稱する。他は、國家が、右の義務の不履現を以て、國家の本來の任務たる右の人生目的の實現に本質的障害を與へぬも、然し尚その實現行爲に本質的障害を與ふると爲して、之れに制裁を附する場合であつて、此の場合の制裁は、一般的の名稱を有せず、其の種類に依りて、或は懲戒罰、或は秩序罰、或は警察罰、或は財政罰等と、種々に呼唱せらるる。今我々の當面の問題たる反理想的及び異理想的の區別の解明は、實に其の中の前者、即ち刑罰の客體たる、個體の義務不履現の行爲を眼中にしてなさるべきものであらねばならぬ。

一般に刑罰の客體たる個體の義務不履の行爲は、制定法上、之れを犯罪と稱するものであるが、其の際國家は——即ち制定法上は——此の犯罪の中に、決して反理想的と異理想的との區別を認めるものであらぬが故に、普通には犯罪に斯くの如き區別の存することは多く看過せらるる。けれども所謂犯罪に右の反理想的と異理想的との區別の認められ得るか否かは、實は——國家の任務たる右の人生目的の實現に、何が本質的障害を爲すかの問題と等しく——本來主觀的に國家の認むる、若くは認めぬが儘に決せらるべきものではなくして、却つて客觀的に理論の命ずるが儘に定めらるべきものであらねばならぬ。然るに今之れを純粹に理論の問題として之れを見ば、國家が刑罰なる制裁を附する行爲、即ち

犯罪――其れは、主として刑法の中に規定せらるる――の中に、反理想的と異理想的との二の分かち考へらるることは、恐らく疑を容れぬ。所謂反理想的犯罪とは、其の眞髓に於いて人類の生々發達の理想の實現に障害を與へ、而して又其れ故に國家の其れの實現の爲に認むる特定の理想に背反する行爲であつて、而して所謂異理想的犯罪とは、其の精神に於いて右の理想の實現に障害を與へぬも、然し國家の其れの實現の爲に認むる特定の理想に背反する行爲であると爲され得る。例へば之れを刑法の定むる犯罪に就きて徴するに、普通の犯罪、即ち横領、詐欺恐喝、強盜、竊盜、誘拐、傷害、殺人、誣告、瀆職等の如きは、殆んど例外の無く前者に屬し、之れに反して特殊の犯罪、即ち騷擾、内亂等の如きは、時として若しくは主として後者に屬するが如きは、即ち是れである。

反理想的犯罪及び異理想的犯罪は、共に或は行動の動機に關し、或は其の結果に關する。兩者は、何れも社會否國家生活に於いて必然的に守らねばならぬ制限の違反であるが、然し其れにも拘らず、我々は、右の兩者が、其れ等の本質に於いて根本的差異の有ることは、之れを觀過することを得ぬ。反理想的犯罪は、啻に一定の社會殊に國家に依りて認められたる特定の理想に背反するのみならず、一般に――客觀的且必然的に想定せらるべき――理想を追求せぬ。其れ故に其れは、犯罪であつて、且沒理想的行爲である。之れに反して異理想的犯罪は、一定の社會殊に國家に依りて認められたる特定の理想に背反するけれども、然し兎に角に客觀的に且必然的に想定せらるべき理想を追求する。其れ故に其れは、犯罪であるけれども、然し合理想的行爲である。勿論右に所謂客觀的且必然的に想定せらるべき理想なるものは、實際上、人類の把識に依りて定まるものであるが故に、之れを事實に就きて謂はば、一の者の理想とするところは他の者に依りて、反理想とせらるることが、有り得ねばならぬ。其れ故に反理想と異理想と、從ひて又反理想的犯罪と異理想的犯罪との區別は、一見之れを分かち得ぬとせられ得るにも似て居る。けれども斯の如きは、只單に事實上の區

別の困難を語るものであつて、決して論理上の區別の不成立を示すものではあらぬ。論理上は、反理想は、異理想でなく、異理想は反理想でなく且其の間に決して混同せられ得ぬ明確の區別の存することは、既に述べたところに依りて、自ら明かであらねばならぬ。然のみならず此の場合の事實上の困難は、實は、個々の人類の把識の、相互に矛盾し得るを謂ふに過ぎぬ。若夫れ一定の社會を眼中にして謂はば、何が異理想であつて、何が反理想であるかに關しては、縱ひ漠然ではあらうが、兎に角定まれる社會意識の存するは、疑はれ得ぬ。

一般に理想は、形式的——即ち前に所謂上位概念的——には、性質上、未來永劫を通じ、無邊六合を貫きて、確然不動たるべきものであるけれども、然し質料的——即ち前に所謂下位概念的——には、性質上、變遷と異別とを許さねばならぬものであるが故に、從ひて一般に何が理想的行爲なるかの問題の客觀的且必然的解決も、時代と場所との差別に依りて、多少の相異の有るは、蓋止むを得ぬ。此のことは、決して人類が、各々其の形容の異るが如くに、其の判斷を異にするものであるが故に、斯く結論せられねばならぬと謂ふではあらぬ。否却つて——人類が、各々其の形容の異るが如に、其の判斷を異にすることは、實に悲しむべくも然し否定せられ得ぬ事實であるが、然し今暫く此の事由を除外しても——私は、此處に、質料的に定めらるる理想の性質上、更に上位の概念を豫想する理想的行爲の、時代と場所との制約に、服從せざるを得ぬことを謂はうとするに外ならぬ。既に理想的行爲が、本來斯くの如き制約を免れ得ぬ性質を有するものであるとせば、國家が、其の制定法に於いて暗示する理想行爲に關する見解に至つては、尚更に時代と場所との制約に服從することが、大であると謂はれねばならぬ。蓋制定法は、其の成立に於いて、常に其の作成者、即ち個々の法令の起草者の存在を前提とするのであるが、個々の法令の起草者は、其の知識感情及び意思に於いて——啻に起草者の相互の間に於いてのみならず、同一人であつても——決して時代と場所との制約に超越し得るものでないが故で

ある。斯くの如くして國家が、其の制定法に於いて、豫想する理想的行爲は、時代と場所との差別に依りて、決して同一であり得ぬ。其れ故に又國家が、右の理想的行爲の豫想の下に定むる犯罪の何たるかも、亦時代と場所との差異に依りて、同一であり得ぬは、元より謂ふまでもあらぬ。然るに斯くの如く一般に犯罪が、時代と場所との制約に服從するものとせば、其の犯罪の二類として、等しく國家が其の制定法に於いて暗示する理想への背反であるところの反理想的及び異理想的犯罪も、亦時代と場所との差異に依りて、變遷と異別とを許すべきは、亦恐らくは論を俟たぬ。此の點に於いて兩者の性質は、少くとも論理上全く共通して、異るところが有らぬ。否實に其れのみかは之れを事實的に考徴せば、理論上、決して容認せられ得ぬ如く思はるる反理想的行爲は、其れが必ずしも國家若くは立法者の利益を脅すに限らぬが故に、例へば墮胎、決鬪、仇討等の如くに——一般に時代的及び場所的相異の相當に大であるを見るが、之れに反して理論上、寧ろ容認せられ得ると思はるる異理想的行爲は——其れが一般に反理想的行爲よりも一層直接且激烈に國家若くは立法者の利益を脅すが故に——却つて嚴重に禁止せられ、且時代的及び場所的相異も、比較的に小なるを通例とするに似て居る。

だが然し反理想的行爲若くは犯罪は、縱ひ時代と場所とに依りて多少の相異を許し得るにしても、然し其れが、一[illegible]に理想の實現を目的とせぬ點に於いて、苟も正常の判斷力を有する者は、之れを敢へてするに躊躇する。尤も今日、[illegible]らゆる文明國に於いて犯罪と認めらるる殺人も、——例へば其れが生贄の慣習若くは初産兒を食ふ慣習等の形式にて現れたるときには——往時に於いては、今日に於いても尚原始社會に於いては、或は然うであらう、必ずしも犯[illegible]見られず、否時としては其れが、却つて合理想的行爲として見られたるが如き形跡が存するけれども、然し——其れ一定の迷信に基く理想の實現を意圖するに出でたるものであつて——其の當時に於いても、其の[illegible]

を得ぬとせられたにしても、決して望ましきことと爲されたではあらぬことと思はるる。之れに反して異理想的行爲若くは犯罪は、啻に時代と場所とに依りて、多少の――反理想的行爲若くは犯罪の場合よりも、或は少からうが、然し兎に角に――相異が有り得るのみならず、又實に一般に理想の實現を目的とするものであるが故に、正常の判斷力を有する者も、時としては必ずしも之れを敢へてするに躊躇せぬ。例へば一部の人々が、無政府主義、共産主義、社會主義等の革命的思想の下に、現實の國家、若くは私有財産制度、資本階級等の存在を破壞しようとするに出づる犯罪は――縱ひ其の主觀的の動機に於いて、時に不純のものが有り得るにしても、然し其の客觀的の趣旨に於いて――決して沒理想的であると謂はれ得ぬが如きは、即ち之れを示す。何人も、彼れ等を以て正常の判斷力を有せず、若くは心に理想を滅却して只徒らに行に狂暴であると速斷することを許されぬ。否實に個人的心理情況よりせば、彼れ等は――時としては虛妄であり、又時としては錯誤であらうが――時代の先覺者としての強き自覺を有し、社會殊に國家よりの迫害に接しては、殉教者たる悲壯の感慨に燃ゆるを常とするものである。即ち彼れ等の行爲は、縱ひ犯罪とせられた、若くはせられねばならぬにしても、尙一般に理想の實現を目的とする。只彼れ等の其の行爲に於いて實現しようとする理想は、國家の其の認むる制度の支持に於て攝持し且承認する理想と同一ならぬと、言はれ得るに過ぎぬ。恰も此の點に於いて、異理想的行爲若くは犯罪と、反理想的行爲若くは犯罪と、其の本質的差異を見出さざるを得ぬものである。

今反理想的行爲若くは犯罪の場合は、我々の當面の問題の究明に重要の關係が無いが故に、此處に之れを措く。之れに對しては、國家が其の固有の任務上、國權を行使して可なるは――と言うても國家が一切の反理想的行爲を罰することは、必ずしも合目的的でなく、之れを罰するには、只其の本質的のもののみに限る必要は、或は有らうが――素より疑を容れぬ。之れに反して異理想的行爲若くは犯罪は我々の當面の問題に緊密の關係を有するが故に、此處に之れを充分

に把持し且考究せねばならぬ。然し我々の當面の問題は、思想殊に異端思想に對する國家の取締に關するものであつて、行爲其の物の討議ではあらぬけれども、然し一般に思想は、行爲に結果し、而して行爲は、思想を前提とせるが故に兩者は、決して單に一を採りて他を顧みぬ方法において、分明に解決せられ得ぬものであるが故である。

顧ふに此の問題の解明の爲めには、我々は、先づ問題の所在の那邊に存するかを、知得せねばならぬ。既に見られたるところに從はば、異理想的行爲若くは犯罪は、一般には決して理想を追求せぬと爲され得ぬものであつて、其れは只其の理想を實現する手段に於いて、國家の見るところと異るに過ぎぬものであつた。即ちそれは、理想の形式的――上位概念的――意義に於いて、國家と同一の理想、（即ち例へば人類の生々發達の理想）を追求するが、然し其の質料的――下位概念的――意義に於いて、國家と別異の理想、（即ち例へば國體若くは社會制度上の他の理想）を、把持するものに外ならぬ。其れ故に今若我々が異理想も亦一の理想であるとの形式的見地に立つならば、我々は、異理想的行爲も、其の趣旨の眞髓に於いて、又容認せらるべきことを、結論せねばならぬ。何故ならば既に國家が、其の諸多の制度の維持に於いて、一定の理想の實現を强行し得るならば、我々は同一の論理に於いて、他の者も、國家と同一の理想の實現の爲に、××××××××××××××、××××××××××。然のみならず今若我々が然し理想は異るとの質料的見地に立ちて、之を論じても、我々は又原則として異理想的行爲が、一概に×××××××××××××××××××××××ならぬ。何故ならば國家の其制度に於いて撥持する理想と、他の者の最良と信ずる手段に豫想せらる理想とは、縱ひ其の間に一者が他者よりも一層合理的であると爲し得ることが有りても、然し其の他者は、決して直ちに非合理的、否殊に沒理想的と爲さるべきものであらぬが故である。勿論實際に於いては我々は、斯くの如き場合に兎角相對的の問題を絕對的の問題に移して、一層合理的を合理的と爲し、又一層非合理的を非合理的と爲

す言辭を弄することが有るけれども、其れは、單に語句の誤用であつて、事の眞相を示すものでないことに想到せねばならぬ。其れ故に異理想的行爲——異理想的思想に至りては、尚更であるが——は、理論上、原則として其の存在××××××、從ひて又其必然の結論として、國家も、亦之れを×××××であると謂はれ得ねばならぬ。だが然し等しく異理想的行爲と謂うても實は其れに二の場合が、分かち考へられねばならぬ。一は、其れが——國家の支持する諸多の制度を破壞することによりて——國家の擁持する理想に變革を試むるものであつて、而して他は、其れが初めより之れに斯くの如き變革を試みぬ場合である。此れ等の二つの場合を分明に區別せねば異理想的行爲に對する國家の取締りの問題は、到底正當に解決しせられ得ぬと謂はれねばならぬ。

然るに此れ等の二つの場合の各々に對しては、既に我々の解答が、用意せられてある。先づ第一に、後の場合、即ち異理想的行爲が、國家の支持する制度を破壞することの無く、從ひて又國家の擁持する理想の存在を危くせぬ場合には、右に確立せられたる原則に從ひて、國家が之れを承認すべきであると謂はれねばならぬ。何故ならば此の場合には、與へられたる假定に從ひて、國家の支持する諸制度と右の異理想的行爲の結果とは、同時に兩立し得るものであるが故に、國家は、其の行爲若くは其の行爲の結果を——縱ひ監視する必要が有るにしても、然し——抑壓する必要の無きが故である。次ぎに第二に前の場合、即ち異理想的行爲が、國家の支持する制度を破壞することに依りて、國家の擁持する理想の存在を危くする場合には、其の本質的に國家の任務の遂行を害する限りに於いて、國家は、之れを犯罪として、豫め之れを禁止し、且其の違反に際して、刑罰を科し得ることは、疑を容れぬ。何故ならば此の場合には、國家の支持する諸制度と右の異理想的行爲の結果とは、互に相拒斥すべき性質のものであるが、既に私が——前に國家の擁持すべき理想及び其の實現方法の定め方を確立する際に——見たるところにして、幸ひに誤が無くば、國家は、自己及び自己の支

持する制度を肯定するに、充分の合理を有するに反して、國家以外の他の者、殊に個人は、斯くの如き事項に——他の多數者の同意を得ずに、妄りに一個の私見を以て——激大の變替を與ふることに、毫末の合理を有せぬが故である。今之れを事實に徴するに、右の二つの場合には、有らゆる國家は、(否少くとも今日の文明國は)、右の夫々に抽出せられたる結論への一致に於いて、行動しつつあるに似て居る。即ち第一の場合には、國家は、必ずしも異理想的行爲の抑壓を試みぬ。所謂新らしき村ファランステリ等の許容せられるは、之れを示すと謂はれねばならぬ。次ぎに第二の場合には、國家は、之れを犯罪として、其れに違反する場合には、必ず刑罰を科する。諸般の革命行爲、不敬行爲等の處罰せられるは、之れを示すと謂はれねばならぬ。即ち異理想的行爲に對する國家の取締が如何にあるべきかの問題に關しては、私は——縱ひ其の範圍若くは强度に就きて、多少の異論を有し得るにしても、然し少くとも其の主義に於いて——全く國家の現實の方針を是認しようとするものに外ならぬ。

斯くの如くして私は、右に異理想的行爲に對して、國家の取締るべき方針の何たるかを決した。けれども今若我々が、問題を異理想的行爲より異理想的思想に移して見たらば、果して如何であらうか？　國家は、異理想的思想に對しても、果して異理想的行爲に對すると同樣の處置を採り得るであらうか？　斯くて我々は、漸くにして我々の標題の問題の討議に立ち入るを得るに至つた。だが然し我々は、其の前に問題の性質を正當に且明瞭に理解し得るが爲に、一般に國家に依りて取締らるべき思想の何たるかに就きて、知得し置くを——縱ひ必要とせぬにしても、然し——便利とする。

一切の思想は——と言つても、之れを嚴密にせば、問題の取扱を簡明にするが爲に、只單に獨存者に關する、本來的處理方法に據る、思想の一切のみを眼中にするのであるが——一方に於いては、其れが、行爲の指導に直接の關係を有

せぬ考察方法に於いて成立するか、若くは其れに直接の關係を有する考察方法に於いて成立するかに從ひて、純正學的思想と運用學的思想との二に分かれ、而して他方に於いては、其れが、理想の實現に關係せしめぬ考察方法に於いて成立するか、若くは其れに關係せしむる考察方法に於いて成立するかに從ひて、自然學的思想と文化學的思想との二に咬れねばならぬ。自然學的及び文化學的思想は、純正學的及び運用學的思想と、夫々互に獨立する別個の標準に於いて分かたれたるものであるが故に、其れ等が、論理上、後二者と互に相交錯し得るは、諡疑を容れぬ。けれども事實上は、自然學的及び文化學的思想は、主として純正學的方向に於いてのみ發達したるが故に、運用學的方向に於いて有の二者を分かつことは、必ずしも實用に適せぬ。其れ故に今若既成思想の分類の目的よりせば、一般に自然學的及び文化學的思想は、純正學的思想の二類として、之れを認むることを得るけれども、然し運用學的思想の中には、之れを認むる實益が、少いと謂はれねばならぬ。今純正學的思想は、其の自然學的たると文化學的たるとを問はず、一般に多く思想取締の客體とせられず、從ひて又我々の問題の解明に、必ずしも重大の關係を有せぬが故に、此處に之れを省く。但し純正學的思想に在りても、例へば近代の初めに於いて、天動說の如き自然科學的思想が、嘗つて教權者の忌諱に觸れ、又例へば近時に於いて唯物史觀の如き文化科學的思想が、往々にして支配者の猜忌する行動を招來するに似て居るが、其れの理由は、之れを次ぎに明瞭にせねばならぬ。之れに反して運用學的思想は──必ずしも學問的でないが、然し我々の問題を解明する爲の便宜の下に──之れを國家の承認する國家若くは社會の諸多の制度に關せざるものと及び此れ等に關するものとの二に分かち考ふることを得る。今前者、即ち國家若くは社會の諸多の制度に關係せぬ運用學的思想──其れの中には、事物若くは人類の使用若くは改良等に關する諸種の思想を包含するのであるが──は、一般に原則として思想取締の客體とせられず、從ひて又我々の問題の解明に、必ずしも緊密の關係を有せぬが故に、此處に之れを略

す。其れ故に一般に思想取締の客體と爲り、從ひて又我々の問題の解明に、而も且藝術の關係を有するものは、實に國家の承認に繋る國家及び社會の諸多の制度に關する運用學的思想、詳言せば其の中の異理想的思想に外ならぬ。

純正學的思想も、將運用學的思想も、何れも眞理の探究を目的とし、且其れへの努力の表出であることは、固より論を俟たぬ。**而も前者が、思想取締の客體と爲らず、後者のみが、獨り其の客體と爲るは、勿論一方に於いては――既に**私が他の機會に於いて之れを指摘したるが如くに――前者の價値闡明を目的とするに反して、後者の價値採擇を目的とするにも由らうが、又他方に於いては、實に前者に關しては、思想取締の主體たる權力者殊に國家が、一定の意見を有せぬに反して、後者に關しては、之れを有するに出づると考へられねばならぬ。天動說――否時としては進化論さへも、亦然りであつた――の甞つて權力者の忌諱に觸れたるは、固より一方に於いては、其れが、既成宗教の獨斷的前提を撥沒することに依りて、其の宗教の承認する諸多の制度（若くは其れ等の制度の支持に於いて豫想する價値採擇）を動搖せしむることにも在らうが、然し他方に於いては、我々は、其の際右の權力者が、其の問題に關して、既成宗教の獨斷的前提なる一定の意見を有したることに注意せねばならぬ。次ぎに運用學的思想に於いて、國家及び社會の諸多の制度に關係せぬ思想も、此れ等に關係する思想も、等しく價値採擇を目的とし、且其れ等に關して、思想取締の主體が、一定の意見を有する場合に屬するは、初めより言を俟たぬ。而も前者が、思想取締の客體と爲らず、而して後者が、獨り其の客體と爲るは、勿論一方に於いては、後者が多衆の生活を對象とする思想なるに反して、前者が然らぬにも出でようが、然し又他方に於いては、此の場合に於いては、右の思想取締の主體たる權力者殊に國家が、前者に關しては、只漠然たる意見を有するに反して、後者に關しては、明確なる意見を有するに基くと考へられねばならぬ。人生目的の實現を確保すべき任務を有する國家が、時に前者に對して、苛酷と思はるる峻嚴の取締を爲すに反して、後者に

對して――例へば國家が、往々不健全と爲す利己主義、耽美主義、超人主義等の思想に對しても――必ずしも斯くの如き取締を爲す擧に出でぬは、素より一方に於いては之れを取締ることの不能若くは不得策であるとせらるるにも在らうが、然し國家が、其れに就きて――少くとも持續的に――明確の意見を有せぬに出づると解するを以て、一層適當としよう。

斯くの如くして思想取締の主體たる權力者殊に國家は、自己の承認する、且其れに就きて明確の意見を有する國家若くは社會制度に關する思想殊に運用學的思想に對しては、其れが、異理想的思想なる限り、決して其の取締を假借せぬことを以て通常とする。所謂科學的主義の基礎を爲す唯物史觀――餘剩價値論も、亦同樣であるが――の如きも、其れ自身は、純正學的思想であつて、決して本來國家の取締の客體と爲るべきものではないが、而も其れが、往々にして危險思想を以て取扱はるるは――固より其れの信奉者が、此の純正學的思想を直ちに運用學的思想に轉ずると云ふ事實にも由るけれども、又實に――其れが、右に述べたるが如き要件を具備して、權力者殊に國家に依りて、望ましからぬと思惟せらるるに基かねばならぬ。だが然し問題は、權力者殊に國家が――縱ひ其れが、理論上、人生目的の實現の爲に、特殊の地位を認めらるべきものであるにしても、然し――他の者殊に個人に對して、果して右の如き事項に關して、自己の意見を強ひ得べき合理を有するか否かに在る。既に確立せられたるところに從はば、國家は、多數者に關係の有る事項、從ひて又多數者の意思の參與を要する事項に關して、個人が、一個の私見を以て擅に其の破壞を企つると云ふが如き、異理想的行爲を禁止し、且抑壓し得るものであつた。けれども斯くの如き結論は、右と同一の事項に關する異理想的思想に關しても、果して必然的に抽出せられ得る、且抽出せられねばならぬものであらうか？曰く否。斷じて否。此處には、我々は、行爲と思想とが、對象論的に同一視せられ得ぬと云ふ點だけに着目しても、思想に關する問

題の解決の、行爲に關する其れと異らねばならぬことに、氣付くであらう。

國家が、一般に思想――と言つても、勿論理想的思想に限ることは、自明であるが――を取締るべき合理を有せぬことは、之れを次ぎの二方面より論述し得ねばならぬ。

（一）、曩に私は、國家の撮持すべき理想及び其の實現方法の定め方を確立するに當りて、個人が、多數者に關係の有る諸多の制度に、激大の變替を加ふべきであらぬことを力說したが、其の際私は、右の理由として、一方に於いては、人類の思惟の兎角に誤り易き點を擧げ、而して他方に於いては、一個の意思を以て多衆の生活を――其の同意を得ることの無くして――激變することの、他の人類の尊嚴を無視するものなる點を擧げた。今是れ等の二の理由は、國家の思想取締に關しても、亦自ら適用せられ得ねばならぬ。何故ならば國家と雖も、亦誤ることが有り得べく、國家と雖も、亦多衆の意思を尊重せねばならぬ――少くとも之れを無視し得べき根據を有せぬ――が故である。其れ故に若一の思想にして、多衆の間に普及せらるるに至らば、國家は、之れを尊重せねばならぬが故に、素より妄りに之れを抑壓し得ぬのみならず、又縱ひ其の思想が、單に少數者に依りて支持せらるる場合であつても、國家は、誤り得る可能が有るが故に、恣いままに之れを禁止することを回避すべき理である。即ち國家は、一般に思想に對しては、之れを取締り得るものではあらぬ。此のことたるや、素より通常の思想に對しても、適用せられねばならぬが、又實に國家の現に猜忌しつつある、彼の國家若くは社會制度に關する運用學的――異理想的――思想に對しても、妥當し得ねばならぬ。勿論國家は、其の承認する國家若くは社會の諸多の制度に關して、充分の確信を有することが必要ではあるが、然しされぱとて國家は、一方に於いては、自己の確信も誤り得ることを知りて、謙抑の態度を持する必要が有り、又他方に於いては、如何なる物、如何なる形式も、改良の餘地が有り、若くは他の物、他の形式も、美點の有り得ることを知りて、異理想的

思想にも、傾聽する雅量が有らねばならぬ。國家の撮持する理想は、必ずしも最善なるに限らず、又縱ひ其ても、事情の變遷に從ひて、其の資格を失ひ得ること、其處に異理想的思想の高調せらるべき機會が有り、又其の取締らるべからざる理由が、有ると謂はれねばならぬ。

（二）、國家の異理想的思想取締の問題を嚴正に理解しようと欲せば、我々は、之れを國家の異理想的行爲取締の問題若くは反理想的思想取締の問題との混亂より、救出せねばならぬ。既に見られたるところに從はゞ、異理想的行爲の場合には、個人が其れに依りて實現しようとする結果は、時としては國家の其の承認する制度の支持に依りて撮持する理想の否定に導く事があり得る。其れ故に斯の如き場合には、自分及び自己の承認する制度を肯定し得べき合理を有する國家は、自己及び右の制度の保全を許され、且之れに於いて其の理想の存續を許さるゝも、多數者に關する事項に激大の變革を與へ得べき合理を有せぬ個人は、縱ひ其の理想の存續を許さるゝにしても、然し右の行爲の實演を許されぬ。元來異理想的行爲は、一般に人類の希望すべき理想に依りて支持せらるゝに拘らず――而して其れの原則として拒斥せらるべきものであらぬことは、既に前に之れを見た――個人が、右の場合に於いて、其の强行の合理を有せぬは、實に其の之れを强行することが、國家の承認する國家及び社會の制度と兩立し得ぬに由らねばならぬ。其の兩立を許す場合に、個人の異理想的行爲の、容認せらるべきものであり、且容認せられつゝあることは、既に前に之れを述べたる如くである。今思想は――縱ひそれが、國家の撮持する理想に背反するものであつても――其れ自身の性質に於いて、國家の撮持する理想を覆沒するものではあらぬ。其れ故に異理想的思想の一般に其の存在の容認を主張し得べきは、元より言を俟たぬ。若人々が、其れにも拘らず、異理想的思想も、一般に國家の取締に服せねばならぬことを考ふるならば、其れは、全く異理想的思想を、右に見られたる異理想的行爲の特殊の場合と混同したるでなければ、又實に異理想的思

想を、反理想的思想との混淆に於いて見たるに外ならぬ。反理想的のものは、其の行爲たると思想たるとを問はず、國家は、之れを抑壓し得る。其れは――既に明かにせられたる如くに――人類の希求すべき理想を沒却するが故である。之れに反して、異理想的のものは、決して斯くの如く取扱はるることを得ぬ。其の理由に至りては、既に前に縷說されたるところであらねばならぬ。然のみならず反理想的思想と雖も、常に取締らるることを合目的的とせぬことは、既に嘗つて見られたるところに依りて、自ら明かであらねばならぬ。況んや異理想的思想に於いてをや。即ち異理想的思想の、一般に國家の取締の客體とせらるべきであらぬとは、亦當然の推論に屬すると謂はねばならぬ。

だが然し茲に當然に起り來るべき疑問は、國家は――既に見られたる如くに――特別の任務を有し、從ひて又特別の地位を認められねばならぬものであるが故に、國家の此の特別の地位に基く取締は、如何なるものに對しても、（從ひて異理想的思想に對しても）、除外せらるべきものであるまいと爲すことである。惟ふに此の疑問は、一應は正當であるとせられねばならぬ。國家は、人類の生々發達の理想の實現を助成し且之れを確實にする固有の任務を有するが故に、茲に其の一部の任務として個人及び共同の生活を安全にする必要が有り、其の結果として茲に國家の側に於いて干渉の權利を生じ、又個人の側に於いて服從の義務が認められ得る。既に見られたる如くに、國家が、一般に反理想を禁止し且抑壓し、又異理想的行爲の或場合を禁止し且抑壓し得るは――而して個人の其れに服從せざるべからざるは、（尤も事實上は、斯くの如き場合に、個人は、只抵抗し得ぬが故に服從しつゝあるだらうが）――此の理由に出づると謂はれねばならぬ。けれども國家の干渉の權利は、只單に干渉の實力の有るが故に、行使せらるべきものではなくして、却つて專ら干渉の合理の有るが故に、行使せらるべきものであらねばならぬ。然るに異理想的思想に對しては、國家は、果して如何なる干渉の合理を有し得るか？ 勿論國家は、其の特別なる任務を有する結果として、其の確信するところに從ひ

て、個人を教育し、又個人にして謬見を有すると思惟するときは、其の誤謬を指摘する擧に出づるも、妨げぬ。[illegible]義の人々は、國家の立法若くは教育を以て、特定階級の利益を不當に保護すると批難し、從ひて又之れに反抗す[illegible]とするが、元より國家の立法及び教育には、決して斯くの如く公平を欠くべきではないけれども、然し國家が、其の法及び教育に於いて、一定の確信を斷行する合理は、之れを認めねばならぬ。けれども國家は、異理想的思想に對しては、確に干渉の合理を失ふ。其の理由に至りては、既に前に擧示せられたるところに依りて、自ら明かであると謂はれねばならぬ。

斯くの如くして私は、純理論的見地よりして、國家の思想取締を否定し、純粋に思想問題に關する限りに於いては、國家は、全く之に無干渉に止まるべきを結論した。其の際所謂思想の意義は――旣に私が指摘したる如くに――常に心裡に成立するものたる主觀的意義に於ける思想たるに止まらず、又實に外部に表出せられたる客觀的意義に於ける思想をも含む。蓋異理想的思想の理想を追求する特質は、客觀的意義に於ける思想も、主觀的意義に於ける思想と異るところが無いのみならず客觀的意義に於ける思想も、主觀的意義に於ける思想と等しく、其れが、縱ひ國家の撤持する理想と背反する場合に於ても、決してそれ自身の性質に於いて、之れを覆沒するものであらぬが故である。若人々が、此の場合に客觀的意義に於ける思想、詳言せば外部に表出せられたる異理想的思想を以て、危險であると考ふるならば、其れは、恐らくは、異理想的行爲の教唆と異理想的思想其の物との混同に基く。今一定の國體一定の社會制度よりも他の國體他の社會制度が、可であるとするは、異理想的思想である。之れに反して一定の國體を顚覆せよ、一定の社會制度を破壞せよと云ふは、異理想的行爲の教唆であらねばならぬ。兩者は、縱ひ其の理想に於いて共通するも、其の性質に於いて分別せられねばならぬ。異理想的行爲の教唆は、其れ自體に於いて彼方法則、異理想的行爲であるが故に、國家

[illegible] と其の性質を異にするが故に、其 [illegible]

[illegible]

[illegible] 所企の一半を遂げむとする次第 [illegible]

[illegible] と云ふのではない。近時福本和夫氏 [illegible]

筆を呵して此處に到るの時は、締切期日まで――其れは、突如として二十日を短縮せられた――餘すところ僅かに二日ぬ。私は、斯く意識したときに、極めて明瞭に、私の腹案の到底充分の開展を以て、結了し得ぬことに氣が付いた。素より強て筆を終結まで運ばうとせば、之れを試みて成し難いと云ふではなからうけれども、然し斯くの如き方法に於いて、意の有るところを悉くさうとすること、其れは全く不能であると謂はれねばならぬ。其れは、必然的に、内容に於いて空疎、論理に於いて粗雑、又體系に於いて混亂なるを免れぬ。斯くの如きは、元より私の欲するところでなく、又斯くの如きものの發表は、恐らくは人々の要求するところであらぬ。其れ故に私は意を決して筆を此處に擱く。顧みるに私の斯くて遂に此の稿に截するを得ぬに至りたる部分は、三の八、即ち實際論的見地に於ける思想取締の理想と、及び四、思想取締の理想の實現との二に外ならぬ。前者に於いては私は、一方に於いては、異理想的思想の存在の必要を認め、其の發生を妨げぬ雰圍氣を作り置く必要を論じ、他方に於いては、縱ひ異理想的思想の存在より、多少の弊害の發生を免れ得ぬにしても、然し之れを抑壓することの不可なる點を指摘し、斯くて國家の思想取締の理想の、寛容に存すべきを高調しようとした。後者に於いては、私は、純理論的見地、否實に實際論的見地に於ける右の理想を、實現する爲に、現在の制度に於いて、如何にすべきであるかを考究しようとしたものであつて、其の國際關係國法の全般に亘りて、其の運用の方法を說述しようとした。思ふに此れ等の論議は――其れは、假りに私に充分の時を與へても、果して私の力で可能であるかどうかは、知らぬけれども――私の此の稿の主要の部分を構成せねばならぬに似て居るが、然し今は、右の事情の爲に、之れを試むることの不能であるが故に、之れを省かねばならぬ。此の點に關して私は、切に讀者の理解の有る寛恕を乞うて止まぬ。

――筆者後記――

階級の自壊作用

高田保馬

一　議論の目ざす所

私は今此小論を以てかねて心掛けてゐた一の仕事を果さうと思ふ。私は小著『階級及第三史觀』の末章に附記して次のことを述べた。

「私はなほ進みてこの仕事を遂げたいと思つてゐる。其一は茲に階級組織と稱したるものを階級構造と階級關係の二に分析し、以て前述の立場を更に精確ならしむることである。而して人口の量質的組立の二方面即ち量の方面と質の方面の何れが根本的重要さを有するかをば、これを聯絡せしめて決定したいと思ふ。其二は社會の野生的勢力の創造者たる分化の因りて來る所を更に立入りて考察する事である。」

執筆の當時私は著しく健康を害してゐたが爲に論じて盡きざる所も多く、思うて當らざる所亦多い事は自ら十分に意識してゐた。たゞ其後健康がなほるにつれて雜事徒に多忙、漸く今日に及びて所企の一半を遂げむとする次第である。從ひて茲に論ずる所私論第三史觀の一部分の補訂たるべき性質を有つ。

而して私が今此筆を執るに至れるわけは、たゞ雜事が漸く片ついたからとのみ

批判の企あり、それに刺激せられて舊稿を讀むに、階級の動學的考察の一章所論粗雜にすぐる點多きを思ふ。意を決して小閑をつくり、此一篇を認むることとした次第である。

二　階級關係と階級構造

私は議論をすゝめる前に言葉の上の約束をして置きたいと思ふ。もとよりこれは約束である、さう解しなければならぬと云ふ筋合のものではない。

階級關係と云ふは人人の間に存する階級的區分の上からの關係である。一部分の人人は優越的支配的地位を占め他部分の人人は之に反して從屬的被支配的地位を占める、これらの人人の相互的關係（しかも此地位の方面からの）が即ち階級關係である。私が今階級構造と云ふのはある社會（詳言すれば全體社會）が一定の「區切の仕方」によりて幾つかの階級に分たれてゐる姿を指す。の階級構造の特徴をなすものは階級の數にもあらず、人數の振り分けたものにあらず、上下のへだたりの程度にも非ず、一に「區切りの仕方」即ち階級の分れる原理の如何に存する。從ひて階級構造の變動と云ふは此階級の區切される仕方の變動（つまりそれは區分原理の變動と云ふことになる）を意味するに外ならぬ。これに對して、階級關係の變動と云ふは廣狹二義に解することが出來る。其一は廣義のものである。それは階級構造が變動するとせざるとを問はず、人人の間の階級關係が（集團的に——此點今詳說せず）變動することを意味する、從來の優越者從屬者の相對的地位が幾分にせよ變化して、各自の立場が異なれるものとなることを意味する。然れども、此意味の階級關係の變動には二の場合がある。一は階級構造の上に何等の變動なくして而も相互の地位が變化する場合にして、他は階級的構造の上に變化なきに拘はらず、同一構造の内部にありながら、人人其立つ所の階級的地位を

與にするに至ることである。狭義に於ける階級關係の變動、又は固有の意義に於けるこれとして之を意味せしめる

私は嘗て次の如くに述べた。『あらゆる時代に階級は存在してゐる。併し多くの場合、階級間には釣合、然り勢力の均衡があつて、新しき事情の生ぜざる限り、新しき變動は生ぜざるものである。たゞ何等か重大なる事情が生ずると、階級組織は茲に何等かの變化を生ずる。』（階級及第三史觀三四二頁。）この階級組織と云ふは、二つのものを包括する。一は如上の意味に於ける階級構造の變動であり、他は同じく階級關係の變動である。例へば、等しく權力を以て階級的區分の原理とする封建制度内部にありて、足利が北條に取代ると云ふのは階級關係の變化であり、權力を區分原理となしたる徳川の封建的階級制度すたれて經濟的事情を區分原理とする明治の產業的階級制度成立するはこれ階級構造の變化である。而も階級組織の變動と云ふのはこの二の何れをも意味し得る。たゞこの中、階級構造の變動は重大なる更革にして、狭義の階級關係の轉化は重大ならざる更革である。重なる歴史觀の目ざす所は主として前者の說明にあるかとも思ふが、私は、附隨的にではあるが、此階級關係の變動をも取扱つてみたいと思ふ。

三　私の主張せんとする原則

私は今自分の議論によりて何を論結せむとするか。此行先を豫め記し置くことがすべての理解を容易ならしめ得ると信ずる。

第一原則。階級はそれ自らを維持せむとする努力によりてそれ自らを破壞する。――階級自壞の原則。

第二原則。階級（從ひて階級組織と云ふもよろし）の變動を支配するものは社會組成（かつて社會の

びたるもの）である。――

第三史觀の一骨子。

第三原則。階級の變動は野生的勢力の勝利によりてのみとげられる――勢力分配の原則。

第四原則。(第二原則の詳述であるが) 階級構造の變動は社會組成の量的方面によりて、階級關係の變動はその質的方面によりて決定せられる。

此中、第二第三の原則は私が從來反覆して叙説したる所であるが第一、第四の二原則は今はじめて構成と叙述とを試みるものである。而して從來の階級理論に於て何人も敢て述べざりし所である。そこで、未熟の私見中若し何等か取るべき點があるならば、それは、貧しけれども新しき貢獻でなければなるまい。

たゞ私は今、これらの原則のうち、第一原則について特別の興味を感ずる。一方に於ては、それが更に廣汎なる原則(社會の進み行き一般に關する) の一特殊的なる場合なるが故に。他方に於ては藝術的なる感興をそゝり得るほどの明白さと直觀性とを具ふるが故に。それ故に私はこの原則を中心として全體の論述をすゝめてゆきたいと思ふ。豫めそれの内容について多少の叙説を加へ、次にその論證に入ることゝする。

から云ふ考へ方がある。すべての社會的制度はそれ自體の消滅を以て其目的とする。例へば病院は病人が全くなくなつて其存立の必要なきに至ることを以て其目的とする。監獄は一切の罪人が出なくなり、それが役に立たないやうになることを以て其目的とする。これらはその消滅そのことを以て目ざす所となしてゐるのである。これはたしかバクウニンにはじめて説かれた見解であるかと記憶する。私は此の如き單純なる意味に於て階級の自己破壞を説くのではない。階級と云ふ制度又は組織は少くも社會の一部の人人のある要求に基いて成立してゐる。而も此の要求が充足せらるゝこと愈多きにつれ、そこに「此要求に基かざる過程」更に「自然的なる過程」の介在がある。これが階級を破壞せむと

する要求を促す、これによりて階級そのものが破壊せられむとする傾向をもつ。此一聯の過程の始めと終りとに二要求に基き、動機に依りて促されたるに従ひて理解し得べき過程がある、其中間には自然的なる。従ひて理解しうべからざる過程がある。これら聯絡を表示すれば次の如きものとなる。

要求＝階級の保持
(1)理解しうべき過程――(2)理解しうべからざる過程――(3)理解しうべき過程
自然的
要求＝階級の破壊

階級を破壊せむとする所の過程はかの理解しうべからざる第二の過程をまちて生じ、此の第二の過程は第一の階級保持の爲にする理解しうべき過程として成立する。かくて階級維持の努力はやがてこれ階級破壊の努力なりと云ふことになる。

ヴントの所謂目的變生の法則、カアルマルクスに於ける辯證法的發展の見解と私の今述べたる所との類縁乃至聯絡の如きは抑、私にとりては一の閑問題である。私はたゞ自らの眼の鋭からむことを願ふのみ。

これを古き言葉に見よ『驕るもの久しからず、ひとへに春の夜の夢の如し。』またこれを近き事實に見よ。階級の懸隔は著しく縮まらむとしつゝあり。階級組織は之を保持せむとする努力の切かるに拘はらず、やがては破壊せられ易き運命をもつ。此矛盾をもたらすものは一にかの中間に介在する所の自然の過程にある。此介在者の何物なるか、それが第二の理解しうべき過程、即ち階級破壊の努力を促し來る事情如何。これを明にするのが私の次の仕事である。

四　階級自壊の原則――其一　共同社會より利益社會へ

私は階級が常に自壊作用を營むと云ふ原則がたゞに階級構造にのみあてはまるもの

構造内に於ける階級的地位の變動（集團的なる）即ちこゝに云ふ所の階級關係の變動についても亦此原則の作用を及むとするものである。然れども、先づ階級構造に關して之を說く、而してこれに就いて妥當するだけに止るとして、なほその原則は十分なる理論的意義を有するものであらうと思ふ。

階級構造について私は其重なるものとして三種を數へ得る。其一は權力を以て階級的區分の原則となすものである。其二は富又は經濟的勢力を以て階級的區分の原理となすものである。其三は此二者の何れをも階級的區分の原理となさざるものである。此最後のものは普通に無階級の社會組織と稱せられる、それが果して無階級と稱せられうべきや否やは別の問題である。第一の場合に於ける階級は權力階級と稱せ得られよう、之を二に小分することも可能なりと信ずるが今はそれに立入らない。第二の場合に於ける階級は經濟階級である。前者は概して封鎖的固定的性質を帶び後者は開放的流動的性質を帶びる。

さて此間の變轉は如何にして行はれたるか。私見を以てすればたゞ一言にして盡く。社會が共同社會より利益社會に向ひて進むが故に。然らば何故に共同社會より利益社會に向ひて進むか。社會的密度の增加の故に。此增加は如何にしてかゝる變轉を生じうるや。結合定量の法則の作用によりて。私の此題に關する主張はほゞこれだけの命題に盡きる。順次にこれらを論證したいと思ふ。たゞ冗長を欲せざるが故に屢私の以前の著書に說明を讓ることを許されたい。

テニイスの所謂共同社會、利益社會の意味については今こゝで說明を加へるまでもないことゝ思ふ。從來此二種の社會の對立を取扱へる學者は其數極めて多い。然れどもこれと階級組織との必要的聯絡を認めたものは寡聞未だ之を知らす。私の立說が若し成立し得るものなれば――而して必ず成立し得ることを信ずるが――私は其構成に關する優先權を主張し得よう。

故に純粹の利益社會を考へよ。彼等は相分離するに拘はらず相結合してゐる。たゞ互に相手にこれを利用し合ふが故にのみ、利益を得る限度に於てのみ相結合してゐる。各自は獨立して自己の個性を完うすると共に自己の自由を保持し、十分に其理知に從ふことによりて一切の行動を營む。此の如き結合としての利益社會が此地上に、其純粹無雜の姿に於て實現せられうべからざることは、もとより餘りに明白の事柄である。然れどもこの實現せらるゝ姿を構想し來れば、私共は次の事を認め得る。そこには何等の階級的懸隔も存し得ない。何人も他人とたゞ相手から利益を得る限度に於てのみ結合するならば、どこに階級存立餘地ありや。一人の自由なる發達が他人の自由なる發達の條件をなす自由聯合の姿はそこにある。そこに存し得る從屬の關係はたゞ所謂單純なる行政即ち物の管理のみ。かくて利益社會と階級懸隔の消滅とは相表裏する事柄である。其間にては、本質必然的なる聯絡を認め得る。此の如く考へ來れば、階級組織がたゞ共同社會に作ひてのみ存立し得ること甚だ明白である。謂ふに階級の懸隔が顯著なればなるほど、一部分の成員は他部分の成員に服從することゝなる。而もこの服從はたゞ共同社會に於てのみ可能である。他人に對して人そのものの故に結合し、敢てこれと一體を形づくりその分岐となることを辯ぜざる場合にのみかゝる服從が實現せられ得る。或はかう考へるものがあらう。服從は必ずしも自發的ではない。否むしろ多くの場合に於て、一方の他方に加へる強制にもとづくものであると。然り、私といへども之を疑ふのではない。然れども、一方が他方を強制し得る程の勢力は如何にして之を有し得るか。社會の前の個人はちりあくたに等し、個人は社會に對して永久依存の狀態に立つ。一方が他方を強制し得ると云ふのも、一方に個人の團結による勢力の集積あるが故である。而もこの集積は共同社會による外はない、利益社會的結合にありては個人互に利益を得る限りに於て結合するのみであるから、利益の關係を超越して團結するが如きはあり得ざるところである。此一方の團結的勢力が社會の名に於て作用するか、又は小數個人の

級區分の原理たる地位から推しのけらるゝに至つた。而してこれに代りてかゝる原理の地位を占めたるものは即ち經濟的勢力である。而も、利益社會的傾向の愈顯著となるに及びて、經濟的勢力たる富には所得も亦かゝる地位を失ふに至らむとする。私がかつて階級基礎の變更（階級考一九五頁以下參照）として述べたるものは同一の內容を異なれる言葉を以て表はしたのに過ぎぬ。之を事實に就いて見よ。近代文明國の歷史に於て權力階級に挽鍾をつきたるものは佛蘭西革命である。而もそれは如何にして起つたか。私は思ふ、共同社會的結合の弛緩は人人をして自己を果なる「社會の道具」たるに甘ぜしめず、自我の要求を厭迫して社會に服從することを否ましめた。これが區分原理としての權力の意義を殆ど消失せしめたる理由である。傳統は破棄せられ、ある階級に對すに自發的自然的服從は差控へられる。茲に於て權力に基く地位の區分と云ふものは大抵認められざるに至つた。茲に於てはじめて、經濟的勢力が階級區分の原理たる王を得るに至つたのである。太陽沒してはじめて漸く月星その光輝を示し得たるわけである。しかも此月星の光輝さへも動もすれば失はれようとする。利益社會的傾向が愈加はりその實現が顯著となるに連れ經濟的勢力の懸隔すらも取除かれようとする。或は云ふものがあらう。此資本主義的經濟組織は一切を合理化し、勞働さへも賣買の對象となすことにより、人人のあらゆる關係を交易化した云はゞ萬人互に商人たる姿である。今日既に利益社會は十分に實現せられてゐるではないかと。私はこゝに冗長なる議論を試みまい。たゞ次の如くに述べよう。眞にあらゆる社會關係が合理化するならば、餘剩價値の絞取と云ふ制度はあり得ざる譯である。これが存在し得るのはなほ社會關係のどこかに共同社會的要素の有力に支配するものがあり、一部の成員が他の部分の成員の手段となることを防止してゐるが故に外ならぬ。即ち經濟的勢力が階級の區分原理として存立する限り、利益社會は其純粹性を失つてゐる。あるが故に若し將來とこも、此利益社會化の進行にして一派の學者の信ずるが如くどこまでも進行するならば [illegible]

新しき共同社會の形成を信ずるものにも（テンニース、シュタウディンガー、[illegible]に於てはマックス・[illegible]（共同社會利益社會の綜合形態（例へば稱して共同社會、又は組合的團結）の未來に於ける支配を信ずるものにも（或る意味に於てマックス・シエエラア等）――階級そのものが消失しなければならぬ、經濟的勢力そのものが區分原理たる事實が全くなくならねばならぬ。もとよりこれは一の極限の場合として私の思惟に上り來る、私がその十分なる實現を可能なりとするや否やは全く別の問題である。

六　其三、利益社會化の說明

結合の基本形態と從屬の基本形態との相關、詳言すれば共同社會と權力階級、利益社會と無階級組織、共同社會利益社會の混交形態と經濟階級との相互關係を認むること前述の如くなるに及べば、私の仕事は極めて簡略となる。私は次に共同社會から利益社會への進行が如何に行はれるかを說く。それはやがて、階級の區分原理の變動（變更も消滅も）が如何に行はるゝかの說明である。次に、此說明を中心として、かかる過程が如何に階級內壞の過程であるかを明にしたいと思ふ。

共同社會より利益社會への進み行が含まれてゐることは何人も疑ひ得ざるところである。然らば、敢て問ふ、此進行は如何なる原因に負ふものであるか（この問題は利益社會を以て共同社會の eine verfallsform なりとし二者を歷史的前後なりと見るものにとりても起り得るが、又此二者を全然本質的のものとなし歷史的形態に非ずと見るものにとりても起り得る。後者にとりては、此二者がそれぞれ社會關係中の支配形態たりうる順序の如何にして形成せらるゝかと云ふ問題として、云はゞ形をかへたる問題として提起せられうる。（これに就いては私の論文社會關係の研究にか

する）。此二の形態の發見者テンニイスの著書にありてもこの問題に關する十分の答解を求むることは困難である。少くも社會的說明を其中に求めむとするも無益に終る。勿論テンニイス自身の考から見るならば、共同社會は本質意志の結合であり、利益社會は任意意志の結合である。從ひて、其一方が勢力を失ひ他方がこれに代ると云ふことに、個人生活にありて任意意志が本質意志に取代ると云ふことの反映であり必然の結果である。かくの如く見る時は共同社會より利益社會への進行の問題は本質意志より任意意志への進行の問題となる。而も、意志そのものゝ變化によりて社會そのものゝ變化を說明するならば、これ明白に精神を以て社會形態の進み行きを說明するものではないか。マクス・シエエラアの見解また究極に於て社會の進み行きを說明するに心理—精神のそれを以てすと解すべきであらうが、今は此點に深く立入り得ない、たゞその社會形態の進み行きの說明が個人に於ける變化を出發點として試みられてゐることは疑を容れずと思ふ。私の根本の前提はかうである。社會形態の變化は社會そのものゝ變化を通さずしては行はれ得ない。然らざる限り、それは精神の自己發展の中にあらゆる社會的變動の根據を認めんとする精神史觀の一形態たらざるを得ざるものである。而して私は此考へ方を以て、實在科學の立場に立つ限り、說明の拋棄、神秘の深みへの逃避、又は少くとも循環的說明に終るものと考へる。たゞ私をして此見方の批判に過大の勞苦を費すことを避けしめよ。

私の立場から見る限り、何故に共同社會が利益社會に其地位を讓るかの問題に關しては、從來殆ど何等の答解をも與へられてゐない。社會的密度の增加を條件として說明せんとしたる私の試は思ふに、拙けれども唯一の者である。或は私見がデュルケム說の反覆に外ならずと云ふ者があるかも知れぬ、しかし之は皮相の見方である。なる程デュルケムも社會的密度を高調する、だが、それはたゞデュルケムに限ることではない。而して私が此條件を用ひながらも說明の中心原理となしたる結合定實の法則がデュルケム說中のいづこに存するや。然れども此點にも今立入ることなくして私の論を進めよう。

此點に關する私の説明は次の引用によりて明にせられよう。「而して社會の範圍の擴大　人口の法則と相合する時が如何なる結果を生ずるか。人々の接觸の範圍が著しく廣さを加へると共に接觸する人々が不斷に代謝する。結合に定量ある結果は其交通理解し合ふ人數の少き間こそ、親密の愛着を以て互に相對すれ、此人數が無限に增加し來れば、かの定量が其間に分配さるゝ以上、相互の親和は極めて薄く、專ら利害の念を以て相接する事とならざるを得ぬであらう。勿論此際、國家又は其他の大なる團結が失はれるのではない、蓋し私共の結合定量の一部分は全體の團結そのものに向ふが、この客觀的結合は人數の增加によりて直接に其强度を失ふとは認められぬからである。相接觸する人數の不斷の變化も亦同一の作用を營む。今日接觸したる人が曾て相理解したる人でもなく而して又將來に於て相交涉する人でもないと云ふ可能が增加する程相互に情誼を以て對する事が乏しくなる。愛着の要素は背後に潛み去り、利害の念が重に作用して相互の關係を定める事になる」（社會學概論四一六頁。なほ社會學原理一〇三三頁以下、社會と國家二二九頁以下參照）。

私は玆に人口密度の增加と云へるに對し、社會的密度の增加と云ふ言葉を置きかへる。それは人口の密度のみによりて定まるものではない。各人の享受し懷抱する文化內容の大さによりてもまた決定せられる、云はゞ二者の相乘積によりて定まる。これに就いては今詳說の餘裕を有しない。

私は此說明を補充したいと思ふがそれに先だちて私は自分の考の立て方に就いて一應の顧慮を拂はなければならぬ。此考へ方は結合の緊密なる場合に共同社會が成立し、それが弛むところに利益社會が成立すると云ふ前提の上に立つ。もとより之れは一方が他方の Verfallsform であり、二者は歷史的なる二段階に過ぎずと見るのではない、二者をそれぞれ特有の本質的形態であると見てなほかく云ひ得ると思ふ。然れども、利益社會の成立は共同社會のそれよりも異な

る心理的又は精神的基礎を要するのではないか、たとへばレヴィ・ブリュウルの原始的心性と現代人のそれとの間には顯著なる區別があり、それらは全く性質を異にするものであるとするならば、而して利益社會が後者の存する所にのみ構成せられ得るとするならば、如何に相互の結合關係が弛緩するにしてもそれが必ず直に利益社會を成立せしむとは云ひ難いことであらう。則ち結合關係が弛緩するのみにては同じ利益社會の成立し得る豫件が與へらるにすぎず、これが成立を必然ならしむる所の合理性――新しき心性（マンタリテ）の形成をまちてはじめて利益社會が實現せらるゝ筈である。私は今此問題を詳細に取扱ふことを得ないが、たゞ次のやうに考へる。合理性には種々なる段階がある。知的能力の程度に應じて種々なる姿を呈するにしても、低き形態に於ける合理性は別に發達したる「心性」をまつものではあるまい。且つまた、所謂原始的心性と吾人のそれとの差異は顯著なる種別にあらず、所謂前者の特徴と見るものも、社會の一定狀態（緊密の共同社會）の所産かと思ふ。從ひて此狀態の去ることは同時にかの原始的心性の特徴を去ることとなる。而して、かゝる事情となれば、理知の程度十分ならずとは云へ、低き合理性は自ら作用して利益社會を作るに至る。シエエラアが利益社會をも亦本質形態となし、感覺的精神的存在の相互關係そのものと結びて離れざる永遠性のものと見たるもの、亦類似の見地に立つに非らざるか。かくて私は利益社會を以て共同社會の稀釋せられたる、冷淡にせられたる形と見ず、二者をそれぞれ本質を異にする別種のものと見るに拘らず、結合の弛緩は自ら共同社會のあとに利益社會を成立せしむるものと見る。かくて、私の前提を保持しつゝ、そのまゝに議論をすゝめて行かう。

社會的密度の增加、從ひて社會的稠密の狀態が結合を弛緩せしめ利益社會を成立せしむるもの、其には、前述の如く結合定量の法則の作用による。然れども私はなほ此外に協働する數多の事情を認める。其一は、傳說の減衰・相互監視の困難によりて各自が自由行動の餘地を與へらるゝこと多い事である。其二は個性の益形成せらるゝことにより類似の結

合がうすくなり、緊密なる結合の成立しがたくなることである。[illegible]冷酷さが加はり、從ひて各自はその爲めに極度の努力を强いらるゝこととなる筈である。これらは何れも社會の利益社會化を助長するものであると思ふが、從來餘り注意せられずしてなほ此助長作用の極めて顯著なる一の事情がある。私はこれについていま簡單なる說明をつけ加へる。

衣食足りて禮節を知る、これ古來何人も疑を容れざる所である。然れども若し禮節と言ふ言葉を普通に解せらるゝが如く道德的なるものと云ふ意味に解するならば私は敢て云ふ『衣食足るが故に禮節を知らず。』『貧困窮乏はなるほど人をして罪人たらしむ、然れども同時に彼をして獻身的ならしむ。其一方をのみ見るは盾の一面を見て止むものである。

家貧にして孝子現はると云ふのは誤りである、家貧なるが故に孝子生ずるのである。而してこれは廣汎なる法則のただ特殊な一場合に過ぎぬ。眞の溫い人情は今日の社會に於てもただ貧乏な家庭にのみ存してゐる。試みに、列車の乘客を比較せよ。一二等の乘客と三等の乘客とを見くらべて、何れに眞の人間味ありや。豪富を擁する富豪の家庭に於ける家族の人人相互の冷淡さは周知の事實である。これはしかし家族內部のこと許りではない。同じく人懷しかるべき子供の態度にしても、貧乏なる家の子女の他人に對する親しみ易い態度と富家のそれ特に貴族の子供が他の何人にも許すまじき樣子との間には顯著なる差異がある。これら一切の事實の根抵に橫はる一原則がある。弱きものほど相親しみ相助く。思ふにこの原則を說明しうべき理由の重なるものに二ある。其一は互助の必要であり、其二は同情の容易さである。貧乏なるほど相手との團結による一致の協働を必要とする。此必要は自ら彼等を驅りて相手と親密に結合せしめる。これは一面から見れば、單に利益のための外的結合が成立するに止まるが如くに考へられよう。併しながら其實然らず。親き外的結合は常に其副作用として內的結合を成立せしめる、而して、人人の間に本來分離の存せず、何等

の内的結合の存するほど然り。手段と目的とが相分れず、手段と目的とが本質的統一に於て考へられ感ぜらるゝ限り肯定意志が目的に對する手段に向ふと云ふテニィスの言葉はかゝる意味に解しうべきものと思ふ。轉じてまた、同情が結合を强むること、それが相手の喜悅に關して成立しがたくその悲哀苦痛に對して生じ易きことも亦周知の事實である。かくて貧しきものゝ間には親密の團結が自然に成立する。このことは自ら其傾向そのものを陶冶して、周圍の一切の人人に對する親密なる態度を作り上げるものと思ふ。富貴の地位にあるものが何故に其周圍の人人に對して冷淡であるかは自らこれよりして理解し得られると思ふ。彼等は勿論社會の恩惠によりてのみ其富裕なる生活資料を享受し得る。而も社會の制度は自ら彼等をして自己の力により又は自己の當然の地位により之を享受するものと信ぜしめ、自分たちは何等の助を借ることなくして現在の生活を營むでゐるものであると思はしめる。彼等は互助の必要を痛感せず、生活狀態は相互の同情をよび起すに不適當である。貧富に於ける此社會的態度の差異は勿論一見、結合定量の法則を否定するかに見えよう。然れども、結合定量の法則は主として結び付き得る能力に限界あることを云ふもの、事情の如何により て結合の傾向の日常作用する程度又は樣式に差異あることを否定しない。

さてこの貧富による結社的態度の差異は何ものを意味するか。一方に於て、それは衣食足りて禮節を知らざる事を示す。貧窮はなるほど犯罪を生み易い。しかし同時に獻身的扶助、極度の愛着を生む。富貴は或は罪を犯すことを少からしめる、しかし傍ら相互的に冷淡ならしめる。衣食足れば足るほど、獻身的情熱、相互奉仕の誠意は漸次に減少するやうに思ふ。此點から考ふれば、全體社會の團結の眞實の基礎は最下層の貧乏なる人々にあり。社會の階級的構成から團結の性質を分析するに、其兩極端に共同社會と利益社會との對立するを見る。最下層の人人の間には主として共同社會が存立し、富裕階級の少數の人人の間には利益社會が成立する。此他の階級に於ては[illegible]

て實現せられてゐる。私は此點から見て、愛國心はロオマを去るほど强しと云ふ言葉に新しき意味を見出し得ると思ふのである。かくて社會の團結の眞實の基礎は下層の階級にあり、此團結によりて得らるゝ効果は主に上級によりて享受せられる。

それが他方に於て意味する所は更に重要である。文化の進展、從ひて社會的稠密は生活内容の豐富さを示す。原始より今日に至る進み行きは生活ことに物質的生活の向上と云ふことであつた。云はゞ人類は絶對的意義に於ける貧乏――これを私は一定の社會の相對的標準に照して見たる貧乏とは別なる意味に於ける――から同じ意味に於ける富裕に高まり上つて來た。同一時代をたち切りて見たる時、貧富の各級に認められる社會的態度の上の差異が此時期をへだてたるものゝ比較に認められざる道理はない。すべての文化内容、ことに物質的生活資料は人と人との間にはさまりて相互の結合を疎からしめる。それが乏しい間は人と人とは素肌を以て抱き合ひながら此の世界の苦患の海を泳ぎ渡る。それが豐富になれば人と人との距離はその爲に益遠ざかる。この一面は容易に限界効用説の援用によりても説明せられうべしと思ふ。少くも外的結合の相手として見る同胞の有りがた味は隣人との協働によりて得らるゝ最後の生活資料の効用によりて決せらるゝ。第三椀目の飯が漸く得らるゝとすればそれだけの効用が彼に歸屬する。しかしそれによりて第十五椀目の飯が得らるゝとすれば彼に歸屬せらるべき効用は零に近き第十五椀目の効用にすぎぬ。衣食足るにつれて禮節愈弛むと考ふ。社會的密度の加はるほど文化の高まるほど、人人の結合は益疎緩を加へる。原始の共同社會的團結は文化の發達するにつれて利益社會的團結と化すべき必然の運命を有するものである。

私の立場は社會的結合の弛緩がやがて利益社會的結合を伴ふものと見る、而して合理性そのものが此利益社會によりて作られざるまでも助長せらるゝものと見る。從ひて西歐文明の自然科學主義、自然征服の努力が此合理化に[illegible]

ことなしと云ふのではないが、かゝる利益社會を産むものではないと思ふ。例へば支那の文明を見よ。それは自然征服の努力極めて乏しかりし文明である。而して、その努力はかへりて、內界の征服に向ふこと最も多かりしものとさへ見られてゐる。然れども、支那民族の營利的活動は著しく目立つ、彼等は其打算金儲の能力に於て極めて優秀なる地位を保つ。私は生活の合理化と自然科學の發達の間に關係なしと云ふのではないが、前者に對する後者の意義を餘りに過重すべからずと信ずるものである。かくて私は利益社會がただ單に結合の弛緩のみによりて生せず、合理主義を前提するものとなし、此後者を更に自然科學的發達によりて說明すむとするが如き見方には——かゝる考へ方を全然成立し得ずとは見ないが——贊同しえざるものである。

七　其四、階級の自壊

私は階級の區分原理の變動を以て共同社會より利益社會への結合關係變動の結果なりとなし、後者がまた更に社會的密度の增加に負ふ所以を明にした。私は今此過程を目して階級の自己破壞となすものである。其理由如何。以上の說明よりして知り得るところはたゞ一點のみ。曰く、階級は社會的密度の增加によりて破壞せらる。階級區分の最初の原理たりし權力は之によりてかゝる原理たる地位を失つた。次で之に代りし經濟的勢力亦同樣なる運命に陥るかに思はれてゐる。かくて階級の區分原理は全く亡び去ると見る人あるに至る。然らば此破壞者たる社會的密度の增加は如何にして行はるゝや。答へて云ふ、たゞ階級の力によりてのみ。私が階級が階級自らを破壞する傾向ありと云ふは正にかゝる事情による。

[illegible]

何によりて社會密度が決定せら[illegible]度即ち社會的密度は種々に相異なる。此密度はかゝる二因子の相乘積によりて定まるとすらも考へ得られる。今先づ、文化内容に就いて考察する。

文化内容の増加は如何にして行はるゝか。私は今此點に就いて詳細なる論證を試みるを得ないから、たゞ其の筋だけを述べる。發展の傾向が本具的に存すると見、又は更によき生活に向上せむとする傾向が自然に具はると見るが如きは、何等の説明でもない。これら見解をとる人人は文化内容の増加特に物質文明の向上を見て、其根底に發展の傾向又は更によき生活への要求あるべしとなし、此處はこれらを出發點として文化の發達そのものを説明しやうとする。説明せむとするものは豫め出發點の中に仕掛けられてゐる。これ畢竟循環論證の仕方のみ。幾千年間停滯せる文化の所有者が存在することは私共をして更によき生活の要求、發展の傾向の本具的ならざることを否定して餘りがある。私共は知る、階級なき社會には文化の發達なきことを。私共が仔細に事實を觀察して見るに、文化内容の増加は根本に於て階級的地位の誇示の爲に行はれる。この事は物財の方面に就いて特に顯著である。優越的地位を占むるものは其地位を誇示せむが爲に新なる文化内容を求め、之を享受する。階級組織に於て生産者被支配者の地位に置かれたるものは一意これを產出することに力む。而も、新なる文化内容が階級間の模倣によりて流下するや、更に新なる内容が優越者の間には求めしめられる。かくして文化内容は増加し傳播する。所謂精神的文化（藝術、宗教、學問等の如き）についても其發達の樣式は前に述べたるものとさまでの距離を有しない。これは大抵高き階級の生活、地位を特に輝かしく又一般人に及び難く見えさせようとの要求に刺激せられて常に發達をつゞけてゐる。これを營む人人自身はその地位の向上を計らむ爲に努力して創作をつゞけるが、之を要求し享受する階級の側より云へば、其地位の誇示又は保存の爲に助成する。

調精神的文化の諸方面に或る程度の自律性を否むのではない、然れども、この自律性あるのみにては文化の進展なし、進展あらしむるためには、常に非精神的方面の協働あるを要し、此協働の方向は階級的なる勢力の保持にありと云ひ得る。かくて、私は思ふ。文化内容の增加、即ち文化の發達は一に階級組織の所產であり、更に進みて云へば、優越的地位を占むるものが其地位を誇示し又は勢力を獲得し維持せむが爲の努力に出づるものである。

更に轉じて、人口密度の增加そのものを考へる。これが人口の增加そのものから促がされることは明白である。而も此人口の增加そのものは何によりて生ずるか。勿論それは「生めよ殖えよ、地に充てよ」と云ふ自然の大法によりてそれ自體ある程度の必然性をもつかに思はれる。これは爭ふべからざる事實である。然れども、所謂「障碍(チェック)」に常に作用する。例へば德川三百年の歷史を見よ。人口は殆ど停滯してゐる。かの必然の大勢を有する人々の增加を實現せしむるには、これを可能ならしめ、障碍を除却するものがなければならぬ。それは即ち文化の發達である。或る一派の學者はその中から特に生產力の增加と云ふ一部分の事柄をとり上げて、此可能的條件と認めるであらう(此考は經濟史觀の人人に認めらるゝのみならず、地理學的社會學者ラッツェル、これを承けたるシュモラア以來極めて廣く行はれてゐる)。私も或る制限の下に於ては敢て之を否定しない。然れども此の文化の發達そのものが決してそれ自體單獨に動き得る自變數ではない。其一部分である所の生產力に就いても亦然り。それはあくまで社會的關係によりて促される。ことに社會的關係の中にても、階級の關係によりて促される。この事既に述べたる通りである。實に生產力の增加も文化の發達も生存競爭のために生ずるのではない。たゞ社會のある一部分の階級が其勢力を誇示し或は獲得せむが爲の手段として行はれる。その結果として文化の進展が行はれるに從ひて其一部分の事象として生產力も增加する。かるが故に多くの場合人々の考ふるよりも生產資料の增加が却りて遙に行はれ、社會のすべての[illegible]

考へ方が許さるゝとすれば、社會的密度の二の決定因子は常に[illegible]階級關係[illegible]利益[illegible]によりて出現せしめ[illegible]若[illegible]ば優越の地位にある階級が其地位を要求し其勢力を獲得し保持せむが爲めの努力の必然の結果として發生する。かくて社會的密度の稠密を來すもの、一に階級それ自らである。

社會的密度の增加が共同社會的結合を崩壞せしめる。此道行は私思ふに、一定の要求によりて營まれることではない。なるほど、それは人間の意識を通して行はれることではあるが、ある意味に於て自然的なる過程である。まづ結合定量の法則を考へよう相接觸する人人の增加は自ら、而して何等の動機をまつことなくして、相互の結合を弛緩せしめる、更に、之に伴ひて享受する文化內容の增加、ことに生活標準の高上といふことについても亦、然り。此增加によりて人人の態度が自ら冷靜を加へ利益社會的となる事柄は同じく要求せられた事實に非ずして、自らに生起し來る自然的過程である。こゝに私共は自然過程が中間に介在し干渉するを見る。此干渉によりて利益社會的分子が或る程度まで成立したる利益社會的分子は一定の要求を通して階級の構造即ち區分原理そのものを變動せしめる。此連絡を圖示しよう。

理解しうべき過程　　自然過程　　理解しうべき過程

階級關係→文化の進展｝＝社會的稠密→利益社會化→階級構造の變動
人口の增加

かくて階級はそれ自體の作用によりて、まづそれが現に自己を支持して居る區分原理を破壞する。此過程が反復せらるゝうち最後には階級構造のすべてを破壞し盡すに至らむとする內的傾向を藏するを見る。これを稱して階級自壞作用と云ふ。

八　一二の例

私は今述べ來れることについて多少の附けたしをして置きたいと思ふ。先づ近代の階級構造の變化について考へて見よう。資本主義的社會にありては、富の生産は急激に增加する、これは有産者階級に於ける利潤獲得の努力の結果である（力の誇示の要求が協働することについてはふれずとしても）。此結果は一方に於て、人口の急激なる增加を來し、他方に於て文化の顯著なる進展と相伴ふ。社會的密度はどこまでも加はる。結合が弛緩し利益社會的分子の重きを占むるに至ることはこれが必然の結果である。ことに自己の生活內容の高上は二の結果を作つた。一方に於て、同一階級即ち有産者そのものゝ利益社會化である、かくて彼等衣食足りて禮節を失ひつゝある。他方に於て、これが無産者の利益社會化を伴ふ。それは無産者の生活內容そのものとてもいくらかづゝ高まり來るからでもあるが、更には有産者の利益社會化の風潮が無産者そのものを同化することに負ふ。かくて社會全體をあげて、利益社會的なる雰圍氣の中に漂ひつゝありと見ることが出來る。而も此利益社會は其本質上、個人の獨立性を要求し、それが何人の手段ともならざることを要求する。階級關係そのものはこれによりて或る程度まで破壞せられざるを得ぬ。階級構造の衰滅はある限度までに必然的なる傾向なりと見なければならぬ。

これは極めて附隨的の事がらであるが、權力階級につてなほ考へる。私は區分原理に從ひて、權力階級、經濟又は産業階級の別を考へた。權力階級を更に小分しうると思ふ。それは權力の分配が血緣によるが、又は身分によるか（一は血族的組織をなし他は封建的組織をなす）に從ふ。前者による時權力階級は血族階級をなし、後者による時それが身分階級をなす。若しあらゆる社會の場合にあり一最初に發生するものは血族階級であらう。而してこれが中間にして身分階級

をなすに至るのであるが。私は今これについてたゞ次のことだけを述べるに止める。社會的密度の増加は血族の混淆、複雜、錯綜を來し、又血緣の遠きもの〻混住を生じ、かくて強固なる血族的共同社會が漸次にくづれ來つた。此團結の崩壞は一方に於て、血族を以て社會組織の單位たらしめざるに至つたのであるが、他方に於てまた、血族關係そのもの〻基礎の上に立つ階級制度を破壞し盡した。權力階級の他の形態は身分階級である。血族團體崩壞し去りてもなほ、社會は利益社會と化し去らず、なほ殆ど純然たる共同社會的團結をなしてゐる。從ひて、依然權力が階級の區分原理をなすにしても、此權力の集中分配がもはや血族關係といふ固定的の事情による事は出來ぬ。實力の上の優勝者の手中に權力が把握せられ、それが專ら主從の關係によりて分配せられる。主從の關係による所以は、血族關係により得ざる以上、密接なる人格的關係による外別に分配の道なきが故である。而して此分配の仕方が階級の利己的努力によりて世襲的となり身分の制度定まる。これ此種の階級が身分階級と稱せらる〻所以である。身分階級は常に封建制度と相伴ふ、從ひてまたこれと封建階級と稱するも妨げず。私思ふに、封建制度の特徴をなすものは主從の密接なる人格的關係と知行としての土地領有の事實である。而も私は此中知行を以てこれが中心的特徴とは見ず、寧ろ主從關係の副産物なりと考へようと思ふ。此點またいま詳論することを得ず。

私は此血族階級から身分階級への推移の中にもまた、社會的密度の作用を見る社會的稠密のみが自然に血緣の混淆を來し遂に血族團體の崩壞を實現せしめ、終に血族階級を消滅せしめた。これによりて全體社會の内部に所有せられざる權力が浮動する。それが封建諸侯の實力によりて確把せられ新たる身分階級を生むに至れるものである。血族階級にありては權力のよりて立つ所主に血族の信念にあり、從ひて服從は常に自發的である。身分階級にありては、權力のよりて立つ所、優越者の武力にあり服從は重に強制的である。これは共同社會的分子が社會的密度の増加に伴ひて減少した

る一側面と解釋し得られざるか。要するに、階級構造の一種類又は一定型として權力が區分原理をなす組織を掲げ得ざならば、其小分又は部分的定型として血族關係を基礎とする權力、身分關係を基礎とする權力の何れかが區分原理たる構造をあげ得ることと信ずる。而して前者より後者への變遷亦社會的稠密の作用に負ふものであると見る。

さて私は以上のべたる部分を以て、最初に掲げたる第一原則即ち階級自壊の原則を説明し得たと信ずる。而も此の説明の中に於て同時に他の原則即ち階級の變動を支配するものは、少くも階級構造について見る時、社會組織であること、(第二原則)、階級構造の變動は社會組織の前的方面によりて決定せらるゝこと(第四原則)、また明にせられたるを見る。たゞ第三原則、即ち階級の變動は野性的勢力の勝利によつてのみ遂げられると云ふ主張は未だ十分に論證せられたとは云ひ難からう。私は敢て玆に之を詳述することを避けて後に階級關係の變動を論ずる場合に論及しやうと思ふ。野性的勢力の勝利によつて變動の遂行せらるゝことは、階級構造についても階級關係についても同樣であるが、その遂行は階級關係の場合に一層明白なりと思はるゝが故に、特にこれに就いて説明を加へようと思ふ。それからして、階級構造の變動に對して野性的勢力の有する意義は自ら推知し得らるゝことと信ずる。

九　階級關係の變動に就いて

私は進みて階級關係の變動のうちに、所謂階級の自壊作用があらはれてゐるか否かを明にしたいと思ふ。此際自壊作用と云ふのは優越的地位を占有する所の階級自體の努力が自ら其地位を失はしむるに至る道行である。所謂優越階級の自己破壊的作用をさすに外ならぬ。

此際問題に一段の限定を加へられなければならぬ。第一限定。階級關係の變動と云ふけれども、これは個別的變動を

意味するに非ずして、たゞ集團的變動をのみ意味する。第二限定、これは前者に伴ひ來ることゝころあるが、[illegible]と云ふ構造內部間に於ける變動を取扱はず、それは問題の外に置かれなければならぬ。

階級構造の變動と階級關係の變動とが事實に於ては密接に相聯絡して生起することは前に述べたる所である。階級構造の變化にして階級關係の變化を伴はざることなく、階級關係の變化は極めて應多少の程度に於ける階級構造の變化に伴ふ。しかれどもこゝには此二者を思想上、全然切り離して考へむとするのである。此の如くに考へたる階級關係の變動は前述の如く、同一なる階級構造の內部に於て、人人が占有する地位の交代することを意味する。例へば優越的地位を占有するものがはじめはaにして次にbとなることの如し。而も此の地位の變動又は交代は必ずしも集團的に行はるゝものではない。個別的に行はるゝ變動が史上極めて重要なる意義を有する。その中最も顯著なるものは次の如し。

(a)人口學的周流、階級の高下により出生率死亡率に差異あり、上位の階級のものは常に其血脈亡び易く、下位の階級は其顯著なる自然增加の結果出でて上級の空位を補塡し易い。（階級考、第六章階級の周流、參照。）

(b)個人的周流。個人的犯罪、個人的動功のために上昇し又は下降する。功罪のみならず、富の喪失又は獲得は權力階級の內部にありてさへ地位の變動を伴ふ。或場合、これは前者の一面をなす。

(c)血脈の混和。固定せる階級にありては上位の血統者は常に上位であり他亦之に準ず。然るに血脈の混和し、混血のもの、地位が社會の事情により種々に定めらるゝが故に、同一の血脈を承くるもの、地位が種々に變動する。

私は今これらの個別的變動を問題とせず、たゞ集團的に行はるゝ社會的地位の交代、變動を考察せむとするのである。而して、これにありては或る場合優越の地位を占めたるものも被壓迫者の地位に立ち、更にまた優越者の地位に復歸することもある。かくて此種の變動はこれを稱して階級的シイソオと云ふことを得よう。一方の優勝は常に他

せらるゝことを意味し、他方の地位の低下は一方の上昇を意味するから此の如く名けるのである。而して階級構造が經濟的なる場合にありては、即ち經濟的勢力が區分原理をなす場合にありては、個別的變動の行はるゝのみにして、此外別に集團的變動と云ふものが行はれない。よし行はるゝことありとしても階級關係の變動の全體から見て極めて輕い意義を有するに止まる。從ひて、私の掲げたる第二の限定は、個人的變動を考察の範圍より除外すと云ふ第一の限定の當然なる結論とも見られ得る。

然らばかの階級的シイソオは如何にして行はるゝか。私はこれが説明をかの野生的勢力の概念によりて試みよう。

『一定の社會に於て社會的勢力の分配に關し支配的重要を有する中心の意志計劃より離れ、それとは獨立に、此意志から見れば自然的偶然的に、かの勢力がある點に集中する。それは種子蒔く人の意志とは獨立に、まかざる種子が野の中に生育するのと趣を同じくする。かくして或る個人又は團體の手の中に集り來る社會的勢力をここに稱して野生的勢力と云ふ。過去の歴史に於ては、多くの場合、勢力分配の中心は國家である。國家機關の意志とは獨立に勢力がある點に集中する時、これを野生的勢力と見る。一定の階級組織が現存してゐる時に於て、意識的に分配の行はれない勢力がある。これは無意識的（無計劃的）の分配の過程に從ひて分配せられる。從ひて無意識的に分配せられたる勢力は社會の種々なる部分（個人又は部分社會）に於て野生的勢力として成長する』（階級及第三史觀三五三頁。）

階級的シイソオの道行の問題は、結局野生的勢力が如何にして形成せらるゝかの問題である。これに就いて私は二の方面を考へて見たいと思ふ。一方には此野生的勢力の形成從ひて集積を可能ならしめ又容易ならしむる所以の消極的事情がある。他方には野生的勢力をして成立增長せしむる所以の積極的事情がある。これを別々に考へようとするのでも

消極的事情。資本家的生産組織に於て資本集積の法則の行はるゝが如く、權力に於てもまたこの集積の法則は行はれる。得られたる權力は新なる權力の獲得手段として利用せられる。そこに權力集積に關する加速度の法則の作立を認め得ると思ふ。然れども、若しこの集積の法則の外にありて何等それに反對する作用を營むものがないならば、野生的權力などは全然成立の餘地なく、一たび作られたる階級關係は永久に存續し、優越者の地位はいつまでも安泰なりうべき筈である。然れどもこれは事實ではない。權力の集積は必然に權力の享受（Machtgenuss と云ふ文字を用ひたい）を伴ふ。茲に權力の享受と云ふは一たび權力的地位に昇れるもの、其地位を誇示せむが爲に、格別に豐富なる物質的生活（當代の標準より見れば奢侈の生活）を營む。權力の集積が急速度を以て行はるゝ間は所謂力の欲望が更に勢力獲得の方向に於て作用する。たゞ此集積が或る限度に達するに連れて、力の欲望は更に力の誇示の方向に作用するに至り、其權力的地位を以て得らるゝ限りの物質を消費して目だち易き生活を營まうとつとめる。然らば權力の集積は如何なる點まで行はるゝものであるか。謂ふに一定の社會に於て成立し得べき權力には一定の分量がある。私はかつてこれを稱して權力定量の法則と稱した。土地の收穫物の上に報酬遞減の法則の行はるゝが如く、權力の集積がはじめは加速度的に行はるゝにしても、かの權力定量の限界に近づくにつれて、集積の事實は益困難となる。即ち權力の集積の爲に努力しても、もはや其効果の餘りあがり得ぬと云ふ限界に近づけば、その努力は減じて寧ろ權力の享受の努力勢を得るに至る。然るに此權力の享受が何ものを意味するか。從來の歷史的事實によれば、殆ど常にこれにより、生じ來るものは權力の獲得、維持の能力の減耗に外ならぬ。「もゝしきの大宮人はいともあれや、櫻かざして今日もくらしつ。」權力の集積が限界に近づくに連れて權力の享受は益行はれ、其行はるゝに伴ひて權力を支持する所以の組織は弛緩する。集積し獲得せられたりし權力は上位の階級の手を離れむとする、云はゞ權力の定量のうち、著しき部分が浮動するに至

る。私はこの部分を名づけて權力殘餘——優越の地位を占むる階級によりて吸收し盡されざる——又は浮動的權力と稱したいと思ふ。此道行を表示すれば次の如し。權力の集積—權力の享受—權力組織の弛緩—權力殘餘の成立。而して權力の享受が權力組織の弛緩を來す道行は自然過程に屬し、到底理解し得べからざることに屬す。普通に驕るもの久しからずと云ふはみな此道行を指すに外ならぬのである。これを平凡なる、常識的の言葉を以て示せば、權力は人を惰弱ならしめやがて權力を失墜せしむと云ふに止まる。此點から見れば、優越階級はそれ自體の中に衰頽の胚子を藏してゐる。早かれ晩かれいつかは其の權力を支持し得ざるに至るべき運命をもつ。このこと有機體の老死に似てゐる。勿論人間の努力を以てこれを遲らすことは出來るが、之を完全に防止することは出來ぬ。また此道行をたとふれば經濟界に於ける景氣の循環の如きものである。景氣はその一定期間存續するうちには必然的に不景氣をその中から生み出す。階級的老衰、階級的律動の表現はこれらの意味を表はす爲に用ひられるうる。

積極的事情。野生的勢力を成立せしめ增長せしむる積極的事情の考察は極めて困難であるが——それは歷史上の事實の極めて錯綜してその間から一定の原則を把捉することの頗るむつかしい爲に——今到達したる結果を略述する。

私は國家を以て數多の部分社會の綜合であるとは信じない　これらを離れて國家は一の部分社會として存立することを信ずる。然れどもその權力を握るものが、常にある部分社會を代表しその勢力によりて後援せらるゝものなることを知る。少くも今までの權力階級に關して云ふ時、優越的地位を占むるものは國家の權力を掌握したるものである。而もこれを掌握しうる爲には比較的相對的の強者でなければならぬ。かるが故に　現在の優越階級が其勢力を失墜せむとするに當りて、之に代り得るものはやはり既にある勢力を握れるものである　此勢力は野生的勢力として成長したるものに外ならぬ。

私は此野生的勢力の成立する事情を成員の分化にもとめた。これは極めて平凡なる見方のやうであるが、今別にこれを書き改むる必要を認めない。

然らば、分化即ち成員の異質化が如何にして此野生的勢力を生ずるに至るや。思ふにそれは略ぼ次の如き進行による。(第一)分化によりて同類に屬する人たち(たとへば今日の有産者、以前の社會に於ける公家、又は武士などと云ふが如きもの)は最初より或る程度に於ける强者であることがある。それは二の仕方に於てである。其一、公生的勢力(野生的勢力に對する、多くの場合に於て國家の權力と同視し得る)を或る形に於て分享してゐるため、即ち舊き階級組織によりて或る程度の優越的地位を與へられてゐる(たとへば中古の地頭の如き)。其二、社會の切迫せる要求に應ずることにより其對價としてある姿に於ける服從を受け、從ひて新なる野生的勢力を有してゐるため(中世の僧侶の如き)。其三 その營める職業そのものが特殊の强さを意味し、從ひて野生的勢力となり易きため(中世の武事に携れる人の如き——後武士となる)。其四、個人の努力ことに相互の勝敗によりて自然に優勢の地歩を占むるに至ることによりて(財産の集積の如き)。これは分化そのことに伴ひて(分化の結果ではない)優越的勢力が一部分の人々の集團に存することを示すものである。然るに 分化そのことから 更に野生的勢力が彼等の上に加はり來る。(第二)分化その事からして次の如き形式的(ジンメル的意義に於ける)効果が生じ得る。一方内部の人人の團結が形成せられる 此團結が人人の力を合せると云ふ意味に於て一の新勢力を作るのみならず、團結は自ら成員をして社會に同化を强要するが故に、此集團的勢力は愈增加する。他方に於て、分化は外部に對する分離 又は冷淡さを伴ひ易い、此分離は自ら外部に對する服從を差控へしめる意味に於て、此集團以外のものゝ勢力を減少す。此の如くにして成立する其集團の勢力は飽まで野生的勢力にして、國家機關の意志の何等計畫せず關知せざるところである。(第三)此の如くにして野生的勢力の

一中心を生ずる時は、これにより新なる勢力が吸收せられる。それは社會の秩序維持の爲には勢力のある鞏固なる中心を要す、これ「組織を求むる共同意志」の存する所以である。此意志又は要求は社會の安定の必要の爲には容易に他に服從せむとする意志に外ならぬ。若し例へば支配階級が十分に權力を行使する能はざる場合、即ち前述の意義に於ける權力餘剩即ち浮動的權力の存する場合には、これらの勢力が容易に——必要の原則によりて——而して自發的に、かの野生的勢力の中心によりて吸收せられる。かくて、野生的勢力は第一圖の增長を見たる譯である。

分化に伴ひて既に或程度まで、優越的なる勢力を——公生的にか野生的にか——有する集團(又はその代表的勢力者)は如上、一段の道行によりて野生的勢力を得る。彼等の勢力にして、組織上の支配的勢力をたふすに足る時はこゝに、國家の權力が此新興の勢力者によりて掌握せられる。舊き支配者は低き地位に降下しなければならぬ。こゝに階級的シイソオの一の運動が成し遂げられる。注意すべきことは、此新なる野生的勢力の中心となるものは、必ずしも豫め分化に伴ひて既に優越的なる勢力を要せざることである。此第一第二の道行によりて野生的勢力の十分なる集中あれば、組織上の支配者の公生的勢力に打ち勝ちて、國家權力そのものを握り、階級組織全體を變革することが出來る。

然らば此積極的事情とかの消極的事情との交涉如何。思ふに權力の集積十分に行はれ、而も優越階級のものが未だ權力享受によりて支配の能力を失はざる間はかの野生的勢力の十分に成立する餘地がない。分化あれどもそれは成員間の異質性を作るのみ。たゞ組織弛緩して、浮動的權力(これは大抵潛在的權力として存立すと見るべきであらう)の存する場合にのみ、野生的勢力が第一第二の道行によりて成立し得る。從つてかの階級的シイソオの實現はこれら積極的消極的の二事情をまちて始めて可能なりと云はれなければならぬ。

扨此の如くに考察し來りて、知り得る所次の如し。階級構造內に於ける階級關係の變動は一方に道行あるを見れば野

生的勢力の成立し増長して公生的勢力の組織を破壊し行く事に外ならぬが、他方、[illegible]と見れば社會的異質性即ち社會組成の質的方面（かつて量的組立と稱したるもの）に外ならぬ。實に、一定の社會に於ける異質性が與へられてありとせよ、各集團（又は部類――全體社會を構成する部分的集團）がその事實上の能力と社會狀態とよりして所有し得べき社會的勢力の程度はほゞ定められてゐる。從つて異質性と事實に成立する階級關係との聯絡は云はゞ方程式の左邊と右邊との聯絡に似てゐる。左邊が與へらるれば必然に右邊の姿が定められる。勿論階級關係の場合にありては、一定の異質性が與へらるゝ時、これから之を左邊とする右邊にも當る階級關係の之に應じて成立するまでには一定の時日を要し、且つ又、其道行には野生的勢力を利用する人間意志の作用をまつ、然れども、此階級關係の決定因子は人間の構想にも目的觀念にも非ずして、事實に存する社會的異質性そのものにあり。

茲に於て問題は移動する。成員の異質化即ち分化は如何にして生じ來るか。然れども今、私は此問題が更らに限定せらるべきものであらうと思ふ。成員の分化には二の場合がある。一は私が外部的分化と名づけたるものにして、異なる成分が征服又は其他の過程により同一の社會を形成する場合にして、他は私の内部的分化と名づけたるもの、即ち一社會の内部から新なる異質が成立する場合である。前者に於ける異質の成立そのことは社會外的事情にまつ事多きが故に茲には議論の外に置かうと思ふ。内部的分化は如何にして行はるゝか。私はこれを可能ならしむる條件と人々を之に驅り行く原因とに分ち考へたいと思ふ。所謂可能ならしむる條件は即ち社會的密度の増加である。これは私の社會學的組織の全體をあげて其説明に充てたる點であるが故に、今別に論證を加へずに置きたい。たゞ私は社會組成の量的質的の二方面の中、前者が後者を決定する地位にある以上、量的組織に根本的重要さを認め質的組織に副次的意義を認める。人人を分化に驅り行く原因とは何ぞや。それは現存する階級組織そのものである。更に精密に表現すれば、支配階級により

占有せられ擁護せられつゝある所の優越的地位そのものの存立である。それが人人の力の欲望を刺激し、相競うて――鞏固なる慣習傳說の束縛が之を壓迫せざる限り――相異なれるものとならしめる。私は貴族制度乃至階級制度の存立が文化の發達の一の原動力であつたと見るシユモラア降りてはマロツクなどの見方に、ある一面の眞理あることを否定しない。かくて成員の分化は社會的密度の增加が之を可能ならしめ、階級的地位の作用が之を必然ならしめる

私は今分化と云ふことの意義に就いて少しく附言する。階級形成に關する分業說はたとへばエンゲルス、シユモラアの如き有力なる代表者を有してゐる。私がよりて以て階級關係の變動を說明せむとする所の分化も亦單に職業の分化を意味するものではあるまいか。此問題に關しては次の如くに答へたいと思ふ。茲に重要なるはすべての生活方面に行はれる成員の分化ではない、それは社會的勢力の根源又は泉源 Machtgrund oder Machtquelle の分化である。從ひて此分化は職業の分化の一面であることもあり、然らずして、職業とは全く關係なき方面の分化であることもある。勢力の根源と云ふは次のことを意味す。私共の社會的勢力を得るのも常にある一定の資格に於てする、或は勞働者として、或は武士として、或は貴族として。此資格をさして勢力根源と云ふ。而してかゝる資格の自ら他のものと相異なるに至り、從ひて分岐するに至る道行を稱してこゝに勢力根源に於ける分化と云ふ。職業を同じくしてなほ勢力根源を異にするものあり、職業を異にして、かゝる根源を同じくするものもある。よし職業を異にし、又は其他に於ける特徵を異にしても、此勢力根源に於て同一であり、他のものから分離して相互に結合する可能ある時、それは私が考察の對象となし來れる集團をなす。社會的勢力は本來、獨占的性質を有するもの、從ひてこれを獲得すべき資格を異にするものの間には必然に利害の衝突がある。これが屢階級を以て利害の團體なりと信ぜしむる一事情をなしてゐる。此の如く、茲に說く所の分化は少くも理論的には職業の分岐と直接なる關係を有せず。階級性は職業的區別と同一視すべきではない。たゞ

實際上の事實としては、甚だ屢、かの勢力根源の異同が職業の異同と併行し一致する。ここに中古封建制度の階級組織にありては職業の大なる區別がやがて階級的區別を意味してゐた。これらはもとより當時の特殊なる社會的事情に基くものであるが、今は立入りて之に考察を加ふる餘裕がない。

十　之を階級の自壊として見る

私の議論の組立は先づ、階級構造の變動をば階級の自壊作用として見、次に階級關係の變動をもその自壊作用として見むとするにある。前半の仕事はほゞ粗雜ながらにかたづけられたと思ふ。殘る仕事は前に述べたる階級關係の變動が階級の自壊である所以を明にするにある。述べるまでもない事であらうが、階級の自壊と私が云ふ時には此破壊の作用を營むものが優越的地位にある階級であることを意味する。

階級關係の變動、即ちＡＢＣ等の各集團の間に階級的地位の交代が行はれると云ふことは既述の如く、一方に於ては消極的事情を要し、他方に於ては積極的事情を要する。消極的事情と云ふは權力享受の結果として權力の維持能力の喪失せられ、其結果浮動的權力の成立するに至ることを云ふ。積極的事情とは分化によりて野生的勢力がある集團の爲に握らるゝことを云ふ。先づ前者に就いて考へる。權力の獲得從ひて集積は本來求められて實現せられたる事柄である、之に伴ひて權力享受の行はるゝことは見樣によりては豫め求められざりし思ひ付きごとと考へられぬ譯もないが、しばらくやはり意欲によりて成立する事柄と許してみよう。さて、此權力享受は必然に權力支持者の脆弱を來し、權力そのものを手からすて去らしむるに至る。此道行を優越的地位を占有するものゝ立場から考へよ。權力の集積の努力の必然の結果として權力の喪失生ず。集積せらるゝまでは理解し得べき過程である、而も喪失を必然なら

らさる自然の過程である。次に積極的事情に就いて分析を加へよう。分化によりて野生的勢力が新興の集團に集中すること は、一方から見る時優越者の權力喪失と相表裏する事實である、浮動的權力の存立なくば野生的勢力は彼等の手に集中せず。従ひてこれは優越的階級の眼から見る時一種の自然的過程として考へられ得る（新興の集團の側に於ける努力を必要とするにもせよ）。且つ又、階級的地位の存立が分化を必然ならしめたる原因なりと云ふ見地から見ても同様の論結に到達しうると思ふ。野生的勢力を武器として既存の組織を破壊し階級關係を覆さむとする遂行は新興の集團の努力にまつ、即ち理解しうべき過程であると云はなければならぬ。従ひて此變動の全過程は前述の如き一聯をなす、理解しうべき過程は其兩端にあり、中間には自然的過程が介在する。

要求＝階級の保持　　　　　　自然的　　　　　　要求＝階級の破壊

(1)理解しうべき過程（權力集積）—(2)理解しうべからざる過程（權力喪失）—(3)理解しうべき過程（組織の破壊）

優越の地位を占有する階級は常に其の全力をあげて權力を集積し其地位を安固ならしめむとつとめる。たゞ自然はそに與ふるに豫期せざる結果を以てする。此結果は他の階級又は集團をして現存の階級關係を破壊せしめる。階級關係の變動はたゞ中間に介在する自然的過程によつてのみ可能となる。人間意志のよくせざる所の變革は自然によりて遂行せらる。これがある故に階級は常に自己を破壊せずには已まざるものなりと云ふことが出來る。

こゝまで述べ來れば、私の先に掲げたる四の原則が階級關係の變動について亦論證せられたるを見る。第一原則、階級はそれ自らを維持せんとする努力によりてそれ自らを破壊する。これは最後に説明したる所である。第二原則及第四原則、階級の變動を支配するものは社會組成である、階級關係の變動は社會組成の質的方面により決定せられる云ふ二點も明にせられたと思ふ。第三原則、階級の變動は野生的勢力の驟烈によりてのみ遂げられると云ふことは階級關係の變

動についてのみ說明した、而して階級組織の變動に關しては全くこれを省略した。しかし此[illegible]知識より容易に推知し得られることであらうと思ふのみならず、それについては別に多少の敍述を試みたることもある。就いて參照せられむことを望む（階級及第三史觀三五二頁以下）

十一　結　末

私の敍述は可なりに晦澁なる部分が多からうと思ふ。しかしこれは私の考のなほ十分に熟しない結果である。私は階級組織の變動に關してはさまでに頭を惱さずして達すべき所に達し得たと思つてゐる。たゞ階級關係の變動に關しては所謂「机上の直觀」のみが一切を解決してくれさうもない。日本の經濟史社會史に關する材料を幾たびか讀みかへして見た。今こゝにはそれからの一例をも擧げなかつたが、私論の骨子は此涉獵の中にまとめ上げたるものである。併しながら、問題の複雜さ、仕事の困難さは、私の頭をなやます事一通りではない、敍述の晦澁は少からず此點に胚胎してゐる。

私は終にこれが從來の學說ならびに今までの私見以外何を主張するかを述べ以つて小篇存在の理由を明かにしたいと思ふ。

（一）社會結合の形態と階級構造との間に密接なる相互關係の存すること。

（二）優越的階級が其社會的勢力を維持集積せむとする努力はやがてこれ自己の地位を破壞せむとする努力に外ならざること（階級自壞の原則）

（三）階級構造と階級關係との區別ならびに一方が社會組成の量的方面によりて、他方がその質的方面によりて決定せ

られるといふこと。

私は第一の點からして、はじめて、所謂水準化の法則、即ち階級的へだたりの漸次に減少すると云ふ法則(たとへばドグレエフ)に理論的根據を供給し得るものと思ふ。エンゲルスは無階級社會の何故に來るべきやを說いて、生産力の増加は階級の分立を必要としてないからだと云ふ。「階級的分立は『生産の不十分に基いた。故にそれは近代生産力の十分なる開展によりて取り去らるゝであらう』然れども私は不敏にして、何故に生産力の増加が必然的に無階級社會を實現せしむかを知り得ない、生産力の増加がその立場から云へば階級制度を可能ならしめたものではなかつたか。私は信ずる、階級距離のちゞまり、階級消滅の傾向の或る程度までに認めらるゝことはたゞ、社會の利益社會化——社會形態と階級構造との聯絡とを認めてはじめて理解せらるゝことを得る。私の企てはテニイスに新しき要素を附け加へてマルクスに代へむとするにある(一九二六、三、三午後五時三日月村の村居に於て。春の雨野にけぶるを見ながら)。

カール・マルクスを克服する者

マルクスの價値法則と勞働の生産力との關係
再び小泉信三氏の『マルクス評』を評す

櫛田民藏

目次

(一) 批評外の目的

昨年本誌十一月號所載小泉氏の論文は『四度勞働費用と平均利潤との問題を論ず』と題されてあるが、氏のマルクス評は、これでちやうど『四度目』と見える。私はその三度目の氏の論文を讀み疑惑の餘りに『學說の矛盾と事實の矛盾』と題する一論を昨年の本誌六月號に公にし、氏の所說に對する疑問乃至批評を述べて置いた。小泉氏の四度目の論文

は、河上博士に對する回答であると同時に、一部私に對する回答でもある。私は、氏が日[illegible]
評も之を默殺すること無しに回答せらるゝことを見て、甚だ愉快に感じつゝあるものである。けれども、氏の所論に
は、遺憾ながら、やはり不服を申出でなければならぬ。

その不服を申出でるにつき、讀者に一言お斷りをして置きたいことがある。元來、價値法則と云ふが如き問題の論争
は、問題の性質上、論争者の双方が、ともすれば自己陶醉に陷り易く、一般讀者に對して、ずいぶん迷惑をかける傾もあ
るゆえ、私はなるたけ問題をたとへ教科書的でも何等かの貿益ある方面に向けたいと考へる　私が本論に『マルクスの
價値法則と生産力の發展』と題したのは、この點を顧慮したがためである。私は、こゝに兩者の全般に涉る諸關係を系
統的に說述しやうとするのではなく、述ぶるところは、依然として、小泉氏に對するマルクスの辯護である。しかし、
その辯護の中心點は、私から見れば、小泉氏によつては常に閑却せらるゝ經濟價値と生産力の發展との關係にかゝつ
て居る。しかも、この問題は、唯物史觀とマルクスの價値法則との關係に關する諸問題中最も重要な問題と見られる。
私は、こゝに、この點を獨立な一論として論じやうと云ふのでないけれども、小泉氏に對する批評は、自づからこの點
を高調せざるを得ない。私の小泉氏に對する不服の申出でが併せてこの點をも多少明かにするを得ば、マルクス價値法則
の理解を多少とも容易ならしむると同時に、近代の一大思想なる唯物史觀の骨子に、多少とも觸れることになる。讀者、
もし、以下の所論に於て、單に『不服の申出』をのみ見ないで、併せてこの論點をも看取せられるならば甚だ幸である。

（二）　マクスの價値說と唯物史觀との交涉及び問題のいきさつ

價値概念に關する問題は、[illegible]には、價値法則に關する問題とは異なり、前者はたとへ[illegible]に關係し、後者

は主として價値の分量に關係する。しかし、凡て、ものの品質は一定の分量を前提し、ものの分量は一定の品質を前提する。經濟價値に於ても亦同樣である。單位なき價値の分量も、分量なき價値の單位も共に無意味でなければならぬ。然らば、經濟價値なるものは、何に「係はり」存在するか。マルクスに從へば、その品質としての價値は一定の社會の關係に係はり、その分量としての價値は物質的生產力の如何に係はる。換言すれば、價値は一定の生產力の發展に順應する社會關係の一定の發達に係る。この二つのものは、互に前提し、互に條件づけられる。互に條件づけられるが故に、その間に交互作用が行はれる。この交互作用は、經濟社會に於ける發展的な運動の形相を採り、その運動の特質は物の交換價値又は價格の運動として現はれる。マルクスの勞働價値說なるものが、この表面的な所謂「現象形態」としての交換價値の分析より進んで、價値の品質を確定し、次でその分量上の規定に及んで居ることは、既に知られたことである。

かの價値品質の規定、――價値は一般的人間的勞働であると云ふこと――は、一定の社會の關係を前提する。生產力の發展に伴ふ私有財產と分業との社會に於ては、人間は生活の必要に基き、互にその生產物を交換しなければならぬ。また、その交換は、互に他の欲望を滿足する生產物の交換であるばかりでなく、等價物の交換でなければならぬ。この等價交換の必要は、各個人の勞働をして互に等しい品質のものたらしむるのである。價値の品質に關するマルクスの抽象的規定は、單なる論理の抽象とのみ見るべきでなく、同時に「歷史の抽象」即ち歷史上の事實でなければならぬ。この事實が前提せられて、價値の大さが問題となる。假令、個人勞働の支出が他人の需要に應ずるものであるにせよ、換言すれば、それが價値であるにせよ、互に同じ分量の勞働量が交換せられるためには、その交換は必ずや完全な自由競爭の下にあることを必要とする。完全な自由競爭は、結局、社會の需要と供給とを一致せしめ、社會の生產が社會の管理

の下にあると同じ作用をもたらすものである。マルクスが、價値は社會的必要勞働に依つて定まると云ふのは、勿論、この意味でなければならぬ。この自由競爭は理論的の抽象ではあるが、マルクスに於ては、また『歷史的の抽象』でなければならぬ。市場の自由競爭が、商品の交換にとゞまらず、資本の流動を起すところに於ては、價値は社會的必要勞働に一致しない。商品生產は、或は單なる商品生產であり、或は資本家的商品生產である。發達せる資本家的商品生產の社會に於ては、市場は資本家によつて支配せられる。市場が資本家の支配の下に於けるところに於ては、商品市場と同時に金融市場があり、各種產業の間に資金の流動が行はれる。各種產業の間に資金の流動するところに於ては、價値は生產價格に轉化せられる。一概に自由競爭と云ふも、社會の關係の異なるに依つて、その作用は異なり、價値が社會的必要勞働の一定量に依つて定まるための必要條件としての自由競爭は、市場に於ける資金の流動無き場合、即ち單なる商品生產の社會か、又は、資本家社會でも同種產業間の競爭に限られる。私はマルクスの價値說をかく解釋する。思ふに、この解釋は、一方に、マルクスの理論上の特質を認むると同時に、他方に價値法則の歷史的特性を認むるものには恐らく承認せらるべきである。

小泉氏は、マルクス價値說の歷史的特質を認める。それを認むるとき、生產關係の異なるに從ひ、價値は生產價格に轉化せられると云ふマルクス說は、歷史の發展に即する事實の解釋であり、兩者の矛盾は、事實上の矛盾である。この事實上の矛盾を指摘することは、單なる商品の價値法則と資本家社會の價値法則とを混同し、事物を千遍一律せんとする資本家學者に對する有力な批評でなければならぬ筈である。然るに、我國に於ては、小泉氏ほど、この事實上の矛盾をマルクス自身の矛盾として問題とし、マルクスの價値論が交換分配の基礎法則の資格に乏しいことの檢討につとめる人は余り無いのである。私には、これがどうしても不思議に見えてならなかつた。それ故に私は、前號（本誌昨年六月號揭

稿）に於て、マルクスの勞働價値說なるものは、一面論理的な抽象法則ではあるが、この抽象はマルクスに於ては、同時に歷史の抽象であるが故に、社會の生産關係の異なるところに於ては、自から異ならざるを得ないと云ふこと、從つて、同じ商品生産社會でも單純商品生産のそれと資本家的商品生産のそれとは、自から異なるべきであると云ふこと、マルクスの價値理論が單なる抽象でなく、同時に歷史の事實に即するものなる以上、生産關係の異るに從つて、價値は生産價格に轉化せらるべきであると云ふこと、この轉化に關するマルクスの所說を以て、マルクスの矛盾（資本論第一卷と第三卷との矛盾）を云爲するものは、事實を無視し、それ自身思想的に却つて矛盾すると云ふことを指摘した（同時に、同じ議論の中に於ても、また、それと同月にこの問題の補遺として『我等』に公にした拙稿（『資本論冒頭の文句と價値法則』）に於ても、價値は生産の社會關係の變化と共に生産價格に轉化せられるが、價値の大さは、社會關係の如何に依つて變化せらるべきでないと云ふことを述べて置いた。）蓋し、小泉氏批評の對象となつた本人のマルクスが、價値と生産價格とは矛盾すると云つて居るのに、矛盾しなければならぬことを高調することがその說の特徴であるのに、之を批評する人が、價値と生産價格とは矛盾すると云つてせめることは、批評それ自身が矛盾すると思はれたからであつた。そして、マルクス說の批評に從事するものは、私から見れば、先づこの點を明かにしてかゝる必要がある。

然るに、小泉氏の問題は、單にこの點ばかりでない。マルクスは、價値と生産價格とは、生産關係の異なるに從つて矛盾するが、この矛盾は、價値法則からのみ說明せらるべきであり、また價値法則そのものを毫も廢止するものでないと云ふことを論證した。資本家社會では利潤率の平均があり、利潤率の平均があれば、價値は生産價格に轉化せられる。生産價格は價値以上であり、以下であり、例外の場合の外價値とは一致しない。價値法則が行はれるためには利潤率の平均があつてはならぬ。利潤率の平均の行はれるところでは價値は生産價格に轉化せられる。この轉化にかゝわら

ず、價値法則の行はるゝことを、價値法則を害することを無しに證明するには如何にすべきか。この立說は、人の知る如くマルクスが資本論第三卷に於て試みたところである。小泉氏はこのマルクスの論證を以て極めて不論理であるとなし、こゝにマルクス價値說の矛盾を見出して居る。この矛盾に關する問題は、先きの場合の如く、單に生產關係の變動に關する問題でなくして、同時に物質的生產力の問題に係はるものであるが、先きの場合と密接に連絡し、價値法則の歷史的特質を充分に理解することに於て、豫め解決せらるべきものである。それ故にこそ、私は、先回の批評に於て特に競爭に關するマルクスの解釋と氏の解釋とが根本的に異なることを指摘したのであつた。即ち、この問題に關し、マルクスは同じ種類の產業の間に於ける競爭と異なれる種類の間に於ける產業間の競爭とを常に區別し居るに拘らず、氏は却つて一律に解釋して居ると云つたのであつた。マルクス價値法則の歷史的特質を認むる氏にとりては、この點殆んど多く說明の必要がないと思はれたばかりでなく、既に河上博士もこの點をマルクスの原文に就いて述べて居られるから、文字を節約して先きには僅かに十數行にとゞめて置いた。然るに、今回氏の四度目の論文に於ては、この點が著しい問題となりしと見え、同種產業間の競爭の結果は價値と勞働との間に何等の關係をも生ぜしむるものないと云ふことが、屢々論じられて居る。そこで、私は小泉氏に對する私の『不服』を、こゝから始めることにする。

(三) 同種產業部門間の競爭と勞働の生產力

同種產業の間の競爭は、個人價値を市場價値(一般的價値)に落ち着ける運動である。しかし、同じ種類の產業に於ても、各產業はそれぞれその生產力を異にするがゆえにに剩餘價値は異なり、たとへ、剩餘價値は同じでも、資本の構成は異なり、この異なる依つて異なれる利潤率か發生する。これに反し、異種產業間の競爭は、個人價値を市場價値に落ち着

ける運動ではなくて、市場價値の成立に依つて各種產業の間に發生する異なれる利潤率を平均する運動である。前者は同種產業の商品に同じ價値を强制すると同時に、その所屬の各產業の間に異なれる利潤率を許す運動であり、後者は、各種產業の間に同じ利潤率を强制すると同時に、各々異なれる價値の存在を許す運動である。この兩者は區別しなければならぬ。そして、後者は必ずや前者を前提しなければならぬ。何となれば利潤率平均の運動が利潤率の差異を前提することと無しには、何を平均するかが無意味であるからである。――極めて大雜把に云へば、[illegible]格の運動に關するマルクスの發見である。(資本論第三卷一五九頁、及び詳しくは剩餘價値學說第二卷第一册、五四頁――七一頁、二六〇頁、その他各册の隨所)。

いま、小泉氏は、マルクスのこの說に滿足しないのである。氏は云ふ『價値が價格の旋回中心たることを示さんとすれば、どうしても、價格が價値以下に離れた場合に商品の供給が減少し、その價格以上に離れた場合にはその供給が增加するの約束あることを言はなければならぬ。當同產業部門內でのみ競爭行はれて、產業部門間の資本流動が遮斷されて居る場合、この供給の減少又は增加は、如何にして行はれるか。試みに、資本の流入を待たずして生產量は、如何にして增加せられるかを考へて見やう。先づ、勞働者の勞働時間を延長すると云ふか。然らば、搾取率即ち餘剩率の變動を如何にするか。生產技術の改良に依ると云ふか。然らば供給量が增加すると同時に、價値もまた下落するから價値價格との距離は却つて增大することがあるのを如何にするか』(『本誌』十一月號六八頁―九頁)と。これが、河上博[illegible]私との双方に對する氏の逆質問である。小泉氏には、需要が增加した場合に供給は、之と交換せらるゝ他の產業から資本の流入無くして如何にして增加するかと云ふことが問題なのである『玆に最も重要な問題が存するのである』。そ[illegible]こに『重要な問題』のあることだけは、私も小泉氏と全く同感である。しかし、氏が『重要』と云ふのは、そこにマル

スの矛盾が發見せられると云ふに反し、私の重要と云ふのは、そこに小泉氏マルクス評の無理解が存在せしめられることにある。小泉氏はその供給増加の不可能を信ずるに反し、私はその可能を信ずるものであり、問題を重要視することに於て所見を一にするに拘らず、結論は不幸にして逆倒する。何故であるか。先づ小泉氏の論證から吟味せしめよ。

小泉氏は云ふ。『勞働者の勞働時間を延長すると云ふか。搾取率、餘剰率の變動を如何にするか』と。これはどう云ふ意味であるか。單に『剰餘率の變動』とあるから、その増加か、減少か、いづれかであらうが、その『如何せん』と云ふところから見れば、その減少の意味である。剰餘率が増加して『如何せん』と嘆ずる資本家はあるまいから。資本家は剰餘價値率を上げるためにこそ勞働時間を延長する。剰餘價値率 $\left(\frac{m}{v}\right)$ が増加せられたならば、他の事情にして同一なる限り、利潤率 $\frac{m}{c+v}$ は増加せられる。資本家の費用價格 $(c+v)$ をKとすれば、利潤率は $\frac{m}{K}$ であり、その増加と共に $1+\frac{m}{v}$ も増加し、従つて、商品の價値 $v\left(1+\frac{m}{v}\right)$ も増加する。この場合は生産量の増加と共に、社會的必要勞働時間が延長せられるのである。例へば、勞賃が割安であり、生産を増加するためには、機械の應用に依るよりも、勞働者を使役してその勞働時間を延長する方が資本家に有利な場合であらう。資本家的費用(費用價格) $c+v$ は勞働時間の増加のみに依つてのみ短縮せられる。剰餘價値率の増加を喜ばぬ資本家は無い。もし、この場合、單に人間勞働の支出の増加のみに依つてのみ短縮せられるといふなら、小泉氏がこの意味で『之を如何せん』と云ふならば、ノーンセンスである。

如何に、批評は自由とて云つても、マルクスを批評しやうと云ふほどの人に、批評の對象に關し、このやうな初歩な行違ひのある筈はない。そこで、小泉氏が所謂『時間の延長』と云ふことを勞働量の増加、使用勞働者数の増加、勞賃量の増加、その勞賃を生産するために必要な勞働時間の増加と解することが穏當である。然るときは、可變資本 v は増加するが故に、m が一定な場合には剰餘價値率 $\frac{m}{v}$ は減ずる。けれども、この剰餘率の減少は、資本家をして毫

も『如何せん』と嘆せしむる理由とたらぬ。既に、問題は、可變資本の増加であるか、この増加に、使用勞働者數の増加であり、使用勞働量の増加である。剰餘率は減少しても、使用勞働量にして増加せんか、剰餘價値の總額に變化なきか又は却つて増加する。Mを以て剰餘價値の總額を表はすとすれば、$M = v \times \frac{m}{v}$ であり、剰餘率 $\frac{m}{v}$ は減少しても、vが増加すれば、mに變化はなく、vの増加にして剰餘率減少の割合より大なるときは、Mは増加する。即ち、資本の勞働者『掠奪』の程度が減少しても、使用勞働者が多いならば、剰餘價値總額は大きいのである。反對に、可變資本vが減少しても、剰餘率 $\frac{m}{v}$ が一層増加するならば、餘剰總額は増加する。即ち、資本家は、使用勞働者を減少しても、現業勞働者の勞働時間を延長することに依つて、餘剰價値を増加することが出來る。これは、勞働の供給が絶對的に無い場合又は現在より少ない場合でさへ、一定の程度に剰餘價値増加の可能あることを意味するに外ならぬ。況んや、可變資本の増加、勞賃の増加、而して勞働者數の増加は、剰餘時間の延長を伴はぬと限つたわけはなく、また勞働者十人が二十人になつたとき能率が一定であるはずもあり得ない。して見れば、如何やうな意味でも、小泉氏が『勞働時間にして延長せんか、剰餘率の減少を如何せん』と云ふ批評の出發點は錯誤の出發點でなければならぬ。問題の主體は資本家だ。自分の利益を少くするために勞賃をふやす資本家はどこの國にもあつたことはない。と共に、彼等が生産物の増加を計るのは、正にその資本家的費用殊にその勞賃を減少することに依つて利潤率を大ならしめんがためである。剰餘價値率とは $\frac{m}{v}$ であり、一般に時間の延長とは、vの延長でなくてmの延長のことである。これほどのことを云ふのは、揚足取りなるかに見え、云ひ惡くもあるが、『こゝに重要な問題がある』。

元來、勞働價値説の否定論者には、價値と價格との區別が無いか、又は不明である。であるから、商品に含まるゝ人間勞働の支出としての必要勞働と、資本家がそれを生産するための支出としての資本家的出費との區別も無い。價格は

資本で定まるとか、又は生産費で定まるとか云ふ場合の資本なり生産費なりは、云ふまでもなである。資本家は自己の出費を節約することを知つては居るが、價値即ち必要勞働は之を必ずしも節約しやうとするものでない。何となれば、資本家的生産は、賃勞働を前提する生産方法であり、價値として商品に體現せらるゝ勞働は自己の勞働ではなくて他人の勞働であるからである。從つて、一般に社會的必要勞働と云ふものは、彼等の意識の外にあり、只だ貨幣で表はされた剰餘價値即ち利潤額だけが問題なのである。これは、資本家を代表する經濟學者の思想にも當然影響する。その結果は、勞賃の生産のために必要な勞働時間と商品の生産の爲に必要な勞働時間とが屢々混同せられ、勞働の『支出』を勞働の『費用』と名づけ、或る種の學者は（小泉氏は別とし）事實勞賃を意味する。勞働時間の延長が直ちに勞賃の生産に必要な勞働時間のそれ（事實勞賃の増加）と考へられ、一般に社會的必要勞働時間の延長が剰餘價値率の減少と云ふが如き結論に到達するその一例である。けれども、事實は正反對である。時間の延長は剰餘價値率の増加であり、設問の場合に於ける資本家は『之を如何せん』と云つて氣をもむ必要は毫も無く、むしろこの方法で生産を増加する。尤も、この方法に依る供給の増加は、勞働時間の延長又はその之を伴ふ勞働量の増加を假定すれば、單に生産に必要なる勞働時間を延長するに依つてのみ生産量が増加せらるゝのであるから、勞働の生産力を増加せしむるものではないのである。生産力の増加は、終局に於ては勞働時間の減少を伴はねばならぬ。生産力が増加せられないで、しかも需要に應じて供給量が増加せらるゝ場合は、當該産業の間に技術の改良が一定の程度に行はれないことを豫想するものである。その一部分行はれても、産業の大部分の生産が勞働者の驅使に依つて行はるゝときは、平均勞働時間は、これ等の高き勞働時間に依つて支配せられ、從つて、市場價値は不利な生産條件の産業に依つて定められる。然らば、價格の高きに應じて價値も高き道理であり、兩者の絶對的不一致を主張すべき理由はない。

しかも、問題に於て時間の延長が唯一の方法である必要は毫も無い。小泉氏設問の場合は需要が供給に超過して居る。問題は同じ種類の産業間の競爭である。しかし、たゞ一人の資本家の產業ではあり得ない。それ等の資本家は、それぐ\異なつた生産條件の下にある。從來價格の關係から費用を償はぬため、前生産期間に於て、生産から退却しなければならなかつた資本家もあり、從つて、ねかれた生産手段もあり勞働者もある。資本家社會ゆえ、これ等のあることは、またその特徴でもある。産業資本の外、商業資本もあれば、生産に用ゐられたことの無い退藏貨幣もある。さらに、それと交換せらるゝ他の産業部門、又はその他の買手の側にも同じ事實が無ければならぬ。これ等現業資本に屬しない生産及び流通手段の全部又は一部は、物價の騰貴と共に何故に當該産業部門の生産資本として動員せられないか。この場合、他の産業部門から流入するものは、現にその部門に於ける現業生産資本に屬するものではないから、これ等の流入があつたにしても、それがその部門の生産力を低下せしむることに依つて、他の部門のそれを高めるものと云ふことは出來ない。この意味の資本の流出入は、問題の同種産業部門の競爭の場合にも勿論認められる。マルクスが資本論第三巻の一節（一七〇頁）に、需給の關係に基く資本の流出入に關說して居るのは、この意味でなければならぬ。それは生産手段の資本化には相違ないが、小泉氏の云ふが如き利潤率の平均を求むる異種産業間の資本の流出入とは全く異るものである。物價騰貴のために新に生産に加はる資本勞力は、價値そのものを變化しないにしても、供給を増加せしむることに依り、價格の下落に作用しないか。物價の騰貴とは價値以上の價格のことであり、いき、價値の一定な場合に供給が増加するならば、一方價格の騰貴に伴ふ需要の反落に伴ふて、價値と價格とは何故に一致し得ないか。この場合には勿論生産力の増加がある。生産力の増加は、『終局に於て』必要勞働時間を減少せしむるものではあるが、それは、同種産業の全面を支配する場合に限り、直接に必要勞働時間を從つて價値を低下せしむるものではない。前例に此

の場合でなければならぬ。

小泉氏に從へば、需要だけが伸縮自在で、供給は凡て固着的である。勞働時間も固着、價格の騰貴に伴ふ生産力の増加も固着である。しかし、その一定の制限にかゝはらず、毫も固着であり得ない理由は、一應述べたところである。そして、需要が物價の騰貴に伴ふて反落することは、小泉氏の認むるところ、この反落がまた價格の一致に作用することは何の疑もない。然らば、同種産業部門の競爭に於て、特に之を何等か固着的に考ふる必要は毫もない筈である。元來同部門の産業の競爭と云ふことは、當該部門の商品の供給者と、その買手即ち需要者との間に於ける市場の競爭がないと云ふことでは毫も無い。これが無くては、獨占價格が成立するだけである。氏が屢々引用する價値で行はるゝ條件の一つとしてマルクスが『賣買一方に何等の獨占無きこと』と云ふのは、こゝを以てである。このことが——この場合には同種産業部門間の商品の供給者とそれの買手との間に於ける市場の自由競爭——前提せられて、同種産業部門間の競爭は、價格を價値に一致せしめるのである。しかし、このことは、小泉氏の解するが如く直ちに利潤の平均を求むる資本の流出入、即ち異種産業間の資本の流出入を意味するものではない。くどいやうであるが、マルクスの同種産業間の競爭と云ふことは、異種産業間の競爭に對して云ふのであつて、その商品の買手との間に於ける競爭の自由を排除するものでないことは云ふまでもない。然るに小泉氏には、利潤の平均を求むる資本の流出入が無ければ、世界は固着して動かないかに見える。しかし、勞働の生産力は、利潤率の平均なきところ、交換者が單に等價物の交換を目的とするところに於ても、否、全く商品交換なきところに於ても、日々夜々動くのであり、固着ではあり得ない。そのあり得ないことは、小泉氏も一應知つて居る。小泉氏は問題に關し、語を次で云ふ『生産技術の改良に依ると云ふが、この生産技術の改良こそ勞働生産力が固着なものでない有力な證據だ。けれども、氏に從へば、これも固着なものであり、然らば、供給

量が増加すると同時に價値も亦た下落するから價値と價格との距離は却つて増大することのあるのを如何にするか」云云と。

需要の一定な場合に、物の供給が増加すれば、價格はもちろん下落する。しかし、價値は低下しない。百人の生産者がいつしよに働くならば、それが別々に働くよりも、何倍かの生産物（使用價値）を増加する。けれども、價値と使用價値とは異なる。生産力の増加と云ふことは、使用價値を、生産物を増加することである。生産物、使用價値の増加は、直接に價値即ち社會的必要勞働に關係するものではない。その必要勞働にして變化しない限り、百人の勞働は同じく百日分の價値である。只だ、その一方はいつしよに働くことに依り、生産力は増加し、從つて生産物は増加するから、その一個當りに就いてはむろん著しく安いものになる。それ故に、これ等の生産者は、それを價値以下に賣つて、しかも儲かるのである。價値で賣るならば、いよ／＼もうかる。只だこの安い生産物が市場に於ける供給の全面を支配するに至るならば、價値は自から低下すると同時に、之と競爭する不利な條件の個人生産者は倒され、價格も自から低下する。生産技術の改良に依る生産力の増加の場合も亦た同樣である。しかし、この場合は時間を延長する場合とは、異なる關係にある。と云ふのは、既に生産技術の改良があるのであるから、時間は一定でも勞働の能率が高められ、その改良が奢侈品でなく日用品の方面に起るならば、勞働者の生活費は低下し、從つて勞賃率は低下するが故に、必要勞働時間は短縮し、その短縮に依つて、剩餘時間は増加し然して剩餘價値率 $\frac{m}{v}$ は増加する。しかしこの場合は、生産用具そのものゝ改良に伴ふて原料や補助材料やも増加し、資本部分に於ける所謂不變資本Cの所謂可變資本vに對する割合は増加せられる。一言にして云へば、資本家は比較的多くの資金を不變資本に固定する。可變資本の割合に變化なき限り、資本は増大する。從つて、剩餘價値率 $\frac{m}{V}$ は上つても、利潤率 $\frac{m}{V+C}$ は低下する。（C+V をKとすれ

ば、利潤率は $\frac{m}{K}$ であり、それの減少と共に $1+\frac{m}{K}$ も減少し、價値 $K(1+\frac{m}{K})$ も亦た低下する。これは、勞働者の勞貨が高く、勞働者を多く使用するよりも、機械を使用する方が割安な場合である。機械の使用が産業の大部分に行はれ、供給の全面がそれ等有利の生産條件の産業に依つて支配せられるならば、價値は自から低下せざるを得ない。しかし、問題の場合に於ては、單に一部分に於ける機械の應用が、需要に應じて供給を增加せしめ、他方價格の騰貴に依る需要の反落と共に、價値に變化なきに反し、價格は下落し、價値價格の一致が得られるものと見なければならぬ。その有利の生産條件に於ける低い價値に於て價値價格の一致するのは、問題の如き、供給に對し需要の增加する場合でなく、反對に供給に對し需要が減少する場合である。が、いづれにしても、生産技術の改良に依つて、『價値と價格との距離は却つて增大する』と云ふやうなことはあり得ない。

かく考へて見れば、小泉氏の取つた二つの例は、つまり、マルクスの所謂絶對的剰餘價値、及び相對的剰餘價値と生産力との關係に係る。二つの場合とも、資本家はその利潤目的のために勞働の生産力を通して需給を調節する。勞働の生産力の大小は、終局に於ては、價値を決定するものであるが、直接價値に關係なきか無きか故に、價値それ自身に變化なきときは、生産力の增減に基く需給關係の如何か價格を價値に一致せしめる。また生産力の關係が價値それ自身を**變化するときは、價格は自から變化して結局價値に一致せさるを得ない。**

一の産業部門は生産力を異にする各個の生産者から成るが故に、その價値それ自身の變化する場合は、高き勞働時間と、低き勞働時間と、又はその平均の何れにおちつくかは、これ等の生産者の方面に於ける競爭の強弱と、需要者側に於ける競爭に係る。需要者側の競爭に依るといふも、小泉氏の信ずるが如く、この場合利潤率の平均を求むる資金の流動を必要としない。マルクスは、この場合に於ては、需要者の方面を單に商品の『買手』とのみ看做してゐる。その

買手は資本家でもあり、また消費者でもあるが、いづれにしても價値の高低に應じて需要を増減する商品の買手である。そこには、自由競爭の下に於ける商品市場はあるが、未だ金融市場は無く況んや證券市場は無い。生産は資本家的生産であり、交換の關係か資本家的でないといふことは、一個の理論の抽象に過ぎないかに見ゆるが、この抽象は歴史の抽象である。株式及び社債か取引所の全面を支配するに至つたのは、資本家社會が一定の發達を遂げての後のことであり、初期の資本家社會に於ては、生産は資本家的であつても市場は尚ほ商品市場であつたと見られる。今、これ等歴史上の事例に立入ることはこゝでは必要としないが、同種産業間の競爭か價値に無關係であると云ふ説は全く受取り難く、殊に生産力の増加は直ちに價値の低下であると云ふ説にはますます贊成出來ないのである。

生産力の増加が價値の低下を伴ふに至るには一定の媒介を要することは既に一言した如くである。元來生産力の増加とは使用價値の増加であり、使用價値は價値の擔當者であり、直接價値に關係するものでないと云ふことはマルクスが資本論の開卷第一に指摘するところである。(小泉氏は或は云ふかも知れぬ。自分はマルクスを批評するのである、説明をきくのではないと。批評は自由である。しかし批評の對象を明かにしない批評は不自由である。)生産量（即ち使用價値）が増加すれば何故に價値は低下しなければならぬか。價値は必要勞働時間である。必要勞働時間は同じでも、技術の改良が行はれ、勞働の能率が高められるならば、生産量は直接價値に關係無しに増加する。また交換に於ては、同じ商品の價値は、之と交換せらるゝ他の商品の變動に依りて或はより多き、或はより少なき分量の使用價値に依つて表はされる。價値と使用價値とは、直接に關係するところは無いのである。そして、價値それ自身の變化は結局社會的必要勞働時間の變動に求むるより外ないのであるが、しかし、この變化は、生産力發達の關係がその必要時間を變化するに依つて可能なのである。それ故に生産量の増減が價値に關係するのは、生産力増減が社會的必要勞働時間を増減する場合

である。その全くそれ無き場合あること勿論、その減少する場合と雖も、生産量の增加は[illegible]

なの可能あるが故に、價格は之に伴ふて減少しなければならぬ。即ち、小泉氏が設問の場合は、結局は勞働の生産力の發展に依つて解決せられる。

こゝに勞働の生産力の發展とは、單に生産技術の改良ばかりでない。生産技術の改良はそのひとつである。勞働組織の改良もそれであり、自然力の開發もそれであり、槪して自然力、勞働力及び技術の進步である（その詳細は、小泉氏の熟知する資本論第三卷第五章『不變資本の應用に於ける經濟』と題する一章に讓る）、氏は問題に關するもうひとつの論據として、生産量の增加のためには、原料其他の不變資本部分の增加を必要とすることを指摘し、『生産量の增加にして原料の增加を要せぬものは無い』（『本誌』同上頁）と云つて居るが、何故に氏は、生産力の增加と云ふことを勞働時間の延長と『生産技術』だけに限らなければならぬか。よし、かく限るとしても、既に技術の改良と云ふ以上、その改良は、何故に原料や補助材料の生産に行はれないか。何故に自然力の開發にも行はれないか。何故に交通機關にも行なはれないか。何故に一の技術の改良は、また他の技術の改良を促さないか。そして、小泉氏は何故に『技術の改良』を單に生産用具だけに限らなければならぬか。同一部門の産業と云ふことは、單一の企業ではなく、生産力の發達と云ふことは、その單一の企業の單一の生産用具の改良ではあるまい。小泉氏の限定は余りに任意であり、また余りに固着しては居ないか。かやうな任意な限定と固着とは、毫も事實に添ふものでない

もし供給の側を任意に限定し得るならば、需要の側も同じやうに任意に限定出來る。『需要は伸縮自由である』といふことは、何等無制限な意味をもつものでない。需要は一定の購買力として何等の交換價値又は貨幣の一定量である。便宜のため之を純粹の資本家社會で見るならば、資本家の年々の資本の補償部分、純收入の中から年々の生産の新設又は擴

張に振向けられる部分及び資本家勞働者の個人的消費部分だ。年々の資本の補償部分は、初め生産に要した過去の勞働の一定量だ。年々の新設擴張部分及び資本家及び勞働者の個人的消費部分は、年々新た生産に必要とせられる勞働の一定量だ。即ち年々の一國民の需要は、過去及び現在の必要勞働量の一定部分を現はすものである。問題を複雑にして、地主や利貸資本家の所得乃至有産無産の勤勞所得者の收入を入れて考へても、同じことである。また問題をせまくして、小泉氏設問の場合に於ける同種産業部門の生産者の製品に對する需要者に限つても同じである。これらの需要者の購買力は、自分達が買手である前に、自分又は他人の勞働の一定量を代表する生産物の賣手であつたためなのである、その購買力を代表する交換價値又は貨幣は、どのやうに分配せられても、自分又は他人の必要勞働の一定量を代表し、その必要勞働は結局勞働の生産力の大小に依つて決定せられる。もし、それで問題が漠然だと云ふならば、例へば、東京市の震災復興資金の結局の出所を、外債だとすれば、その外債を何で拂ふか、その支拂に當てられる輸出品はどこで生産せられ、何を代表するかと云ふやうに、また、最も卑近には、あなたも私も月々月給を受取るが、それの出所をそれからそれへと、追求すればよい。私の月給などは、一二回の媒介を經ると、ぢきにおちつくところにおちつく、要するに貨幣は何であるか何處から出るかと云ふ問題を起せばよいのだ。さうしたならば、マルクス勞働價値説に於ける抽象的な價値の品質及び分量に關する規定は、小泉氏の云ふが如き無意味なものでないことが判るであらう。しかし、價値の現象形態たる貨幣を神様の位置に祭り上げて置く限り、勞働價値説は無意味となり、また需要だけが、無制限に伸縮自由なものとなる代りに、勞働の生産力の發展に關する問題は固着不動のものとなる。

(四) 文義上及びこれに關係する諸問題

さて、私はこれまで小泉氏の設問の順序に従つて、同種産業部門の競爭ある社會、私から云へしあつても、市場は尙まだ資本家に依つて充分に支配せられて居ない時代、歴史的には、概して初期の資本家時代に彷徨して居た。そこでは、生産技術の改良は未だ充分でなく、生産量の增加は主として、勞働の驅使に依つて遂げられた。手工業が尙ほ多少とも幅をきかせる。地主は尙ほ熊の皮にすはつて居る。社會の空氣は、新らしい生産方法に對して贊否相半ばする。しかし、私はこゝに歴史的な追想を逞うする閑を許されて居ない。小泉氏の設問は歴史を遡つて小生産者の社會へと移るから、私も亦たついて行かねばならぬ。しかし、ことの順序としてか、小泉氏は先づ、最初小泉氏が問題とし、次で私が問題とした資本論冒頭の文議が再論せられて居る。しかし、この點に關する小泉氏の所論はこの場合、いかにも單純に見える。理由は最初に『資本家的生産方法の行はるゝ社會の富は云々と』書いてあるから、そこに論じられてあるのは資本家的商品だと云ふだけの主張である。ものゝ初は最もむづかしい。殊にマルクス特有の理論に於て然るべき理由がある。そこには全く夜でもなく、全く晝でもなく、黎明の如く又薄暮の如き景色がある。或る意味で實に『渾沌』の相である。そこに述べられた法則が、或は單純生産の商品のそれなるかに、或は資本家的商品のそれなるかに解せられるのはこれがためである。河上博士の如き、それの何れでもなくて、單に『商品が商品のとして法則』と解せられるのもそれがためである。河上博士はかつて或る學會の席上、この章を論じ去り論じ來つて、それは『純粋な姿に於ける商品とも云ふべく、』また『實に何とも云はれぬもの』であると結ばれたことがある。この『何とも云はれぬ』と云ふことが、私をして『als-ob の哲學』と云ふ本の名前(名前だけ)を思出さしめたのである。『als-ob』は直譯すれば『かの如く』であつて、『實に何とも云はれぬもの』であり、幽明の界にもある。しかし、それでは、餘り影が薄く、私は、マルクスの價値法則を單に意識の問題にのみ・しかも、幽明の界に置く解釋に贊成することが出來なかつた。私はエンゲ

ルスに從つて、他面之を歴史的に解釋し得べきを信じ、その商品法則を以て、歴史的には單純商品生産の價值法則と解すべきことを主張したのである。これは、反對に余りにマルクスの理論を『平凡化』するものであると云ふ非難があるかも知れぬ。しかし、マルクスの理論は、一面には、複雜から單純に進むけれども、他面單純より漸次複雜に進み、この點に於て歴史的發展の事實と照應するところを見る。しかも、小泉氏が常に問題とする一卷と三卷との矛盾と云ふことは、かく解するとき、學說の矛盾でなくて事實の矛盾となる。しかも、かく解することは、模型的な單純商品社會と模型的な資本家の社會とを對立せしむることになり、マルクスの理論の發展を明白ならしめる。また、之がために價值法則の理論的一般的性質の害せられないことは、この解釋に於て、第一、價值法則は單純商品生産に行はれ、第二に資本家社會に於ては同種産業部門間の競爭の場合に行はれ、第三、異種産業部門間に競爭ある場合於て價值は生産價格に轉化せられるも、その資本家社會を全體として見ればその同じく行はれるに依つて明かである。然るに河上博士に於ては、それは商品としての法則であるに拘らず、單に資本家社會に限られ、單商品社會には行はれない。小泉氏は、河上博士とは常に解釋を異にするにかゝはらず、それを資本家社會の法則と見るの點に於ては博士と一致する。資本家社會の同種部門の問題に於ては、私は博士と一致し小泉氏と離れる。それ故に、この點で私は博士とは或は一致し、或は離れるけれども、小泉氏とは離れる。博士は、この點に關し、その主宰する『社會問題研究』二冊をうづめ、私が嘗つて『我等』に公にした一論と同題(『資本論冒頭の文義と價值法則』)で批評を公にせられて居る。私は自分の蒙を啓くため、之を熟讀したが、不幸にして未だ合點出來ずに居る。近いうちに その理由を述べて見たいと思つて居り、詳論をその時に讓る。

マルクスが一方で價值と生産價格との區別を力說しながら、他方で價值と所謂『自然價格』(事實、生産價格)とを

同一視して居ると云ふことがまた小泉氏の非難の的となつて居る。それには、マルクスの通俗書『賃勞働『勞賃價格及び利潤』が屢々引合に出されて居る。しかし、小泉氏は、『片言隻語に餘り重きを重く解釋法の危險多きを認め』『特に資本論以前の著作に就いて、マルクス思想發達の經路を尋ね、彼が價値が價格の旋廻中心たりと說くことが一朝一夕のこでないことを』示さんとして、その『第一思想』は、右のマルクス『賃勞働と資本』『價値價格及び利潤』資本論第一卷の至要部に現はれ、その『第二思想』（價値と生產價格とを區別する思想）は、『一八六二年の書簡と資本論第三卷』に現はれる云ふことを言明せられる。つまり、マルクスの矛盾と云ふことは『一朝一夕のことでない』と云はれるのである。餘計なことかも知れぬが、それほどマルクスの矛盾が一朝一夕のことでないことか明かなれば、それを簡單に『矛盾』として排斥してはならない何かの理由がありはせぬかと云ふ疑問も起りそうに思はれる。『マルクス思想發達の經路を尋ね』と云はれるが、單にこの問題たけに限つて見たところで、これに最も重要な關係ある剩餘價値學說史の全部が氏の所謂資本論以前のマルクスの著作研究なるものに殘されて居たやうに思はれる。『一八六二年の書簡』も重要には相違ないが、當時こんな珍しいものを御研究になる前に、何故、もう少しそれに必要なあたり前のものを御參考にならなかつたかと惜しい氣もする。『一八六二年の書簡』も書簡だが、つまり問題は資本論以前の著作として例のマルクスの通俗本『賃勞働と資本』及び『價値價格及び利潤』とマルクスの科學的研究『資本論』との問題である。そうして見ると、小泉氏が問題とする『價値價格及び利潤』其他に於てマルクスが價値と自然價格とをいつしよにし、資本論に於て價値と生產價格（自然價格）とを區別したと云ふことは、私見では、問題それ自身が既一應その答をも含んで居る。と云ふのは、本の由來から見て、前者は、どこまでも勞働者に對する『通俗』の講演であり、後者は、『經濟學批評』と云ふが如く！この方面に於ける在來の所謂科學に對して同じ方面に於ける他の科學を對抗したる『科學的

研究』である。前者に於ける價値に關する法則の主たる目的は、それに依つて單に利潤の出端を明にせんがためであり、後者に於ては、それと併せて理論的にも歴史的にも、その發展的様相を示すことが重要とせられる。價値と所謂『自然價格』、又は生産價格との嚴格な區別は、後者に於ては、『批評』の主眼をなすに反し、前者に於ては、むしろ屢々『通俗』の趣旨を害する。一方に於ては、『剩餘價値』と『利潤』、『剩餘價値率』と『利潤率』と云ふことが嚴密に區別せられ、それに依つて常に正統派の經濟學が批判せられあるに反し、他方に於ては、一定の斷り書きの下に、却つてそれがいつしよにせられて居ることは、小泉氏の熟知せられるところ、これは同じ『通俗』の趣旨でなければならぬ。かの『通俗』書に於ける自然價格と價値との同一視がそれほど問題になるならば、利潤と剩餘價値、利潤率と剩餘價値率との同一視は當然相關連して問題となるべきであり、その他種々な點が一樣に問題とならざるを得ないのである。切り離された只だひとつのことだけが何故そう小泉氏に問題となるか。氏にして若し、これ等の『全體』を問題としたならば、必ずや、兩著作の趣旨と構造に想到すべきであり、問題は極めて單純化せられる。しかも、その通俗の理由に就いては斷り書きもある。例へば、問題の價値と自然價格に就いては、河上博士の云ふが如く『獨占及びその他若干の modification の作用——今私は、これ等の問題に立入ることは出來ないが——を除外するならば、』もそれであり、それより少し前のアダム・スミスの言を引用したあとには、『私は今この點を進んで吟味することが出來ぬ』とあるもそれである。小泉氏は自由競爭は、競爭者双方の間に必ず資本の流出入を伴はねばならぬと解釋して居るが、既に述べた如く、マルクスが資本論第三巻に於ける價値で行はるゝ第三條件の競爭の自由と云ふことは、『賣買一方に獨占のないこと』と云ふので、必ずしも資本の流出入の自由を必要としない。資本の流出入の自由が自由競爭の條件であるのは、特定な資本家社會に於てであり、そこでは、市場は資本家に支配せられ、異種産業間の競爭に依りて價値は生産價

格に轉化せられるのである。『若干のモデヒケーションの作用』と云ふのはそのことである。
問題の内に答が含まると云ふのは以上の理由であり、『通俗的』と『科學的』の差異であるが、さて、『通俗』と云ふことは、科學的要求を全々無視してよいかと云ふと斷じてそうではない。それが科學的な要求と異なる所ありとせば、その異なるところは、また一定の意味で科學的な要求に從ふのでなければならぬ。何故にマルクスはその通俗本に於て、生産價格（自然價格）と價値とを同一視してはならなかつたか。これが新たに問題とせらるべきである。こゝでも問題は答を含むと云ふのは、それは科學的な要求に從ふ『通俗』であるからである。問題は、生産價格の總計は價値の總計に等しいとか、費用價格は價値に等しいとか云ふマルクスの『全體的』な考察と當然相關連するものである。費用價格は價値に等しいと云ふことは、マルクス批評家に依つて、マルクスは、資本論第三卷に於て個々の商品に就いて價値法則の適用を廢止しながら、資本に就いては之を支持して居ると云つて非難せられるが、これは、マルクスが資本家學者と異なり『特殊』と『一般』『個別』と『總體』とを常に區別する彼の特徴を示すものである。利潤率平均のある資本家社會では明かに價値と生産價格とは區別しなければならず、之を同一視するときは、自然單なる商品社會と資本家社會との特徴も無視せられる。これは資本家社會の本質を隱蔽し、その永久性を理由づけることになるから、マルクスは斷然之を排撃した。然し、それにも拘らず、マルクスは、費用價格は價値に等しく、生産價格の總計は價値に等しいと云ふ見解を把持した。前者は、事物の個別性の考察であり、後者はその總體性の考察である。兩者相俟つて始めて事物の眞相が明かにせられる。その一を見て他を見ないものは林を見て山を見ざるか、山を見て林を見ざるかであり、いづれも片手落に過ぎぬ。マルクスは双方を見た。双方を見たればこそ一方に價値法則の適用を廢止しながら、他方にその適用を支持するのである。試みに、資本は、機械や原料や補助材料や生活品やいろ／＼なものゝ結合であり、物質的に

は、鐵や石炭や木材や米麥やその他何れかのであ[illegible]の上に又は[illegible]ふことが[illegible]である。これは等の商品はいづれも資本家的商品とすれば、その平均結續の狀態に於ては、例外の外、價値以上以下の生產價格で定められ價値では定められない。けれども、資本はそれ等のものゝ商品の全體より成り、資本として不可分の一部を成して居る。これを一體として見るときは、それに含まるゝ價値以上價値以下の商品價格は互に相殺せられて、『大體に於ては』價値に等しいと見られる。マルクスの價値法則を考察するに、一般的、特殊的及び全體的の三場合に涉つて居る。一般的とは、純粹な單純商品の價値法則及び同種部門の資本家間に競爭ある場合の資本家商品の價値法則、特殊的とは、異種產業部門間の競爭に於ける價値法則全體的とは、資本家全社會を一括して見たる場合の價値法則これである。利潤率の平均に依り、價値が生產價格へ轉化せらるゝ場合は、一般的と全體的との間に於ける橋渡しをなして居る。このことは資本論第三卷第十章に精通する小泉氏の自づから看取せらるゝところと信ずる。同じ事物に對するマルクスのこれ等それ〴〵の觀點の結果は、もし之を不用意無連絡に見るならば、必ずや矛盾し衝突する。しかし、之を相互關聯的に見るとき、矛盾はなく、事物の眞相は、却つて之に依つてのみ把握せられる。かの通俗本に於ける價値と自然價格との同一視も、私から見れば同一の理由であり、『個別』に對する『全體』の關係である。そこでは、明かに資本家社會の交換である。それ故にこそ、單なる商品社會のそれと異なり、個々の商品の交換としての『賣』又は『買』でなくて、大量品の取引としての『需要』又は『供給』である。しかも、マルクスの考察は、それの全體的考察である。それに含まるゝ個々の商品は、發達せる資本家社會では價格を定むるものは、生產價格$K(1+p)$であり價値$K(1+\frac{m}{p})$ではない。前者は後者より大きく又小さく、例外の場合の外、後者と一致しない。けれども、取引せらるゝそれ等同種の個々の商品を全體として一括して考へたならば、その價値以上又は以下の價格は互に相殺せられて『大體に於て』價値に等しいと云つ

て差支はあるまい。もちろん事物の大量的考察に於ては、一定の『誤差』は免れない。その觀察の對象として含まるゝ商品の範圍が少ないとき、期間の短いとき、『誤差』は一層大きいに相違ない。小泉氏はそも〳〵この『誤差』を問題とするか。然らば、マルクスほどこの『誤差』の存在を承認して意識的に之を言明したものはない。『特殊な生産部門に於て、商品の費用價格をそれの生産に使用せらるゝ生産手段の價値に等しいとするならば、常に誤があり得る』（第三卷一四四頁）。けれども、これ等の『誤』は、『全體として、且つ長期に渉つて觀察するときは』益々少ない。精密科學に於てさへ豫期せらるゝ『誤差』の存在は許される。社會科學に於て、この種の誤差は許されねばならぬ。小泉氏は、この誤差が著しく大なるべきを主張するか。然らば、問題は『價値計算』の問題として數理統計の問題に移る。これは論題の範圍も逸し、殊に私のやうな數學の下手なものは、しばらくおとまわしにするより外ない。

（五）小生産者社會の價値法則と勞働の生産力

小泉氏は文義上及び類似のことに就いては存外輕視せられて居るから、こゝでは、その話はしばらくこれだけに留め、氏が問題とする『資本主義以前の商品交換は價値通りに行はれたりや否や』（『本誌』同上、八三頁）といふ問題に入る。小泉氏は云ふ。『此の問題は前段河上博士に答へた部分中（小生云ふ、前項に論じた同種産業部門の問題のこと也）に自ら答へられて居る』（同上）と。これは全く同感であり、私が前項同種産業部門に就いて云つたことが正しいならば、この場合も『自づから答へられてゐる』。しかし、小泉氏は勞をいとはず、この點も詳論せられて居るから、私も氏の所論を吟味して行かなければならぬ。

先づこの點に關する小泉氏の所說は、二つに分かれる。ひとつは、獨立生產者が、經濟原則に從つて活動する場合、もうひとつは、それが妨げられる場合これである。最初の場合は、各種の生產者の間に完全に自由競爭が行はれる。さうすると、需給の關係に從つて各生產者の間に生產手段の移動を惹き起し、利潤率は平均せられ、價値とは一致しない生產價格が生ずると云ふのである。その論證は前後異種產業部門のそれに於けると同じく、もしさうでないならば、需給の一致しない場合に之を調節する方法が全く無いからと云ふのである。

問題は、他人の勞働でなしに、自己の勞働に依る獨立な單純商品生產者が支配する社會である。さう云ふ社會には金融市場も證券市場も無いのである。利潤率の平均と云ふやうなことは考へられはしない。小泉氏は生產手段の移動と云ふが、大工が引き合はないからと云つて、鑿と鉋を以て急にお百姓になるわけにも行くまいし、百姓が引き合はぬと云つて、鍬と馬とを以て急に大工になるわけには行かぬ。またさう云ふ社會ではその大工なり、左官なりは、座又は組合に屬し勝手なまねは出來ないのが普通だ。百姓には都會の手工業者のやうな强固な組合は成立たぬが、一時引合はぬとて濫多に祖先傳來の土地など賣拂ふものではない。近代に於ける農業利潤の平均作用さへ、只だ全く都會に於ける大工業に於ける利潤の平均を前提して說明せられる。手工業時代の利潤の平均など云ふことは、私にはどうしても判からぬ話である。

けれども、問題の獨立生產者は、分業私有財產の必然に基く商品の生產者である。商品の交換は、互にその價値を等しくしなければならぬ。どうして之を等しくするか。これ等の小生產者と雖も、互に生產の條件を異にし、その異にするがために、需要と供給とは必ずしも一致しない。或は需要が供給に超過し、或は反對に供給が需要に超過する。小泉氏は、前項資本家的の產業の同種部門の場合と同じく、互に地方の生產手段及び勞働を移動するのでなければ、之を調節する方法はなく、從つて價値と價格とを一致せしむる方法は無いと云ふのである。しかも、私から見れば、この種の

社會に於て、かゝる生產手段及び勞働の移動は容易に行はるべきものでないと云ふのである。と[illegible]か。勞働の生產力の伸縮のみが之を調節する。もし、需要が供給に超過するならば、供給者側は、同じ勞働時間で、より多くの分量の交換價値を受取る。このことは供給者の側に競爭を惹き起し、供給量が增加せられる。その供給量の增加が需要に一致するに從つて、必要勞働時間は增加する。もし、その供給の增加が需要に超過するならば、同じ勞働時間により少ない分量の交換價値を受取る。このことは、反對の現象を伴ふ。即ち、從來交換に依つて得たところの物の一部は、むしろ、自分の側で生產しやうとする。そうすれば、商品の供給は需要に應じ減少すると同時に、その市場を占むる商品の價値は生產條件の有利なものの勞働時間に依つて定められるから、價値は價格に應じ、自づから低下せざるを得ない。これを交換者双方に就いて見れば、一方に交換價値の騰つたことは、他方にその低下したのでなければならぬ。價値に就いて見れば、初めは双方とも何等の變化が無く、單に一方に於て生產力が一部增加したのであるかも知れぬ。けれども、それが繼續的に行はれるならば、必ずや他方の生產力に變化を惹起し、その變化は引いて一方の生產力を同一の方向に變化せしむるがゆえに、之を長期に涉り平均持續的に見れば、價値の交換が行はれる。供給に對する需要の增加が、一方の側に於ける生產力の全面的增加に依る、從つて價値の低下に依る場合に於ても結局は同じである。問題は自由競爭を前提する（但し、小泉氏の云ふが如く、利潤率の平均を求むる資本の流動を前提しない）。一方に生產力が增加し又は減少するに伴ふて、必要勞働時間が減少し增加するまで、之と交換せらるゝ他方の生產力が、供給に先だつて增加し又は減少し、從つて必要勞働時間は之と反對に減少し增加したまゝで居るわけではない。生產力發達の關係は、交換せらるゝもの双方に、その必要勞働時間を同時に同一の方向に變化することもあれば、互に反對の方向に變化することもある。その同一の方向に變化する場合は問題に無い。その反對の方向に變化する場合と雖も、そのと

と自身が、既に相互の矛盾を除くべき原因となる。即ち、交換者一方の必要時間が減少するに反し、他方の必要勞働時間が增加することは、その減少する側に於ける交換價値の減少又は物價の下落を、その增加する側に於ける、交換價値の增加又は物價の騰貴を意味する。その一方に於ける交換價値又は物價の下落は、生產力の低下を促しその一方の生產者をして必要時間を增加せしむるに反し、その他方に於ける交換價値又は物價の騰貴は、生產力の增加を促しその生產者をして必要勞働時間を短縮せしむる。一方に增加したものが低下し、他方に低下したものが增加する可能があるならば、そこに、矛盾の調節が無ければならぬ。これは直接では無しに間接であり、物價の下落又は騰貴と云ふ媒介を經てのことであるが、その媒介も生產力の關係それ自身に基くのであるから、互に異なつた方向に發展する生產力の相互矛盾の關係は、それ自身に於て、それ自身の矛盾を排除する性質をもつと云はなければならぬ。

唯物的辨證法と云ふことが日本でも研究せられつゝある。もしそう云ふ論理が事實を解釋する正しい論理だと云ふならば、それは、人間生活の實際が既に辨證法的發展であるためでなければならならぬ。廣く之を云へば、歷史の發展が生產力と生產關係との間に於ける矛盾の發展なるが故にのみ、唯物的辯證法は事實說明の理論たり得るのであつて、反對に、人間の意識に辨證法的理論が固有なるが故に、事實と歷史が辨證法的な發展を取るのではない。いま勞働の生產力の發展が、物價に一定の影響を及ぼし、その及ぼすことに依つて、それ自身を變化すると云ふことは、マルクスの唯物史觀に所謂生產力の發展と生產關係(生產交換(分配)の關係)との相互關係に係る問題であり、またその相互關係より起り、そして互に條件づけられつゝ、相互追從的に發展する經濟上の運動の各モメント(生產交換分配消費)に於て、生產力の發展が遂に決定的事情にあると云ふと吻合するものである。交換分配の關係は生產力の發展に順應する生產の直接の關係によつて支配せられる。生產力にして發展すれば、生產に必要な勞働時間は減少し、從つて

價値は低下し、反對に、生産力にして退化すれば、生産に必要な勞働時間は增加し、從つて價値は增加し、その價値の低下又は增加に伴ふて、交換價値又物價は下落又は騰貴し、その騰落に從つて、所得分配の關係に變更を起し、かくして社會の階級關係に變更を起し、階級間の闘爭を起し、その闘爭は種々なる媒介を經て反對に生産力の關係に變更を呼び起し、その呼び起すことに依つて、新たな生産關係が生れ、かくて、人間の歷史は進展（又は時として退化）する。勞働の生

この歷史の解釋の問題は小泉氏と私との問題には甚だ緣遠いやうに見えるが、ことがら自身は同じである。需給が産力の關係を固着的に考へ、單に、交換分配の關係のみを重んずる小泉氏から見れば、小生産者の社會に於て、離れた場合に供給を減小し又は增加せしめて之を調節する方法は全くないことになり、單に一方の獨占狀態が發生するに過ぎないことになる。しかし、この生産力を中心として問題を考ふるとき、一定の條件の下に於ては、何等の困難もない。

一定の條件とは自由競爭のことである。マルクスが小生産者社會に於て價値と價格とが一致したと云ふのは、これを前提してのことである。小泉氏も亦たこの前提を認める。しかし、氏は、どこまでも、それを發達した資本家社會のそれと同じものに考へる。相互生産手段の移動と云ふ條件を入れ、遂に利潤率の平均と云ふ資本家社會特殊の現象を發生せしめ、そこで價値と價格とを引き離すことに依つてマルクスを非難するのである。マルクスが自由競爭の條件として擧げた獨占狀態の無いことと云ふのは、度々云ふが如く交換の相手方の一方にそれが無いことゝ云ふのである。即ち一方が他方に對し常に高く賣り、又は同じことであるが、一方が他方に常に高く買ふと云ふやうな事情が無いことゝ云ふのである。雙方とも生産手段を獨占することは獨占でなく自由競爭の條件である。大きな生産手段を用ゐたものは、それだけ全價値も大きく、小さい生産手段を用ゐたものはそれだけ全價値も小さく。この大小に應じて各々この商品に含ま

る價値から分前を受けるだけのことである。商品を作るために必要とせらるゝ現在の勞働が等しくせられる以上、剩餘は等しいのであり、その剩餘が大きな分母に分けられやうが、小さい分母に分けられるが、利潤を目的としない生産のこの狀態に於ては全く『どうでもよいこと』ではないか。小泉氏はマルクスのその『どうでもよい』と云つたことを非難するのであるが、これは現在の株式取引所をその儘元龜天正の頃に置きかへやうと云ふやり方であつて、毫も歴史上の事實を說明するものでない。マルクスに於ては理論と事實とはひとつである。事實は進展する。だから眞に事實を說明する理論は、固着ではあり得ない。價値法則と云つても、それ〲の適用があり、自由競爭と云つてもそれ〲の適用がある。問題の場合の如き、發達した資本家社會に於てこそ資本の相互流出入は自由競爭の條件であるが、小生産者の場合では、それであり得ない。またそのあり得ないことは、毫も自由競爭の性質を害するものでない。これは相互の獨占が何等の獨占でもないに依つて明かである。更に、これまで生産手段として用ゐられなかつたものが、生産手段として流入し、また從來かく用ゐられたものが廢棄せられて、流出することは、毫も、互に交換せられるものゝ生産者の間の生産手段の相互の流出入ではないのである。だから、小泉氏が交換者の間が互に隔離せらるればせらるるほど梅田說には都合がよいと云ふやうなことは當つて居らぬ。

只だ小生産者の社會にて於は、獨立な生産者が完全な自由競爭の下に生産すると云ふことは、むしろ例外的な事實であり、多くは獨占價格が支配した。例へば、當時に於ては都會の手工業者は、多くは座や組合やに屬し、徒弟の使用數、製品の材料、價格其他種々な點に於て一定の制限を受けなければならない。然るに、之と交換する農業生産者の方にはかやうな組合を作る可能が少なく、從つて割合に生産販路上に自由競爭が行はれる。一方に獨占行はれ、他方に自由競爭ある場合に於ては、云ふまでもなく交換が價値で決まる可能はあり得ない。農民はかやうな場合には常にその生産物を

價値以下に賣らなければならないに反し、都會の手工業者は、その製品を價値又は價値以上に賣ることが出來る。都會に富の集中せられたのは主としてこの事情であることは既にアダム・スミスの認めたところであり小泉氏の知らるゝところであらう。しかし、この點に於て、小泉氏が非難するマルクスは、スミスのこの言を"sehr richtig"と云つて是認して居る。(剩餘價値學説史、第二卷第一冊九二頁)この點に小泉氏は、新たにマルクスの矛盾を發見せられるかも知れぬが、事の眞相は、矛盾でも何でもなく、單獨な手工業者と農民と間のはもちろん、農民と農民との間、又はその獨占者である手工業者と手工業者との間には競爭の自由を妨げはしない。時を異にすれば賣手であつたものは買手であり、買手であつたものは賣手であるから、獨占者が相互に獨占價格で賣り又は買つたとて、競爭は自由である。問題は、たゞ當時に於て自由競爭は例外であつたと云ふことである。しかし、このそれを例外と見るところに、マルクスの理論の適用がある。例外から原則が發展する。自由競爭は資本家社會の原理である。この原理は、封建社會では例外の事實であつた。しかし、この例外は、一般的な獨占の中に存在した。この例外が一般化するに從つてその母體と異なる新らしい生産方法に基く資本家社會が發展したのである。同じことが、小泉氏のこの點に關する第二の論據に關係して來る。

その第二の論據に於て小泉氏の云ふところは、『需要減退のため自からこの業を止めて他に轉ずるか、若しくは、己の子をして、他業に就かしめんとする、に當つて彼は如何なる職業を選擇するか』(『本誌』同上一頁)と云ふ問題である。これは歴史的には、つまり、一方に家内工業などが起り始め、之と同じ種類の生産に從事して居た手工業者の製品の需要が減退し、そこで、『自らこの業をやめて他に轉ずるか若しくは己の子をして』云々と云つたことに解してよからう。これに對して小泉氏の答ふるところをかい摘んで見ると、さうした時には、生産の剩餘はたとひ、同じでも原料や道具等に役用のかからぬ方に人間が移つて行く。そして仲間のかゝるものは、「完全獨占」に依つてゞなければ、得られないから、

さういふ節欲をした人間には報酬が出てくる。どうして出るかといふと、多數人口の集まつた方には、自由競爭行はれて供給增加するに反し、その節欲をした少數の人口の方には、供給減少し、價値以上に賣れる。それがまさに『享樂延期の報酬』であり、節欲のありがた味である云々（小泉氏論文同上頁參照）。これは早くから屢々きかされた說であり、しばらく忘れてゐたが、さて懷舊の情にたえないものである。

しかし剩餘は、費用が同じときに收入が多くなるか、收入が同じいときに、費用が少なくなるかによると云ふことは、もつと早くから聞かされた說である。費用が同じときに、收入が多くなると云ふことは、とりもなほさず、勞働の生産力が發達したことに外ならぬ。また收入が同じときに費用が下かると云ふことも、同じに解せらる。費用を下げるには、生産手段を改良するか、交換に依るかによつて費用として必要なものが安くなればよい。交換は分業の發達を前提し、既に生産力の一定の發達を意味する。只だその交換に依る場合は、それに依つて取得するものが奢侈品でなしに、原料や道具や又は生活需品であり、すなはち、費用そのものに投せられるものでなければならぬ、『欲望の延期』とか、節欲とか云ふのは、この場合であり、從來奢侈的に消費せられたものが生産的に消費せられる場合である。この場合も剩餘を作るが、何故に、同じ費用でより多くの收入が上げられる場合、同じ收入で、直接に生産手段の改良に依つて收入が上げられる場合などは、剩餘を作らぬか。人口の自然增加、即ち勞働力の增加に依つても生産力を增加し、從つて同じ時間でより多くのものが得られる筈である。しかも、その所謂消費節欲の場合でも既に生産力の發達を前提するではないか。

小泉氏が創定する自分が轉業するか、又は『己れの子をして他の業に就かしめんとする云々』の場合は、既に、之と競爭する他の同じ職業に於て生産力が發達し、社會の需要がその安い製品に依つて充たされるか、又は、それの代用品

の生産が發達したことであらう。事實生産技術が發達し手工業が倒れかけた場合と見てもよい。この場生産者となる可能が無ければ、自分を倒したその同じ事業の賃勞働者となるより外ない。その『親』の心配するその『子』も同じことだ。親子もろ共、小泉氏の所謂節欲者、有利な生産條件の下にある、生産手段の所有者の賃勞働者となる。親子もろ共六時間の勞賃を受けて十二時間奉公し、六時間をロハでその生産手段の所有者に提供する。剰餘價値が發生する。それが小泉氏の享樂延期の報酬なのだ。實は他人の勞働の『掠奪』である。しかし、小泉氏は、この場合、この憐れな親子を直に賃勞働者にしやうとはしない。そして、原料や道具や固定資本の入らない、なるべく手で出來る簡單な仕事を與へる。つまり、沒落しかけた獨立生産者を賃勞働者とはしないで何か判らぬが、やはり生産手段を持たない持つても極めて一部しか持たない獨立な生産者に仕立てゝ居る。そして、これ等の人間は皆節欲と云ふことを知らぬ人間ではあるが、至つて數多く、生活の必要から、互た競爭しつゝ何か多量に生産する。他方節欲をした生産手段の所有者の方は、至つて小數で競爭もなく、しかし生活の必要からこれも亦た何か生産する。しかも兩者共に商品の獨立な生産者でありまた互に獨立な商品の賣手である。(果然需要と供給とが隔離し、有利な生産手段の所有者の商品價格が騰貴して、獨占利益を受ける。その獨占利益が『享樂延期の報酬』であり、所謂資本利子である。と云ふことになる。即ち資本利子は生産の過程から發生するものでなくて交換の過程から發生すると云ふ説である。『節欲説、』『資本前貸説、』『享樂延期説、』『價値時差説』その他云々と云ふ諸説は詮じつめれば同じ論法であり、その間に多少とも説明の巧拙があるだけである)。

しかし、商品交換に於ては、時を異にすれば賣手であつたものは買手であり、また買手であつたものは賣手である。お互の限定の下では、一方が他方に常に價値以下に賣らねばならぬ約束は無い。小泉氏の生産者の一方は、この場合何

故にその價格の著しく高まつた貨物の一部生産に從事することが出來ないか。如何に不利な生産條件でも、價格がこれほど高まるならば、引合ふ筈ではないか。原料や道具と云ふが、もとこれは勞働の生産物ではないか。これほど多數の人々が。どれもこれも、どうしてそれほど愚昧でなければならぬか。競爭がそれほど强いならば、不利な生産條件のものは生産から除外されて居るに相違ない。そうしたならば、そこの供給量がどうしても依然のまゝである筈はない。また、之と交換する例の節欲者の方面に就いて見ても同じことだ。只だ反對な現象が起るだけだ。しかし、實際に於ては、恐らくこれは小泉氏の想定の如くであるに相違ない。と云ふのは、既に生産手段を失つた例の『親子』の如きは、新たに獨立な生産者である筈はない。手工業から農業に轉じやうとして見たところで、駄目だ。その社會は私有財産の社會だ。土地と云ふ生産手段は、都會の手工業の失敗者が容易に得られるわけでない。小額の元手で、小商人になる。そこにも競爭がある。行商になる。そこにも競爭がある。憐れな『親子』が轉々流浪してどゝのつまりの行先はちやんと決まつて居る。賃勞働者になることだ。小泉氏が手輕な仕事に多數の人々が集中すると云つたのは、事實かうした『親子』のなれの果ての賃勞働の群れを指して居るのでなければならぬ。『道具や原料やに金のかゝらぬ方面に集まる多數の人々』と云ふ抽象的な獨立生産者は、無産の大衆のことである。しかも、それは小泉氏に從へば獨立な商人だ。小泉氏はこの『親子』に生産物を賣らして居る。しかも常に價値以下で。なるほど、どこの『親子』一味も、そうした社會では商人であるに相違あるまい。しかし、それは生産物を賣る商人でなくて、今は自己の唯一の財産である自己の勞働力を商品として賣るのである。誰に賣るか。これもちやんと決まつて居る。買手は云ふまでもなく、かの『節欲者』『享樂延期者』とその生産手段の所有者である。『親子』は彼の管理の下で、六時間の勞賃を受け十二時間働く。殘り六時間は、節欲者がロハで受取る。剩餘價値だ。資本家は、それを生産手段と資本家が支拂つた勞賃、所謂資本家の費用全體に割當

てる。それが利潤率だ。そうすると、物から利潤が生れる。物としての資本は人格化する。資本利潤の起源に關する所謂『利用説』、『生産力説』其他云々と云ふ神秘な學説が發生する。

　クラシックの經濟學者は、發展した資本家社會の價値法則を單純商品生産社會のそれと同じに解さうとした。小泉氏は資本家社會の價値法則を單純商品生産社會にあてはめやうとする。多少ともより近い經驗に支配されるものと見える。しかし、何れもそれで歴史は棒引にせられる。マルクスはその何れとも異なつて居た。然るに、小泉氏は、このマルクスの特徴を認めるが如く云ひながら事實認めやうとしない。小生産者間の問題に、或は平均利潤の問題を持ち込み、或は事實初期の資本家社會をおし込んでマルクスを非難するのである。しかも、それで滿足しないで、棒を一本引き、兩端にＡＢと云ふ符號を記し、Ａの方は、生産價格成立する資本家的生産、Ｂの方は、獨占の行はるゝ資本家的生産を代表せしめ、兩極端の生産部門相互の交換に於て價格は如何に決定せられるかと質問する。話はいつの間にか、否とう／＼資本家社會におちてしまつた。もと、この段の話は小生産者間のことではなかつたか。資本論第三卷に於けるマルクスの小生産者間の交換の問題を批評するわけではなかつたか。Ａの方は農業の生産者、Ｂの方は都會の手工業者のギルドと見れば、話はもとへ返せる。そこには、一方に常に價格の獨占があるのだから、交換そのものに常に妨げがあり、價値で行はるべき理由は毫末もない。しかも、ギルドとギルドとの間、又は農業者と農業者との間には、價値交換の可能があり、價値法則の存在を妨げないことは既に述べたところである。しかし、かりに、資本家社會相互の關係としても、その自由競爭の行はるゝＡの側に、それと競爭する獨占の行はるゝ他のいくつものＡがあり、Ｂの側に、それと競爭する自由競爭の行はるゝ他のいくつものＢがあり、ＡＢ各々の側の競爭と同時に、ＡＢ相互の間に自由競爭（兩者の間に資本の流動は必ずしも必要としない）ありとせば、どうなるか。交換一方に自由競爭のＡ、他に獨占のＢと云

ふが如きは、世界市場の實際ではあるまい。何はとも角に、小泉氏が、小生産者社會の問題に極端な一つの資本家社會を持ち込んで來たのは、恐らくは別個の理由からであり、即ち國際貿易の問題が問題となるからである。そして、そこにはまた、獨逸ではブレンターノ以來マルクス價値說の攻撃の材料として慣用せられ來たリカルドの比較生産費說なるものが問題となるからである。

(六) 國際間の價値法則と勞働の生産力

舞臺はケチな小生産者から大まかな外國貿易へと廻る。小泉氏は云ふ。『リカルドは謂ふ。英蘭と葡萄牙との間に貿易の行はるゝ場合、英蘭は羅紗を製造するために一年一〇〇人の勞働者を、葡萄酒を釀造するために一二〇人の勞働を要し、葡萄牙に於ては、葡萄酒は僅かに八〇人羅紗は九〇人の勞働を要し、結局二物但に葡萄牙に於てより低廉に生産せらるゝに拘らず、猶ほ且つ英蘭産の羅紗は葡萄牙産の葡萄酒と交換せられ得るものである。蓋し是に由つて葡萄酒は八〇人の勞働を以て九〇人の勞働を要すべき羅紗を獲得し、英蘭は一〇〇人の勞働を以て一二〇人の勞働を要すべき生産物を獲得し得るからであると。ここで、英蘭人一〇〇人の勞働の生産物が葡萄牙人八〇人の勞働の生産物と交換せらるることゝなる。リカルドに從へば、斯ることは同一國内には行はれ得ぬことである。然らば國際間には何故に此事が行はれるか。それは國際間に於ては、國内に於けるが如き自由なる資本の流動が無いからである』(『本誌』同上九〇頁)

リカルドの貿易論に於けるこの一句は、果して彼の價値法則の例外を主張したものであるか、それとも、生産力の差異に基く國際分業の利益、從つて生産上の利益に關するものであるか。失禮であるが、かりに、あなたは、先生も出來れば記者も出來る。私は、あなたよりは何れの點でも劣つては居るが、同じく先生も出來れば記者も出來ると假定しませ

う。しかし、あなたの方は、記者よりは、はるかに先生としての能力があり、私の方はいづれ
るが、先生としてよりは記者としての方が比較的まさつて居るとする。そうした場合には、あなたは、先生と記者と
かけ持ちをするよりも、記者は私に――マヅくても――やらせ、先生の方に專門にかゝる方より利益だろうし、私の方
でも、マツイ先生とマツイ記者とをかけ持ちするよりは、先生の方は全くあなたにお願し、自分はマツイながら、比較
的長所と信ずる記者生活に專念する方が利益なわけである。そうすると、あなたに新聞が必要な限り、どうしても、
あなたは私の新聞を讀まねばならないし、私の方でも、學問をそう怠つてはならぬ限り、どうしても、あなたの論文例
へば『マルクス評』を讀まなければならぬ。そうすると、否でも應でも、あなたの論文と私の新聞とが、あなたと私
の間に交換せられ、間接には、あなたの勞働と私の勞働とが交換せられるわけである。いま、あなたの論文と私の新聞
とは、このリカルドの例に於けるイギリスの羅紗とホルトガルのぶどう酒と同じわけだ。これが經濟學者の云ふ分業
上の利益だ。人間に能力の差等があり、人間に出來るだけ自分の勞費を少なくしやうとする努力のある限り、國内で
も國際でも、資本主義の社會でも共産主義の社會でも、そう云ふ意味の分業の利益、それに基くそう云ふ意味の交換の
あることに變りはあるまい。これは、お互に能力をみがき熟練を増し、無駄をはぶき、新たなる發明發見のもとえとも
なり、つまり、勞働の生産力を増加して必要勞働時間を減少することになる。この意味に於て、甲一日の勞働は乙二日
の勞働と安心して交換する。リカルドの云ふやうに『イギリス人一〇〇人の勞働の生産物は、ホルトガル人八〇人、露
西亞人六〇人又は東印度人、一二〇人の勞働の生産物と交換せられる』。それは分業の必要に基く生産物の交換であり、
使用價値の交換である。

けれども、分業と同時に『私有財産』の行はるゝところに於ては、生産物は、單に生産物であるばかりでなく、商品

の形態をとる。商品は使用價値でありまた價値である。交換は、生産物の交換であるばかりでなく、價値即ち等一物の交換でなければならぬ。私有財産の下では誰もが交換に依つて互に欲望を滿足するばかりでなく、與ふるものと受取るものとが等しい價値のものであることを要求する。『英吉利人一〇〇人の勞働は　英吉利人八〇人の勞働と交換せらるゝ筈はないが』とリカルドは云ふ。こゝでは、その英吉利人は皆商人であり、勞働は社會的必要勞働として價値たるの性質のものであることを示して居る。そのホルドガルに於ても亦た同様である。さて、この意味に於て、リカルドの假定するイギリスとホルトガルとは、何れも私有財産と分業の下にある商人國であり、しかも資本家社會だ。商人の目的とするところは、使用價値でなくて價値だ。生産物でなくて貨幣だ。そこで、イキリスの羅紗とホルトガルのぶどう酒とは、貿易商の手を經て交換せられる。便宜上運賃保險料其他所謂貿易費用を除外し、更に、兩國がその羅紗なりぶどう酒なりの生産に要する勞働日は共に社會的必要勞働として英貨で表はされるものとしやう。ぶどう酒は本國ホルトガルでは、八〇磅のものが、イギリスに輸出すれば、一二〇磅に賣れ、四〇磅のもうけがあるから、ホルトガルの商人は喜んで之をイギリスに輸出する。けれども、その同じ商人は、果してイギリスから羅紗を輸入するだろうか。この場合、イギリスの羅紗はイギリスでは一〇〇磅に賣れるが、ホルトガルでは、九〇磅にしか賣れない筈である。お互の約束の商人は慈善家でもなければ、必ずしも愛國家でもない。羅紗はイギリスでは一〇〇磅、ホルトガルでは九〇磅であるから、イギリスで買つてホルトガルに輸入すれば、明かに一〇磅だけ損が立つ。一〇磅の損と知りつゝ態々羅紗を輸入する商人はあるまい。この商人は、リカルドの云ふやうに、羅紗を輸入する代りに、貨幣を輸入するに相違あるまい。便宜上こゝにも亦た爲替の問題を除外する。そして、このことが一定の期間繼續せられたならばどうするか。イギリスには貨幣が減る代りに、ホルトガルには貨幣がふえる。貨幣が一方に減り一方にふえるのであるから、貨幣の分量に關

することまかい話は別として、ホルトガルに於ては、物が概して騰貴するに反し、イギリスに於ては物が概して下落するとしやう。その騰貴した方では、從來引き合はずにねかされた又はぶどう酒以外比較的不利な條件の下にある產業の資本勞力が、ぶどう酒の生產に投ぜられることになるから、極端な場合を假定すれば供給は增加しても、それの生產に必要な勞働時間の平均は高まると共に、有利な條件の下にあるものは、多くの特別利益を受けることになる。反對に、物價の下落した方に於ては、その價格に於ては最早や引合はぬ程度に不利な生產條件の下にある資本勞働は、その生產を去り、從つて羅紗の供給は減少するが、極端な場合を云へば、その生產に必要な勞働時間は有利の生產條件の下にある產業のそれに依つて支配せられるから、その平均時間は低められる。交換の一方では價格の騰貴と共に價値も亦た高まり、他方では價格の下落と共に價値も亦た低められるとせば、價値での交換が行はなければならぬ。ぶどう酒は八〇磅から九〇磅に上り、羅紗は百磅から九十磅に下落するとすれば、イギリス九十日の勞働は、ホルトガル九十日の勞働と交換せられる。イギリスでは羅紗が下落すると同じやうにぶどう酒も下落し、ホルトガルではぶどう酒が騰貴すると同じやうに羅紗も騰貴する。前者では羅紗若干量九〇磅、ぶどう酒若干量一一八磅、後者では、ぶどう酒同一量九〇磅、羅紗同一量一一二磅余となるとすればホルトガルの貿易商は、貨幣を輸入しないで、羅紗を輸入する。彼は、ぶどう酒を輸出して二十八磅もうけ、羅紗を輸入して二十二磅もうける。イギリスの貿易商が同じことをすれば羅紗を輸出して二十二磅、ぶどう酒を輸入して二十八磅、同じもうけである。國同志から云へば、九十日の勞働が九十日の勞働と交換せられる。なほ、ホルトガルの貿易商のもうけは、イギリスの消費者が、イギリスの貿易商品のもうけはホルトガルの消費者が支拂ふのであるが、それ等の消費者は、それ〴〵の消費者である以前に於て旣に生產者であるか、また直接そうでないとすれば、社會的勞働の一部を收入として取得する權利あるものに[illegible]、いづれにしても、結局は、それ

は、それ〳〵の國の社會的な勞働から償はれる。それ等の商業利潤が交換から生れるわけではない。

生産力の變化は、兩者の交換の割合に變化を起すこと勿論である。その結果は、イギリスにぶどうの栽培を、ポルトガルに羅紗の製造を起すかも知れぬ。前と反對にイギリスがぶどう酒の輸出國となり、ポルトガルが羅紗の輸出國となるか知れぬ。その生産の變化に應じて、工業國が農業國ともなり、工業國が農業國ともなるなど、從つて社會の關係に未だ種々なる變動をも起し得る。資本家の生産は、自然の條件に絕對的に拘束せられるものでないからである。この場合に於ても、二つの國の相互に資本勞働の移動は必ずしも必要としないが、自國內に於ては各種産業間にその移動が行はるゝと勿論である。その結果、自國內には價値と必ずしも一致しない生産價格が成立するであらう。併し、その輸出入品は、いづれの國に於ても、その國の生産價格で賣買せられたものであり、またこれ等の輸出品全體、輸入品全體を長期に就いて見れば、價値以上以下の生産價格は多少の誤差を除き相互に相殺せられて結局價値で交換せられると云ふことが出來やう。もちろん、事實上の問題としては、資本勞力の移動が比較的容易な戰前の歐羅巴諸國の如きがあり、政治上外交上の關係が交換の自由を防げてゐる東洋諸國と歐洲諸國との關係の如きがあり、劃一的な論斷のあり得ないとは云ふまでもない。永續的な入超國もあり永續的な出超國もある。けれども、交換の相手方として、所謂未開國は文明國に對し、常に價値以下で交換するといふやうな論斷は出來ない。商品の交換に於ては、それが野蠻人の手で出來やうと、賃勞働者の手で出來やうと、又は獨立勞働者の手で出來やうと、問ふところでない。市場では、同じく人間勞働の一定量を體現するものとして交換せられる。市場價値と個人價値とは異なり、價値は個人價値以上でありまた以下であり得る。この關係は國際市場でも、一定の媒介を通じて見れば、同樣であり、只だそれ等の國の社會價値がこゝに所謂個人價値に相當する。この個別的な社會價値を等しうせんとする運動は、交換相互の需給關係を媒介とし、相互の生産力に

一定の變化を與ふるに依つて達せられる。必ずしも國際利潤の平均を求むるがためにする國際間の資本の移動を必要としない。只だ、かの個別社會價値の均一運動は、生產力の小さい未開國の生產力の發達を促し、その促すに依つて、その社會の關係を變動せしむる。所謂未開國の崩解過程である。社會組織を異にする共產露西亞と日本との貿易關係の如き、國交の回復にかゝはらず、兩國の間には未だ資本の流動はない。しかも、露西亞の貿易の大部分は國家に依つて管理せられ、自由競爭の下にはないに反し、日本の貿易は、關稅の問題はあつても、私企業の競爭に任せられてある。この點世界の資本國は大體同じ事情にある。然るとき、小泉氏は例の一方に獨占、他方に自由競爭といふ論法に依つて、露西亞と取引する世界の資本國は、露西亞の生產物を常に價値以上に買ふとでも云はふとするか。世界の資本國は『露西亞』を買ふのでなくて、露西亞の『商品』を買ふのである。露西亞の商品は、商品としては、それと同じ種類の世界の商品と互に競爭する。商品としては、世界の資本國が毛蟲のやうに嫌ふ共產露西亞の商品でも、人間勞働の體現として無差別平等な品質としての價値であり、そこには單にその分量上の差あるに過ぎない。尤も、世界市場に於ける共產露西亞の貿易關係は、露西亞の生產力の發達に如何なる影響を與ふるか、引いてその社會關係が如何なる變化を受くるか、反對に世界の資本國のそれに如何なる影響を及ぼすかは問題である。これは、古來の共產體がそれに依つて內部組織の崩解を招いたと類似の過程であるが、共產體の行き詰つたところに於ける團體交換の關係と、資本主義の行詰りつゝあるところに於ける團體交換の關係とは異なつて觀察を要する。『行き詰り』とは價値實現の困難と云ふことであるが、結局に於ては生產の社會關係が生產力の發展を阻害するに至ることである。世界の資本主義が果して行詰まれるかどうか。それ等は今こゝで問題でない。只だ露西亞と日本との如き、未だ互に資本の移動なきところに於ても、兩者が國際市場に於ける商品の交換者である以上長期平均的の考察に於ては、結局個價値法則の支配を受けると云ふこと一問

際市場の價値法則に就いては、尙ほ種々なる媒介を必要とすること勿論であらうが、そして、國際間の如き、一定の時に於て社會の發達の程度が著しく異なり、またその異なるそれらの特殊性も、資本家的生產の影響の混入があり、それ自身理解の困難なるところに於ては、先づ價値法則の一般的な考察を必要とすることを云へば足る。

そうして見れば、リカルドのイギリス百日勞働がポルトガル九十日勞働と交換せられると云ふことは、單に生產物の交換と云ふ意味では兩國分業上の利益を意味するに留まり問題はないが、商品價値としての交換に於ては、たとへ、相互に資本の移動が無い場合でも存續すべきでない。一定の長期に涉り平均持續的に觀察すれば、交換兩者の間に自由競爭の行はれる限り、交換兩國の一方に何等の獨占もない限り、價値法則は行はれる。その苟しくも價値での交換である限り、兩國の資本關係の如何に依り、剩餘の分配が如何に行はれても、國際相互の資本流動が相互の慣習又は法則その他の理由で妨げるところでは、『どうでもよい』ことに相違ない。學徒の興味として殘る問題は彼のリカルド原論の一節に於ける貿易論は、彼の價値說を立證しやうとしたのであるが、それとも小泉氏の云はるゝ如く、その例外を述べたものであるかである。いま直接に關係ないことではあるが。

(七) 小泉氏の購買力說

これまでのところ、小泉氏の所論は、商品生產の如何なる階級に於ても、生產相互の間に資本勞力を自由に移動する可能が無ければ、需要に應じて他方供給を節する可能はなく、從つて價値と價格との一致もないと云ふことであり、それに對する私見は、既述の如くである。然るに氏の議論は、實に百尺竿頭更に一步を進め、需給が一致すれば價値で決まり、價値で決まれば需給は一致すると云ふ正統派の經濟學の主張及びこれを一定の意味で承認するマルクス說を『

本的』に覆かいそうとする。『一定の意味で』とは、この場合スミスやリカルドに取りて價値が、マルクスにとりては、社會的必要勞働のことであり、歴史的には單純商品及び同部門に競爭行はるゝ場合の資本的商品及び資本家社會全體の商品に就いて平均持續的の考察に於てである。

さて、小泉氏は云ふ。『需要供給が平均するかせぬかは、價格を條件とせずしては、全く云ふことが出來ないのである。抑も價格なるものは、一方需要を制限して供給に適應せしめ、他方供給を刺戟して需要に適應せしむるために成立する。』(『本誌』同上九二頁)。

更に進んで氏は、その意を敷衍し、需要供給とは一定の價格に於ける需給と云ふことであり、需給の一致不一致とは、一定の價格に於ける物の分量の一致不一致と云ふことであると解して居る。誰か之を否認しませうか。氏は語を次で云ふ。『この說は近頃カッセルの力說なるところであるが、これだけのことを理解するには、必ずしもカッセルを待つものでない。』と。その意味に於てならば、日本でも、梅園の『價原』以來のこと、日本で初めてウェーランドの經濟學を講義した福澤翁などは、カッセルの代りにわしを引合に出してくれゝばと地下で云つたかも知れぬ。實際『これだけのことを理解するには必ずしもカッセルを待つものでない』。資本家の經濟學を母體とするマルクスの經濟論がそのいづこにこれを否認して居るか。然るに、小泉氏が前句を受けて云ふところをきけ、『苟くも商品は使用價値を有するものなる限り、如何なる價格に於ても需給の一致せぬと云ふことはあり得ない』云々(本誌同上九三頁)。

この解釋に從へば、商品が苟くも人間の欲望を滿足する性質のものであり、買手の側に之を買はんとする欲望があり、この欲望を實現する手段(商品又は貨幣)の存在する以上、どう云ふ價格でも、需給は一致して取引が行はれると云ふのである。換言すれば、時を同じうして賣つたものは買つたもの、買つたものは賣つたもの、賣手は買手、買手は賣手

で、物の價格は、單に買手の貨幣の分量の如何に依つて定まる（需要即ち供給說、而してまた一の貨幣數量說）と云ふのである。この說では、この世の中に、生産超過も低下もなく、從して恐慌なるものはあり得ないのである。

先づ、需要供給と云ふことが、經濟社會では、常に一定の價格に於ける需給（物の分量的關係）と云ふことであるならば、反對に、その一定の價格は、何故に、一定の需要供給に於ける價格であり得ないか。小泉氏が屢々引用せられる例の小麥一クオタア鐵二ツエントネルで行かう。

私は小麥の生産者だ。あなたは鐵の生産者だ。私はあなたから鐵を買ふ代りにあなたに小麥を賣る。私はあなたに對して小麥の供給者だ。そして、私の小麥は、あなたの云はれる通り、あなたの欲望をみたすに足る使用價値をもつて居る。しかし、商品だから、同時に價値をも有つて居る。小麥一クオタに含まるゝ、價値に相當する價格を高過ぎるが五十圓とする。この割合で一〇〇クオーター供給すれば、その價格は五千圓だ。そこで、私があなたに小麥一〇〇クオタを供給すると云ふことは、小麥同量の使用價値を供給することであるが、それに含まるゝ價値（社會的必要勞働）をも同時に供給することである。私は商人だから、その小麥一〇〇クオタの價値を實現したいのだ。あなたが首尾よく價値相當の價格五千圓を拂つてくれゝば、私は價値通りに小麥を賣つたのだ。私は、小麥の使用價値を供給する以上、私はその小麥に需要はないので、只だ、あなたの支拂ふ貨幣を需要するのだ。これと反對に、あなたは、小麥の需要者であるが、同時に貨幣の供給者だ。あなたが、一定の貨幣を供給する以上、あなたは貨幣を需要するのでなくて、小を需要するのだ。して見れば、あなたと私ととは、實はお互に需要者であり、お互に供給者である。たゞ、異なるところは、あなたは、貨幣の供給者で、小麥の需要者であり、私は、小麥の供給者で貨幣の需要者であると云ふことだ。

さて、私が小麥一〇〇クオタに對する價値相當の附値は五千圓だ。けれども、あなたが、それを五千圓で買つてくれる

かどうか。買つてくれゝば、私が貨幣に對する需要と小麥の供給とは一致し、價格は價値に一致す限らぬ。あなたに貨幣があり餘り、倍値一萬圓で買つてくれるかも知れぬ。それが不足で千圓しか拂はぬと云ふかも知れぬ。そこはお互に市場では自由競爭の世の中ゆゑ、私があなたを強制するわけには行かぬ。一萬圓で買つてもらひれば私は價値以上に賣つたのだし、三千圓しか拂つてくれなければ價値以下に賣つたのだ。二人たけの世の中ならとも角、幾人もく\の小麥供給者があり、また幾人もく\の小麥の需要者がある。しかも市場には所謂『樂觀材料』あり『悲觀材料』あり、どうなるか判かりようが無い。況んや之を一國の全體、世界市場の關係に於ては、いよく\以て判からぬ。それが首尾よく一致すれば、偶然でその一致しないことが普通だ。こんなことは小泉氏には云ふまでもない。然るに、氏は、苟くも物が賣れゝば、需要と供給とは一致するし、一致しないことはあり得ないと主張する。或る價格で物が賣られ又買はれたと云ふ單なる事實がどうして需給の一致を意味し得るか。それは供給が需要に超過して、それ自身有用有價値なものが無用無價値とせられ、又は需要が供給に超過し、それ自身價値乏しきものが法外に評價せられると云ふ事實に外ならぬ。五千圓の小麥一〇〇クオタがが一萬圓で買はれたとき、私の小麥の供給と、貨幣に對する需要とがどうして一致するか。小麥の價値は、それの生産に必要な社會的勞働が變らぬ限り變らぬ。けれども、その同じ價値は、之と交換せらるゝ他のものゝ價値の變化に依り、種々な分量の使用價値を以て表はされる。小麥一クオタは、鐵二ツエントネルとも三ツエントネルとも、茶一斤とも二斤とも、砂糖百目とも二百目とも、それ等のものゝ價値の變化に依り、或は多い或は少ない分量で表はされる。貨幣に就いても同じことだ。只だひとつの物の價値を貨幣で表はすことは、之と交換せられる種々なる物、鐵や茶や砂糖や木綿や絹や其他石炭でもダイヤでも、商品市場のそれ等個々の物で表はす代りに、商品市場のそれ等一切のもので表すと云ふに過ぎない。そして、あなたが私の小麥に對して支拂ふ貨幣に、あ

なたが小麦の買手である前に、鐵の賣手として得たところのものだ。それは、結局、あなた自身又はあなたの使用する勞働者の勞働が社會的必要勞働として商品鐵に體化せられたもの、即ち價値を代表する。それは、それ自身に變化なくとも、あなたが需要する小麦の價値の變動に依つて、或は多き或は少なき小麦の分量を買ひ得るとしたならば、どうしてあなたの小麦に對する需要と貨幣の供給とは一致し得るか。貨幣の價値は變らぬのに小麦の分量は增減する。

小泉氏は云ふ『價格は常に需給關係に依つて決せられるものであるが、或る需給關係に由つて成立する價格は、其れ自體の中に變動の原因を藏して居る』(本誌同上、九三頁)と。これに依れば、小泉氏と雖も、需給は一定の價格に於けるものであるが、その價格は亦た一定の需給に於けるものであることを知つてる。しかも價格はそれ自身に變動の原因を藏して居ると云ふところを見れば、一定の價格に於ける需給は矛盾の關係にあることも知つて居る。しかし、氏は一方に、『商品は、使用價値を有するものなる限り、如何なる價格に於ても、需給の一致せぬものはない』と云ふのである。このことは、需給が如何なる價格で統一せられても、その統一は凡て矛盾を含まぬと云ふに外ならぬ。統一は矛盾の統一である。統一は矛盾の中に存在し、矛盾は統一に含まれる。矛盾は運動であり、統一は靜止である。靜止は偶然であるか又は抽象であり、運動は、常態でありまた實際である。需給の關係は、常に運動の關係である。この運動の過程を全體として見やうとすれば、平均持續的な價格の狀態を見なければならぬ。平均持續的な價格の狀態は、即ち靜態であり抽象である。しかし、その抽象はあたまの抽象でなくて事實の抽象である。米價は日々に變動する、或日は三十六圓或日は三十八圓に。しかし一年を通じて見れば、米の市場價格は三十七圓臺にあるが如し。如何なる方法によらば實數に近かき平均市場價格が得られるかは學者の間て議論はあつても、一定の長期を通じてかの如き平均價格の存在すること、またそれが日々の市價の上下の動揺が互て相殺せられたものであることは疑なき事實である。價値法則の問題

は、その平均價格が何で決定せられるかにある。小泉氏と私との問題は、云ふまでもなく、こゝにある。この平均價格て於ては、日々の市價の上下の動搖が相殺せられて居るのであるから、この價格に於ては、當該商品に對する社會の需要に供給が一致したものでなければならぬ。もしそれが一致しないならば、價格は平均以上又は以下の市價に過ぎないものであつて、平均價格ではあり得ない。それは小泉氏の云ふが如く、『それ自體の內に變動の原因を藏して居る』のでなければならぬ。マルクスが需要と供給とが一致すれば、その働きを停止すると云ふのは、その日々に變動する市價に於ける需給を云ふのでなくて、平均市場價格に於ける需給であることは說明を要するか。くりかへし云ふが、需給が一定の價格に於ける需給ならば、價格は、一定の需給に於ける價格だ。こゝに平均價格とは、市場の『賣平均』『買平均』(『ナラシ』)のことではない。それは同種商品市價の長期持續の平均市場價格のことであり、その平均價格に於ける需給とは、その平均價格を表はす貨幣の一定量と物の一定量との關係である。例へば、前例の石平均三十七圓これだ。この價格の高さは何で決まる？小泉氏は商品は使川價値を有する限り、如何なる價格でも需給は一致すると云ふが、こゝでは、『如何なる價格』でもなくて、平均價格だ。それは何で決まる？一定の價格に於ける需給だから三十七圓で決まると云ふか。その三十七圓は何で決まる？一定の需給に於ける價格だから、米一石で決まると云ふか。米一石と云ふ一定の分量は、何で決まる？小泉氏のこの論法からは三十七圓で決まると云ふより外ない。何の說明もあつたものでない。これは A=B, B=A 故に A=A, B=B と云ふだけのことだ。米一石は米一石に等しく、三十七圓は三十七圓に等しと云ふことが『價格論分配論の基礎たる價値法則』となるか。或は、米一石の價格は三十七圓だから、三十六圓より大きく三十八圓より小さいと云はうとするか。その三十六圓より大きく三十八圓より小さいと云ふことは、即ちに米一石は三十七圓に等しいと云ふことを意味するに外ならぬ。この『等しい』と云ふことは何を意味するか？單なる交換の事實

を意味するか、單なる交換の割合を意味するか、それとも、それ以外のことを意味するか。單なる交換の事實であつてはならぬ。然るときは、この價格は三十六圓でもよく七圓でもよく、その他の價格でもよいわけであり、何故に石三十七圓と云ふ一定の割合であるかが判からなくなるからである。また單なる交換の割合であつてもならぬ。然るときは、この割合は交換に先行するものとなるが、しかも事實は、却つてこの割合が種々なる交換の結果であり、その原因ではあり得ないからである。それが單なる交換の事實でもなく、單なる物の交換の割合でもないとすれば、それは、その『等しい』と云ふことは果して何を意味するか？試みに、米一石の代りに例の小麥一クオタ、貨幣三十七圓の代りに鐵二ツエントネルを置き替へて見よ。問題は小麥1クオタ＝鐵2ツエントネルとなり　マルクス資本論卷頭の價値論に於ける根本命題に返へる。そこでは、個々の商品又は單なる商品に就いてであり。こゝでは、資本家的商品に就いてである。利潤率の平均する資本家商品に就いては、かの平均價格は資本家出費に平均率の利潤を加へたもの、生産價格 K（1＋p）であるが　問題はこの生産價格は何で決まるかと云ふのであり問題は同じことだ。これ、私が前論に於て『マルクスの價値考察は、常に需要と供給の平均するところに始まる。需給が平均し、一定の平均價格が成立するものとすれは、それが何故にかく成立するかと云ふことは、最早働きを停止した需要供給の關係からは說明せられない』と云つた所以である。

價格中心の小泉氏の理論からは、この問題に答ふることは出來ない。強へて答へやうとすれば、米一石は三十七圓、三十七圓は米一石、故に、米一石は米一石に對しく、三十七圓は三十七圓に等しいと云ふだけのことだ。これは價値論無き價格論の當然の運命だ。そこではその價格が何であるかは知ろうともしないし、また判かりようも無い。從つて、その高さ又は大きさの何で決まるかも判かりやうが無い。たゞ價格が貨幣が大明神である。だから價格萬能の取引所に

は迷信が支配する『定期』は迷信である。迷信から脱却せんとする學者の欲望は、人間の『欲望』に最後の隱れ家を見出さうとする。所謂主觀的評價、主觀價値論が出て來る。この評價の主體は歴史に超在する『一般的抽象的人間』である。それが、フホエルバッハの『人間』であるかどうかは今問題でない。しかし、この抽象的人間は、朝に食器を『大切』にする代りに夜具を『虐待』し、夕に夜具を『大切』にする代りに食器を『虐待』する太古の『自由』な野蠻人や、自炊生活の放奔な書生さんでないことだけは明かである。彼等は、商品の賣手として又た買手として、大明神貨幣に拘束せられる人間である。世の中は、一定の價格に於ける需給もあれば、一定の需給に於ける價格でもある。彼等は、この『關係』の中に生息し、彼等の『欲望』はこの『關係』で絶えず影響せられる。この『關係』とは、商品としての物の一定量と、貨幣としての結局ピカ〳〵する『物』の一定量との關係である。それは、分業と私有財産との社會制度の下に於て、人間がその生活の必要から互に物を交換することに依つて互に自己の勞働を交換する人間相互の關係ではなくて、單に物と物との關係たる過ぎない。それは、物の交換の『割合』であり、物同志の關係である。その割合には、その關係には、爲替の相場や、外資の輸入や、生産の増減やはもちろん、法律の改正や内閣の更迭や、天候の變化や、地震や火事や、出生死亡、結婚離婚、風俗習慣宗教祭祀人間自然人事社會百般のことが或は『樂觀材料』として、或は『悲觀材料』として影響する。それ等の『イロ〳〵』な關係は、その抽象的人間の欲望に影響するから、それは、『イロ〳〵』な評價の混合でもある。そして、曰く、平均價格は、單に社會的勞働に依つて定まるものではなくて、需給に影響する『イロ〳〵』な關係に依つて定まると。かくて、需要に影響する條件凡そ十何條、供給に影響する條件凡そ十何條を列記する。つまり、問題は『イロ〳〵』な關係に依つて『定まる』。つまり、何事も説明しないと同じことである、價格は何か、この高さは何で決するかと云ふ問題は依然として問題である。之に反し、一般、交換がなければ一般

に價値（品質としての價値）は無いが、價値の分量は、交換で定まるものでなくて、平均的生産條件の下における勞働量、社會的必要勞働に依つて定まると云ふマルクスの答は簡單である。この答のみが利潤が如何にして發生するかを說明し、從つてまた現代の社會の基礎工事を說明する。交換が無ければ價値が無いと云ふこと、私有財産と分業との社會でなければ、人間の勞働が物に體現せられた對象物（即ち價値）として交換せられることが無いと云ふことは、價値は特定な社會の關係に『係る』と云ふことであり、文化哲學者の詞を借用すれば、勞働は、社會關係に『かゝわつて』(beziehen) 品質としての價値となると云ふことであり、價値の分量大さは交換に依らずして社會的必要勞働に依つて定まると云ふことは、價値の分量は、結局その社會關係が順應する一定の生産力の發展の程度に依つて定まると云ふに外ならぬ。即ち生産力の發展の程度にして小なれば價値は大に、その程度にして大なれば、價値は小である。價値と使用價値とは一面直接に關係するところは無いが、この點に於て密接不離の關係にある。私はこの與へられた紙面に於てこれ等の點を詳論することは出來ぬ。これ等の點は私の未熟なる論文『價値概念に關する一考察』（大原社會問題研究所雜誌第三卷第一號）に讓るの外はない。それは、主として價値の品質に關する問題を主題としたものであるが、分量の問題も尙ほ論じてはある。意に滿たないものではあるが、尙ほそこに述べたマルクス價値說の社會的物質的解釋は、依然として私の把持しつゝあるところである。

（八）勞働價値說の科學的解釋と空想的解釋

マルクス價値說の社會的物質的解釋の問題は、小泉氏の最後の論點に私を導く。話はもう終りに近づいて來た。小泉

氏の論文は次の文句で終つて居る。

『櫛川氏は又私が河上博士の人類の價値犠牲説を單にマルクス價値法則の解釋としては不可なりと云ふに止め、此說自體には頗る傾聽すべきものを含めり」など云つたことに對して不滿の感を漏らして居られる。私はこの不滿も至當なりとする譯には行かぬ。此問題には今茲に詳論する時を有せぬが、たゞ、私は云ふ。私が人類價値犠牲說に傾聽すべきものが含まれてゐると云ふのは、次の章句を是認すると同じ意味に於てである（側點は私が入れた）。曰く In allen Zustände musste die Arbeitzeit, welche die Produktion der Lebensmittel kostet,den Menschen interessieren ……これは、特定の歴史的階段と關係なく主張し得ることで、而して、吾々の首肯し得る所である。然らば、此の言は何人に出でたか。外ならぬ資本論の著者カアル・マルクスである（側點は私が入れたもの）。』（本誌同上九三頁。）

私は、小泉氏のこの文句を讀んだとき、この種の問題を爭ふことが、やはり無意味でなかつたと思つた。そして、私は、私が先きに『小泉氏小泉氏を評す?』と云つたことが單なる疑問ではなかつたと云ふことをも確信するに至つた。

何故であるか。

私が先きに小泉氏の批評の立脚點を疑問としたのは、『ヒユームが地上一切のものは勞働に依つて購はると云ひ、アダムスミスが世上一切の富は、もと凡て勞働に依つて、購はれたものなり、云々』と云ふ文句であつた。これは即ち、勞働は富の唯一の源であると云ふ思想だ。こゝに『富』とは何ぞや。もし之を使用價値と解釋するならば、勞働は決して富の源でない。自然も亦たその源でなければならぬ。もし、之を交換價値と解せんか、勞働は富の唯一の源である。『勞働は、有らゆる富及びあらゆる文化の源泉である。さうして、有益な勞働は、社會に於てのみ、又社會に依つてのみ可能であるから、勞働の收益は、平等の權利に從つて悉く社會の全員に屬するのだ』。これは、ラッサールのゴータ綱領の

第一條であり、また勞働全收權の思想の表現である。これに對し、マルクスが如何なる批評を加へたか。『勞働は有らゆる富（使用價値）の源泉でない。自然も、勞働――それ自體、その自然力たる人間の勞働力の發現に過ぎないところの――と同じ程度に於て使用價値の源泉である（中略）社會主義的な綱領としては、斯樣なブルジョア的な語法を許すべきでない（中略）』『（上略）勞働が自然に制約されるものだとすれば、正にその點よりして自分の勞働力以外に何物も所有しない人間は、あらゆる社會狀態及び文化狀態に於て對象的勞働條件の所有者となつて居るところの、他人の奴隷であるべきだと云ふ結果を生ずるからである』以上ゴータ綱領の文句は凡て水谷氏譯ゴータ綱領批評五六―五八頁。）これは小泉氏の熟知せらるゝところであり、これに引續く凡ての文句は揭ぐるの必要はない。

ゴータ綱領にかやうな批評を加へたマルクスは、如何に、どうして『勞働は富の唯一の源』と云ふ思想を承認し得るか。資本論卷頭『勞働の二重性』と題する一節は、私を以て見れば、正にかの說に對する抗辯である。既に、そこに、ゴータ綱領の批評に於けると同じく『勞働は、それから生産せられた使用價値の素材的な富の唯一の源ではないと』書いてあることは人の知るところ、その脚註に於けるアダム・スミスに對する批評を讀むときは、このことはいよ〳〵明白となる。然るに、小泉氏に從へば、マルクスが排擊したこの思想は、氏が資本論から引用した前記獨文『凡ての狀態に於て、生活手段の生産が費やすところの勞働時間は、人間に利害關係あるのでなければならなかつた』カウツキ版、三五頁下）と『同じ意味』であり、『この言は何人に出てたか、外ならぬ資本論の著者カアル・マルクスである』と云ふことである。この文句がマルクス資本論の文句であることは疑ないが、それは、マルクスが排擊に努めた『勞働は富の唯一の源』と『同じ意味』だと云ふに至つて、私は私の先きに疑問として置いた『小泉氏小泉氏を評す？』と云ふ一言を撤回することが出來なくなつてしまつたのである。かの『生活手段の生産が費やすところの勞働時間云々』の文句は、一面

から見れば人間には『生活の生產』に於て、勞働の節約に努力すると云ふ經濟原則の外、何を意味するか。しかも、この原則は、マルクスが唯物史觀に所謂生產力發展の原則そのものでなくて何であるか。勞働の生產力にして增加すれば、必要勞働時間——『人間が生活手段の生產に費やすところの勞働時間』——が減少し、勞働の生產にして減退すれば、必要勞働時間が增加する。商品生產の社會に於ては、この必要勞働時間は即ち問題の價値である。資本家的商品生產に於ては、價値は無產勞働者の勞働が一般的人間的勞働として商品に體現せられる。使用價値としての生產手段を私有する資本家は、單にその私有の事實に基き、商品價値の一部を利潤として收得する。その利潤を多くするために、勞働の生產力は或は擴張せられ、或は縮少せられ、その擴張せられ縮少せらるゝに從つて、價値に變動を起し、その變化は需給の關係を通して價格を變動せしめ、交換分配の關係に變更を與ふに依つて、社會の上層建築に變更を與ふるのである。それ等の變更は更に生產力の關係に一定の變化を與ふるのであるが、その變化は、交換分配の關係に新たなる變化を呼び起すと云ふが如く、生產力と生產の關係とは、互に條件づけられ、互に交互作用を起しつゝ發展するところの關係であり、しかもそれ等の發展の各モメントに於ける決定的動因は、生產力の發展これである。マルクスの社會主義は、實にこの勞働の生產力の絕えざる發展に基礎を置くものであり、分配の關係は、常に生產力に依つて決定せられるとなすものである。それは資本家社會の交換分配の關係はもちろん、過渡期社會主義社會に於ける勞働時間に依る分配、完成社會主義に於ける欲望に依る分配等これ等の諸制度の態樣は皆生產力の發展の程度如何に係るとなすものである。科學的社會主義と空想的社會主義との根本區別は、實にこゝにある。

然るに、『勞働は富の唯一の源』と云ふ思想は、富が使用價値を意味する場合に於ては全々事實に反する。自然も亦た富の源だからである。交換價値を意味するとせば、この思想は單に商品生產時代に限らるべきである。從つて、小經

が之を生產力發展の原則と同意味に解し、一特定の歷史的階段に關係なく主張し得る』と云ふことは首肯し得ない。ただ之を以て『吾々の首肯し得る所である』と云ふことには到底首肯するを得ない。しかも、この思想が、要求するところは何であるか。それはラッサールやプルドンやロートベルツスやまたそれ以前のリカルデアン・ソシアリスの一派と同じ勞働全收權の要求を含む。これはそれ等の學說に精通する小泉氏の首肯せられるところに相違ない。また、それ等の經濟學說の僅かな一部（例へばジョーンス）を除いては、皆經濟の循環行程の決定的動因を分配關係に置くと云ふこと、更にそれ等の學說に基く社會主義の運動が、所謂空想的であり、實行上失敗に終つたことも、小泉氏の認められるところと思ふ。今日の資本家社會に於て、勞働は富の唯一の源だと云ふことを主張するときは、一見勞働者を喜ばせるかも知れぬ。けれども、それは、生產手段が資本家に屬するところに於ては、勞働者は單に自分の勞働力だけが生活の基本であり、從つて勞働者は勞賃の取得者として甘んずべきであるとか、また勞働者に對する資本家の支配は、生產手段の私有と全々無關係な永久法則に依るとか云ふ結論をも引出し得る。いづれにしても、この文句に基礎づけられる經濟論は『眉唾』ものである。かの『價値人類犧牲說』と云ふことは之と全く正反對な意味で解釋せられたものではあるが、そこには勞働全收權論の、從つて生產關係よりも分配關係に決定要素を認めんとする思想が含まれる。そこにはマルクスの價値說が正反對に適用せられる危險があり、私はこの說に贊成しなかつたのである。然るに、小泉氏もこの點に於ては、私と同意見であり、既に前後二回もこの說を非難せられて居るに拘らず、尙ほ自らはそれとほゞ同じ原理の『勞働は富の唯一の源』と云ふ說を抱持するやに思はれる。しかも、今回の論文に依れば、それがマルクスの生產力の發展に關する法則と『同じ意味』だと云ふのである。かくの如きは、マルクスの價値說の空想的解釋とも云ふべきものであり、しかも、それは、マルクスの矛盾を指摘せんとするに急なる餘り、氏自身の矛盾を告白するのでなければならぬ。

(九) マルクスを克服する者は誰ぞ

小泉氏の論文は、河上博士に對する部分と私に對する部分と二つから成つてゐる。以上、私は、單に私に關係する部分についてのみ私見を述べた。もし、河上博士に對する部分にも關係するならば、私の氏に對する疑問は、一層強められる。現に豫期以上にながたらしくなり、こゝでは、これ以上讀者に迷惑をかけることを遠慮しなければならず、進んでそれ等の諸點に論及することは、しばらく差ひかへる外ないか、いづれにしても、私見では、氏が數回の努力にかゝるマルクス評は、マルクス經濟論の如何なる部分をも動かしては居らぬ。むしろ、他の多くのマルクス評と同じく氏のマルクス評それ自身が批評の對象に依つて批評せらるべき性質のものである。世界のマルクス評はマルクスと共に始まつて居るか、未だ之を克服するに足る批評あるを知らない。むしろ、時代の進步と共に批評それ自身が事實の前に克服せられつゝあるの事實を見る。これ何故であるか。私は、こゝに剩餘價値說史第三卷序文に於けるカウツキーの一文を想起する。カウツキーは云ふ。

『資本家的生産方法の總行程と其諸々の發展傾向に就いての理論的な認識が、今日に至るまでマルクス以上に、資本論以上に、即ち現に半世紀も以前に得られた認識以上に、本質的に一步も踏み出し得なかつたと云ふことは、如何にして說明せらるゝことが出來るか。……自然科學が日々革新せられてゐる現代に於て、此の事實は如何にして說明せらるべきか？經濟學の停滯はそも〳〵如何なる原因に出るのであるか。

『この理由の一つとして、吾々はカール・マルクス――而かも彼はフリードリッヒ・エンゲルスの後援を有したのだ――擧げることが出來る。あのやうな達見、あの樣な大膽さ、あのやうな科學、それに兼ぬるに、更に種々の專門における

あのやうな根本的知識と、實際に就いてのあのやうな經驗とを以てする一個の巨人に、[illegible]ない、[illegible]巨人が一度び或領域を占領するといふと彼は久しきに亙つて王者として之を支配するものである。

『固より此種の支配が及ぶのは、驚きに獲得せられた領域の範圍に止まらざるを得ない。若しも此の領域が新たな事實により若しくは、事實を新たな光で指す示す新たな觀察方法に依つて、縮少せられ、變更せられ、又は全々取除かれるならば　從來の支配者の支配は、彼の偉大が如何に優越なものであつても、遂に終りを遂げねばならない。

『たが、この種の新たな事實は、資本論の著述以來、未だ出現して居ない、そして、マルクスが今日迄優越を維持して居るのは、此理由に基くのである。彼が其『資本論』の著述に從事した當時に於て、英吉利及び佛蘭西にあつては、今日世界の經濟生活を規定してゐる諸々の現象、即ち資本の集積とか、株式と並びに銀行に依る產業の支配とかは、既に其萌芽を現はしてゐた。マルクスは既に萌芽に於て、それ等のものが、二葉の中に含つて居た種々の傾向を認識し得たのである。斯くて最近五十年間の凡ての發展は、資本主義に關するマルクスの理論を無對象とはしないで、反つて之を確證することゝなつたのである。それはマルクス撲滅家の數が年々增加するに依つて最も明かに證據立てられる。人々が、こんなに躍起になつて、撲き倒さうとするからには、それはどうしても、生きて居るものであり、其力を彼等が恐れてゐるのに違ひない。』（上略）資本主義が丁度、其最終且つ最高の形態を展開し始めた時代に、彼（マルクス）が之を探究したと云ふことは、マルクスに取り、將た又吾々に取つて一つの幸福であつた。何となれば、株式會社及び銀行に依る、集中せられし產業の支配以上には、資本主義は出ることはできないから。資本は茲では、全々非人格的な、純粹に社會的な勢力となるのである。五十年前に、資本主義の理論の進展が社會主義の立場からのみ可能であつたとするならば、今日に於ては、資本主義の實際の進展は、社會主義への途上に於てのみ可能である。それは換言すれば、斯う云ふことに外ならない、マルクスに依つて基礎づけられた理論の克服は、たゞマルクスに依つて基礎づけられた實行の背

尼よき遂行に依つてのみ可能である（下略）」（大原社會問題研究所雜誌第二卷第二號、久留間鮫造氏譯文「マルクスを克服する唯一の方法」に依る）

マルクス批評家は、カウツキーのこの言を以て、マルクスを偶像化するものと云ふかも知れぬ。しかし、そこに、社會の事實が進展するならば、「彼（マルクス）の偉大が如何に優越なものであつても遂に終りを遂げねばならぬ」と云ふこと、「マルクスは、既に萌芽に於て、それ等（資本の集積金融資本の支配等）のものが二葉の中にあつた種々の傾向を認識し得た」と云ふことなどは、恐らく否認はしまい。而も、「それは、（資本主義に關するマルクスの理論が現在の事實の中に生きてゐると云ふこと）マルクス撲滅家の數が年々增加するに依つて、最も明かに證據立てられる。人々が、こんなに躍起になつて撲き倒さうとするからには、それは、どうしても生きてゐるものであり云々」などは、どう見ゆるか？カウツキーが、この一文を書いたのは、戰前一九一〇年のことであるが、世界戰爭と露西亞革命を一轉期として、一次、ベームやディールなどの古いマルクス批評家が忘れられて行く代りに新らしい批評家もふえては來た。しかし、その代り新らしい辯護者の數も年々にふえる。ヨーロッパの保守的な大學でさへマルクス克服のために存在するマルクス批評家ばかりでなしに、今は、大小の『ローテ・プロフエッサー』も居る。そしておかげに批評の自由と云つてるやうにも聞いて居る。しかし、一方の自由は、しば〳〵資本家の自由を、他方の自由は、しば〳〵勞働者の自由を指す。昔し昔しギリシヤの自由の女神の指さした指の方向の自由は、昔話にもなりつゝある。いづれは、何かの影であると思はれるが、いづれにしても、資本家社會の存續する限り、『資本論』は事實の中に生きて居り、それが生きてゐる限り、マルクスの理論は生きて居り、しかし、その事實が一個のアンタゴニズムである限り、マルクス說に對する對立的な贊否の批評も必然である。只だ、これ等の學者の批評と辯護そのものが彼の說を克服し又は支持し得るかと云ふに何れも駄目である。マルクスを克服し得るものは、ベームでもなければ、ディールでもなく、マルクスを支持し得るものはカウツキーでもフイルファーデングでもない。それは、只だ、勞働者の生產力の發展に伴ふ增大する勞働者の要求だけである。これに [illegible]

編輯だより

◇本誌創刊以來梅も八回咲いた。笑ふべき時も身に憂あれば花また樂しからずで、花も見ないうちに散るし、美術展覽會も一見せずして閉鎖さるる。

◇だが憂鬱のなかにも燃ゆるがやうな希望は鋭く光つている。我々をしていつも若々しくしてくれ、元氣づけてくれるのはその希望である。新緑とともに我々がどれほど本誌の革新に意を用ゆるか。

◇忌まわしき事件ばかりが議會を包圍した。田中問題は我陸軍の權威を保つ上に徹底的に調査の歩武を進むべきだ。でなければ政友會も一田中と共に深い疑惑と共に奈落の底へ沈んで仕舞はねばならぬだらう。政友會の若手は割に元氣があり、思想にも諒解のある人が多い。此際は眼をつぶつて田中、野田、小川山梨、山本(條)等如何はしき評判の人々を一掃する方が可い。

◇政友本黨もその通りだ。實權ある人格者田本達雄を陣頭に立て、憲政會は妥協派の若槻を引退せしめて。國民に幾多の親しみを有つ濱口を矢面に立てた方が其黨にとりては得策

[illegible]

[illegible]論文は[illegible]代人[illegible]何人も[illegible]何値あるものだ。京大の[illegible]村教授[illegible]貢に垂んとする論鋒も思想問題を云為する人々の血となり骨となるべき有益の文献。隨筆の大篇「活死人」は氏得意のもので「運命」以來の心血を傾注したる力作。論文、創作、説苑欄を通じて今月は大作揃ひである。

◇本月本社より發行する單行本はブハリン著「世界經濟論」正宗白鳥著「安土の春」菊地寛著「文壇當座帳」幸田露伴著「頼朝」[illegible]佐藤春夫著「窓展く」森戸辰男著「學生と政治」リベテインスキー著「一週間」賀川豐彦著「雲水遍路」細井和喜藏著「奴隷」清原貞雄著「日本道徳論」。ブハリンの「唯物史観」は其筋で未だ發行が許可されません

◇私は哀愁を包んで再び九州へ旅立たねばならぬこととなつた。いろいろ澤田の不幸が昨年より續いて雑誌編輯も意の如くゆかず、來月號よりは渾身の力を出して誌面を改革します。讀者にあつく御詫びします。

(此項山本)

定價

[illegible]

注文の注意

▲御注文は凡て[illegible]に申受く前金切れの時は發送を[illegible]

▲臨時增大號其他[illegible]價の變更に依る前金拂込不足の時は[illegible]拂込を待つて雑誌を發送す

▲外國よりの御注文は郵税實費を申受く

▲日本[illegible]請求の向は振替又は郵券にて定價通り御拂込ありたし但し郵券代用は[illegible]一割[illegible]の事

▲御[illegible]込は振替によらるゝを最も便利とす

大正拾五年三月廿日　印刷納本
大正拾五年四月一日　發行

(定價壹圓九拾錢)

東京市芝區愛宕下町一ノ[illegible]
編輯兼發行兼印刷人　山本[illegible]

東京市[illegible]
印刷所　秀英舍

發行所
東京芝區愛宕下一ノ一
改造社
振替東京八四〇二[illegible]
電話高輪四九九三